市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第31集

上総国分寺台遺跡調査報告XXVI

市原市諏訪台古墳群・天神台遺跡 II

（本文編1）

２０１５

市 原 市 教 育 委 員 会

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第31集

上総国分寺台遺跡調査報告XXVI

市原市諏訪台古墳群・天神台遺跡 II

（本文編1）

２０１５

市 原 市 教 育 委 員 会

序　文

市原市は、千葉県のほぼ中央に位置し、東京湾の豊かな恵みと、養老川や村田川が形成した肥沃な平野、丘陵部などの緑豊かな自然環境にあります。こうした自然との共生のもと、先人は神門古墳群や、「王賜」銘鉄剣、上総国分僧尼寺跡に代表される、全国的にも優れた歴史的文化遺産を多く残しています。

現在「国分寺台」と呼ばれるこの地域に、土地区画整理事業が計画されたのは昭和 43 年です。この地には上総国分寺跡を始め、数多くの遺跡があり、発掘調査は昭和 46 年から昭和 63 年まで長期に渡りました。また、整理報告刊行事業についても、平成 6 年に着手し、現在も継続しています。

今回は、「諏訪台古墳群・天神台遺跡Ⅱ」の報告書を刊行する運びとなりました。調査は、総面積約 146,000 ㎡を測る、国分寺台最大規模の記録です。本書では、弥生時代から中世に至る「墓」を中心に収録しています。300 基余を数える「墓」は時代によって様々な顔を持っており、本地域の「墓」に対する意識の変遷を知る上で、他にない重要な資料となるでしょう。

このような発掘調査によって得られた成果が、将来にわたり活用され、地域の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行までの間、長期にわたり並々ならぬ御指導と御協力を賜りました、文化庁記念物課、千葉県教育庁文化財課、旧市原市国分寺台土地区画整理組合、旧上総国分寺台遺跡調査団、旧財団法人市原市文化財センター、関係諸機関並びに地元関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

平成 27 年 3 月

市原市教育委員会
教育長　白鳥秀幸

例　言

1　本書は、市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書の第 31 集であり、また、国分寺台地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書の第 26 集である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県市原市村上字諏訪台 1664 番地、同字東山、惣社字天神台、西広字松ケ谷ほかに所在した諏訪台古墳群及び天神台遺跡である。

3　本書は、諏訪台古墳群・天神台遺跡の墳墓編であり、古墳を「諏訪台古墳群」、それ以外の遺構を「天神台遺跡」としている。

4　諏訪台古墳群・天神台遺跡は、昭和 49（1974）年から、昭和 63（1988）年までの間、13 地区を調査している。調査区地番、遺跡名、面積・対象遺構、調査主体、調査期間は以下のとおりである。なお、これらは文化財保護法の規定（現第 92 条第 1 項）による発掘届文書の記載事項に基づくが、文書不明のものは、既刊行物である概報・概要によって補足の上、括弧書きとしている。調査区については原文に記載が無いため加筆している。ただし、一部に認められる既刊行物と届出文書との対応関係の不整合は、そのままとした。

（1）SW74 地区

市原市惣社 1176-2 ほか　諏訪台古墳群　18,000 ㎡及び古墳 4 基（1,2,6,7 号墳）
上総国分寺台遺跡調査団　　須田　勉、宮本敬一、（田中新史）
昭和 49 年 10 月 25 日から昭和 50 年 3 月 25 日まで

（2）（TJ 地区）

（昭和 50 年　市原市惣社字天神台 1148 ほか　天神台遺跡　18,700 ㎡
上総国分寺台遺跡調査団　　平野元三郎　谷島一馬　對馬郁夫）

（3）SW79 地区

市原市惣社 1170-2 ほか　諏訪台古墳群　古墳 1 基（諏訪台 2 号墳、890 ㎡）
上総国分寺台遺跡調査団　　市毛　勲、田中新史
昭和 54 年 5 月 1 日から昭和 55 年 3 月 15 日まで

（4･5）SW80 地区・81 地区

市原市村上 1669-2 ほか　諏訪台古墳群　古墳 13 基　（SW80 地区 19,700 ㎡・SW81 地区 2,200 ㎡）上総国分寺台遺跡調査団　　市毛　勲、深沢克友、白井久美子（永沼律朗、早稲田大学考古学研究室）
昭和 55 年 4 月 15 日から昭和 56 年 3 月 31 日まで

（6）064 地区

市原市惣社 1175 ほか　諏訪台古墳群　古墳 3 基（3,4,5 号墳、6,000 ㎡）
上総国分寺台遺跡調査団　昭和 57 年 4 月 1 日から昭和 58 年 3 月 31 日まで

（7）099 地区

① 市原市村上字東上 1683 ほか　天神台遺跡　8,000 ㎡
上総国分寺台遺跡調査団　　矢島一馬、対馬郁夫、浅利幸一
昭和 55 年 8 月 20 日から昭和 56 年 3 月 31 日まで

② 市原市村上 1684-1 ほか　天神台遺跡　10,000 ㎡
上総国分寺台遺跡調査団　　矢島一馬、浅利幸一
③ 市原市村上 1684-1 ほか　天神台遺跡　30,000 ㎡
上総国分寺台遺跡調査団
昭和 58 年 4 月 1 日から昭和 59 年 3 月 31 日まで

（8）SW83 地区
① 市原市村上字東上 1683 ほか　諏訪台古墳群　古墳 4 基
上総国分寺台遺跡調査団　　須田　勉
昭和 58 年 5 月 1 日から昭和 59 年 3 月 31 日まで
② 市原市村上 891 ほか　諏訪台古墳群　古墳 10 基
上総国分寺台遺跡調査団　　須田　勉、半田堅三、米田耕之助
昭和 58 年 4 月 1 日から昭和 59 年 3 月 31 日まで
③ 市原市村上 902 ほか　諏訪台遺跡　13,000 ㎡
（財）市原市文化財センター　　須田　勉、宮本敬一
昭和 60 年 4 月 1 日から昭和 61 年 3 月 31 日まで

（9・10）セ 28 地区・セ 28（神社裏）地区
① 市原市西広 900 ほか　諏訪台古墳群　5,460 ㎡
（財）市原市文化財センター　　高橋康男
昭和 61 年 11 月 1 日から昭和 62 年 3 月 31 日まで
② 市原市村上 902 ほか　諏訪台古墳群　7,000 ㎡
（財）市原市文化財センター　　浅利幸一、田所　真
昭和 61 年 4 月 1 日から昭和 61 年 7 月 31 日まで

（11）セ 54 地区
市原市西広 895 ほか　諏訪台古墳群　8,000 ㎡
（財）市原市文化財センター　　高橋康男
昭和 62 年 4 月 1 日から昭和 62 年 11 月 30 日まで

（12・13）セ 72・73 地区
市原市村上字諏訪台 1662 ほか　諏訪台遺跡　5,100 ㎡
（財）市原市文化財センター　　加藤正信、宮本敬一
昭和 63 年 4 月 1 日から昭和 63 年 9 月 30 日まで

5　天神台遺跡は、縄文時代の遺構と遺物について『天神台遺跡Ⅰ』として既に刊行され、弥生時代以降の集落跡を中心とした遺構については『天神台遺跡Ⅲ』として報告する予定である。なお、このことは、『天神台Ⅰ』例言において、上層の遺構・遺物（本書でいう弥生時代以降の集落跡）を『天神台Ⅱ』で報告予定としたが、編集方針の変更により名称を変更したので留意されたい。

6　本報告では、諏訪台古墳群、天神台遺跡として調査された地区・遺構のうち、一部について記録類・遺物が確認できなかったため、掲載していないものがある。そうした地区・遺構については、関連すると思われる資料、遺物について努めて掲載している。

7　整理・報告事業は、平成 16 年度から平成 17 年度までを（財）市原市文化財センターが市原市より受託し、平成 18 年度以降を市原市教育委員会・市原市埋蔵文化財調査センターが実施した。整理作業期間は以下のとおりである。

平成 16 年 4 月 1 日から平成 17 年 3 月 31 日まで　　浅利幸一
平成 17 年 4 月 1 日から平成 18 年 3 月 31 日まで　　浅利幸一
平成 18 年 4 月 10 日から平成 19 年 3 月 16 日まで　　浅利幸一
平成 19 年 4 月 16 日から平成 20 年 3 月 15 日まで　　浅利幸一
平成 20 年 4 月 14 日から平成 21 年 3 月 13 日まで　　田中清美
平成 21 年 4 月 14 日から平成 22 年 3 月 13 日まで　　田中清美
平成 22 年 4 月 13 日から平成 23 年 3 月 12 日まで　　田中清美
平成 23 年 4 月 13 日から平成 24 年 3 月 12 日まで　　田中清美・牧野光隆
平成 24 年 4 月 16 日から平成 25 年 3 月 15 日まで　　木對和紀・北見一弘
平成 25 年 4 月 16 日から平成 26 年 3 月 15 日まで　　木對和紀・忍沢成視・北見一弘
平成 26 年 4 月 16 日から平成 27 年 3 月 24 日まで　　北見一弘

8　本書の執筆・編集は、第 2 章第 2 節及び第 6 章第 1 節を木對、第 2 章第 3 節第 6 項を忍澤、写真図版・全体図等 DTP を大村、それ以外を北見が行った。また、埋葬人骨については、聖マリアンナ大学解剖学教室長岡朋人氏、平田和明氏、筑波大学大学院人文科学研究科清家大樹氏に分析を依頼し、第 3 章第 3 節を執筆いただいた。盤龍鏡の三次元計測は奈良県立橿原考古学研究所の協力を得た。また、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した、石器石材及び礫類の肉眼鑑定と分析結果を第 3 章第 4 節に、土器の胎土分析と分析結果を第 3 章第 1 節に、釘付着木質の樹種同定と分析結果を第 3 章第 2 節に掲載している。

9　金属器の実測図の一部は、田中新史氏作図の写しを基に、そのまま、もしくは一部改変したものをトレースして掲載している。

10　遺構の時期については、各担当が行っているが、最終的には北見が修正を加えている。

11　本文中の地番は、区画整理前の旧地番で表記している。

12　図中の方位は座標北を、高さは海抜を示している。

13　本書は本文編 1 、本文編 2 、写真図版編の 3 分冊で構成されている。

14　本書に掲載した出土遺物及び図面・写真等の記録類は、市原市埋蔵文化財調査センターで収蔵・保管している。

15　整理報告書作成において以下の方々のご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表す。

奥山誠義　小林清隆　酒巻忠史　西野雅人　水野敏典　柳沼賢治

（五十音順敬称略）

目　次

序 文
例 言
目 次
挿図目次
表 目 次
遺構一覧

本文編 1 (第 1 分冊)

第 1 章　調査の経緯と概要
第 1 節　調査にいたる経緯 …… 1
第 2 節　遺跡周辺の環境 …… 1
第 3 節　調査の概要 …… 25
1　諏訪台古墳群・天神台遺跡Ⅱの概要
2　SW74 地区
3　TJ 地区
4　SW79 地区
5　SW80･81 地区
6　064 地区
7　099 地区
8　SW83 地区
9　セ 28 地区
10　セ 28 (神社裏)地区
11　セ 54 地区
12　セ 72 地区
13　セ 73 地区
14　保存地区

第 2 章　遺構と遺物
第 1 節　弥生時代から古墳時代前期の遺構と遺物 …… 41
第 2 節　古墳時代後期以降の遺構と遺物 ……255

本文編２目次

第２章　遺構と遺物

第３節　その他の遺構と遺物 ……635

1　土坑・土壙　SK(1～350) ……635

2　溝　SD(1～29) ……789

3　その他の遺構　SX(1～3) ……798

4　遺構外の遺物……817

土器　　中世陶器　　土製品　　石製品　　金属製品　　玉類　　その他

5　SW80 地区　８号墳出土の遺物……839

土器　　石製品　　金属製品　　その他

6　諏訪台古墳群墳丘出土の縄文遺物……844

土器

064　　099　　セ 72・73　　セ 28　　セ 54　　SW83　　SW80・81

土製品　　石製品

第３章　分析

第１節　諏訪台古墳群出土土器の胎土分析……927

第２節　諏訪台古墳群から出土した釘付着木質の樹種……940

第３節　諏訪台古墳群出土古墳時代人骨について……948

第４節　諏訪台古墳群出土石器等石材鑑定……952

第４章　総括

第１節　諏訪台古墳群中における終末期方墳と律令制墳墓
（改葬系区画墓）の狭間……963

第２節　遺構の変遷

1　墳墓　　2　土壙・土坑　弥生～中世　　3　その他の遺構と遺物……968

表目次

Tab.1　遺構一覧
Tab.2　遺構一覧(SS 墳墓)
Tab.3　遺構一覧(SS 主体部)
Tab.4　遺構一覧(SM 墳墓・主体部)
Tab.5　遺構一覧(SK 土壙・土坑)
Tab.6　土器観察表(SS)
Tab.7　中世土器・陶磁器観察表
Tab.8　土製品観察表(SS)
Tab.9　石製品観察表(SS)
Tab.10　金属器観察表
Tab.11　玉類観察表
Tab.12　その他の遺物(SS)
Tab.13　土器観察表(SM)
Tab.14　土製品観察表(SM)
Tab.15　転用砥石観察表(SM)
Tab.16　石器観察表(SM)
Tab.17　諏訪台古墳群 下層縄文土器集計表
Tab.18　諏訪台古墳群 下層縄文土器集計表
Tab.19　包含層出土土器集計表
Tab.20　古墳下層縄文土器属性表
Tab.21　古墳下層石器
Tab.22　古墳下層石器属性表

※ Tab.1・Tab.17 以外は DVD-ROM にのみ収録。

本文編 1 挿図目次

Fig.1　諏訪台古墳群・天神台遺跡位置図 1/100,000 1/50,000 …… 3
Fig.2　諏訪台古墳群・天神台遺跡現状位置図 1/7,500 …… 4
Fig.3　諏訪台古墳群・天神台遺跡調査区と周辺地形図 1/4,000 …… 5
Fig.4　諏訪台古墳群測量図　1/2,500 …… 6
Fig.5　国分寺台地区と周辺の遺跡群　1/12,000 …… 7
Fig.6　諏訪台古墳群・天神台遺跡と周辺の遺跡群 1/5,000 …… 9
Fig.7　調査区配置図　1/4,000 …… 11
Fig.8　遺構全体図(1)　1/3,500 …… 12
Fig.9　遺構全体図(2)　1/3,500 …… 13
Fig.10　遺構全体図(3)　1/1,000 …… 14
Fig.11　遺構全体図(4)　1/1,000 …… 15
Fig.12　遺構全体図(5)　1/1,000 …… 16
Fig.13　遺構全体図(6)　1/1,000 …… 17
Fig.14　遺構全体図(7)　1/1,000 …… 18
Fig.15　遺構全体図(8)　1/1,000 …… 19
Fig.16　遺構全体図(9)　1/1,000 …… 20
Fig.17　遺構全体図(10)　1/1,000 …… 21
Fig.18　遺構全体図(11)　1/1,000 …… 22
Fig.19　遺構全体図(12)　1/1,000 …… 23
Fig.20　SW74 地区、TJ 地区全体図 …… 26
Fig.21　SW79 地区全体図 …… 27
Fig.22　SW 80、SW 81 地区全体図 …… 29
Fig.23　064 地区、099 地区全体図 …… 31
Fig.24　SW83 地区、セ 28 地区全体図 …… 33
Fig.25　セ 28(神社裏)地区、セ 54 地区全体図 …… 35
Fig.26　セ 72 地区、セ 73 地区全体図 …… 37
Fig.27　SS1 遺構・遺物(1)実測図 …… 42
Fig.28　SS1 遺物(2)実測図 …… 43
Fig.29　SS1 遺物(3)実測図 …… 44
Fig.30　SS2 遺構実測図 …… 46
Fig.31　SS2 遺物、SS3 遺構・遺物実測図 …… 47
Fig.32　SS4 遺構・遺物実測図 …… 48
Fig.33　SS5 遺構・遺物実測図 …… 50
Fig.34　SS6 遺構・遺物実測図 …… 51
Fig.35　SS7 遺構・遺物実測図 …… 52
Fig.36　SS8 遺構実測図 …… 54
Fig.37　SS8 遺物、SS9 遺構実測図 …… 55
Fig.38　SS10 遺構・遺物実測図 …… 56
Fig.39　SS11 遺構(1)実測図 …… 58
Fig.40　SS11 遺構(2)・遺物実測図 …… 59
Fig.41　SS12 遺構(1)実測図 …… 60
Fig.42　SS12 遺構(2)・遺物出土詳細実測図 …… 62
Fig.43　SS12 遺物(1)実測図 …… 63
Fig.44　SS12 遺物(2)実測図 …… 64
Fig.45　SS13 遺構実測図 …… 66
Fig.46　SS13 遺物実測図 …… 67
Fig.47　SS14 遺構実測図 …… 68
Fig.48　SS15 遺構(1)実測図 …… 70
Fig.49　SS15 遺構(2)・遺物実測図 …… 71
Fig.50　SS16 遺構実測図 …… 72
Fig.51　SS17 遺構(1)実測図 …… 74
Fig.52　SS17 遺構(2)・遺物、SS18 遺構(1)実測図 …… 75
Fig.53　SS18 遺構(2)・遺物、SS19 遺物実測図 …… 76
Fig.54　SS19 遺構実測図 …… 78
Fig.55　SS20 遺構・遺物実測図 …… 79
Fig.56　SS21 遺構・遺物実測図 …… 80
Fig.57　SS22 遺構・遺物実測図 …… 82
Fig.58　SS23 遺構実測図 …… 83
Fig.59　SS24 遺構実測図 …… 84
Fig.60　SS25 遺構実測図 …… 86
Fig.61　SS25 遺物、SS26 遺構・遺物実測図 …… 87
Fig.62　SS27 遺構(1)実測図 …… 88
Fig.63　SS27 遺構(2)・遺物実測図 …… 90
Fig.64　SS28 遺構・遺物実測図 …… 91
Fig.65　SS29 遺構実測図 …… 92
Fig.66　SS30 遺構実測図 …… 94
Fig.67　SS30 遺物出土詳細・遺物(1)実測図 …… 95

Fig.68　SS30 遺物(2)実測図……96
Fig.69　SS31 遺構実測図……98
Fig.70　SS31 遺物出土詳細・遺物実測図……99
Fig.71　SS32 遺構・遺物実測図……100
Fig.72　SS33 遺構、SK145 遺構、SK146 遺構
実測図……102
Fig.73　SS34 遺構・遺物実測図……103
Fig.74　SS35 遺構、SS36 遺構実測図……104
Fig.75　SS37 遺構実測図……106
Fig.76　SS37 遺物出土詳細・遺物実測図……107
Fig.77　SS38 遺構(1)実測図……108
Fig.78　SS38 遺構(2)・遺物実測図……110
Fig.79　SS39 遺構実測図……111
Fig.80　SS40 遺構実測図……112
Fig.81　SS41 遺構実測図……114
Fig.82　SS42 遺構実測図……115
Fig.83　SS43 遺構実測図……116
Fig.84　SS44 遺構実測図……118
Fig.85　SS44 遺物、SS45 遺構実測図……119
Fig.86　SS46 遺構実測図……120
Fig.87　SS47 遺構実測図……122
Fig.88　SS48 遺構実測図……123
Fig.89　SS49 遺構(1)実測図……124
Fig.90　SS49 遺構(2)・遺物実測図……126
Fig.91　SS50 遺構実測図……127
Fig.92　SS51 遺構実測図……128
Fig.93　SS52 遺構実測図……130
Fig.94　SS53 遺構実測図……131
Fig.95　SS54 遺構実測図……132
Fig.96　SS55 遺構実測図……134
Fig.97　SS56 遺構・遺物実測図……135
Fig.98　SS57 遺構実測図……136
Fig.99　SS58 遺構実測図……138
Fig.100　SS59 遺構・遺物実測図……139
Fig.101　SS60 遺構実測図……140
Fig.102　SS61 遺構実測図……142
Fig.103　SS62 遺構・遺物実測図……143
Fig.104　SS63 遺構実測図……144
Fig.105　SS64 遺構・遺物(1)実測図……146
Fig.106　SS64 遺物出土詳細・遺物(2)、SS65
遺構実測図……147
Fig.107　SS66 遺構・遺物実測図……148
Fig.108　SS67 遺構、SS68 遺構・遺物実測図……150
Fig.109　SS69 遺構、SS70 遺構実測図……151
Fig.110　SS71 遺構・遺物実測図……152
Fig.111　SS72 遺構、SS73 遺構・遺物実測図……154
Fig.112　SS74 遺構、SS75 遺構実測図……155
Fig.113　SS76 遺構(1)・遺物出土詳細実測図……156
Fig.114　SS76 遺構(2)・遺物実測図……158
Fig.115　SS77 遺構(1)・遺物実測図……159
Fig.116　SS77 遺構(2)実測図……160
Fig.117　SS78 遺構(1)・遺物出土詳細実測図……162
Fig.118　SS78 遺構(2)・遺物実測図……163
Fig.119　SS79 遺構実測図……164
Fig.120　SS80 遺構、SS81 遺構、SS82 遺構実
測図……166
Fig.121　SS83 遺構実測図……167
Fig.122　SS84 遺構・遺物実測図……168
Fig.123　SS85 遺構・遺物出土詳細、SS86 遺構・
遺物実測図……171
Fig.124　SS87 遺構・遺物実測図……172
Fig.125　SS88 遺構・遺物出土詳細実測図……173
Fig.126　SS88 遺物実測図……176
Fig.127　SS89 遺構・遺物(1)、SS90 遺構実測図…177
Fig.128　SS89 遺物出土詳細・遺物(2)実測図……178
Fig.129　SS89 遺物(3)、SS91 遺構実測図……179
Fig.130　SS92 遺構・遺物実測図……183
Fig.131　SS93 遺構・遺物実測図……184
Fig.132　SS94 遺構(1)・遺物実測図……185
Fig.133　SS94 遺構(2)実測図……188
Fig.134　SS95 遺構実測図……189
Fig.135　SS95 遺物、SS96 遺物実測図……190
Fig.136　SS96 遺構・遺物出土詳細実測図……195
Fig.137　SS97 遺構(1)、SK267 遺構(1)実測図……193

Fig.138 SS97 遺構(2)・遺物出土詳細・遺物(1)実測図……194
Fig.139 SS97 遺物(2)、SK267 遺構(2)実測図……197
Fig.140 SS98 遺構実測図……198
Fig.141 SS99 遺構・遺物(1)実測図……199
Fig.142 SS99 遺物(2)、SS100 遺構・遺物実測図……201
Fig.143 SS101 遺構実測図……203
Fig.144 SS101 遺物出土詳細・遺物実測図……206
Fig.145 SS102 遺構実測図……207
Fig.146 SS103 遺構(1)実測図……208
Fig.147 SS103 遺構(2)・遺物出土詳細(1)・遺物(1)実測図……209
Fig.148 SS103 遺構(3)実測図……212
Fig.149 SS103 遺物出土詳細(2)・遺物(2)実測図……213
Fig.150 SS103 遺物(3)実測図……214
Fig.151 SS104 遺構(1)実測図……216
Fig.152 SS104 遺構(2)・遺物(1)実測図……217
Fig.153 SS104 遺物(2)実測図……218
Fig.154 SS105 遺構・遺物出土詳細実測図……220
Fig.155 SS105 遺物実測図……221
Fig.156 SS106 遺構(1)実測図……222
Fig.157 SS106 遺物出土詳細・遺物実測図……224
Fig.158 SS106 遺構(2)実測図……225
Fig.159 SS107 遺構実測図……226
Fig.160 SS108 遺構、SS109 遺構・遺物実測図……228
Fig.161 SS110 遺構・遺物実測図……229
Fig.162 SS111 遺構(1)・遺物(1)実測図……230
Fig.163 SS111 遺構(2)・遺物(2)、SS112 遺構(1)実測図……232
Fig.164 SS112 遺構(2)実測図……233
Fig.165 SS112 遺構(3)実測図……234
Fig.166 SS112 遺物出土詳細(1)・遺構(4)実測図……236
Fig.167 SS112 遺物出土詳細(2)実測図……237
Fig.168 SS112 遺物(1)実測図……239
Fig.169 SS112 遺物(2)実測図……240
Fig.170 SS112 遺物(3)実測図……241
Fig.171 SS112 遺物(4)実測図……242
Fig.172 SS113 遺構・遺物、SK250 遺構実測図……244
Fig.173 SS114 遺構実測図……245
Fig.174 SS114 遺物実測図……246
Fig.175 SS115 遺構実測図……247
Fig.176 SS115 遺物実測図……248
Fig.177 SS116 遺構・遺物実測図……249
Fig.178 SS117 遺構(1)実測図……250
Fig.179 SS117 遺構(2)・遺物実測図……251
Fig.180 SS118 遺構実測図……252
Fig.181 SS118 遺物、SS119 遺構実測図……253
Fig.182 SS119 遺物実測図……254
Fig.183 SM1001 遺構(1)実測図……256
Fig.184 SM1001 遺構(2)実測図……257
Fig.185 SM1001 遺構(3)実測図……259
Fig.186 SM1001 遺物実測図……260
Fig.187 SM1002 遺構(1)実測図……262
Fig.188 SM1002 遺構(2)・遺物出土詳細・遺物(1)実測図……263
Fig.189 SM1002 遺物(2)実測図……264
Fig.190 SM1003 遺構(1)実測図……266
Fig.191 SM1003 遺構(2)実測図……267
Fig.192 SM1003 遺物実測図……268
Fig.193 SM1004 遺構(1)実測図……270
Fig.194 SM1004 遺構(2)・遺物出土詳細実測図……271
Fig.195 SM1004 遺物(1)実測図……273
Fig.196 SM1004 遺物(2)実測図……274
Fig.197 SM1005 遺構(1)実測図……276
Fig.198 SM1005 遺構(2)実測図……277
Fig.199 SM1005 遺構(3)実測図……279
Fig.200 SM1005 遺構(4)・遺物(1)実測図……280
Fig.201 SM1005 遺物(2)実測図……282
Fig.202 SM1006 遺構(1)実測図……283
Fig.203 SM1006 遺構(2)実測図……285
Fig.204 SM1006 遺物(1)実測図……286

Fig.205 SM1006 遺物(2)実測図……287
Fig.206 SM1007 遺構(1)実測図……289
Fig.207 SM1007 遺構(2)実測図……290
Fig.208 SM1007 遺構(3)実測図……291
Fig.209 SM1007 遺構(4)・遺物出土詳細(1)・遺物(1)実測図……292
Fig.210 SM1007 遺構(5)・遺物出土詳細(2)・遺物(2)実測図……293
Fig.211 SM1007 遺構(6)・遺物出土詳細(3)実測図……294
Fig.212 SM1007 遺物(3)実測図……295
Fig.213 SM1007 遺物(4)実測図……296
Fig.214 SM1007 遺物(5)実測図……297
Fig.215 SM1008 遺構(1)、SI1001 遺構(1)実測図……299
Fig.216 SM1008 遺構(2)・遺物出土詳細(1)実測図……302
Fig.217 SM1008 遺構(3)・遺物出土詳細(2)実測図……303
Fig.218 SM1008 遺物(1)実測図……304
Fig.219 SM1008 遺物(2)実測図……305
Fig.220 SM1008 遺物(3)、SI1001 遺構(2)実測図……306
Fig.221 SI1001 遺物実測図……307
Fig.222 SM1009 遺構(1)実測図……309
Fig.223 SM1009 遺構(2)実測図……310
Fig.224 SM1009 遺物実測図……311
Fig.225 SM1010 遺構(1)実測図……313
Fig.226 SM1010 遺構(2)実測図……314
Fig.227 SM1010 遺物(1)実測図……315
Fig.228 SM1010 遺物(2)実測図……316
Fig.229 SM1010 遺物(3)実測図……317
Fig.230 SM1010 遺物(4)実測図……318
Fig.231 SM1010 遺物(5)実測図……319
Fig.232 SM1010 遺物(6)実測図……320
Fig.233 SM1010 遺物(7)実測図……322
Fig.234 SM1011 遺構(1)実測図……323
Fig.235 SM1011 遺構(2)・遺物実測図……325
Fig.236 SM1012 遺構(1)実測図……326
Fig.237 SM1012 遺構(2)・遺物実測図……328
Fig.238 SM1013 遺構(1)実測図……329
Fig.239 SM1013 遺構(2)実測図……330
Fig.240 SM1013 遺構(3)・遺物実測図……332
Fig.241 SM1014 遺構(1)実測図……333
Fig.242 SM1014 遺構(2)・遺物出土詳細(1)実測図……334
Fig.243 SM1014 遺物(1)実測図……336
Fig.244 SM1014 遺構(3)・遺物出土詳細(2)実測図……337
Fig.245 SM1014 遺物出土詳細(3)実測図……338
Fig.246 SM1014 遺物(2)実測図……339
Fig.247 SM1014 遺物(3)実測図……340
Fig.248 SM1014 遺物(4)実測図……341
Fig.249 SM1014 遺物(5)実測図……342
Fig.250 SM1014 遺物(6)実測図……343
Fig.251 SM1014 遺物(7)・遺物出土詳細(4)実測図……344
Fig.252 SM1015 遺構(1)実測図……346
Fig.253 SM1015 遺構(2)・遺物(1)実測図……347
Fig.254 SM1015 遺構(3)・遺物(2)実測図……348
Fig.255 SM1016 遺構実測図……350
Fig.256 SM1016 遺物実測図……351
Fig.257 SM1017 遺構実測図……353
Fig.258 SM1017 遺物(1)実測図……354
Fig.259 SM1017 遺物(2)実測図……355
Fig.260 SM1018 遺構(1)実測図……357
Fig.261 SM1018 遺構(2)実測図……358
Fig.262 SM1018 遺物実測図……359
Fig.263 SM1019 遺構(1)実測図……361
Fig.264 SM1019 遺構(2)実測図……362
Fig.265 SM1019 遺物(1)実測図……363
Fig.266 SM1019 遺物(2)実測図……364
Fig.267 SM1020 遺構(1)実測図……366
Fig.268 SM1020 遺構(2)実測図……367

Fig.269 SM1020 遺構(3)・遺物実測図……368
Fig.270 SM1021 遺構(1)実測図……370
Fig.271 SM1021 遺構(2)・遺物実測図……371
Fig.272 SM1022 遺構(1)実測図……373
Fig.273 SM1022 遺構(2)・遺物実測図……374
Fig.274 SM1023 遺構(1)実測図……376
Fig.275 SM1023 遺構(2)・遺物実測図……377
Fig.276 SM1024 遺構(1)実測図……379
Fig.277 SM1024 遺構(2)・遺物(1)実測図……380
Fig.278 SM1024 遺物(2)実測図……381
Fig.279 SM1024 遺物(3)実測図……382
Fig.280 SM1025 遺構実測図……383
Fig.281 SM1025 遺物実測図……384
Fig.282 SM1026 遺構・遺物実測図……385
Fig.283 SM1027 遺構実測図……387
Fig.284 SM1027 遺物出土詳細・遺物(1)実測図…388
Fig.285 SM1027 遺物(2)実測図……389
Fig.286 SM1028 遺構(1)実測図……391
Fig.287 SM1028 遺構(2)・遺物実測図……392
Fig.288 SM1029 遺構・遺物実測図……393
Fig.289 SM1030 遺構実測図……395
Fig.290 SM1031 遺構・遺物実測図……396
Fig.291 SM1032 遺構・遺物実測図……398
Fig.292 SM1033 遺構・遺物、SM1034 遺構
実測図……399
Fig.293 SM1035 遺構実測図……401
Fig.294 SM1036 遺構・遺物、SK90 遺構、
SK91 遺構実測図……402
Fig.295 SM1037 遺構・遺物出土詳細実測図……404
Fig.296 SM1037 遺物、SM1038 遺構実測図……405
Fig.297 SM1039 遺構・遺物、SM1040 遺構
実測図……408
Fig.298 SM1041 遺構(1)実測図……409
Fig.299 SM1041 遺構(2)実測図……410
Fig.300 SM1041 遺構(3)・遺物出土詳細実測図…411
Fig.301 SM1041 遺物(1)実測図……412
Fig.302 SM1041 遺物(2)実測図……413
Fig.303 SM1042 遺構(1)実測図……415
Fig.304 SM1042 遺構(2)実測図……416
Fig.305 SM1042 遺構(3)・遺物実測図……417
Fig.306 SM1043 遺構(1)実測図……419
Fig.307 SM1043 遺構(2)・遺物(1)実測図……420
Fig.308 SM1043 遺物(2)実測図……422
Fig.309 SM1044 遺構・遺物実測図……423
Fig.310 SM1045 遺構・遺物実測図……425
Fig.311 SM1046 遺構実測図……428
Fig.312 SM1046 遺物実測図……429
Fig.313 SM1047 遺構実測図……431
Fig.314 SM1048 遺構(1)実測図……432
Fig.315 SM1048 遺構(2)・遺物出土詳細実測図…433
Fig.316 SM1047 遺物、SM1048 遺物実測図……434
Fig.317 SM1049 遺構、SM1050 遺構実測図……436
Fig.318 SM1049 遺物、SM1050 遺物実測図……437
Fig.319 SM1051 遺構・遺物実測図……440
Fig.320 SM1052 遺構、SM1053 遺構・遺物
実測図……441
Fig.321 SM1054 遺構(1)・遺物実測図……443
Fig.322 SM1054 遺構(2)実測図……444
Fig.323 SM1055 遺構・遺物、SM1056 遺構・
遺物実測図……445
Fig.324 SM1057 遺構・遺物実測図……447
Fig.325 SM1058 遺構・遺物出土詳細実測図……448
Fig.326 SM1058 遺物実測図……449
Fig.327 SM1059 遺構(1)実測図……451
Fig.328 SM1059 遺構(2)実測図……452
Fig.329 SM1059 遺物実測図……453
Fig.330 SM1060 遺構(1)・遺物出土詳細(1)実
測図……456
Fig.331 SM1060 遺構(2)実測図……457
Fig.332 SM1060 遺構(3)・遺物出土詳細(2)実
測図……458
Fig.333 SM1060 遺構(4)実測図……459
Fig.334 SM1060 遺物(1)実測図……460
Fig.335 SM1060 遺物(2)実測図……461

Fig.336 SM1061 遺構実測図……463
Fig.337 SM1062 遺構(1)実測図……464
Fig.338 SM1062 遺構(2)・遺物、SM1063 遺構・遺物実測図……465
Fig.339 SM1064 遺構(1)・遺物実測図……467
Fig.340 SM1064 遺構(2)実測図……468
Fig.341 SM1065 遺構実測図……470
Fig.342 SM1066 遺構・遺物実測図……471
Fig.343 SM1067 遺構・遺物実測図……473
Fig.344 SM1068 遺構・遺物実測図……474
Fig.345 SM1069 遺構(1)実測図……476
Fig.346 SM1069 遺構(2)・遺物実測図……477
Fig.347 SM1070 遺構実測図……479
Fig.348 SM1071 遺構・遺物実測図……480
Fig.349 SM1072 遺構・遺物実測図……482
Fig.350 SM1073 遺構・遺物実測図……483
Fig.351 SM1074 遺構実測図……485
Fig.352 SM1075 遺構(1)、SD30 遺構実測図……486
Fig.353 SM1075 遺構(2)実測図……487
Fig.354 SM1076 遺構(1)実測図……489
Fig.355 SM1076 遺構(2)実測図……490
Fig.356 SM1077 遺構・遺物実測図……491
Fig.357 SM1078 遺構・遺物実測図……493
Fig.358 SM1079 遺構実測図……494
Fig.359 SM1080 遺構実測図……496
Fig.360 SM1081 遺構・遺物実測図……497
Fig.361 SM1082 遺構・遺物実測図……498
Fig.362 SM1083 遺構・遺物実測図……500
Fig.363 SM1083 人骨出土詳細実測図……501
Fig.364 SM1084 遺構・遺物実測図……503
Fig.365 SM1085 遺構実測図……504
Fig.366 SM1086 遺構・遺物実測図……506
Fig.367 SM1087 遺構(1)実測図……507
Fig.368 SM1087 遺構(2)・遺物実測図……508
Fig.369 SM1088 遺構実測図……511
Fig.370 SM1089 遺構(1)実測図……512
Fig.371 SM1089 遺構(2)・遺物(1)実測図……513
Fig.372 SM1089 遺物(2)実測図……514
Fig.373 SM1090 遺構実測図……516
Fig.374 SM1090 遺物、SM1091 遺構(1)実測図……517
Fig.375 SM1091 遺構(2)・遺物実測図……518
Fig.376 SM1092 遺構実測図……520
Fig.377 SM1093 遺構(1)実測図……521
Fig.378 SM1093 遺構(2)・遺物実測図……522
Fig.379 SM1094 遺構実測図……524
Fig.380 SM1095 遺構・遺物出土詳細・遺物実測図……525
Fig.381 SM1096 遺構実測図……527
Fig.382 SM1097 遺構実測図……528
Fig.383 SM1098 遺構実測図……530
Fig.384 SM1099 遺構実測図……531
Fig.385 SM1100 遺構(1)実測図……532
Fig.386 SM1100 遺構(2)・遺物、SM1097 遺物、SM1099 遺物実測図……533
Fig.387 SM1101 遺構・遺物実測図……535
Fig.388 SM1102 遺構(1)実測図……537
Fig.389 SM1102 遺構(2)・遺物実測図……538
Fig.390 SM1103 遺構・遺物実測図……539
Fig.391 SM1104 遺構・遺物実測図……541
Fig.392 SM1105 遺構・遺物実測図……542
Fig.393 SM1106 遺構・遺物出土詳細・遺物実測図……545
Fig.394 SM1107 遺構実測図……546
Fig.395 SM1107 遺物、SM1108 遺構実測図……547
Fig.396 SM1109 遺構実測図……549
Fig.397 SM1110 遺構実測図……550
Fig.398 SM1111 遺構・遺物、SM1112 遺構実測図……552
Fig.399 SM1113 遺構、SM1114 遺構・遺物実測図……553
Fig.400 SM1115 遺構・遺物実測図……555
Fig.401 SM1116 遺構・遺物実測図……556
Fig.402 SM1117 遺構・遺物実測図……559

Fig.403　SM1118 遺構・遺物実測図……560
Fig.404　SM1119 遺構実測図……561
Fig.405　SM1120 遺構実測図……563
Fig.406　SM1121 遺構、SM1122 遺構実測図……564
Fig.407　SM1123 遺構・遺物実測図……567
Fig.408　SM1124 遺構、SM1125 遺構実測図……568
Fig.409　SM1126 遺構実測図……569
Fig.410　SM1127 遺構・遺物実測図……571
Fig.411　SM1128 遺構実測図……572
Fig.412　SM1129 遺構・遺物出土詳細・遺物実測図……575
Fig.413　SM1130 遺構、SM1131 遺構・遺物実測図……576
Fig.414　SM1132 遺構、SM1133 遺構実測図……577
Fig.415　SM1134 遺構・遺物実測図……579
Fig.416　SM1135 遺構・遺物実測図……580
Fig.417　SM1136 遺構実測図……582
Fig.418　SM1137 遺構・遺物、SM1138 遺構・遺物実測図……583
Fig.419　SM1139 遺構、SM1140 遺構実測図……586
Fig.420　SM1141 遺構・遺物、SM1142 遺構・遺物実測図……587
Fig.421　SM1143 遺構、SM1144 遺構、SM1145 遺構実測図……589
Fig.422　SM1146 遺構・遺物実測図……591
Fig.423　SM1147 遺構・遺物実測図……592
Fig.424　SM1148 遺構、1149 遺構・遺物実測図……594
Fig.425　SM1150 遺構、SM1151 遺構実測図……595
Fig.426　SM1152 遺構・遺物、SM1153 遺構実測図……597
Fig.427　SM1154 遺構、SM1155 遺構・遺物実測図……600
Fig.428　SM1156 遺構・遺物、SM1157 遺構・遺物実測図……601
Fig.429　SM1158 遺構・遺物、SM1159 遺構・遺物実測図……603
Fig.430　SM1160 遺構、SM1161 遺構・遺物実測図……604
Fig.431　SM1162 遺構・遺物、SM1163 遺構実測図……607
Fig.432　SM1164 遺構・遺物実測図……608
Fig.433　SM1165 遺構・遺物、SM1166 遺構実測図……609
Fig.434　SM1167 遺構、SM1168 遺構実測図……612
Fig.435　SM1169 遺構・遺物、SM1170 遺構実測図……613
Fig.436　SM1171 遺構、SM1172 遺構実測図……615
Fig.437　SM1173 遺構・遺物、SM1174 遺構実測図……616
Fig.438　SM1175 遺構・遺物、SM1176 遺構実測図……619
Fig.439　SM1177 遺構、SM1178 遺構・遺物出土詳細・遺物実測図……620
Fig.440　SM1179 遺構・遺物、SM1180 遺構実測図……621
Fig.441　SM1181 遺構・遺物、SM1182 遺構・遺物実測図……624
Fig.442　SM1183 遺構実測図……625
Fig.443　SM1184 遺構実測図……626
Fig.444　SM1185 遺構・遺物実測図……628
Fig.445　SM1186 遺構・遺物実測図……629
Fig.446　SM1187 遺構実測図……631
Fig.447　SM1188 遺構、SM1189 遺構実測図……632
Fig.448　SM1190 遺構・遺物実測図……633

Tab.1 遺構一覧

略号	掲載遺構№	地区名	旧遺構№	種別	諏訪台コード	国分寺台 古墳コード	時期（諏訪台区分）	旧Grid	新Grid
SS	1	ＴＪ	ＴＪ８方形周溝	方墳	—	—	諏訪台3b期	IB82	E11-62
SS	2	ＴＪ	ＴＪ９方形周溝	方墳	—	—	諏訪台3b期	IB52	E11-02
SS	3	099	２０１２	方墳	—	—	諏訪台3b期	HD43	H9-84
SS	4	099	4004	方墳	—	—	諏訪台3b期	GD77	I8-42
SS	5	099	4005	方墳	—	—	諏訪台3b期	HD81	I9-60
SS	6	099	4025	方墳	—	—	諏訪台3b期	HE07	J10-02
SS	7	099	4030	方墳	—	—	諏訪台3b期	HE09	J10-06
SS	8	099	4031	方墳	—	—	諏訪台3b期	HE04	J9-06
SS	9	099	4029	方墳	—	—	諏訪台3b期	HD49	H10-86
SS	10	099	4038	方墳	—	—	諏訪台3b期	GE37	J8-62
SS	11	099	4036	方形周溝墓	—	—	諏訪台1期	GE99	K8-86
SS	12	099	4021	方墳	—	—	諏訪台3b期	KE71	K15-40
SS	13	099	4086	方形周溝墓	—	—	諏訪台2b期	LF26	L18-40
SS	14	099	4088	方形周溝墓	—	—	諏訪台2b期	MF93	M19-84
SS	15	099	4089	方形周溝墓	—	—	諏訪台2b期	MF85	M19-68
SS	16	099	4091	方形周溝墓	—	—	諏訪台2b期	LG60	O18-08
SS	17	099	4092	方形周溝墓	—	—	諏訪台2b期	MG71	O19-40
SS	18	099	4046	方形周溝墓	—	—	諏訪台2b期	GF53	M7-04
SS	19	099	4047	円形周溝墓	—	—	諏訪台2b期	GF71	M7-40
SS	20	099	4045	（方形周溝墓）	—	—	(諏訪台2a期)	GG07	N8-02
SS	21	099	4049	（方形周溝墓）	—	—	(諏訪台2a期)	GG13	N7-24
SS	22	099	4051	方形周溝墓	—	—	諏訪台1期	GG47	N8-82
SS	23	099	4054	方形周溝墓	—	—	諏訪台1期	HG21	N9-40
SS	24	099	4052	方形周溝墓	—	—	諏訪台1期	GG69	O8-26
SS	25	099	4055	方形周溝墓	—	—	諏訪台1期	HG53	O9-04
SS	26	099	4072	方形周溝墓	—	—	諏訪台1期	HG16	N10-20
SS	27	099	4027	方形周溝墓	—	—	諏訪台2a期	HF29	L10-46
SS	28	099	4043	（方形周溝墓）	—	—	(諏訪台2a期)	HG08	N10-04
SS	29	099	4082	（方形周溝墓）	—	—	(諏訪台2a期)	IG31	N11-60
SS	30	099	4071	方形周溝墓	—	—	諏訪台1期	HG78	O10-44
SS	31	099	4056	方形周溝墓	—	—	諏訪台1期	HG93	O9-84
SS	32	099	4059	方形周溝墓	—	—	諏訪台1期	HH06	P10-00
SS	33	099	4062	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	HH39	P10-66
SS	34	099	4069	方形周溝墓	—	—	諏訪台1期	IH01	P11-00
SS	35	099	4115	（方形周溝墓）	—	—	(諏訪台2a期)	IG71	O11-40
SS	36	099	ロ－２	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	IG56	O12-00
SS	37	099	4073	方形周溝墓	—	—	諏訪台1期	IH25	P11-48
SS	38	ヒ28	０３４	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	G12-01	Q11-00
SS	39	ヒ28	０３３	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	G12-07	Q11-35
SS	40	ヒ28	１６２	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	G12-16	Q11-88
SS	41	ヒ28	１６３	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	G13-02	Q12-04
SS	42	ヒ28	１８５	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	G13-11	Q12-55
SS	43	ヒ28	１４８	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	G14-01	Q13-00
SS	44	ヒ28	１５０	方形周溝墓	—	—	諏訪台1期	G14-14	Q13-83
SS	45	ヒ28	１９０	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	G15-01	Q14-00
SS	46	ヒ28	１５２	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	G15-09	Q14-30
SS	47	ヒ28	１５３	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	H15-09	R14-50
SS	48	ヒ28	１５９	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	H16-03	R15-05
SS	49	ヒ54	№９	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	I16-A	S15-00
SS	50	ヒ54	№３９	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	I17-A	S16-00
SS	51	ヒ54	№８	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	I18-A	S17-00
SS	52	ヒ28	０５４	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	I15-09	S14-50
SS	53	ヒ28	１６７	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	I14-07	S13-25
SS	54	ヒ28	１６８	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	J14-01	T13-02
SS	55	ヒ28	１８０	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	K14-01	U13-00
SS	56	ヒ28	１８１	方形周溝墓	—	—	諏訪台1期	J13-03	T12-05
SS	57	ヒ28	１４５（５５重複）	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	I13-03	S12-05

Tab.1 遺構一覧

略号	掲載遺構№	地区名	旧遺構№	種別	諏訪台コード	国分寺台 古墳コード	時期（諏訪台区分）	旧Grid	新Grid
SS	58	セ28	１６４（166重複）	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	I14-01	S13-00
SS	59	セ28	１６５	方形周溝墓	—	—	諏訪台1期	H13-07	R12-35
SS	60	セ28	１２４	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	H13-05	R12-30
SS	61	セ28	１２３	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	H12-16	R11-88
SS	62	セ28	１８２	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	J12-02	T11-03
SS	63	セ28	１２２	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	H11-16	R10-77
SS	64	セ28	０５０	方形周溝墓	—	—	諏訪台1期	H11-02	R10-02
SS	65	セ28	１９３	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	H10-12	R9-58
SS	66	セ28	２４４	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	I10-01	S9-00
SS	67	セ28	２９４	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	H10-05	R9-30
SS	68	セ28	２９５	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	H10-02	R9-03
SS	69	セ28	２４５	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	G10-12	Q9-57
SS	70	セ28	２９３	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	G10-13	Q9-80
SS	71	セ28	２９２	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	G9-15	Q8-85
SS	72	セ28	２９６	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	G10-05	Q9-30
SS	73	099	4058	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	GH50	P8-88
SS	74	099	ロ－12	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	GH69	Q8-26
SS	75	セ28	２９１	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	G9-09	Q8-50
SS	76	セ54	№３０	方形周溝墓	—	—	諏訪台1期	M20-A	W19-00
SS	77	セ54	№３３	（方形周溝墓）	—	—	(諏訪台2a期)	M21-A	W20-00
SS	78	セ54	№２８	方形周溝墓	—	—	諏訪台2a期	L21-A	V20-00
SS	79	セ54	№４３	（方形周溝墓）	—	—	(諏訪台2a期)	M22-A	W21-00
SS	80	セ54	№４４	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	M22-K	W21-55
SS	81	セ54	№４５	（方形周溝墓）	—	—	(諏訪台2a期)	M22-K	W21-55
SS	82	セ54	№４６	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	M22-K	W21-55
SS	83	セ72	００３	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台3b期）	3B-A1	M4-00
SS	84	セ72	００４	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	3B-C1	M4-50
SS	85	セ72	００５	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台3a期）	3A-D1	L4-55
SS	86	セ72	００６	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台3a期）	3A-D1	L4-55
SS	87	セ72	００７	方墳	—	—	諏訪台3a期	2A-D1	L3-55
SS	88	セ72	００８	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台3a期）	2B-A1	M3-10
SS	89	セ72	００９	方形周溝墓	—	—	諏訪台2a期	2C-A1	N3-00
SS	90	セ72	０３６	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	2C-A1	N3-00
SS	91	セ72	０１０	（方形周溝墓）	—	—	(諏訪台2a期)	1B-C4	M2-72
SS	92	セ72	０４２	方形周溝墓	—	—	諏訪台2a期	1B-A4	M2-33
SS	93	セ72	０４３	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台3a期）	2B-A1	M3-00
SS	94	SW74	諏訪台３３号墳	前方後方墳	諏訪台33号墳	国223 ※	諏訪台4a期	-	K2-00
SS	95	099	4003	方墳	—	—	諏訪台4b期	FE55	K5-08
SS	96	099	4048	方墳	—	—	諏訪台4a期	FF38	L6-64
SS	97	セ72	００１	前方後方墳	諏訪台9号墳	国155	諏訪台4a期	4B-A1	M5-00
SS	98	099	ロ－8	（方形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	HD51	I9-00
SS	99	099	4065	方墳	—	—	諏訪台4b期	JH01	P13-00
SS	100	099	4057	（円形周溝墓）	—	—	（諏訪台1期）	HH11	P9-20
SS	101	セ73	００１	前方後方墳	諏訪台11号墳	国157	諏訪台4b期	BM12-A	R3-00
SS	102	セ73	０１４	（方墳）	—	—	(諏訪台4b期)	BM16-F	S5-33
SS	103	セ28	０４８	方墳	諏訪台12号墳	国158	諏訪台4b期	I7-03	S6-05
SS	104	セ28	０４７	方墳	諏訪台13号墳	国159	諏訪台4b期	J9-01	T8-00
SS	105	セ28	１３９	方墳	—	—	諏訪台4c期	J7-16	T6-78
SS	106	セ28	１１３	方墳	—	—	諏訪台4b期	J9-13	T8-80
SS	107	セ28	１３４－B	（方墳）	—	—	（諏訪台3b期）	K10-01	U9-00
SS	108	セ28	１１２	（方墳）	—	—	（諏訪台3b期）	J9-11	T8-55
SS	109	セ28	２８０	（方墳）	—	—	（諏訪台3b期）	J9-07	T8-25
SS	110	セ28	０６１	（方墳）	—	—	（諏訪台4a期）	H8-07	R7-35
SS	111	セ28	０４６	方墳	—	—	諏訪台4b期	I8-03	S7-05
SS	112	セ28	０４３	方墳	—	—	諏訪台4b期	I9-01	S8-00
SS	113	セ28	２９０	方墳	—	—	諏訪台4a期	I10-11	S9-55
SS	114	セ28	１３４－A	方墳	—	—	諏訪台4b期	I11-01	S10-00

Tab.1 遺構一覧

略号	掲載遺構No.	地区名	旧遺構No.	種別	諏訪台コード	国分寺台 古墳コード	時期（諏訪台区分）	旧Grid	新Grid
SS	115	セ28	１２５	（方墳）	—	—	（諏訪台4c期）	I12-16	S11-88
SS	116	セ28	１３０	（方墳）	—	—	（諏訪台3b期）	J12-11	T11-55
SS	117	セ28	１２１	方墳	—	—	諏訪台3b期	J11-12	T10-57
SS	118	セ28	１２０	（前方後方墳）	—	—	（諏訪台3b期）	K11-09	U10-50
SS	119	セ28	１２８	前方後方墳	—	—	諏訪台3b期	L11-01	V10-00
SM	1001	セ28	０２９	前方後円墳	諏訪台18号墳	国164	諏訪台7期	H13-05	R12-10
SM	1002	099	4033	前方後円墳	—	—	諏訪台7期	GF-53	L7-64
SM	1003	セ28	０３９	前方後円墳	諏訪台15?・16?号墳	国161?・162?	諏訪台7期	I10-02	S9-02
SM	1004	099	4081	円墳→前方後円墳	—	—	諏訪台6期	IG-14	N11-26
SM	1005	セ28	０２５	円墳→前方後円墳	諏訪台20号墳	国166	諏訪台6期	F14-13	P13-70
SM	1006	099	4068	円墳→前方後円墳	—	—	諏訪台7期	JG-55	O13-08
SM	1007	セ28	０３８	円墳→前方後円墳	諏訪台17号墳	国163	諏訪台6期	I12-10	S11-52
SM	1008	SW83	K15	前方後方墳	諏訪台26号墳	国172	諏訪台8期	NK-47	W22-08
SM	1009	099	4022	前方後方墳	—	—	諏訪台8期	KE-66	K16-20
SM	1010	099	4060	前方後方墳	—	—	諏訪台8期	HG-97	P10-00
SM	1011	セ73	００２	方墳→前方後方墳	諏訪台38号墳	国254	諏訪台8期	BM-13-11	R4-55
SM	1012	SW83	６号墳（Ｋ６）	方墳→前方後方墳	—	—	諏訪台8期	NJ-37	T22-85
SM	1013	セ54	№３２	方墳→前方後方墳	—	—	諏訪台8期	M21-C	W20-05
SM	1014	セ28	０４９	円墳→前方後円墳	諏訪台41号墳	—	諏訪台6期	J7-04	T6-52
SM	1015	セ28	０２２	円墳	—	—	諏訪台7期	G14-04	Q13-07
SM	1016	099	4070	円墳	—	—	諏訪台7期	HG-56	O10-00
SM	1017	064	151　5号墳	円墳	諏訪台5号墳	国151	諏訪台6期	2B-85	G5-00
SM	1018	099	4066	円墳	—	—	諏訪台7期	JH-04	P13-06
SM	1019	099	4061	円墳	—	—	諏訪台6期	IH-03	P11-04
SM	1020	SW74	諏訪台７号墳	円墳	諏訪台7号墳	国153	諏訪台6期	-	K3-50
SM	1021	セ28	０２８	円墳	諏訪台19号墳	国165	諏訪台7期	H13-12	R12-58
SM	1022	セ28	０６４	円墳	—	—	諏訪台6期	I9-09	S8-50
SM	1023	099	4050	円墳	—	—	諏訪台7期	GG-49	N8-86
SM	1024	064	150　4号墳	円墳	諏訪台4号墳	国150	諏訪台6期	2B-27	E5-55
SM	1025	099	4042	円墳	—	—	諏訪台7期	HF-78	M10-46
SM	1026	099	4039	円墳	—	—	諏訪台7期	GF-07	L8-04
SM	1027	099	4074	円墳	—	—	諏訪台7期	IG-87	O12-62
SM	1028	セ28	０４５	円墳	—	—	諏訪台6期	J9-11	T8-55
SM	1029	セ28	０３０	円墳	—	—		G13-01	Q12-00
SM	1030	セ28	１５１	円墳	—	—		H14-03	Q13-85
SM	1031	セ28	０３５	円墳	—	—		H11-04	R10-07
SM	1032	セ28	３２７	円墳	—	—	諏訪台7期	I8-06	S7-33
SM	1033	099	4053	円墳	—	—	諏訪台7期	E9-19	O8-66
SM	1034	セ28	０４０	円墳	—	—		H11-05	R10-20
SM	1035	セ28	０３６	円墳	—	—		G11-09	Q10-50
SM	1036	099	4023	円墳	—	—		JE-77	K14-42
SM	1037	セ28	１７２	円墳	—	—	諏訪台7期	I14-05	S13-32
SM	1038	セ28	１７３	円墳	—	—		I13-03	S12-05
SM	1039	064	263	円墳	—	国263		2C-42	F6-07
SM	1040	099	ロ－１	円墳	—	—		HG-71	O9-40
SM	1041	SW83	K17	方墳	諏訪台30号墳	国176	諏訪台9期	RI-45	R26-00
SM	1042	セ54	№１５	方墳	諏訪台22号墳	国168	諏訪台9期	J19-A	T18-00
SM	1043	セ54	№１３	方墳	—	—	諏訪台9期	J22-A	T20-07
SM	1044	SW83	K21	方墳	—	—	諏訪台9期	NH-41	Q21-00
SM	1045	SW80	175	方墳	諏訪台29号墳	国175	諏訪台9期	PI-01	R25-00
SM	1046	064	152　6号墳	方墳	諏訪台6号墳	国152	諏訪台9期	3C-02	G7-50
SM	1047	099	4020	方墳	—	—	諏訪台9期	JF-01	L13-00
SM	1048	SW83	５号墳（Ｋ５）	方墳	諏訪台24号墳	国170	諏訪台9期	JN-45	U22-00
SM	1049	SW83	３号墳（Ｋ３）	方墳	—	—	諏訪台10期	OI-01	R23-00
SM	1050	099	4009	方墳	—	—		IC-73	G11-44
SM	1051	099	4076	方墳	—	—	諏訪台10期	JF-55	M13-08
SM	1052	セ54	№２	方墳	—	—		G19-D	Q18-05

Tab.1 遺構一覧

略号	掲載遺構№	地区名	旧遺構№	種別	諏訪台コード	国分寺台 古墳コード	時期（諏訪台区分）	旧Grid	新Grid
SM	1053	099	4010	方墳	—	—		IC-66	G12-20
SM	1054	SW83	１号墳（Ｋ１）	方墳	諏訪台23号墳	国169		I22-A	S21-00
SM	1055	064	261	方墳	—	国261		2C-27	E7-49
SM	1056	099	4014	方墳	—	—		JD-22	H13-42
SM	1057	064	260	方墳	—	国260		2B-59	F6-30
SM	1058	SW83	K14	方墳	—	—	諏訪台9期	OJ-67	U24-55
SM	1059	SW83	K16	方墳	諏訪台27号墳	国173	諏訪台8期	OK-16	V24-52
SM	1060	ｾ28	０３７	方墳	諏訪台14号墳	国160	諏訪台8期	H10-02	R9-03
SM	1061	ＴＪ	ＴＪ１２方形周溝	方墳	—	—		HC-93	G9-84
SM	1062	SW83	４号墳（Ｋ４）	方墳	—	—		NJ-07	S22-75
SM	1063	099	4104	方墳	—	—		OG-74	O23-46
SM	1064	ｾ54	№２３	方墳	—	—	諏訪台9期	L22-A	U20-97
SM	1065	099	4077	方墳	—	国260		KF-51	M15-00
SM	1066	SW83	７号墳（Ｋ７）	方墳	諏訪台25号墳	国171	諏訪台9期	OJ-23	T23-75
SM	1067	099	4108	方墳	—	—	諏訪台9期	OH-21	P23-40
SM	1068	099	4034	方墳	—	—		HE-61	K9-20
SM	1069	099	4094	方墳	—	—		LG-56	O18-00
SM	1070	099	4078	方墳	—	—		JF-51	M13-00
SM	1071	ｾ54	№１４	方墳	—	—		I20-J	S19-73
SM	1072	099	4032	方墳	—	—	諏訪台10期	HE-56	K10-00
SM	1073	SW83	２号墳（Ｋ２）	方墳	—	—	諏訪台9期	NI-35	R27-70
SM	1074	SW83	K22	方墳	—	—		NH-45	Q22-00
SM	1075	ｾ73	００３	方墳	—	—		BM7-B	P2-05
SM	1076	SW83	K19	方墳	—	—		PJ-61	U25-53
SM	1077	099	4090	方墳	—	—	諏訪台10期	MG-41	O19-00
SM	1078	ＴＪ	ＴＪ１４方形周溝	方墳	—	—		JB-82	E13-62
SM	1079	ＴＪ	ＴＪ１１方形周溝	方墳	—	—		HC-88	G10-64
SM	1080	ＴＪ	ＴＪ１０方形周溝	方墳	—	—		JB-37	D14-62
SM	1081	ｾ54	№１８	方墳	—	—	諏訪台9期	J21-M	T20-70
SM	1082	SW83	K18	方墳	—	—		PJ-68	U26-67
SM	1083	099	4016	方墳	—	—	諏訪台10期	JD-67	I14-22
SM	1084	ｾ54	№６	方墳	—	—		I20-A	S19-00
SM	1085	ｾ54	№２９	方墳	—	—	諏訪台8期	M20-A	W19-00
SM	1086	ＴＪ	ＴＪ１３方形周溝	方墳	—	—		GD-18	H18-24
SM	1087	SW83	K9	方墳	—	—	諏訪台10期	NJ-75	U22-80
SM	1088	ｾ54	27	方墳	—	—		L22-K	V21-55
SM	1089	ｾ28	044	方墳	—	—	諏訪台8期	H9-13	R8-81
SM	1090	ｾ28	171	方墳	—	—		I14-10	S13-75
SM	1091	099	4019	方墳	—	—		IE-74	K11-46
SM	1092	ｾ28	222	方墳	—	—		G9-13	Q8-90
SM	1093	ｾ28	０２０	方墳	—	—		G16-13	Q15-80
SM	1094	ｾ54	№１９	方墳	—	—		J19-K	T18-55
SM	1095	ｾ54	№７	方墳	—	—	諏訪台10期	H18-11	R17-55
SM	1096	ｾ54	№３４	方墳	—	—		M22-A	W21-00
SM	1097	ｾ54	№１７	方墳	諏訪台21号墳?	国167?	諏訪台10期	I17-M	S16-70
SM	1098	ｾ54	№４	方墳	—	—		H21-A	R20-30
SM	1099	SW83	K13	方墳	—	—		OJ-47	T24-85
SM	1100	099	4111	方墳	—	—		MG-100	O20-88
SM	1101	099	4102	方墳	—	—	諏訪台10期	MF-85	M21-68
SM	1102	SW83	K10	方墳	—	—		OJ-51	U23-20
SM	1103	ＴＪ	ＴＪ５方形周溝	方墳	—	—		KD-98	I16-84
SM	1104	099	4087	方墳	—	—	諏訪台9期	LF-97	M18-82
SM	1105	ｾ54	№５	方墳	—	—		H20-B	R19-03
SM	1106	099	4110	方墳	—	—	諏訪台9期	NG-93	O21-84
SM	1107	SW83	K23	方墳	—	—	諏訪台9期	PJ-42	U25-03
SM	1108	ｾ54	№４７	方墳	—	—		L22-H	V21-38
SM	1109	099	4106	方墳	—	—		OM-14	P23-26

Tab.1 遺構一覧

略号	掲載遺構№	地区名	旧遺構№	種別	諏訪台コード	国分寺台 古墳コード	時期（諏訪台区分）	旧Grid	新Grid
SM	1110	セ54	№２１	方墳	—	—		J18-I	T17-60
SM	1111	099	4040	方墳	—	—		GF-86	M7-68
SM	1112	セ54	№１３３	方墳	—	—		L20-L	V19-57
SM	1113	セ54	№３６	方墳（方形区画墓）	—	—		H21-N	S20-03
SM	1114	セ54	№３５	方墳	—	—		I21-A	S20-00
SM	1115	099	4011	方墳	—	—	諏訪台10期	ID-55	I11-08
SM	1116	セ54	№５１	方墳	—	—	諏訪台11期	L21-L	V20-58
SM	1117	099	4017	方墳	—	—		ID-98	I12-84
SM	1118	099	4099	（方墳（方形区画墓））	—	—		KG-55	O15-08
SM	1119	SW83	K20	方墳	—	—		PK-12	V25-23
SM	1120	SW83	K24	方墳	—	—		QI-32	R27-73
SM	1121	099	4079	方墳	—	—		IG-09	N12-06
SM	1122	セ54	№５０	（方墳（方形区画墓））	—	—		M21-G	W20-26
SM	1123	099	4006	方墳	—	—		HD-46	H10-80
SM	1124	ＴＪ	ＴＪ６方形周溝	方墳	—	—		JC-72	G13-42
SM	1125	ＴＪ	ＴＪ１５方形周溝	方墳	—	—		HF-78	G14-60
SM	1126	セ28	０１１	方墳	—	—		G17-12	Q16-58
SM	1127	セ28	０４２	方墳	—	—	諏訪台10期	I15-10	S9-85
SM	1128	099	4080	（方墳（方形区画墓））	—	—		IG-28	N12-44
SM	1129	セ54	№１６	方墳	諏訪台21号墳?	国167?	諏訪台10期	J17-C	T16-05
SM	1130	099	4085	方墳	—	—		LF-22	L17-42
SM	1131	セ28	4085	方墳	—	—		H17-01	Q16-90
SM	1132	セ54	№１２	方墳	—	—		H20-O	R19-85
SM	1133	ＴＪ	ＴＪ１方形周溝	方墳	—	—		NF-14	L21-26
SM	1134	セ28	１１６	方墳	—	—		J10-12	T10-51
SM	1135	セ28	１７９	方墳	—	—	諏訪台10期	J14-05	T13-30
SM	1136	セ54	№４８	方墳	—	—		M21-O	W20-85
SM	1137	セ54	№３１	方墳	—	—		M20-P	W19-78
SM	1138	099	4097	（方墳（方形区画墓））	—	—		LG-26	N18-40
SM	1139	099	4084	（方墳（方形区画墓））	—	—		KF-38	L16-64
SM	1140	ＴＪ	ＴＪ７方形周溝	（方墳（方形区画墓））	—	—		IB-67	E12-22
SM	1141	099	4103	（方墳（方形区画墓））	—	—		OG-34	N23-66
SM	1142	ＴＪ	ＴＪ３方形周溝	（方墳（方形区画墓））	—	—		ME-77	K20-42
SM	1143	ＴＪ	ＴＪ２方形周溝	（方墳（方形区画墓））	—	—		ME-70	K20-28
SM	1144	099	4041-A	（方墳（方形区画墓））	—	—		LE-82	K17-62
SM	1145	099	4041-B	（方墳（方形区画墓））	—	—		LE-82	K17-62
SM	1146	セ28	１１５	（方墳（方形区画墓））	—	—		J10-16	T9-57
SM	1147	099	4101	（方墳（方形区画墓））	—	—		OF-95	M23-88
SM	1148	099	4098	（方墳（方形区画墓））	—	—		KG-40	N16-68
SM	1149	セ28	０２７	（方墳（方形区画墓））	—	—		H14-08	R13-37
SM	1150	099	4035	（方墳（方形区画墓））	—	—		HE-64	K9-26
SM	1151	099	4105	（方墳（方形区画墓））	—	—		OH-07	P24-02
SM	1152	セ28	０３１	（方墳（方形区画墓））	—	—		G12-03	Q11-05
SM	1153	099	4112	（方墳（方形区画墓））	—	—		NH-23	P21-44
SM	1154	セ28	０４１	（方墳（方形区画墓））	—	—		H11-10	R10-52
SM	1155	セ54	№２６	（方墳（方形区画墓））	—	—		K18-N	U17-91
SM	1156	099	4037	（方墳（方形区画墓））	—	—		HE-33	J9-64
SM	1157	099	4028	方墳（方形区画墓）	—	—	諏訪台10期	IF-52	M11-02
SM	1158	099	4024	方墳（方形区画墓）	—	—	諏訪台10期	HE-90	K10-68
SM	1159	セ54	№１０	（方墳（方形区画墓））	—	—		I16-F	S15-32
SM	1160	099	4096	（方墳（方形区画墓））	—	—		LG-71	O17-40
SM	1161	099	4018	（方墳（方形区画墓））	—	—		JE-10	J14-08
SM	1162	099	4008	（方墳（方形区画墓））	—	—		ID-04	H11-06
SM	1163	099	4109	（方墳（方形区画墓））	—	—		H9-53	O21-04
SM	1164	セ28	026	方墳（方形区画墓）	—	—	諏訪台10期	H15-07	R14-65
SM	1165	セ54	№２４	（方墳（方形区画墓））	—	—		K21-N	U20-82
SM	1166	099	4026	（方墳（方形区画墓））	—	—		IF-11	L11-20

Tab.1 遺構一覧

略号	掲載遺構№	地区名	旧遺構№	種別	諏訪台コード	国分寺台 古墳コード	時期（諏訪台区分）	旧Grid	新Grid
SM	1167	ｾ28	060	（方墳（方形区画墓））	—	—		I6-12	S5-67
SM	1168	099	4093	（方墳（方形区画墓））	—	—		LG-100	O18-88
SM	1169	099	4013	（方墳（方形区画墓））	—	—		ID-09	H12-06
SM	1170	099	4007	（方墳（方形区画墓））	—	—		ID-11	H11-20
SM	1171	099	4083	（方墳（方形区画墓））	—	—		IG-58	N12-94
SM	1172	ＴＪ	TJ4方形周溝	（方墳（方形区画墓））	—	—		LE-03	I17-93
SM	1173	099	4095	方墳（方形区画墓）	—	—	諏訪台11期	LG-73	O17-44
SM	1174	064	262	（方墳（方形区画墓））	—	国262		IB-90	D6-52
SM	1175	SW83	K12	方墳（方形区画墓）	—	—	諏訪台11期	OJ-16	T24-32
SM	1176	SW83	K26	（方墳（方形区画墓））	—	—		PK-17	V26-25
SM	1177	ｾ54	№38	（方墳（方形区画墓））	—	—		I15-D	S14-08
SM	1178	099	4107	方墳（方形区画墓）	—	—	諏訪台10期	OH-44	P23-86
SM	1179	ｾ28	144	（方墳（方形区画墓））	—	—		I13-10	S12-53
SM	1180	ｾ54	№40	（方墳（方形区画墓））	—	—		H16-K	R15-55
SM	1181	099	4012	方墳（方形区画墓）	—	—	諏訪台10期	IC-82	G12-51
SM	1182	099	4015	（方墳（方形区画墓））	—	—		JD-33	H13-64
SM	1183	ｾ54	№20	（方墳（方形区画墓））	—	—		J18-O	T17-75
SM	1184	ｾ54	№25	（方墳（方形区画墓））	—	—		K20-A	U19-00
SM	1185	ｾ73	015	方墳	—	—		BM15-K	S4-55
SM	1186	ｾ54	№1	方墳	諏訪台36号墳	国252		G20-C	Q19-05
SM	1187	SW83	K25	方墳	—	—		PK-41	W25-00
SM	1188	SW83	K27	（方墳（方形区画墓））	—	—		PK-34	V25-78
SM	1189	SW83	K28	（方墳（方形区画墓））	—	—		PK-14	V25-38
SM	1190	ｾ28	３６１	方墳	—	—		Ｊ５－０７	T4-23
SK	1	ＴＪ	ＴＪ２号土壙墓	地下式土壙	—	—		IC34	F11 - 66
SK	2	ＴＪ	ＴＪ３号土壙墓	地下式土壙	—	—		KD24	H15-46
SK	3	064	ﾄ-13	土坑	—	—		2B-32	E4-83
SK	4	064	ﾄ-12	土坑	—	—		2B-23	E4-56
SK	5	064	ﾄ-3	土坑	—	—		2B-14	E4-38
SK	6	064	ﾄ-11	土坑	—	—		2B-04	E4-18
SK	7	064	ﾄ-10	土坑	—	—		2B-05	E5-00
SK	8	064	ﾄ-2	土坑	—	—		1B-97	D5-75
SK	9	064	SK207	土坑	—	—		1B-100	D6-91
SK	10	064	ＳＫ９３８	土坑	—	—		1C-92	D6-88
SK	11	064	SK206	側壁抉込土壙	—	—		2C-02	E6-08
SK	12	064	ＳＫ９３２	土坑	—	—		2C-11	E6-45
SK	13	064	SK944	土坑	—	—		2C-37	E8-80
SK	14	064	ＳＫ９４０	土坑	—	—		2C-86	G7-08
SK	15	064	ＳＸ９０９	土坑	—	—		2C-74	F7-82
SK	16	064	ＳＸ９１０	土坑	—	—		2C-74	F7-82
SK	17	064	ＳＫ９３６	土坑	—	—		2C-63	F7-40
SK	18	064	ＳＫ９３７	土坑	—	—		2C-63	F7-40
SK	19	064	ＳＫ９３５	土坑	—	—		3C-02	G6-57
SK	20	064	ﾄ-5	土坑	—	—		2B-90 (SB114住居内)	G6-02
SK	21	064	ＳＫ９２７	土坑	—	—		2B-98	G5-28
SK	22	064	ＳＫ９１０	方形竪穴状遺構	—	—		2B-98	G6-50
SK	23	064	ＳＫ９１１	方形竪穴状遺構	—	—		2B-98	G6-50
SK	24	064	ＳＫ９１２	方形竪穴状遺構	—	—		2B-98	G6-50
SK	25	064	ＳＫ９１３	方形竪穴状遺構	—	—		2B-98	G6-50
SK	26	064	ＳＫ９１４	土坑	—	—		2B-98	G6-50
SK	27	064	ＳＫ９１６	方形竪穴状遺構	—	—		2B-98	G6-50
SK	28	064	ＳＫ９１７	方形竪穴状遺構	—	—		2B-98	G6-50
SK	29	064	ＳＫ９１８	方形竪穴状遺構	—	—		2B-98	G6-50
SK	30	064	ＳＫ９２２	方形竪穴状遺構	—	—		3B-08	G5-67
SK	31	064	SK945	土坑	—	—		3B-07	G5-55
SK	32	064	ＳＫ９２０	土坑	—	—		3B-07	G5-55
SK	33	064	ﾄ-4	地下式土壙	—	—		2B-84	G4-18

Tab.1 遺構一覧

略号	掲載遺構No.	地区名	旧遺構No.	種別	陶邑台コード	国分寺台 古墳コード	時期（陶邑台区分）	旧Grid	新Grid
SK	34	064	ト-1	土壙	—	—		2B-73	F4-88
SK	35	064	ＳＸ９０８	地下式坑	—	—		2B-73	F4-88
SK	36	064	ＳＫ９３１	土坑	—	—		2B-63	F4-55
SK	37	064	ＳＫ９３４	土坑	—	—		2B-52	F4-33
SK	38	064	ト-14	土壙	—	—		2B-52	F4-23
SK	39	064	ＳＫ９２９	側壁抉込土壙	—	—		3B-14	G4-77
SK	40	064	ト-6	土壙	—	—		3B-14	G4-88
SK	41	064	ＳＸ９０６	地下式土壙	—	—		3B-25	H5-11
SK	42	064	ＳＸ９０４	側壁抉込土壙	—	—		3B-26	H5-02
SK	43	064	ＳＫ９２４	土壙	—	—		3B-16	G5-84
SK	44	064	ＳＫ９２１	土壙	—	—		3B-17	G5-85
SK	45	064	ＳＫ９２８	土坑	—	—		3B-27	H5-05
SK	46	064	ＳＫ９０９	土坑	—	—		3B-29	H6-00
SK	47	064	ＳＫ９０８	土坑	—	—		3B-30	H6-01
SK	48	064	ＳＫ９０６	土坑	—	—		3C-31	H6-24
SK	49	064	ＳＫ９０７	土坑	—	—		3C-31	H6-24
SK	50	064	ＳＫ９０４	土坑	—	—		3B-40	H6-33
SK	51	064	SK941	土坑	—	—		3C-22	H6-07
SK	52	064	SK942	土坑	—	—		3C-22	H6-07
SK	53	064	SK943	土坑	—	—		3C-22	H6-08
SK	54	064	ＳＫ９１５	土坑	—	—		3C-32	H6-27
SK	55	064	ＳＫ９０３	土坑	—	—		3C-32	H6-38
SK	56	064	ＳＫ９０１	土坑	—	—		3C-23	H7-00
SK	57	064	ＳＫ９０２	土坑	—	—		3C-33	H7-30
SK	58	099	３０３３	土坑	—	—		HD67	I10-22
SK	59	064	ＳＫ９０５	土坑	—	—		3C-43	H7-50
SK	60	064	ＳＸ２０１	土坑	—	—		3C-42	H6-57
SK	61	064	ＳＸ９０２	土坑	—	—		3B-60	H6-73
SK	62	064	ＳＫ９１９	土坑	—	—		3B-38	H5-39
SK	63	064	ト-7	土坑	—	—		3B-33	H4-36
SK	64	064	ト-8	土坑	—	—		3B-42	H4-53
SK	65	099	３０５１	土坑	—	—		GD93	I7-84
SK	66	099	３０５２	土坑	—	—		GE04	J7-06
SK	67	099	３０５３	土坑	—	—		GE05	J7-08
SK	68	099	３０５８	土坑	—	—		GE26	J8-40
SK	69	099	３０３７	土壙	—	—		HD93	I9-84
SK	70		３０３５	土壙	—	—		HD27	H10-42
SK	71	099	３０３６	土壙	—	—		HD17	H10-22
SK	72	099	３０２３	土壙	—	—		ID15	H11-28
SK	73	099	３０３３	土坑	—	—		HD67	I10-22
SK	74	099	３０３４	土坑	—	—		HD87	I10-62
SK	75	099	３０３０	土壙	—	—		HD60	I10-07
SK	76	099	３０３２	土坑	—	—		HD69	I10-26
SK	77	099	３０２２	土壙	—	—		ID42	H11-82
SK	78	099	３０２１（Ｂ）	土壙	—	—		ID57	I12-02
SK	79	099	３０２１（Ａ）	土壙	—	—		ID57	I12-02
SK	80	099	３０２４	土坑	—	—		JD32	H13-62
SK	81	099	３３６４	土坑	—	—		JD84	I13-66
SK	82	099	３０２９	土壙	—	—		KE45	J15-88
SK	83	099	ロ-5	土壙	—	—		KF20	L16-28
SK	84	099	ロ-6	側壁抉込土壙	—	—		KF36	L16-60
SK	85	099	３０２６	土坑	—	—		JE32	J13-62
SK	86	099	３０２７	土坑	—	—		JE41	J13-80
SK	87	099	３１１１	地下式改葬墓	—	—		JE64	K13-26
SK	88	099	３１１７	土坑	—	—		JE75	K13-48
SK	89	099	３１１６	土坑	—	—		JE75	K13-48
SK	90	099	３１１４	土坑	—	—		JE67	K14-22

Tab.1 遺構一覧

略号	掲載遺構№	地区名	旧遺構№	種別	踏査台コード	国分寺台 古墳コード	時期（踏査台区分）	旧Grid	新Grid
SK	91	099	３１１５	土坑	—	—		JE67	K14-22
SK	92	099	３１１２	土坑	—	—		JE83	K13-64
SK	93	099	３１１３	土坑	—	—		JE83	K13-64
SK	94	099	３１０９	土壙	—	—		JE85	K13-68
SK	95	099	３１１０	土坑	—	—		JE96	K14-80
SK	96	099	３１０８	土坑	—	—		JF15	L13-28
SK	97	099	３１０４	土坑	—	—		JF23	L13-44
SK	98	099	３１０５	土壙	—	—		JF23	L13-44
SK	99	099	３１３２	土坑	—	—		IE72	K11-42
SK	100	099	３１３３	土坑	—	—		IE72	K11-42
SK	101	099	３０８２	土坑	—	—		IE92	K11-82
SK	102	099	３０８１	土坑	—	—		IE92	K11-82
SK	103	099	３０８３	土坑	—	—		IE92	K11-82
SK	104	099	３０８４	土坑	—	—		IE83	K11-64
SK	105	099	３０８５	土坑	—	—		IE83	K11-64
SK	106	099	３０８６	土坑	—	—		IE85	K11-68
SK	107	099	３０８７	土坑	—	—		IE85	K11-68
SK	108	099	３０８８	土坑	—	—		IE95	K11-88
SK	109	099	３０８９	土坑	—	—		IF04	L11-06
SK	110	099	３０９０	土壙	—	—		IF02	L11-02
SK	111	099	３０９１	土壙	—	—		IF15	L11-28
SK	112	099	３０９２	土坑	—	—		IF16	L12-20
SK	113	099	３０９９	土壙	—	—		IF22	L11-42
SK	114	099	３１００	土坑	—	—		IF33	L11-64
SK	115	099	３０９４	土坑	—	—		IF35	L11-68
SK	116	099	３０９５	土坑	—	—		IF35	L11-68
SK	117	099	３０９３	土壙	—	—		IF26	L12-40
SK	118	099	３１０３	土坑	—	—		IF29	L12-46
SK	119	099	３０９８	土坑	—	—		IF45	L11-88
SK	120	099	３０６２	土坑	—	—		EE97	K4-82
SK	121	099	３０６３	土坑	—	—		EE97	K4-82
SK	122	099	３０６７	土壙	—	—		EE98	K4-84
SK	123	099	３０６８	土坑	—	—		EE99	K4-86
SK	124	099	３０６９	土坑	—	—		EE100	K4-88
SK	125	099	３０７１	土壙	—	—		EE90	K4-68
SK	126	099	３０７２	土坑	—	—		FE82	K5-62
SK	127	099	３０７９	土坑	—	—		FF11	L5-20
SK	128	099	ロ-11	土坑	—	—		FF10	L6-08
SK	129	099	３１４０	土坑	—	—		GF24	L7-45
SK	130	099	ロ-10	土壙	—	—		GE90	K8-58
SK	131	099	３１２２	土壙	—	—		GF40	L8-68
SK	132	099	３１２５	土坑	—	—		GF57	M8-02
SK	133	099	３１２７	土坑	—	—		GF57	M8-02
SK	134	099	３１２４	土坑	—	—		GF70	M8-28
SK	135	099	３１２６	土坑	—	—		HF51	M9-00
SK	136	099	３１２３	土坑	—	—		HF43	L9-84
SK	137	099	３１２９	土壙	—	—		HF84	M9-66
SK	138	099	３１３０	土壙	—	—		HG05	N9-08
SK	139	099	ロ-13	土坑	—	—		HG25	N9-48
SK	140	ｾ54	№４９	土坑	—	—		M21-O	W20-85
SK	141	099	３１５７	土坑	—	—		HF98	M10-84
SK	142	099	３１５８	土壙	—	—		HG10	N10-08
SK	143	099	３１５４	土坑	—	—		HG84	O9-66
SK	144	099	３１５３	土壙	—	—		HH42	P9-82
SK	145	099	３１５１	土坑	—	—		HH37	P10-62
SK	146	099	３１５５	土坑	—	—		HH50	P10-88
SK	147	099	３１５９	土壙	—	—		IG64	O11-16

Tab.1 遺構一覧

略号	掲載遺構№	地区名	旧遺構№	種別	諏訪台コード	国分寺台 古墳コード	時期（諏訪台区分）	旧Grid	新Grid
SK	148	099	３１６０	土坑	—	—		IG46	N12-80
SK	149	099	３１６１	土壙	—	—		IG58	N12-94
SK	150	099	３１６２	土壙	—	—		JG18	N14-24
SK	151	099	３１６８	地下式土壙	—	—		JG59	O14-06
SK	152	099	３１６９	土壙	—	—		KG61	O15-20
SK	153	099	３０７６	土壙	—	—		MF68	M20-24
SK	154	099	３１７４	側壁抉込土壙	—	—		LG30	N18-48
SK	155	099	３１７５	側壁抉込土壙	—	—		LG29	N18-46
SK	156	099	３１７３	土坑	—	—		LG91	O17-80
SK	157	099	ロ-7	土坑	—	—		LG94	O17-86
SK	158	099	３０７０	土坑	—	—		MG71	O19-40
SK	159	099	ロ-9	土坑	—	—		MG65	O19-28
SK	160	099	３３５２	土坑	—	—		MG37	N20-62
SK	161	099	３３５０	土坑	—	—		MG49	N20-86
SK	162	099	３３４８	土坑	—	—		MG68	O20-24
SK	163	099	３３４７	土坑	—	—		MG78	O20-44
SK	164	099	３３４６	土坑	—	—		MG87	O20-62
SK	165	099	３３４５Ａ	土坑	—	—		MG79	O20-46
SK	166	099	３３４５Ｂ	土坑	—	—		MG69	O20-26
SK	167	099	３３３８	土壙	—	—		NG04	N21-06
SK	168	099	３３３７	土坑	—	—		NG15	N21-28
SK	169	099	３３３９	土坑	—	—		NG34	N21-66
SK	170	099	３３４３	土壙	—	—		NG42	N21-82
SK	171	099	３３４４	土坑	—	—		NG64	O21-26
SK	172	099	３３３２	土坑	—	—		NG85	O21-68
SK	173	099	３３５６	土壙	—	—		NH05	P21-08
SK	174	099	３３３４	土坑	—	—		NG57	O22-02
SK	175	099	３３３３	土坑	—	—		NG67	O22-22
SK	176	099	３３００	土壙	—	—		NG10	N22-08
SK	177	099	３３６０	土坑	—	—		OG11	N23-20
SK	178	099	ロ-4	土坑	—	—		OG12	N23-22
SK	179	099	３３１１	土壙	—	—		OG31	N23-60
SK	180	099	３３１２	土坑	—	—		OG62	O23-22
SK	181	099	３３１３	地下式土壙	—	—		OG82	O23-62
SK	182	099	３３２８	土坑	—	—		NH19	P22-26
SK	183	099	３３１８	側壁抉込土壙	—	—		OG66	O24-20
SK	184	099	３３６１	土坑	—	—		OG59	O24-06
SK	185	099	３３５８	土坑	—	—		OG78	O24-44
SK	186	099	３３２０	土坑	—	—		OG96	O24-80
SK	187	099	３３２２	土坑	—	—		OH26	P24-40
SK	188	099	３３２１	土坑	—	—		OH37	P24-52
SK	189	099	３３２６	土坑	—	—		OH45	P23-88
SK	190	099	３３２５	土坑	—	—		OH57	Q24-02
SK	191	099	３３０５	土壙	—	—		QH10	P28-08
SK	192	099	３３０７	土壙	—	—		QH10	P28-08
SK	193	099	３３０６	土壙	—	—		QH10	P28-08
SK	194	SW83	K40	側壁抉込土壙	—	—		QI62	S27-64
SK	195	SW83	K39	土坑	—	—		QI72	S27-82
SK	196	SW83	K38	土壙	—	—		QK03	V27-04
SK	197	SW83	K43	土坑	—	—		QK12	V27-23
SK	198	SW83	K37	側壁抉込土壙	—	—		QK22	V27-51
SK	199	SW83	K42	土坑	—	—		PK18	V26-28
SK	200	SW83	K36	側壁抉込土壙	—	—		PK28	V26-47
SK	201	SW83	K29	土坑	—	—		PJ35	T26-80
SK	202	SW83	K30	土坑	—	—		PJ57	U26-33
SK	203	SW83	K34	側壁抉込土壙	—	—		PJ54	U25-28
SK	204	SW83	K32	土壙	—	—		PJ53	U25-35

Tab.1 遺構一覧

略号	掲載遺構№	地区名	旧遺構№	種別	諏訪台コード	国分寺台 古墳コード	時期（諏訪台区分）	旧Grid	新Grid
SK	205	SW83	K31	側壁抉込土壙	—	—		PJ64	U25-58
SK	206	SW83	K33	側壁抉込土壙	—	—		PK04	V25-07
SK	207	SW83	K35	土壙	—	—		PK11	V25-20
SK	208	SW83	K11	土壙	—	—		OJ04	T23-08
SK	209	SW83	1201	土壙	—	—		OJ01	T23-00
SK	210	SW83	K44	土壙	—	—		NK25	V22-50
SK	211	SW83		土坑	—	—		位置不明	
SK	212	ｾ28		土坑	—	—		J5-07	T4-25
SK	213	ｾ28	０６３（７２重複）	土壙	—	—		I6-10	S5-53
SK	214	ｾ28	０７０	土壙	—	—		I7-09	S6-50
SK	215	ｾ28	３２８	側壁抉込土壙	—	—		I8-09	S7-60
SK	216	ｾ28	０６５	土壙	—	—		H8-10	R7-52
SK	217	ｾ28	３４６（０６６？）	土坑	—	—		H8-14	R7-82
SK	218	ｾ28	３４５	土坑	—	—		I8-01	S7-00
SK	219	ｾ28	０６６	土壙	—	—		H8-14	R7-83
SK	220	ｾ28	０７４	土壙	—	—		J9-09	T8-51
SK	221	ｾ28	２２３	地下式土壙	—	—		J9-09	T8-50
SK	222	ｾ28	２２４	地下式土壙	—	—		J9-14	T8-72
SK	223	ｾ28	０７６	土壙	—	—		J9-03	S8-95
SK	224	ｾ28	１１１	土壙	—	—		J9-03	T8-05
SK	225	ｾ28	３５８	土壙	—	—		I10-13	S9-80
SK	226	ｾ28	０７５	土壙	—	—		T9-00	S9-80
SK	227	ｾ28	０６８	土壙	—	—		J10-01	T9-00
SK	228	ｾ28	０６９	土坑	—	—		J10-02	T9-02
SK	229	ｾ28	３５９	土坑	—	—		J10-01	T9-00
SK	230	ｾ28	２２９	土坑	—	—		J10-09	T9-50
SK	231	ｾ28	114	土壙（蔵骨器）	—	—		J9-15	T8-86
SK	232	ｾ28	２４８	地下式土壙	—	—		K10-06	U9-23
SK	233	ｾ28	２４７	土坑	—	—		K10-08	U9-37
SK	234	ｾ28	３７４－Ａ	土坑	—	—		H9-11	R8-55
SK	235	ｾ28	３７４－Ｂ	土坑	—	—		H9-12	R8-57
SK	236	ｾ28		土坑	—	—		G9-06	Q8-33
SK	237	ｾ28	２９７－Ａ	土坑	—	—		H10-01	R9-00
SK	238	ｾ28	２９８－Ａ	土坑	—	—		H10-05	R9-20
SK	239	ｾ28		土坑	—	—		H10-06	R9-23
SK	240	ｾ28	４０３	土坑	—	—		G10-16	Q9-88
SK	241	ｾ28	４０４	土坑	—	—		H10-04	R9-07
SK	242	ｾ28	４０５	土坑	—	—		H10-04	R9-07
SK	243	ｾ28	４０８	土坑	—	—		H11-02	R10-02
SK	244	ｾ28	４１２	土坑	—	—		H11-05	R10-20
SK	245	ｾ28	４１１	土坑	—	—		H11-06	R10-22
SK	246	ｾ28	４２６	土坑	—	—		H11-10	R10-51
SK	247	ｾ28	０７７	土壙	—	—		H11-14	R10-73
SK	248	ｾ28	２２０－Ａ	土壙	—	—		I10-03	S9-05
SK	249	ｾ28	２２０－Ｂ	土坑	—	—		I10-03	S9-05
SK	250	ｾ28		土坑	—	—		I10-07	S9-36
SK	251	ｾ28	ニ－１	土坑	—	—		I13－01	S12-00
SK	252	ｾ28	１９１	地下式土壙	—	—		J13-08	T12-27
SK	253	ｾ28	１８７	土壙	—	—		H14-15	R13-75
SK	254	ｾ28	１５５	土壙	—	—		H15-09	R14-50
SK	255	ｾ28	０３２	土壙	—	—		G12-09	Q11-50
SK	256	ｾ28	ニ－２	土坑	—	—		G12-06	Q11-33
SK	257	ｾ28	１９４	土坑	—	—		G13-05	Q12-30
SK	258	ｾ28	１９５	土坑	—	—		G13-02	Q12-03
SK	259	ｾ28	１９２	土坑	—	—		G15-02	Q14-03
SK	260	ｾ28	１６０	土壙	—	—		F16-13	P15-80
SK	261	ｾ28	１５８	土壙	—	—		H16-07	R15-24

Tab.1 遺構一覧

略号	掲載遺構№	地区名	旧遺構№	種別	諏訪台コード	国分寺台 古墳コード	時期（諏訪台区分）	旧Grid	新Grid
SK	262	t28神社裏	1016	土坑	—	—		B6-10	L5-28
SK	263	t28神社裏	1014	土坑	—	—		B6-15	L5-48
SK	264	t28神社裏	1013	土坑	—	—		B7-11	L6-40
SK	265	t28神社裏	1031	土坑	—	—		B7-16	L6-60
SK	266	t28神社裏	1032	土坑	—	—		B7-22	L6-82
SK	267	t28神社裏	1036	土壙	—	—		C7-09	M6-26
SK	268	t28神社裏	1028	土坑	—	—		C8-11	M7-40
SK	269	t28神社裏	1029	土坑	—	—		C7-15	M6-48
SK	270	t28神社裏	1030	土坑	—	—		C8-16	M7-60
SK	271	t28神社裏	1035	土坑	—	—		D8-01	N7-00
SK	272	t28神社裏	1011	土坑	—	—		D8-02	N7-02
SK	273	t28神社裏	1001	土坑	—	—		D8-07	N7-22
SK	274	t28神社裏	1006A	土坑	—	—		D8-09	N7-26
SK	275	t28神社裏	1009	土坑	—	—		D8-25	N7-88
SK	276	t28神社裏	1010	土坑	—	—		D8-25	N7-88
SK	277	t28神社裏	1020	土坑	—	—		E9-01	O8-00
SK	278	t54	№４１	土壙(蔵骨器)	—	—		I16-E	S14-39
SK	279	t54	№４２	土坑		—		I16-E	S14-49
SK	280	t54	№１０８	土壙	—	—		I17-I	S16-50
SK	281	t54	№１０７	土壙	—	—		H17-J	R16-52
SK	282	t54	№８８	土壙	—	—		G20-M	Q19-70
SK	283	t54	№８７	土壙	—	—		G20-J	Q19-53
SK	284	t54	№９１	側壁抉込土壙	—	—		H21-A	Q20-90
SK	285	t54	№９０	土坑	—	—		H21-A	Q20-90
SK	286	t54	№９６	側壁抉込土壙	—	—		I21-E	S20-20
SK	287	t54	№９７	側壁抉込土壙	—	—		I21-E	S20-30
SK	288	t54	№９８	側壁抉込土壙	—	—		I21-I	S20-40
SK	289	t54	№９９	土坑	—	—		I21-I	S20-40
SK	290	t54	№１７７	土壙	—	—		J20-F	T19-23
SK	291	t54	№１２８	土坑	—	—		J20-F	T19-33
SK	292	t54	№５２	側壁抉込土壙	—	—		J20-J	T19-53
SK	293	t54	№５４	側壁抉込土壙	—	—		J20-M	T19-80
SK	294	t54	№５８	側壁抉込土壙	—	—		K19-B	U18-03
SK	295	t54	№６１	土坑	—	—		K19-F	U18-22
SK	296	t54	№６２a	土壙	—	—		K19-E	U18-30
SK	297	t54	№６８	土坑	—	—		K18-L	U17-47
SK	298	t54	№１３４	土坑	—	—		K18-E	U17-20
SK	299	t54	№７３	地下式土壙	—	—		L19-A	V18-00
SK	300	t54	№１８５	土坑	—	—		J21-M	T20-80
SK	301	t54	№１７１	土壙	—	—		K21-D	U20-07
SK	302	t54	№１２６	土坑	—	—		K21-I	U20-50
SK	303	t54	№１３５	土坑	—	—		K21-H	U20-37
SK	304	t54	№１３７	土坑	—	—		K22-N	U21-73
SK	305	t54	№１４８	側壁抉込土壙	—	—		L22-M	V21-70
SK	306	t54	№１４３	土壙	—	—		L21-H	V20-38
SK	307	t54	№１４１	側壁抉込土壙	—	—		L21-K	V20-55
SK	308	t54	№１４２	土壙	—	—		L21-K	V20-55
SK	309	t54	№１４０	土坑	—	—		L21-J	V20-53
SK	310	t54	№１３１	土坑	—	—		L20-O	V19-75
SK	311	t54	№１６９	土坑	—	—		M22-E	W21-20
SK	312	t54	№１６１	土坑	—	—		M22-E	W21-30
SK	313	t54	№１４９	側壁抉込土壙	—	—		M21-J	W20-53
SK	314	t54	№１５８	土坑	—	—		M21-N	W20-73
SK	315	t54	№１５９	土壙	—	—		M21-K	W20-55
SK	316	t54	№１６０	側壁抉込土壙	—	—		M21-L	W20-57
SK	317	t54	№１５５	土壙	—	—		M21-P	W20-77
SK	318	t54	№１５６	土坑	—	—		N21-O	W20-97

Tab.1 遺構一覧

略号	掲載遺構№	地区名	旧遺構№	種別	諏訪台コード	国分寺台 古墳コード	時期（諏訪台区分）	旧Grid	新Grid
SK	319	ｾ54	№１５１	側壁抉込土壙	—	—		M21-M	W20-80
SK	320	ｾ54	№１５０	土坑	—	—		N21-A	X20-00
SK	321	ｾ54	№１５２	土壙	—	—		N21-A	X20-00
SK	322	ｾ54	№１５４	土坑	—	—		N21-C	X20-05
SK	323	ｾ72	０２６	土坑	—	—		5A-C3	L6-70
SK	324	ｾ72	０１２	（側壁抉込土壙）	—	—		4A-D3	L5-75
SK	325	ｾ72	０１７	土壙	—	—		4A-C2	L5-62
SK	326	ｾ72	０１９	土壙	—	—		3A-D4	L4-77
SK	327	ｾ72	０２５	土壙	—	—		3A-C2	L4-53
SK	328	ｾ72	０１８	土坑	—	—		3A-D3	L4-75
SK	329	ｾ72	０２０	土壙	—	—	諏訪台8期	3A-D3	L4-85
SK	330	ｾ72	０２４	側壁抉込土壙	—	—		3B-B3	M4-35
SK	331	ｾ72	０３３	土壙	—	—	諏訪台8期	3B-C1	M4-50
SK	332	ｾ72	０３２	土壙	—	—	諏訪台8期	3B-C3	M3-78
SK	333	ｾ72	０７９	土坑	—	—		2B-D1	M3-55
SK	334	ｾ72	０４１	土坑	—	—		1B-B2	M2-07
SK	335	ｾ72	０７６	土壙	—	—		1C-B2	N2-07
SK	336	ｾ72	０７５B	土坑	—	—		1C-B4	N2-28
SK	337	ｾ73	０４２	側壁抉込土壙	—	—		BM7-H	P2-47
SK	338	ｾ73	００６	土壙	—	—		BM8-A	P2-91
SK	339	ｾ73	０１０	土壙	—	—		BM8-P	Q2-77
SK	340	ｾ73	００９	土壙	—	—		BM11-C	Q2-95
SK	341	ｾ73	００８	土壙	—	—		BM12-H	R3-28
SK	342	ｾ73	０２７	土壙	—	—		BM13-F	R4-12
SK	343	ｾ73	０１２	土壙	—	—		BM12-J	R3-53
SK	344	ｾ73	０２２	土壙	—	—		BM16-B	S5-13
SK	345	ｾ73	０２３	土壙	—	—		BM16-B	S5-13
SK	346	ｾ73	０１９	土壙	—	—		BM16-E	S5-40
SK	347	099	３１６７	側壁抉込土壙	—	—		位置不明	
SK	348	099	３１７７	側壁抉込土壙	—	—		位置不明	
SK	349	ｾ28		土壙	—	—		G19-05	Q18-20
SK	350	099	4036主体部B	土壙	—	—		GE-99	K8-86
SD	1	064	ＳＤ９０２	土壙	—	—		3B-06	G5-53
SD	2	064	ＳＤ９０３	土壙	—	—		3B-19	G5-88
SD	3	064	ＳＤ９０４	土壙	—	—		3B-13	G4-85
SD	4	064	ＳＤ９０９	土壙	—	—		2B-78	F5-88
SD	5	064	ＳＤ９１０	土壙	—	—		2C-65	F7-55
SD	6	064	ＳＤ９１１	土壙	—	—		2C-75	F7-75
SD	7	064	ＳＤ９１４	土壙	—	—		2B-79	F6-80
SD	8	099	２００１	土壙	—	—		EE80	K4-48
SD	9	099	２００４	土壙	—	—		FF03	L5-04
SD	10	099	ロ－３	土壙	—	—		HF98	M10-84
SD	11	SW83		土壙	—	—		NK25	V22-50
SD	12	ｾ28	００１	土壙	—	—		H18-01	R17-00
SD	13	ｾ28	００２	土壙	—	—		H18-01	R17-00
SD	14	ｾ28	００８	土壙	—	—		H18-01	R17-00
SD	15	ｾ28	０１０	溝	—	—		H17-01	R16-00
SD	16	ｾ28	０７８	溝	—	—		I10-04	S9-07
SD	17	ｾ28	３６４	溝	—	—		J10-09	T9-50
SD	18	ｾ28		溝	—	—		I10-01	S8-09
SD	19	ｾ54	№１０４	溝	—	—		I19-P	S18-77
SD	20	ｾ54	№１５３	溝	—	—		N21-A	X20-00
SD	21	ｾ54		溝	—	—		M22-A	W21-00
SD	22	ｾ72	０１３	溝	—	—		4A-D1	L5-65
SD	23	ｾ72	０５３	溝	—	—		1B-C2	M2-52
SD	24	ｾ72	０５５	溝	—	—		1B-B3	M2-25
SD	25	ｾ72	０６０	溝	—	—		1C-A4	N2-32

Tab.1 遺構一覧

略号	掲載遺構№	地区名	旧遺構№	種別	陾訪台コード	国分寺台 古墳コード	時期（陾訪台区分）	旧Grid	新Grid
SD	26	ｾ72	０６２	溝	—	—		1C-B1	N2-05
SD	27	ｾ73	０１６	溝	—	—		BM16-I	S5-50
SD	28	ｾ73	０１７	溝	—	—		BM11-A	R2-00
SD	29	ｾ73	ﾘ-1	溝	—	—		BM16-I	S5-50
SD	30	ｾ73	００４	溝	—	—		BM7-A	P2-00
SD	31	064	ＳＤ９０１	溝	—	—		3C-33	H7-30
SX	1	064	ＳＸ９０７	台地整形跡	—	—		2B-73	F4-88
SX	2	064	ﾄ-9	集石遺構	—	—		151号墳西	F4-97
SX	3	ｾ28	２１０	方墳（方形区画墓）	—	—		K12-09	U11-50

第 1 章　調査の経緯と概要

第 1 節　調査に至る経緯

東京湾東岸に位置し、首都圏に近接する市原市では、昭和 30 年代に始まる海浜部工業地化を契機として、臨海部に近い台地上において宅地造成が盛んに行われるようになった。こうした中、1970(昭和 45)年に国分寺台土地区画整理組合が設立され、市原市庁舎の移転先の周辺域、約 3,800,000 ㎡余りを対象に、大規模な土地区画整理事業が計画されるに至った。この土地を通称「国分寺台」としたのはこの時である。

当時、既に開発の対象範囲には、上総国分僧尼寺跡の存在が知られており、区画整理事業当初から、史跡として保存される見通しがあった。その一方で、古墳や貝塚、集落跡など、それ以外の埋蔵文化財の存在については、全くと言っていいほど未知数であった。このような具体的な大規模開発が進行する状況下で、埋蔵文化財保護体制の整備が急がれた。

1971(昭和 46)年、市原市国分寺台埋蔵文化財調査会が組織され、翌年、この調査会の下部組織として上総国分寺台遺跡調査団（団長は早稲田大学教授滝口宏）が結成されるに至り、形式的には発掘調査体制が整ったといえる。体制が整うと、区画整理組合との間で協議がなされ、国分寺台地区の発掘調査は、1972(昭和 47)年から 3 年の計画で実施されることとなった。

ところが、調査が進むに従って、検出される遺跡の数、範囲、密度が想定をはるかに上回ることが次第に判明し、都度協議の場が持たれ、計画変更が行われた。最終的には昭和 63(1988)年までに、43 遺跡、17 年間の調査となっていた。

こうして国分寺台土地区画整理事業に伴う現地調査は一段落し、この膨大な資料の整理作業に着手する時期を迎えた。しかし、速やかには整理作業には着手できていない。かかる費用負担の問題があったことは大きく影響したが、このこととは別に、当時市原市はインフラ整備を急いでおり、公共事業に伴う発掘調査が継続的に発生していた。この対応に追われたことが主因となって、結果的には、バブル経済崩壊までの間、整理作業は進捗を見なかった。

ようやくこの状況に変化があったのは、1994(平成 6)年、文化庁文化財部記念物課、千葉県教育庁教育振興部文化財課の指導の下、国庫補助事業として整理作業が着手されたことだった。翌 1995(平成 7)年には、市原市と国分寺台土地区画整理組合との間で文化基金の設立が合意に至り、これにより、1997(平成 9)年度からは国庫補助事業以外の遺跡についても整理作業が開始された。

この間、調査組織も変遷し、国分寺台地区の調査を手掛けた上総国分寺台遺跡調査団は 1985(昭和 60)年に解散。この後は、市原市が（財）市原市文化財センターに業務委託するかたちとなった。この財団も、2006(平成 18)年に解散したため、それ以後、現在に至るまで市原市の組織である市原市埋蔵文化財調査センターが業務を担っている。

第 2 節　遺跡周辺の環境

地理的環境　(Fig.3～6)

市原市は、房総半島のほぼ中央に位置する。市域が 36km×22km と南北に長く、標高は、南部の丘陵地帯にある大福山で 292m のピークを示し、北部へ向け次第に低くなる地勢を示す。この丘陵地

に水源を持った養老川が、市中央を南から北に貫流して東京湾に至る。市域にはこのほかに東京湾に注ぐ2本の河川、北側に村田川、南側に椎津川が流れ、これら河川周囲には沖積地が形成され、水稲耕作を目的とした可耕地が広がる。このうち、養老川については、近世以降、船や筏による水運が物資の輸送に重要な役割を果たしたことが知られている（藤原 1979）。

諏訪台古墳群・天神台遺跡の所在する通称市原台地は、養老川下流域右岸に広がる南北 6km、東西 3.5km の範囲を指し、小河川に侵食された小谷が幾筋も形成される。このため台地が樹枝状に分岐するが、台地上は起伏の乏しい平坦面を形成しており、こうした場所で人間の生活痕跡が多く発見されている。中でも東京湾側においては標高 20m ほどの波蝕崖を形成し、特にこのような台地縁辺部に遺構が集中する傾向がある。

国分寺台地区は、この市原台地の南西端に位置する。この地区では、区画整理事業に伴い 43 遺跡が発掘調査されており、諏訪台古墳群・天神台遺跡はその南端に位置している。

国分寺台地区内の台地は 3 本の谷によって分断され（Fig.5）、南から A 谷、B 谷、C 谷とすると、この 3 本の谷と、これによって分けられた樹枝状の台地 3 本分で構成される。ここでは A 谷の南側の台地を「A 谷南」、以下同様に、谷に対する方向で台地を呼称する。

諏訪台古墳群・天神台遺跡の立地する台地は、A 谷南に位置する。この台地は台地南部縁辺部にピークがあり、標高 27m を測る。この頂から北に向けて緩やかに傾斜しながら、北端では 21m 程となる。この台地を取り巻く沖積地は標高 10 から 15m 前後であるため、比高は 6m から 17m となる。眼下には養老川が近接して流れ、南方には沖積地を隔てて袖ケ浦台地が遠望される。

歴史的環境　（Fig.5・6）

国分寺台にかかる発掘調査の成果は次々と公表されており、周辺の歴史的環境については各報告書に詳しい。ここでは国分寺台の遺跡を谷で解析された台地毎に概観してみる。

A 谷南　諏訪台古墳群・天神台遺跡が位置する台地で、弥生時代後期を中心とした集落跡である蛇谷遺跡（市毛ほか 1977）と、弥生時代終末期～古墳時代前期に造墓が開始され、断続的に古墳時代終末期に至る東間部多古墳群（田中 1975）が位置する。

A 谷北　未整理ではあるが、定型化前の前方後円墳や、纒向型前方後円墳などと呼ばれ、弥生時代終末期後半に 3 基連続して造墓されたと考えられている神門墳丘墓群が位置し、その被葬者の母村との評価をうける中台遺跡（鶴岡 2013）が諏訪台古墳群・天神台遺跡と谷に広がる雷電池を挟んで対峙している。中台遺跡からは、方形区画を伴う近接棟持柱建物跡が検出されており、神門古墳群被葬者のいずれかが関係すると考えられている。また、奈良・平安時代から中世に至る変遷が追える上総国分僧寺跡（櫻井 2009）や、その運営に関わる集団の居住地区とされる荒久遺跡（北見 2011）が台地上を広く占地している。荒久遺跡からは 8 世紀後半の地下式改葬墓が検出されている。

B 谷南　調査された範囲は限られるが、南中台遺跡（大村 2009）は弥生時代終末期を中心とする集落で、北陸系の良好な土器が出土している。

B 谷西　根田代遺跡（大村 2005）は弥生時代中期～後期の集落跡で環濠を伴う。台地端部には 6 世紀後半の古墳が位置する。台遺跡（半田 2003 他）は弥生時代～中世の複合遺跡だが、弥生時代中期後半古段階の環濠集落と、3 群を構成する方形周溝墓が検出されている。集落は市内最古段階の環濠集落の一つとされ、ここに展開する方形周溝墓群は、環濠外の一群が当該遺跡の墓域を形成し、環濠



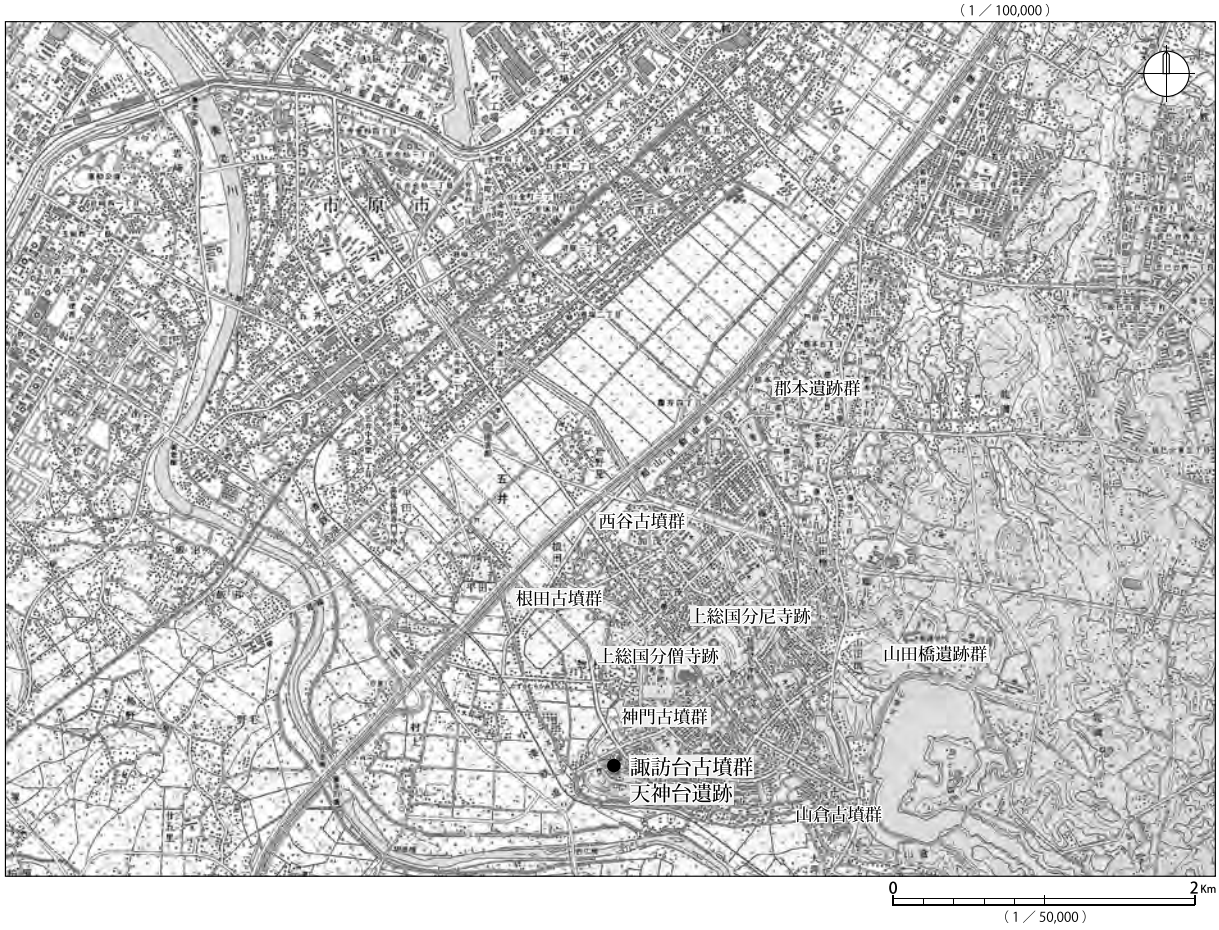


Fig.1　諏訪台古墳群・天神台遺跡位置図

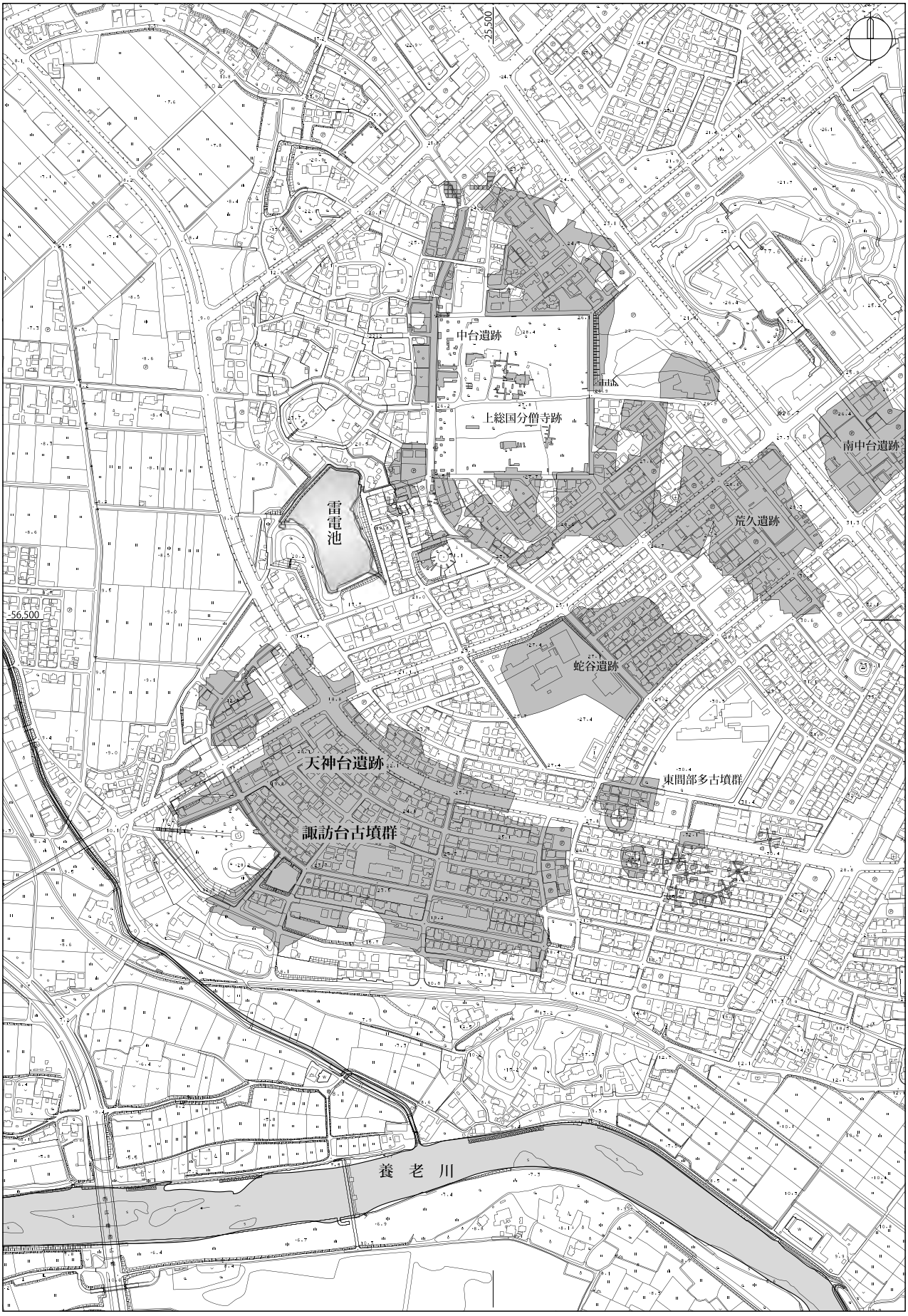


Fig.2　諏訪台古墳群・天神台遺跡現状位置図

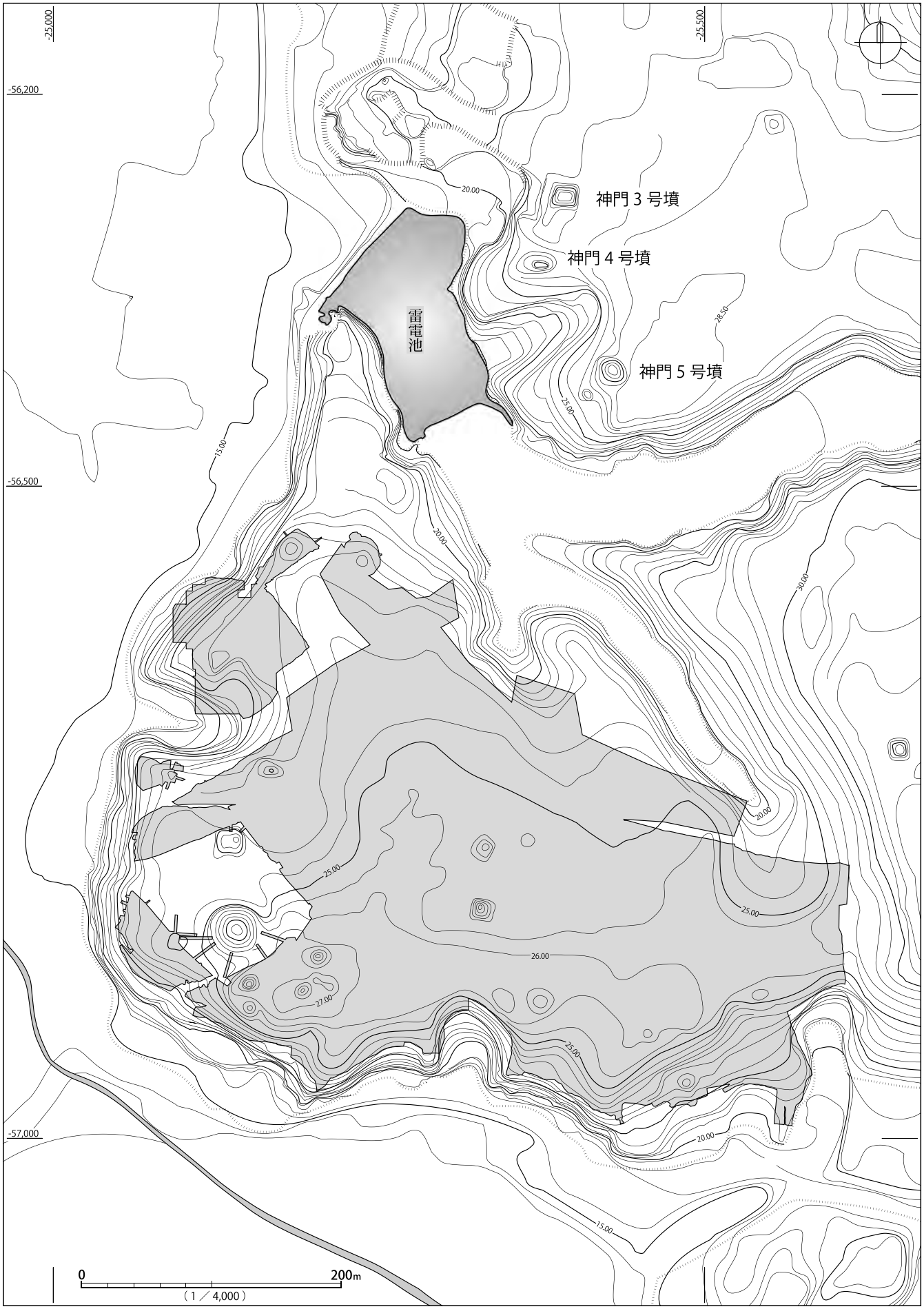


Fig.3　諏訪台古墳群・天神台遺跡調査区と周辺地形図

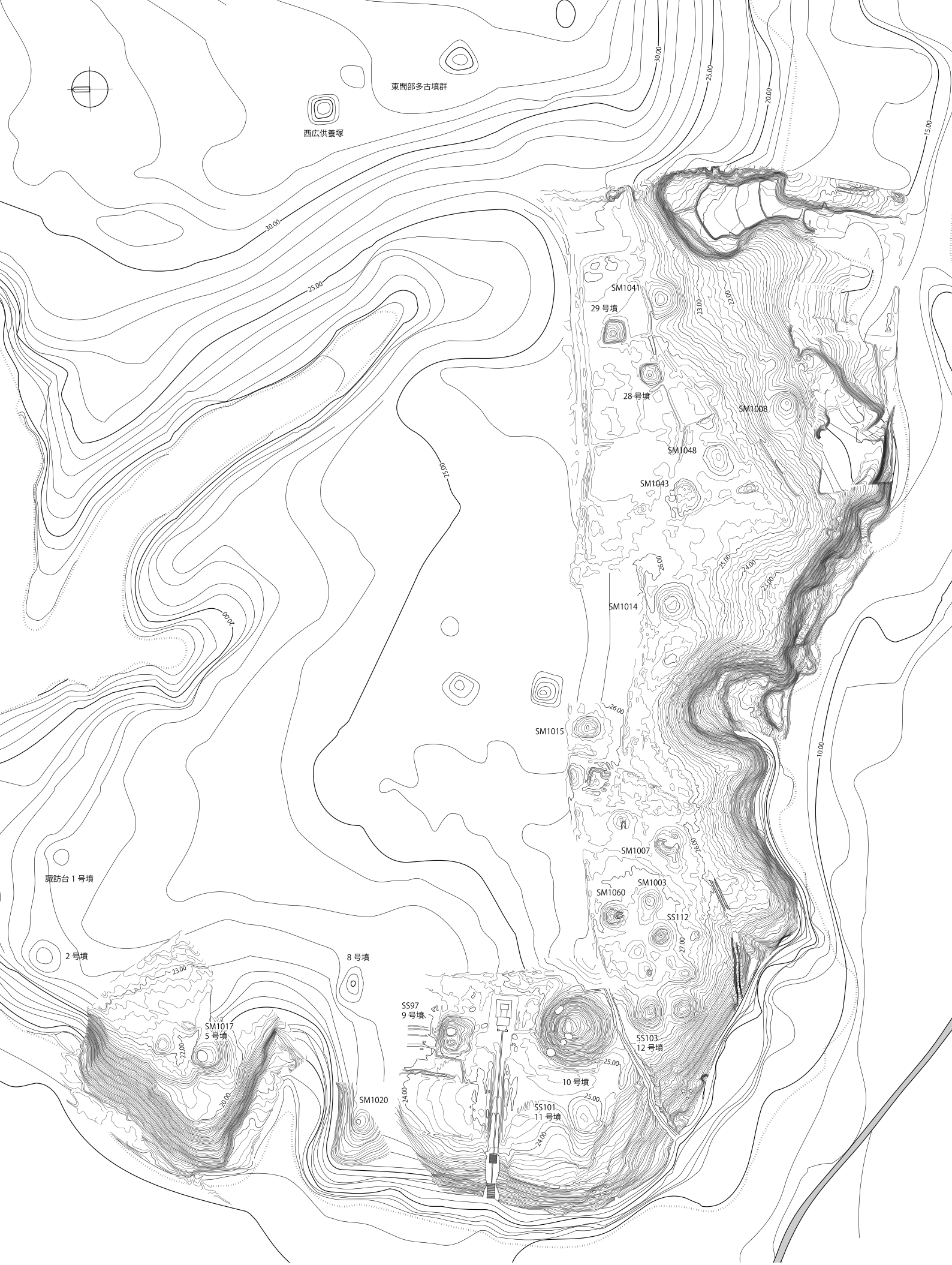


Fig.4　諏訪台古墳群・測量図

0　100 m
（1／2,500）



0 600 m
（1／12,000）

Fig.5　国分寺台地区と周辺の遺跡群



Fig.6　諏訪台古墳群・天神台遺跡

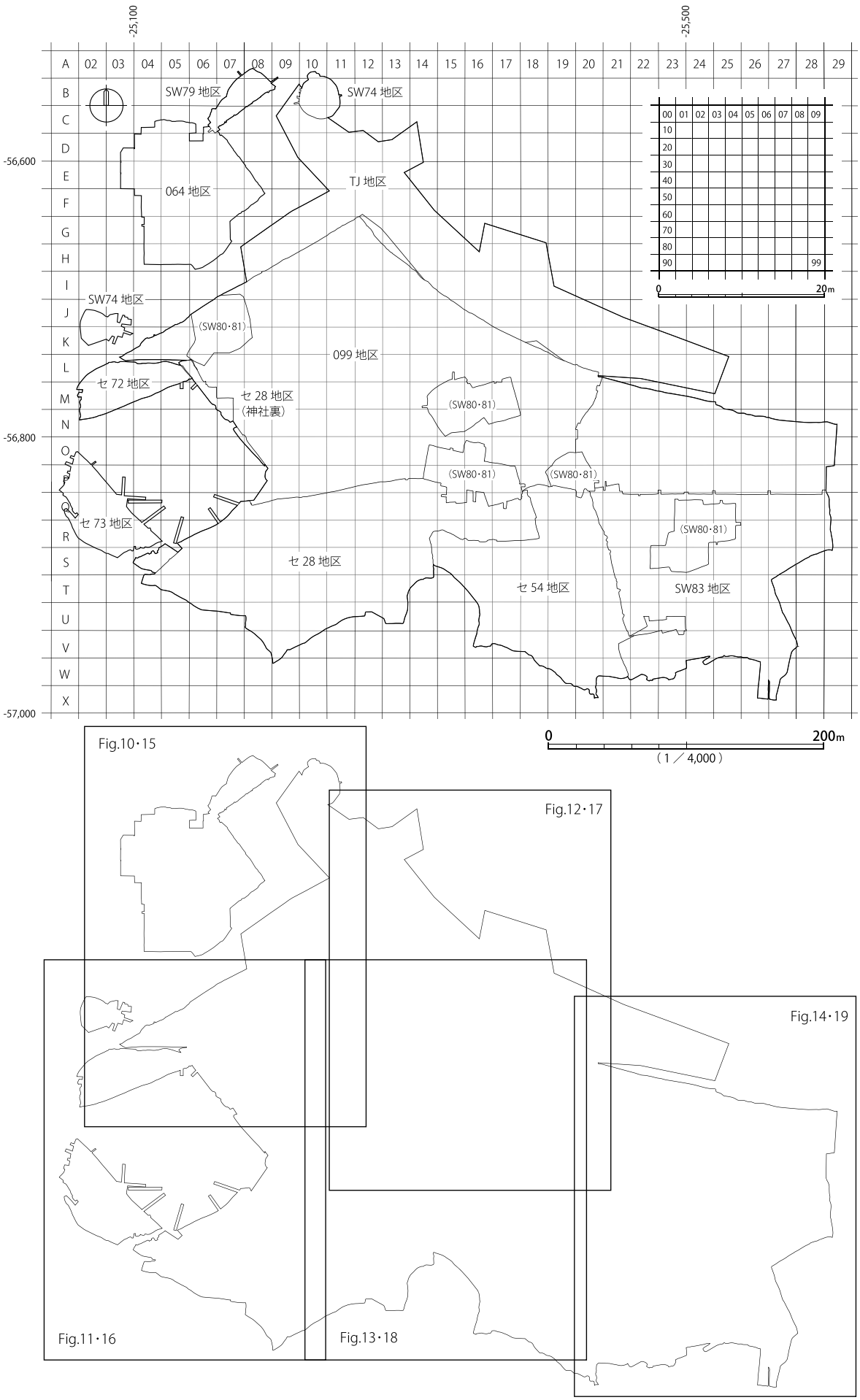

-25,100
-25,500
-56,600
-56,800
-57,000
SW79 地区
SW74 地区
064 地区
TJ 地区
SW74 地区
(SW80・81)
099 地区
セ 72 地区
セ 28 地区
(神社裏)
(SW80・81)
(SW80・81)
(SW80・81)
セ 73 地区
(SW80・81)
セ 28 地区
セ 54 地区
SW83 地区
0
20m
0
200m
(1／4,000)
Fig.10・15
Fig.12・17
Fig.14・19
Fig.11・16
Fig.13・18

Fig.7　調査区配置図



Fig.8　遺構全体図(1) 諏訪台古墳群・天神台遺跡全遺構

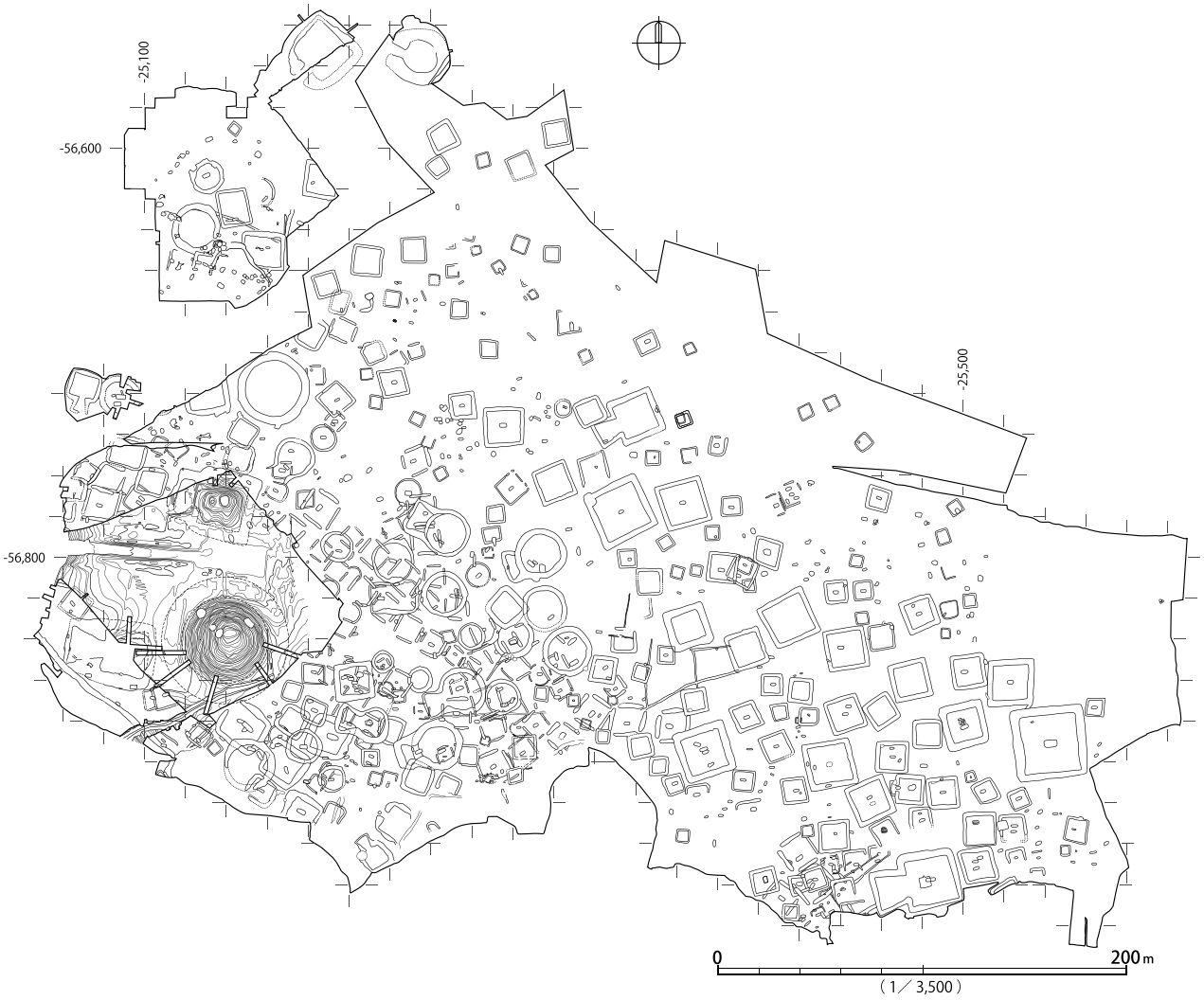


Fig.9　遺構全体図(2) 本報告対象遺構（対象外古墳を含む）

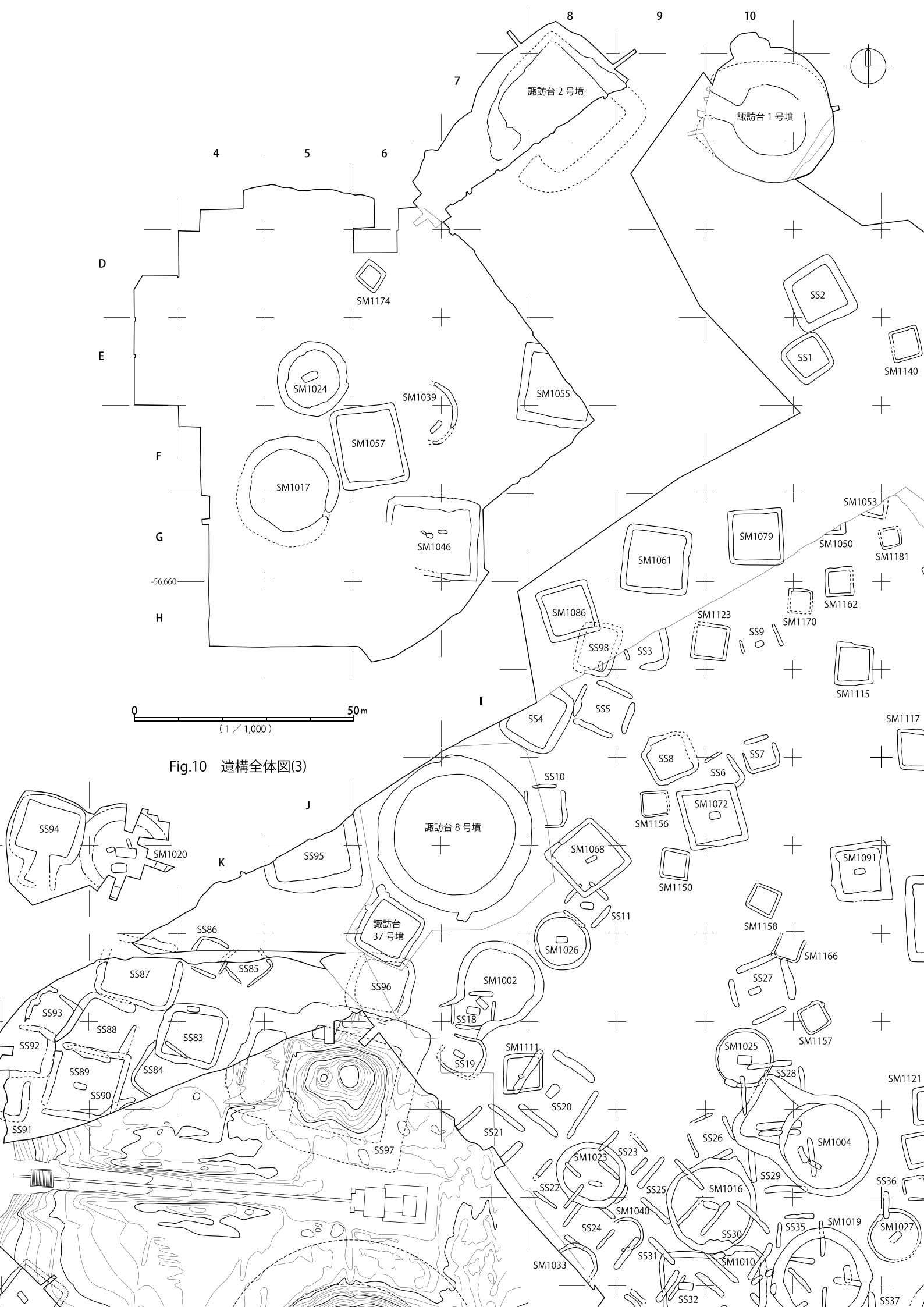


Fig.10　遺構全体図(3)

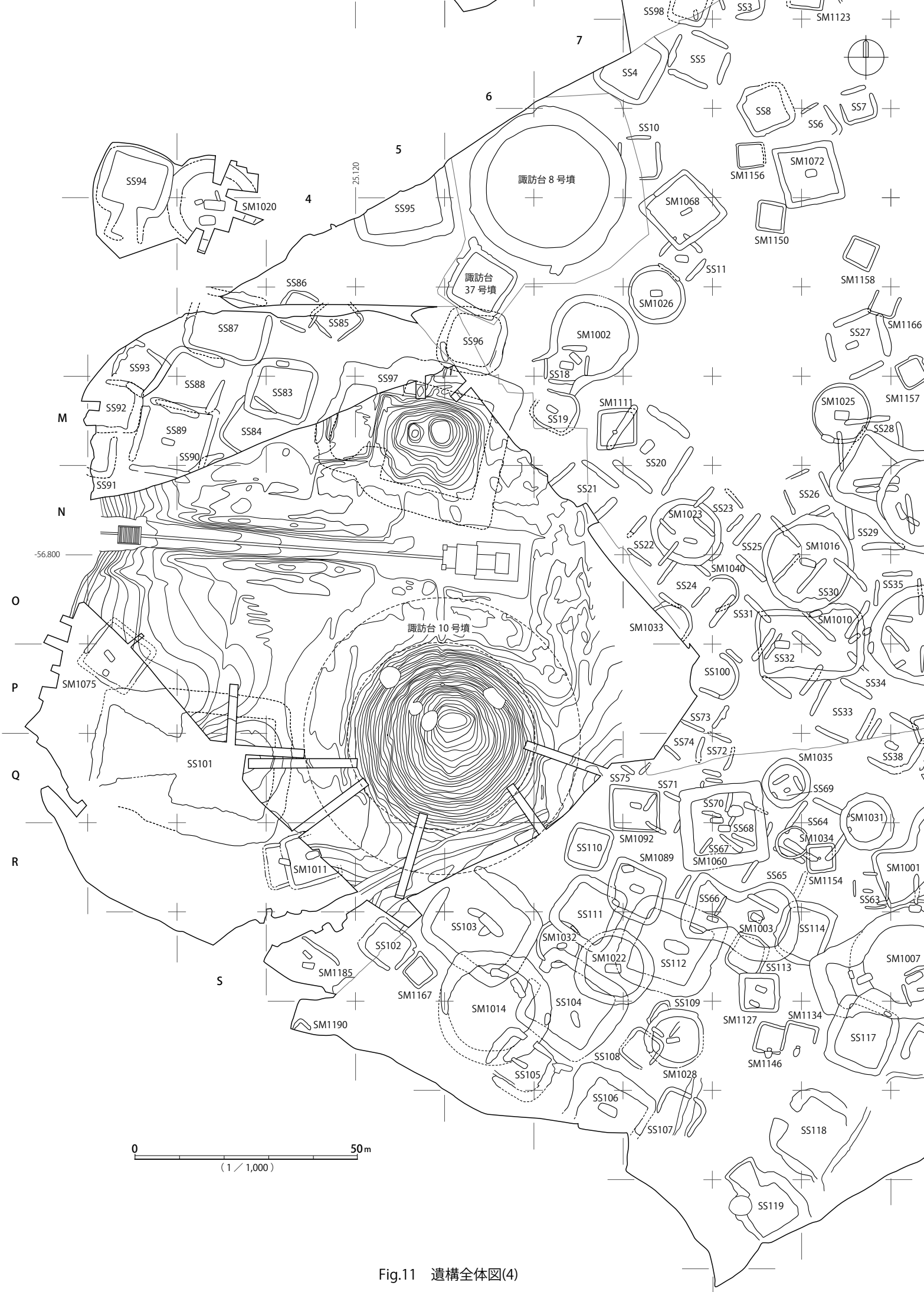


Fig.11　遺構全体図(4)

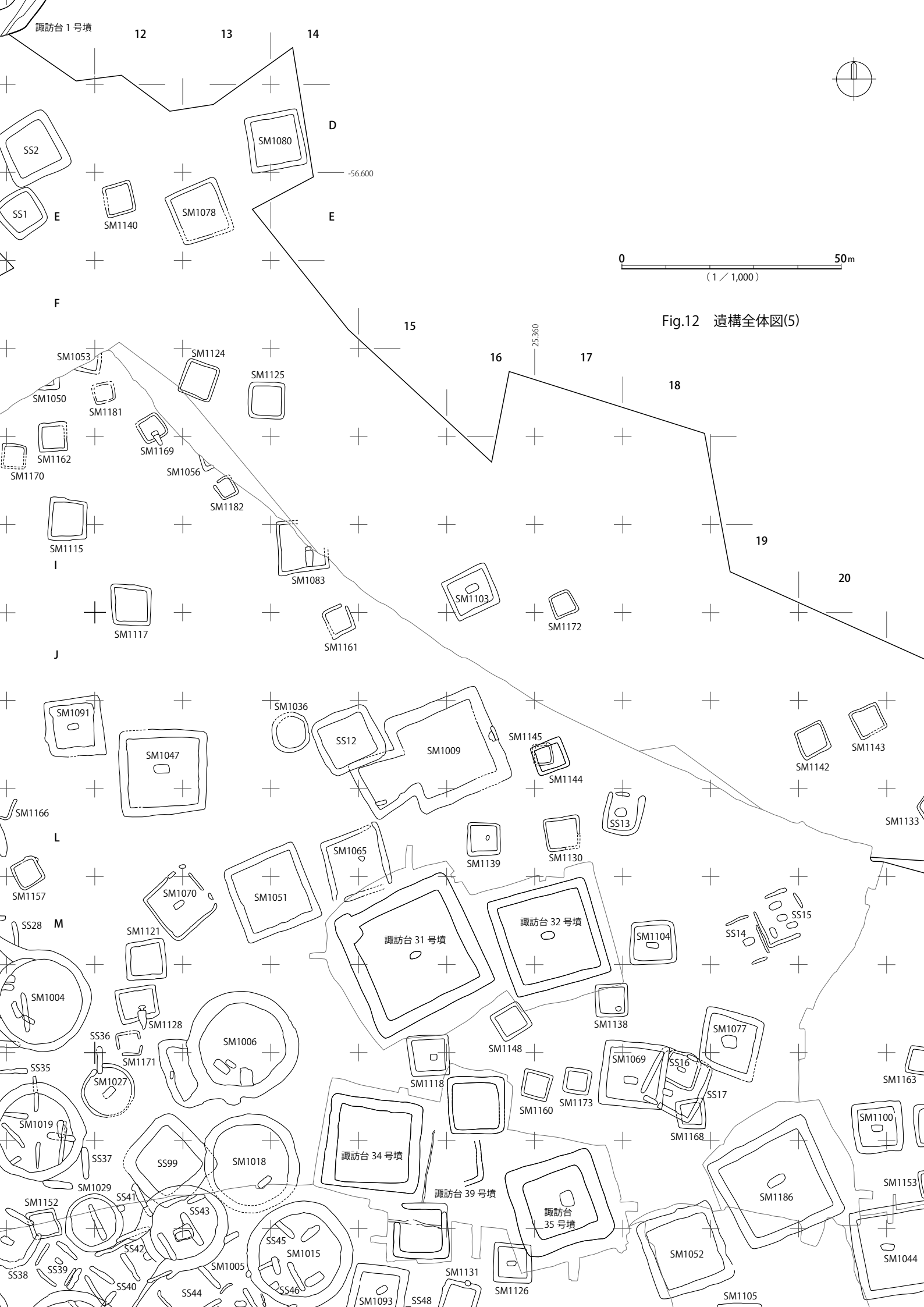


Fig.12　遺構全体図(5)



Fig.13　遺構全体図(6)



Fig.14　遺構全体図(7)

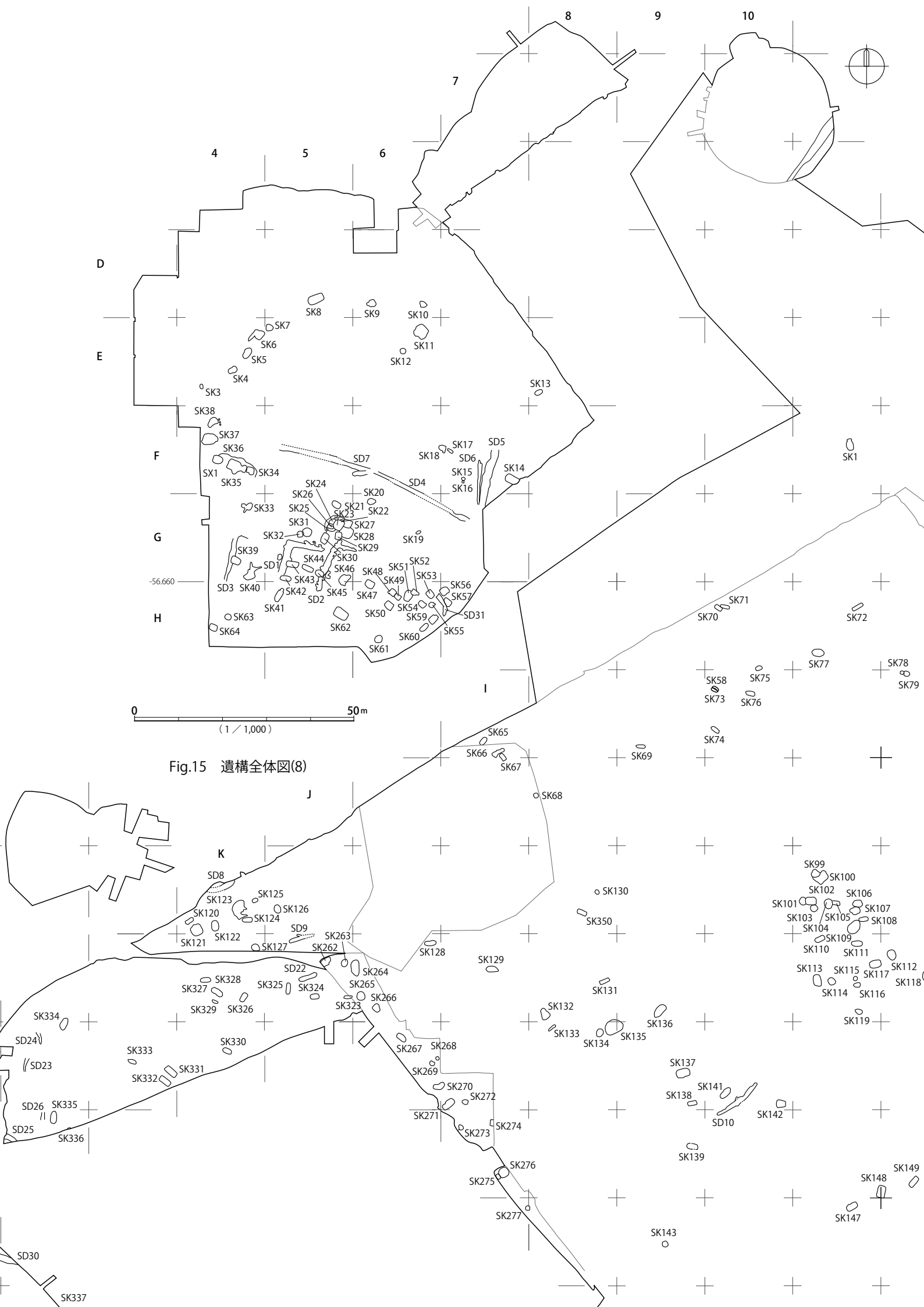


Fig.15　遺構全体図(8)

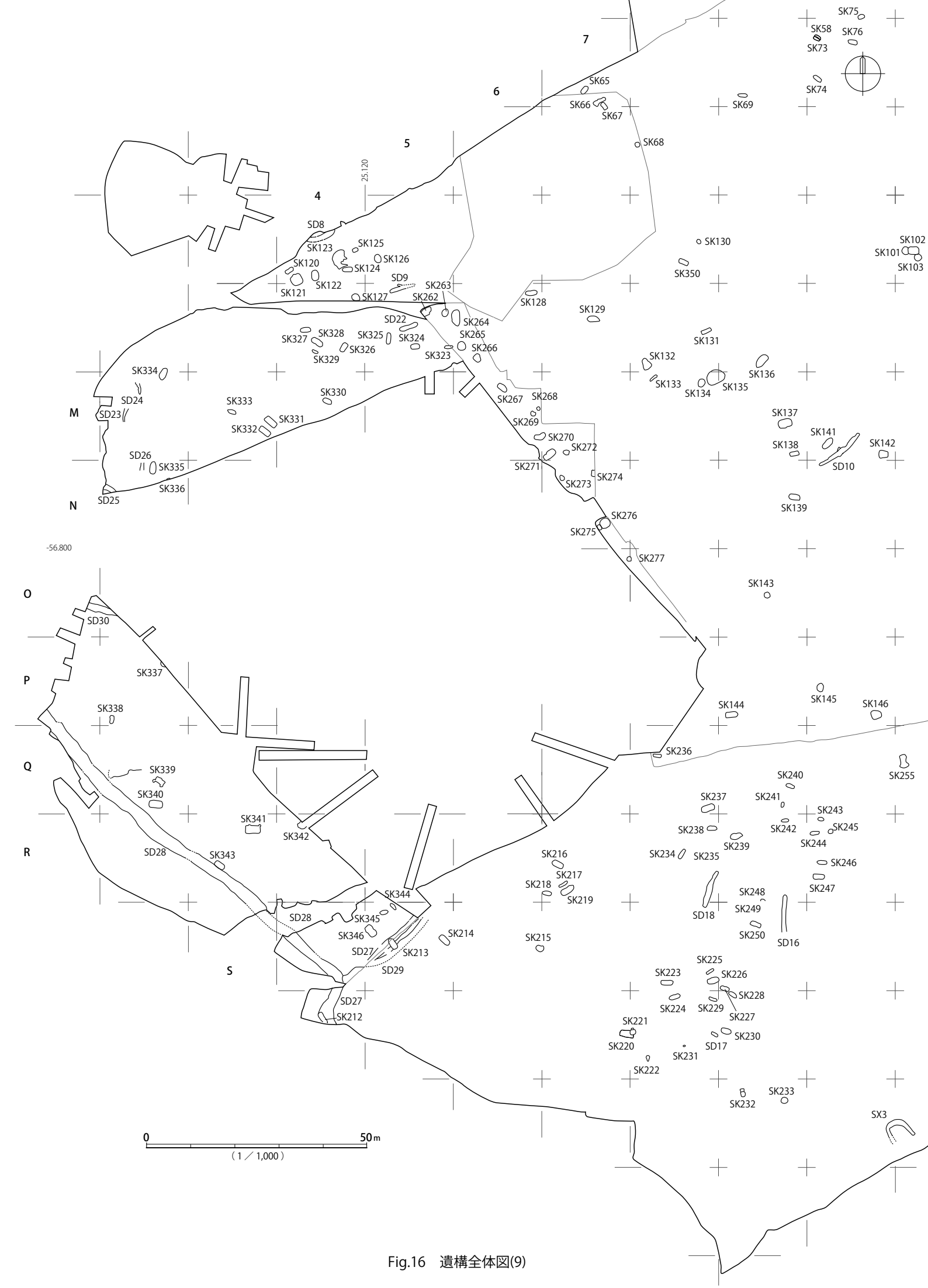


Fig.16　遺構全体図(9)

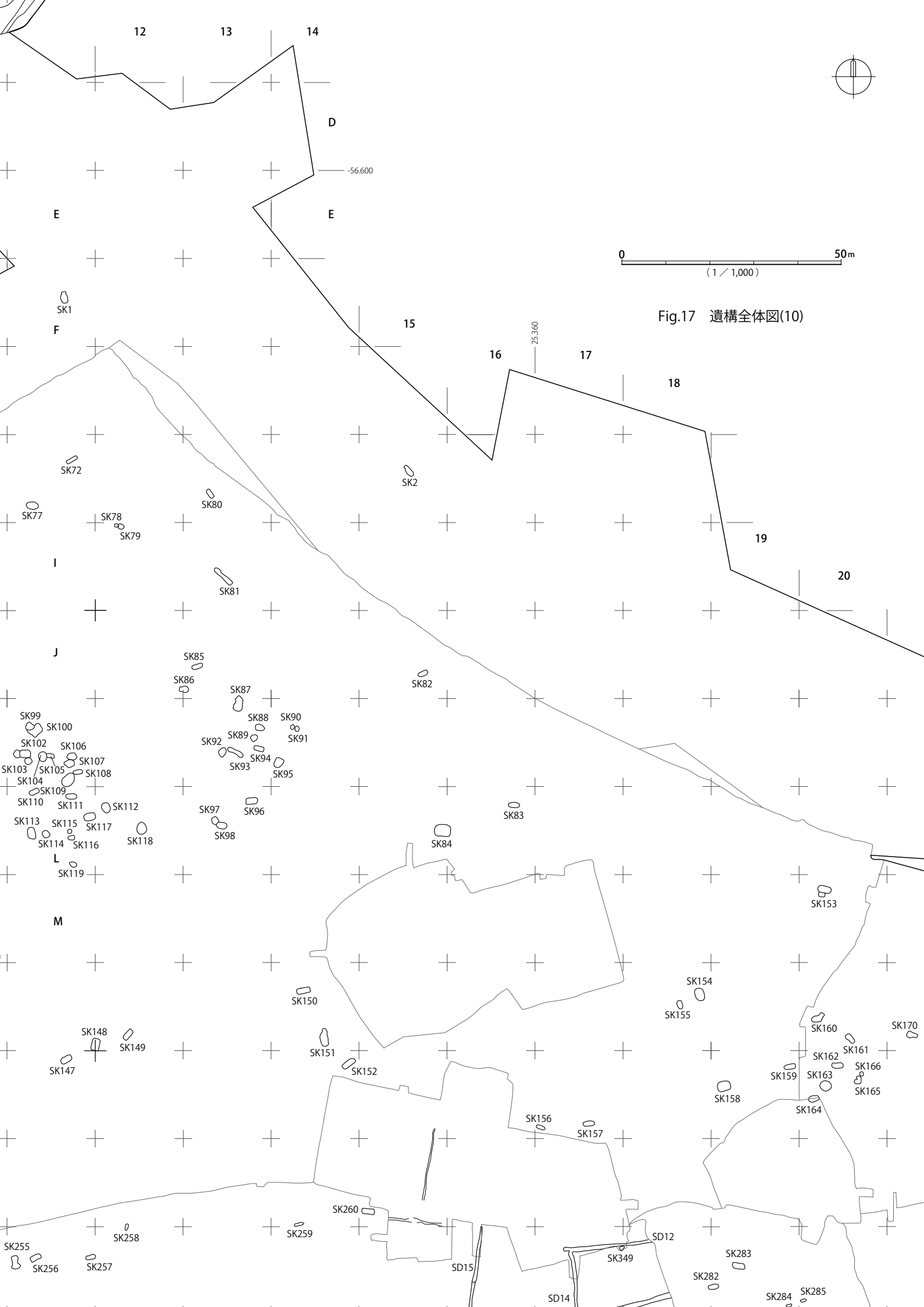


Fig.17　遺構全体図(10)

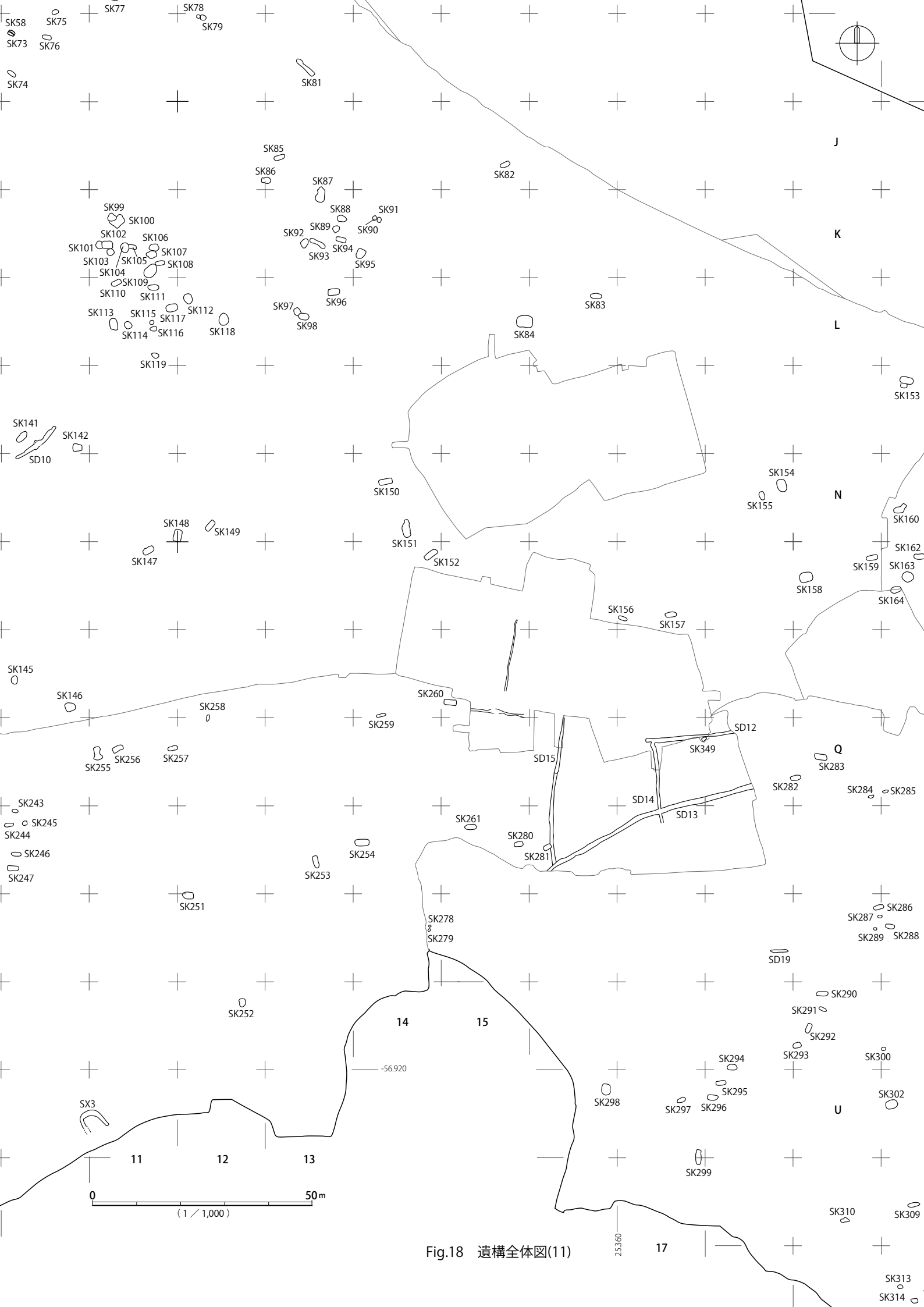


Fig.18　遺構全体図(11)

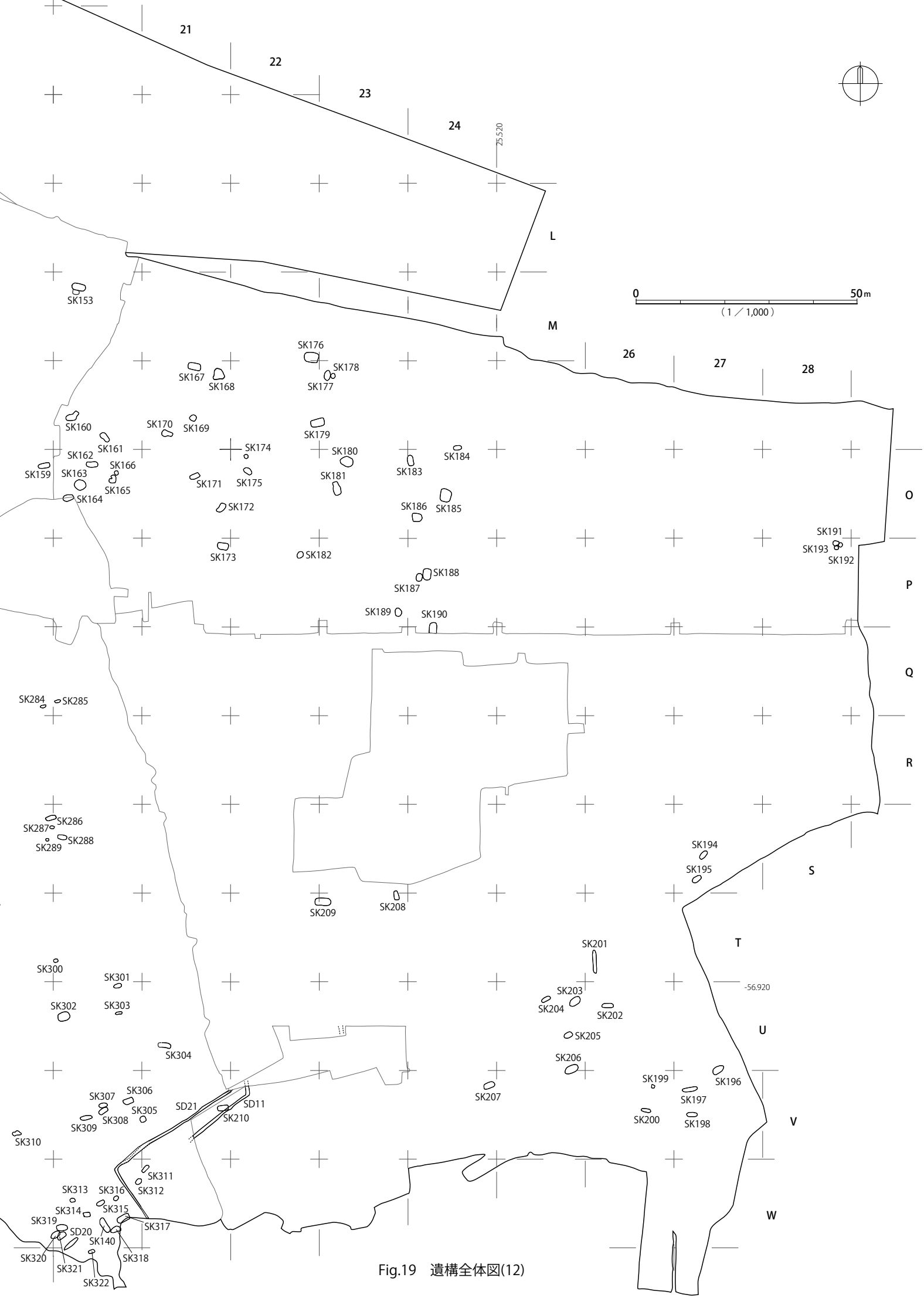


Fig.19　遺構全体図(12)

内の一群は、台遺跡環濠集落が廃絶後、小谷を隔てて位置する根田代遺跡の墓域として成立するとされる（大村 2005）。辺田古墳群とその下層の御林跡遺跡（木對 2008）からは、古墳時代前期中葉の辺田 1 号墳の他、弥生時代後期～弥生時代終末期の方形周溝墓が認められ、集落は、弥生時代中期～後期までが中心となる。長平台遺跡（小橋 2006）は弥生時代後期を中心とした集落と後期末～終末期、古墳時代前期にかけての方形周溝墓が検出されている。東海西部や伊勢湾周辺の影響を受けた土器の出土が認められる。加茂遺跡（浅利 2005）は弥生時代中期と後期の集落、北野原遺跡（小川）からは 9 世紀前半とみられる地下式の主体部を伴う方形周溝状遺構が検出されている。

B 谷東　向原台遺跡（高橋 2002）は弥生時代中期後半から後期後半と古墳時代後期の集落跡で、古墳を伴うが、詳細は不明である。また、関係者の話として古墳墳丘下に環濠の可能性のある V 字溝が存在したという話が伝わる。祇園原貝塚（忍澤 1999）上層からは、弥生時代中期後半の集落が見つかっており、環濠集落である可能性が高い。

C 谷西　東向原遺跡、上総国分尼寺跡、坊作遺跡（小出 2002）は上総国分尼寺跡の造営に関わる集落として評価されているが、後期前半に開始される弥生時代の集落跡でもある。

C 谷東　稲荷台遺跡、稲荷台古墳群、宮ノ前遺跡、山田橋大山台遺跡、山田橋大塚台古墳

A 谷･B 谷の付け根にあたる台地上には、持塚古墳群、東古墳群、埼玉県生出塚埴輪窯産の埴輪を出土した古墳時代後期後葉の山倉 1 号墳を含む山倉古墳群（小橋 2004）が位置する。

これまでの調査成果から、弥生後期、終末期に竪穴建物跡の棟数が爆発的に増加し、それら集落は台地西部に偏在することが指摘されている（小橋 2006）。また、これまでの研究では、古墳時代前期前半で国分寺台地区からは広域的な首長墓が姿を消すことが知られている。

最後に、諏訪台古墳群・天神台遺跡範囲内において、第 2 章では対象とし難い事項について触れておくことにする。

諏訪神社　遺跡内の南西部、村上字諏訪台 1661（現、諏訪 2 丁目）に鎮座する、村上集落の鎮守である。正式には上下諏訪神社と称する。縁起は不詳であるが、伝承では、大永元（1521）年 4 月に領主村上周防義清が高沢監物を信州諏訪神社に遣わし、本社神主舎弟黒川左近同道にて神璽、神鏡を移すとする。万延元（1658）年 12 月に再建、明治元年に現在の諏訪神社に改名。それまでは諏訪大明神と称したとされる。社殿は西方を向き、周囲は保存地区として今も区画整理前の風景を残している。

塚　遺跡のほぼ中央には、大字村上、惣社、西広（さいひろ）の字界が認められ、この境界近くに通称「行人塚」と呼ばれる塚が存在した。調査では国分寺台№308 を付与して調査したとみられるが、記録類が無く、詳細は不明である。概報には三段築成で一辺が 15m、高さ 4.1m を測ることが記されている。付近には蛇谷遺跡内の西広供養塚、A 谷と B 谷の付け根には上神台塚群、A 谷北の荒久遺跡内の惣社行人塚などの記録が残る。

墓地　区画整理前の地籍図には、惣社と西広の字界付近、村上字諏訪台 1667 に墓地の地籍が認められ、村上集落の墓地がこの台地状の一角に営まれていたことが判る。

第３節　調査の概要

1　諏訪台古墳群・天神台遺跡Ⅱの概要　諏訪台古墳群･天神台遺跡は、国分寺台土地区画整理事業に伴い昭和 49 年度から昭和 63 年度までの 15 年間に、13 地区、計 146,890 ㎡を発掘調査している。検出遺構数は方形周溝墓基 62 基（弥生時代中期後半から後期）、古墳 220 基（古墳時代の方形周溝墓や、古代の区画墓を含む）、竪穴住居跡 460 棟とされた(浅利 2003)[i]。主要な出土遺物は、古墳時代前期の墳墓主体部上層から出土した盤龍鏡、鉄剣、玉類や、集落からは小銅鐸、銅鏃、船の線刻のある壺型土器などの出土が公表されている。

整理作業は、遺跡が断絶期を含むものの、縄文時代から中世に至る複合遺跡であることから、初期段階では遺跡全体を対象として進捗させている。しかし、整理作業中盤において報告書を縄文時代編、墳墓編、集落編という区分に分けることとなったため、刊行順序が早いものから優先的に進捗を図った。このうち、縄文時代編である『天神台遺跡Ⅰ』は 2012 年に刊行となっている。

本報告書で扱う範囲の整理作業は、平成 17 年度から平成 26 年度までの、実に 10 年間に及んでいる。この間、作業は、13 区存在する調査区ごとに進められている。しかし、その内容は、発掘調査組織が複数存在することをはじめ、調査方法など、必ずしも共通のフォーマットで行われているとは言えない。また、異なる調査区にまたがっている遺構については、複数の遺構№で調査されているなど、記録類の取りまとめには複雑な作業が伴った。そこで、遺跡総体として記述できる部分を最初に触れ、煩雑な記述となる調査経緯については、本節末で調査区ごとにその内容を概観する。

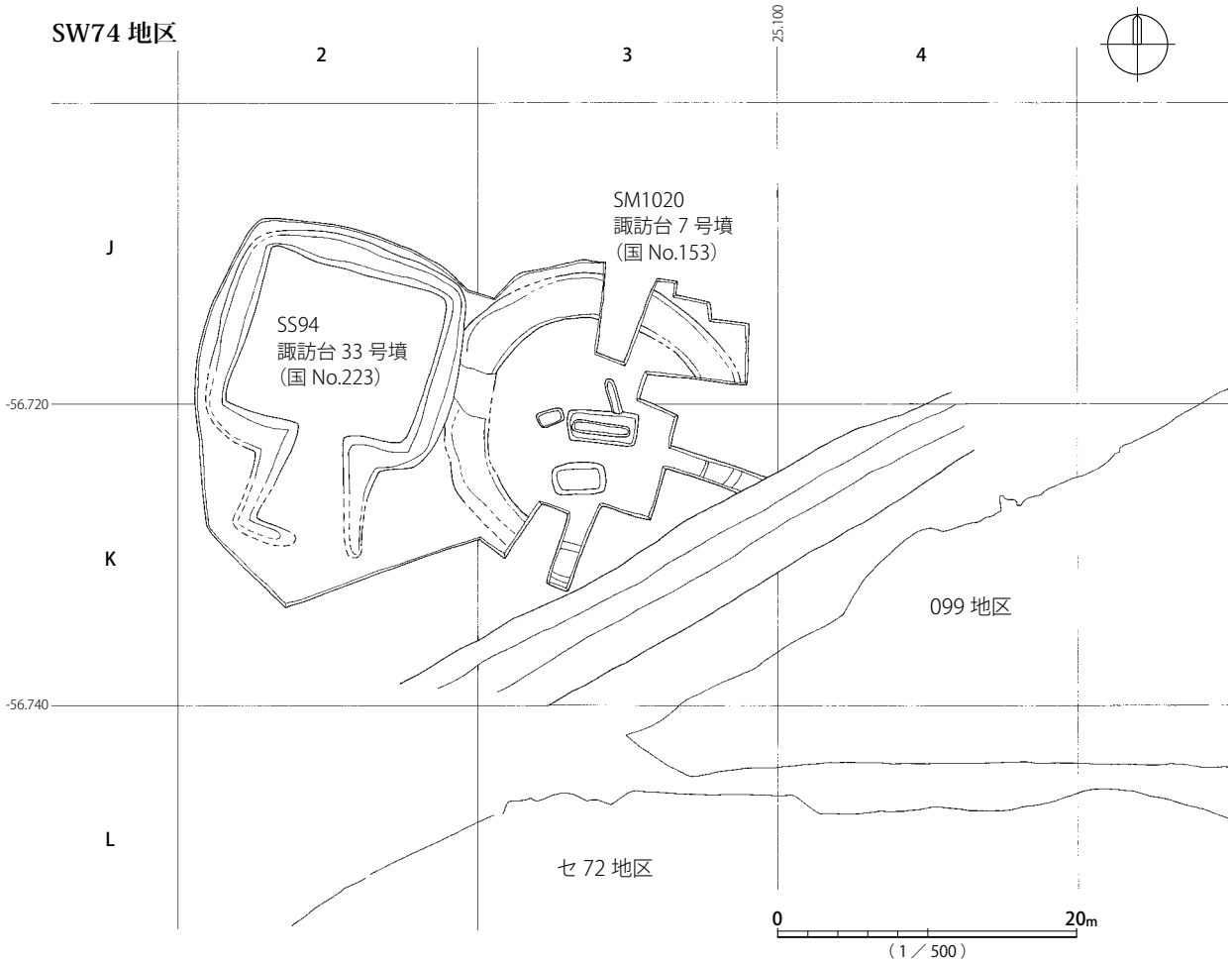
遺跡名　本遺跡の名称については、1973(昭和 48)年の分布調査段階で原則的に使い分けを行っており、範囲が重なって存在する遺跡のうち、古墳群については「諏訪台古墳群」、散布地等については「天神台遺跡」としている（田中 1975）。ところが、分布地図など既刊行物の中では「諏訪台遺跡」という名称が散見され、現状は混乱した状況にあるといえる。当初の状況を鑑みれば、本報告書名についても、古墳についてのみ「諏訪台古墳群」とし、弥生時代の方形周溝墓や、奈良・平安時代の墳墓、単独の土壙・土坑については「天神台遺跡」を冠することが適切であるといえる。

ただし、この原則を報告書の内容に反映させようとすると、個別遺構の時期や性格を明確に区分して取り扱うことが必要とされることになり、例えば弥生時代終末期（古墳出現期、古墳時代早期）の時期区分の問題、古墳時代前期の周溝墓や、周溝の一角に陸橋を持つもの、低墳丘の前方後方形の墳墓など、必ずしも呼称が定まっているとは言えない遺構について、明瞭な区分を与えなければならない。

このように、方形周溝墓とは何か、古墳とは何かといった、本質的な問いから派生する問題により、個々の遺構の報告書上での取扱いを難しくする状況を回避するため、本書では、遺跡名については書名で併記することとし[ii]（例言 5 参照）、個別遺構の区分には、この原則が及んでいないものとして本書を構成していたが、最終的には以下のとおりとしている。

文章中、遺構種を表わす略号は弥生時代中期から古墳時代前期までの墳墓を SS としているが、段階としては、山田橋式までを方形周溝墓とし、中台式以降を古墳としておきたい。

方形周溝墓と古墳の区分、弥生時代と古墳時代の区分、また、奈良・平安時代の方形墓については、さまざまな見方がある。ここでは、方形周溝墓と古墳時代前期に至る方形周溝墓系譜の方形墓、前方



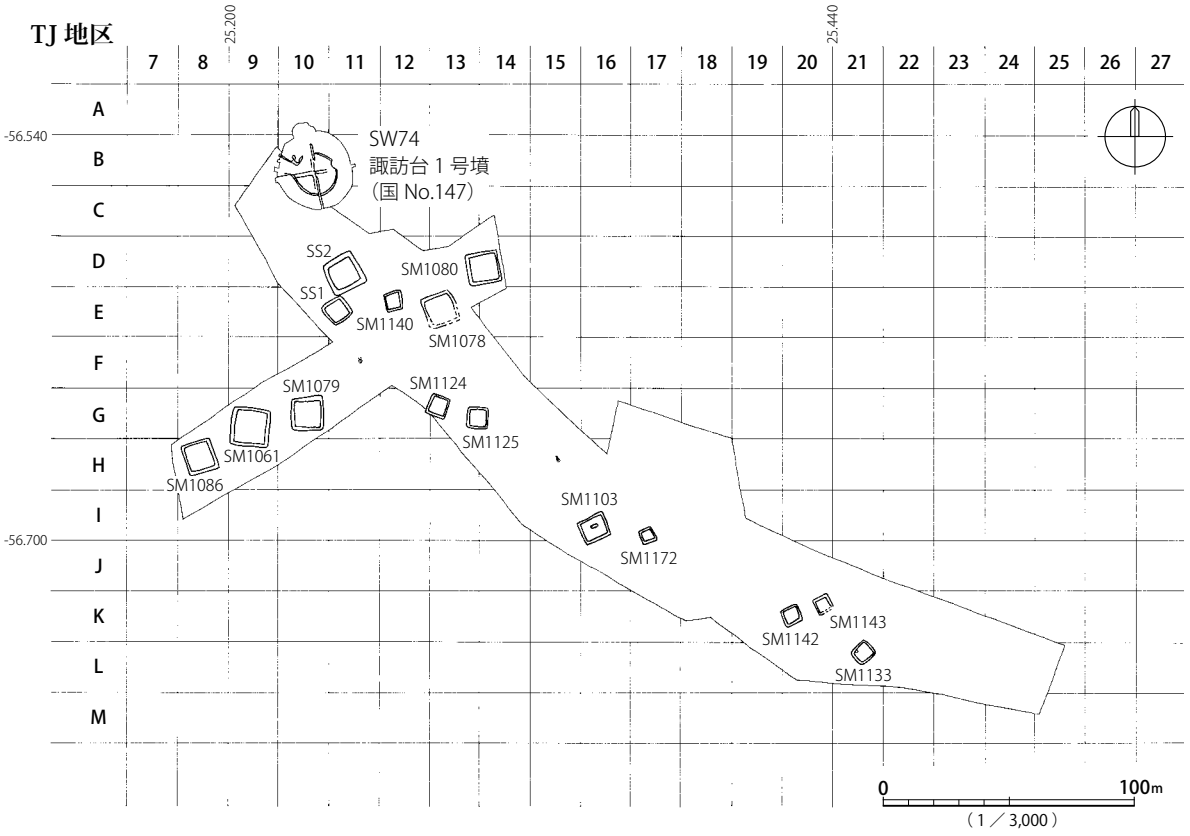


Fig.20　SW74地区、TJ地区全体図

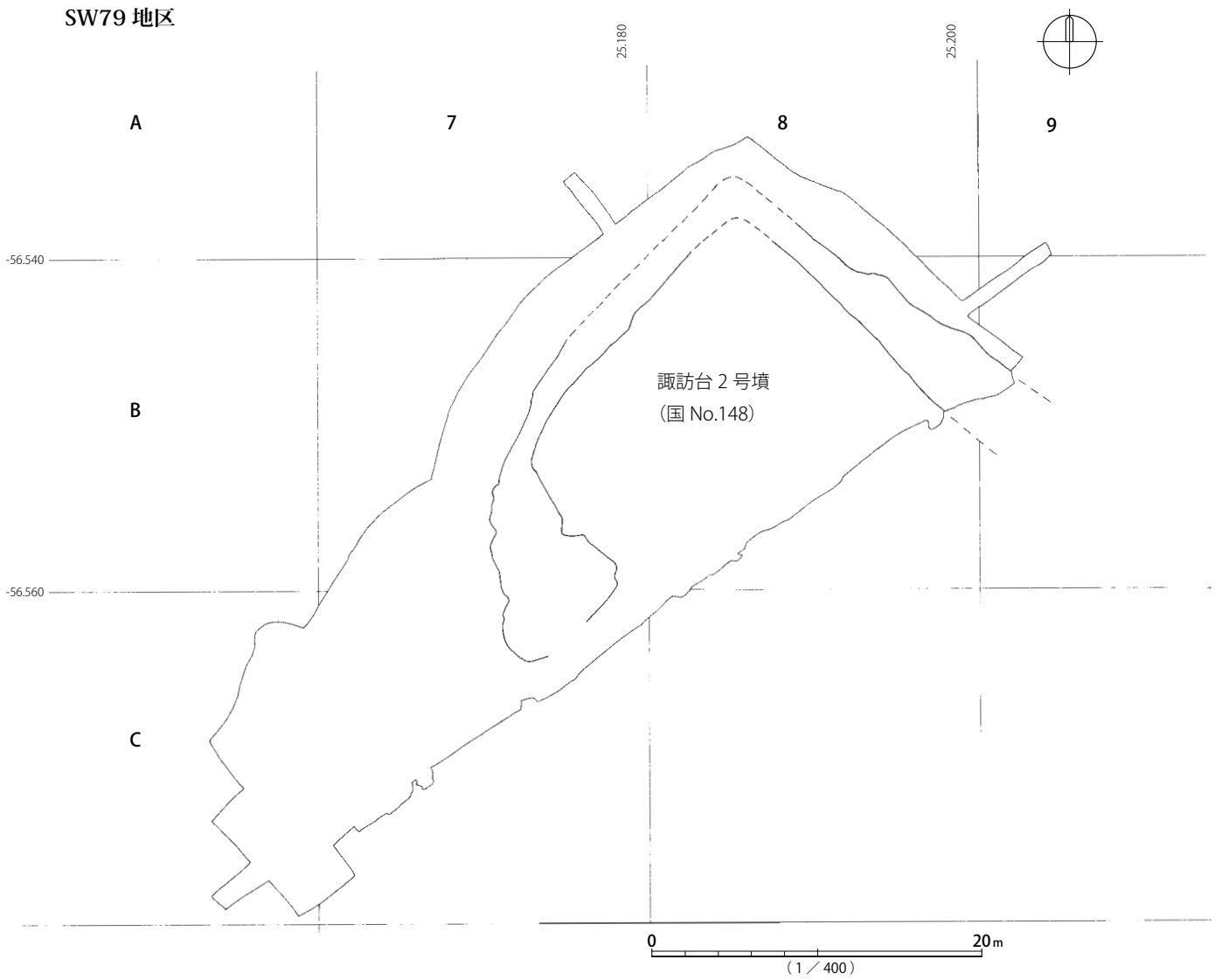


Fig.21　SW79地区全体図

後方形墓については SS、古墳時代前期以降の円墳、前方後円墳、方墳、前方後方墳及び、方墳系譜の奈良・平安時代の方形墓（本報告では律令制墳墓）については SM とする。

SS、SM 区分とは別に、各墳墓の天神台遺跡、諏訪台古墳群の帰属については、ここでの遺構の変遷等を考慮し、中台式期以降、奈良・平安時代を含む墳墓を諏訪台古墳群の帰属としておく。弥生時代と古墳時代の区分にはさまざまな見方があり、古墳の定義も一遺跡の問題ではないが、あくまでも便宜的な区分として提示しておく。

遺構番号　本報告で扱う墳墓・古墳の名称は、掲載№（略号№）を新たに与えている。こうした遺構番号の変更は、既に浸透している遺構番号もあるため、本来であれば適切な判断とはいえない。しかしながら、掲載№の付与については幾つかの理由がある。

遺構番号は各調査区で、それぞれのルールに従って付与されており、結果、調査区境界付近では連続するとみられる遺構も全く異なる名称で呼称され、瞬間的な理解の妨げとなった。こういった問題は、複数の地区にまたがって位置する遺構において顕著で、整理作業上での混乱を多く生じさせた。また、同じ調査区でも 1 遺構に対し複数に付与された遺構番号や、逆に 1 つの遺構番号が複数の遺構に付与されるなどの遺構番号の重複も少なからずあり、これを是正する必要性があった。他に、遺構番号が引用される際も、現状では統一性が保たれているとは言い難い状況であるとみられ、こうした状況に鑑み、遺構番号の変更を決定したものである。

このように、諏訪台古墳群・天神台遺跡では、個々の遺構に対する呼称に変動がみられるため、ここでは、その経緯を確認しておきたい。

1973(昭和 48)年、国分寺台区画整理事業地内の分布調査では、遺跡番号を、寺院跡(001～)、瓦窯跡(011～)、貝塚(031～)、散布地(051～)、古墳(101～)、供養塚等(301～)に分けてコード化し、「国分寺台遺跡地名表」、「国分寺台遺跡分布地図」として刊行している（田中 1975）。

ここでの番号の特徴は、古墳の場合、表中「遺跡番号」としている項目に、古墳 1 基を充てていることである。つまり古墳 1 基が 1 遺跡として捉えられているのである。また、これに対応する「遺跡名」には遺構番号にあたる古墳群としての連番を付与している（以下「遺跡番号」を国分寺台古墳№、「遺跡名」を諏訪台古墳群№とする）。たとえば国分寺台古墳№147 は諏訪台 1 号墳、148 は諏訪台 2 号墳となっている。ここにおける諏訪台古墳群は、計 32 基に対し、国分寺台古墳№147～178、諏訪台古墳群№1～32 号墳を充てており、続く「遺跡番号」は別遺跡に充てられている[ii]。

これにより、この時点での国分寺台における古墳数は一目瞭然ではあった。恐らく、こうした資料の作成は、既に一部発掘調査に着手していたこの時期に、当初計画では到底収まらないと判明しつつあった実態を、開発側との調整において具体的な数字で示す必要性が存在したものと思われる。

こうした「遺跡番号」と「遺跡名」の設定は、複数に及ぶ遺跡の一元的な管理を念頭にしていたはずだが、結果としてこの設定に従うと、同一古墳群内での新発見等による追加データについては、先の元データとは番号が隔絶してしまい、群としてのまとまりが捉えにくいものとなったことは否めない。諏訪台古墳群のように、①複数の調査組織が関係、②想定外の基数の古墳が新発見、③短期に設定された調査期間、④複数の現場担当者による発掘調査、という状況下にあっては、常に最新の遺跡番号を共有する必要があるこの設定は、現場担当者としては自由裁量度が低く、機能し難い構成であったようだ。その後、各地区で調査が行われるごとに、新発見の古墳に対し国分寺台古墳№及び、諏

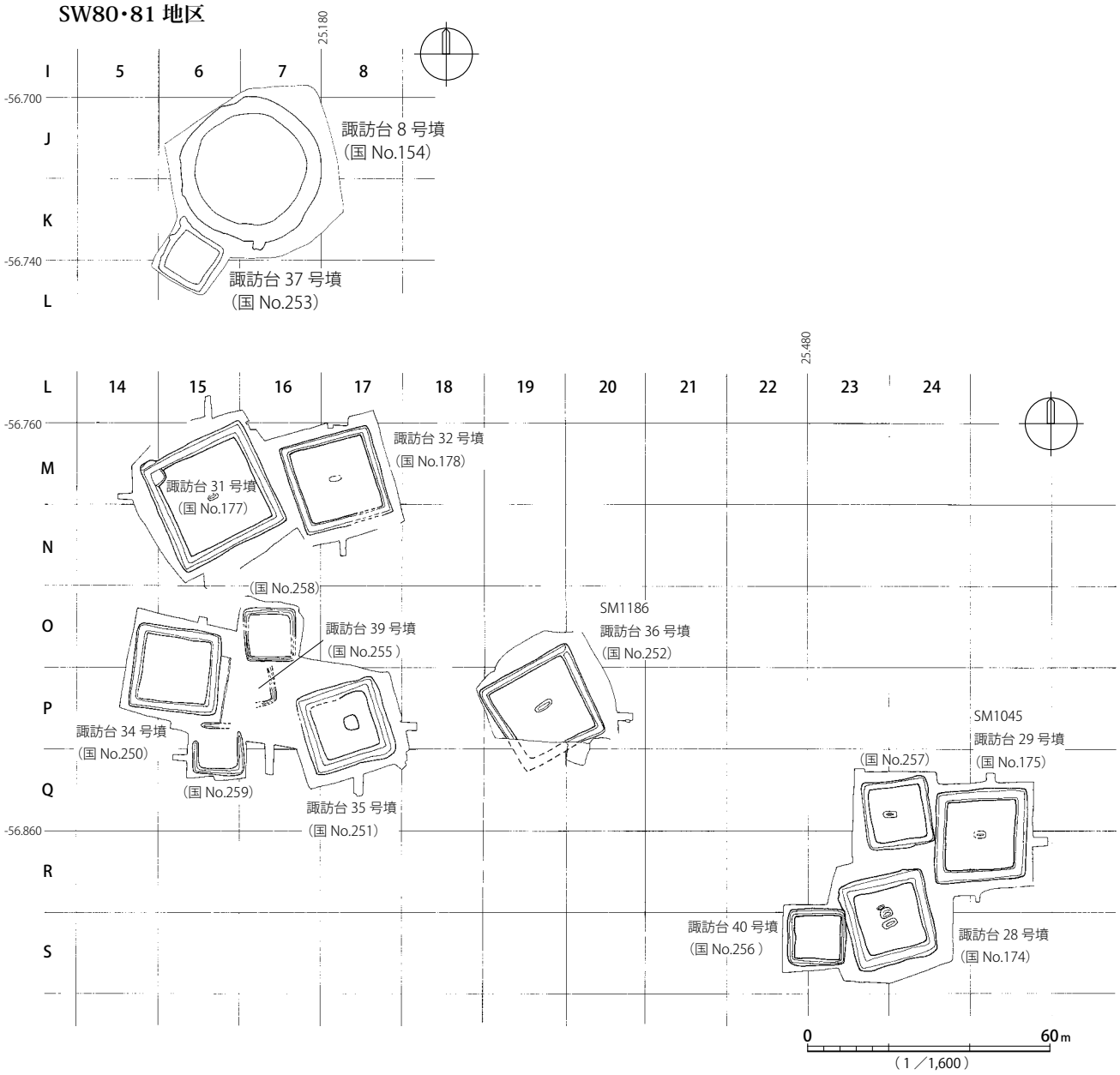


Fig.22　SW 80、SW 81地区全体図

訪台古墳群№に連動しない遺構番号が付与されることとなった。

こうした状況によって、整理作業段階では、調査区ごとに付与された遺構番号間の対応関係で混乱が生じた。加えて、一部刊行物に、ここで言う「遺跡番号」及び「遺跡名」を取り違えたものがあったことも加わり、更に状況を複雑にした経緯がある。

そこで本報告では、国分寺台古墳№(以下国№とする)、諏訪台古墳群№(以下諏訪台№とする)、調査時遺構№（地区№）については、既に認知度が高い遺構もあるため、遺構一覧(Tab.1)のほか、基本的には初出時に併記するようにした。たとえば「SS94(国№223、諏訪台 33 号墳、SW74-33)」とし、調査区が複数にまたがる遺構については、地区ごとの遺構№を列記している。

これとは別に、1988(昭和 63)年発行の『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図』―北部編―においては、諏訪台古墳群は遺跡番号 761 であり、枝№が付与され 15 基が記載されているにすぎない。本報告後の追加作業が必要となる。

実測図　本遺跡については、発掘調査後、概報、概要、年報、県史などで、部分的に公表されているものがある。この他に基礎的な整理も実施されており、こうした作業の成果品として、遺構図や遺物実測図、もしくはその写しが残されている。こうした成果品の利用については、今回の報告とは仕様が異なるため、基本的には行わず、そのほとんどについて、新たに作成している。しかし、金属器については、遺物そのものが、保存処理を実施しているものや、劣化が進んでいるため、元の形状を復元できなくなったものなどを複数含んでいる。このような遺物については、成果品である実測図や、その写しをそのまま、もしくは一部を改変後、トレースして掲載している。このことにより、本報告中の遺物には、写真図版とは異なり、実測図と現形状が違うものが含まれていることをお断りしておく。

次に発掘調査時の 13 地区について概観する。

2　SW74 地区　(Fig.3～7・10・20)

諏訪台古墳群・天神台遺跡における最初の調査で、調査期間は、書類上で昭和 49 年 10 月 25 日から昭和 50 年 3 月 25 日までである。調査区は遺跡の西端部 3 か所に点在し、何れも調査前に墳丘が目視できる地点となっている。現地での調査は、昭和 49(1974)年 11 月から昭和 50 年 3 月までの 5 か月間、上総国分寺台遺跡調査団によって実施されている。調査対象地は市原市惣社字天神台 1176-2 ほかに所在し、調査面積は 1,900 ㎡を測る。プラニメータ計測値は 1,393 ㎡である。

調査の契機が工事による削平であったためか、グリッドは設定せず任意座標で調査を行い、調査時の遺構番号は、古墳と認識した遺構について諏訪台古墳群№を使用している。

調査によって縄文時代早期炉穴 9 基、弥生時代から古墳時代までの竪穴住居跡 11 軒、古墳 4 基を検出している（須田勉・田中新史, 1975）。

このうち、前方後方墳の SS94（国№223、後に国№249 に変更か、諏訪台 33 号墳、SW74-33）、円墳である SM1020（国№153、諏訪台号墳 7 号墳、SW74-7）、方墳である SM1046（国№152、諏訪台 6 号墳、SW74-6、064-152）については、出土遺物は確認できないものの、現場図面が確認できたため本書に掲載している。しかし、記録類の全体像が把握できないため、遺物とともに、より詳細な図面が存在する可能性を残す。なお、前方後円形墳墓である諏訪台 1 号墳（国№147、SW74-147）については、記録類、遺物が無いため本報告では扱っていない。

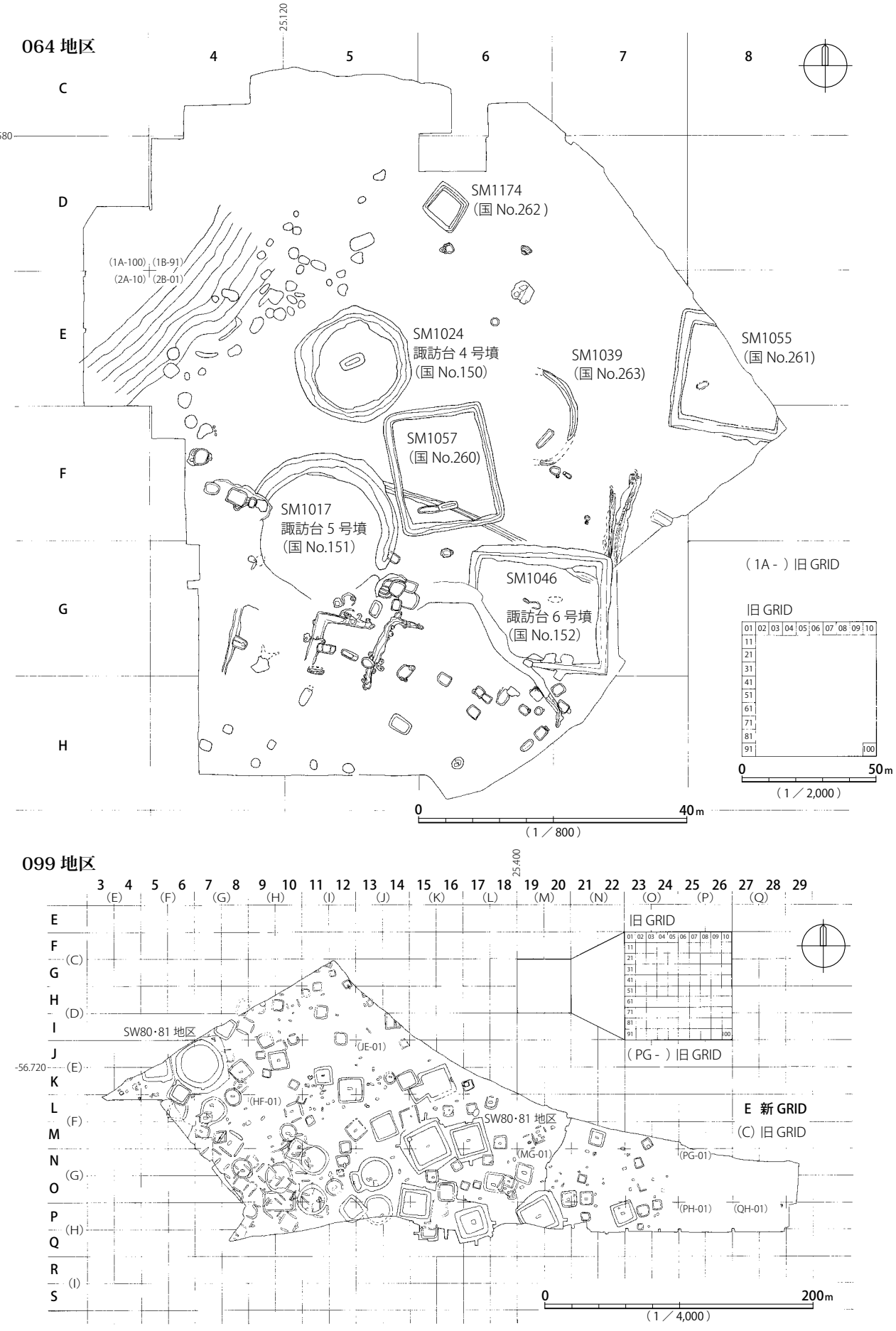


Fig.23　064地区、099地区全体図

一方、整理作業においては、発掘調査が任意座標での調査であったことから、本地区の全体図を、遺跡全体図へ反映する際、旧地形に合わせて位置決めをしている。そのため精度は落ちたものとなっている。また、掲載した遺構図は、概報掲載図面の一部をトレースして掲載している。

3　TJ 地区　（Fig.3～7・10・12・20）

調査区は遺跡の北部、雷電池に向けて開口するA谷（字南田谷）の支谷である小谷（字蛇谷）に沿った台地北辺部に位置し、北端にSW74地区の諏訪台1号墳が接続する。調査は、昭和49年11月から昭和50年3月までの5か月間、街路建設範囲を対象に実施された。調査対象地は市原市惣社字天神台1148ほかに所在し、調査面積は18,700㎡を測る。上総国分寺台遺跡発掘調査団による事業計画の下、天神台遺跡発掘調査団（平野考古学研究所）が実施した。調査の結果、縄文時代早期の炉穴13基、弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡13軒・竪穴住居跡161軒、方形周溝墓3、方墳10基を検出している。ブルドーザーによる表土除去を行い、遺構確認面としている。グリッドは設定せず、遺構№は、遺構種ごとに1番から付与している（平野元三郎ほか,1975）。

整理作業における問題点として、本地区はSW74地区と同様に、公共座標を使用せずに調査を実施しているため、調査区を遺跡全体図へ反映する際に地形を考慮して合成しているが、任意の操作をしているので、ここで触れておく。

調査区を既刊の概報や報告書の位置に従って合成すると、隣接調査区（099地区）と重複する範囲が生じ、この範囲内では遺構の分布・密度に不自然な状況が看取された。このため、調査区をまたがって位置する遺構の整合性を重視して再合成すると、座標に沿った方向だけでなく、回転方向での操作を行うこととなった。結果的には、099地区との間に未調査区域が現れることとなり、調査区間で極端に遺構密度が変化している範囲については整合性が高まったと思われる。なお、この操作の際には、TJ地区全体の航空撮影写真のほか、099地区の調査前現況地形図の道路、地形を参考にしている。

4　SW79 地区　（Fig.3～7・10・21）

調査区は遺跡の北部、台地西端に位置し、南側で064地区に接続し、市原市惣社字天神台1170-2ほかに所在する。上総国分寺台遺跡発掘調査団が、昭和54年5月1日から昭和55年3月15日までの期間で、890㎡を対象に調査している。調査の契機は、前年度中に諏訪台2号墳（国№148）を含む、その周辺が重機により削平され、諏訪台2号墳も東側を喪失したことを発端としている。残存する墳丘が崩壊する恐れが出たため、急遽調査することになったとされる（田中新史, 1980）。

調査は任意座標で遺構番号は古墳と認識した遺構には、諏訪台古墳群№を使用している。

調査の結果、縄文時代炉穴10群15基落し穴2基、弥生時代後期末葉から古墳時代前期の竪穴住居跡が32軒、諏訪台2号墳とされた前方後方墳1基を検出し、諏訪台2号墳の墳頂部からは、墳丘主軸方向に長軸をもった木棺痕が検出され、棺内から管玉、刀子が出土している。また、分布調査で目視されていた、国№149号墳は、調査段階では墳丘が削平されており、概報によると調査区南側の方形周溝墓のである可能性を残すが、完全に煙滅した可能性もあるとしている。この付近の土壙からガラス製小玉19点が出土している。

本地区の調査記録類は皆無であり、概報以上の資料は提示できない。そのため本報告では詳細を掲載せず、後の報告に譲ることとする。

5　SW80･81 地区　（Fig.3～7・11・12・22）

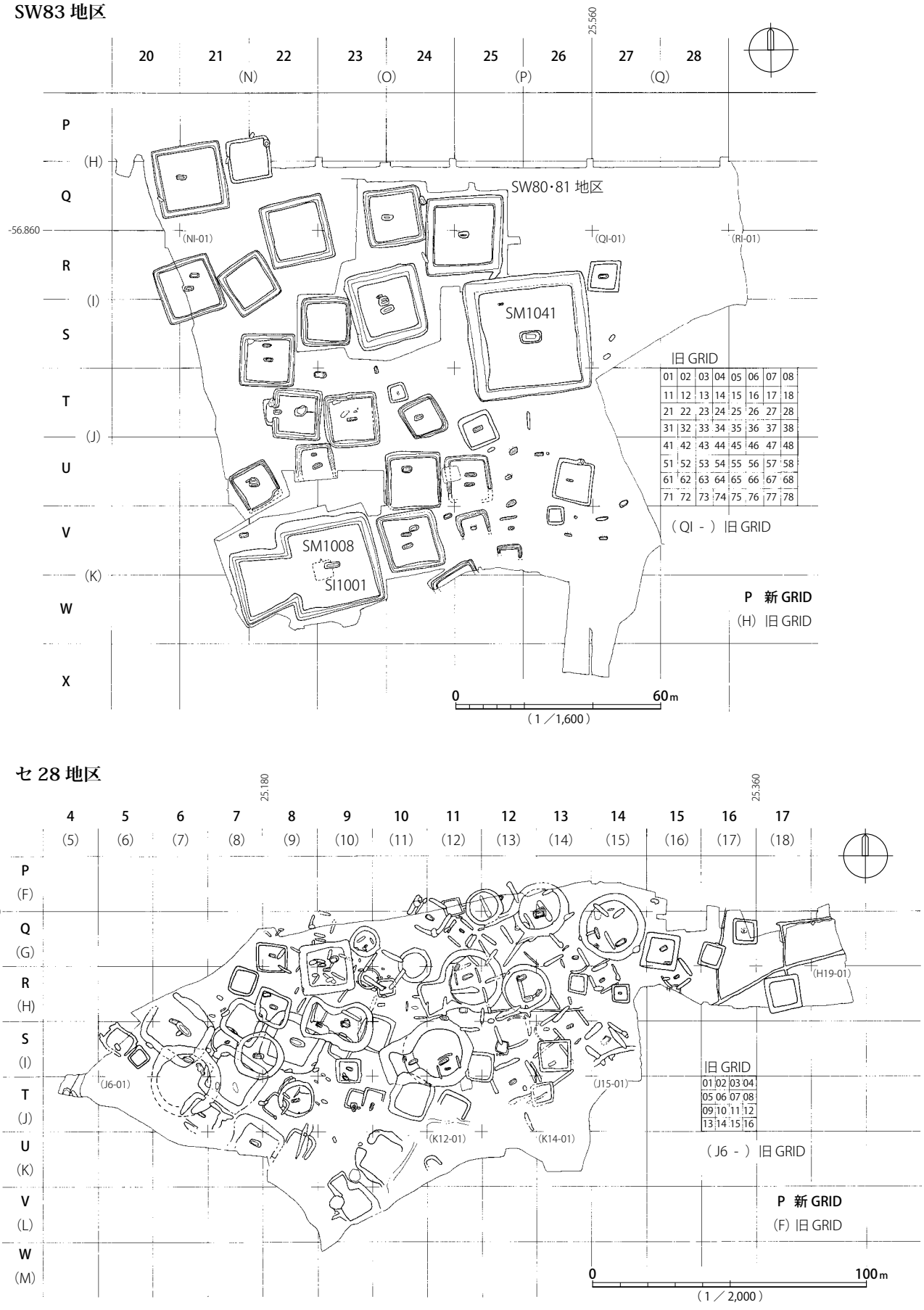


Fig.24　SW83地区、セ28地区全体図

調査区は遺跡全体のほぼ中央を東西方向に５地点に分かれて位置する。SW80 地区と SW81 地区は、調査年度は異なるが、連続した調査であり、どちらの調査区に帰属するか分け難い遺構もあるため、ここではまとめて扱う。

調査期間は書類上昭和 55 年 4 月 15 日から昭和 56 年 3 月 31 日までの記載が残るが、翌年度も調査を継続している。対象地は市原市村上字東山 1669-2 ほかで、面積は SW 80 地区が 19,700 ㎡、SW81 地区が 2,200 ㎡を測る。調査方法等詳細は、概報に記載がある（深澤・白井 1981）。

この地区の調査の際には、古墳の本調査以外に、現況地形の測量調査、確認調査、塚の本調査が行われている。測量調査は、早稲田大学考古学研究室の協力で実施されている。現在保存地区となっている範囲を中心に、5 基の古墳と周辺地形が図化されている。

確認調査は、範囲を保存地区の外周に巡る開発部分として実施され、諏訪神社境内の諏訪台 10 号墳(国№156)及び SS101（国№157、セ 73 地区で調査した前方後方墳）、SS97（国№155、セ 72 地区で調査した前方後方墳）の周溝部分に、トレンチを設定している。諏訪台 10 号墳の調査は、今日に至るまでこれが唯一のものであるが、周溝の一部を確認したものの、墳形・築造時期を確定するには至っていない。

塚の調査については、「行人塚」と呼ばれていること、国№308 を付与、三段築成で一辺が 15m、高さ 4.1m を測ること、古銭が出土していること、塚の下層からは古墳 1 基(国№250、諏訪台 34 号墳)が検出されていることなどが判っている。

整理作業における問題点と対応としては、概報掲載図面からの変更が挙げられる。概報に掲載している第 1 図　諏訪台調査古墳位置図（中央部及び東部）については、そのままグリッドで合成すると、099 地区の遺構配置に整合が取れなくなるため、国№252 号墳及び国№251 号墳を含む調査区を東に 5m ずらしている。作業としては、SW80･81 地区の調査図面との照合が必要だが、記録類の制約から行っていない。

本地区の調査記録類は限られており、概報以上の資料は提示できない。このため本報告では詳細は掲載せず、後の報告に譲ることとする。ただし、整理作業終盤で出土遺物の一部と見られる一群（「SW80 地区 8 号墳」のラベルあり）を確認したため、第 2 章第 3 節 5 項で掲載している。

6　064 地区　（Fig.3～7・10・23）

調査区は、遺跡の北西端に位置し、北側で SW79 地区と接する。調査期間は、昭和 57 年 4 月 1 日から昭和 58 年 3 月 31 日までで、（財）市原市文化財センターが調査を行っている。対象地は市原市惣社字天神台 1175 ほかに所在し、調査面積は、6,000 ㎡を測る。

調査方法は、座標北を基準として大グリッドを 50m×50m、小グリッドを 5m×5m とし、大グリッドは西から東へ A、B、C…、北から南へ 1、2、3…、その中に 01～100 の小グリッドを設定している。遺構番号は略号を設けるが、古墳については、国№を使用している。

主な成果として、円墳 3 基、方墳 4 基(うち 1 基は SW74 の SM1046)、竪穴住居跡 60 軒、土壙 40 基を検出している。

調査区内の土壙・土坑は、平坦面から斜面への変換点付近に集中する傾向があるが、これらの幾つかについては記録類が限られ、位置や詳細が不明であった。このため、航空写真等により、整理作業段階で復元している。また、同様に南側調査区境界についても同様な手法で復元している。

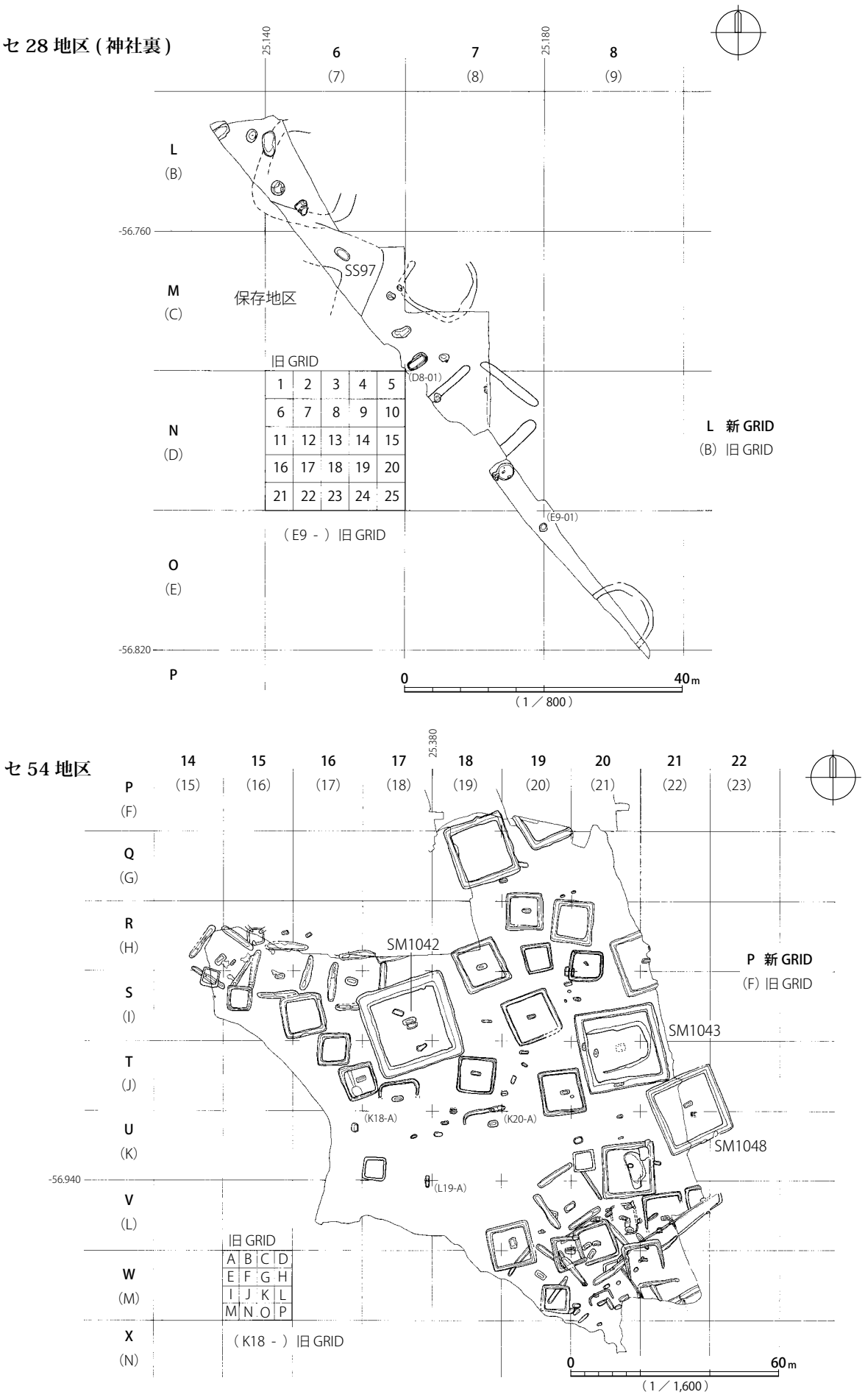


Fig.25　セ28(神社裏)地区、セ54地区全体図

7　099 地区　（Fig.3～7・11・12・23）

調査区は、遺跡全体のほぼ中央に位置し、1 調査区としては、同遺跡内で最大規模となる。調査期間は、書類上 4 期に分かれており、最初は昭和 55 年 8 月 20 日から昭和 56 年 3 月 31 日までで、最後は昭和 58 年 4 月 1 日から昭和 59 年 3 月 31 日までであり、上総国分寺台遺跡調査団が調査を行っている。対象地は市原市村上字東山 1683 ほかに所在し、調査面積は 44,000 ㎡を測る。

調査方法は、大グリッドを 40m×40m、西から E、F、G…、北から C、D、E…とし、小グリッドは 4m×4m、01～100 で設定している。遺構№は 1000 番台を竪穴建物跡、2000 番台を溝、3000 番台を土壙・土坑、4000 番台を方形周溝墓・古墳に振り分けている。

整理作業における問題点の対応としては、前述のとおり、TJ 地区の全体図への合成の際に未調査区域が生じていること、また、099 地区内に含まれる SW80・81 調査区の一部の区域について、遺構分布の整合性に問題が生じたため、099 の遺構配置に合わせて座標軸に沿って東に 5m 移動していることが挙げられる。

8　SW83 地区　（Fig.3～7・24）

調査区は、遺跡の南西隅に位置する。調査期間は、書類上 3 つにわかれるが、最初は昭和 58 年 4 月 1 日から昭和 59 年 3 月 31 日まで、最後は昭和 60 年 4 月 1 日から昭和 61 年 3 月 31 日までで、上総国分寺台遺跡調査団が調査している。対象地は市原市西広字松ケ谷 891 ほかに所在し、調査面積は 4,400 ㎡を測る。

調査は、大グリッド 40m×40m で、099 地区と共通の設定を採用しているものの、小グリッドは 5m×5m とし、踏襲していない。遺構№は、古墳・土壙を K1 から連番とし、竪穴建物跡を 1200 番台、溝を 2000 番台として付与している。

なお、現場図面には SW50 という地区名ともとれるコードが使用されている。推測の域を出ないが、調査時期が異なる先の調査に付与した地区コードの可能性がある。しかし、調査区境界が復元できないため、本報告では反映させていない。

整理作業における問題点と対応としては、西側に隣接するセ 54 地区との調査区境界については不整合が生じたため、特に SM1008 付近で大きく復元していること、また、東側及び南側の調査区境界については、一部欠落部位について、航空写真等を参考に復元していることが挙げられる。

9　セ 28 地区　（Fig.3～7・24）

調査区は、遺跡の南西部に位置する。調査期間は、書類上 2 つに分かれるが、最初は昭和 61 年 4 月 1 日から同年 7 月 31 日まで、最後は昭和 61 年 11 月 1 日から 62 年 3 月 31 日までで、(財)市原市文化財センターが調査している。市原市西広字松ケ谷 902 ほかに所在し、調査面積は 18,957 ㎡を測る。調査は、20m×20m を大グリッドとし、西から 5、6、7…、北から F、G、H…を設定、5m×5m を小グリッドとし、01～16 として 16 分割している。遺構番号は 001 から連番で付与されている。

調査では、古墳時代前期の古墳主体部上から盤龍鏡が出土し、話題となった。

10　セ 28(神社裏)地区　（Fig.3～7・10・11・25）

調査区はセ 28 の北側、保存地区の北西辺と 099 地区に挟まれて位置する。(財)市原市文化財センターが調査している。セ 28 地区と同時期に調査されている範囲であり、文書上では独立した調査区



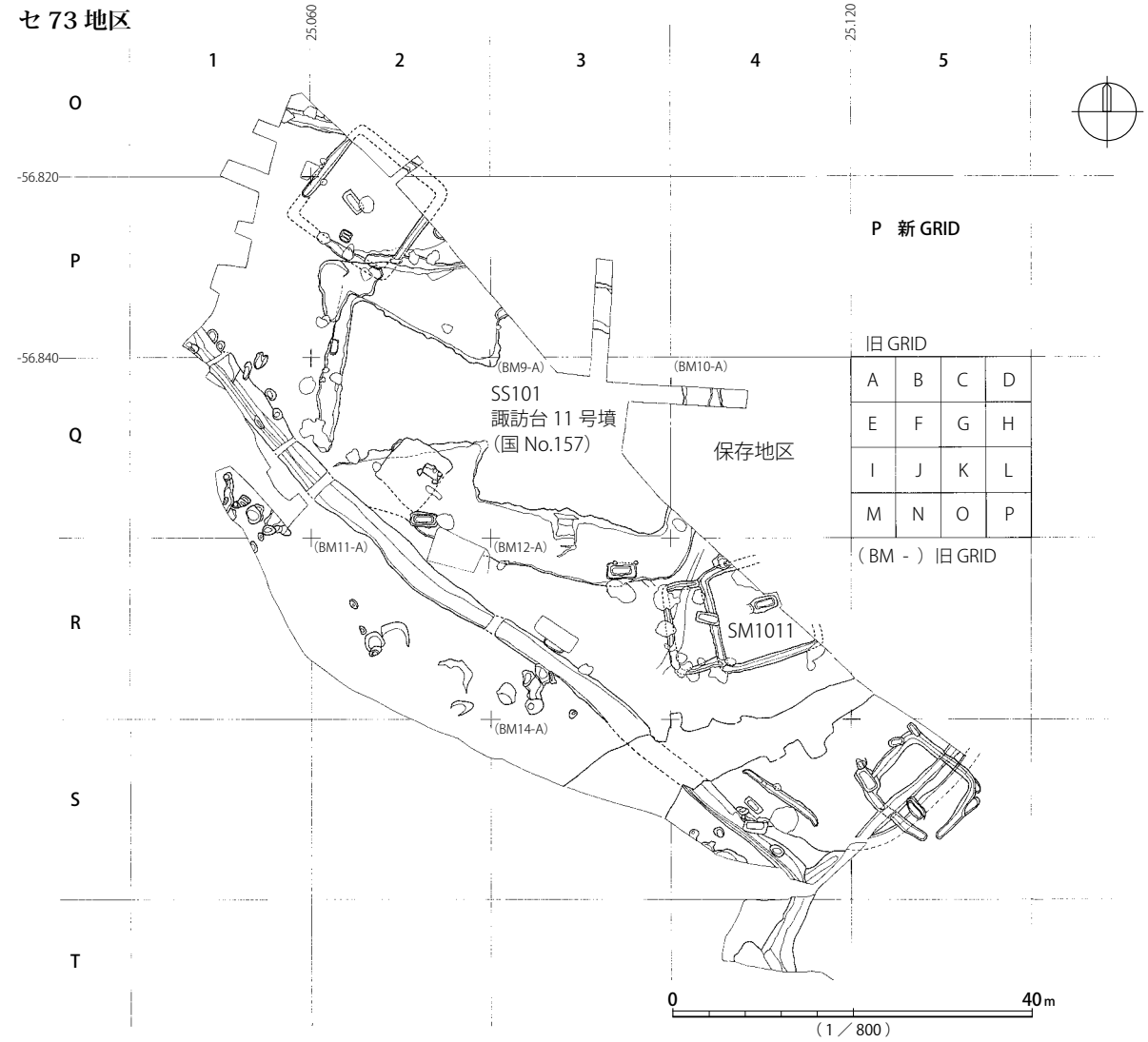


Fig.26　セ72地区、セ73地区全体図

とは看做し難い。しかし、調査内容を見ると、グリッドの設定など調査方法が微妙に異なる。このため本報告ではセ 28 地区に付属した小地区として扱う。

大グリッドは、セ 28 と共通の設定だが、小グリッドは 4m×4m とし、1～25 の№を付与している。遺構№は 1000 番台で完結している。

この調査区は、年報で図示されていないこともあり、これまでに公表された資料は皆無である。

主な成果としては、SS97（前方後方墳）の後方部周溝を検出していることが挙げられる。しかし、この範囲を含む調査区北側の調査原図が、連続する調査範囲に対して、そのままでは整合しないため、整理作業段階で修正を加えている。具体的にはグリッドに沿った水平移動に加え、回転方向での修正となっている。この修正は、現場での平板設定の際、南北方向の座標軸に乗せる段階で、視準した杭を誤認したことによるずれと判定し、そのずれを補正したものである。

11　セ 54 地区　（Fig.3～7・25）

調査区は遺跡の南限を示す台地突出部に位置する。調査期間は、書類上では昭和 62 年 4 月 1 日から昭和 62 年 11 月 30 日までとあるが、昭和 62 年 4 月 1 日から昭和 63 年 2 月 18 日までの記録が残る。(財)市原市文化財センターが調査している。市原市西広 895 番地ほかに所在し、調査面積は 8,000 ㎡を測る。大グリッドは隣接調査区のセ 28 地区と共通で、20m×20m を採用するが、小グリッドは 5m×5m で、A～P の 16 分割に設定している。遺構№は 1 から遺構種を横断して連番で付与している。

整理作業における問題点と対応、SW83 地区で触れたように、東側の調査区境界、特に SM1008 付近では、整合性を持たせるために大きく復元している。

12　セ 72 地区　（Fig.3～7・11・26）

別称は「神社北地区」。調査区は遺跡の西端、保存地区の北側に位置する。調査期間は書類上では昭和 63 年 4 月 1 日から昭和 63 年 9 月 30 日までとあるが、昭和 63 年 4 月 1 日から昭和 63 年 7 月 29 日までの記録が残る。(財)市原市文化財センターが調査している。市原市村上字諏訪台 1662-22 ほかに所在し、調査面積は 2,100 ㎡を測る。

グリッド設定は、諏訪台古墳群・天神台遺跡の調査を通じて特異なグリッドを採用している。大グリッドは 20m×20m で西から 1、2、3…、北から A、B、C…とし、その中を、中グリッドとして 10m×10m を設け、A、B、C、D と 4 区分。更にその中を 5m×5m の小グリッドで 4 つに分割し、1、2、3、4 としている。遺構№は 001 から遺構種を横断して付与されている。

13　セ 73 地区　（Fig.3～7・11・26）

別称は「神社南地区」。調査区は遺跡の西端、保存地区の南西側に位置する。調査期間は書類上では昭和 63 年 4 月 1 日から昭和 63 年 9 月 30 日までとあるが、昭和 63 年 4 月 1 日から昭和 63 年 7 月 29 日までの記録が残る。(財)市原市文化財センターが調査している。市原市村上字諏訪台 1662-92 ほかに所在し、調査面積は 3,000 ㎡を測る。

大グリッドは 20m×20m で、北から A1、B2 と、やや変則的な呼称となっている。その中を 5m×5m の小グリッドで 16 に分割し、A、B…P としているが、現場段階では方眼杭の BM№を主としている。

遺構№は 001 から遺構種を横断して付与されている。

14　保存地区　（Fig.3～7・11）

現在、諏訪神社の鎮座する遺跡の南西隅周辺は、諏訪台古墳群・天神台遺跡において唯一現状保存されている区域である。市原市村上字諏訪 1018 ほか（現状地番では諏訪２丁目）に所在し、面積はプラニメータ計測値で 9,900 ㎡を測る。保存地区内には、国分寺台地区で最大規模の諏訪台 10 号墳(国№156)や、前期前方後方墳である SS97(諏訪台９号墳、国№155)、SS101（諏訪台 11 号墳、国№157）両墳の一部を含んでいる。この範囲の調査は、先述したように、SW80･81 地区調査時（厳密には SW80 地区調査時）に、遺構範囲確認のために実施したトレンチ調査と、早稲田大学考古学研究室による墳丘測量調査に始まる（深澤・白井 1981）。このうち、SS97･101 についてはその後に本調査が実施され、その成果を本書に掲載しているのでここでは触れないが、諏訪台 10 号墳については、現在に至るまで、この調査しか行われていないため、成果の概要を再掲しておく。

トレンチは、10 号墳の墳丘を除く南半分に５本設定され、このうちの第 1、第 2、第 5 トレンチで周溝を確認している。周溝幅は周溝上端間で 9.0m から、下端間で 7.5m、深さ 1.0 m から 1.2m を測る。盛土は 4.5m を、墳丘直径は 40m、周溝外側で 60m を推定している。周溝の断面形状は諏訪台８号墳、SS97（諏訪台９号墳）のそれに類するとして、前期古墳である可能性を指摘している。墳形については、測量調査の成果も合わせて張り出し部の存在は認められないため、円墳を想定している[iii]。諏訪台 10 号墳は、諏訪台古墳群中ではもちろん、国分寺台において最大規模の墳墓であるとともに、古墳時代前期の主要古墳が集中する地点に占地し、特に、遺跡内で最も標高の高い地点の先端部に築かれていることから、諏訪台古墳群の展開に主要な役割を果たしていることは疑いない。築造時期によっては、小谷を隔てた神門墳丘墓群のありかたをどのように捉えるかに大きく影響する。

---

[i] これまでに遺構数、調査面積については、様々な数字が公表されている。ここでの数字は縄文時代を除き、直近のものを採用している。

[ii] 報告書名については、『天神台遺跡Ⅰ』において、墳墓編を『諏訪台古墳群』、集落編を『天神台遺跡Ⅱ』とするとしているが（忍澤 2014.例言 3)、しかし、その後に遺跡名については、発掘調査前からの明瞭な区分があるとの指摘を受け、本書名を変更するとともに、集落編は『天神台遺跡Ⅲ』とすることに改めている。

[iii] これ以後、新発見の古墳は随時追加されている。公表されているものでは、1974 年報文内で分布地図が改訂されているが、ここには図が示されているものの、国分寺台古墳№など、個々のデータは掲載されていない。1975 年発行の『諏訪台古墳群調査概要』にある第２図「諏訪台・神門古墳群」では、諏訪台古墳群№33(SS94、国№223)が追加されている。確証はないが、残る記録からは国分寺台古墳№257 を諏訪台古墳群№41 号墳としたものが最後とみられる。また、この表中の「備考」には、小字名を冠した旧とされる古墳№(名称)も記されている。

[iv] 墳丘規模については、直径 45m を推定する場合もあり、定まっていない。墳形についても張り出し付きの円墳を復元する見解もある。

【参考文献】

浅利幸一　2003『千葉県の歴史　資料編　考古 2(弥生・古墳時代)』千葉県
浅利幸一　1985『市原市文化財センター年報　昭和 57･58 年度』財団法人市原市文化財センター
浅利幸一ほか　2005『市原市加茂遺跡 A・B 地点』市原市教育委員会
浅利幸一ほか　2002『稲荷台遺跡』市原市教育委員会
市毛勲ほか　1977『蛇谷遺跡』
大村直ほか　2009『市原市南中台遺跡・荒久 A 地点』市原市教育委員会

大村直ほか　2005『市原市根田代遺跡』市原市教育委員会
忍澤成視　1977『西広貝塚』
忍澤成視ほか　2013『市原市天神台遺跡Ⅰ』市原市教育委員会
忍澤成視ほか　2007『市原市西広貝塚Ⅲ』市原市教育委員会
忍澤成視ほか　2004『西広貝塚Ⅱ』市原市教育委員会
忍澤成視ほか　1999『市原市祇園原貝塚』市原市教育委員会
小幡重康　1986『市原市史　中巻』市原市
北見一弘ほか　2011『市原市荒久遺跡B･C地点』市原市教育委員会
木對和紀　2010『市原市台遺跡C地点』市原市教育委員会
木對和紀　2004『辺田古墳群』市原市教育委員会
木對和紀　2004『御林跡遺跡』市原市教育委員会
木對和紀ほか　2008『市原市御林跡遺跡Ⅱ』市原市教育委員会
小出紳夫　2002『坊作遺跡』市原市教育委員会
小橋健司　2006『市原市長平台遺跡』市原市教育委員会
小橋健司　2004『山倉古墳群』市原市教育委員会
櫻井淳史ほか　2009『上総国分僧寺跡Ⅰ』市原市教育委員会
須田勉ほか 1975『諏訪台古墳群調査概要』国分寺台遺跡調査団
高橋康男　2002『市原市向原台遺跡・東向原遺跡』市原市教育委員会
高橋康男ほか　2002『南祇園原・上神台・持塚5号墳』市原市教育委員会
田中新史　2000『上総市原台の光芒』
田中新史　1980『上総国分寺台発掘調査概報』上総国分寺台遺跡調査団
田中新史ほか　1975『東間部多古墳群』上総国分寺台遺跡調査団
田中新史ほか　1981『上総国分寺台発掘調査概報』上総国分寺台遺跡調査団
田中新史ほか　1976『南向原』上総国分寺台遺跡調査団
鶴岡英一　2013『市原市中台遺跡』市原市教育委員会
鶴岡英一ほか　2014『市原市台遺跡A・D地点』市原市教育委員会
半田堅三　2003『市原市台遺跡B地点』市原市教育委員会
平野元三郎ほか　1975『天神台遺跡発掘調査概報』上総国分寺台遺跡調査団
藤原文夫　1979『市原市史　別巻』市原市
米田耕之助　1984『諏訪台古墳群調査概要』市原市教育委員会
2003　『国分寺台』国分寺台土地区画整理組合
1994　『市原市文化財センター年報　昭和63年度』財団法人市原市文化財センター
1989　『市原市文化財センター年報　昭和62年度』財団法人市原市文化財センター
1988　『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図　北部編』市原市教育委員会
1988　『市原市文化財センター年報　昭和61年度』財団法人市原市文化財センター
1986　『市原市文化財センター年報　昭和60年度』財団法人市原市文化財センター

第2章　遺構と遺物

第1節　弥生時代から古墳時代前期の遺構と遺物

概要　本節で対象とするのは、諏訪台古墳群・天神台遺跡で検出された遺構のうち、弥生時代中期後半～古墳時代前期後半までの墳墓119基である。ここにおいては、第1章第3節でふれたように、遺構略号をSSとしているが、内容的には方形周溝墓をはじめとして、墳丘の不明瞭ないわゆる方形の小規模低墳丘墓から、明瞭に墳丘を持つ方墳までを含んでいる。しかし矛盾するようだが、用語の使用については､弥生時代中期後半､宮ノ台式期から弥生時代後期後葉の山田橋式期までを方形周溝墓とし、続く弥生時代終末期の中台式期以降を古墳としている。

SS1　TJ地区（Fig.27～29、PL.23･151～152･180）

E11-62付近に位置する方墳である。北側にSS2が隣接する。本遺構の南北周溝で竪穴建物跡を掘り込んでおり、竪穴建物跡が本遺構に対して先行することが判る。竪穴建物跡の時期は現在整理中のため、不確定だが、遺構プランからは弥生時代終末期の所産とみられる。本遺構は、発掘調査時にはTJ8号方形周溝と呼称されている。事実記載にあたりここでは北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、墳丘部が北側辺で幅広になるものの、ほぼ正方形を呈し、周溝は全周する。周溝幅は北西隅を除きほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が7.52m×7.44m、周溝の上・下端幅、北側周溝で1.13m・0.72m、東溝が1.08m・0.65m、南溝が1.20m・0.70m、西溝が1.15m・0.80m、を測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-58°-E である。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

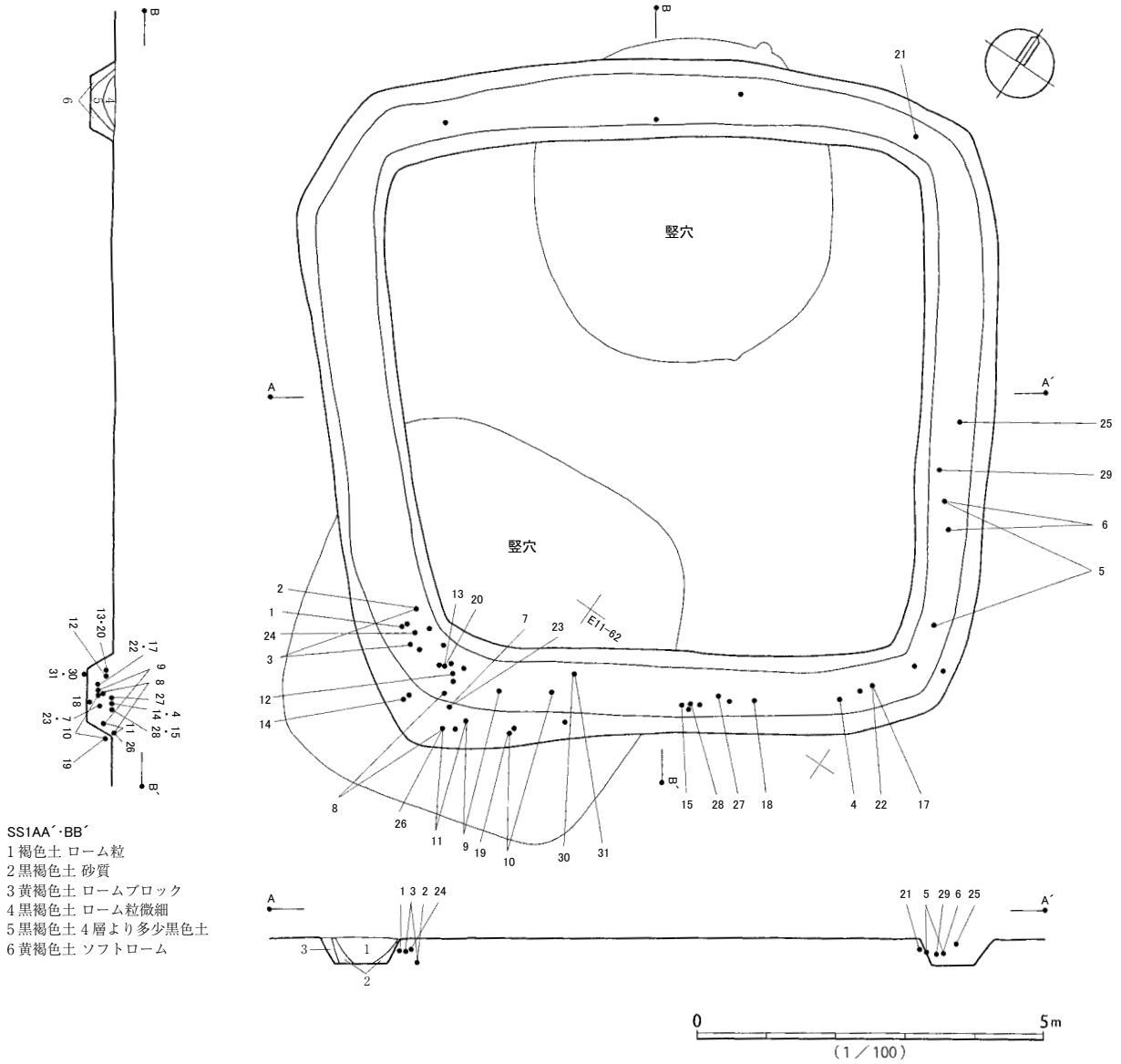
出土遺物は、南側周溝から東側周溝にかけてと、北側周溝に集中して出土している。いずれも重複遺構である竪穴建物跡と近接する位置であるが、発掘調査段階、整理初期段階で帰属遺構の精査があったとみられるため、報告はこれに従っている。1～17は甕形土器、18～28は壺形土器、29・30が高杯形土器、31・32は器台形土器である。

帰属時期は、中台2式期の所産と考えられる。

SS2　TJ地区（Fig.30～31、PL.23･152･180）

E11-02付近に位置する方墳である。南側にSS1が隣接する。本遺構の南北周溝で竪穴建物跡を掘り込んでおり、竪穴建物跡が先行することが判る。竪穴建物跡の時期は現在整理中のため不確定だが、遺構プランから弥生時代終末期とみられる。本遺構は、発掘調査時にはTJ9号方形周溝と呼称されている。事実記載にあたりここでは北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、墳丘部がほぼ正方形であるが、外周部には、西辺以外の3辺にテラス状の平坦部を認める。周溝は幅をほぼ均等に全周する。規模は方台部が10.10m×9.48m、周溝の上・下端幅、北溝で2.35m・1.18m、東溝が1.80m・0.90m、南溝が1.85m・0.93m、西溝が1.50m・1.10m、を測る。周溝底面は平坦で、断面形状は逆台形を基本とするが、法面角度は方台部側でやや緩やかになる。テラス状の平坦面は、断面図を見る限り、周溝開口時には露出していたと考えられる。墳丘範囲では盛土を検出していない。埋葬施設は方台部、周溝内共に確認していない。主軸方位は方台部長軸方向から



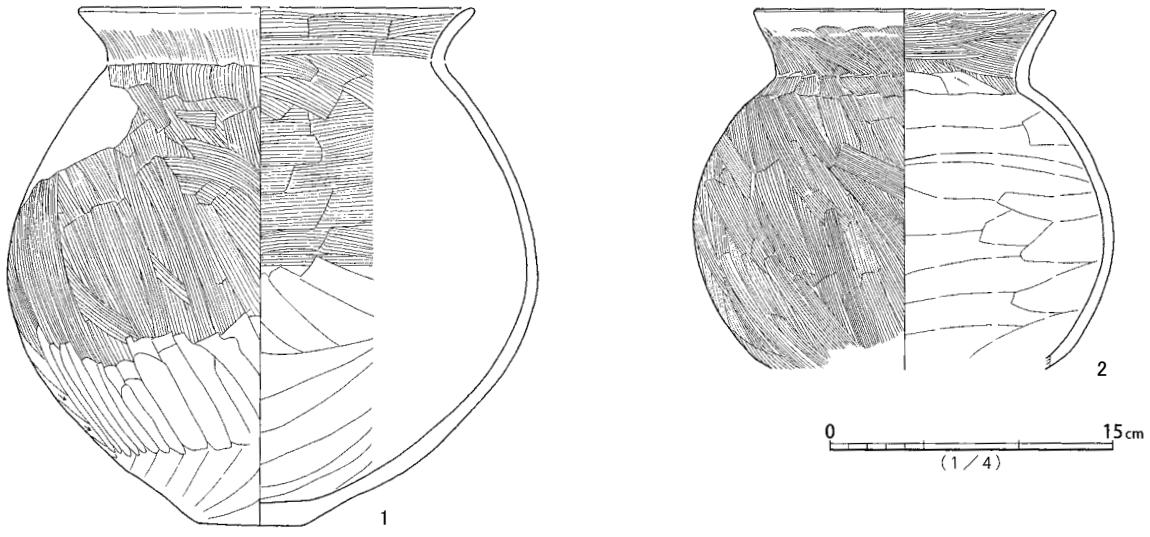


Fig.27　SS1 遺構・遺物 (1) 実測図

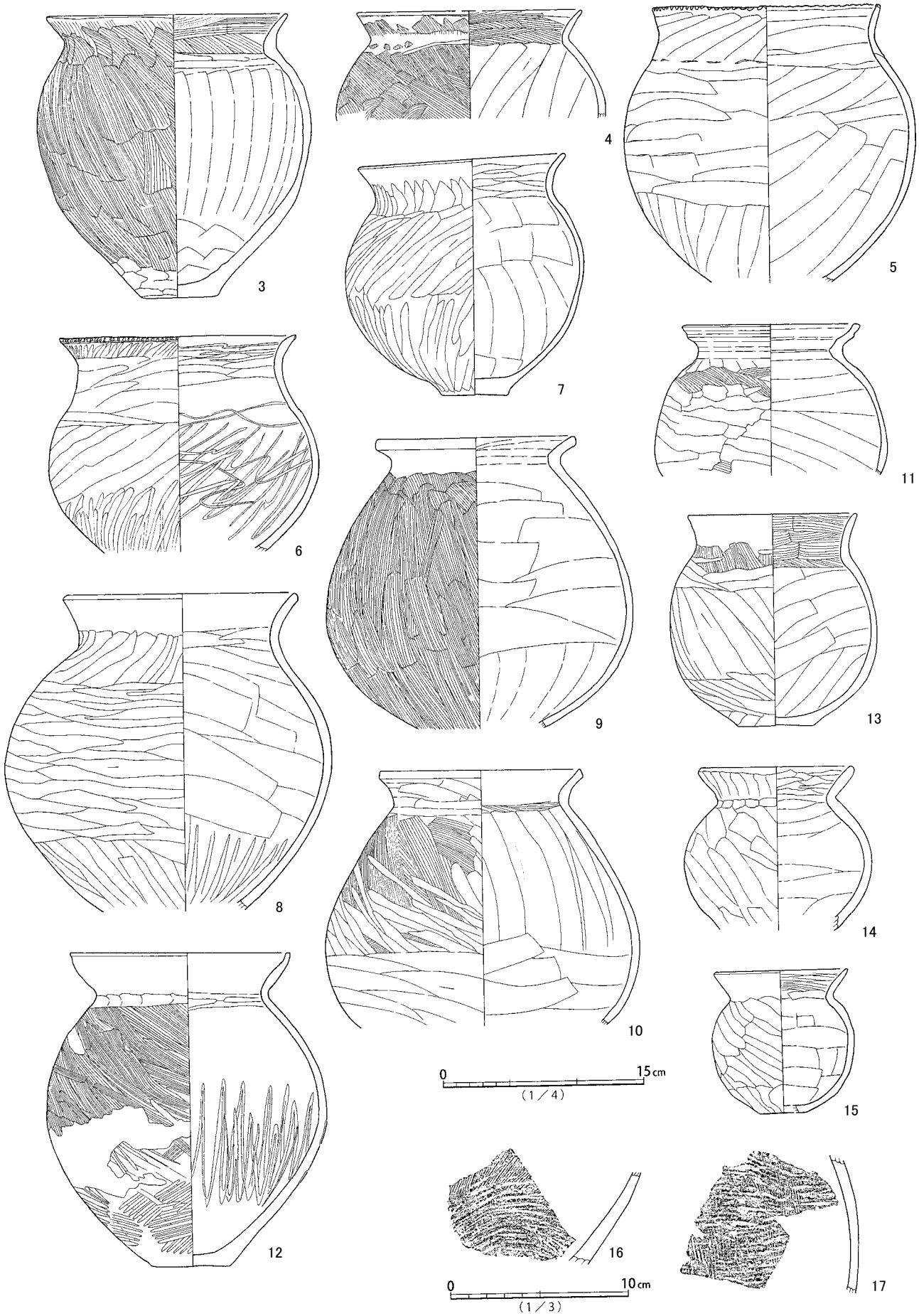


Fig.28　SS1 遺物 (2) 実測図

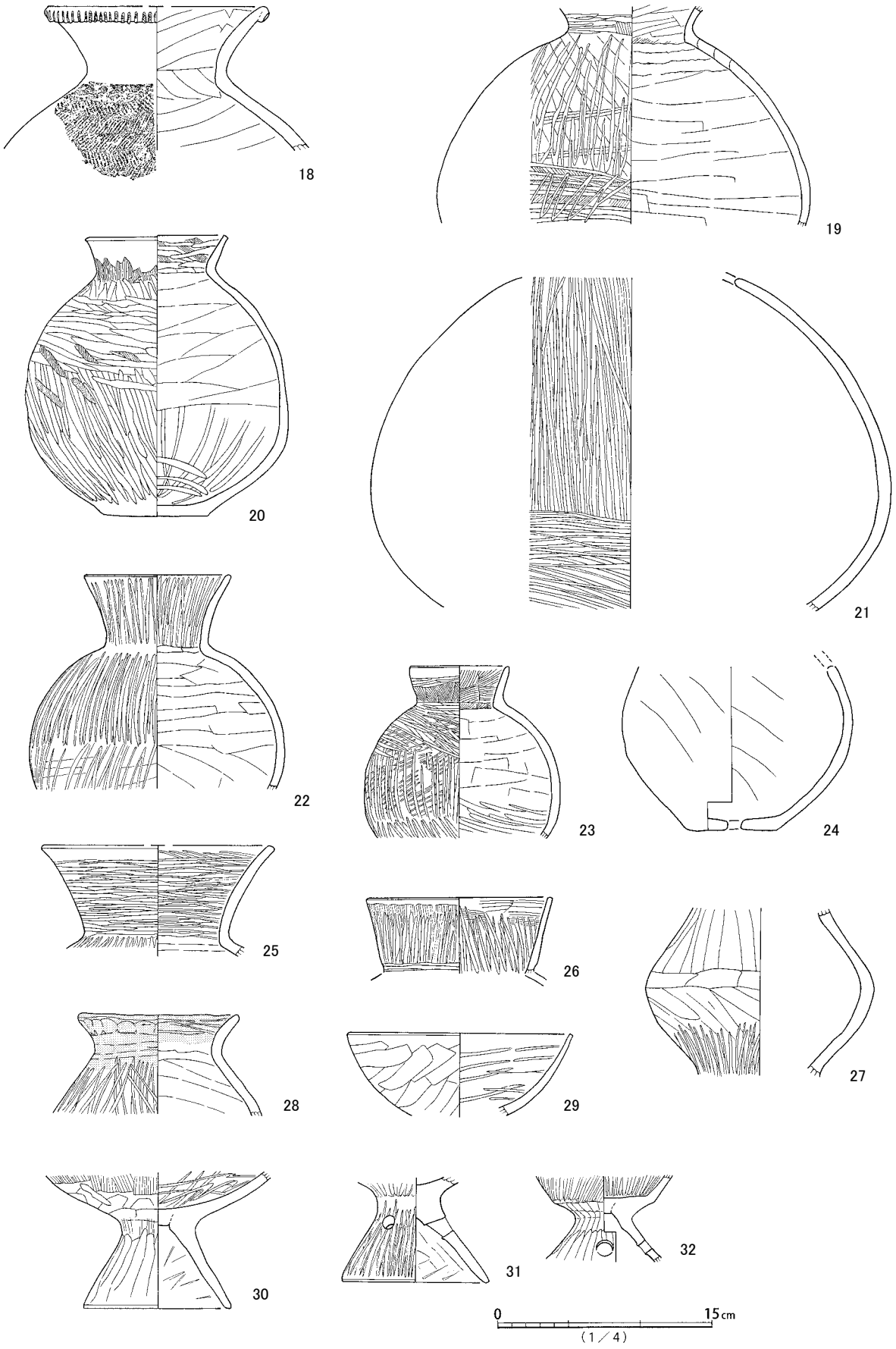


Fig.29　SS1 遺物 (3) 実測図

N-64°-Eである。

遺物の出土位置は記録がなく不明。

遺物は、1甕形土器、2・3・8壺形土器、4・5鉢形土器、6高杯形土器、7器台形土器、8は須恵器甕形土器である。

帰属時期は、中台2式期の所産と考えられる。

SS3　099地区（Fig.31、PL.153・180）

H9-84付近に位置する方形周溝墓である。北側半分はTJ地区となるが、遺構プランを検出していない。西側にSS98、SS4・5がやや離れて位置する。東側で竪穴建物跡を掘り込む。また、方台部中央より西方にかけて、攪乱や時期不明の掘り込みにより西側での遺存も悪い。本遺構は、発掘調査時には099-2012号遺構と呼称されている。

平面形状は、南側で円形に張り出す溝と、直線的に伸びる溝2本が検出されており、どちらを帰属させるかにより大きく異なる。東側周溝との関係や、土層断面図等、記録がないため、判断に苦しむが、直線的な溝を本遺構に帰属させておくが、周溝幅だけを見れば、東側周溝と南側円形溝が一連の別遺構である可能性も否めない。方台部は方形を呈するとみられるが、南西隅で明瞭に、周溝が切れる。周溝は、西・南側で幅が狭く均等、直線的であるが、東側は幅が広く直線的で様相が異なる。周溝断面形は記録がなく不明。規模は方台部が9.92m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北溝で計測不能、東溝が1.40m・0.72m、0.31m、南溝が0.60m・0.22m、0.26m、西溝が0.62m・0.28m、0.08mを測る。墳丘・埋葬施設は検出していない。主軸方位は長軸を遺存する東西方向とするとN-72°-Eである。

遺物の出土位置は不明。

遺物は、1～３・7・8が壺形土器、4～6が甕形土器である。

帰属時期は、中台2式期の所産と考えられる。

SS4　　099地区　（Fig.32、PL.23・153・180）

I8-42付近に位置する方形周溝墓である。東側にSS5が近接する。北側の一部がTJ地区にかかるが、遺構プランを検出していない。北東から南西方向に幾つかの攪乱を受けている。

本遺構は、発掘調査時には099-4004号遺構と呼称されている。

平面形状は、方台部が隅丸長方形とみられる。周溝は全周するとみられ、溝は辺の中央部が僅かに外側に膨らむ形態を呈する。規模は方台部が(11.80)m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北溝で計測不能・0.80m、0.50m、東溝が1.95m・0.90m、0.94m、南溝が1.63m・0.95m、0.79m、西溝が深さ0.48mを測る。周溝底面は凹凸が激しく、段差が認められる。周溝の断面形状は、底面からの立ち上がりが外側で不明瞭となる傾向が看取できる。

墳丘・埋葬施設は検出していない。主軸方位は北東から南西方向を軸とした長軸方向からN-25°-Eである。

遺物の出土位置は、南西隅と北東隅付近にまとまりが認められ、覆土中位以上のレベルから出土している。

遺物は、1～3は壺形土器、このうち3は器台形土器の可能性がある。

帰属時期は、中台2式期の所産と考えられる。

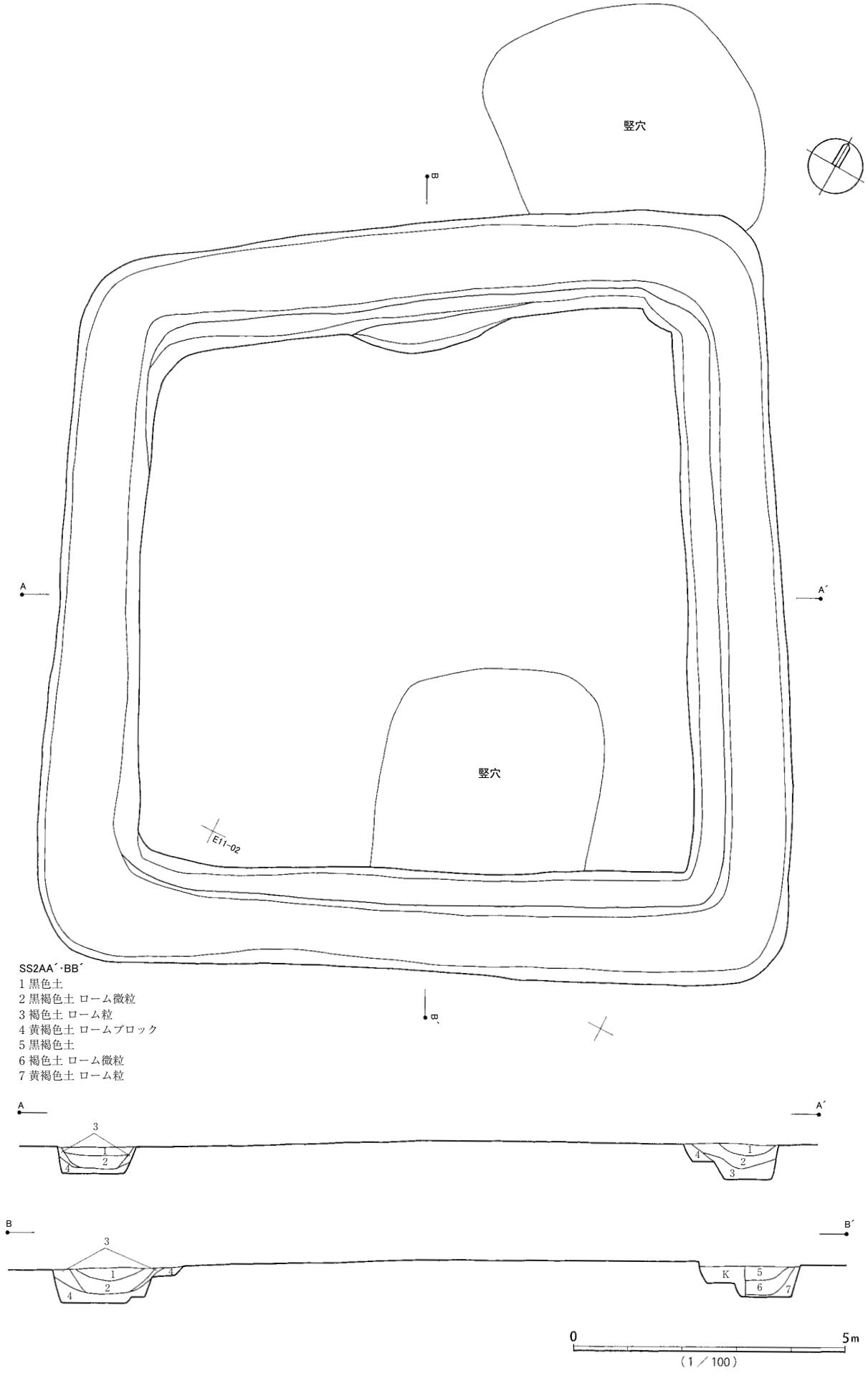


Fig.30　SS2 遺構実測図

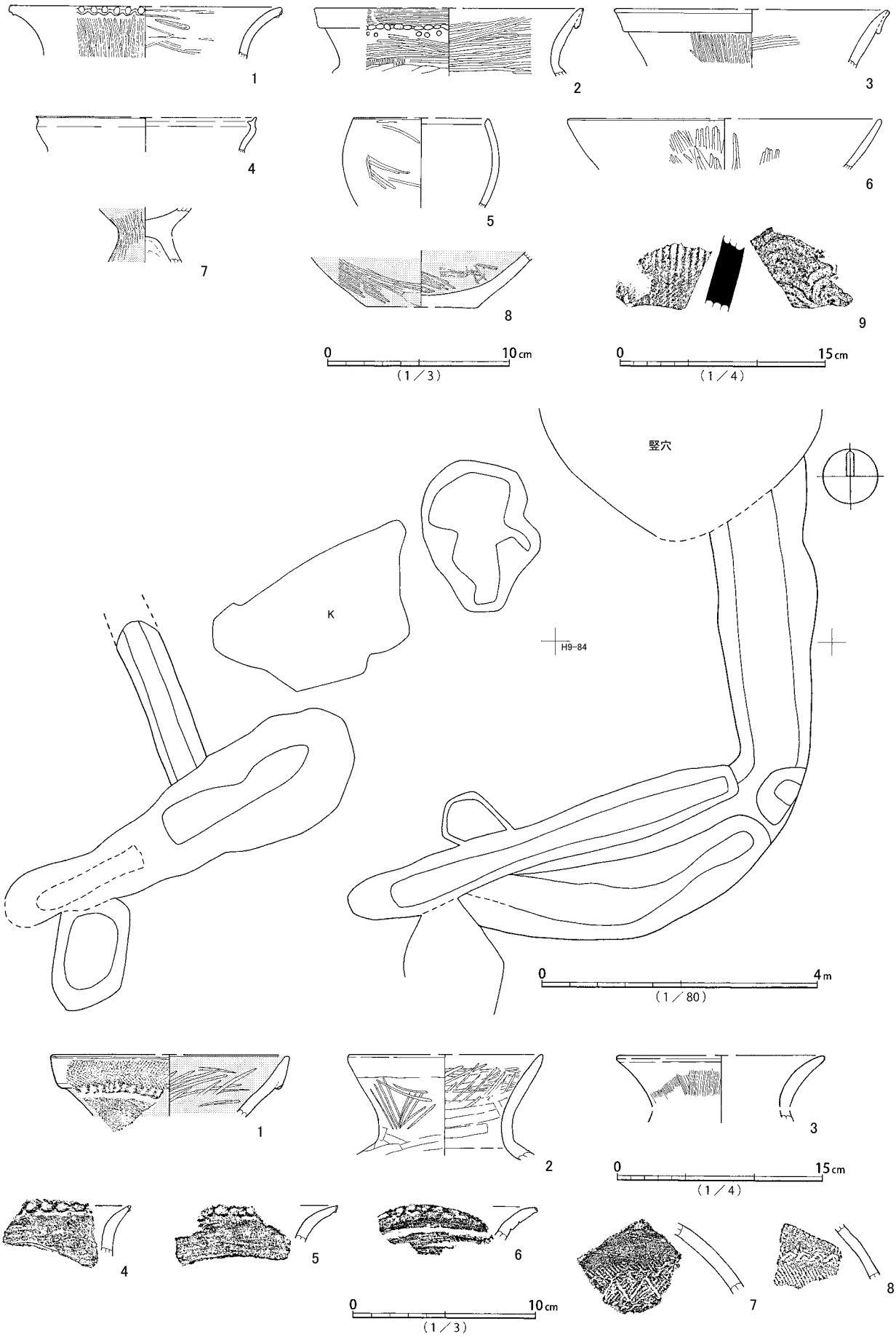
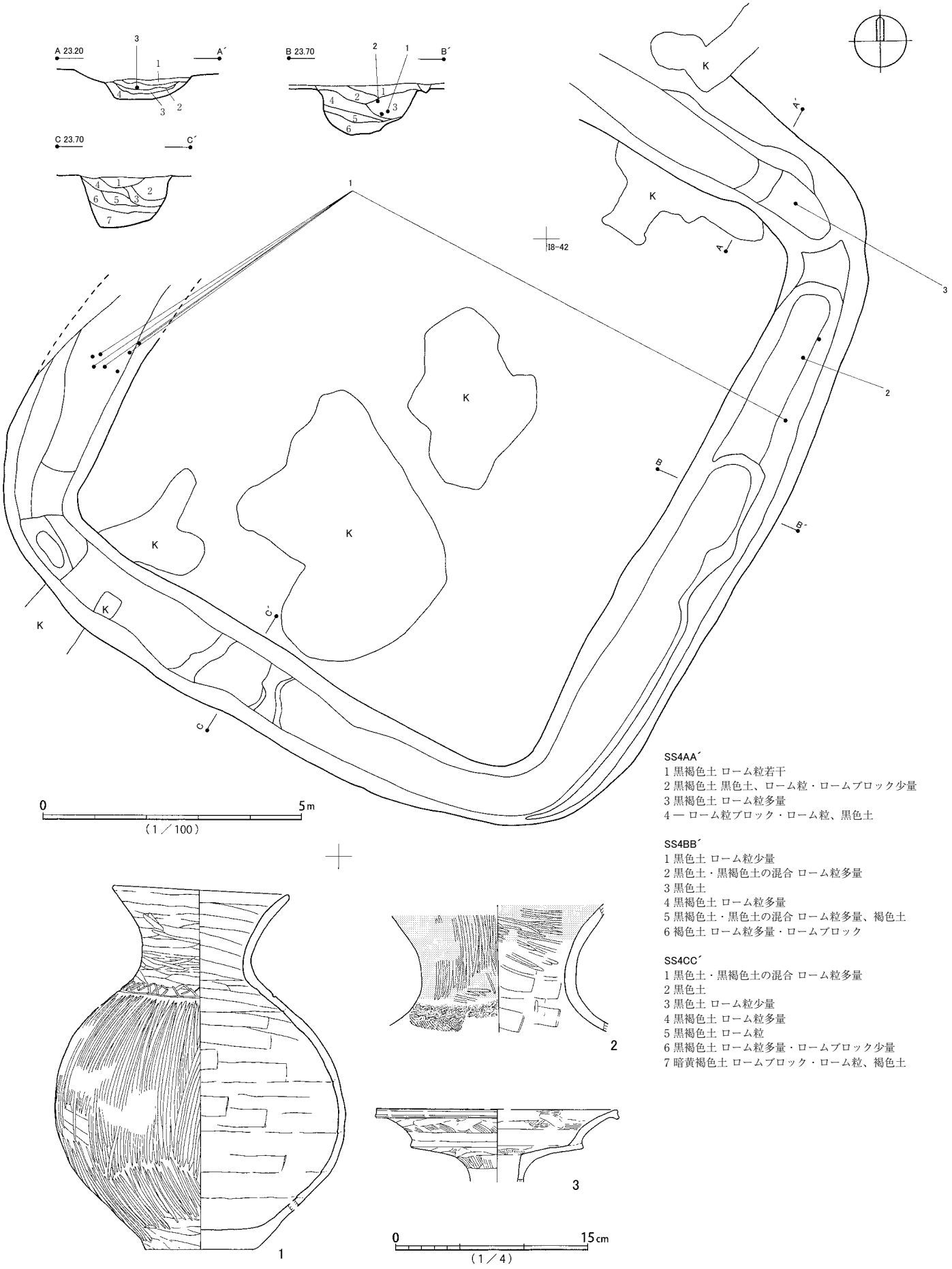


Fig.31　SS2 遺物、SS3 遺構・遺物実測図



SS4AA´
1 黒褐色土 ローム粒若干
2 黒褐色土 黒色土、ローム粒・ロームブロック少量
3 黒褐色土 ローム粒多量
4 — ローム粒ブロック・ローム粒、黒色土

SS4BB´
1 黒色土 ローム粒少量
2 黒色土・黒褐色土の混合 ローム粒多量
3 黒色土
4 黒褐色土 ローム粒多量
5 黒褐色土・黒色土の混合 ローム粒多量、褐色土
6 褐色土 ローム粒多量・ロームブロック

SS4CC´
1 黒色土・黒褐色土の混合 ローム粒多量
2 黒色土
3 黒色土 ローム粒少量
4 黒褐色土 ローム粒多量
5 黒褐色土 ローム粒
6 黒褐色土 ローム粒多量・ロームブロック少量
7 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒、褐色土

Fig.32　SS4 遺構・遺物実測図

SS5　099地区（Fig.33、PL.23・153）

I9-60付近に位置する方形周溝墓である。西側でSS4が近接し、周囲にSS3、SS8が位置する。SS4との切り合いは記録が無い。

本遺構は、発掘調査時には099-4005と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形で、周溝は明瞭に四隅が切れる。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が10.76m×9.16m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.05m・0.52m、0.39m、東溝が1.30m・0.87m、0.29m、南溝が1.22m・0.48m、0.37m、西溝が1.00m・0.57m、0.18mを測る。西側周溝を除き、周溝は浅く、周溝底面は中央が浅く窪み、平坦では無い。断面形状はレンズ状を呈し、底面から側面への変換点は不明瞭である。西側周溝は、底面がほぼ平坦で、断面形が下位において方形を呈する。周溝内土壙の可能性があるが、やや幅が狭い。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-71°-Wである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、1は小型の壺形土器である。

帰属時期は、中台2式期の所産と考えられる。

SS6　099地区（Fig.34、PL.24・153）

J10-02付近に位置する方形周溝墓である。東西にSS７、SS8が近接する。南側に後期古墳であるSM1072が位置する。東側で竪穴建物跡を掘り込んでいる。本遺構は、発掘調査時には099-4025と呼称されている。ここでは事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、方形を呈するとみられるが、西側周溝を欠き、北東隅は切れる。南東隅は検出されていないため形状は不明。周溝幅は各辺が均等な幅で方台部をめぐる。規模は方台部が7.40m×計測不能、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.58m・0.26m、0.12m、東溝が(1.12)m・0.44m、0.31m、南溝が1.16m・0.41m、0.35mを測る。周溝底面は中央が窪み平坦では無い。断面形状はレンズ状を呈し、周溝幅に対して浅い。墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-35°-Wである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、西側周溝底付近から小型の壺形土器が正位で出土している。

帰属時期は、中台2式期の所産と考えられる。

SS7　099地区（Fig.35、PL.24・153・180）

J10-06付近に位置する方形周溝墓である。西側にSS6が近接するが、重複しない。
南西側で竪穴建物跡を掘り込んでいる。本遺構は、発掘調査時には099-4030と呼称されている。ここでは事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、ほぼ正方形を呈し、周溝は北辺の両端で切れる。南西隅は検出されていないため不明。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が6.30m×5.86m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.00m・0.76m、0.14m、東溝が1.09m・0.64m、0.42m、南溝が0.84m・0.29m、0.66m、西溝が0.92m・0.44m、0.33mを測る。周溝底面は平坦では無い。断面形状は深さと共に安定しない。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-76.5°-Eである。埋葬施設は

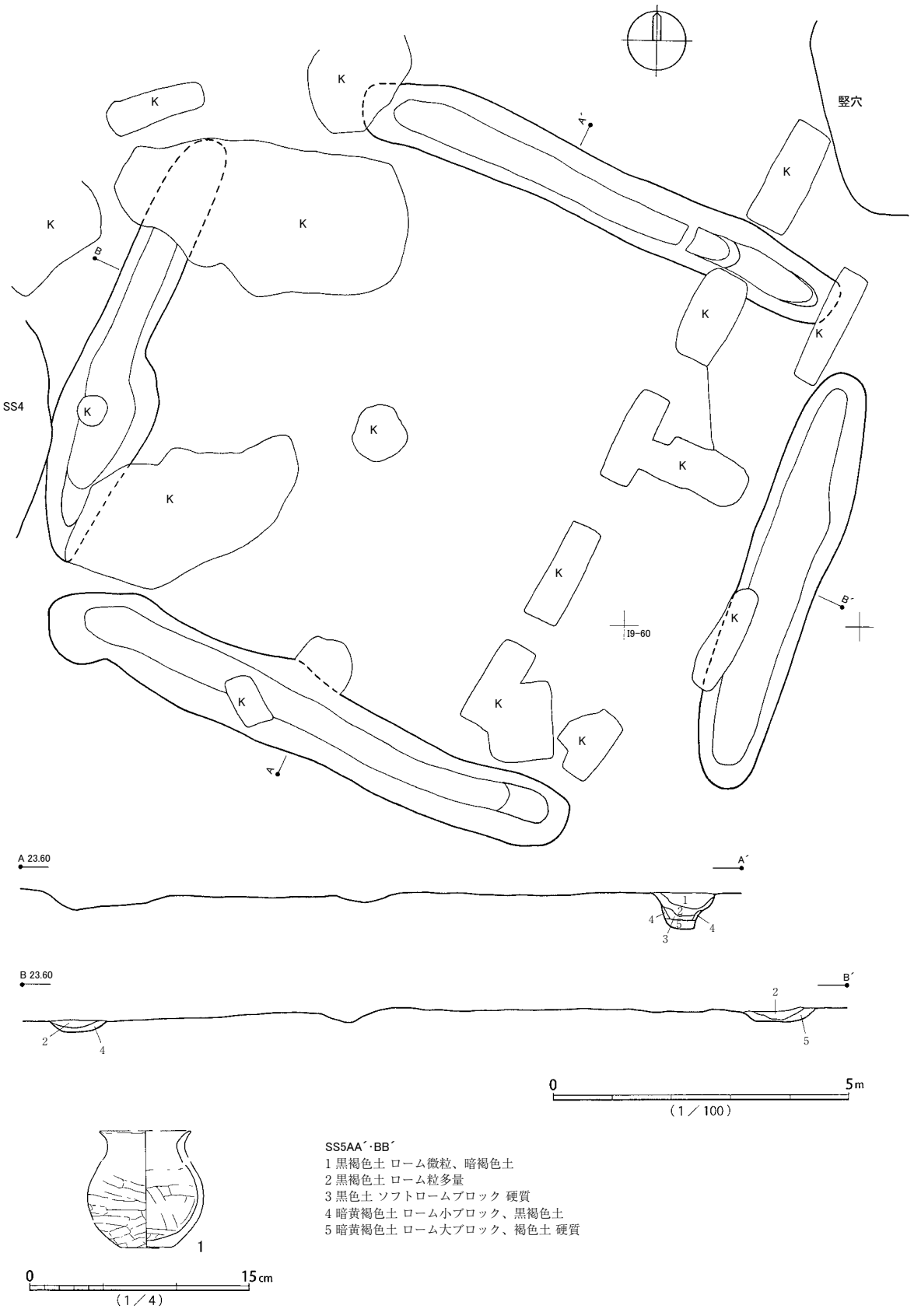


Fig.33　SS5 遺構・遺物実測図

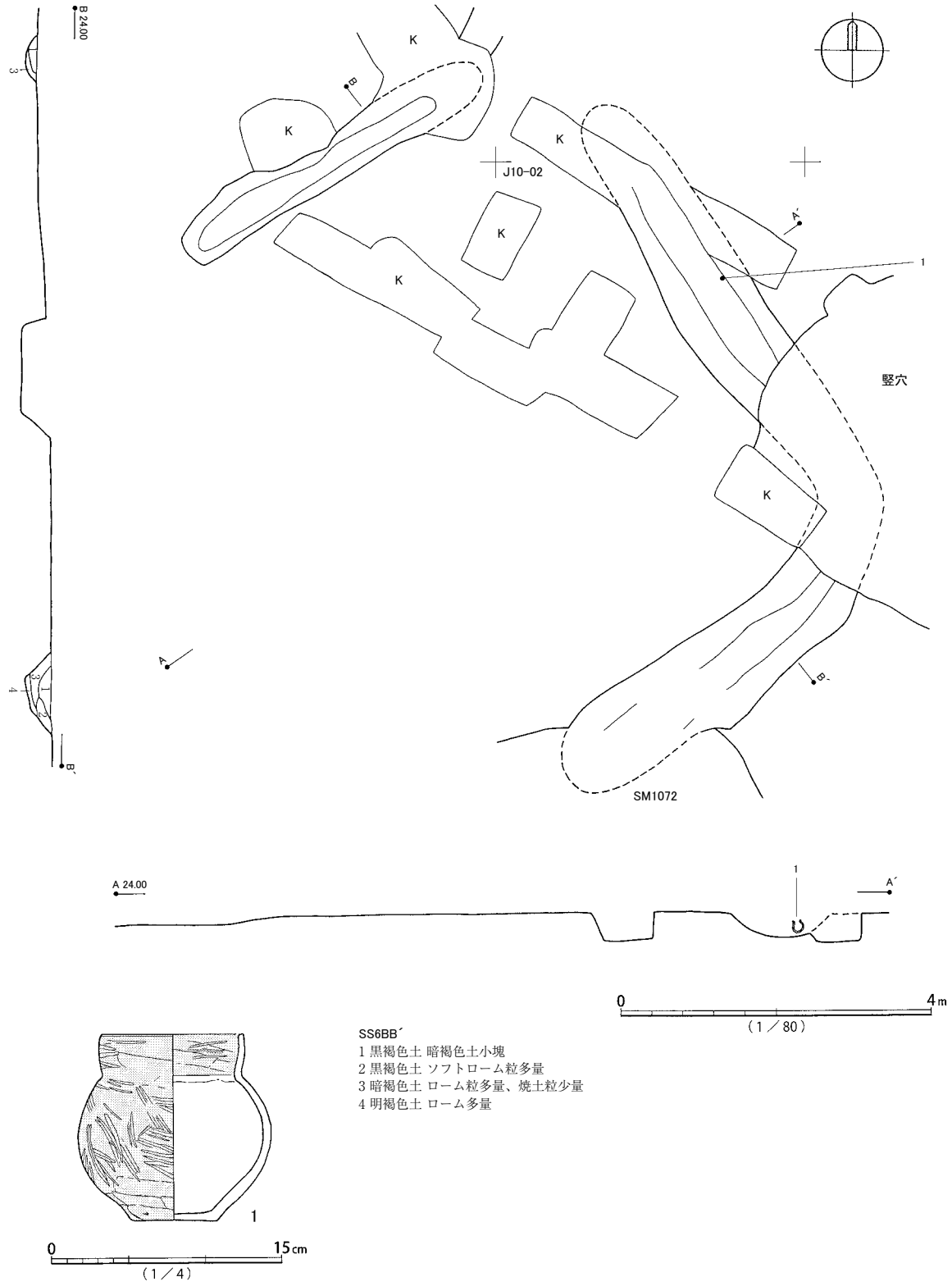


Fig.34　SS6 遺構・遺物実測図

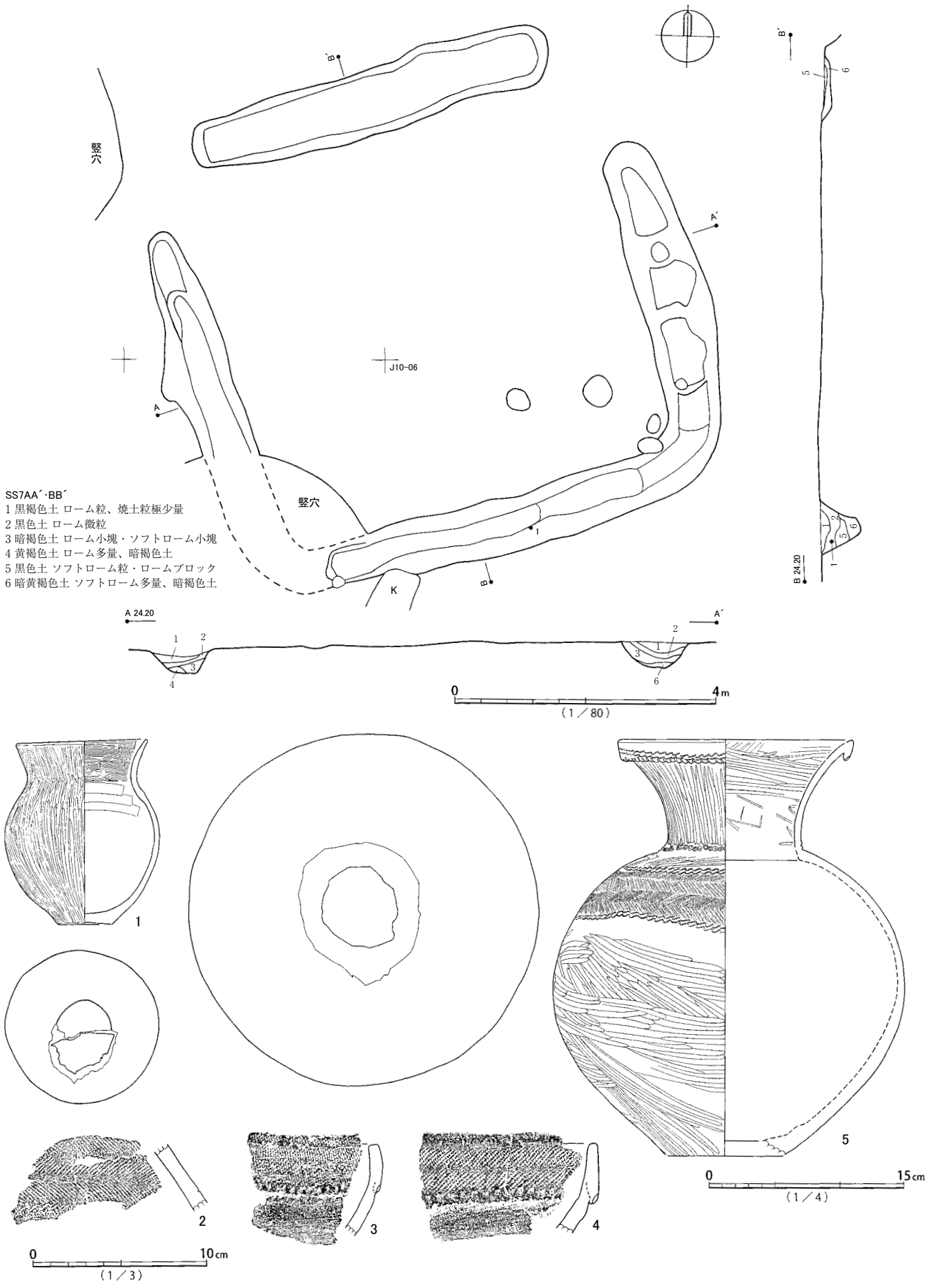


Fig.35　SS7 遺構・遺物実測図

方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、周溝内の覆土中からで、1が小型短頸壺形土器で、底部を焼成後に人為的に欠いている。2・5は壺形土器、3・4は浅鉢形土器である。

帰属時期は、中台2式期の所産と考えられる。

SS8　099地区（Fig.36～37、PL.24・153）

J9-06付近に位置する方形周溝墓である。東側にSS6が近接する。竪穴建物跡を掘り込んでいる。本遺構は、発掘調査時には099-4031と呼称されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈するが、北西隅外側でSK79を避けるように内側に屈折している。周溝は全周するが、周溝幅は均等とは言えず、特に北側周溝でその傾向が顕著である。規模は方台部が8.56m×8.48m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.22m・0.56m、0.13m、東溝が(1.68)m・0.78m、0.38m、南溝が0.96m・0.55m、0.14m、西溝が1.02m・0.66m、0.29mを測る。周溝底面は中央が窪み、平坦では無い。断面形状はレンズ状を呈し、底面から側面への変換点が不明瞭である。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-26°-Wである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、周溝覆土中の出土で、1・4は壺形土器、2は直口壺形土器、3は小型椀形土器である。

帰属時期は、中台2式期の所産と考えられる。

SS9　099地区（Fig.37、PL.24）

H10-86付近に位置する方形周溝墓である。南側で竪穴建物跡を掘り込んでいる。本遺構は、発掘調査時には099-4029と呼称されているが、2011としても調査している。また、主体部は3031である。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、方形を呈するとみられるが、周溝は東西辺のみ認められ、南北方向に区画は無い。周溝幅はほぼ均等である。規模は方台部が8.04m×計測不能、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で計測不能、東溝が0.68m・0.48m、0.11m、南溝が計測不能、西溝が0.58m・0.42m、0.11mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-73°-Eである。埋葬施設は方台部中央に1基検出し、東西方向に主軸方向を持って位置する。

主体部からは木棺痕が検出されており、規模は長軸1.60m×短軸0.68m、確認面からの深さ0.37mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-76°-Eである。

墓壙の平面形状は、長方形で、規模は2.03m×1.23m、確認面からの深さは、0.37mを測る。主軸方位は長軸方向からN-73°-Eである。底面は長方形で中央が深く、凹凸が激しい。断面形状は、短軸方向では底面の狭いU字形で、長軸方向では両端部に向け浅くなる形状を呈する。

出土遺物は無い。

帰属時期は、遺構の形状には問題が残るが、遺構配置から中台2式期を推定する。

SS10　099地区（Fig.38、PL.24）

J8-62付近に位置する方形周溝墓である。西側で国8号墳に掘削を受ける。本遺構は、発掘調査時には099-4038と呼称されている。エレベーション図は整理段階で作図している。

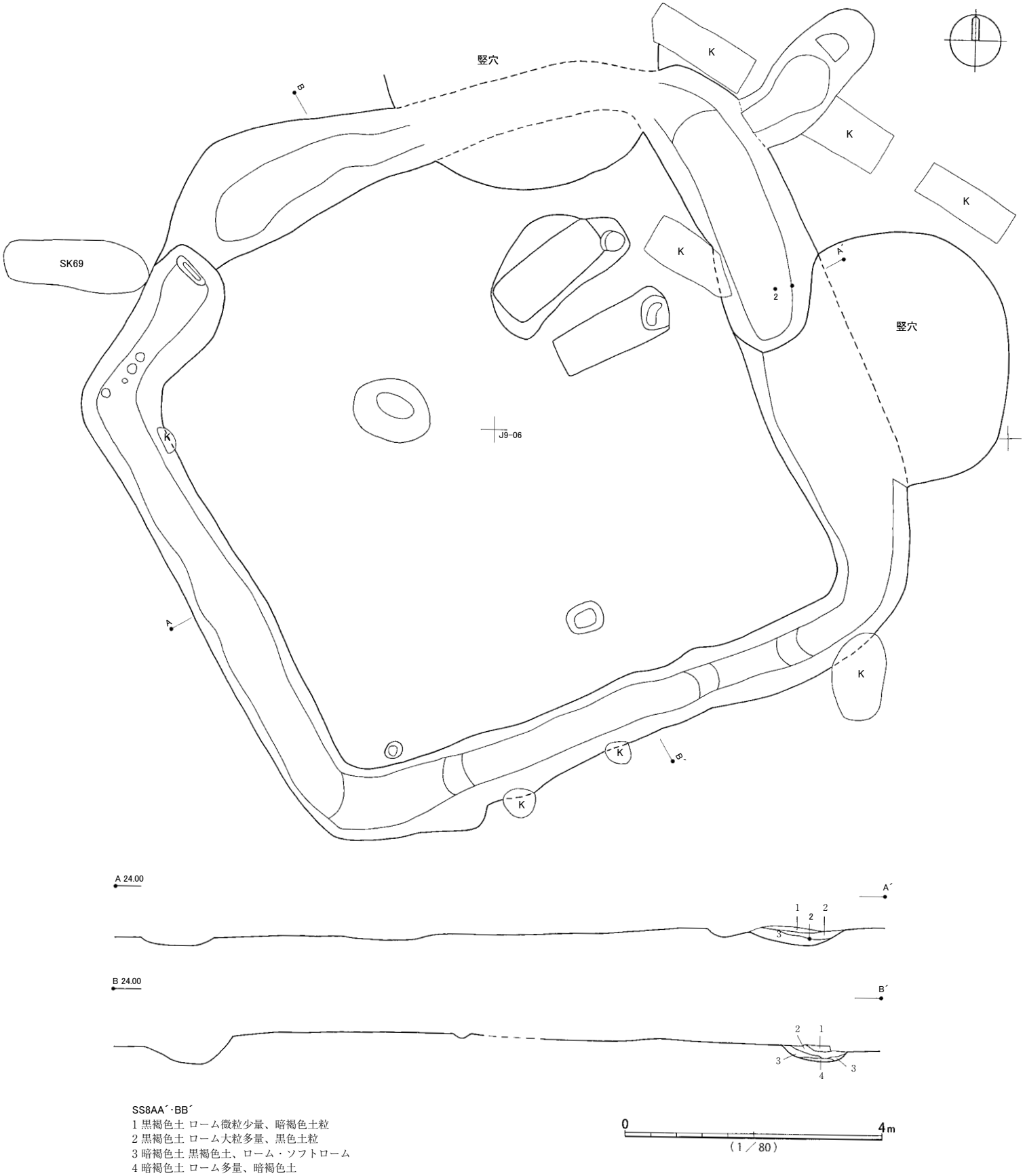
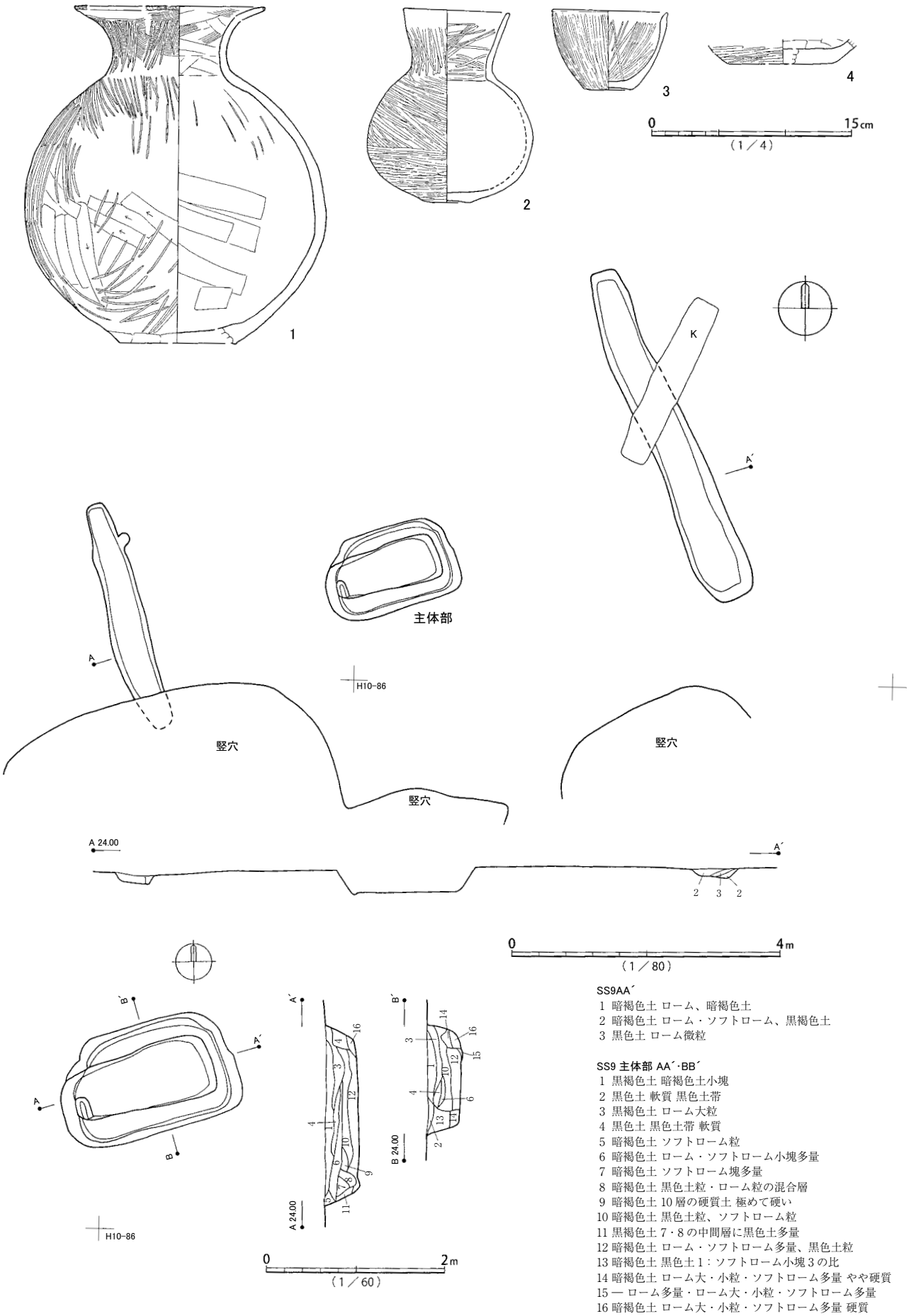


Fig.36　SS8 遺構実測図



SS9AA´
1 暗褐色土 ローム、暗褐色土
2 暗褐色土 ローム・ソフトローム、黒褐色土
3 黒色土 ローム微粒

SS9 主体部 AA´·BB´
1 黒褐色土 暗褐色土小塊
2 黒色土 軟質 黒色土帯
3 黒褐色土 ローム大粒
4 黒色土 黒色土帯 軟質
5 暗褐色土 ソフトローム粒
6 暗褐色土 ローム・ソフトローム小塊多量
7 暗褐色土 ソフトローム塊多量
8 暗褐色土 黒色土粒・ローム粒の混合層
9 暗褐色土 10 層の硬質土 極めて硬い
10 暗褐色土 黒色土粒、ソフトローム粒
11 黒褐色土 7・8 の中間層に黒色土多量
12 暗褐色土 ローム・ソフトローム多量、黒色土粒
13 暗褐色土 黒色土 1：ソフトローム小塊 3 の比
14 暗褐色土 ローム大・小粒・ソフトローム多量 やや硬質
15 ― ローム多量・ローム大・小粒・ソフトローム多量
16 暗褐色土 ローム大・小粒・ソフトローム多量 硬質

Fig.37　SS8 遺物、SS9 遺構実測図

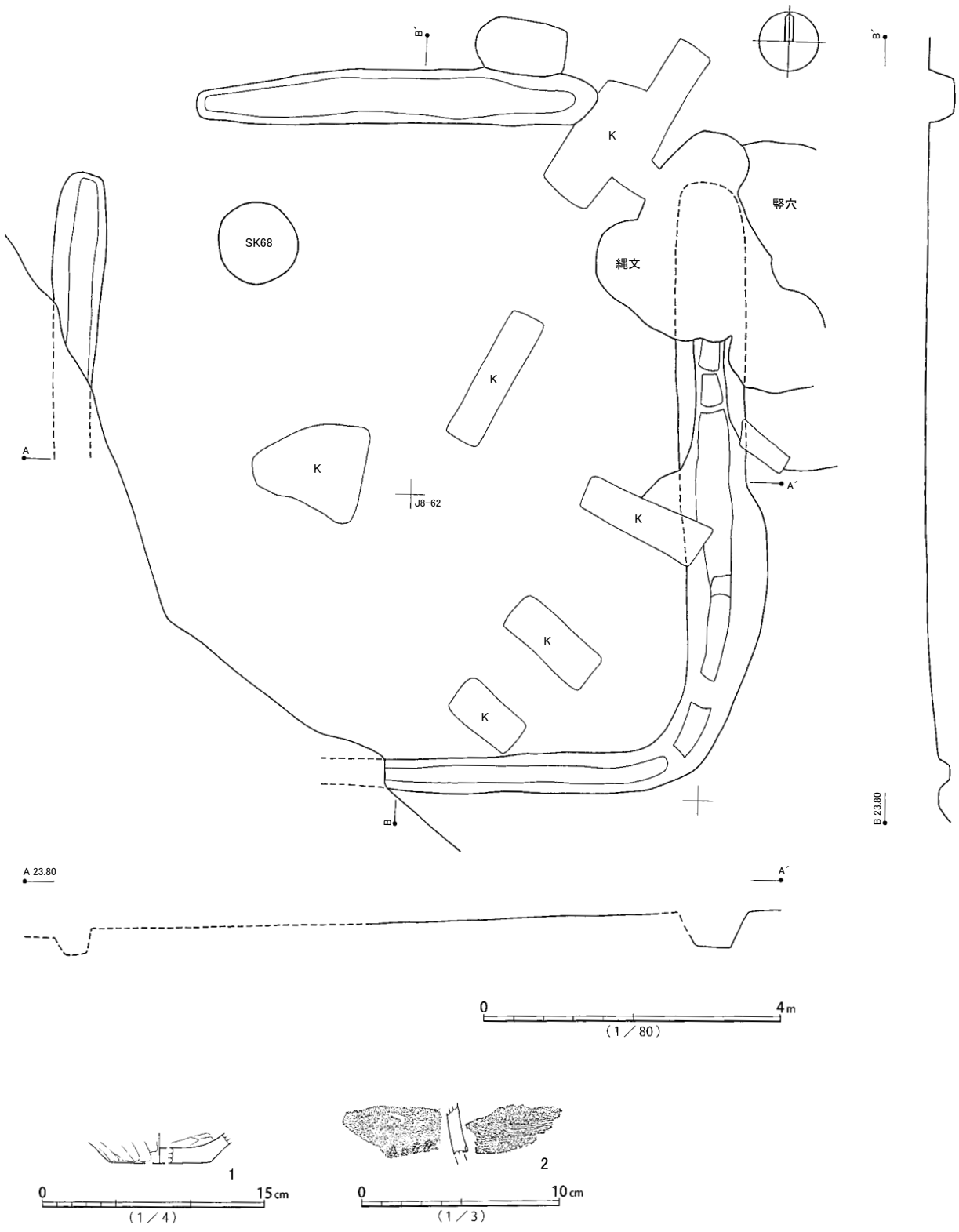


Fig.38　SS10 遺構・遺物実測図

平面形状は方形を呈し、周溝は北辺両端で断絶する。周溝幅は各辺で差異が認められるが、概ね均等に方台部をめぐる。規模は方台部が8.56m×計測不能、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.74m・0.48m、0.33m、東溝が0.90m・0.42m、0.53m、南溝が(0.40)m・0.16m、0.15m、西溝が0.64m・0.30m、0.11mを測る。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-1.5°-Wである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、周溝覆土から出土している。1は壺形土器底部、2は甕形土器である。

帰属時期は、根拠となる遺物が無いため、遺構の形状と配置から中台2式期を推定する。

SS11　099地区　(Fig.39～40、PL.24～25・180)

K8-86付近に位置する方形周溝墓である。北側でSM1068に、南側でSM1026に掘削を受ける。本遺構は、発掘調査時には099-4036と呼称されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状はほぼ正方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅は中央が広く、僅かに両端部に向け幅を狭める。また、周溝上端形状は、方台部側が直線的であるのに対し、外側は僅かに弧を描く。規模は方台部が7.46m×7.44m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.84m・0.44m、0.39m、東溝が0.94m・0.46m、0.29m、南溝が1.16m・0.60m、0.41m、西溝が上端で(0.88)mを測る。周溝底面は平坦部が少なく、断面形状は逆台形に近い。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-50°-Wである。埋葬施設は方台部中央に主体部1基を検出し、主軸を東西方向に持って位置する。このため、主軸は、方台部の東西隅の対角線上にほぼ重なる。

主体部からは木棺痕が検出されており、規模は長軸2.40m×短軸0.80m、確認面からの深さは、0.54mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-85°-Wである。

墓壙の平面形状は、長方形で、規模は2.95m×1.56m、確認面からの深さは、0.54mを測る。主軸方位は長軸方向からN-85°-Wである。底面は長方形で平坦である。断面形状は、短軸方向では逆台形を呈する。

出土遺物は、周溝覆土中から出土している。1～4・7は壺形土器、5・6・8～10は甕形土器である。

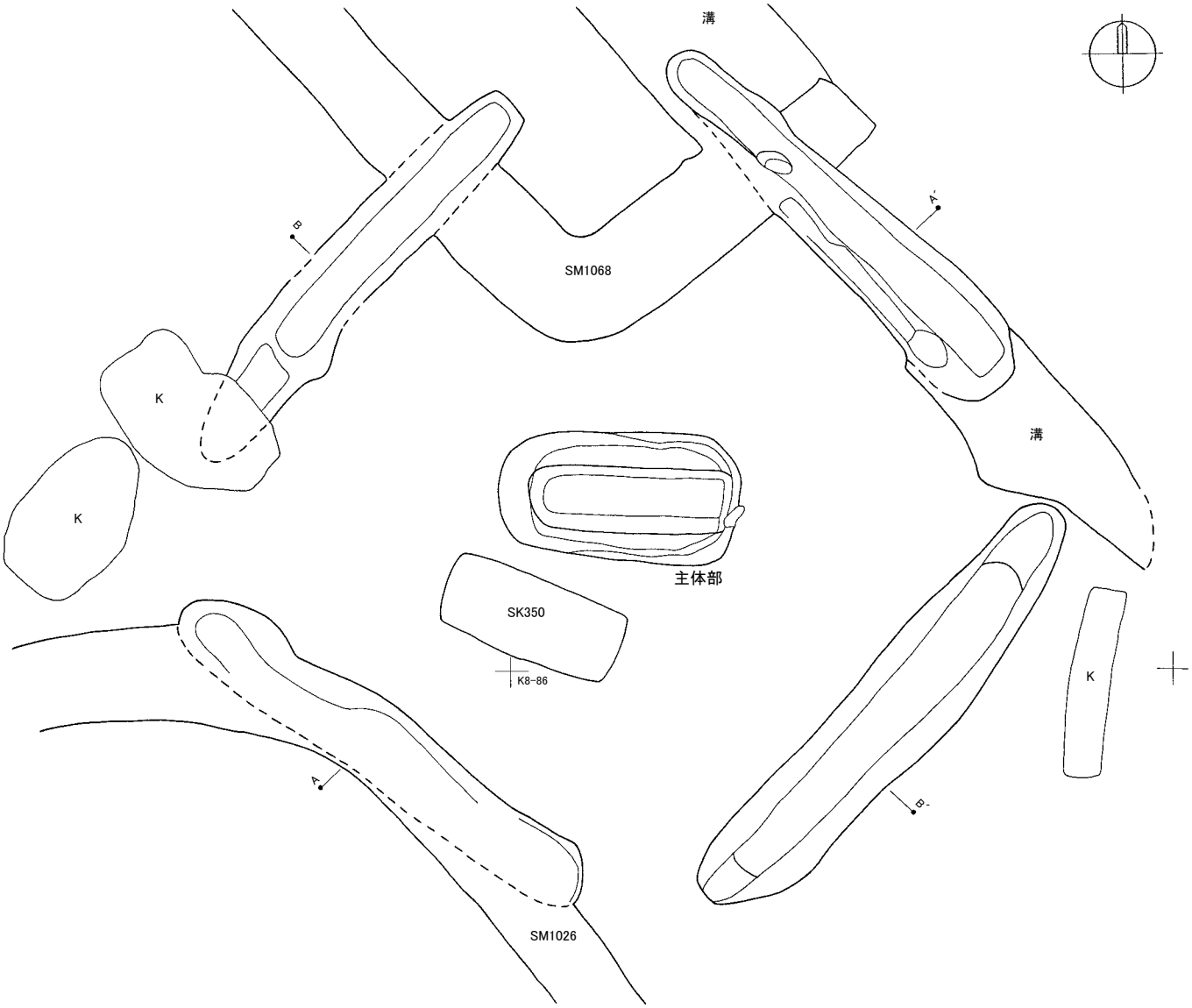
帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

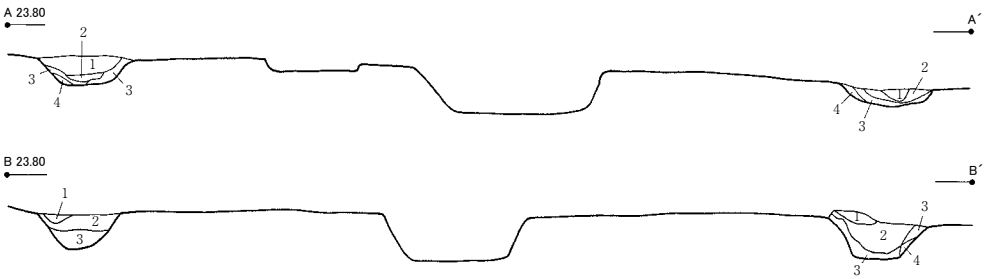
SS12　099地区　(Fig.41～44、PL.25・153～154・180)

K15-40付近に位置する方墳である。西側にSM1036が近接し、南側でSM1009に掘削される。本遺構は、発掘調査時には099-4021と呼称されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状はほぼ正方形を呈し、周溝は全周する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が11.84m×10.04m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で(2.00)m・0.78m、1.00m、東溝が1.95m・0.91m、0.89m、南溝が1.60m・0.75m、0.85m、西溝が1.50m・0.27m、0.95mを測る。周溝底面は平坦部分が少なく、断面形状は逆台形に近い。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-64°-Eである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。



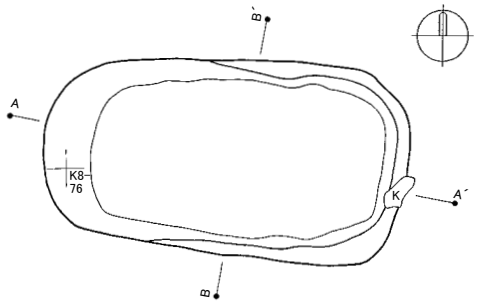


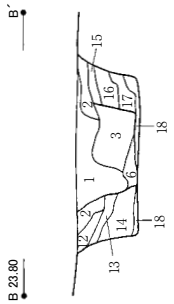
0 4m
(1／80)

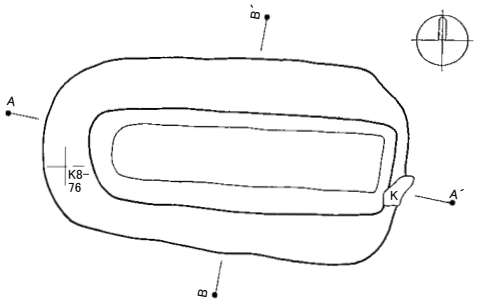
SS11AA´
1 黒色土 褐色土粒
2 黒色土 褐色土粒、ローム微粒
3 黒褐色土 ソフトローム多量
4 暗褐色土 ローム、黒褐色土

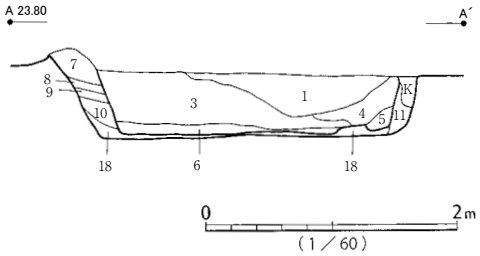
SS11BB´
1 黒色土 ローム微粒
2 暗褐色土・褐色土・黒色土の混合 軟質
3 黒褐色土 褐色土粒、ローム大粒
4 暗褐色土 ローム、黒褐色土

Fig.39　SS11 遺構 (1) 実測図

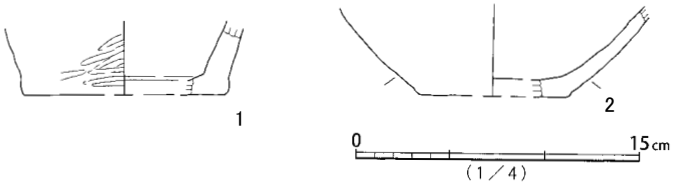








SS11 主体部 AA´·BB´
1 暗褐色土 ローム大粒、黒色土粒、ソフトローム 軟質
2 黒褐色土 ロームブロック少量
3 暗褐色土 ローム粒少量 軟質
4 黒褐色土 ソフトローム、褐色土塊
5 黒色土
6 黒褐色土 暗褐色土塊多量、ローム小ブロック少量
7 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
8 黒色土 ローム微粒
9 暗褐色土 ローム粒・ローム大ブロック多量
10 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土粒
11 黒色土 ローム粒
12 黄褐色土 ローム
13 暗褐色土 ローム粒・ローム小ブロック
14 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック
15 黒色土
16 黒色土 ローム微粒
17 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック
18 黒色土 ローム小ブロック



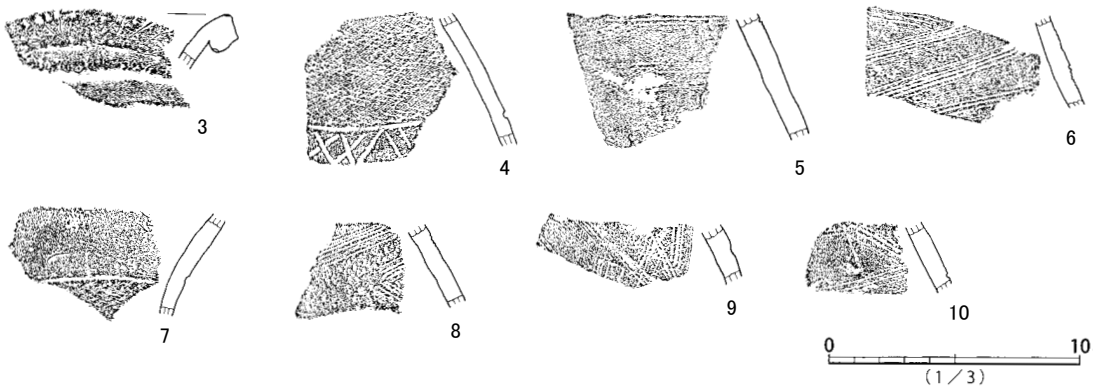


Fig.40　SS11 遺構 (2)・遺物実測図

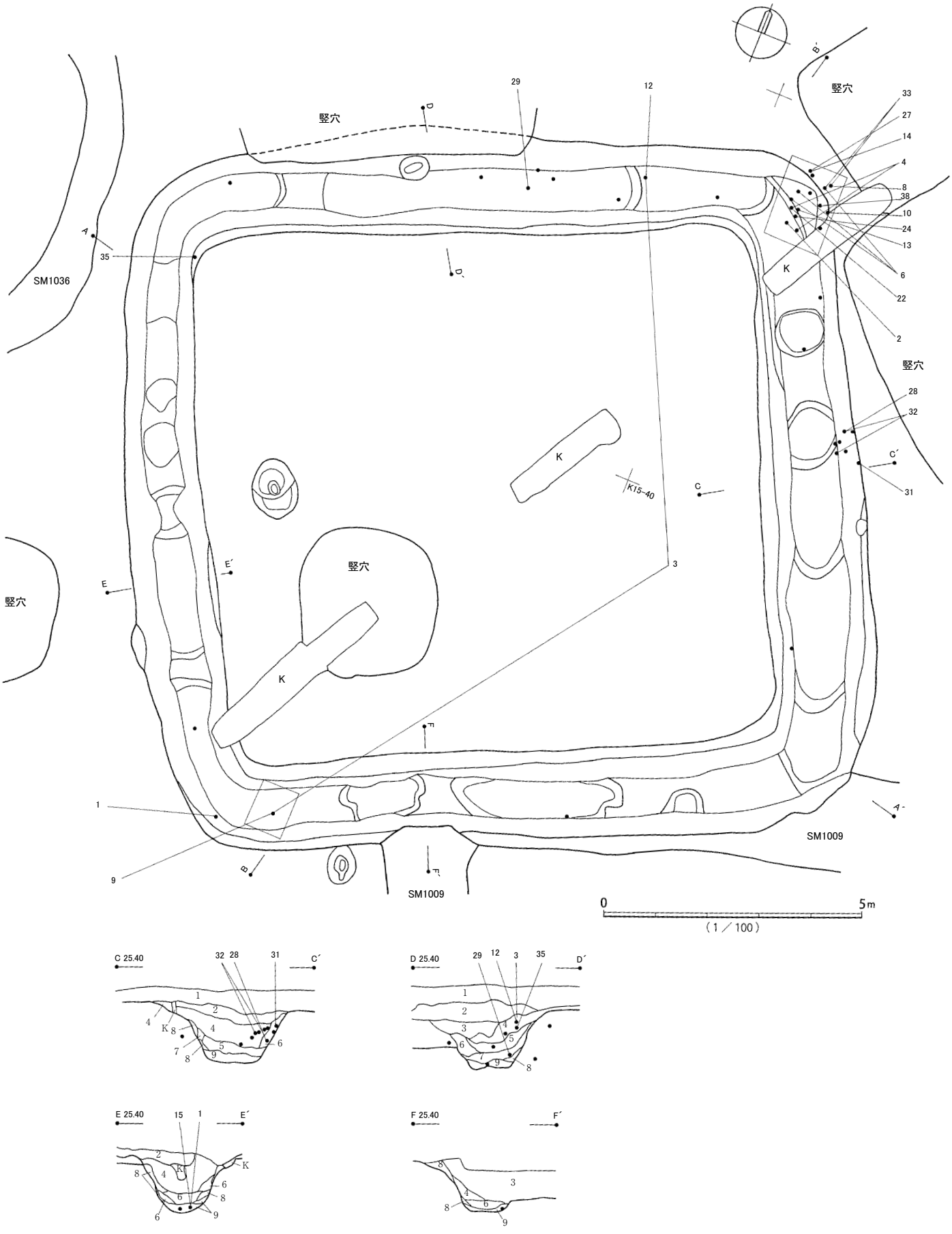


Fig.41　SS12 遺構 (1) 実測図

遺物は、北東隅に集中し、北辺中央、南西隅からも出土している。何れも出土層位が覆土中位で共通する。1～4・8・12･14・15～17・27甕形土器、5・6・13・18・19・24小形短頸壺形土器、7・10・20～23・26・28～30壺形土器、9短頸壺形土器、11広口壺形土器、25・42～44小形壺形土器、31台付甕形土器、32～34高杯形土器、35～39器台形土器、40・41手捏土器である。

帰属時期は、中台2式期の所産と考えられる。

SS13　099地区　（Fig.45～46、PL.25･154～155･180）

L18-40付近に位置する方形周溝墓である。西側にSM1130が位置するが、遺構密度の低い地点に占地する。本遺構は、発掘調査時には099-4086と呼称されている。

平面形状は方形を呈し、周溝は北側周溝両端で断絶する。周溝が「コ」の字形を呈する部分の隅は角張らず変換点を明瞭にせずにめぐっている。周溝幅はほぼ均等。規模は方台部が7.80m×6.64m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.78m・0.50m、0.16m、東溝が1.08m・0.50m、0.24m、南溝が1.04m・0.68m、0.23m、西溝が1.00m・0.60m、0.27mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形とレンズ状の中間的な形状を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-12°-Eである。埋葬施設は方台部中央内に1基検出し、主軸を東西方向に位置する。

主体部からは木棺痕が検出されており、規模は長軸2.05m×短軸0.65m、確認面からの深さ0.30mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-90°である。

墓壙の平面形状は、長方形で、規模は2.60m×1.85m、確認面からの深さは、0.33mを測る。主軸方位は長軸方向からN-90°である。底面は長方形で中央が深く、凹凸が激しい。断面形状は、短軸方向では底面の狭いU字形で、長軸方向では両端部に向け浅くなる形状を呈する。

遺物は、覆土中の出土で、1は壺形土器で焼成後底部を打ち欠いて穿孔している。2は甕形土器、3は小形壺形土器である。

帰属時期は、山田橋1式期の所産と考えられる。

SS14　099地区（Fig.47、PL.25）

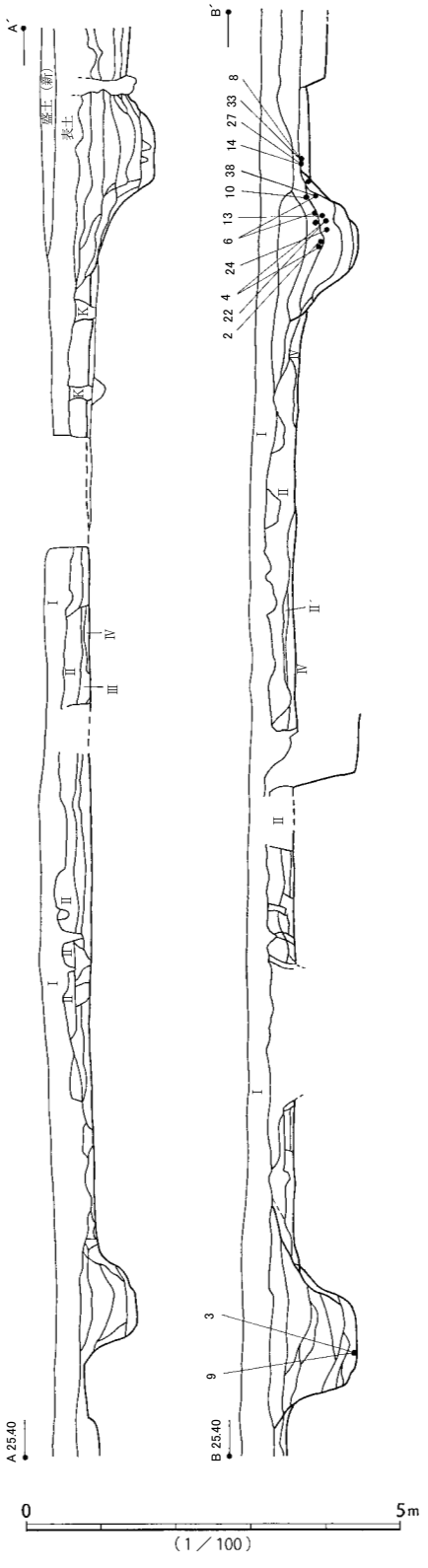
M19-84付近に位置する方形周溝墓である。東側にSS15が近接し、面する周溝は平行である。本遺構は、発掘調査時には099-4088と呼称されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、方形を呈すると見られ、周溝は西側の区画を欠き、他3辺は隅で断絶する。周溝幅は狭く均等である。規模は方台部が9.96m×計測不能、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.46m・0.32m、0.12m、東溝が0.44m・0.32m、0.09m、南溝が0.64m・0.44m、0.19mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈するが極めて浅い。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-29°-Wである。埋葬施設は南北軸でほぼ中央、東西軸ではやや東寄りの方台部内に1基検出されている。埋蔵施設の主軸は東西方向より、周溝に対する角度を優先している。

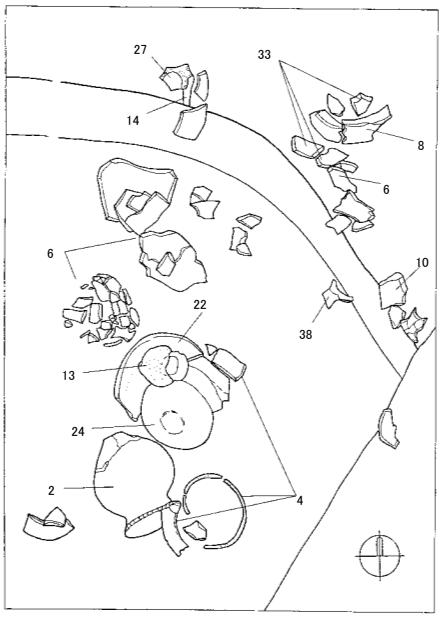
主体部からは木棺痕が検出されており、規模は長軸2.25m×短軸0.75m、確認面からの深さ0.10mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-79°-Eである。

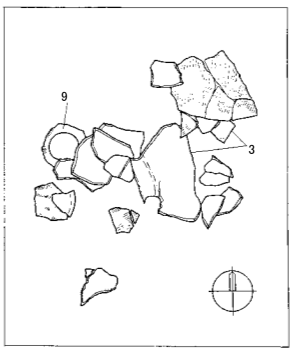
墓壙の平面形状は、長方形で、規模は2.55m×1.55m、確認面からの深さは0.15mを測る。主軸方



SS12CC´·DD´·EE´·FF´
1 ― 表土
2 黒色土 ローム粒若干、黒色土塊ブロック状
3 黒褐色土 ローム粒 やや硬質
4 黒褐色土 ローム粒多量
5 黒褐色土
6 暗褐色土
7 暗褐色土 ローム粒多量
8 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
9 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック

SS12AA´·BB´
Ⅰ ―
Ⅱ 暗黒褐色土 黒色土
Ⅱ´―
Ⅲ ―
Ⅳ 暗茶褐色土





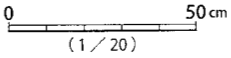


Fig.42　SS12 遺構 (2)・遺物出土詳細実測図

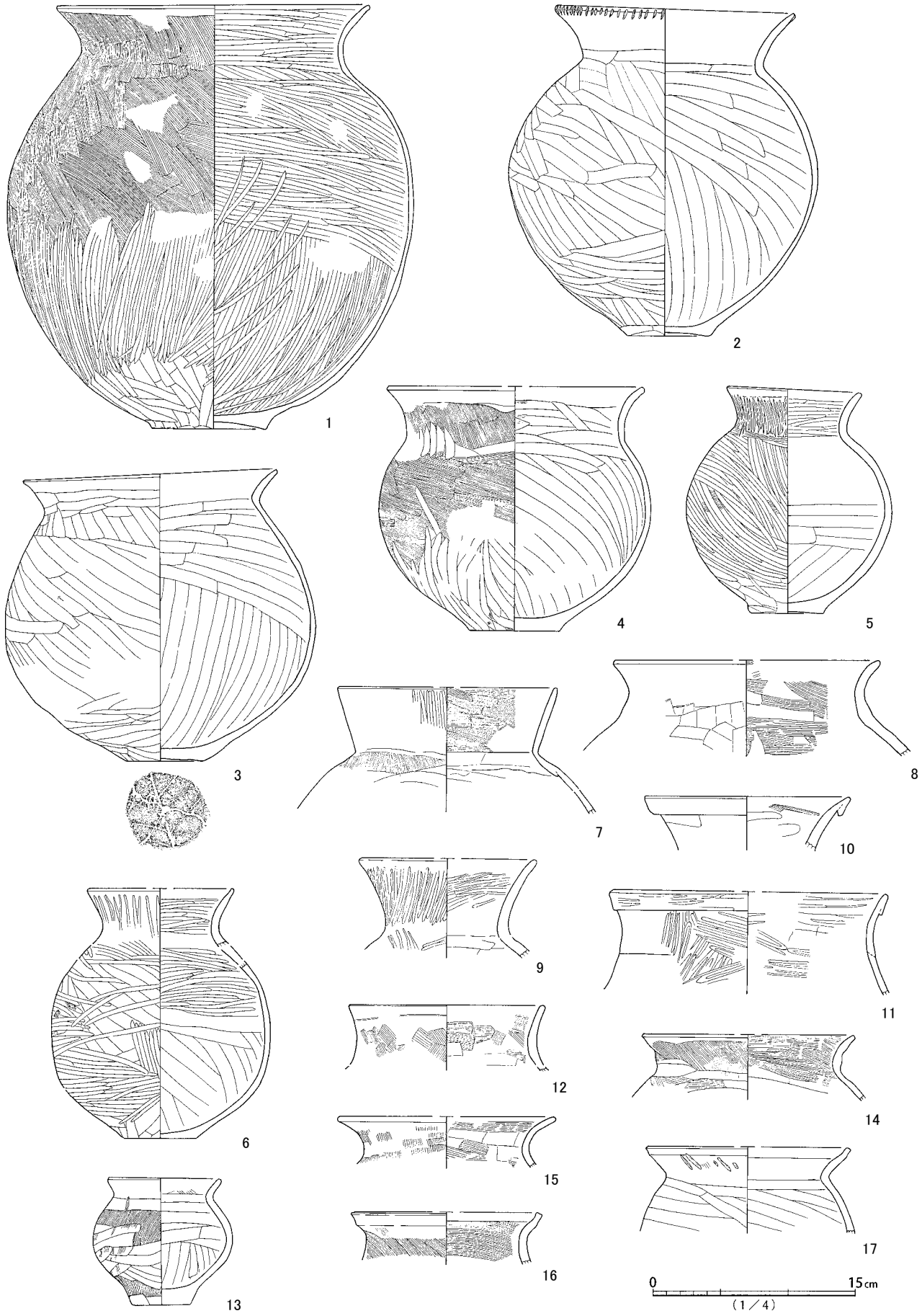


Fig.43　SS12 遺物 (1) 実測図

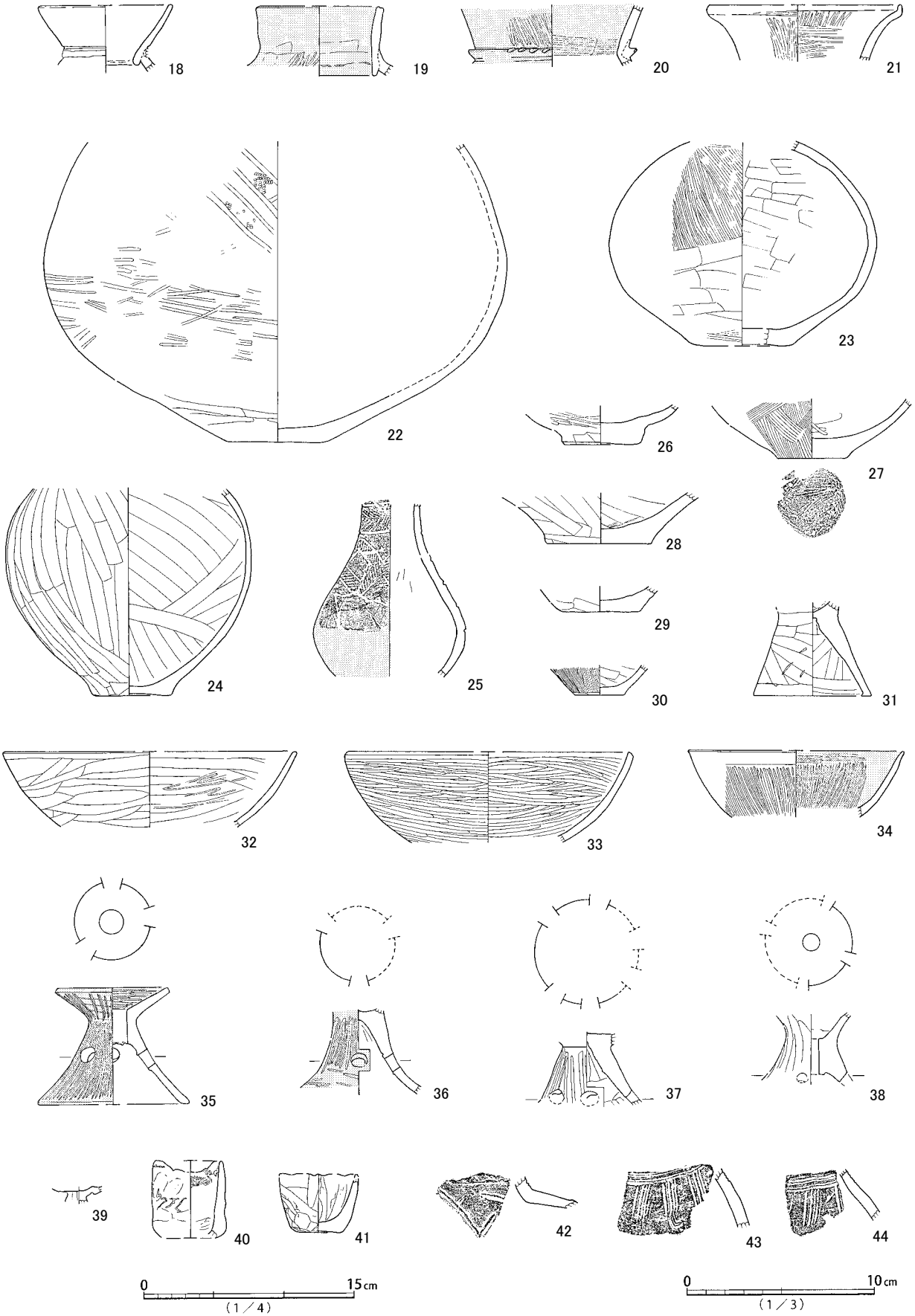


Fig.44　SS12 遺物 (2) 実測図

位は長軸方向からN-78°-Eである。底面は長方形で平坦である。断面形状は、短軸方向では逆台形を呈する。

出土遺物は無い。

帰属時期は、近接するSS15と遺構規模、形状の類似性から、山田橋1式期の所産と考えられる。

SS15　099地区（Fig.48～49、PL.25～26・155・180）

M19-68付近に位置する方形周溝墓である。西側にSS14が近接し、面した周溝は平行している。本遺構は、発掘調査時には099-4089と呼称されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈し、周溝は3方向の隅で断絶するが、周溝が極めて浅い検出状況であるため、本来の形状を示していない可能性が高い。全周していた可能性も否めない。周溝幅は狭く、ほぼ均等に方台部をめぐる。隅は明瞭に屈折している。規模は方台部が5.03m×4.90m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.56m・0.32m、0.25m、東溝が0.48m・(0.38)m、0.07m、南溝が0.78m・0.59m、0.13m、西溝が0.60m・0.40m、0.16mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈するが、極めて浅い。墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-27.5°-Wである。

埋葬施設は4基検出しており、この内3基が南北軸方向に並立し、主軸を東西方向としているのに対し、1基は南西隅に3基とは直交する方向に造られている。

主体部Aからは木棺痕が検出されており、規模は長軸2.08m×短軸0.56m、確認面からの深さ0.18mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-72°-Eである。

墓壙の平面形状は、長方形で、規模は2.46m×1.23m、確認面からの深さは、0.21mを測る。主軸方位は長軸方向からN-72°-Eである。底面は長楕円形で平坦である。断面形状は、短軸方向では逆台形で、長軸方向では両端部に向け浅くなる形状を呈する。

主体部Bからは木棺痕が検出されており、規模は長軸1.98m×短軸0.58m、確認面からの深さ0.12mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-81°-Eである。

墓壙の平面形状は、長方形で、規模は2.35m×1.45m、確認面からの深さは、0.12mを測る。主軸方位は長軸方向からN-81°-Eである。底面は楕円形で平坦である。断面形状は、短軸方向、長軸方向共に逆台形を呈する。

主体部Cからは木棺痕が検出されており、規模は長軸2.25m×短軸0.65m、確認面からの深さ0.27mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-69°-Eである。

墓壙の平面形状は、長方形で、規模は2.85m×1.53m、確認面からの深さは、0.27mを測る。主軸方位は長軸方向からN-71°-Eである。底面は楕円形で平坦である。断面形状は、短軸方向、長軸方向共に逆台形を呈する。

主体部Dは平面形状が長方形で、規模は2.45m×1.21m、確認面からの深さは0.15mを測る。主軸方位は長軸方向からN-24°-Wである。底面は不整楕円形で、凹凸が激しい。断面形状は、短軸方向では幅広のU字形で、長軸方向では両端部に向け浅くなる形状を呈する。木棺痕は検出していない。

主体部の先後関係は判然としないが、位置関係のみで考えれば、主体部Bが先行し、以降A、C何れかが続き、最終的にDとなるが、推定の域を出ない。

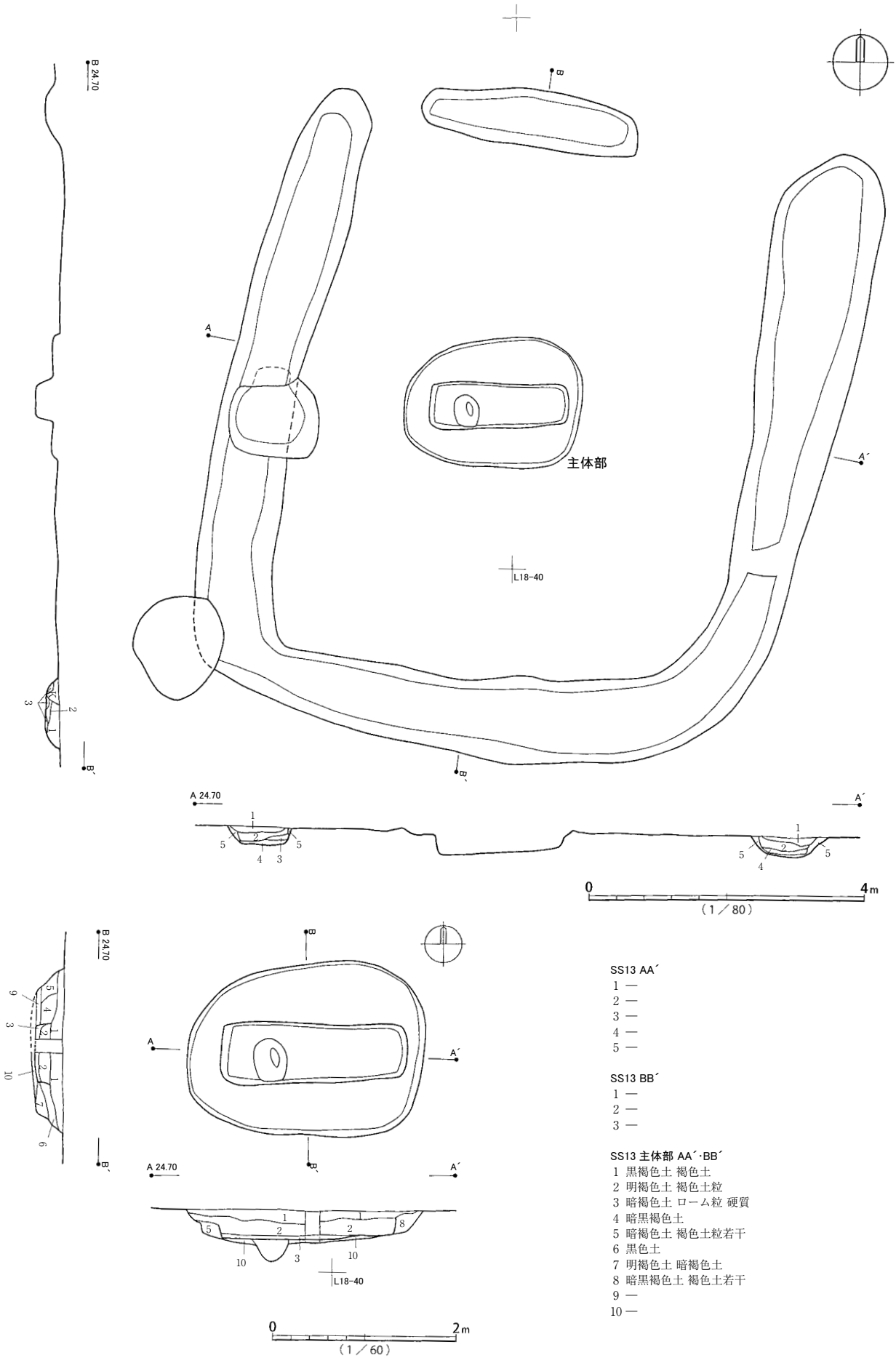


Fig.45　SS13 遺構実測図

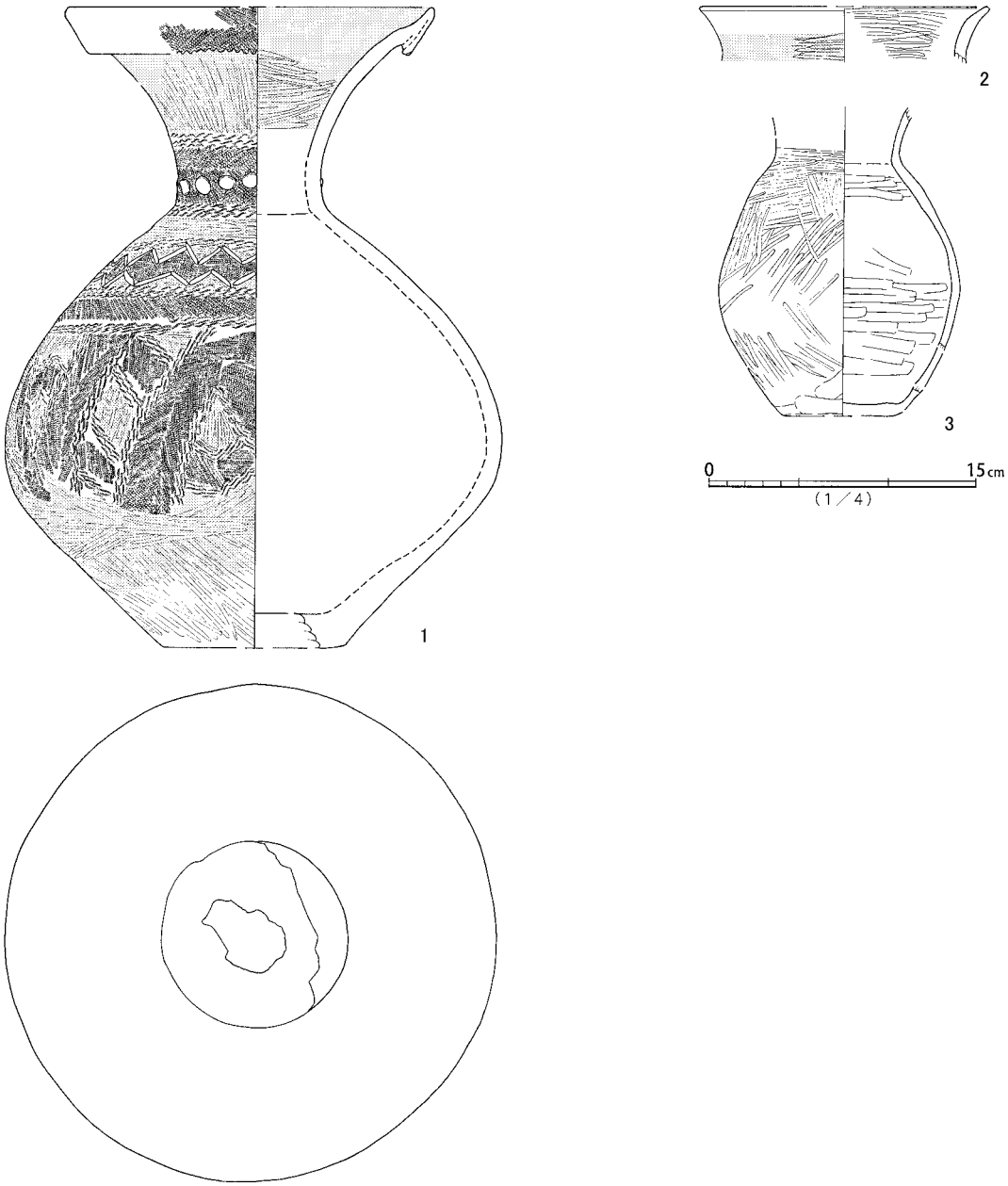


Fig.46　SS13 遺物実測図

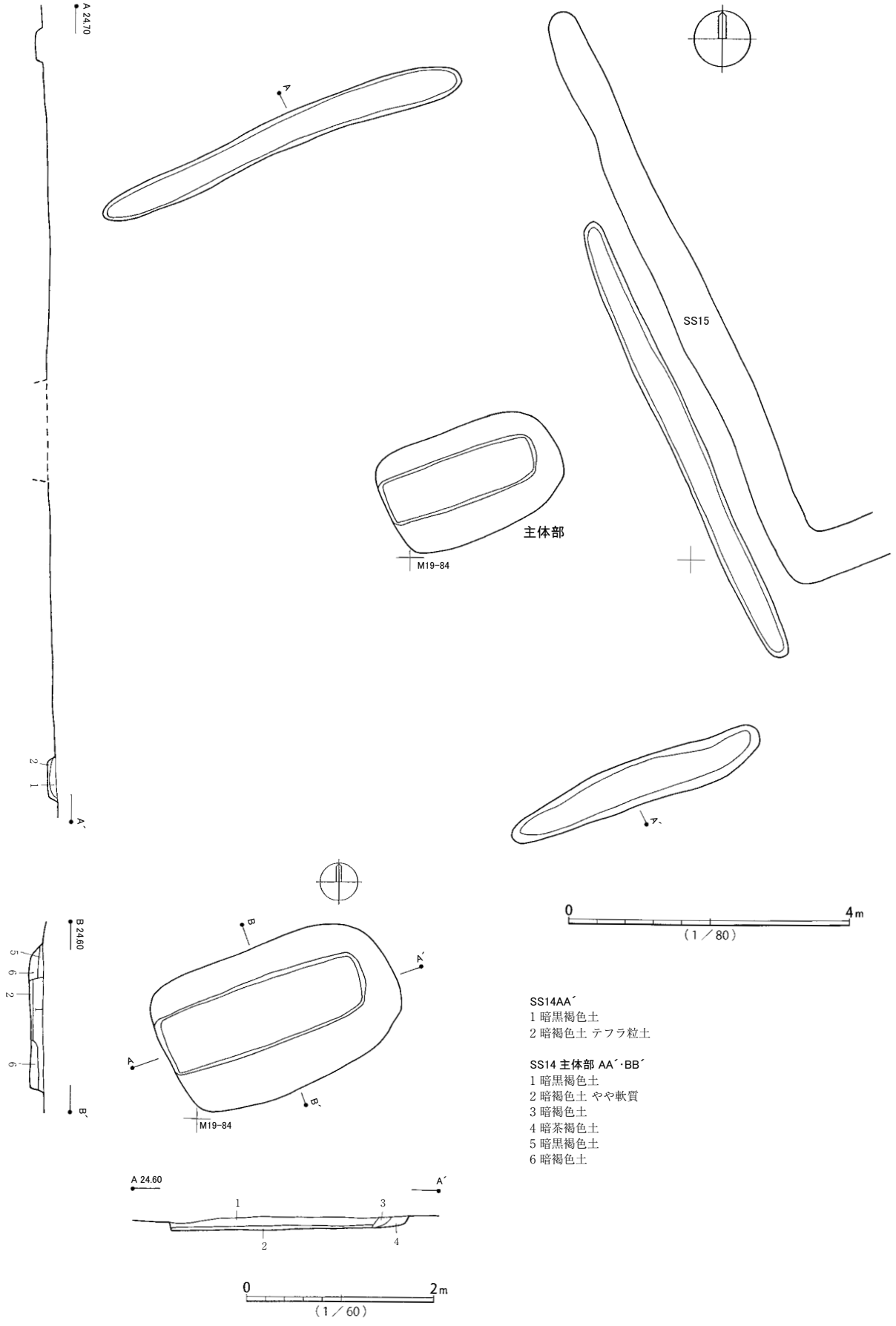


Fig.47　SS14 遺構実測図

出土遺物は1・2が甕形土器で、2は底部を焼成後、打ち欠いて穿孔している。

帰属時期は、山田橋1式期の所産と考えられる。

SS16　099地区　（Fig.50、PL.26）

O18-08付近に位置する方形周溝墓である。SS17の方台部内に位置し、周溝の一部を共有する。西側でSM1069に掘削される。SS17埋葬施設の位置や主軸方向から、SS17に対し本遺構が古いと判断した。本遺構は、発掘調査時には099-4091と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈し、周溝は、遺構の重複により西側を欠くが、全周するとみられる。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が(6.92)m×6.40m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.76m・0.34m、0.16m、東溝が0.62m・0.40m、0.14m、南溝が0.72m・0.38m、0.24mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形よりもレンズ状に近い形状を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-66°-Wである。

埋葬施設は2基検出している。1基は方台部中央に周溝を意識した主軸方位で位置する。別の1基は北側周溝の北東隅に近い位置に、周溝を意識して造られている。

主体部Aの平面形状は長方形で、規模は1.87m×0.79mを測る。主軸方位は長軸方向からN-68°-Wである。底面は不整長方形を呈する。

主体部Bの平面形状は長方形で、規模は2.63m×0.96mを測る。主軸方位は長軸方向からN-64°-Wである。底面は長楕円形を呈する。

主体部Bの位置は、SS17北側周溝のほぼ中央にあたるため、SS17に帰属する可能性も考えられるが、ここでは現場の判断を優先する。

出土遺物は無い。

帰属時期は、山田橋1式期の所産と考えられる。

SS17　099地区（Fig.51～52、PL.26）

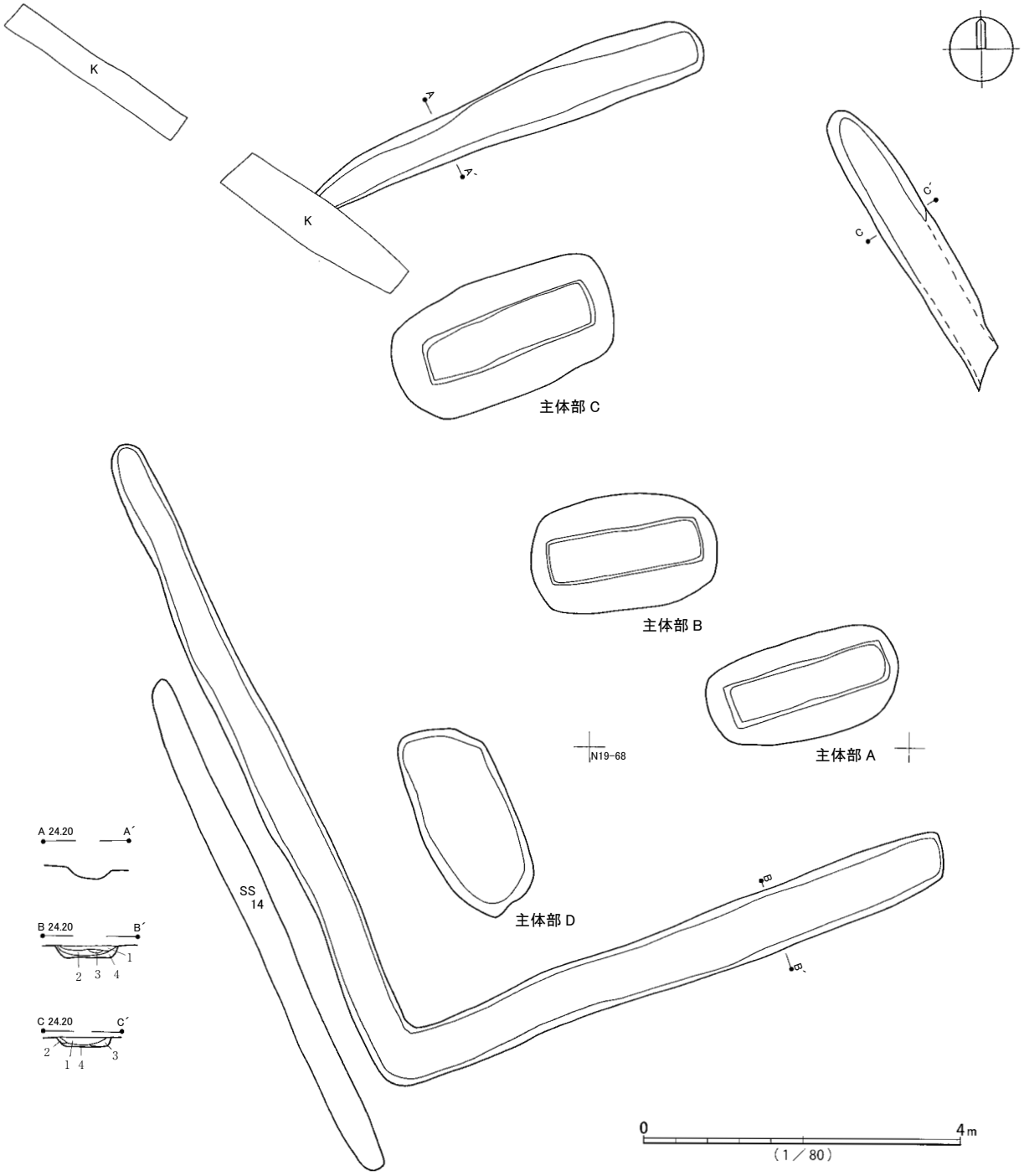
O19-40付近に位置する方形周溝墓である。SS16が方台部内に位置する。北側でSM1077、南側でSM1168、西側でSM1069に掘削される。本遺構の埋葬施設の位置や主軸方向から、SS16に対し本遺構が新しいと判断した。

本遺構は、発掘調査時には099-4092と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈し、周溝は北側周溝の遺存状態が悪いため断定できないが、南西隅では断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が(12.20)m×11.10m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.80m・0.38m、0.17m、東溝が1.23m・0.70m、0.43m、南溝が1.25m・0.65m、0.50m、西溝が1.16m・0.70m、0.52mを測る。周溝底面は平坦部位が多く、断面形状は逆台形に近い形状を呈するが、西溝は異なる。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-25°-Eである。

埋葬施設は方台部内に1基検出しているが、その位置関係に特徴が認められる。方台部中央に至るSS16を避けて南側に寄せ、主軸方向は南側周溝を意識して造られている。このことから、埋葬施設がSS16に対し後出であるといえる。



SS15BB´
1 暗黒褐色土
2 黒褐色土 テフラ粒土若干
3 暗黒茶褐色土 テフラブロック
4 暗褐色土 テフラ粒土

SS15CC´
1 暗黒褐色土
2 ―
3 暗褐色土 テフラ粒土若干
4 暗褐色土 テフラ粒土

SS15 主体部 A AA´·BB´
1 暗黒褐色土
2 暗褐色土 硬質
3 ―
4 暗茶褐色土
5 暗褐色土
6 黒色土
7 黒色土
8 暗褐色土
9 黒色土
10 黒色土 硬質
11 暗褐色土

SS15 主体部 B AA´·BB´
1 黒褐色土
2 暗褐色土 硬質
3 暗褐色土
4 暗褐色土
5 褐色土
6 暗茶褐色土
7 ―
8 暗褐色土
9 暗茶褐色土
10 暗褐色土
11 暗黒褐色土 褐色土粒
12 ―

SS15 主体部 C AA´·BB´
1 暗黒褐色土
2 暗褐色土 明褐色土
3 暗褐色土 硬質
4 ―
5 暗黒褐色土
6 明褐色土
7 暗褐色土
8 暗黒褐色土
9 暗褐色土
10 黒色土
11 暗褐色土
12 黒色土
13 暗褐色土

SS15 主体部 D AA´·BB´
1 黒褐色土
2 暗褐色土 硬質
3 暗茶褐色土
4 暗黒褐色土
5 黒褐色土
6 暗褐色土
7 ―
8 黒褐色土
9 暗黒褐色土
10 暗褐色土

Fig.48　SS15 遺構 (1) 実測図

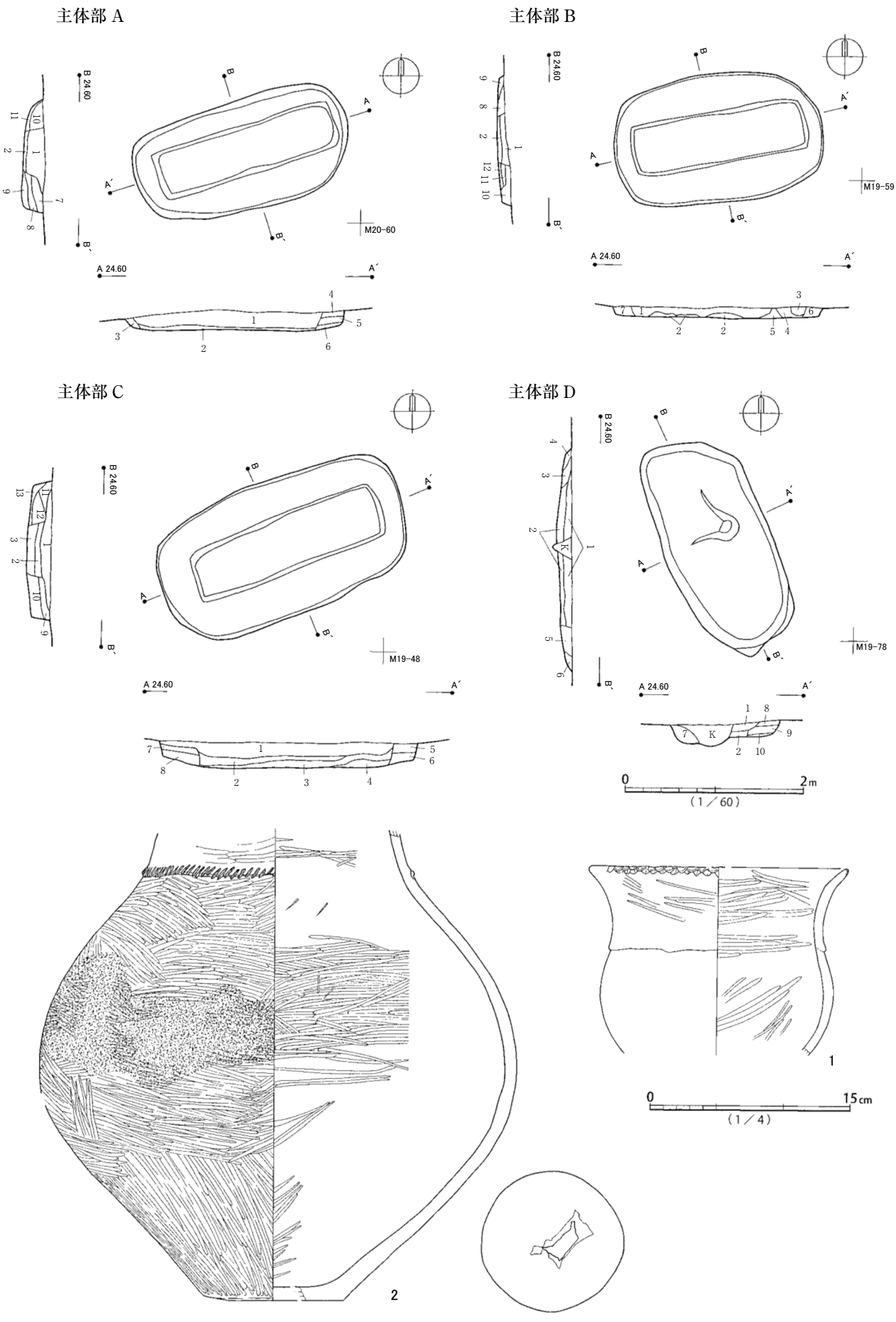
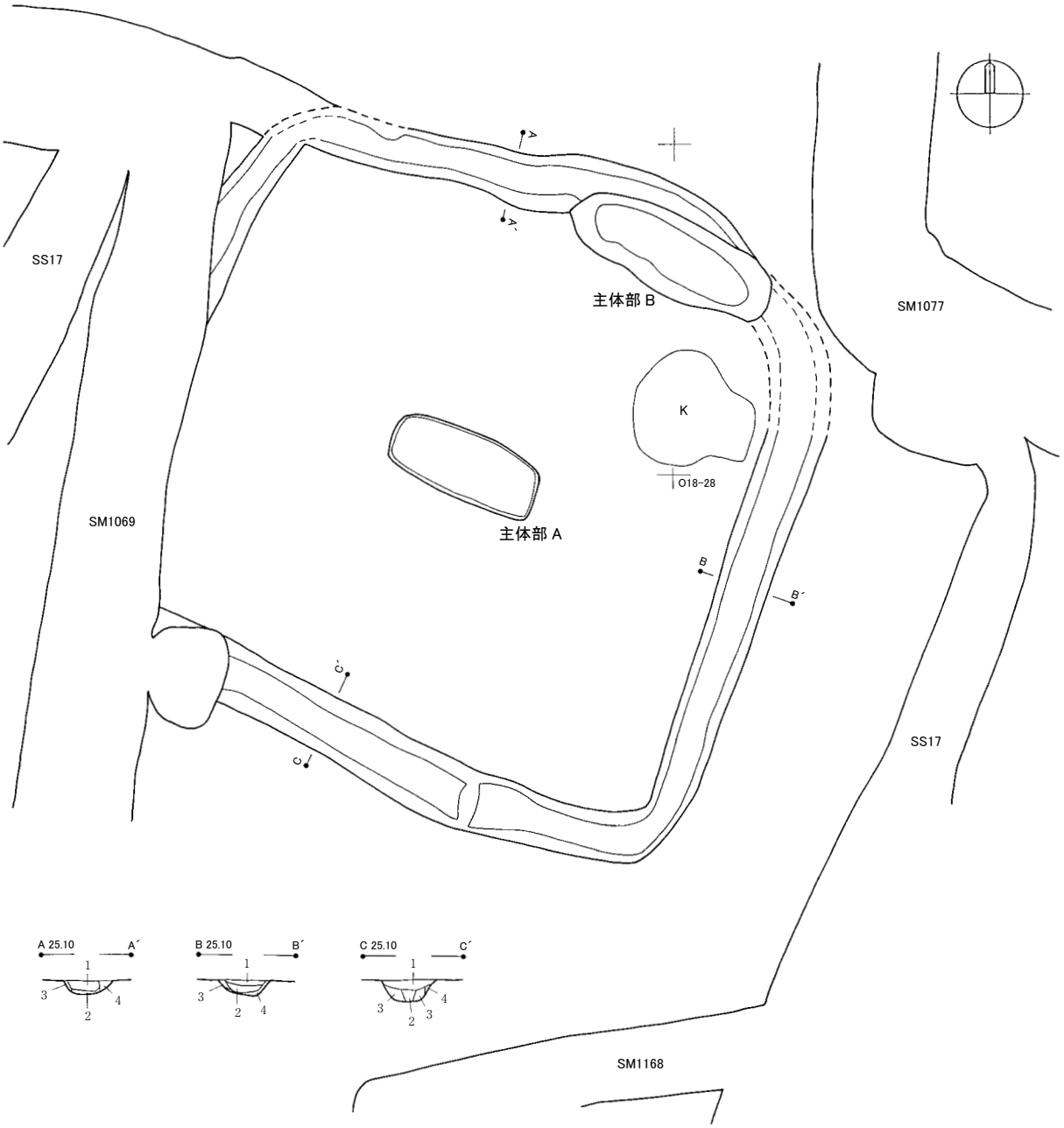
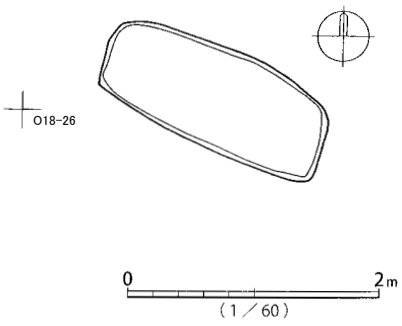


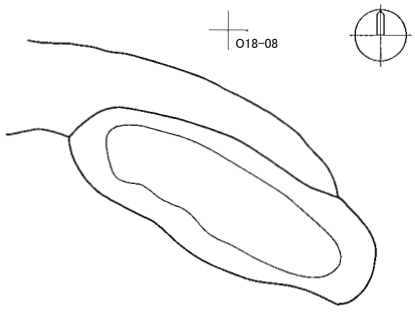
Fig.49　SS15 遺構 (2)・遺物実測図



主体部 A



主体部 B



SS16AA´
1 黒褐色土
2 褐色土
3 暗褐色土
4 暗茶褐色土

SS16BB´
1 黒褐色土
2 暗黒褐色土
3 褐色土
4 暗茶褐色土

SS16CC´
1 黒褐色土 褐色土多量、ローム粒
2 暗褐色土
3 暗黒褐色土 褐色土粒、ローム粒若干
4 ―

Fig.50　SS16 遺構実測図

主体部の平面形状は長方形で、規模は計測不能×1.33m、確認面からの深さは、0.19mを測る。主軸方位は長軸方向からN-72°-Wである。底面は隅丸長方形で平坦である。断面形状は、短軸方向ではレンズ状で、長軸方向では端部に向け浅くなる形状を呈する。

遺物は、周溝から出土している。1は小形椀形土器か鉢形土器と考えられる。

帰属時期は、山田橋1式期の所産と考えられる。

SS18　099地区　（Fig.52～53、PL.180～181）

M7-04付近に位置する方形周溝墓である。SM1002前方後円墳の前方部に位置する。南側にSS19が近接する。本遺構は、発掘調査時には099-4046と呼称されている。本遺構のエレベ-ション図は、整理段階で作図している。

平面形状は方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が8.42m×6.90m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.80m・0.24m、0.26m、東溝が0.68m・0.28m、0.38m、南溝が0.70m・0.36m、0.28m、西溝が0.64m・0.28m、0.11mを測る。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-88°-Eである。埋葬施設は方台部中央に東西方向に主軸方向を持って位置する。

主体部からは木棺痕が検出されており、平面形は不整長方形を呈し、規模は長軸2.00m×短軸1.05mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-81°-Wである。

墓壙の平面形状は、長方形で、規模は2.93m×1.70m、確認面からの深さは、0.40mを測る。主軸方位は長軸方向からN-79°-Wである。底面は長方形で中央が深く、凹凸が激しい。断面形状は、短軸方向、長軸方向共に逆台形を呈する。

遺物は、周溝から出土している。1・2・8は壺形土器、3・10は椀形土器、4～6・9は甕形土器、7は壺形土器の棒状浮文である。

帰属時期は、山田橋1式期の所産と考えられる。

SS19　099地区　（Fig.53～54、PL.26・155・181）

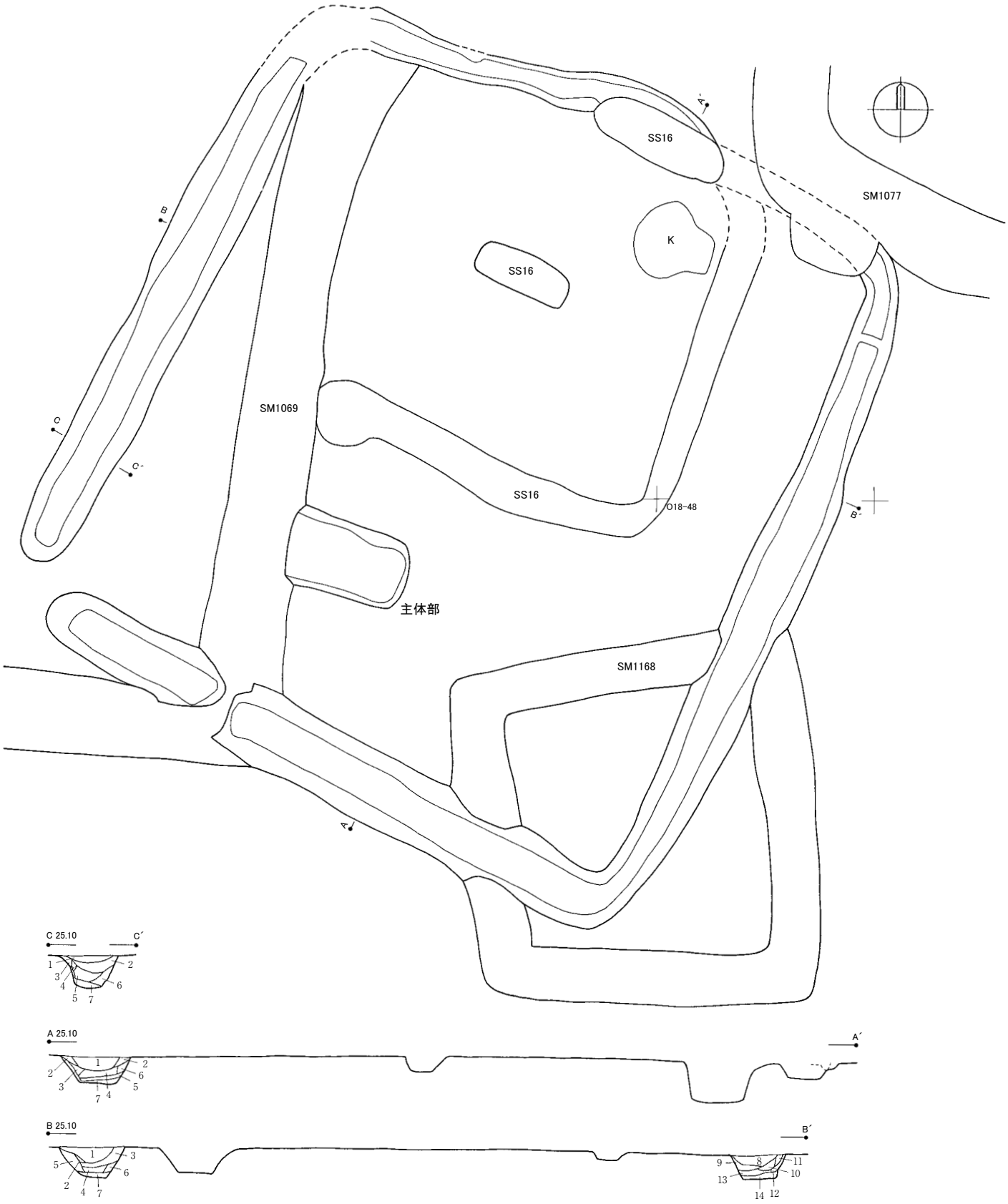
M7-40付近に位置する方形周溝墓である。北側にSS18が位置する。本遺構は、発掘調査時には099-4047と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。本遺構のエレベ-ション図は整理段階で作図している。

平面形状は隅丸方形を呈し、南西、南東隅が調査区境界に当たり検出していないが、北西隅で断絶する。周溝幅は狭く、ほぼ均等であるが、東周溝で幅広な部位が認められる。規模は方台部が8.60m×7.58m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.64m・0.38m、0.33m、東溝が1.06m・0.50m、0.34m、南溝が(0.66)m・計測不能、0.05m、西溝が0.68m・0.55m、0.15mを測る。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-62°-Wである。埋葬施設は方台部中央よりやや北西寄りに位置する。主体部墓壙の平面形状は、長方形で、規模は2.65m×1.15m、確認面からの深さは、0.33mを測る。主軸方位は長軸方向からN-70°-Wである。

遺物は、周溝から出土している。1・2・8・9が壺形土器、3は不明、4・5は甕形土器、6は椀形土器、7は甕形土器である。

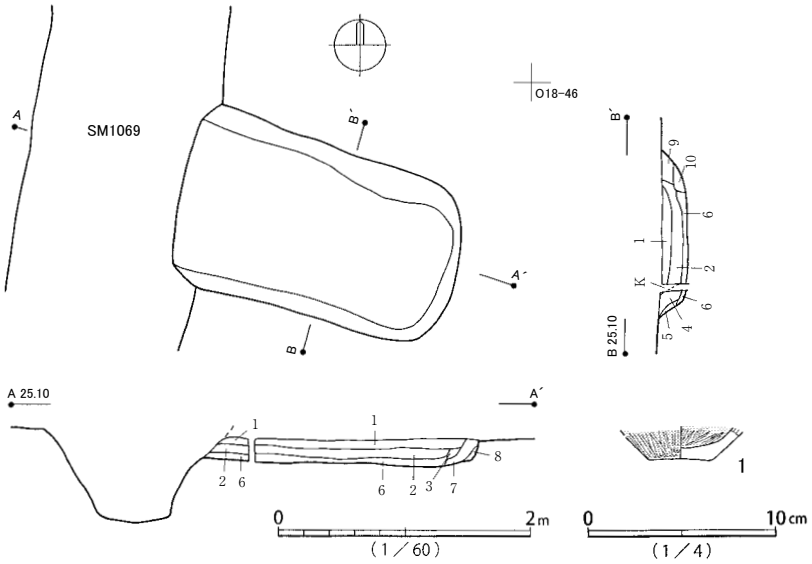
帰属時期は、山田橋1式期の所産と考えられる。



SS17AA´
1 黒色土 褐色土粒若干
2 黒褐色土 褐色土粒
3 褐色土 ローム粒
4 暗黒褐色土 褐色土粒多量
5 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒、褐色土
6 暗茶褐色土 ロームブロック・ローム粒、褐色土粒
7 暗黄褐色土 ロームブロック若干・ローム粒土、褐色土粒

SS17CC´
1 暗黒褐色土 褐色土ブロック、ローム粒
2 黒色土 ローム粒若干
3 暗茶褐色土
4 ― ローム粒土
5 黒褐色土 褐色土多量、ローム粒
6 暗黒褐色土 ローム粒多量、褐色土粒
7 黒色土・褐色土の混合 ローム粒

Fig.51　SS17 遺構 (1) 実測図



SS17BB´
1 暗黒褐色土 褐色土ブロック、ローム粒
2 黒褐色土
3 黒褐色土 ローム粒多量、褐色土粒
4 黒褐色土 褐色土多量、ローム粒
5 褐色土 ローム粒
6 褐色土 黒褐色土、ローム粒
7 褐色土 ロームブロック多量・ローム粒
8 暗黒褐色土 ローム粒多量
9 暗黒褐色土 ローム粒多量
10 黒褐色土 褐色土ブロック
11 褐色土・黒褐色土の混合 ローム粒若干
12 褐色土 ローム粒土多量
13 暗褐色土 ローム粒多量
14 黒色土・褐色土の混合 ローム粒

SS17 主体部 AA´·BB´
1 黒褐色土 ローム粒多量
2 黒褐色土 ローム粒多量、褐色土多量
3 暗褐色土 硬質
4 黒色土・褐色土の混合 硬質
5 暗茶褐色土
6 暗褐色土 やや硬質
7 暗褐色土
8 暗茶褐色土 ローム粒
9 黒色土 硬質
10 黒色土・褐色土の混合 硬質

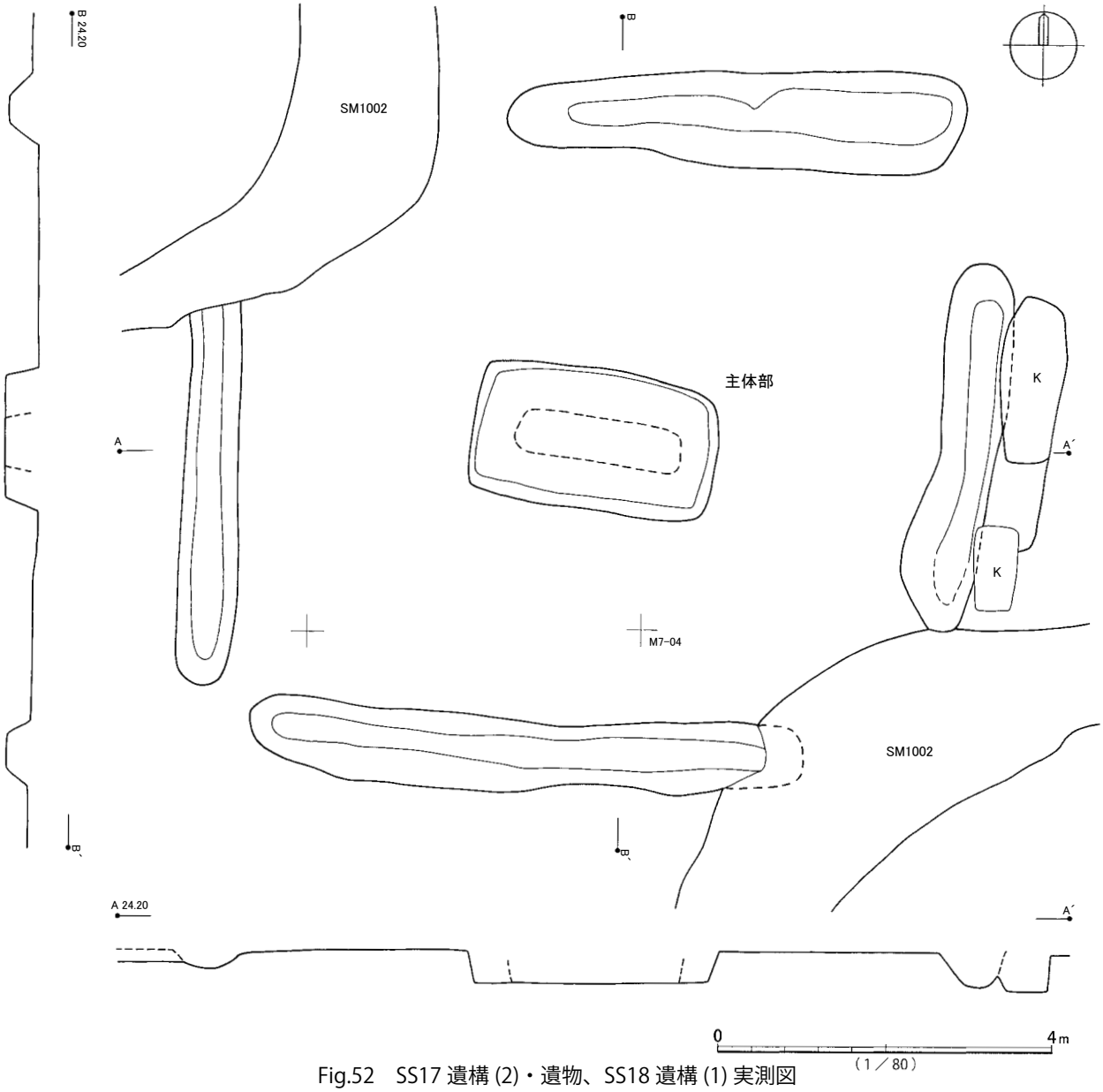


Fig.52　SS17 遺構 (2)・遺物、SS18 遺構 (1) 実測図

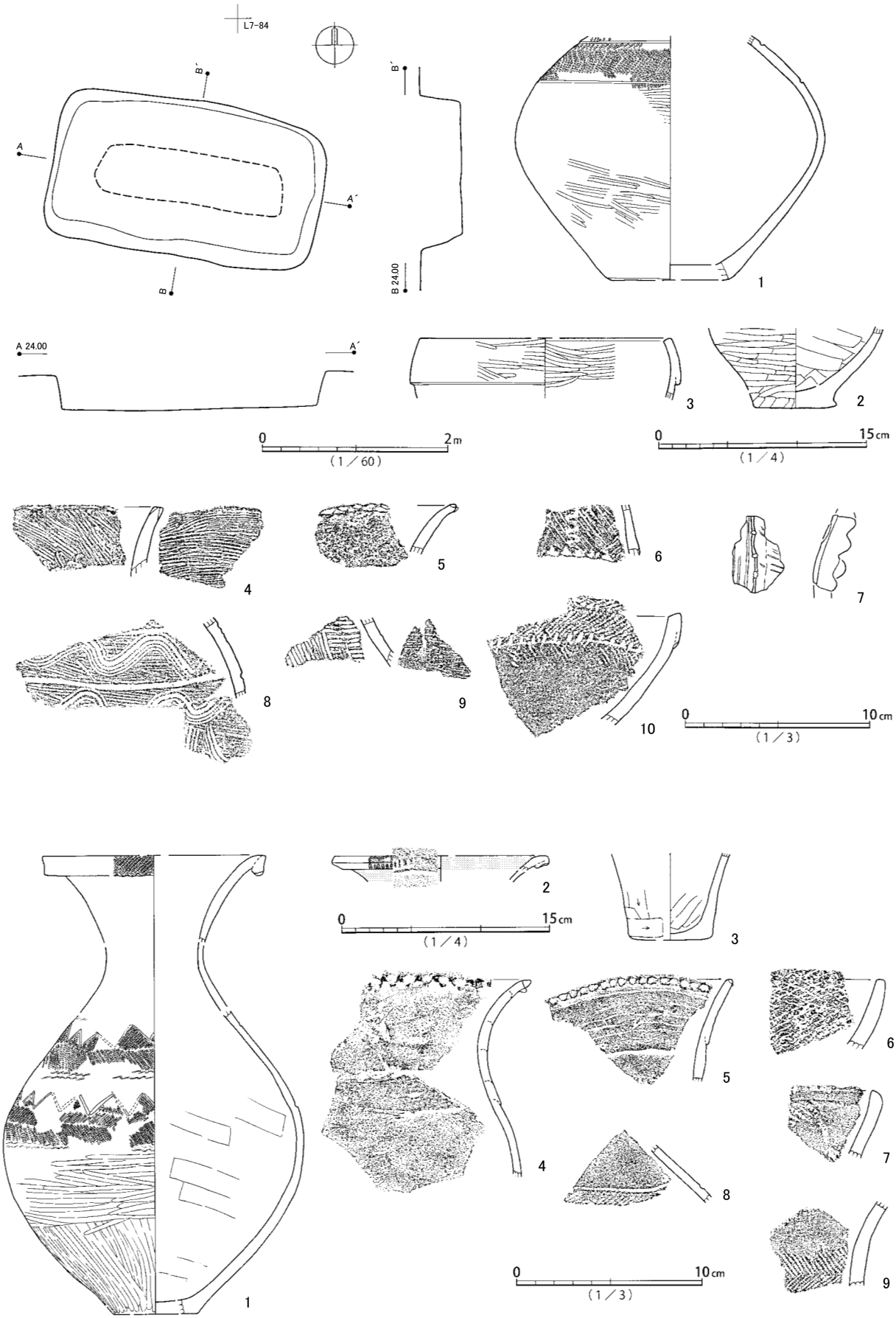


Fig.53　SS18 遺構 (2)・遺物、SS19 遺物実測図

SS20　099地区（Fig.55、PL.26・181）

N8-02付近に位置する方形周溝墓である。北側でSM1111に掘削される。四隅が切れるタイプの方形周溝墓列で北西端に位置する。本遺構は、発掘調査時には099-4045と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が14.40m×13.20m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で2.00m・0.88m、0.78m、東溝が1.12m・0.49m、0.43m、南溝が1.40m・0.40m、0.65m、西溝が1.52m・0.52m、1.14mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-52°-Wである。

埋葬施設は方台部中央より北西に寄って位置する。

主体部からは木棺痕が検出されており、平面形は長方形を推定できる。規模は長軸(2.15)m×短軸(0.75)m、確認面からの深さ0.37mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-45°-Eである。

墓壙の平面形状は、長方形で、規模は3.70m×2.00m、確認面からの深さは、0.60mを測る。主軸方位は長軸方向からN-47°-Eである。底面は長方形で平坦である。断面形状は、短軸方向では逆台形で、長軸方向では両端部に向け浅くなる形状を呈する。

遺物は、周溝から出土している。1～3は壺形土器、4は台付甕形土器か、5は甕形土器である。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS21　099地区（Fig.56、PL.181）

N7-24付近に位置する方形周溝墓である。北側にSS20が隣接する。四隅が切れるタイプの方形周溝墓列で北西端に位置する。南西側半分が調査区境界にあたり、検出されていない。本遺構は、発掘調査時には099-4049と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。エレベ-ション図は整理段階で作図している。

平面形状は方形を呈するとみられる。周溝は不確定だが四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が10.88m×計測不能、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.30m・0.95m、0.52m、東溝が1.65m・0.68m、0.47m、西溝が0.95m・0.40m、0.30mを測る。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-45°-Wである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

遺物は周溝から出土している。1は甕形土器、2～6は壺形土器、7・8は椀形土器である。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS22　099地区（Fig.57、PL.181）

N8-82付近に位置する方形周溝墓である。北西側にSS21、南東側にSS24が位置し、北東側でSM1023に掘削される。本遺構は、発掘調査時には099-4051と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状はほぼ正方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅は北西隅を除きほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が8.60m×(8.52)m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で(0.70)m・0.30m、0.18m、東溝が0.72m・0.50m、計測不能、南溝が(0.65)m・0.35m、0.28m、西溝が0.98m・0.50m、0.19mを測る。周溝底面は平坦面が少なく、断面形状はレンズ状を呈する部位

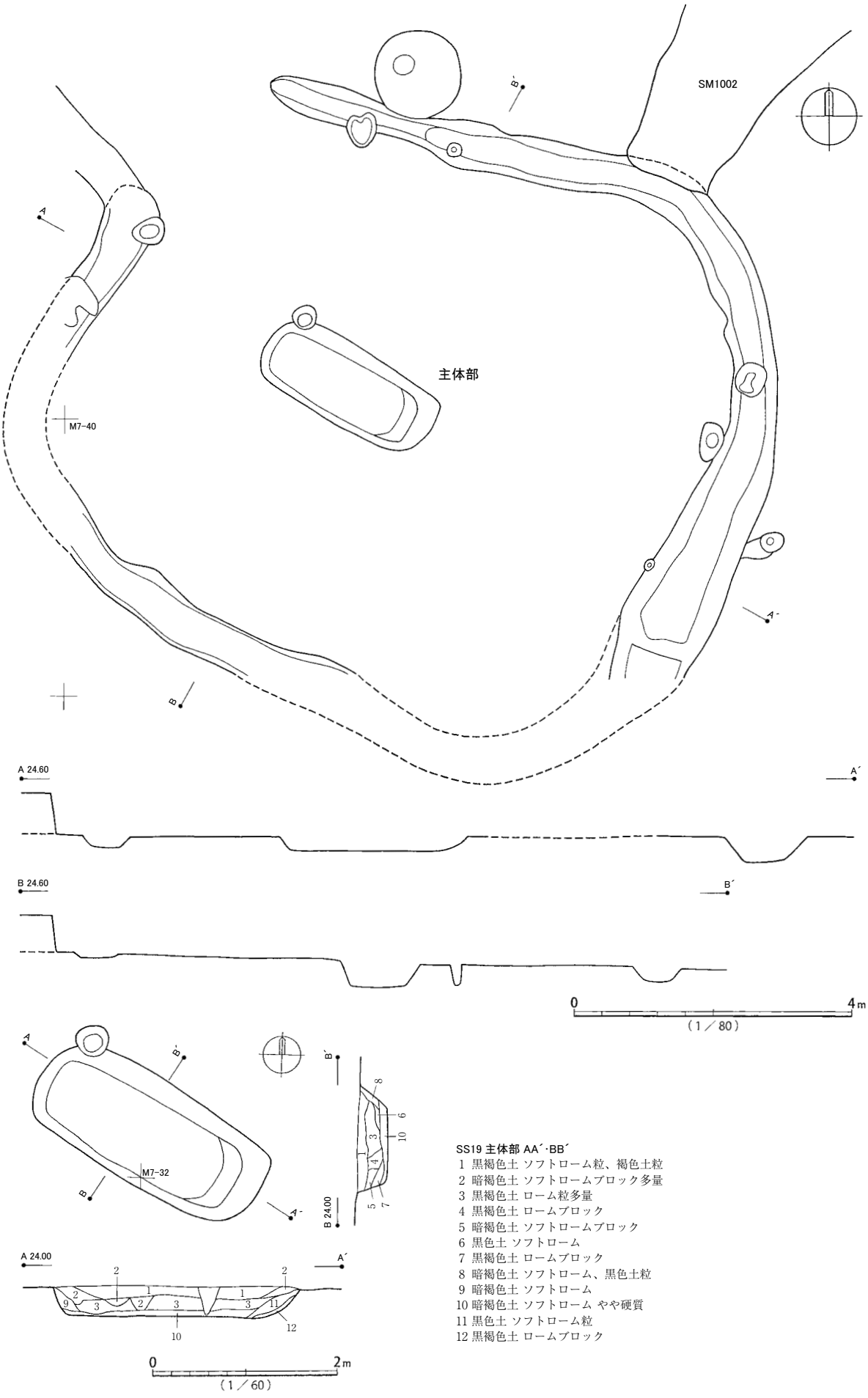


Fig.54　SS19 遺構実測図

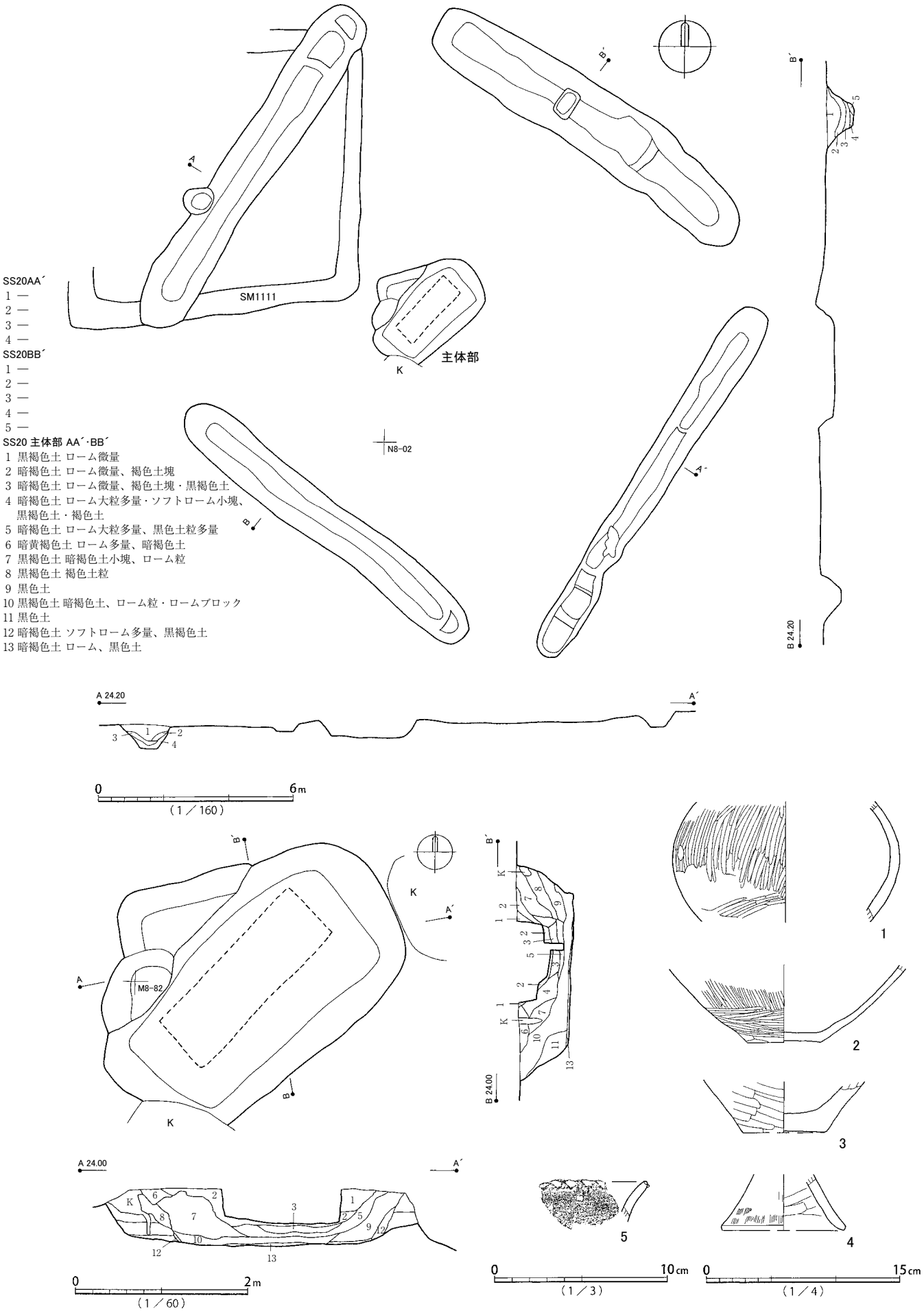


Fig.55　SS20 遺構・遺物実測図

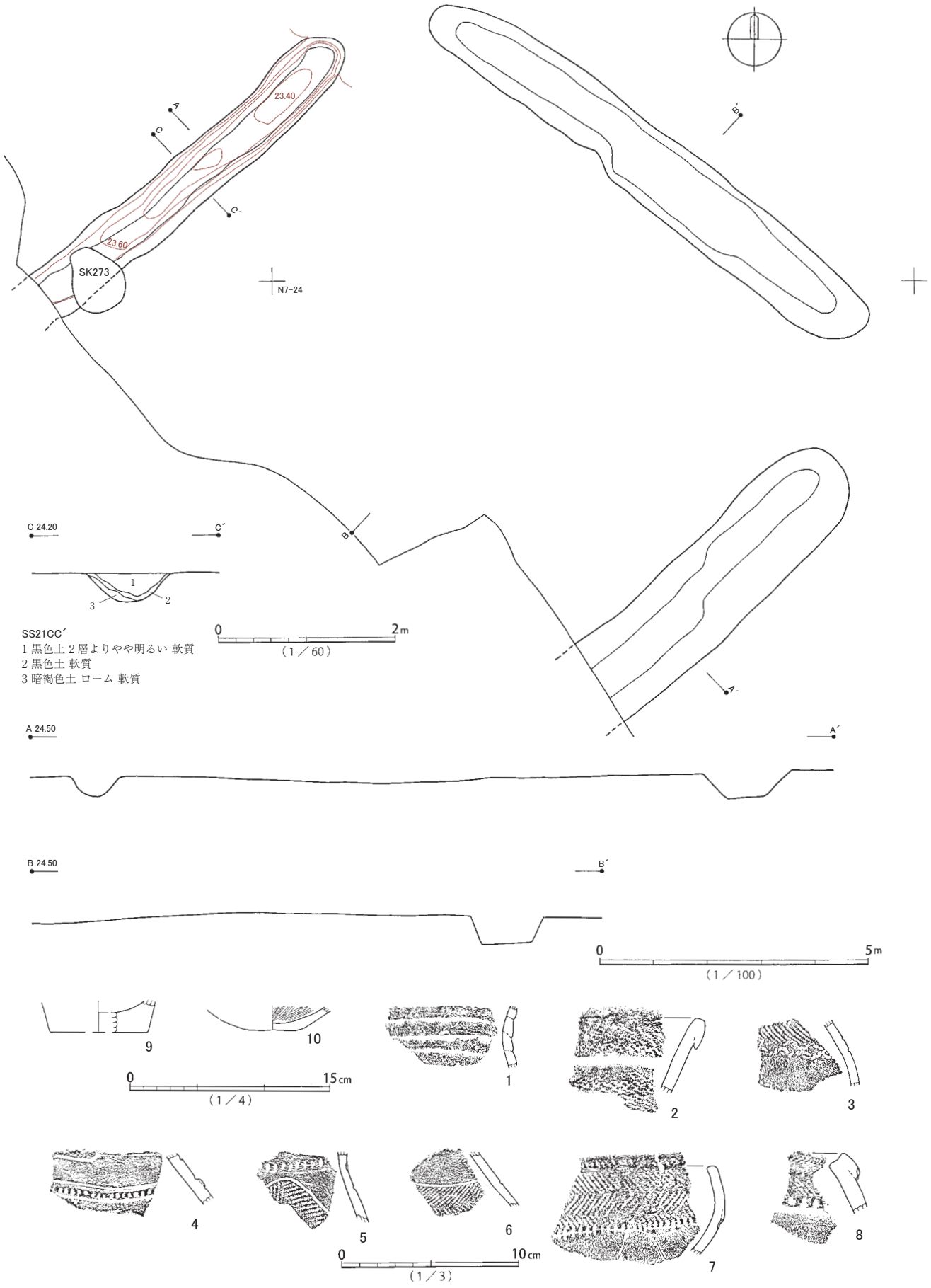


Fig.56　SS21 遺構・遺物実測図

もあるが、ほぼ不整形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-40°-Eである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

遺物は周溝から出土している。1は壺形土器である。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS23　099地区　（Fig.58）

N9-40付近に位置する方形周溝墓である。北西側にSS20、南東側にSS25が位置し、SM1023に掘削される。本遺構は、発掘調査時には099-4054と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅は狭く、ほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が8.40m×7.90m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で(0.79)m・0.46m、0.16m、東溝が0.80m・0.48m、0.20m、南溝が1.00m・0.48m、0.26m、西溝が1.06m・0.40m、0.57mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-45°-Eである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS24　099地区（Fig.59）

O8-26付近に位置する方形周溝墓である。北西側にSS22が、南東側にSS31が位置し、SM1023、SM1033に掘削される。本遺構は、発掘調査時には099-4052と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が9.20m×8.56m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で(0.86)m・0.68m、0.49m、東溝が0.72m・0.26m、0.31m、南溝が0.84m・0.44m、計測不能、西溝が(0.94)m・(0.52)m、0.22mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形、レンズ状など安定しない。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-38°-Eである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS25　099地区（Fig.60～61、PL.181・195）

O9-04付近に位置する方形周溝墓である。北西側にSS23が、南東側にSS30が位置し、SM1016に掘削される。本遺構は、発掘調査時には099-4055と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が11.44m×(10.20)m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で(0.88)m・(0.50)m、0.55m、東溝が0.66m・0.36m、0.38m、南溝が1.08m・0.56m、0.38m、西溝が1.16m・0.68m、0.44mを測る。周溝底面は平坦面が少なく、断面形状は逆台形、不整形を呈する。墳丘範囲では盛土を検出

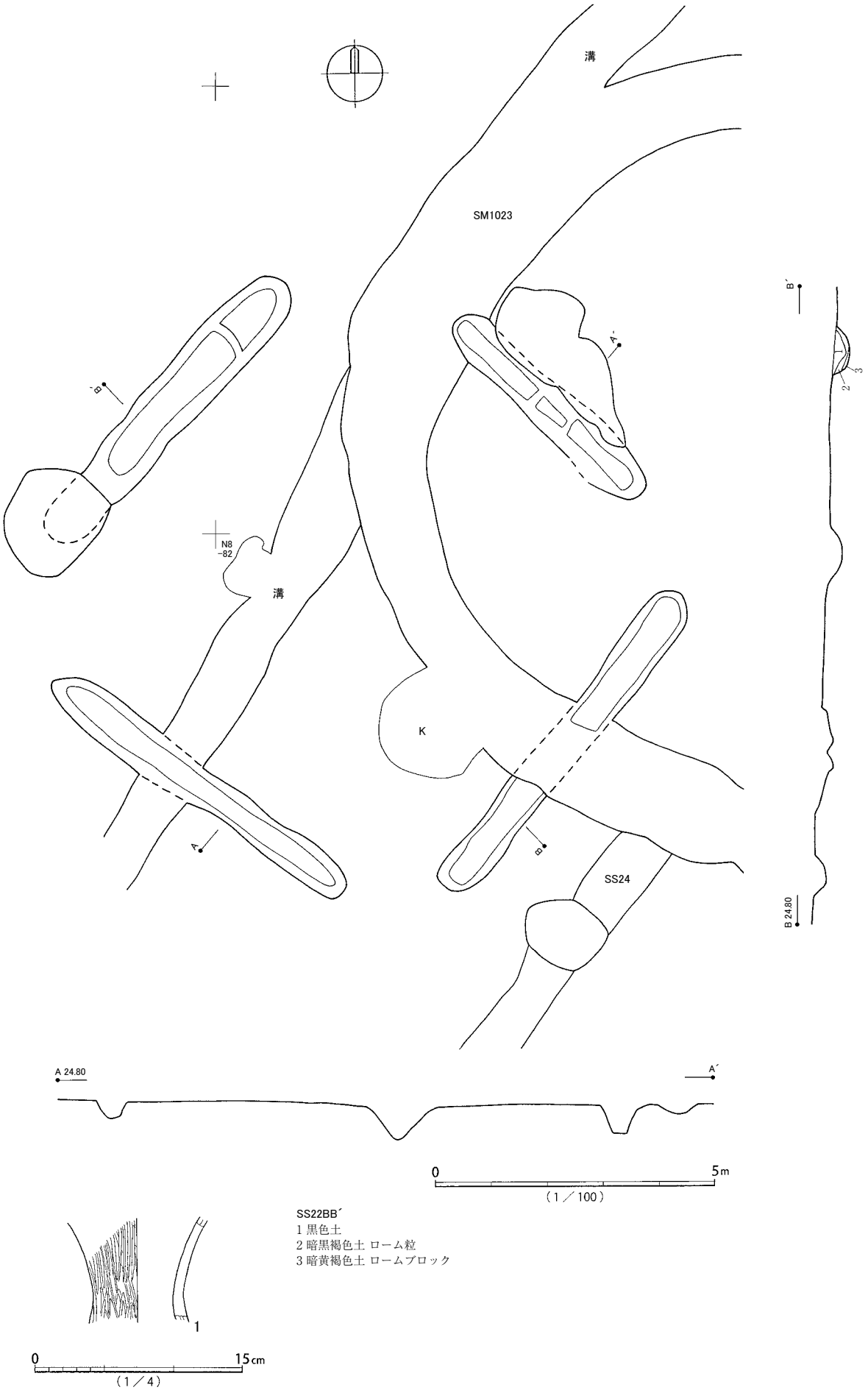


Fig.57　SS22 遺構・遺物実測図

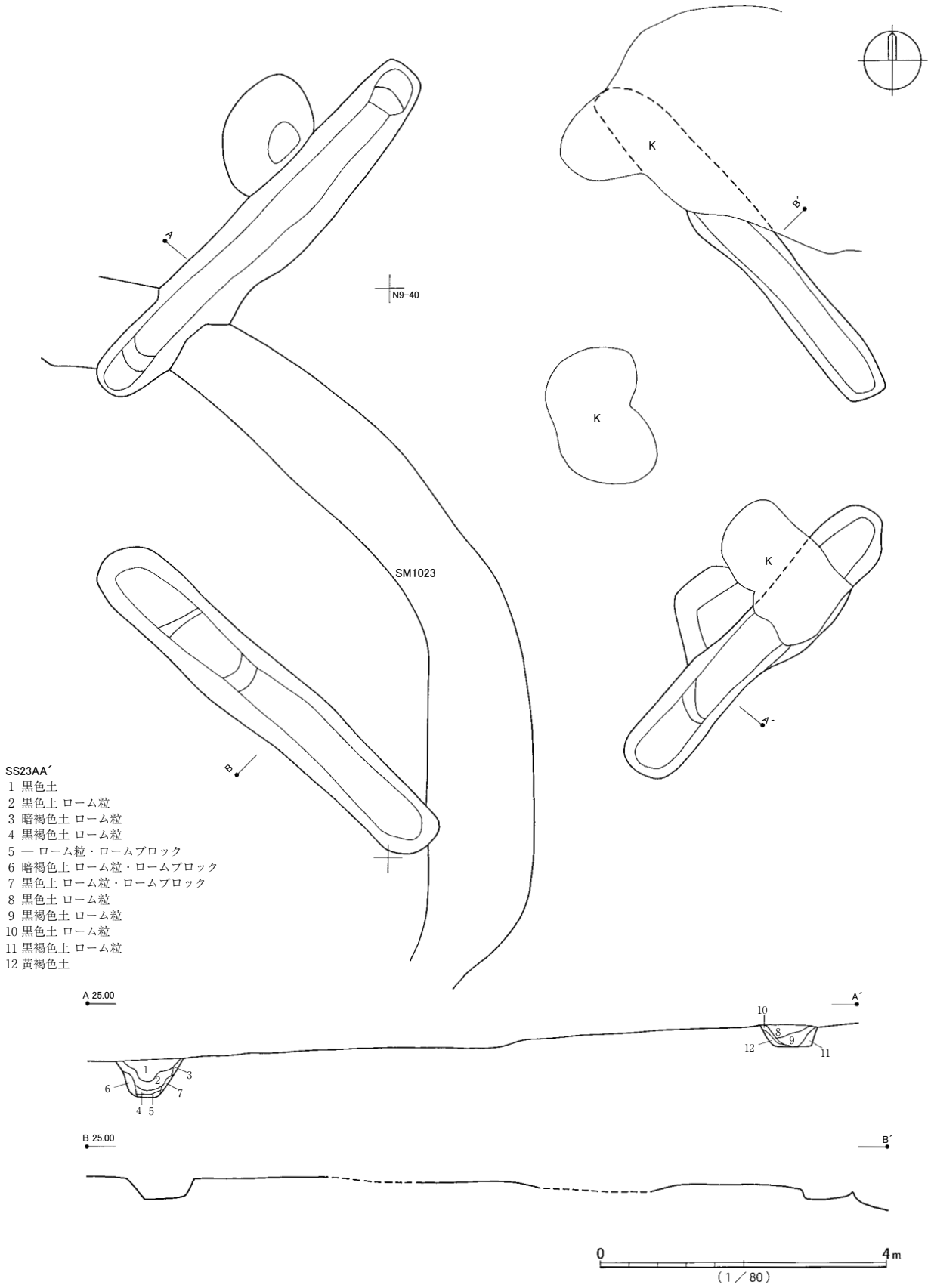


Fig.58　SS23 遺構実測図

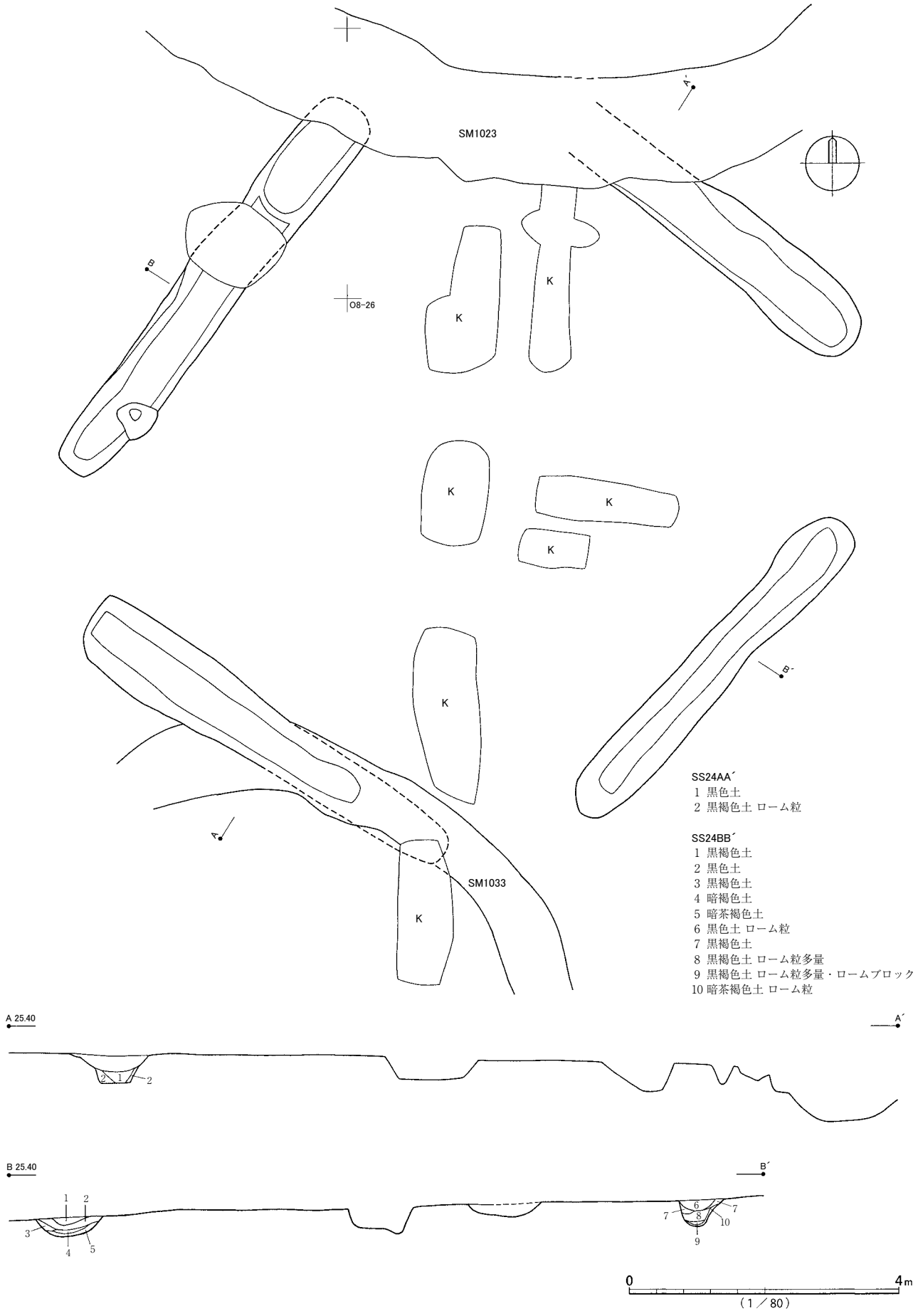


Fig.59　SS24 遺構実測図

していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-46°-Wである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

遺物は、周溝から出土している。1・2は壺形土器で、3は鉄製刀子である。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS26　099地区　（Fig.61、PL.181・195）

N10-20付近に位置する方形周溝墓である。北東側にSS28が、南西側にSS25が位置し、SM1016に掘削される。本遺構は、発掘調査時には099-4072と呼称されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が8.74m×8.48m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.62m・0.22m、0.39m、東溝が0.86m・0.32m、0.43m、南溝が1.12m・0.62m、0.20m、西溝が0.50m・0.32m、0.49mを測る。周溝底面はほぼ平坦面を持たず、断面形状はU字形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-28°-Wである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

遺物は周溝から出土している。1・2甕形土器、3鉄滓である。

帰属時期は、久ケ原式期の所産と考えられる。

SS27　099地区　（Fig.62～63、PL.26～27・155・181）

L10-46付近に位置する方形周溝墓である。四隅が切れるタイプの方形周溝墓列で北西端に位置する。南側にSS28がやや離れて位置し、SM1166に掘削される。本遺構は、発掘調査時には099-4027と呼称されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。本遺構の周溝エレベ-ション図は整理作業段階で作図している。

平面形状は方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が10.92m×10.66m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.40m・0.62m、0.68m、東溝が2.08m・0.92m、0.86m、南溝が1.14m・0.46m、0.74m、西溝が(1.28)m・0.54m、0.72mを測る。墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-16°-Wである。

埋葬施設は1基が、方台部中央から西寄りに、主軸方向を東西方向に持って造られている。

主体部からは木棺痕が検出されており、平面形は不明、規模は長軸2.10m×短軸0.70m、確認面からの深さ0.27mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-72°-E である。

墓壙の平面形状は、長方形で、規模は2.87m×1.45m、確認面からの深さは、0.27mを測る。主軸方位は長軸方向からN-68°-E である。底面は不整長方形で平坦である。断面形状は、短軸方向、長軸方向共に逆台形を呈する。

遺物は、東溝の覆土上層に集中する。1は甕形土器、2～4は壺形土器である。

帰属時期は、久ケ原式期の所産と考えられる。

SS28　099地区（Fig.64）

N10-04付近に位置する方形周溝墓である。北側にやや距離を置いてSS27が位置し、南側にSS29が近接する。SM1004、SM1025、SD10、SK142と重複し、いずれの遺構も本遺構に対して新しい。本遺構は、発掘調査時には099-4043と呼称されている。

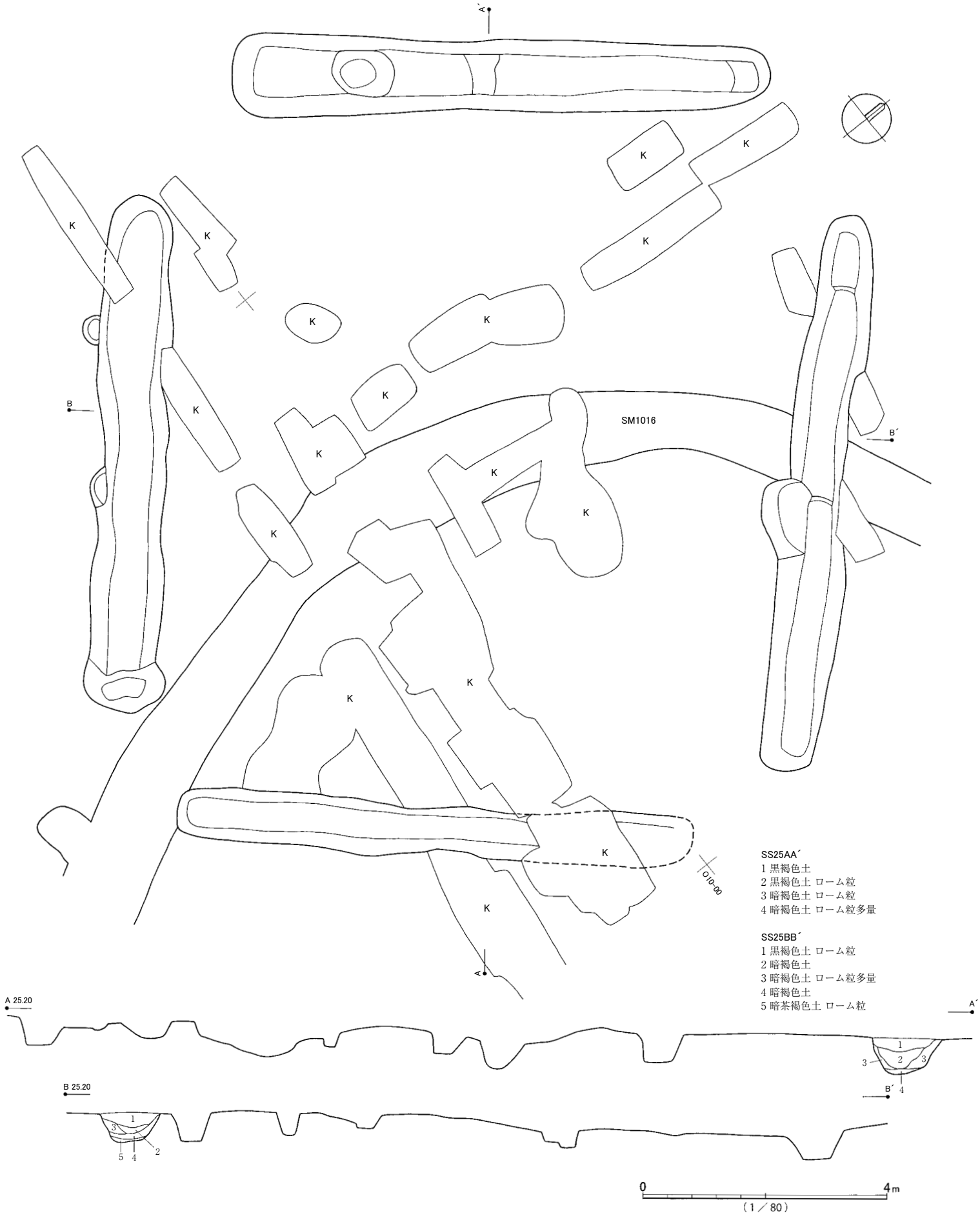


Fig.60　SS25 遺構実測図

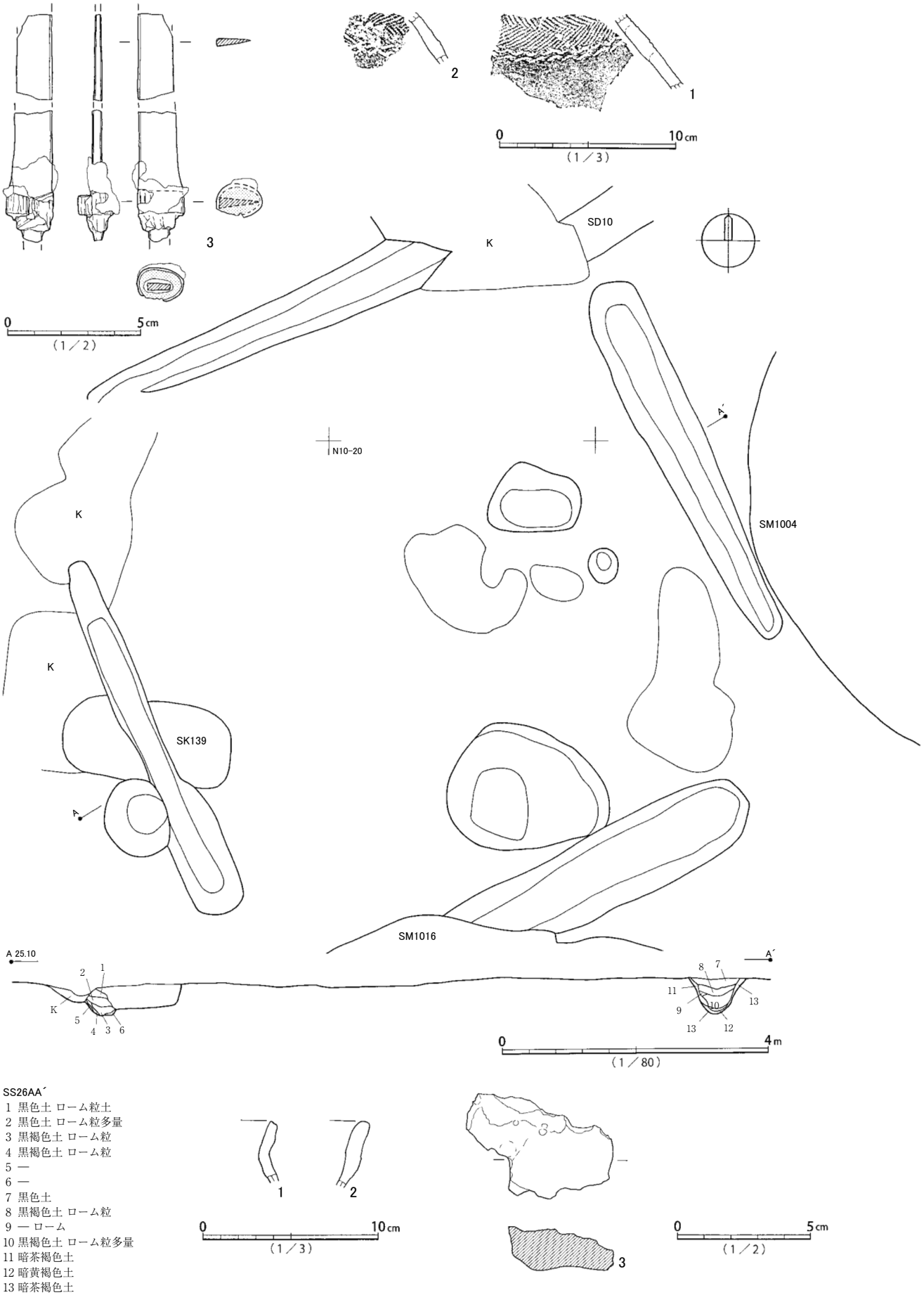


Fig.61　SS25 遺物、SS26 遺構・遺物実測図

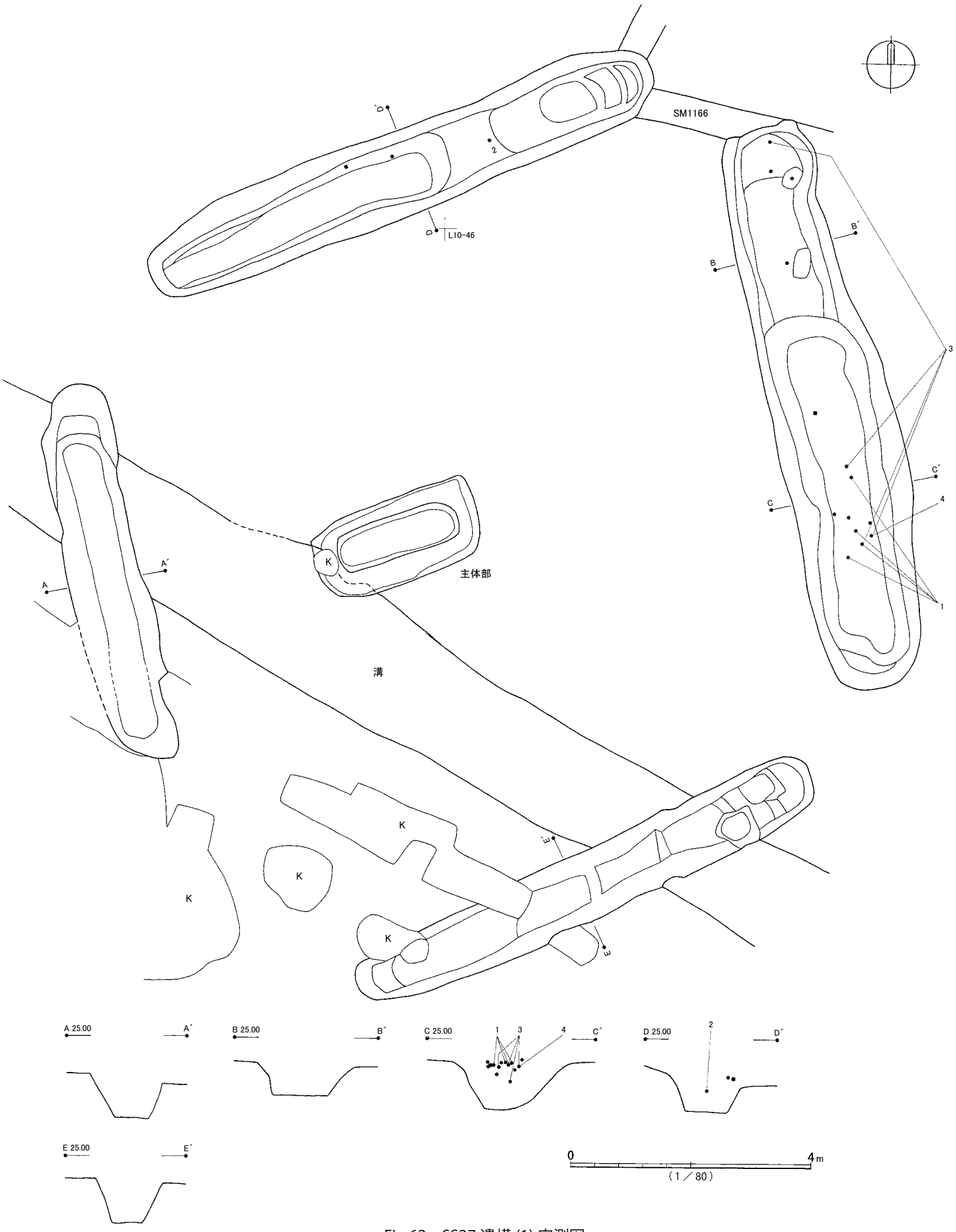


Fig.62　SS27 遺構 (1) 実測図

平面形状は方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が(12.62)m×12.52m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.90m・0.55m、0.42m、東溝が(0.78)m・0.55m、0.17m、南溝が1.32m・0.80m、0.23m、西溝が0.93m・0.58m、0.43mを測る。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-82°-Eである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

遺物は、周溝から出土している。1は甕形土器か。

帰属時期は、久ケ原式期の所産と考えられる。

SS29　099地区（Fig.65）

N11-60付近に位置する方形周溝墓である。北側にSS28が近接し、南側にSS35が位置する。SM1004と重複し、本遺構に対して新しい。本遺構は、発掘調査時には099-4082と呼称されている。

平面形状は方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が12.50m×11.60m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.92m・0.45m、0.48m、東溝が1.15m・0.35m、0.83m、南溝が1.40m・0.31m、0.70m、西溝が1.37m・0.55m、0.50mを測る。周溝底面はほぼ平坦面は認められない。断面形状は逆台形に近い形状を呈する。墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-84.5°-Eである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。

帰属時期は、久ケ原式期の所産と考えられる。

SS30　099地区（Fig.66～68、PL.27・155～156・181）

O10-44付近に位置する方形周溝墓である。北西側にSS25が、南東側にSS34が位置し、列状を形成している。SM1010、SM1016と重複し、いずれも本遺構に対して新しい。本遺構は、発掘調査時には099-4071と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅は狭く、ほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が13.04m×12.68m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で(1.10)m・0.40m、0.68m、東溝が0.55m・0.26m、0.26m、南溝が0.88m・0.42m、0.63m、西溝が0.95m・0.50m、0.62mを測る。周溝底面はほぼ平坦を持たず、断面形状は不整形である。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-47°-Wである。埋葬施設は方台部では検出していないが、東側周溝内南端から壺形土器棺が2組出土している。

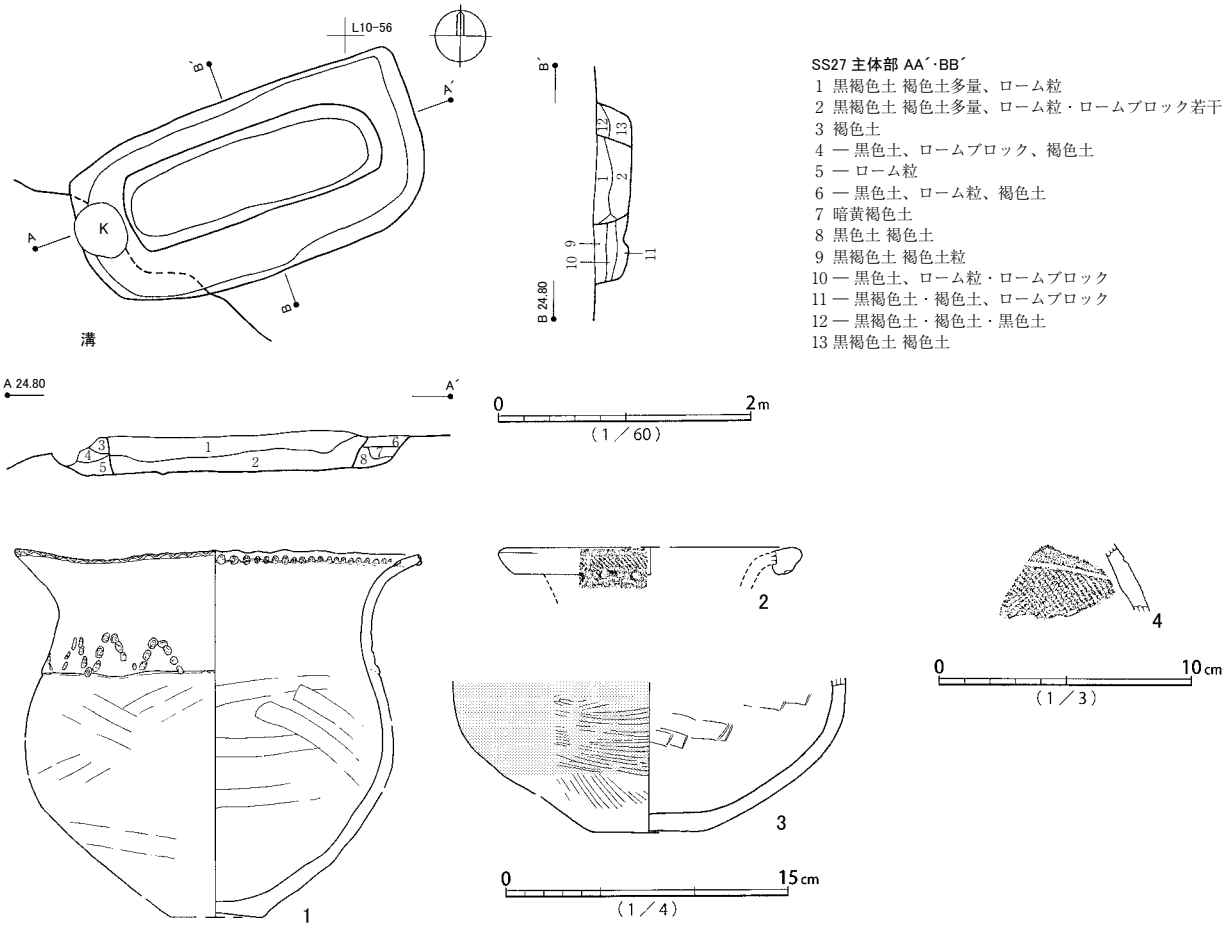
1・2は甕形土器、3は広口壺形土器、4～8は壺形土器である。

帰属時期は、宮ノ台式期中葉の所産と考えられる。

SS31　099地区（Fig.69～70、PL.27・156）

O9-84付近に位置する方形周溝墓である。北西側にSS24が、南東側にSS32が位置し、列状を成す。東側をSM1010に掘削される。本遺構は、発掘調査時には099-4056と呼称されている。
事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が10.96m×(10.36)m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.36m・0.74m、



SS27 主体部 AA´·BB´
1 黒褐色土 褐色土多量、ローム粒
2 黒褐色土 褐色土多量、ローム粒・ロームブロック若干
3 褐色土
4 ― 黒色土、ロームブロック、褐色土
5 ― ローム粒
6 ― 黒色土、ローム粒、褐色土
7 暗黄褐色土
8 黒色土 褐色土
9 黒褐色土 褐色土粒
10 ― 黒色土、ローム粒・ロームブロック
11 ― 黒褐色土・褐色土、ロームブロック
12 ― 黒褐色土・褐色土・黒色土
13 黒褐色土 褐色土

Fig.63　SS27 遺構 (2)・遺物実測図

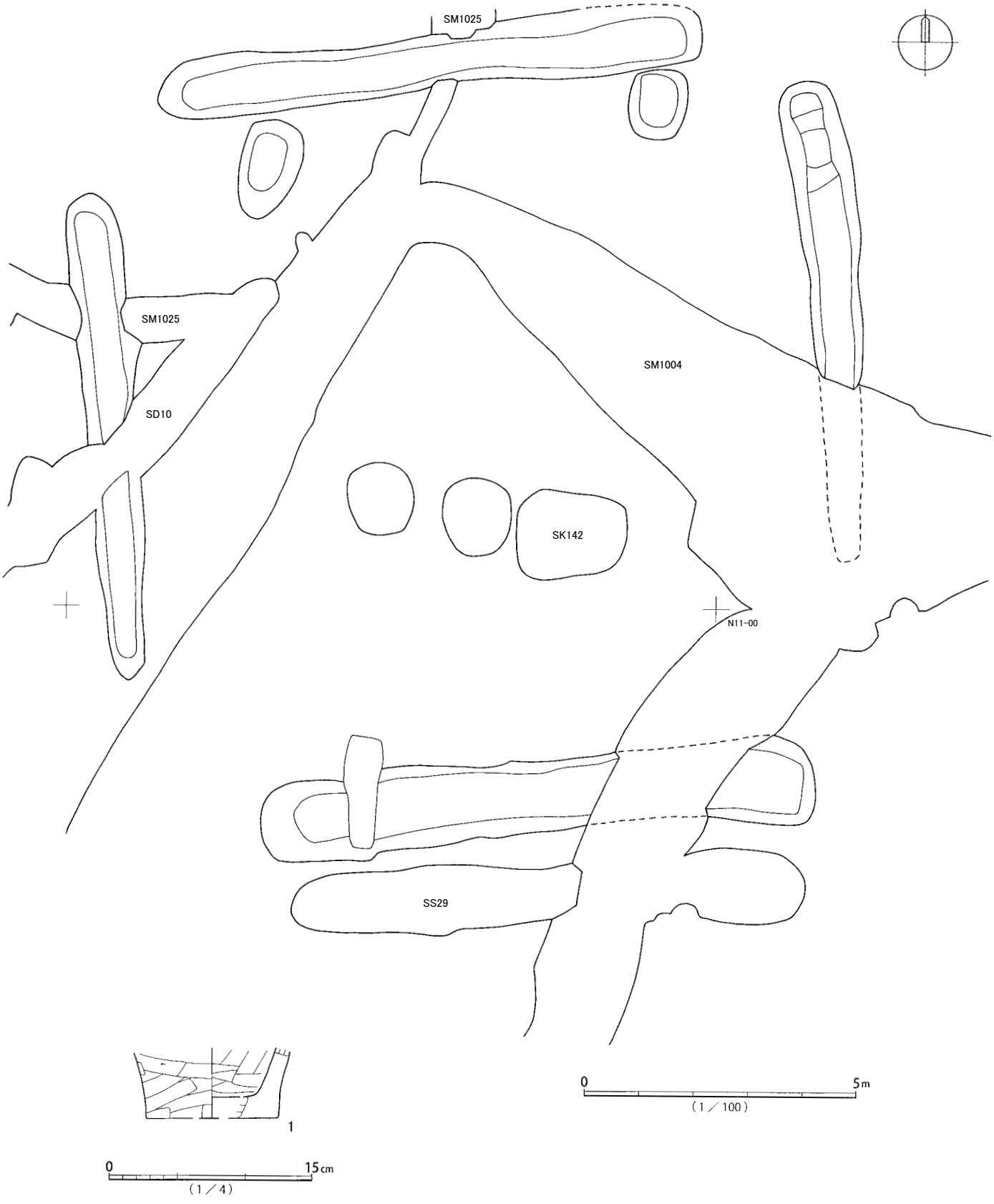
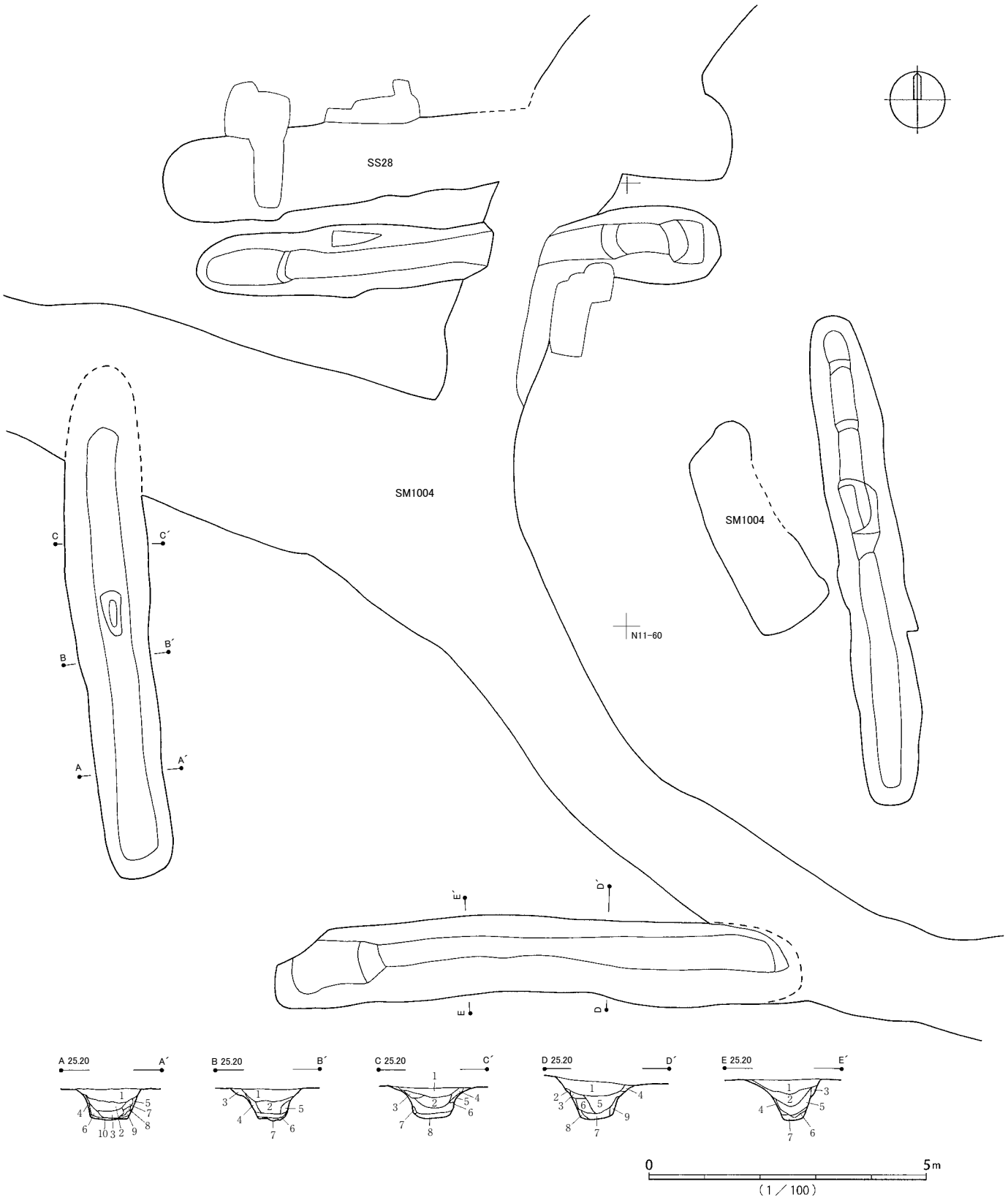


Fig.64　SS28 遺構・遺物実測図



SS29AA´
1 黒色土
2 黒色土 褐色土粒
3 黒色土
4 ― ローム
5 ― ローム
6 ― 褐色土粒
7 黒褐色土 ローム粒
8 黒褐色土 ローム粒
9 黒褐色土 ロームブロック
10 暗黄褐色土

SS29BB´
1 黒色土
2 黒色土
3 暗黄褐色土
4 暗褐色土
5 暗褐色土
6 黒色土 褐色土、ローム粒
7 暗黄褐色土

SS29CC´
1 黒色土
2 黒色土
3 黒褐色土
4 褐色土
5 暗茶褐色土
6 褐色土 ローム粒
7 暗黄褐色土
8 暗茶褐色土

SS29DD´
1 黒色土
2 ―
3 暗茶褐色土
4 黒褐色土
5 黒色土
6 褐色土 ロームブロック粒
7 暗褐色土
8 暗茶褐色土
9 暗茶褐色土

SS29EE´
1 黒色土 褐色土粒
2 黒色土 ローム粒
3 暗褐色土
4 暗茶褐色土
5 黒褐色土 ローム粒、褐色土粒
6 暗黄褐色土
7 ― 褐色土粒

Fig.65　SS29 遺構実測図

0.36m、東溝が1.16m・0.64m、0.51m、南溝が0.96m・0.70m、0.24m、西溝が1.40m・0.70m、0.51mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈し、側面の傾斜は方台部側に比べ、外側で緩い傾向がある。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-51°-Wである。埋葬施設は方台部では検出していないが、南側周溝内の東側に1.23m×0.84mの土壙が位置し、底面直上から壺形土器棺2点が出土している。

1・2は壺形土器でである。

帰属時期は、宮ノ台式期中葉の所産と考えられる。

SS32　099地区（Fig.71、PL.156）

P10-00付近に位置する方形周溝墓である。北西側にSS31が、南東側にSS33が位置し、列状を形成している。北側をSM1010が掘削する。本遺構は、発掘調査時には099-4059と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が10.54m×10.48m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.40m・0.65m、0.58m、東溝が1.22m・0.72m、計測不能、南溝が1.35m・0.38m、0.55m、西溝が0.70m・0.40m、0.26mを測る。周溝の断面形状等については、記録類が限られ詳細は不明である。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-39°-Eである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、周溝から出土している。1は小形壺形土器である。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS33　099地区（Fig.72）

P10-66付近に位置する方形周溝墓である。北西側にSS32が、南東側にSS38が位置し、列状を成す。東側周溝がSK146と重複するが、新旧関係は不明である。本遺構は、発掘調査時には099-4062と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が10.90m×10.64m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.35m・0.70m、0.40m、東溝が(1.22)m・(0.75)m、0.34m、南溝が1.00m・0.63m、0.14m、西溝が1.05m・0.57m、0.35mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は東西周溝では逆台形を呈するが、南北周溝ではレンズ状を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-60°-Wである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

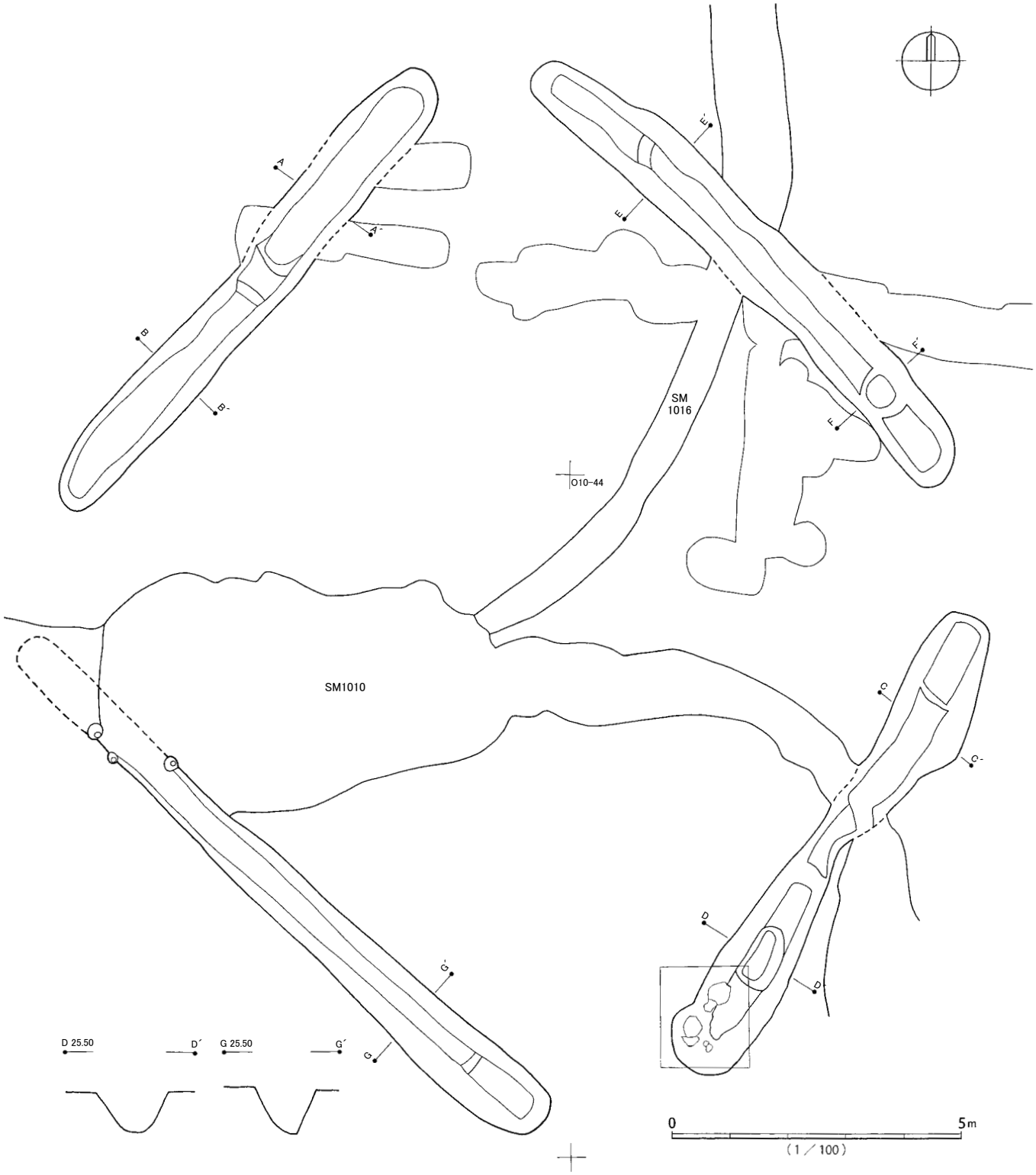
出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS34　099地区（Fig.73、PL.156）

P11-00付近に位置する方形周溝墓である。北西側にSS30が、南東側にSS37が位置し、また、北側にはSS35が位置し何れも列状を形成している。本遺構は異なる列の支点的な位置に立地する。

本遺構は東側からSM1019、西側からSM1010に掘削される。発掘調査時には099-4069と呼称され



SS30AA´
1 黒褐色土
2 黒色土 褐色土
3 暗褐色土

SS30BB´
1 黒褐色土
2 黒色土
3 黒褐色土 ローム粒、褐色土

SS30CC´
1 褐色土
2 黒色土 黒褐色土
3 暗褐色土
4 暗茶褐色土

SS30EE´
1 黒褐色土
2 黒色土 ローム粒若干
3 暗褐色土
4 ― ロームブロック

SS30FF´
1 黒褐色土 褐色土ブロック
2 黒褐色土
3 暗褐色土

Fig.66　SS30 遺構実測図

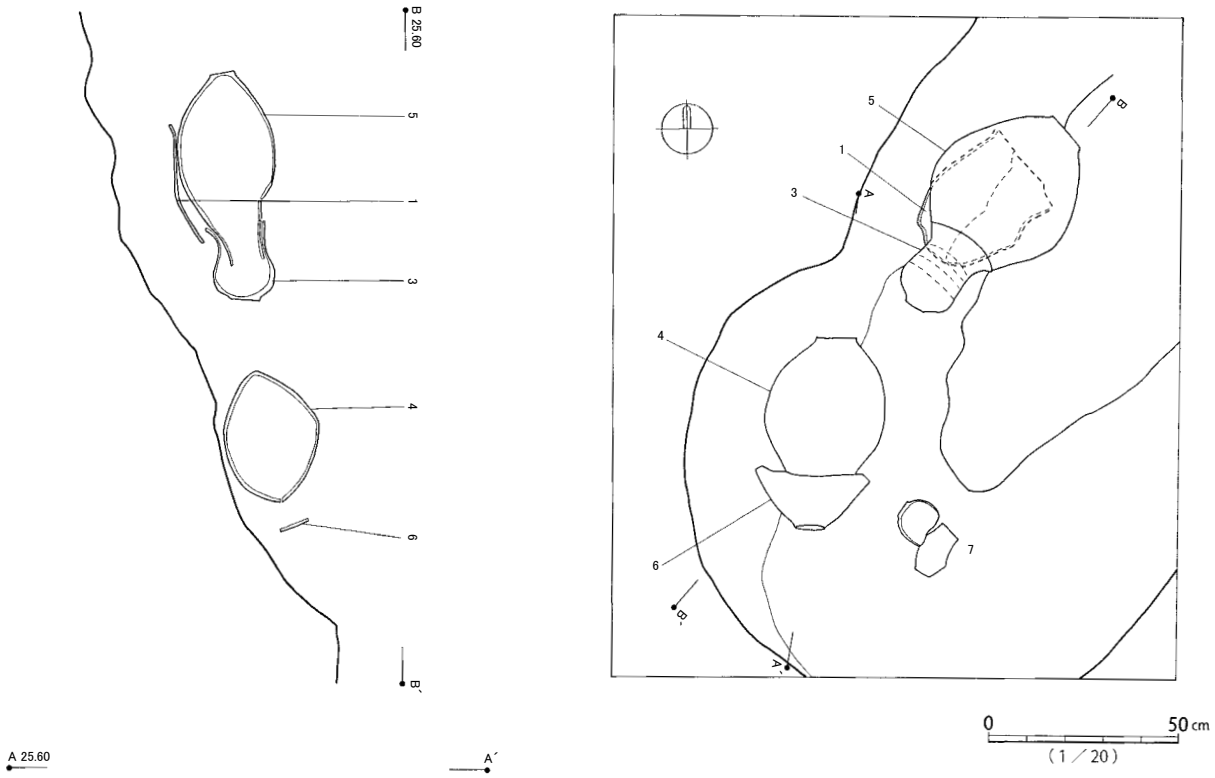


Fig.67　SS30 遺物出土詳細・遺物 (1) 実測図

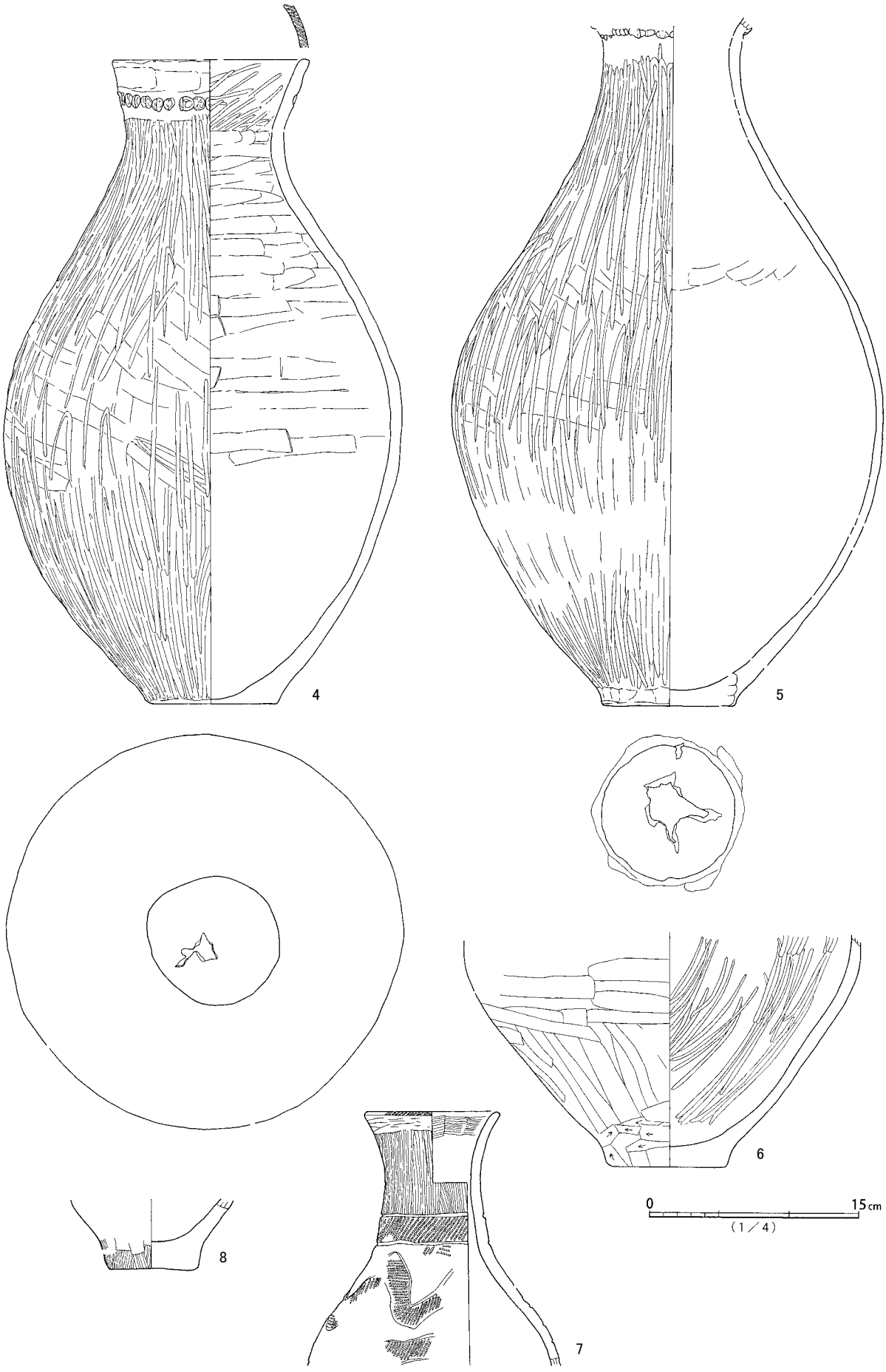


Fig.68　SS30 遺物 (2) 実測図

ている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。また、本遺構のセクションA-A´は平面図との整合性が取れないことから、高さを70cm下げて作図している。

平面形状は、ひし形を呈し、周溝は四隅で断絶するとみられる。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が(9.40)m×(9.16)m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で(1.00)m・(0.55)m、計測不能、東溝が0.95m・0.60m、0.34m、南溝が1.00m・0.70m、計測不能、西溝が0.80m・0.50m、0.14mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-40°-Wである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

遺物は、周溝から出土している。

1は甕形土器である。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS35　099地区（Fig.74）

O11-40付近に位置する方形周溝墓である。北側にSS29が、南東側にSS34が位置し、列状を成す。南側からSM1019に掘削される。本遺構は、発掘調査時には099-4115と呼称されている。

平面形状はやや歪んだ方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が9.24m×8.96m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.88m・0.48m、0.37m、東溝が0.82m・0.50m、0.18m、南溝が0.96m・0.56m、0.44m、西溝が0.68m・0.46m、0.14mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈し、側面の傾斜は方台部側に比べ、外側が緩くなる傾向が認められる。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-86°-Wである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。

帰属時期は、久ケ原式期の所産と考えられる。

SS36　99地区（Fig.74）

O12-00付近に位置する。遺構は溝状であるが、規模、主軸方向が近接する方形周溝墓の周溝に近似するため、方形周溝墓として扱う。北側でSK148、南側でSM1027と重複する。本遺構は、発掘調査時には遺構番号を付与されていないため、整理作業段階で与えている。

平面形状は、長楕円形を呈する。周溝幅はほぼ均等である。方台部は、西側に展開すると想定しているが、断定的な根拠は無い。記録類が限られるため詳細は不明である。

墳丘及び、埋葬施設は検出していない。

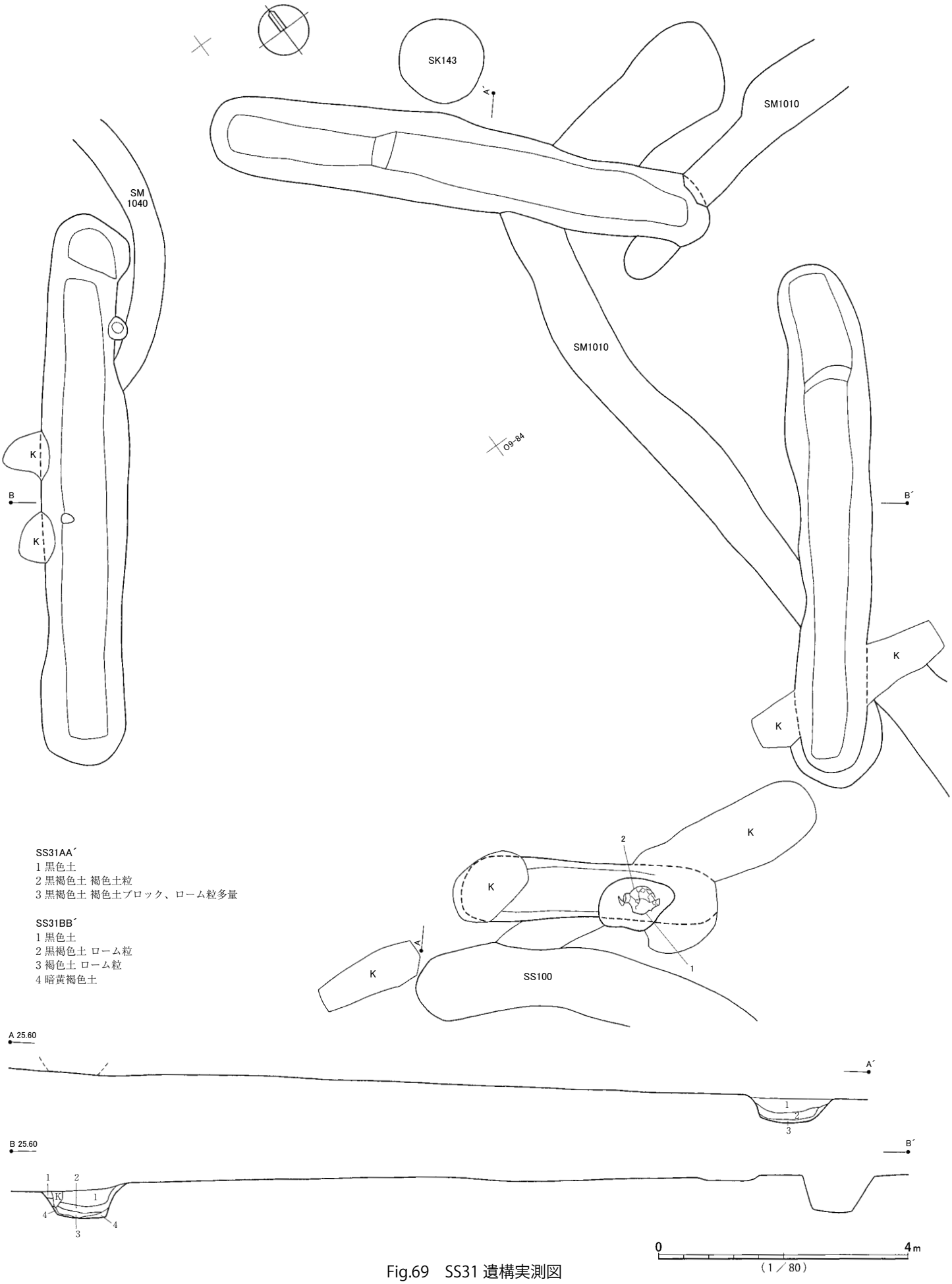
出土遺物は無い。

帰属時期は、不明である。

SS37　099地区（Fig.75～76、PL.156・181）

P11-48付近に位置する方形周溝墓である。北西側にSS34が、北側にSS35が位置し、列状を形成している。本遺構は、北西から南東に展開する系列と、北から南に展開する系列の何れにも加えられる位置に占地する。北側からSM1019に掘削される。また、発掘調査時には099-4073と呼称されている。

平面形状はほぼ正方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅は方台部側で直線的だが、外側では



SS31AA´
1 黒色土
2 黒褐色土 褐色土粒
3 黒褐色土 褐色土ブロック、ローム粒多量

SS31BB´
1 黒色土
2 黒褐色土 ローム粒
3 褐色土 ローム粒
4 暗黄褐色土

Fig.69　SS31 遺構実測図

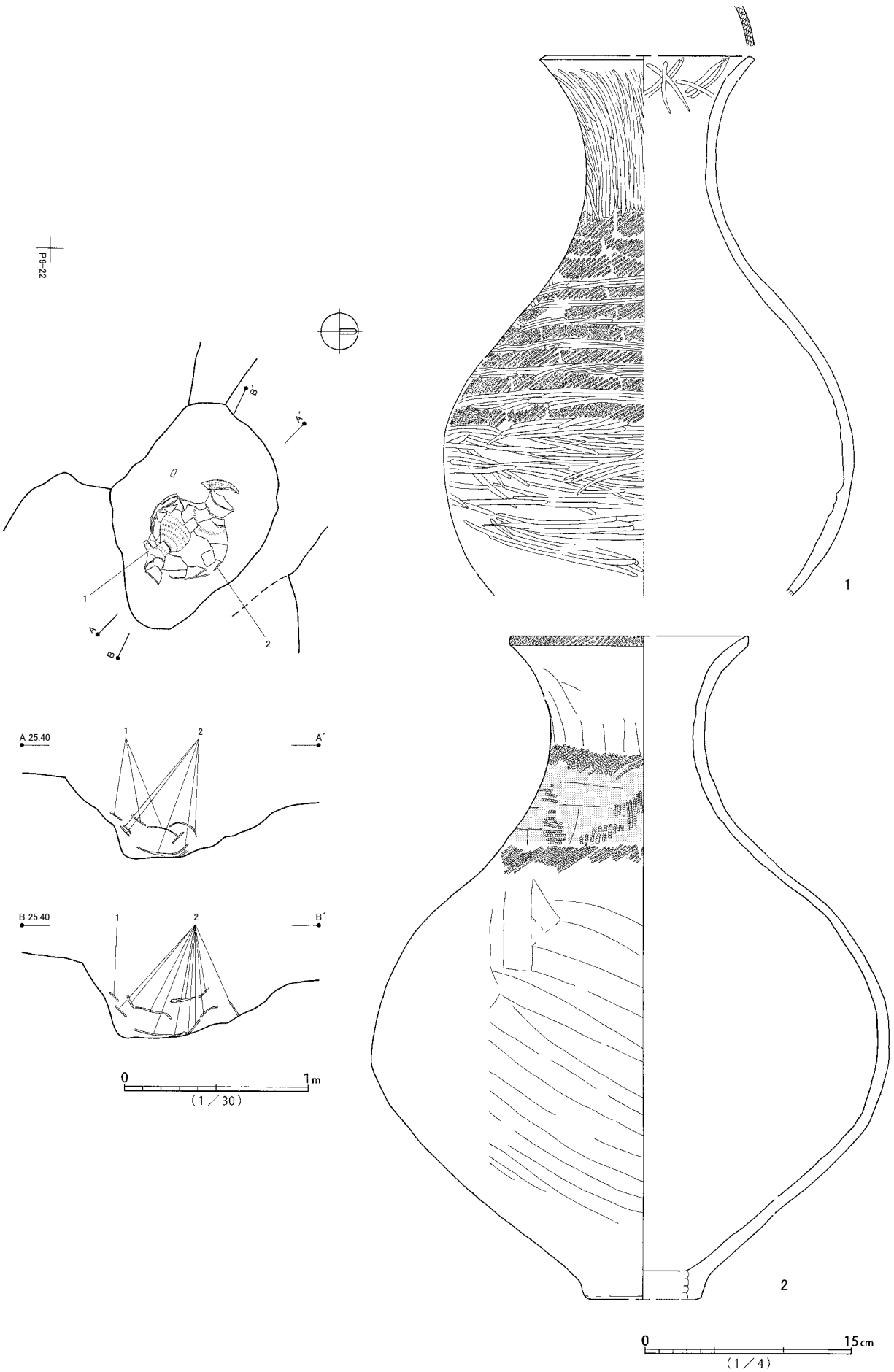


Fig.70　SS31 遺物出土詳細・遺物実測図

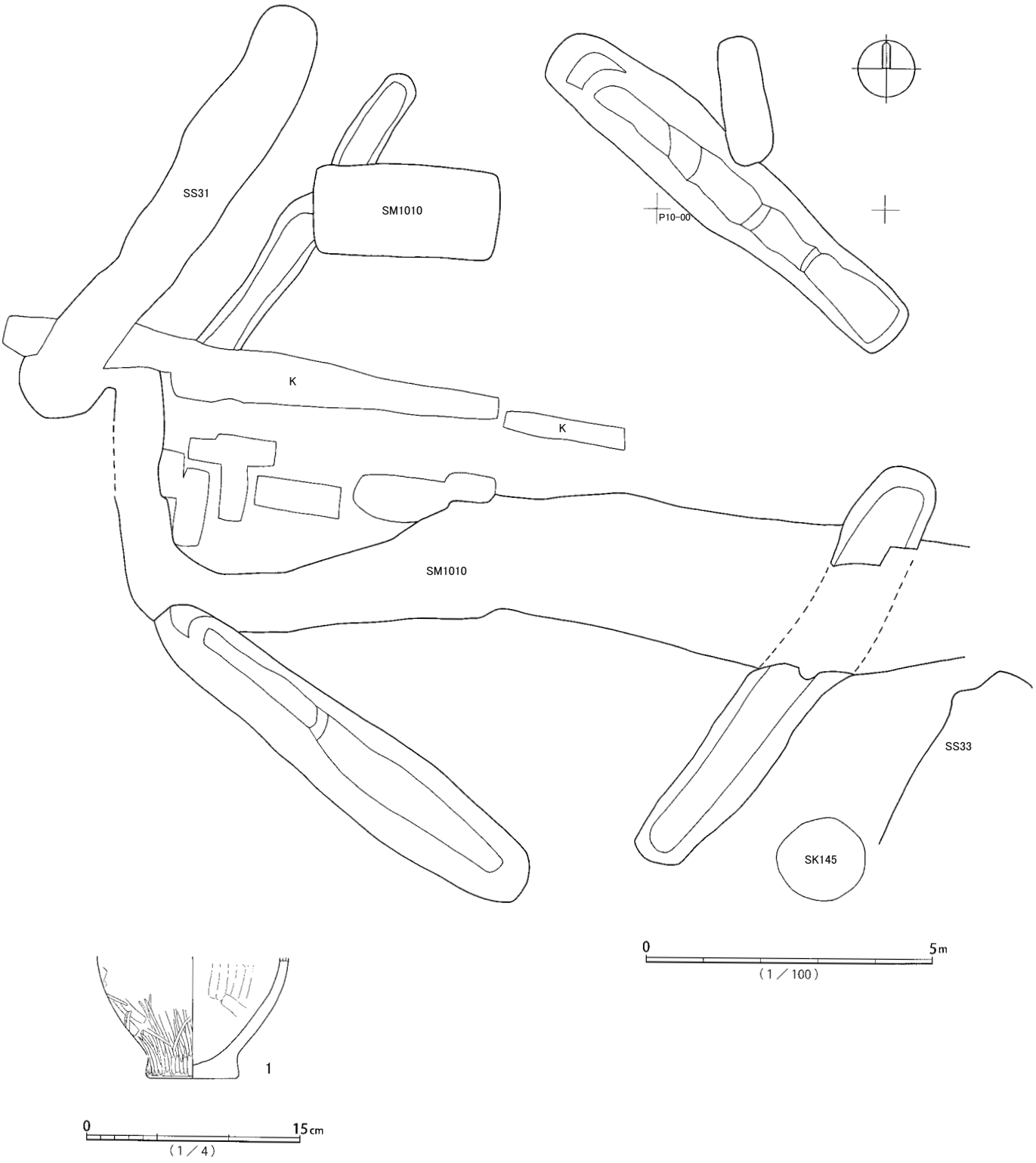


Fig.71　SS32 遺構・遺物実測図

僅かに弧を描き、中央部に最大幅がある傾向を示す。規模は方台部が9.92m×(9.46)m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で(1.20)m・(0.57)m、計測不能、東溝が1.57m・0.90m、0.61m、南溝が1.70m・1.15m、0.44m、西溝が(0.72)m・0.55m、0.18mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-82°-Wである。

埋葬施設は方台部では検出していないが、東側周溝南端から、壺形土器棺が出土している。周溝外側に楕円形や不整形の土坑が数基検出されているが、本遺構との関係性を示す要素は認められない。

1～5は壺形土器である。

帰属時期は、宮ノ台式期後半から久ケ原1式期の所産と考えられる。

SS38　セ28地区（Fig.77～78、PL.27・156）

Q11-00付近に位置する方形周溝墓である。北西側にSS33が、南東側にSS39が位置し、列状を形成している。北側からSM1152に、南隅でSK255に掘削される。西側周溝とSK146の新旧関係は不明である。本遺構は発掘調査時にはセ28-034と呼称されている。

平面形状は、方形を呈し、周溝は三隅で断絶するが、南東隅では屈折して繋がる可能性が認められる。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が9.90m×9.74m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.18m・0.56m、0.64m、東溝が1.60m・0.74m、0.59m、南溝が1.34m・0.46m、0.46m、西溝が0.98m・0.46m、0.23mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

僅かに盛土状の土層が認められるが、方台部に安定して認められるか確認できないため、断定的では無い。主軸方位は方台部長軸方向からN-27°-Eである。埋葬施設は方台部中央から僅かに南寄りに、主軸を東西方向にして位置する。

主体部からは木棺痕が検出されており、平面形は不明、規模は長軸2.00m×短軸0.40m、確認面からの深さ0.15mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-66°-Wである。

墓壙の平面形状は、長方形で、規模は2.93m×(1.60)m、確認面からの深さは、0.14mを測る。主軸方位は長軸方向からN-64°-Wである。底面は長方形で中央が深く、凹凸が激しい。断面形状は、短軸方向では底面の狭いU字形で、長軸方向では両端部に向け浅くなる形状を呈する。内部施設としてテラス状のステップが認められる。

遺物は、周溝から出土している。

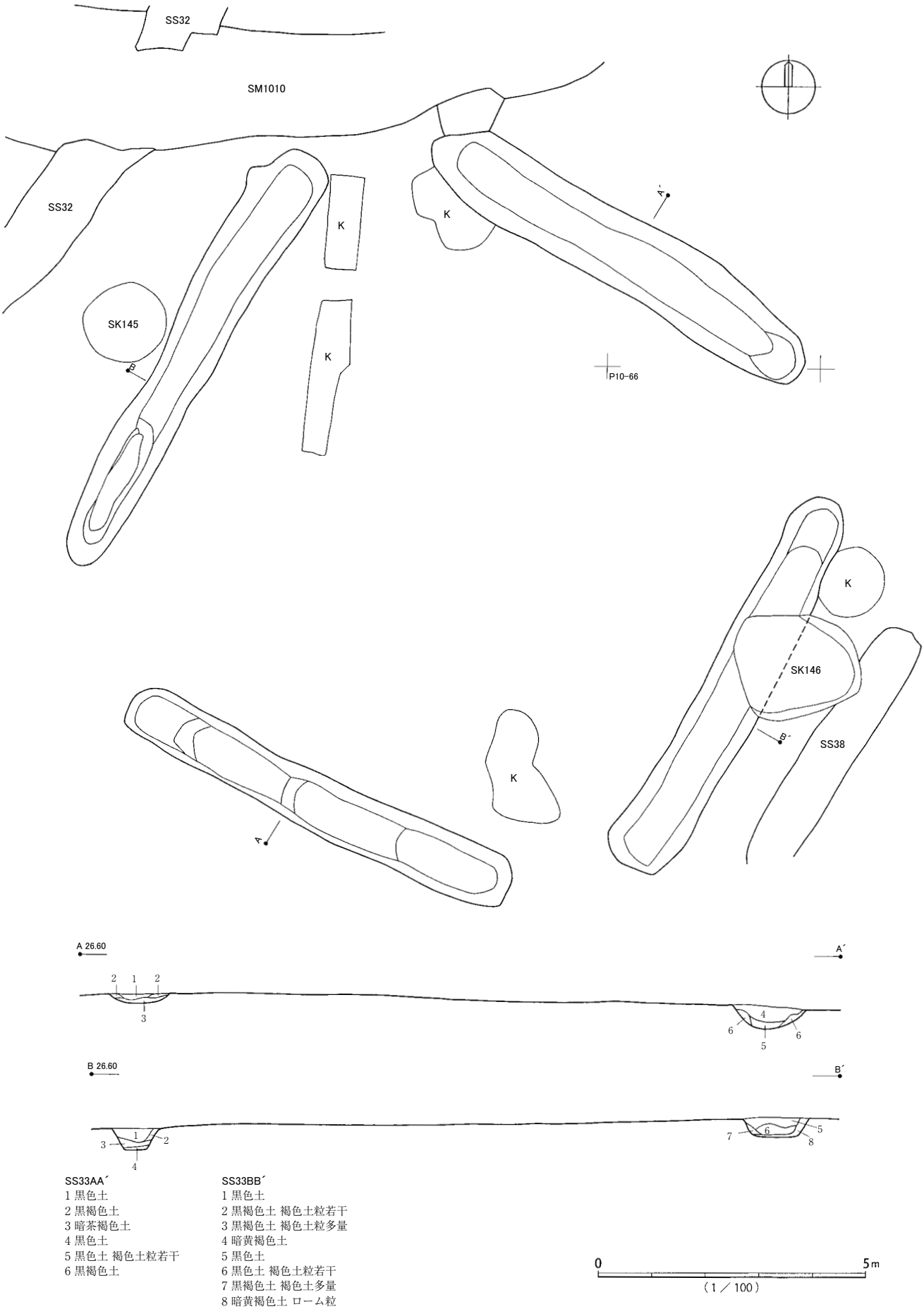
1は壺形土器である。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS39　セ28地区（Fig.79、PL.27）

Q11-35付近に位置する方形周溝墓である。北西側にSS38が、南東側にSS40が位置し、列状を形成する。西側周溝とSK256の新旧関係は不明である。本遺構は、発掘調査時にはセ28-033と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、やや歪んだ方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が7.56m×7.16m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.94m・0.26m、0.56m、東溝が0.58m・0.18m、0.30m、南溝が0.78m・0.18m、0.36m、西溝が0.68m・0.28m、0.50m



SS33AA´
1 黒色土
2 黒褐色土
3 暗茶褐色土
4 黒色土
5 黒色土 褐色土粒若干
6 黒褐色土

SS33BB´
1 黒色土
2 黒褐色土 褐色土粒若干
3 黒褐色土 褐色土粒多量
4 暗黄褐色土
5 黒色土
6 黒色土 褐色土粒若干
7 黒褐色土 褐色土多量
8 暗黄褐色土 ローム粒

Fig.72　SS33 遺構、SK145 遺構、SK146 遺構実測図

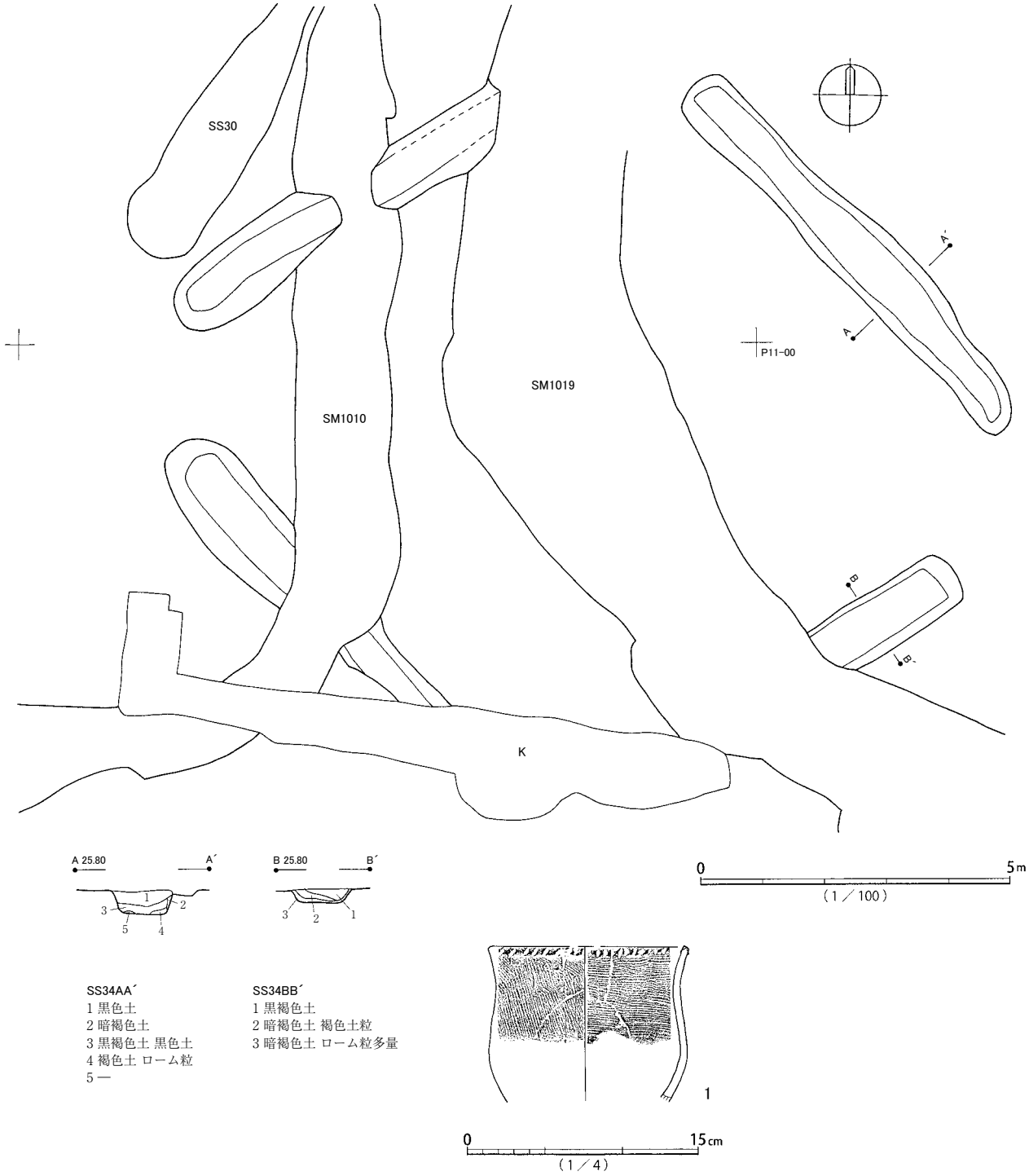


Fig.73　SS34 遺構・遺物実測図

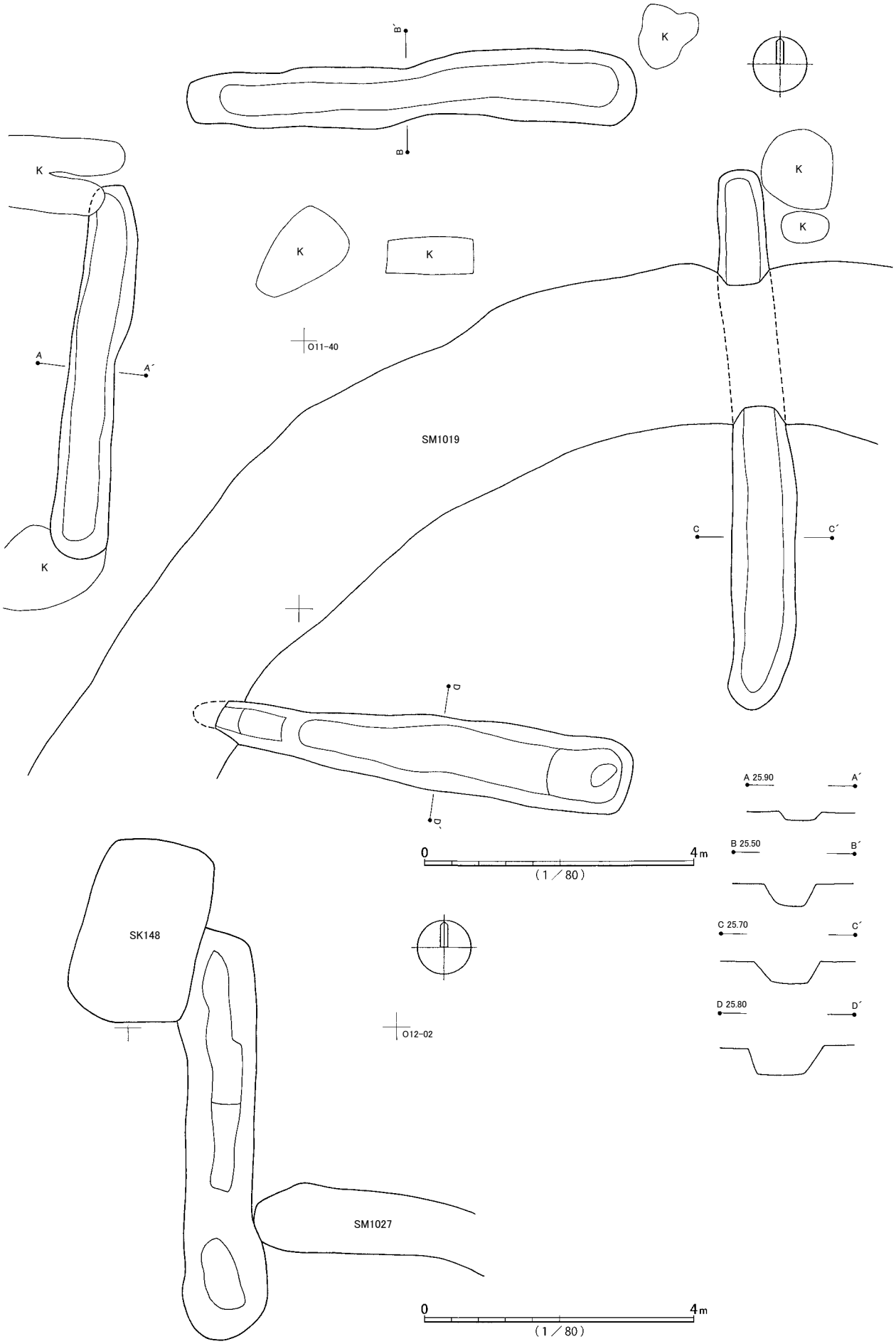


Fig.74　SS35 遺構、SS36 遺構実測図

を測る。周溝底面は平坦面は少なく、断面形状は不整形である。墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-52°-Wである。

埋葬施設は方台部中央よりやや北寄りに、主軸方向を周溝のそれを意識して位置する。

主体部からは木棺痕が検出されており、平面形は不整方形、規模は長軸1.83m×短軸0.93m、確認面からの深さ0.27mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-60°-Wである。

墓壙の平面形状は、長方形で、規模は1.80m×0.93m、確認面からの深さは、0.39mを測る。主軸方位は長軸方向からN-57°-Wである。底面は不整形で中央が深く、凹凸が激しい。断面形状は、短軸方向ではU字形で、長軸方向では両端部に向け浅くなる形状を呈する。

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS40　セ28地区（Fig.80）

Q11-88付近に位置する方形周溝墓である。北西側にSS39が、南東側にSS59が位置し、列状を形成するが、本遺構を支点として屈折する。南側からSM1001、SM1005に掘削される。本遺構は、発掘調査時にはセ28-162と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状はやや歪んだ方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が8.48m×(8.02)m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.26m・0.56m、0.62m、東溝が0.78m・0.64m、0.23m、南溝が0.78m・0.20m、0.25m、西溝が(1.00)m・0.66m、0.18mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形に近い。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-38°-Eである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS41　セ28地区（Fig.81）

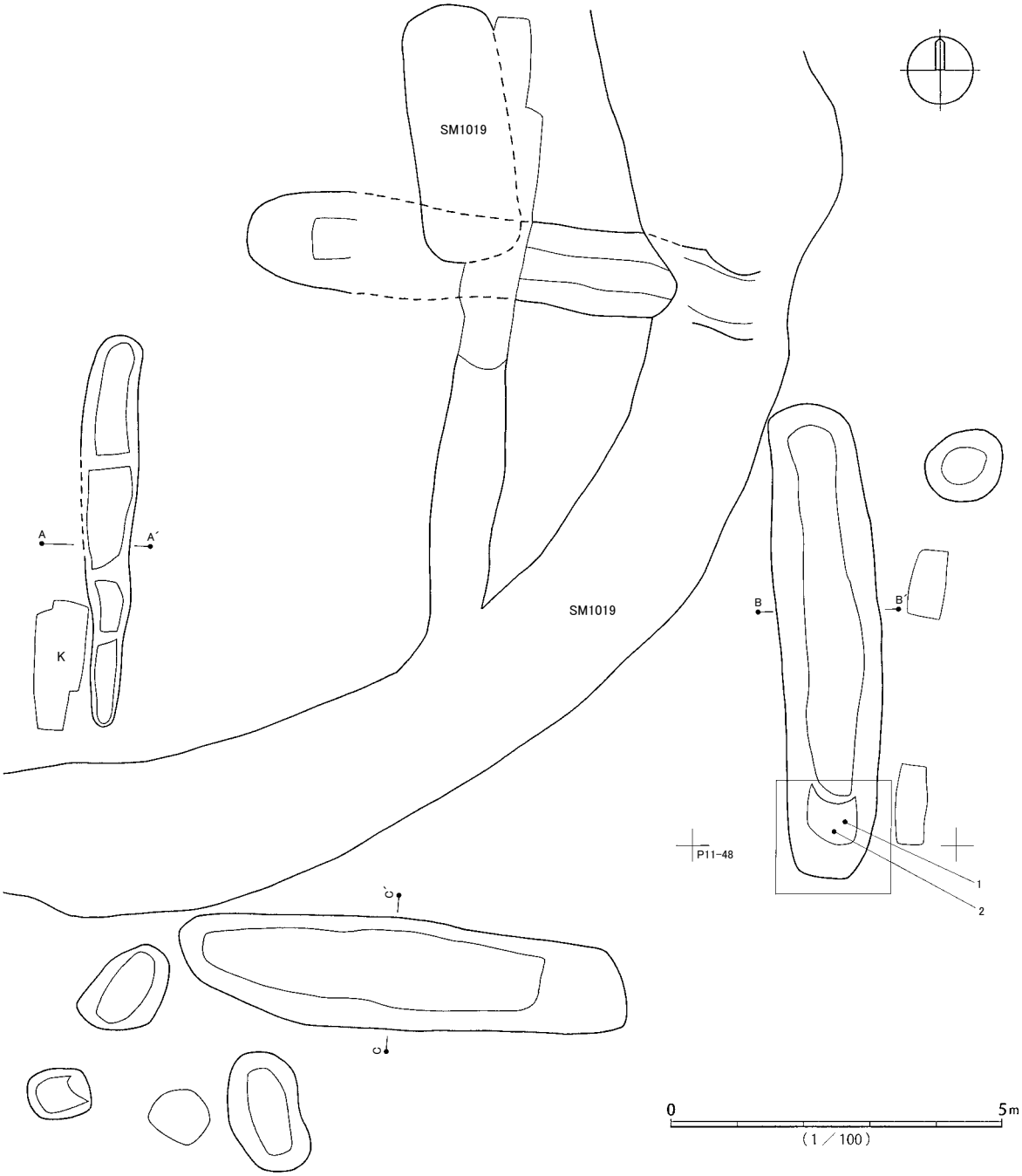
Q12-04付近に位置する方形周溝墓である。北西側にSS37が、南東側にSS42が位置し、列状を形成する。SM1029、SK258が重複する。本遺構は、発掘調査時099地区とセ28地区で遺構番号を付与しており、099-4082、セ28-163と呼称されているが、099地区調査時には他遺構との混乱がみられる。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

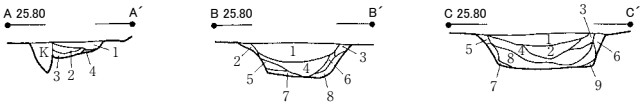
平面形状は方形を呈するとみられる。周溝は北側の区画を欠き、二隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が10.06m×計測不能、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で計測不能、東溝が1.40m・0.60m、0.86m、南溝が(1.00)m・(0.75)m、0.52m、西溝が1.10m・0.40m、0.70mを測る。周溝の断面形状等は記録類が限られ、詳細は不明である。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-63°-Eである。

埋葬施設は方台部中央に1基位置する。主体部からは木棺痕が検出されており、平面形は不整方形、規模は短軸0.70m、確認面からの深さ0.16mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-69°-Eである。

墓壙の平面形状は長方形で、規模は1.44m、確認面からの深さは、0.20mを測る。主軸方位は長軸方向からN-68°-Eである。底面は隅丸長方形を呈する。断面形状は、短軸方向、長軸方向共に逆台形を呈する。



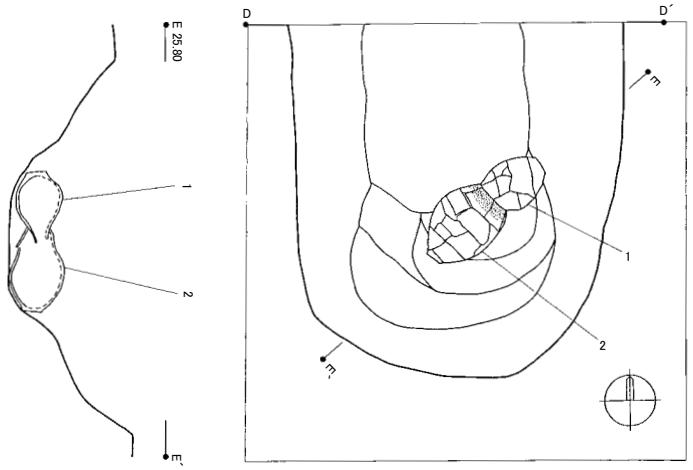


SS37AA´
1 黒色土
2 暗褐色土
3 暗褐色土 ローム粒
4 ―

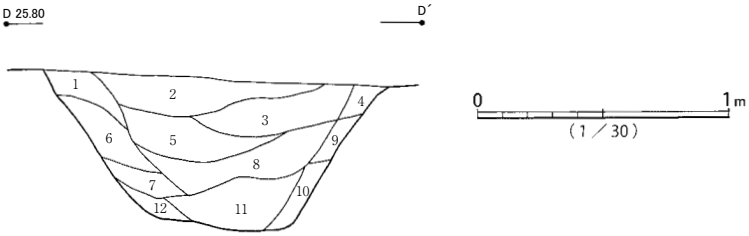
SS37BB´
1 黒色土
2 褐色土
3 黒褐色土
4 黒色土
5 暗黒褐色土 ローム粒
6 暗黒褐色土
7 ―
8 暗茶褐色土 褐色土粒、ローム粒

SS37CC´
1 黒色土
2 黒色土
3 ―
4 ―
5 褐色土
6 暗褐色土
7 暗茶褐色土
8 黒褐色土 黒色土
9 暗茶褐色土

Fig.75　SS37 遺構実測図



SS37DD´
1 暗褐色土 わずかにローム粒
2 黒褐色土 赤色粒を一様に含む
3 黒褐色土 2 層と似る わずかに斑
4 暗褐色土 1 層より褐色味強 ローム
5 黒褐色土 2、3 層と似る 赤色粒子、ローム粒を比較的顕著に含む
6 暗褐色土 ローム斑状に顕著に含む
7 暗褐色土 6 層と似る ロームがやや少ない
8 黒褐色土 2、3、5 層と似る 赤色粒子、ローム粒微量、わずかに斑
9 暗褐色土 ロームを斑状にわずかに含む
10 暗褐色土 9 層と似る ローム多く、黄色味強い
11 暗褐色土 斑、ローム粒わずかに含む
12 暗黄褐色土 ほぼローム単一、わずかに暗褐色土



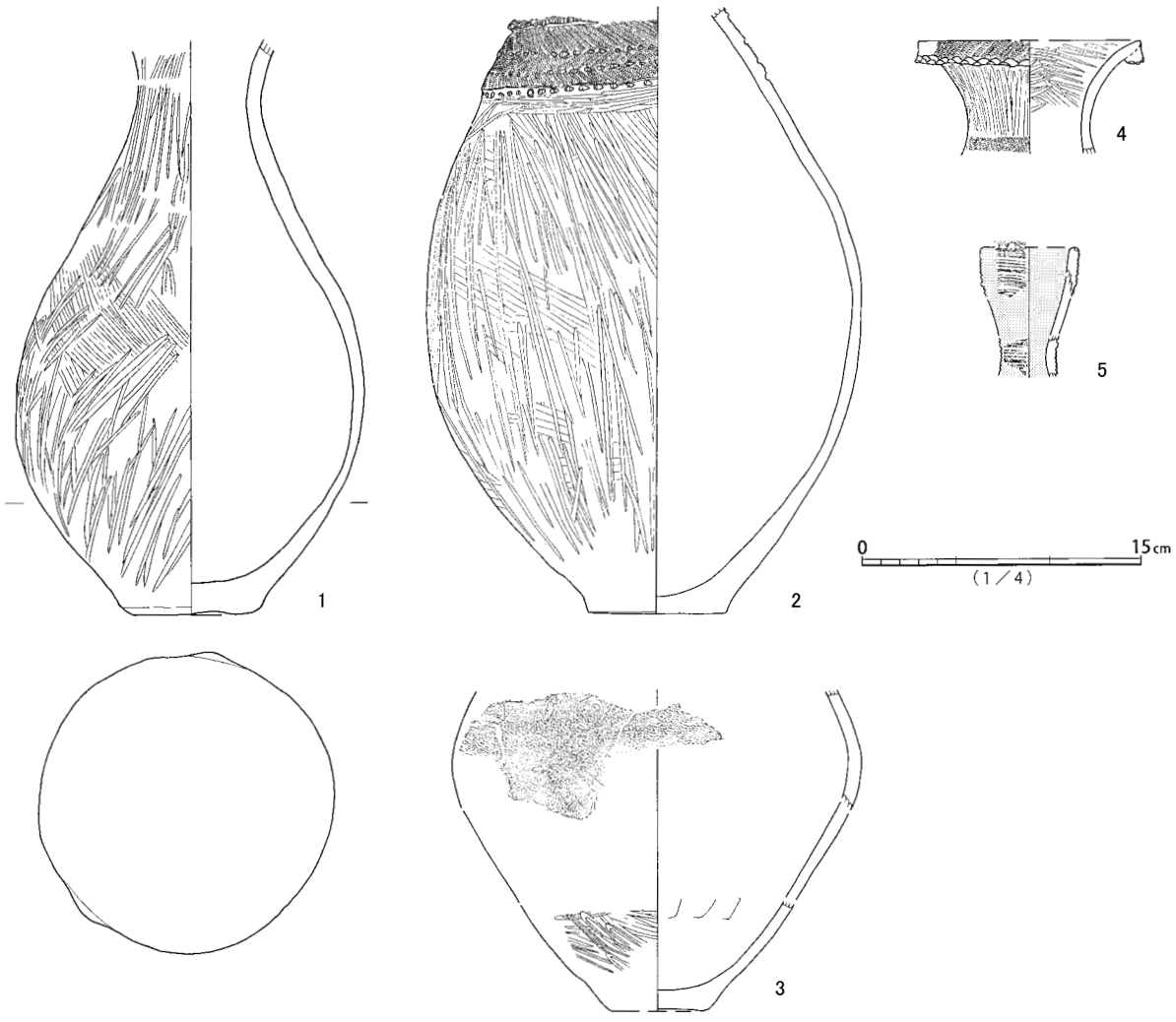
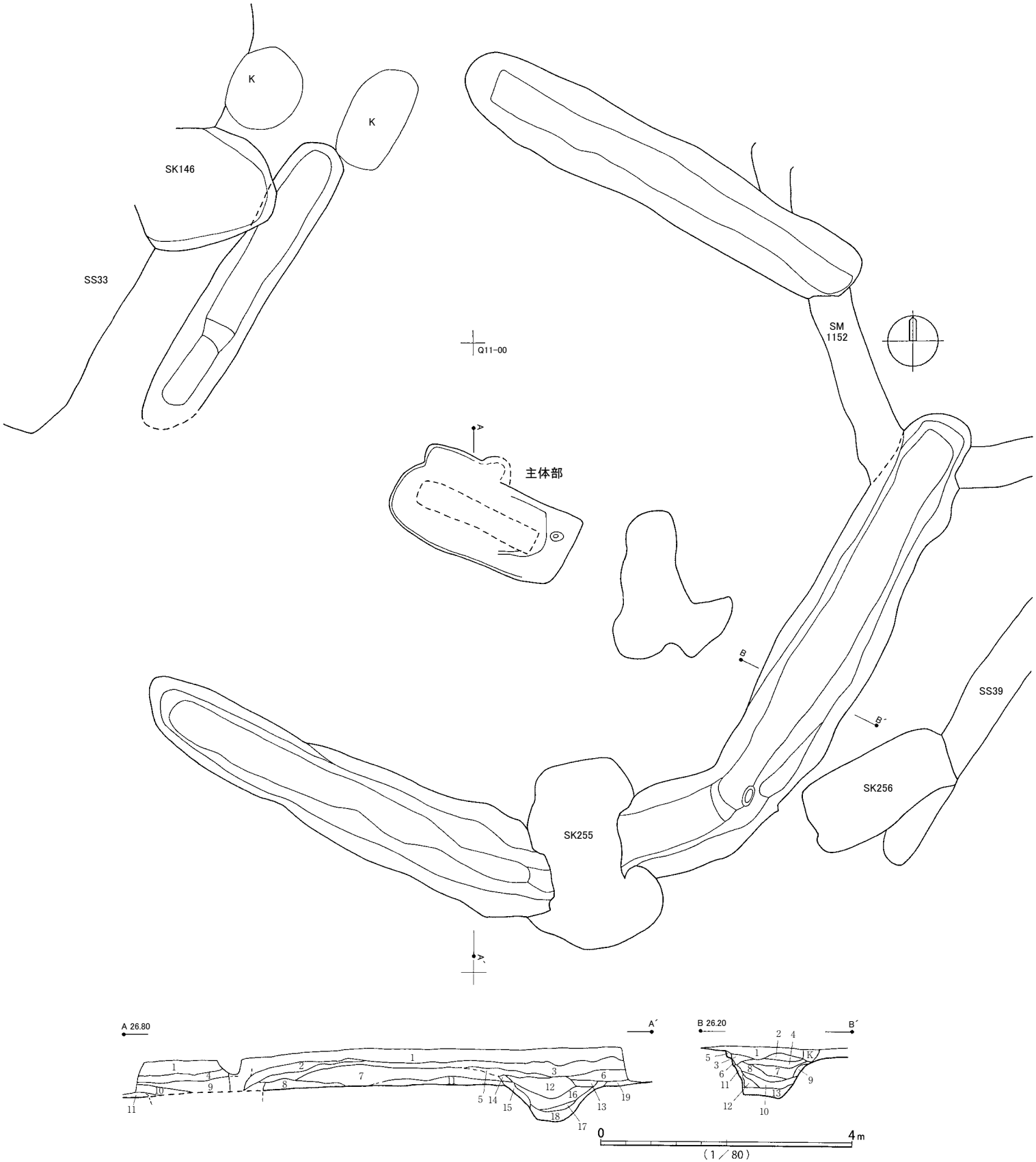


Fig.76　SS37 遺物出土詳細・遺物実測図



SS38AA´
1 ― 表土
2 暗褐色土
3 黒褐色土 ボソボソのブロック
4 ―
5 ―
6 黒褐色土
7 黒褐色土
8 黒褐色土 褐色土
9 黒褐色土 (きたない) ローム粒・ロームブロック
10 黒褐色土 (ややきたない)
11 ― 暗茶褐色土ブロック
12 黒色土
13 ― 褐色土粒、ローム粒
14 ―
15 暗茶褐色土 ロームブロック・ローム粒
16 暗黒褐色土 ローム粒
17 暗褐色土 ローム粒若干
18 暗褐色土 ローム粒多量
19 ―

SS38BB´
1 黒褐色土
2 ―
3 ―
4 黒色土
5 ―
6 ―
7 暗黒色土 ローム粒
8 黒色土 ローム粒
9 ― 黒褐色土粒
10 暗褐色土黒 褐色土、ローム粒多量
11 ― 褐色土粒、ローム粒・ロームブロック
12 ― 褐色土粒、ローム粒
13 ― ローム粒土・ロームブロック、黒褐色土

Fig.77　SS38 遺構 (1) 実測図

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS42　セ28地区（Fig.82、PL.27）

Q12-55付近に位置する方形周溝墓である。北西側にSS41が、南東側にSS44が位置し、列状を形成する。SM1005墳丘下に位置する。本遺構は、発掘調査時にはセ28-185と呼称されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、やや歪んだ方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が9.24m×8.40m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で(1.72)m・0.40m、0.57m、東溝が1.28m・(0.72)m、0.35m、南溝が0.56m・0.40m、0.20m、西溝が1.00m・0.68m、0.64mを測る。周溝底面は平坦面が少なく、断面形状は逆台形、レンズ状と安定しない。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-36°-Wである。埋葬施設は方台部中央に1基検出している。主体部墓壙の平面形状は長方形で、規模は計測不能×1.90mを測る。主軸方位は長軸方向からN-59°-Eである。

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS43　セ28地区（Fig.83）

Q13-00付近に位置する方形周溝墓である。南西側にSS42が位置し、周辺に展開する列状の系列には入らない。SS99、SM1005と重複し、いずれも本遺構に対し新しい。本遺構は、発掘調査時にはセ28-148と呼称されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈するとみられる。周溝は東側の区画を欠き、二隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が(9.98)m×計測不能、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で(1.32)m・0.58m、0.36m、東溝が計測不能、南溝が(1.60)m・(0.68)m、0.39m、西溝が(1.68)m・0.76m、0.59mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-26°-Wである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。

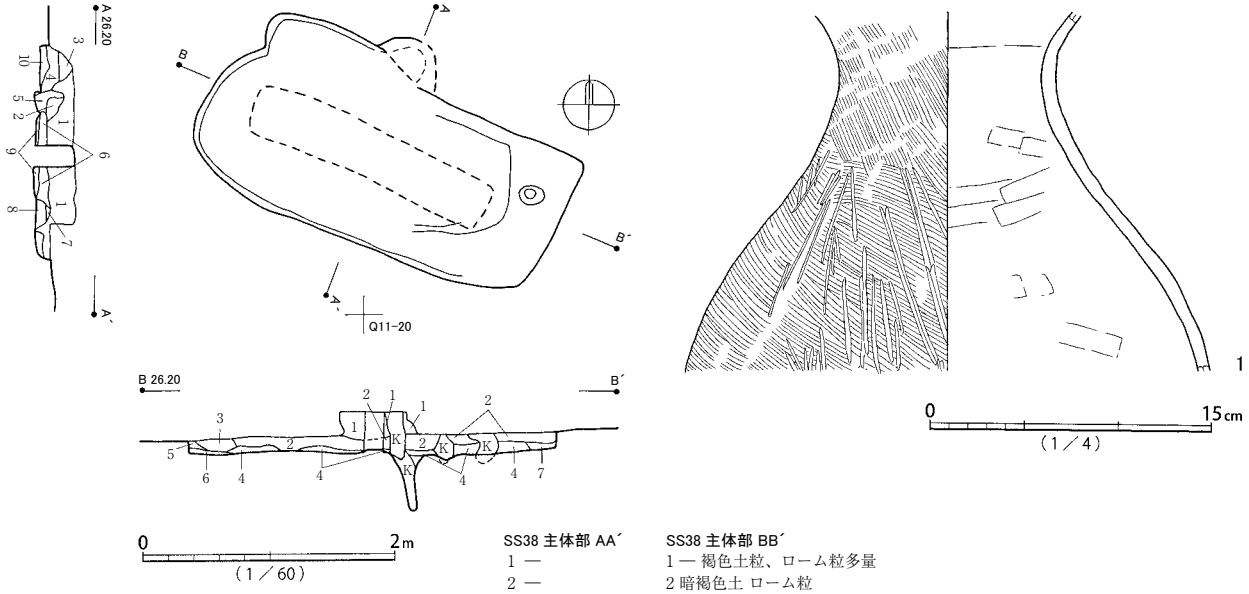
帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS44　セ28地区（Fig.84～85、PL.27・156～157）

Q13-83付近に位置する方形周溝墓である。北西側にSS42が位置し、列状を形成するが、本遺構は南東端に位置する。北側でSM1005に掘削される。本遺構は、発掘調査時にはセ28-150と呼称されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状はやや歪んだ方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が11.00m×9.58m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で(0.78)m・(0.40)m、0.25m、東溝が1.20m・0.72m、0.48m、南溝が1.00m・0.40m、0.34m、西溝が0.80m・0.24m、0.64mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形、漏斗状と安定しない。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-54°-Eである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。



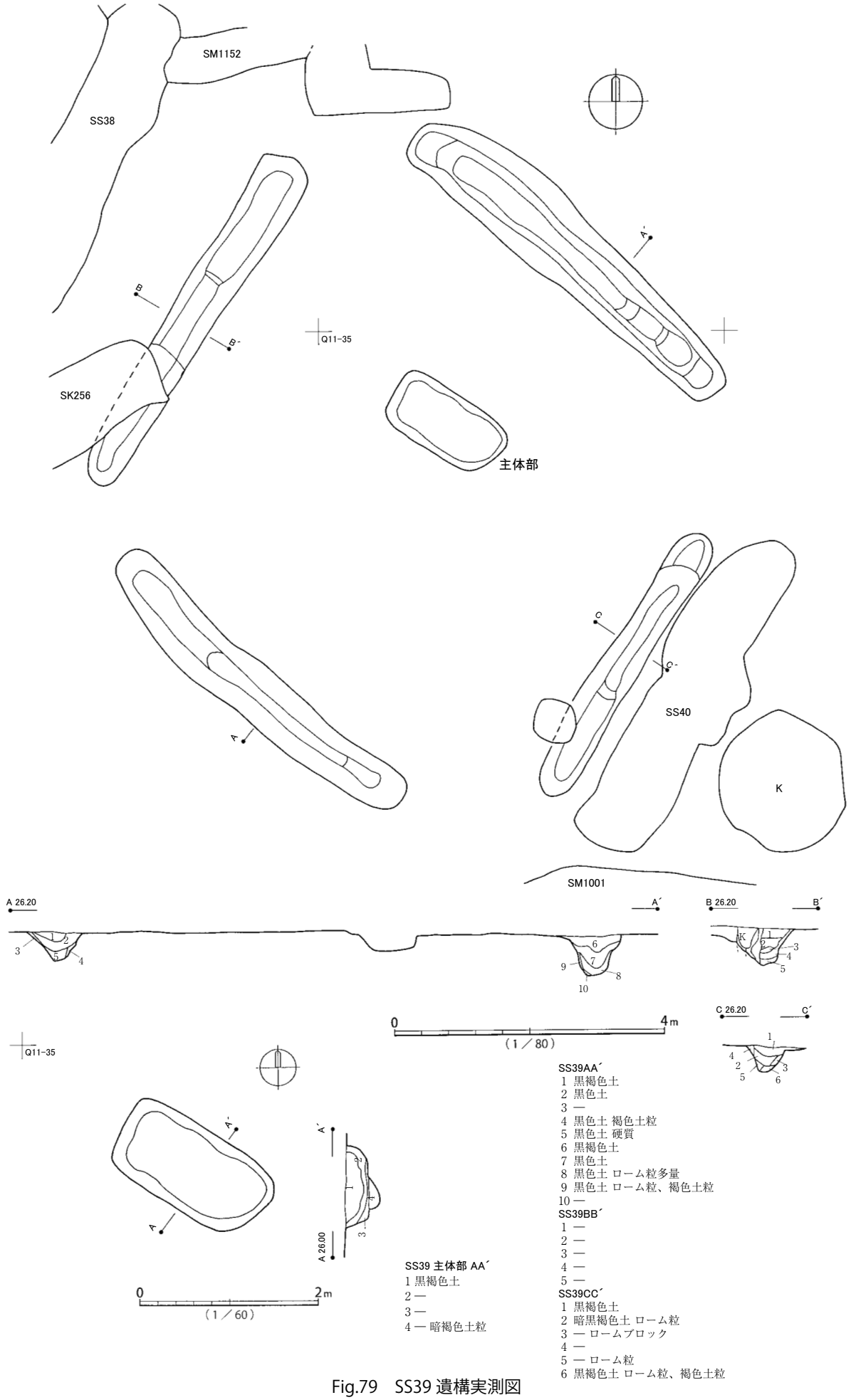
SS38 主体部 AA´

1 —
2 —
3 —
4 —
5 —
6 —
7 —
8 —
9 —
10 —

SS38 主体部 BB´

1 — 褐色土粒、ローム粒多量
2 暗褐色土 ローム粒
3 —
4 褐色土 ローム粒 硬質
5 —
6 暗褐色土
7 —

Fig.78　SS38 遺構 (2)・遺物実測図



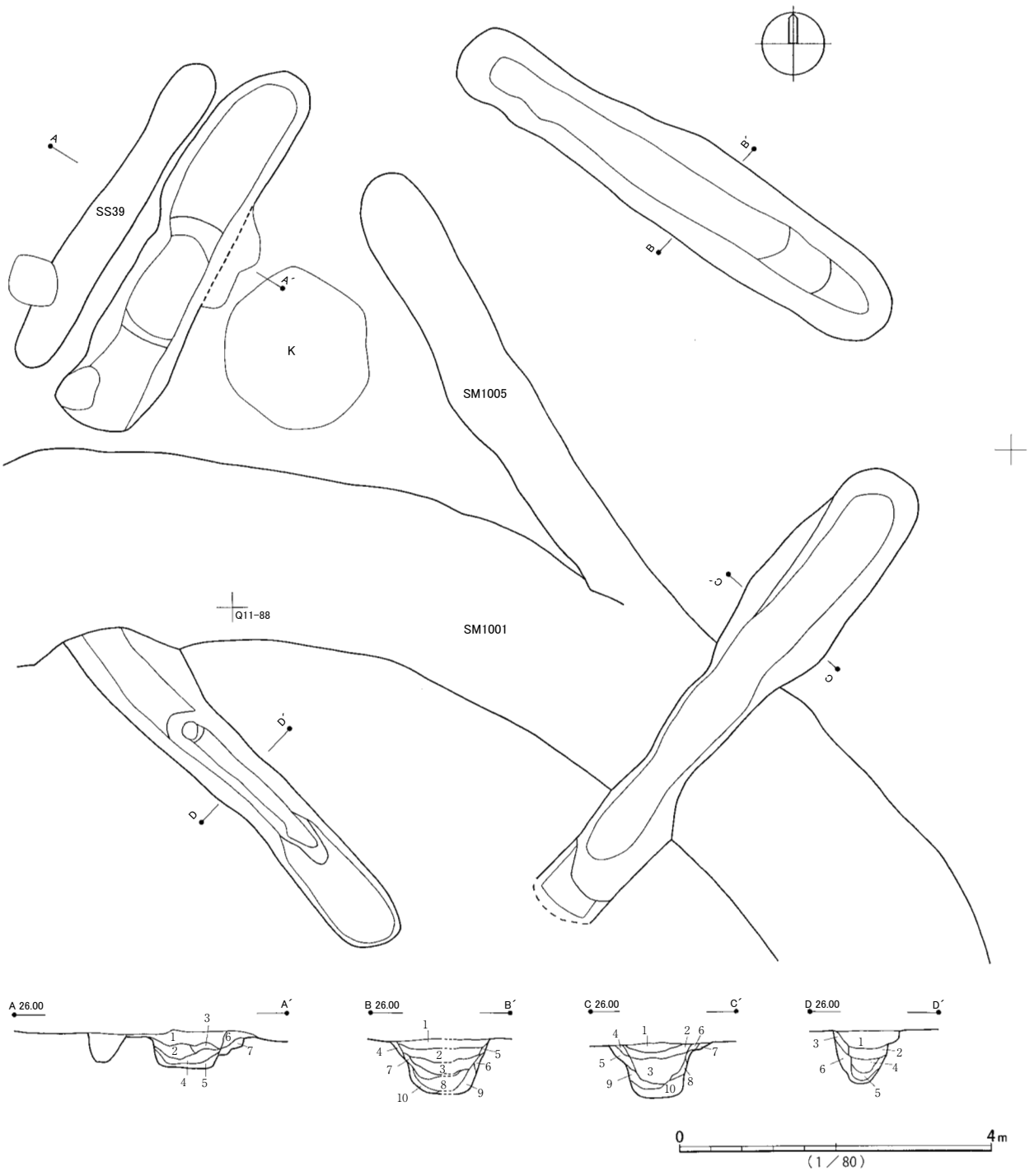
SS39AA´
1 黒褐色土
2 黒色土
3 —
4 黒色土 褐色土粒
5 黒色土 硬質
6 黒褐色土
7 黒色土
8 黒色土 ローム粒多量
9 黒色土 ローム粒、褐色土粒
10 —

SS39BB´
1 —
2 —
3 —
4 —
5 —

SS39CC´
1 黒褐色土
2 暗黒褐色土 ローム粒
3 — ロームブロック
4 —
5 — ローム粒
6 黒褐色土 ローム粒、褐色土粒

SS39 主体部 AA´
1 黒褐色土
2 —
3 —
4 — 暗褐色土粒

Fig.79　SS39 遺構実測図



SS40AA´
1 暗黒褐色土
2 黒色土 ローム粒多量
3 暗褐色土
4 黒色土 暗褐色土粒、ローム粒
5 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒
6 ―
7 ―

SS40BB´
1 暗黒褐色土
2 黒色土
3 黒色土 褐色土
4 暗茶色土
5 暗褐色土
6 ― ローム粒
7 暗黒褐色土 ローム粒
8 暗黒褐色土 ローム粒若干
9 ―
10 暗褐色土 ローム粒

SS40CC´
1 黒褐色土
2 暗黒褐色土
3 暗黒色土 テフラブロック
4 ―
5 ― ローム粒若干
6 ―
7 暗茶色土
8 暗黒褐色土 ローム粒若干
9 暗黒褐色土 ローム粒若干
10 暗褐色土 褐色土粒多量、ローム粒

SS40DD´
1 黒褐色土
2 暗黒褐色土
3 暗褐色土 ローム粒
4 黒色土
5 黒色土 ローム粒若干
6 暗褐色土

Fig.80　SS40 遺構実測図

遺物は周溝から出土している。1・2は壺形土器で、1は底部中央を焼成後に打ち欠いて穿孔している。3は小形鉢形土器であろうか。

帰属時期は、宮ノ台式期後半の所産と考えられる。

SS45　セ28地区（Fig.85、PL.27）

Q14-00付近に位置する方形周溝墓である。南側にSS46が位置するが、周辺に展開する列状の系列からは外れているようにみえる。SM1015と重複する。本遺構は、発掘調査時にはセ28-190と呼称されている。

平面形状は方形を呈するとみられるが、北西、北東側の区画を欠く。周溝は隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等である。規模は方台部が計測不能、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で計測不能、東溝が1.80m・0.60m、0.70m、南溝が1.30m・0.58m、0.64mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は計測不能である。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS46　セ28地区（Fig.86、PL.28）

Q14-30付近に位置する方形周溝墓である。北西側にやや離れてSS43が、南東側にはSS47が隣接する。小規模な列を形成している可能性がある。北側をSM1015が掘削する。本遺構は、発掘調査時にはセ28-152と呼称されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状はほぼ正方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が10.50m×10.42m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.74m・0.40m、0.34m、東溝が1.10m・0.57m、0.50m、南溝が(1.04)m・0.44m、0.38m、西溝が0.94m・0.40m、0.43mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-28°-Wである。

埋葬施設は方台部中央に1基検出している。

主体部からは木棺痕が検出されており、平面形は長方形を呈するが、SM1015に削平されている。規模は長軸計測不能×短軸0.73m、確認面からの深さ0.43mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-60°-Eである。

墓壙の平面形状は長方形で、規模は計測不能×1.58m、確認面からの深さは、0.43mを測る。主軸方位は長軸方向からN-60°-Eである。底面は長方形で中央が深く、平坦である。断面形状は、短軸方向、長軸方向で逆台形を呈し、両端部に向け浅くなる。

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS47　セ28地区（Fig.87、PL.28）

R14-50付近に位置するSM1164とSK254が重複し、いずれも本遺構に対して新しい。方形周溝墓である。北西側にSS46が近接する。小規模な列状を形成する可能性がある。SM1164とSK254が重複し、いずれも本遺構に対して新しい。本遺構は、発掘調査時にはセ28-153と呼称されている。事実記載に

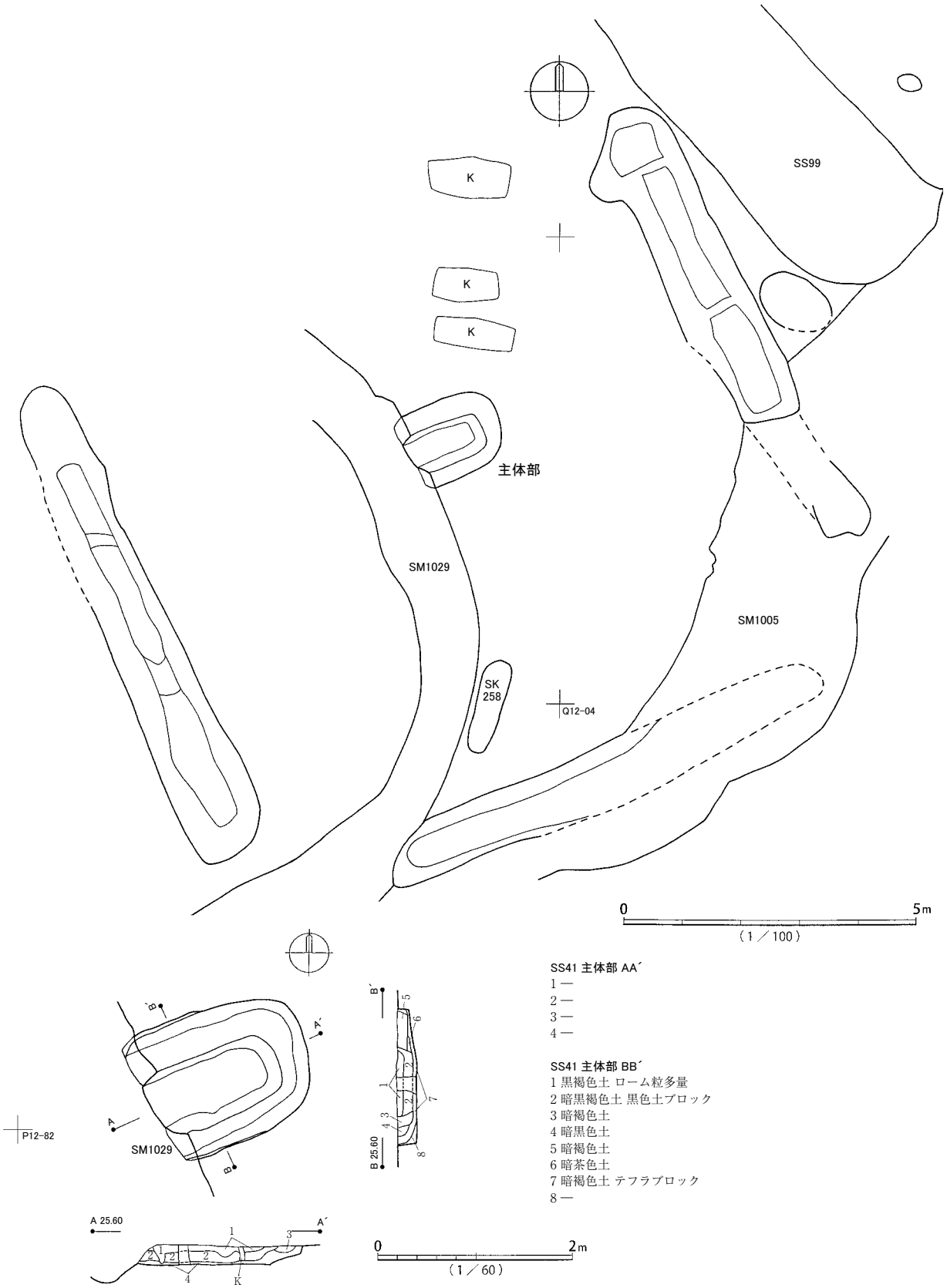
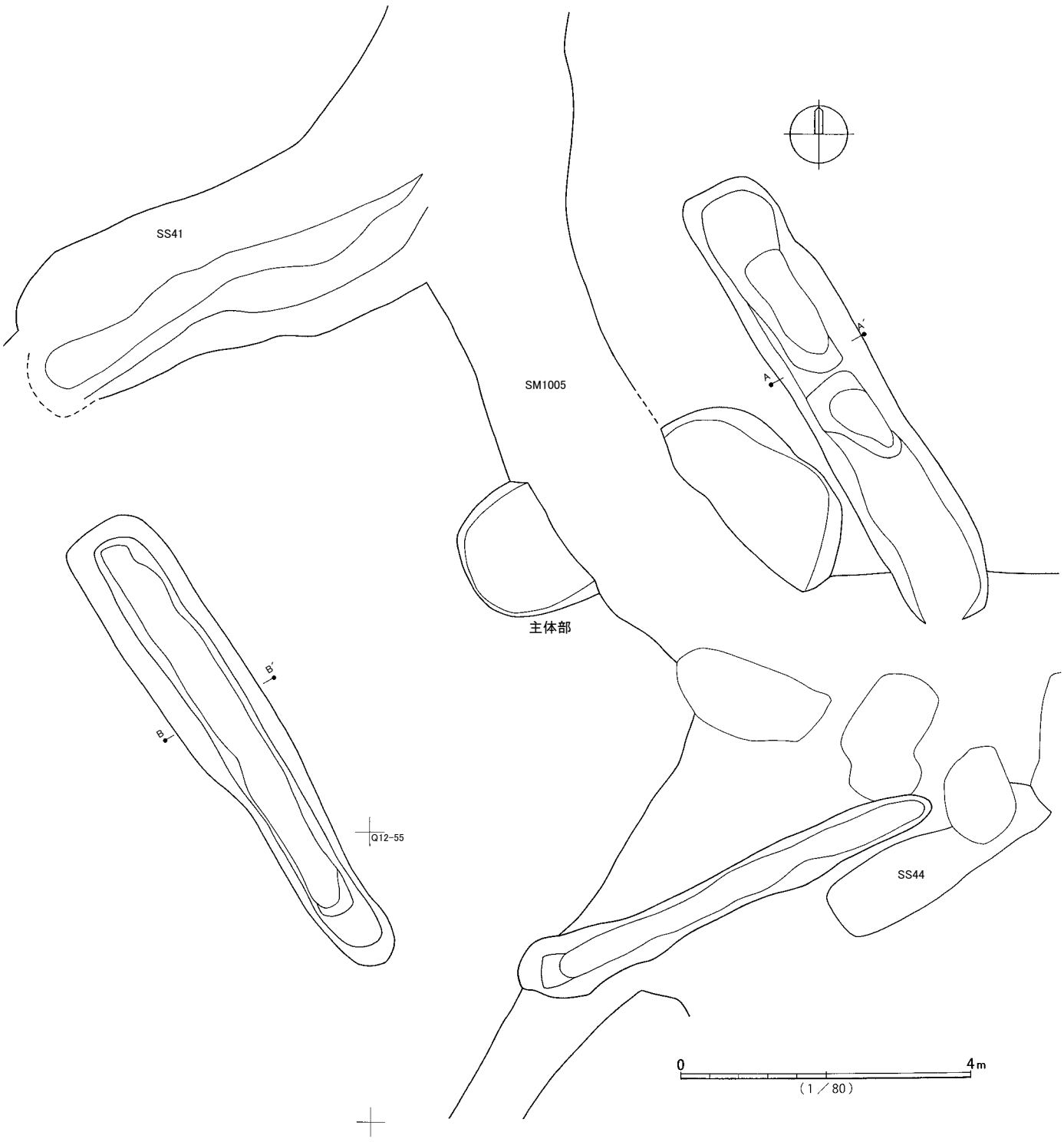
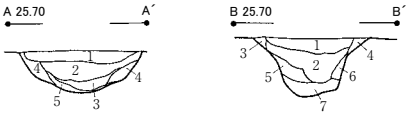


Fig.81　SS41 遺構実測図

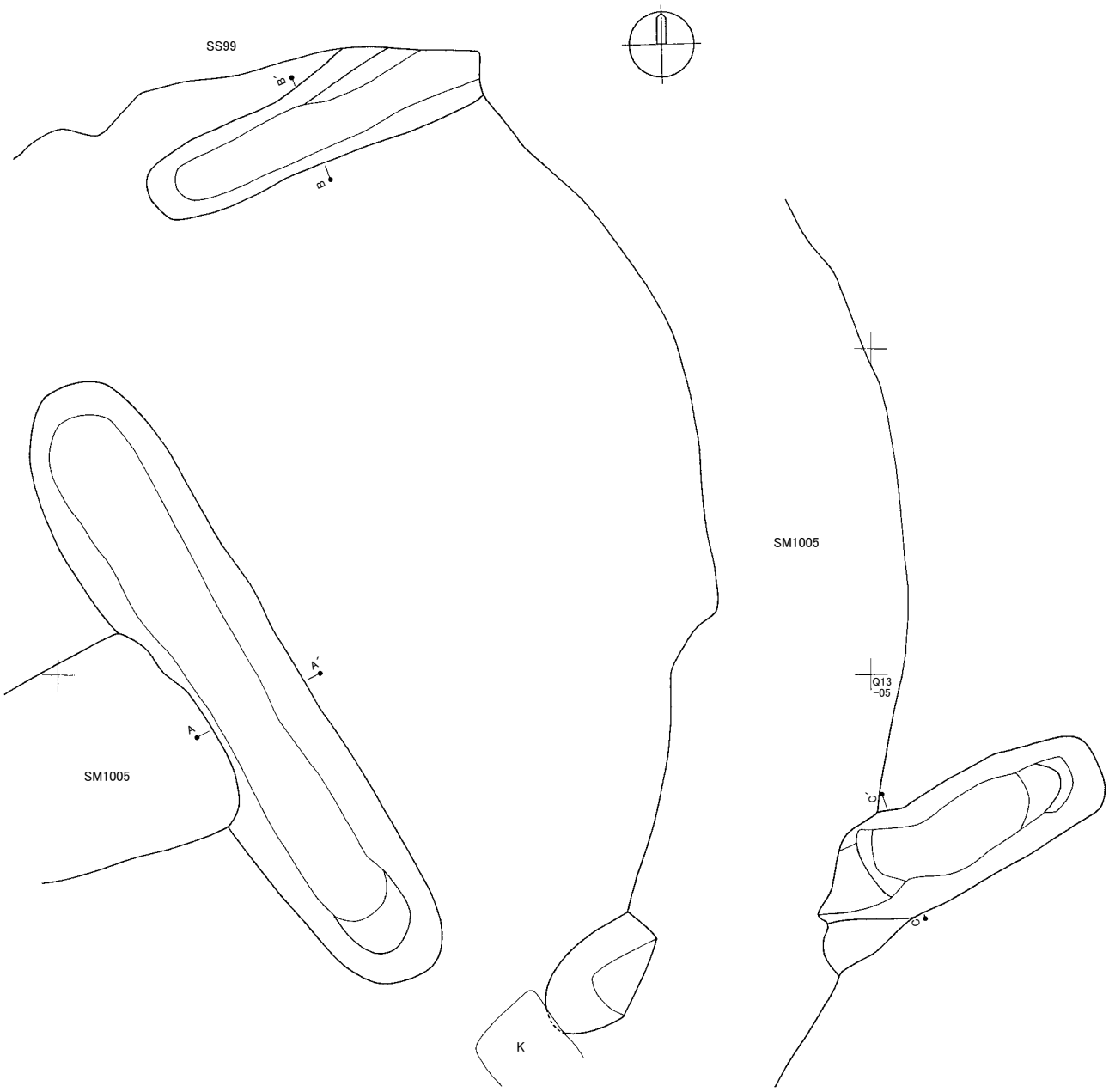




SS42AA´
1 暗黒褐色土
2 黒色土
3 暗黒褐色土 ローム粒
4 ― 褐色土ブロック、ローム粒
5 褐色土 ローム粒多量

SS42BB´
1 黒色土
2 暗黒色土 ローム粒若干
3 暗茶色土
4 暗茶色土
5 暗黒褐色土 褐色土、ローム粒
6 暗褐色土 ローム粒
7 暗黒褐色土 褐色土粒土

Fig.82　SS42 遺構実測図



SS43AA´
1 黒褐色土
2 黒褐色土
3 暗黒褐色土
4 黒褐色土 褐色土ブロック
5 黒褐色土 ローム粒
6 ― 褐色土粒、ローム粒
7 ―

SS43BB´
1 黒褐色土・褐色土の混合
2 暗黒褐色土
3 暗褐色土
4 黒褐色土 ローム粒若干

SS43CC´
1 暗黒褐色土 黒色土ブロック
2 暗黒褐色土
3 ― 褐色土ブロック
4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック
5 ― 褐色土ブロック、ローム粒

Fig.83　SS43 遺構実測図

あたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が8.42m×7.48m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.12m・0.82m、0.35m、東溝が0.86m・0.28m、0.32m、南溝が0.80m・0.30m、0.29m、西溝が1.04m・0.48m、0.47mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-66°-Eである。

埋葬施設は方台部中央から南西に寄った位置に1基検出している。主体部からは木棺痕が検出されており、平面形は不整方形、規模は長軸1.45m×短軸0.55m、確認面からの深さ0.27mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-60°-Eである。墓壙の平面形状は長方形で、規模は2.00m×1.11m、確認面からの深さは、0.27mを測る。主軸方位は長軸方向からN-60°-Eである。

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS48　セ28地区（Fig.88、PL.28～29）

R15-05付近に位置する方形周溝墓である。北側と南側をSM1093、SM1180に掘削される。周囲の列状の系列からは距離を置いて位置する。本遺構は、発掘調査時にはセ28-159、主体部はセ54-109と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈するとみられ、周溝は西側の区画を欠き、二隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が8.00m×計測不能、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.28m・0.80m、0.19m、東溝が1.10m・0.54m、0.41m、南溝が0.74m・0.44m、0.20mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-50.5°-Eである。埋葬施設は方台部中央から南に寄って1基検出している。

主体部からは木棺痕が検出されており、平面形は長方形、規模は長軸1.45m×短軸(0.60)m、確認面からの深さ0.23mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-63°-Eである。

墓壙の平面形状は長方形で、規模は1.90m×1.15m、確認面からの深さは、0.25mを測る。主軸方位は長軸方向からN-60°-Eである。底面は長方形で中央が浅く、凹凸が激しい。断面形状は、短軸方向、長軸方向共に逆台形を呈する。

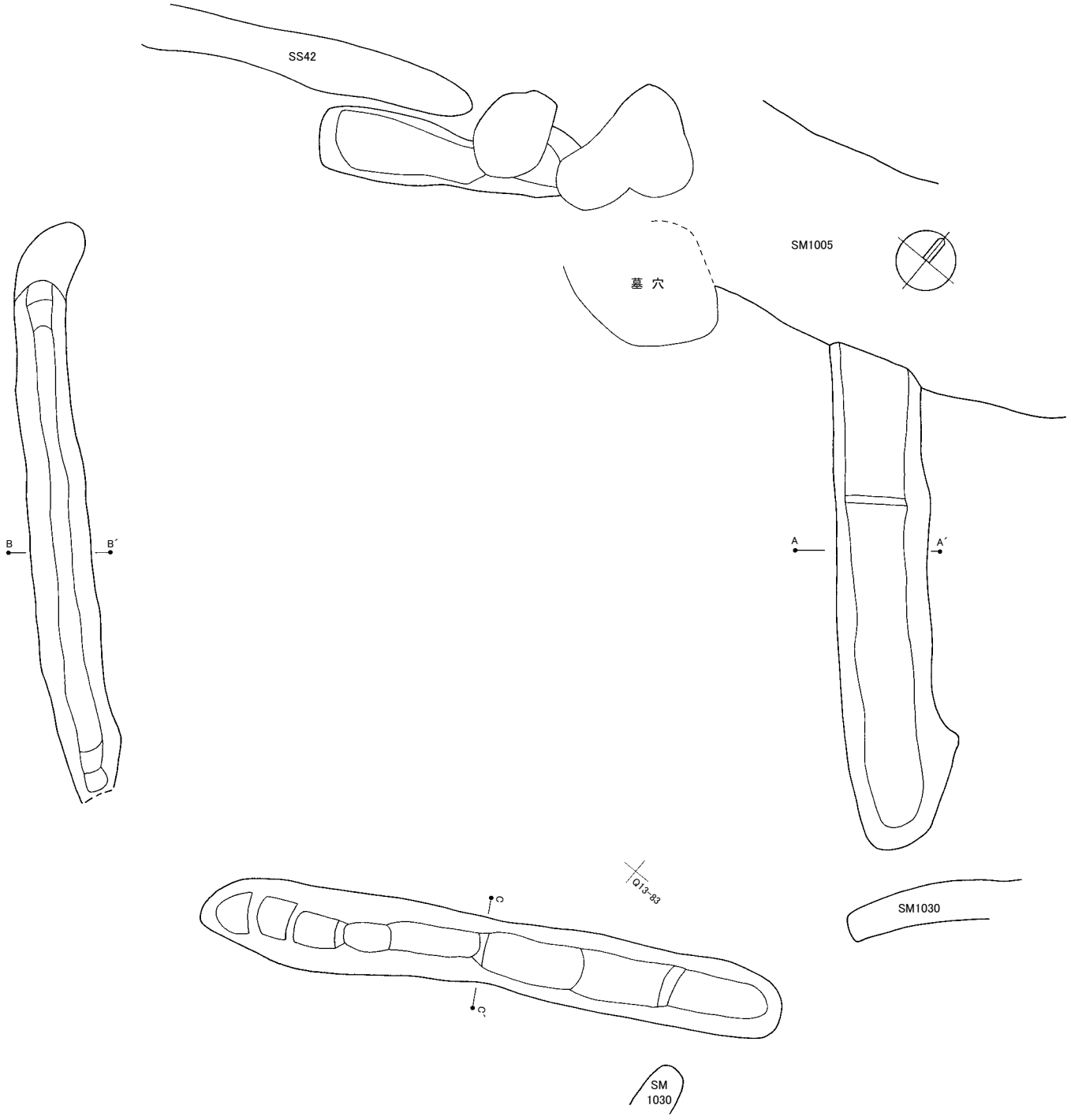
出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS49　セ28地区・セ54地区（Fig.89～90、PL.29・157）

S15-00付近に位置する方形周溝墓である。北側にSS48が、東側にSS50が位置する。規模が近い同形態の方形周溝墓が3基東西方向に近接して列状を形成し、本遺構は西端に位置する。西側と南側をSM1164、SM1177、SM1159に掘削される。発掘調査時にはセ54-№9と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が13.44m×12.60m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.88m・0.96m、0.75m、東溝が1.60m・0.40m、0.84m、南溝が1.68m・0.48m、0.80m、西溝が(1.56)m・0.88m、0.71mを

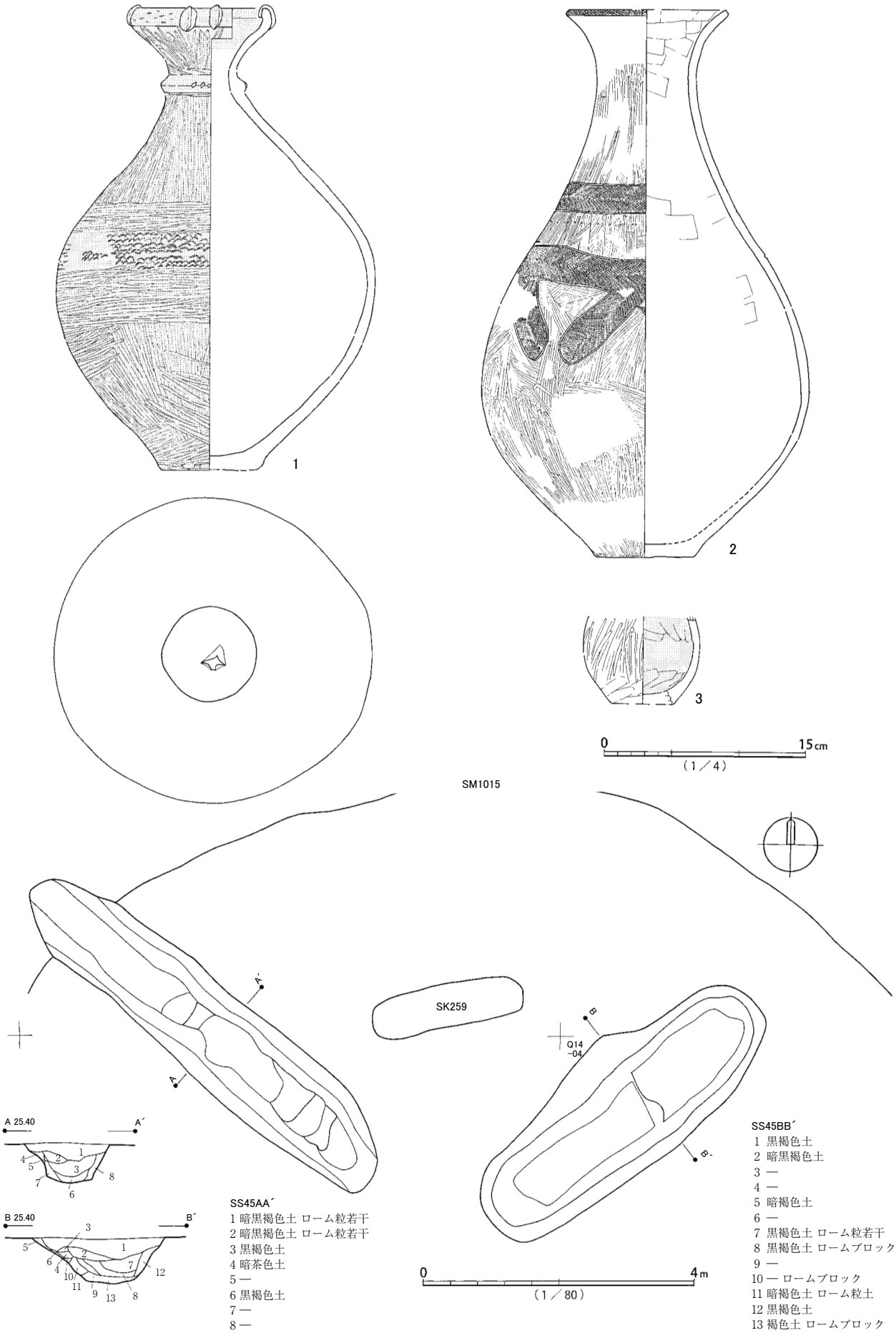


SS44AA´
1 黒褐色土
2 黒褐色土
3 暗黒褐色土
4 暗褐色土
5 ―
6 暗褐色土

SS44BB´
1 黒褐色土
2 暗黒褐色土
3 暗褐色土
4 黒色土
5 黒色土 テフラブロック
6 褐色土 ローム粒
7 黒色土 ローム粒、褐色土粒

SS44CC´
1 暗黒褐色土
2 暗黒色土
3 暗黒褐色土
4 黒褐色土
5 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック
6 褐色土 ローム粒
7 褐色土 ローム粒
8 暗褐色土
9 黒褐色土
10 ― 褐色土粒、ローム粒
11 暗褐色土 ローム粒、褐色土粒

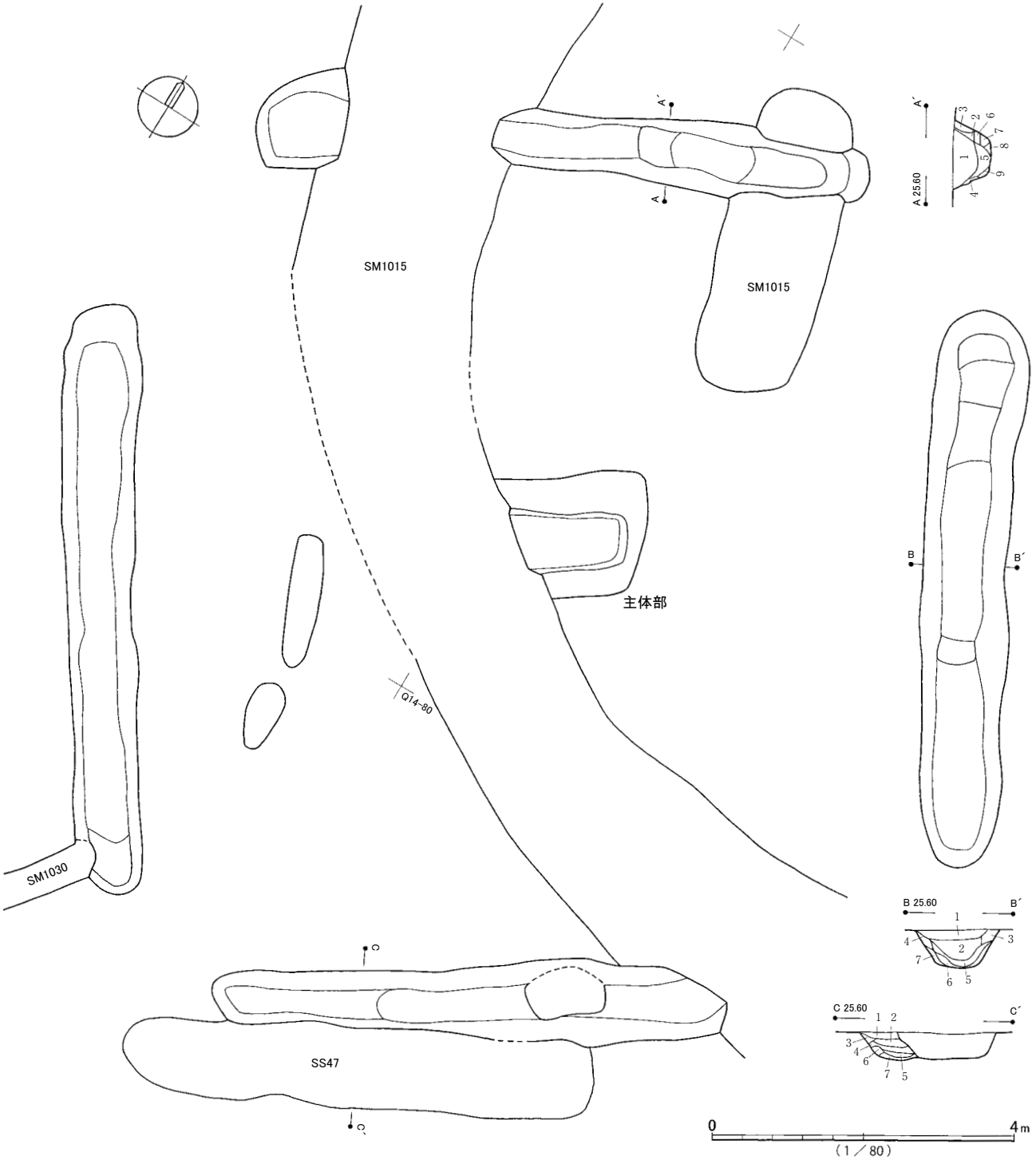
Fig.84　SS44 遺構実測図



SS45AA´
1 暗黒褐色土 ローム粒若干
2 暗黒褐色土 ローム粒若干
3 黒褐色土
4 暗茶色土
5 —
6 黒褐色土
7 —
8 —

SS45BB´
1 黒褐色土
2 暗黒褐色土
3 —
4 —
5 暗褐色土
6 —
7 黒褐色土 ローム粒若干
8 黒褐色土 ロームブロック
9 —
10 — ロームブロック
11 暗褐色土 ローム粒土
12 黒褐色土
13 褐色土 ロームブロック

Fig.85　SS44 遺物、SS45 遺構実測図



SS46AA´
1 黒褐色土
2 —
3 —
4 —
5 —
6 —
7 —
8 —
9 —

SS46BB´
1 黒褐色土
2 暗黒褐色土
3 —
4 —
5 —
6 —
7 —

SS46CC´
1 黒褐色土
2 黒褐色土・褐色土の混合 ローム粒
3 — ローム粒、褐色土粒・黒褐色土粒
4 暗黒褐色土 ローム粒、黒色土粒土
5 褐色土 ローム粒
6 — 褐色土粒土、ローム粒
7 暗茶褐色土

SS46 主体部 AA´·BB´
1 暗褐色土 黒い 褐色土 有機性強い
2 暗褐色土 ローム粒多量
3 黒色土 ローム粒若干 やや硬質 有機性強い
4 暗褐色土 ローム粒 やや多量 やや硬質 有機性強い
5 暗褐色土 ローム粒多量 やや硬質
6 褐色土 ローム粒多量 軟質
7 暗褐色土 6 層に似る 軟質 有機性強い
8 暗褐色土 ローム多量 有機性強い
9 暗褐色土 ローム若干 有機性強い
10 黒褐色土 ローム粒若干 有機性強い
11 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 やや硬質
12 褐色土 ローム粒若干・ロームブロック多量 やや硬質

Fig.86　SS46 遺構実測図

測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形に近い形状を呈する。

方台部では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-55°-Wである。

埋葬施設は方台部中央と西寄りに2基検出している。

主体部Aからは木棺痕が検出されており、平面形は方形で、組合式木棺である。規模は長軸2.24m×短軸0.76m、確認面からの深さ0.30mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-46°-Eである。

墓壙の平面形状は、長方形で、規模は3.80m×(1.95)m、確認面からの深さは、0.30mを測る。主軸方位は長軸方向からN-49°-Eである。底面は不整長方形で平坦である。断面形状は、短軸方向では底面の狭いU字形で、長軸方向では両端部に向け浅くなる形状を呈する。

主体部Bからは木棺痕が検出されており、平面形は隅丸方形、規模は長軸1.08m×短軸0.40m、確認面からの深さ0.18mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-40°-Eである。

墓壙の平面形状は、長方形で、規模は1.94m×0.84m、確認面からの深さは、0.18mを測る。主軸方位は長軸方向からN-40°-Eである。底面は長方形で平坦である。断面形状は、短軸方向では底面の狭いU字形で、長軸方向では両端部に向け浅くなる形状を呈する。

遺物は、東側周溝から出土している。1・2は壺形土器である。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS50　セ28地区・セ54地区（Fig.91、PL.30）

S16-00付近に位置する方形周溝墓である。西側にSS49が、東側にSS51が近接し、列状を形成する。周溝土層断面からは、SS49に対し本遺構が古い。南側をSM1097に掘削される。本遺構は、発掘調査時にはセ54-№39と呼称されている。

平面形状はやや歪んだ方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅は僅かに周溝中央に最大幅が形成される傾向が認められる。周溝の形状は、方台部側では直線的で、外側で僅かに弧を描く。規模は方台部が16.40m×12.00m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で2.36m・1.36m、0.55m、東溝が2.40m・0.56m、0.88m、南溝が1.98m・0.76m、0.68m、西溝が1.68m・1.12m、0.47mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-88°-Wである。埋葬施設は方台部中央から南寄りに1基検出している。

主体部からは木棺痕が検出されており、平面形は長方形、規模は長軸1.65m×短軸0.76m、確認面からの深さ0.39mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-88°-Wである。

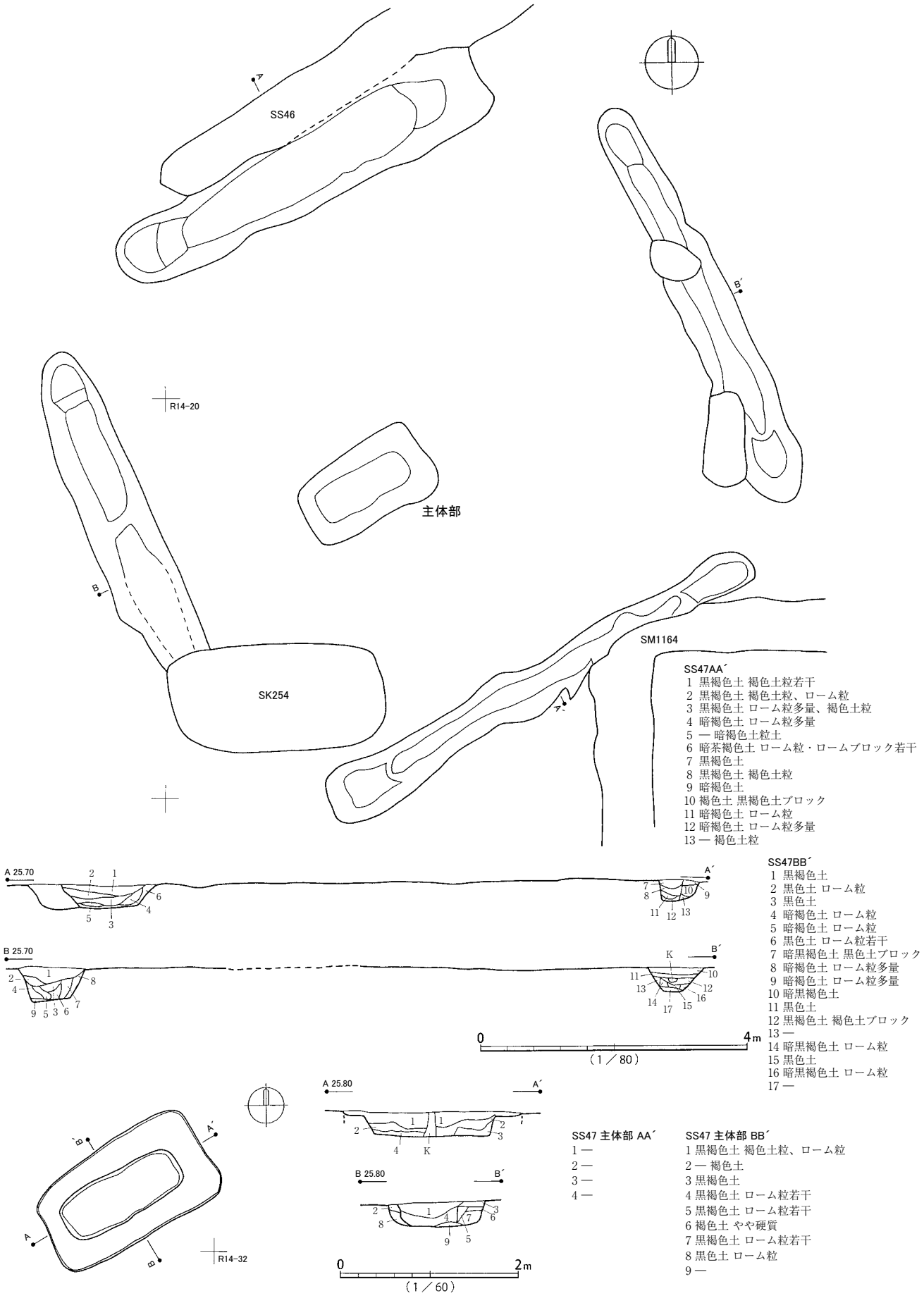
墓壙の平面形状は、長方形で、規模は2.52m×(1.60)m、確認面からの深さは、0.46mを測る。主軸方位は長軸方向からN-86°-Eである。底面は不整長方形で平坦である。断面形状は、短軸方向、長軸方向共に逆台形を呈する。

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS51　セ28地区・セ54地区（Fig.92、PL.30～31）

S17-00付近に位置する方形周溝墓である。西側にSS50が隣接する。東側をSM1095、SM1042に掘削される。本遺構は、発掘調査時にはセ54-№8と呼称されているが、記録類中、国8号墳（SW80）と混同されているものが認められる。



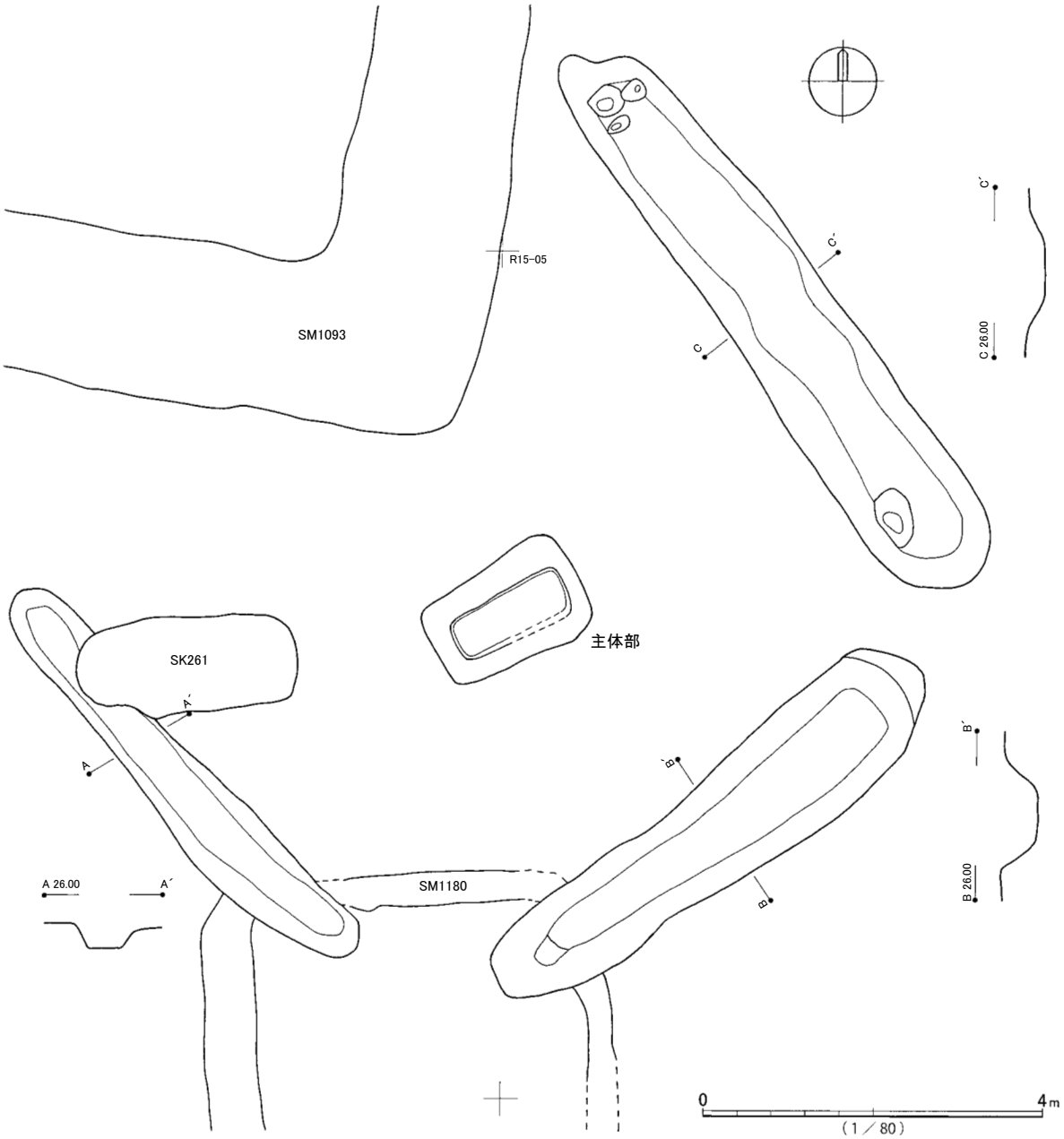
SS47AA´
1 黒褐色土 褐色土粒若干
2 黒褐色土 褐色土粒、ローム粒
3 黒褐色土 ローム粒多量、褐色土粒
4 暗褐色土 ローム粒多量
5 ― 暗褐色土粒土
6 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック若干
7 黒褐色土
8 黒褐色土 褐色土粒
9 暗褐色土
10 褐色土 黒褐色土ブロック
11 暗褐色土 ローム粒
12 暗褐色土 ローム粒多量
13 ― 褐色土粒

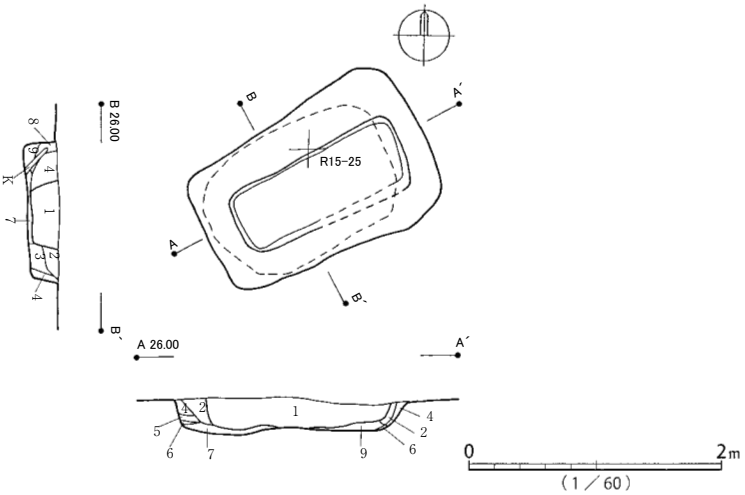
SS47BB´
1 黒褐色土
2 黒色土 ローム粒
3 黒色土
4 暗褐色土 ローム粒
5 暗褐色土 ローム粒
6 黒色土 ローム粒若干
7 暗黒褐色土 黒色土ブロック
8 暗褐色土 ローム粒多量
9 暗褐色土 ローム粒多量
10 暗黒褐色土
11 黒色土
12 黒褐色土 褐色土ブロック
13 ―
14 暗黒褐色土 ローム粒
15 黒色土
16 暗黒褐色土 ローム粒
17 ―

SS47 主体部 AA´
1 ―
2 ―
3 ―
4 ―

SS47 主体部 BB´
1 黒褐色土 褐色土粒、ローム粒
2 ― 褐色土
3 黒褐色土
4 黒褐色土 ローム粒若干
5 黒褐色土 ローム粒若干
6 褐色土 やや硬質
7 黒褐色土 ローム粒若干
8 黒色土 ローム粒
9 ―

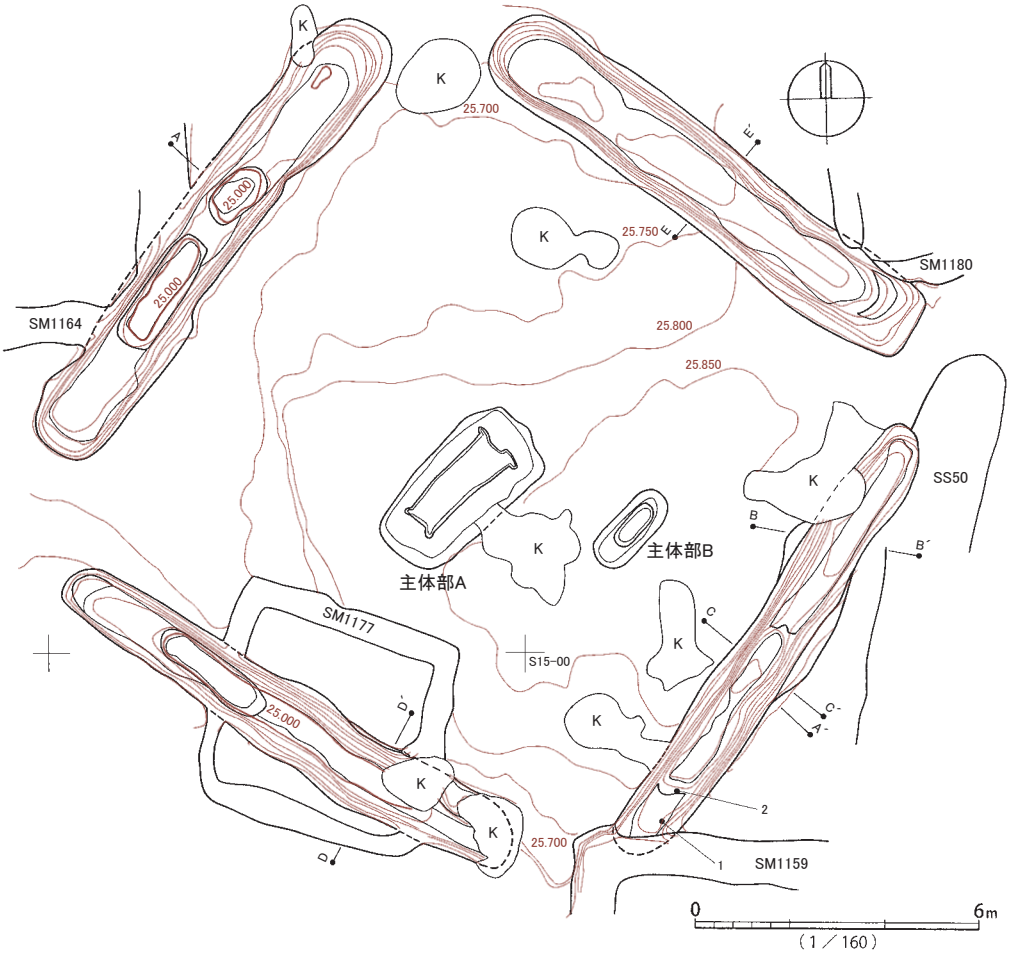
Fig.87　SS47 遺構実測図



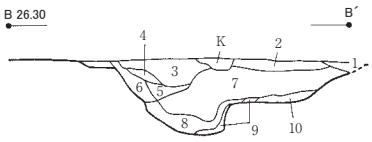


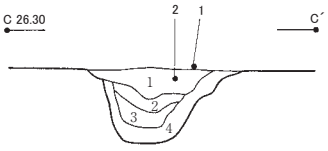
SS48 主体部 AA´·BB´
1 黒褐色土 ローム粒極少量 やや砂質 有機質性強い
2 暗褐色土 ローム粒少量、斑点状暗褐色土
3 黒色土 やや粘質 有機質土
4 暗褐色土 やや褐色味強い ローム粒多量
5 暗褐色土 ローム 4 層より少ない
6 ― ソフトロームブロック
7 暗褐色土 ローム粒多量・ロームブロック多量
8 暗褐色土
9 暗褐色土 ローム粒多量・ロームブロック多量 軟質

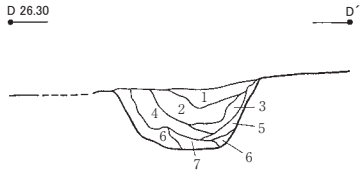
Fig.88　SS48 遺構実測図

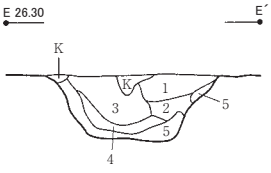


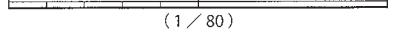












SS49BB´
1 暗灰褐色土・黒褐色土の混合 細いローム粒
2 黒褐色土 ローム粒、暗灰褐色土少量 7 層よりローム粒多い
3 黒褐色土 褐色が強い ローム粒極少
4 黒褐色土 褐色が強い ローム粒極少、暗褐色土
5 黄褐色土・暗褐色土の混合 暗い 黒褐色土
6 黄褐色土・暗褐色土の混合 黒褐色土
7 黒褐色土 ローム粒、暗灰褐色土少量
8 黒褐色土 褐色が強い ローム粒少量、黄褐色土少量・暗褐色土
9 暗褐色土・黄褐色土の混合 黒褐色土少量
10 黒褐色土・暗褐色土の混合 ローム粒、黄褐色土

SS49CC´
1 黒褐色土 ローム粒、暗灰褐色土
2 黒褐色土 ローム粒極少量
3 黒褐色土 褐色が強い ローム粒少量
4 黒褐色土・暗褐色土の混合 ローム粒、黄褐色土

SS49DD´
1 黒褐色土 ローム粒、暗灰褐色土 ローム粒 2 層より多い
2 黒褐色土 ローム粒、暗灰褐色土
3 黒褐色土 ローム粒
4 黒褐色土 褐色が強い ローム粒、暗灰褐色土
5 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土少量
6 暗褐色土 ローム粒、黄褐色土・黒褐色土
7 黒褐色土・暗褐色土の混合 ローム粒

SS49EE´
1 黒褐色土 褐色が強い ローム粒、暗灰褐色土
2 黒褐色土 褐色が強い ローム粒少量
3 黒褐色土 ローム粒、暗灰褐色土
4 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土
5 黒褐色土・暗褐色土の混合 ローム粒、黄褐色土

Fig.89　SS49 遺構 (1) 実測図

平面形状はやや歪んだ方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅は僅かに中央に最大幅がある傾向が認められる。周溝の形状は、方台部側が直線的で、外側が僅かに弧を描く。規模は方台部が(12.68)m×12.60m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で2.16m・1.52m、0.47m、東溝が2.04m・1.28m、0.66m、南溝が1.76m・0.76m、0.75m、西溝が2.40m・0.80m、0.77mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形に近い形状を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-5°-Wである。埋葬施設は方台部中央から西に寄って1基検出している。

主体部からは木棺痕が検出されており、平面形は不明、規模は長軸2.65m×短軸1.05m、確認面からの深さ0.64mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-74°-Wである。

墓壙の平面形状は、長方形で、規模は3.40m×2.25m、確認面からの深さは、0.67mを測る。主軸方位は長軸方向からN-72°-Wである。底面は隅丸長方形で凹凸が激しい。断面形状は、短軸方向ではU字形で、長軸方向では両端部に向け浅くなる形状を呈する。

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS52　セ28地区（Fig.93、PL.31）

S14-50付近に位置する方形周溝墓である。北西側にSS53が隣接し、列状を形成する。本遺構はその南端に位置する。東・南側を溝によって掘削されている。本遺構は、発掘調査時にはセ28-054と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈し、周溝は東側の区画を欠き、二隅で断絶する。この東側周溝に関しては上端のみ図化された掘り込みが相当する可能性を否定できないが、この掘り込みの位置がやや方台部に寄り過ぎていること、北側に伸びている痕跡が認められないことから、周溝ではないと判断した。周溝幅は概ね均等に方台部を巡っている。規模は方台部が10.08m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.23m・0.80m、0.33m、南溝が1.75m・0.95m、0.18m、西溝が1.85m・1.05m、0.55mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形・漏斗状を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-43°-Eである。埋葬施設は方台部中央からやや西寄りに1基検出している。主体部墓壙の平面形状は、長方形で、規模は(3.70)m×(2.40)m、確認面からの深さは、0.35mを測る。主軸方位は長軸方向からN-39°-Eである。

出土遺物は無い。

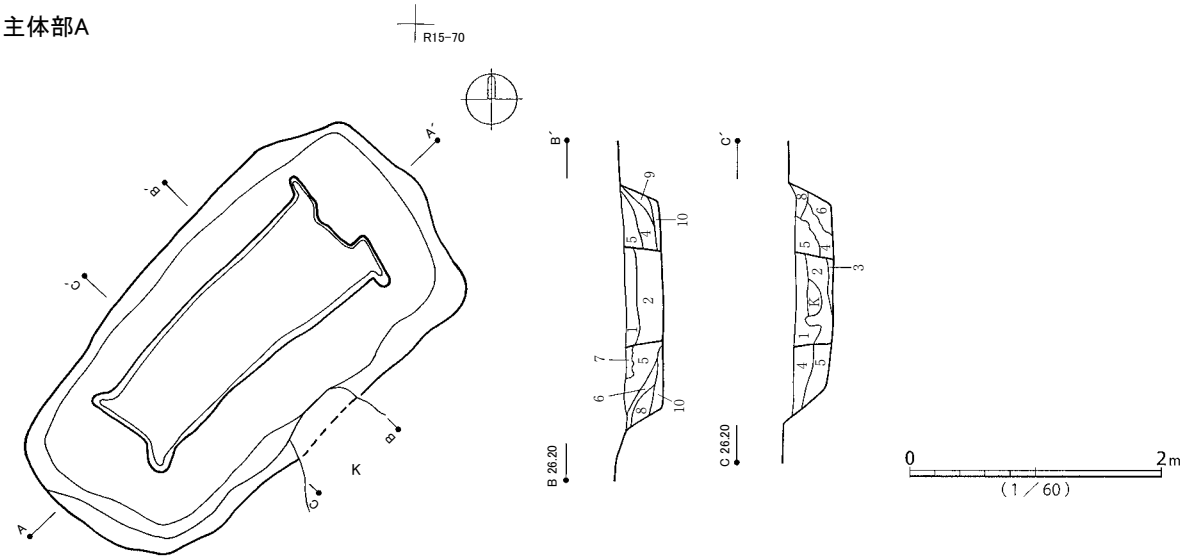
帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS53　セ28地区（Fig.94、PL.31）

S13-25付近に位置する方形周溝墓である。北西側にSS58が、南東側にSS52が位置し、列状を形成する。南側をSM1090に掘削される。本遺構は、発掘調査時にはセ28-167と呼称されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

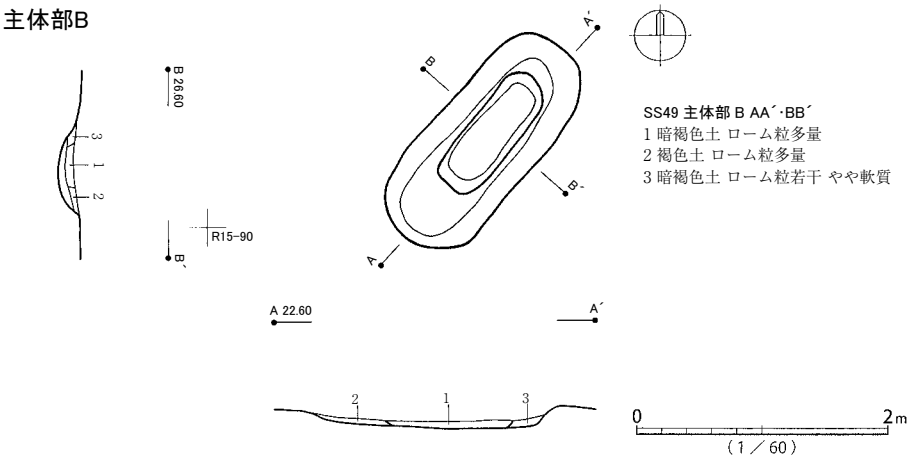
平面形状は方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等だが、北側周溝のみ西方に向けて幅を広げる。規模は方台部が(10.46)m×9.78m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.35m・0.70m、0.47m、東溝が0.70m・0.55m、0.36m、南溝が0.65m、他計測不能、西溝が1.00m・0.60m、0.26mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は不整形である。

主体部A



SS49 主体部 A AA´·BB´·CC´
1 暗褐色土 ローム粒多量
2 暗褐色土 暗い ローム粒多量 有機質
3 暗褐色土 ローム粒多量・ロームブロック多量
4 暗褐色土 褐色土に近い ローム粒・ロームブロック多量
5 黒褐色土 ローム粒若干 有機性強い
6 暗褐色土 ローム粒やや多量、黒色土
7 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、黒色土ブロック 有機質
8 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック、黒色土
9 暗褐色土 ローム粒若干・ロームブロック若干、黒色土
10 暗褐色土 やや褐色が強い ロームブロック・ローム粒多量 有機質

主体部B



SS49 主体部 B AA´·BB´
1 暗褐色土 ローム粒多量
2 褐色土 ローム粒多量
3 暗褐色土 ローム粒若干 やや軟質

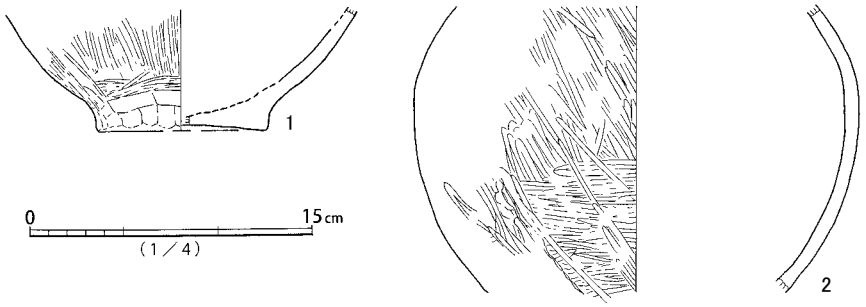
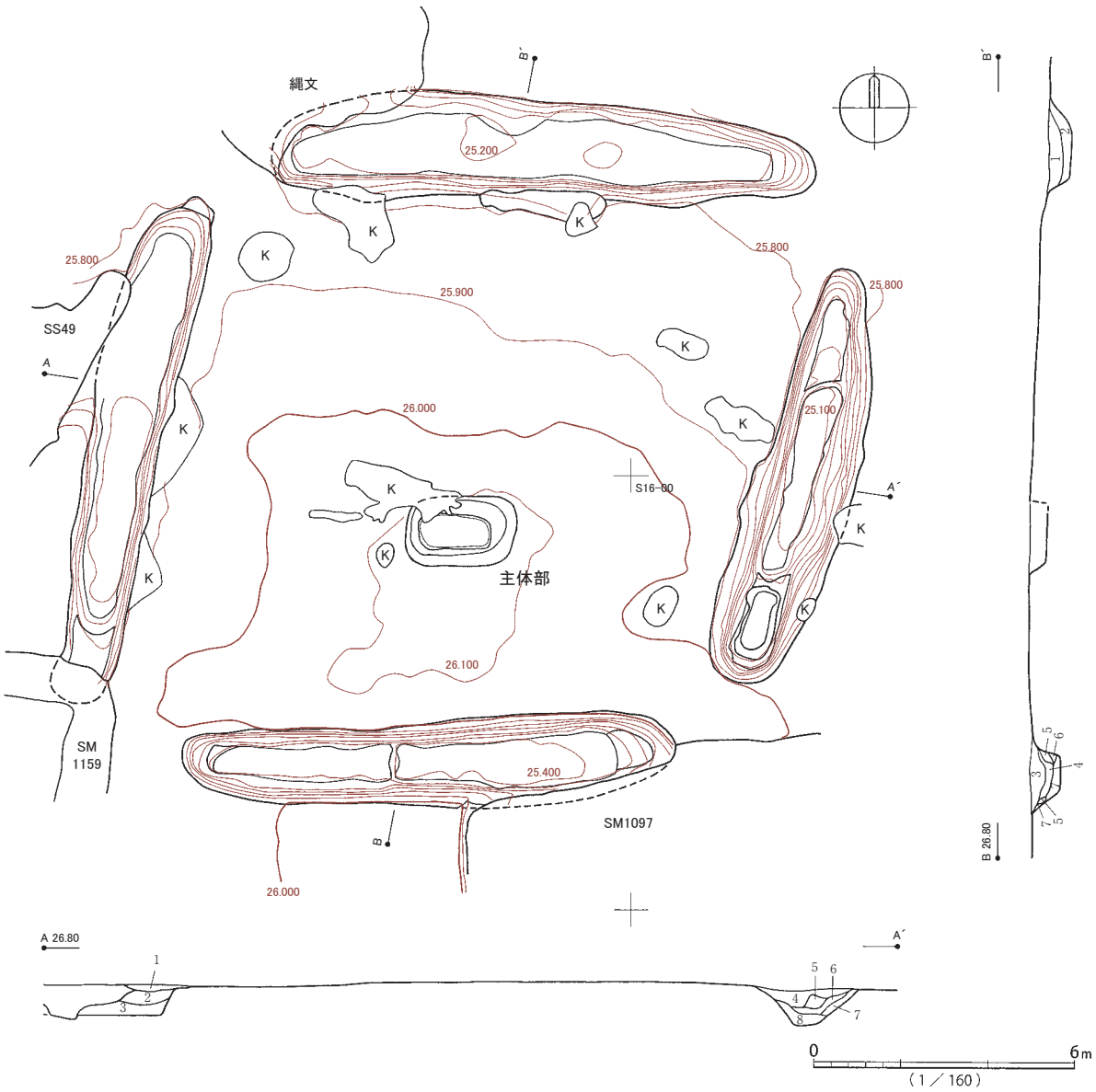
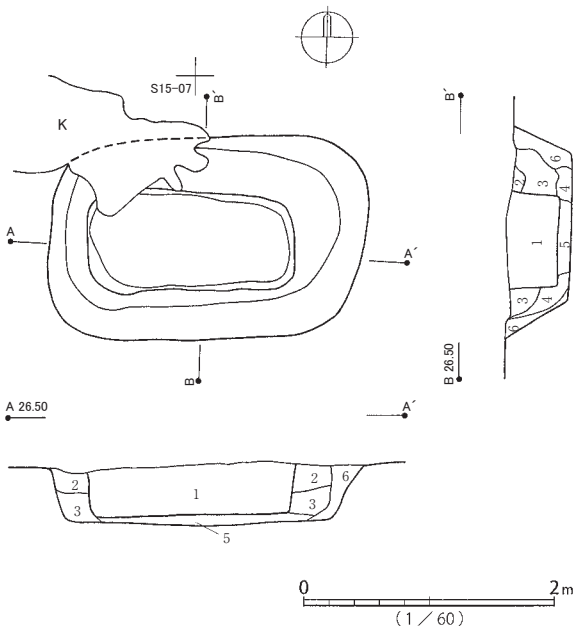


Fig.90　SS49 遺構 (2)・遺物実測図



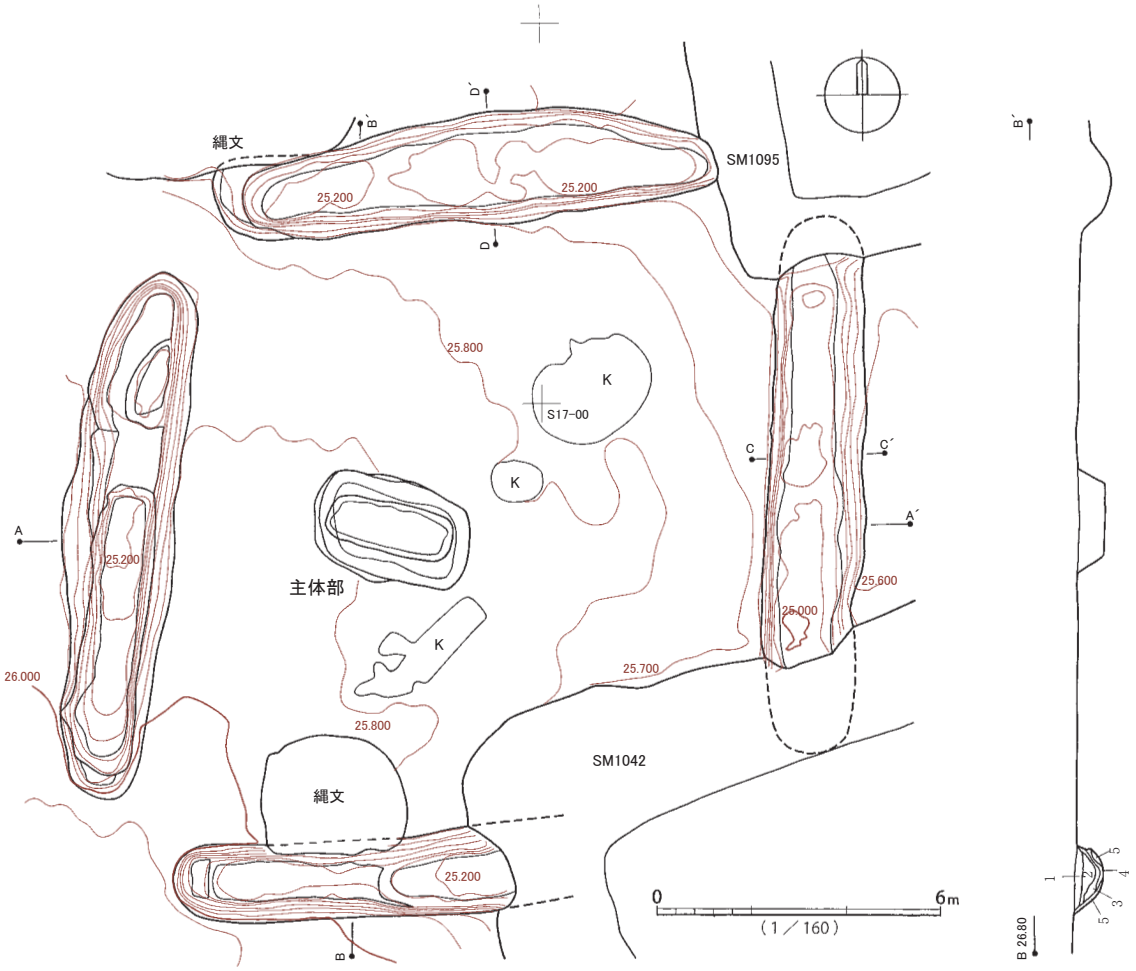


SS50AA´
1 暗褐色土・黒褐色土の混合 ローム粒
2 暗黒褐色土 褐色が強い ローム粒、暗灰褐色土少量
3 暗褐色土・黒褐色土の混合 黄褐色土
4 黒褐色土 ローム粒、暗灰褐色土
5 黒褐色土 ローム粒
6 黒褐色土 やや褐色気味 ローム粒極少量、暗灰褐色土少量
7 黒褐色土 ローム粒、黄褐色土少量・暗褐色土
8 暗褐色土・黒褐色土の混合 ローム粒、黄褐色土

SS50BB´
1 黒褐色土 ローム粒、暗灰褐色土
2 黒褐色土 ローム粒、黄褐色土・暗褐色土
3 黒褐色土 明るい ローム粒、暗灰褐色土
4 黒褐色土 ローム粒
5 黒褐色土 ローム粒 4 層よりやや多い
6 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土
7 暗褐色土・黒褐色土の混合 ローム粒、黄褐色土

SS50 主体部 AA´·BB´
1 暗褐色土 ローム粒多量
2 暗褐色土 ロームブロック多量 軟質
3 暗褐色土 ロームブロック斑点状 やや硬質
4 黒色土 ローム粒若干 硬質 有機質性強い
5 暗褐色土 ローム粒若干 やや硬質
6 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック やや軟質

Fig.91　SS50 遺構実測図



SS51AA´
1 黒褐色土 ローム粒、暗灰褐色土
2 黒褐色土 褐色が強い ローム粒極少量
3 黒褐色土 一番黒い ローム粒極少
4 黒褐色土 やや褐色土 ローム粒少量
5 暗褐色土 ローム粒、暗灰褐色土・黒褐色土
6 褐色土 ローム粒、黒褐色土少量
7 褐色土 ローム粒極少量、黒褐色土
8 褐色土 黄褐色土・暗褐色土
9 褐色土 黄褐色土・黒褐色土
10 暗褐色土 黄褐色土・黒褐色土少量
11 黒褐色土 黄褐色土・暗褐色土

SS51BB´
1 黒褐色土 ローム粒少量、暗灰褐色土２層より暗灰褐色土多い
2 黒褐色土 ローム粒少量、暗灰褐色土
3 黒褐色土 褐色が強い ローム粒少量
4 暗褐色土・黒褐色土の混合 黄褐色土
5 暗褐色土 黒褐色土少量・黄褐色土

SS51CC´
1 黒褐色土 ローム粒、暗灰褐色土
2 黒褐色土 ローム粒、暗灰褐色土１層より暗灰褐色土少ない
3 黒褐色土 褐色が強い ローム粒、暗褐色土少量
4 暗褐色土・黒褐色土の混合 黒色が強い ローム粒
5 ― 褐色が強い

SS51DD´
1 ― 灰褐色土多量 軟質
2 黒褐色土 ローム粒、暗灰褐色土
3 黒褐色土 ローム粒少量 硬質
4 黒褐色土３層より黒い ローム粒３層より多い
5 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土
6 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土・黄褐色土

SS51 主体部 AA´･BB´
1 極暗褐色土 ローム粒多量 有機質性強
2 極暗褐色土１層より黒い ローム粒多量 有機質性強
3 暗褐色土 褐色味強い ローム粒・ロームブロック多量
4 極暗褐色土２層より黒い ローム粒多量・ロームブロック若干 やや硬質 有機質性強
5 褐色土 ローム粒・ロームブロック
6 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量５･７層の中間層 有機質
7 黒褐色土 ロームブロック２～３ヶ、黒色土 有機質
8 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量 有機質
9 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック８層よりロームブロック多い 有機質
10 暗褐色土 あまり黒くない ローム若干 有機質
11 暗褐色土３層より黒い ローム粒・ロームブロック若干
12 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック 13層よりロームブロック多い やや硬質 有機質性強
13 黒褐色土 ロームブロック若干 硬質
14 褐色土 ローム粒多量
15 褐色土 ローム粒・ロームブロック多量 やや硬質
16 暗褐色土３･11層の中間の色調 ローム粒多量

Fig.92　SS51 遺構実測図

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-38°-Wである。埋葬施設は方台部中央に1基検出している。

主体部が検出されており、平面形は不整楕円形、規模は長軸2.48m×短軸1.48m、確認面からの深さ0.51mを測る。主軸方位は長軸方向からN-57°-Eである。

底面は中央が深く、凹凸が激しい。断面形状は、短軸方向では底面の狭いU字形で、長軸方向では両端部に向け浅くなる形状を呈する。

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS54　セ28地区（Fig.95）

T13-02付近に位置する方形周溝墓である。北側にSS53が、西側にSS56が隣接し、SM1090、SM1135、SM1037に掘削される。本遺構は、発掘調査時にはセ28-168と呼称されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈し、周溝は四隅が断絶する。周溝幅は狭く、ほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が11.64m×(11.38)m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.80m・0.25m、計測不能、東溝が1.05m、他計測不能、南溝が0.75m、他計測不能、西溝が1.10m、計測不能0.38mを測る。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-58°-Eである。埋葬施設は方台部中央から1基検出している。

主体部については記録類が限られるため詳細は不明である。主体部墓壙の平面形状は、長方形で、規模は2.80m×1.25m、確認面からの深さは、不明である。主軸方位は長軸方向からN-56°-Eである。

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS55　セ28地区（Fig.96）

U13-00付近の南斜面に位置する方形周溝墓である。北側にSS56が隣接し、SM1135、掘立柱建物跡（189号遺構）に掘削される。本遺構は、発掘調査時にはセ28-180と呼称されている。

平面形状は方形を呈するとみられ、周溝は東側・南側を欠き、北西隅は断絶する。周溝幅はほぼ均等である。規模は方台部が計測不能、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.80m・計測不能、0.33m、西溝が0.90m、他計測不能である。周溝断面形状等は、記録類が限られ詳細は不明である。

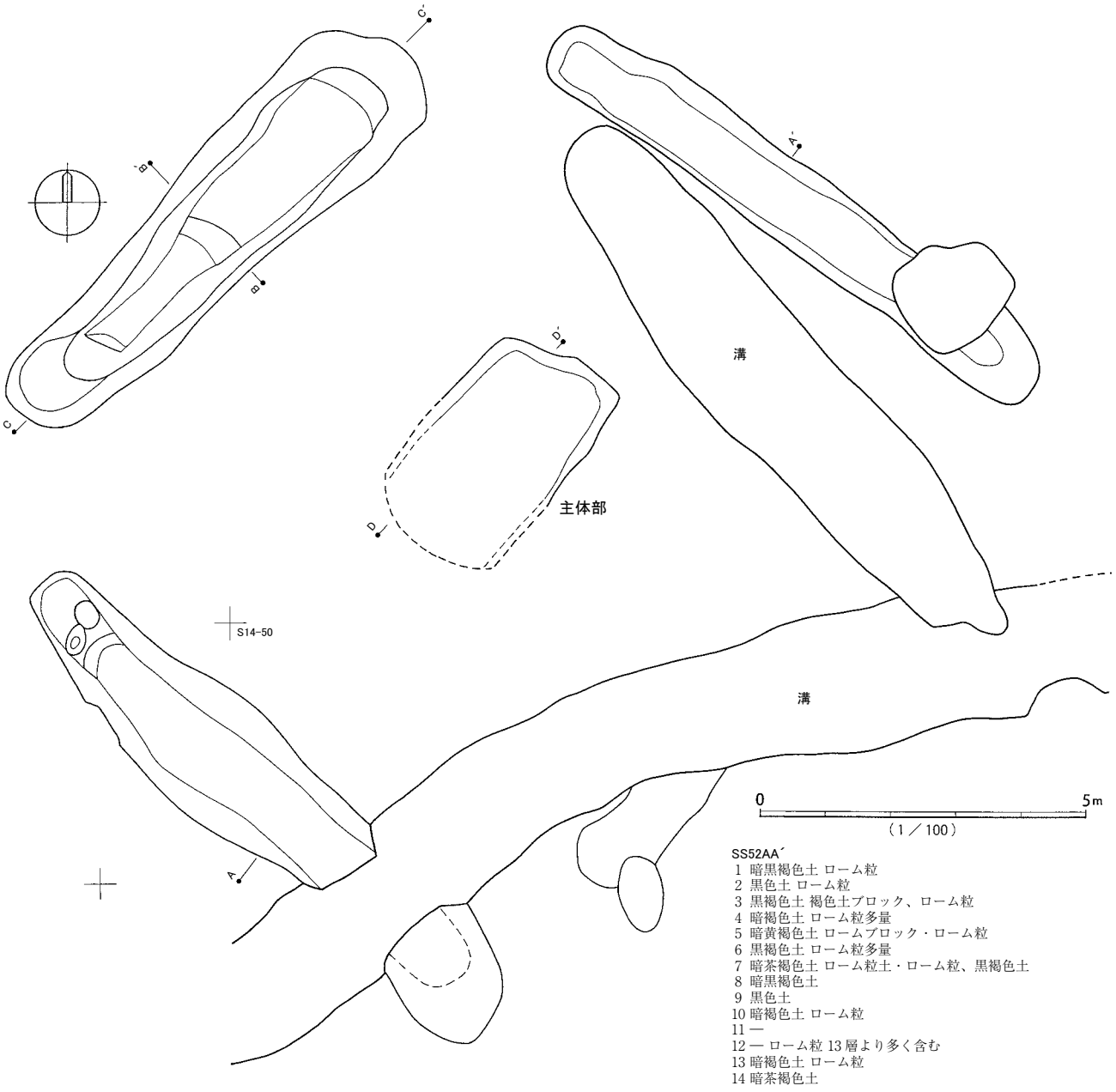
墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は計測不能である。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。

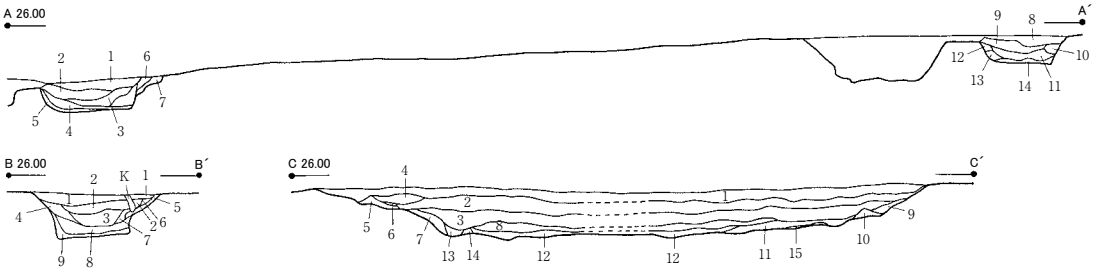
帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS56　セ28地区（Fig.97、PL.181）

T12-05付近の南斜面に位置する方形周溝墓である。北側にSS57、南側にSS55、東側にSS54が隣接する。SM1135、掘立柱建物跡（208・189号遺構）に掘削される。本遺構は、発掘調査時にはセ28-181と呼称されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。



SS52AA´
1 暗黒褐色土 ローム粒
2 黒色土 ローム粒
3 黒褐色土 褐色土ブロック、ローム粒
4 暗褐色土 ローム粒多量
5 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒
6 黒褐色土 ローム粒多量
7 暗茶褐色土 ローム粒土・ローム粒、黒褐色土
8 暗黒褐色土
9 黒色土
10 暗褐色土 ローム粒
11 —
12 — ローム粒 13 層より多く含む
13 暗褐色土 ローム粒
14 暗茶褐色土



SS52BB´
1 暗黒褐色土 褐色土ブロック
2 黒色土
3 暗黒色土 ローム粒
4 暗黒褐色土 ローム粒
5 暗茶褐色土
6 暗茶褐色土 ローム粒
7 — ローム粒
8 暗黒褐色土 ローム粒、黒色土ブロック・褐色土粒
9 暗褐色土 ローム粒多量

SS52CC´
1 暗黒褐色土 ローム粒若干、黒褐色土ブロック
2 暗黒褐色土 黒色土ブロック
3 暗黒色土
4 暗黒褐色土 褐色土ブロック
5 暗黒褐色土
6 —
7 暗黒色土 暗茶褐色土ブロック若干
8 暗褐色土
9 暗褐色土
10 暗茶褐色土 ローム粒
11 —
12 暗褐色土 暗茶褐色土ブロック、ローム粒
13 暗黒色土 ローム粒土、暗黄褐色土ブロック
14 暗黒褐色土
15 暗黄褐色土

SS52DD´
1 黒褐色土
2 —
3 — テフラブロック
4 黒色土 ローム粒
5 —

Fig.93　SS52 遺構実測図

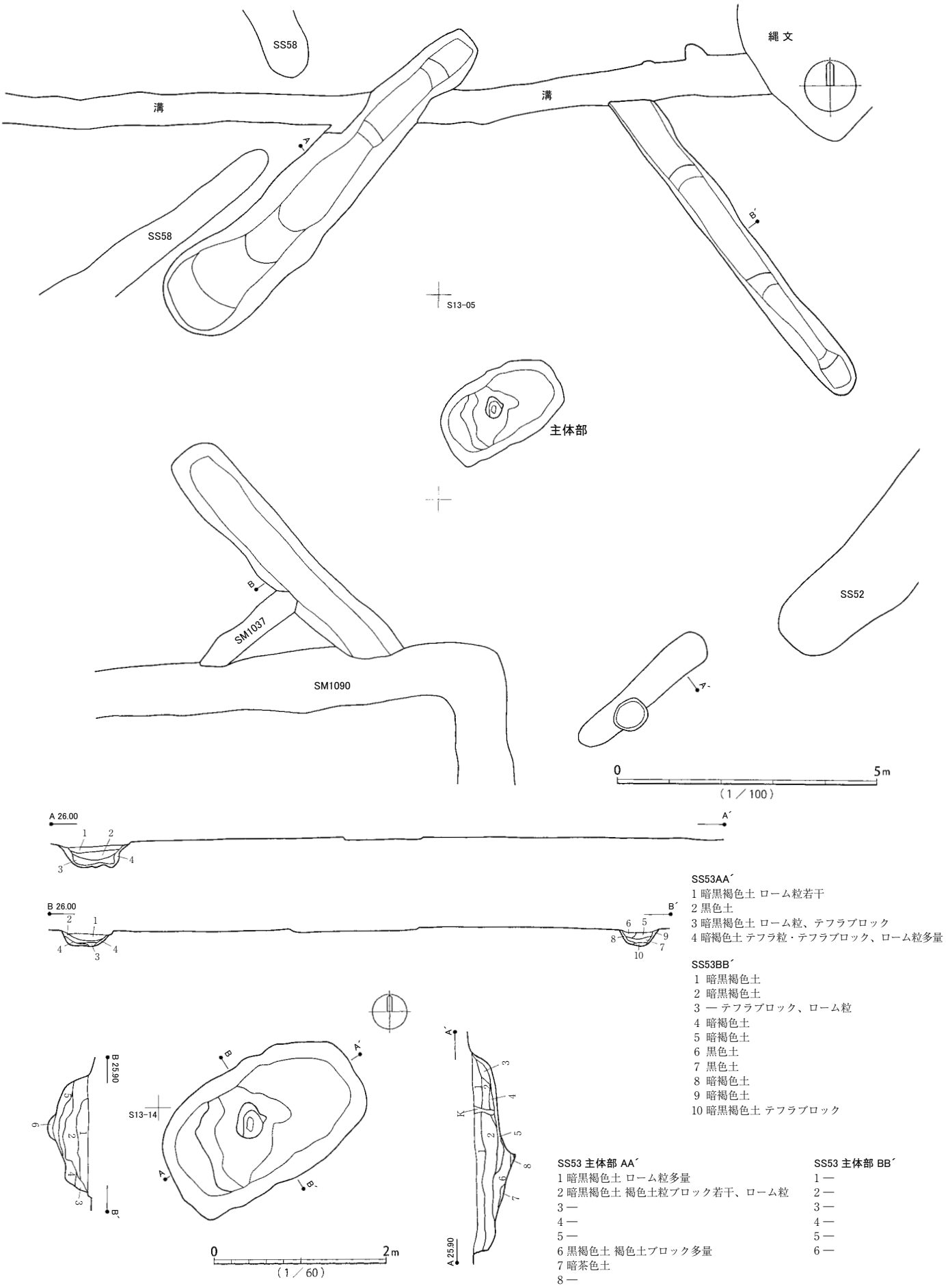


Fig.94　SS53 遺構実測図

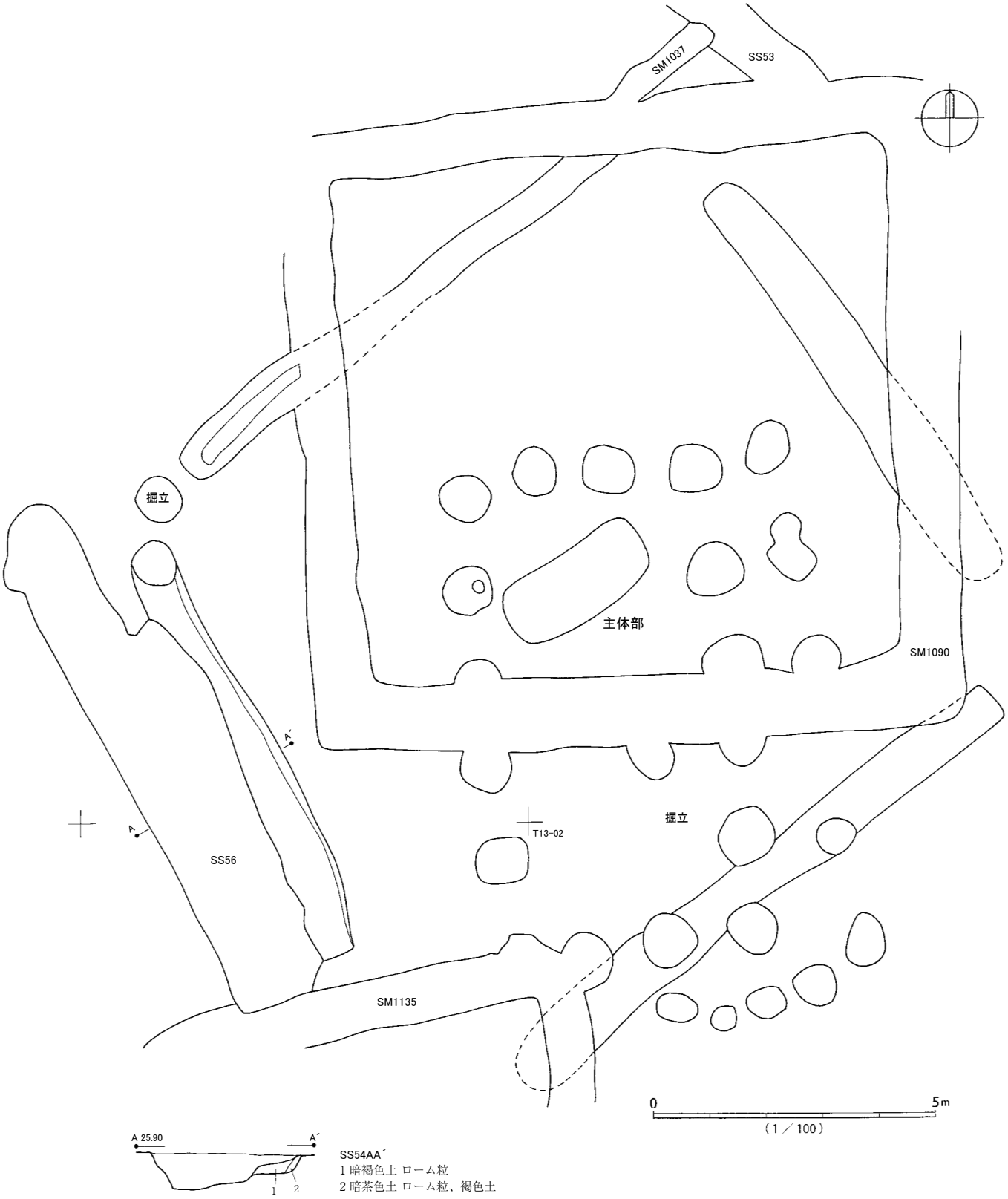


Fig.95　SS54 遺構実測図

平面形状は方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅は狭く、東側以外ほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が13.44m×12.36m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.44m・0.64m、0.67m、東溝が1.88m・0.88m、0.76m、南溝が(0.96)m・(0.52)m、0.22m、西溝が1.12m・0.56m、0.53mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形に近い形状を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-67°-Eである。
埋葬施設は方台部中央に1基検出している。

主体部からは木棺痕が検出されており、平面形は不明、規模は長軸(2.10)m×短軸(0.65)m、確認面からの深さ0.21mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-45°-Eである。

墓壙の平面形状は、長方形で、規模は(2.90)m×1.70m、確認面からの深さは、0.27mを測る。主軸方位は長軸方向からN-45°-Eである。底面は長方形で中央が深く、凹凸が激しい。断面形状は、短軸方向では底面の狭いU字形で、長軸方向では両端部に向け浅くなる形状を呈する。内部施設としてテラス状のステップが認められる。

出土遺物の、1は壺形土器である。周辺グリッドから出土している。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS57　セ28地区（Fig.98）

S12-05付近に位置する方形周溝墓である。北側にSS59が、東側にSS58が近接し、南側にはSS56がやや離れて位置する。本遺構は、発掘調査時にはセ28-145・055と2つの遺構番号が付与されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈するが、全体的に丸みを帯びる。SM1038の影響とみるが、確証は無い。周溝は四隅で断絶する。周溝幅は東側以外概ね均等に方台部をめぐる。規模は方台部が10.60m×10.45m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.35m・0.10m、0.53m、東溝が1.40m・0.25m、0.72m、南溝が1.10m・0.25m、0.74m、西溝が1.20m・0.40m、0.60mを測る。周溝底面は平坦面が殆ど認められず、断面形状はV字、漏斗状を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-20°-Wである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS58　セ28地区（Fig.99）

S13-00付近に位置する方形周溝墓である。北西側にSS59、南東側にSS53、西側にSS57が近接する。北側をSM1021、東西方向に伸びる溝に掘削される。本遺構は、発掘調査時にはセ28-164・166と、2つの遺構番号を付与されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状はやや歪んだ方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅は狭く、ほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が9.90m×9.50m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.85m・0.30m、0.71m、東溝が0.80m・0.30m、0.53m、南溝が0.75m・0.30m、0.23m、西溝が0.90m・0.50m、0.46mを測る。周溝底面は平坦面が無く、断面形状はV字状、不整形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-60.5°-Eである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

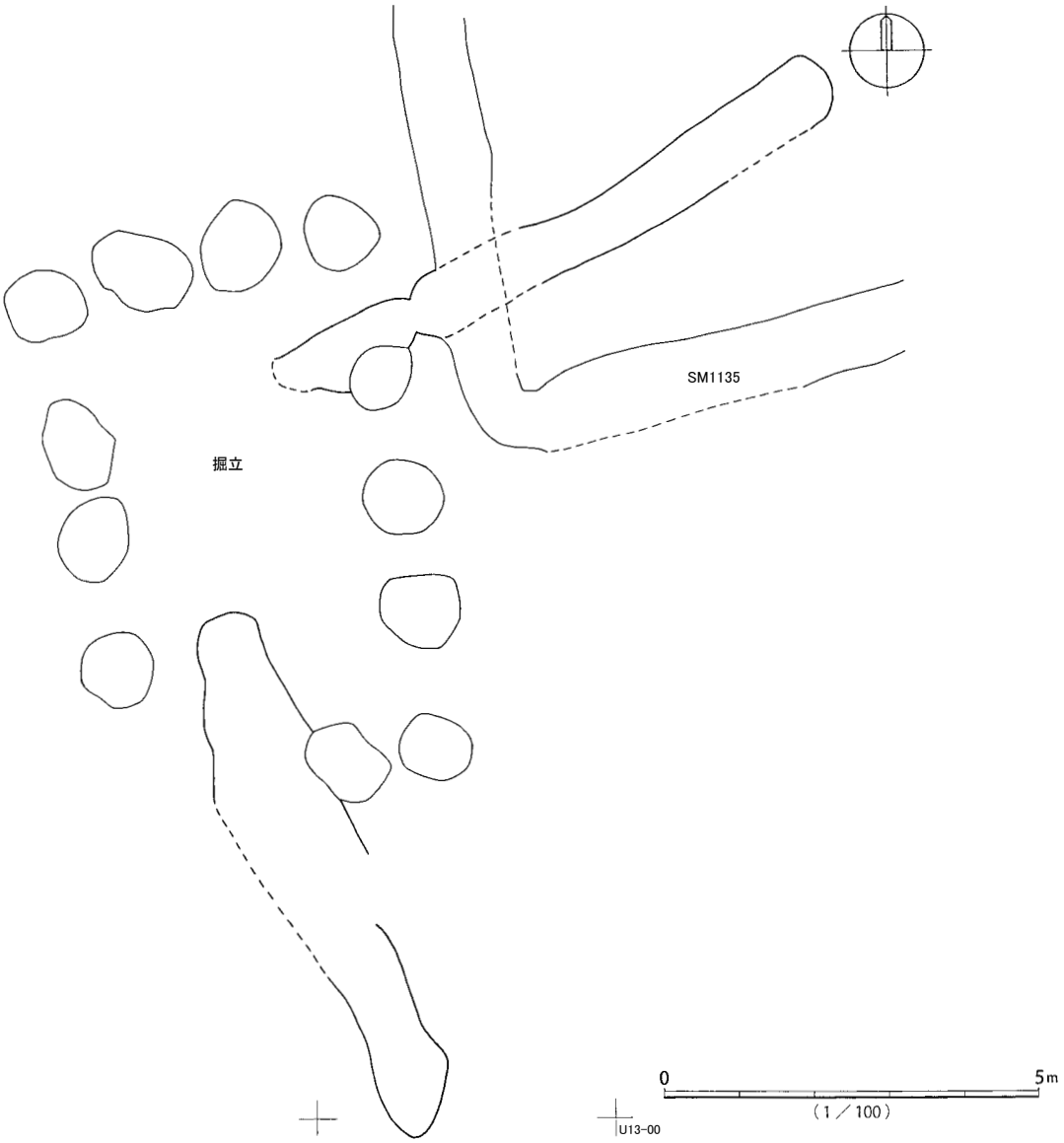
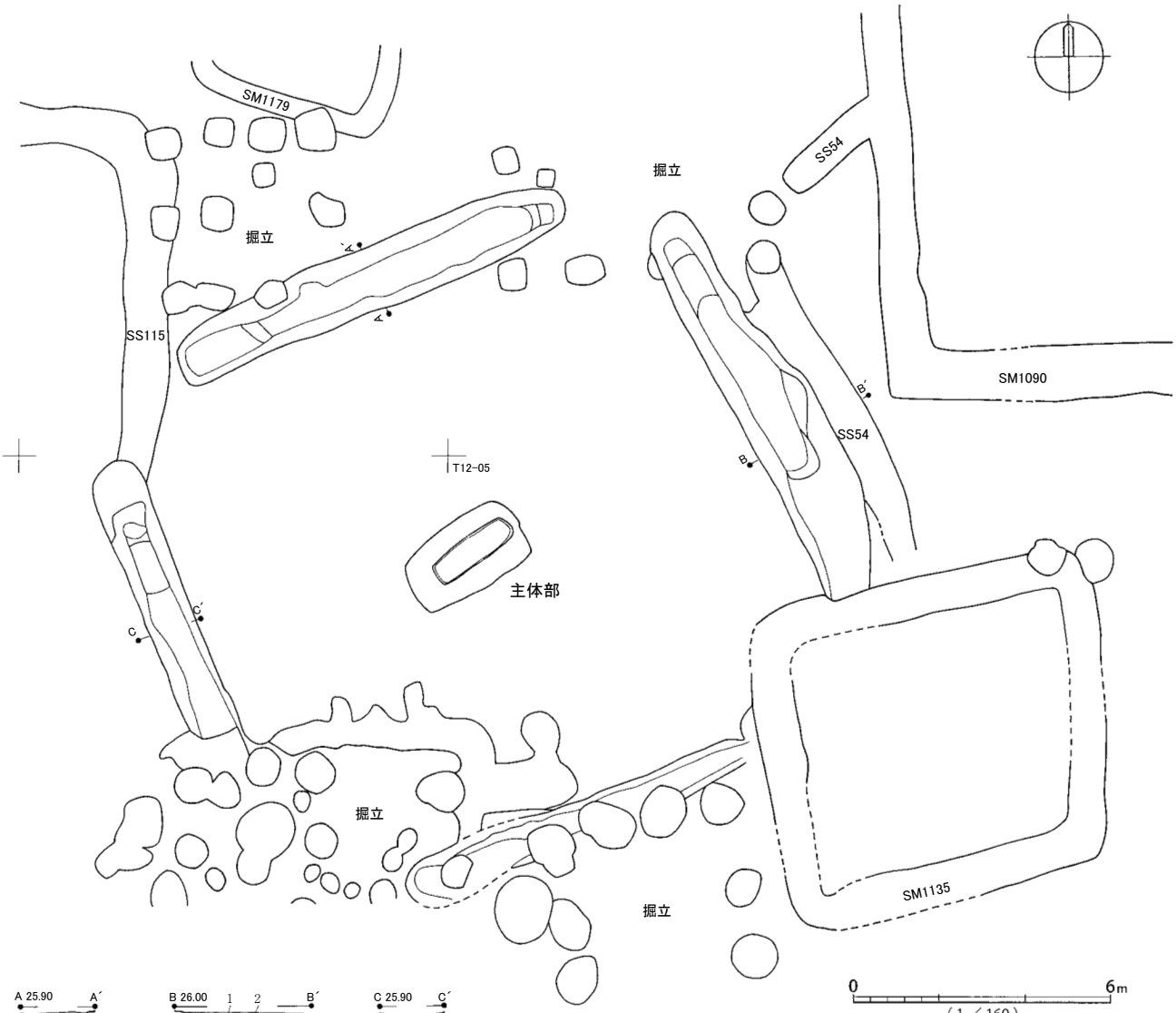
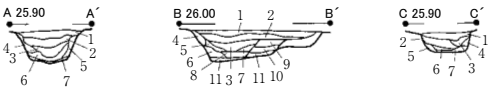


Fig.96　SS55 遺構実測図

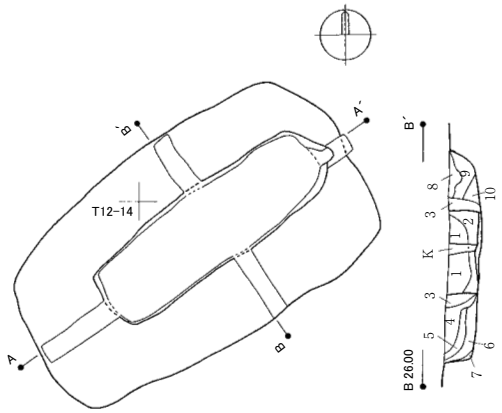




SS56AA´
1 暗黒褐色土 ローム粒
2 黒色土
3 黒色土
4 ― ローム粒、褐色土粒
5 暗黒褐色土 ローム粒、黒色土
6 ―
7 黒色土 ローム粒

SS56CC´
1 ―
2 黒色土 ローム粒
3 暗褐色土
4 暗褐色土 ローム粒
5 褐色土 ローム粒・ロームブロック
6 暗褐色土
7 暗褐色土

SS56BB´
1 黒褐色土 ローム粒若干
2 暗黒褐色土
3 黒色土
4 褐色土 6 層より汚い
5 ―
6 褐色土 ローム多量、暗褐色土粒
7 黒色土
8 黒色土 ローム粒若干
9 黒色土 ローム粒
10 暗茶色土
11 暗茶色土 ローム粒・ロームブロック、黒褐色土



SS56 主体部 AA´
1 暗褐色土 ローム粒多量 軟弱
2 暗褐色土 ロームブロック やや硬質
3 黒褐色土 ソフトローム粒 硬質
4 暗褐色土 黒褐色土、ローム
5 暗黄褐色土 粘土少量、ソフトローム 硬質
6 暗黄褐色土 ローム多量
7 黄褐色土 ロームの崩れ
8 黒褐色土 上層土
9 ―
10 暗黄褐色土 ソフトローム やや硬質

SS56 主体部 BB´
1 暗褐色土 ローム粒多量
2 暗褐色土 ロームブロック
3 暗褐色土 黒色土多量、ローム粒多量
4 暗黄褐色土 粘土少量、ソフトローム 硬質
5 黒褐色土 ローム粒
6 暗褐色土 ソフトローム多量
7 ―
8 黒褐色土 9 層と同系
9 黒褐色土 8 層と同系 ロームブロック多量 硬質
10 黒色土

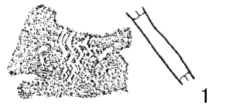
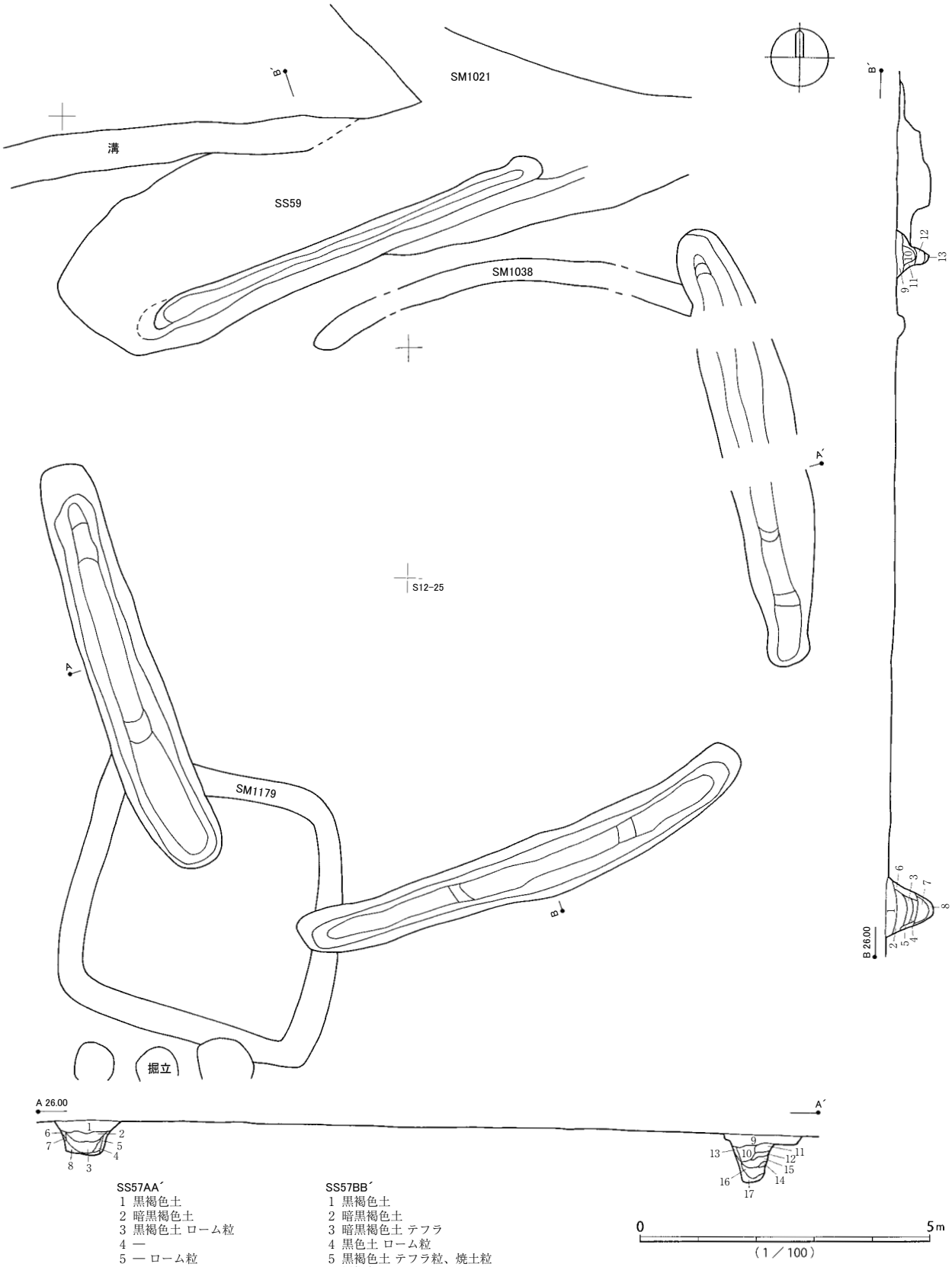


Fig.97　SS56 遺構・遺物実測図



SS57AA´
1 黒褐色土
2 暗黒褐色土
3 黒褐色土 ローム粒
4 ―
5 ― ローム粒
6 ―
7 ― ローム粒土
8 黒褐色土 ローム粒多量
9 黒褐色土
10 黒色土 ローム粒
11 黒褐色土 テフラ
12 暗黒褐色土
13 ―
14 黒褐色土 テフラブロック
15 黒褐色土 ローム粒
16 暗黒褐色土
17 ― 褐色土粒土、ローム粒

SS57BB´
1 黒褐色土
2 暗黒褐色土
3 暗黒褐色土 テフラ
4 黒色土 ローム粒
5 黒褐色土 テフラ粒、焼土粒
6 黒褐色土 テフラブロック
7 黒色土
8 ― ローム粒・ロームブロック、テフラブロック
9 暗黒褐色土
10 黒色土
11 暗黒褐色土 テフラ
12 黒色土
13 黒色土 ローム粒

Fig.98　SS57 遺構実測図

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS59　セ28地区（Fig.100、PL.157・181）

R12-35付近に位置する方形周溝墓である。南側にSS57が近接する。SM1001、SM1021、溝に掘削される。本遺構は、発掘調査時にはセ28-165と呼称されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状はやや歪んだ方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が12.45m×(12.20)m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.70m・0.20m、0.69m、東溝が1.25m・0.35m、0.88m、南溝が(1.05)m・0.50m、0.36m、西溝が1.10m・0.37m、0.59mを測る。周溝底面は平坦が少なく、断面形状V字状、逆台形に近い形状を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-71°-Eである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

遺物は、1は甕形土器で、東側周溝覆土中層から出土している。2は壺形土器である。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS60　セ28地区（Fig.101、PL.31）

R12-30付近に位置する方形周溝墓である。前方後円墳であるSM1001の後円部盛土下に位置する。北側にSS40が、南側にSS61が近接する。北側周溝がSM1001第1主体部に掘削される。本遺構は、発掘調査時にはセ28-124と呼称されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状はやや歪んだ方形を呈し、周溝は南側をSS61北側周溝と共有するか、一部と重複するとみられ、隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が7.64m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.89m・0.34m、0.42m、東溝が0.56m・0.36m、0.22m、西溝が0.46m・0.30m、0.25mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-79°-Eである。

埋葬施設は方台部中央に1基検出している。主体部からは木棺痕が検出されており、平面形は長方形、規模は長軸2.33m×短軸0.75m、確認面からの深さ0.57mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-69°-Eである。

墓壙の平面形状は長方形で、規模は3.68m×1.65m、確認面からの深さは、0.63mを測る。主軸方位は長軸方向からN-69°-Eである。底面は長方形で断面形状は、短軸方向では逆台形、長軸方向では両端部が丸みをおびる形状を呈する。

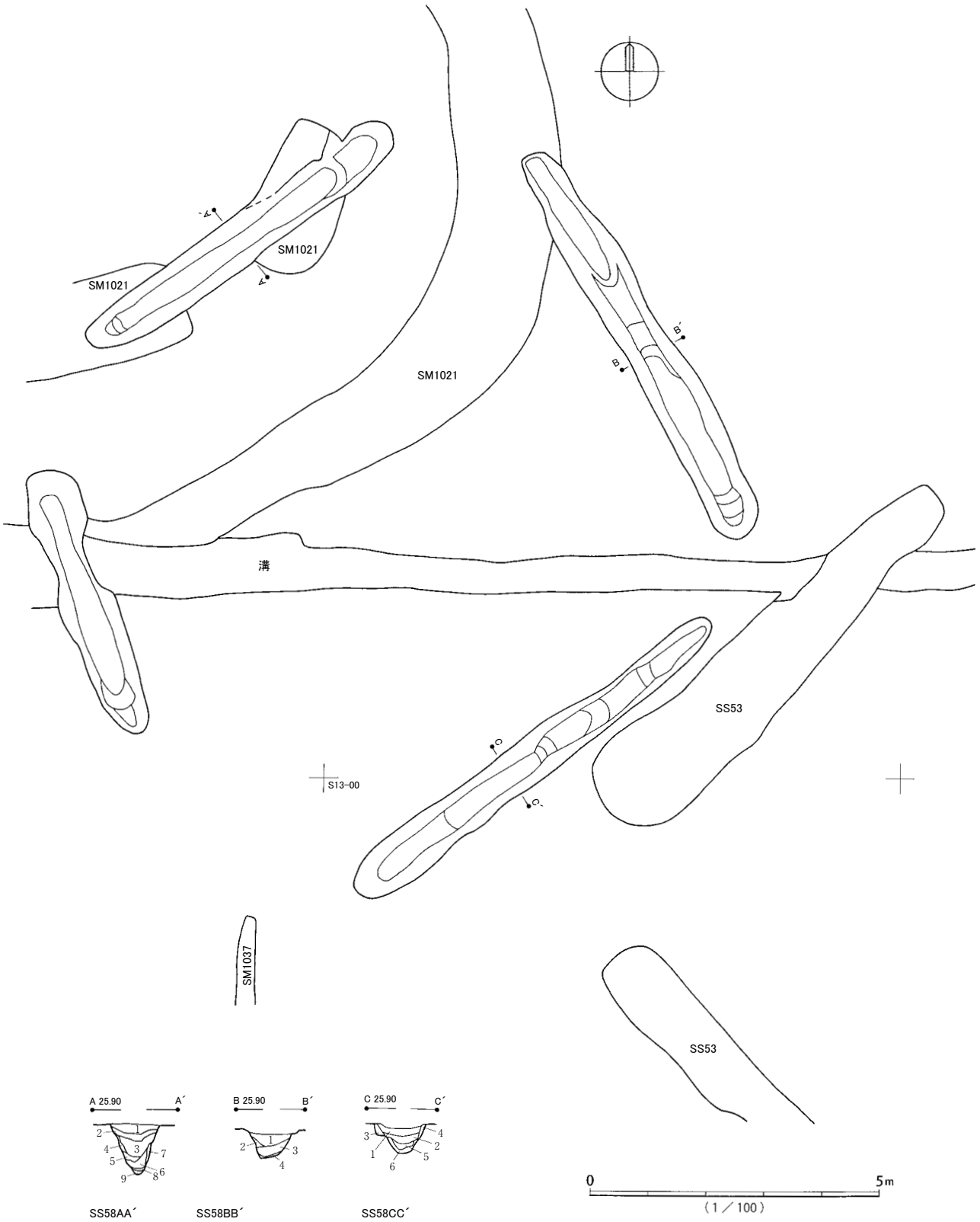
出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS61　セ28地区（Fig.102、PL.31）

R11-88付近に位置する方形周溝墓である。北側にSS60が近接し、東側SS59、西側にSS63が位置する。SM1001、溝に掘削される。本遺構は、発掘調査時にはセ28-123と呼称されている。

平面形状は方形を呈し、周溝は南東部分を失っているが、四隅で断絶するとみられる。また、北側周溝が不自然に外側に膨らむが、おそらく北側に近接するSS60の南側周溝がここに含まれるものとみられる。周溝幅はこの北側周溝を除き、ほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が12.85m×

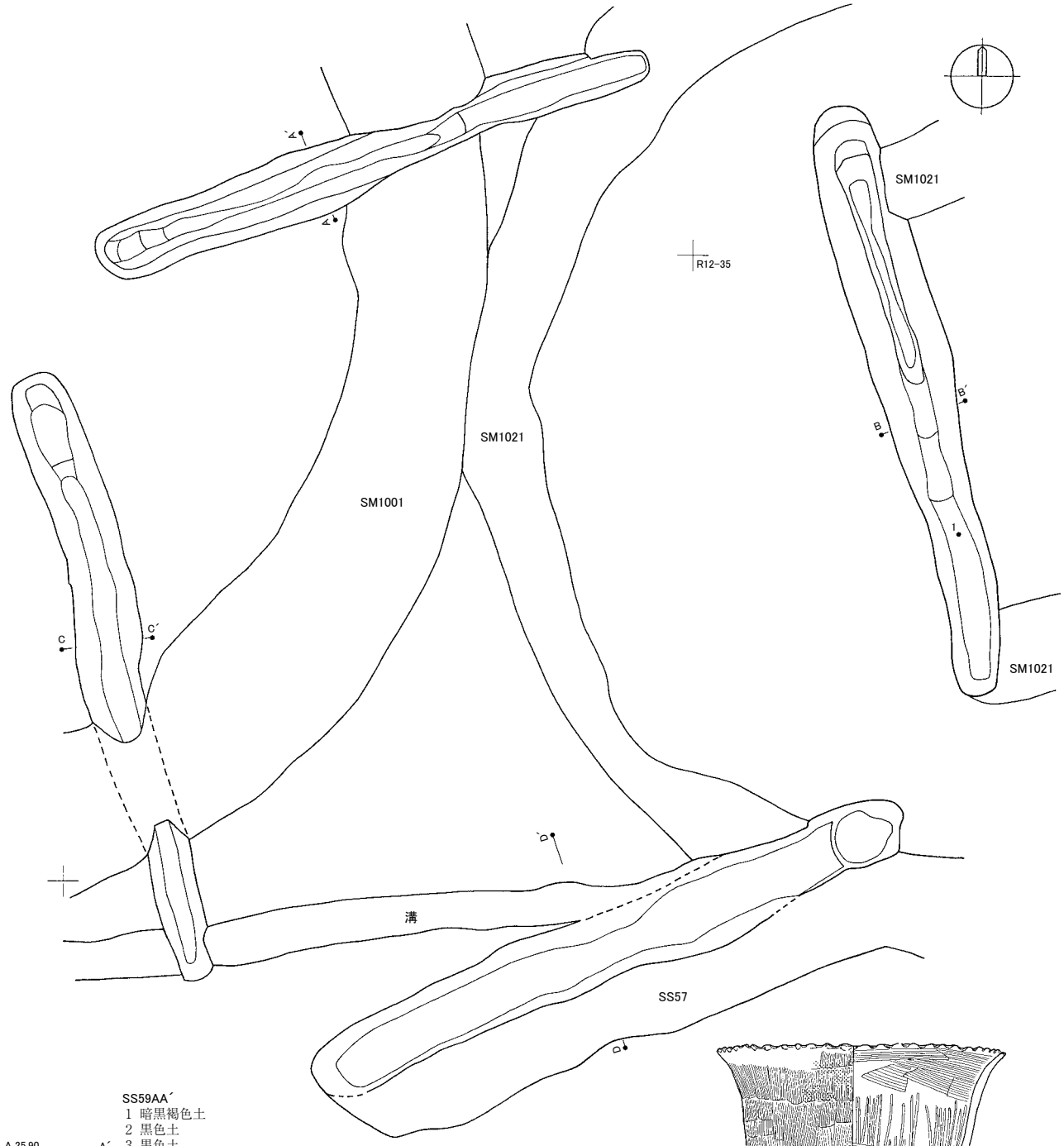


SS58AA´
1 —
2 —
3 —
4 —
5 —
6 —
7 —
8 —
9 —

SS58BB´
1 暗黒色土
2 暗褐色土 テフラ土
3 暗黒褐色土
4 — テフラ粒、ローム粒

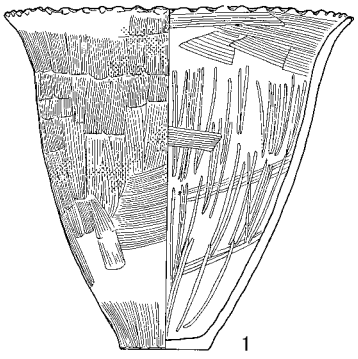
SS58CC´
1 —
2 暗黒色土 褐色土粒若干
3 — テフラ
4 暗黒褐色土
5 暗黒褐色土
6 暗黒褐色土 ローム粒多量

Fig.99　SS58 遺構実測図



SS59AA´
1 暗黒褐色土
2 黒色土
3 黒色土
4 暗茶色土
5 ― ローム粒
6 黒色土
7 黒褐色土 ローム粒多量
8 黒色土
9 ― ローム粒
10 黒褐色土 ローム粒若干
11 黒色土

0 5m
（1／100）

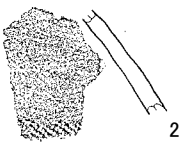


0 15cm
（1／4）

SS59BB´
1 ―
2 ―
3 ―
4 ―
5 ―
6 ―
7 ―

SS59CC´
1 黒色土
2 黒色土
3 黒色土
4 ―
5 ―
6 ―
7 ―

SS59DD´
1 黒褐色土 テフラブロック
2 暗黒褐色土
3 暗黒褐色土
4 黒褐色土 テフラ
5 ― ローム粒
6 暗黒褐色土 ローム粒
7 暗黒褐色土 ローム粒・ロームブロック
8 黄褐色土



0 10cm
（1／3）

Fig.100　SS59 遺構・遺物実測図

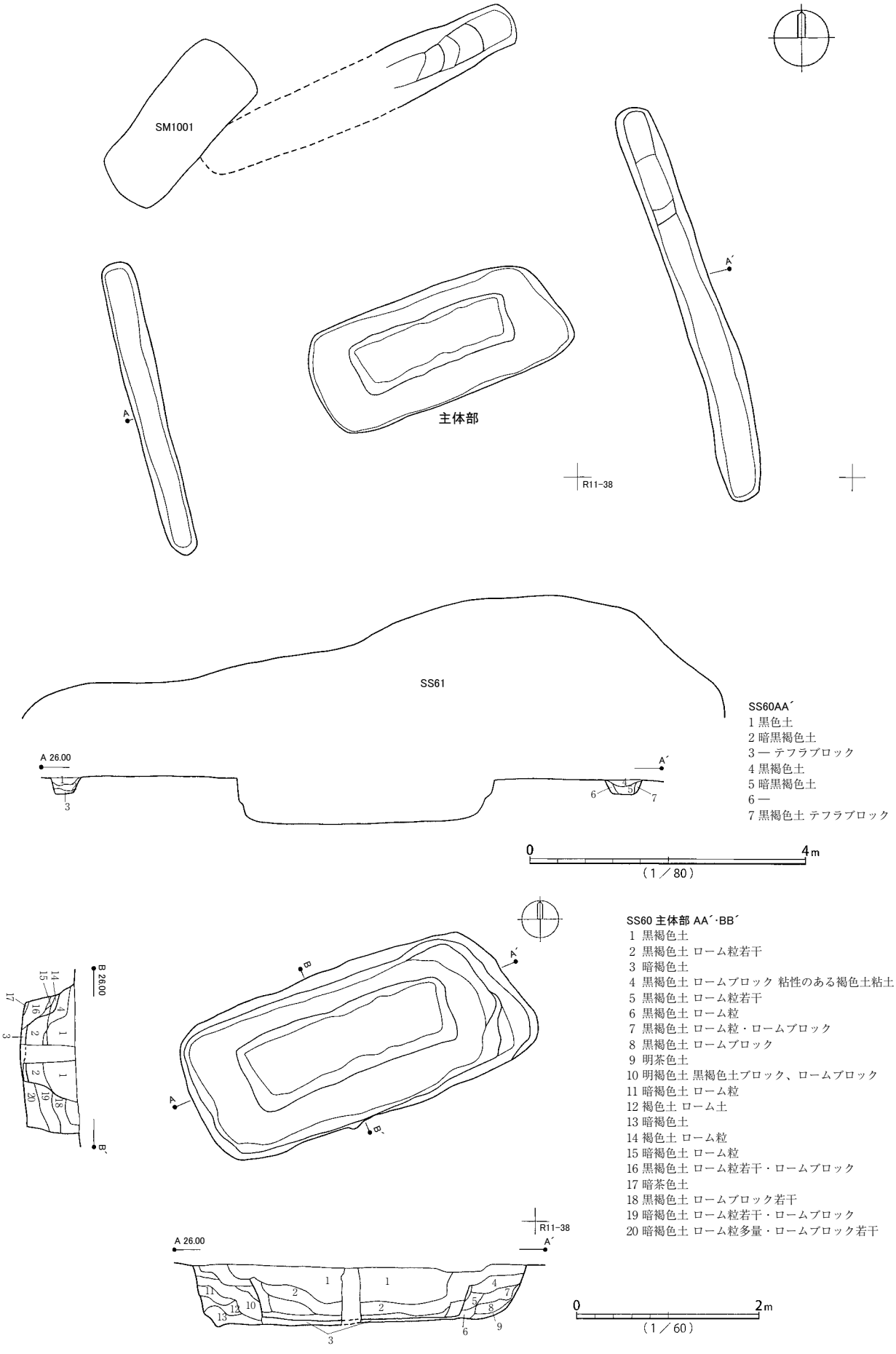


Fig.101　SS60 遺構実測図

(12.85)m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.75m・0.60m、0.71m、東溝が0.95m・0.60m、0.31m、南溝が0.75m・0.40m、0.28m、西溝が0.90m・0.45m、0.30mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状はレンズ状から逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-10°-Eである。
埋葬施設は方台部中央に1基検出している。

主体部からは木棺痕が検出されており、平面形は隅丸長方形、規模は長軸3.30m×短軸1.78m、確認面からの深さ0.55mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-90°である。

墓壙の平面形状は、長方形で、規模は3.30m×1.78m、確認面からの深さは、0.54mを測る。主軸方位は長軸方向からN-90°である。底面は長方形で凹凸が激しい。断面形状は、短軸方向、長軸方向共に逆台形を呈する。

実測遺物は無いものの、写真には主体部内に広口壺形土器が写っている。しかし所在を確認出来ない。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS62　セ28地区（Fig.103、PL.32）

T11-03付近に位置する方形周溝墓である。四隅が切れる同形態の方形周溝墓とは距離を置いて位置する。SM1007盛土下にあり、墳丘裾の主体部に掘削される。本遺構は、発掘調査時にはセ28-182と呼称されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈するとみられる。周溝は南側を検出していないが、おそらくSM1007周溝により失われたとみられ、残る二隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が7.48m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.80m・0.20m、0.55m、東溝が0.66m・0.32m、0.67m、南溝が計測不能、西溝が0.44m・0.26m、0.26mを測る。周溝底面は平坦面は殆ど認められず、断面形状はレンズ状からU字状に近い形状を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-65°-Eである。埋葬施設は方台部中央から南西寄りに1基検出している。主体部墓壙の平面形状は、長方形で、規模は1.95m×0.75m、確認面からの深さは、0.33mを測る。主軸方位は長軸方向からN-89°-Eである。

遺物は、1が壺形土器の底部とみられ、周溝から出土している。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

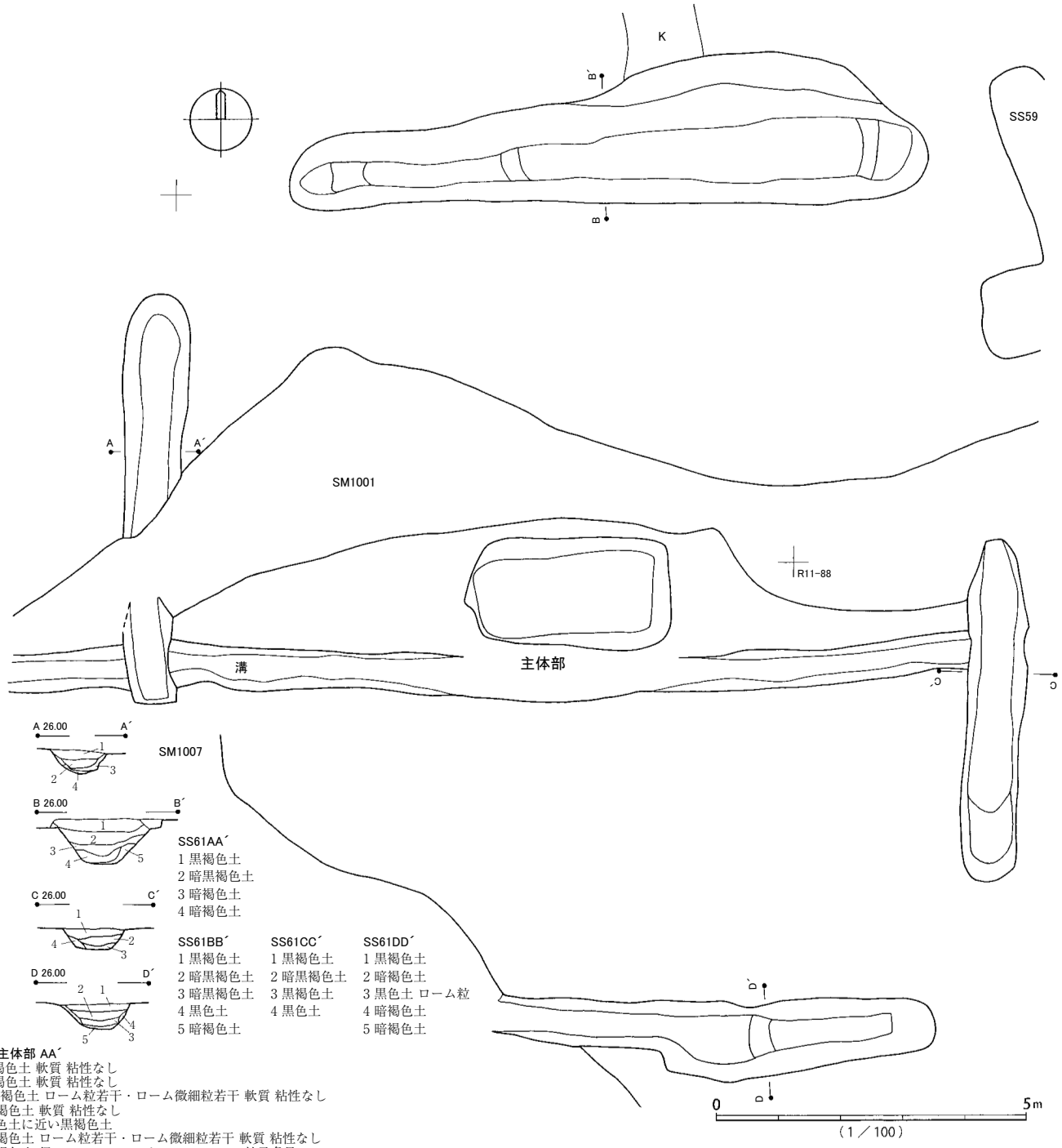
SS63　セ28地区（Fig.104）

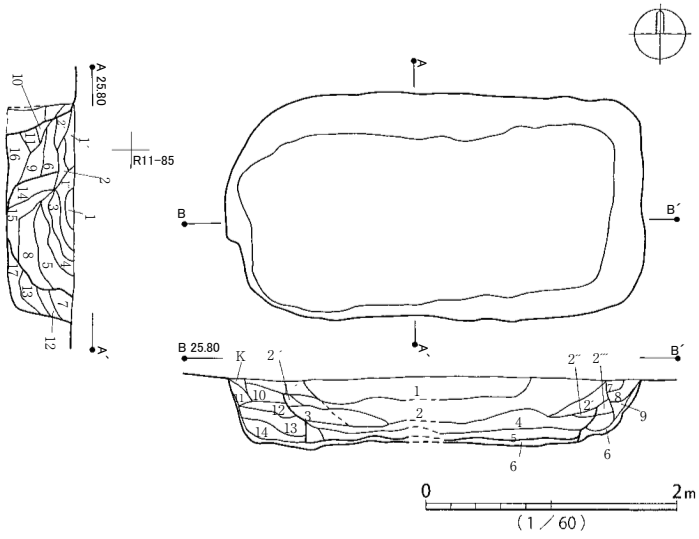
R10-77付近に位置する方形周溝墓である。東側にSS61が距離をおいて位置する。東側をSM1001に掘削される。本遺構は、発掘調査時にはセ28-122と呼称されている。

平面形状は方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅は極めて狭く、ほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が7.08m×7.04m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.58m・0.24m、0.21m、東溝が0.44m・0.32m、0.07m、南溝が0.38m・0.20m、0.13m、西溝が0.34m・0.22m、0.10mを測る。周溝底面はほぼ平坦面を持たず、断面形状はレンズ状を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-85°-Wである。埋葬施設は方台部中央のやや西寄りに1基検出している。

主体部は上端のみの図であるため詳細は不明。主体部墓壙の平面形状は、長方形で、規模は2.04m





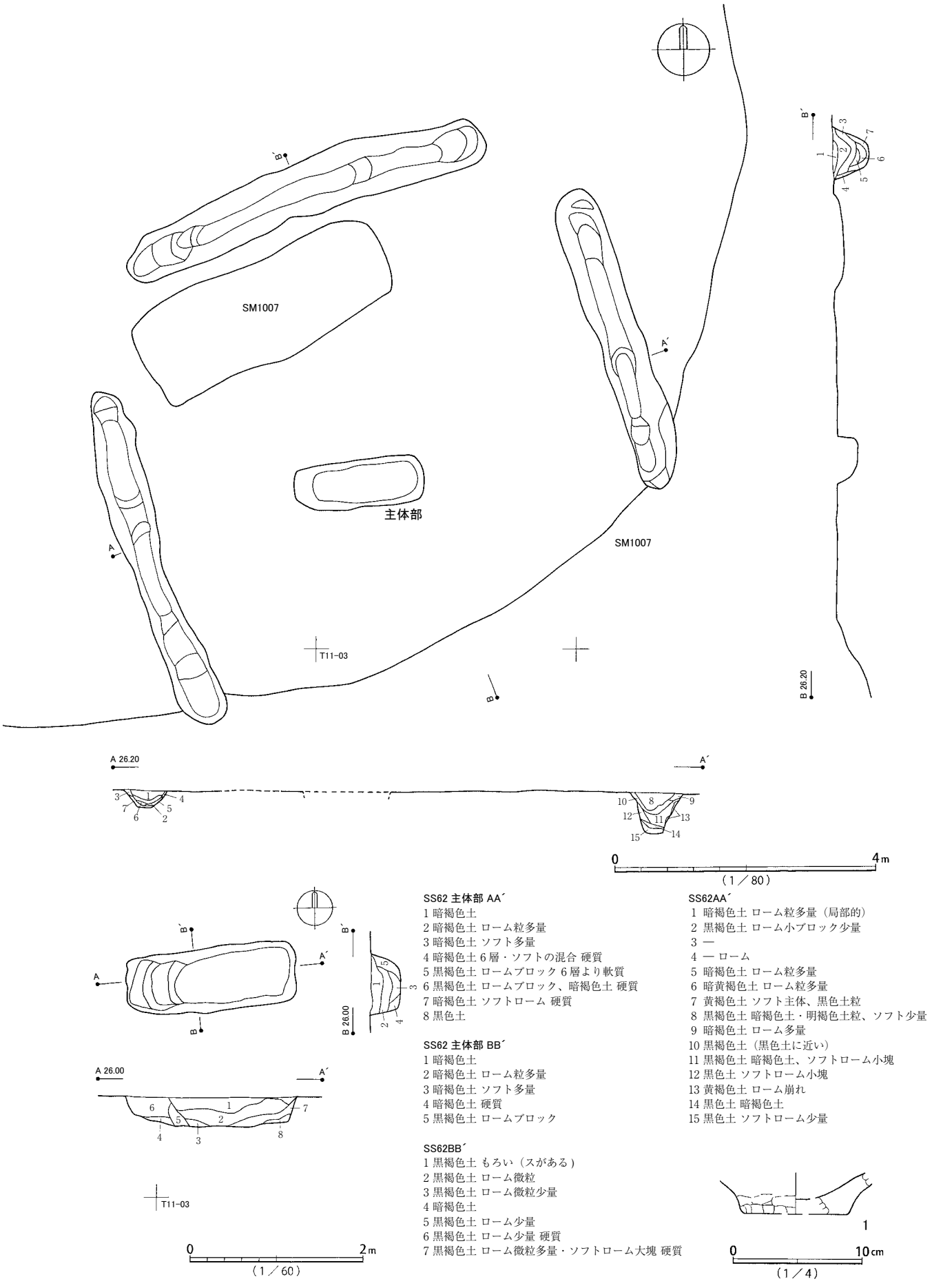
SS61 主体部 AA´

1 明褐色土 軟質 粘性なし
1´明褐色土 軟質 粘性なし
1˝ 明褐色土 ローム粒若干・ローム微細粒若干 軟質 粘性なし
2 黒褐色土 軟質 粘性なし
2´褐色土に近い黒褐色土
3 明褐色土 ローム粒若干・ローム微細粒若干 軟質 粘性なし
4 明褐色土 径 3mm のロームブロック・ローム粒子多量
5 明褐色土 径 3mm のロームブロック・ローム粒子多量 4 層より多量
6 暗褐色土 軟質 粘性なし 所により 16 層との境はしまっている
7 褐色土 ローム斑・硬質のロームブロック多量
8 黒褐色土 硬質 粘性あり
9 黄褐色土
10 黒褐色土 軟質 粘性なし
11 赤褐色土 やや硬質 焼土のような感じ
12 褐色土 ローム斑多量
13 明赤褐色土 硬質のローム斑若干
14 黒褐色土 軟質 粘性なし
15 褐色土 硬質
16 黒褐色土 ローム粒子若干あり
17 明褐色土 軟質 粘性あり

SS61 主体部 BB´

1 暗褐色土 径 3mm のローム粒子、3 ～ 5cm の粘土状のローム塊多量
1´暗褐色土 1 層よりも茶色土 径 3mm のローム粒子、3 ～ 5cm の粘土状のローム塊多量 1 層より多量
2 黒っぽい暗褐色土 径 3mm のローム粒子、3 ～ 5cm の粘土状のローム塊若干
2´暗褐色土 赤化ローム粒子微量
2˝ 暗黒褐色土 赤化ローム粒子微量 2´ 層よりも黒い
2‴ 暗褐色土 2´層より茶色土 軟質で粘性のあるローム塊
3 暗黒褐色土 硬質のローム粒子若干・ローム塊
4 暗褐色土
5 暗黒褐色土 軟質のローム斑若干
6 褐色土 ソフトローム類似 粘性あり
7 暗黒褐色土 硬質のローム粒若干
8 暗黒褐色土 7 層より茶色土 軟質のローム斑
9 暗黒褐色土 8 層より茶色土 軟質のローム斑 8 層より多量
10 褐色土に近い暗褐色土 硬質の粘性のないロームブロック少量
11 暗黒褐色土に近い暗褐色土 硬質の粘性のないロームブロック少量 10 層より少量
12 暗褐色土 ロームブロック
13 暗褐色土 ロームブロック
14 暗黒褐色土

Fig.102　SS61 遺構実測図



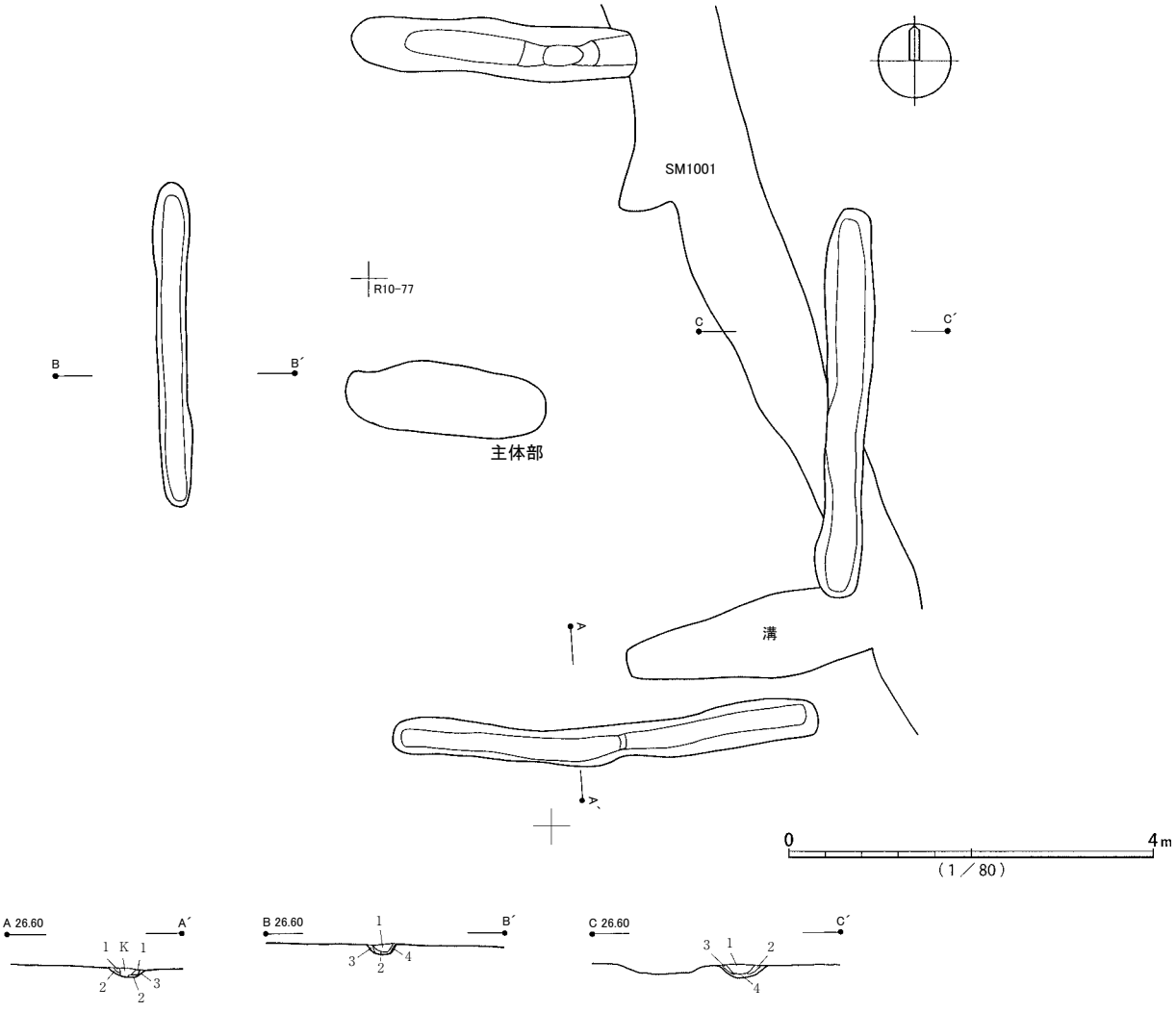
SS62 主体部 AA´
1 暗褐色土
2 暗褐色土 ローム粒多量
3 暗褐色土 ソフト多量
4 暗褐色土 6 層・ソフトの混合 硬質
5 黒褐色土 ロームブロック 6 層より軟質
6 黒褐色土 ロームブロック、暗褐色土 硬質
7 暗褐色土 ソフトローム 硬質
8 黒色土

SS62 主体部 BB´
1 暗褐色土
2 暗褐色土 ローム粒多量
3 暗褐色土 ソフト多量
4 暗褐色土 硬質
5 黒褐色土 ロームブロック

SS62BB´
1 黒褐色土 もろい（スがある）
2 黒褐色土 ローム微粒
3 黒褐色土 ローム微粒少量
4 暗褐色土
5 黒褐色土 ローム少量
6 黒褐色土 ローム少量 硬質
7 黒褐色土 ローム微粒多量・ソフトローム大塊 硬質

SS62AA´
1 暗褐色土 ローム粒多量（局部的）
2 黒褐色土 ローム小ブロック少量
3 —
4 — ローム
5 暗褐色土 ローム粒多量
6 暗黄褐色土 ローム粒多量
7 黄褐色土 ソフト主体、黒色土粒
8 黒褐色土 暗褐色土・明褐色土粒、ソフト少量
9 暗褐色土 ローム多量
10 黒褐色土（黒色土に近い）
11 黒褐色土 暗褐色土、ソフトローム小塊
12 黒色土 ソフトローム小塊
13 黄褐色土 ローム崩れ
14 黒色土 暗褐色土
15 黒色土 ソフトローム少量

Fig.103　SS62 遺構・遺物実測図



SS63AA´
1 暗褐色土 はりのないローム粒子若干 粘性なし
2 褐色土 はりのないローム粒子若干 粘性なし
3 褐色土 はりのないローム粒子若干 粘性若干あり

SS63BB´
1 —
2 —
3 —
4 —

SS63CC´
1 —
2 —
3 —
4 —

Fig.104　SS63 遺構実測図

×0.96mを測る。主軸方位は長軸方向からN-85°-Wである。

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS64　セ28地区（Fig.105～106、PL.32・157）

R10-02付近に位置する方形周溝墓である。南西側にSS65が近接し、北側にSS69が位置する。SM1031、SM1034、SM1154に掘削される。本遺構は発掘調査時にはセ28-050と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅は南側を除きほぼ均等に方台部をめぐる。南側周溝は西に向けて幅を広げる。規模は方台部が5.33m×5.28m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.24m・0.72m、0.51m、東溝が1.28m・0.40m、0.78m、南溝が1.08m・0.56m、0.41m、西溝が1.08m・0.56m、0.52mを測る。周溝底面はほぼ平坦面が少なく、断面形状は逆台形からレンズ状に近い形状を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-35.5°-Eである。埋葬施設は方台部では検出していないが、南側周溝外縁に沿って掘り込まれた土壙内から壺形土器棺が出土している。

土壙の平面形状は長方形で、規模は0.90m×0.50m、確認面からの深さは、0.60mを測る。主軸方位は長軸方向からN-55°-E である。掘り込みは明らかに周溝を意識するか、周溝内ではなく、拡張するような位置につくられている。

出土遺物は土壙内からの出土のみで、1・2は壺形土器である。何れも土壙底面直上から出土している。1は頸部を東側に向け、横位で出土している。2は1の頸部を蓋として合わせた状態で出土している。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS65　セ28地区（Fig.106）

R9-58付近に位置する方形周溝墓である。北側にSS64が近接し、主軸方位を等しくする。西側をSM1003、SD16に掘削される。本遺構は、発掘調査時にはセ28-193と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈し、周溝は一部を欠くものの、四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が11.15m×(10.20)m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.30m・0.75m、0.52m、東溝が1.10m・0.60m、0.44m、南溝が1.15m・0.35m、0.43m、西溝が0.90m・0.45m、0.42mを測る。周溝底面は中央が窪み、平坦面は少ない。断面形状は逆台形からレンズ状の中間的な形状を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-26.5°-Eである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS66　セ28地区（Fig.107、PL.181）

S9-00付近に位置する方形周溝墓である。北側に距離をおいてSS67が位置する。SM1003、SS112

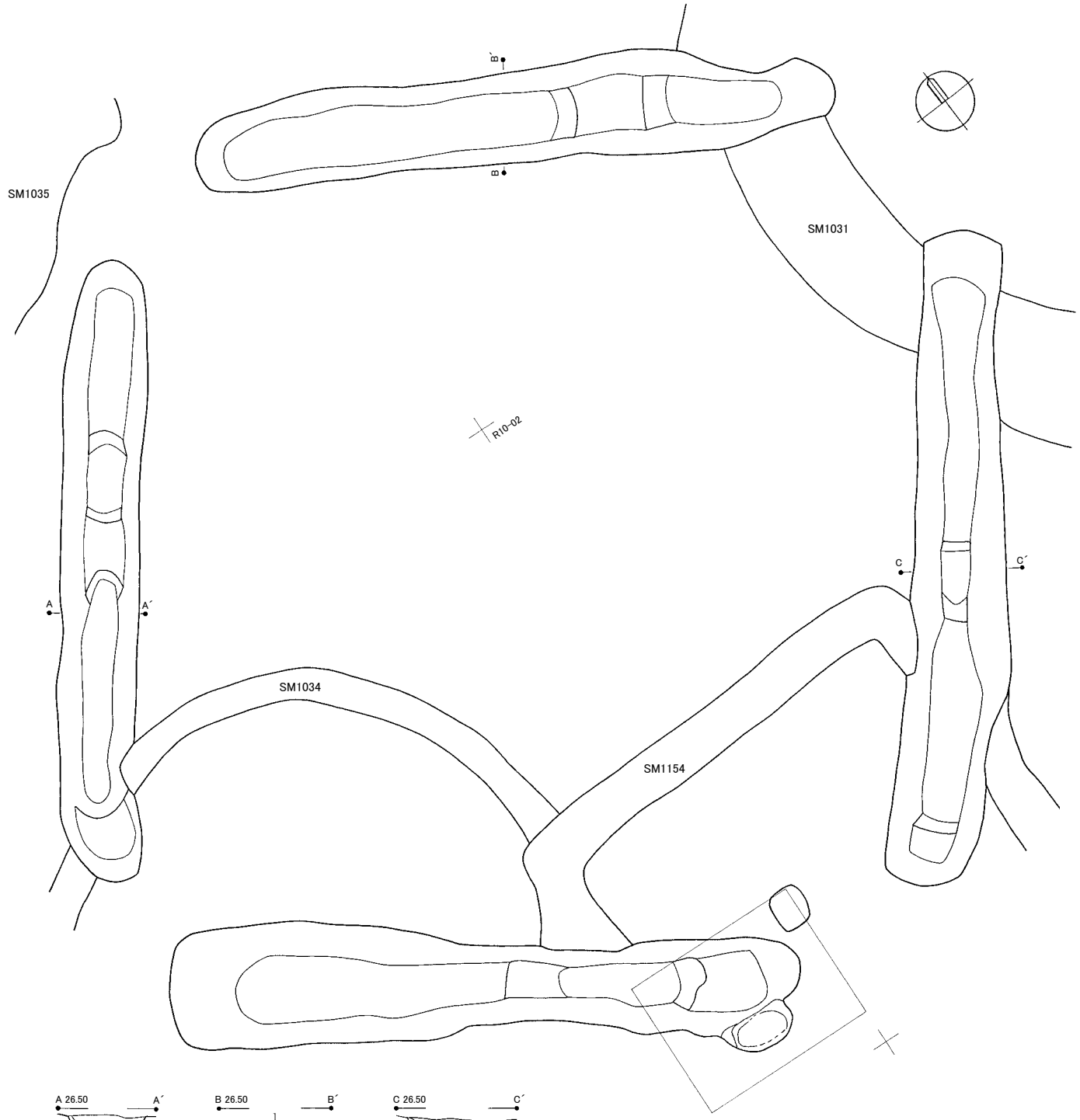


Fig.105　SS64 遺構・遺物 (1) 実測図

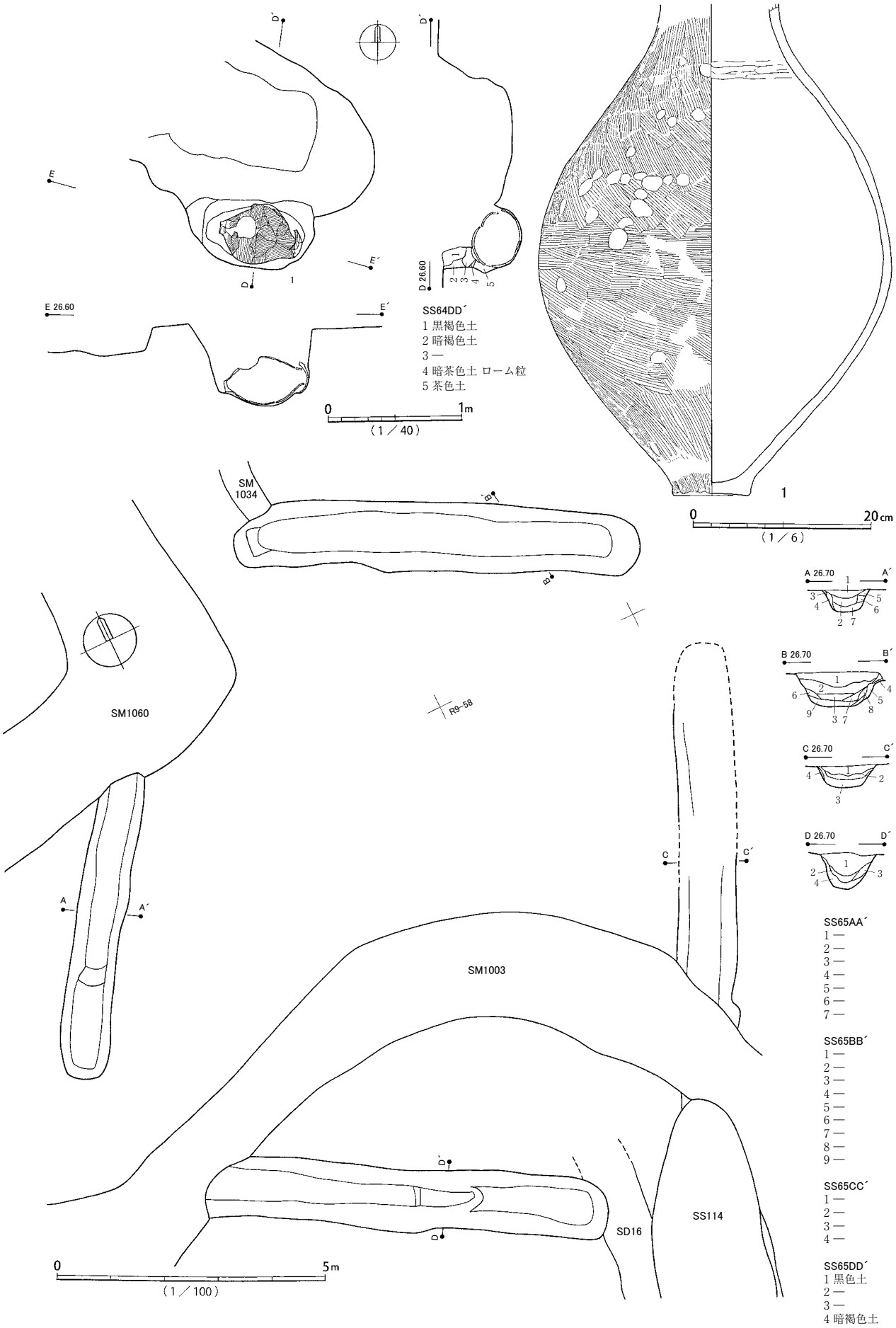


Fig.106　SS64 遺物出土詳細・遺物 (2)、SS65 遺構実測図

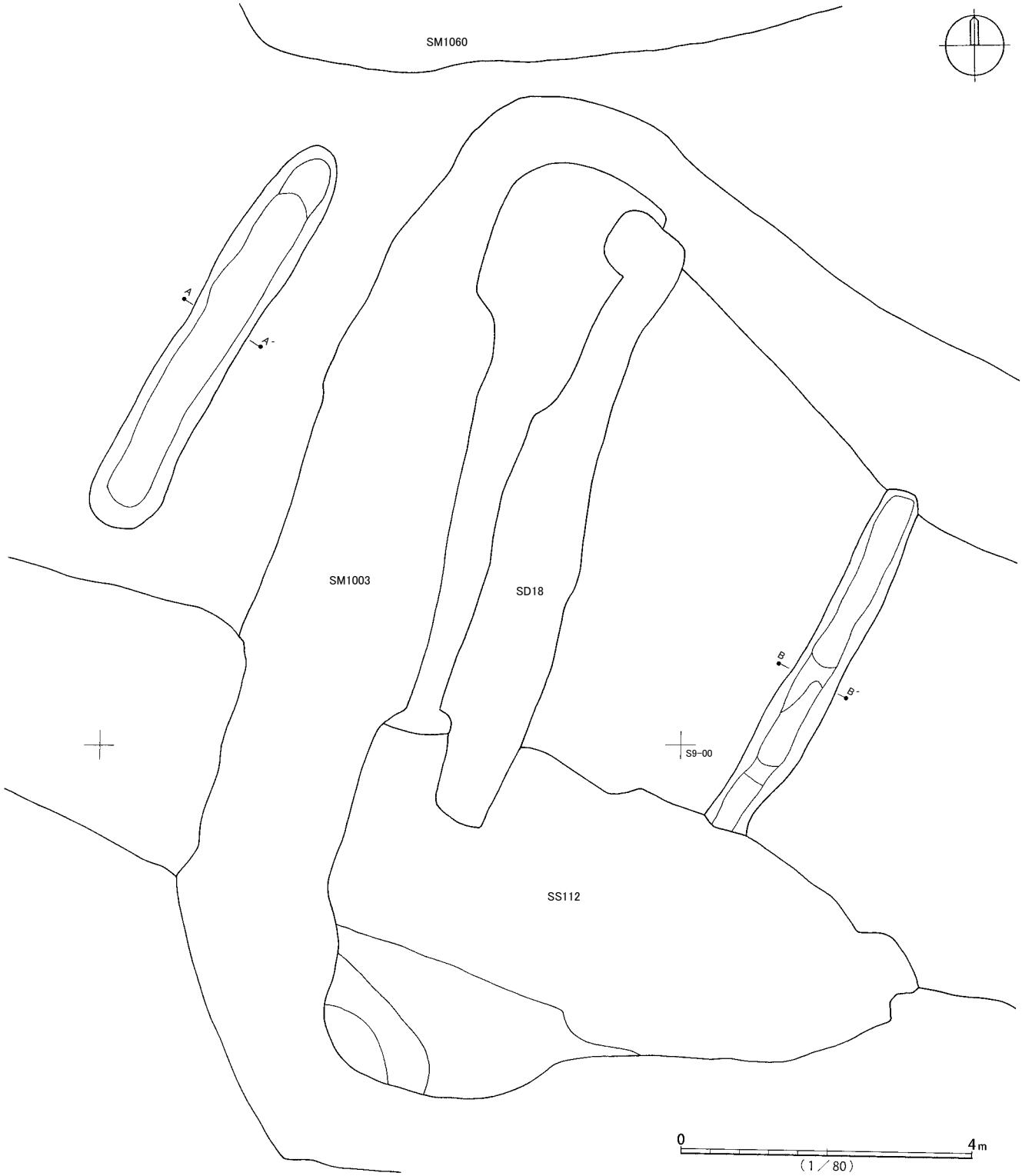


Fig.107　SS66 遺構・遺物実測図

に掘削される。本遺構は、発掘調査時にはセ28-244と呼称されている。事実記載にあたり北西側を西辺、西側周溝とする。

平面形状は方形を呈するとみられる。周溝は北側、南側を欠いている。周溝幅はほぼ均等に方台部を囲む。規模は方台部が8.98m×計測不能、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で計測不能、東溝が0.66m・0.38m、0.42m、南溝が計測不能、西溝が0.86m・0.60m、0.24mを測る。周溝底面は中央が窪み平坦面は少ない。断面形状はレンズ状に近い形状を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-59°-Wである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、周溝から出土している。1は壺形土器である。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS67　セ28地区（Fig.108）

R9-30付近に位置する方形周溝墓である。北側でSS68が近接し、南側にSS66が距離を置いて位置する。南側をSM1060に掘削される。本遺構は、発掘調査時にはセ28-294と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈するものとみられる。周溝はSM1060により東側から南側を欠くが、少なくとも三隅で断絶する。周溝幅は、北側周溝が東に向け幅を広げるが、西側周溝はほぼ均等である。規模は方台部が計測不能、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.12m・0.80m、0.24m、東溝が計測不能、南溝が計測不能、西溝が0.70m・0.38m、0.25mを測る。周溝の断面形状等は記録が限られ詳細は不明である。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は計測不能である。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS68　セ28地区（Fig.108）

R9-03付近に位置する方形周溝墓である。ほぼSM1060の墳丘下に位置し、周溝に掘削される。北西側にSS70が、南側にSS67が近接する。本遺構は、発掘調査時にはセ28-295と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅は北側周溝で不確定だが、ほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が7.64m×6.40m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.12m・0.42m、0.66m、東溝が0.64m・0.48m、0.11m、南溝が0.82m・0.40m、0.62m、西溝が0.86m・0.42m、0.54mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形、漏斗状に近い形状を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-69.5°-Wである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS69　セ28地区（Fig.109）

Q9-57付近に位置する方形周溝墓である。SM1035墳丘下にあり、南側を周溝で掘削される。南側

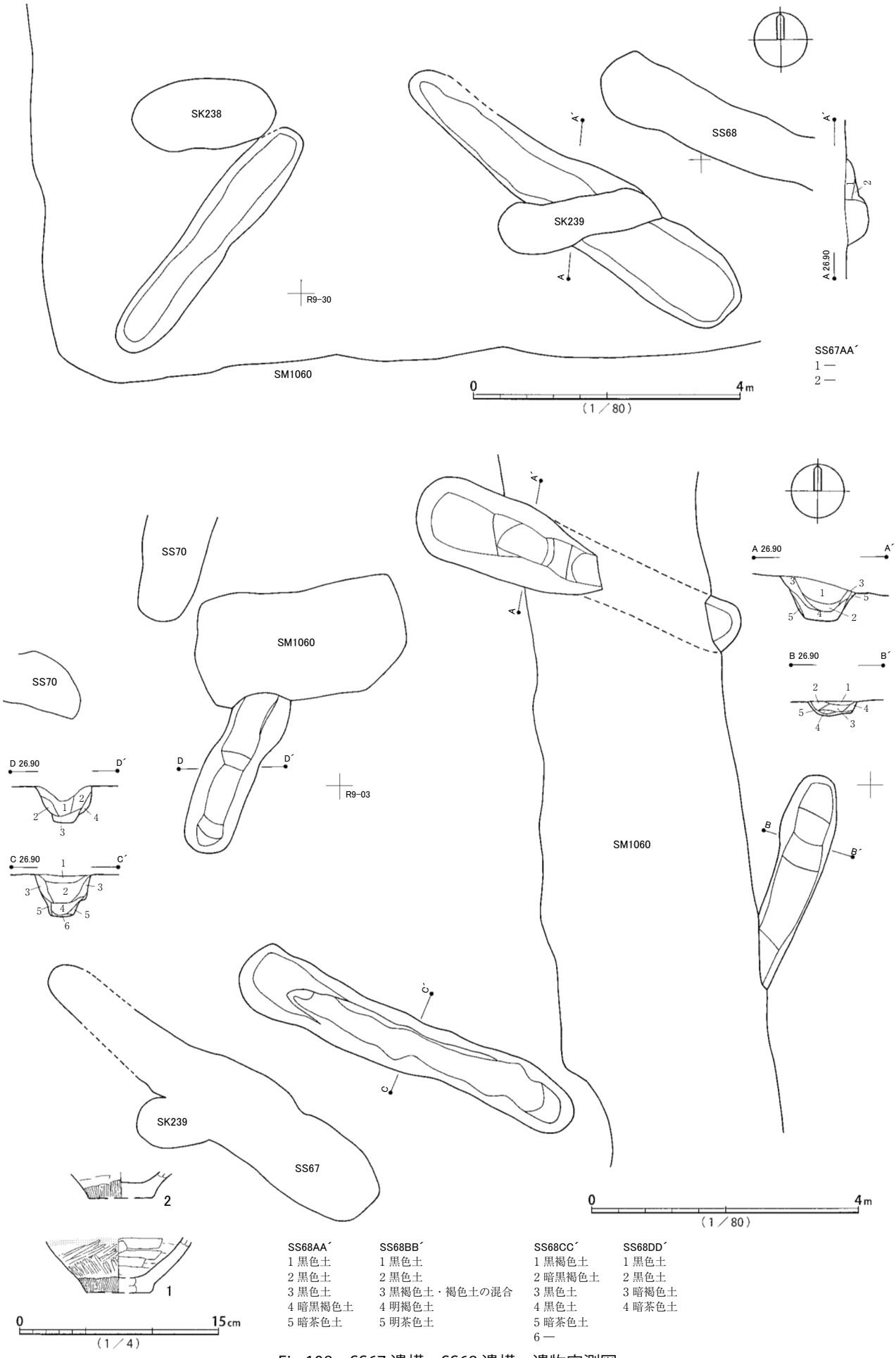


Fig.108　SS67 遺構、SS68 遺構・遺物実測図

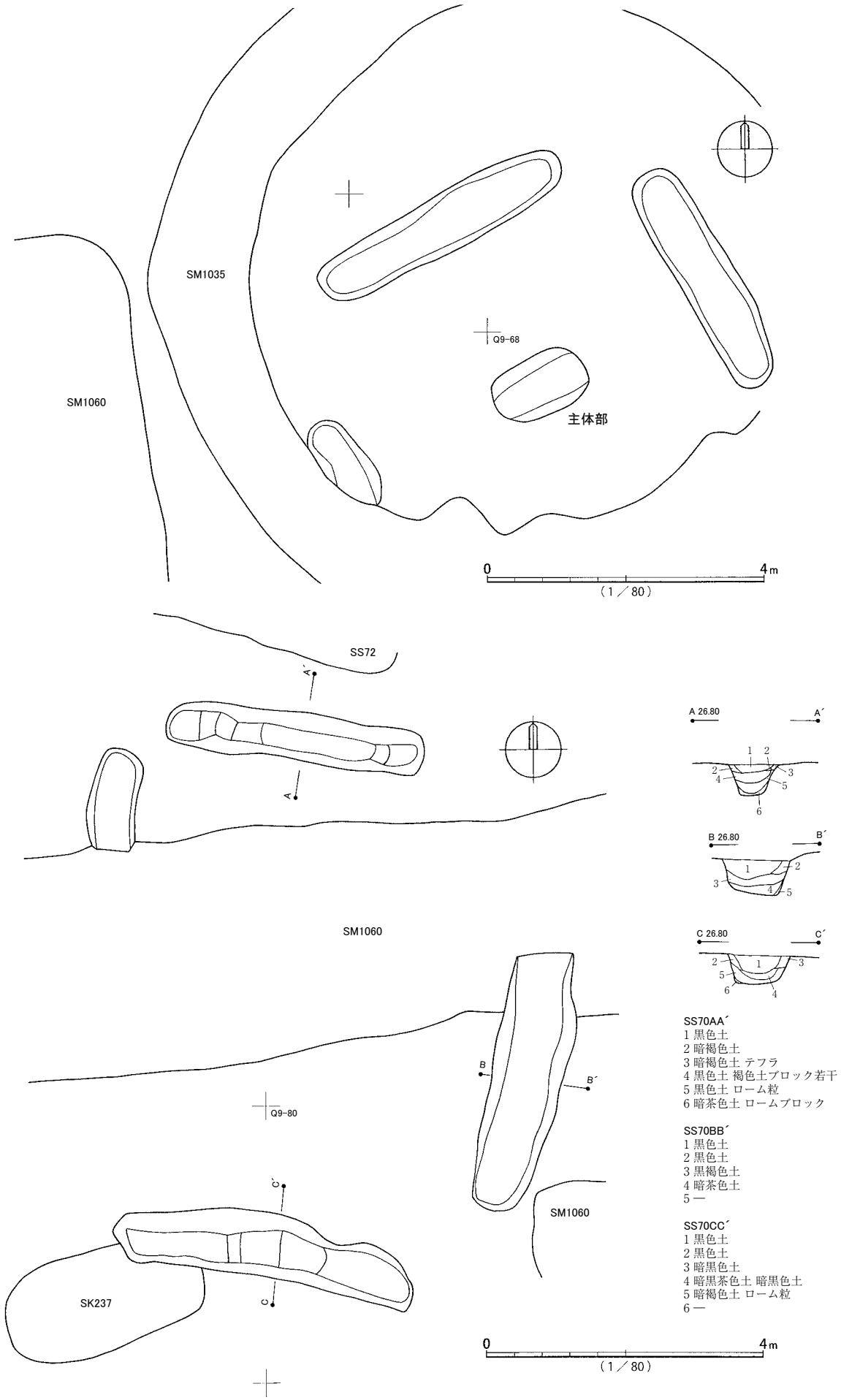
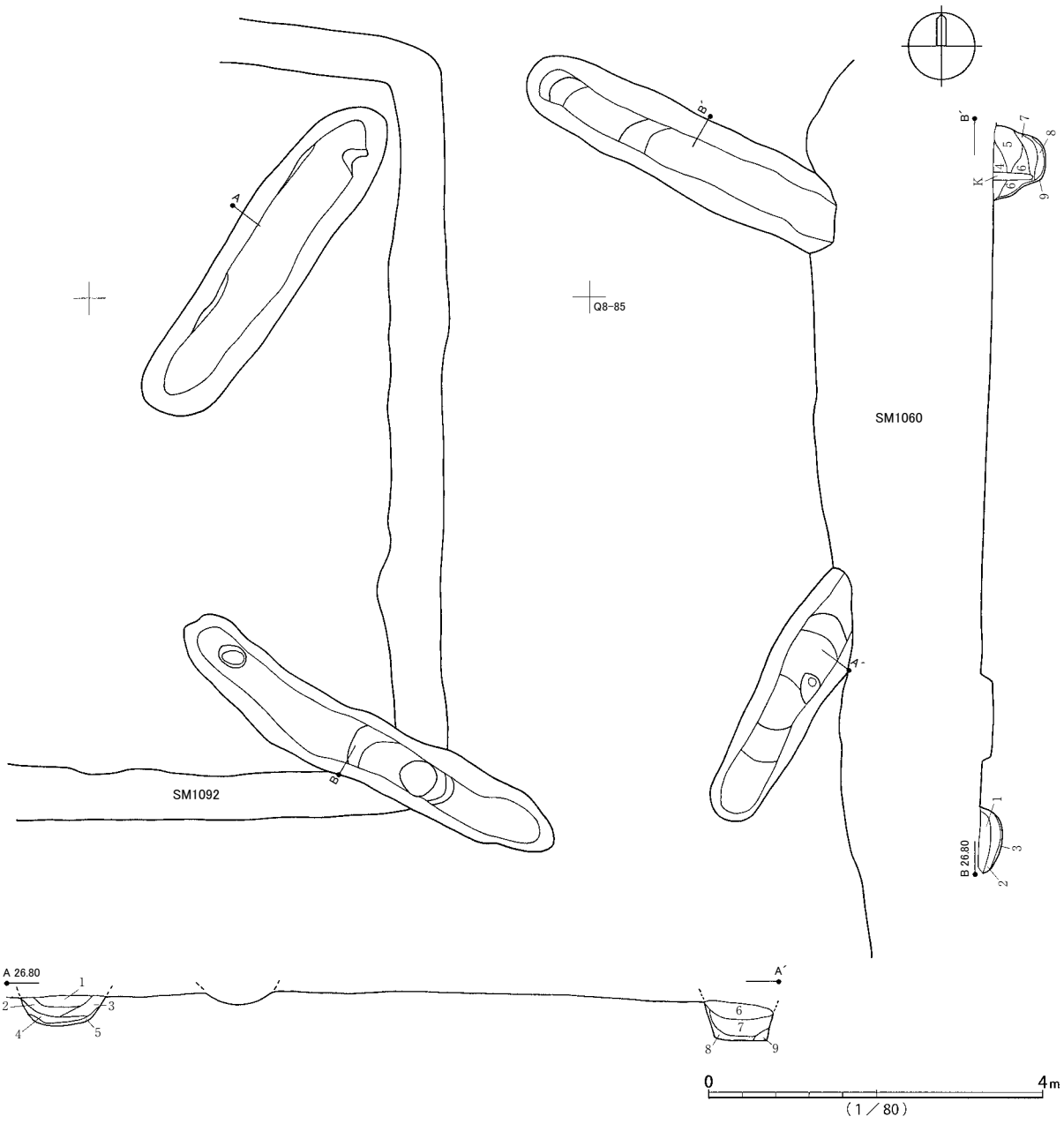
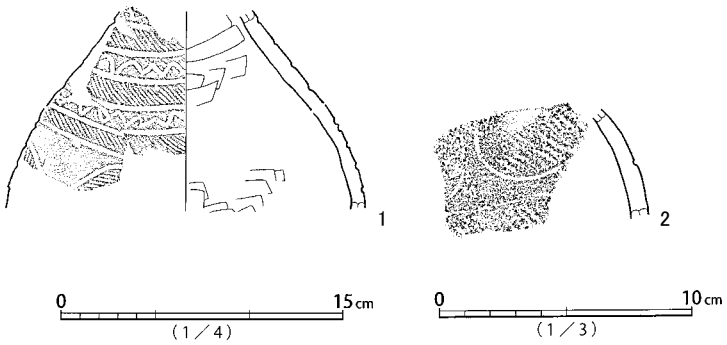


Fig.109　SS69 遺構、SS70 遺構実測図





SS71AA´
1 暗褐色土 ローム粒多量 硬質
2 暗褐色土 硬質
3 暗褐色土 ローム粒、赤褐色土粒
4 暗褐色土 ローム粒若干 硬質
5 暗褐色土 ローム
6 暗褐色土 ローム粒、褐色土・赤褐色土粒
7 暗褐色土 ローム粒、褐色土多量
8 褐色土 ローム 軟質
9 暗褐色土 ローム

SS71BB´
1 暗褐色土 ローム粒若干 軟質
2 褐色土・暗褐色土の混合 ローム粒若干 軟質
3 ― ローム
4 暗褐色土 ローム粒若干 硬質
5 暗褐色土 硬質
6 暗褐色土・褐色土の混合 軟質
7 暗褐色土 ローム粒 軟質
8 黒褐色土 ローム細粒若干
9 暗褐色土 ローム

Fig.110　SS71 遺構・遺物実測図

にSS68・64が隣接するが主軸方向は大きく異なる。本遺構は、発掘調査時にはセ28-245と呼称されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は方形を呈するとみられ、周溝は南側周溝を欠くが、少なくとも三隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が5.18m×計測不能、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.82m・0.62m、0.26m、東溝が0.80m・0.58m、0.16m、南溝が計測不能、西溝が(0.72)m・0.40m、0.11mを測る。記録類が限られ、周溝断面形状等、詳細は不明である。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-63°-Eである。埋葬施設は方台部中央に、1基検出され、周溝の方位を意識して主軸方向をおいている。主体部墓壙の平面形状は、長方形で、規模は1.42m×0.84mを測る。主軸方位は長軸方向からN-67°-Eである。

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS70　セ28地区（Fig.109）

Q9-80付近に位置する方形周溝墓である。北側にSS72、東側にSS68、南側にSS67と近接する。SM1060に中央を大きく掘削されている。本遺構は、発掘調査時にはセ28-293と呼称されている。

平面形状はやや歪んだ方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅は各々異なるものの、ほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が6.56m×(5.32)m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.70m・0.30m、0.48m、東溝が1.04m・0.68m、0.51m、南溝が0.94m・0.48m、0.42m、西溝が0.68m・0.50m、0.08mを測る。周溝底面は平坦面が多く、断面形状は逆台形に近い形状を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-5.2°-Eである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS71　セ28地区（Fig.110、PL.181）

Q8-85付近に位置する方形周溝墓である。列状を呈する方形周溝墓群とは隣接するがやや距離を置いて位置する。西側でSM1092、東側でSM1060と重複し、何れの遺構よりも古い。本遺構は、発掘調査時にはセ28-292と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、方台部がほぼ正方形を呈し、周溝は北東隅が不明であるが、三隅で断絶が確認できる。おそらく原形は四隅が断絶するものとみられる。周溝幅は北西隅を除きほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が7.24m×7.10m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.98m・0.44m、0.70m、東溝が0.96m・0.56m、0.47m、南溝が0.80m・0.48m、0.27m、西溝が1.04m・0.62m、0.35mを測る。周溝底面は平らではなく、断面形状はU字形を呈する。東側、南側周溝内には土坑状の掘り込みが存在する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-31°-Eである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は1、2共に壺形土器で、何れもグリッド一括取り上げである。

帰属時期は、宮ノ台式期前半の所産と考えられる。

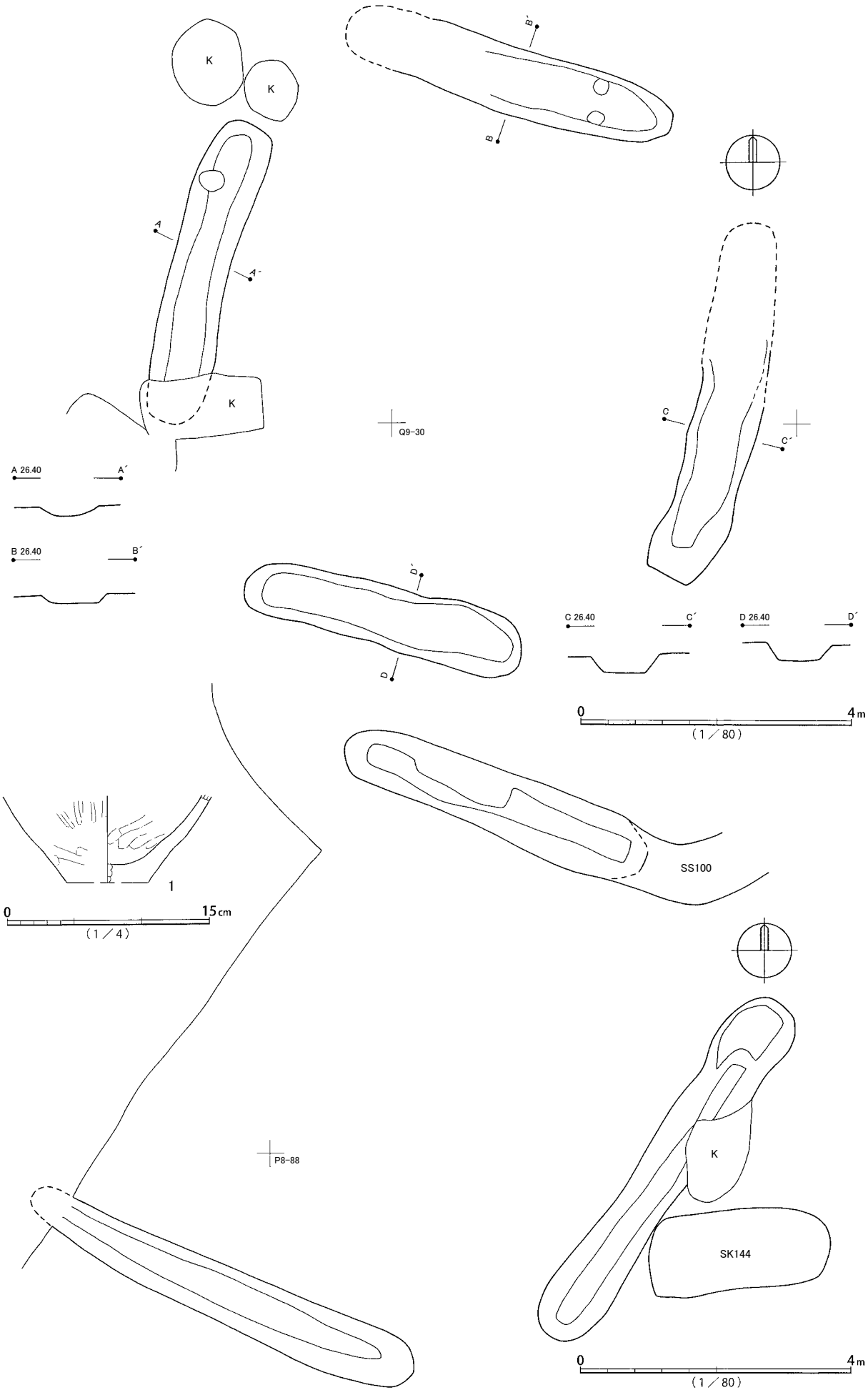
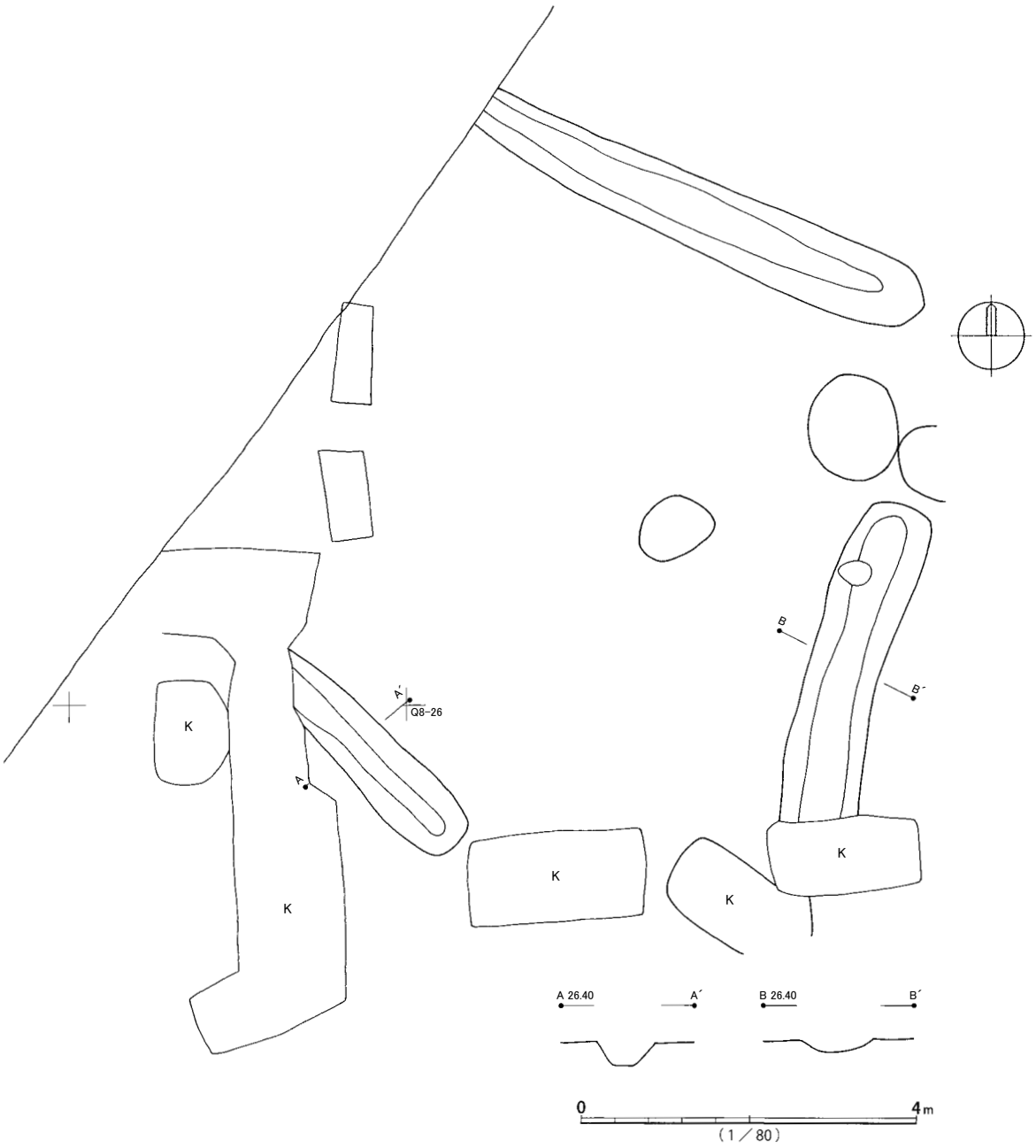


Fig.111　SS72 遺構、SS73 遺構・遺物実測図



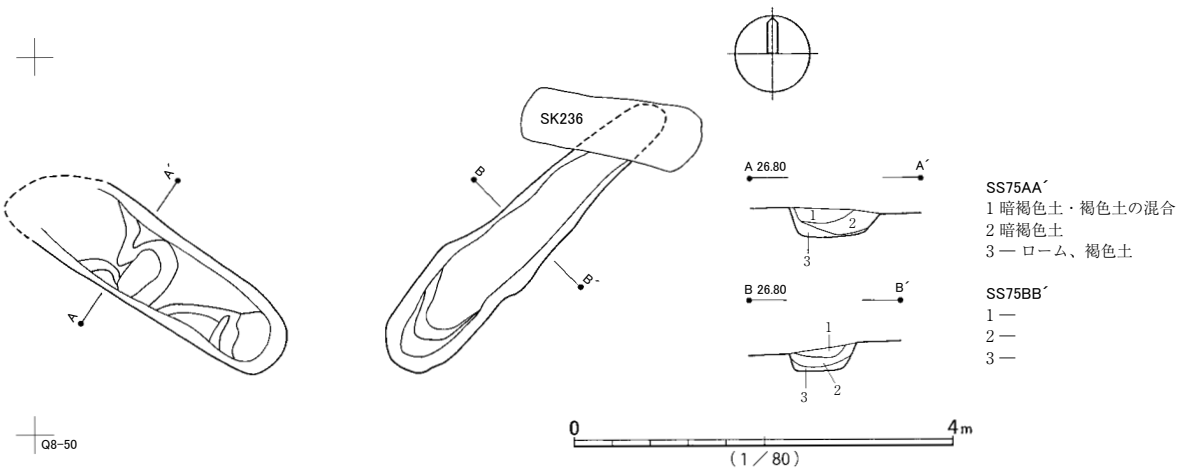
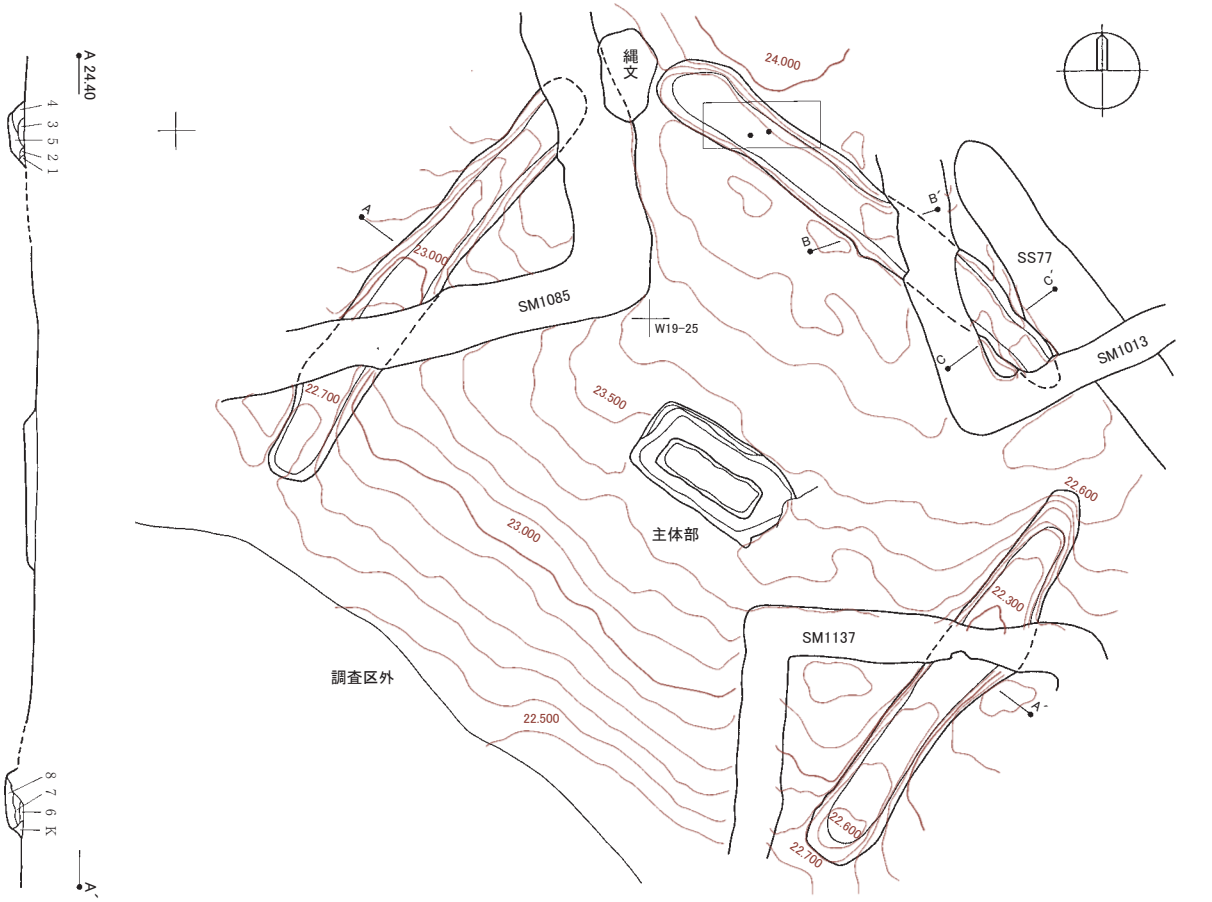
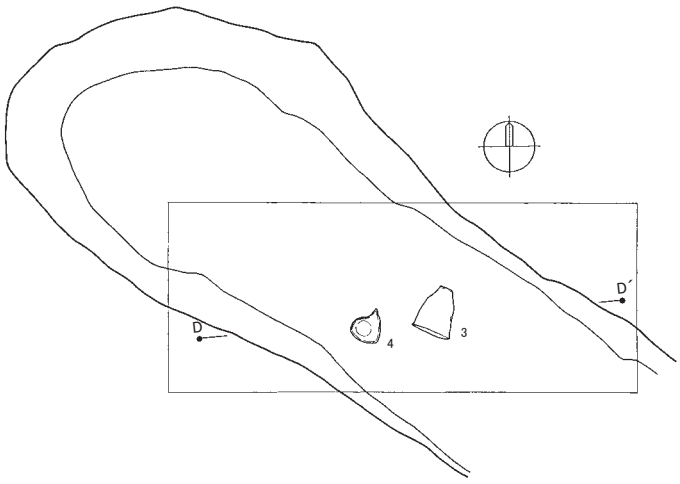


Fig.112　SS74 遺構、SS75 遺構実測図





SS76AA´
1 灰褐色土 暗褐色土・黄褐色土
2 暗灰褐色土 暗褐色土・灰褐色土
3 黒褐色土 ローム粒少量、暗褐色土多量
4 黒褐色土 ローム粒、灰褐色土多量・暗褐色土
5 暗褐色土 ローム粒 4 層より多い
6 黒褐色土 暗黄褐色土
7 黒褐色土 ローム粒極少量、暗黄褐色土少量
8 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土

SS76BB´
1 黒褐色土 やや褐色が強い ローム粒極少量
2 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土

SS76CC´
1 黒褐色土 やや褐色が強い ローム粒少量、灰褐色土多量
2 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土
3 黒褐色土・暗褐色土の混合 ローム粒

Fig.113　SS76 遺構 (1)・遺物出土詳細実測図

SS72　セ28地区（Fig.111）

Q9-30付近に位置する方形周溝墓である。北側にSS73、南側にSS70、西側にSS74が近接する。本遺構は、発掘調査時にはセ28-296と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。また、エレベーション図は整理作業時点で作図している。

平面形状は、方台部がほぼ正方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が7.20m×7.16m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.00m・0.68m、0.14m、東溝が0.96m・0.60m、0.26m、南溝が0.88m・0.56m、0.27m、西溝が0.84m・0.38m、0.14mを測る。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位はN-75°-Wである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS73　099地区（Fig.111）

P8-88付近に位置する方形周溝墓である。南側にSS72、SS74が近接し、北側でSS100と重複するが、新旧関係は不明である。西側は保存区境界となり、遺構は調査区外に及んでいるとみられる。本遺構は、発掘調査時には099-4058と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、北側でやや歪んだ方形を呈し、西側が調査区外にあるとみられ未検出だが、少なくとも三隅で断絶する。おそらく四隅が断絶するとみられる。周溝幅は均等とは言い難いが、極端な形状変化は認められない。規模は方台部の南北軸長で7.50mを測る。周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.96m・0.44m、0.49m、東溝が0.72m・0.48m、0.50m、南溝が0.82m・0.44m、0.35mを測る。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-30°-Eである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、1が壺形土器底部で、グリッド一括取り上げである。

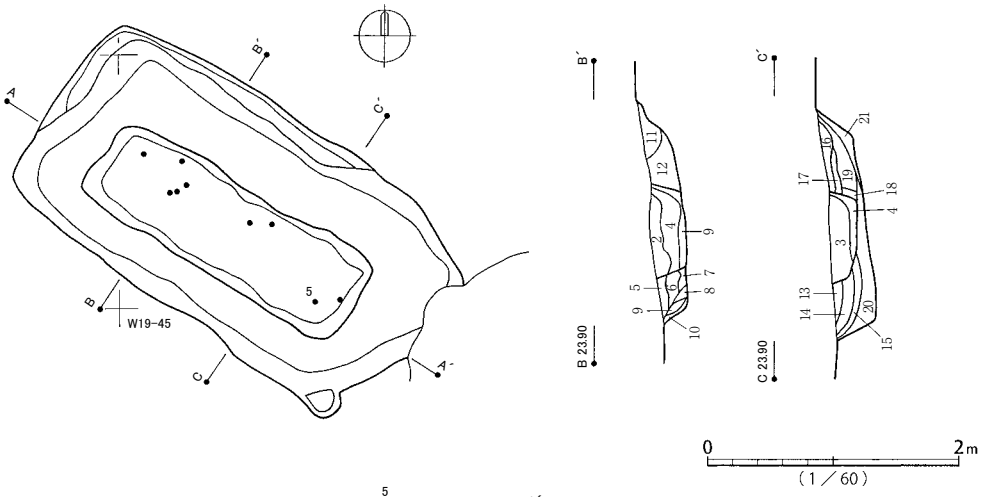
帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

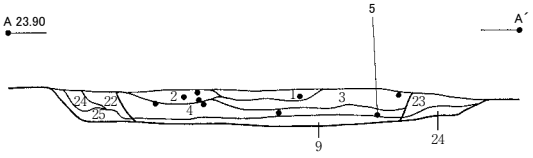
SS74　099地区（Fig.112）

Q8-26付近に位置する方形周溝墓である。北側にSS73、東側にSS72と近接する。西側は保存区境界となり、西側周溝は調査区外に位置する可能性がある。本遺構は、発掘調査時には、方形周溝墓としては認識されておらず、南側溝が遺構番号無しで図面化されていた。整理作業段階で、北側と東側周溝を、SS73とSS72との共有するものと判断している。ただし、本遺跡で、明瞭に周溝を共有する例は乏しく、将来的に西側周溝が確認されるか否かで、周溝墓であるかの判断が可能となる。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。エレベーション図は整理作業段階で作図している。

平面形状は、方台部が著しく歪んだ方形を呈し、周溝は二隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が、南北軸方向で6.88mを測る。周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.84m・0.46m、0.35m、東溝が0.86m・0.38m、0.14m、南溝が0.78m・0.20m、0.30mを測る。

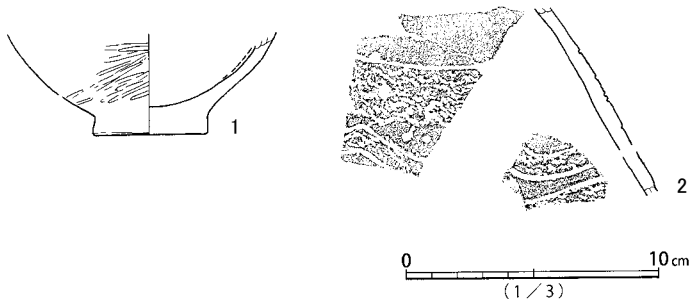
墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-28.5°-Eである。埋葬施設は





SS76 主体部 AA´·BB´·CC´

1 暗灰褐色土 ローム粒 3 層より少量
2 暗黄灰褐色土 4 層より暗い 暗灰褐色土多量
3 暗黄灰褐色土 ローム粒、暗褐色土・暗灰褐色土、炭粒少量
4 暗灰褐色土 黄褐色が強い ローム粒
5 暗褐色土 ローム粒、黄褐色土多量
6 暗褐色土 ローム粒多量、黄褐色土・黒褐色土
7 黄褐色土 ロームブロック、暗褐色土
8 黒褐色土 褐色が強い ローム粒、暗褐色土少量
9 暗黄褐色土 ローム粒 硬質
10 黒褐色土 ローム粒多量
11 暗黄褐色土 ローム粒、黒褐色土少量
12 暗褐色土 ローム粒（大）、黒褐色土・黄褐色土
13 暗褐色土・黒褐色土の混合 ローム粒、黄褐色土
14 暗褐色土・黒褐色土の混合 ローム粒
15 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土
16 暗褐色土 ローム粒（大、小）、黒褐色土
17 暗褐色土 ローム粒（大）、暗灰褐色土
18 暗褐色土 やや灰褐色気味 黒褐色土、ローム粒・ロームブロック少量
19 黒褐色土・暗褐色土の混合 ローム粒・ロームブロック
20 暗褐色土・黄褐色土の混合
21 黒褐色土 暗褐色土
22 暗褐色土 黒っぽい黄褐色土
23 暗灰褐色土 少し暗い ローム粒少量、暗褐色土
24 暗褐色土・黄褐色土の混合 ローム粒（大）、黒褐色土
25 黄褐色土 暗褐色土



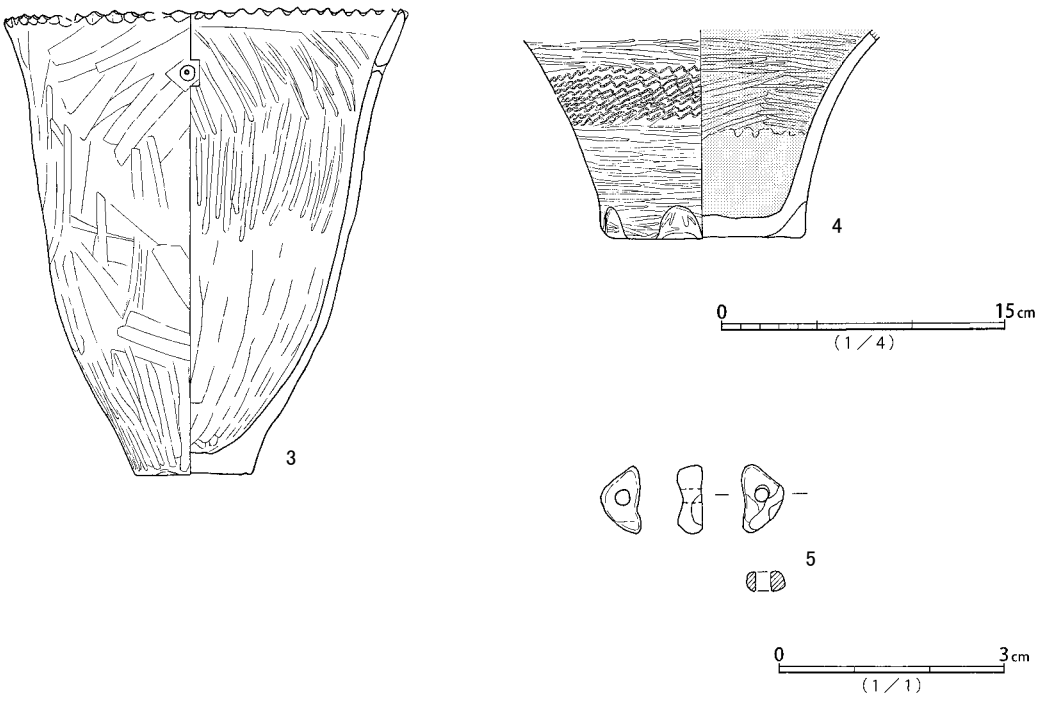


Fig.114　SS76 遺構 (2)・遺物実測図

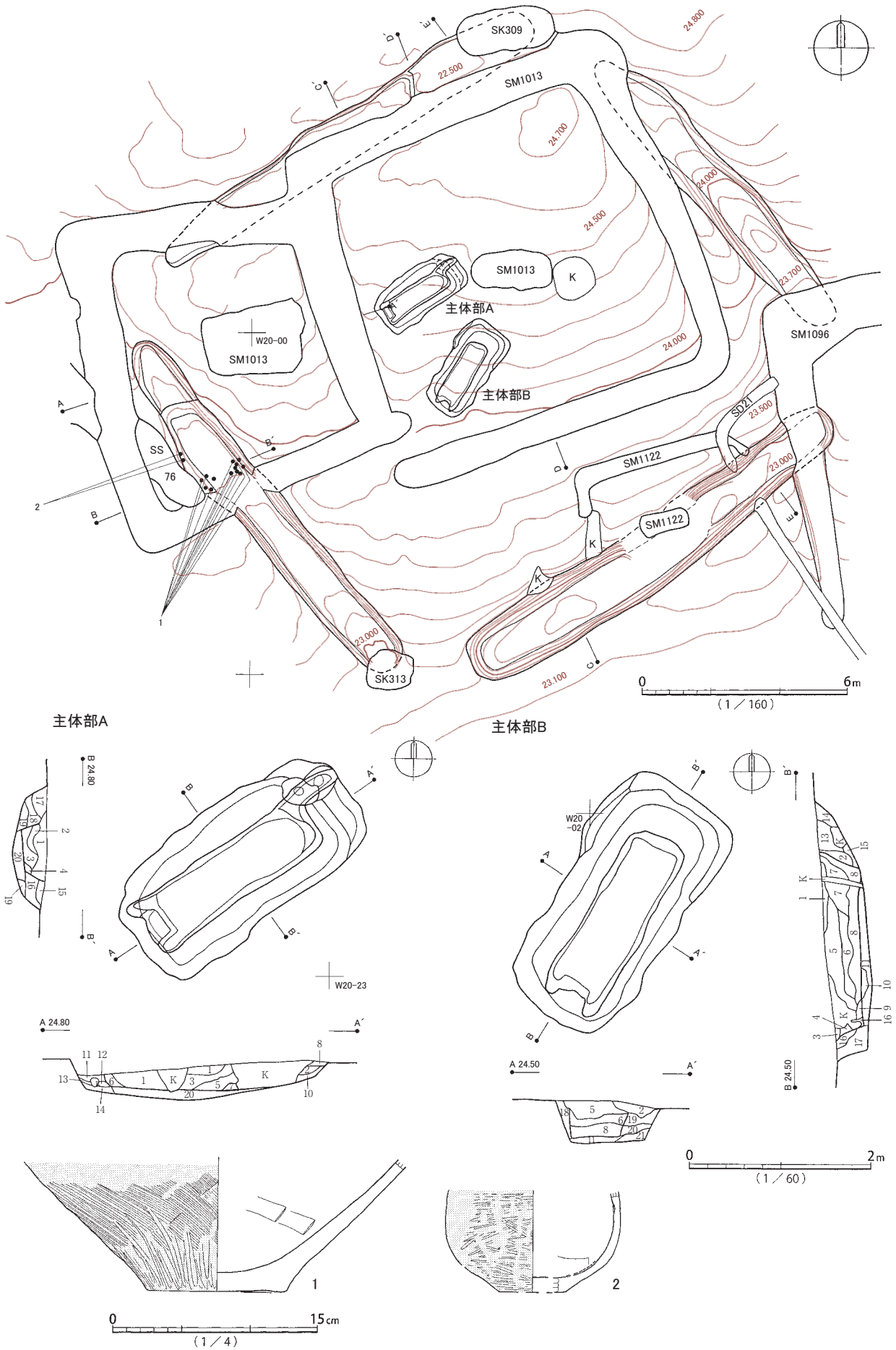
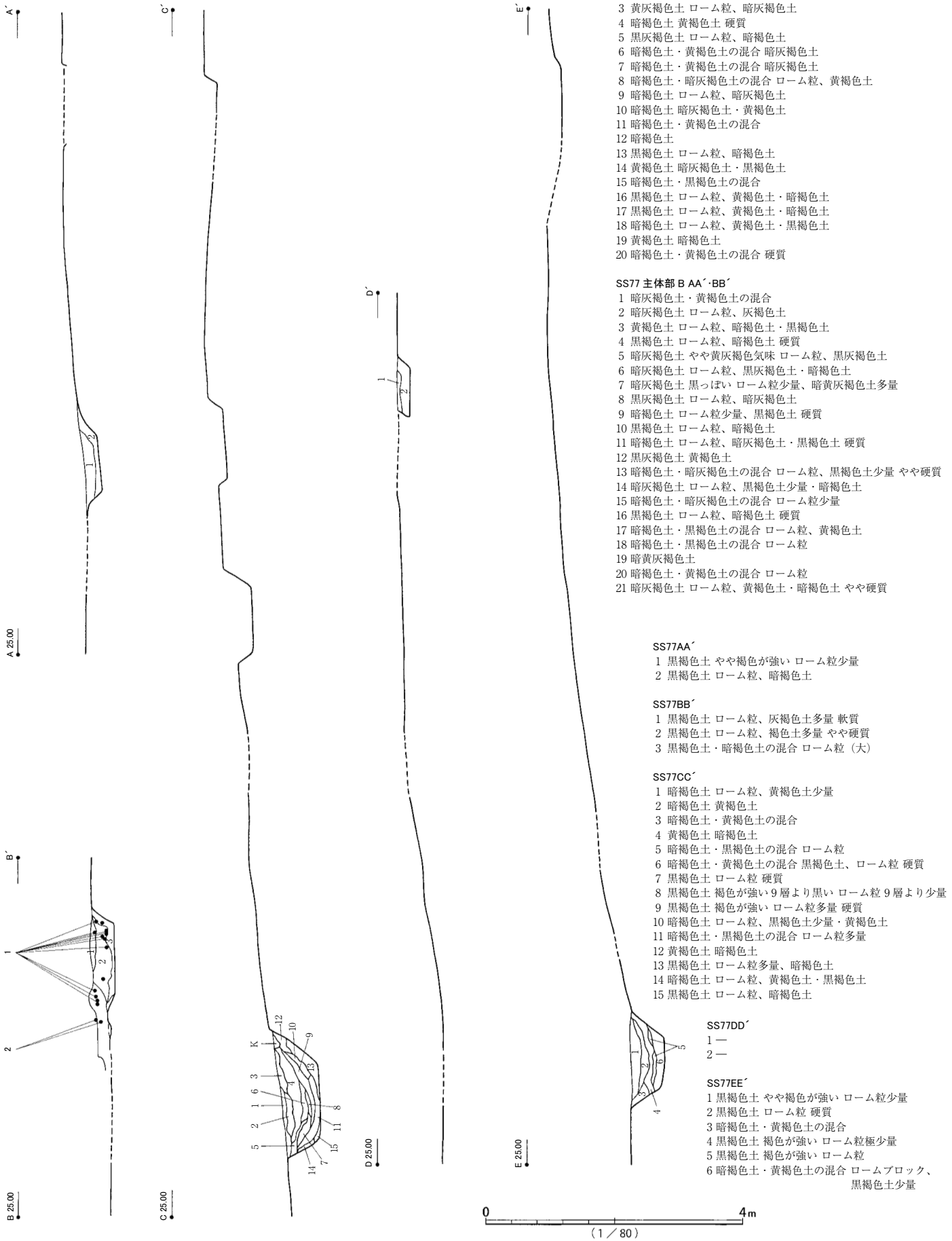


Fig.115　SS77 遺構 (1)・遺物実測図



SS77 主体部 A AA´·BB´
1 暗灰褐色土 ローム粒、暗褐色土
2 黄灰褐色土 3 層より暗い ローム粒、暗灰褐色土
3 黄灰褐色土 ローム粒、暗灰褐色土
4 暗褐色土 黄褐色土 硬質
5 黒灰褐色土 ローム粒、暗褐色土
6 暗褐色土・黄褐色土の混合 暗灰褐色土
7 暗褐色土・黄褐色土の混合 暗灰褐色土
8 暗褐色土・暗灰褐色土の混合 ローム粒、黄褐色土
9 暗褐色土 ローム粒、暗灰褐色土
10 暗褐色土 暗灰褐色土・黄褐色土
11 暗褐色土・黄褐色土の混合
12 暗褐色土
13 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土
14 黄褐色土 暗灰褐色土・黒褐色土
15 暗褐色土・黒褐色土の混合
16 黒褐色土 ローム粒、黄褐色土・暗褐色土
17 黒褐色土 ローム粒、黄褐色土・暗褐色土
18 暗褐色土 ローム粒、黄褐色土・黒褐色土
19 黄褐色土 暗褐色土
20 暗褐色土・黄褐色土の混合 硬質

SS77 主体部 B AA´·BB´
1 暗灰褐色土・黄褐色土の混合
2 暗灰褐色土 ローム粒、灰褐色土
3 黄褐色土 ローム粒、暗褐色土・黒褐色土
4 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土 硬質
5 暗灰褐色土 やや黄灰褐色気味 ローム粒、黒灰褐色土
6 暗灰褐色土 ローム粒、黒灰褐色土・暗褐色土
7 暗灰褐色土 黒っぽい ローム粒少量、暗黄灰褐色土多量
8 黒灰褐色土 ローム粒、暗灰褐色土
9 暗褐色土 ローム粒少量、黒褐色土 硬質
10 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土
11 暗褐色土 ローム粒、暗灰褐色土・黒褐色土 硬質
12 黒灰褐色土 黄褐色土
13 暗褐色土・暗灰褐色土の混合 ローム粒、黒褐色土少量 やや硬質
14 暗灰褐色土 ローム粒、黒褐色土少量・暗褐色土
15 暗褐色土・暗灰褐色土の混合 ローム粒少量
16 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土 硬質
17 暗褐色土・黒褐色土の混合 ローム粒、黄褐色土
18 暗褐色土・黒褐色土の混合 ローム粒
19 暗黄灰褐色土
20 暗褐色土・黄褐色土の混合 ローム粒
21 暗灰褐色土 ローム粒、黄褐色土・暗褐色土 やや硬質

SS77AA´
1 黒褐色土 やや褐色が強い ローム粒少量
2 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土

SS77BB´
1 黒褐色土 ローム粒、灰褐色土多量 軟質
2 黒褐色土 ローム粒、褐色土多量 やや硬質
3 黒褐色土・暗褐色土の混合 ローム粒（大）

SS77CC´
1 暗褐色土 ローム粒、黄褐色土少量
2 暗褐色土 黄褐色土
3 暗褐色土・黄褐色土の混合
4 黄褐色土 暗褐色土
5 暗褐色土・黒褐色土の混合 ローム粒
6 暗褐色土・黄褐色土の混合 黒褐色土、ローム粒 硬質
7 黒褐色土 ローム粒 硬質
8 黒褐色土 褐色が強い 9 層より黒い ローム粒 9 層より少量
9 黒褐色土 褐色が強い ローム粒多量 硬質
10 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土少量・黄褐色土
11 暗褐色土・黒褐色土の混合 ローム粒多量
12 黄褐色土 暗褐色土
13 黒褐色土 ローム粒多量、暗褐色土
14 暗褐色土 ローム粒、黄褐色土・黒褐色土
15 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土

SS77DD´
1 —
2 —

SS77EE´
1 黒褐色土 やや褐色が強い ローム粒少量
2 黒褐色土 ローム粒 硬質
3 暗褐色土・黄褐色土の混合
4 黒褐色土 褐色が強い ローム粒極少量
5 黒褐色土 褐色が強い ローム粒
6 暗褐色土・黄褐色土の混合 ロームブロック、黒褐色土少量

Fig.116　SS77 遺構 (2) 実測図

方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS75　セ28地区（Fig.112）

Q8-50付近に位置する方形周溝墓である。北側は保存区となり、未調査であるため、南側半分以下の検出とみられる。本遺構は、発掘調査時にはセ28-291と呼称されている。

事実記載にあたり南西側を南辺、南側周溝とする。

平面形状は、方形を呈するとみられ、周溝は一隅で断絶する。周溝幅は、ほぼ均等に方台部をめぐるものとみられる。規模は方台部が計測不能、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、東溝が0.68m・0.52m、0.29m、南溝が0.96m・0.74m、0.32mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は計測不能である。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。

帰属時期は、宮ノ台式期の所産と考えられる。

SS76　セ54地区（Fig.113～114、PL.32～33・157・181・212）

W19-00付近に位置する方形周溝墓である。北西側でSM1085、北東側でSM1013前方部、南側でSM1137と重複し、周溝土層から、何れの遺構よりも本遺構が古い。SS77の南西周溝と近接する。本遺構は、発掘調査時にはセ54-30と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、ほぼ正方形を呈するが、南側周溝を欠く。ただし、南側周溝があるべき位置は、南西側に下る傾斜となっており、元来周溝が存在した可能性を残す。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐり、コーナーで断絶する。規模は方台部が長軸方向で12.88m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.20m・0.80m、0.30m、東溝が1.32m・0.96m、0.30m、南溝は計測不能、西溝が1.36m・0.76m、0.30mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形もしくはレンズ状を呈する。

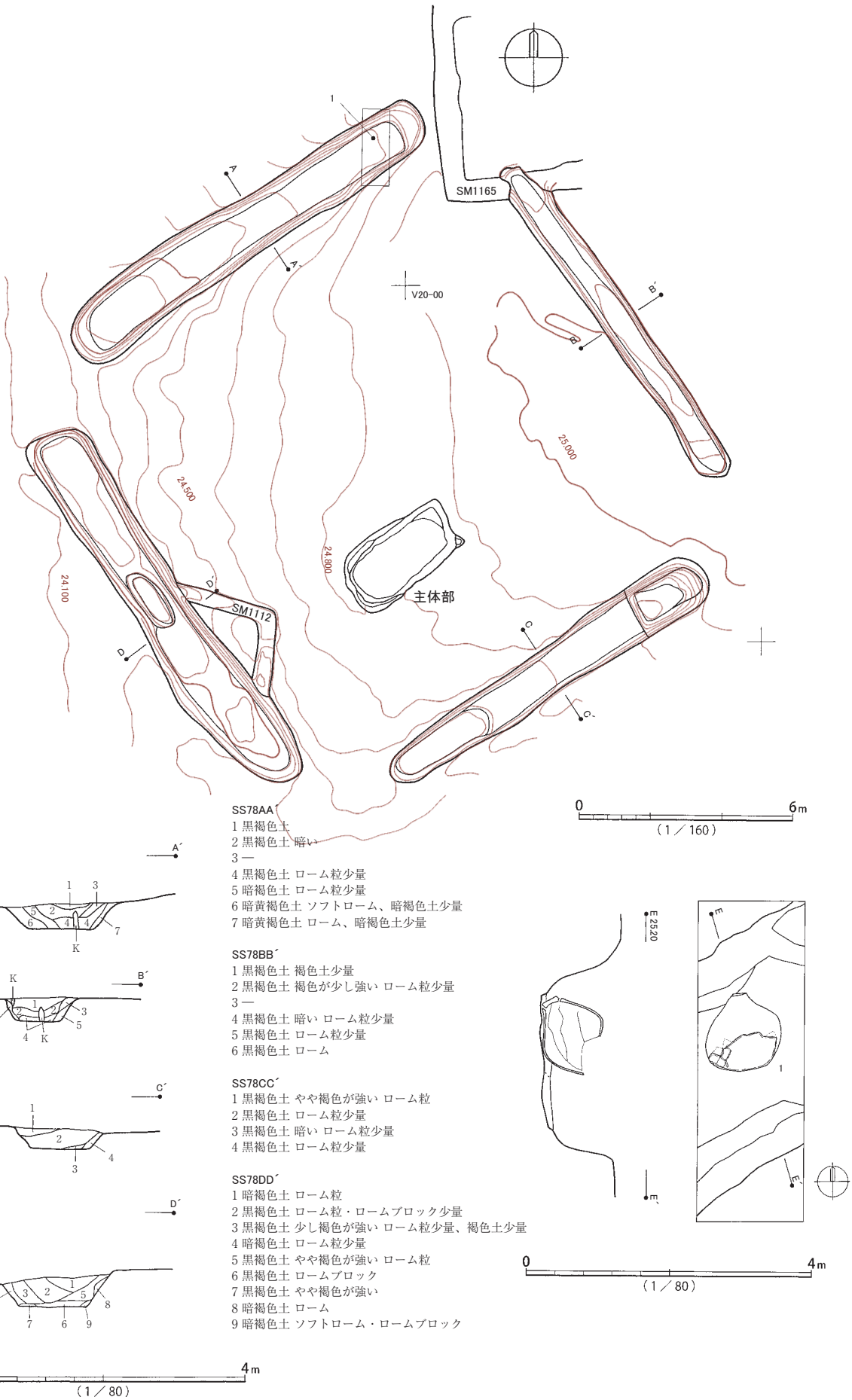
墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-52°-Wである。埋葬施設は方台部中央に1基検出している。主体部からは木棺痕が検出されており、平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.35m×短軸0.72mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-56°-Wである。土壙の平面形状は、隅丸長方形で、規模は(3.45)m×1.78m、確認面からの深さは、0.27mを測る。主軸方位は長軸方向からN-55°-Wである。

出土遺物は、1・2・5は主体部から出土している。1・2は壺形土器で、5は琥珀製勾玉である。北側周溝の西側から3・4が出土している。3は甕形土器で、4は鉢形土器であり、いずれも周溝底から出土している。

帰属時期は、宮ノ台式期後半の所産と考えられる。

SS77　セ54地区（Fig.115～116、PL.33～34・157）

W20-00付近に位置する方形周溝墓である。北側でSM1013、東側でSM1096が重複する。北西側ではSS78が周溝を接して近接する。本遺構は、発掘調査時にはセ54-33と呼称されている。事実記載



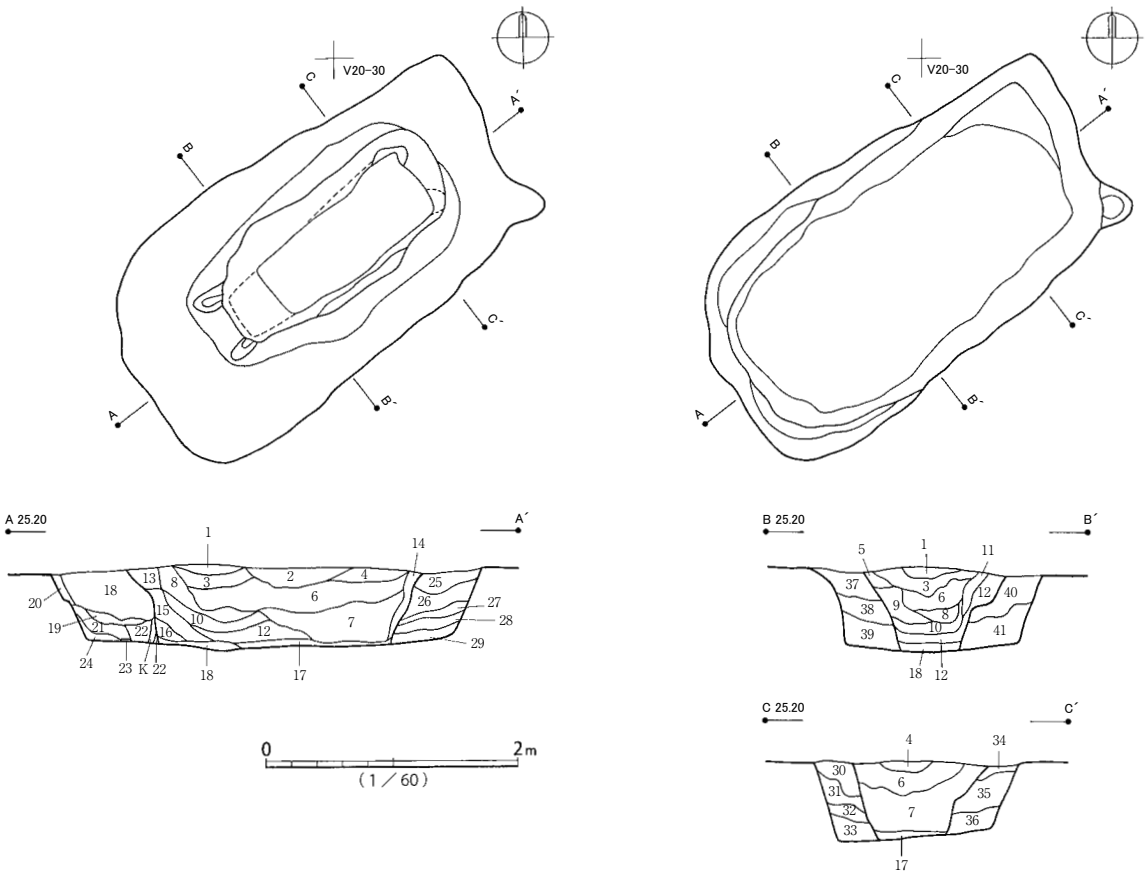
SS78AA´
1 黒褐色土
2 黒褐色土 暗い
3 —
4 黒褐色土 ローム粒少量
5 暗褐色土 ローム粒少量
6 暗黄褐色土 ソフトローム、暗褐色土少量
7 暗黄褐色土 ローム、暗褐色土少量

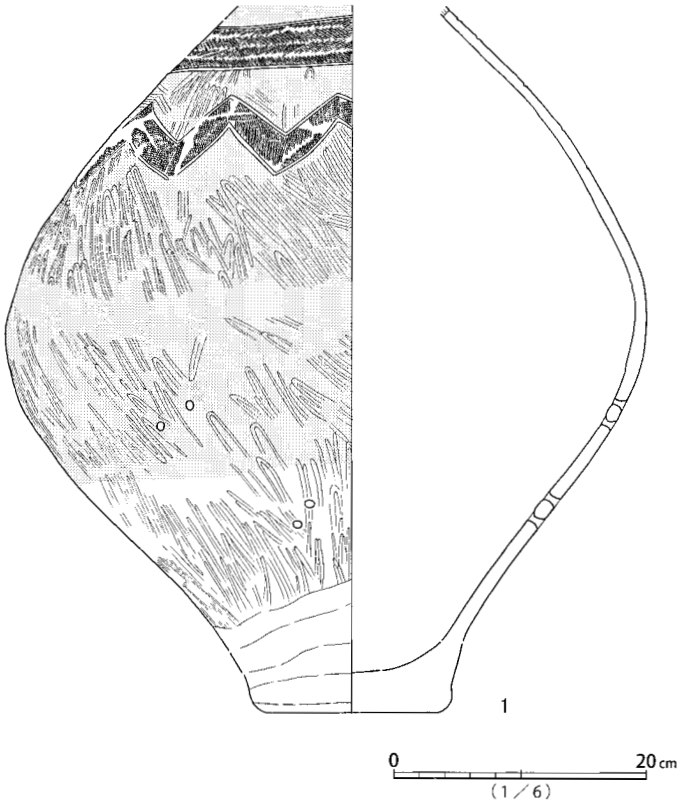
SS78BB´
1 黒褐色土 褐色土少量
2 黒褐色土 褐色が少し強い ローム粒少量
3 —
4 黒褐色土 暗い ローム粒少量
5 黒褐色土 ローム粒少量
6 黒褐色土 ローム

SS78CC´
1 黒褐色土 やや褐色が強い ローム粒
2 黒褐色土 ローム粒少量
3 黒褐色土 暗い ローム粒少量
4 黒褐色土 ローム粒少量

SS78DD´
1 暗褐色土 ローム粒
2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
3 黒褐色土 少し褐色が強い ローム粒少量、褐色土少量
4 暗褐色土 ローム粒少量
5 黒褐色土 やや褐色が強い ローム粒
6 黒褐色土 ロームブロック
7 黒褐色土 やや褐色が強い
8 暗褐色土 ローム
9 暗褐色土 ソフトローム・ロームブロック

Fig.117　SS78 遺構 (1)・遺物出土詳細実測図

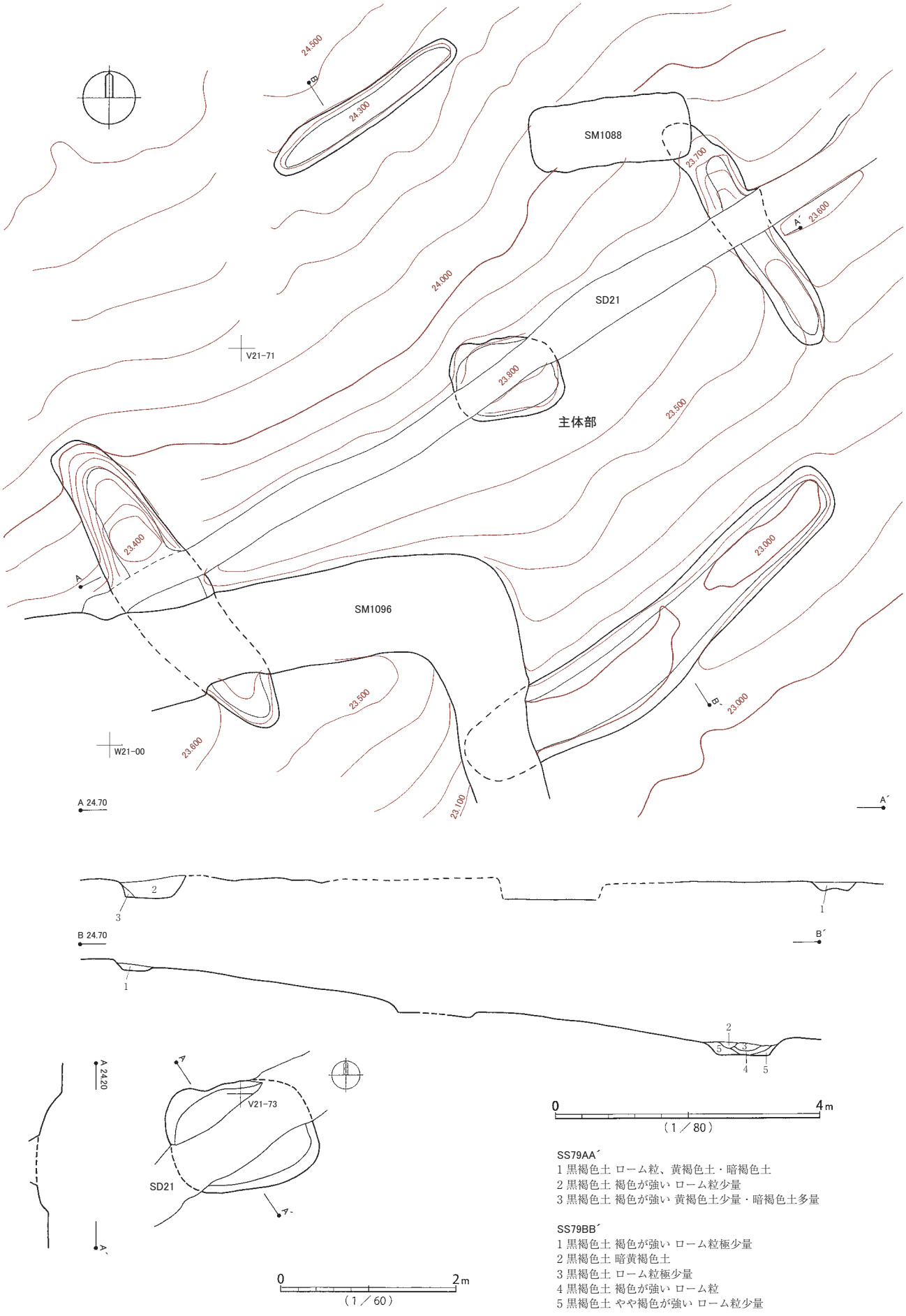




SS78 主体部 AA´·BB´·CC´

1 黒灰褐色土 ローム粒、暗灰褐色土
2 暗灰褐色土 ローム粒、黒灰褐色土
3 暗灰褐色土・黒灰褐色土の混合 ローム粒
4 暗灰褐色土 ローム粒、黒灰褐色土
5 暗灰褐色土 ローム粒
6 黒灰褐色土 ローム粒、暗灰褐色土
7 暗灰褐色土 ローム粒
8 暗灰褐色土 ローム粒（小）
9 暗灰褐色土 褐色がやや強い ローム粒、黄褐色土
10 暗灰褐色土 ローム粒、黒灰褐色土
11 暗灰褐色土 褐色がやや強い ローム粒、黄褐色土
12 暗灰褐色土 褐色が強い ローム粒少量
13 暗灰褐色土 黄褐色が強い ローム粒、暗褐色土
14 暗灰褐色土 ローム粒、暗黄褐色土 軟質
15 暗灰褐色土 褐色が強い ローム粒、暗褐色土
16 暗灰褐色土
17 暗灰褐色土 褐色が強い ローム粒 硬質
18 黄褐色土 暗褐色土・黒褐色土少量、ロームブロック
19 暗褐色土 黄褐色土・黒褐色土 やや硬質
20 黒褐色土・暗褐色土の混合 黄褐色土
21 黒褐色土 褐色が強い ローム粒 硬質
22 暗褐色土・黒褐色土の混合 ローム粒少量、黄褐色土 軟質
23 黄褐色土・暗褐色土の混合 黒褐色土
24 黒褐色土 褐色が強い 黄褐色土・暗褐色土
25 —
26 暗黄褐色土 黒褐色土少量・暗褐色土 軟質
27 黄褐色土 黒褐色土・暗褐色土 やや硬質
28 黒褐色土 褐色が強い ローム粒少量 硬質
29 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック、暗褐色土・黄褐色土
30 —
31 —
32 暗褐色土 ローム粒、黄褐色土・暗褐色土
33 黒褐色土 褐色が強い 硬質
34 —
35 —
36 黒褐色土 ローム粒少量、暗褐色土
37 —
38 —
39 —
40 —
41 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量、暗褐色土・黄褐色土 硬質

Fig.118　SS78 遺構 (2)・遺物実測図



SS79AA´
1 黒褐色土 ローム粒、黄褐色土・暗褐色土
2 黒褐色土 褐色が強い ローム粒少量
3 黒褐色土 褐色が強い 黄褐色土少量・暗褐色土多量

SS79BB´
1 黒褐色土 褐色が強い ローム粒極少量
2 黒褐色土 暗黄褐色土
3 黒褐色土 ローム粒極少量
4 黒褐色土 褐色が強い ローム粒
5 黒褐色土 やや褐色が強い ローム粒少量

Fig.119　SS79 遺構実測図

にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、方台部がほぼ正方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅は、ほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が(14.84)m×(13.60)m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.52m・0.88m、0.40m、東溝が1.84m・1.08m、0.40m、南溝が1.40m・0.80m、0.50m、西溝が(1.36)m他は計測不能である。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-55°-Eである。埋葬施設は方台部に二基、主軸方位を異にして検出している。主体部Aからは木棺痕が検出されており、平面形は長方形で南西側の小口の形状から、組み合せ式の木棺とみられる。規模は長軸2.15m×短軸0.60m、確認面からの深さ0.22mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-56°-E である。土壙の平面形状は隅丸長方形で、規模は2.85m×1.35m、確認面からの深さは、0.35mを測る。主軸方位は長軸方向からN-55°-Eである。

主体部Bからは木棺痕が検出されており、平面形は長方形を呈し、規模は長軸1.95m×短軸0.68m、確認面からの深さ0.37mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-32°-E である。墓壙の平面形状は、長方形で、南西側の小口の形状から、組み合せ式の木棺とみられる。規模は2.88m×1.33m、確認面からの深さは、0.44mを測る。主軸方位は長軸方向からN-35°-Eである。

出土遺物は、南側周溝に集中して出土している。1は壺形土器で、2は小型壺形土器である。

帰属時期は、久ケ原式期の所産と考えられる。

SS78　セ54地区（Fig.117～118、PL.34～35・157）

V20-00付近に位置する方形周溝墓である。北側でSM1165、南西側でSM1112が重複する。何れも本遺構が古い。南東側で周溝を接してSS77が近接する。本遺構は、発掘調査時にはセ54-28と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、方台部がほぼ正方形を呈し、周溝は四隅が断絶する。周溝幅は北側、東側で狭いが、それぞれはほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が13.90m×13.60m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.00m・0.60m、0.37m、東溝が1.22m・0.84m、0.25m、南溝が1.52m・0.88m、0.43m、西溝が1.60m・0.96m、0.46mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-56°-Eである。埋葬施設は方台部から1基検出している。主体部からは木棺痕が検出されており、平面形は長方形で、南側小口の形状から組み合わせ式木棺とみられる。規模は長軸2.30m×短軸1.20m、確認面からの深さ0.60mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-55°-E である。土壙の平面形状は、隅丸長方形で、規模は3.40m×1.80m、確認面からの深さは、0.60mを測る。主軸方位は長軸方向からN-54°-Eである。

出土遺物は、1が壺形土器で、西側周溝北端寄りから出土している。胴部下位に2個一対の焼成後穿孔が２ヶ所穿たれている。

帰属時期は、久ケ原1式期の所産と考えられる。

SS79　セ54地区（Fig.119、PL.35）

W21-00付近に位置する方形周溝墓である。北側でSM1088、南側でSM1096が重複する。何れの遺構より本遺構が古いと見られる。西側にSS77が近接する。本遺構は、発掘調査時にはセ54-43と呼

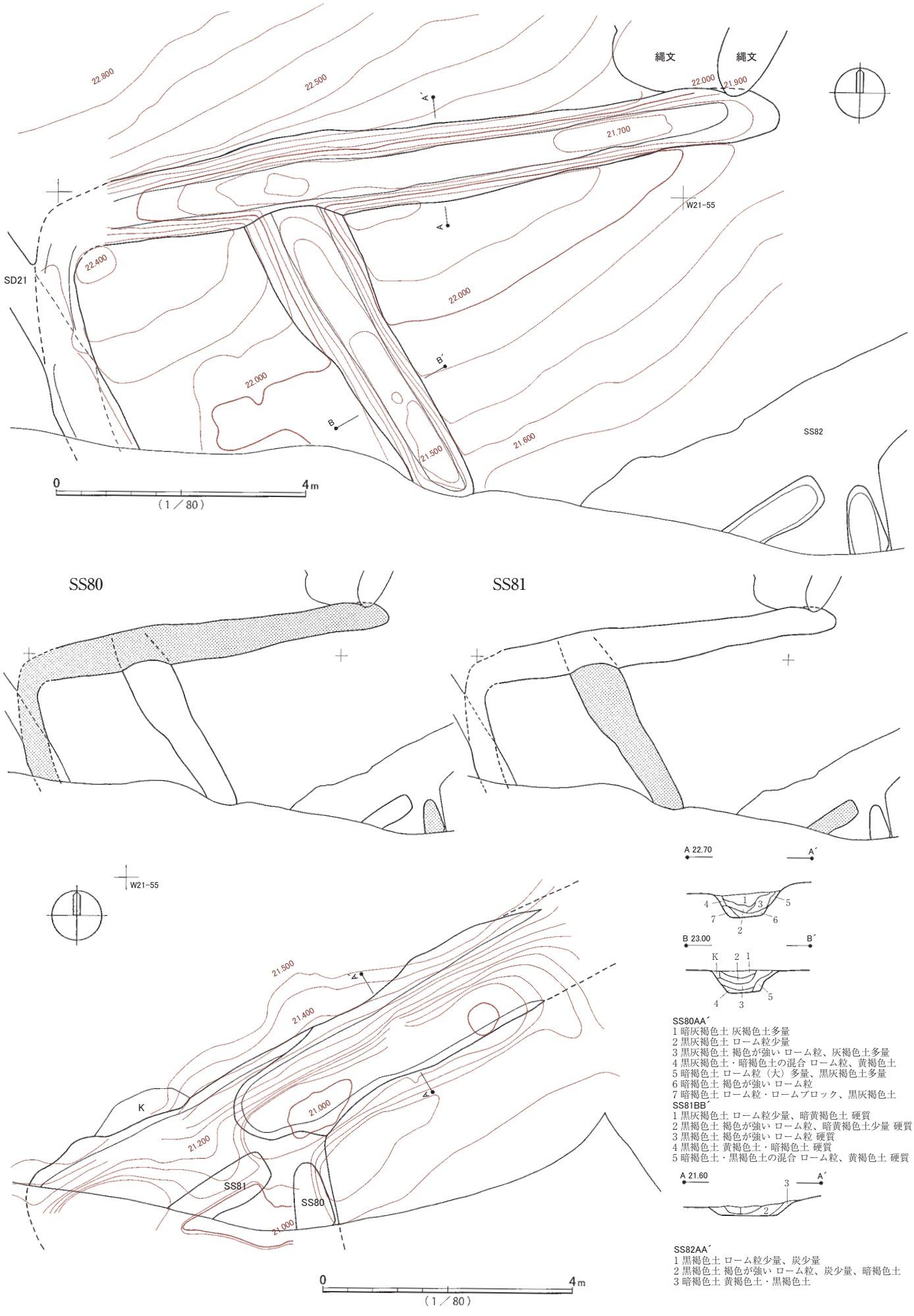
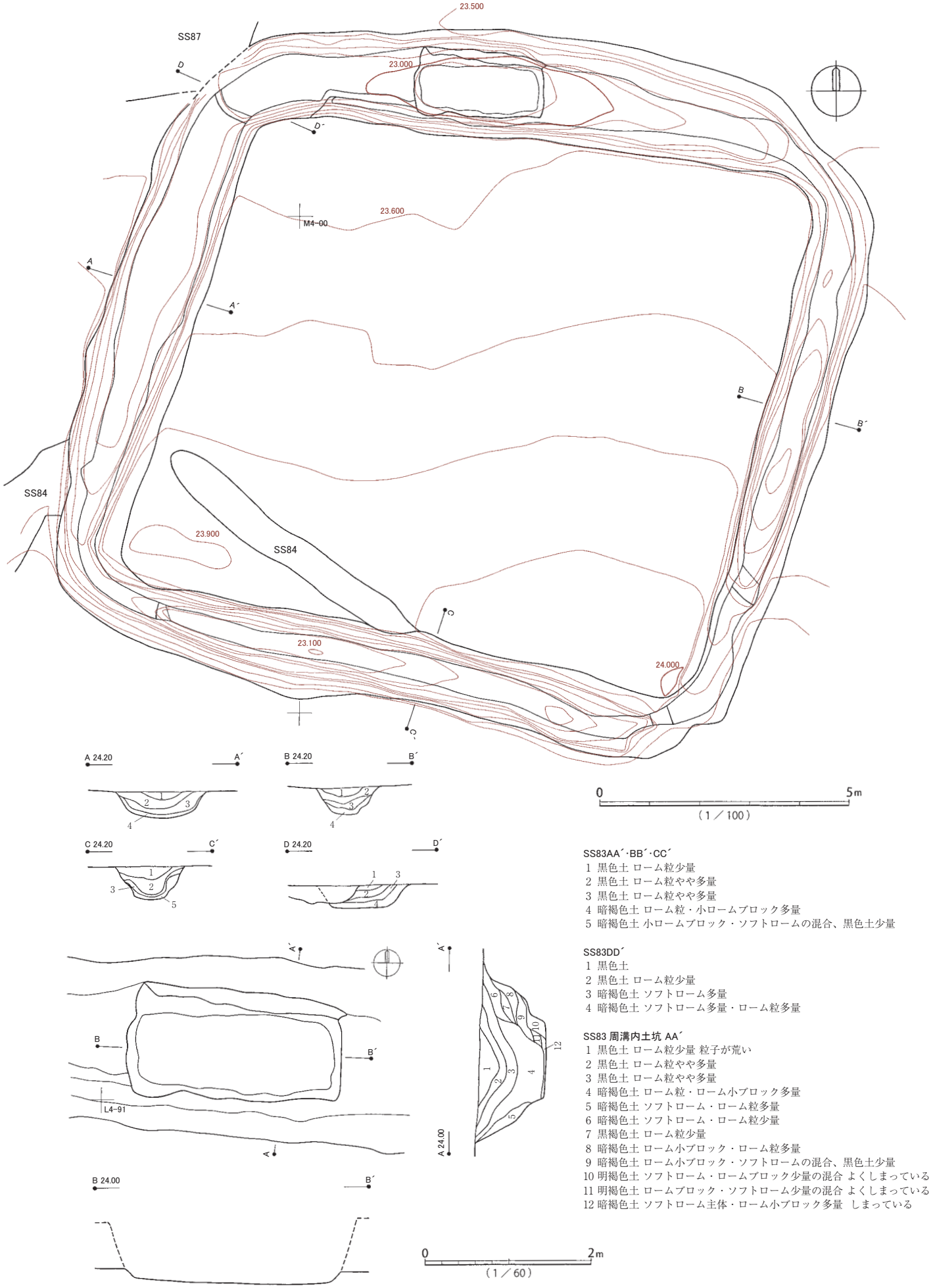


Fig.120　SS80 遺構、SS81 遺構、SS82 遺構実測図



SS83AA´·BB´·CC´
1 黒色土 ローム粒少量
2 黒色土 ローム粒やや多量
3 黒色土 ローム粒やや多量
4 暗褐色土 ローム粒・小ロームブロック多量
5 暗褐色土 小ロームブロック・ソフトロームの混合、黒色土少量

SS83DD´
1 黒色土
2 黒色土 ローム粒少量
3 暗褐色土 ソフトローム多量
4 暗褐色土 ソフトローム多量・ローム粒多量

SS83 周溝内土坑 AA´
1 黒色土 ローム粒少量 粒子が荒い
2 黒色土 ローム粒やや多量
3 黒色土 ローム粒やや多量
4 暗褐色土 ローム粒・ローム小ブロック多量
5 暗褐色土 ソフトローム・ローム粒多量
6 暗褐色土 ソフトローム・ローム粒少量
7 黒褐色土 ローム粒少量
8 暗褐色土 ローム小ブロック・ローム粒多量
9 暗褐色土 ローム小ブロック・ソフトロームの混合、黒色土少量
10 明褐色土 ソフトローム・ロームブロック少量の混合 よくしまっている
11 明褐色土 ロームブロック・ソフトローム少量の混合 よくしまっている
12 暗褐色土 ソフトローム主体・ローム小ブロック多量 しまっている

Fig.121　SS83 遺構実測図

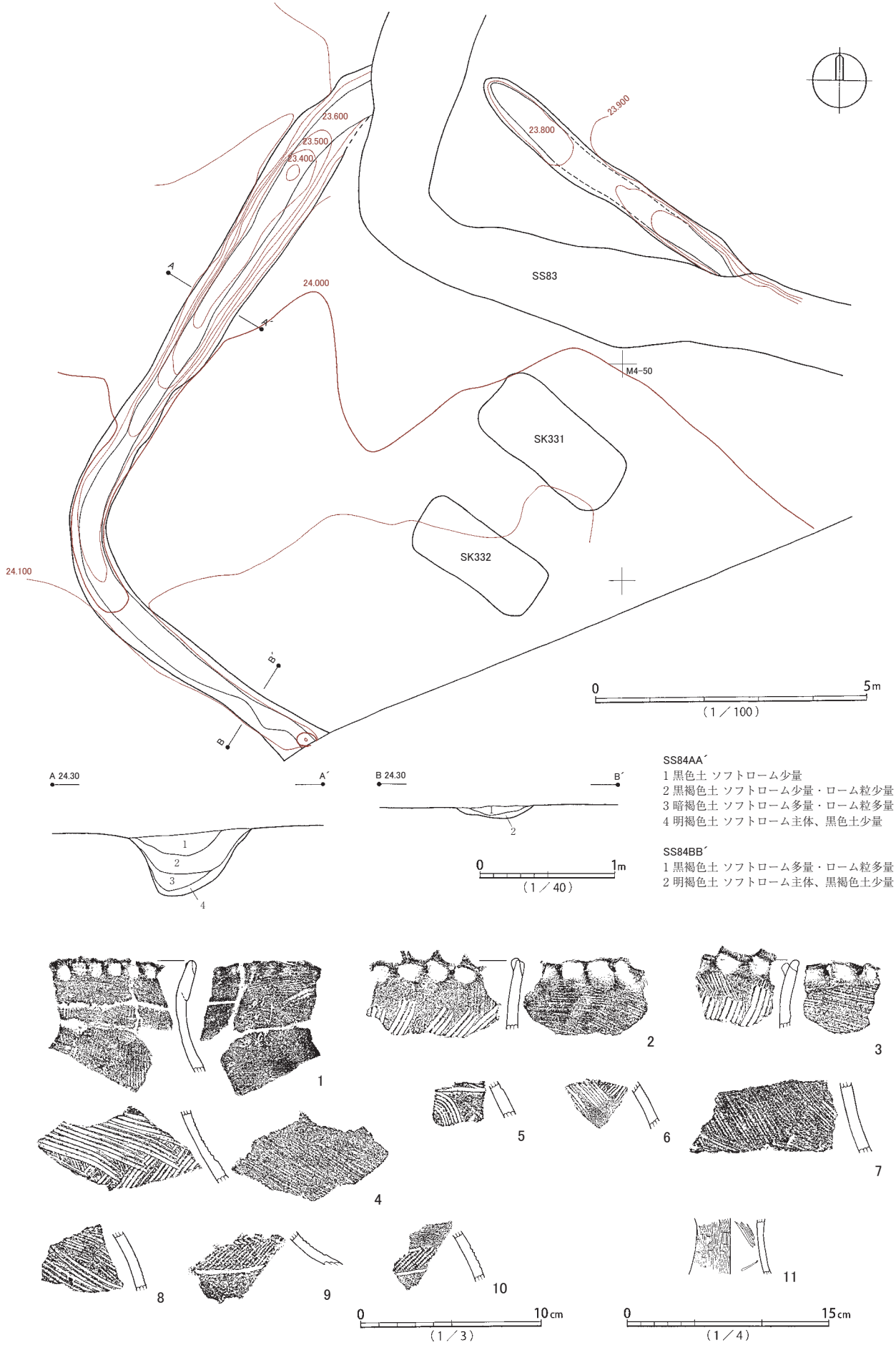


Fig.122　SS84 遺構・遺物実測図

称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、方台部が南北方向に長い長方形を呈し、周溝は四隅で断絶する。周溝幅は北側、西側で極端に幅が狭小となり、長さも短くなる。南側、西側は幅広で、やや胴張り形状を呈する。規模は方台部が(9.36)m×8.36m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.72m・0.40m、0.15m、東溝が1.34m・0.86m、0.15m、南溝が1.20m・0.72m、計測不能、西溝が0.58m・0.34m、0.10mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-57°-Eである。埋葬施設は方台部で1基検出している。主体部土壙の平面形状は、隅丸方形で、規模は(1.64)m×1.22mを測る。主軸方位は長軸方向からN-79°-Eである。木棺痕は検出していない。

出土遺物は無い。

帰属時期は、久ケ原式期の所産と考えられる。

SS80　セ54地区（Fig.120、PL.36）

W21-55付近に位置する方形周溝墓である。南側に下る台地縁辺部の斜面に位置する。南側半分は調査区外にあるとみられ、東側周溝は検出していない。SS81と重複するが新旧関係は不明である。本遺構は、発掘調査時にはセ54-44と呼称されている。

平面形状は、方台部がやや歪んだ方形を呈し、周溝は北側から西側へ連続するとみられる。周溝幅は細く、ほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が計測不能、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.20m・0.52m、0.66m、東溝が0.62m・0.44m、計測不能、西溝が(1.04)m・(0.64)m、計測不能。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。主軸方位は計測不能である。墳丘範囲では盛土を検出していない。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。

帰属時期は、不明である。

SS81　セ54地区（Fig.120、PL.36）

W21-55付近に位置する方形周溝墓である。調査区南端、南へ下る斜面上位に位置する。SS80と重複するが、新旧関係は不明である。東側にSS82が近接する。

本遺構は、発掘調査時にはセ54-45と呼称されている。事実記載にあたり南西側を西辺、西側周溝とする。

平面形状は、北側及び東側周溝が認められないことから方台部範囲を確定することはできない。南西隅が調査区外に存在するとみられ、西側周溝と南側周溝の接続状況は不明である。周溝幅は遺構上端で大きく変わるが、これは斜面という地形的な要因と、遺構の重複の影響を受けているとみられ、遺構下端をみると、ほぼ一定していることが判る。遺構規模は計測不能であるが、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、南溝が0.60m・0.46m、計測不能、西溝が1.00m・0.50m、0.60mを測る。墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は計測不能である。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。

帰属時期は、久ケ原式期を推定する。

SS82　セ54地区（Fig.120）

W21-55付近に位置する方形周溝墓である。調査区南端、南に下る斜面上位に位置し、西側にSS80、SS81が近接し、一部西側で重複する。本遺構は、発掘調査時にはセ54-46と呼称されている。

平面形状は、北側周溝の一部を検出したのみであるため、不明である。周溝幅は検出範囲ではほぼ均等である。遺構規模は計測不能であるが、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.40m・1.08m、0.20mを測る。墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は計測不能である。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。

帰属時期は、不明である。

SS83　セ72地区（Fig.121、PL.36）

M4-00付近に位置する方形周溝墓である。北西側でSS87、南西側でSS84と重複し、東側に前方後方墳であるSS97が隣接する。本遺構は、発掘調査時にはセ72-003と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、方台部が北西隅でやや歪むものの、ほぼ正方形を指向する。周溝は全周するが、周溝は四隅でその幅を減じている。規模は方台部が11.56m×10.10m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で2.10m・1.10m、0.50m、東溝が1.35m・0.52m、0.50m、南溝が1.40m・0.50m、0.70m、西溝が1.86m・1.00m、0.60mを測る。周溝底面は平坦では無く、中央がなべ底上に僅かに凹む。断面形状は直線的な部分が無く、丸みを帯びた逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-80°-Wである。埋葬施設は方台部では認められず、北側周溝内、中央やや西よりに、１基検出している。主体部墓壙の平面形状は、長方形で、規模は2.60m×1.10m、確認面からの深さは、0.79mを測る。主軸方位は長軸方向からN-85°-Wである。棺痕跡は不明瞭であるが、土層図から棺底幅は想定可能である。

出土遺物は無い。

帰属時期は、中台2式期の所産と考えられる。

SS84　セ72地区（Fig.122、PL.36・181）

M4-50付近に位置する方形周溝墓である。調査区南端に位置し、北側でSS83と重複し、西側でSS88、SS89に近接する。方台部中央にSK331、SK332が位置するが、別遺構としている。本遺構は、発掘調査時にはセ72-004と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、遺構の南側が保存区内にあるとみられ、断定し得ないが、隅丸方形を呈するとみられる。周溝は、北東、南東隅で断絶するように見えるが、断面図をみると、部分的に周溝が極めて浅いことから、確認面の問題で検出できていない周溝がある可能性があり、全周していることも否定できない。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は、方台部が南北軸で11.08m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.72m・0.53m、0.20m、南溝が0.58m・0.18m、計測不能、西溝が0.90m・0.30m、0.40mを測る。周溝底面が平坦部はほとんど認められず周溝底の幅が狭い。断面形状は不整形で安定していない。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-37°-Eである。

埋葬施設は方台部中央の土壙2基にその可能性が残るが、周溝形状と土壙出土遺物の時期に整合性が低いとの判断で別遺構としている。しかしながら、この2基が本遺構の埋葬施設である可能性を完

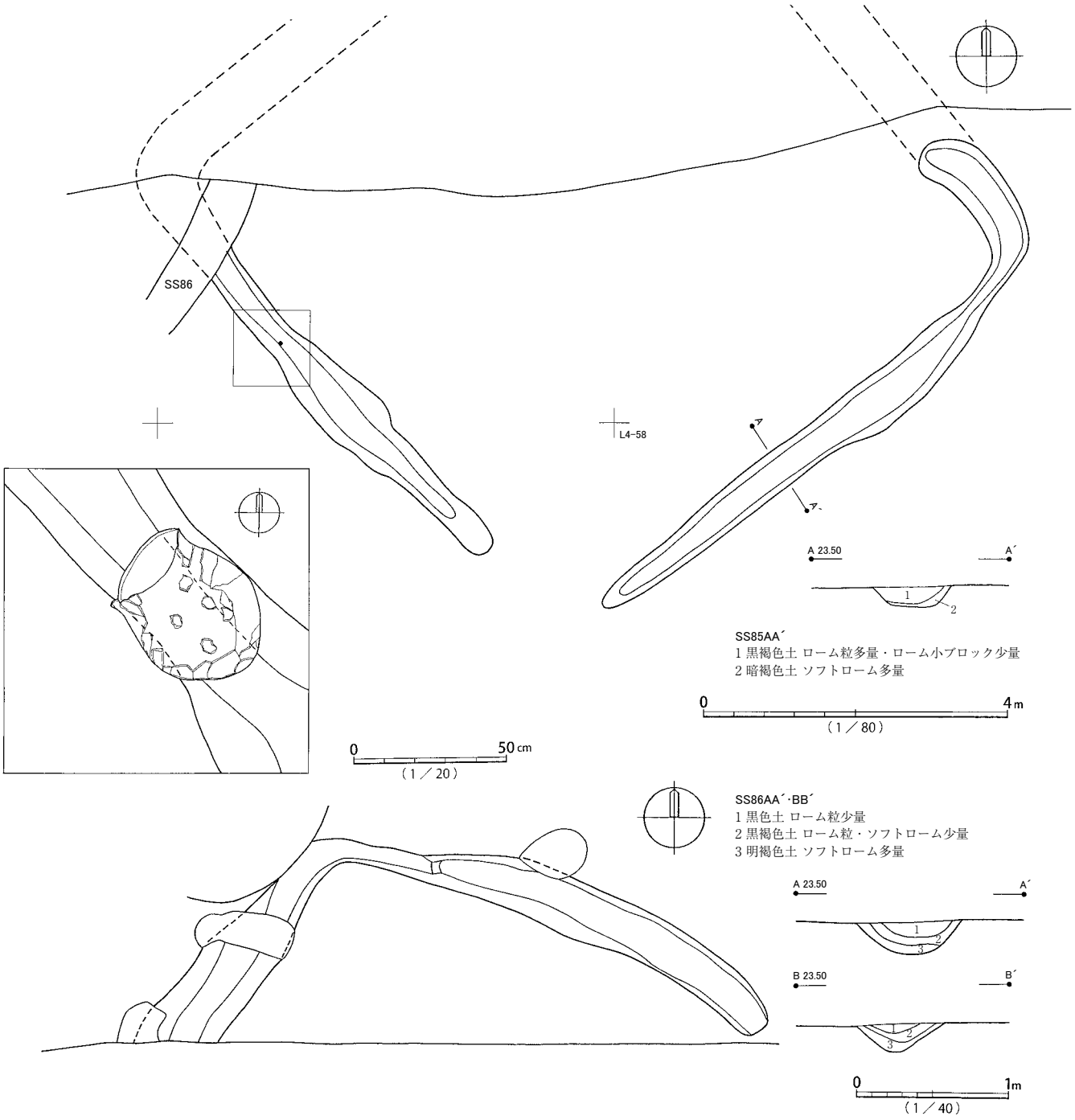
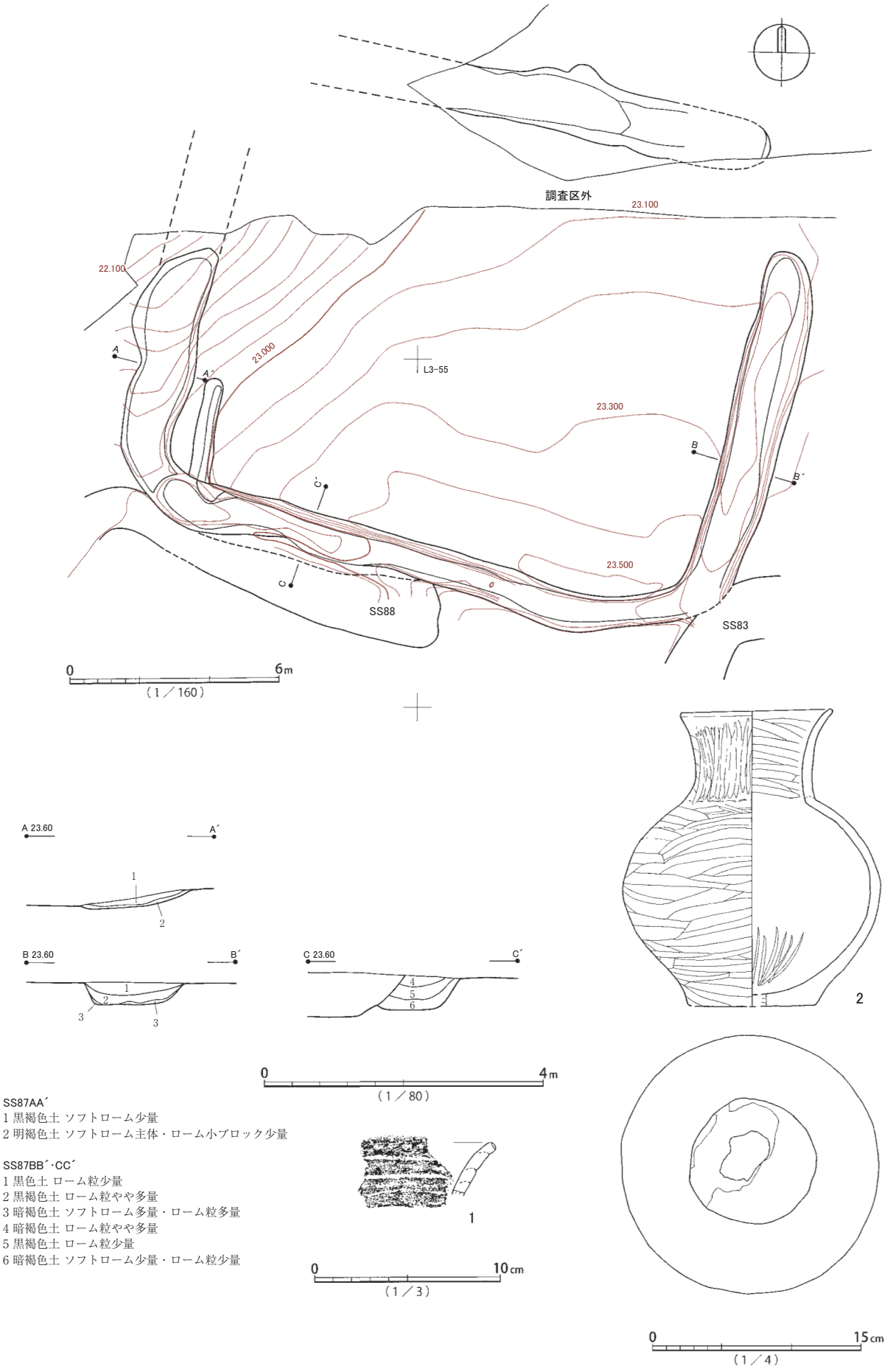


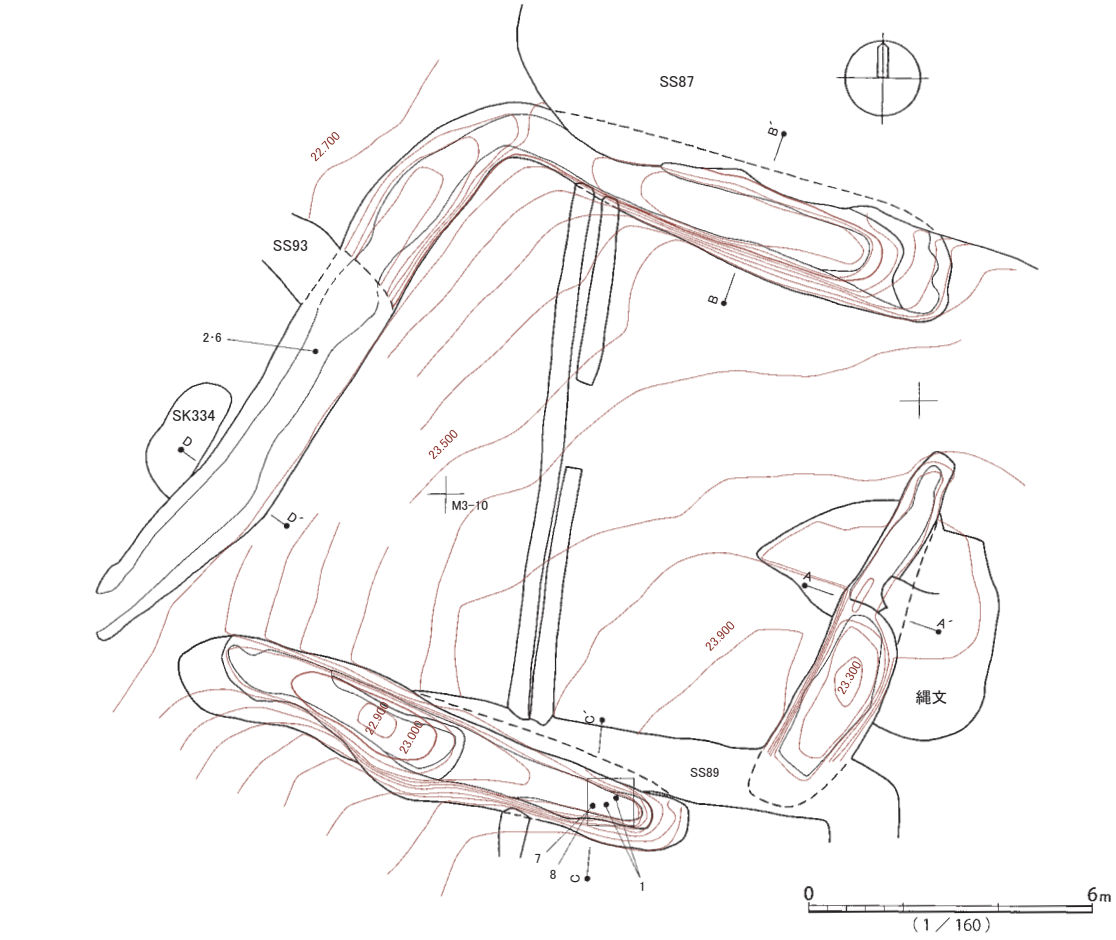
Fig.123　SS85 遺構・遺物出土詳細、SS86 遺構・遺物実測図

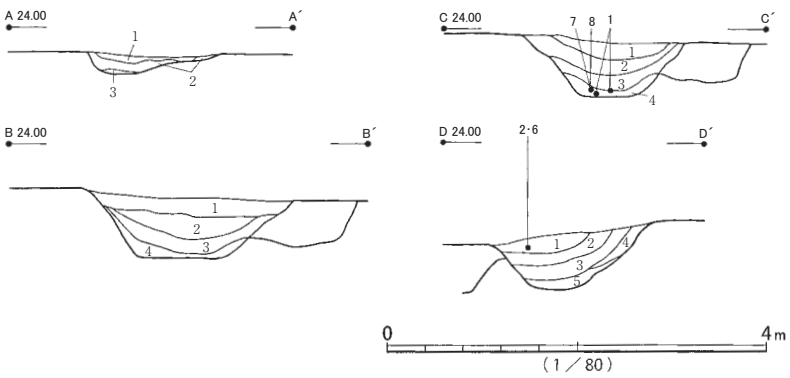


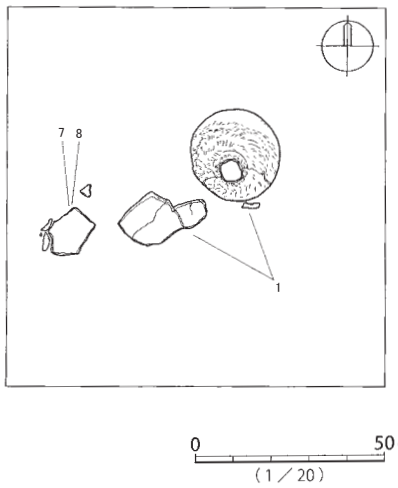
SS87AA´
1 黒褐色土 ソフトローム少量
2 明褐色土 ソフトローム主体・ローム小ブロック少量

SS87BB´·CC´
1 黒色土 ローム粒少量
2 黒褐色土 ローム粒やや多量
3 暗褐色土 ソフトローム多量・ローム粒多量
4 暗褐色土 ローム粒やや多量
5 黒褐色土 ローム粒少量
6 暗褐色土 ソフトローム少量・ローム粒少量

Fig.124　SS87 遺構・遺物実測図







SS88AA´
1 黒色土 ローム粒少量
2 黒褐色土 ローム粒やや多量
3 暗褐色土 ソフトローム・ローム粒多量

SS88BB´
1 黒色土 ローム粒少量
2 暗褐色土 ローム粒やや多量
3 黒褐色土 ローム粒やや多量
4 暗褐色土 ローム粒やや多量、焼土粒少量

SS88CC´
1 黒色土 ローム粒少量、暗褐色土少量
2 黒色土 ローム粒少量、焼土粒少量
3 黒褐色土 ローム粒少量・ソフトローム少量
4 暗褐色土 ソフトローム多量

SS88DD´
1 暗褐色土 ローム粒多量
2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
3 茶褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
4 暗褐色土 ローム粒多量
5 明褐色土 ローム小ブロック多量・ローム粒多量

Fig.125　SS88 遺構・遺物出土詳細実測図

全に否定することは出来ない。

出土遺物は、1～10までが甕形土器で、11が壺形土器で、近接するグリッドから出土している。南側周溝から東側周溝にかけてと、北側周溝に集中して出土している。いずれも重複遺構である。

帰属時期は、宮ノ台式期前半の所産と考えられる。

SS85　セ72地区・099地区（Fig.123、PL.37）

L4-55付近に位置する方形周溝墓である。調査区北端に位置し、遺構北側は未調査区及び099地区にあるとみられるが、099地区調査時には検出していない。西側でSS86が重複するが、新旧関係は不明である。本遺構は、発掘調査時にはセ72-005と呼称されている。事実記載にあたり南東側を東辺、東側周溝とする。

平面形状は、遺構の半分が未検出であることから断定出来ないが、方台部は正方形もしくは隅丸を呈するとみられる。周溝は南東隅で明瞭に断絶するように見えるが、断面図では、周溝の検出が非常に浅いことから、確認面の問題で捉えられなかった可能性が残る。周溝幅はやや不安定に見えるが、前述した確認面の問題に起因している可能性がある。規模は方台部が(7.64)m×(7.48)m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、東溝が0.48m・0.32m、0.15m、南溝が0.80m・0.36m、0.17mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-39°-Wである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、南側周溝中央西寄りから甕形土器が出土している記録が残るが、所在不明である。

帰属時期は、久ケ原式期の所産と考えられる。

SS86　セ72地区・099地区（Fig.123、PL.37・181）

L4-55付近に位置する方形周溝墓である。調査区北側に位置し、遺構北側は未調査区及び099地区に伸びる。東側でSS85が重複するが、新旧関係は不明である。本遺構は、発掘調査時には099-4002及びセ72-006と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、方台部はほぼ正方形を呈し、周溝は、北西隅以外は断絶する。周溝幅は、端部に向けて僅かに減じ、また、北西隅でも幅が狭くなる。規模は方台部が7.00m×(6.96)m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.72m・0.40m、0.18m、東溝が0.64m・0.34m、0.14m、南溝が0.68m・0.30m、0.14m、西溝が(0.96)m、0.28mを測る。周溝底面は平坦面が殆どなく、断面形状は底面が丸く、側面は内湾しながら外傾する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-24°-Eである。未調査区が方台部中央を横断することから、ここに埋葬施設が位置する可能性がある。

出土遺物は、1が甕形土器で、2・3が壺形土器で周辺グリッドから出土している。

帰属時期は、久ケ原式期の所産と考えられる。

SS87　セ72地区・099地区（Fig.124、PL.37～38・157・181）

L3-55付近に位置する方形周溝墓である。調査区北側に位置し、遺構の北側は未調査区及び099地区、調査区外に伸びるとみられる。南側でSS88、SS83と重複するが、新旧関係は、周溝土層図から、SS88に対し本遺構が古い。東側にはSS86が隣接する。本遺構は、発掘調査時にはセ72-007と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、方台部が東西方向に長方形を呈し、周溝は、北東隅で断絶する。周溝幅は南側でやや不安定だが、ほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が15.36m×12.40m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.68m・1.32m、0.23m、東溝が1.60m・0.83m、0.30m、南溝が(1.12)m・0.56m、0.20m、西溝が(1.60)m・1.28mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-73°-Wである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、1が甕形土器、2が壺形土器で、周溝内より出土している。

帰属時期は、中台1式期の所産と考えられる。

SS88　セ72地区（Fig.125～126、PL.37～38・157・181）

M3-10付近に位置する方形周溝墓である。調査区西側の北西に下る斜面上位に位置する。四方に周溝墓が近接し、北側でSS87、西側でSS93、南側でSS89と重複し、新旧関係は、何れの遺構に対しても本遺構が新しい。本遺構は、発掘調査時にはセ72-008と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、方台部が南西隅で歪むが、ほぼ北側で幅広になるものの、方形を呈し、周溝は北西隅以外で断絶する。周溝幅は、やや中膨れで、端部へ向けやや幅を減じる。規模は方台部が11.40m×(10.84)m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で(2.04)m・0.96m、0.70m、東溝が(1.48)m・0.84m、0.20m、南溝が(2.00)m・1.08m、0.70m、西溝が1.64m、0.64mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は、西側で不正形だが、他は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-66°-Wである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。しかし、南側周溝及び東側周溝内に掘り込みが認められ、周溝内埋葬の可能性が残る。

出土遺物は、1・5・7・8が壺形土器、2が小型壺形土器、3が鉢形土器、4が壺形土器底部、6､9が甕形土器で、出土位置は、1が南側周溝東端部付近から出土しいている。

帰属時期は、中台1式期の所産と考えられる。

SS89・SS90　セ72地区（Fig.127～129、PL.38～39・158・181）

SS89は､N3-00付近に位置する方形周溝墓である｡調査区南端に位置する｡北側でSS88､南側でSS90と重複し、新旧関係は、周溝土層図から、SS88に対して本遺構が新しい。西側にはSS92が隣接する。本遺構は、発掘調査時にはセ72-009と呼称されている。事実記載にあたり北東側を辺、北側周溝とする。

平面形状は、方台部がほぼ正方形を呈し、周溝は、繋がっている北東隅と調査区外の南東隅以外は断絶する。周溝幅は方台部をほぼ均等にめぐる。規模は方台部が13.92m×13.12m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で(1.40)m、0.70m、東溝が1.32m・0.76m、0.30m、南溝が1.68m・0.96m、0.55m、西溝が1.36m・1.04m、0.20mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

出土遺物は、1が広口壺形土器、2が甕形土器、3が壺形土器で、周溝内から出土している。4～105はガラス小玉で、木棺内全体、棺底直上付近に、分散して出土しているが、西側中央と、東側中央付近に分布の中心が認められる。その中でも西側に密度が高い範囲がある。

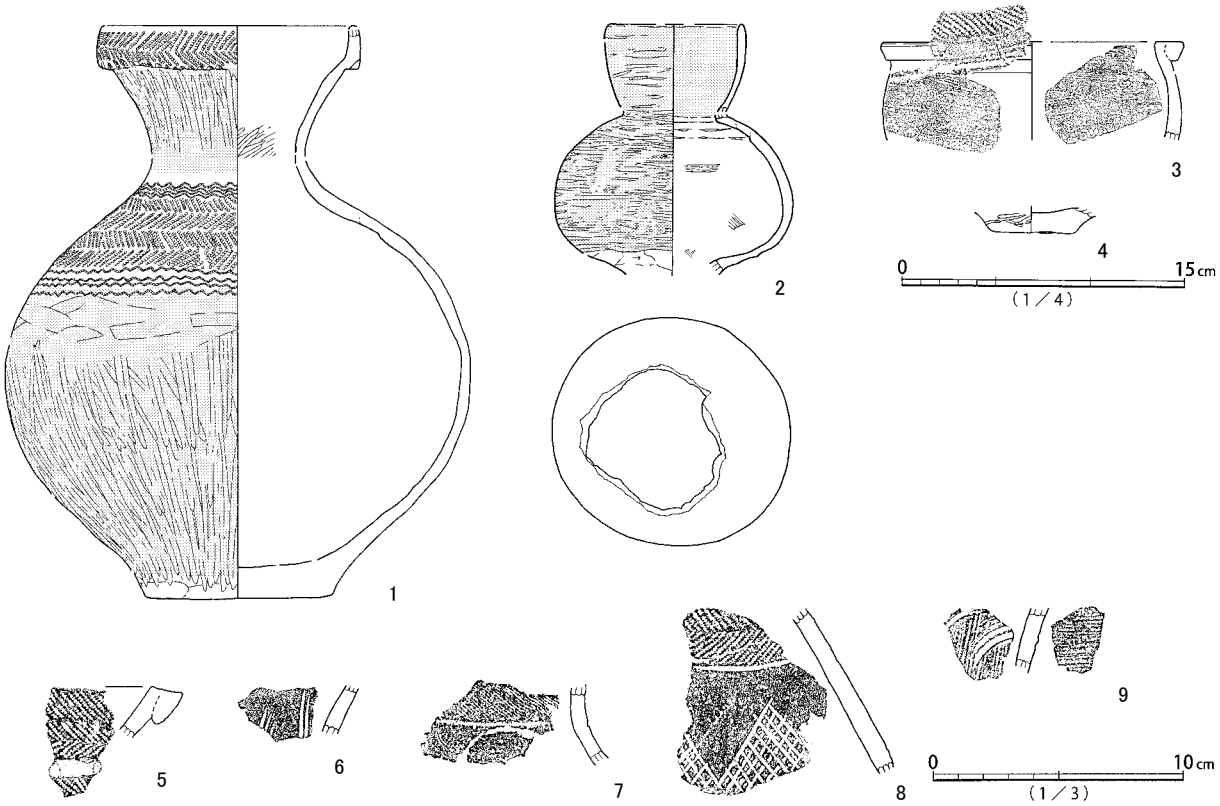


Fig.126　SS88 遺物実測図

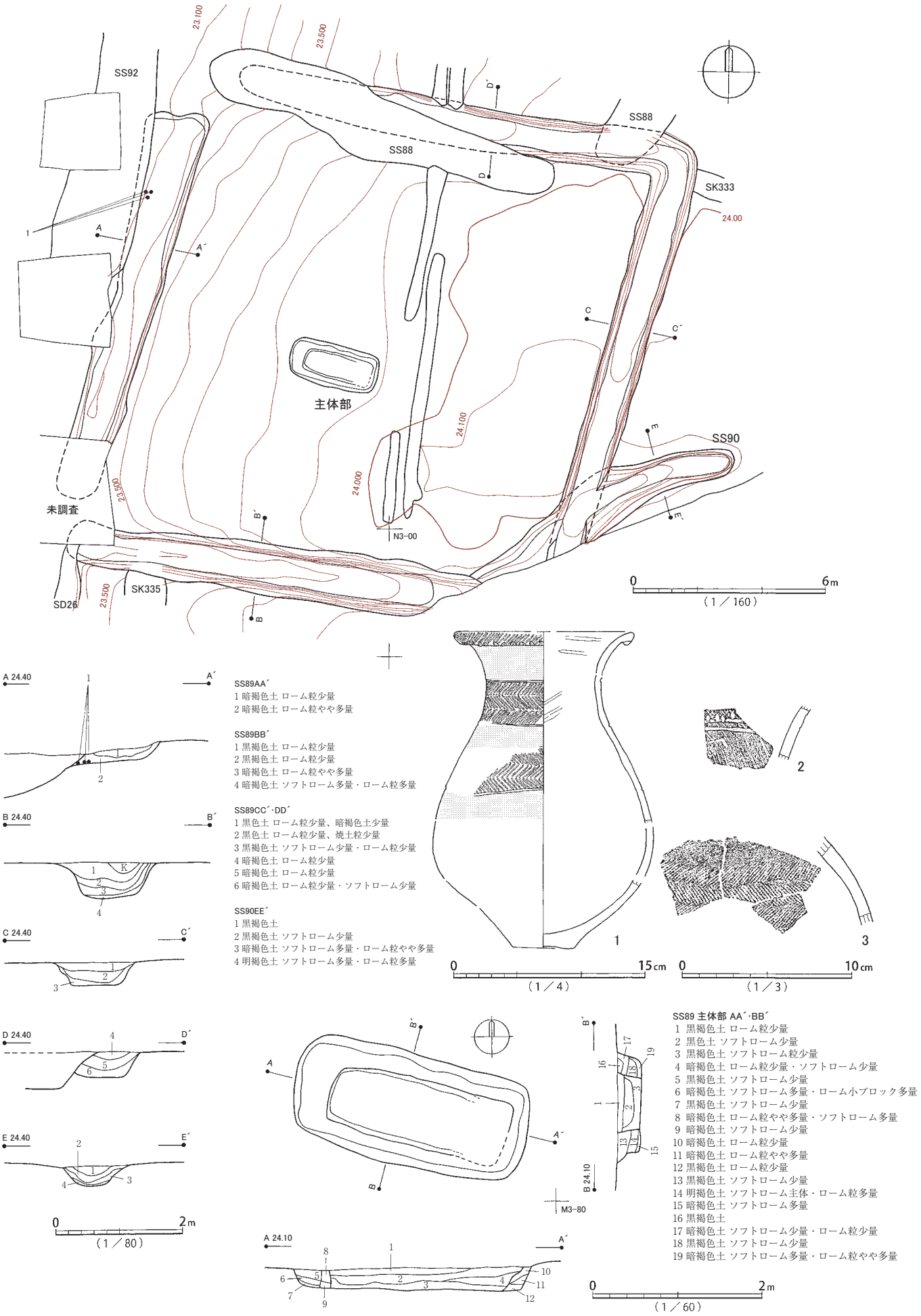
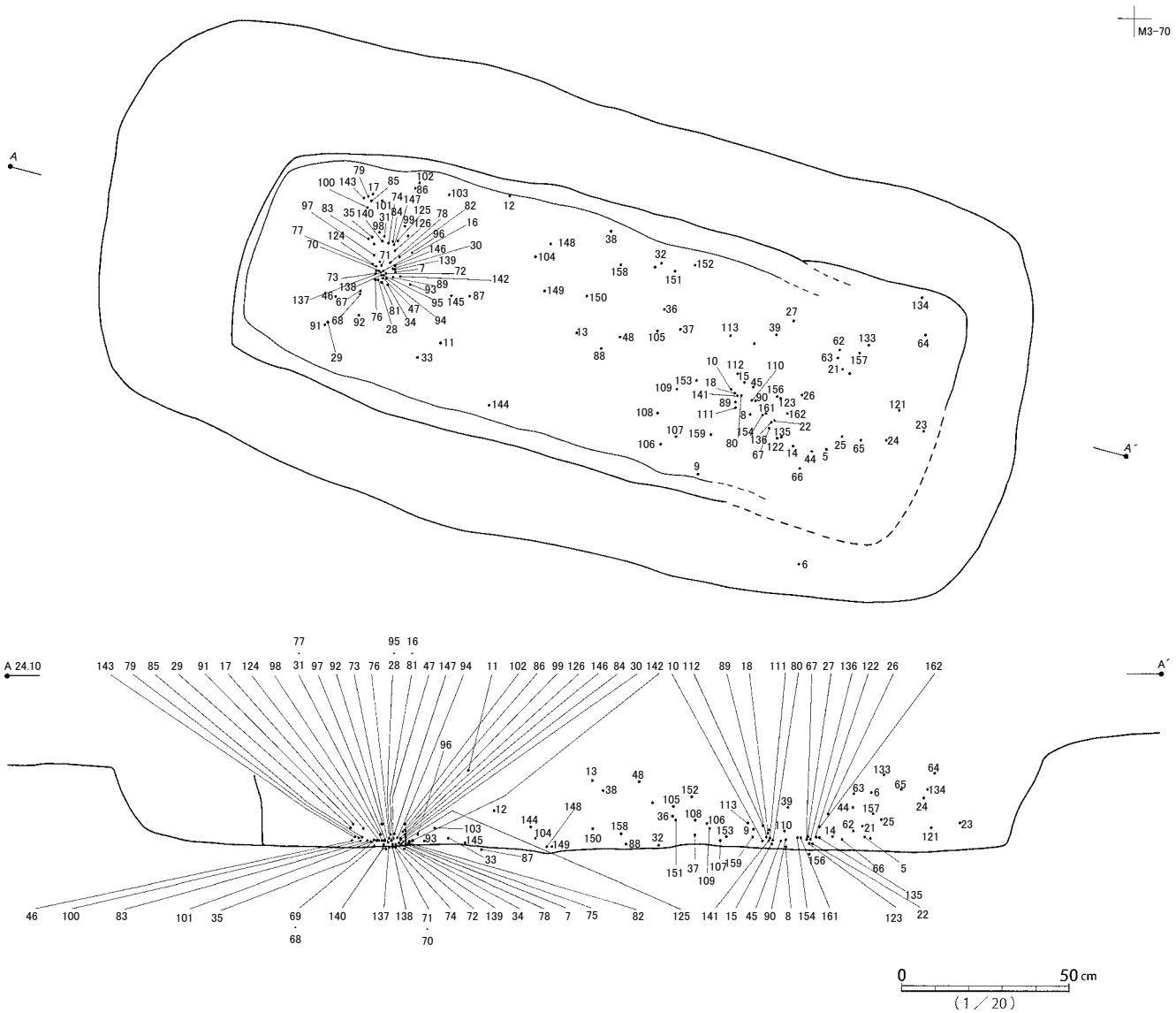


Fig.127　SS89 遺構・遺物 (1)、SS90 遺構実測図



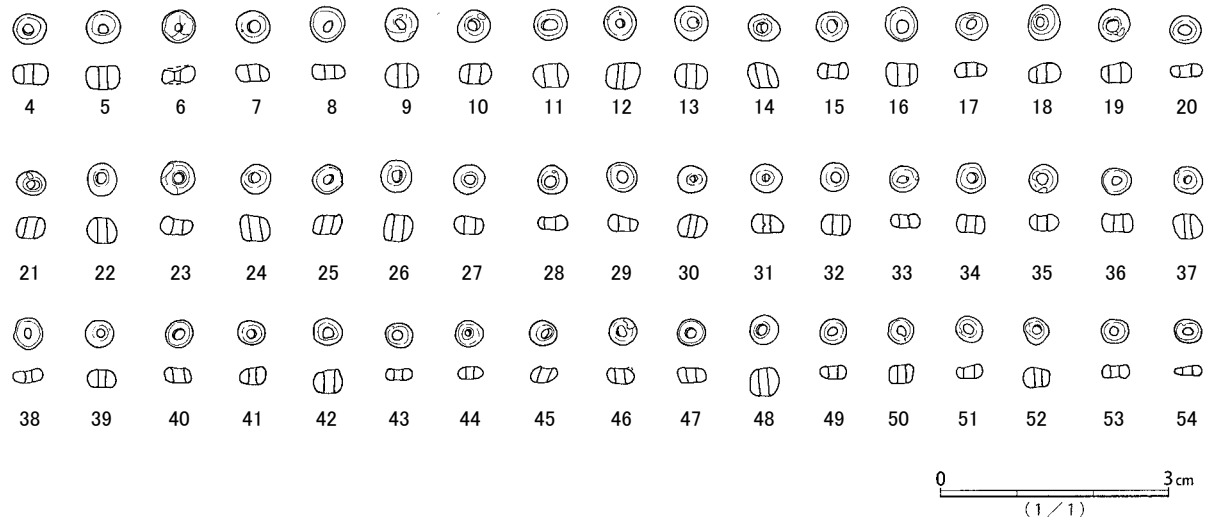


Fig.128　SS89 遺物出土詳細・遺物 (2) 実測図

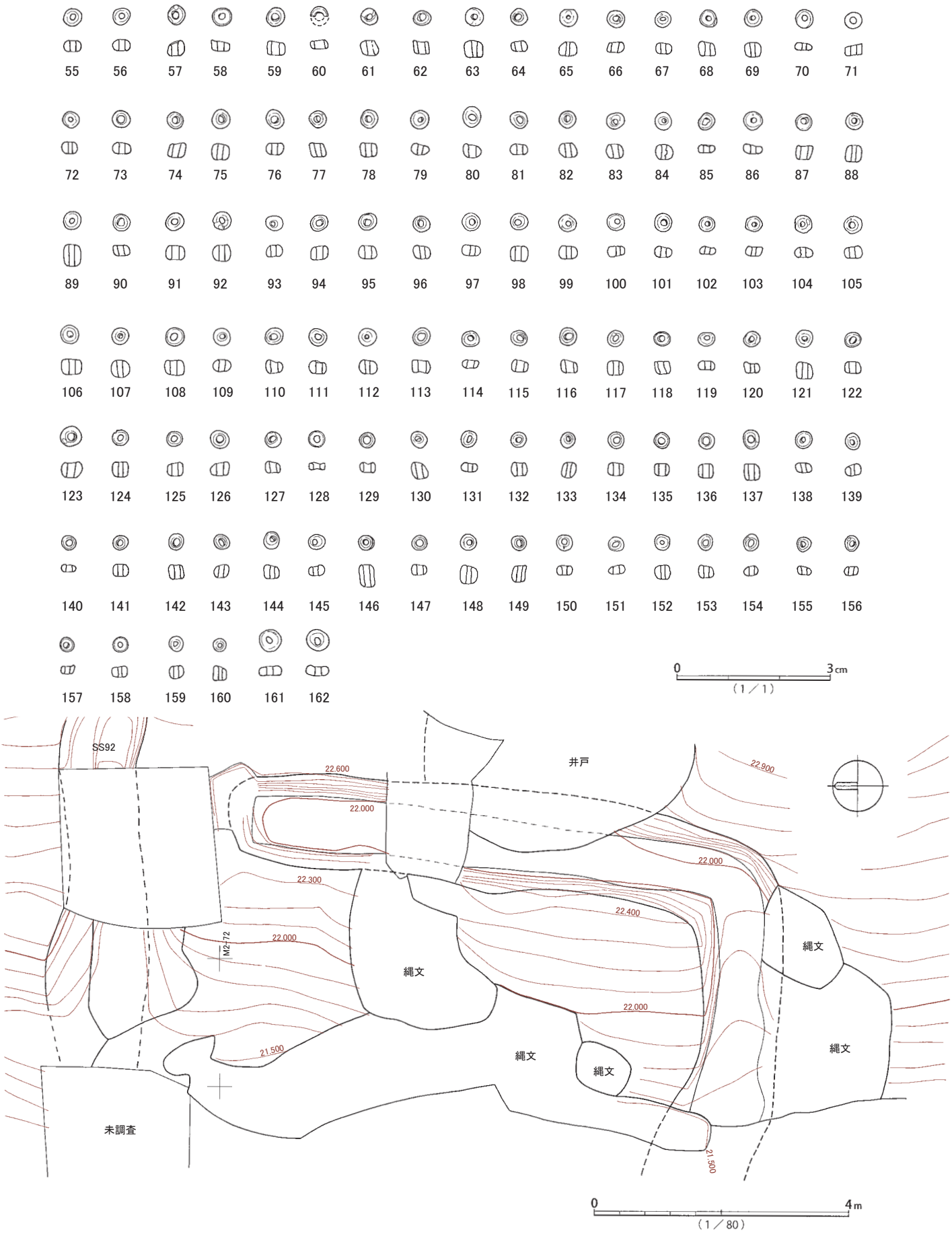


Fig.129　SS89 遺物 (3)、SS91 遺構実測図

帰属時期は、久ケ原1式期の所産と考えられる。

SS90は、N3-00付近に位置する遺構で、方形周溝墓とみられる。遺構のほとんどが南側の保存区内にあるとみられる。北側でSS89と重複するが新旧関係は不明である。本遺構は、発掘調査時にはセ72-036と呼称されている。

平面形状等詳細は不明だが、周辺遺構とは主軸方位が異なる。周溝幅は端部で減じる。規模は方台部が計測不能、周溝の上・下端幅、北側周溝で1.06m、0.48mを測る。周溝底面は平坦では無く、断面形状はレンズ状を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は計測不能である。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。

帰属時期は、不明である。

SS91　セ72地区（Fig.129）

M2-72付近に位置する方周溝墓である。調査区西端、西へ下る斜面上位に位置し、遺構西側は調査区外に伸びるとみられる。北側でSS92と重複し、北側周溝を共有するとみられる。東側にはSS89が近接する。本遺構は、発掘調査時にはセ72-010と呼称されている。

平面形状は、遺構西側が検出されていないため断定できないが、方台部は方形を呈するものとみられる。周溝は北東隅で断絶する。溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は規定の計測部位が、検出されていないため計測不能である。

周溝の上・下端幅は、東溝が1.50m・0.78m、南溝が(1.18)m・0.82mを測る。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は計測不能である。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。

帰属時期は、久ケ原式期の所産と考えられる。

SS92　セ72地区（Fig.130、PL.157）

M2-33付近に位置する方形周溝墓である。調査区西端、西へ下る斜面上位に位置する。東側でSS88、SS89、南側でSS91と重複するが、新旧関係は不明である。遺構範囲には、樹木部分の掘削を避けたため、ブロック状に未調査範囲が残る。西側は調査区境界が迫るが、本遺構の南北軸長を考慮すれば、西側周溝が調査区内に収まる遺構規模であった可能性が高い。本遺構は、発掘調査時にはセ72-042と呼称されている。

平面形状は、方台部が西側で不明瞭だが、方形を呈するものとみられる。周溝は西側を欠き、コの字状を呈する。周溝幅は東側溝が幅広で南北周溝がやや細いが、地形的な影響があるものとみられる。それぞれはほぼ均等幅で方台部をめぐる。規模は方台部が南北軸で(9.36)m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で1.18m・0.54m、0.30m、東溝が(2.24)m・1.44m、0.80m、南溝が1.22m・0.52m、0.50mを測る。墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-15°-Eである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、１が鉢形土器、2がミニチュアの小型甕形土器で、いずれも東側周溝のほぼ中央から近接して出土している。3は器形不明土器で、周溝内から出土している。

帰属時期は、久ケ原式期の所産と考えられる。

SS93　セ72地区（Fig.131、PL.181）

M2-06付近に位置する方形周溝墓である。調査区の西端、西側に下る斜面上位に位置する。遺構範囲には、樹木部分の掘削を避けたため、ブロック状に未調査範囲が残る。西側溝の一部が調査区外に伸びるとみられる。東側溝でSS88、南側でSS92と重複し、何れも周溝を共有するとみられる。本遺構は、発掘調査時にはセ72-043と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、方台部が方形を基調とするが、周溝が南北で一部断絶している。周溝幅は東側で幅広となり、南北、西側でやや狭める。いずれもほぼ均等幅で方台部をめぐる。規模は方台部が8.24m×(7.36)m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で0.88m・0.43m、0.20m、東溝が1.65m・0.75m、0.60m、西溝が1.10m・0.75m、0.26mを測る。断面図を見る限りでは、周溝底面は平坦部位が少なく、断面形状は逆U字形に近い。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-46°-Wである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、1が甕形土器の破片で、不明不明から出土している。

帰属時期は、中台1式期の所産と考えられる。

SS94　SW74地区（Fig.132～133、PL.39）

K2-00付近に位置する前方後方墳である。西側に下る斜面の上位、諏訪台古墳群中最も西側に位置する。北側には小谷が入り込み、沖積地からは視認しやすい範囲である。東側にSM1020が位置し、本遺構東側周溝が、SM1020西側周溝に掘り込まれている。本遺構は、発掘調査時には国№223、諏訪台33号墳と呼称されているが、後の調査である稲荷台遺跡に国№223を重複して付与している可能性があり、ある段階で本古墳の国分寺台№を国№249に改めている形跡が認められる。事実記載にあたり北側を北辺、北側周溝とする。また、本遺構は記録類が限られるため、詳細は不明な点が多い。

平面形状は、後方部が東西方向に長い長方形を呈し、前方部が後方部南側辺中央に造出されており、南端で不明瞭となるが台形を呈するものとみられる。周溝は全周せず、前方部南辺中央から東側で断絶する。周溝幅は後方部では、各辺の中央付近が広く、隅に向かって僅かに狭くなる特徴が認められる。前方部では、墳丘に対して相似形を取らず、平面形状は方形に近い。

墳丘規模は、全長が17.96m、幅が12.32mを測る。周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で2.12m・1.00m、0.70m、東溝が2.00m・1.16m、0.60m、南溝が(1.20)m・(0.72)m、0.65m、西溝が2.08m・1.04m、0.60mを測る。

周溝底面はほぼ平坦とみられるが、くびれ部のみ深く掘り込まれている。周溝の断面形状は逆台形に近い。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向からN-16°-Eである。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。また、墳丘ロ-ム層を掘り込む。

出土遺物は、1が壺形土器で北側周溝覆土中より出土している。

帰属時期は、土器から中台２式期の所産と考えられる。

SS95　099 地区（Fig.134～135、PL.40・158・182）

K5-08 付近に位置する方墳である。調査区北西部に位置し、遺構北側半分は調査区外に伸びている

とみられる。東側に諏訪台８号墳、南側に諏訪台 37 号墳が近接するが、何れも本報告では掲載していない遺構であり、詳細は不明である。本遺構は、発掘調査時には 099-4003 と呼称されている。

平面形状は、北側半分が調査区外となるため、墳形を断定することは出来ない。墳丘は東西辺が直線的であるのに対し、南辺は明瞭に胴張りとなる。周溝は検出範囲では断絶しない。周溝幅は東西周溝がほぼ均等であるが、南側周溝は墳丘の胴張形状を強調するように、中央付近で広く、隅に向けて僅かに狭くなる。規模は墳丘が東西方向で 17.12m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、東溝が 2.56m・1.88m、0.43m、南溝が 3.00m・1.52m、0.78m、西溝が 2.36m・(1.20)m、0.18m を測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は、底面からの立ち上がりが、墳丘側で緩やかなのに対し、外側では垂直方向に立ち上がる、左右非対称な逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部東西方向から N-80°-E である。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、南側周溝の両隅にまとまりが見られる。1 が甕形土器、2 が直口壺形土器で、2 は周溝底面付近から出土している。3 が鉢形土器で、東側周溝中央寄りの覆土中層からの出土。8 は器台形土器脚部、4～7 が宮ノ台式の壺形土器で、9～12・14・16～20 が宮ノ台式の甕形土器、13・15 が宮ノ台式の壺形土器、21・22 が宮ノ台式の鉢形土器とみられる。宮ノ台式の土器は、本遺構に伴うものではなく、周辺に当該期の遺構がある可能性が高い。なお、遺物の出土レベルは、絶対高が不明であるため、他遺構から復元している。

帰属時期は、土器から草刈２式期の所産と考えられる。

SS96　099 地区　(Fig.135～136、PL.40・158・195)

L6-64 付近に位置する方墳である。北側で諏訪台 37 号墳と重複し、南側には SS97 の後方部周溝外周が位置し、近接または一部が重複する。新旧関係は、SS97 に対しては、本遺構が新しいと捉えているが、根拠は墳丘規模とその位置関係からであるため確証はない。諏訪台 37 号墳に対しては、記録類が皆無であるため不明である。本遺構は、発掘調査時には東側を 099-4048 として調査されているが、西側・南側はセ 72 地区・セ 28 神社裏地区で調査され、それぞれセ 72-014・神社裏-1018 としていた土壙（二重口縁壺出土）・前方後方墳の周溝の一部と考えられていた溝状の掘り込みが、それぞれ西側・南側周溝に当たると判断した。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、墳丘は隅丸正方形を呈するとみられ、周溝外周も同様に隅丸方形を呈する。周溝は東側以外不明瞭な部位が多いが、全周するとみられる。周溝幅は北東隅がやや狭いが、これを除きほぼ均等に墳丘をめぐる。規模は方台部が(11.04)m×(10.96)m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で上端(1.52)m、東溝が 1.80m・0.60m、0.39m、南溝が(2.08)m・(1.24)m を測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形またはレンズ状を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向から N-81°-W である。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、西側周溝の南西隅付近に集中する。1・2 は壺形土器で、共に周溝底面が土坑状に掘り窪んだ箇所から出土している。1 の壺形土器は口縁部上位を欠損するが、二重口縁を呈する。肉厚で大きさに対して重い。2 は折返し口縁を持つ壺形土器で、底部を欠損するが、穿孔しているのか判断し難い。2 個体の作りにはそれほど共通する要素は見出せない。3 は棒状の不明鉄製品で、周溝内か

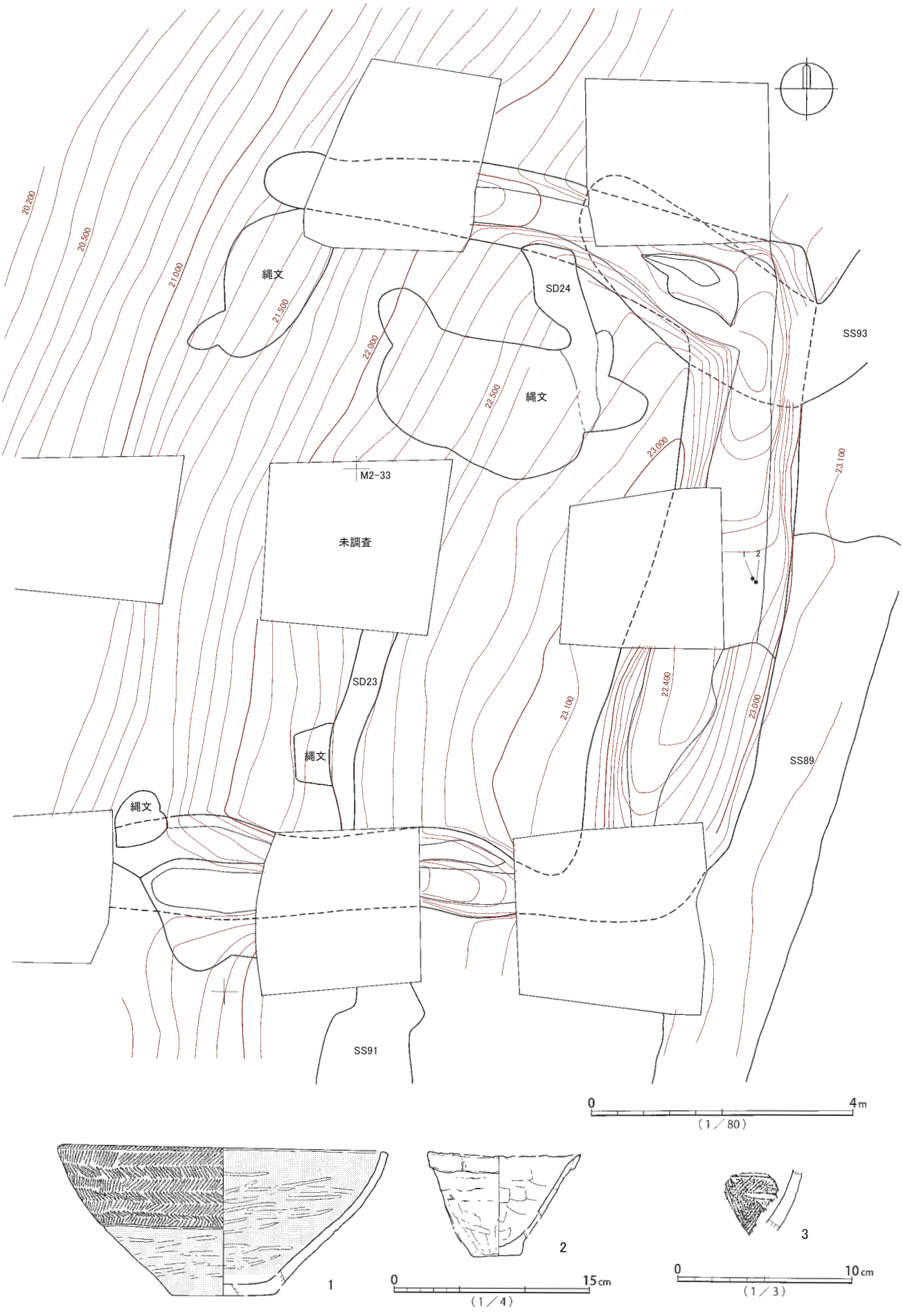
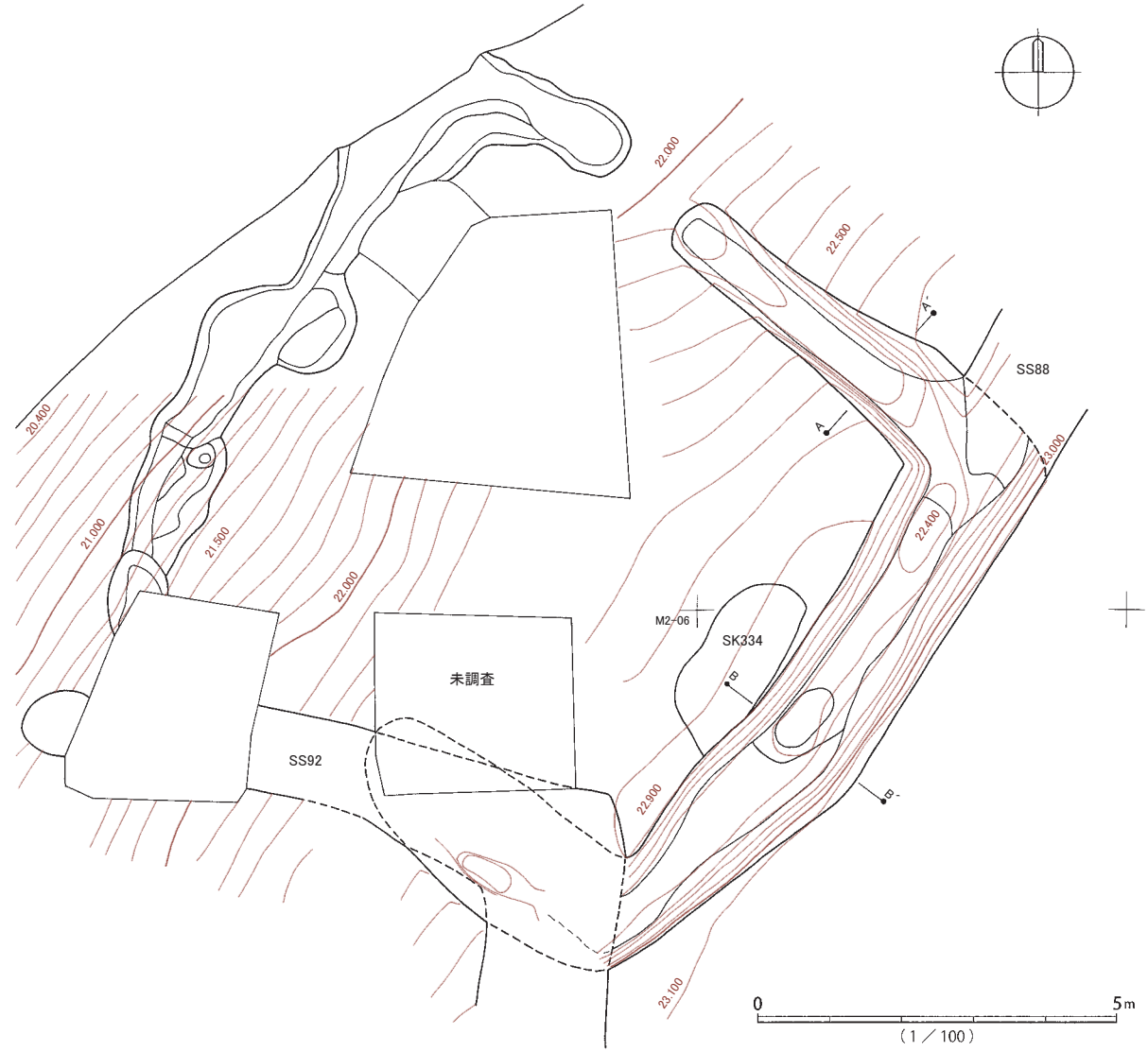
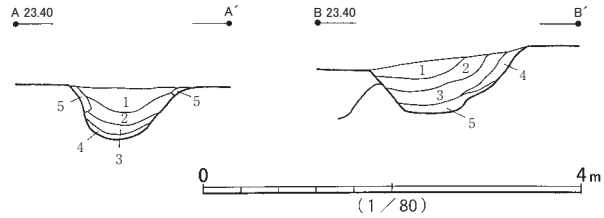


Fig.130　SS92 遺構・遺物実測図





SS93AA´
1 黒褐色土 ローム粒少量
2 黒褐色土 ローム粒やや多量
3 暗褐色土 ローム粒多量・ソフトローム少量
4 暗褐色土 ソフトローム主体・ローム小ブロック少量
5 暗褐色土 ソフトローム多量・ローム小ブロック少量

SS93BB´
1 暗褐色土 ローム粒多量
2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
3 茶褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
4 暗褐色土 ローム粒多量
5 明褐色土 ローム小ブロック多量・ローム粒多量

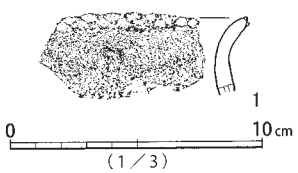


Fig.131　SS93 遺構・遺物実測図

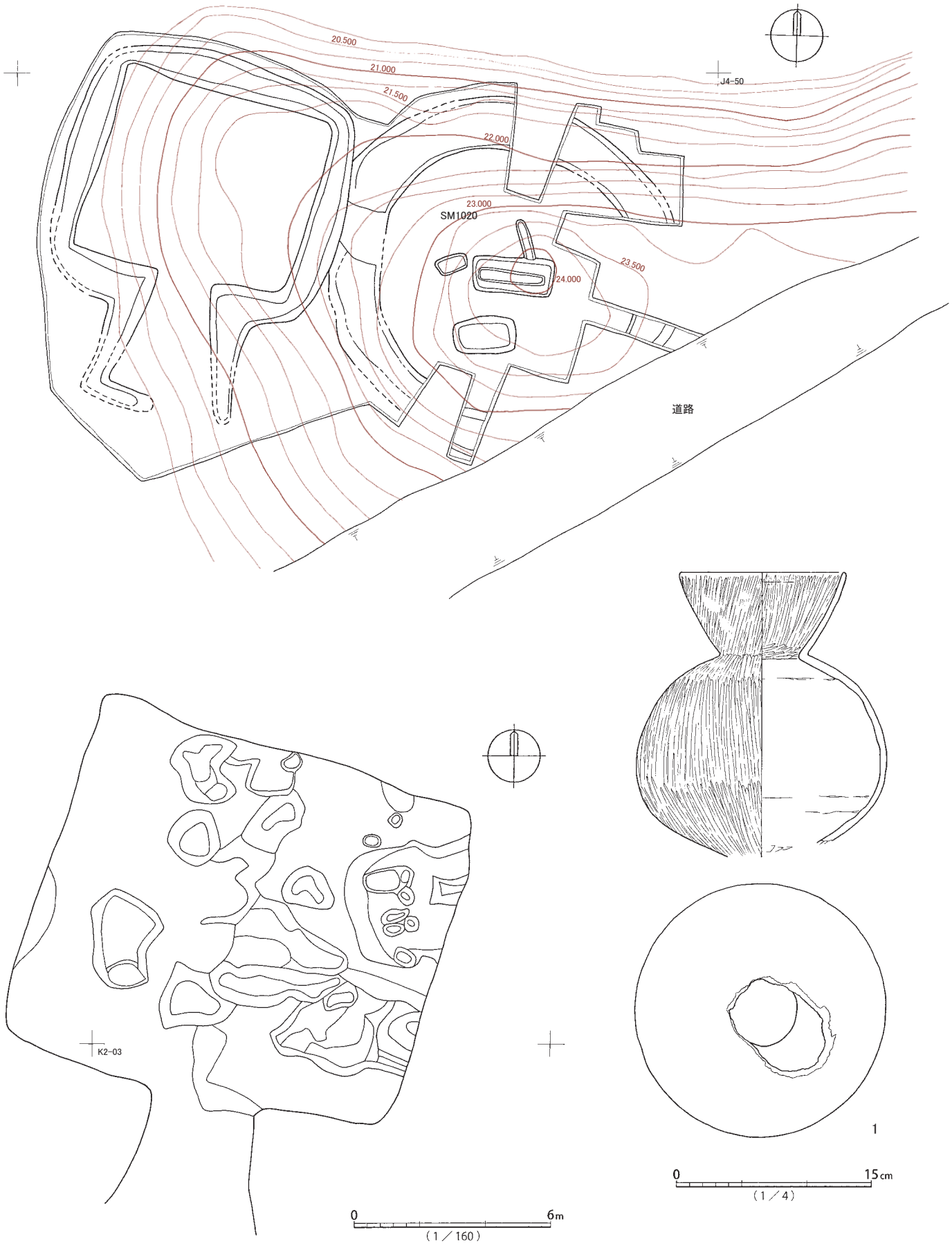


Fig.132　SS94 遺構 (1)・遺物実測図

らの出土である。

帰属時期は、草刈 1 式期の所産と考えられる。

SS97　セ 72 地区・セ 28 神社裏地区（Fig.137～139、PL.40～41・158・182）

M5-00 付近に位置する前方後方墳である。国№155、諏訪台 9 号墳と呼称されている。調査は後方部北東隅及び北西隅から前方部の北側にかけてに限られ、墳丘のほとんどと、以南部分については保存地区に現状保存されている。周辺には北側で SS96 が近接もしくは重複し、西側には SS83 が隣接している。本遺構の東側調査区に当たる後方部北東隅は、セ 28 神社裏地区として調査されている。そのため、調査区の全体図を構成する際に、不整合部分のつじつまを合わせるために方向を補正しており（第 1 章第 3 節第 10 項）、その影響を本遺構も受けている。

本遺構は、発掘調査時には、後方部北東部分をセ 28 神社裏-1018、後方部北西側をセ 72-001、前方部をセ 72-002 としており、ひとつの遺構としては認識されていなかった段階があったことが伺える。事実記載にあたり北側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、検出範囲が限られるため部分的な観察にとどまる。墳丘は後方部の北東・北西隅ではやや丸みを帯びているが、明確に隅を形成している。これがテラス状の段であるかは判断できない。また、前方部は特異な形状であり、上端では周溝に並行するように方形を呈するのに対し、下端では台形状に西側へ向けて幅が広がる様相を示す。周溝は全周し、周溝幅は前方部の西側周溝を除きほぼ均等に墳丘をめぐる。規模は墳丘が主軸方向で（38.40）m、周溝を含むと 41.00mを測る。周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で 5.70m・4.85m、0.30m、東溝が 5.10m・3.90m、0.70m、西溝が 1.80m・0.80m、0.60m を測る。周溝底面はくびれ部で深くなるがほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈するが、前方部西側周溝は、他に比べ浅く、断面もレンズ状を呈する。

後方部の墳丘高は、現況で周溝底から 4mほどを測り、主軸方位は N-76°-W である。埋葬施設は墳丘では検出していないが、後方部北東隅付近に SK267 とした周溝内土壙が 1 基検出されている。平面形は長楕円形で規模は 2.13m×1.20m、周溝底からの深さは 0.42mを測る。この SK267 は整理段階で、単独の土壙として認識されていた時期があり、個別の番号を採っているが最終的には SS97 に帰属するものと判断している。

出土遺物は、北側周溝の前方部周溝からくびれ部にかけて認められる。1～12 が壺形土器で、9 が灰釉陶器である。1・5 は二重口縁壺であるが、その作りに共通する要素は見られない。4 は小型の短頸壺で、底部を焼成後に打ち欠いて穿孔している。

帰属時期は、草刈 1 式期の所産と考えられる。

SS98　099 地区（Fig.140）

I9-00 付近に位置する方形周溝墓である。北側で SM1086 と重複し、南側で SS5 が隣接する。新旧関係は、遺構からでは判断できない。本遺構は、2 地区に分かれて発掘調査されていることになるが、TJ 地区では検出されておらず、SM1086 の写真にプランの一部が写り込んでいるのみである。また、099 地区では 099-2001 と呼称されているものの、この遺構番号が別の遺構（SD8）にも重複して付与されている。この他に、TJ 地区を遺跡全体図に反映させる際の操作（第 1 章第 3 節第 3 項）などを考慮すると、平面プランについてはその再現性は低いとみられる。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

方台部の平面形状は、南北方向が東西方向に対して長く、隅丸の長方形を呈する。周溝は全周し、周溝幅は北西隅を除きほぼ均等に方台部をめぐるとみられる。規模は方台部が（9.84）m×（6.80）m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、東溝が 1.16m・0.42m、南溝が（1.56）m・0.54m、0.30m を測る。

方台部範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向から N-18°-E である。埋葬施設は方台部東南隅に位置し、主体部墓壙の平面形状は、隅丸の長方形で、規模は計測不能×0.94m を測る。主軸方位は長軸方向から N-9°-W である。木棺痕は検出していない。

出土遺物は無い。帰属時期は不明である。

SS99　099 地区（Fig.141～142、PL.159・182・195・215）

P13-00 付近に位置する方墳である。東側で SM1018、南側で SM1005 が重複し、SS41 が近接するが、当該時期としては単独で位置する。新旧関係は本遺構に対し、SM1018、SM1005 が新しく、SS41 は古いとみられる。本遺構は、発掘調査時には 099-4065 と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、墳丘が僅かに胴張の正方形を呈する。周溝は全周し、周溝幅はほぼ均等に墳丘をめぐる。規模は墳丘が（12.16）m×12.12m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で 2.32m・1.36m、0.65m、東溝が（2.64）m・1.48m、0.71m、南溝が（2.96）m・（1.88）m、西溝が 2.54m・1.80m、0.57m を測る。周溝の断面形状はレンズ状を呈する。

盛土は土層図を見る限りでは明瞭なものは確認できない。

主軸方位は方台部長軸方向から N-39°-W である。埋葬施設は墳丘、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、すべて周溝覆土からの出土で、1・6・8 は甕形土器、2～5・7 は壺形土器、9・10 は浅鉢形土器である。

帰属時期は、出土土器から草刈 2 式期の所産と考えられる。

SS100　099 地区（Fig.142、PL.182）

P9-20 付近に位置する円形周溝墓もしくは円墳である。南側で SS73 と重複し、北側に SS31 が近接する。新旧関係は不明である。本遺構は、発掘調査時には 099-4057 と呼称されている。

平面形状は、西側で周溝が認められないため全容は不明だが、南東側に下る傾斜変換点に位置することから、当初は周溝が円形にめぐっていたものとみられる。周溝幅はほぼ均等にめぐる。規模は墳丘が直径（9.00）m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、周溝北側で 1.05m・0.50m、0.18m、東側が 0.85m・0.42m、0.15m、南側が 0.95m・0.52m、0.10m を測る。周溝の断面形状は逆台形もしくはレンズ状を呈するが、極めて浅いため、遺構の下位のみを検出しているとみられる。

墳丘範囲では盛土を検出していない。埋葬施設は墳丘部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は 1・2 共に周溝覆土からの出土で、1 は SS73 周溝との重複範囲から出土している。1 は高坏形土器とみられ、2 は須恵器甕である。何れの遺物も遺構の時期を示すとは言い切れず、帰属時期は不明とせざるを得ない。担当間での意見交換を経て、SS としたが、近接する北側の斜面下位に規模の同様な古墳（SM 1033、SM1040）が位置し、SM とする時期の所産とも考えられる。

SS101　セ 73 地区（Fig.143～144、PL.2・41～44・159・182）

R3-00 付近に位置する前方後方墳である。遺跡の西端部、標高 25m 程の、台地頂上よりやや下が

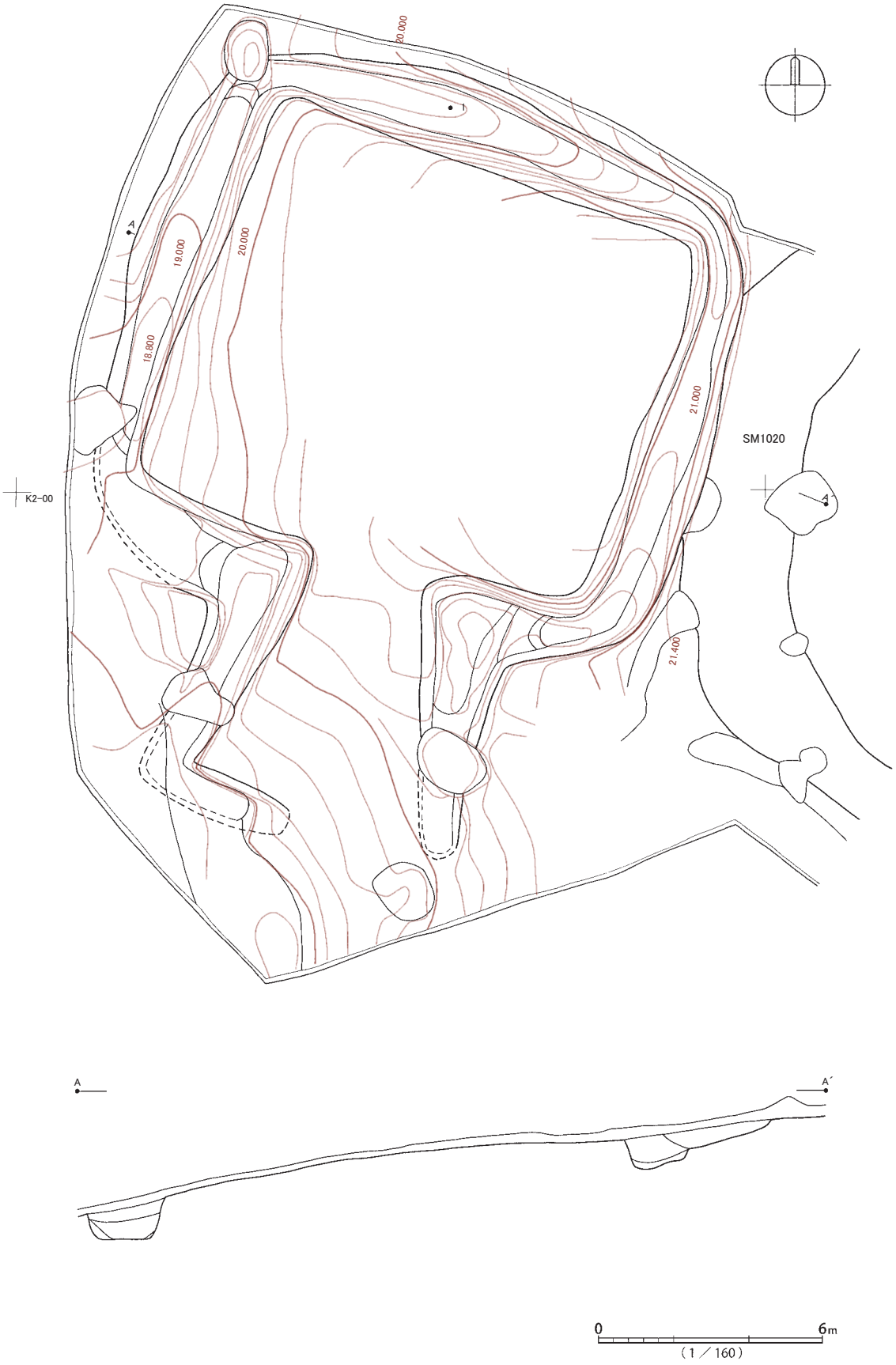
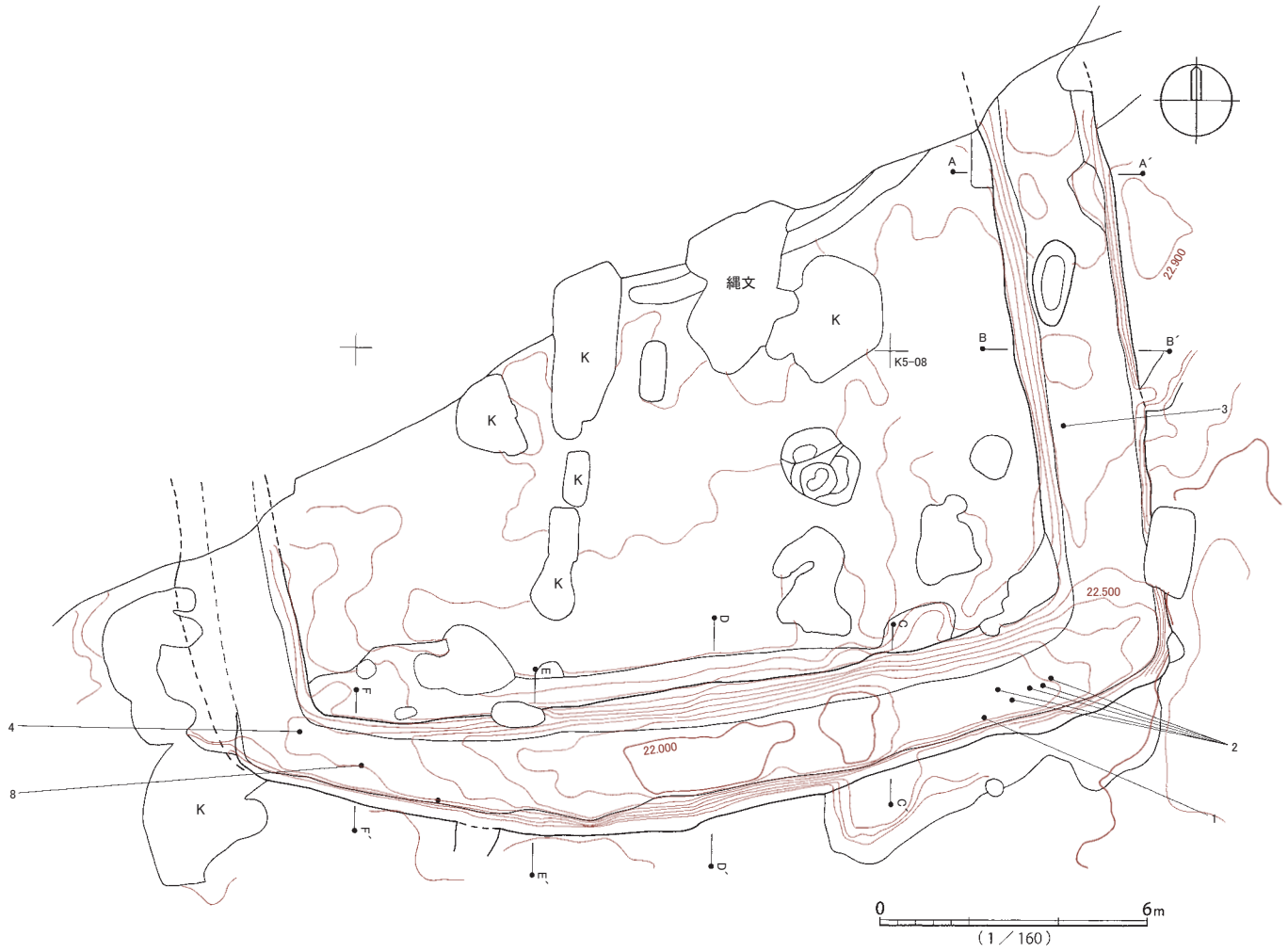
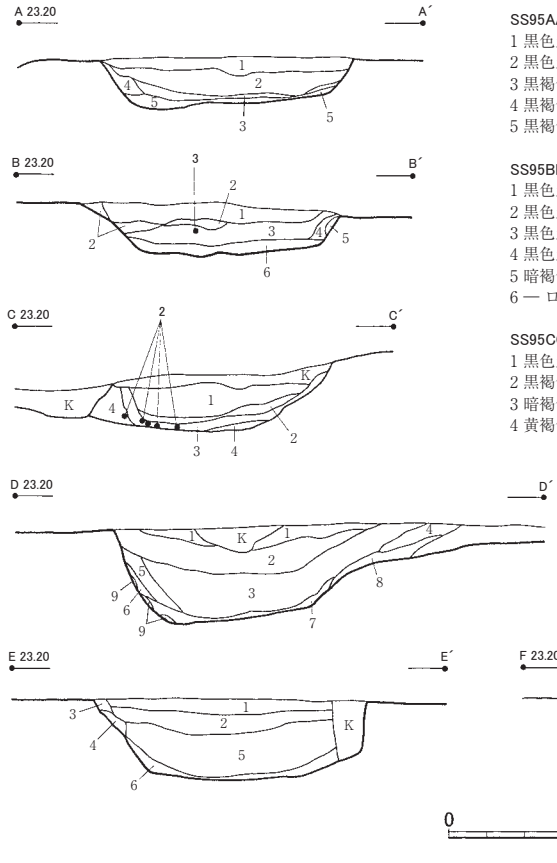


Fig.133　SS94 遺構 (2) 実測図





SS95AA´
1 黒色土 黒褐色土若干
2 黒色土
3 黒褐色土 ローム粒
4 黒褐色土・褐色土の混合
5 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量

SS95BB´
1 黒色土・黒褐色土・褐色土の混合
2 黒色土・黒褐色土・褐色土の混合 暗い 黒色土多量
3 黒色土
4 黒色土 黒褐色土
5 暗褐色土 ローム粒多量
6 ― ローム粒・ロームブロック

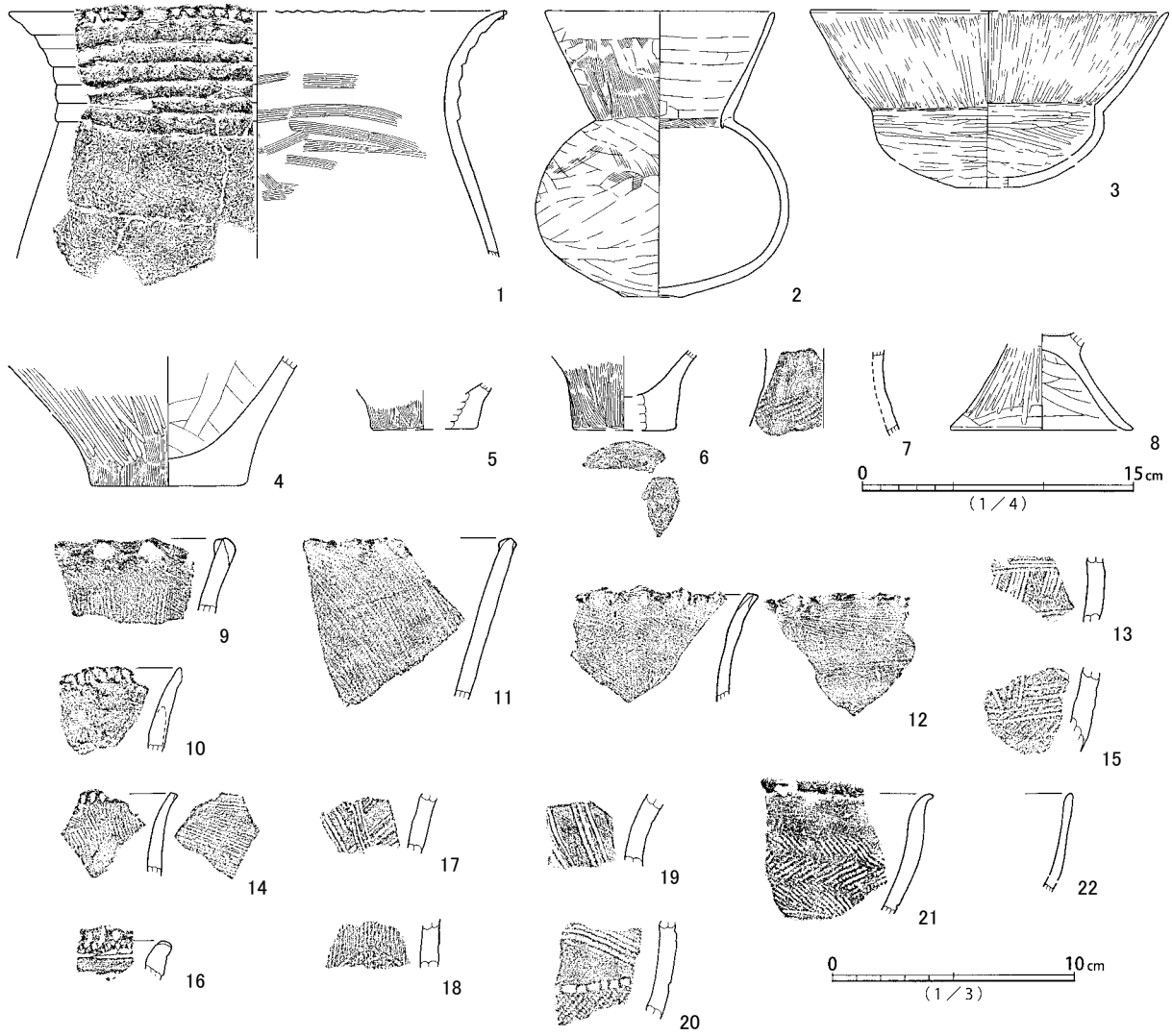
SS95CC´
1 黒色土
2 黒褐色土 ローム粒
3 暗褐色土 ローム粒
4 黄褐色土 ローム粒

SS95DD´
1 黒褐色土 ローム粒多量
2 黒色土 ローム粒若干
3 黒色土
4 黒褐色土
5 暗褐色土
6 暗黄褐色土
7 暗黄褐色土 ロームブロック
8 褐色土 ローム粒
9 暗黄褐色土 ローム粒

SS95EE´
1 黒褐色土 黒色土多量
2 黒色土 ローム粒若干
3 暗褐色土
4 暗黄褐色土 ローム粒
5 黒色土
6 暗黄褐色土 ローム粒多量

SS95FF´
1 黒色土
2 黒褐色土 ローム粒多量
3 黒褐色土 ローム粒
4 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、黒褐色土

Fig.134　SS95 遺構実測図



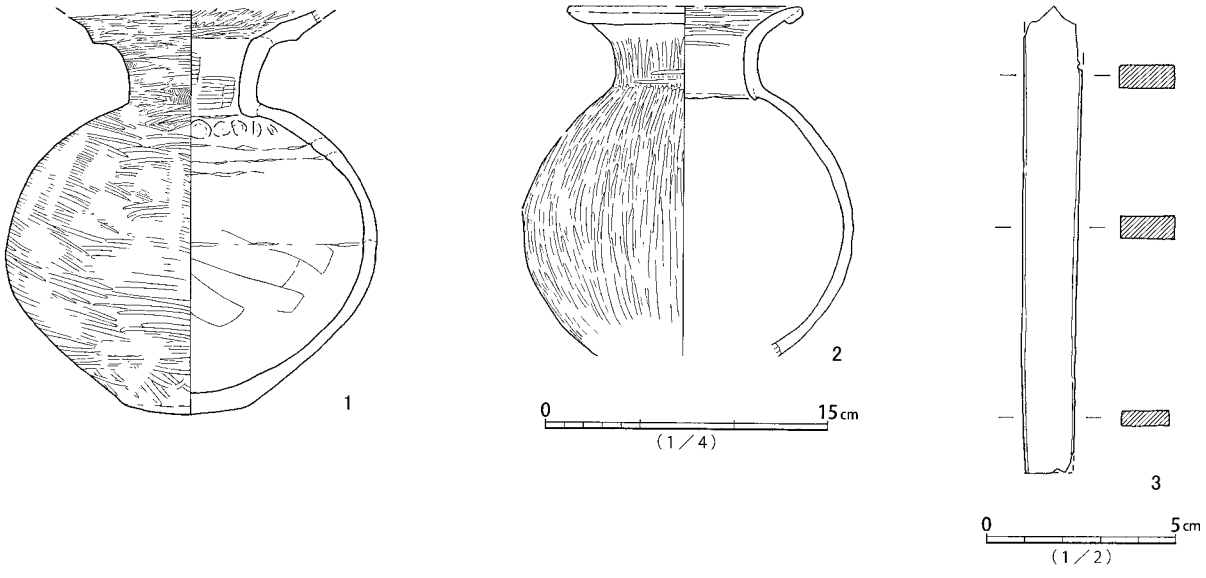


Fig.135　SS95 遺物、SS96 遺物実測図

った、南へ傾斜する斜面変換点に位置する。これより南西側の斜面には古墳は存在せず、本古墳が空間的に群の端部を形成していることが明瞭である。東側には保存地区内に諏訪台 10 号墳が近接し、後方部南側には SM1011、前方部北側には SM1075 が近接する。また前方部南側では、古墳時代終末期とみられる竪穴建物跡が重複して改変されている。

本遺構は当初、国№157、諏訪台古墳群 11 号墳とされたが、発掘調査時にはセ 73-001 と呼称されている。これより先の調査として、確認調査が SW80 地区調査時に実施されており（第 1 章第 3 節第 5 項）、現状での保存地区内に、諏訪台 10 号墳と墳丘裾から本墳後方部中央方向に伸びるトレンチを設定し、その結果、諏訪台 10 号墳周溝と、本墳の後方部周溝を検出し、切り合いが生じていないことを確認している。

墳丘規模は、主軸長（38.00）m×幅（22.00）m、周溝を含めた規模は主軸長（44.32）m×幅 32.12m、南側周溝底から後方部墳頂は 2.9m を測る。主軸方位は方台部長軸方向から N-82°-W である。

前方部は、断面図において、表土である耕作土下に盛土が認められないため、どれだけ原形を残しているか確証がないことを前提とする。平面形状は左右対称に近い台形を呈するが、南西隅で周溝が途切れ、僅かに幅 1.8m 程の部分が陸橋状に掘り残された形状を示す。幅は西側端部下端間で 19.92m、くびれ部で 9.80m、主軸長（16.70）m、墳丘裾から前方部中央付近の高さは約 1.00m を測る。主軸方向での断面形状は後方部から緩やかに前方部端部まで下っており、墳丘裾に幅 1m 程のテラス状の平場が認められる。

後方部は、平面形状が正方形に近いが、西側両隅からくびれ部へはやや後方部側に食い込んだ形状を呈する。規模は主軸長（21.30）m×幅（22.00）m、高さは墳丘裾から盛土上端まで 2.40m を測る。断面図からは、旧表土から 0.72m 程の盛土が認められ、後方部墳丘外周から盛土が行われたことが観察できる。また、後方部南側中央付近の墳丘裾には、幅 2.90m 長さ 3.00m、高さ約 0.80m の階段状の張出しが検出されている。

周溝の上・下端幅、墳頂部からの深さは、北側周溝で 4.80m・3.70m、2.60m、東溝が上端 4.40m、下端 2.70m、1.70m、南溝が 6.60m・5.30m、2.90m、西溝が 2.45m・1.95m、3.50m を測る。周溝はくびれ部の周溝外周寄りに最深部を持つことを特徴とし、断面形状は底面がなべ底のように丸みを帯び、墳丘側では明瞭に立ち上がるが、周溝外周側では漸次的な傾向が見受けられる。

埋葬施設は墳丘内では確認されていない。周溝内には SK338・SK339・SK340・SK341 が位置するものの、中世である SK339 以外は遺物の出土が無く、時期不明である。位置関係から、本墳を意識して作られていることは確かであるが、本墳に帰属するか否か判断が難しい。ここでは本古墳に帰属する可能性を残しつつ、別に取り扱うこととした。

出土遺物は、極めて少なく、1・2・8 は甕形土器、3・4 は小型丸底壺形土器、5・6・9 は壺形土器で 5 は二重口縁壺、6 は折返し口縁の広口壺、7 は椀形土器、10・11 は高坏形土器、14 は灰釉陶器椀、15 は須恵器杯、16 は須恵器高台付杯、17 は須恵器短頸壺、18 は須恵器壺である。1・3・4 が周溝くびれ部から、10・12 は後方部南側表土中から、2・6～9・11・16 が後方部南側からくびれ部にかけて、5・13 が後方部南東側から、17・18 が後方部北側からくびれ部にかけて、15 が後方部南北トレンチから出土している。

帰属時期は、草刈 2 式期の所産と考えられる。

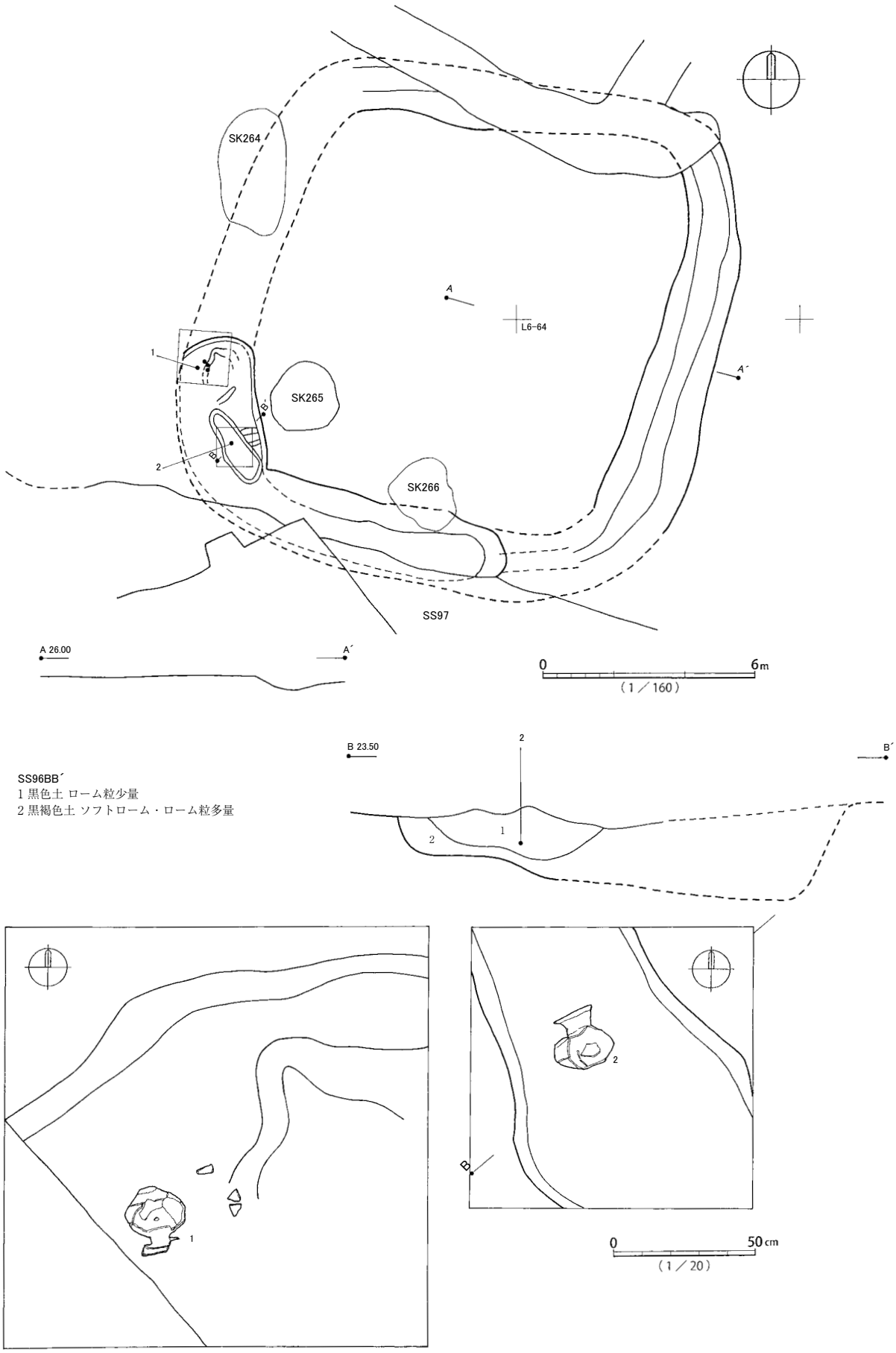


Fig.136　SS96 遺構・遺物出土詳細実測図

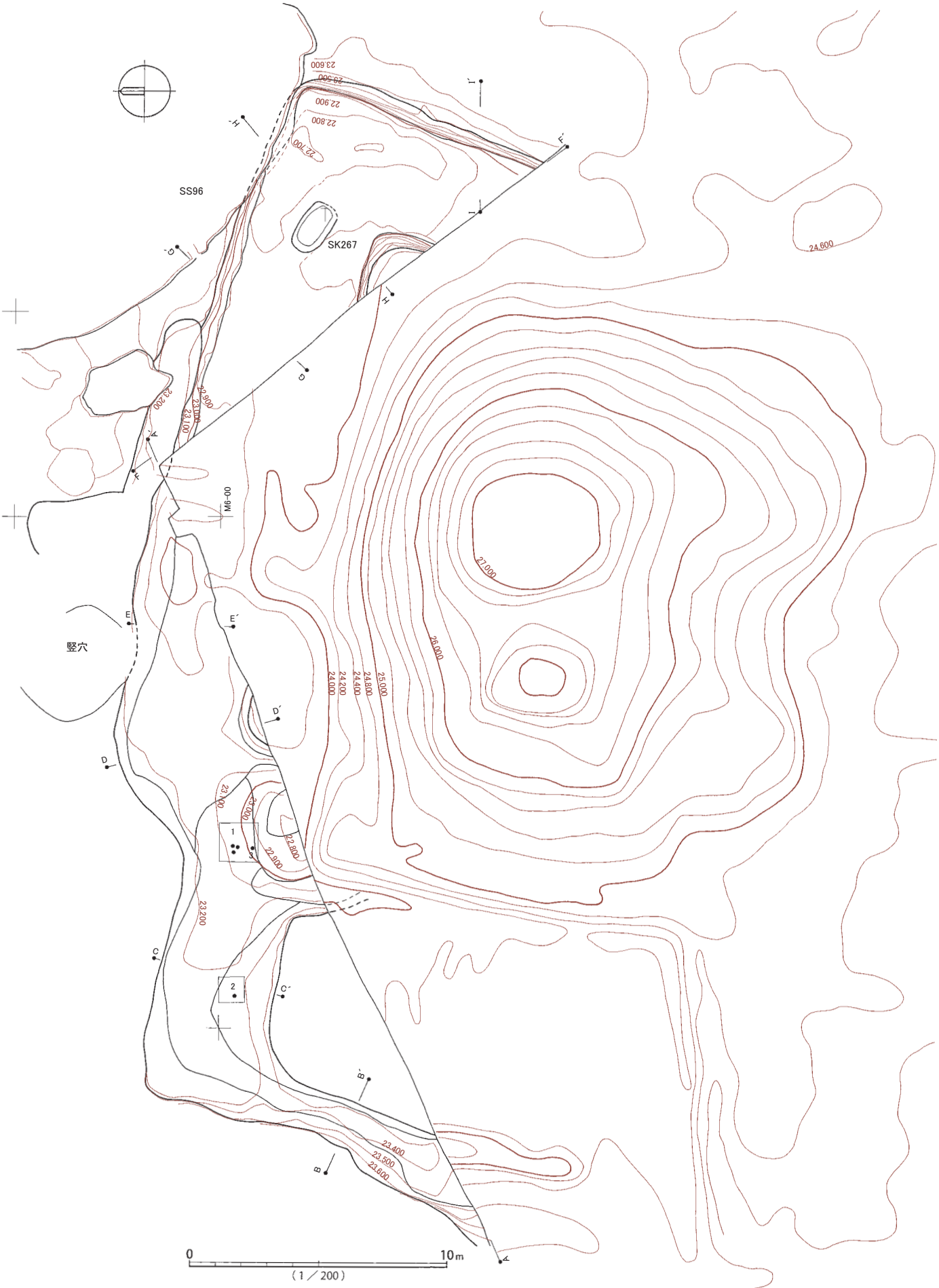
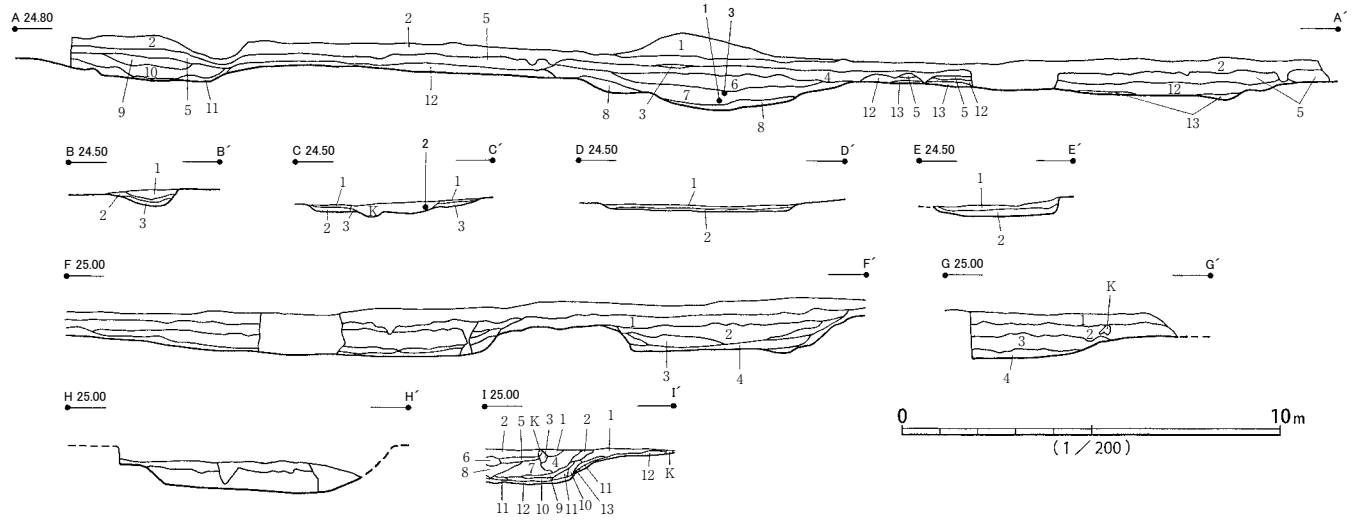


Fig.137　SS97 遺構 (1)、SK267 遺構 (1) 実測図



SS97AA´
1 黒褐色土 やや粒子荒い、表土に似る
2 ― 表土
3 黒色土 宝永の富士火山灰
4 暗褐色土 ソフトローム・ローム粒少量
5 黒褐色土
6 黒褐色土 ソフトローム・ローム粒少量
7 黒褐色土 ローム粒少量
8 暗褐色土 ソフトローム・ローム粒多量
9 黒色土 ローム粒少量
10 黒褐色土 ローム粒少量
11 暗褐色土 ソフトローム・ローム粒少量
12 暗褐色土 ソフトローム・ローム粒少量
13 暗褐色土 ソフトローム・ローム粒少量

SS97BB´
1 黒色土 ローム粒若干
2 黒色土 ローム粒少量
3 暗褐色土 ローム粒やや多い・ローム小ブロック少量

SS97CC´
1 黒色土
2 黒色土 ローム粒若干
3 暗褐色土 ソフトローム・ローム粒多量

SS97DD´
1 黒褐色土 ソフトローム少量・ローム粒多量
2 明褐色土 ローム粒少量 ソフトロームが主

SS97EE´
1 黒色土 ローム粒少量
2 黒褐色土 ソフトローム・ローム粒少量

SS97FF´
1 灰褐色土 1mm 以上 5mm 以下のローム粒子 1.5mm 以上 2mm 以下の灰色土砂粒しま状に含む 軟質 粘性なし
2 黒褐色土 1mm 以上 5mm 以下のローム粒子多量 軟質 粘性なし
3 黒褐色土 3mm 以上 10mm 以下の堅いローム粒子 軟質 粘性なし
4 褐色土 ソフトローム若干 硬質 粘性なし

SS97GG´
1 黒色土 表土
2 暗褐色土 褐色土多量
3 暗褐色土
4 暗褐色土 ソフトローム

SS97II´
1 灰褐色土 1mm 位のローム粒 しまりあり 2層より硬質 粘性なし
2 灰褐色土 1mm 以上 5mm 以下のローム粒 1.5mm 以上 2mm 以下の灰色土砂粒をしま状に含む 軟質 粘性なし
3 暗褐色土 1mm 以下のローム粒・1mm 以下の灰色土砂粒 軟質 粘性なし
4 黒褐色土 1mm 以下のローム粒多量 軟質 粘性なし
5 黒褐色土 1mm 以下のローム粒子・灰色土砂粒をしま状に含む 軟質 粘性なし
6 黒褐色土 1mm 以上 5mm 以下のローム粒子多量 軟質 粘性なし
7 黒褐色土 灰色土砂粒・1mm 以上の風化ローム砂粒子多量 軟質 粘性なし
8 黒褐色土 3mm 以上　10mm 以下の堅いローム粒子 軟質 粘性なし
9 灰黒色土 軟質 粘性なし
10 灰褐色土 軟質 粘性なし
11 暗褐色土 軟質 粘性なし ローム漸移層
12 褐色土 ソフトローム若干 硬質 粘性なし
13 黄褐色土 硬質 粘性若干あり

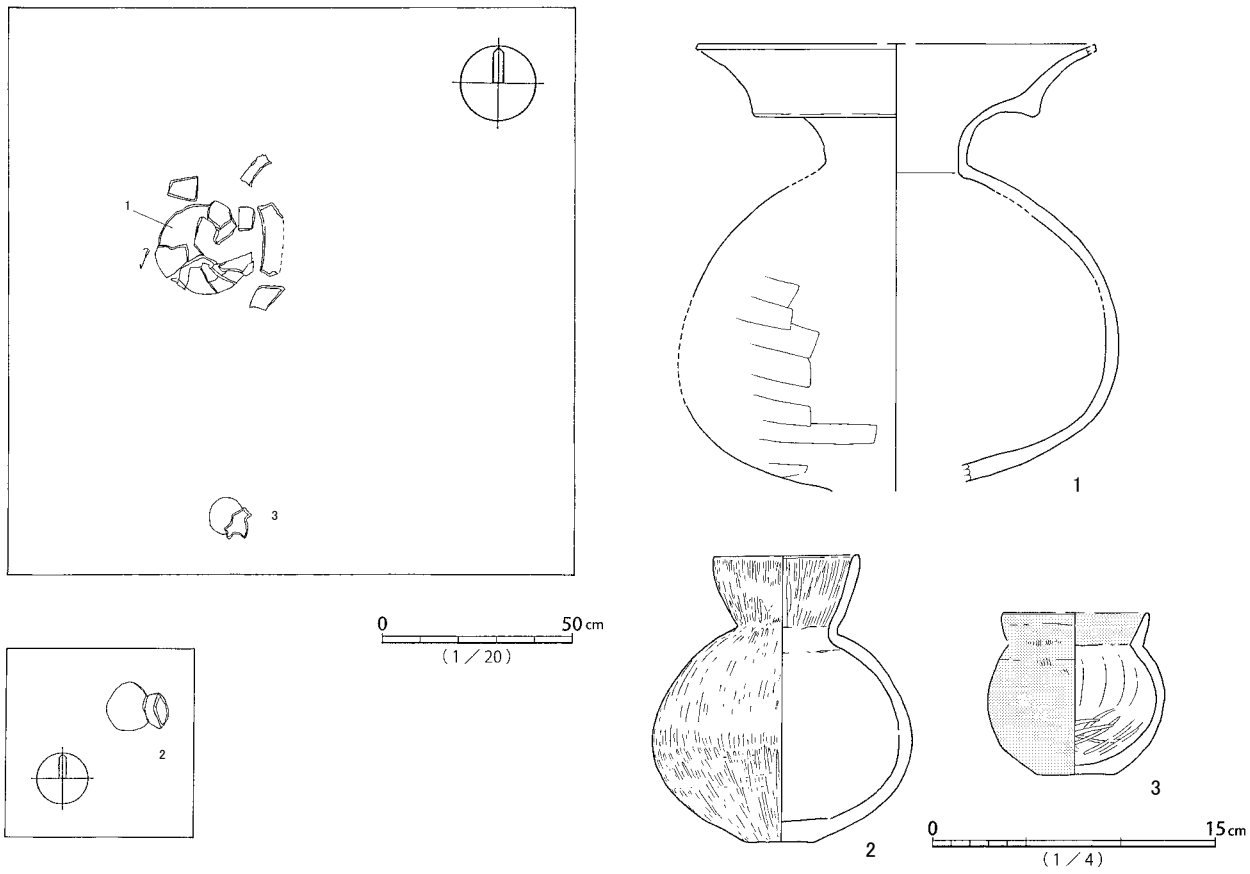


Fig.138　SS97 遺構 (2)・遺物出土詳細・遺物 (1) 実測図

SS102　セ 28 地区・セ 73 地区（Fig.145、PL.44）

S5-33 付近に位置する方形周溝墓である。セ 28 地区、セ 73 地区に跨る南西に下る緩斜面上位に位置する。南東側に SM1167、北東側に SS103 が近接する。方台部内の西寄りに SK213 が位置するが、本遺構よりも新しい。また、遺構中央を南西から北東方向に SD27、SD29 の両溝が横断している。明確な根拠に乏しいが本遺構に対して両溝が新しいものとして捉えている。本遺構は、発掘調査時にはセ 28-062、セ 73-014 と呼称されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、方台部が南北方向に長い長方形を呈するが、南東隅の平面プランが 2 つ検出されているため、遺構形状が 2 通り考えられる。ひとつは周溝が南西隅のみで断絶するもの。もうひとつは、南西隅に加えて、南東隅も断絶するものである。この遺構東南隅の形状の差については、調査時の記録類や所見では、新旧関係に触れていないため、どのように捉えるべきか判断材料に欠ける。ここでの計測値は前者のプランを採用している。規模は方台部が 8.56m×7.52m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で 0.96m・0.46m、計測不能、東溝が 1.42m・0.56m、0.58m、南溝が 0.8.m・0.38m、0.50m、西溝が 0.96m・0.68m、0.10m を測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向から N-49°-W である。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無く、帰属時期は判断し難いが、前段階の古墳とは立地が異なること、周辺に同期の古墳が群集し、主軸方向も重なることから、やや下る可能性も否定できないが、草刈 2 式期の所産と考えられる。

SS103　セ 28 地区（Fig.146～150、PL.5・9・44～46・159・182・210）

S6-05 付近に位置する方墳である。保存区域に近接した、調査区南西部に位置する。本墳東側周辺が、標高 27m の遺跡内で最も高い標高となる。北側の保存区内には、群中最大規模の古墳である諏訪台 10 号墳がそびえ、おそらく、その周溝はかなり近接した位置にある。東側には SS111 や SS104 が主軸をそろえて近接する。南側で SM1014 が重複し、その周溝が本墳の墳丘を掘り込んでいるため、新旧関係は、本遺構に対し SM1014 が新しい。本遺構は、発掘調査時の遺構番号はセ 28-048 で、調査前は国№158（諏訪台 12 号墳）である。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、東西方向にやや長い長方形を呈し、周溝は西側周溝が北西端で断絶する。周溝は、各辺の中央で外側に僅かに膨らんで方台部をめぐる。規模は方台部が 19.36m×15.92m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で 3.6m・2.12m、0.70m、東溝が 2.84m・1.92m、0.80m、南溝が 2.48m・1.68m、0.30m、西溝が 2.56m・1.64m、0.20m を測る。周溝底面は平坦では無く、断面形状はレンズ状を呈する。

墳丘は、旧表土より 1m ほどの盛土で築造されており、周溝底からの見かけ上の高さは 1.5m を測る。墳丘の主軸方位は方台部長軸方向から N-51°-W である。

埋葬施設は墳丘のほぼ中央部盛土中から 2 基検出されている。主体部 A とした竪坑は、平面形状が不整長方形で、西側において矩形を呈するが、東側では端部に向け徐々に幅を狭め、明瞭な隅を持たない。規模は(6.37)m×2.21m、掘り込み面から底面までは 0.54m を測る。主軸方位は長軸方向から N-47°-W である。掘り込みの時期は、墳丘の土層断面から、盛土が概ね完了した後の実施であること

が判る。底面は旧表土直上にあり、ローム層まで達していない。また、ほぼ平坦に造られている。断面形は逆台形を呈する。ほぼ中央に木棺痕がとみられる落ち込みがみられ、形状からは割竹形木棺を想定する。

また、西側には主軸をやや南側にとる掘り込みが検出されており、その規模は 3.13m×1.70m、掘り込みの深さは 0.27m を測る。この掘り込みについては、現場所見では主体部ではなく、墓道的な解釈が示されている。

主体部 B とした墓壙の平面形状は、不整形で、規模は 2.40m×1.78m、確認面からの深さは、0.22m を測る。主軸方位は長軸方向から N-52°-E で、主体部 A とは直交方向を示す。

出土遺物は、1・2・5・6・8 が壺形土器で、1 は東側周溝北寄りの周溝底から 0.1～0.2m 程上に、横位で出土している。3 は甕形土器、4・9 は小型丸底壺形土器、7・10 は開脚高杯、11 は器台、12 はカワラケである。ほかに実測遺物との関係がつかめないが、遺構北西側の陸橋部状に土器とみられる遺物の出土が記録されている。13 は盤龍鏡である。14～44 はガラス小玉で、出土位置は盤龍鏡と同じく、主体部 A 中央の南西側寄り、確認面最上層よりに集中している。垂直方向では何れも木棺痕上には重ならない。

盤龍鏡とガラス小玉の帰属は、主体部 A、B どちらも考えられることだが、主体部 B とした施設について、埋葬施設としての根拠に乏しいことから、ここでは主体部 A に帰属するものとしておきたい。

盤龍鏡　出土位置は主体部 A 中央の南西側寄りの確認面最上層であり、平面的な位置関係では木棺痕上には重ならない。出土状況は鏡面を上方、鏡背面を下方にして南側に傾いて出土している。

遺存状況は、内区と外区の境界で分離しており、内区は紐を含めて 6 つの破片に割れた状態で出土している。しかし欠損部は無く、完形に復元可能であることから、破壊されて遺されたのではなく、埋没後から調査される間に破損したものと思われる。復元可能としたが、破片に僅かな変形が生じており、破面が噛み合わず接合は出来ない。割れ以外の状態は極めて良好で、肉眼観察では金属的な強度を保っているように見える。

各部位の計測値は、径 119.1mm、外区幅は下端で 18.2 mm、上端で 14.7 mm・厚さ 5.9 mm～8.4 mm、内区径 82.9 mm・厚さ 1.1 mm、紐座径 26.1 mm、紐径 22mm・厚 13 mm、重量 376.9g である。

文様構成は、半球形の紐が円座の中央に据えられ、紐穴は不整楕円形で、紐孔の大きさは両側で異なる。

内区は、主文帯として 2 頭の盤龍が対向すると理解されてきたが、実測図を作成する過程で、盤龍と虎と判断した。根拠は獣像の表現によるが、その幾つかを述べると、

① 頭部…（左像）横に長く表現されている。
　　（右像）丸みを帯びる。
② 龍角…（左像）頭の後方に向かって 1 本表現されている。
　　（右像）頭部後方には表現されていない。前方に伸びる表現は不明。
③ 体表…（左像）体部に同心円文様があり、鱗を表現しているとみられる。
　　（右像）体部には円形もしくは線表現が僅かにみられ、文様が少なく左像とは異なる。

他に脚部や尾の表現の違いなどが挙げられるが、主に以上のような特徴から、向かって左像を龍、右像を虎と判断した。③については鋳型の甘さや、使用中の磨滅を考慮しなければならないが、漢鏡の

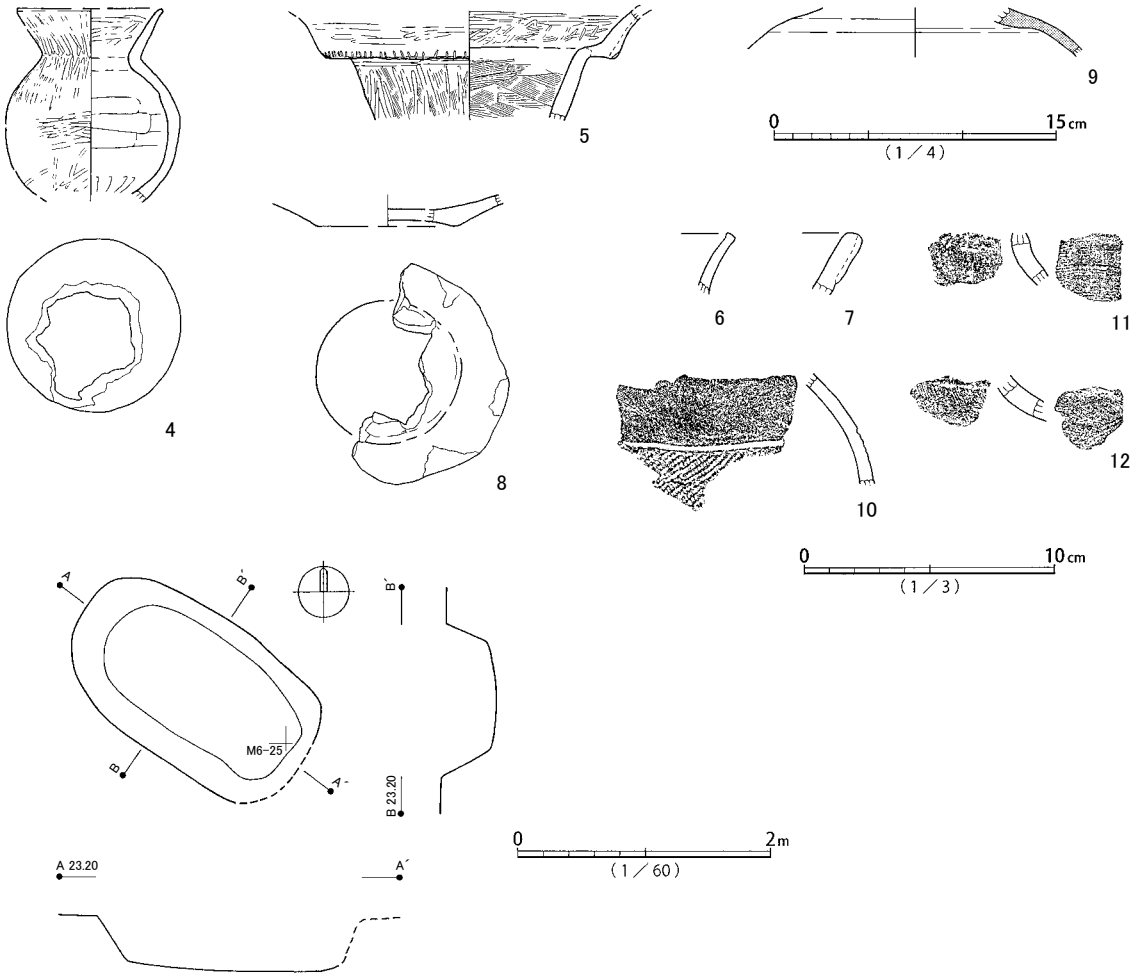


Fig.139　SS97 遺物 (2)、SK267 遺構 (2) 実測図

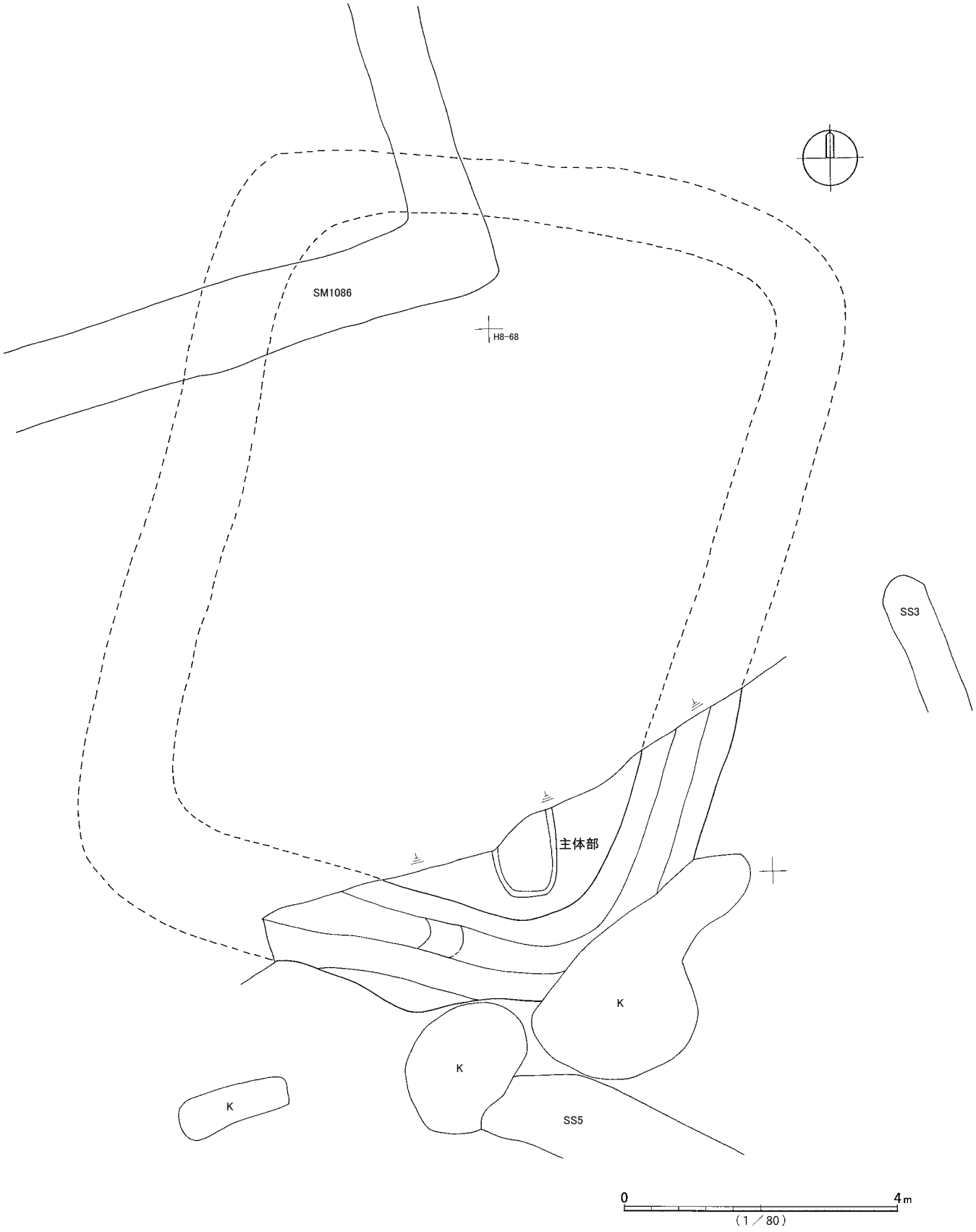
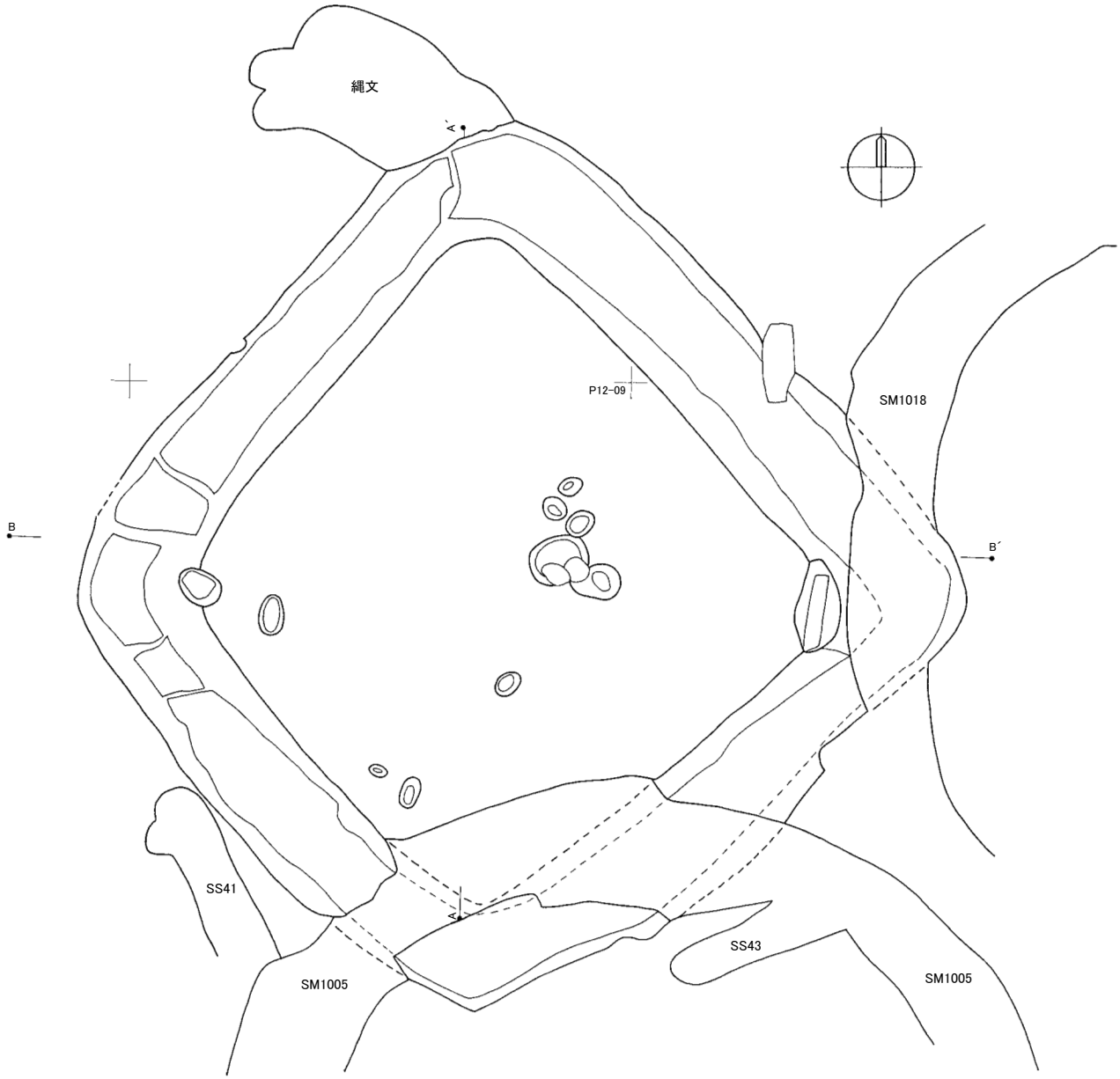


Fig.140　SS98 遺構実測図



SS99AA´
1 — 表土
2 — 黒褐色土・黒色土
3 黒色土 褐色土ブロック若干
4 黒色土
5 黒色土
6 黒褐色土
7 暗褐色土 テフラ
8 褐色土 テフラ
9 暗褐色土 黒色土
10 褐色土 ローム粒
11 黄褐色土

SS99BB´
1 — 表土
2 黒褐色土
3 暗褐色土
4 褐色土
5 黒色土 ブロック状に褐色土若干
6 黒色土
7 黒褐色土 テフラ
8 暗褐色土
9 褐色土
10 暗褐色土 黒色土多量
11 暗褐色土

12 —
13 暗黄褐色土
14 —
15 暗黒褐色土 ローム粒、褐色土粒
16 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック
17 黄褐色土 ローム粒土
18 暗黒褐色土 ローム粒若干
19 暗茶褐色土 褐色土、ローム粒多量・
20 — ロームブロック若干
21 黒褐色土
22 暗黄褐色土

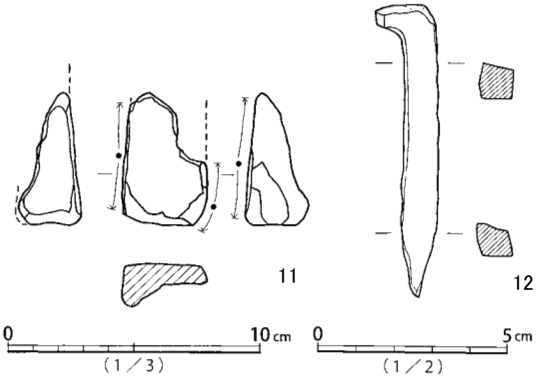


Fig.141　SS99 遺構・遺物 (1) 実測図

中に獣像表現、配置に極めて似た特徴を有する鏡が存在していることもあり、これを根拠としたい。副文帯は主文帯と二重圏文で区画され、櫛歯文がめぐる。外区は鋸歯文がめぐりその外側凹部に 77 個の珠文が配されている。縁の断面は平縁の範疇とみられるが、端部において三角形に突出する様相は斜縁の要素を含むように見える。范傷は、遺物及び三次元画像の観察においては認められない。鏡面は僅かに凸面を呈する。同范鏡は管見では確認していない。製作地については、積極的な究明は行われていない。これまでの理解では舶載製と意識されてきた雰囲気があるが、これはおそらく、出土した古墳の時期が前期であることと、盤龍鏡という鏡式、加えて資料の状態が極めて良好なことが主要な判断要因であったと考えられる。今回の報告においてもこれについては断じ得ない。付着物としては、櫛歯文や鋸歯文の隙間には朱が微量認められる。また、調査担当者からは、布の痕跡があったとのコメントを得たが、現状では確認できない。ほかに資料の特徴としては、状態の良さに比べ図像の鮮明度は低いと言える。特に内区においてその傾向が強い。范の問題か、製造後の磨滅であるのか判断は難しい。色調は銀～黒色で、緑青が一部に認められる、自然科学的な分析を経ていないが、色調からは錫の含有量が多いように見受けられる。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から草刈２式期の所産と考えられる。

SS104　セ 28 地区（Fig.151～153、PL.46・159～160・182・195）

T8-00 付近に位置する方墳である。標高 27m を示す、遺跡内で最も高い範囲に位置する古墳の一つで、この中では最も南に占地している。周囲には築造時期が古墳時代前期とみられる古墳が主軸方向を合わせて近接している。北側には SS111、SS112 が、南側には SS105、SS106、東側には SS108、西側には SS103 が位置している。墳丘は、のちに造られた SM1022・SM1014・SM1032 によって、東側、西側、北側で改変されている。

本遺構の遺構番号は、発掘調査時にはセ 28-047 と呼称され、調査前には国№159（諏訪台 13 号墳）とされている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、方台部が東西方向にやや長い方形を呈し、周溝は西側中央で断絶し、陸橋部を造り出している。周溝幅は、南北では均等だが、東側で中央部が広く、端部がやや狭まる形状を呈する。墳丘規模は（15.24）m×14.08m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で 2.60m・1.72m、0.65m、東溝が 3.56m・2.12m、0.90m、南溝が上端 2.88m、深さ 0.40m、西溝が深さ 0.50m を測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は、周溝北側で、墳丘側側面が亀腹状を呈し、外側がレンズ状に窪んでいる。墳丘は盛土で構築されており、高さは、旧表土から 1m、周溝底からは 1.92m を測る。主軸方位は方台部長軸方向から N-47°-W である。

主体部は、南側で検出されている。平面形は不整長楕円形で、規模は 3.72m×1.43m を測る。主軸方位は長軸方向から N-20°-W である。

しかし、この主体部位置及び規模、形状については、その精度に疑問が残る。主体部の記録類から、調査時の状況を見てみると、墳丘の掘削時に鉄剣が出土し、その周囲を精査した上で、プランを図化していることが伺える。このことから、盛土除去の段階では、主体部が捉えにくい状況であったことが判る。また、一般的な見方をすれば、特殊な状況を除き、副葬品の位置や向きは、木棺のそれとは関連性が強いといえるが、本墳主体部では、出土した鉄剣の位置と向きからでは、棺位置を想定し難い。墳丘の流出などによって、主体部内の遺物位置が動いている可能性を考慮しなければならないが、

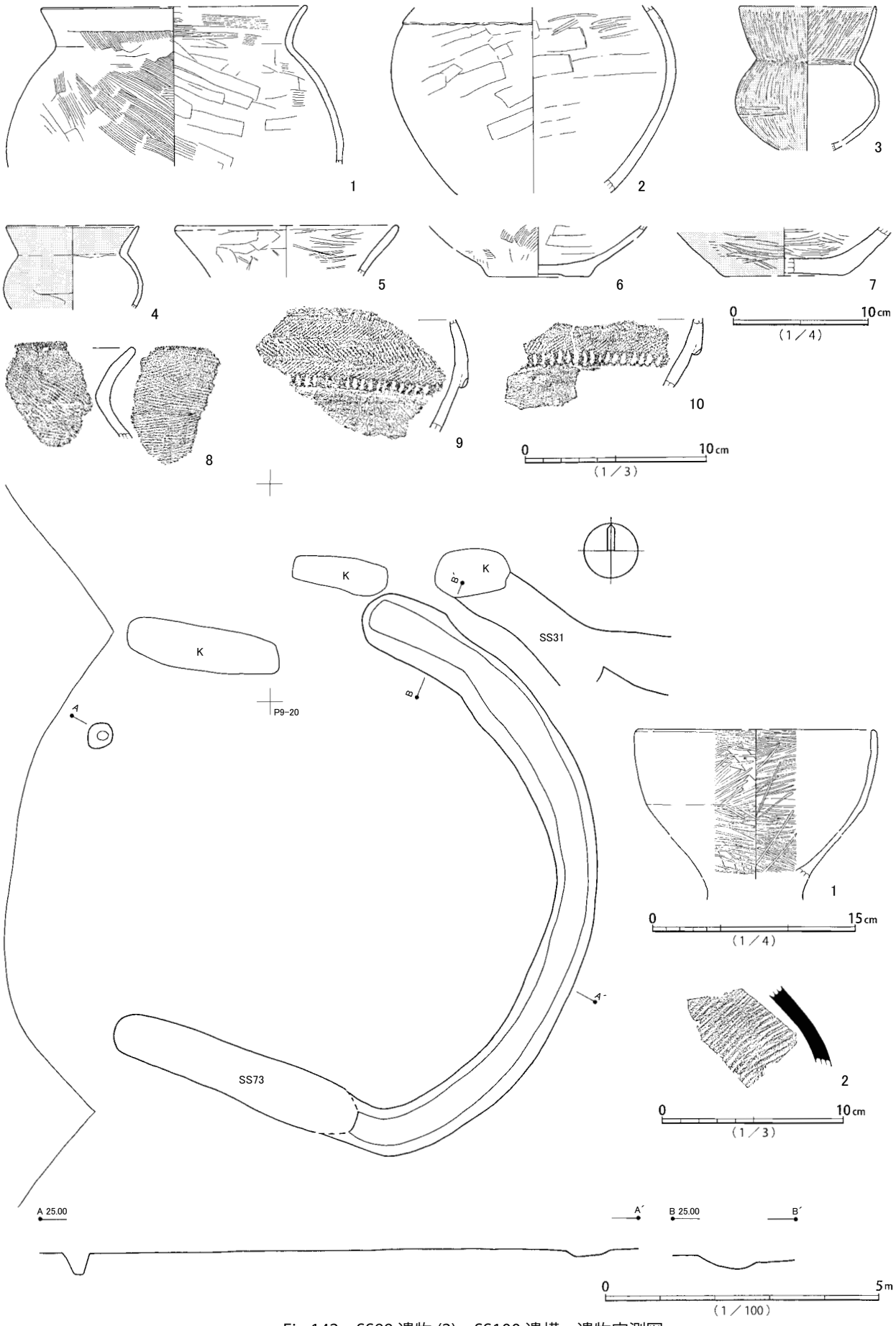


Fig.142　SS99 遺物 (2)、SS100 遺構・遺物実測図

幾つかに破損した剣の破片位置が、直線状に並んでいることを加味すれば、鉄剣は元位置を大きくは動いていないと考えたほうが自然である。よって、この主体部プランは、主軸方向で墳丘との関係性が弱いこと、また、鉄剣の出土状況が、棺の想定位置とは不安定な位置関係にあることなどから、その位置や主軸方向には再検討の余地があると考えられる。

着目出来るのは、墳丘の長軸方向と、鉄剣軸方向が近似するという事実である。これを重視すれば、主体部の主軸方向もこれに近く復元可能である。鉄剣の副葬位置が被葬者のどの位置に想定するかによって、主体部の位置は大きく異なるが、より墳丘中心部に近い位置を想定可能となる。

遺物は、南側周溝の東寄りに最も集中し、東側周溝中央付近、北側周溝東寄りでも出土している。

1 は二重口縁の壺形土器で、底部に焼成後穿孔が認められる。2・3 は直口壺形土器で、2 は底部に焼成後穿孔が認められる。4・5 は小型椀形土器、6・7 は高杯形土器で、8・9 は器台形土器、10・11 は甕形土器、12 は台付甕形土器、13 は折り返し口縁の壺形土器、14・15 は壺形土器底部、16・17 はカワラケである。18 は壺形土器で底部に焼成後の打ち欠いたような穿孔が認められる。また、胴部中位に焼成後とみられる線刻が認められるが、図像としては理解出来ない。19 は主体部出土の鉄剣である。切先を欠損し、依存度は 2/3 程度である。茎尻はほぼ直角で、茎は同じ幅で伸び、関付近で徐々に幅を広げて関に至る。茎の関に近い位置に中心軸に沿って二箇所の目釘孔が縦列する。関は不明瞭だが、直角に近く復元している。剣身は鎬が弱い。

帰属時期は、出土遺物から草刈 2 式期の所産と考えられる。

SS105　セ 28 地区（Fig.154～155、PL.47・160～161・195・212）

T6-78 付近に位置する方墳である。調査区南側の南に下る斜面の上位に位置する。北側に SS104 が近接し、東側に SS106 が位置する。西側で SM1014 と重複し、新旧関係は本遺構が古い。

本遺構は、発掘調査時にはセ 28-139 と呼称されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、墳丘が南北方向に長い長方形を呈し、周溝は北西隅で明確に断絶するが、南西は記録類が無く不明である。周溝幅は南東隅を除き概ね均等に方台部をめぐる。規模は墳丘が 11.20m×9.84m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で 2.14m・0.92m、1.00m、東溝が 1.60m・0.80m、0.40m、南溝が 1.88m・0.72m、0.80m、西溝が 2.00m・0.80m を測る。周溝底面は平坦な部分は殆ど無く、断面形状は各辺で安定していない。主軸方位は方台部長軸方向から N-54°-W である。墳丘範囲では盛土を検出していない。埋葬施設は墳丘盛土内に位置する。主体部の平面形状は、北側でやや狭くなる長方形で、規模は 3.66m×0.95m、深さは、0.16m を測る。主軸方位は長軸方向から N-59°-W である。周溝内では土壙を検出していない。

遺物は、北側周溝中央に集中し、東側周溝、南側周溝の南東隅寄りの覆土中層から土器が出土し、主体部底面からは鉄器、玉類が出土している。

1 は折り返し口縁の壺形土器で、底部を焼成後に大きく穿孔している。2 は直口壺形土器、3・4・5 は小型椀形土器、6・7・8 は高杯形土器で、脚部は 6 が中空脚、7 が中実だが、僅かに中空部分を作り出している。9 は器台形土器で、いわゆる X 字状器台である。10 は小型の壺形土器とみられる。11～13 は滑石製臼玉、14・15 は滑石製の管玉である。16～19 は鉄製品で、16 は刀子、17 は鉄斧、18・19 はヤリガンナとみられる。刀子、鉄斧はやや華奢な作りで、刃部の作りが甘いことから実用ではな

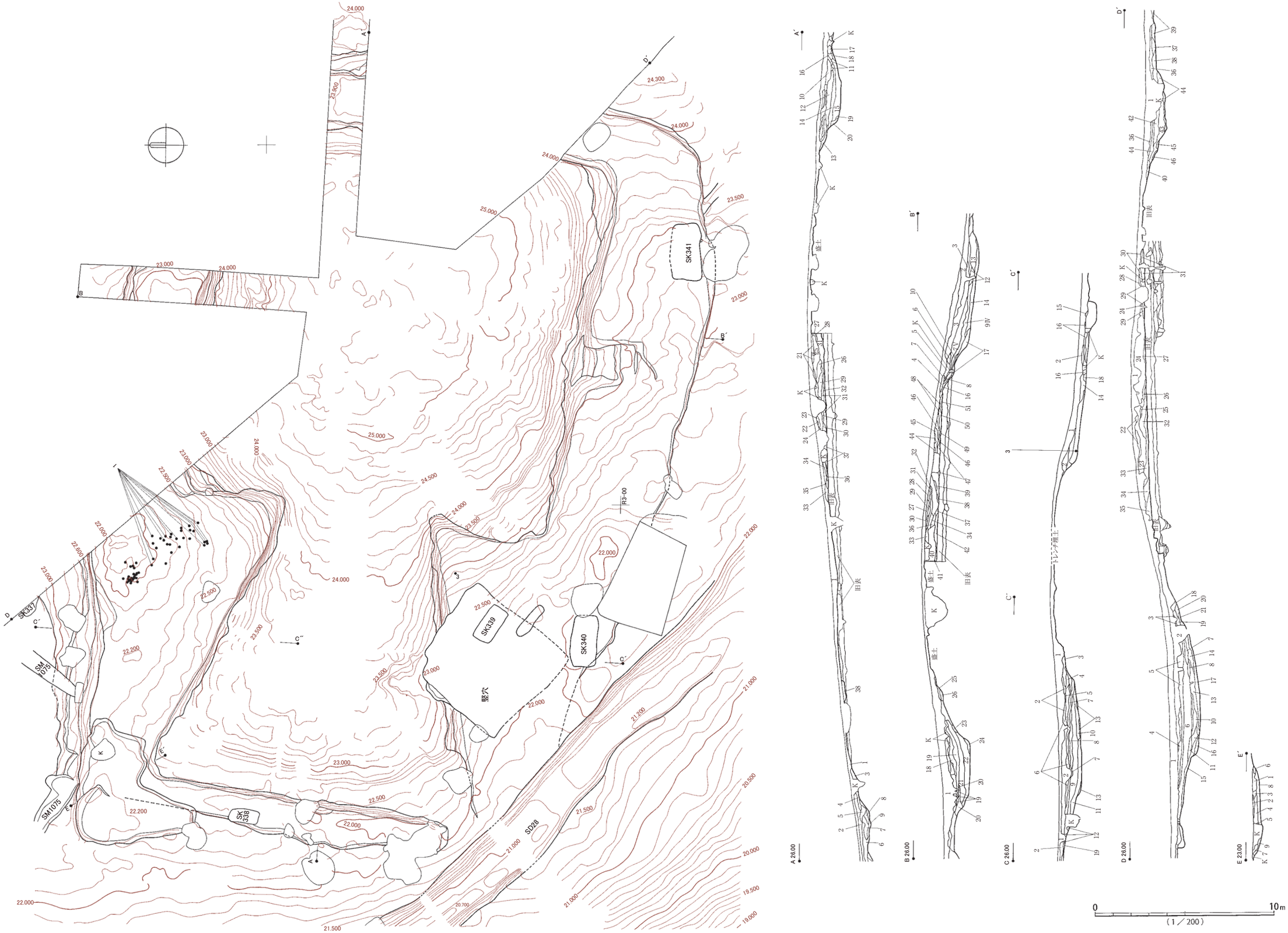


Fig.143　SS101 遺構実測図

SS101AA´
1 灰褐色土 黒色が強い ローム粒
2 灰褐色土 黄褐色が強い
3 灰褐色土・黄灰褐色土の混合
4 灰褐色土 ローム粒、黒褐色土粒・暗褐色土
5 黄灰褐色土 ロームブロック・ローム粒、暗灰褐色土・灰褐色土
6 灰褐色土 2 層よりやや暗い ローム粒、暗褐色土 軟質
7 黒褐色土 褐色土・灰褐色が強い 暗褐色土
8 暗褐色土 黄褐色土・黒褐色土
9 黄褐色土・暗褐色土の混合 暗灰褐色土
10 黄灰褐色土 灰褐色土
11 暗灰褐色土・灰褐色土の混合
12 暗灰褐色土・黒褐色土の混合 斑点状黄灰褐色土 硬質
13 黒褐色土 褐色が強い 灰褐色土・暗褐色土 硬質
14 黒褐色土 褐色が強い 斑点状黄灰褐色土・暗褐色土、ローム粒
15 黒褐色土 褐色が強い 斑点状黄灰褐色土・暗褐色土
16 暗灰褐色土 灰褐色土
17 暗灰褐色土 灰褐色土
18 暗褐色土 黄褐色土・暗灰褐色土
19 暗褐色土・黒褐色土の混合
20 暗褐色土 黒褐色土・黄褐色土
21 暗黄褐色土 暗褐色が強い、25 層より暗い 黒褐色土粒、ローム粒
22 ― 黒褐色土 23 層より多量
23 ― 黄褐色土 (ブロック状) 24 層より多量で大きい
24 暗黄褐色土 黒褐色土粒・黄褐色土粒
25 暗黄褐色土 黒褐色土粒・黄褐色土粒 31 層より細かく少量
26 ― 黒褐色土粒・暗黄褐色土
27 黄褐色土 黒褐色土粒少量・暗黄褐色土
28 暗黄褐色土 黄褐色土小粒・黒褐色土粒
29 暗黄褐色土・黄褐色土の混合 黒褐色土
30 黄褐色土 黒褐色土粒・暗黄褐色土
31 黄褐色土・暗黄褐色土の混合 黒褐色土粒
32 黒褐色土・暗褐色土の混合 黄褐色土粒
33 黄褐色土 黒褐色土粒少量・暗黄褐色土
34 ― 黒褐色土・黄褐色土主体 硬質
35 黄褐色土・暗黄褐色土の混合 黒褐色土粒
36 ― 黄褐色土・黒褐色土・暗黄褐色土 硬質
37 黄褐色土・暗黄褐色土の混合 黒褐色土粒

SS101CC´
1 灰褐色土 黒褐色土粒、ローム粒 軟質 (耕作土)
2 灰褐色土 1 層よりやや暗い　ローム粒、黒灰褐色土
3 黄灰褐色土 灰褐色土
4 暗灰褐色土 6 層より暗い 軟質 (道埋土 ?)
5 黒灰色土 宝永火山灰
6 暗灰褐色土 黄灰褐色土・灰褐色土
7 黄灰褐色土・暗灰褐色土の混合 灰褐色土
8 暗灰褐色土 斑点状黄灰褐色土 11 層と基本的には同じ
9 黒褐色土 暗灰褐色が強い　斑点状黄灰褐色土 平安時代か
10 黒褐色土 暗灰褐色が強い 斑点状黄灰褐色土少量
11 黒褐色土 褐色が強い 古墳時代か
12 黒褐色土 褐色が強い ローム粒、暗褐色土
13 暗褐色土・黄褐色土の混合 黒褐色土少量
14 灰褐色土 褐色が強い ローム粒、暗褐色土、宝永の火山灰 軟質 カクランか
15 ―
16 暗灰褐色土 灰褐色が強い ローム粒、斑点状黄灰褐色土 上面硬化
17 暗灰褐色土 灰褐色が強い 暗褐色土 やや軟質 周溝埋土
18 暗灰褐色土 ローム粒、暗褐色土 軟質 周溝埋土 ?
19 灰褐色土 黄褐色土・暗褐色土・黒褐色土

SS101EE´
1 黒褐色土 褐色が強い
2 灰褐色土 黄褐色が強い 黒褐色土
3 黒褐色土
4 黒褐色土 やや灰褐色が強い
5 黒褐色土 褐色が強い
6 黒褐色土 黄褐色土
7 黒褐色土 ローム粒 硬質
8 暗褐色土 黄褐色土・黒褐色土
9 黒褐色土・暗褐色土の混合 ローム粒 硬質

SS101BB´
1 灰褐色土
2 黄灰褐色土 ローム粒多量 軟質
3 黄灰褐色土 2 層より黄褐色が強い ローム粒
4 灰褐色土 黄灰に近い ローム粒、暗灰褐色土
5 黄灰褐色土 褐色が強い ローム粒
6 黄灰褐色土・灰褐色土の混合 ローム粒、暗灰褐色土
7 黒褐色土 褐色が強い、9 層より灰褐色が強い ローム粒、黄灰褐色土粒状 硬質
8 黒褐色土 やや灰褐色が強い
9 黒褐色土 やや褐色が強い ローム粒、暗褐色土・斑点状黄褐色土 7 層より少量
10 ― 暗褐色土主体 軟質
11 暗灰褐色土 黒色が強い 黄灰褐色土
12 暗灰褐色土 斑点状黄灰褐色土
13 黒褐色土
14 暗黄褐色土 黄褐色土
15 黒褐色土
16 暗褐色土 17 層より暗い 黄褐色土と黒褐色土がブロック状に混じる 硬質
17 暗褐色土 黄褐色土と黒褐色土がブロック状に混じる 硬質
18 灰褐色土 黄灰褐色土 軟質
19 黒褐色土 ローム粒、斑点状黄灰褐色土 硬質
20 暗褐色土 ローム粒、斑点状黄灰褐色土・黒褐色土
21 暗褐色土・黒褐色土の混合 黒褐色が強い ローム粒
22 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土
23 暗褐色土・暗灰褐色土の混合 ローム粒、黄褐色土 硬質
24 黄褐色土 ローム粒、暗褐色土・黒褐色土少量
25 暗褐色土・灰褐色土の混合 ローム粒、黒褐色土 軟質
26 暗褐色土・灰褐色土の混合 黒褐色土主体 軟質
27 黄褐色土 黒褐色土粒少量・暗褐色土少量
28 暗黄褐色土 ローム粒、黒褐色土粒
29 黒褐色土・暗褐色土の混合 黄褐色土
30 暗黄褐色土 黄褐色が強い ローム粒、黒褐色土小粒
31 暗黄褐色土 ローム粒、黒褐色土粒
32 暗黄褐色土 ローム粒多量、黒褐色土粒
33 ― ローム粒 40 層より小粒少量
34 暗黄褐色土 ロームブロック、黒褐色土粒少量
35 ― 黒褐色土・暗褐色土、ロームブロック
36 暗黄褐色土 ローム粒、黒褐色土粒
37 ― ロームブロック主体 36 層に似る
38 暗黄褐色土 ローム粒、黒褐色土粒 粒子細かくサラサラ
39 暗黄褐色土 ローム粒、黒褐色土粒少量 粒子細かくサラサラ
40 暗黄褐色土 黒褐色土粒少量、ローム粒・ロームブロック多量
41 暗黄褐色土 黒褐色土粒、ローム粒・ロームブロック
42 ― 黒褐色土多量・黄褐色土小粒、ロームブロック
43 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック、黄褐色土・黒褐色土粒
44 暗黄褐色土 ローム粒、黒褐色土少量
45 暗黄褐色土 黒褐色土大小粒・黄褐色土大小粒
46 黄褐色土 黒褐色土粒・暗褐色土
47 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土粒
48 黄灰褐色土 黒褐色土・暗褐色土
49 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土
50 暗黄褐色土 黒褐色土粒少量・黄褐色土大小粒多量
51 暗褐色土 黒色が強い 黄褐色土・黒褐色土少量

SS101DD´
1 灰褐色土
2 灰褐色土 ローム粒ブロック、暗灰褐色土・黒褐色土 1 層より軟質 カクラン層
3 灰褐色土
4 暗灰褐色土 ローム粒 硬質
5 黄灰褐色土・暗灰褐色土の混合 硬質
6 暗灰褐色土 黒色が強い ローム粒、斑点状黄灰褐色土 平安～中世
7 黒灰褐色土 黄灰褐色土
8 黄灰褐色土・暗灰褐色土の混合
9 暗灰褐色土・黒褐色土の混合
10 黒褐色土 ローム粒、暗灰褐色土
11 暗黄灰褐色土
12 暗灰褐色土 ローム粒
13 黒褐色土 黄褐色土粒・灰褐色土少量
14 暗黄褐色土・黒褐色土の混合
15 暗灰褐色土 ローム粒、斑点状黄灰褐色土・暗褐色土
16 暗灰褐色土・暗褐色土の混合 ローム粒、黄褐色土・黒褐色土
17 黄褐色土 黒褐色土少量・褐色土
18 黄灰褐色土 ローム粒 一部硬化
19 灰褐色土 黄灰褐色土
20 灰褐色土 やや暗い 黄灰褐色土
2 1 暗灰褐色土 黄灰褐色土
22 黄褐色土 黒褐色土少量・暗黄褐色土 23 層より黒褐色土少量・黄褐色土多量
23 黄褐色土・暗黄褐色土の混合 黒褐色土粒・暗黄褐色土
24 暗黄褐色土 黄褐色土粒多量・黒褐色土粒少量、焼土粒
25 黄褐色土 黒褐色土粒・暗黄褐色土
26 黄褐色土 黒褐色土粒極少量・暗黄褐色土
27 黒褐色土・暗黄褐色土の混合 黄褐色土粒
28 暗褐色土 黄褐色土粒・黒褐色土粒・暗黄褐色土
29 黄褐色土・暗黄褐色土の混合 黒褐色土粒
30 黒褐色土・暗黄褐色土の混合 黄褐色土粒
31 暗黄褐色土 黒褐色土・黄褐色土 29 層より暗黄褐色土多量
32 暗黄褐色土・黄褐色土の混合 黒褐色土粒 23 層より黄褐色土やや多量
33 暗黄褐色土 黒褐色土粒・黄褐色土粒
34 暗黄褐色土 35 層より黒色が強い 黄褐色土粒・黒褐色土粒　35 層より黒褐色土・暗褐色土多量
35 暗黄褐色土 ローム粒、黒褐色土粒
36 暗黄褐色土 灰褐色が強い 硬質
37 灰褐色土・暗灰褐色土の混合 ローム粒少量 道
38 暗灰褐色土 黄褐色土・暗褐色土
39 暗灰褐色土 ローム粒、暗褐色土
40 灰褐色土 黒褐色土・暗灰褐色土
41 暗褐色土 灰褐色が強い 黒黄褐色土 硬質 (粒状)
42 黒褐色土 暗灰褐色が強い ローム粒少量、斑点状黄灰褐色土 平安時代の埋土
43 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土 古墳時代の埋土か
44 黄褐色土・暗褐色土の混合 暗褐色土
45 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土粒・黄褐色土
46 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土粒・黄褐色土・11 層より黒色が強い暗褐色土少量

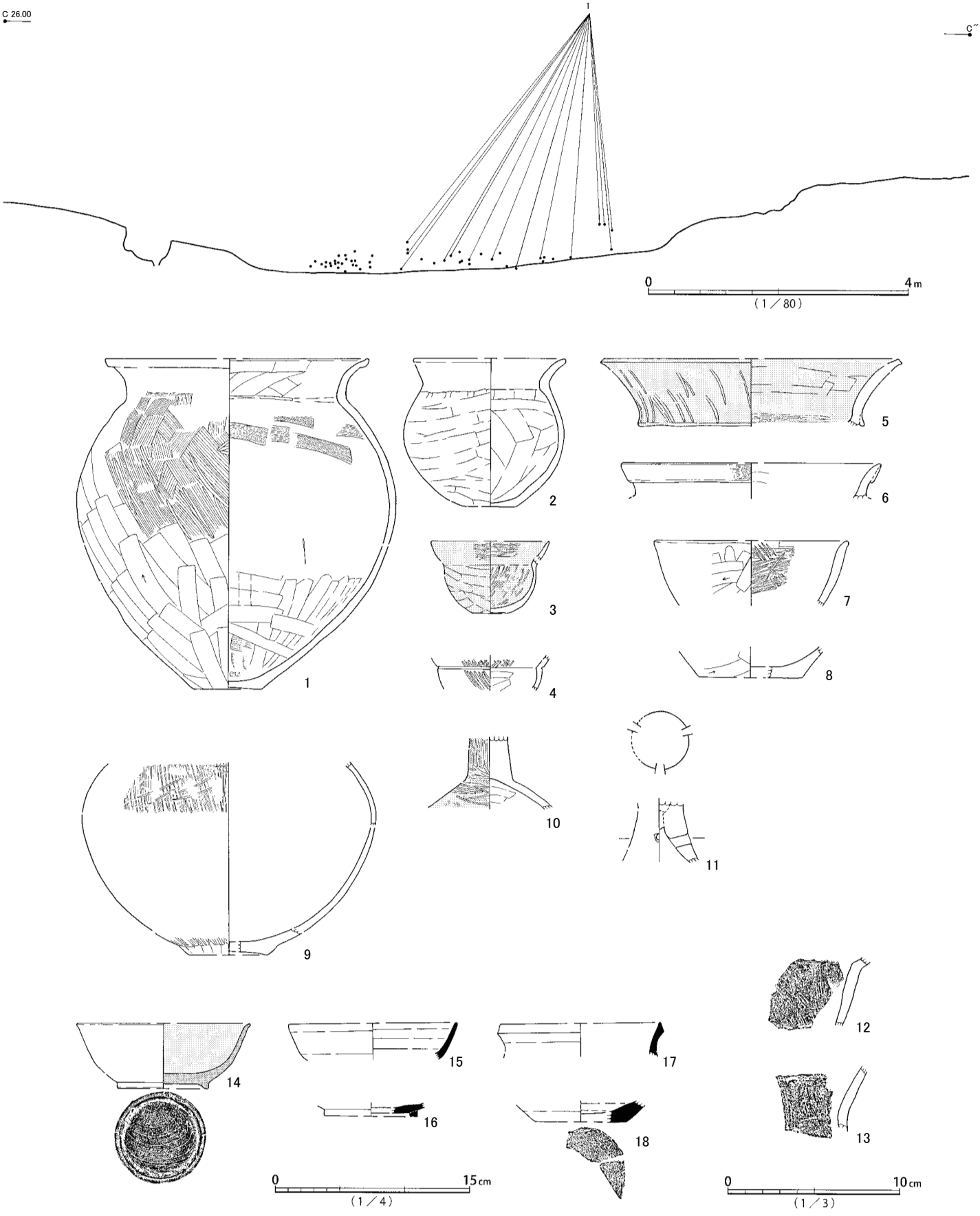


Fig.144　SS101 遺物出土詳細・遺物実測図

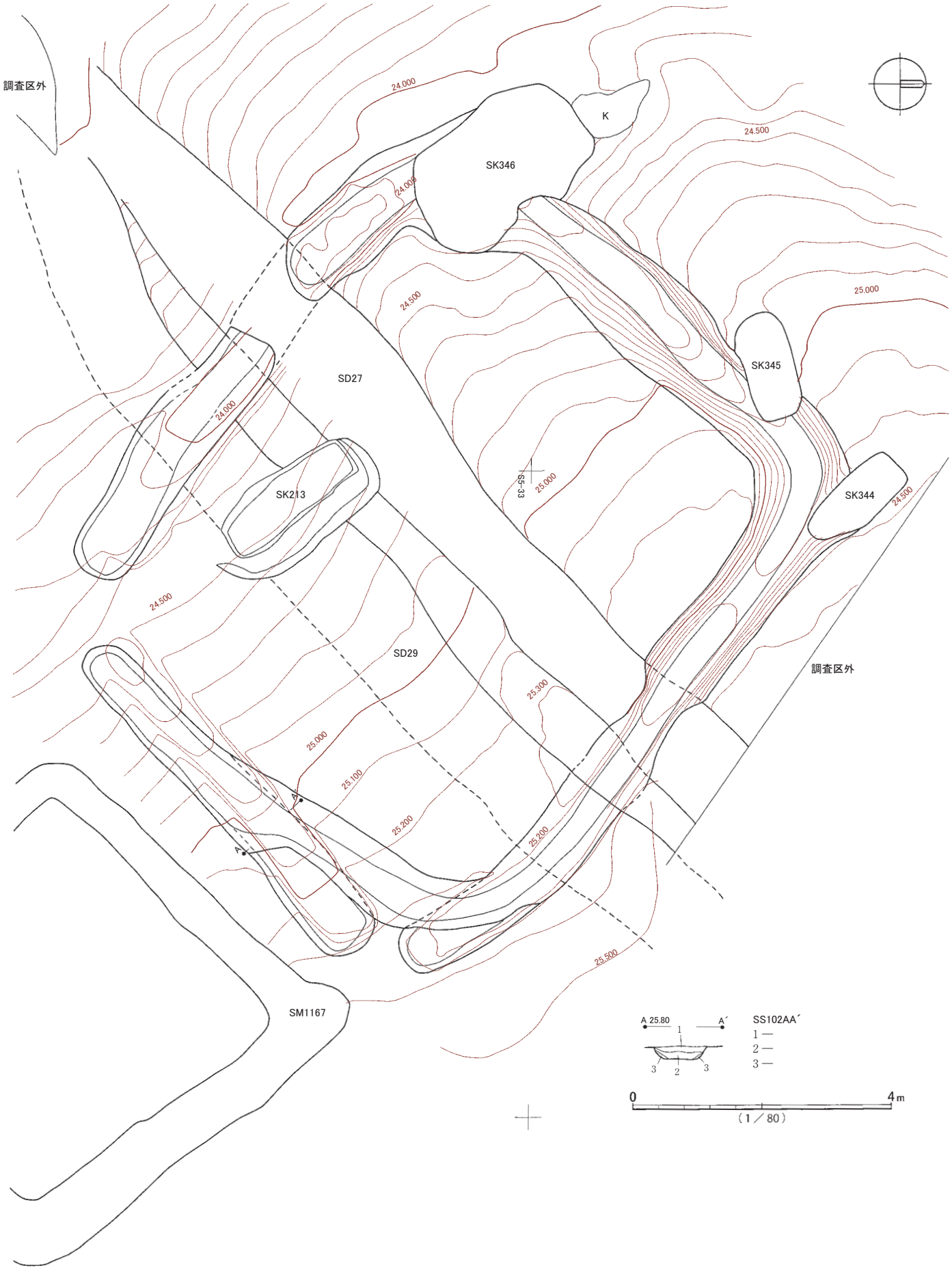


Fig.145　SS102 遺構実測図

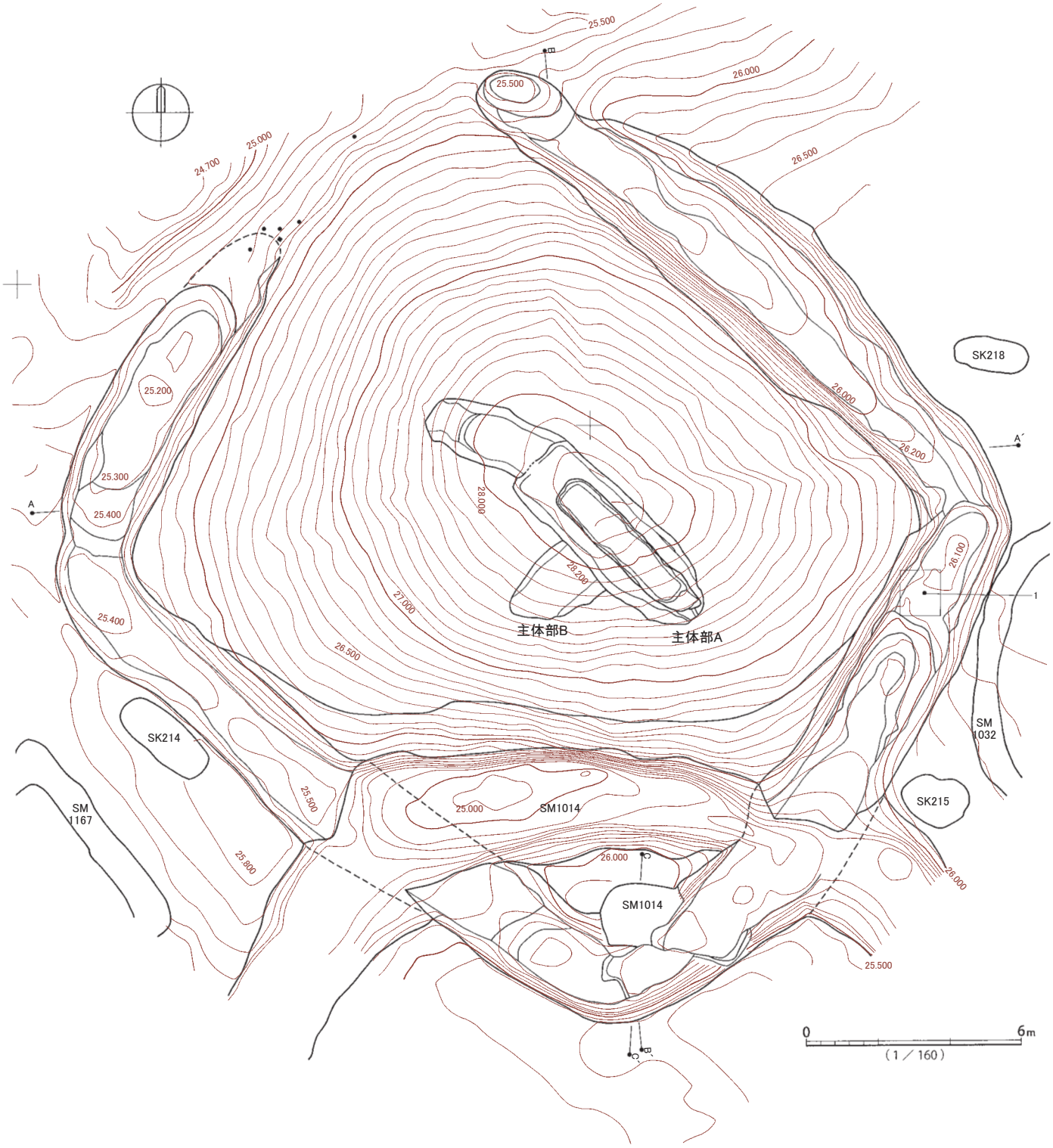
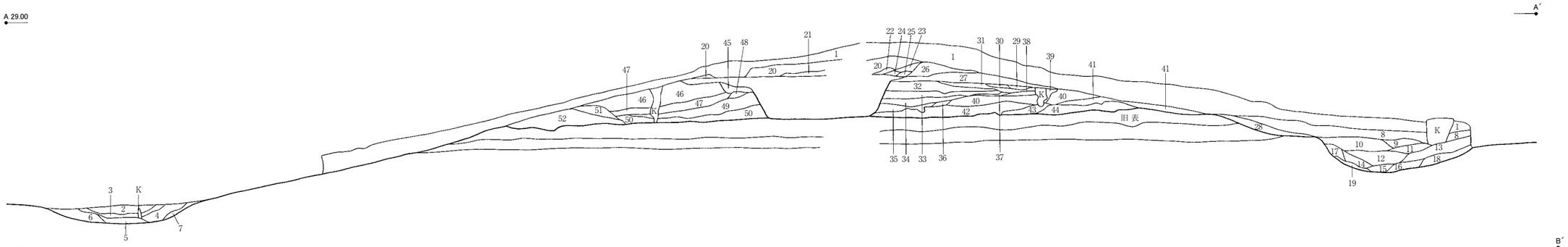


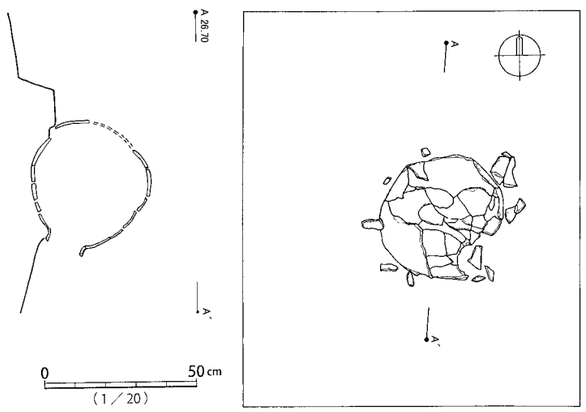
Fig.146　SS103 遺構 (1) 実測図



SS103AA´
1 ― BB´ の 1 と同層　表土
2 暗褐色土 斑点状淡褐色土
3 褐色土 ローム粒
4 暗褐色土 ローム粒多量
5 淡褐色土 やや粘質
6 褐色土
7 褐色土
8 暗茶褐色土
9 暗茶褐色土 茶褐色土
10 暗茶褐色土 茶褐色土、ローム粒やや多量
11 暗茶褐色土 茶褐色土、ローム
12 暗茶褐色土 暗い ローム粒多量
13 暗茶褐色土 ローム粒若干
14 暗茶褐色土
15 暗茶褐色土 ローム粒若干
16 暗茶褐色土 ローム粒多量
17 茶褐色土
18 ―
19 ― ソフトローム
20 ― ロームブロック BB´ の 15 と同層
21 黒色土
22 ― ローム
23 ― ローム
24 黒色土
25 ― ローム
26 ― 暗褐色土、ロームブロック
27 黒褐色土
28 暗茶褐色土・黒色土の混合 ローム粒多量
29 ― ロームブロック
30 ― 褐色土、ロームブロック
31 暗褐色土 ローム小ブロック
32 ― 褐色土、ローム中ブロック
33 黒褐色土 ロームブロック
34 ―
35 ― 褐色土、ロームブロック
36 ― ロームブロック
37 ―
38 ― ロームブロック
39 ― ローム
40 褐色土 ローム大ブロック
41 暗褐色土
42 暗褐色土 ローム小ブロック若干
43 ― 褐色土、ロームブロック
44 黒褐色土
45 ― ロームブロック
46 暗褐色土 ロームブロック
47 暗褐色土 褐色土、ローム小ブロック
48 黒色土
49 黒褐色土 ロームブロック少量
50 ― 褐色土、ロームブロック多量
51 褐色土 ロームブロック若干
52 褐色土 ローム小ブロック

SS103BB´
1 ― AA´ の 1 と同層 表土
2 褐色土 ローム粒若干
3 黒色土 ソフトローム粒
4 暗褐色土 ソフトロームブロック若干
5 ―
6 黒色土 褐色土
7 暗褐色土 黒色土・黒褐色土
8 明褐色土・黒色土の混合
9 明褐色土
10 褐色土 ロームブロック
11 暗褐色土
12 暗褐色土 ロームブロック
13 ― ロームブロック
14 ― 褐色土、ロームブロック
15 ― ロームブロック AA´ の 20 と同層
16 ― 暗褐色土、ロームブロック
17 ― ローム大ブロック
18 ― 褐色土、ロームブロック多量
19 褐色土 ローム大ブロック
20 暗褐色土 ローム極少量
21 褐色土
22 ― 褐色土、ローム中大ブロック多量
23 褐色土 ロームブロック少量
24 暗褐色土 ロームブロック少量
25 黒褐色土 硬質
26 褐色土
27 暗褐色土
28 ― ローム若干
29 褐色土 硬質
30 暗褐色土 硬質
31 暗褐色土 硬質
32 ― 褐色土、ローム中ブロック
33 暗褐色土 ローム中ブロック若干
34 ― 褐色土、ローム中ブロック多量

SS103CC´
1 暗黒褐色土 黒色土多量・暗褐色土ブロック若干
2 黒色土 暗褐色土ブロック若干
3 暗黒褐色土 褐色土ブロック若干
4 暗黒褐色土 褐色土粒土多量、ローム粒
5 暗褐色土 ローム粒多量



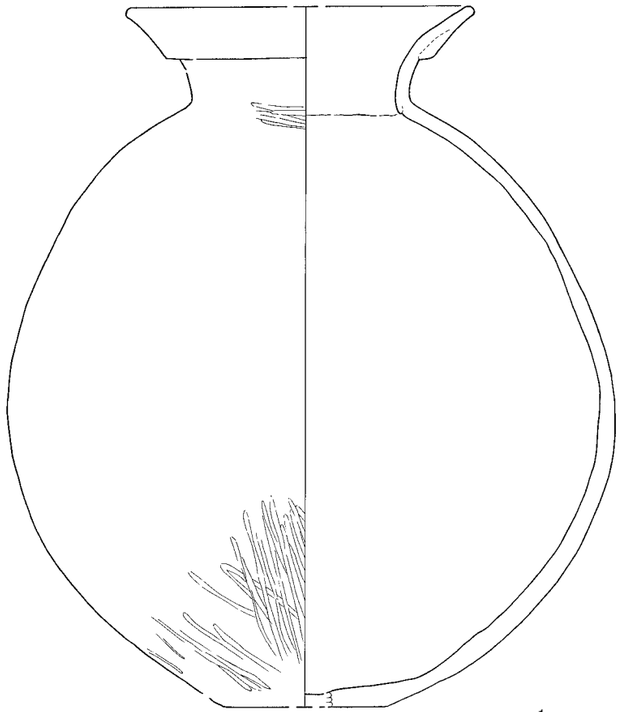


Fig.147　SS103 遺構 (2)・遺物出土詳細 (1)・遺物 (1) 実測図

いとみられる。

帰属時期は、土器の形式と副葬鉄器の組成から草刈３式期の所産と考えられる。

SS106　セ 28 地区（Fig.156～158、PL.4･47～48･161）

T8-80 付近に位置する方墳である。調査区南端の南に下る斜面の上位に位置し、遺構の南側は調査区外に伸びるとみられる。北側に SS104、SS108、西側に SS105、東側に SS107 が主軸方向を同じくして近接する。遺構の重複は無い。本遺構は、発掘調査時にはセ 28-113 と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、墳丘は南側辺が未検出で不明だが、北側では整った方形を呈する。周溝は北側と東西辺の北半分ほどを検出している。周溝は墳丘と同じく整った方形の外周を持つが、西側北端部で大きく外側に膨らむ。そのため、周溝幅は北西隅を除きほぼ均等に墳丘をめぐる。規模は墳丘が東西軸で 13.20m、周溝の上･下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で 2.96m･1.60m、0.90m、東溝が 1.72m･1.44m、0.10m、西溝が上端 3.60m、深さ 0.10m を測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は北側で逆台形を呈するが、西側では隅の曖昧な形状になる。

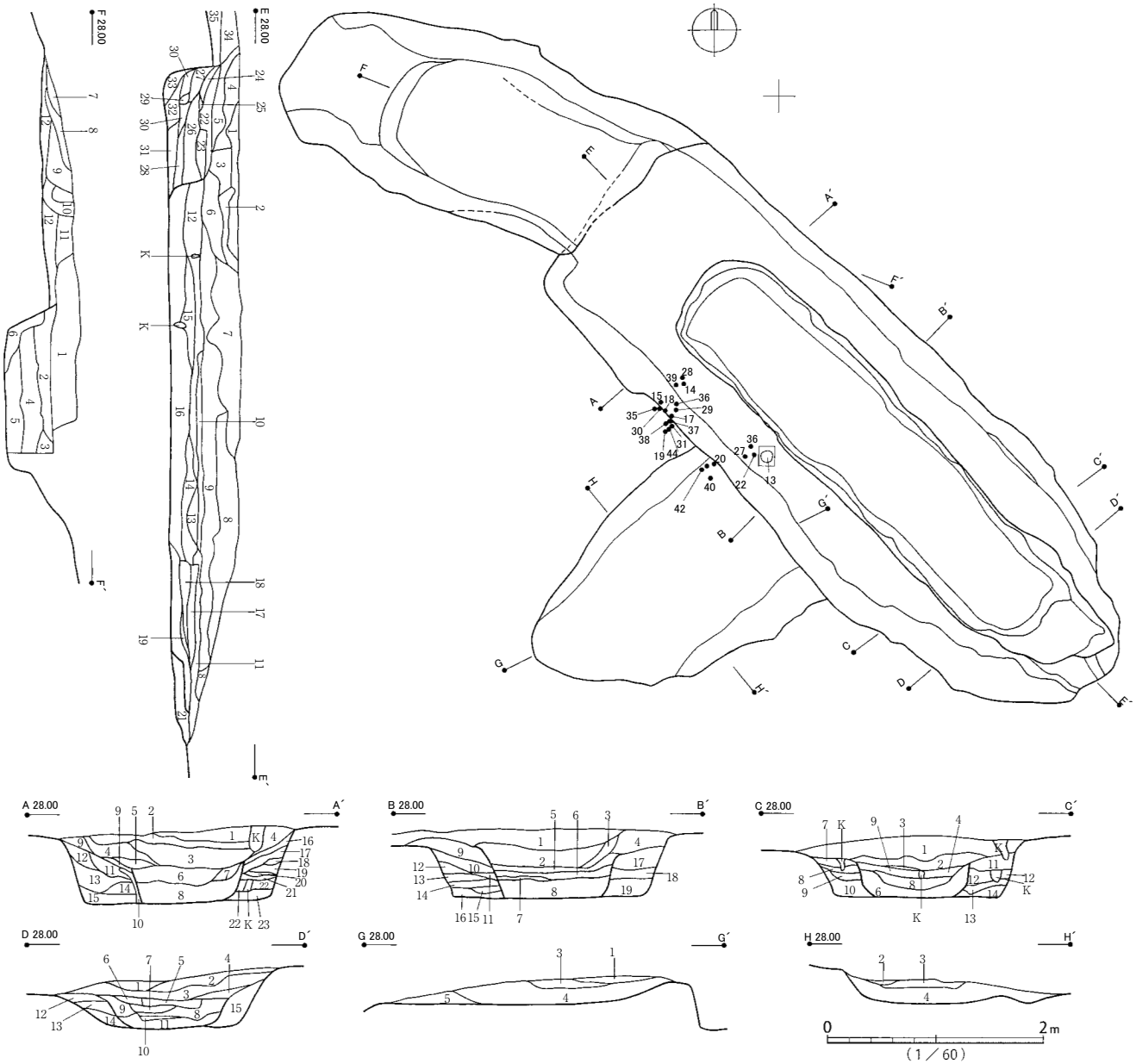
墳丘は、等高線図により北側で僅かに高まりをみとめられるが、盛土であるか判然としない。主軸方位は墳丘の長軸方向から N-56°-W である。主体部は墳丘の中央部に主軸を東西方向にして位置する。主体部からは木棺痕が検出されており、平面形は小口側で丸みを帯びる長方形で、規模は長軸 2.96m×短軸（0.93）m、確認面からの深さ 0.39m を測る。木棺の主軸方位は長軸方向から N-61°-W である。竪坑の平面形状は、隅丸の不整長方形で、規模は 4.38m×（2.14）m、確認面からの深さは、0.72m を測る。主軸方位は長軸方向から N-61°-W である。周溝内から埋葬施設は確認されていないが、周溝北西部の外側への膨らみ部分に土坑状の掘り込みが認められ、存在の可能性は残る。

出土遺物は、北側周溝中央部東寄りから、集中して出土している。出土高の記録がないため正確ではないが、写真から判断すると、何れの遺物も周溝覆土中層からの出土とみられる。1･2 は二重口縁壺形土器で、器形では極めてその特徴が近く、同一製作者によるものとみられる。ただし、内面の調整において、1 が刷毛目整形後、丁寧なナデを施しているのに対し、2 はヘラナデ後、胴部上位を磨きに近いヘラナデを行っており、微妙に異なっている。底部を焼成後に円形に打ち欠いて穿孔している。重厚な作りで、見かけよりも重量を感じる。3 は直口壺形土器で口唇部内面を僅かに面取し、底部外面は上方に窪む。4 は鉢形土器で頸部内面は鋭く屈曲し、外面にヘラ状工具小口の刺突による刻みが施されている。口縁部も丁寧に仕上げられ、全体的に入念な作りとなっている。5 は高杯形土器の杯部、6 は結合型器台形土器で、外面を丁寧にヘラ磨きで仕上げており、入念な作りだが、重厚な作りで、みかけより重量を感じる。全ての土器が外面を赤彩されており、近似した色調を示す。また、焼成、胎土、破損状況などでその特徴が近いことから、同じタイミングで整形、焼成された土器群と考えられる。7～11 は主体部棺底付近から出土したガラス小玉である。

帰属時期は、草刈２式期の所産と考えられる。

SS107　セ 28 地区（Fig.159、PL.48）

U9-00 付近に位置する方形周溝墓である。調査区南端の南に下る斜面上位に位置する。西側に SS106 が近接し、遺構中央を南北方向に溝状遺構２条が縦断する。新旧関係は、明確ではないが、本遺構に対し溝状遺構が新しいとみられる。本遺構は、発掘調査時にはセ 28-134B と呼称されている。事実記



SS103 主体部 AA´
1 ― 褐色土、ローム小ブロック・ローム EE´ の 1 と同層
2 褐色土 茶褐色土、ローム小ブロック EE´ の 2 と同層
3 ― 茶褐色土、ローム大ブロック多量・ローム小ブロック やや軟質 EE´ の 6 と同層
4 ― ローム大ブロック
5 黒色土 ロームブロック・ローム
6 褐色土 ローム多量 EE´ の 12 と同層
7 ― 黒色土粒、ローム小ブロック
8 黒褐色土 ロームブロック EE´ の 16 と同層
9 黒色土 硬質
10 ― ロームブロック、褐色土 軟質
11 ― ロームブロック、暗褐色土 硬質
12 淡褐色土 軟質
13 ― ローム大ブロック、褐色土
14 ― ローム小ブロック・ローム、黒色土 硬質
15 暗褐色土 ロームブロック若干
16 ― 褐色土多量、ローム小ブロック多量 硬質
17 黒色土 ローム中ブロック 硬質
18 ― ロームブロック
19 ― ロームブロック、黒色土・褐色土 硬質
20 黒色土
21 ― ロームブロック
22 暗褐色土 褐色土、ロームブロック
23 褐色土 ロームブロック 硬質

SS103 主体部 BB´
1 ― ローム小ブロック EE´ の 7 と同層
2 ― ローム大ブロック EE´ の 9 と同層
3 ― ロームブロック、褐色土
4 ― ロームブロック多量、褐色土
5 暗褐色土 やや硬質 EE´ の 10 と同層
6 褐色土 ローム多量 EE´ の 12 と同層
7 黒色土
8 黒褐色土 ロームブロック EE´ の 16 と同層
9 ― ローム大ブロック
10 ― ローム小ブロック、赤褐色土ブロック・黒色土 硬質
11 ― ロームブロック
12 ― ロームブロック、暗褐色土 硬質
13 ― ローム やや軟質
14 褐色土 ロームブロック、暗褐色土
15 暗褐色土 ローム若干
16 ― 褐色土・淡褐色土、ローム
17 ― 黒色土・暗褐色土・褐色土少量、小ローム 硬質
18 ― ローム
19 ― ロームブロック、暗褐色土 硬質

SS103 主体部 CC´
1 ― ロームブロック多量、褐色土 EE´ の 8 と同層
2 ― ローム大ブロック EE´ の 9 と同層
3 暗褐色土 赤褐色土粒、ロームブロック やや硬質 EE´ の 11 と同層
4 黒色土 ロームブロック 硬質 EE´ の 17 と同層
5 ― ローム大ブロック、暗褐色土 EE´ の 18 と同層
6 暗褐色土 EE´ の 20 と同層
7 暗褐色土 ハードロームブロック・ローム
8 褐色土 ロームブロック
9 暗褐色土 硬質
10 ― ロームブロック
11 暗褐色土 ローム粒・ローム小ブロック多量 硬質
12 ― ロームブロック多量、褐色土
13 褐色土 ロームブロック・ローム
14 暗褐色土

SS103 主体部 DD´
1 ― ローム 軟質
2 ― ロームブロック多量、褐色土 EE´ の 8 と同層
3 ― ローム大ブロック EE´ の 9 と同層
4 黒色土 ローム小ブロック やや硬質
5 暗褐色土 赤褐色土粒、ロームブロック やや硬質 EE´ の 11 と同層
6 ― ローム小ブロック、褐色土
7 黒色土 ロームブロック 硬質 EE´ の 17 と同層
8 ― ローム大ブロック、暗褐色土 EE´ の 18 と同層
9 ― ロームブロック
10 ― ロームブロック、褐色土 EE´ の 19 と同層
11 暗褐色土 EE´ の 20 と同層
12 褐色土 ローム粒少量
13 黒色土
14 ―
15 黒色土 ローム小ブロック やや硬質

SS103 主体部 FF´
1 ― ローム大ブロック EE´ の 34 と同層
2 ― ローム小ブロック
3 褐色土 ロームブロック
4 褐色土 ロームブロック多量
5 褐色土・暗褐色土の混合
6 黒色土
7 ― ローム
8 黒色土 硬質
9 ― ロームブロック
10 ― ローム 少し軟質
11 ― ローム、褐色土
12 ― ロームブロック、黒色土・褐色土 EE´ の 35 と同層

SS103 主体部 EE´
1 ― 褐色土、ローム小ブロック・ローム AA´ の 1 と同層
2 褐色土 茶褐色土、ローム小ブロック AA´ の 2 と同層
3 ― ロームブロック
4 褐色土 ロームブロック
5 ― ロームブロック、褐色土
6 ― 茶褐色土、ローム大ブロック多量・ローム小ブロック やや軟質 AA´ の 3 と同層
7 ― ローム小ブロック BB´ の 1 と同層
8 ― ロームブロック多量、褐色土 CC´ の 1、DD´ の 2 と同層
9 ― ローム大ブロック BB´ の 2、CC´ の 2、DD´ の 3 と同層
10 暗褐色土 やや硬質 BB´ の 5 と同層
11 暗褐色土 赤褐色土粒、ロームブロック やや硬質 CC´ の 3、DD´ の 5 と同層
12 褐色土 ローム多量 AA´ の 6、BB´ の 6 と同層
13 ― 褐色土・黒色土、ロームブロック
14 ― 褐色土・黒色土、ロームブロック　13 層よりロームブロック多量
15 ― 褐色土・黒色土多量、ロームブロック多量
16 黒褐色土 ロームブロック AA´ の 8、BB´ の 8 と同層
17 黒色土 ロームブロック 硬質 CC´ の 4、DD´ の 7 と同層
18 ― ローム大ブロック、暗褐色土 CC´ の 5、DD´ の 8 と同層
19 ― ロームブロック、褐色土 DD´ の 10 と同層
20 暗褐色土 CC´ の 6、DD´ の 11 と同層
21 ―
22 ― ローム大ブロック
23 ― ローム大ブロック多量、褐色土
24 黒褐色土
25 ― ロームブロック
26 ― ロームブロック多量、褐色土多量・黒色土
27 黒色土
28 ― 褐色土、ローム多量
29 ― ロームブロック
30 褐色土 硬質
31 褐色土 ローム 軟質
32 暗褐色土 ロームブロック若干
33 暗褐色土
34 ― ローム FF´ の 1 と同層
35 ― ロームブロック、黒色土・褐色土 FF´ の 12 と同層

SS103 主体部 GG´·HH´
1 ―
2 ― ハードロームブロック
3 黒色土 軟質
4 ― ローム大ブロック多量・ローム
5 褐色土 ローム 軟質

Fig.148　SS103 遺構 (3) 実測図

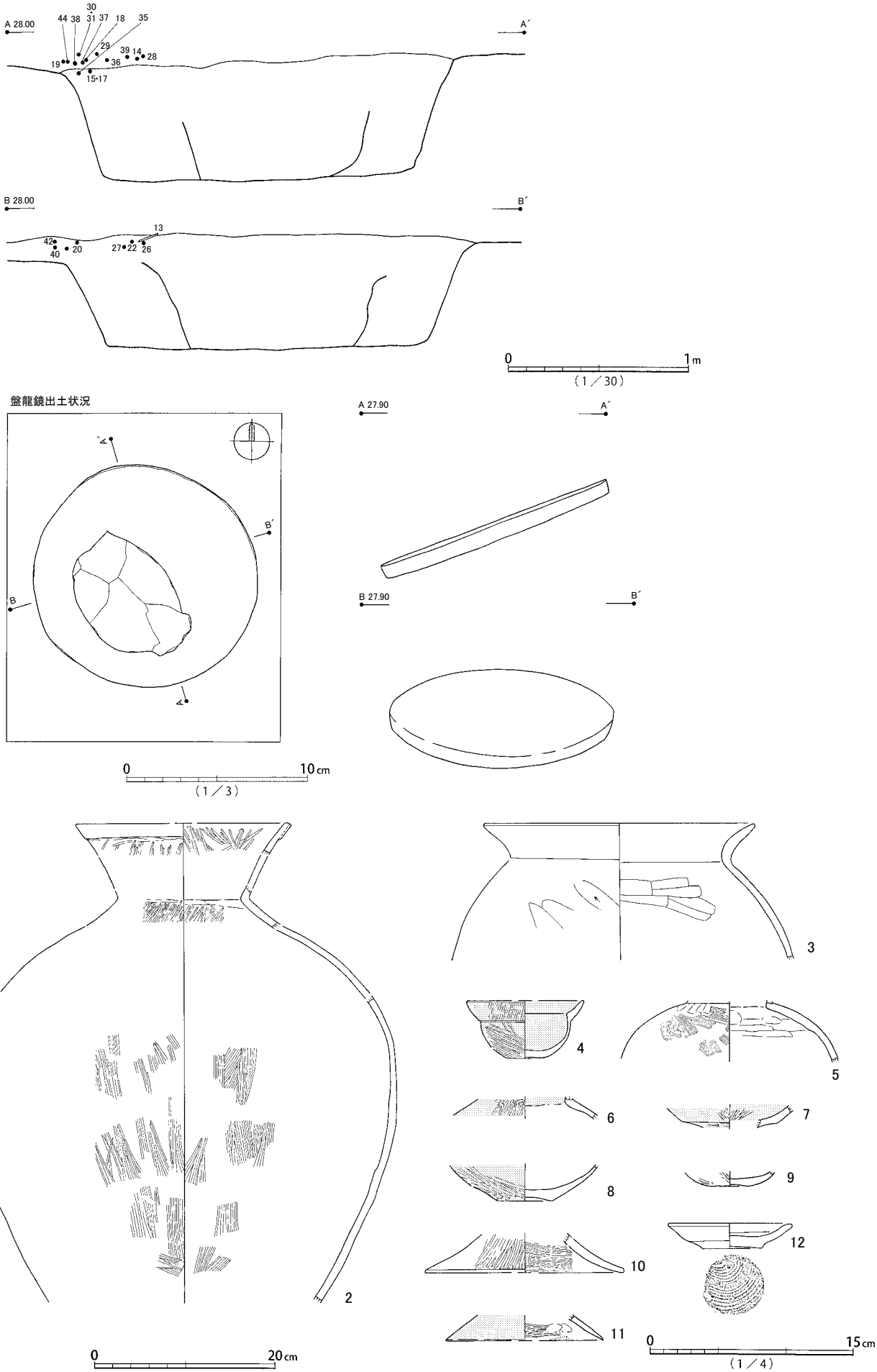


Fig.149　SS103 遺物出土詳細 (2)・遺物 (2) 実測図

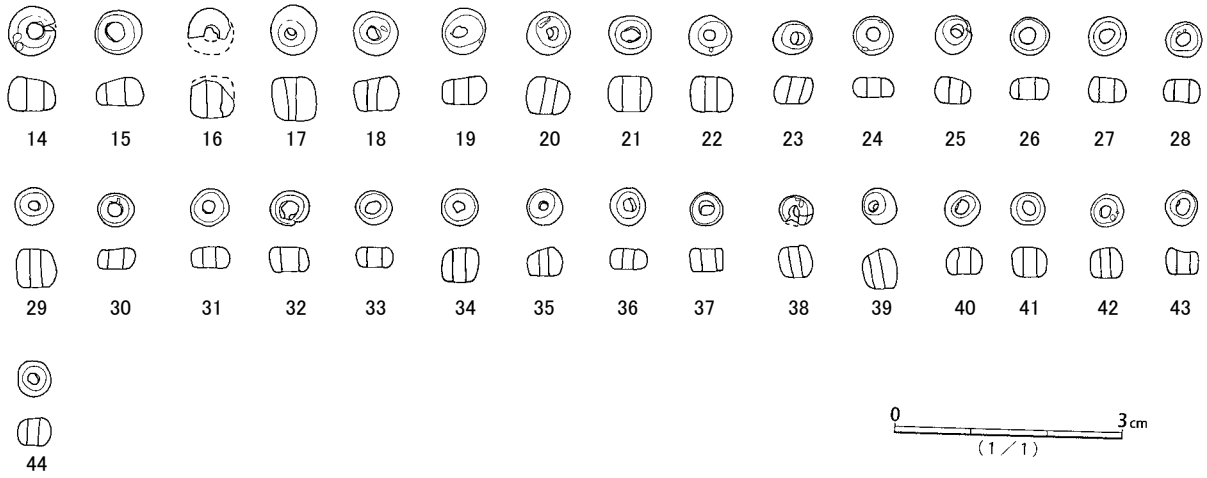




Fig.150　SS103 遺物 (3) 実測図

載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、方台部が南側で不明瞭であるが、隅丸方形を呈し、周溝は南辺で検出されていない以外は、ほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が東西方向で 8.40m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で 0.90m・0.42m、0.30m、東溝が 1.00m・0.72m、0.20m、西溝が 0.84m・0.44m、0.30m を測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向から N-67°-W である。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。

帰属時期は、不明確であるが、遺構平面形と位置関係から中台 2 式期の所産としておく。

SS108　セ 28 地区（Fig.160、PL.48）

T8-55 付近に位置する方形周溝墓である。調査区南側、標高 27m を測る最高位付近の南に下る斜面への傾斜変換点に位置する。北側に SS109 が近接し、やや距離をあけて南東方向に SS107 が位置する。SM1028 と重複し、新旧関係は、本遺構が SM1028 に対し古い。本遺構は、発掘調査時にはセ 28-112 と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、方台部が隅丸方形を呈し、周溝は東側周溝南側で断絶し、周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。周溝の断絶は、等高線図からでは、傾斜によるものとも考えられるが、北側に位置する SS109 は、遺構規模、形状、主軸方向において共通性が見られることから、極めて近い時期の増築とみられ、この SS109 も同様に南東隅で周溝が断絶しており、意識的な形状とも考えられる。規模は方台部が（6.54）m×6.50m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で 0.68m・0.40m、0.20m、東溝が 0.70m・0.32m、0.20m、南溝が 0.68m・0.36m、0.15m、西溝が 0.62m・0.38m、0.15m を測る。周溝底面は平坦面が少なく、断面形状はレンズ状を呈する。墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向から N-39°-E である。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は無い。帰属時期は、不明確であるが、遺構平面形と位置関係から中台 2 式期の所産としておく。

SS109　セ 28 地区（Fig.160、PL.48・161）

T8-25 付近に位置する方形周溝墓である。調査区の南側、標高 27m を測る最高位に位置する。南側に SS108、北側には SS112 が近接する。SM1028 が重複し、新旧関係は本遺構が SM1028 に対し古い。本遺構は、発掘調査時にはセ 28-280 と呼称されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、遺構の重複により遺存部位が限られるものの、隅丸方形とみられ、周溝は、記録類の限界により東側で不明瞭となるが、南西隅で断絶する。周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は、方台部が 5.64m×(5.30)m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で 0.66m・0.22m、0.23m、南溝が 0.76m・0.24m、0.32m、西溝が 0.92m・0.32m、0.24m を測る。周溝底面は平坦面がほほ認められず、断面形状は不整なレンズ状を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向から N-49°-W である。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、1 が小型の鉢形土器で周溝からの出土である。

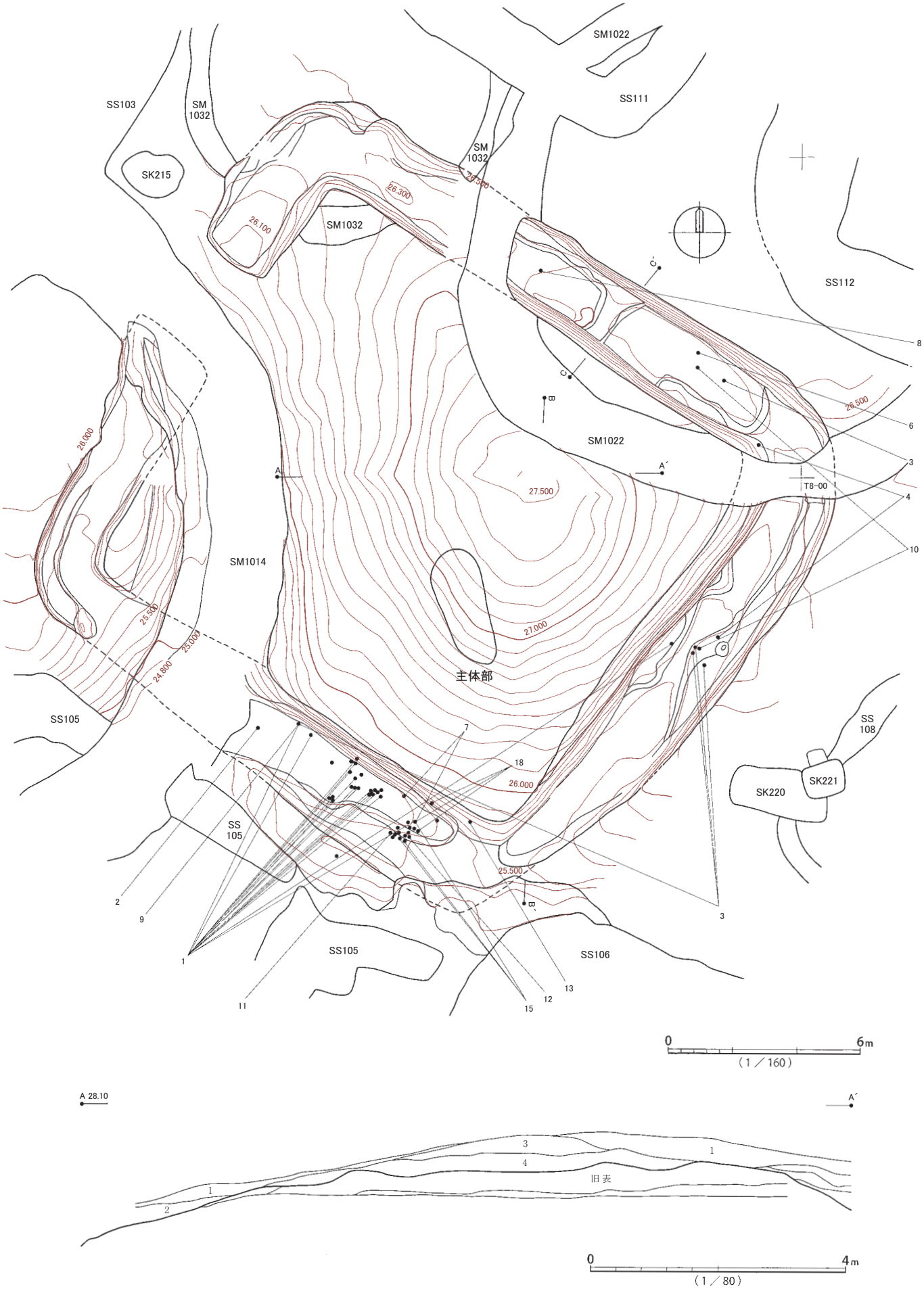


Fig.151　SS104 遺構 (1) 実測図

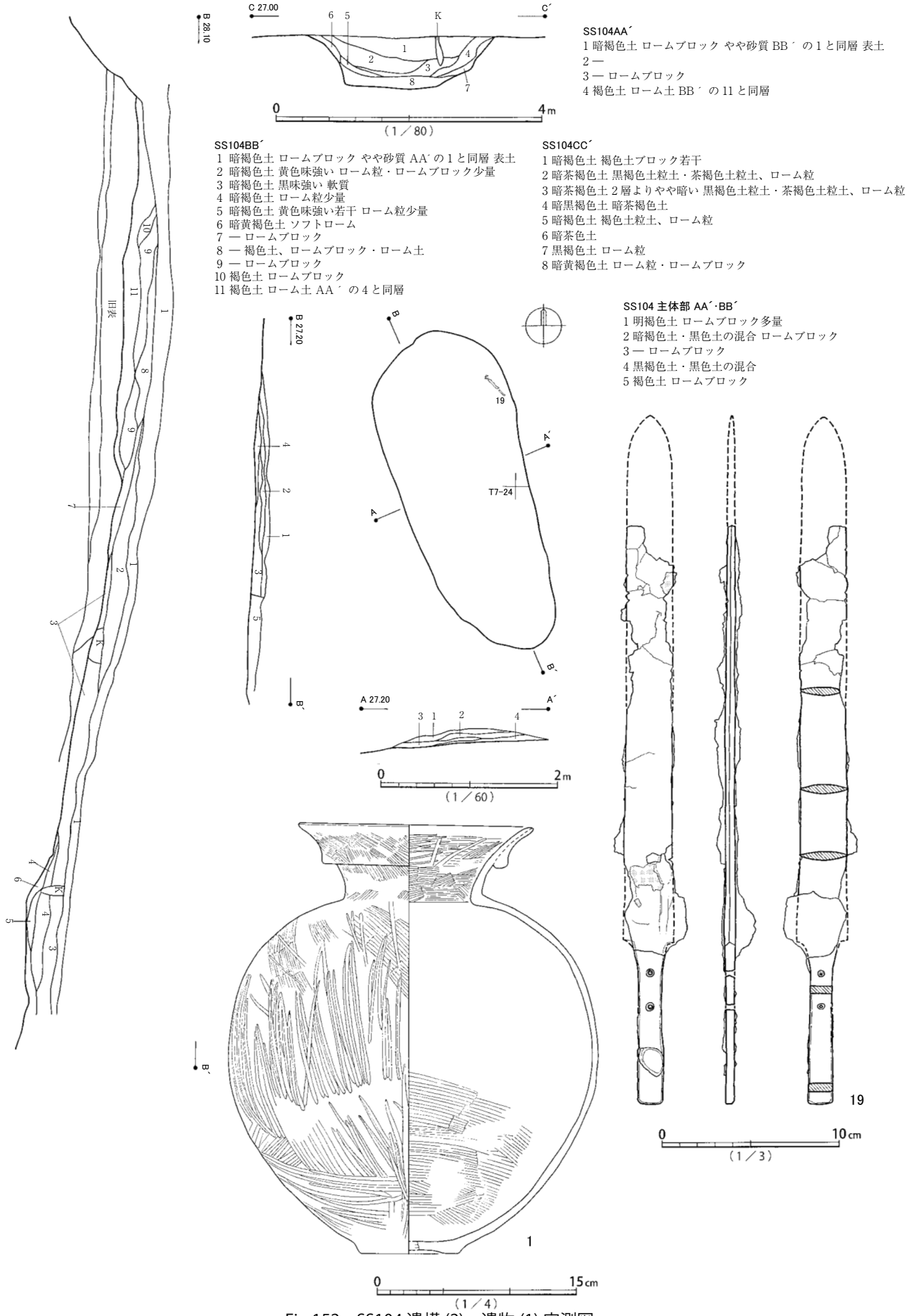


Fig.152　SS104 遺構 (2)・遺物 (1) 実測図

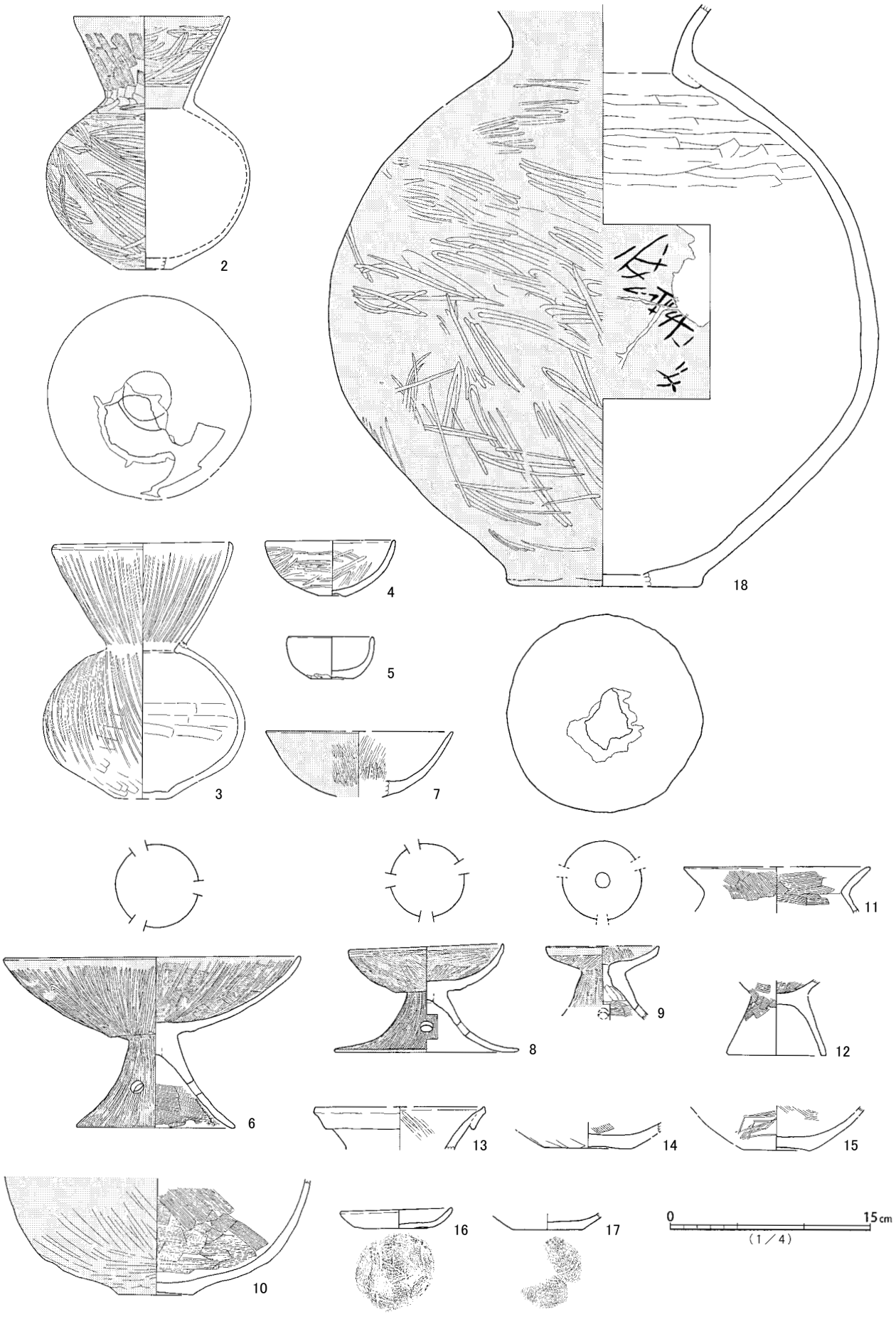


Fig.153　SS104 遺物 (2) 実測図

帰属時期は、土器から中台２式期の所産と考えられる。

SS110　セ 28 地区（Fig.161、PL.48～49）

R7-35 付近に位置する方墳である。調査区西側の標高 26m を超える高位平坦面に位置する。西側には保存区が広がり、諏訪台 10 号墳が近接する。南側には SS111 が位置するが、主軸方向が僅かに異なる。東側には SM1092、SM1089 が近接するが、重複関係にある遺構は無い。本遺構は、発掘調査時にはセ 28-061 と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、墳丘が隅丸方形を呈し、周溝外形では隅丸が更に強調される形状を呈する。周溝は全周し、周溝幅はほぼ均等に墳丘をめぐる。規模は墳丘が 8.00m×7.52m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で 0.88m・0.48m、0.30m、東溝が 0.92m・0.58m、0.30m、南溝が 1.16m・0.46m、0.40m、西溝が 1.04m・0.36m、1.30m を測る。周溝底面は四隅で僅かに浅くなり、各辺の中央部が深くなる傾向がみられ、断面形状は逆台形に近いが、内側と外側とでは非対称形となる。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は墳丘長軸方向から N-20°-E である。埋葬施設は墳丘、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、1 が杯口縁部とみられるが、本遺構に帰属するものではない。

帰属時期は、不明確であるが墳形と占地状況から、草刈 1～2 式期としておく。

SS111　セ 28 地区（Fig.162～163、PL.49～50・161・182・215）

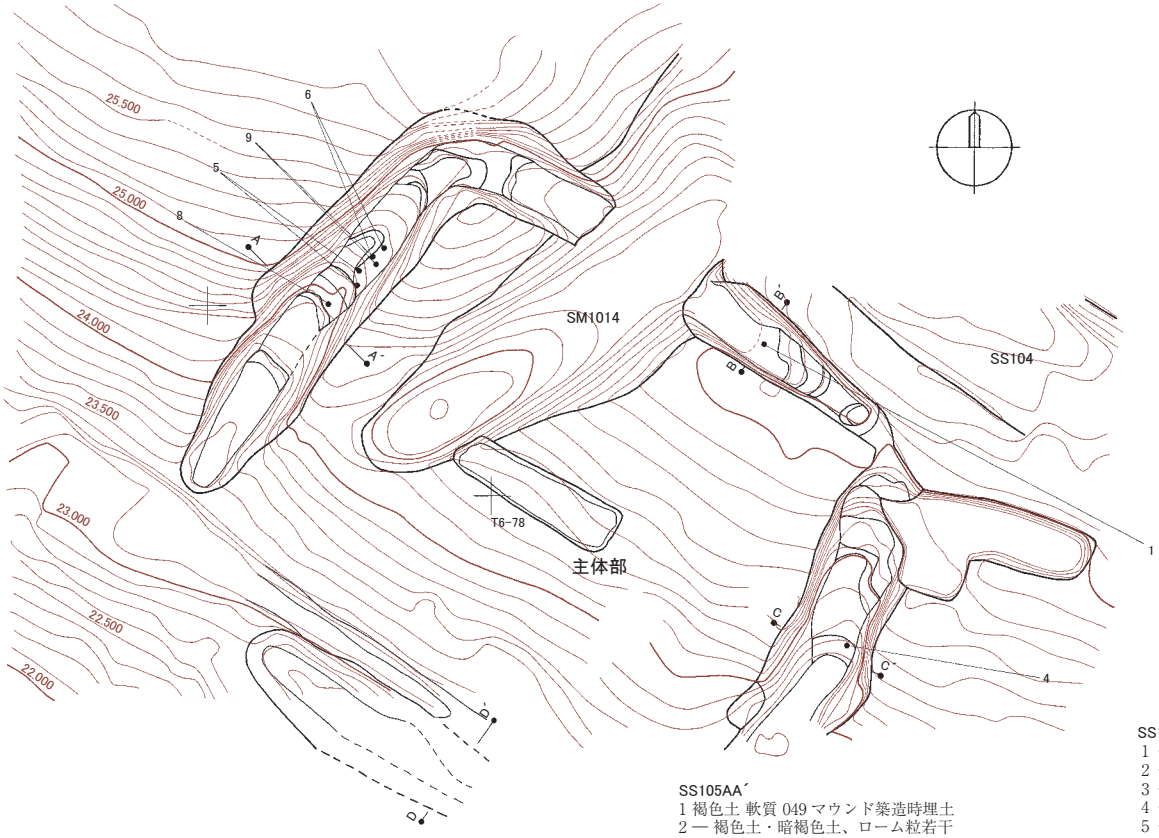
S7-05 付近に位置する方墳である。調査区西側の標高 26m を超える高位平坦面に位置する。北側に SS110、東側に SS112、南側に SS104、西側に SS103 が近接する。北西方向には保存区内に諏訪台 10 号墳が位置するが、10 号墳との間には本墳 1 基分ほどの遺構空白範囲が存在する。SM1089、SM1022、SM1032、SK219 と重複し、本遺構は何れの遺構に対しても古い。本遺構は、発掘調査時にはセ 28-046 と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

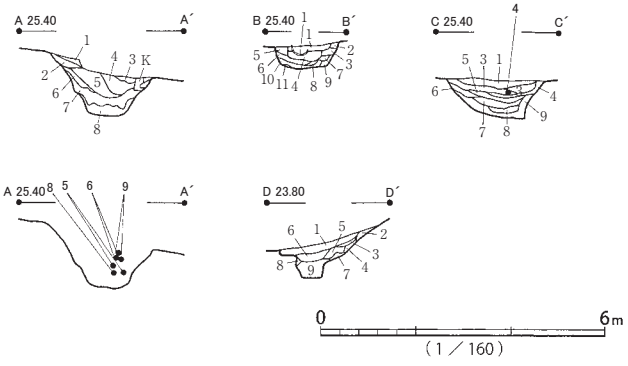
平面形状は、墳丘が隅丸の正方形を呈し、周溝外形では隅丸が更に強調される形状を呈する。周溝は全周し、周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が 10.28m×10.16m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で 2.04m・1.08m、0.40m、東溝が 2.00m・0.96m、0.60m、南溝が 1.88m・1.16m、0.56m、西溝が上端で 2.00m、深さ 0.50m を測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形であるが、底面からの立ち上がりが甘く、丸みを帯びる。墳丘については評価が難しい。平面図上では北側に高まりが認められるが、土層断面図においては、表土層直下に僅かに盛土とみられる層が認められるのみで、殆ど存在しない。また、最下層直下の基盤層とみられる層位が水平ではなく、墳丘中央部が高く、周溝に向かって丸みを帯びて下がっている。図面をそのままで理解すれば、切土によって、墳丘を作り出していることになる。主軸方位は墳丘長軸方向から N-31°-E である。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、1・2 が小型壺形土器で 2 は外面と口縁部内面を赤彩している。1 は南側周溝、2 は西側周溝の中央寄りからの出土である。3 は大型の壺形土器で、内外面を赤彩している。 4 は壺形土器か、高杯形土器で、5 は壺形土器の底部である。6 はネフライト製とされる石製の垂飾とみられ、周溝内より出土している。

帰属時期は、土器から草刈２式期の所産と考えられる。

SS112　セ 28 地区（Fig.163～171、PL.3・6・9・50～52・161～164・182・195）



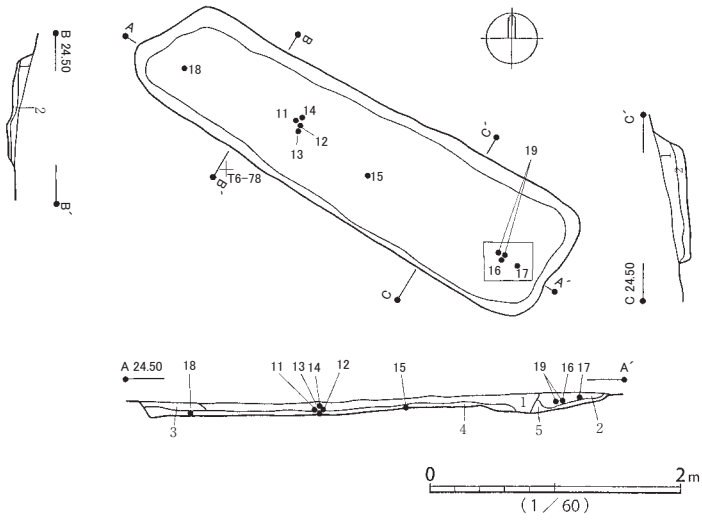


SS105AA´
1 褐色土 軟質 049 マウンド築造時埋土
2 ― 褐色土・暗褐色土、ローム粒若干
3 ― 暗褐色土、ローム粒 硬質
4 ― 褐色土・明褐色土、ローム粒 軟質
5 ― 暗褐色土・褐色土
6 ― 褐色土、ローム土 軟質
7 ― 褐色土、ローム土・中型ロームブロック稀
8 ― ソフトローム・ハードロームブロック土 周溝掘削時

SS105BB´
1 ―
2 ―
3 ―
4 ―
5 ―
6 ―
7 ―
8 ―
9 ―
10 ―
11 ―

SS105CC´
1 黒色土
2 ―
3 黒色土 褐色土多量
4 暗黒褐色土
5 暗黒褐色土
6 暗褐色土
7 ― 褐色土 8 層よりやや少ない
8 暗黒黄褐色土 ローム粒多量、褐色土粒
9 暗茶褐色土 ローム粒多量、褐色土粒

SS105DD´
1 黒褐色土 褐色土粒多量
2 暗茶褐色土
3 ―
4 褐色土
5 ― 褐色土粒、ローム粒・ロームブロック
6 暗茶褐色土
7 ― 褐色土粒、ローム粒
8 ―
9 ― 褐色土粒土、ローム粒



SS105 主体部 AA´
1 暗褐色土 ローム微粒 やや明るい
2 褐色土 黒色土粒
3 褐色土 暗褐色土多量
4 明褐色土 ソフトローム 軟質
5 明褐色土 ソフトローム 軟質

SS105 主体部 BB´
1 ―
2 ―

SS105 主体部 CC´
1 ―
2 ―

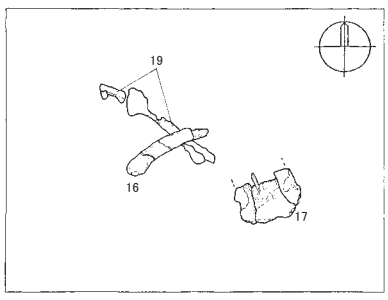


Fig.154　SS105 遺構・遺物出土詳細実測図

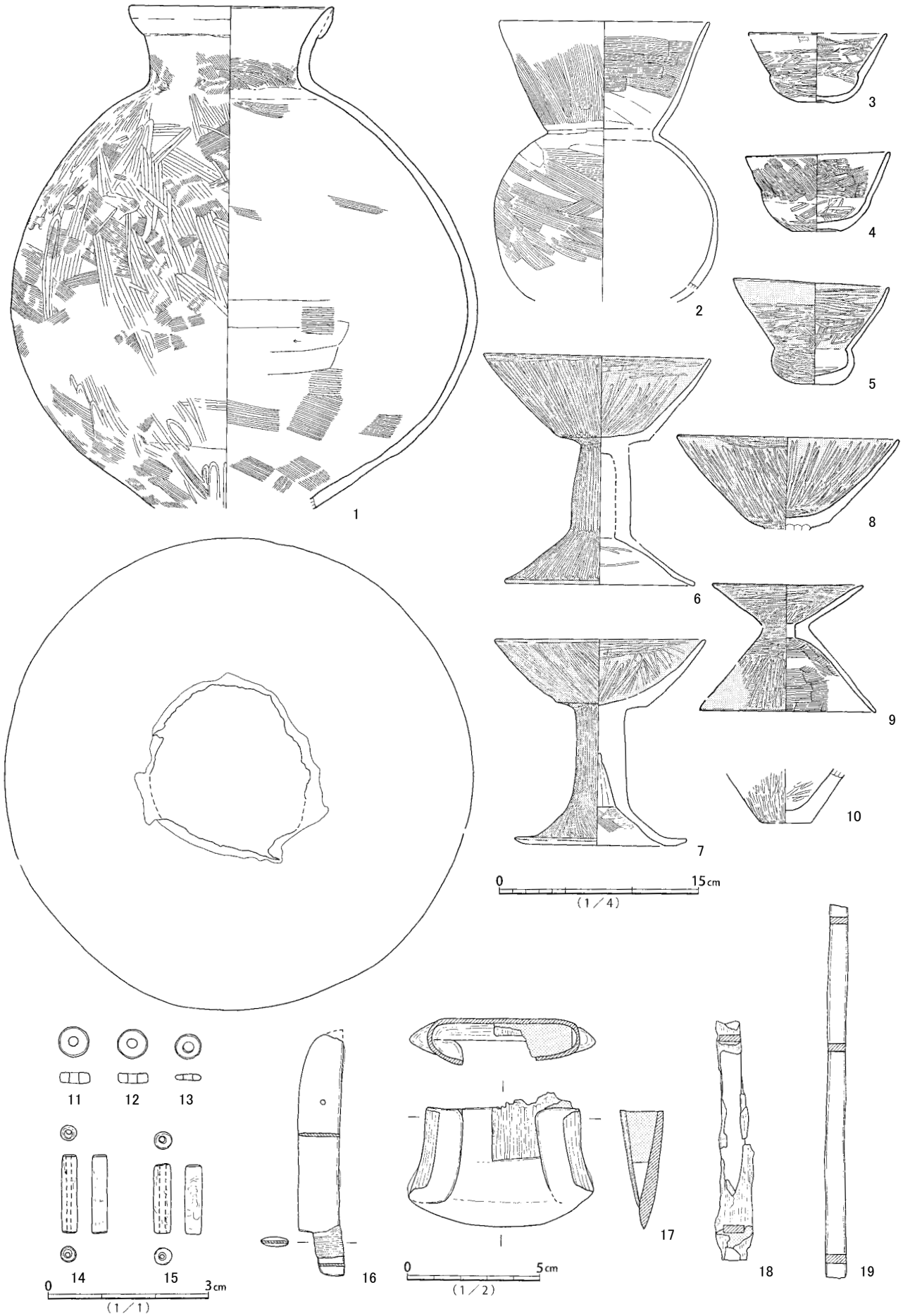
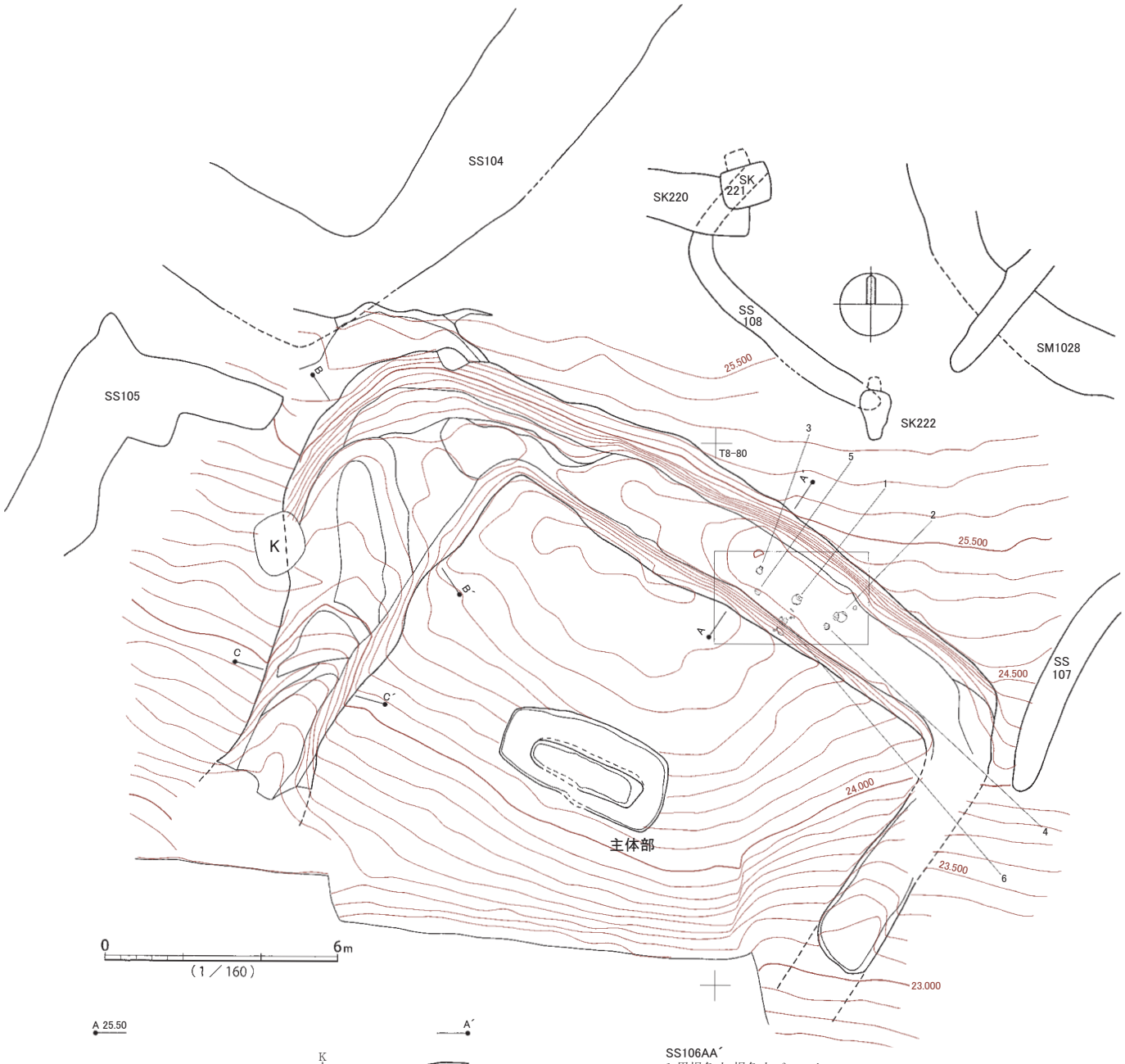


Fig.155　SS105 遺物実測図



SS106AA´
1 黒褐色土 褐色土ブロック
2 黒色土 ローム粒若干
3 黒褐色土 褐色土粒多量
4 黒褐色土 ローム粒
5 黒褐色土 ローム粒多量
6 黒褐色土 ローム粒多量
7 暗茶褐色土 黒褐色土、ローム粒多量・ロームブロック若干
8 暗茶褐色土 褐色土、ローム粒・ロームブロック
9 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック

SS106BB´
1 黒褐色土 褐色土粒多量・褐色土ブロック
2 黒褐色土 褐色土粒若干、ローム粒
3 褐色土 褐色土粒、ローム粒多量
4 暗黒褐色土 褐色土粒、ローム粒若干
5 黒色土 褐色土粒多量、ローム粒若干
6 黒褐色土 褐色土粒多量、ローム粒多量
7 褐色土 ローム粒多量
8 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック

SS106CC´
1 黒褐色土 褐色土粒、ローム粒多量
2 黒褐色土 褐色土粒多量、ローム粒多量
3 暗黒褐色土 褐色土粒多量
4 暗褐色土 褐色土粒多量、ローム粒多量２層より多量
5 暗褐色土 褐色土粒多量、ローム粒多量・ロームブロック若干２層より多量
6 暗茶褐色土
7 暗褐色土 ロームブロック若干
8 ― ローム粒多量・ロームブロック、褐色土粒・暗茶褐色土多量

Fig.156　SS106 遺構 (1) 実測図

S8-00 付近に位置する方墳である。調査区西側の標高 27m を測る最高位に位置する。西側に SS111、南側に SS104、SS109、東側に SS113 が近接する。SM1089、SM1003、SM1022 と重複し、墳丘を掘り込まれているため、本遺構は何れに対しても古い。SK223、SK225 は周溝が埋まりきってから造られている。墳丘は、これら後期以降の遺構に改変されているが、比較的良好な原状を残す。本遺構は、発掘調査時にはセ 28-043 と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、墳丘裾レベルでは、北東隅で歪むが方形を呈し、上位に向け次第に隅は無くなり、中位付近ではむしろ円形に近い形状を呈している。周溝は外周が隅丸で、各辺もやや丸みをもって方形を呈し、確認面においては墳丘を全周しているが、東側中央部で幅 1m 程の作り出し状の周溝の掘り残しが存在し、周溝上端から 0.2m 程低い陸橋となっている。周溝幅は南東側を除き、ほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が 14.44m×14.00m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で 3.40m・2.56m、0.50m、東溝が 2.92m・1.28m、計測不能、南溝が 2.96m・1.28m、0.40m、西溝が（3.32）m・（2.36）m、0.30m を測る。周溝底面の状況は資料が少ない。東側周溝ではほぼ平坦面を持つが、南側では丸みを帯びる。断面形状は東側周溝が逆台形に近く、西側周溝はレンズ状を呈する。

墳丘は、旧表土から高さ 0.5m の盛土を行い、周溝底からの高さは 1m を作り出している。主軸方位は方台部長軸方向から N-70°-W である。埋葬施設は墳丘中央の盛土内に位置するものを主体部 A とし、北側周溝内のものを主体部 B としている。主体部 A からは木棺痕が検出されており、平面形は小口方向で丸みを帯びる長方形を呈し、規模は長軸 3.93m×短軸 1.00m、深さ 0.42m を測る。木棺の主軸方位は長軸方向から N-70°-W である。竪坑の平面形状は、長楕円形で、規模は 5.70m×2.60m、深さは、0.49m を測る。主軸方位は長軸方向から N-71°-W である。

主体部 B の平面形状は、長方形で、規模は 2.46m×1.03m、深さ 0.18m を測る。主軸方位は長軸方向から N-75°-W である。

出土遺物は、主体部 A 棺内と、四方の周溝中央寄りにまとまりがみられる。1～4 は甕形土器、5～21 が壺形土器で、5～8 が二重口縁壺、13～15 が直口壺である。 9 は大廓式の大形壺で、図面にはその出土位置・状況が示されていない。しかし調査担当者への聞き取りから、北西隅の周溝覆土中から一括で取り上げた遺物であることを確認している。一括取り上げ土器の数ある破片の中から、胎土の似た破片を集め、接合したところ、1 個体に復元できたとのことであった。10・11 が伊勢型二重口縁壺であり、11 は頸部外面に焼成後の逆 U 字形の線刻がみとめられる。22～27 が鉢形土器・小型壺形土器、28～31 が高杯形土器、32～40 が器台形土器、なお、1・5・9・10・12・13・28・29・36 については胎土分析を行っている（第 3 章第 1 節）。その結果 9 の大廓式の大形壺については鉱物片・岩石組成が他と異なり、搬入品である可能性が高いこと、また、それ以外は、同一由来の粘土を使用した可能性が高いことなどの結論を得ている。

他に、主体部から 42～101 のガラス小玉で、60 点が出土している。

周溝内出土土器については元来供えられた場所が問題となるが、調査担当者からは、マウンドにあったものが転落したとの所見があった。断じ得ないが、周溝の各辺中央付近に分布が偏ること、各辺の器種構成をみると必ず壺が含まれ、偏りが見られることなどから、セットとしてのそもそもの器種構成を保っていると考えたい。また無傷の土器が極めて少ないことなどをみると、ある程度の移動が

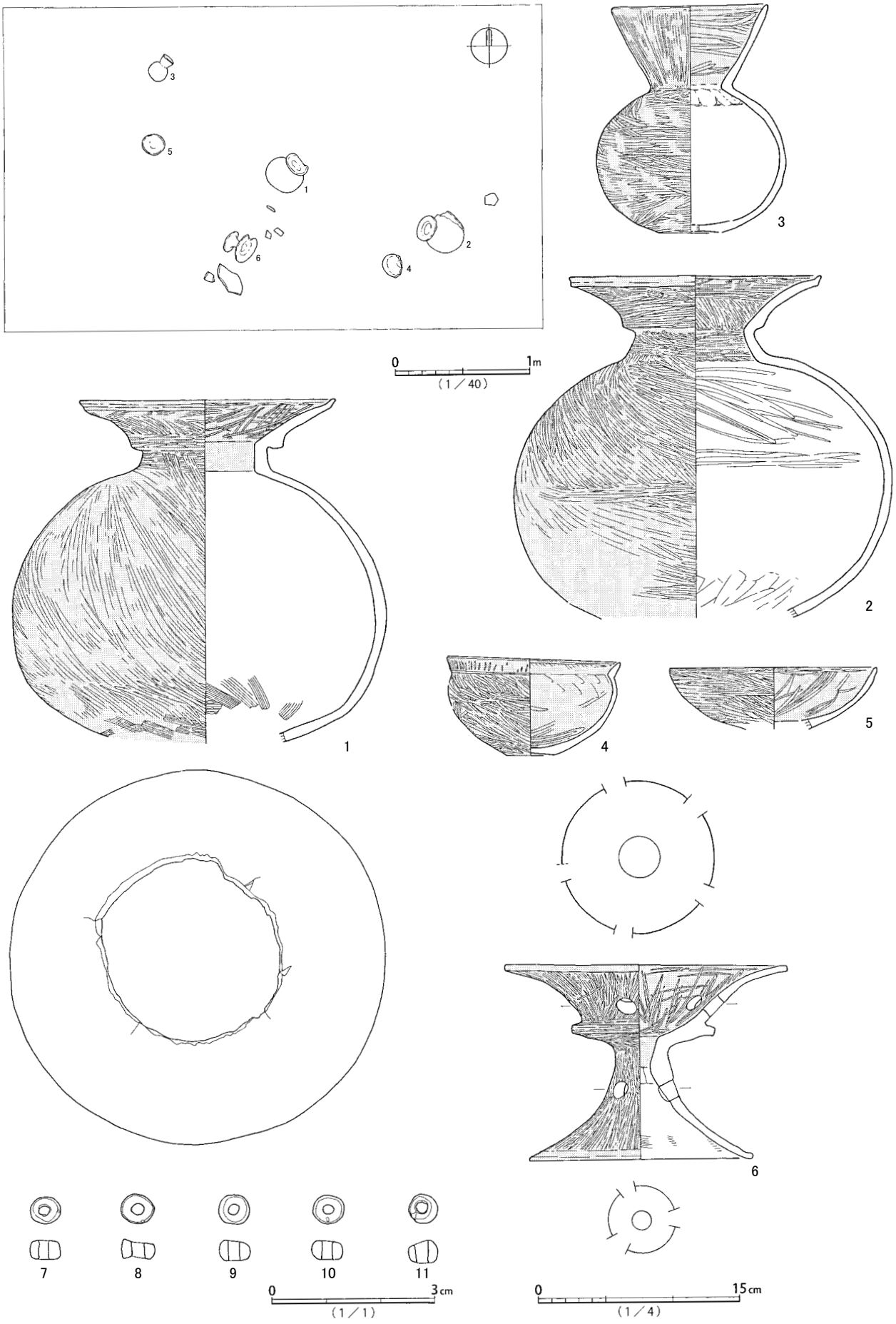
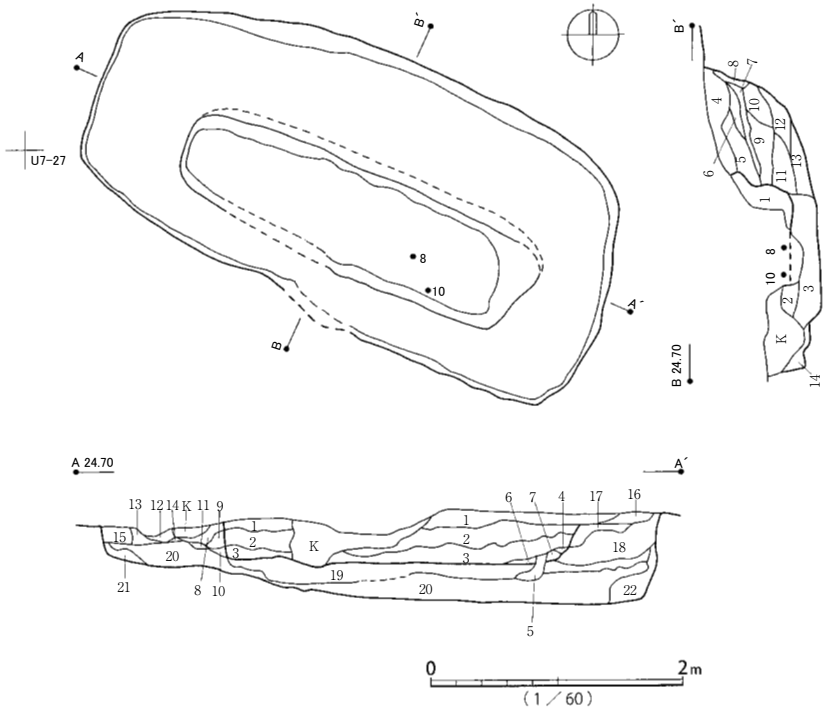


Fig.157　SS106 遺物出土詳細・遺物実測図



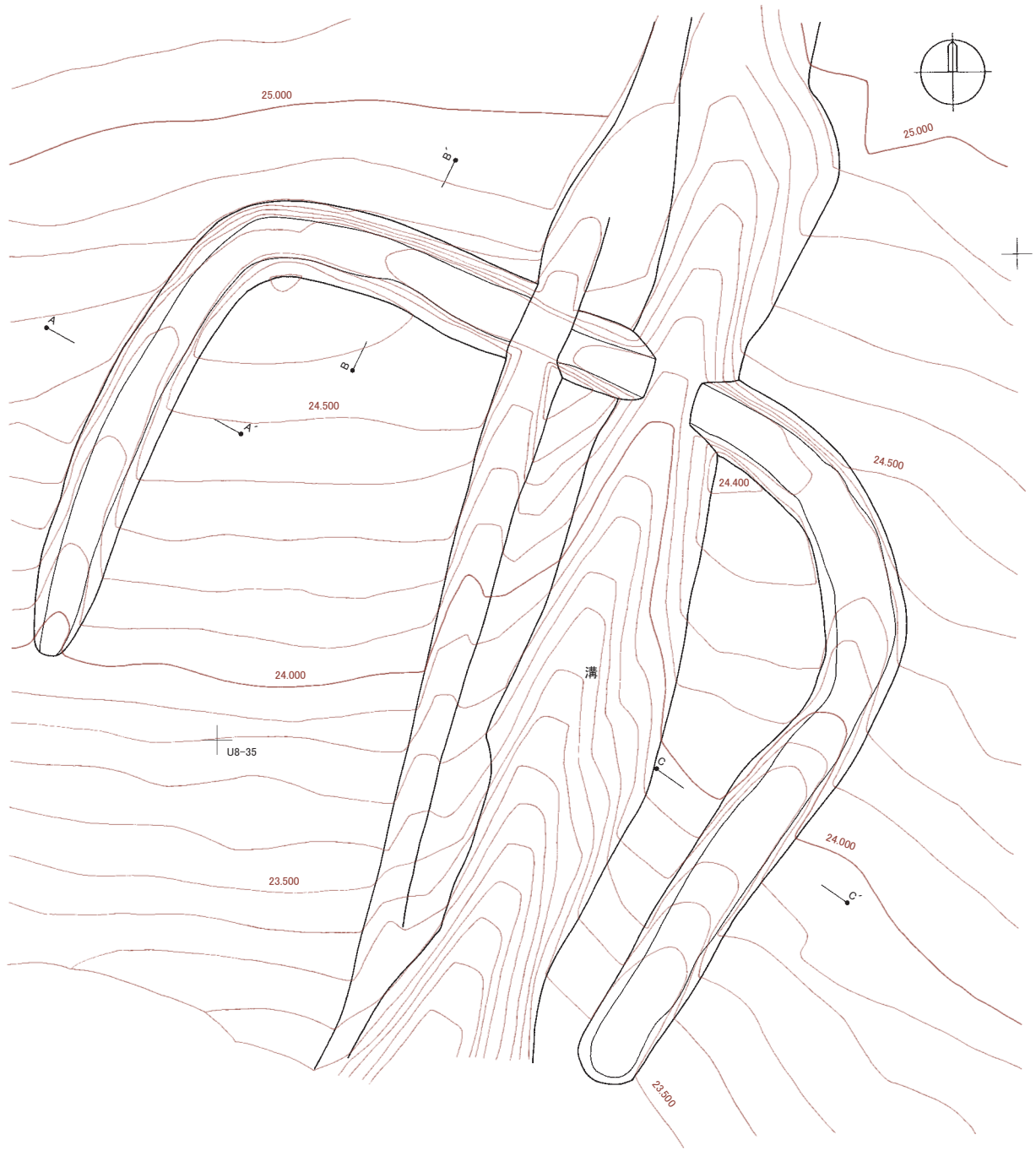
SS106 主体部 AA´

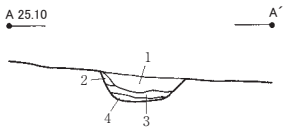
1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック 軟質 砂質
2 黒褐色土 褐色土粒多量、ローム粒 軟質 砂質
3 黒褐色土 2層より暗い 褐色土粒多量、ローム粒
4 —
5 —
6 —
7 —
8 —
9 —
10 —
11 —
12 —
13 — ロームブロック
14 —
15 黒色土・褐色土の混合
16 暗茶色土 ローム粒・ロームブロック
17 —
18 — ロームブロック・ローム粒、黒色土ブロック若干
19 黒褐色土 やや暗い ローム粒若干・ロームブロック、褐色土
20 褐色土 ロームブロック
21 —
22 暗褐色土

SS106 主体部 BB´

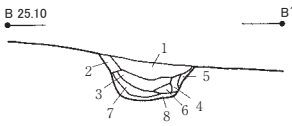
1 暗茶褐色土 ロームブロック若干
2 黒褐色土 ローム粒若干
3 暗黄色土 ロームブロック・ローム粒
4 暗茶色土 ローム粒・ローム小ブロック
5 暗黄褐色土
6 暗黄褐色土
7 黒褐色土 褐色土粒土多量、ロームブロック若干
8 黒褐色土 褐色土粒土多量、ロームブロック若干
9 暗黄褐色土 ロームブロック
10 暗茶褐色土 ロームブロック・ローム粒、黒褐色土
11 暗黄褐色土 ロームブロック
12 —
13 暗黄褐色土 ロームブロック、黒褐色土ブロック
14 —

Fig.158　SS106 遺構 (2) 実測図

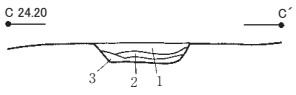




SS107AA´
1 —
2 —
3 —
4 —



SS107BB´
1 —
2 —
3 —
4 —
5 —
6 —
7 —
8 —



SS107CC´
1 —
2 —
3 —

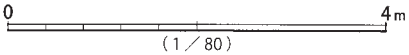


Fig.159　SS107 遺構実測図

あったことも想定しうる。以上のことから、土器は墳丘頂部への囲繞は考えにくく、墳丘裾か、周溝内に置かれた可能性を示しておく。

帰属時期は、周溝出土土器から草刈２式期の所産と考えられる。

SS113　セ 28 地区（Fig.172、PL.164）

S9-55 付近に位置する方墳である。調査区の西寄り、標高 27m 程の最高位に位置する。西側に SS112、東側に SS114 が主軸を同様にして近接する。SM1003、SM1127、SK250 と重複し、SK250 以外、何れの遺構に対しても本遺構が古い。SK250 は本遺構の周溝外周に沿って位置しており、近い時期の遺構である可能性がある。本遺構は、発掘調査時にはセ 28-290 と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、方台部が隅丸方形を呈し、北側でやや歪んだ形状となる。周溝は全周するとみられ、周溝幅は広狭がみられるが、規則性は認められない。規模は方台部が（7.30）m×（7.04）m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で 0.64m・0.38m、0.10m、東溝が 0.66m・0.48m、0.10m、南溝が 0.70m・0.48m、0.13m、西溝が 1.12m・0.70m、0.24m を測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向から N-27°-E である。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、1 が鉢形土器で周溝覆土からの出土である。

帰属時期は、出土土器と墳丘形状から、草刈 1 式期の所産と考えられる。

SS114　セ 28 地区（Fig.173～174、PL.52～53・164・182）

S10-00 付近に位置する方形周溝墓である。調査区西寄りの、標高 26m 程の高位に位置する。西側に SS113 が主軸方位を同様にして近接する。SM1003、SM1007 と重複するが、何れの遺構に対しても本遺構が古い。本遺構は、発掘調査時にはセ 28-134A と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、方台部が隅丸の長方形を呈し、周溝は全周するものとみられ、周溝幅は、外周で中央が幅広で、隅に向けて狭まる傾向が認められる。規模は方台部が 10.84m×8.60m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で 1.77m・0.67m、0.30m、東溝が 1.32m・0.90m、0.30m、南溝が 1.55m・0.90m、0.30m、西溝が 2.40m・1.45m、0.60m を測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。また、方台部上位は大きく削平されているとみられ、東側に傾斜している。周溝底レベルは東側周溝が西に対し 1m 程低く造られている。主軸方位は方台部長軸方向から N-20°-E である。埋葬施設は方台部では検出せず、周溝内では西側周溝北寄りと、北側周溝と東寄りで落ち込みが認めらえれ、主体部である可能性が残るが、明確な根拠が求められない。

出土遺物は西側周溝に集中している。1・2 は甕形土器、3 が壺形土器で、頸部に断面三角形の突帯を持ち、底部は焼成後に打ち欠いて穿孔している。

4 が鉢形土器、5～7 が甕形土器、8 が内傾する部位で、上位にヘラ状工具刺突による刻みを施し、下位沈線区画に隣接して単節斜縄文がみられ、鉢形土器としたいが明確ではない。9 は折り返し口縁を持つ鉢形土器である。

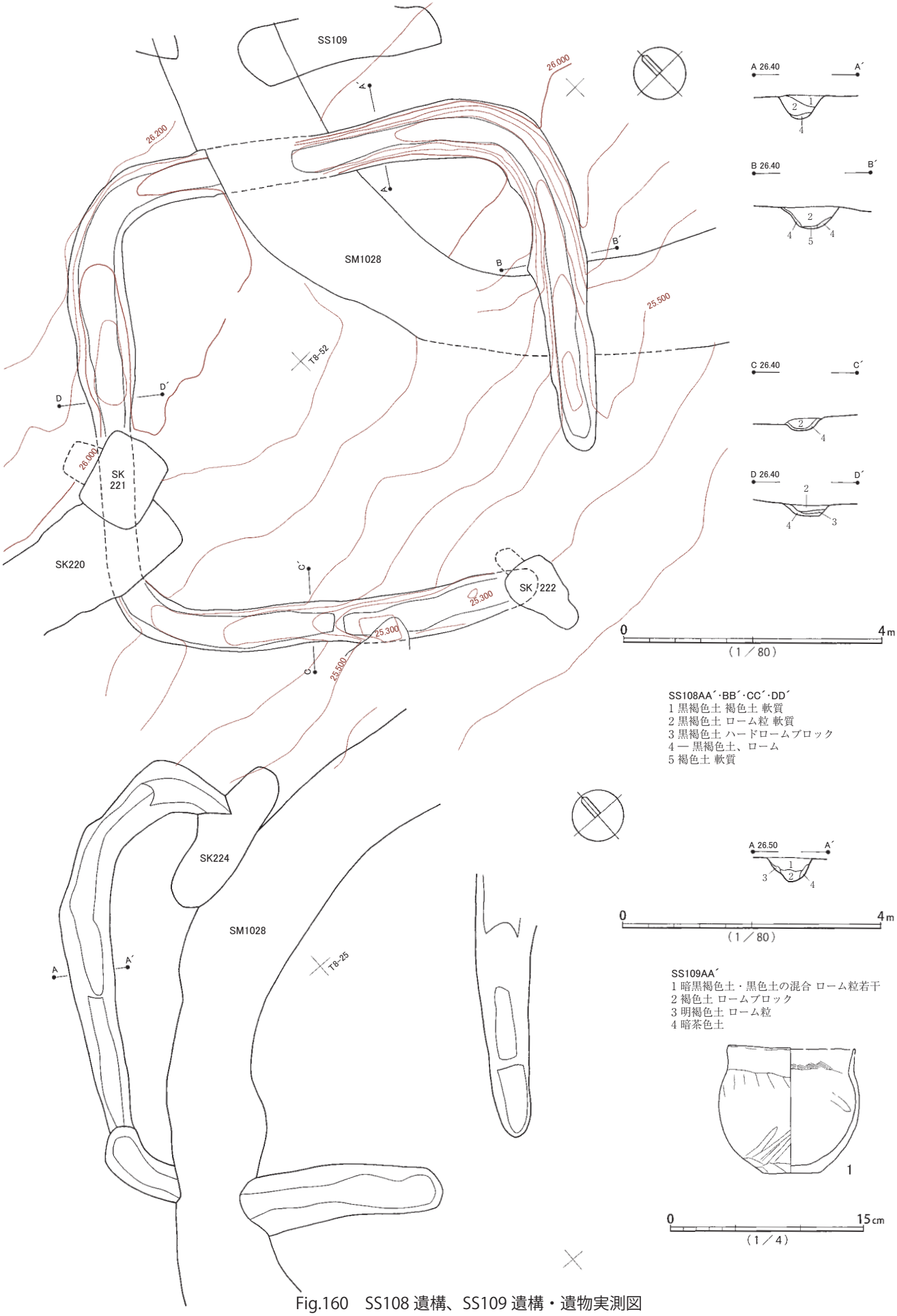


Fig.160　SS108 遺構、SS109 遺構・遺物実測図

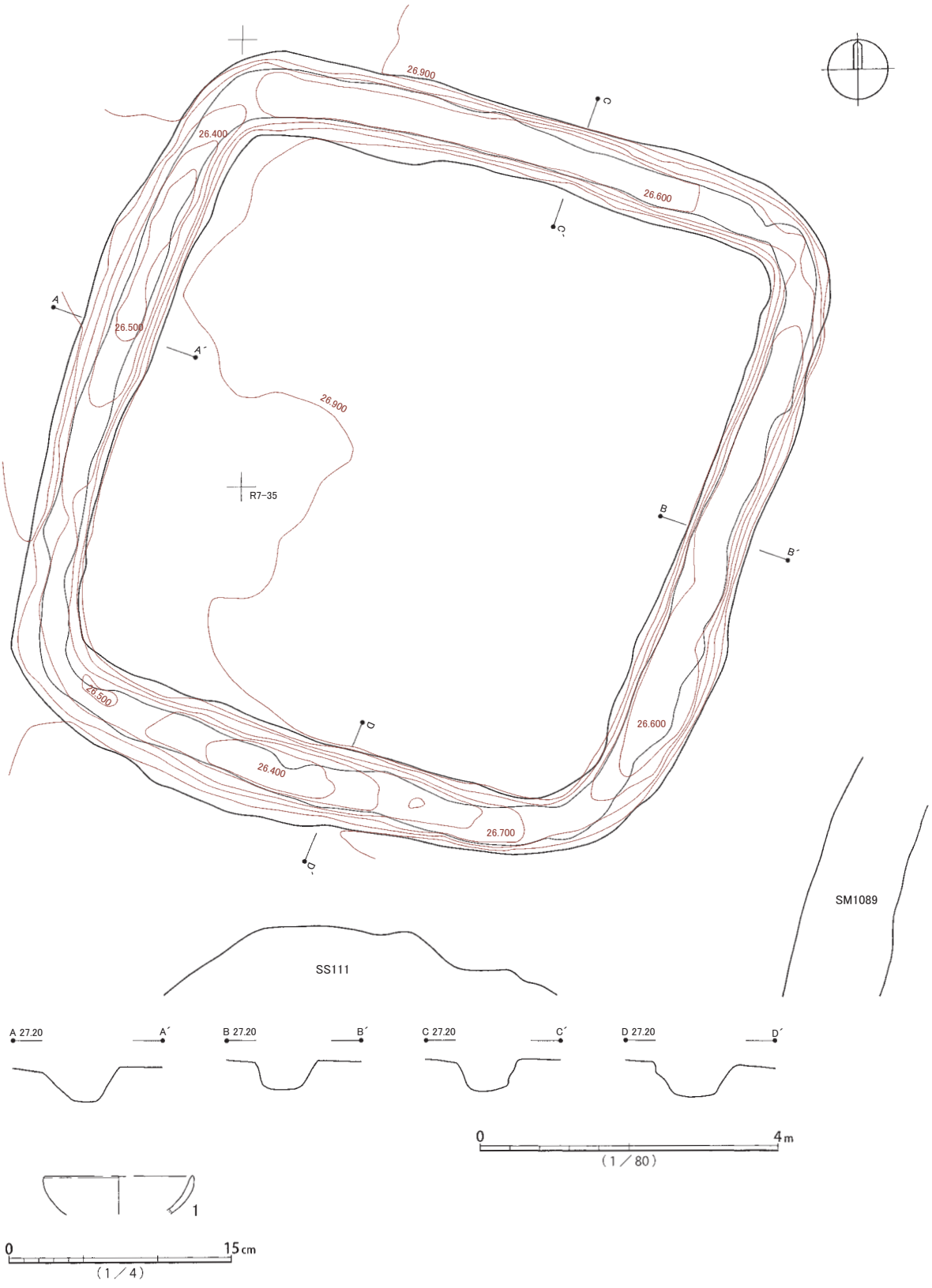
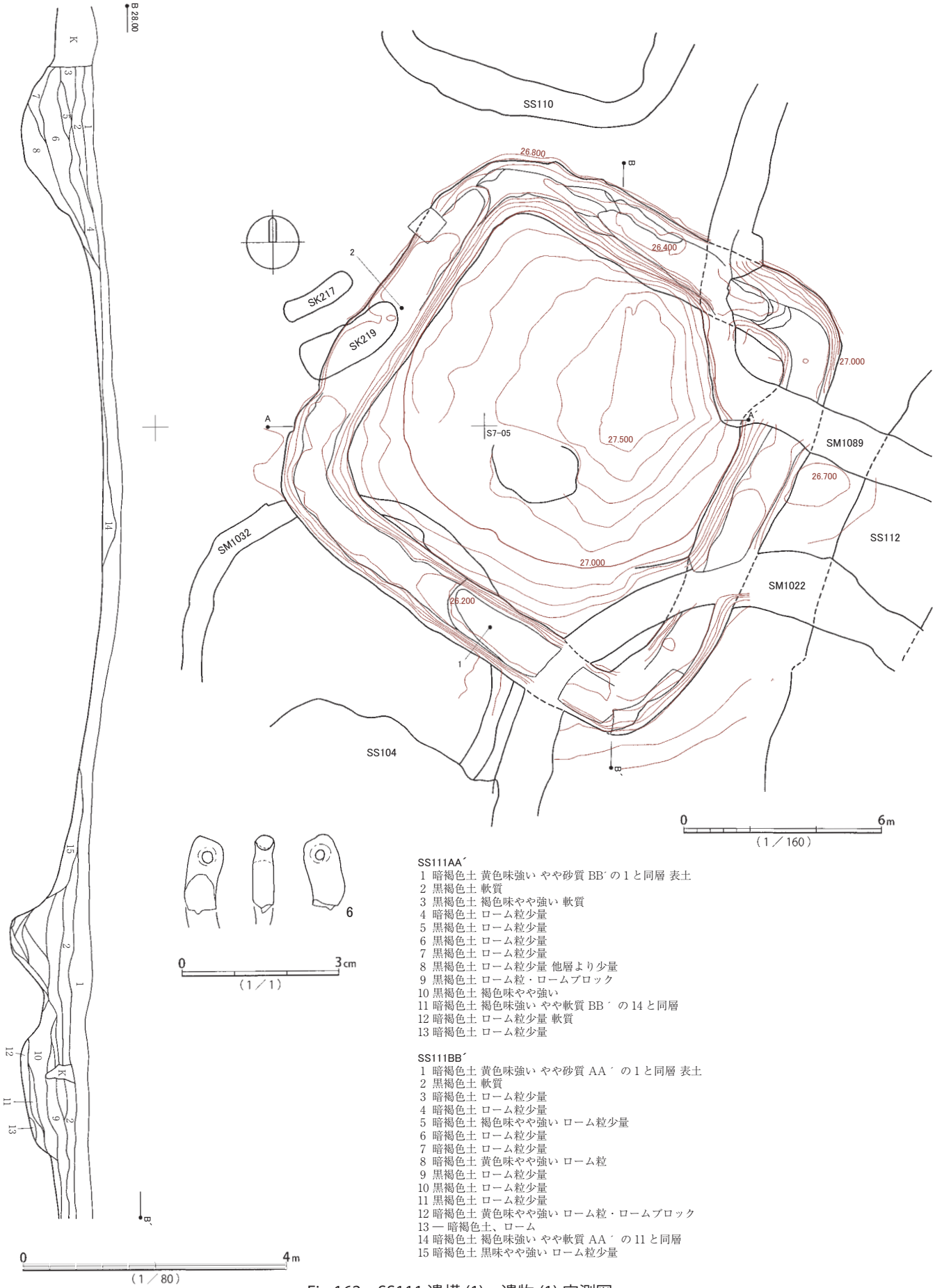


Fig.161　SS110 遺構・遺物実測図



SS111AA´
1 暗褐色土 黄色味強い やや砂質 BB´ の 1 と同層 表土
2 黒褐色土 軟質
3 黒褐色土 褐色味やや強い 軟質
4 暗褐色土 ローム粒少量
5 黒褐色土 ローム粒少量
6 黒褐色土 ローム粒少量
7 黒褐色土 ローム粒少量
8 黒褐色土 ローム粒少量 他層より少量
9 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック
10 黒褐色土 褐色味やや強い
11 暗褐色土 褐色味強い やや軟質 BB´ の 14 と同層
12 暗褐色土 ローム粒少量 軟質
13 暗褐色土 ローム粒少量

SS111BB´
1 暗褐色土 黄色味強い やや砂質 AA´ の 1 と同層 表土
2 黒褐色土 軟質
3 暗褐色土 ローム粒少量
4 暗褐色土 ローム粒少量
5 暗褐色土 褐色味やや強い ローム粒少量
6 暗褐色土 ローム粒少量
7 暗褐色土 ローム粒少量
8 暗褐色土 黄色味やや強い ローム粒
9 黒褐色土 ローム粒少量
10 黒褐色土 ローム粒少量
11 黒褐色土 ローム粒少量
12 暗褐色土 黄色味やや強い ローム粒・ロームブロック
13 ― 暗褐色土、ローム
14 暗褐色土 褐色味強い やや軟質 AA´ の 11 と同層
15 暗褐色土 黒味やや強い ローム粒少量

Fig.162　SS111 遺構 (1)・遺物 (1) 実測図

帰属時期は、出土土器から草刈２式期の所産と考えられる。

SS115　セ 28 地区（Fig.175～176、PL.53・164）

S11-88 付近に位置する方墳である。調査区中央寄りの、南側に開口する小谷に面して位置する。西側で SM1007、東側で掘立柱建物跡、南側で竪穴建物跡と重複し、何れの遺構に対しても本遺構が古い。本遺構は、発掘調査時にはセ 28-125 と呼称されている。

平面形状は、方台部が僅かに隅の丸い方形を呈する。周溝は全周するとみられ、周溝幅はほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が 8.60m×8.40m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で 1.12m・0.60m、0.20m、東溝が 0.96m・0.66m、0.35m、南溝が 1.04m・0.66m、0.20m を測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向から N-88°-W である。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、1 が高杯形土器、2・3 は甕形土器である。いずれも周溝覆土上層からの出土である。

帰属時期は、高杯形土器から草刈３式期の所産と考えられる。

SS116　セ 28 地区（Fig.177、PL.53・164・182）

T11-55 付近に位置する方形周溝墓である。調査区中央寄り、南側に開口する小谷に面した、標高 26m 程の傾斜変換点に位置する。西側に SS117 が近接し、南側に小谷を巡る溝状遺構、掘立柱建物跡を含むピット群が近接、または重複する。本遺構は、発掘調査時にはセ 28-130 と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、南側で周溝を検出していないため不確定だが、方台部は方形を呈するとみられる。周溝は隅も含めほぼ均等幅でコの字状にめぐる。規模は方台部が東西軸で 9.02m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で 1.68m・1.08m、0.48m、東溝が 1.18m・0.72m、0.21m、西溝が 2.24m・1.00m、0.21m を測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向から N-65°-W である。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、1～4 が壺形土器で、周溝覆土中からの出土である。

帰属時期は、出土土器と遺構形状から中台２式期の所産と考えられる。

SS117　セ 28 地区（Fig.178～179、PL.53・164・182・215）

T10-57 付近に位置する方形周溝墓である。調査区中央寄り、東側で小谷に面する標高 25m 程の傾斜変換点に位置する。東側に SS116 が、南側に小谷をめぐる溝状遺構が近接する。北側で SM1007 と、南側でセ 28-268 掘立柱建物跡と重複し、何れの遺構に対しても本遺構が古い。

本遺構は、発掘調査時にはセ 28-121 と呼称されている。事実記載にあたり北東側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、方台部が長方形を呈し、周溝は全周するとみられる。周溝幅は隅を除きほぼ均等に方台部をめぐる。規模は方台部が（12.30）m×10.80m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、東溝が 1.70m・1.15m、0.60m、南溝が 1.98m・1.18m、0.50m、西溝が 2.50m・1.95m、0.30m を測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形状は逆台形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向から N-19°-E である。埋葬施設は

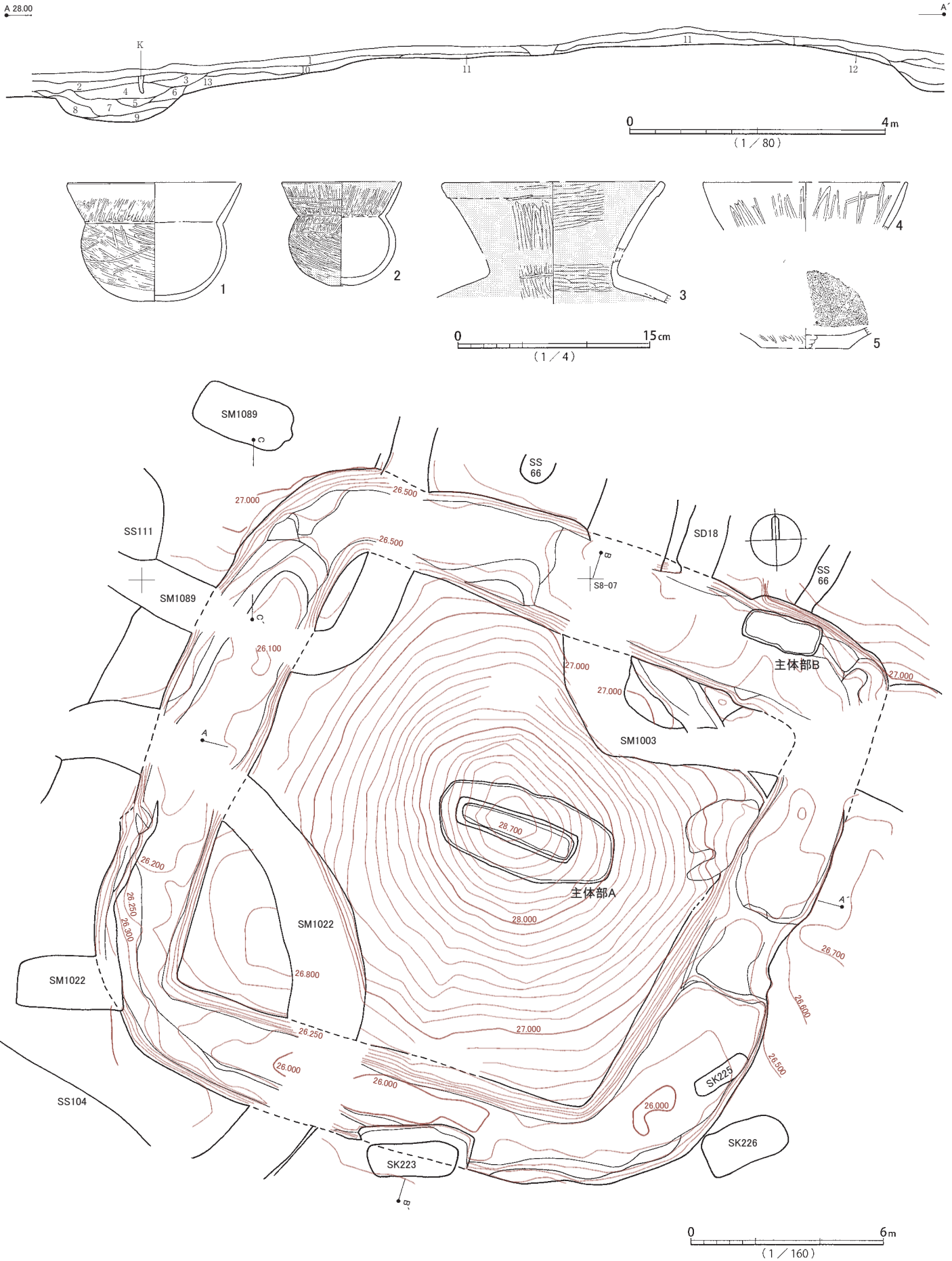
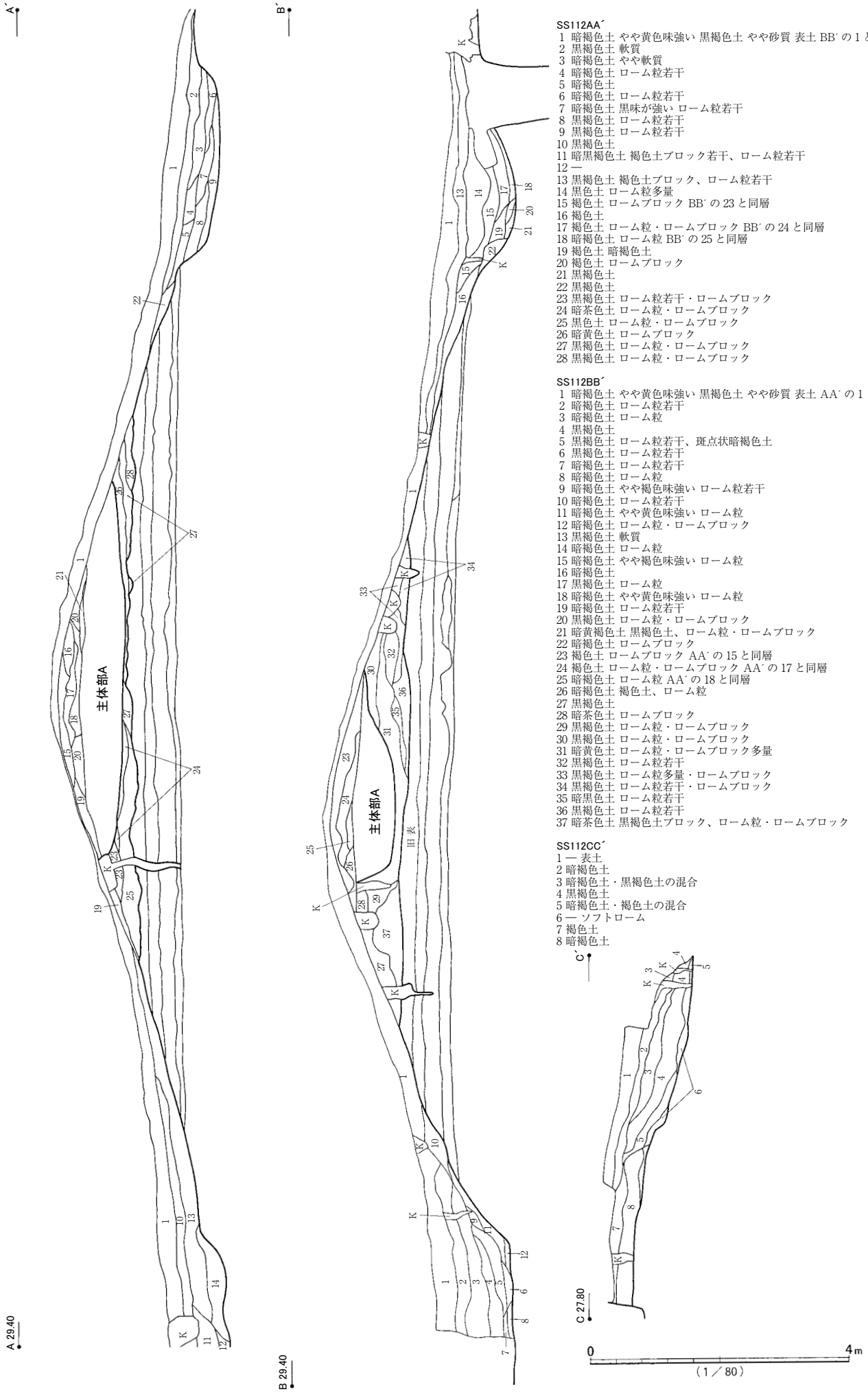


Fig.163　SS111 遺構 (2)・遺物 (2)、SS112 遺構 (1) 実測図

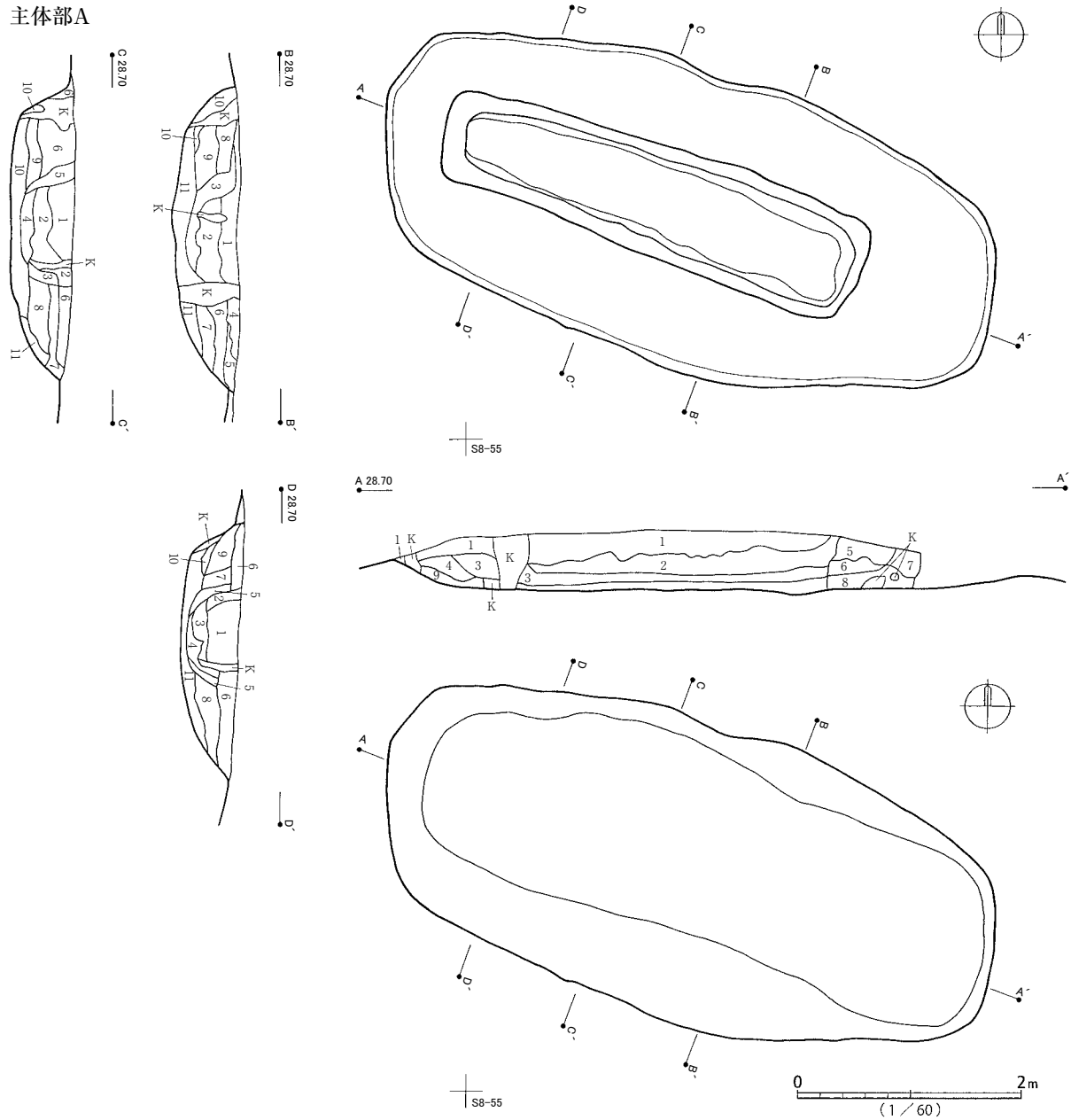


SS112AA´
1 暗褐色土 やや黄色味強い 黒褐色土 やや砂質 表土 BB´ の 1 と同層
2 黒褐色土 軟質
3 暗褐色土 やや軟質
4 暗褐色土 ローム粒若干
5 暗褐色土
6 暗褐色土 ローム粒若干
7 暗褐色土 黒味が強い ローム粒若干
8 黒褐色土 ローム粒若干
9 黒褐色土 ローム粒若干
10 黒褐色土
11 暗黒褐色土 褐色土ブロック若干、ローム粒若干
12 ―
13 黒褐色土 褐色土ブロック、ローム粒若干
14 黒色土 ローム粒多量
15 褐色土 ロームブロック BB´ の 23 と同層
16 褐色土
17 褐色土 ローム粒・ロームブロック BB´ の 24 と同層
18 暗褐色土 ローム粒 BB´ の 25 と同層
19 褐色土 暗褐色土
20 褐色土 ロームブロック
21 黒褐色土
22 黒褐色土
23 黒褐色土 ローム粒若干・ロームブロック
24 暗茶色土 ローム粒・ロームブロック
25 黒色土 ローム粒・ロームブロック
26 暗黄色土 ロームブロック
27 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック
28 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック

SS112BB´
1 暗褐色土 やや黄色味強い 黒褐色土 やや砂質 表土 AA´ の 1 と同層
2 暗褐色土 ローム粒若干
3 暗褐色土 ローム粒
4 黒褐色土
5 黒褐色土 ローム粒若干、斑点状暗褐色土
6 黒褐色土 ローム粒若干
7 暗褐色土 ローム粒若干
8 暗褐色土 ローム粒
9 暗褐色土 やや褐色味強い ローム粒若干
10 暗褐色土 ローム粒若干
11 暗褐色土 やや黄色味強い ローム粒
12 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック
13 黒褐色土 軟質
14 暗褐色土 ローム粒
15 暗褐色土 やや褐色味強い ローム粒
16 暗褐色土
17 黒褐色土 ローム粒
18 暗褐色土 やや黄色味強い ローム粒
19 暗褐色土 ローム粒若干
20 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック
21 暗黄褐色土 黒褐色土、ローム粒・ロームブロック
22 暗褐色土 ロームブロック
23 褐色土 ロームブロック AA´ の 15 と同層
24 褐色土 ローム粒・ロームブロック AA´ の 17 と同層
25 暗褐色土 ローム粒 AA´ の 18 と同層
26 暗褐色土 褐色土、ローム粒
27 黒褐色土
28 暗茶色土 ロームブロック
29 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック
30 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック
31 暗黄色土 ローム粒・ロームブロック多量
32 黒褐色土 ローム粒若干
33 黒褐色土 ローム粒多量・ロームブロック
34 黒褐色土 ローム粒若干・ロームブロック
35 暗黒色土 ローム粒若干
36 黒褐色土 ローム粒若干
37 暗茶色土 黒褐色土ブロック、ローム粒・ロームブロック

SS112CC´
1 ― 表土
2 暗褐色土
3 暗褐色土・黒褐色土の混合
4 黒褐色土
5 暗褐色土・褐色土の混合
6 ― ソフトローム
7 褐色土
8 暗褐色土

Fig.164　SS112 遺構 (2) 実測図



SS112 主体部 A AA´
1 暗褐色土 黒褐色土ブロック、ローム粒多量・ロームブロック小多量 BB´・CC´・DD´の1と同層
2 暗褐色土 褐色土粒ブロック、ローム粒多量 BB´・CC´の2、DD´の3と同層
3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック若干 やや軟質 BB´の3、CC´・DD´の4と同層
4 褐色土 ローム粒・ロームブロック 軟質
5 暗褐色土 ローム粒多量
6 ―
7 暗褐色土 ローム粒多量
8 暗茶褐色土 褐色土、ローム粒・ロームブロック
9 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック BB´の11、CC´の10、DD´の11と同層

SS112 主体部 A BB´
1 暗褐色土 黒褐色土ブロック、ローム粒多量・ロームブロック小多量 AA´の1と同層
2 暗褐色土 褐色土粒ブロック、ローム粒多量 AA´の2と同層
3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック若干 やや軟質 AA´の3と同層
4 褐色土
5 黒褐色土 ローム粒
6 褐色土 黒色土ブロック、ローム粒
7 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック
8 暗褐色土 褐色土・暗黒褐色土ブロック、ローム粒・ロームブロック
9 暗茶褐色土 褐色土粒、ローム粒・ロームブロック
10 黒褐色土 ローム粒
11 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック AA´の9と同層

SS112 主体部 A CC´
1 暗褐色土 黒褐色土ブロック、ローム粒多量・ロームブロック小多量 AA´の1と同層
2 暗褐色土 褐色土粒ブロック、ローム粒多量 AA´の2と同層
3 ―
4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック若干 やや軟質 AA´の3と同層
5 ―
6 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック若干
7 ― ローム粒多量
8 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック
9 暗茶褐色土 ローム粒
10 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック AA´の9と同層
11 暗褐色土 ローム粒若干

SS112 主体部 A DD´
1 暗褐色土 黒褐色土ブロック、ローム粒多量・ロームブロック小多量 AA´の1と同層
2 褐色土 ローム粒
3 暗褐色土 褐色土粒ブロック、ローム粒多量 AA´の2と同層
4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック若干 やや軟質 AA´の3と同層
5 暗褐色土
6 黒褐色土 ローム粒
7 暗黒褐色土 褐色土ブロック、ローム粒
8 黒褐色土 ローム粒多量・ロームブロック大粒
9 黒色土 ローム粒若干
10 褐色土
11 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック AA´の9と同層

Fig.165　SS112 遺構 (3) 実測図

方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、東西周溝より出土しており、1・2、4～7、10・12・13 が壺形土器で、3 が甕形土器、8・11 が杯形土器、9 が甕形土器、14 は不明石製品である。出土位置は同一点から、複数の遺物が出土していることになっており、現場図面と遺物№の関係に疑問が残るが、ここではそのまま示している。

帰属時期は、土器から中台 2 式期の所産と考えられる。

SS118　セ 28 地区（Fig.180～181、PL.53・182～183）

U10-50 付近に位置する前方後方墳である。調査区南部の小谷に面した標高 24m 程の傾斜変換点に位置する。北側に SS117、南側に SS119 が近接し、列状に並ぶ。南側で、掘立柱建物跡であるセ 28-269、セ 28-270 と重複し、何れの遺構に対しても本遺構が古い。本遺構は、発掘調査時にはセ 28-120 と呼称されている。以下前方部を西側として、各部を記載する。

平面形状は、東側で不明瞭となるが、後方部は方形を呈し、西辺の中央でばち形の前方部が造出されている。周溝は、東側で検出されておらず、これは東に下る斜面によるものか、溝状遺構の影響か、または元来から無いものなのか判断し難いが、ここでは地形的な要因を重視し、元来は東側周溝が巡っていたものとして扱う。よって、周溝は西側前方部が陸橋状に張出す部分で断絶する。周溝幅は、後方部の南北で、中央が広く隅に向かって狭くなる傾向で共通する。また、西側周溝は、前方部を挟んだ左右で同じ形状を呈する。規模は全長が（14.48）m、幅が 13.80m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、東溝が 2.60m・1.68m、0.30m、西溝が 1.68m・1.32m、0.10m を測る。周溝底面はほぼ平坦だが、前方部のいわゆるくびれ部で、ひときわ深く掘り込まれており、断面形状では、墳丘側が深く、外側に向けてなだらかに浅くなる特徴を示す。南北周溝の断面形は逆台形、レンズ状を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向から N-53°-W である。埋葬施設は方台部、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、1・6 が壺形土器、2・4・5 が甕形土器、3 が高杯形土器杯部である。明確に本遺構に伴うと判断できる遺物は提示できないが、調査担当者によると、周溝内より土器を出土したが、調査期間中に現場で盗難にあったとの情報を得ている。

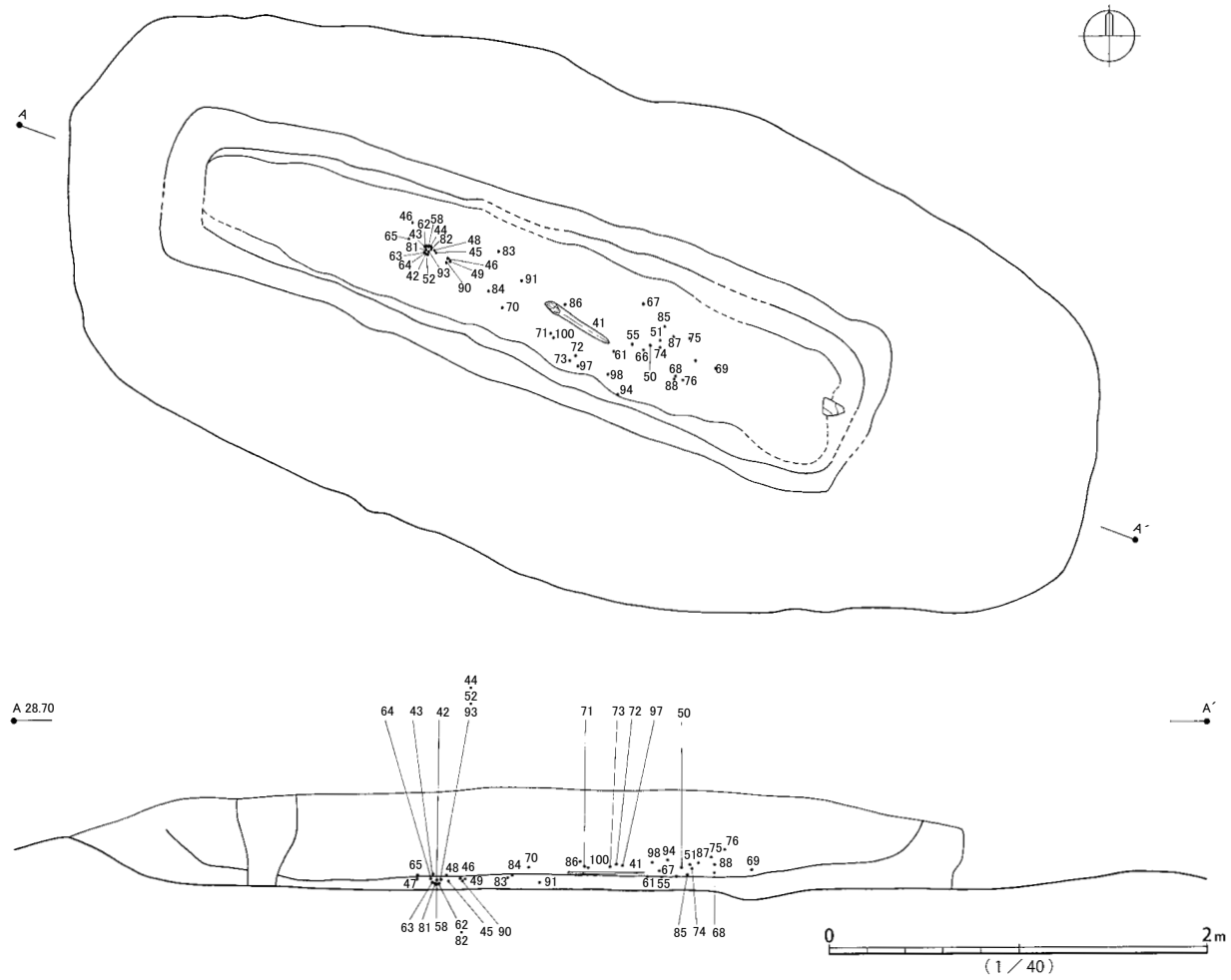
帰属時期は、周辺遺構と形状から中台 2 式期の所産としておく。

SS119　セ 28 地区（Fig.181～182、PL.53～54・164）

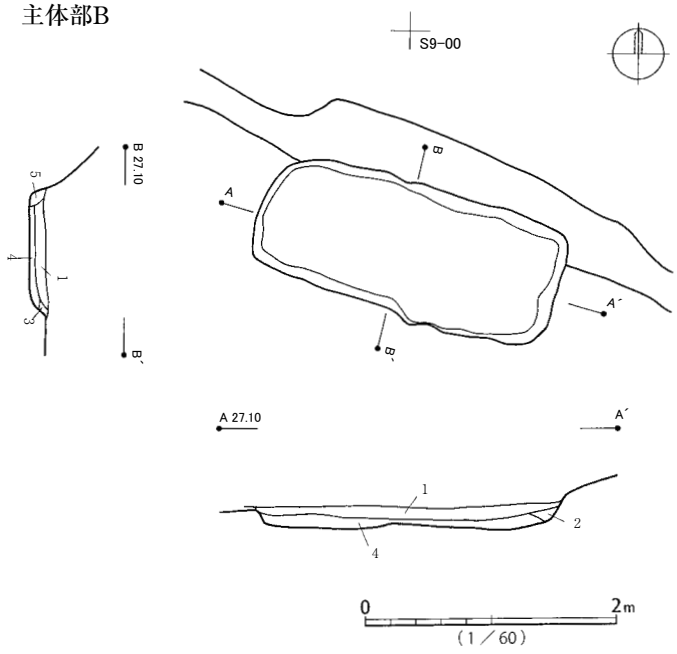
V10-00 付近に位置する前方後方墳である。調査区の南端、南東に下る斜面への傾斜変換点に位置する。SS118 が隣接する。本遺構は、発掘調査時にはセ 28-128 と呼称されている。事実記載にあたり北西側を北辺、北側周溝とする。

平面形状は、南側で不明瞭だが、方形の後円部に台形の前方部が造出されている。周溝は南側で立ち上がりが検出されていないが、確実に全周する。周溝幅は、前方部より、後方部が広く造られている。前方部は、墳丘に相似するのではなく、方形に近いプランを呈する。後方部は、南側で狭くなるが、それ以外の部位ではほぼ均等にめぐる。規模は全長が 16.36m、幅が 10.12m、周溝の上・下端幅、確認面からの深さは、北側周溝で 0.78m・計測不能、0.10m、東溝が 2.28m・1.24m、0.60m、南溝の深さが 0.70m、西溝が 1.80m・0.88m、0.40m を測る。周溝底面は平坦が少なく、断面形状はU字形を呈する。

墳丘範囲では盛土を検出していない。主軸方位は方台部長軸方向から N-36°-W である。埋葬施設



主体部B



SS112 主体部 B AA´·BB´
1 黒色土 褐色土ブロック、ローム粒若干
2 暗褐色土 ローム粒
3 黒色土 ローム粒
4 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック
5 黒褐色土 ローム粒

Fig.166　SS112 遺物出土詳細 (1)・遺構 (4) 実測図

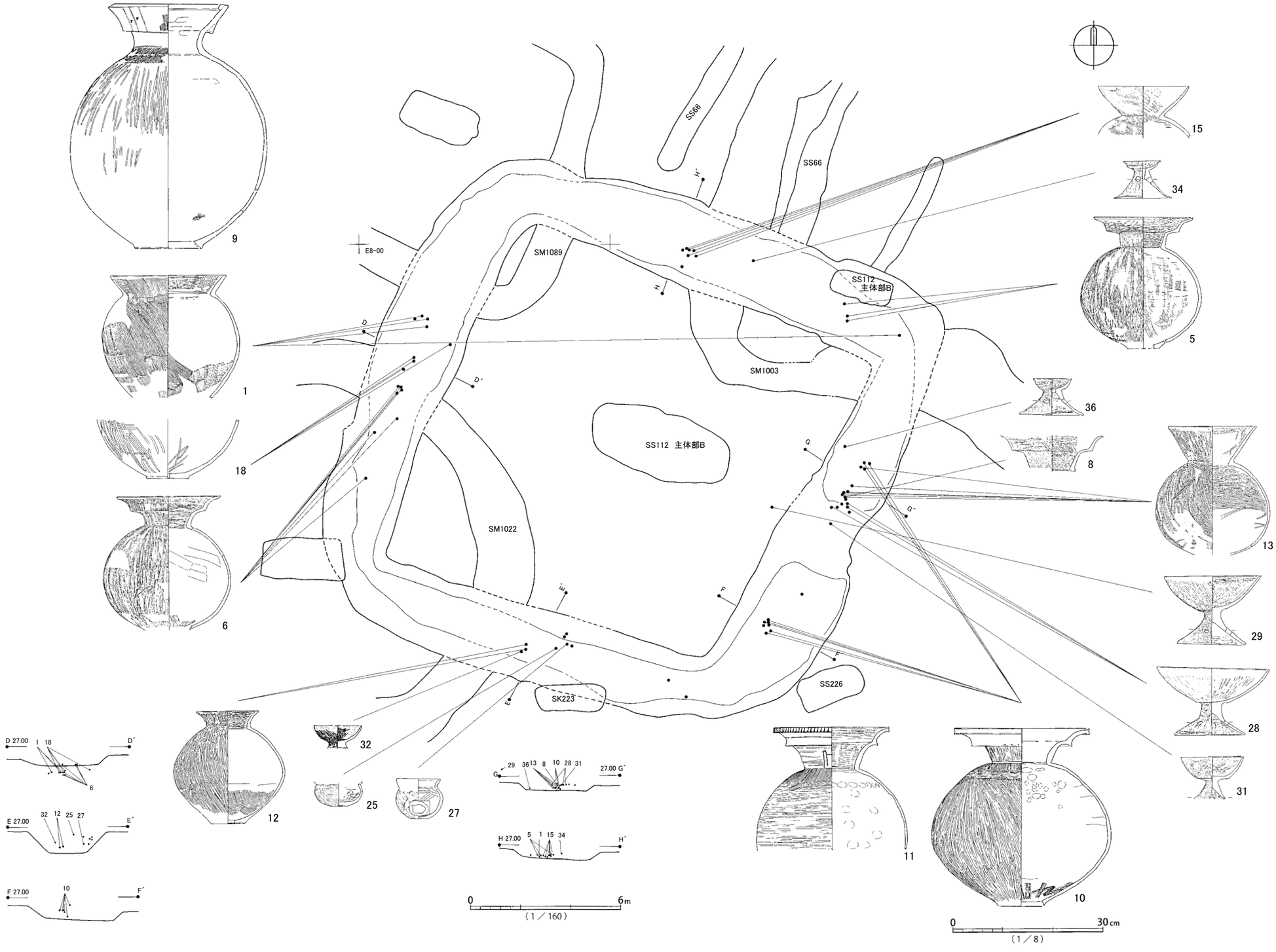


Fig.167　SS112 遺物出土詳細 (2) 実測図

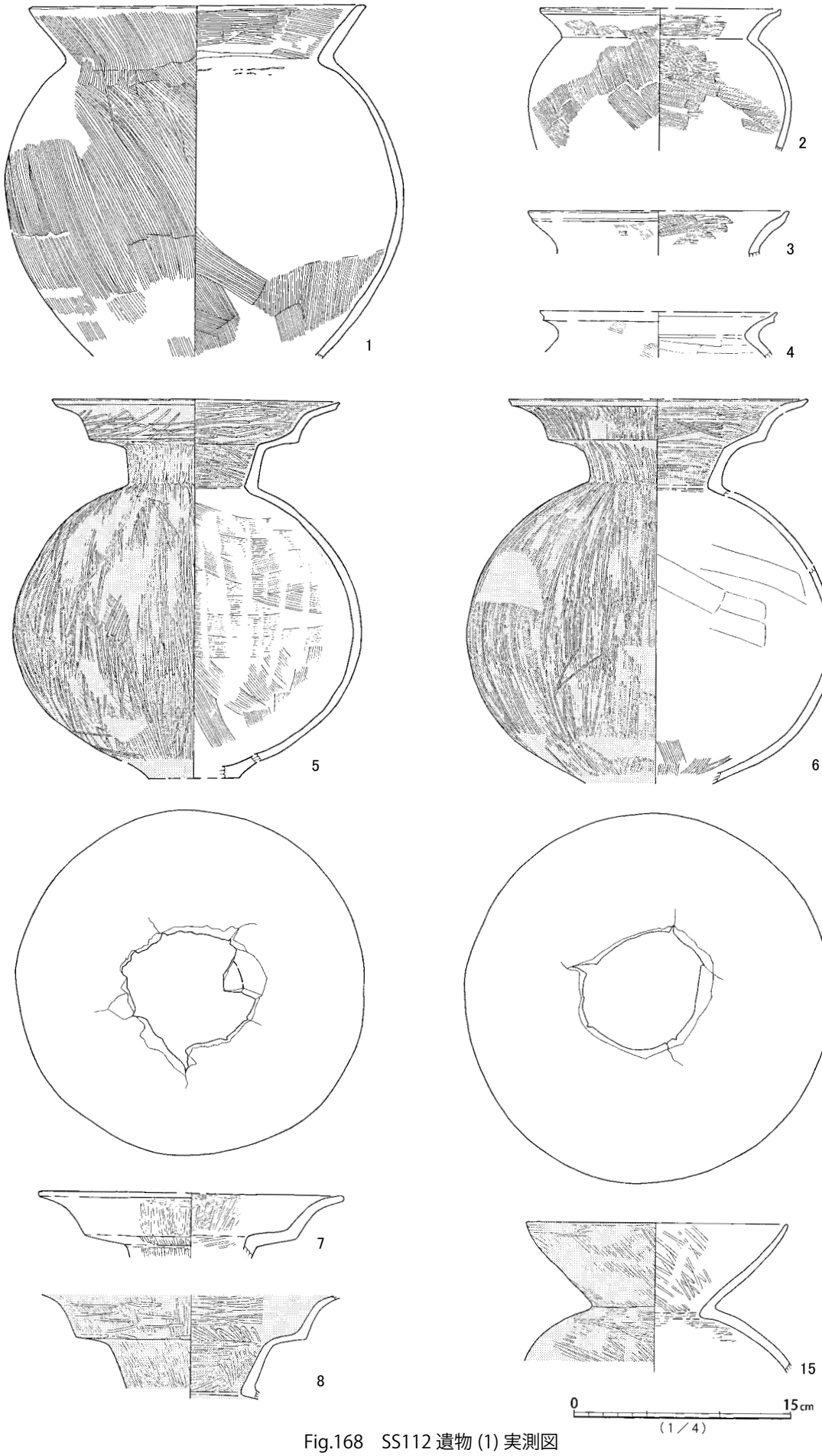


Fig.168　SS112 遺物 (1) 実測図

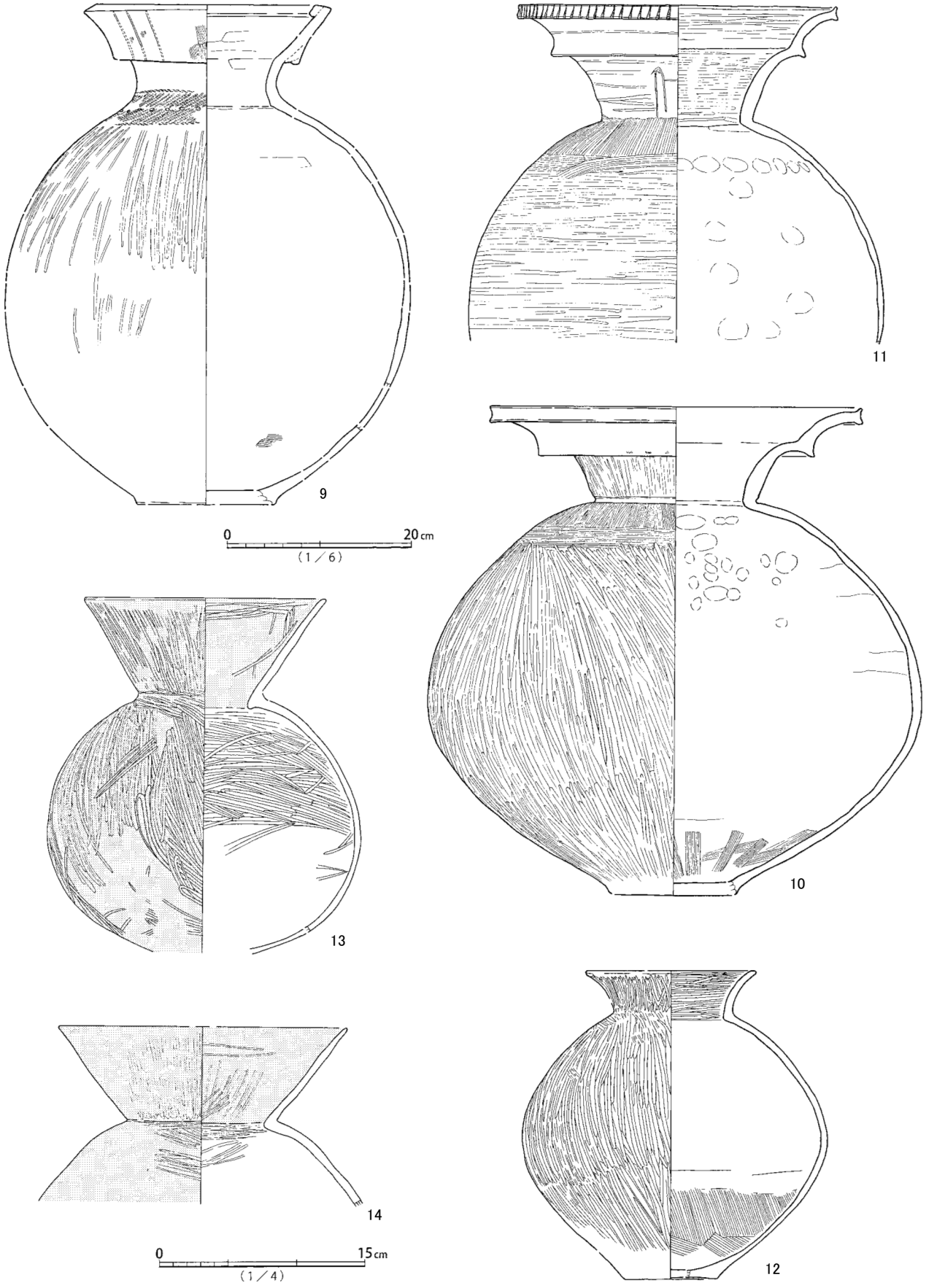


Fig.169　SS112 遺物 (2) 実測図

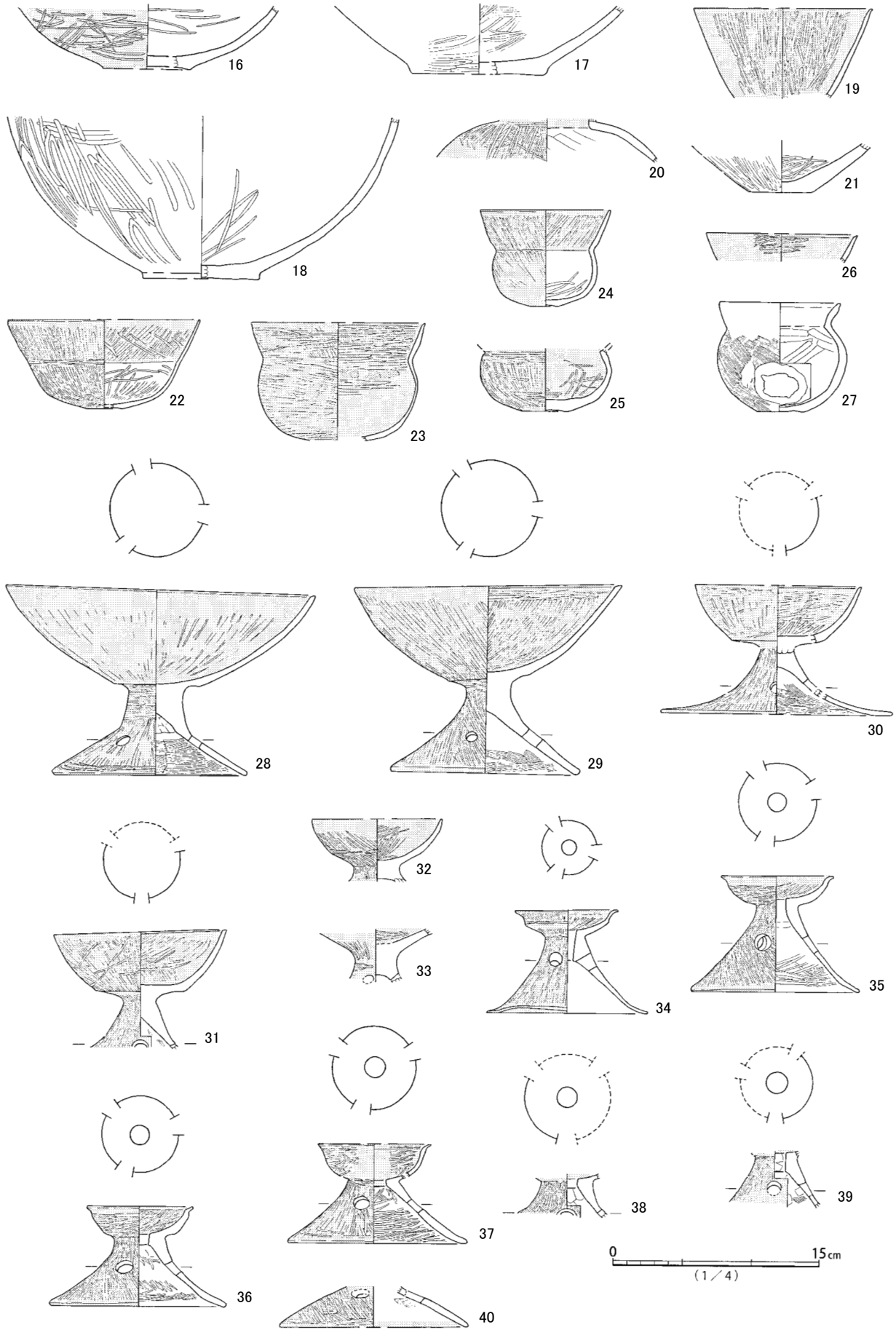


Fig.170　SS112 遺物 (3) 実測図

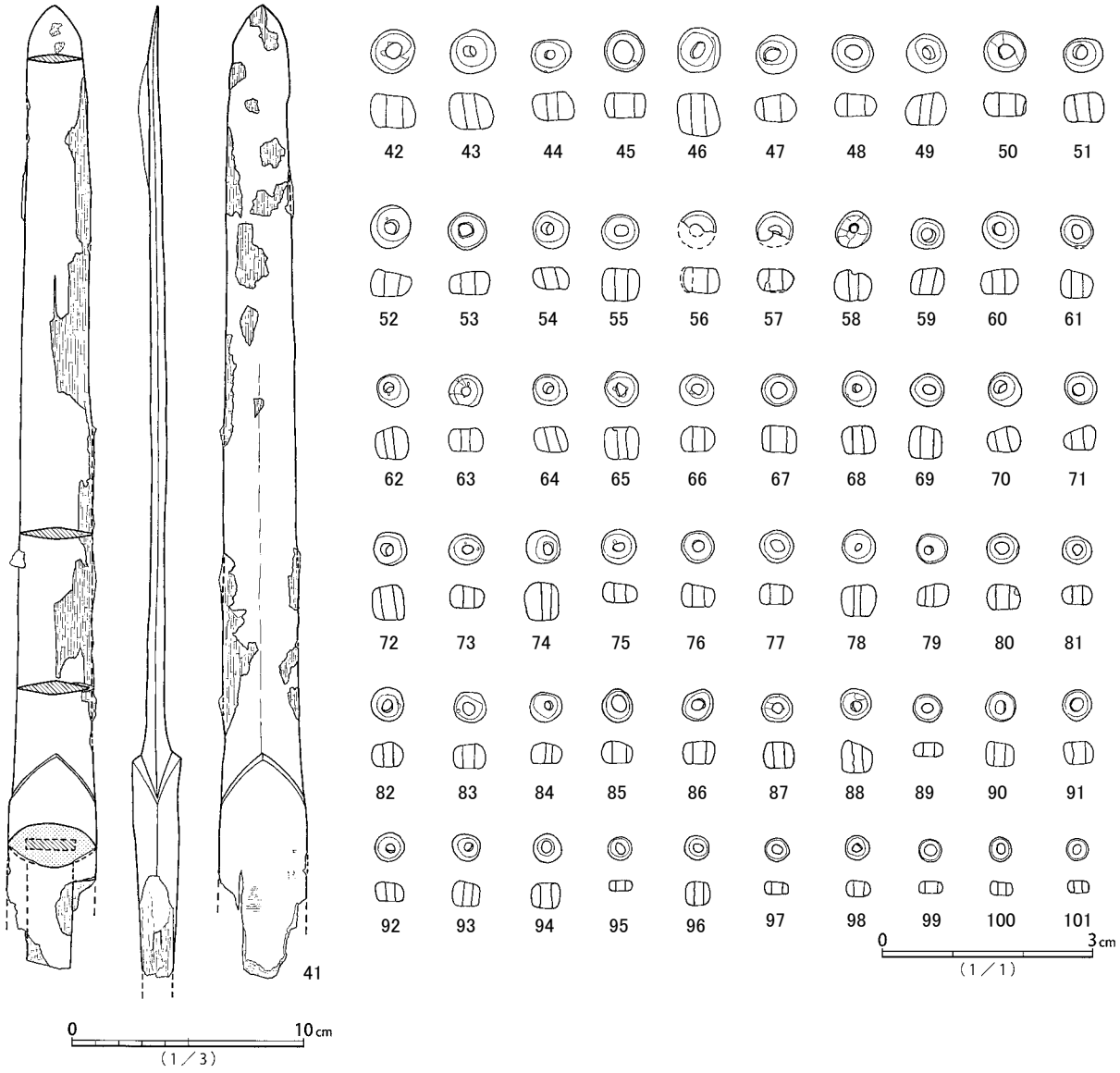
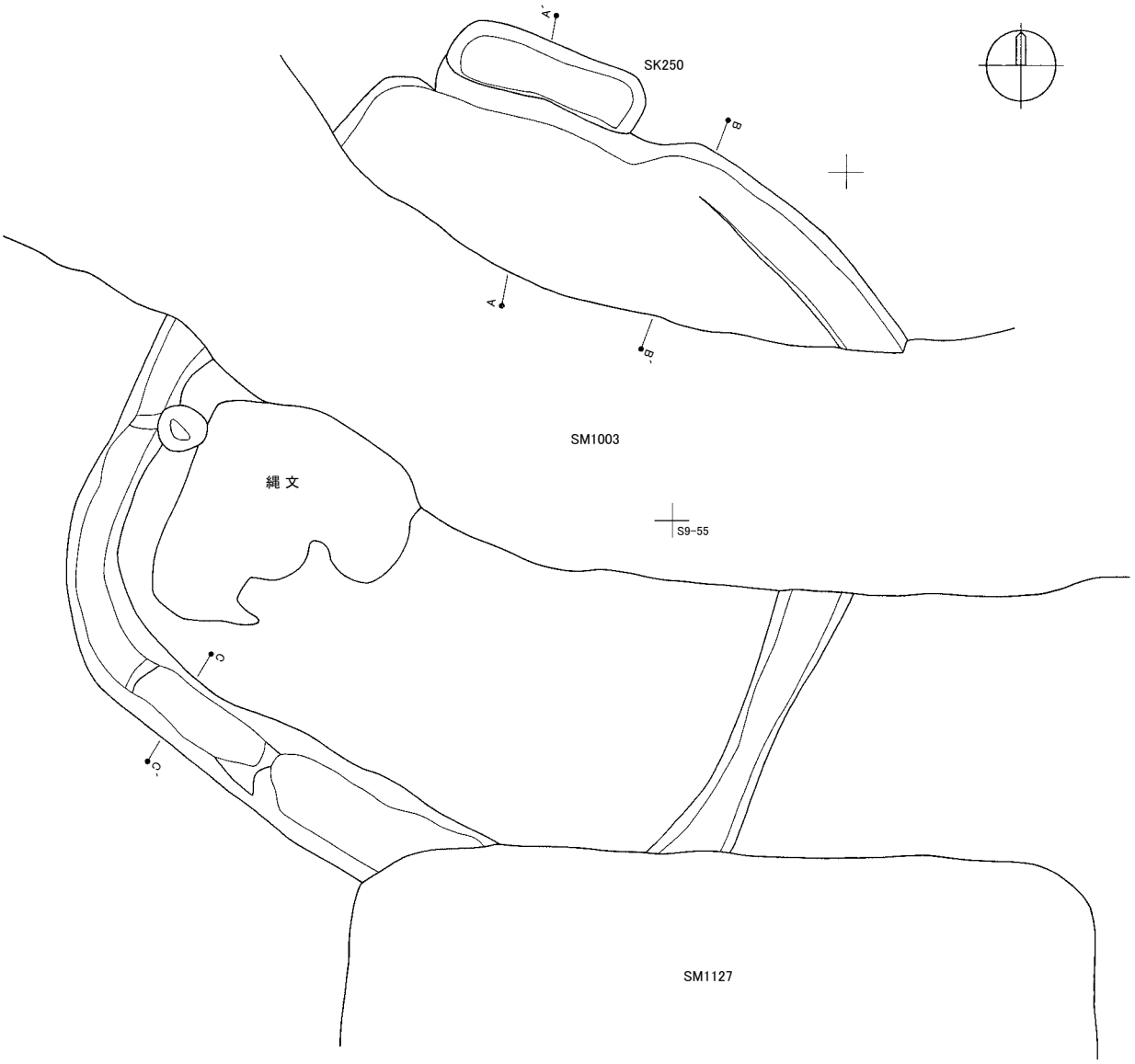


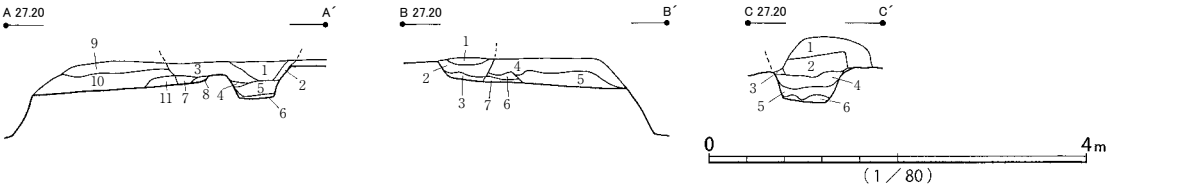
Fig.171　SS112 遺物 (4) 実測図

は墳丘、周溝内ともに検出していない。

出土遺物は、東側くびれ部でまとまっている。1・2が壺形土器で、1は底部を円形に焼成後穿孔している。3は甕形土器である。

帰属時期は、出土土器から中台２式期の所産と考えられる。





SS113·SK250AA´
1 黒色土
2 暗褐色土
3 黒褐色土
4 暗黒褐色土
5 暗黒褐色土 硬質
6 暗茶褐色土
7 黒褐色土
8 —
9 褐色土 ローム粒多量
10 明褐色土 ローム粒多量
11 —

SS113BB´
1 黒色土 ロームブロック・ローム粒
2 暗黒褐色土 ローム粒
3 —
4 褐色土 ローム粒
5 明褐色土 ローム粒
6 茶褐色土
7 黄褐色土

SS113CC´
1 — 表土
2 黒色土
3 —
4 黒色土
5 暗茶褐色土
6 黄褐色土

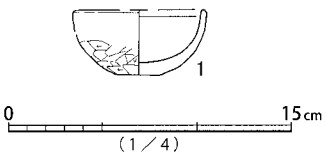
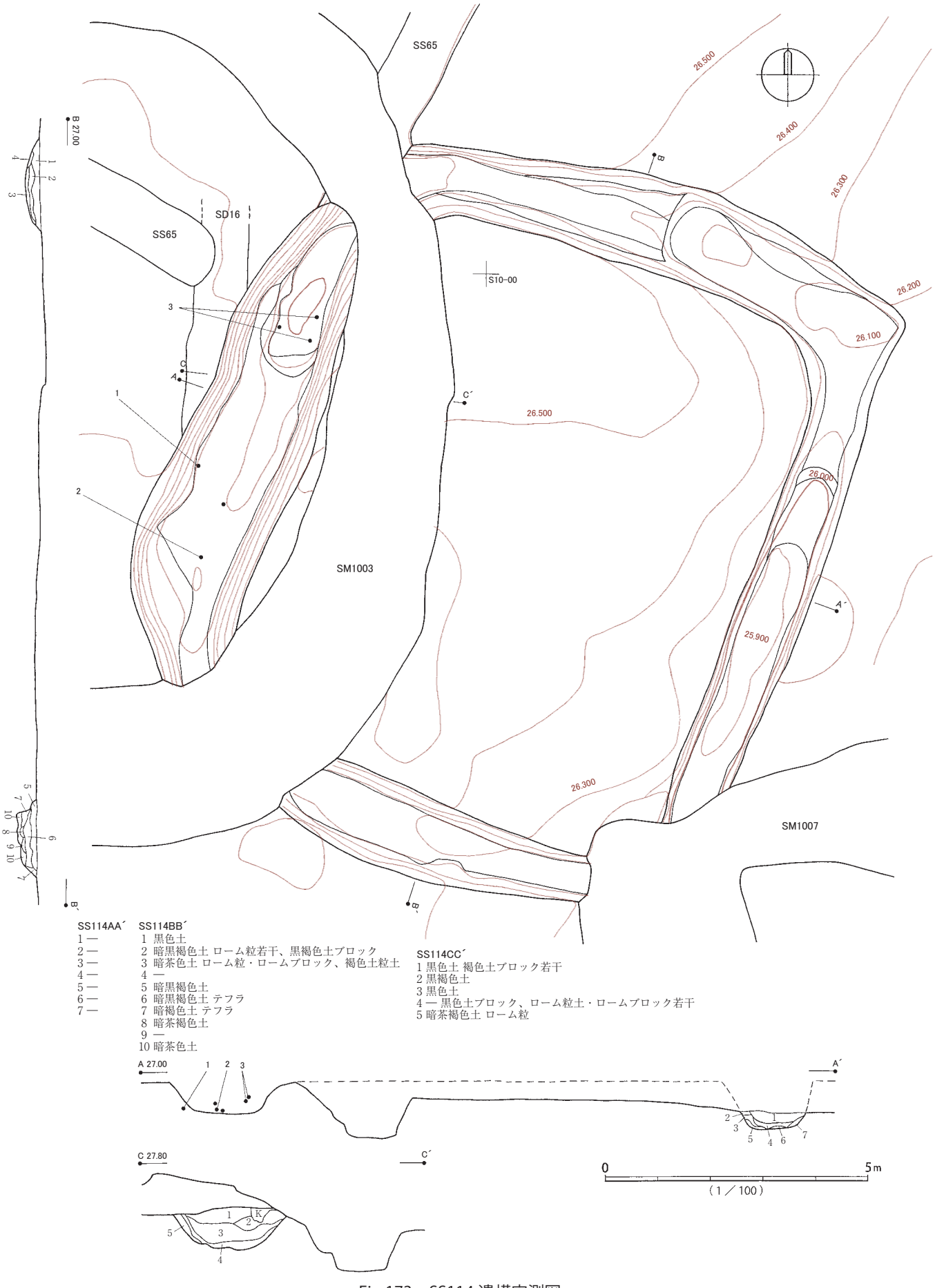


Fig.172　SS113 遺構・遺物、SK250 遺構実測図



SS114AA´
1 —
2 —
3 —
4 —
5 —
6 —
7 —

SS114BB´
1 黒色土
2 暗黒褐色土 ローム粒若干、黒褐色土ブロック
3 暗茶色土 ローム粒・ロームブロック、褐色土粒土
4 —
5 暗黒褐色土
6 暗黒褐色土 テフラ
7 暗褐色土 テフラ
8 暗茶褐色土
9 —
10 暗茶色土

SS114CC´
1 黒色土 褐色土ブロック若干
2 黒褐色土
3 黒色土
4 — 黒色土ブロック、ローム粒土・ロームブロック若干
5 暗茶褐色土 ローム粒

Fig.173　SS114 遺構実測図

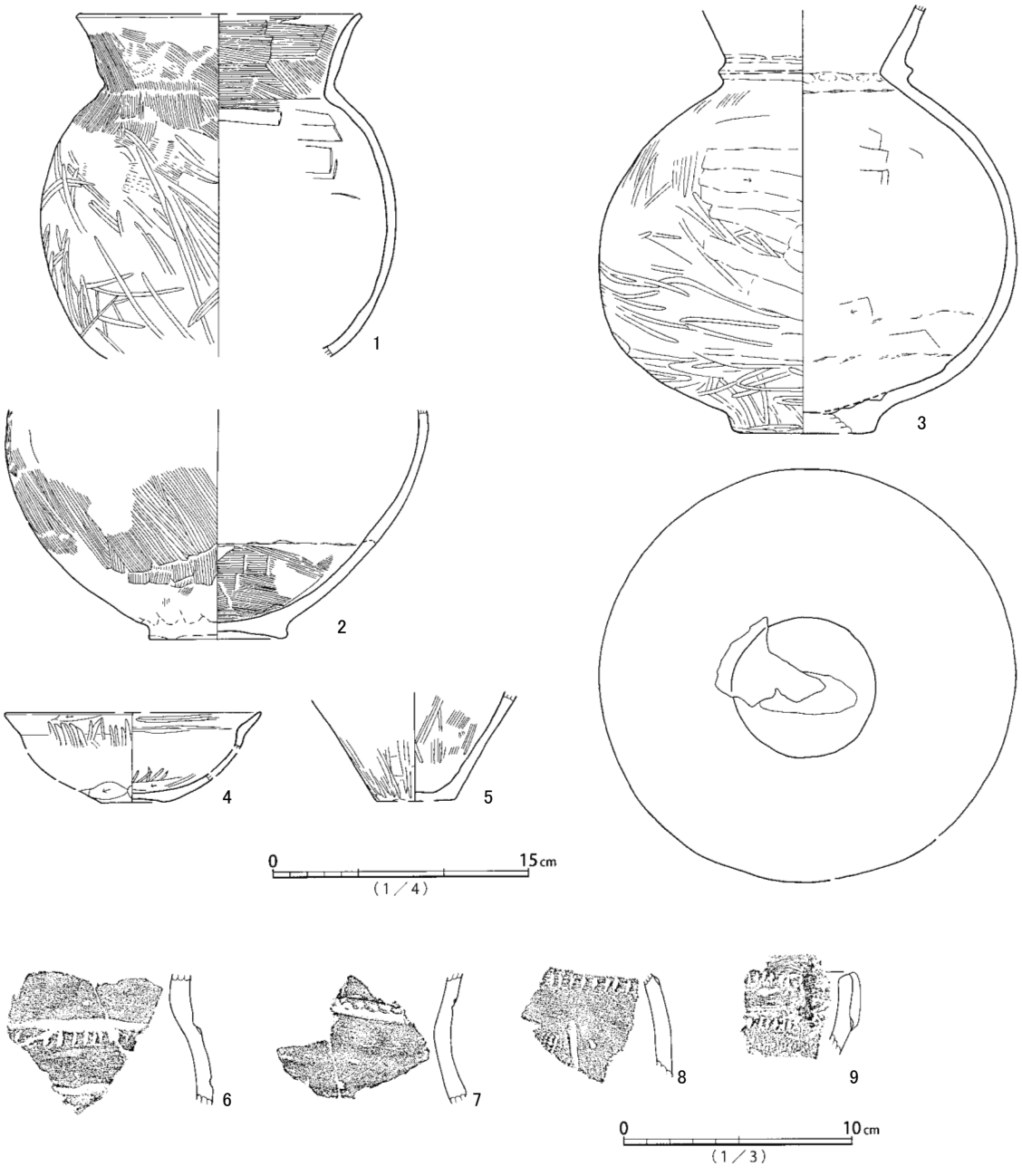
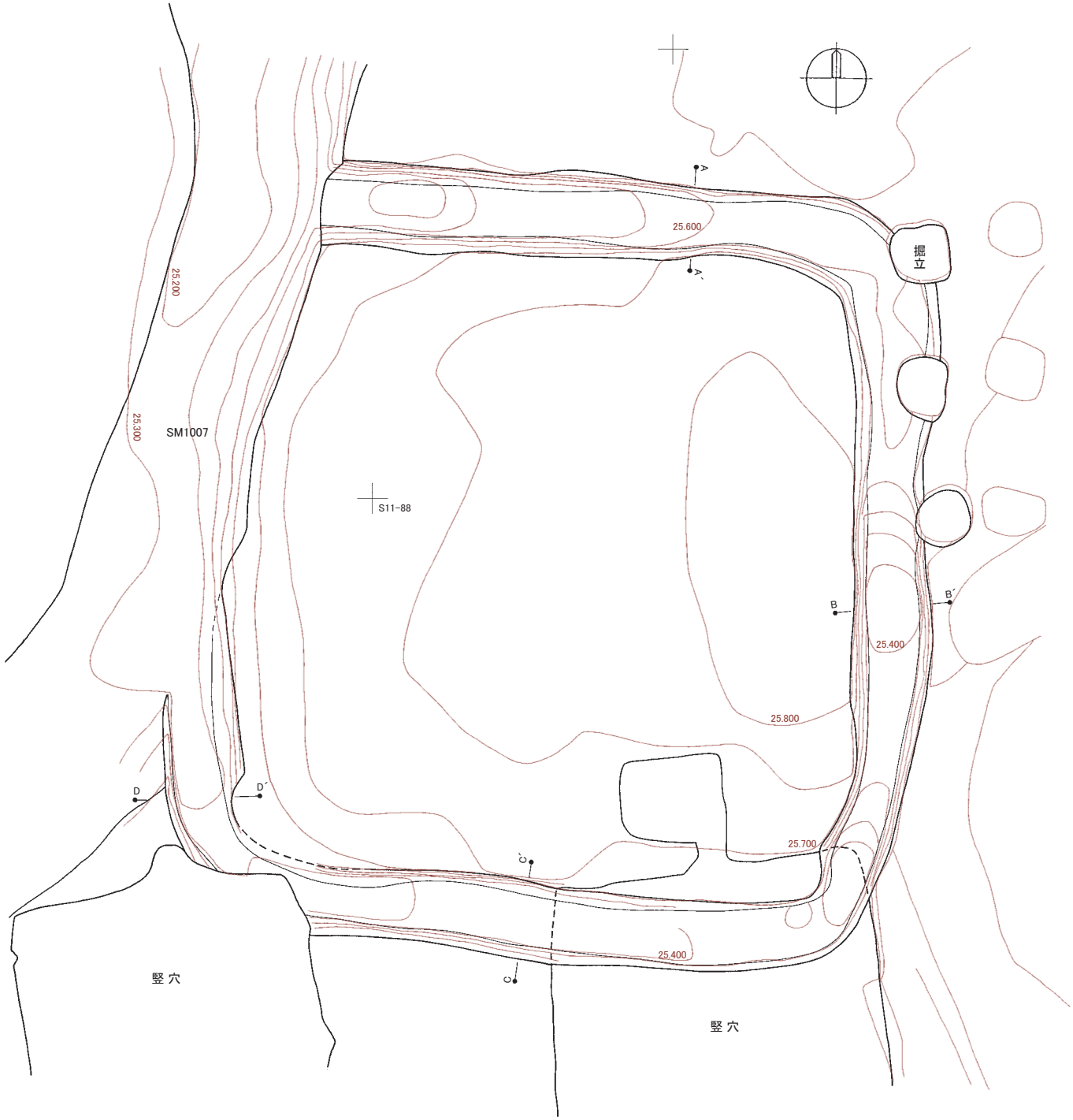
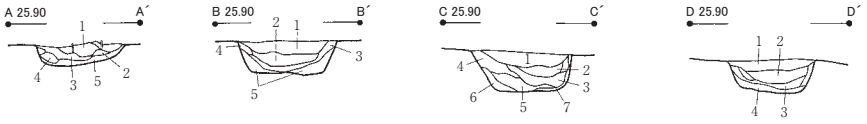


Fig.174　SS114 遺物実測図





SS115AA´
1 黒色土 ローム粒
2 黒色土
3 黒色土 褐色土粒土、ローム粒
4 黒色土
5 黒褐色土 ローム粒多量

SS115BB´
1 黒色土 褐色土粒
2 黒色土
3 暗茶褐色土 テフラブロック
4 ― 褐色土粒土
5 暗茶褐色土 ローム粒

SS115CC´
1 黒色土 ローム粒多量、褐色土粒
2 黒色土 ローム粒
3 黒色土 ローム粒、テフラブロック
4 黒褐色土 ローム粒
5 黒褐色土 ローム粒、テフラ粒土
6 褐色土 ローム粒・ロームブロック
7 ― テフラ粒土

SS115DD´
1 黒褐色土
2 黒褐色土
3 黒褐色土
4 暗褐色土 ローム粒

0 4m
（1／80）

Fig.175　SS115 遺構実測図

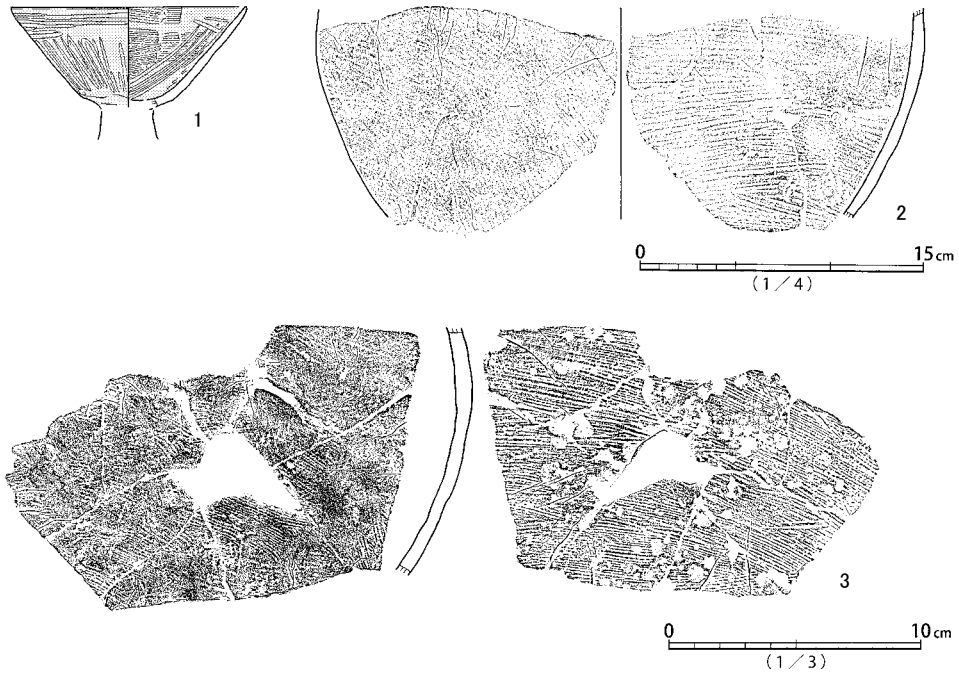
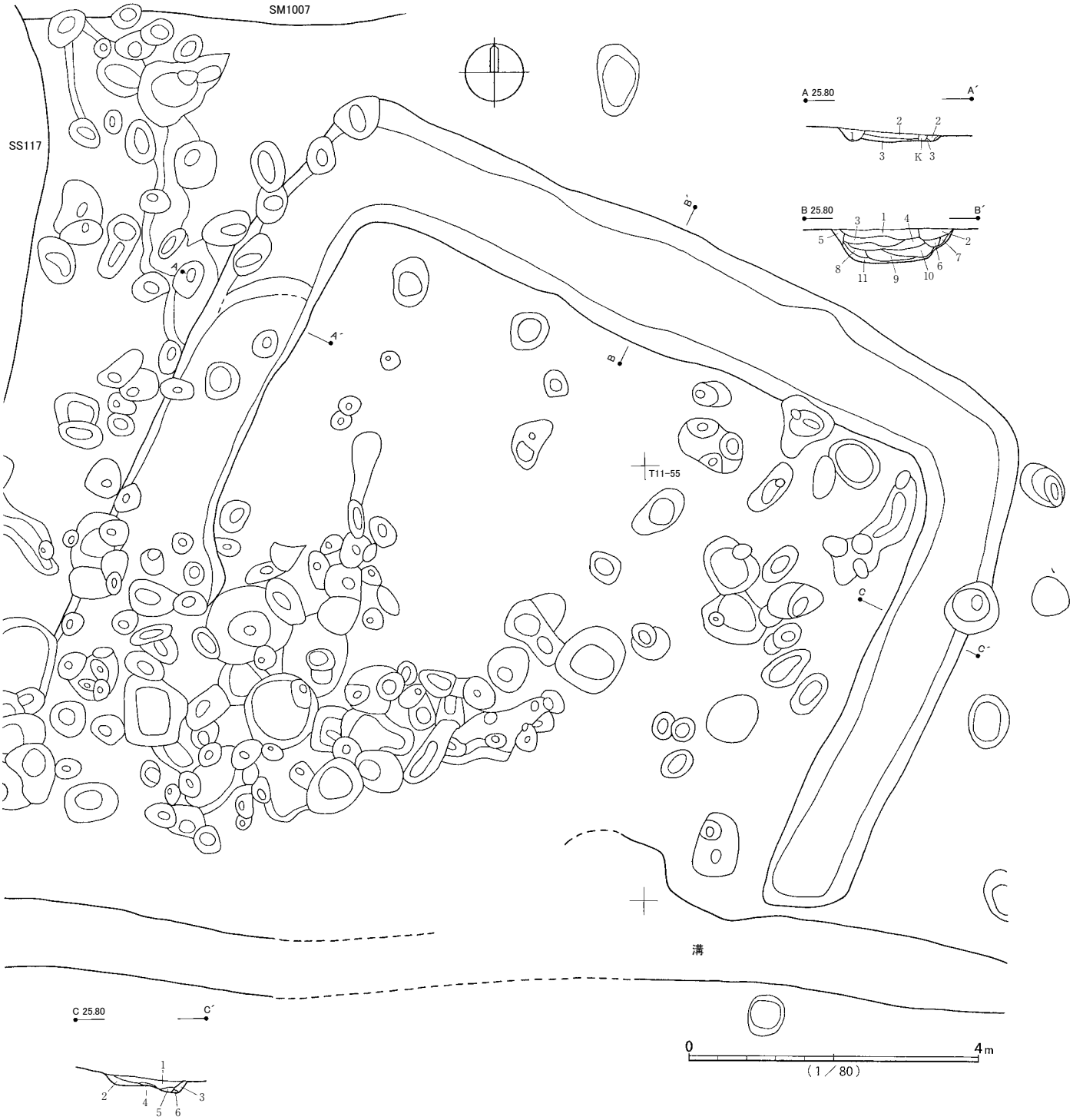


Fig.176　SS115 遺物実測図



SS116AA´
1 暗黒褐色土 ローム粒
2 黒褐色土 ローム粒
3 暗褐色土 ローム粒多量

SS116BB´
1 黒褐色土 ローム粒、黒色土ブロック
2 黒褐色土 ローム粒
3 黒色土 ローム粒
4 暗黒褐色土 ローム粒
5 暗茶色土 ローム粒
6 暗黒褐色土 ローム粒
7 暗茶褐色土 ローム粒多量
8 暗褐色土 ローム粒
9 暗褐色土 ローム粒多量
10 暗黒褐色土 ローム粒多量
11 ― ローム粒・ロームブロック

SS116CC´
1 黒褐色土 ローム
2 ― ローム粒土
3 ―
4 ―
5 ―
6 ―

Fig.177　SS116 遺構・遺物実測図

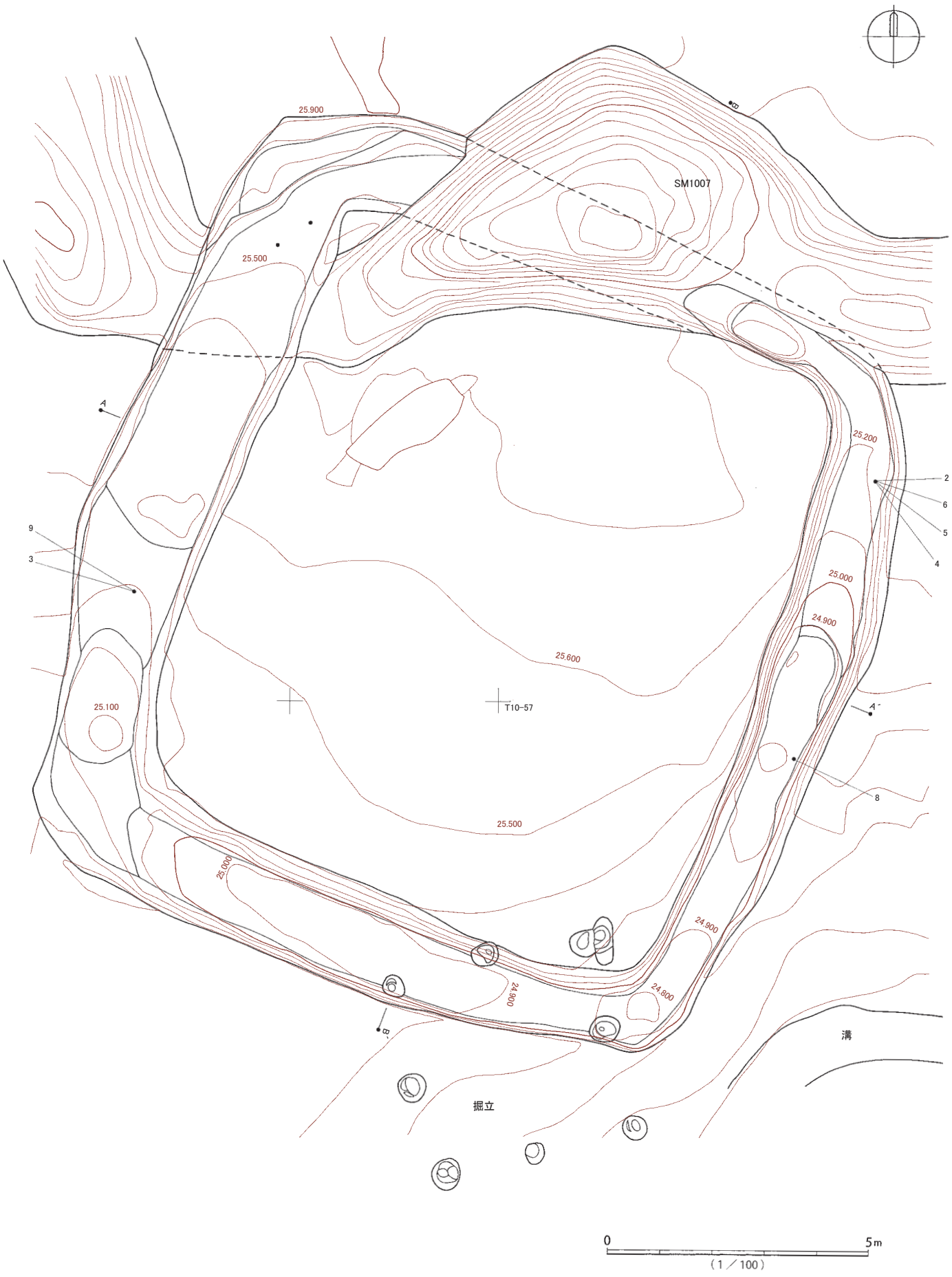
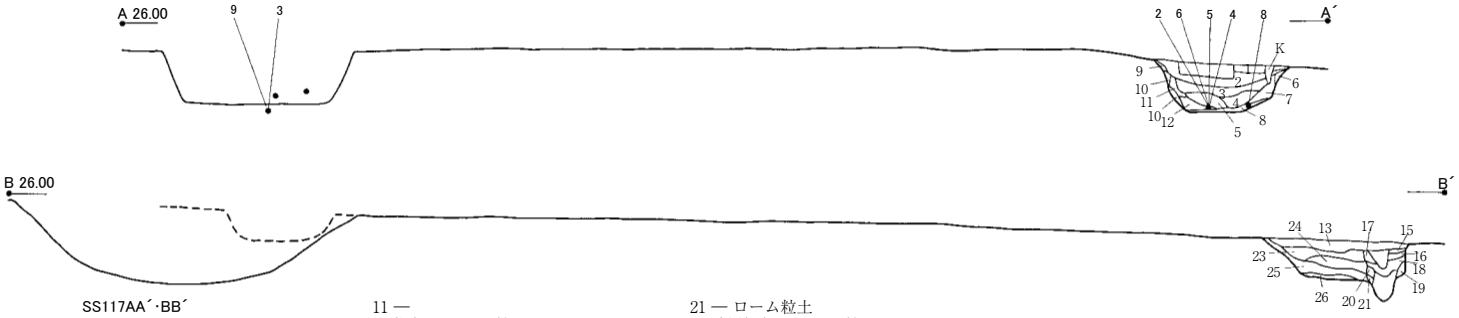


Fig.178　SS117 遺構 (1) 実測図



SS117AA´·BB´

1 —
2 暗黒褐色土 ローム粒
3 暗黒色土 ローム粒多量
4 暗黒褐色土
5 黒褐色土 ローム粒多量
6 — テフラブロック
7 褐色土 ローム粒
8 暗茶褐色土 ローム粒
9 — テフラブロック
10 褐色土 ローム粒・ロームブロック
11 —
12 褐色土 ローム粒ブロック
13 黒褐色土 ローム粒多量、褐色土まじり
14 黒褐色土
15 黒褐色土
16 黒褐色土 ローム粒土まじり
17 黒褐色土
18 黒褐色土 褐色土粒
19 — ローム粒土まじり
20 暗黒褐色土
21 — ローム粒土
22 暗黒褐色土 ローム粒
23 黒褐色土 ローム粒多量
24 暗黒色土 ローム粒多量
25 黒褐色土 ローム粒多量、褐色土粒土
26 — ローム粒、褐色土粒土

0 5m
（1／100）

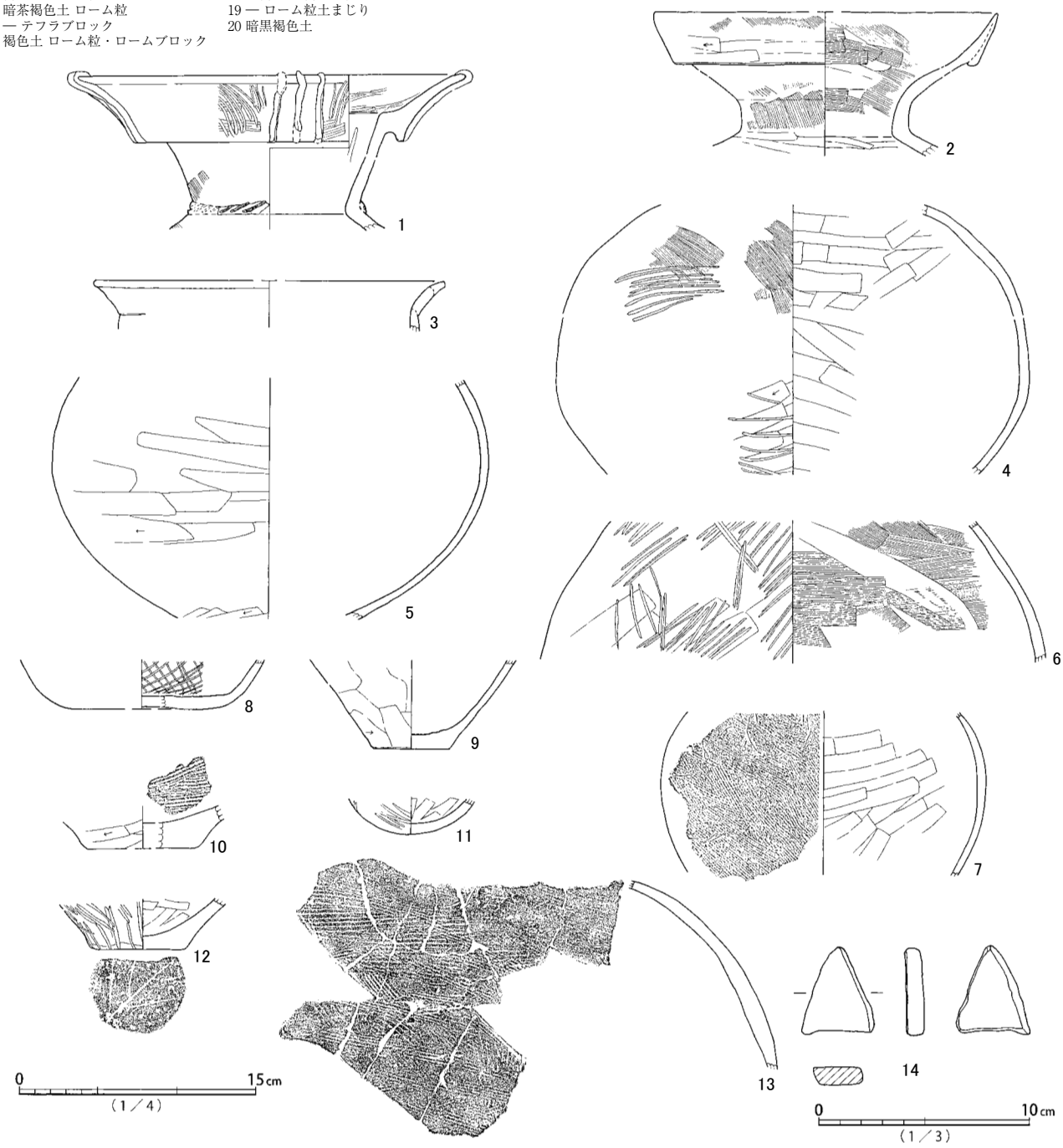
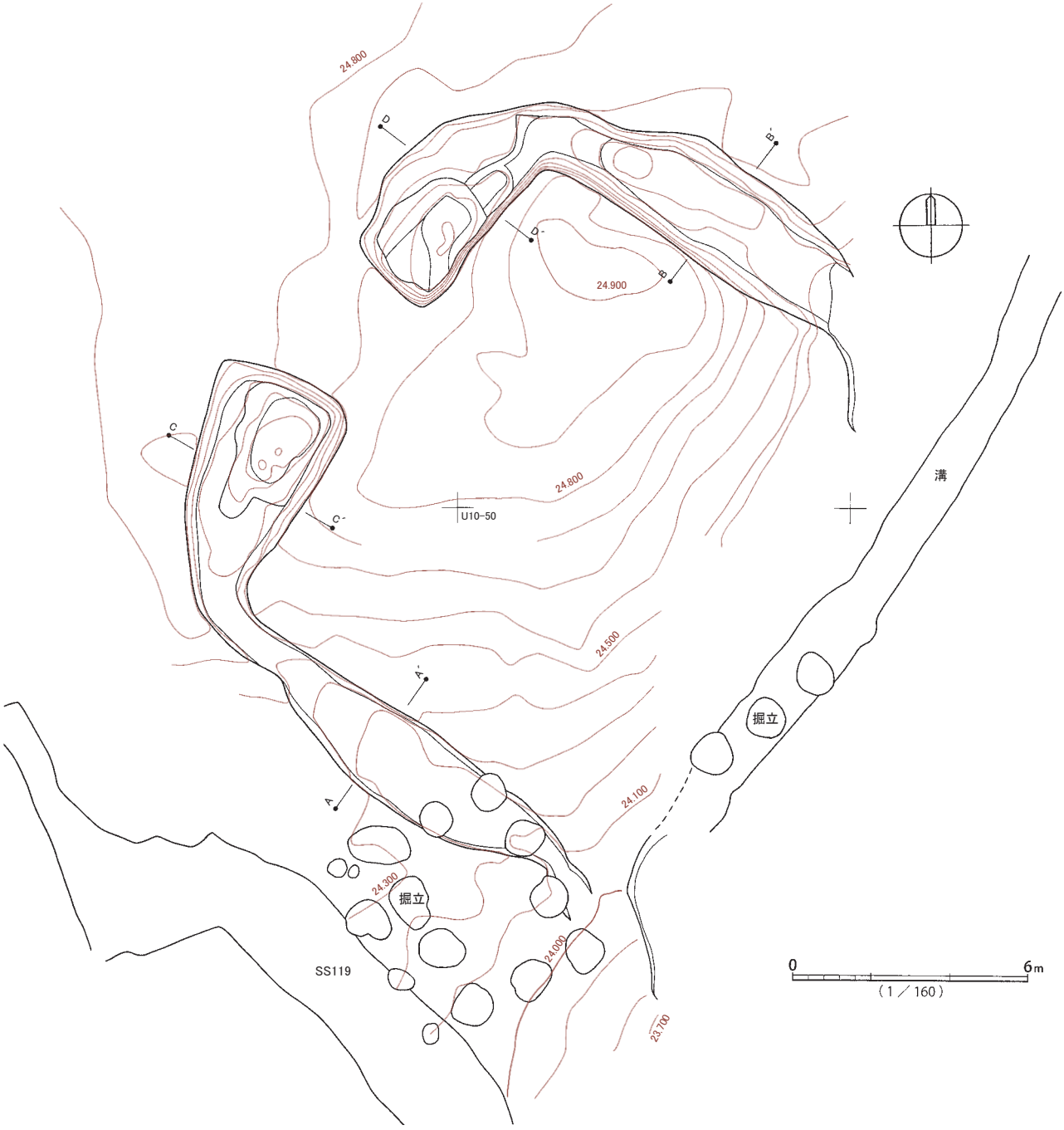
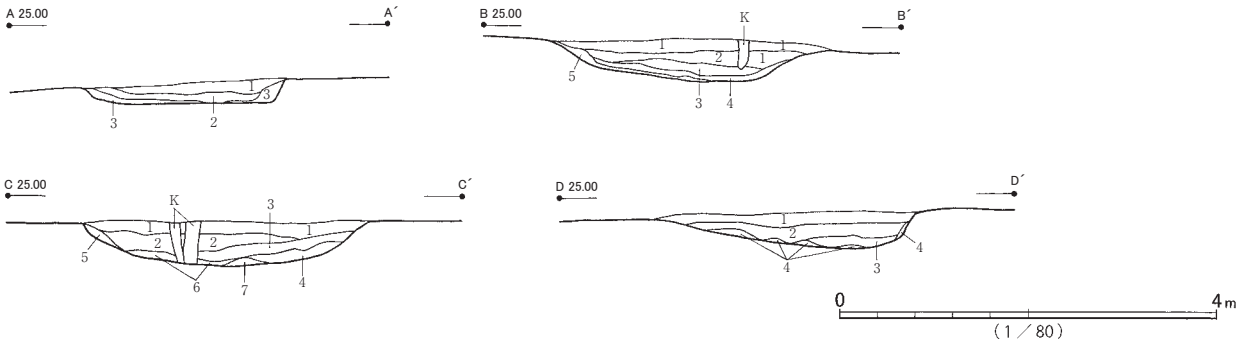


Fig.179　SS117 遺構 (2)・遺物実測図





SS118AA´
1 黒褐色土 褐色土粒多量
2 暗褐色土 ローム粒
3 褐色土 ロームブロック

SS118BB´
1 黒褐色土
2 暗黒褐色土 ローム粒
3 暗黒褐色土
4 黒褐色土 ローム粒
5 ― 褐色土、ローム粒・ロームブロック

SS118CC´
1 黒褐色土
2 暗黒褐色土 ローム粒多量
3 黒色土 ローム粒
4 黒褐色土 ローム粒多量
5 黒褐色土 褐色土粒多量、ローム粒
6 暗茶褐色土 ローム粒
7 ― ローム粒

SS118DD´
1 黒褐色土 ローム粒
2 暗黒色土 ローム粒多量
3 黒褐色土 褐色土粒、ローム粒
4 褐色土 ローム粒多量

Fig.180　SS118 遺構実測図

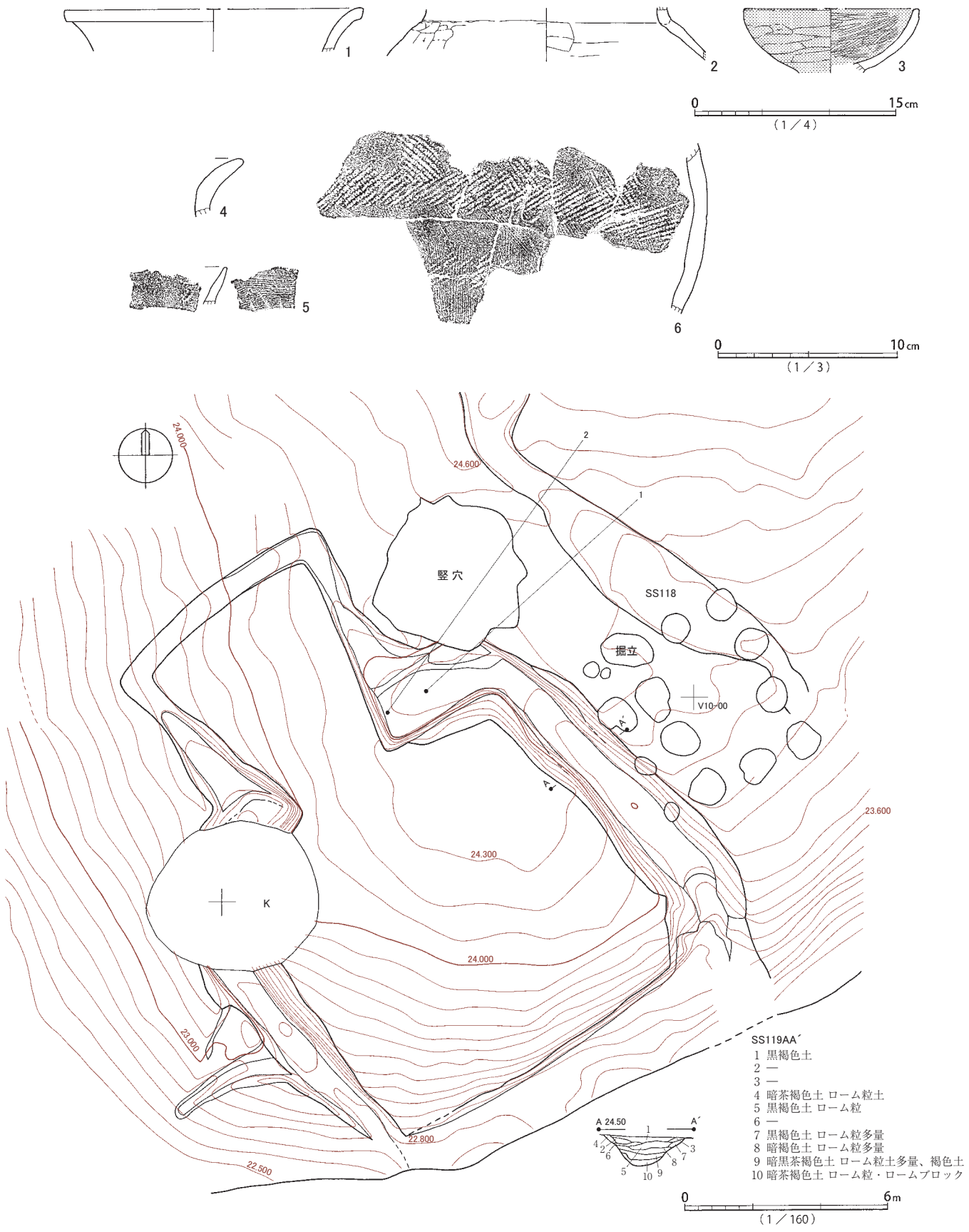


Fig.181　SS118 遺物、SS119 遺構実測図

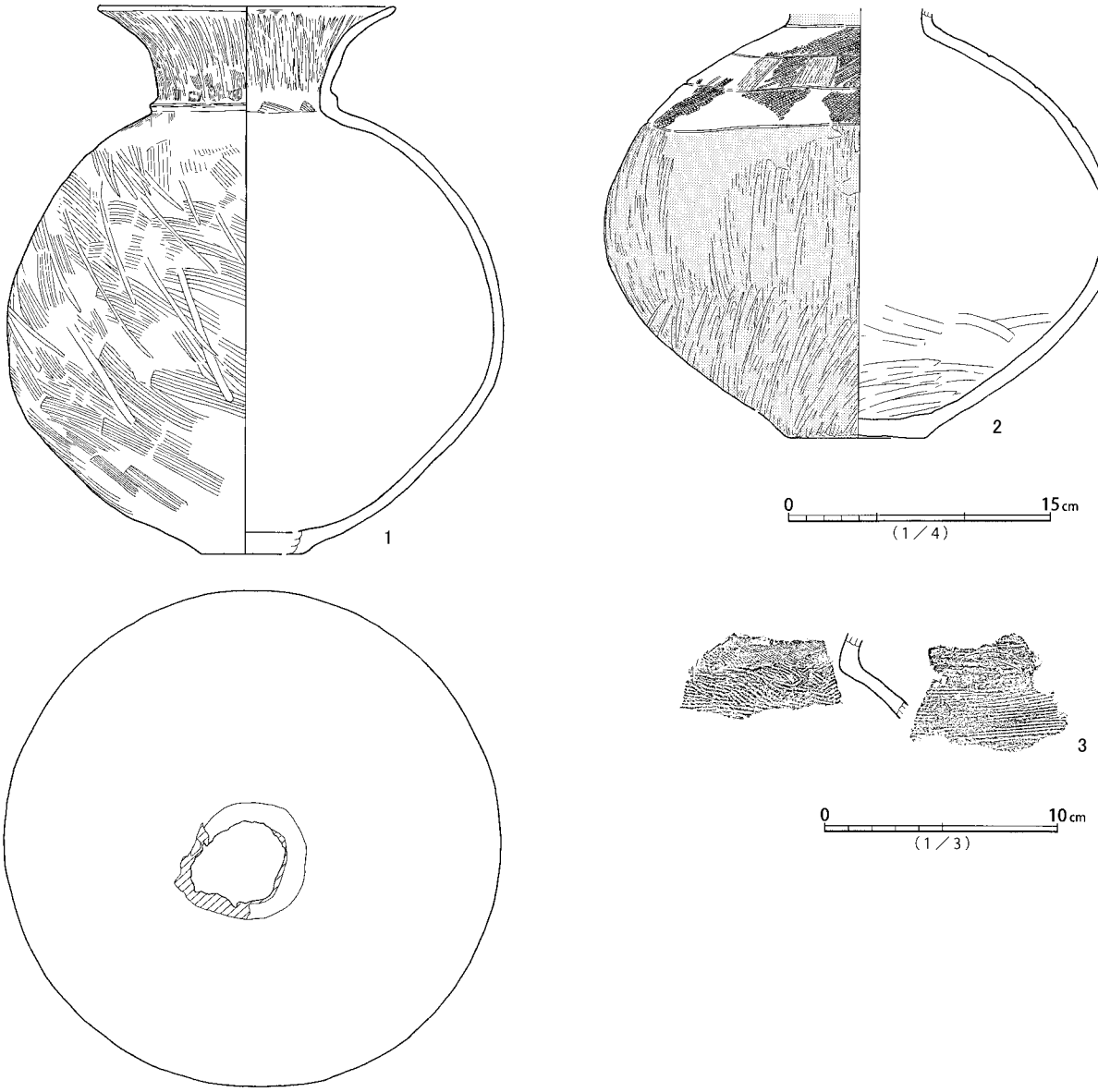


Fig.182　SS119 遺物実測図

第2節　古墳時代後期以降の墳墓と遺物

はじめに

第2節は、古墳時代後期以降の墳墓と遺物について取扱う。また、第2節は、執筆者が異なっており、事前の担当者協議の中で、第2節中の遺構番号については前章からの連番ではなく、新規に1001番からの開始とした。

古墳時代後期以降の墳形は前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳から所謂方形周溝状遺構（改葬系区画墓・律令制墳墓）等バリエーションも多く、調査区と調査年度を跨って調査された墳墓も多い。したがって調査地区等を優先するのではなく、前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳順の墳形を優先とし、各墳形ごとに墳墓の占有面積順に報告していくことを原則とした。ただし、紙面の都合上、遺存度1/2以下の円墳や「コ」の字「Ｌ」字形の方墳等、面積の測定ができなかった小規模墳墓については、図版内に可能な限り複数組み込む方法を採用しており、必ずしも面積順になっていない部分もある。そのため、古墳と所謂方形周溝（改葬系区画墓・律令制墳墓）等が混在する図版が存在することとなったことから、便宜的に遺構記号は古墳を示すSM記号で統一することとし、遺構観察表もこれと対応させている。

古墳の終末とこれに連続するその後の墳墓の問題に関し、諏訪台古墳群の調査事例は、特に混沌としたこれまでの房総事例解明の大きな手掛かりを保持している。したがって古墳を示すSM記号で統一したからと言っても、必ずしも古墳と断言し得ない事例が多々存在しており、最後に所見を纏めておきたいと考えている(1)。

時期決定の方法としては、埋葬施設内や古墳周溝内等から出土した遺物群の中でも、特に編年作業が確立している土器編年・鉄鏃編年を活用し判断している。在地土器編年については拙稿(2)、鉄鏃編年については杉山論文(3)、東海産須恵器編年については鈴木論文(4)を参考とした。

註及び引用参考文献

註1　木對和紀「房総における改葬系区画墓の出現期」『市原市埋蔵文化財センター研究紀要Ⅰ』1987財団法人市原市文化財センター
「房総における改葬系区画墓の出現期Ⅱ」『倉田芳郎先生古寿記念　生産の考古学』1997同成社
「台遺跡における律令制墳墓の形態」『市原市台遺跡Ｃ地点』2010市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第12集

註2　木對和紀「竪穴住居の耐久年数からみた房総における古墳時代須恵器の出現と終焉　椎津茶ノ木遺跡を中心として」『市原市埋蔵文化財センター研究紀要Ⅱ』1993財団法人市原市文化財センター

註3　杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集八』1988吉川弘文館

註4　鈴木敏則「湖西産古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅　第5分冊補遺・論考編』2001東海土器研究会

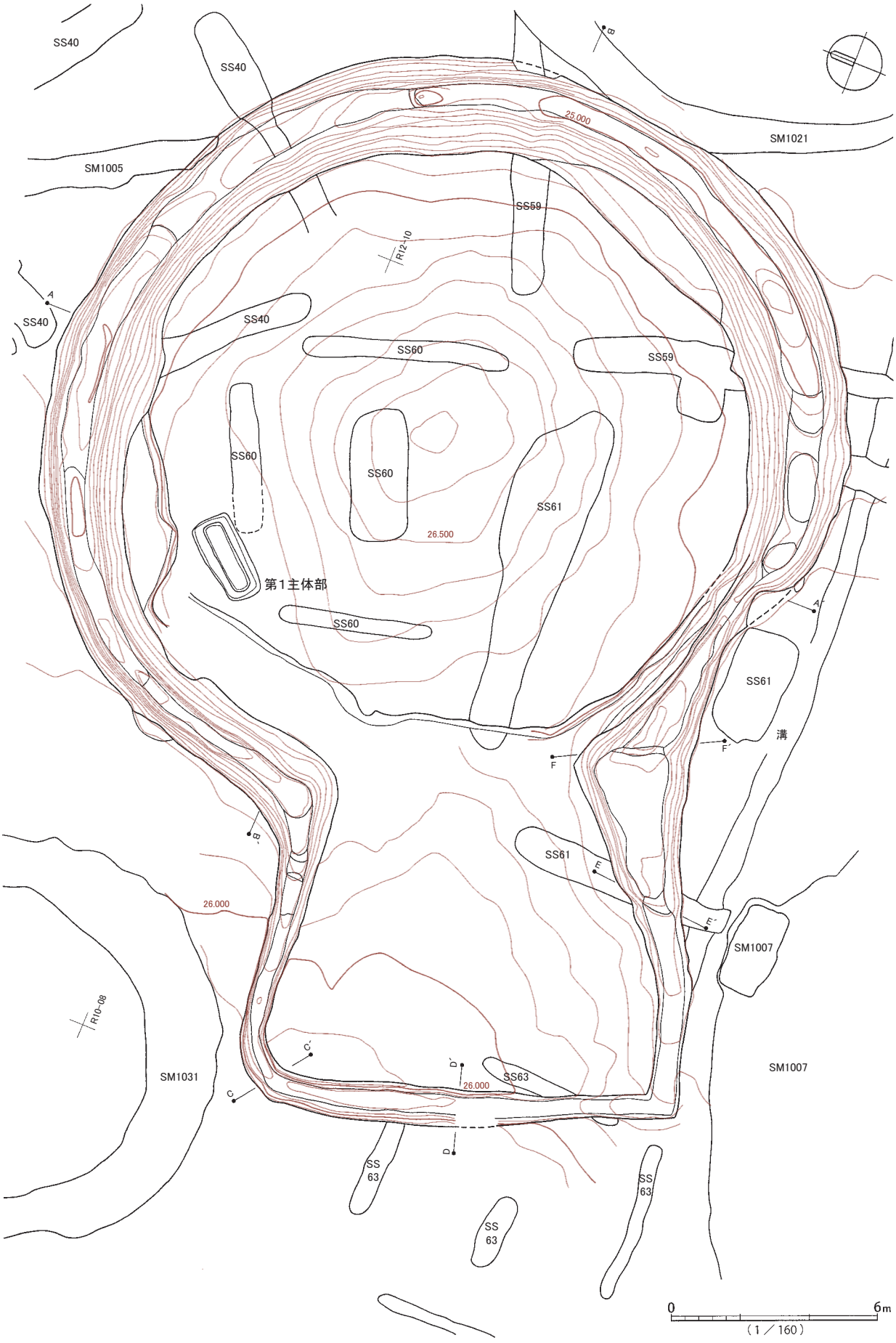
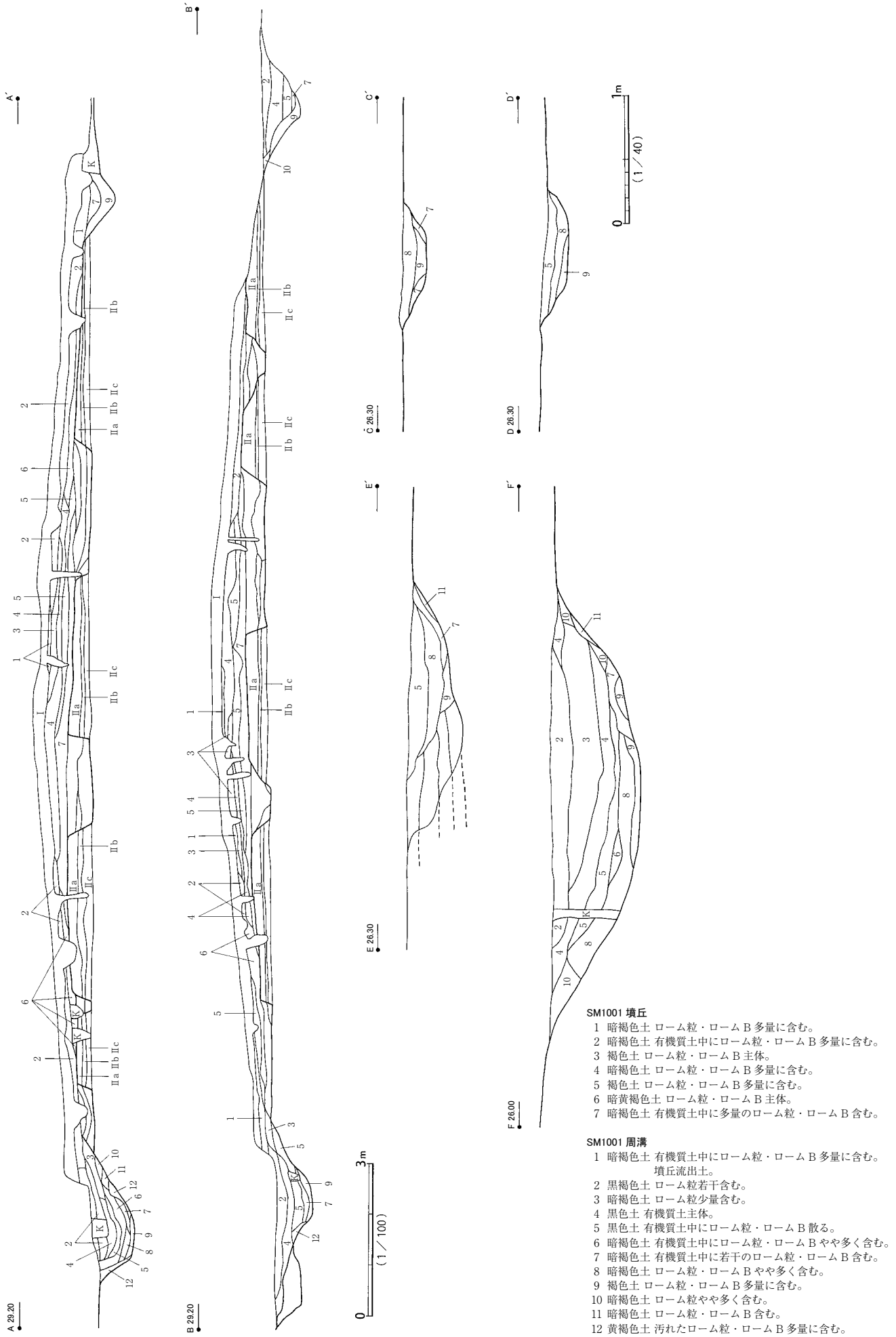


Fig.183　SM1001 遺構 (1) 実測図



SM1001 墳丘

1 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
2 暗褐色土 有機質土中にローム粒・ローム B 多量に含む。
3 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
4 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
5 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
6 暗黄褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
7 暗褐色土 有機質土中に多量のローム粒・ローム B 含む。

SM1001 周溝

1 暗褐色土 有機質土中にローム粒・ローム B 多量に含む。
　墳丘流出土。
2 黒褐色土 ローム粒若干含む。
3 暗褐色土 ローム粒少量含む。
4 黒色土 有機質土主体。
5 黒色土 有機質土中にローム粒・ローム B 散る。
6 暗褐色土 有機質土中にローム粒・ローム B やや多く含む。
7 暗褐色土 有機質土中に若干のローム粒・ローム B 含む。
8 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
9 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
10 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
11 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
12 黄褐色土 汚れたローム粒・ローム B 多量に含む。

Fig.184　SM1001 遺構 (2) 実測図

古墳・方形区画改葬墓（律令制墳墓）

1.前方後円墳

SM1001　セ28地区　（Fig.183～186、PL.95・183・195・212）

R・S-10・11・12グリッドに位置し、東側をSM1021（円墳）と接し、下層のSS40・59・60・61・63と重複する終末期の前方後円墳である。旧遺構番号はセ28‐029号遺構である。

墳丘と周溝

全長27.24m、後円部径18.12m、前方部最大幅11.44m、括れ部幅6.96m、残存する盛土の高さは最大0.88mを測り、主軸方位はN-68°-Eを示す。周溝内側面積は前方部88.4㎡・後円部259.0㎡、併せて347.4㎡を測り、諏訪台古墳群中の前方後円墳では最大規模を測る。確認面での周溝幅は0.72～3.16m、深さは0.19～0.76m、土層断面図上の最大値は0.84mを測り、後円部側が深くて広い傾向が認められる。周溝断面は半円形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

埋葬施設は、後円部中央を大きく離れた東側に偏った位置から1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、後円部北側の周溝側に偏った位置に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は長径2.58m短径1.08～1.28m深さ0.36mを測り、主軸方位はN-38°-Eを示す。墓壙のほぼ中央に箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は上端で長さ2.20m幅0.60m、下端で長さ2.08m幅0.46m、深さは0.24mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-38°-Eを示す。

墓壙及び棺内から1点の大刀と15点の鉄鏃及び鉄鏃片が検出されている。

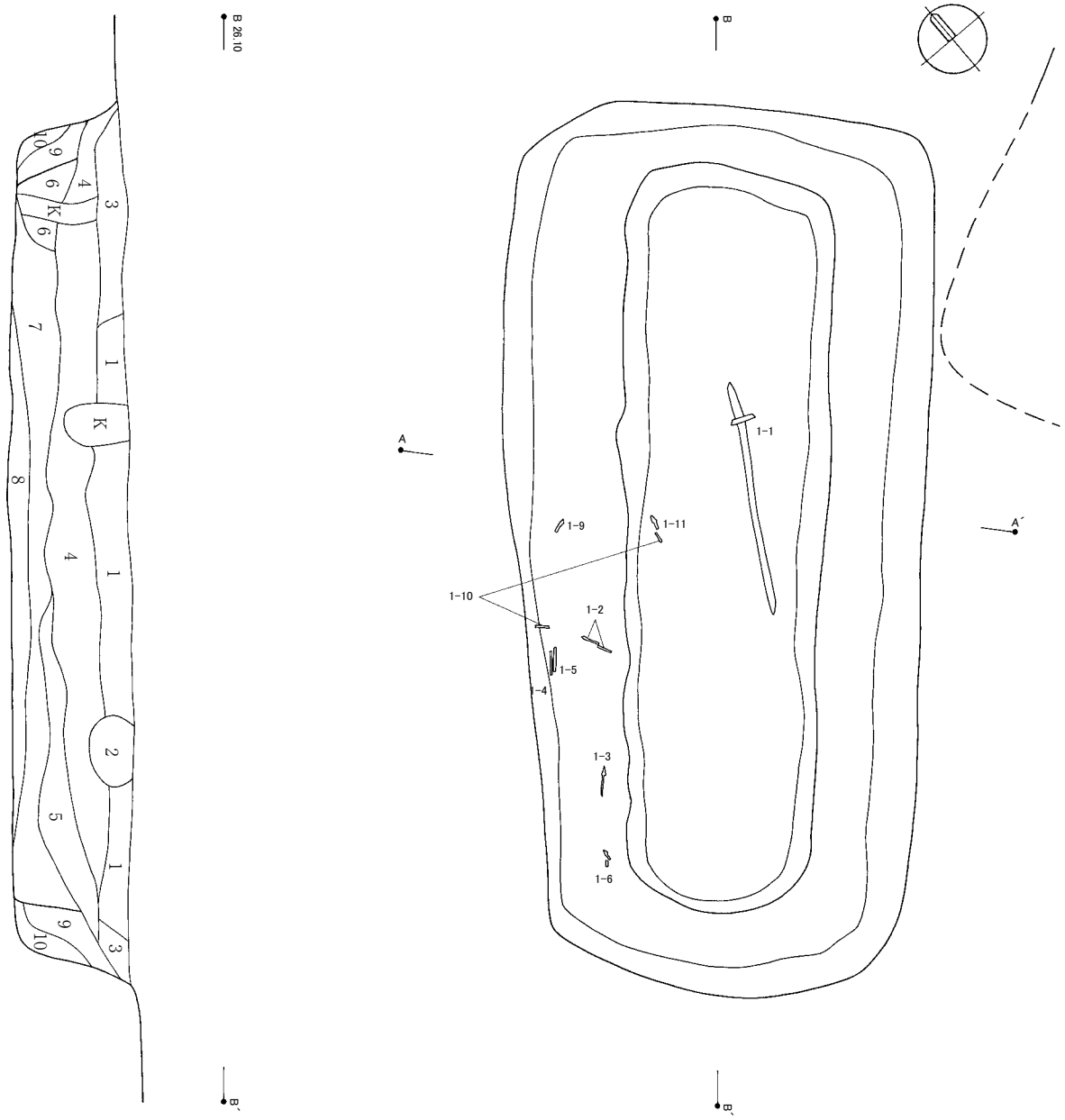
出土遺物

第1主体部からは比較的多量の鉄器が出土した。1-1は全長70.0㎝を測る無窓の鍔付き大刀である。鋒を有し、刀身部には1.2㎝程の反りが認められる。関形状は鋒によって不明であるが、直関もしくは斜関と想定される。茎部の目釘孔は１孔で、目釘孔には目釘が残存しており、茎尻部は隅切形状を呈している。出土した大刀の切っ先方向から判断して、被葬者は帯刀した状態で、東枕安置で埋葬されたと察知される。

1-2～6、9～11は主体部内での出土地点がわかる長頸鏃群である。刃部の解る製品は、全て両丸造りであるが、鏃身部が退化しはじめる所謂鑿箭鏃の類であり、関形状の判明する製品は全て棘関である。頸部形状が類似すること等から、1-16を除いた他の長頸鏃片も、おそらく主体部一括で取り上げられた可能性が極めて高いと判断される。1-16は出土地点不明である。おそらく一括で取り上げられた腸抉三角形鉄鏃であり、抉部・関部を欠くが、長頸鏃群と対比した場合、若干古い段階の特徴を保持していると見受けられる。

本墳周溝内等からは3点の遺物が出土している。1は須恵器長頸壺・堤瓶、ないしは平瓶の口縁部、2は平瓶で、共に周溝内一括で取り上げられている。3は小型石製管玉で、当墳一括とされるが、遺物の性格から判断すれば、おそらく主体部一括で取り上げられた管玉と判断される。

これらの出土遺物を総合的に判断すると、須恵器は残存部が少なく、かつ形状不安定ではあるが7世紀後葉の年代観が想定されるのに対し、長頸鏃群は7世紀代中葉～後葉の年代観を持っている。したがって、本墳の築造時期は7世紀後葉前後と想定される。



SM1001 第1主体部

1 黒褐色土 多量のローム粒・ローム B 含む。
2 褐色土 ローム B。
3 黒褐色土 ローム B 含む。
4 黒褐色土 ローム粒・ローム B 若干含む。
5 黒褐色土 ローム粒若干含む。
6 黒褐色土 ローム粒含む。
7 褐色土 暗褐色有機質土中にローム B を含む。
　圧力により硬化し締る。
8 暗褐色土 暗褐色有機質土中にローム粒含み硬く締る。
9 褐色土 ローム粒多く含む。
10 褐色土 ローム粒・ローム B 多く含む。
11 褐色土 ローム粒・ローム B 多く含む。

Fig.185　SM1001 遺構 (3) 実測図

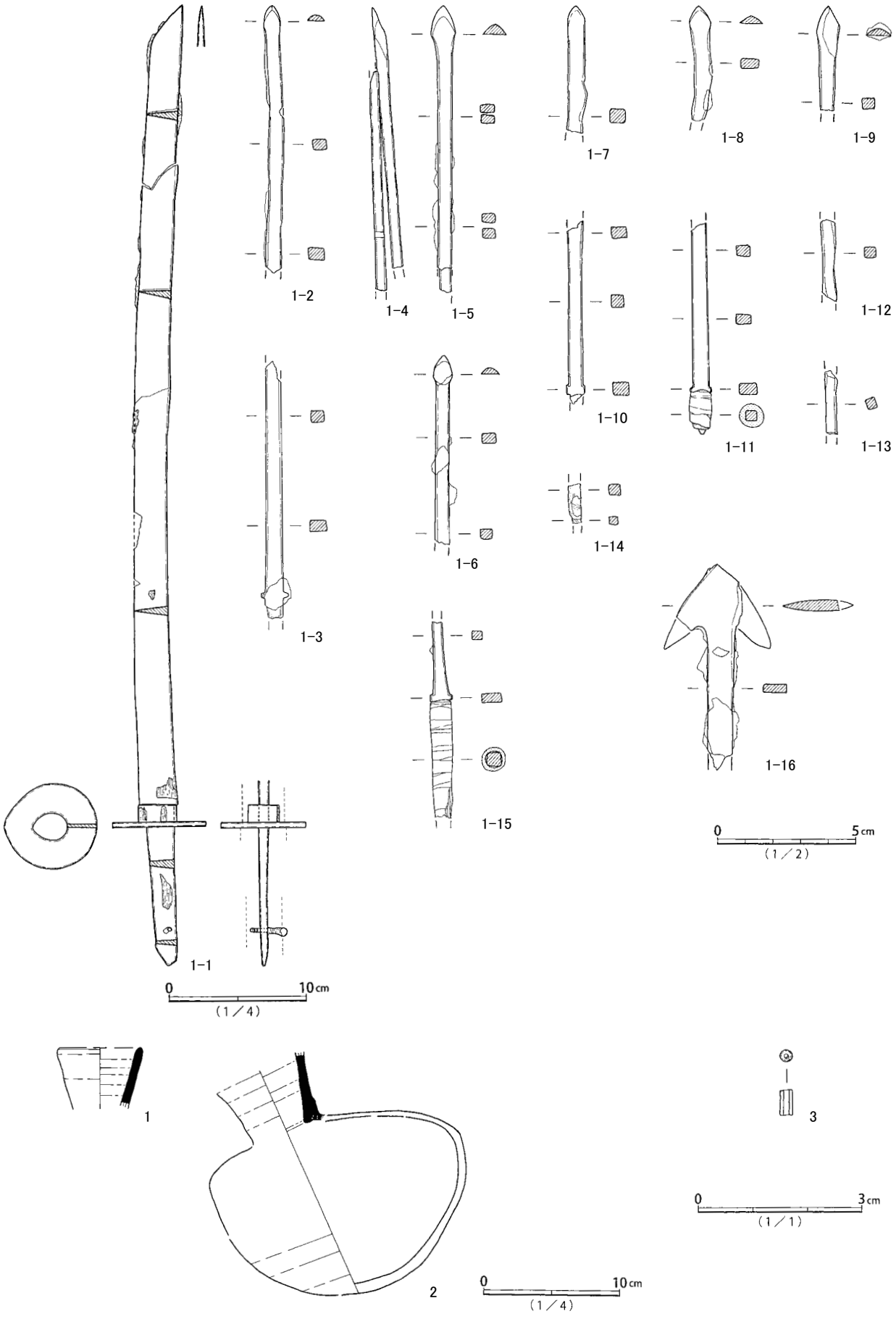


Fig.186　SM1001 遺物実測図

SM1002　099地区　（Fig.187～189、PL.9・183・195・212・216）

L-7・8グリッドに位置し、下層のSS18・19と重複する前方後円墳である。旧遺構番号は099-4033号遺構である。

墳丘と周溝

全長21.40m、後円部径15.56m、前方部最大幅10.84m、括れ部幅7.48mを測り、主軸方位はN-43°-Eを示す。現状では盛土は存在しない。周溝内側面積は247.2㎡を測り、諏訪台古墳群中前方後円墳では第2位の規模である。確認面での周溝幅は0.68～2.36m、深さは0.44～0.48m、土層断面図上の最大値は1.08mを測り、後円部側が深くて広い傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

埋葬施設は、後円部中央を大きく離れた南側の括れ部付近から1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、後円部括れ部付近の偏った位置に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で長径2.80m短径1.30～1.34m、下端で長径2.66m短径1.18m深さ0.46mを測り、主軸方位はN-45°-Wを示す。墓壙の中央から周囲を粘土で囲った箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は上端・下端で長さ1.94m幅0.70m、深さは0.30mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-44°-Wを示す。

棺内からは2点1対の耳環と13点の勾玉、13点の丸玉、8点のガラス玉が検出されている。現場平面図では、更に多数のガラス玉が検出したとされるが、整理作業の結果、移植ごての衝撃で飛び散ったと想定される１㎜以下の極小ガラス細片が10点確認されており、これを図中の■記号で示した。また現場でガラス玉として取り上げられた袋の中には、再確認してみると土塊（潰すと土）やガラス玉大の極小礫も多数検出され、図中の□記号で示した遺物不明のガラス玉は、そういった類のものが含まれているものと判断される。

出土遺物

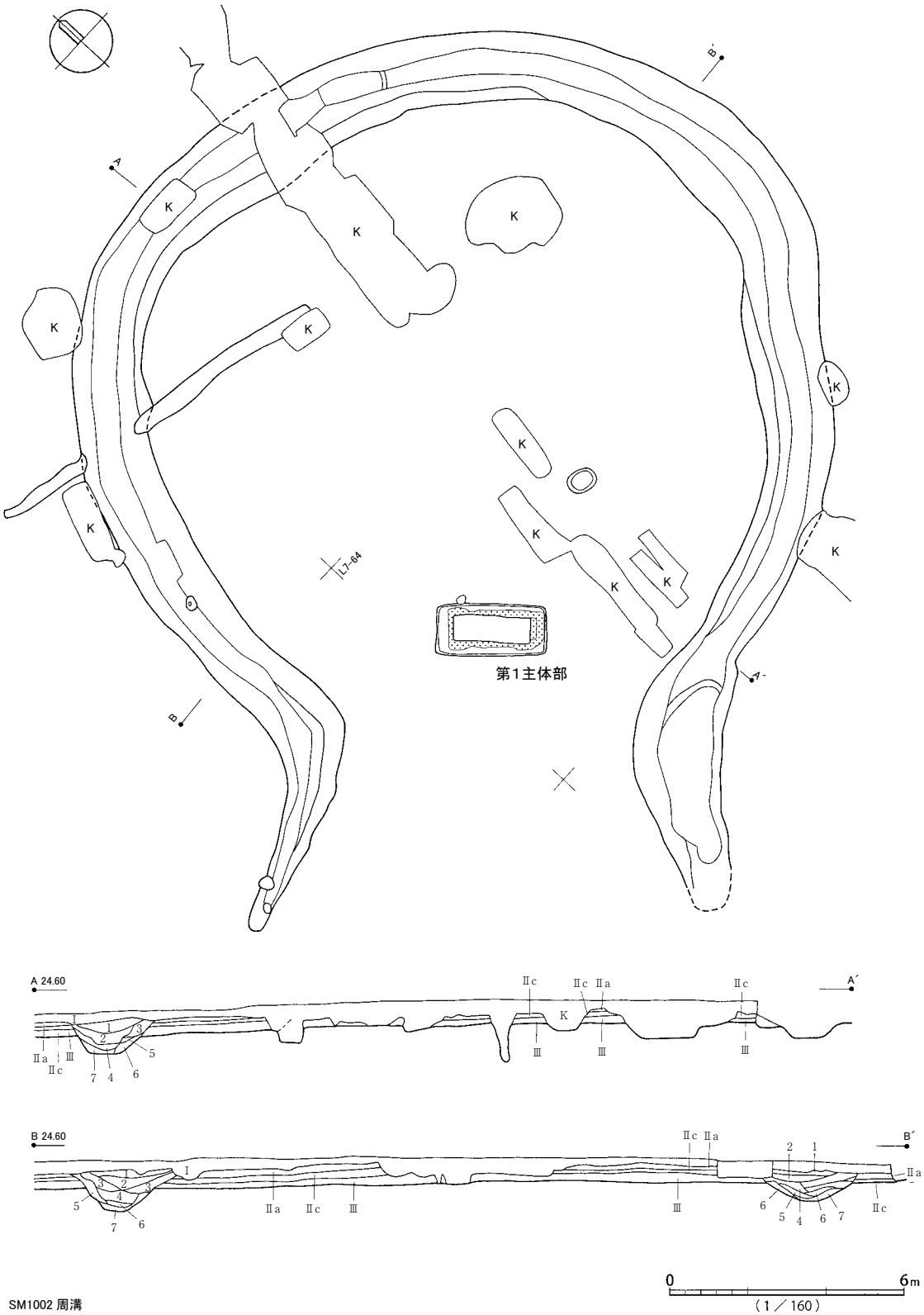
金銅製耳環や玉類は、全て第1主体部の木棺内から検出されている。1-1・2は金銅製耳環である。1-3は変質流紋岩製勾玉、1-4は瑪瑙製勾玉、1-5は滑石製勾玉、1-6～15は玉髄製勾玉である。1-16～22は変質凝灰岩製丸玉、1-23は変質流紋岩製丸玉、1-24は滑石製丸玉、1-25は琥珀製丸玉、1-26～28は鉛ガラス製丸玉で、1-29～36はガラス玉である。1-37は1-1の金銅製耳環の下から検出された木棺の棺材であり、最大径2.5㎝厚さ３㎜ほど残存している。

これらの遺物は、木棺東側から集中して検出されており、金銅製耳環の位置を被葬者の頭部と見れば、東枕安置で埋葬されたと察知される。なお、埋葬施設内から玉などの装飾品の類が多数出土しているが、大刀や鉄鏃等の武器類が全く検出されなかったことから、被葬者は女性である可能性が高いといえよう。

本墳周溝内からは、1～10の土師器・須恵器片、瀬戸美濃系卸目皿、鉈状鉄器、寛永通宝2点が覆土一括で取り上げられている。ただし、何れの遺物も、本墳の築造時期を明確に示す資料とは言い難い。

SM1003　セ28地区　（Fig.190～192、PL.3・95～96・164～165・183・195）

R・S-8・9グリッドに位置し、下層のSS65・66と重複し、SS112・113・114を削平する終末期の前方後円墳である。旧遺構番号はセ28-039号遺構である。



SM1002 周溝
1 黒褐色土 汚れたローム粒含む。
2 黒褐色土 有機質土主体。
3 黒褐色土 ローム粒若干含む。
4 黒褐色土 ローム粒含む。
5 黒褐色土 ローム粒含む。
6 暗褐色土 ローム粒含む。
7 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。

Fig.187　SM1002 遺構 (1) 実測図

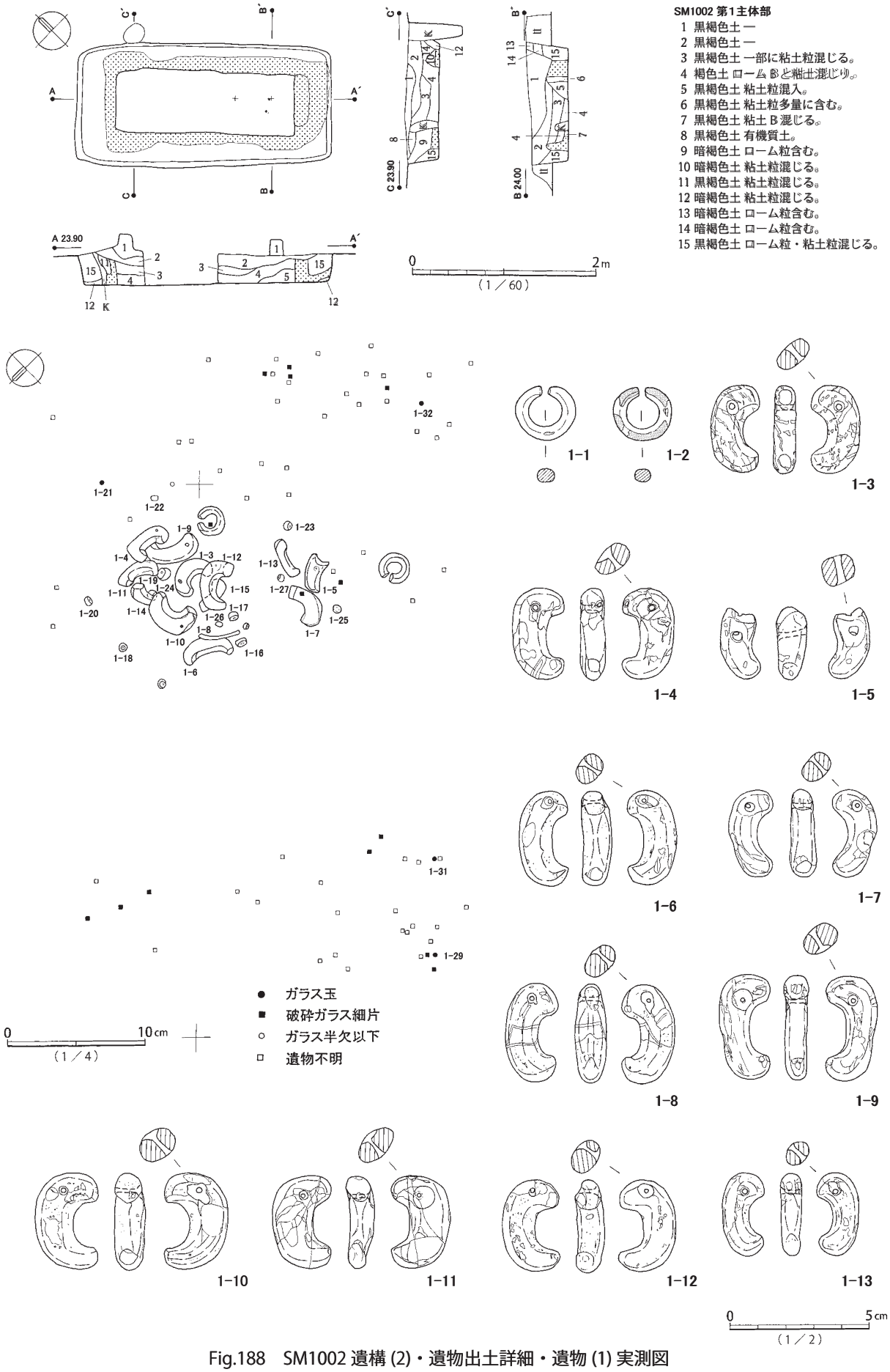


Fig.188　SM1002 遺構 (2)・遺物出土詳細・遺物 (1) 実測図

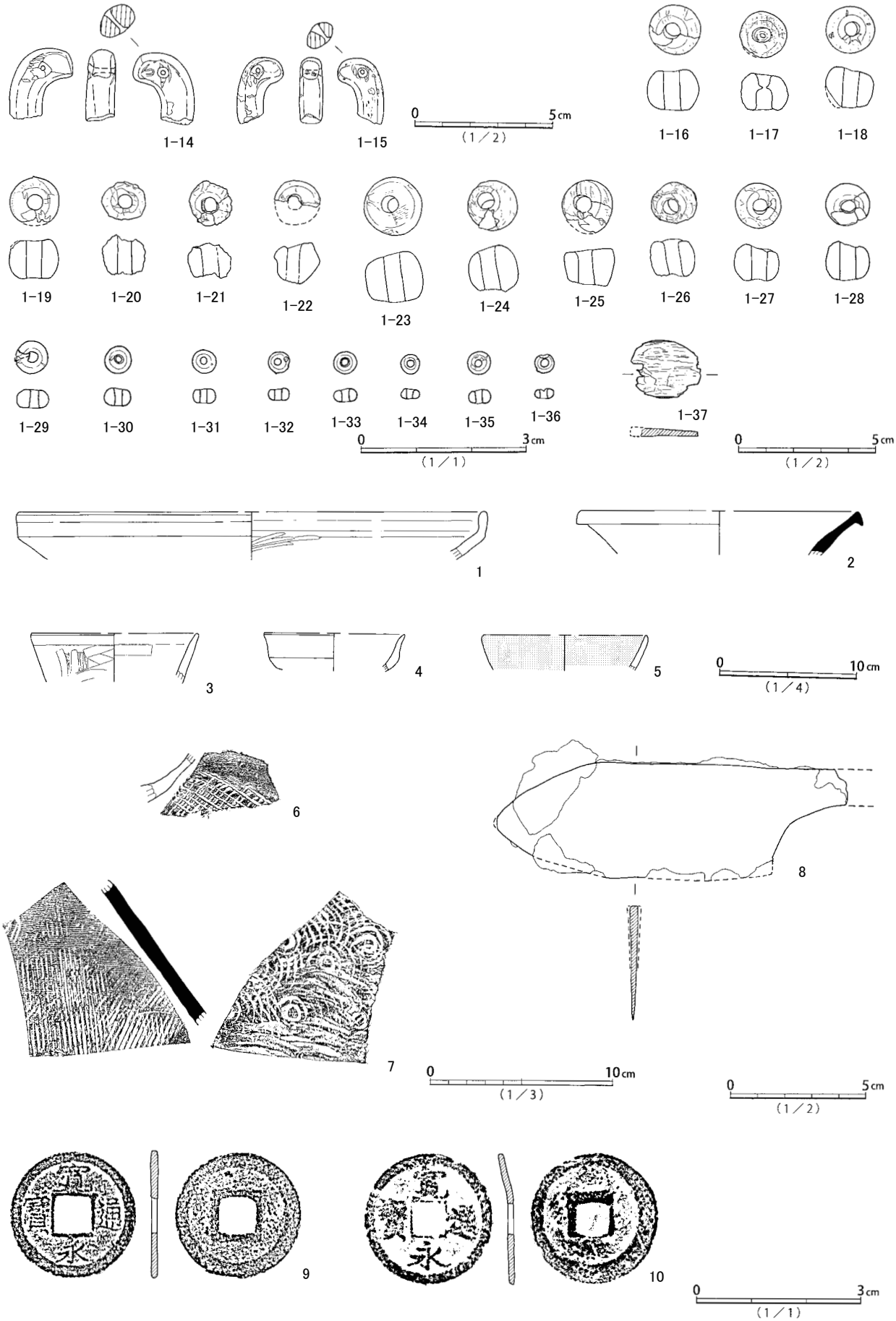


Fig.189　SM1002 遺物 (2) 実測図

墳丘と周溝

全長21.00m、後円部径13.08m、前方部最大幅13.92m、括れ部幅5.72m、残存する盛土の高さは0.68mを測り、主軸方位はN-80°-Wを示す。周溝内側面積は208.1㎡を測り、諏訪台古墳群中前方後円墳では第3位の規模である。確認面での周溝幅は0.96～4.12m、深さは0.76～1.20m、土層断面図上の最大値は1.48mを測り、後円部側が深くて広い傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

埋葬施設は、後円部中央に重複して検出された2基の木棺直葬の墓壙であり、上層に位置する第1主体部の方が新しい。

第1主体部

第1主体部は、後円部中央上層に位置する木棺直葬の土壙墓である。上端で長径2.90m短径1.58m、下端で長径2.76m短径1.32m深さ0.44mを測り、主軸方位はN-61°-Wを示す。墓壙のほぼ中央から箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は上端で長さ2.24m幅0.78m、下端で長さ2.02m幅0.44m、深さは0.32mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-62.5°-Wを示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

第2主体部

第2主体部は、後円部中央の第1主体部の下層に位置し、第1主体部主軸から北に36°振れた状態で、一部を第1主体部に削平されて検出されている。墓壙規模は、上端で長径3.46m短径2.40m、下端で長径3.26m短径2.18m深さ0.32mを測り、主軸方位はN-84°-Eを示す。墓壙のほぼ中央から箱型の木棺痕が検出され、木棺規模は上端で長さ2.74m幅0.80～1.00m、下端で長さ2.40m幅0.62～0.74 m、深さは0.24mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-82.5°-Eを示す。

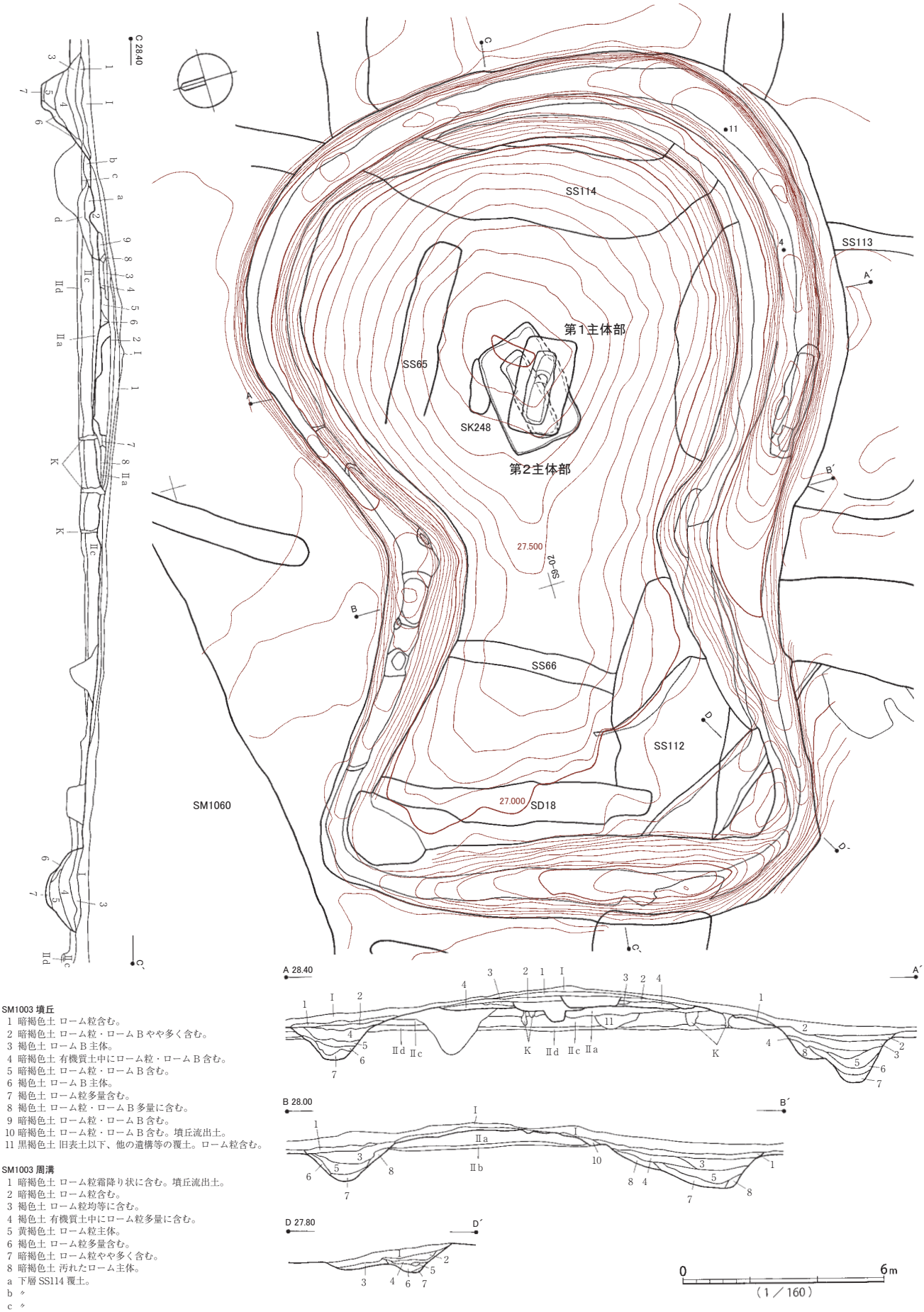
棺内からは何の遺物も検出されていないとされるが、遺物の性格から判断すれば、遺構一括扱いの長頸鏃群は、2基の埋葬施設の何れか一方の埋葬施設からの一括取り上げと判断することが妥当であろう。

出土遺物

周溝内等から14点の須恵器、3点の土師器、11点の鉄器が検出されている。7世紀末葉の須恵器は、何れも湖西産の製品である。1・2は広口壺、3はフラスコ瓶、4は長頸壺ないしはフラスコ瓶と想定されるが、何れにしても口唇部下に凸帯を有しており、7世紀末葉段階の湖西産須恵器の特徴を保持している。5は長頸壺、6～10は坏類、11～14は高坏、15～17は土師器坏である。

18～28は長頸鏃の頸部から茎部であるが、鏃身形状のわかる製品は1点も存在していない。19には矢柄の一部が残存し、紐巻きの痕跡が認められる。22は、唯一関形状の判明する製品であり、関は棘関である。これら鏃身形状の不明な鉄鏃群に関しては、全て遺構一括で取り上げられた製品であるとされるが、遺物の性格から判断すれば、本来主体部一括遺物と捉える事が妥当な遺物であろう。その場合、鉄鏃の頸部形状や関が棘関であることなどから見れば、7世紀末葉～8世紀前半代の所産と捉える事が可能な遺物群と判断される。したがって、どちらかと言えば、初葬段階の第2主体部に属する可能性が高い遺物といえよう。

土師器・須恵器については、4・11が後円部南側周溝内の覆土上層から出土している他は、墳丘内な

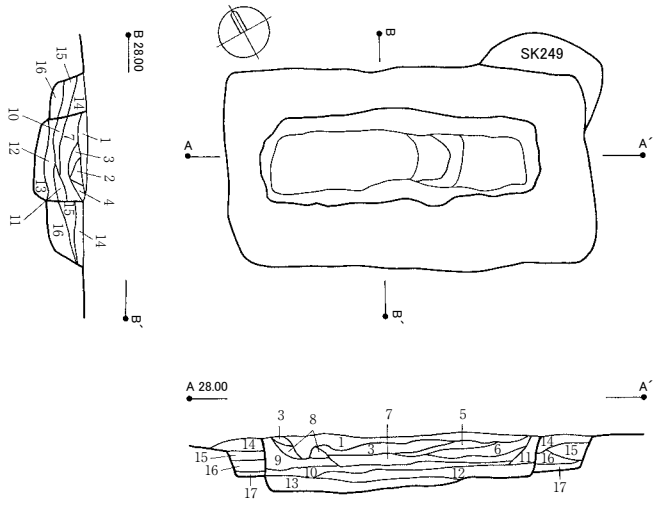


SM1003 墳丘
1 暗褐色土 ローム粒含む。
2 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
3 褐色土 ローム B 主体。
4 暗褐色土 有機質土中にローム粒・ローム B 含む。
5 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
6 褐色土 ローム B 主体。
7 褐色土 ローム粒多量含む。
8 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
9 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
10 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。墳丘流出土。
11 黒褐色土 旧表土以下、他の遺構等の覆土。ローム粒含む。

SM1003 周溝
1 暗褐色土 ローム粒霜降り状に含む。墳丘流出土。
2 暗褐色土 ローム粒含む。
3 褐色土 ローム粒均等に含む。
4 褐色土 有機質土中にローム粒多量に含む。
5 黄褐色土 ローム粒主体。
6 褐色土 ローム粒多量含む。
7 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
8 暗褐色土 汚れたローム主体。
a 下層 SS114 覆土。
b 〃
c 〃
d 〃

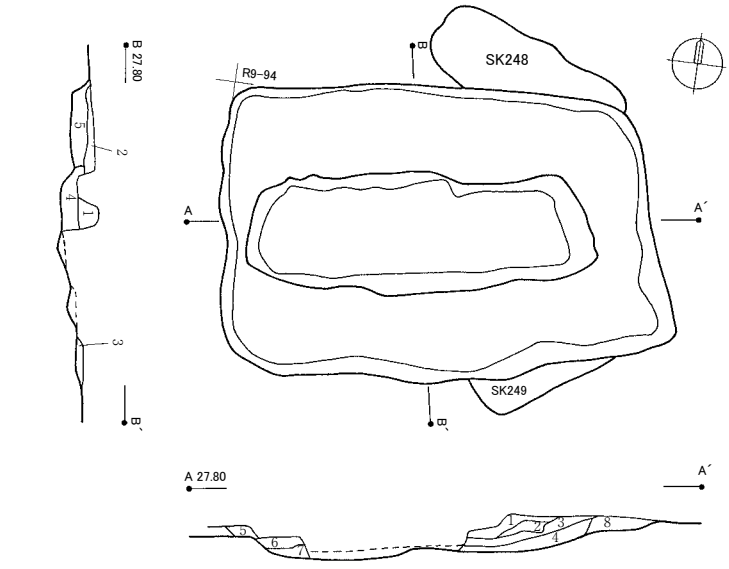
Fig.190　SM1003 遺構 (1) 実測図

第１主体部



SM1003 第 1 主体部
1 暗褐色土 ローム粒・ローム B・粘土 B 含む。
2 暗褐色土 ローム粒含む。
3 暗褐色土 ローム粒含む。やや締まる。
4 褐色土 ローム B。
5 暗褐色土 ローム B 若干含む。
6 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多く含む。
7 暗褐色土 ローム B・粘土粒含む。締まる。
8 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
9 暗褐色土 ローム粒含む。締まる。
10 暗褐色土 ローム粒・粘土粒含む。
11 褐色土 ローム B 主体。
12 暗褐色土 有機質土主体。ローム粒若干含む。
13 暗褐色土 ローム粒均等に含みやや締まる。
14 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
15 暗褐色土 有機質土中にローム粒・ローム B やや多く含む。
16 褐色土 ローム B 主体。
17 黒色土 有機質土中にローム粒若干含む。

第２主体部



SM1003 第 2 主体部
1 黒褐色土 有機質土中にローム粒混入。
2 黒褐色土 有機質土中にローム粒若干含む。
3 暗褐色土 有機質土中にローム粒多く含む。
4 暗褐色土 有機質土中にローム粒・ローム B 多く含む。
5 褐色土 ローム主体しまる。
6 褐色土 褐色土中にローム粒・粘土粒多く含む。
7 暗褐色土 ローム粒少量含む。
8 暗褐色土 ローム粒・ローム B 少量含む。

0 2m
（1／60）

Fig.191　SM1003 遺構 (2) 実測図

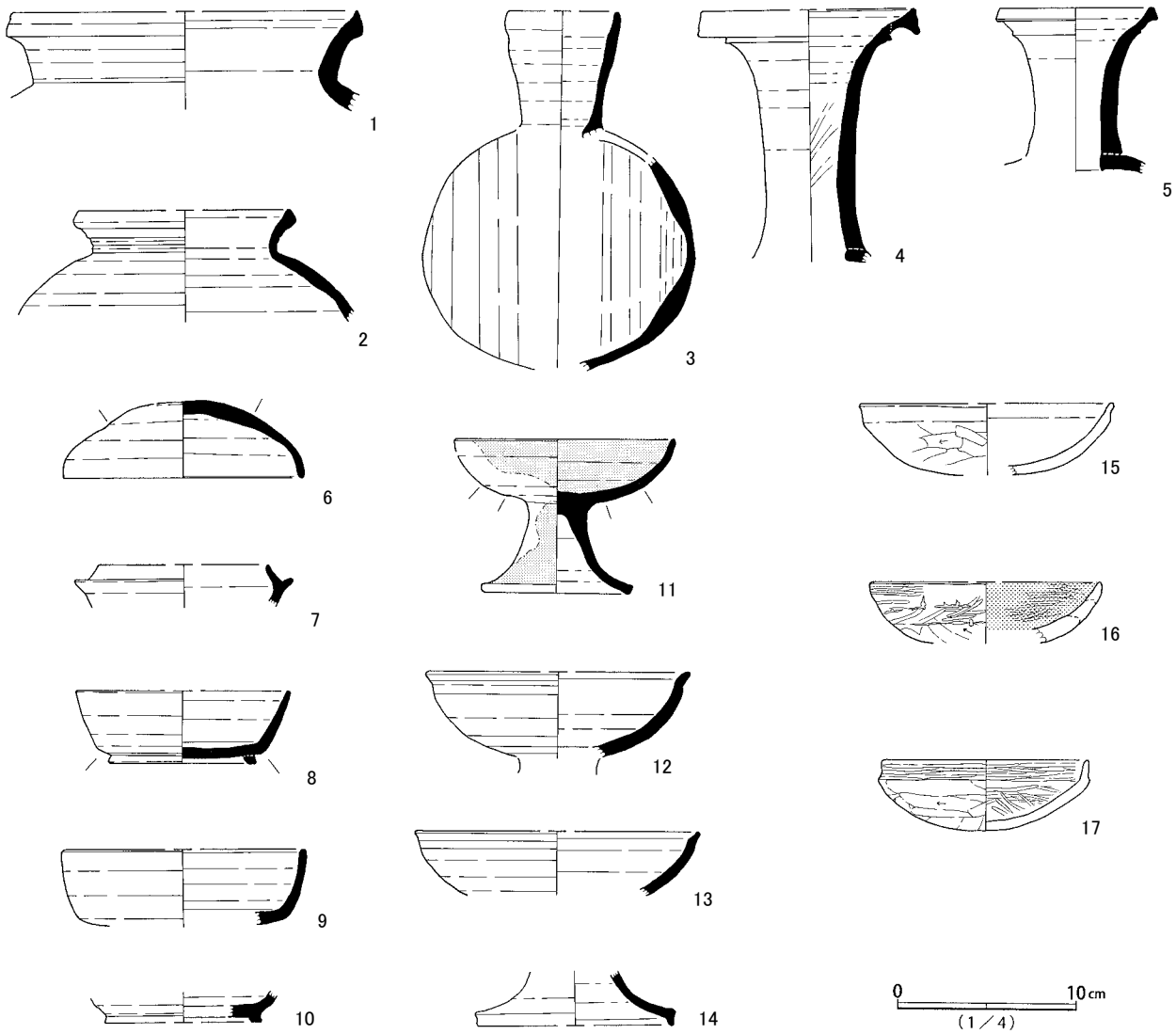


Fig.192　SM1003 遺物実測図

のか周溝内なのか、出土地点がよくわからない。しかし、その組み合わせから見れば、7世紀末葉段階の一群と8世紀後半段階の一群の計2群の存在を読み取ることができる。この2時期が埋葬段階だと想定すれば、先の鉄鏃群が8世紀後半段階まで盛行していた製品と捉えることは考え難いことから、鉄鏃群はおそらく初葬段階の第2主体部に伴っていた可能性が高いと言えよう。したがって、8世紀後半段階に追葬として第1主体部を構築した集団は、7世紀末葉の初葬段階の埋葬位置を知らずに本墳に追葬したものと想定される。

SM1004　099地区　（Fig.193～196、PL.96・165・183・195～196・212）

M・N-10・11グリッドに位置し、下層のSS28・29と重複し、SM1025と接する円墳改変の終末期前方後円墳である。旧遺構番号は099-4081号遺構である。

墳丘と周溝

全長28.20m、後円部長径18.96m、短径18.24m前方部最大幅14.28m、括れ部幅9.92m、残存する盛土の高さは0.12mを測り、主軸方位はN-30°-Eを示す。周溝内側面積は400.3㎡を測り、円墳改変前方後円墳では最大規模を測る。改変前の円墳では278.4㎡で、円墳中の第2位の規模を測る。確認面での周溝幅は、1.16～4.48m、深さは0.64～0.80m、土層断面図上の最大値は1.00mを測り、後円部側が深くて広い傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

本墳は当初円墳として成立し、後に改変されて前方後円墳となった墳丘であることが平面図から窺い知れる。しかし、前方部に埋葬施設が存在しないことなどから、おそらく2基存在する主体部のうち、より新しい段階に築造された埋葬施設の構築に伴い、円墳から前方後円墳に改変されたものと想定される。

埋葬施設

後円部南西側の偏った位置から2基検出された。何れも木棺直葬の土壙墓であるが、新旧関係の判定は困難である。

第1主体部

第1主体部は、より西側から検出された木棺直葬の土壙墓である。上端で長径3.70m短径1.46m深さ0.74m、下端で長径3.14m短径0.84mを測り、主軸方位はN-22°-Wを示す。墓壙のほぼ中央に周囲を粘土で固定した箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は上端で長さ3.04m幅0.60m、下端で長さ2.96m幅0.52 m深さは0.74mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-22°-Wを示す。墓壙と木棺中央部はイモ穴による攪乱により大きく削平されており、遺存状況は不良である。

木棺内からは、1-1の金銅製鞘尻金具付大刀、1-4の鉄鏃、中央東側のイモ穴より1-2の大刀切先部、1-3の大刀茎部、1-5～7の鉄鏃片、1-8の不明金銅製品が検出されている。1-8の不明金銅製品は、緑青が付着し、円錐もしくは円筒形を呈することから、1-1の金銅製鞘尻金具に関連する可能性が考えられる。

第2主体部

第2主体部は、第1主体部の東側に40㎝離れた位置から検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径2.96m短径1.06m、下端で長径2.80m短径0.88m深さ0.28mを測り、主軸方位はN-60°-Wを示す。墓壙のほぼ中央に西側木口を粘土で固定した箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は上端で長さ2.18m幅0.54m、下端で長さ2.14m幅0.52m深さ0.24mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸

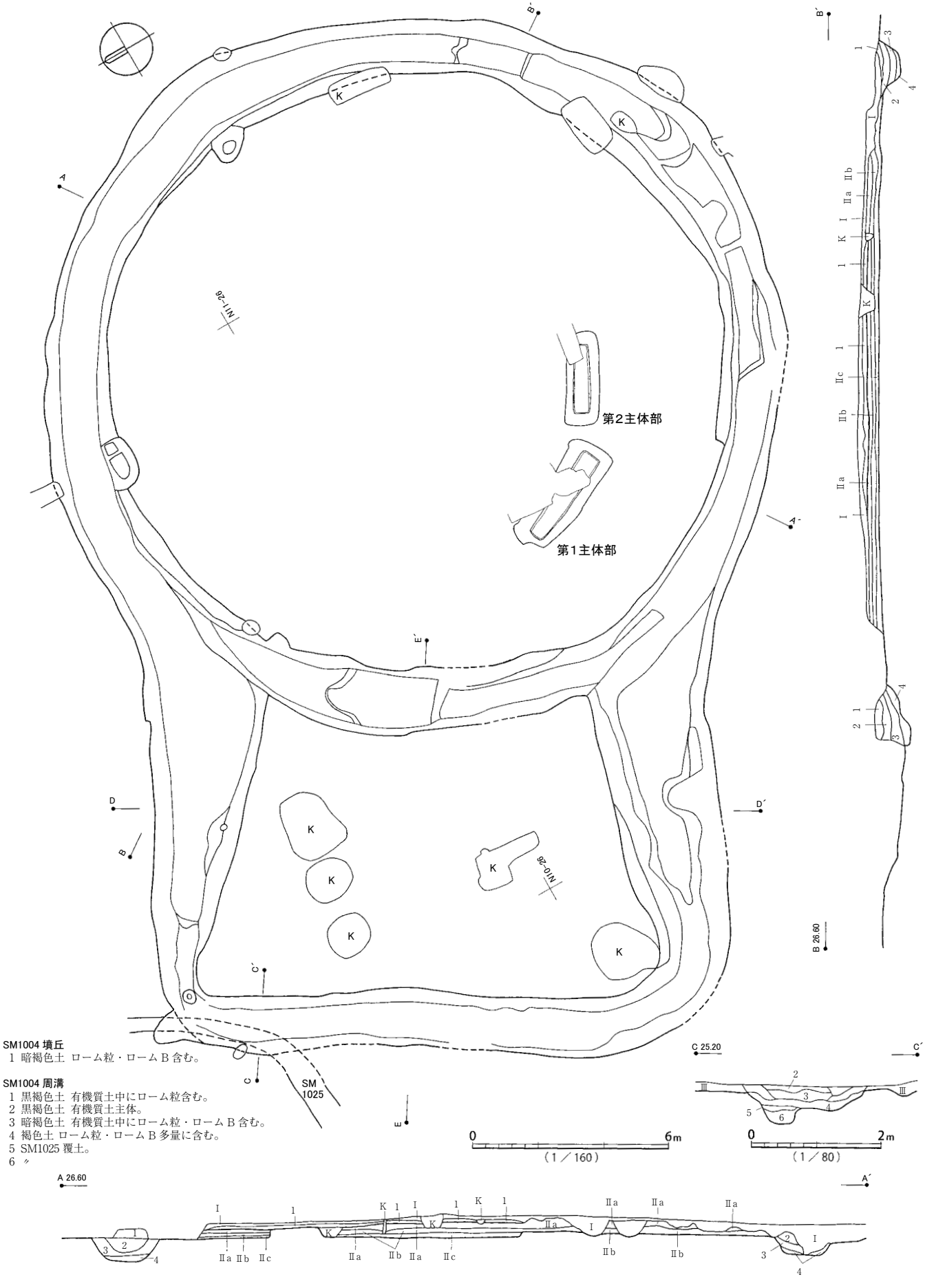
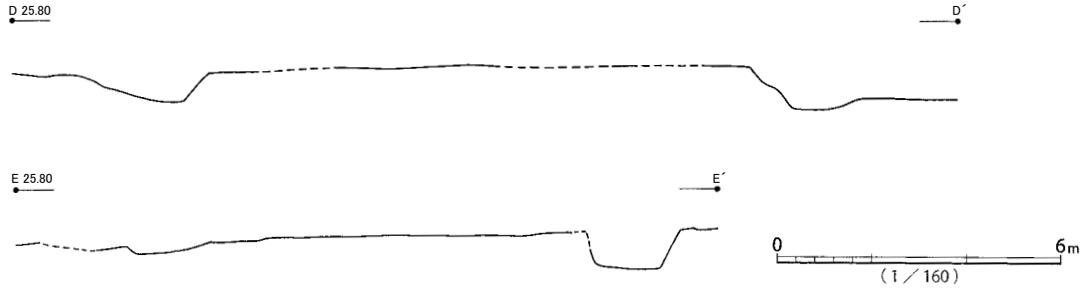
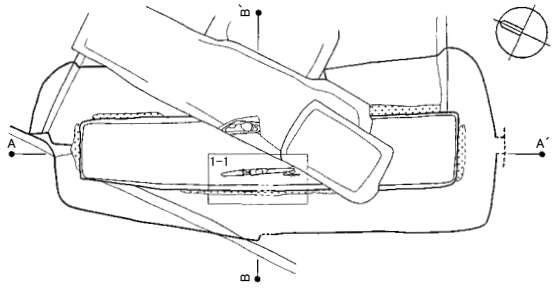
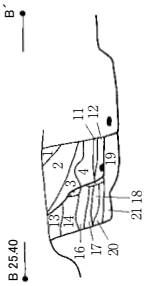


Fig.193　SM1004 遺構 (1) 実測図

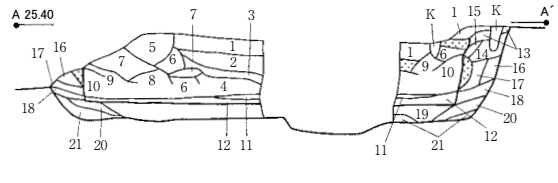


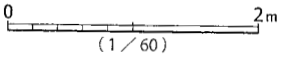
第１主体部

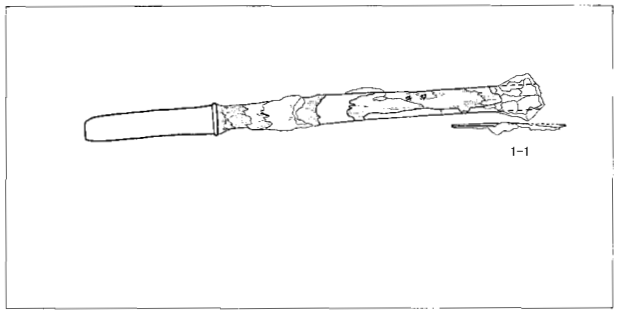


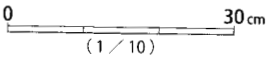


SM1004 第１主体部
1 暗褐色土 ローム粒・ローム小Ｂ多量に含む。
2 暗褐色土 ローム粒・ローム中Ｂ多量に含む。
3 暗褐色土 ローム粒・ローム大Ｂ多量に含む。
4 暗褐色土 ローム粒混入。
5 暗褐色土 ローム大Ｂ混入。
6 暗褐色土 ロームＢ混入。
7 暗褐色土 ローム粒混入。
8 黒褐色土 有機質土主体。
9 黒褐色土 有機質土中にローム粒混じる。
10 黒褐色土 有機質土中にローム粒・粘土粒散る。
11 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ混入暗褐色。硬く付き固まる。
12 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ混入黒色土。硬く付き固まる。
13 黒褐色土 ローム粒含む。
14 黒褐色土 ローム粒・ローム小Ｂ含む。
15 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
16 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ・粘土粒含む。
17 暗褐色土 ローム粒・粘土粒含む。
18 褐色土 ローム粒・ローム大Ｂ多量に含む。
19 暗褐色土 ローム粒・ローム小Ｂ・有機質土の混合土。硬く締まる。
20 褐色土 ローム粒主体。
21 褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。

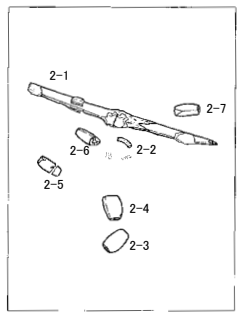


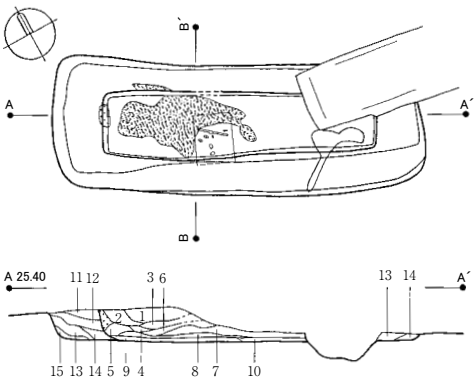


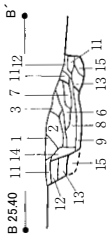




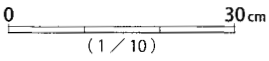
第２主体部







SM1004 第２主体部
1 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
2 黒色土 有機質土中にローム粒若干含む。
3 黒色土 有機質土中にローム粒・ロームＢ少量含む。
4 暗褐色土 ローム粒含む。
5 暗褐色土 粘土粒・ローム粒含む。
6 暗褐色土 ローム小Ｂ少量・ローム大Ｂ多量に含む。
7 黒褐色土 ローム大粒混入・粘土粒含む。
8 黒褐色土 粘土粒・ローム粒含む。硬く締まる。
9 暗褐色土 粘土粒・ローム粒含む。硬く締まる。
10 暗褐色土 粘土粒・ローム粒含む。やや軟質。
11 黒褐色土 粘土粒混入。
12 暗褐色土 ロームＢと粘土の混合土。
13 暗褐色土 ロームＢと粘土の混合土。黒色土も含む。
14 暗褐色土 黒褐色土・ローム粒・粘土粒の混合土。
15 暗褐色土 ローム粒・粘土粒含む。
変色した硬質の貼床状範囲。



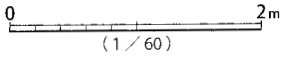


Fig.194　SM1004 遺構 (2)・遺物出土詳細実測図

方位はN-59°-Wを示す。墓壙・木棺とも第1主体部より一回り小型な埋葬施設である。第1主体部同様、墓壙と木棺の東側はイモ穴による攪乱により大きく削平されており、遺存状況は不良である。

木棺内からは、2-1の刀子、2-2の錫製耳環片、2-3～7の琥珀製棗玉5点が出土している。これら遺物の付近には、トーンで示した硬質の貼り床状変色範囲が存在している。

出土遺物

第1主体部木棺内の中央西側から、茎部を欠く1-1の金銅製鞘尻金具付大刀、1-4の鉄鏃、中央東側のイモ穴より1-2の大刀切先部、1-3の大刀茎部、1-5～7の鉄鏃片、1-8の不明金銅製品が検出されている。この内1-4の鉄族は、西側の大刀脇から出土している。現場平面図では長頸鏃であるかのように見えるが、残された遺物は均等両関の三角形鏃であり、鏃身部が折れていた痕跡がある。おそらく折れた鏃身部が大刀下に潜り込んでいたものと推定される。なお、東側中央部付近出土の1-2の大刀は、大振りな造りで地金の依存も良好であり、1-1の金銅製鞘尻金具付大刀とは身幅が異なり同一品とは成り得ない。攪乱穴からの出土であり、おそらく農家がイモ穴掘削の際に西側から出土した大刀片を、律義にこの地点に残したものと想定される。

第2主体部木棺内中央部からは、2-1の長めの刀子が切っ先を西側に向けて検出されている。全長27.6㎝、茎長7.2㎝を測り、茎部には目釘孔1孔が貫通する。周囲からは2-2の錫製耳環片、2-3～7の琥珀製棗玉5点が出土するものの、大刀や鉄鏃等の武器類などが存在していないことが特筆される。

この他、周溝内からは1～17の土師器・須恵器が一括で出土している。この内13のロクロ成形の土師器坏を除けば、概ねTK-209型式併行期とTK-217型式併行期の2時期に細分が可能であり、二つの主体部の構築時期もそのあたりに対応するものと判断される。ただし、どちらの埋葬施設も時期決定の遺物を欠き、どちらに対応可能なのかの判定が著しく困難である。しかしながら、円墳から前方後円墳への改変期は、概ねTK-209型式併行期からTK-217型式古段階併行期の間に存在するものと想定できる。

SM1005　セ28・099地区　（Fig.197～201、PL.97・165・183・196）

P・Q・R-12・13グリッドに位置し、下層のSS42・43と重複する円墳改変の終末期前方後円墳である。旧遺構番号はセ28-025・099-4076号遺構である。

墳丘と周溝

全長31.28m、後円部径14.72m、前方部最大幅13.92m、括れ部幅7.36m、残存する盛土の高さは0.65mを測り、主軸方位はN-52°-Eを示す。周溝内側面積は376.9㎡を測り、円墳改変前方後円墳では第2位の規模である。改変前の円墳では181.9㎡で、円墳中の第7位の規模を測る。確認面での周溝幅は、0.44～3.60m、深さは0.08～0.84m、土層断面図上の最大値は1.26mを測り、後円部側が深くて広い傾向が認められる。周溝断面はなだらかな逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

本墳は当初円墳として成立し、後に改変されて前方後円墳となった墳丘であることが遺構平面図から窺い知れる。当初埋葬施設である第1主体部を削平した第2主体部構築時に、円墳から前方後円墳に改変されたものと判断できる。

埋葬施設

埋葬施設は、後円部中央に2基検出された。何れも木棺直葬の土壙墓であるが、第1主体部は第2主体部に大きく削平されて存在している。

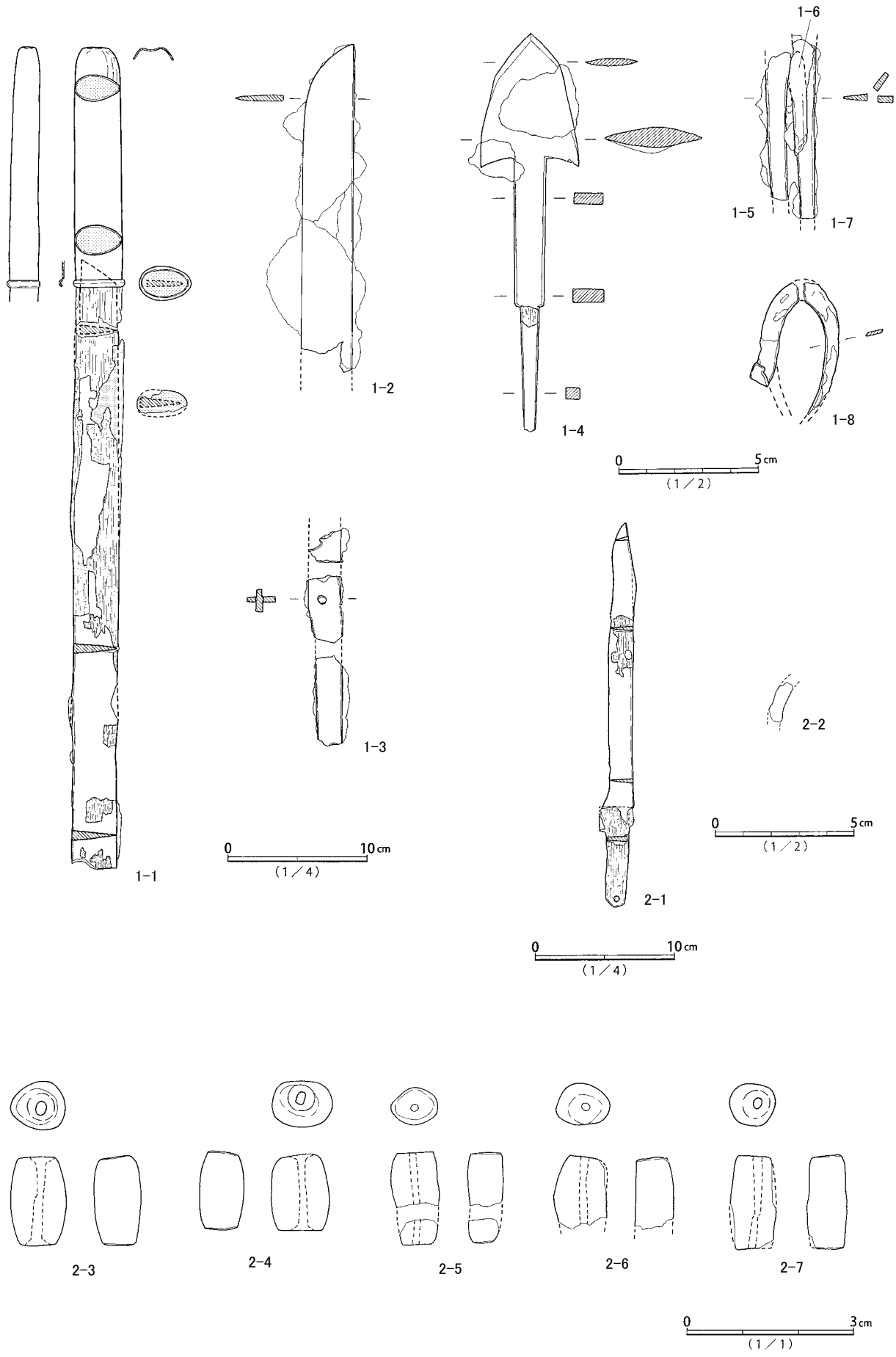


Fig.195　SM1004 遺物 (1) 実測図

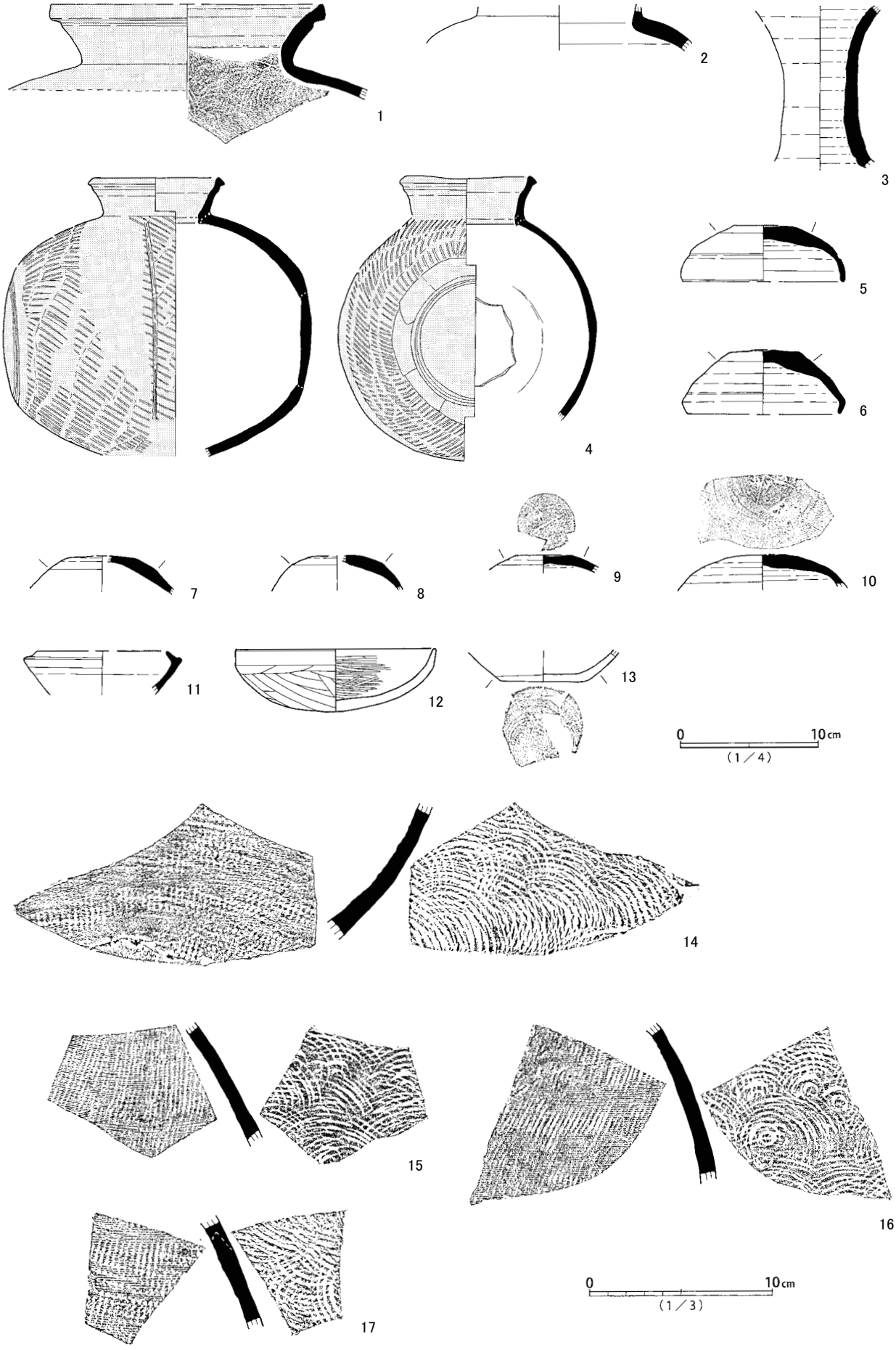


Fig.196　SM1004 遺物 (2) 実測図

第1主体部

第1主体部は、後円部中央に位置し、第2主体部に大きく削平されて存在する木棺直葬の土壙墓である。墓壙の残存規模は、上端で長径4.50m短径0.60m深さ0.85m、下端で長径2.96m短径0.36mを測り、主軸方位はN-69°-Eを示す。おそらく墓壙のほぼ中央に木棺痕があったと想定されるが、規模は定かではない。現場平面図からは上端で長さ3.28m幅0.50m、下端で長さ2.08m幅0.34m程の木棺痕らしき落ち込みが認められるが、深さは不明である。

墓壙・棺内からは、遺物が全く検出されなかった。

第2主体部

第2主体部は、後円部の中央からやや軸を南側にずらした位置で、第1主体部を大きく削平して存在する木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径4.43m短径2.38m、下端で長径3.64m短径1.83m深さ1.10mを測り、主軸方位はN-79°-Eを示す。墓壙のほぼ中央に箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は上端で長さ3.25m幅1.83m、下端で長さ2.35m幅1.06m深さ0.80mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-79°-E を示す。

木棺内からは2-1の大刀と2-2の刀子の周囲から2-3・4・5・6の耳環、2-7～19及び21の番号を付した鉄鏃群等が検出されている。

出土遺物

第2主体部の墓壙上層からは、1・2の番号を付した平瓶とフラスコ瓶が検出された。共に7世紀末葉に位置付けられる湖西産須恵器であり、遺体埋葬直後の供献土器と判断される。

第2主体部木棺内からは、2-1の番号を付した2窓の有孔鍔付大刀・2-2の刀子が、中央東寄りに検出されている。2-1は茎部を欠損するが、残存長59.20㎝、刀身長55.40㎝を測り、長径7.13㎝、短径5.93㎝厚さ0.28～0.31㎝の鍔が伴う。2-2は全長10.80㎝の刀子であり、木質の外側に革巻きの痕跡が認められることから、皮巻き鞘の可能性が高い。周囲からは2-3・4・5・6の番号を付した金銅製耳環が検出されており、大刀切先と耳環の位置から、被葬者は東枕安置されていたものと察知される。これを前提とすれば、被葬者の足下付近からは、2-7～19及び2-21の番号を付した鉄鏃群が検出されている。2-7は三角形鏃で、関形状は棘関であり、茎部分に紐巻きの痕跡が認められる。2-8～23は、刃部を欠く製品も含めて片刃の長頸鏃群と想定され、関形状の判明するものは何れも棘関であり、茎部に紐巻きの痕跡が認められる製品も存在する。2-25は一括で取り上げられた鏃状鉄製品であり、木質が付着することから、木棺に関連する遺物と想定される。2-24・26も一括で取り上げられた鉄器であり、一部を欠くが、2次変形した鉄製縁金具であろうか。そうであれば、本来は身幅の細い小太刀類の鞘に伴う製品と考えられる。

この他、周溝内から3・4の番号を付した土師器・須恵器が一括で検出されている。3は、5世紀末葉のTK-47型式併行期の土師器坏、4は長頸壺の類であるが、本墳の何れも築造時期を正確に示すものではない。

本墳の当初の築造時期は不明であるが、第2主体部構築時は、上層に供献された平瓶とフラスコ瓶から7世紀末葉段階に位置付けられる。

SM1006　099地区　（Fig.202～205、PL.97～98・165～166・183～184・196）

N・O-12・13・14グリッドに位置する円墳改変の終末期前方後円墳である。本墳は諏訪台古墳群中、

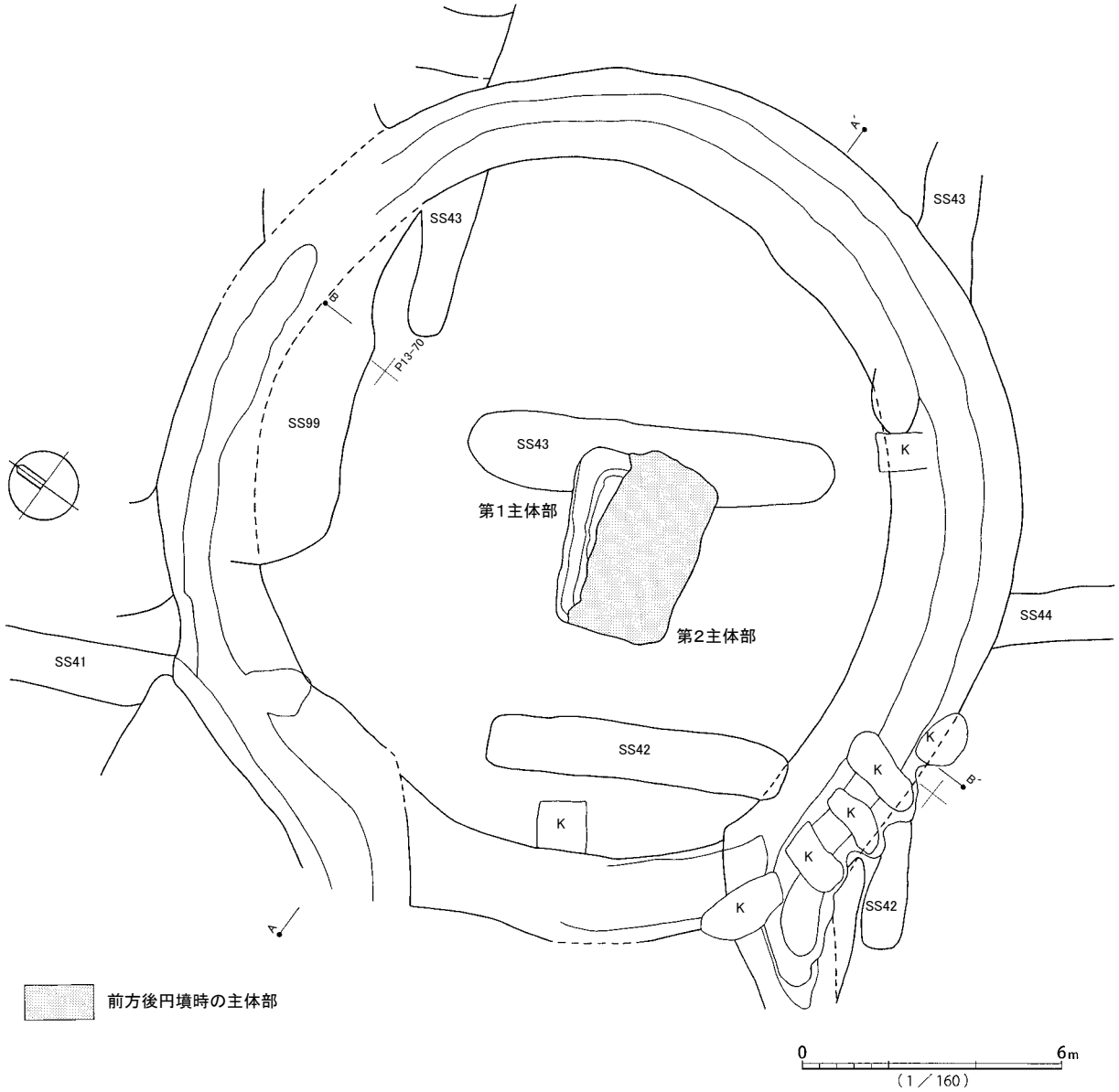


Fig.197　SM1005 遺構 (1) 実測図

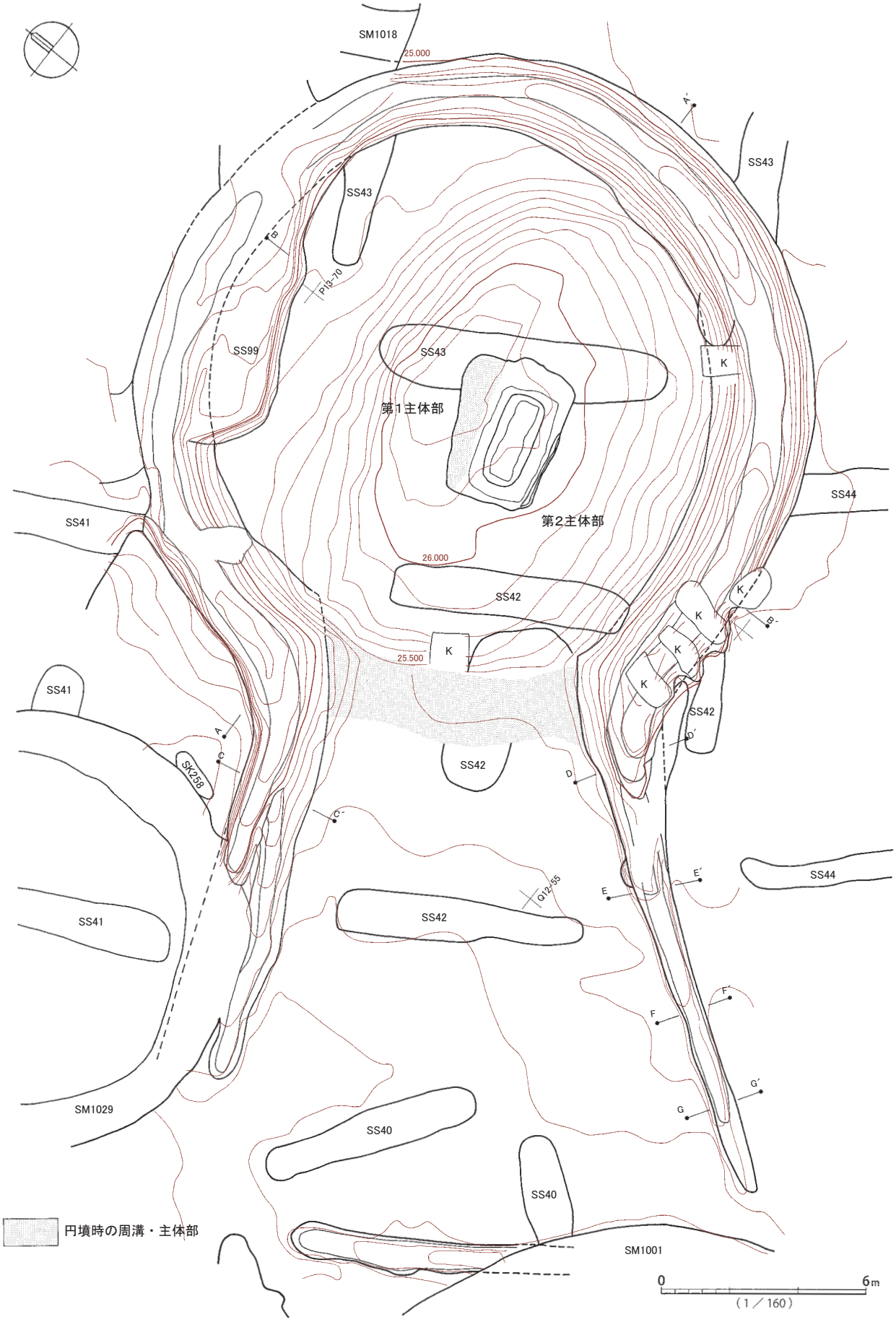


Fig.198　SM1005 遺構 (2) 実測図

唯一の横穴式石室採用墳である。旧遺構番号は099-4068号遺構である。

墳丘と周溝

全長26.40m、後円部長径19.20m、後円部短径19.00m、前方部最大幅12.40m、括れ部幅8.10mを測り、主軸方位はN-66°-Eを示す。現状では盛土は存在しない。周溝内側面積は357.8㎡を測り、円墳改変前方後円墳では第3位の規模である。改変前の円墳では286.6㎡を測り、円墳中の第2位の規模を示す。確認面での周溝幅は、2.00～3.50m、深さは0.80～0.90m、土層断面図上の最大値は1.20mを測り、後円部側が深くて広い傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

本墳は当初円墳として成立し、後に改変されて前方後円墳となった墳丘である。軟質砂岩使用の横穴式石室である第3主体部前庭部は、本墳周溝によって削平されていることから、当初埋葬施設の横穴式石室を削平した後に、第1・2主体部を構築し、その段階で、円墳から前方後円墳に改変されたものと想定される。

埋葬施設

埋葬施設は、後円部南側に偏った位置で3基、前方部前面周溝内中央部から1基検出された。うち2基は墓壙を接し併存して検出された木棺直葬の土壙墓であり、1基は、諏訪台古墳群では唯一の軟質砂岩載石積みの横穴式石室、1基は前方部前面中央部の周溝内土坑であるが、互いの埋葬施設が切り合う関係のものは存在しない。

第1主体部

第1主体部は、最も前方部寄りに検出された木棺直葬の土壙墓である。第1主体部と第2主体部は、墓壙を接し併存して検出されているが、新旧関係はよく解らない。墓壙規模は、上端で長径3.94m短径1.72m深さ0.52m、下端で長径3.60m短径1.38mを測り、主軸方位はN-56°-Wを示す。墓壙の中央には木口の両側を粘土で固定した箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は上端で長さ3.42m幅1.00m、下端で長さ3.34m幅0.68m深さ0.52mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-56°-Wを示す。攪乱により墓壙と木棺痕の一部を欠き、遺存状態は不良である。

木棺内からは、金銅製耳環2対4点が検出されている。

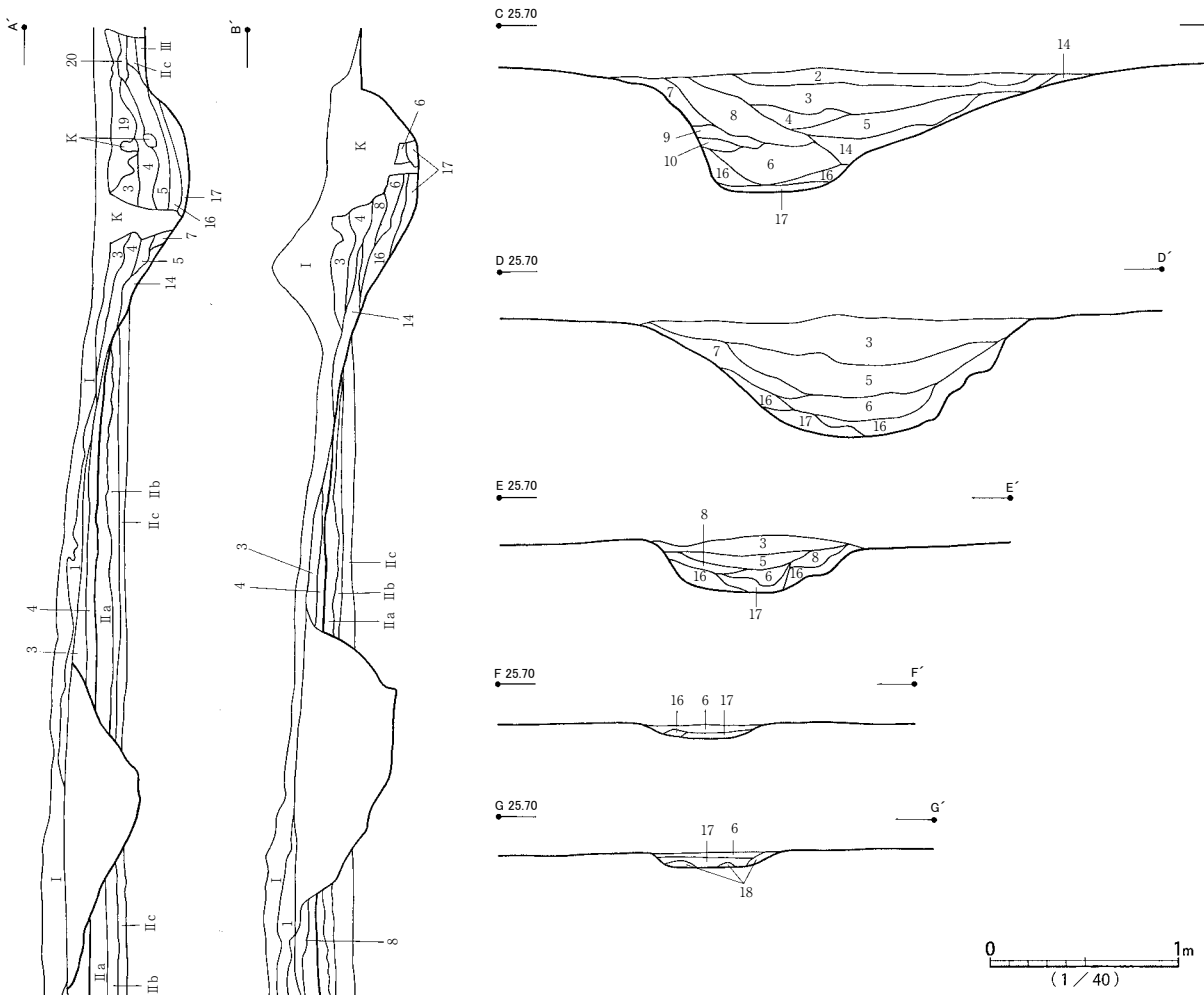
第2主体部

第2主体部は、第1主体部と墓壙を接して検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径3.30m短径1.10m深さ0.54m、下端で長径3.20m短径1.04mを測り、主軸方位はN-51°-Wを示す。墓壙の中央には木口の両側を粘土で固定した箱型の木棺痕が検出された。木棺残存規模は上端で長さ2.08m以上幅0.64m、下端で長さ2.04m以上幅0.54m深さ0.40mを測り、主軸方位はN-51°-Wを示す。第1主体部より墓壙・木棺とも小ぶりと想定されるが、攪乱により大きく削平されており、木棺規模の長さは不明である。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

第3主体部

第3主体部は、後円部南側の周溝に接して検出された軟質砂岩使用の横穴式石室である。墓壙規模は、上端で長径4.02m短径2.76m深さ0.64m、下端で長径3.58m短径2.12mを測り、主軸方位はN-1°-Wを示す。



SM1005 墳丘

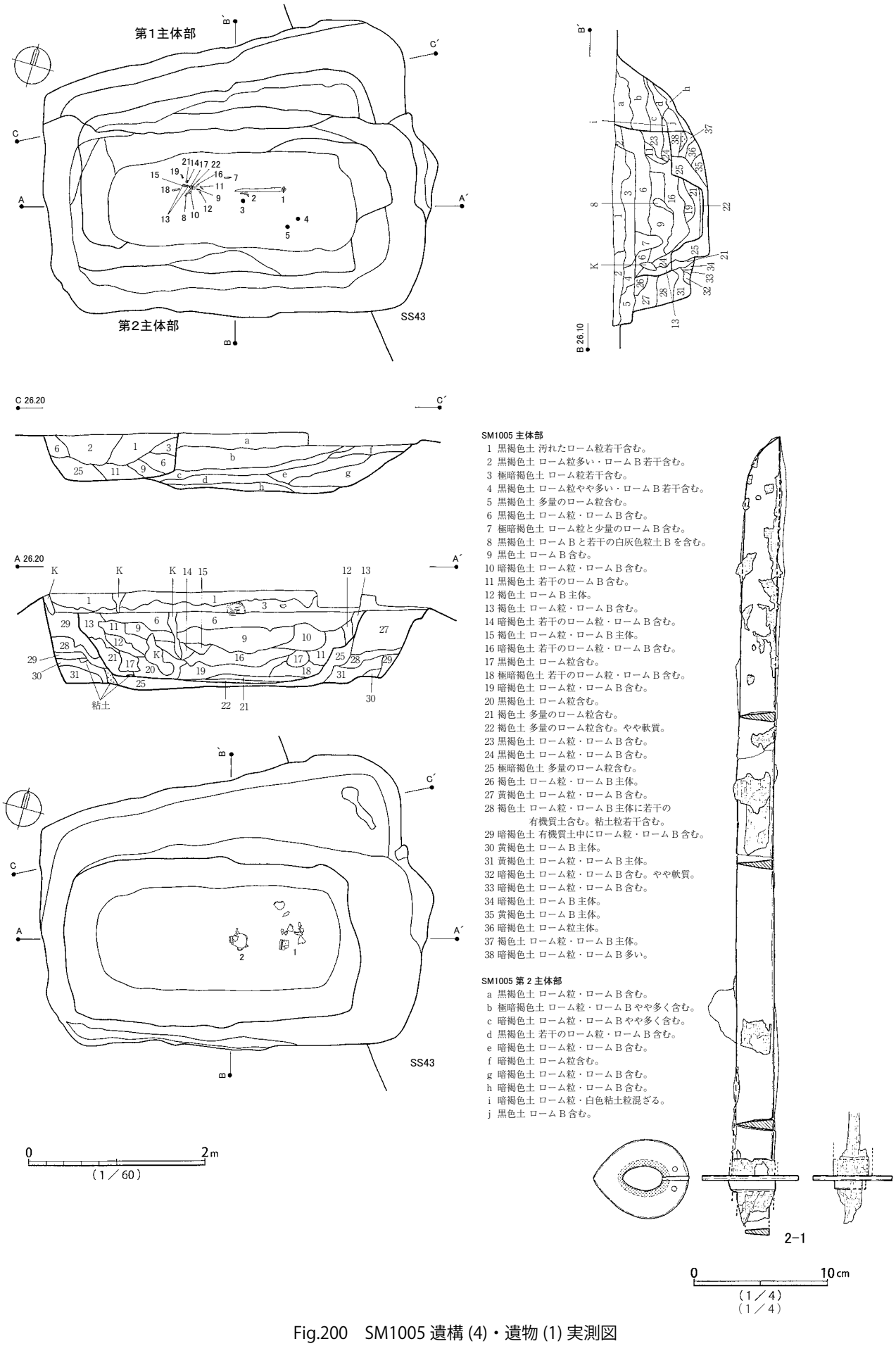
1 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
2 暗褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
3 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。ローム量多い。
4 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
5 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む墳丘流出土。
6 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む墳丘流出土。
7 暗褐色土 早期に墳丘から流出した土。ローム粒・ローム B 含む。
8 褐色土 ローム B 主体。
9 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
10 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む墳頂部からの流入土。

SM1005 周溝

1 暗褐色土 墳丘 1 に似る。最後に墳頂部から流出してきた墳丘流出土。
2 黒褐色土 有機質土主体。
3 黒褐色土 若干のローム粒含む。
4 黒褐色土 暗褐色有機質土主体。
5 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
6 黒色土 有機質土主体。若干のローム粒含む。
7 暗褐色土 ローム粒含む。
8 黒色土 ローム粒含む。
9 褐色土 ローム主体。
10 褐色土 ローム B 主体。
11 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
12 暗褐色土 ローム粒主体。
13 暗褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
14 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
15 褐色土 ローム B。
16 暗褐色土 ローム粒多量・若干のローム B 含む。
17 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
18 褐色土 汚れたローム粒主体。
19 SM1015 円墳方向から流出してきた土。
20 SM1015 円墳方向から流出してきた土。

Fig.199　SM1005 遺構 (3) 実測図

第１・２主体部



SM1005 主体部

1 黒褐色土 汚れたローム粒若干含む。
2 黒褐色土 ローム粒多い・ローム B 若干含む。
3 極暗褐色土 ローム粒若干含む。
4 黒褐色土 ローム粒やや多い・ローム B 若干含む。
5 黒褐色土 多量のローム粒含む。
6 黒褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
7 極暗褐色土 ローム粒と少量のローム B 含む。
8 黒褐色土 ローム B と若干の白灰色粒土 B を含む。
9 黒色土 ローム B 含む。
10 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
11 黒褐色土 若干のローム B 含む。
12 褐色土 ローム B 主体。
13 褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
14 暗褐色土 若干のローム粒・ローム B 含む。
15 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
16 暗褐色土 若干のローム粒・ローム B 含む。
17 黒褐色土 ローム粒含む。
18 極暗褐色土 若干のローム粒・ローム B 含む。
19 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
20 黒褐色土 ローム粒含む。
21 褐色土 多量のローム粒含む。
22 褐色土 多量のローム粒含む。やや軟質。
23 黒褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
24 黒褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
25 極暗褐色土 多量のローム粒含む。
26 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
27 黄褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
28 褐色土 ローム粒・ローム B 主体に若干の
有機質土含む。粘土粒若干含む。
29 暗褐色土 有機質土中にローム粒・ローム B 含む。
30 黄褐色土 ローム B 主体。
31 黄褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
32 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。やや軟質。
33 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
34 暗褐色土 ローム B 主体。
35 黄褐色土 ローム B 主体。
36 暗褐色土 ローム粒主体。
37 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
38 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多い。

SM1005 第２主体部

a 黒褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
b 極暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
c 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
d 黒褐色土 若干のローム粒・ローム B 含む。
e 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
f 暗褐色土 ローム粒含む。
g 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
h 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
i 暗褐色土 ローム粒・白色粘土粒混ざる。
j 黒色土 ローム B 含む。

Fig.200　SM1005 遺構 (4)・遺物 (1) 実測図

墓壙の中央には両袖式の横穴式石室が存在するが、天井石と床石及び奥壁石は盗掘等によって既に失われている。玄室と羨道部間には方柱状の載石を左右に配して玄門部を構築し、玄門部には基底部に少なくとも２石の載石を配し、框石としている。

玄門部の方柱状載石は、遺存状況が良好なもので縦長の６面の面取りを有した載石が縦方向に配置されており、載石の縦方向の高さは0.64m、玄門部の幅は0.50m、奥行き0.32mを測る。

玄室の平面プランは、奥壁が遺存していないので不確実ではあるが、残存する両袖石から推察して奥壁側がやや広い長台形を呈していたと想定される。床石及び袖石の一部が存在していないため正確な玄室規模は不明であるが、墓壙の掘り方から判断して推定全長3.26m程度、残存長2.16m残存幅0.90m、両袖の載石の高さは、遺存度良好なもので0.44mを測る。左右の袖石の遺存状況は極めて不良で、1段目の2/3程しか遺存していない。ただし、玄門部の方柱石の高さから判断して、おそらく袖石3段積み以上の石室であっただろうと想定される。玄門部の方柱石並びに遺存する袖石が上方に向かって「ハ」の字状に設置されていることから、上方に向かって「持ち送り」が行われたものと察知される。

羨道部は、玄門から載石1個分の0.38m程周溝側に張り出すが、本来存在し得た先端部分が、本墳の周溝によって削平されていることから、第3主体部こそが改変以前の円墳段階での埋葬施設と捉えられる。したがって本墳は、円墳段階では横穴式石室、前方後円墳改変後に木棺直葬土壙墓に変遷したと想定され、改変後に第1・第2主体部が築造されたと捉えられる。

墓壙・石室内からは、何の遺物も検出されなかった。

第4主体部

第4主体部は、前方部前面周溝内の中央部に検出された土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径1.74m短径0.66m深さ0.54m、下端で長径1.52m短径0.38mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-1°-Wを示す。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

埋葬施設内からの出土は、第1主体部から1-1～4の金銅製耳環4点を検出したに過ぎず、他の埋葬施設を含め各埋葬施設の築造年代を正確に捉える事が出来ない。

本墳周溝内からは、1の須恵器大甕、2の須恵器甕、5の須恵器高台付坏底部、3・4の平瓶2点他、土師器・須恵器と寛永通宝、近年の1銭銅貨が一括で取り上げられている。時期の整合しない遺物も存在するが、土師器・須恵器の主要が示す年代は、7世紀末葉段階を示している。ただし、この7世紀末葉段階に対応する埋葬施設を、明確に捉えることはできない。

SM1007　セ28地区　（Fig.206～214、PL.99～100・166～167・184・196～197）

S-10・11グリッドに位置し、下層のSS61・62・114・115・117と重複する円墳改変の前方後円墳である。旧遺構番号はセ28-038号遺構である。

墳丘と周溝

全長26.20m、後円部径17.68m、前方部残存最大幅10.72m、括れ部幅6.20m、残存する盛土の高さは0.84mを測り、主軸方位はN-71°-Eを示す。周溝内側面積は319.5㎡を測り、円墳改変前方後円墳では第4位の規模である。改変前の円墳では253.0㎡で、円墳中では第6位の規模を測る。確認面での周

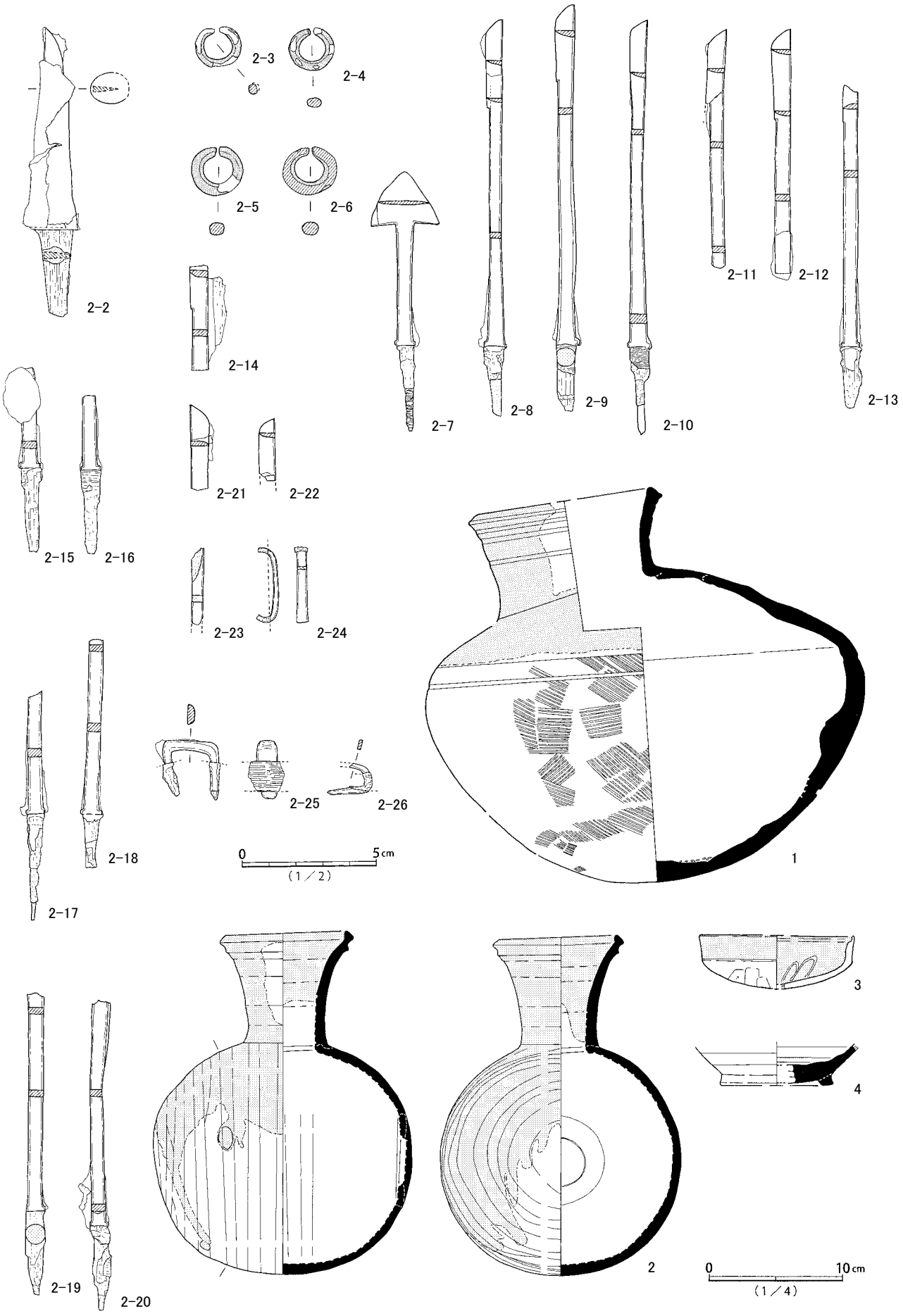
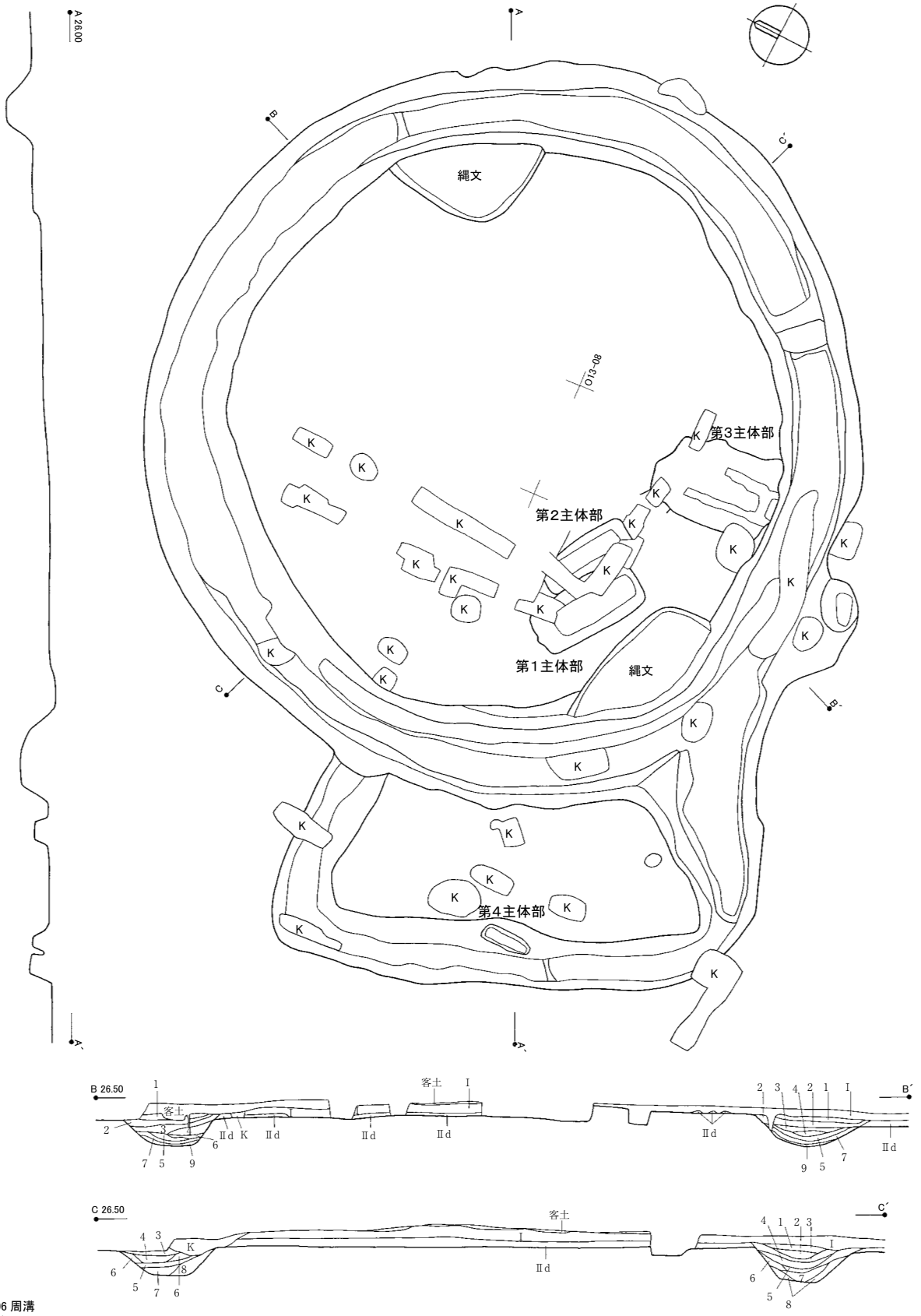


Fig.201　SM1005 遺物 (2) 実測図



SM1006 周溝
1 黒色土 ―
2 黒褐色土 若干のローム粒含む。
3 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
4 黒褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
5 黒色土 ローム粒少量含む。
6 暗褐色土 黒褐色土中にローム粒・ローム B 多く含む。
7 暗黄褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
8 暗黄褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
ローム B 量多い。
9 暗黄褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。

Fig.202　SM1006 遺構 (1) 実測図

溝幅は、2.88～6.12m、深さは0.32～1.12m、土層断面図上の最大値は1.52mを測り、後円部側が深くて広い傾向が認められる。周溝断面はなだらかな逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

本墳は当初円墳として成立し、後に改変されて前方後円墳となった墳丘であることが、埋葬施設の配置とその構築状況から判断される。第2主体部は、円墳の周溝を埋め戻した後に構築されており、このことから、第1主体部構築時は円墳、第2主体部構築時に円墳から前方後円墳に改変されたことが判明する。

埋葬施設

埋葬施設は全部で5基検出された。当初の埋葬施設は円墳段階の第1主体部であり、後円部の中央から南側に偏った地点に存在する木棺直葬の土壙墓である。次段階は、円墳周溝を埋め戻した後に構築された第2主体部の木棺直葬の土壙墓である。なお、この段階で本墳は前方後円墳に改変されたことが確実である。この他、周溝内に検出された側壁抉り込み土壙としての3基の埋葬施設が存在するが、第5主体部は詳細図がない。ただし、第2主体部が円墳段階の周溝を埋め戻した後に構築されたことが確実であるため、円墳段階に共存した側壁抉り込み土壙であると判断される。

第1主体部

第1主体部は、後円部中央やや南側から検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径4.60m短径1.28～1.54m深さ0.60m、下端で長径3.84m短径1.20～1.32 mを測り、主軸方位はN-64°-Eを示す。墓壙の中央からやや南側に偏った地点で、当期としては珍しい割竹形木棺状の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ3.16m幅0.54～0.74m、下端で長さ2.74m幅0.32～0.44m深さ0.60mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-66°-Eを示す。

木棺内からは1-1の大刀・1-2の刀子、1-3～12の長頸鏃群が2群に纏まった状態で検出されている。

第2主体部

第2主体部は、前方部構築のために西側の円墳周溝を埋め戻した後に構築された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径3.62m短径1.72m深さ0.36m、下端で長径3.36m短径1.48mを測り、主軸方位はN-64°-Eを示す。墓壙の中央から箱型木棺状の木棺痕が検出された。木棺規模は上端で長さ2.28m幅0.76m、下端で長さ2.14m幅0.62m深さ0.34mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-65°-Eを示す。

木棺内からは、2-1の小太刀と2-2・2-3の刀子、2-4～11の片刃長頸鏃群が検出されている。

第3主体部

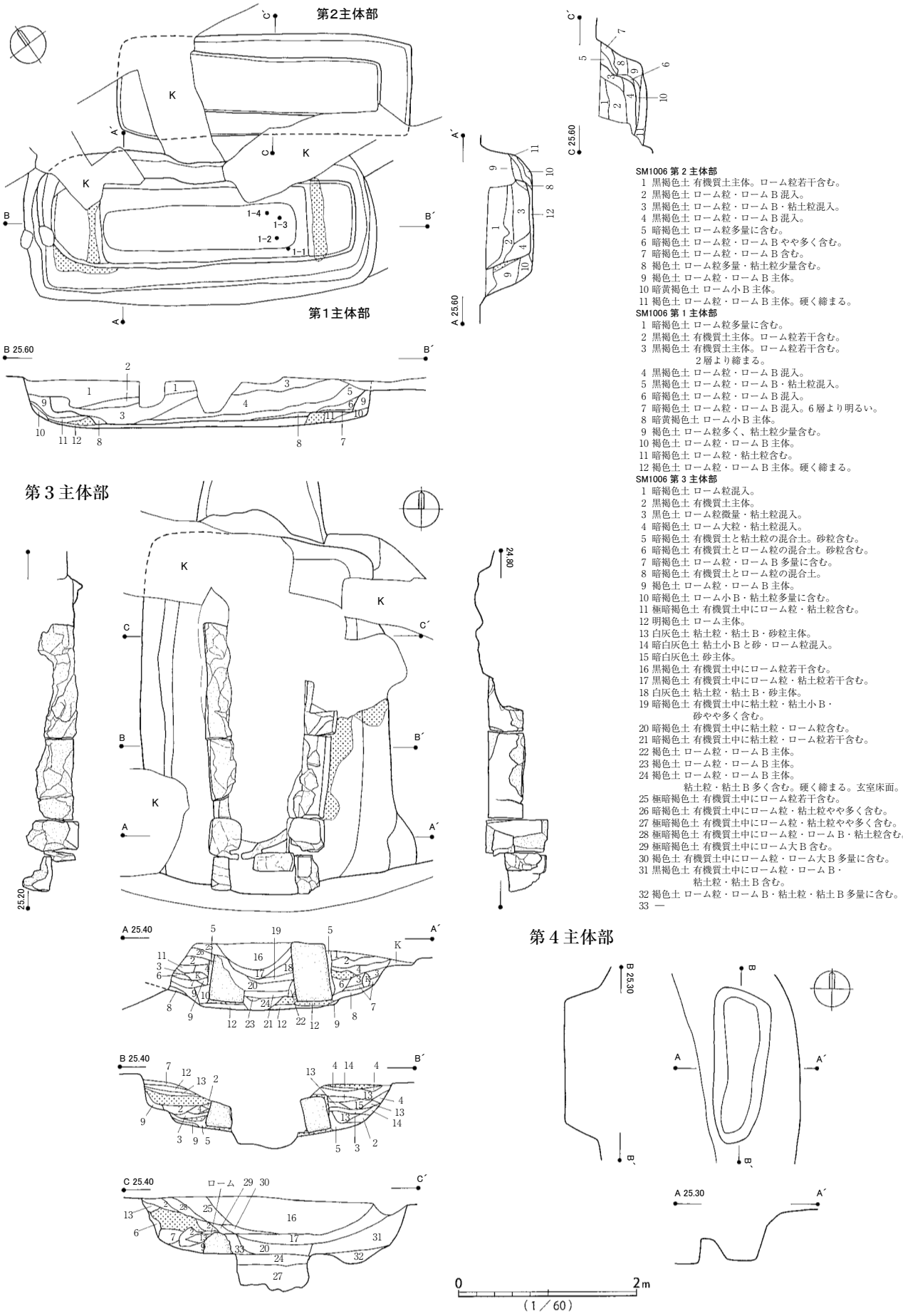
第3主体部は、後円部の北側に位置する側壁抉り込みタイプの土壙墓である。前方後円墳改変段階には、第2主体部構築に伴い埋め戻されていることから、円墳段階に第1主体部と共存した埋葬施設である。墓壙規模は、上端で長径3.30m短径1.50m、下端で長径2.40m短径0.80m、深さは周溝底面から0.32mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-89°-Wを示す。

墓壙内からは、遺物が全く検出されなかった。

第4主体部

第4主体部は、後円部の南側に位置する側壁抉り込みタイプの土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径1.76m短径0.72m、下端で長径1.36m短径0.32mを測るが、深さは不明である。主軸方位はN-69°-Wを示す。

第１・２主体部



SM1006 第 2 主体部
1 黒褐色土 有機質土主体。ローム粒若干含む。
2 黒褐色土 ローム粒・ローム B 混入。
3 黒褐色土 ローム粒・ローム B・粘土粒混入。
4 黒褐色土 ローム粒・ローム B 混入。
5 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
6 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
7 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
8 褐色土 ローム粒多量・粘土粒少量含む。
9 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
10 暗黄褐色土 ローム小 B 主体。
11 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。硬く締まる。

SM1006 第 1 主体部
1 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
2 黒褐色土 有機質土主体。ローム粒若干含む。
3 黒褐色土 有機質土主体。ローム粒若干含む。
２層より締まる。
4 黒褐色土 ローム粒・ローム B 混入。
5 黒褐色土 ローム粒・ローム B・粘土粒混入。
6 暗褐色土 ローム粒・ローム B 混入。
7 暗褐色土 ローム粒・ローム B 混入。6 層より明るい。
8 暗黄褐色土 ローム小 B 主体。
9 褐色土 ローム粒多く、粘土粒少量含む。
10 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
11 暗褐色土 ローム粒・粘土粒含む。
12 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。硬く締まる。

SM1006 第 3 主体部
1 暗褐色土 ローム粒混入。
2 黒褐色土 有機質土主体。
3 黒色土 ローム粒微量・粘土粒混入。
4 暗褐色土 ローム大粒・粘土粒混入。
5 暗褐色土 有機質土と粘土粒の混合土。砂粒含む。
6 暗褐色土 有機質土とローム粒の混合土。砂粒含む。
7 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
8 暗褐色土 有機質土とローム粒の混合土。
9 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
10 暗褐色土 ローム小 B・粘土粒多量に含む。
11 極暗褐色土 有機質土中にローム粒・粘土粒含む。
12 明褐色土 ローム主体。
13 白灰色土 粘土粒・粘土 B・砂粒主体。
14 暗白灰色土 粘土小 B と砂・ローム粒混入。
15 暗白灰色土 砂主体。
16 黒褐色土 有機質土中にローム粒若干含む。
17 黒褐色土 有機質土中にローム粒・粘土粒若干含む。
18 白灰色土 粘土粒・粘土 B・砂主体。
19 暗褐色土 有機質土中に粘土粒・粘土小 B・
砂やや多く含む。
20 暗褐色土 有機質土中に粘土粒・ローム粒含む。
21 暗褐色土 有機質土中に粘土粒・ローム粒若干含む。
22 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
23 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
24 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
粘土粒・粘土 B 多く含む。硬く締まる。玄室床面。
25 極暗褐色土 有機質土中にローム粒若干含む。
26 暗褐色土 有機質土中にローム粒・粘土粒やや多く含む。
27 極暗褐色土 有機質土中にローム粒・粘土粒やや多く含む。
28 極暗褐色土 有機質土中にローム粒・ローム B・粘土粒含む。
29 極暗褐色土 有機質土中にローム大 B 含む。
30 褐色土 有機質土中にローム粒・ローム大 B 多量に含む。
31 黒褐色土 有機質土中にローム粒・ローム B・
粘土粒・粘土 B 含む。
32 褐色土 ローム粒・ローム B・粘土粒・粘土 B 多量に含む。
33 —

Fig.203　SM1006 遺構 (2) 実測図

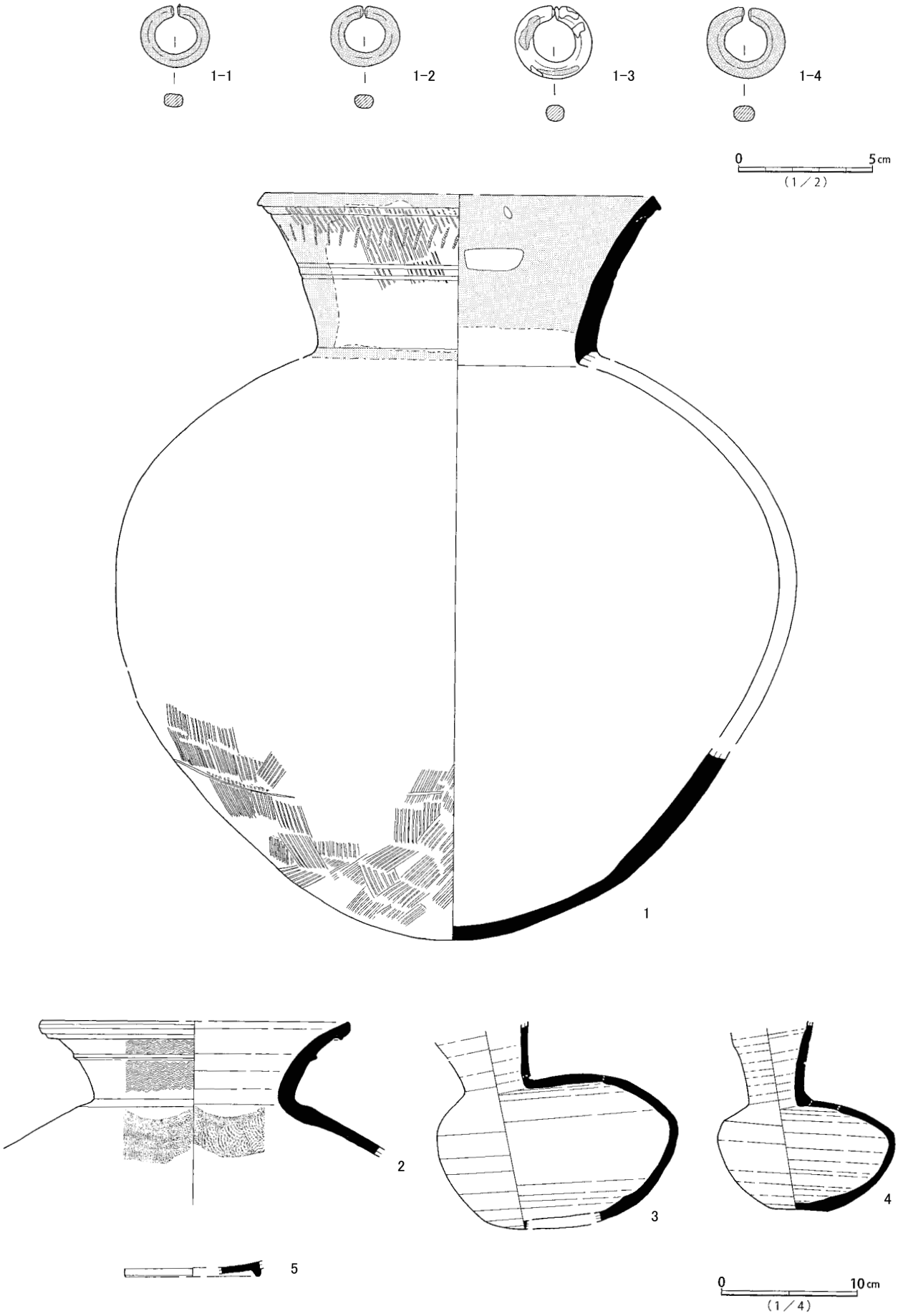


Fig.204　SM1006 遺物 (1) 実測図

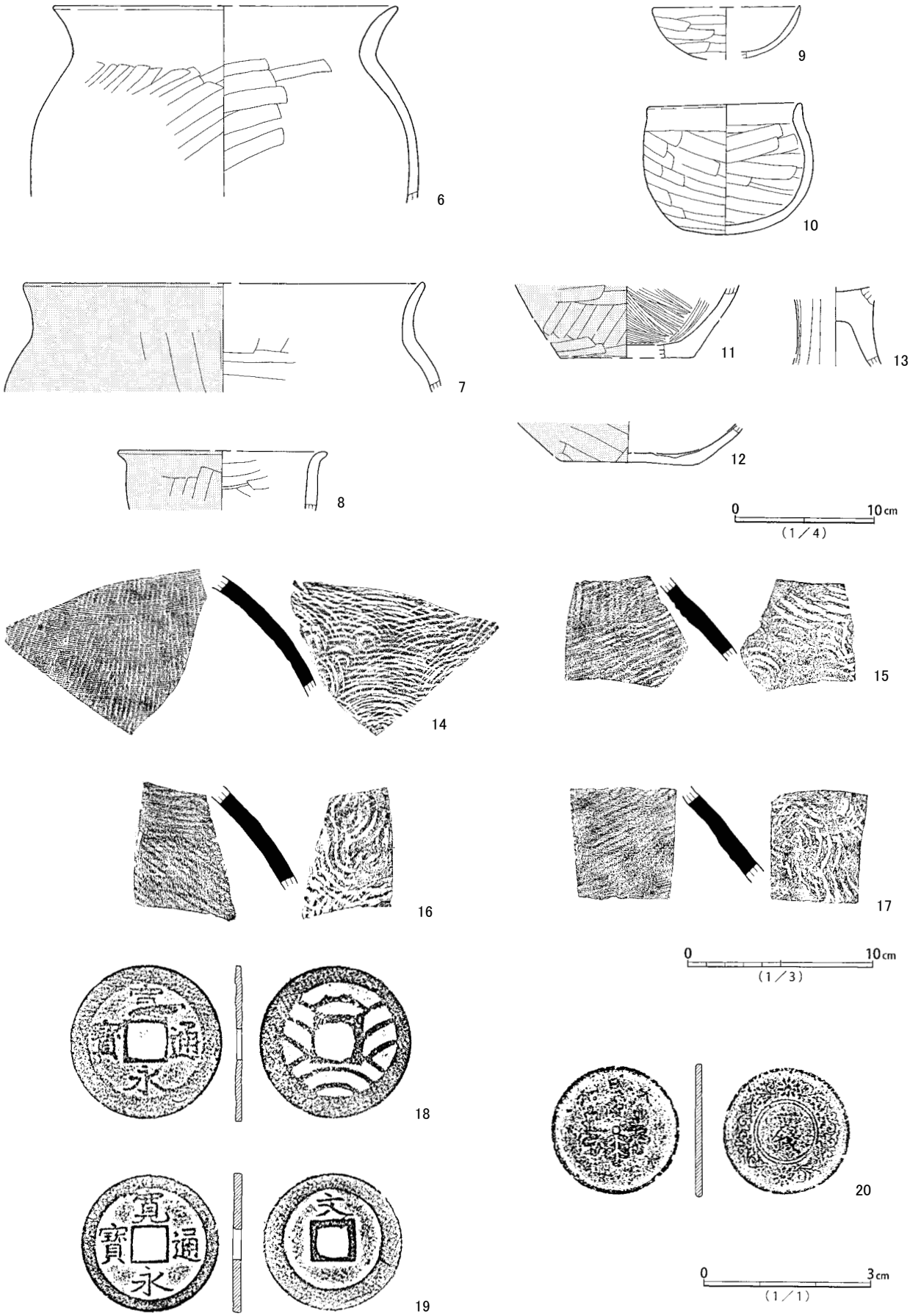


Fig.205　SM1006 遺物 (2) 実測図

墓壙内からは、遺物が全く検出されなかった。

第5主体部

第5主体部は後円部の西側に位置し、円墳段階に第1主体部と共存した側壁抉り込みタイプの土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径1.76m短径0.82m、下端で長径1.46m短径0.48m、深さは周溝底面から0.26mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-17°-Wを示す。

墓壙内からは、遺物が全く検出されなかった。

出土遺物

第1主体部の木棺内からは、中央北側より全長94.65㎝を測る1-1の無窓鍔付大刀が、刀部を西側に茎部を東に向けて検出された。茎には目釘孔が2孔貫通し、目釘が残存する。刀身幅と茎幅に差があることから、片関の大刀と想定される。この大刀の出土状態から、被葬者は東枕安置されていたことが察知される。1-2の刀子は、大刀の刀部に沿うように検出された。刃部の一部に皮が付着し、木質が存在しないことから、刃部は革鞘を装着していた可能性が高い。この他、被葬者の足下側には1-3～12の番号を付した三角形長頸鏃と長三角形長頸鏃群が2群に纏まった状態で検出されている。これら鏃群の内、三角形長頸鏃は1-12であり、鏃身部は両者とも片丸造りである。関形状は、1-9が台関と想定される以外は全て棘関であり、1-4・6・9・12の矢柄には、撚り無しの紐巻き痕跡が認められる。

第2主体部の木棺内からは、中央やや東寄りに2-1の小太刀と2-2・3の刀子が検出された。このことから、被葬者は東枕安置されたと察知される。被葬者の足下付近からは2-4～11の片刃長頸鏃群が検出されており、関形状は全て棘関である。他に出土した短頸鏃類もこの辺りから一括で出土したものと想定される。

本墳周溝内からは、後円部東側周溝内と括れ部の南側から、比較的多量の土師器・須恵器が検出されている。この内第1主体部に近い周溝内からは、1～8、16・17・19・21・28・29・30・33・37・38・45・48・51・52・54・59等のTK-43型式併行期の土師器・須恵器が、第2主体部に近い位置からは、11・15・23・25・55・59・61等のTK-209型式併行期の土師器・須恵器が検出されており、それぞれ埋葬施設への共献土器と判断されることから、各埋葬施設の築造時期を示す遺物と判断される。

したがって本墳の築造時期は、当初の円墳築造時は6世紀後葉のTK-43型式併行期、前方後円墳改変期は、TK-209型式の古～新段階移行期と想定され、実年代では650年代が想定される。

2.前方後方墳および関連遺構

SM1008　SW83地区　（Fig.215～220、PL.100～102・167・184・197～198・215）

V・W-21・22・23グリッドに位置する。古墳時代終末期の前方後方墳である。なお、本墳後方部に存在する埋葬施設の直下には、時期的に近接する竪穴住居跡1軒が単独で存在し、殯屋的な可能性も含めて本墳との関連性が極めて高い遺構と判断される。旧遺構番号はSW83-K15号である。

墳丘と周溝および付帯施設

全長37.50m、後方部長径22.20m、後方部短径20.70m、前方部最大幅16.50m、括れ部幅8.10m、残存する盛土の高さは1.70mを測り、主軸方位はN-76°-Eを示す。周溝内側面積は703.7㎡を測り、諏訪台古墳群中では全ての墳墓の頂点に立つ前方後方墳である。確認面での周溝幅は、2.40～5.49m、深さは0.50～2.40m、土層断面図上の最大値は2.40mを測り、後方部側が深くて広い傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

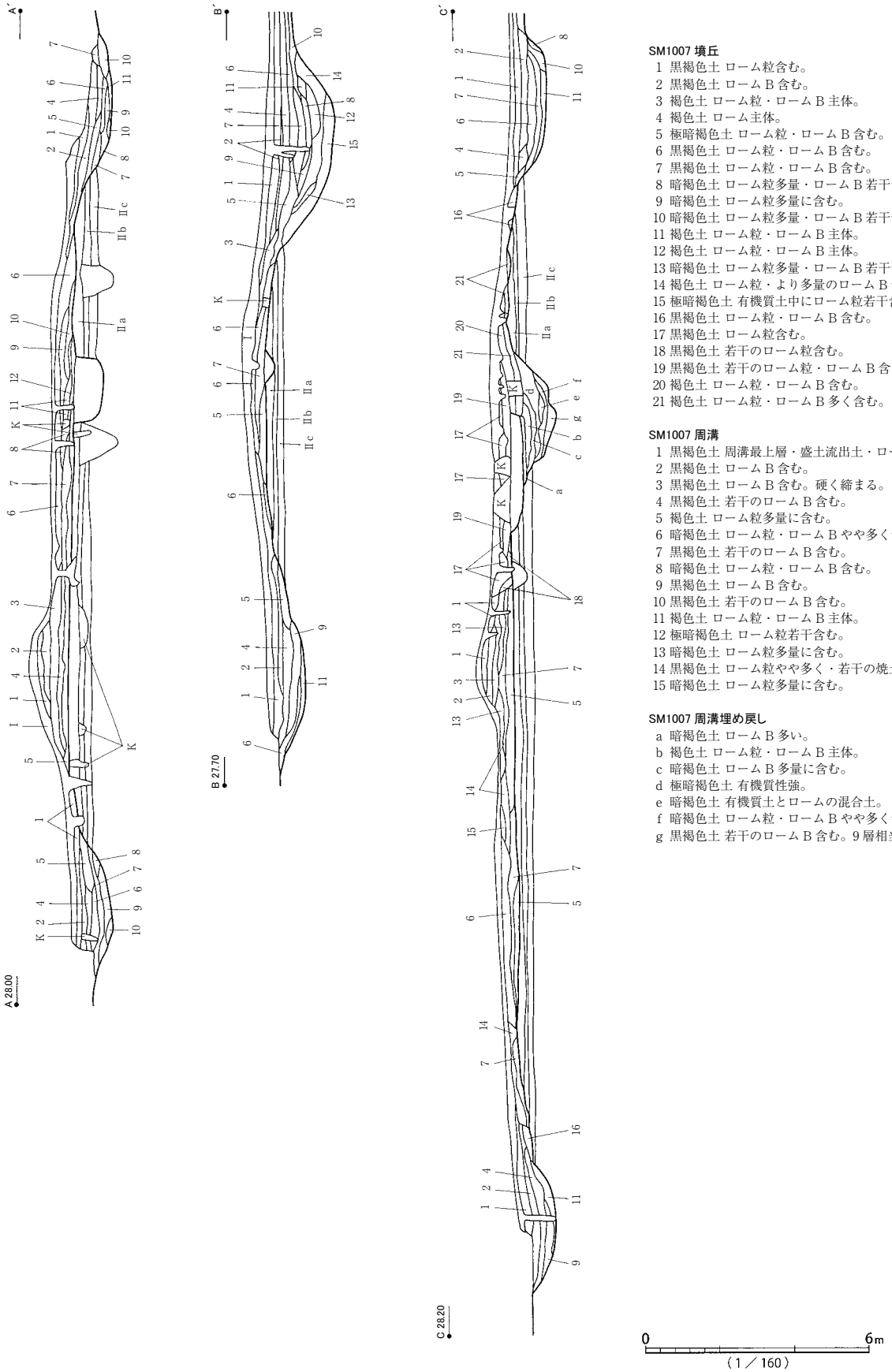


SM1007 円墳埋め戻し部
1 黒褐色土 有機質土。
2 極暗褐色土 有機質土主体。
3 褐色土 ローム粒やや多く含む。
4 黄褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
5 褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
6 暗褐色土 ローム粒含む。
7 褐色土 ローム粒・ローム B 多く含む。
8 暗黄褐色土 汚れたローム粒・ローム B 主体。
9 褐色土 ローム粒・ローム B 含む。

Fig.206　SM1007 遺構 (1) 実測図



Fig.207　SM1007 遺構 (2) 実測図



SM1007 墳丘

1 黒褐色土 ローム粒含む。
2 黒褐色土 ローム B 含む。
3 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
4 褐色土 ローム主体。
5 極暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
6 黒褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
7 黒褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
8 暗褐色土 ローム粒多量・ローム B 若干含む。
9 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
10 暗褐色土 ローム粒多量・ローム B 若干含む。
11 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
12 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
13 暗褐色土 ローム粒多量・ローム B 若干含む。
14 褐色土 ローム粒・より多量のローム B 含む。
15 極暗褐色土 有機質土中にローム粒若干含む。
16 黒褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
17 黒褐色土 ローム粒含む。
18 黒褐色土 若干のローム粒含む。
19 黒褐色土 若干のローム粒・ローム B 含む。
20 褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
21 褐色土 ローム粒・ローム B 多く含む。

SM1007 周溝

1 黒褐色土 周溝最上層・盛土流出土・ローム粒含む。
2 黒褐色土 ローム B 含む。
3 黒褐色土 ローム B 含む。硬く締まる。
4 黒褐色土 若干のローム B 含む。
5 褐色土 ローム粒多量に含む。
6 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
7 黒褐色土 若干のローム B 含む。
8 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
9 黒褐色土 ローム B 含む。
10 黒褐色土 若干のローム B 含む。
11 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
12 極暗褐色土 ローム粒若干含む。
13 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
14 黒褐色土 ローム粒やや多く・若干の焼土粒含む。
15 暗褐色土 ローム粒多量に含む。

SM1007 周溝埋め戻し

a 暗褐色土 ローム B 多い。
b 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
c 暗褐色土 ローム B 多量に含む。
d 極暗褐色土 有機質性強。
e 暗褐色土 有機質土とロームの混合土。
f 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。6 層相当。
g 黒褐色土 若干のローム B 含む。9 層相当。

Fig.208　SM1007 遺構 (3) 実測図

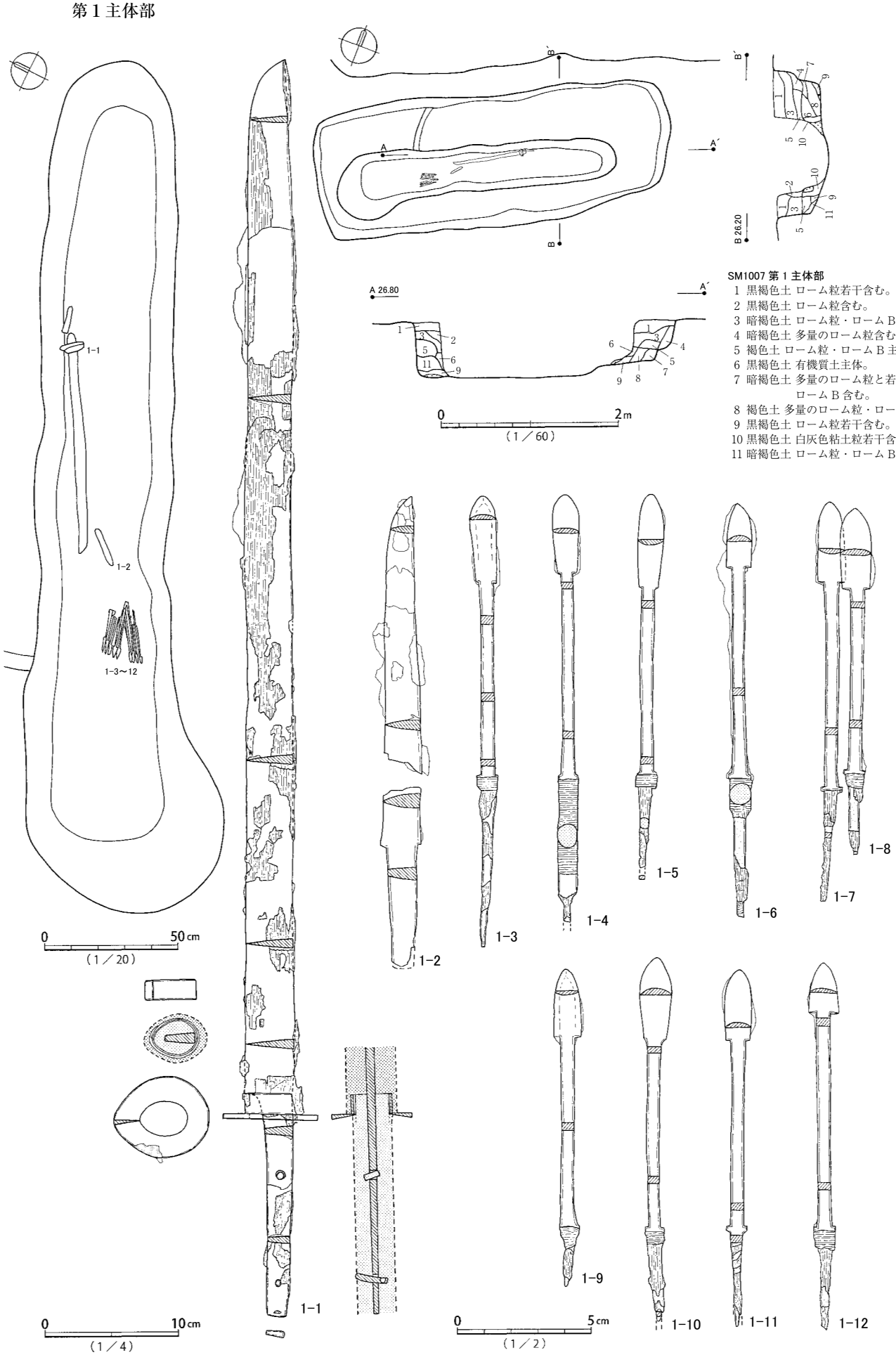


Fig.209　SM1007 遺構 (4)・遺物出土詳細 (1)・遺物 (1) 実測図

第２主体部

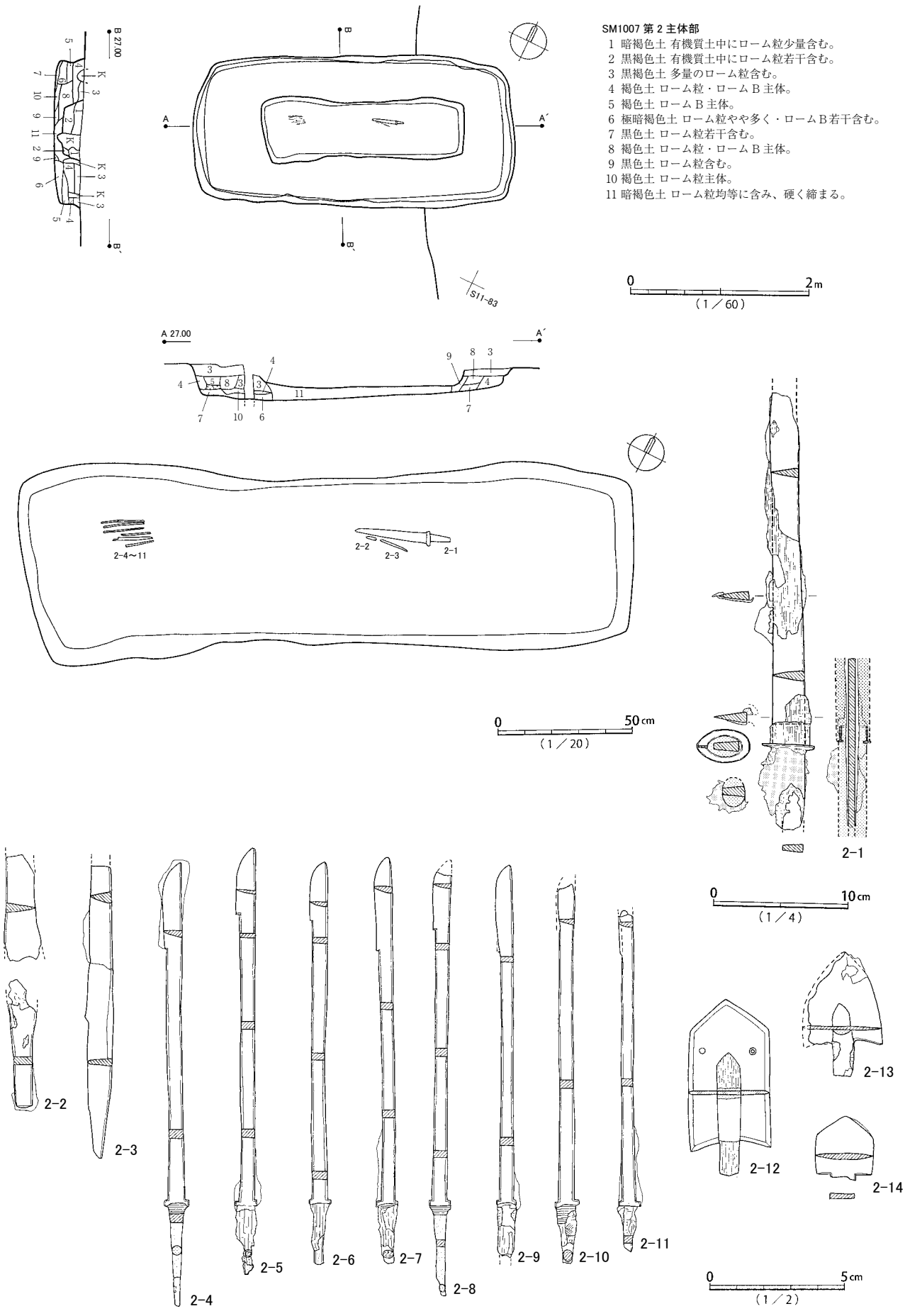
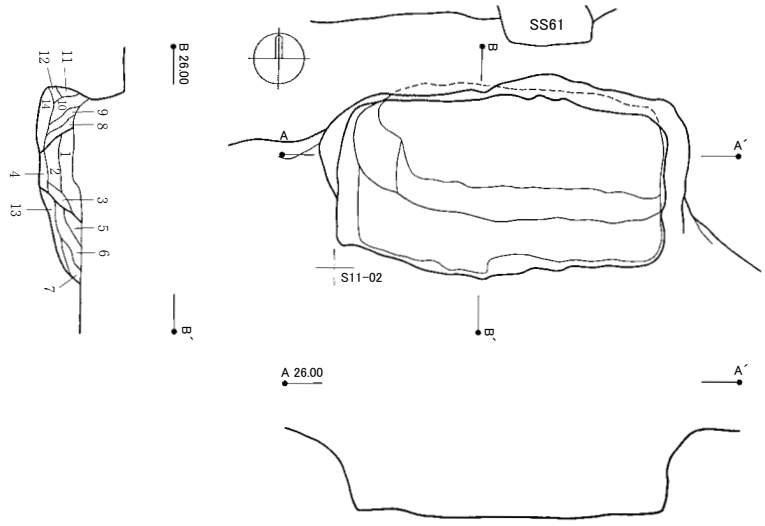


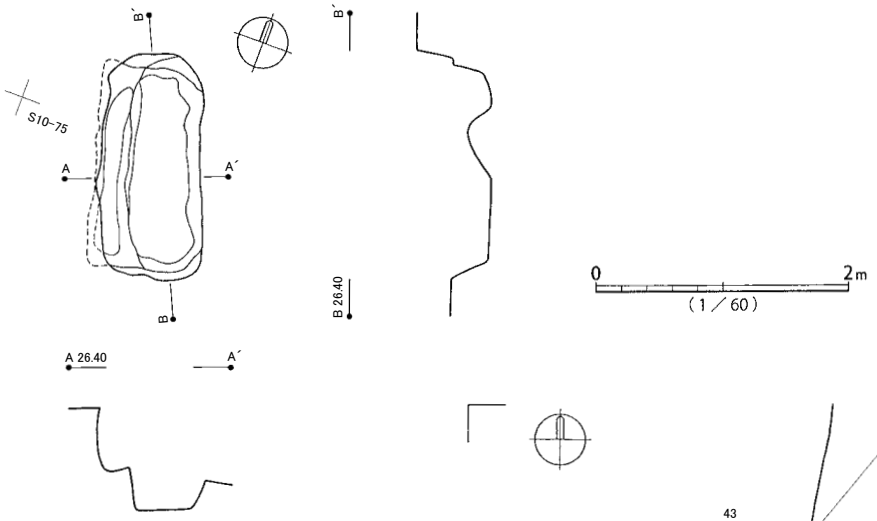
Fig.210　SM1007 遺構 (5)・遺物出土詳細 (2)・遺物 (2) 実測図

第３主体部



SM1007 第３主体部
1 黒色土 ローム粒含む。
2 黒色土 ローム粒やや多く含む。
3 黒色土 ローム粒多く含む。
4 黒色土 ローム粒若干含む。
5 暗褐色土 ローム粒多く含む。
6 暗褐色土 若干のローム粒含む。褐色味強。
7 暗褐色土 ローム粒含む。
8 黒褐色土 ローム粒少量含む。
9 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
10 褐色土 天井崩壊・ロームＢ。
11 暗褐色土 ロームＢ主体。
12 暗褐色土 ローム粒主体。
13 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。
14 暗褐色土 ローム主体。

第５主体部



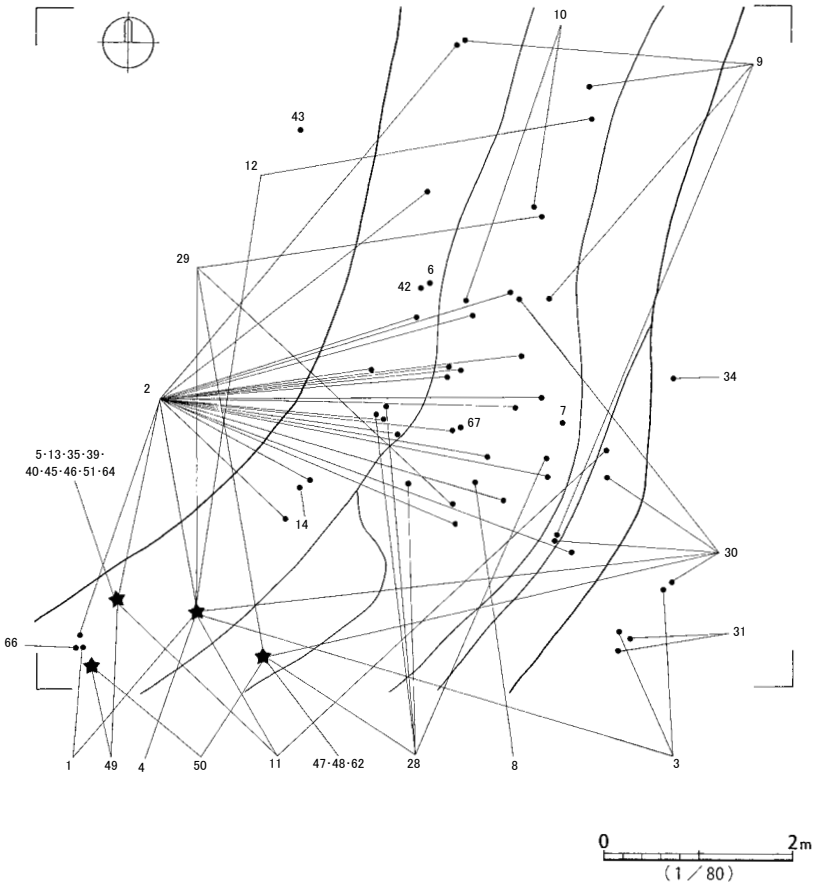


Fig.211　SM1007 遺構 (6)・遺物出土詳細 (3) 実測図

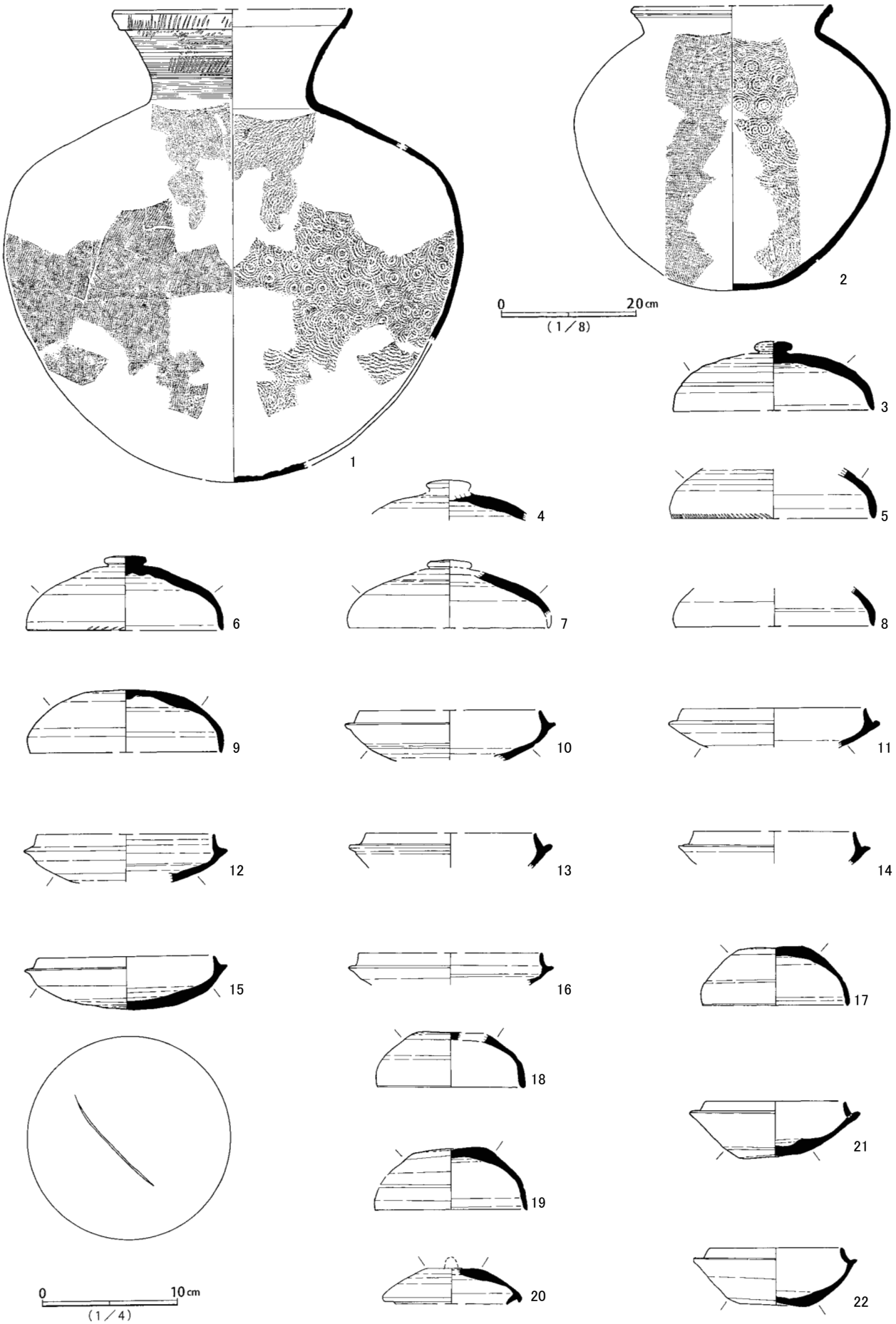


Fig.212　SM1007 遺物 (3) 実測図

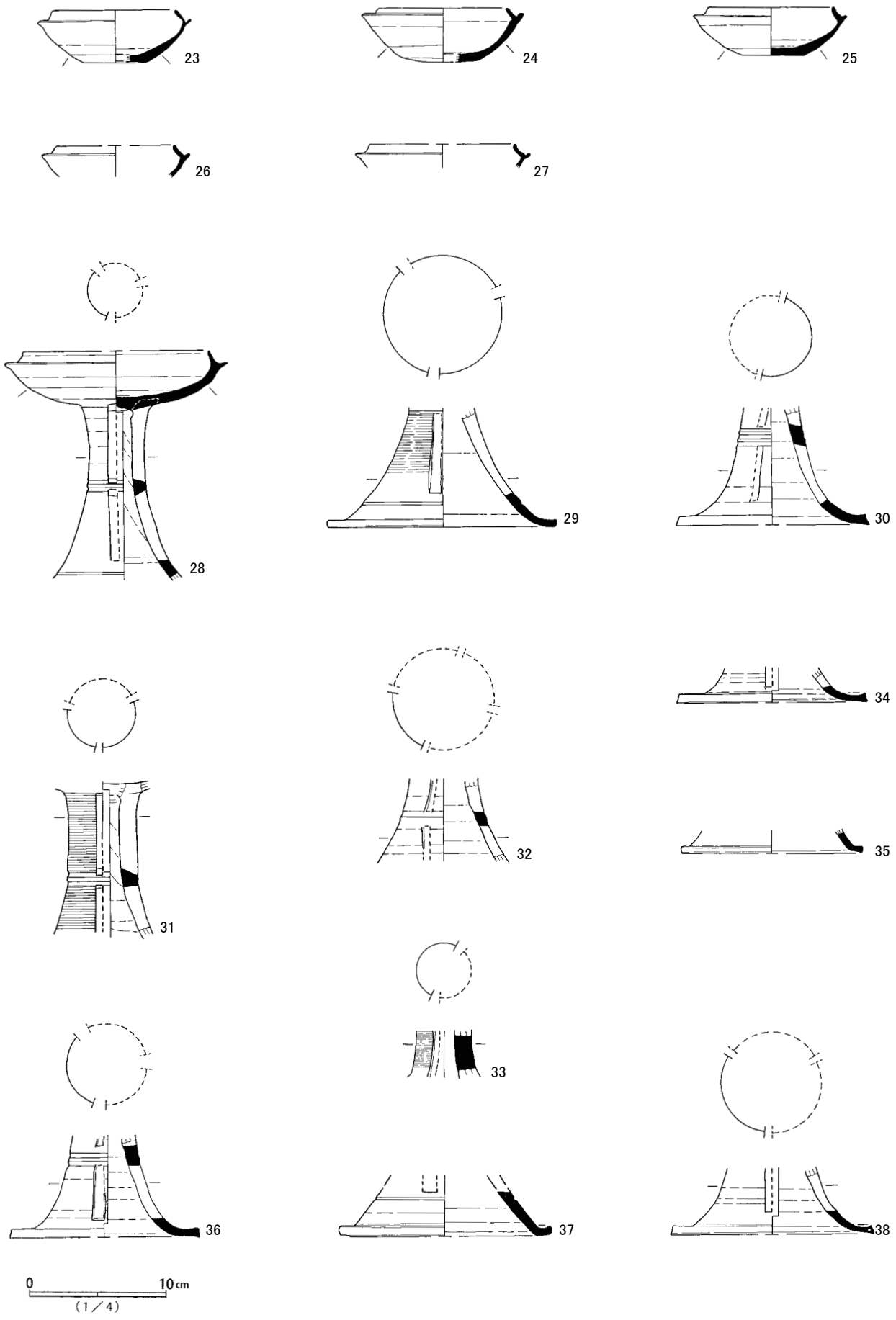


Fig.213　SM1007 遺物 (4) 実測図

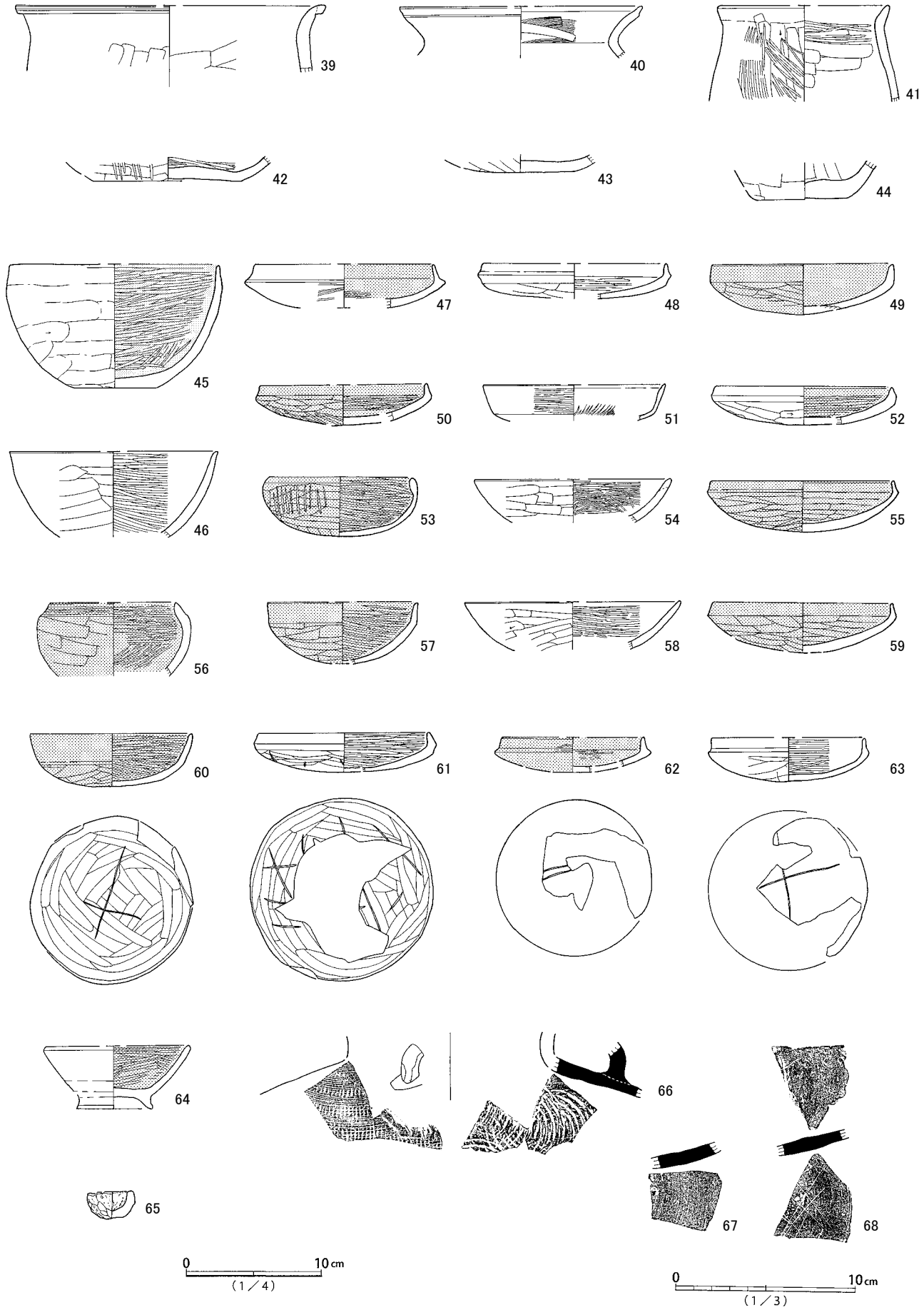


Fig.214　SM1007 遺物 (5) 実測図

本墳の埋葬施設直下には竪穴住居跡が単独で存在しており、且つ覆土には自然堆積土が殆んど存在しておらず、古墳築造に伴い一気に埋め戻された状況を示している。住人は、本墳築造のための土地確保、もしくは土地管理人的な役割を帯びていた人物が居住していたか、あるいは殯屋的な遺構である可能性が高い。

埋葬施設

埋葬施設は、後方部の中央に1か所検出された。他に埋葬施設が存在しないことから、本墳は被葬者一人のための墳墓と想定される。

第1主体部

第1主体部は、後方部中央から検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径4.64m短径1.53m深さ0.36m、下端で長径4.60m短径0.92mを測り、主軸方位はN-87.5°-Eを示す。墓壙のほぼ中央に割竹形木棺状の木棺痕が検出されたとされるが、木棺東側の端部付近は攪乱によって定かではない。遺物の位置と東側の変色範囲を被葬者の頭部とすれば、両木口を粘土で固定した箱型木棺と想定され、木棺規模は、長さ3.10m前後、幅0.62m、深さ0.28mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-90°-Wを示す。なお、東側木口の粘土範囲は、西側木口の木棺端部から粘土までの位置を、木棺掘り方に合わせて復元したものである。

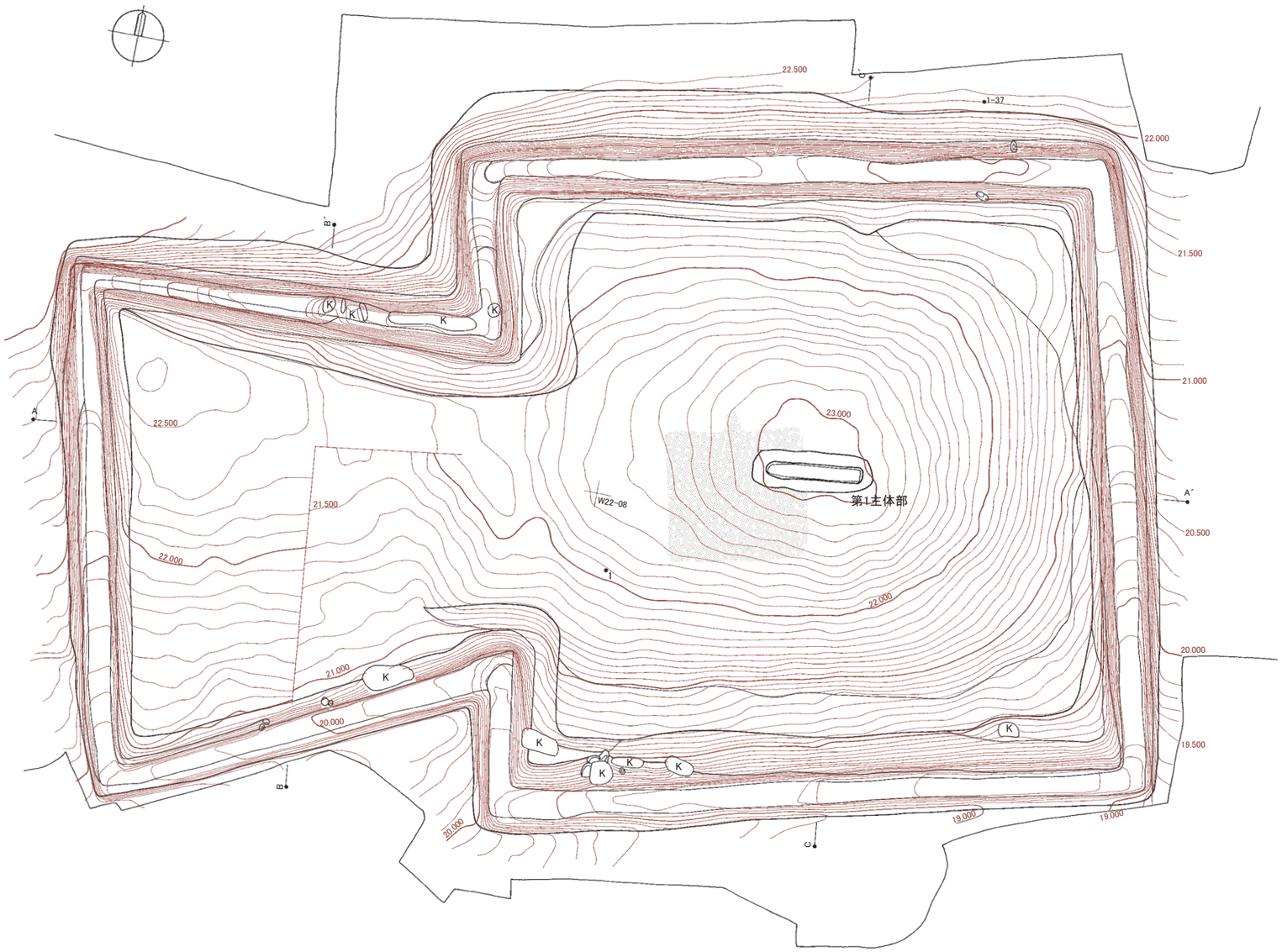
出土遺物

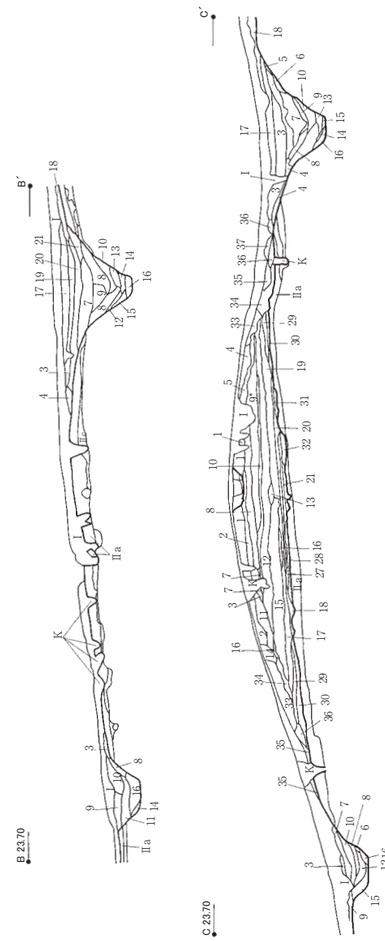
1は後方部でも前方部寄りの、主体部の西側に6.50m離れた地点から検出された須恵器大甕である。頸部には列点文が施され、口縁から肩部にかけて自然釉が付着する。出土位置から本墳築造時に供献された遺物であると判断される。

第1主体部の木棺内棺底部からは、全長103.0㎝を測る1-2の金銅製方頭大刀が出土した。現場平面図から、鳩目金具付の方頭大刀であろうと判断されるが、現状では方頭部の金具は残存していない。大刀には金銅製縁金具付小型鍔、鯉口部に金銅製鞘口を巻き、金銅製縁金具付足金物一対と鞘尻に金銅製縁金具付鞘尻金具が付随する豪華な大刀である。茎部には１孔の目釘孔が貫通し、目釘孔の片側には目釘が残存している。

1-3～16は、本墳同様の前方後方墳であるSM1010出土を示すケースに収められていた14本の長頸鏃が束状に結合したものであるが、SM1010の遺物分布図とは整合しない鉄鏃群である。結合した裾拡がりの束状形状が本墳の遺物分布図の形状に酷似することや、この鉄鏃群が本墳出土製品でないならば、遺物の遺漏が発生し、且つ、他に類似する鉄鏃群が存在しないこと等から、諏訪台古墳群に精通する浅利氏に意見を求めたところ、「同じ前方後方墳ということで、遺物が混交してしまった可能性がある」との教示を得た。本墳出土鉄鏃に遺漏なきよう、ここでは本墳出土鉄鏃として取り扱うこととした。これら14本の鉄鏃群は、1-2の金銅製方頭大刀に近い棺外から検出され、関形状は何れも棘関である。この内鏃身部が三角形状の長頸鏃は11本確認されており、三角形式の長頸鏃の中でも鏃身部が退化しはじめた小型の鏃身部を有し、いわゆる鑿箭鏃の直前段階に位置付ける事が出来よう。これら束状に結合した14本の長頸鏃群の中には、長頸飛燕鏃が3本含まれており、TK-217型式新段階以降の様相として捉えられよう。なお、墓壙外の掘り込みから、図中▲で示した鉄鏃が出土したとする記録があるが、所在不明である。

特筆されるのは、墓壙西側棺外から出土した1-1の楕円透かし孔を持つ杏葉4点である。これらの遺





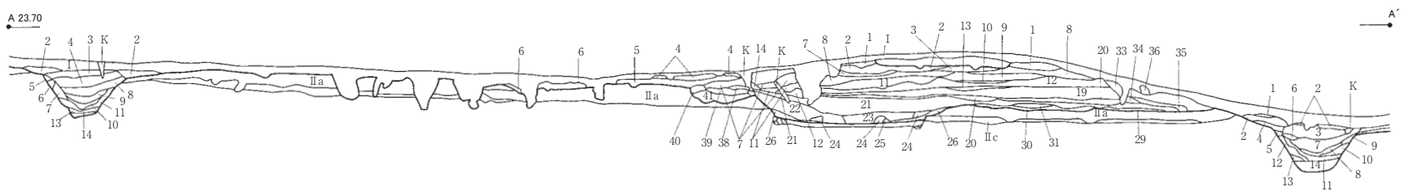


Fig.215　SM1008 遺構 (1)、SI1001 遺構 (1) 実測図

SM1008 墳丘

1 黒褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
2 黒褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
3 黒褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
4 暗褐色土 ロームＢ含む。
5 黒褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。硬く締まる。
6 黒褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
7 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
ロームと有機質土半々。
8 黒褐色土 ローム粒含む。
9 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
10 暗褐色土 有機質土中にローム粒・ロームＢ含む。
11 黄褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。
12 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
13 黒褐色土 ローム粒含む。
14 黒褐色土 ローム粒含む。
15 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
ロームと有機質土半々。
16 黒褐色土 有機質土中にローム粒・ロームＢ含む。
17 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
18 黄褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。
19 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
20 暗褐色土 有機質土とローム半々。
21 黒褐色土 有機質土中にローム粒・ロームＢ混入。
22 黒褐色土 有機質土中にローム粒若干含む。
23 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
24 黒褐色土 旧表土系黒色有機質土。
25 黄褐色土 ロームＢ。
26 暗褐色土 ローム粒・粘土含む。
27 黒褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
28 黒褐色土 有機質土・ローム等含まない。
29 暗褐色土 ローム粒含む。
30 黒褐色土 粘土粒含む。硬く締まる。
31 暗赤褐色土 粘土と焼土を含む。
32 黄褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。
33 暗褐色土 ローム粒多量に含む。盛土流土。
34 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ多量に含む。
盛土流土。
35 暗褐色土 ローム粒多量・ロームＢ少量含む。
盛土流土。
36 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。盛土流土。
37 褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。
38 黒褐色土 ローム粒含む。
39 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
40 暗褐色土 有機質土主体。
41 黒褐色土 ローム粒・粘土Ｂ含む。

SM1008 周溝

1 黒褐色土 ローム粒多量に含む。盛土流土。
2 黒褐色土 ローム粒少量含む。硬く締まる。
3 黒褐色土 有機質土主体。
4 暗褐色土 ローム若干含む。
5 暗褐色土 ソフトローム崩壊土。
6 暗褐色土 ローム粒微量に含む。
7 黒褐色土 有機質土中にローム粒霜降り状に含む。
8 暗褐色土 細かいローム粒含む。
9 黄褐色土 壁崩壊ソフトローム主体。
10 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
11 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
12 黄褐色土 壁崩壊ロームＢ主体。
13 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
14 黄褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。
15 暗褐色土 ロームＢ多量に含む。
16 黄褐色土 壁崩落ロームＢ。
17 黒褐色土 ローム粒含む。北側からの流入土。
18 黒色土 有機質土中に若干のローム粒流入土。
19 黒色土 流入土。ローム粒含む。
20 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。流入土。
21 黒褐色土 ロームＢ含む。流入土。

0　10m
（1／200）

物は現存していないが、一部にバックルが付随する富津市割見塚古墳出土の心葉形杏葉とよく似た製品であることが現場図面から読み取ることができる。出土地点の周囲が一段低く掘り下がることから、おそらく木箱に納められた状態で埋納されていたものと察知される。なおトーンは現場平面図に着色された範囲を図化している。図面に特記事項がないため何なのか実態不明であるが、杏葉からはみ出して比較的広範囲から検出されていることから、杏葉に伴うのではなく、これを収めた木箱等に塗られていた漆等の残骸と考えられる。

この他、轡の一部・釘・鉄鏃片等が周囲の棺外から検出されている。この内1-31は、樹種同定により釘頭側の板目とその下部の柾目がヒノキ科と同定されている。また、周溝等から出土した2～9の土器類は全て一括で取り上げられてしまったものであるが、須恵器蓋を含んだその所属時期は、土師器の皿状扁平坏を主体とする時期であり、椎津茶ノ木編年第10期に概ね併行するものと判断される。これらのことから、本墳の築造時期は、TK-217型式新段階からTK-46型式への移行期に位置付けることができ、実年代では670年代前後の時期を想定できる。

SI1001　SW83地区（Fig.220～221、PL.102・167～168・184～185・198）

V・W-22に位置する古墳時代終末期の竪穴住居跡である。旧番号の1207は竪穴住居跡、1209は竪穴建物跡覆土上層に検出された焼土・粘土範囲である。何れも本来ならば下層の天神台遺跡で報告すべき竪穴住居跡であるが、埋葬施設の直下に存在し、自然堆積の覆土がほとんど存在しない等、墳丘構築に際し一気に埋め戻された状況を示すことから殯屋的な性格も考えられる。何れにせよ上層のSM1008号と関連が深い遺構と判断されることから、ここで報告する。旧遺構番号はSW83-1207・1209号遺構である。

遺構

長径5.30m短径5.16m深さ最大50.0㎝を測り、主軸方位はN-16°-Wを示す。床面直上層、および壁際周囲の覆土は、本来の遺構覆土と考えられるが、竪穴廃絶直後の古墳築造に際し、一気に埋め戻された後で、その最上層が焼かれている。住居廃絶に伴う穢れ払い、ないしはカマド祭祀等が行われた可能性がある。カマドは北壁に構築され火床長軸48.0㎝短軸36.0㎝主軸方位は真北を示す。ピットは5か所に検出された。P１～P4は主柱穴、P5は入口施設に伴うものと考えられ、掘り込みも深くしっかりしている。深さはそれぞれP１が56.1㎝、P2が71.5㎝、P3が64.0㎝、P4が70.8㎝、P5が45.0㎝を測る。周溝はほぼ全周し、深さは10㎝前後を測る。南側の床面には厚さ4㎝程度の焼土が散布している。

出土遺物

１は竪穴遺構外の墳丘下の焼土・粘土範囲から検出された須恵器甕である。2・3・6・9は、カマド西側の壁際から竪穴内にかけて検出された土師器甕・小型甕・高坏である。14・16・17はカマド袖脇及びカマド前面の床面から検出されている。18は南周溝際から検出された鉄斧、19はカマド右袖脇の床面から検出された刀子である。関は撫で関で、茎部に柄金具が残存する。これらの遺物を総合的にみると、TK-217型式期最新段階に捉えられ、SM1008とほぼ同時期の竪穴と捉えられる。

SM1009　099地区　（Fig.222～224、PL.102～103・168・198・215）

J・K-15・16グリッドに位置する。下層のSS12と周溝が重複する古墳時代終末期の前方後方墳である。旧遺構番号は099-4022号遺構である。

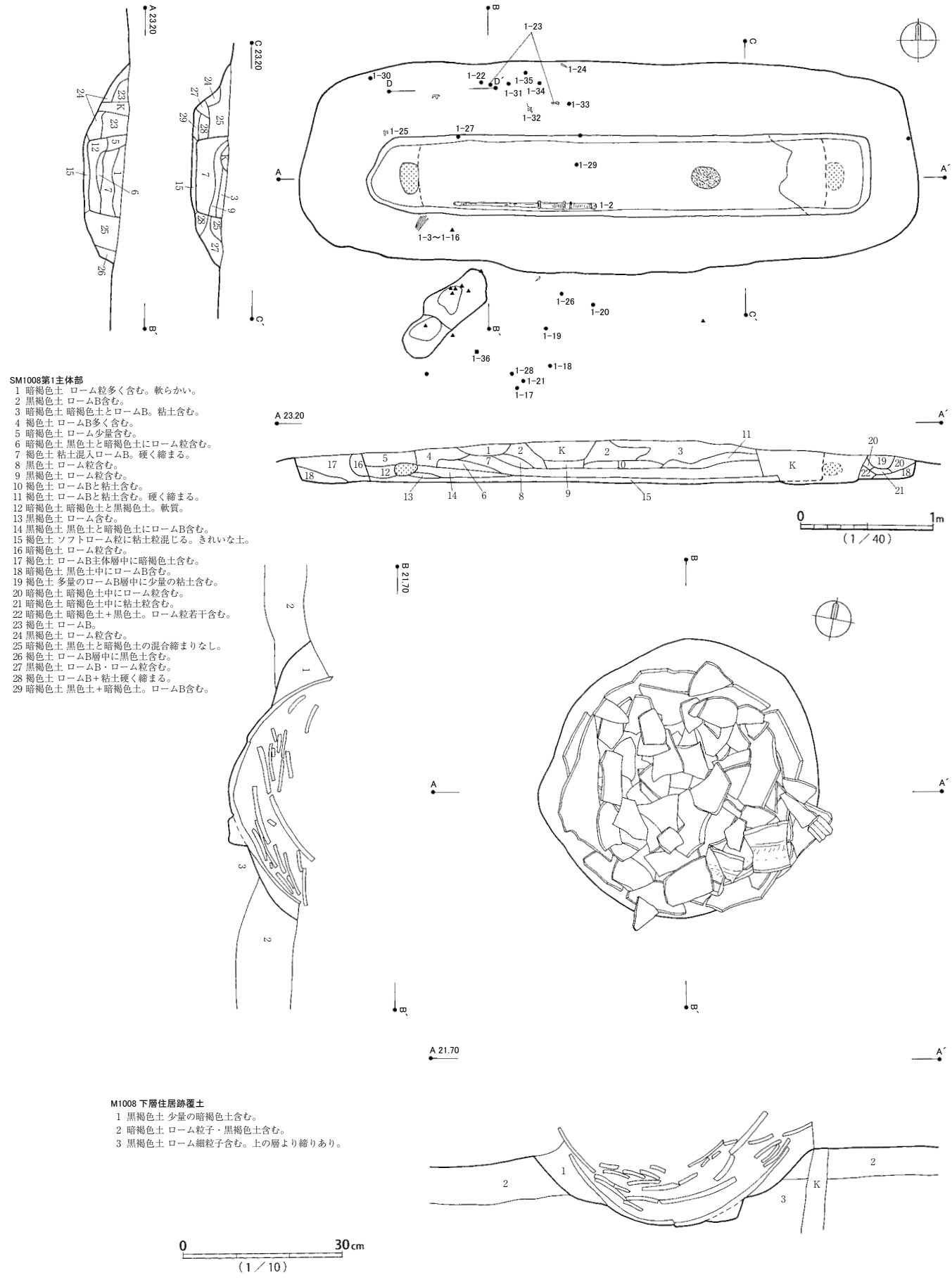


Fig.216　SM1008 遺構 (2)・遺物出土詳細 (1) 実測図

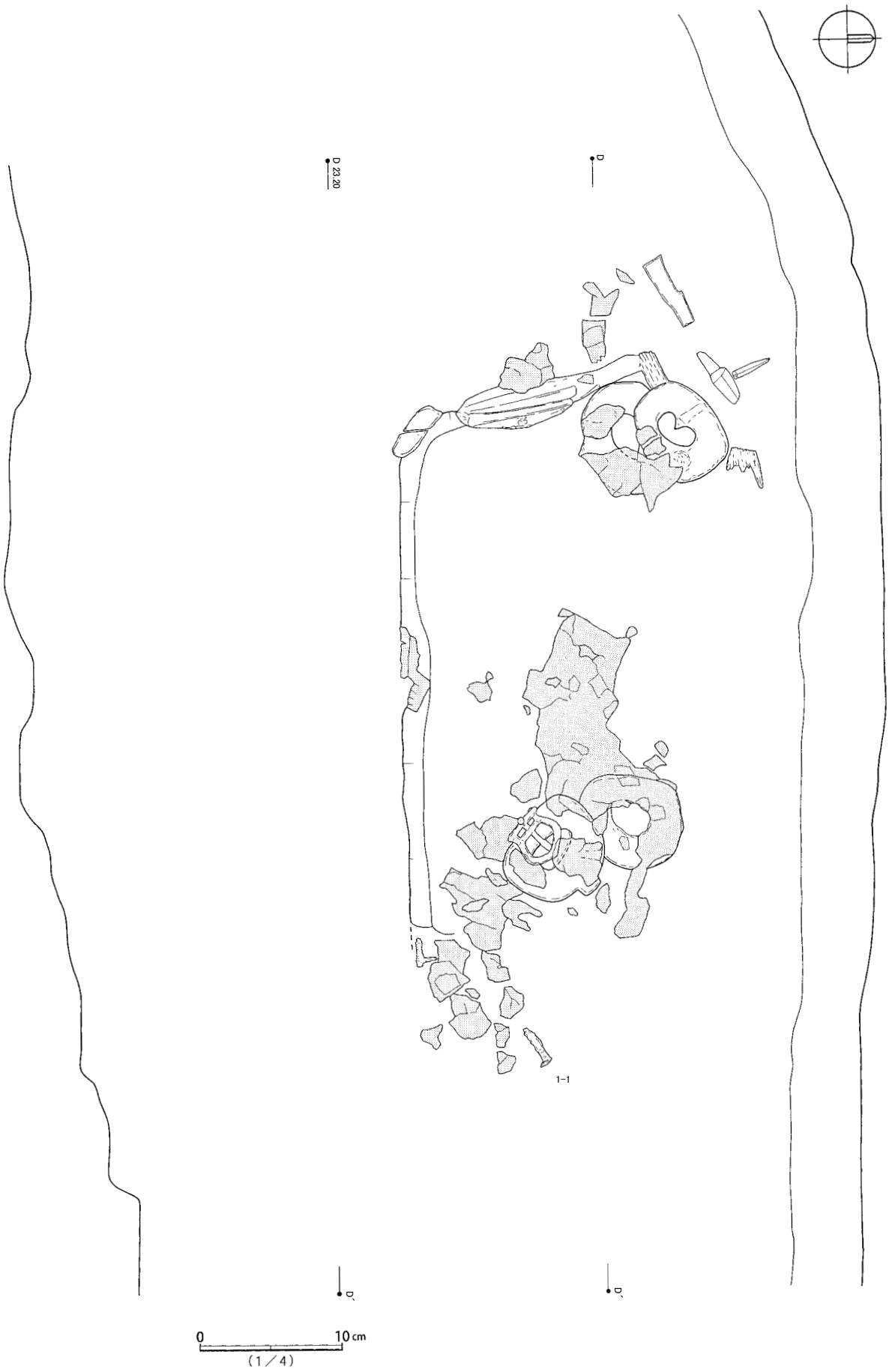


Fig.217　SM1008 遺構 (3)・遺物出土詳細 (2) 実測図

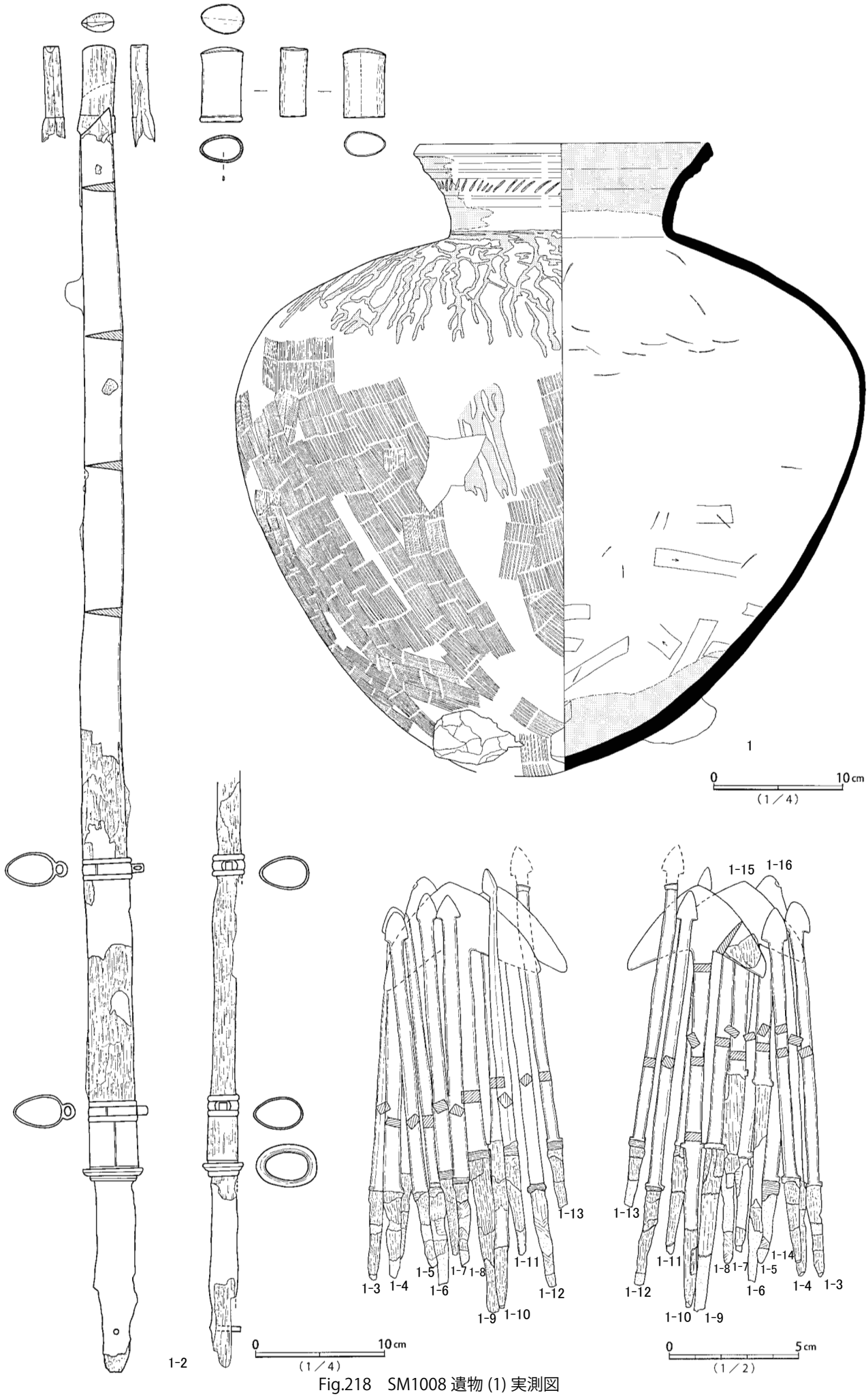


Fig.218　SM1008 遺物 (1) 実測図

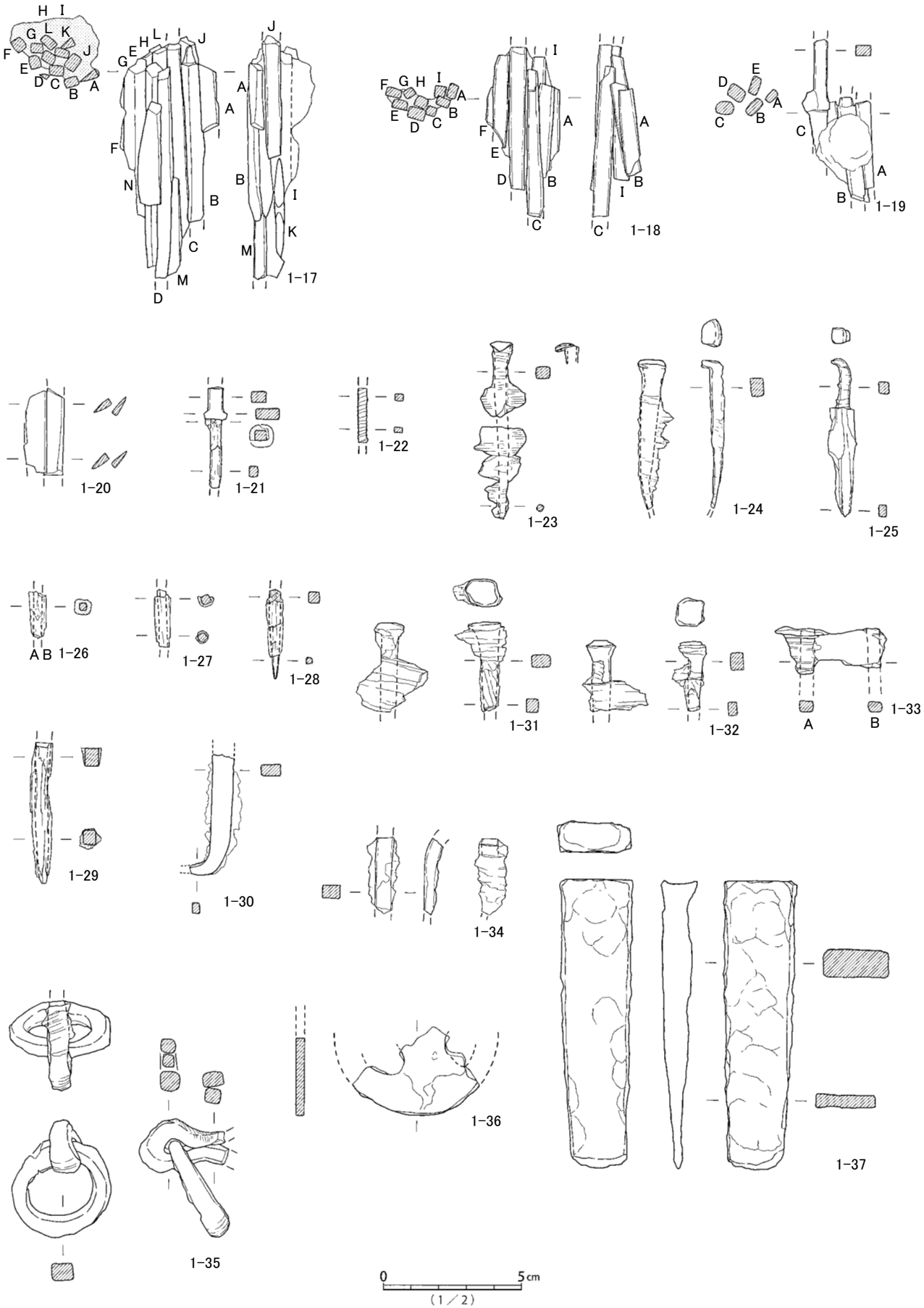
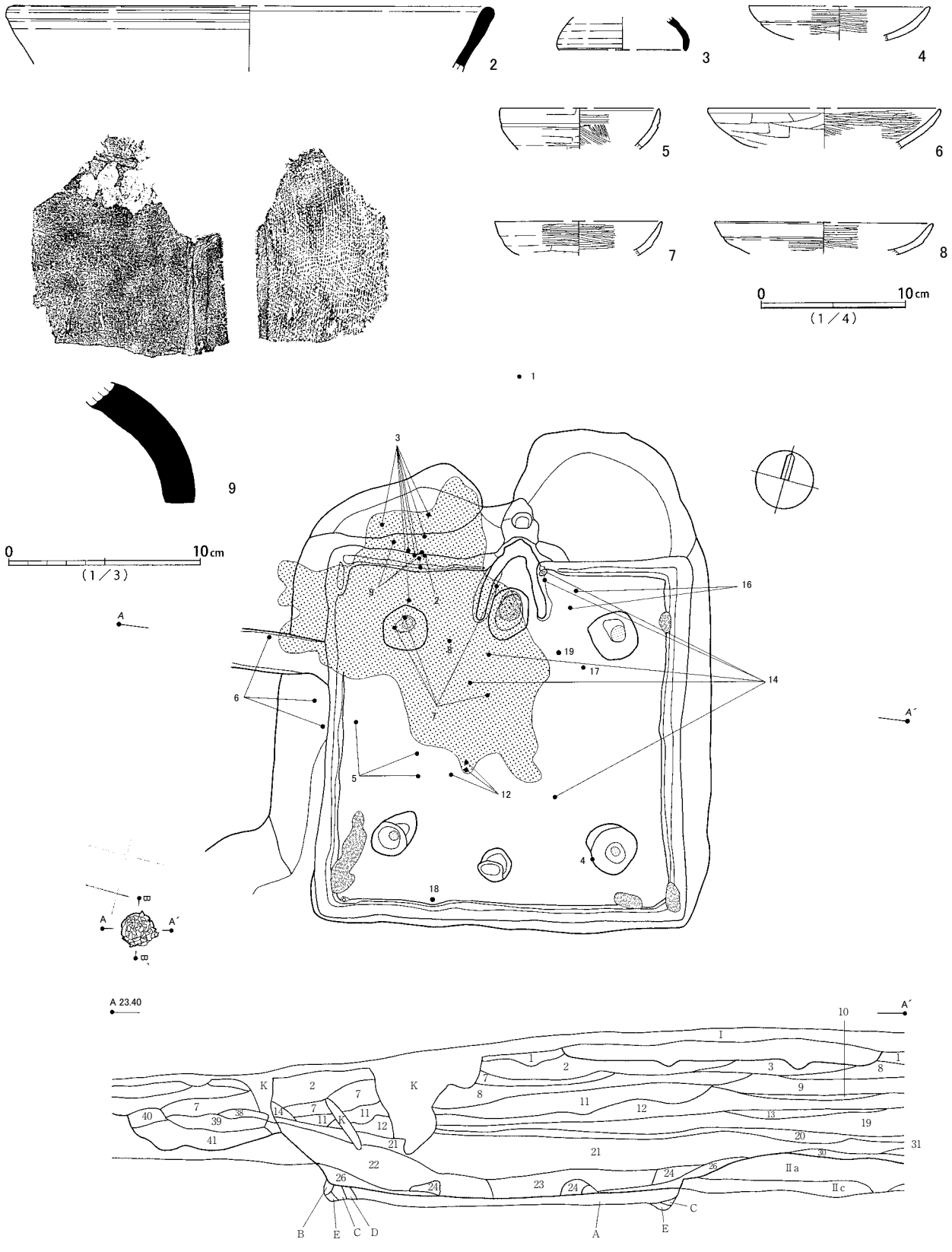


Fig.219　SM1008 遺物 (2) 実測図



SM1008下層住居跡覆土
A 黒色土 ローム粒含む。硬く締まる自然推積土。
B 黄褐色土 壁崩壊ソフトローム主体。
C 黒褐色土 ローム粒含む。
D 黒褐色土 ローム粒含む。
E 黄褐色土 壁崩壊ソフトローム。
上記以外の上層数字は古墳築造時の墳丘及び盛土。

Fig.220　SM1008 遺物 (3)、SI1001 遺構 (2) 実測図

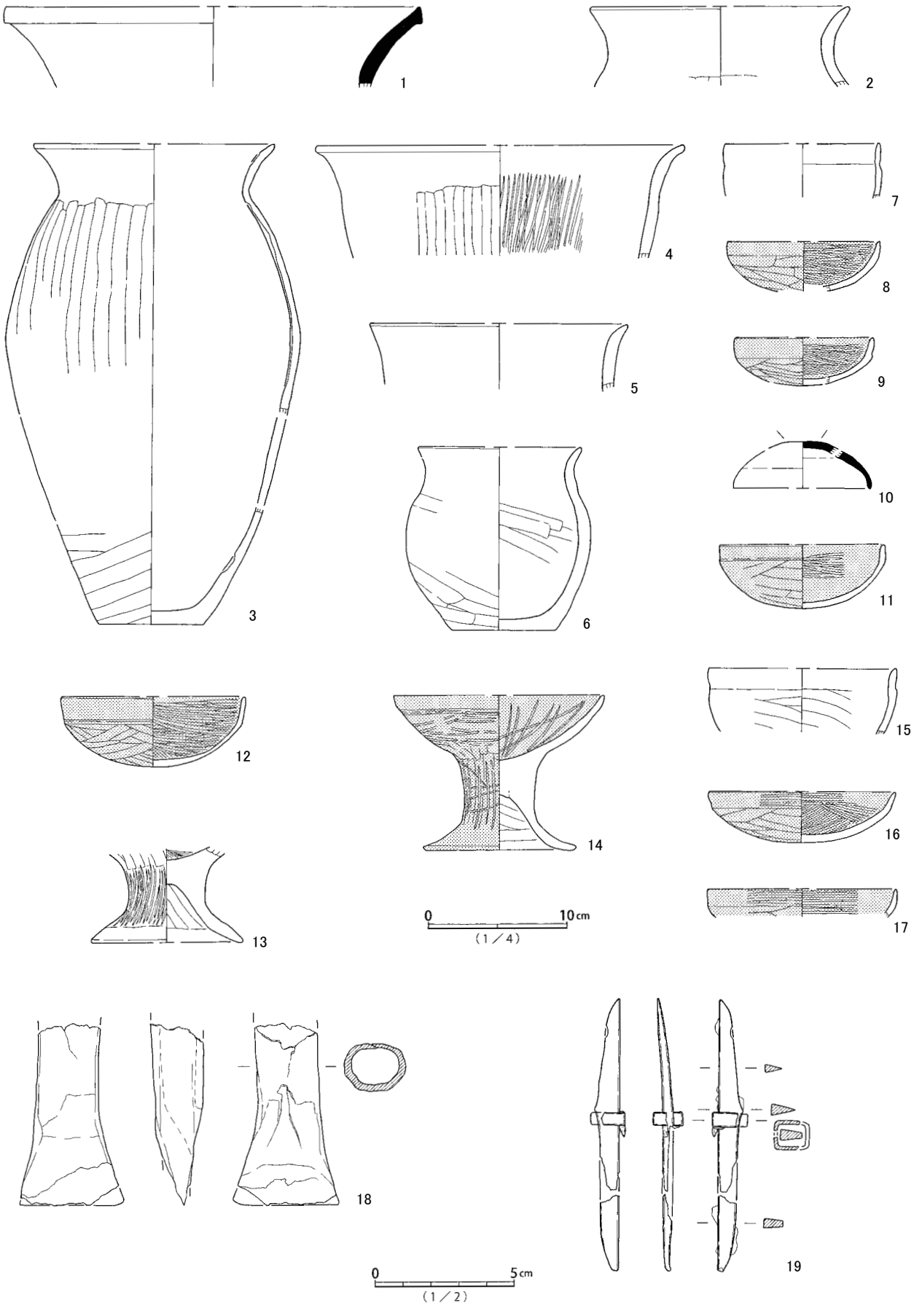


Fig.221　SI1001 遺物実測図

墳丘と周溝

全長29.10m、後方部長径17.88m、後方部短径17.40m、前方部最大幅10.44m、括れ部幅7.28m、主軸方位はN-64°-Eを示し、現状では残存する盛土は存在しない。周溝内側面積は406.7㎡を測り、諏訪台古墳群中での前方後方墳では第2位の規模である。確認面での周溝幅は、1.84～3.20m、深さは0.48～0.93mを測り、後方部側が深くて広い傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

後方部内での埋葬施設は確認されなかった。前方部の西側コーナー部に1か所と、後方部側の周溝内中央に1か所の併せて2か所に埋葬施設らしき土壙が検出されている。

前方部内土壙１

墓壙規模は、上端で長径2.48m短径0.86m深さ0.38m、下端で長径2.36m短径0.60mを測り、主軸方位はN-70°-Eを示す。底面はほぼ平坦であり、遺物は全く検出されなかった。

周溝内土壙２

墓壙規模は、上端で長径3.76m短径0.96m深さ0.76m、下端で長径2.60m短径0.36mを測り、主軸方位はN-20°-Wを示す。底面はほぼ平坦であり、遺物は全く検出されなかった。

出土遺物

遺物は何れも周溝内から一括で検出されている。1～4は何れも須恵器である。5はリベット付の鉄器で、おそらく馬具の一部と想定される。6は砥石片、7は土製丸玉であるが、土玉のような貫通孔はない。総合的に見て、須恵器の組み合わせから本墳の築造時期は8世紀初頭頃を示すものと想定される。

SM1010　099地区　（Fig.225～233、PL.103・168～169・185・198～200・211）

O・P-9・10グリッドに位置する。下層のSS30・31・32・33・34と重複し、SM1016と接する古墳時代終末期の前方後方墳である。旧遺構番号は099-4060号である。

墳丘と周溝

全長21.76m、後方部長径14.00m、後方部短径13.00m、前方部最大幅12.50m、括れ部幅11.20m、主軸方位はN-87°-Wを示す。現状では残存する盛土は存在しない。周溝内側面積は270.3㎡を測り、諏訪台古墳群中の前方後方墳では第3位の規模である。確認面での周溝幅は、0.72～2.72m、深さは0.60～1.04m、土層断面図上の最大値は1.40mを測り、後方部側が深くて広い傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

本墳の形状は限りなく長方形に近い形状であることから、前方後方墳と称するには異論もあろう。しかしながら、僅かながら括れ部と想定される幅狭部が残存していることから、前方後方墳として報告しておく。

埋葬施設

埋葬施設は前方部の中央に1基検出された。他に埋葬施設が存在しないことや出土遺物に時期差が認められないことから、本墳は被葬者一人のための墳墓と想定される。

第1主体部

埋葬施設は、前方部中央に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径3.28m短

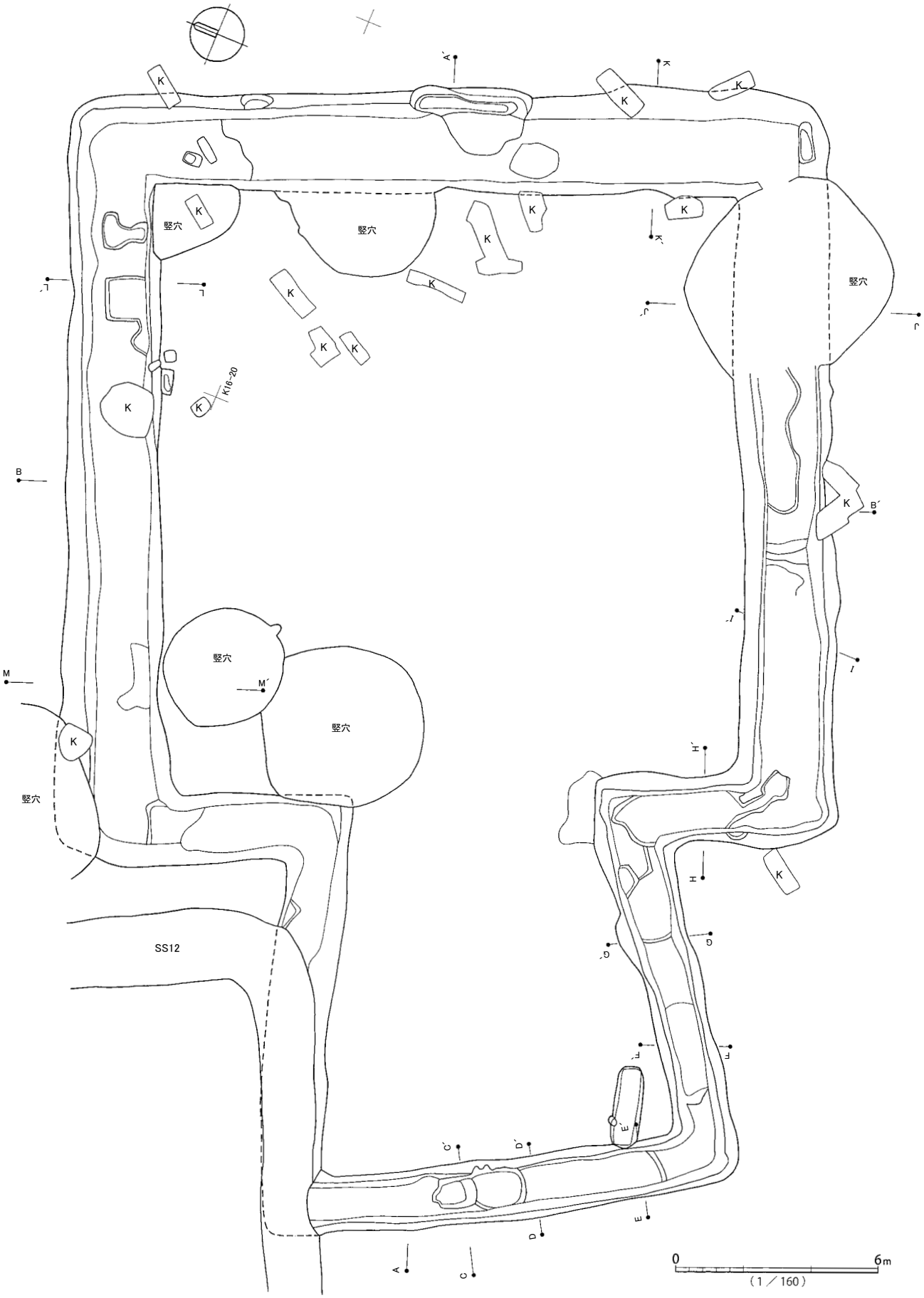
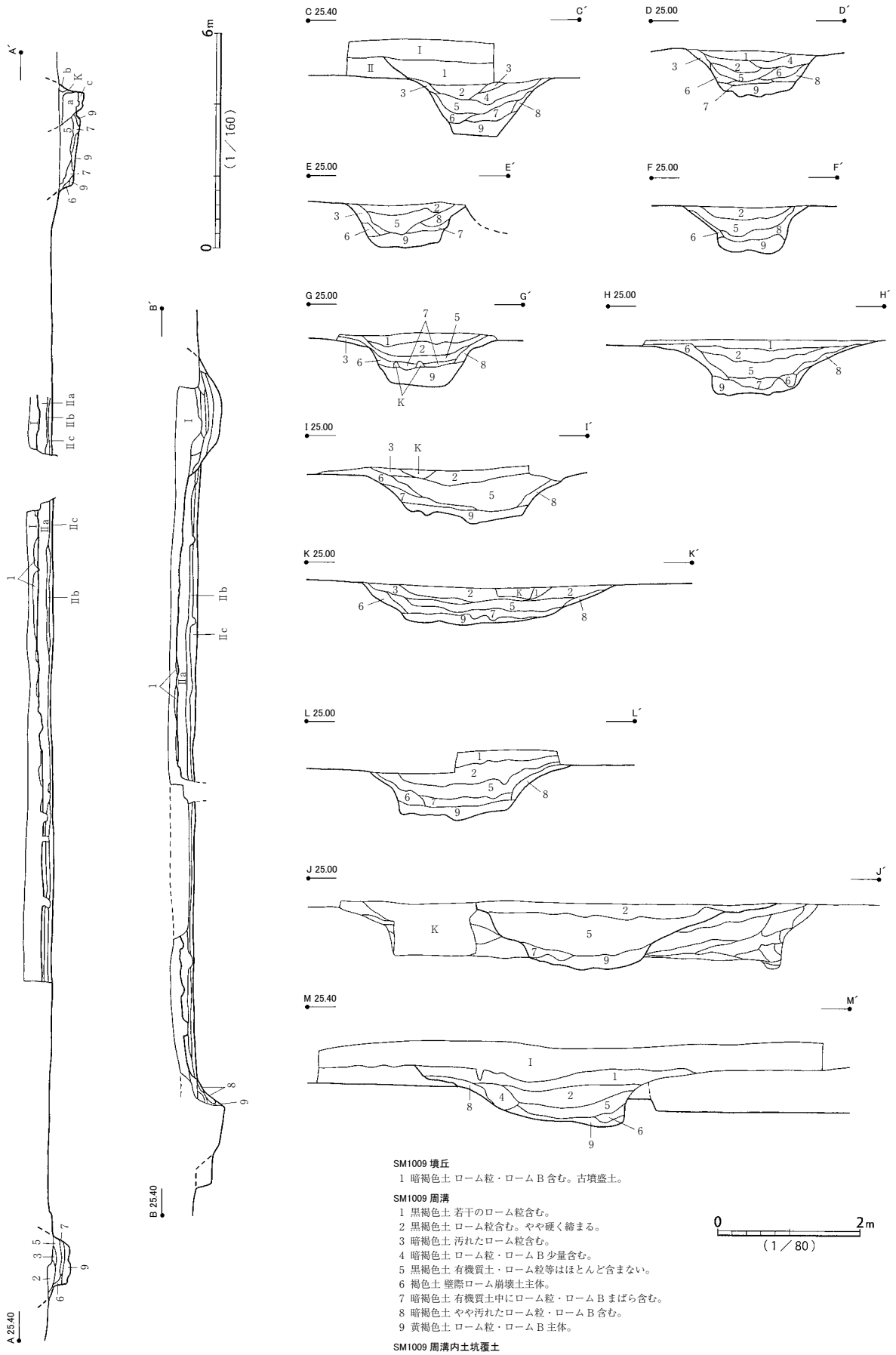


Fig.222　SM1009 遺構 (1) 実測図



SM1009 墳丘

1 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。古墳盛土。

SM1009 周溝

1 黒褐色土 若干のローム粒含む。
2 黒褐色土 ローム粒含む。やや硬く締まる。
3 暗褐色土 汚れたローム粒含む。
4 暗褐色土 ローム粒・ローム B 少量含む。
5 黒褐色土 有機質土・ローム粒等はほとんど含まない。
6 褐色土 壁際ローム崩壊土主体。
7 暗褐色土 有機質土中にローム粒・ローム B まばら含む。
8 暗褐色土 やや汚れたローム粒・ローム B 含む。
9 黄褐色土 ローム粒・ローム B 主体。

SM1009 周溝内土坑覆土

a 暗褐色土 ローム粒多く含む。
b 暗褐色土 ローム粒 a 層より多く含む。
c 黄褐色土 ローム粒・ローム B 主体。

Fig.223　SM1009 遺構 (2) 実測図

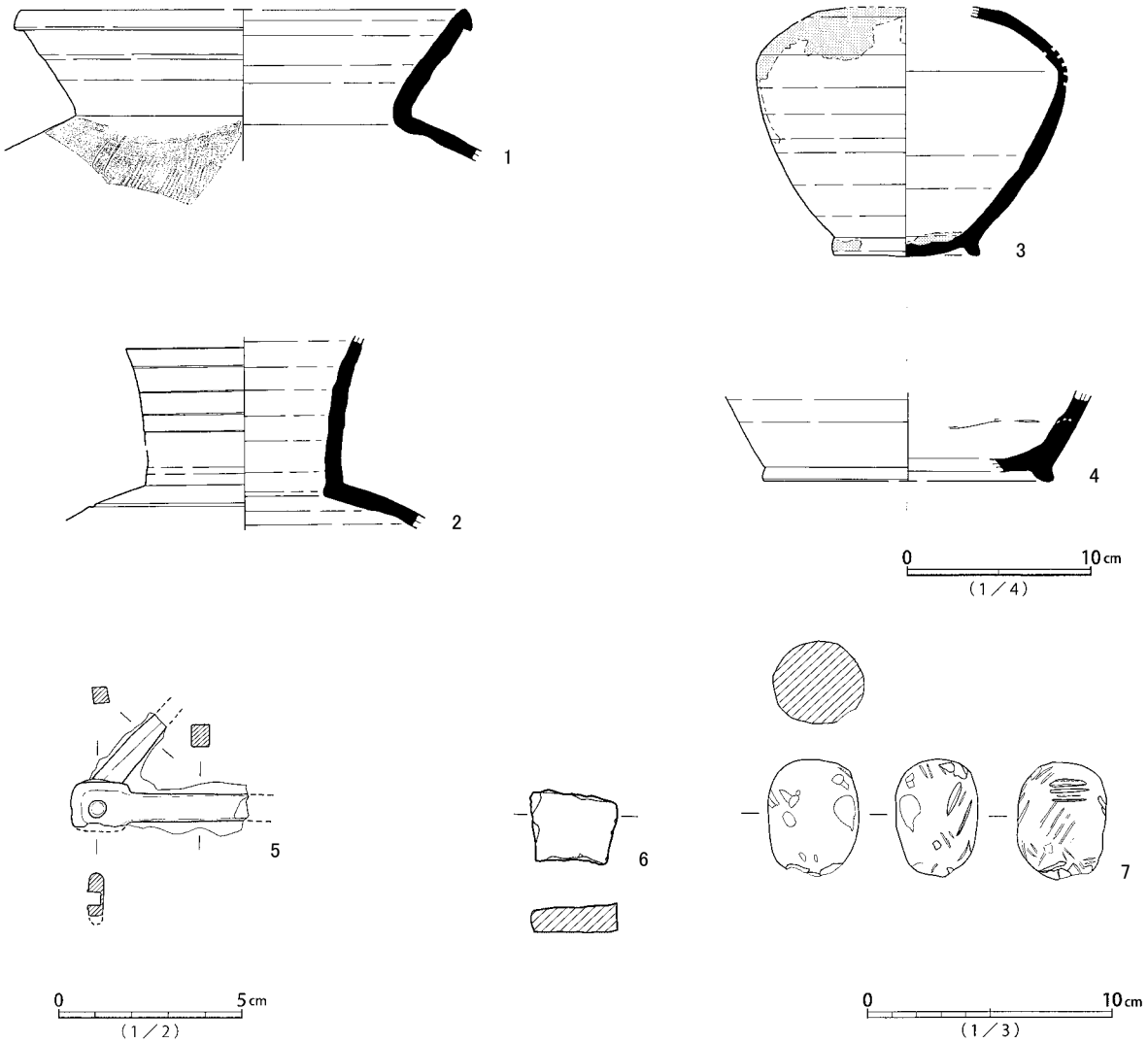


Fig.224　SM1009 遺物実測図

径1.56m深さ0.86m、下端で長径3.12m短径1.50mを測り、主軸方位はN-86°-Eを示す。墓壙の中央やや北寄りに、木棺に打ち込まれた鉄釘が長方形に分布する範囲が存在するが、調査段階では木棺痕と認識されなかったようで、正確な遺構平面図が存在しない。ただし、土層断面図では、この鉄釘群から想定される範囲を木棺痕と認識した図面を残している。よって墓壙内に破線で示した。このことによって推定される木棺規模は、長径2.26m短径0.62m深さ0.68mを測る箱型木棺である。底面はほぼ平坦であり、推定主軸方位はN-86°-Eを示す。

出土遺物

第1主体部の木棺内棺底部からは、極めて多量の遺物が出土した。木棺中央やや北寄りに、全長84.0㎝を測る1-1の鏃付八窓鍔付大刀が、1-3の全長87.2㎝を測る鏃付六窓鍔付大刀と重なった状態で、1が上位に位置して検出されている。1の関部は刀身部側の片関と想定され、茎部には目釘孔が2か所に確認される。1-3の関形状は刀身部より茎部両側の幅が減じるため両関と想定され、茎部には目釘孔が1か所に確認される。木棺中央両木口の東側からは、1-2の金銅製装鏑造鉄鉾の刃部が出土した。袋部端部には薄い金銅製責金具が巻かれており、鉄鉾に伴う王冠状突起を持つ金銅製責金具は、鉄鉾袋部端から5㎝北側に離れて出土している。鉄鉾の全長を示す石突部は西木口側から検出されており、出土位置から推定される鉄鉾の全長は、2.20m前後に復元される。

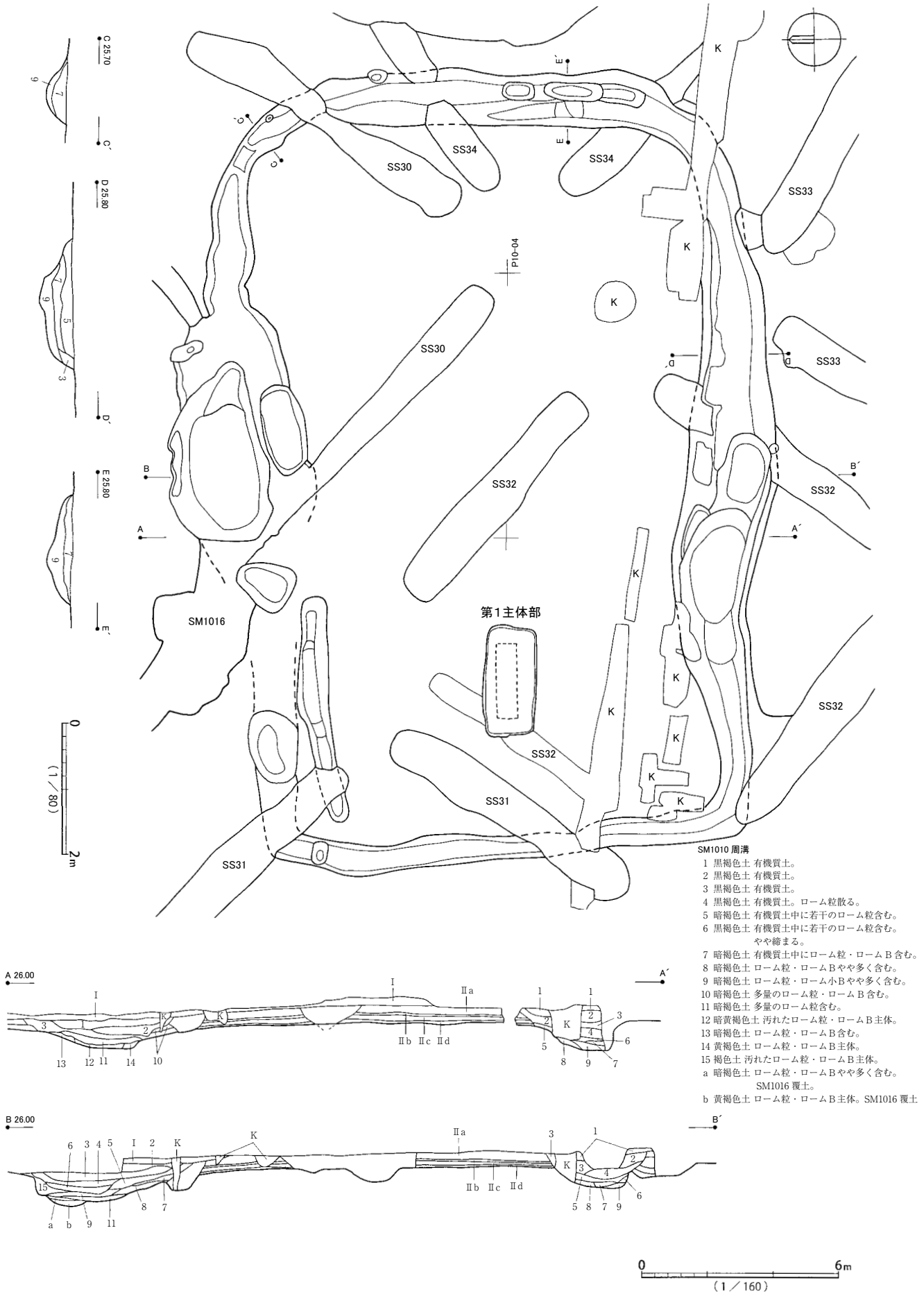
木棺中央やや東寄りに、南北方向に横一列に並んだ状態で52本の鉄鏃群が検出された。これらの鉄鏃群は、三角形長頸鏃が主体であり、関の判明するものは何れも棘関である。茎部が残存する製品の中には、1-4・5・10・13のように撚りを持たない紐巻きの痕跡が存在する製品も認められる。また三角形長頸鏃群は、SM1008号出土長頸鏃と極めて類似した形状を呈するが、更に鏃身部の三角形状が小型化した段階であり、時期的には更に新しい段階に位置付けられそうである。1-55は鑷子である。南側の鉄鏃群中から検出している。1-56～90は鉄釘である。1-89については、遺物は現在行方不明であるが、木棺痕の周囲から木質を伴って検出されていることから、木棺に打ち込まれた釘群と想定される。1-64は、樹種同定により釘頭側の板目が針葉樹、先端付近の柾目はヒノキ科と同定されている。これら大刀や鉄鉾の出土状態から、被葬者は東枕安置で埋葬されたものと察知される。

木棺内以外の出土品で、注目される遺物に1-91の鏡板付銜・引手、1-93の鏨状鉄器がある。これらはグリッド検出の遺物であり、その出土位置から本墳に伴う遺物として提示している。馬具・鏨状鉄器は当古墳群中最大の終末期前方後方墳SM1008からも類似製品が出土しており、その関連性が注目される。なお、本墳出土とされる束状に結合した14本の鉄鏃群は、本墳主体部の遺物分布図と整合しないこと等の前述の理由から、同じ前方後方墳であるSM1008で掲載・報告している。

本墳周溝内からは、比較的多量の土師器・須恵器が検出されている。これらの遺物は、全て周溝内一括で取り上げられたものであるが、検出された須恵器群は何れも湖西産の製品で、その主体は極めて限定的な時期を提示している。これらの土師器・須恵器が示す在地土器の年代観は椎津茶ノ木11期併行期、東海編年でのⅣ期後半、須恵器ではTK-46型式併行期、実年代では670～80年代と想定される。

SM1011　セ73地区　（Fig.234～235、PL.103・200）

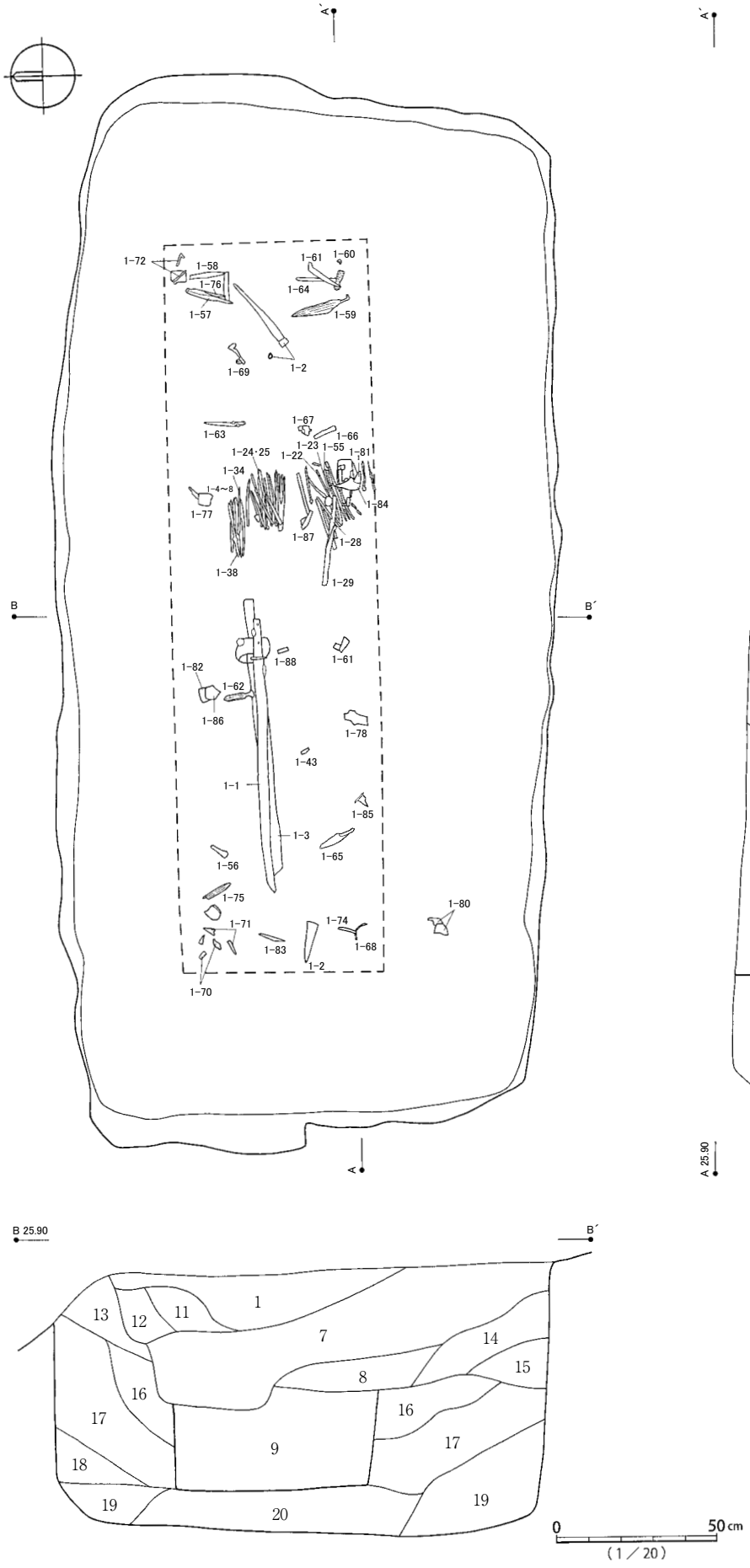
R-4グリッドに位置する。古墳時代終末期方墳改変の終末期前方後方墳である。旧遺構番号はセ73-002号遺構である。

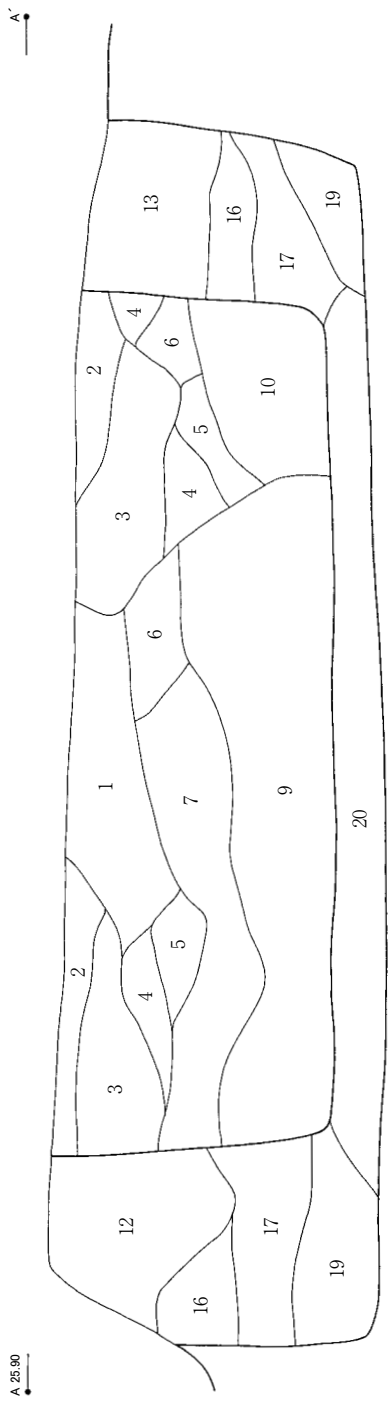


SM1010 周溝

1 黒褐色土 有機質土。
2 黒褐色土 有機質土。
3 黒褐色土 有機質土。
4 黒褐色土 有機質土。ローム粒散る。
5 暗褐色土 有機質土中に若干のローム粒含む。
6 黒褐色土 有機質土中に若干のローム粒含む。やや締まる。
7 暗褐色土 有機質土中にローム粒・ローム B 含む。
8 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
9 暗褐色土 ローム粒・ローム小 B やや多く含む。
10 暗褐色土 多量のローム粒・ローム B 含む。
11 暗褐色土 多量のローム粒含む。
12 暗黄褐色土 汚れたローム粒・ローム B 主体。
13 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
14 黄褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
15 褐色土 汚れたローム粒・ローム B 主体。
a 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。SM1016 覆土。
b 黄褐色土 ローム粒・ローム B 主体。SM1016 覆土

Fig.225　SM1010 遺構 (1) 実測図





SM1010 第 1 主体部

1 暗褐色土 有機質土中にローム粒・ローム B 含む。
2 暗褐色土 有機質土中にローム粒・ローム B4 ～ 5cm大含む。
3 暗褐色土 1 層に似るやや有機質性強。
4 褐色土 ローム B 主体。
5 暗褐色土 有機質土中にローム B 混じる。
6 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
7 暗褐色土 有機質土中にローム B 含む。
8 暗褐色土 有機質土中に 2 ～ 3cm のローム B 含む。暗褐色土主体。
9 暗褐色土 3 ～ 4cmのローム B 主体。
10 暗褐色土 2 ～ 3cmのローム B 含む。
11 暗褐色土 ローム粒・2 ～ 3cmのローム B 含む。
12 暗褐色土 褐色味強く 3 ～ 4cm 大のローム B 含む。
13 黄褐色土 2 ～ 3cm大のローム B 主体。
14 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
15 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
16 暗褐色土 暗褐色土主体。2 ～ 3cm のローム B 含む。
17 暗褐色土 暗褐色土主体。ローム粒・1 ～ 3cm 大のローム B 含む。
18 褐色土 ローム粒・2 ～ 4cm大のローム B 主体。
19 褐色土 1 ～ 5cm大のローム B 主体。
20 暗褐色土 ローム粒・ローム B 主体。硬く引き締まる。

Fig.226　SM1010 遺構 (2) 実測図

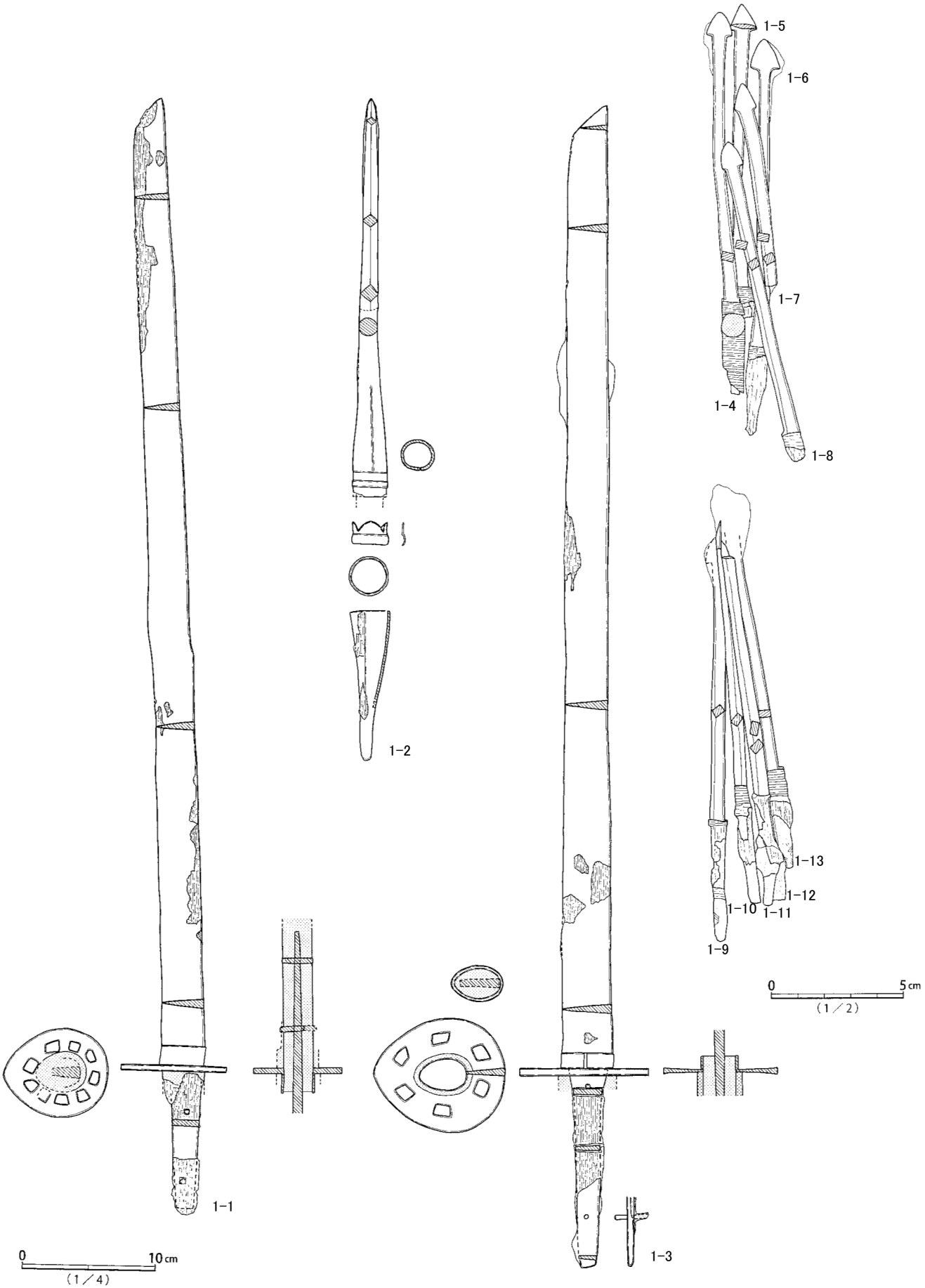


Fig.227　SM1010 遺物 (1) 実測図

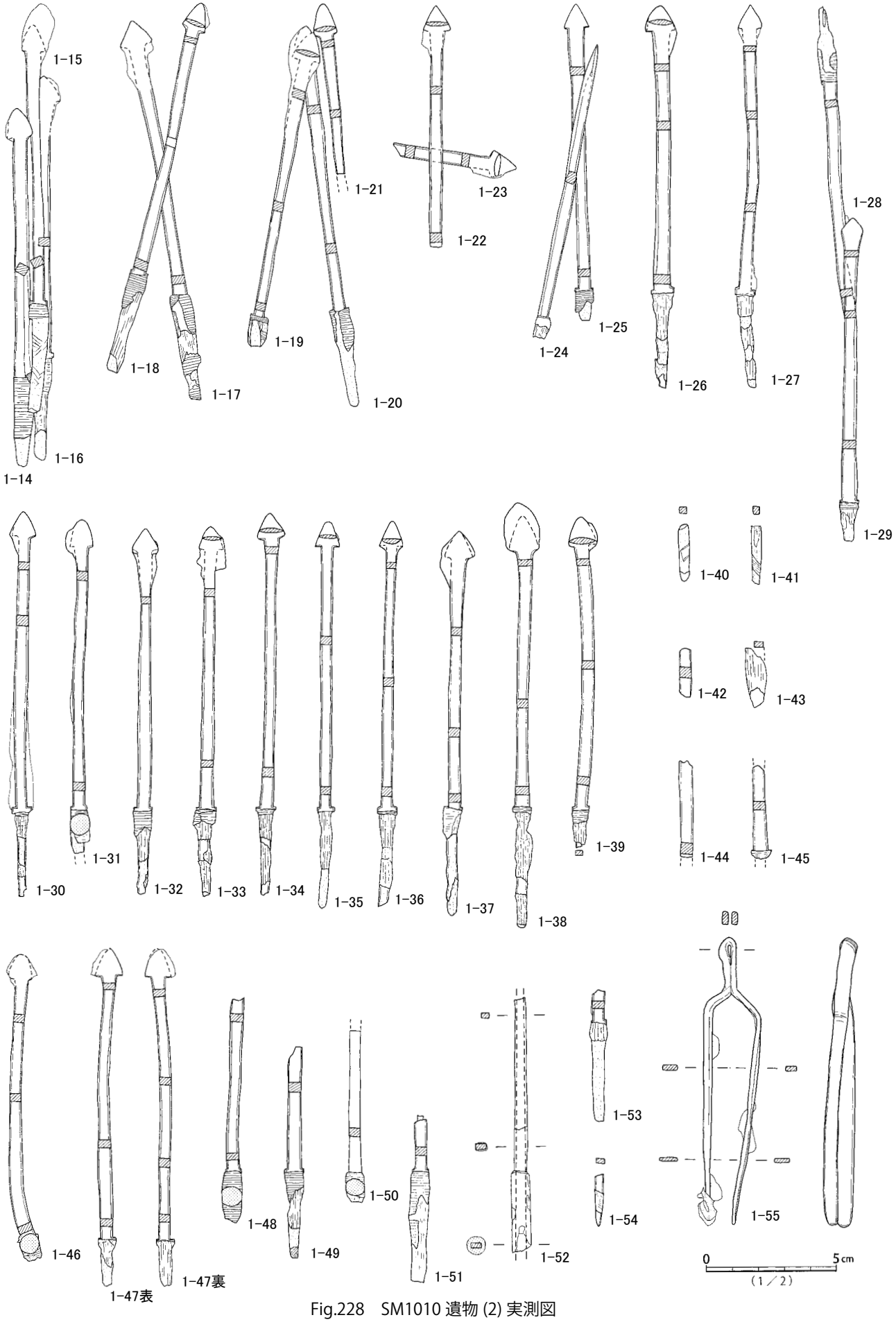


Fig.228　SM1010 遺物 (2) 実測図

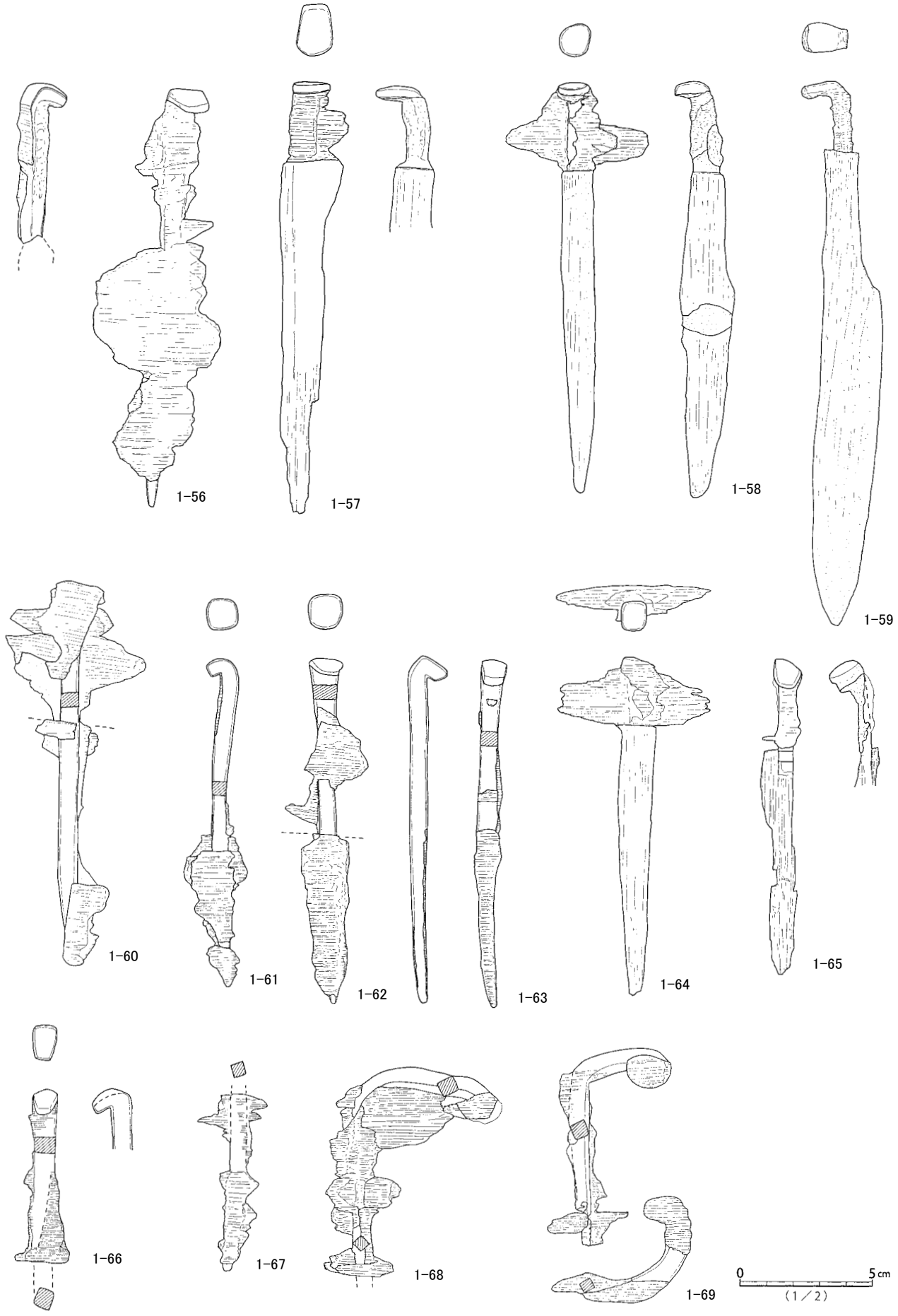


Fig.229　SM1010 遺物 (3) 実測図

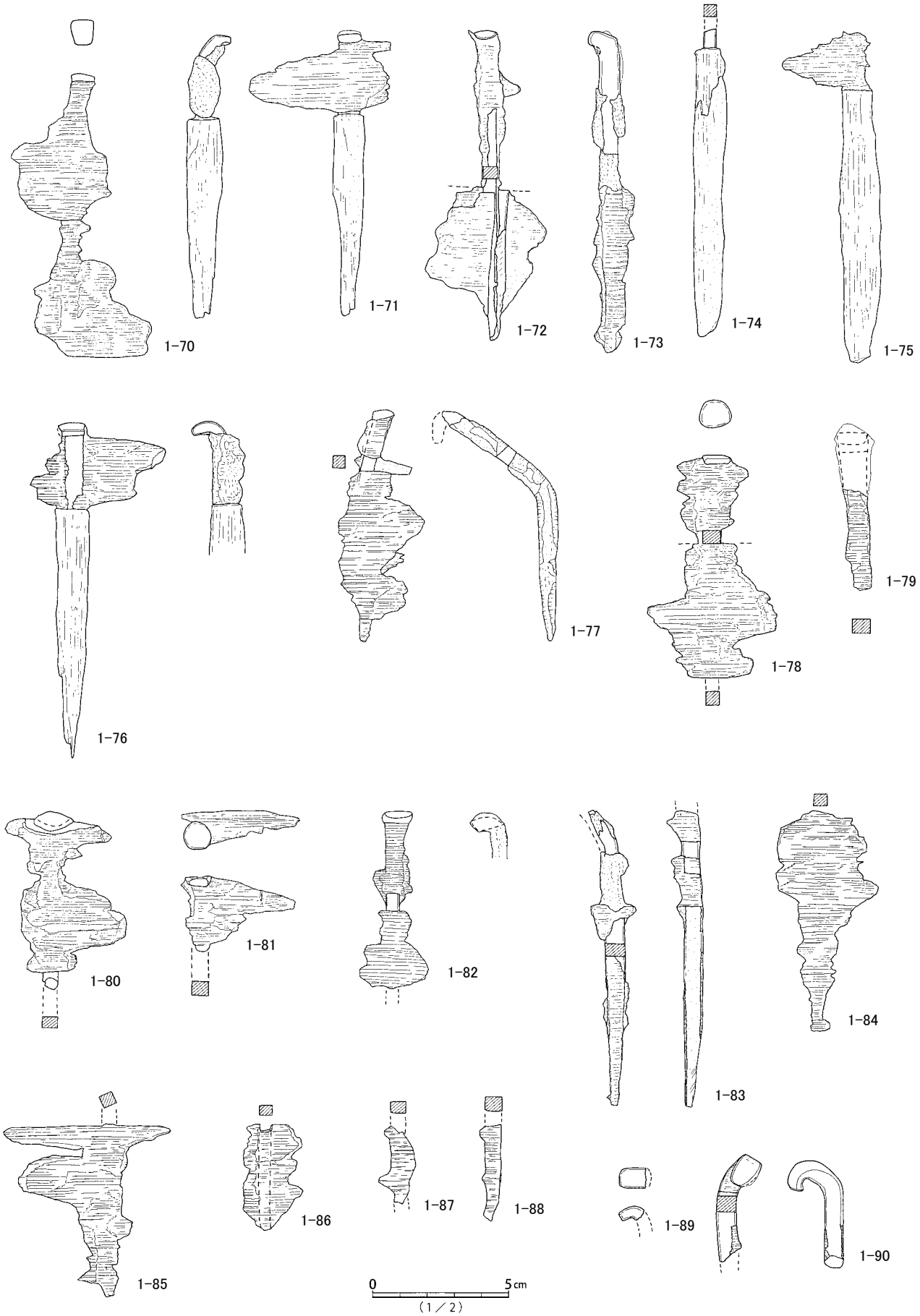


Fig.230　SM1010 遺物 (4) 実測図

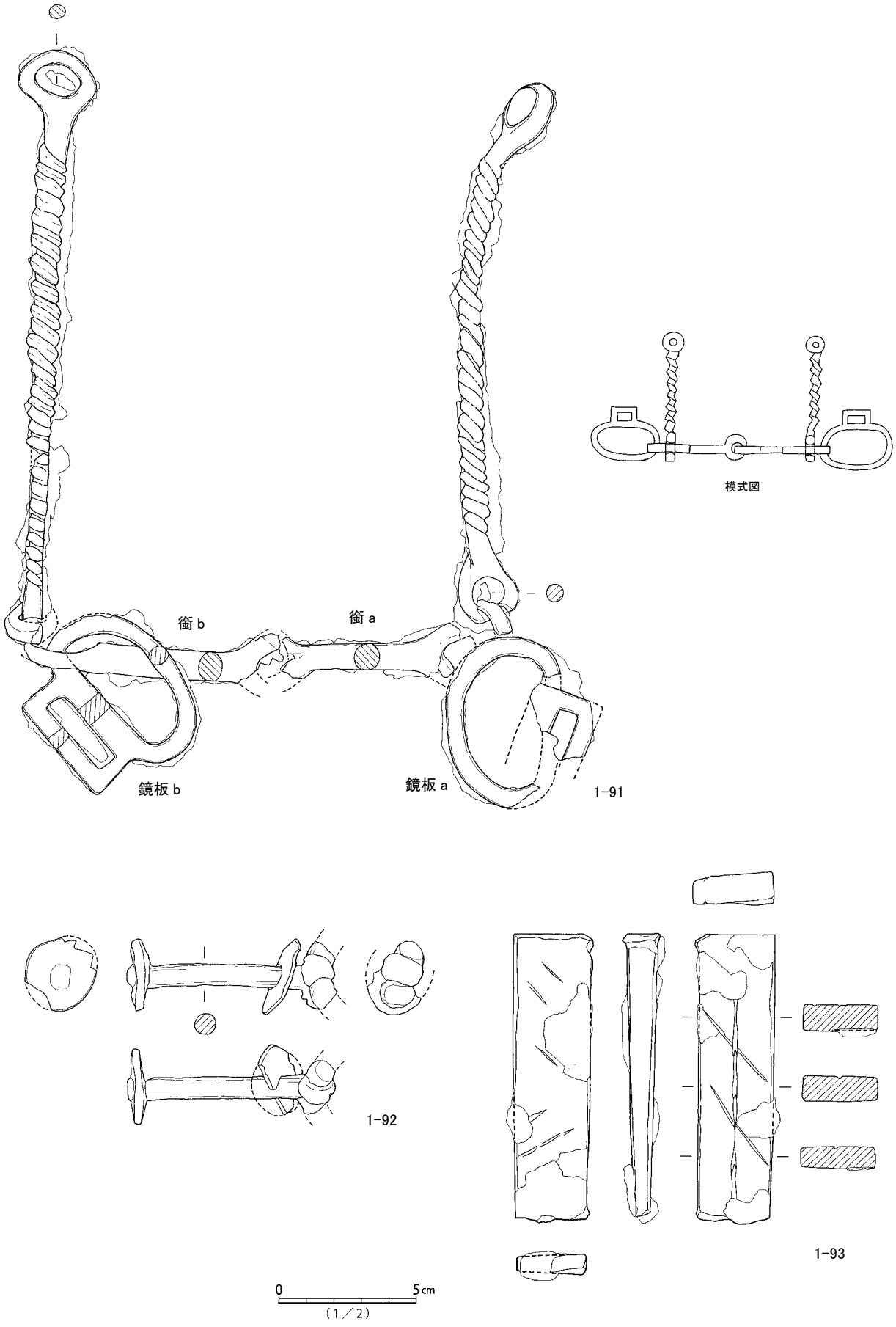


Fig.231　SM1010 遺物 (5) 実測図

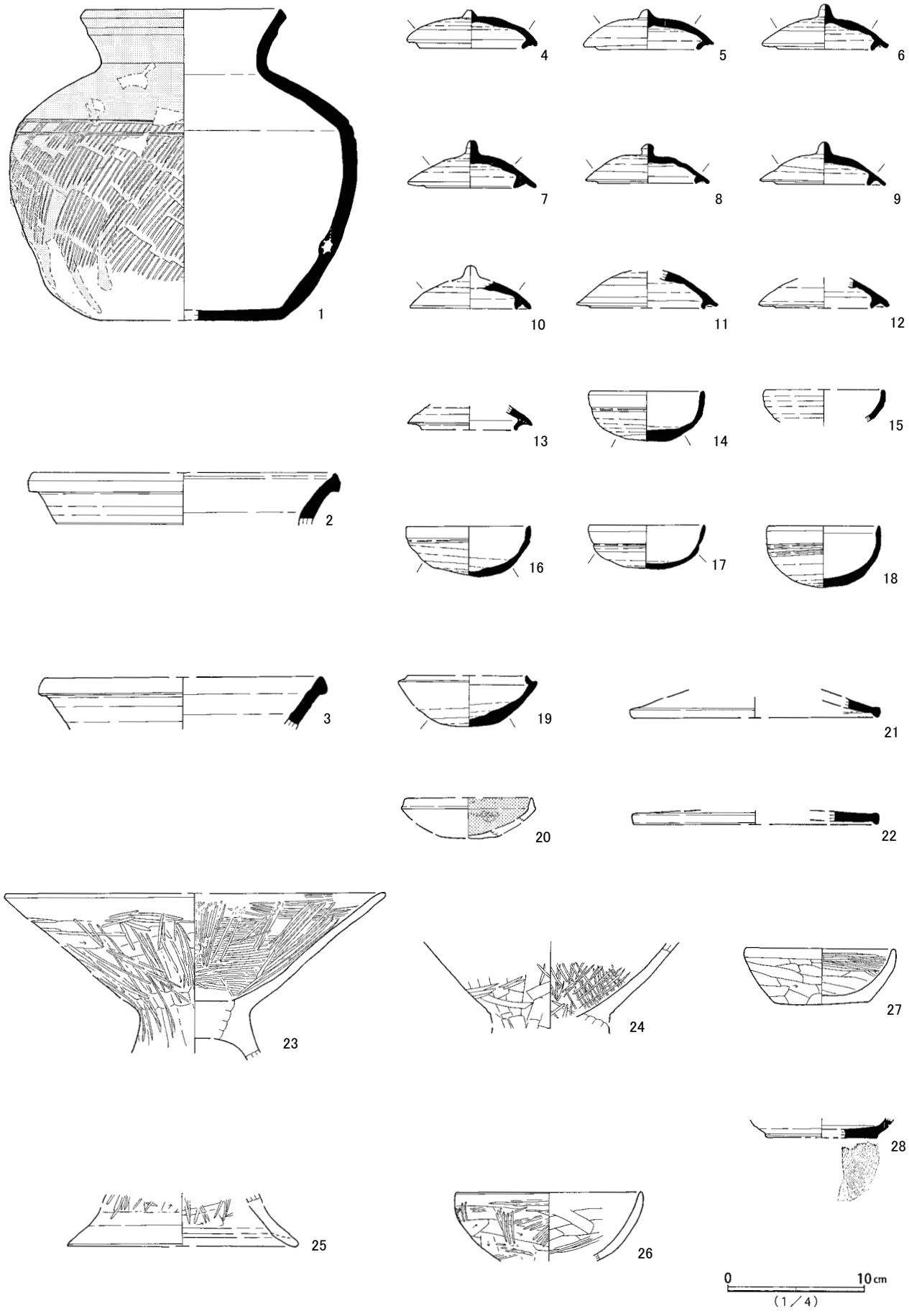


Fig.232　SM1010 遺物 (6) 実測図

墳丘と周溝

推定全長15.10m、後方部推定長径9.90m、後方部推定短径9.86m、前方部最大幅8.60m、括れ部幅7.84m、主軸方位はN-76°-Eを示す。現状では残存する盛土は存在しない。推定周溝内側面積は141.9㎡を測り、諏訪台古墳群中の前方後方墳では第4位の規模である。確認面での周溝幅は、0.82～1.14m、深さは0.36～0.80m、土層断面図上の最大値は0.86mを測り、後方部側が深くて広い傾向を示す。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

後方部中央に第1主体部、前方部側の西側周溝を埋め戻した後、埋め戻しの周溝部と前方部に跨るように第2主体部が構築されている。このことから、方墳段階の第1主体部が古く、前方後方墳改変後の第2主体部の方が新しいと判断される。

第1主体部

埋葬施設は、後方部中央に存在する木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径2.86m短径1.64m深さ0.88m、下端で長径2.26m短径1.10mを測り、主軸方位はN-73°-Eを示す。墓壙の中央から箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.16m幅0.84m、下端で長さ1.96m幅0.66m深さ0.62mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-76°-Eを示す。

木棺内からは、1-1の刀子が検出されている。

第2主体部

第2主体部は、西側の方墳周溝を埋め戻して構築された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径2.52m短径1.30m深さ0.68m、下端で長径2.42m短径0.98mを測り、主軸方位はN-79°-Wを示す。墓壙の中央から箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は上端で長さ2.14m幅0.72m、下端で長さ1.98m幅0.58m深さ0.46mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-75°-Wを示す。

木棺内からは、2-1の刀子が検出されている。

出土遺物

第1主体部の木棺内棺底部からは、1-1の刀子が出土した。刀身部の先端を欠くが、推定全長19.5㎝の比較的大型品であり、刃部と茎部の一部に皮膜痕跡が残存する。関は両関であるが、刀身側が大きく切り込まれている。関部付近に残る木質には、柄金具の痕跡が残っている。第2主体部の2-1の刀子は、棺内から検出されている。こちらは全長7.4㎝の小型品で、関部付近の木質には柄金具の痕跡が残り、関形状は不明である。

周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1012　SW83地区　（Fig.236～237、PL.103～104）

T-22グリッドに位置する。古墳時代終末期方墳改変の終末期前方後方墳である。本墳は昭和59年度発行の上総国分寺発掘調査概要ⅩⅡで、その概要が報告された6号墳である。旧遺構番号はSW83-K6号遺構である。

墳丘と周溝

全長11.44m、後方部長径10.80m、後方部短径10.40m、前方部最大幅5.24m、括れ部幅5.00m、残存する盛土の高さは0.28mを測り、主軸方位はN-85°-Eを示す。周溝内側面積は128.0㎡を測り、諏訪台古墳群中の前方後方墳では第5位の規模である。確認面での周溝幅は、0.84～2.12m、深さは0.56

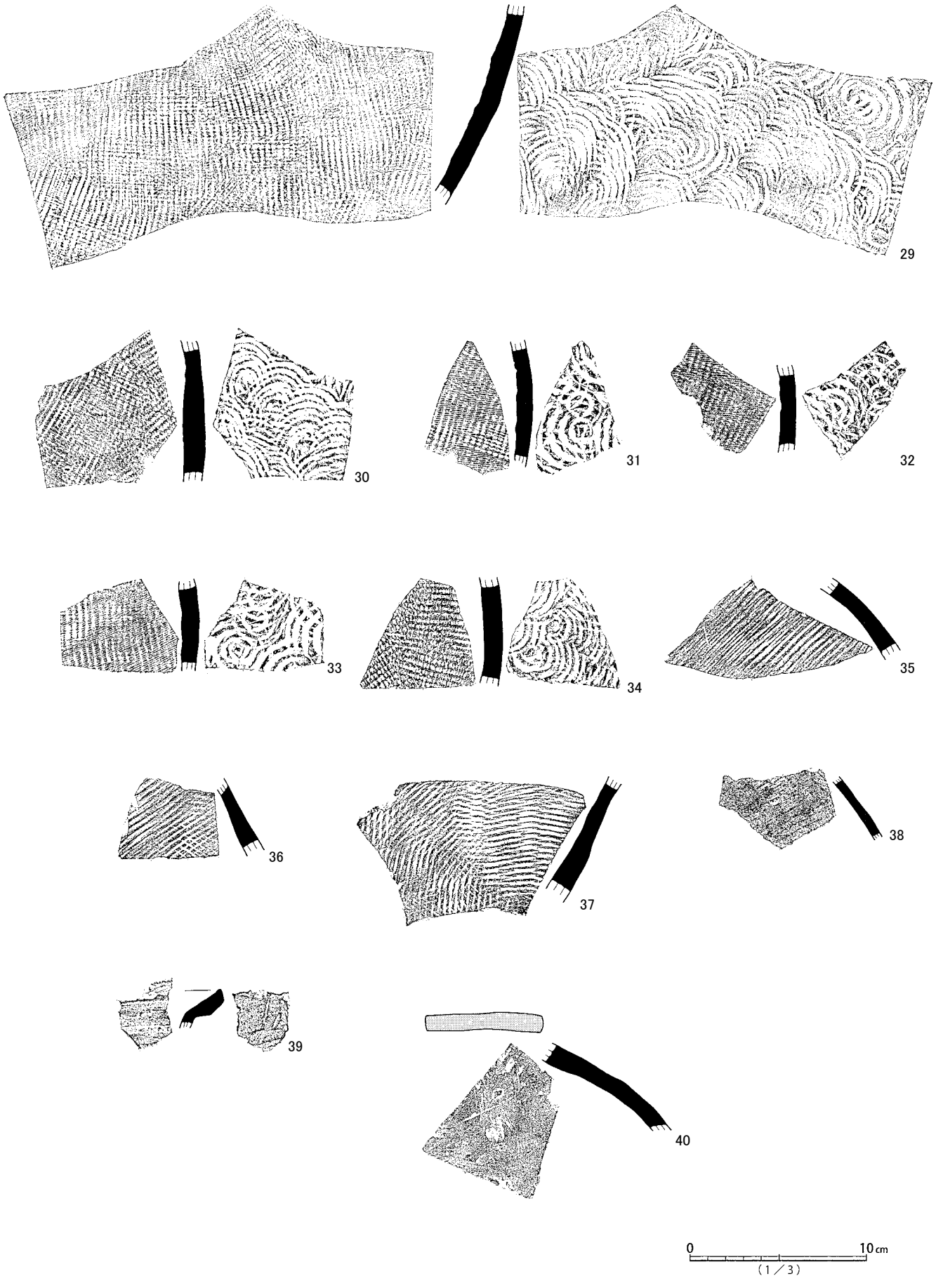
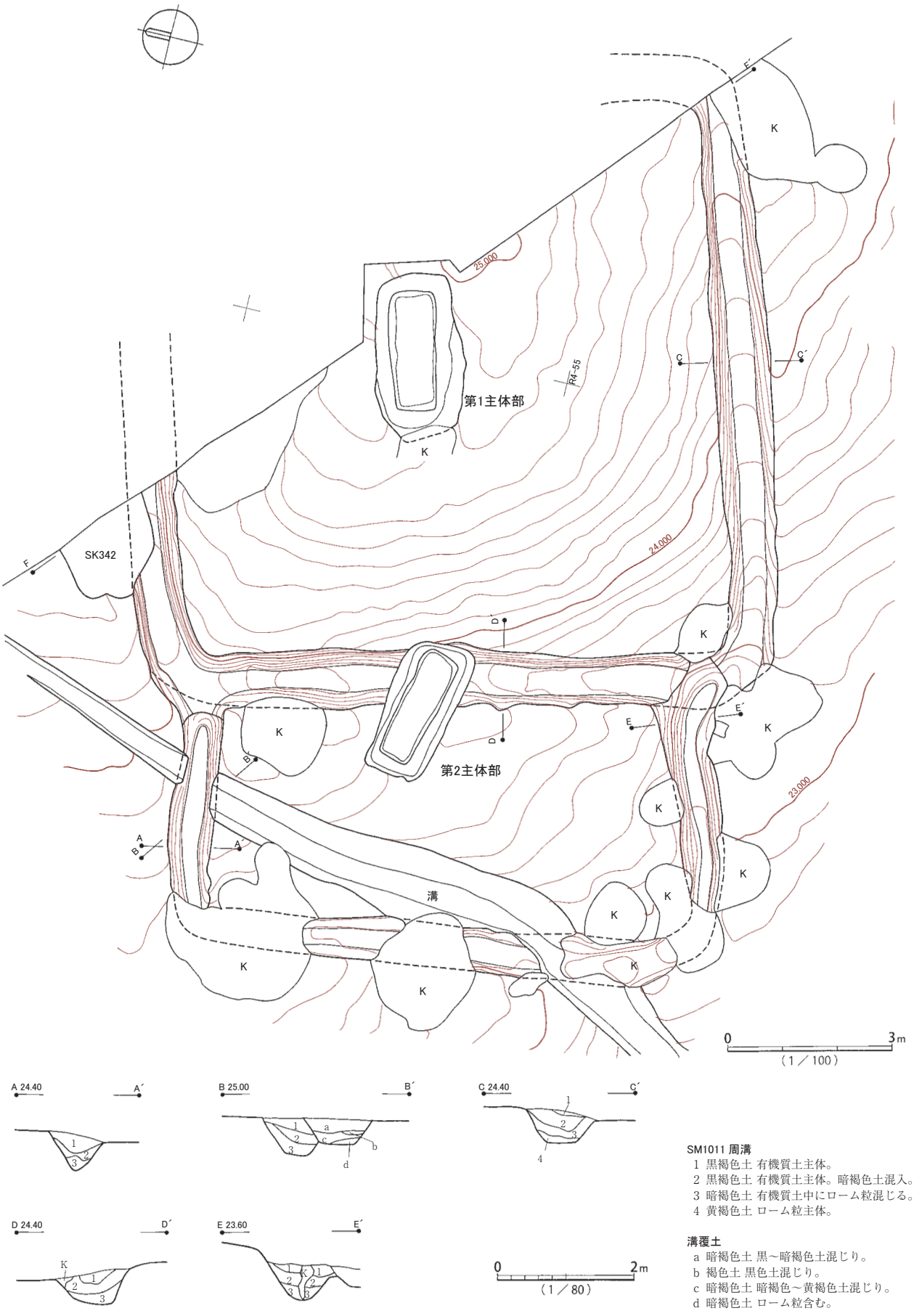


Fig.233　SM1010 遺物 (7) 実測図



SM1011 周溝
1 黒褐色土 有機質土主体。
2 黒褐色土 有機質土主体。暗褐色土混入。
3 暗褐色土 有機質土中にローム粒混じる。
4 黄褐色土 ローム粒主体。

溝覆土
a 暗褐色土 黒～暗褐色土混じり。
b 褐色土 黒色土混じり。
c 暗褐色土 暗褐色～黄褐色土混じり。
d 暗褐色土 ローム粒含む。

Fig.234　SM1011 遺構 (1) 実測図

～0.96m、土層断面図上の最大値は1.08mを測り、後方部側が深くて広い傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

概報では後方部側に埋葬施設がないとされているが、後方部中央の攪乱内からは粘土が検出されており、本来この位置に埋葬施設が存在していたものと想定される。第2主体部は、方墳段階の周溝を埋め戻した後、埋め戻された周溝内に構築されている。このことから、方墳段階の第1主体部が古く、前方後方墳改変後の第2主体部の方が新しいと判断される。

第1主体部

本来の埋葬施設は、後方部中央に位置していたが、攪乱によってその全てを失っている。攪乱内には粘土ブロックが多々散見されることから、方墳段階には、この位置に埋葬施設が存在していたことが確実である。

攪乱内からは、遺物が全く検出されなかった。

第2主体部

第2主体部は、方墳の西側周溝を埋め戻した後構築された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径2.56m短径1.32m深さ0.92m、下端で長径2.44m短径0.96mを測り、主軸方位はN-87°-Wを示す。墓壙の中央から箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は上端で長さ1.88m幅0.56m、下端で長さ1.88m幅0.46m深さ0.70mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-90°-Wを示す。

墓壙・木棺内からは、遺物が全く検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、覆土一括で取り上げられた灰釉・須恵器片計3点だけあり、明瞭な時期がわかる遺物は存在していない。

SM1013　セ54地区　（Fig.238～240、PL.104～105・169・185・212）

V-19・20グリッドに位置する。下層に位置するSS76・77と重複する古墳時代終末期の前方後方墳である。旧遺構番号はセ54-32号遺構である。

墳丘と周溝

全長16.12m、後方部長径9.06m、後方部短径8.86m、前方部最大幅7.58m、括れ部幅5.70m、残存する盛土の高さは0.50mを測り、主軸方位はN-71°-Eを示す。周溝内側面積は118.0㎡を測り、諏訪台古墳群中の前方後方墳では第6位の規模である。確認面での周溝幅は、0.96～1.46m、深さは0.15～0.54mを測り、後方部側が深くて広い傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

埋葬施設は、後方部中央から1基、前方部内から1基、括れ部周溝内から1基、併せて3基検出されている。後方部の周溝が完結しないことや、前方部側周溝の埋め戻しが確認されないことから、埋葬施設の構築順は不明である。

第1主体部

埋葬施設は、後方部のほぼ中央に位置する木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径2.36m短径1.18m深さ0.18m、下端で長径2.10m短径0.90mを測り、主軸方位はN-88.5°-Eを示す。墓壙の南

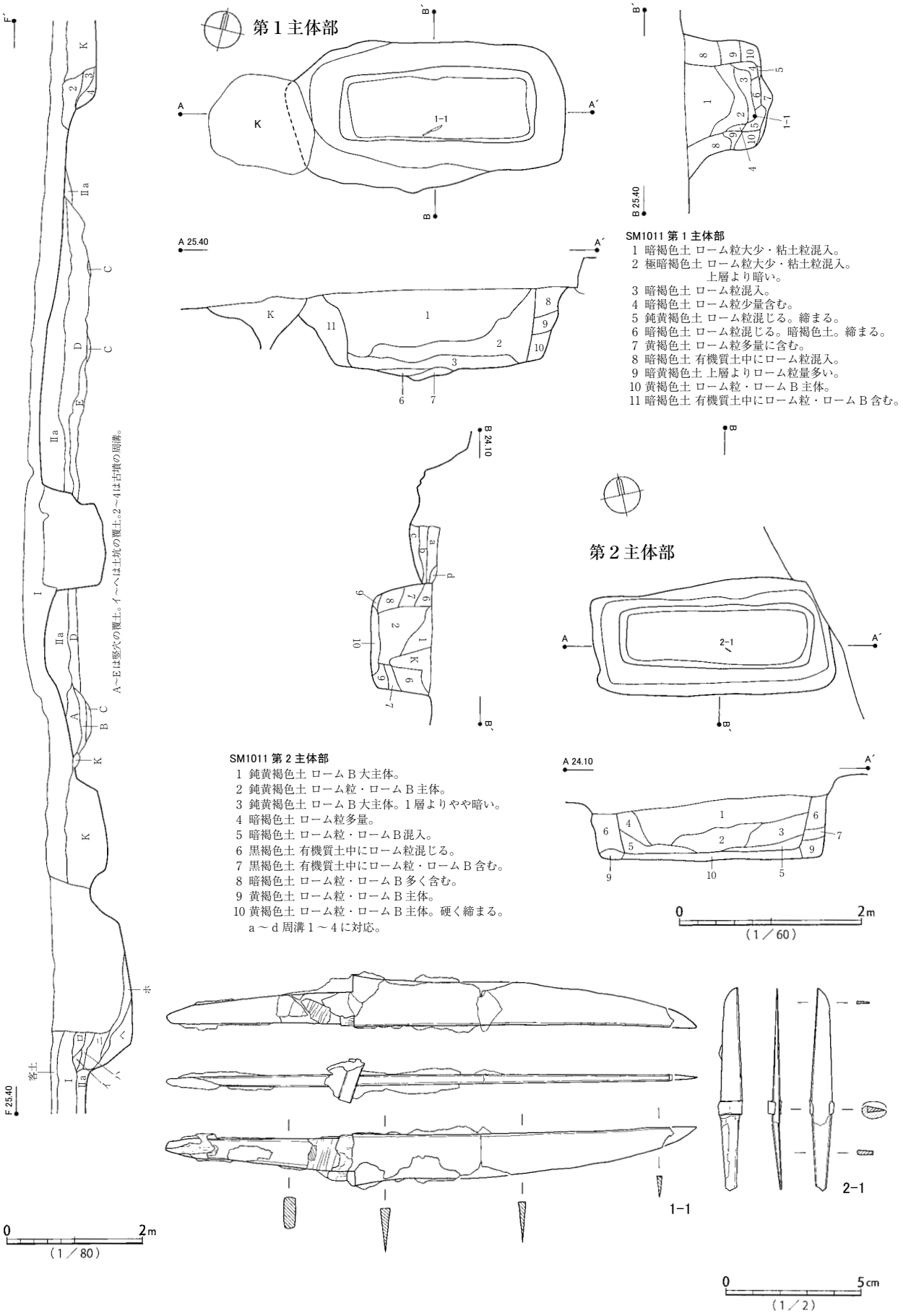
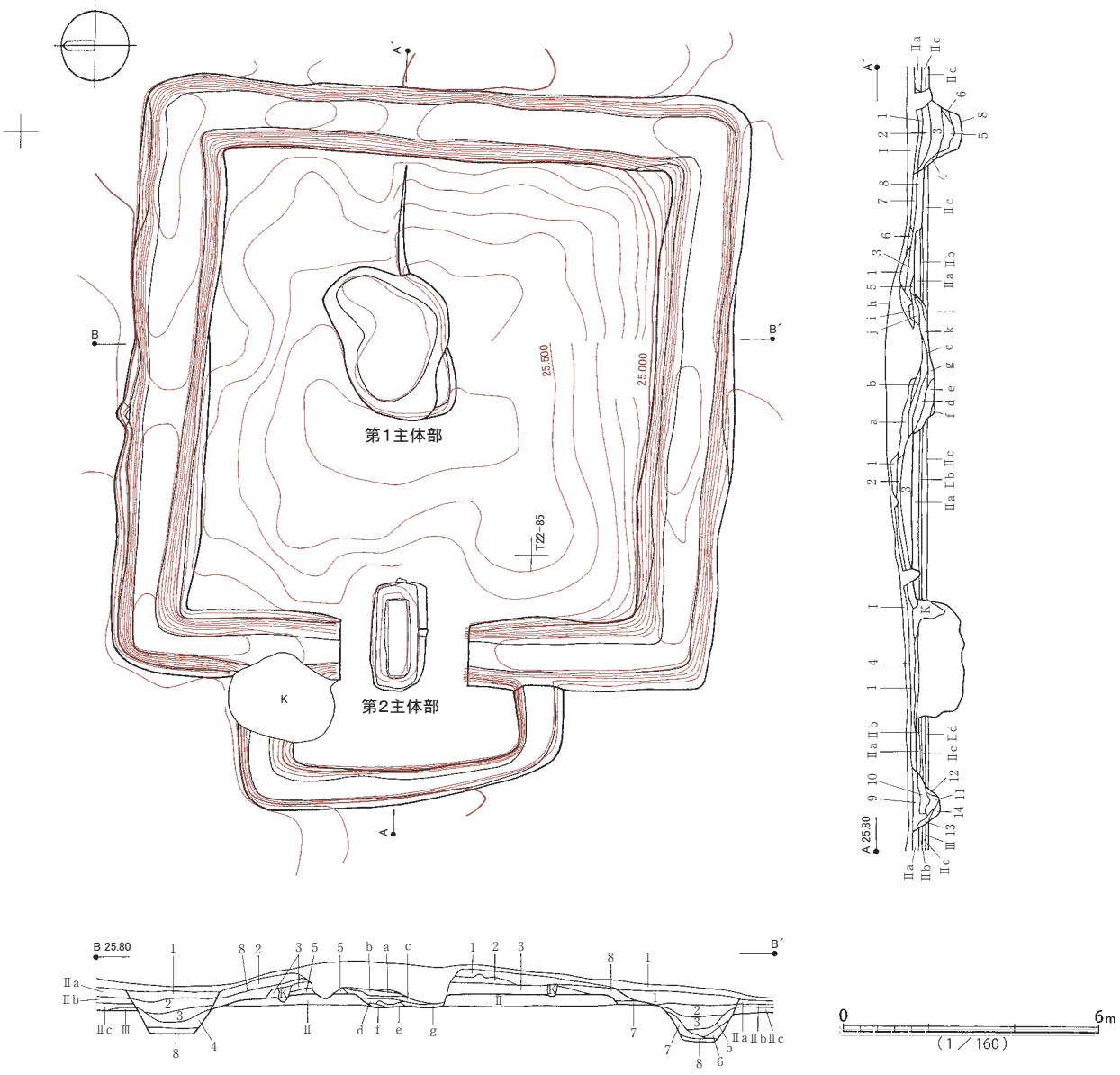


Fig.235　SM1011 遺構 (2)・遺物実測図



SM1012 墳丘

1 暗褐色土 ローム粒・黒褐色土粒含む。
2 黒褐色土 ローム粒若干含む。
3 盛土。
4 黒褐色土 ローム粒若干含む。
5 暗褐色土 黒褐色土粒含む。
6 暗褐色土 ローム粒含む。
7 暗褐色土 ローム粒若干含む。
8 黒褐色土 ローム粒若干含む。

SM1012 周溝

1 黒褐色土 有機質土主体。
2 暗褐色土 ローム粒少量含む。
3 黒褐色土 ローム粒混入。
4 暗褐色土 ローム粒含む。
5 黒褐色土 有機質土。
6 褐色土 ローム粒多量に含む。
7 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
8 明褐色土 ローム B 主体。
9 黒褐色土 ローム粒若干含む。
10 黒褐色土 ローム粒・ローム B 少量含む。
11 黒褐色土 ローム粒若干含む。
12 暗褐色土 黒褐色土・ローム粒。
13 黒褐色土 ローム粒含む。
14 黒褐色土 ソフトローム崩壊土・ローム粒含む。

SM1012 第 1 主体部

a 暗褐色土 ローム粒少量含む。
b 暗褐色土 褐色土含む。
c 明褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
d 明褐色土 c 層よりローム量多い。
e 黒褐色土 ローム粒少量含む。硬く締まる。
f 明褐色土 ローム B 主体。
g 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
h 暗褐色土 ローム粒・ローム B 少量含む。
i 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
j 暗褐色土 ローム粒含む。
k 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
l 明褐色土 ローム粒多量に含む。

Fig.236　SM1012 遺構 (1) 実測図

側に偏った位置に、周囲を粘土で固定した箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は上端で長さ1.70m幅0.46m、下端で長さ1.56m幅0.42m深さ0.18mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-88°-Eを示す。

墓壙・木棺内からは何の遺物も検出されなかった。

第2主体部

埋葬施設は、前方部中央東寄りに検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、南側をテラス状に掘り込んだ二段掘りで、テラス部の上端で長径2.94m短径0.96m深さ0.20m、下端で長径2.72m短径0.86mを測り、主軸方位はN-86°-Eを示す。遺体を安置したと想定される墓壙は、このテラスに接して更に深く掘り込まれており、長径1.62m短径1.06m深さ0.54m、下端で長径1.52m短径0.74mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-72.5°-Eを示す。箱型の木棺痕の検出を期待したが、木棺痕跡は明確に捉える事が出来なかった。あるいは墓壙とほぼ同サイズの木棺だったのかもしれない。

墓壙内の棺底部付近から、ほぼ1/2を欠いた2-1のガラス玉1点が検出されている。

第3主体部

北側括れ部の周溝内に検出された周溝内土壙である。上端で長径1.64m短径0.94m深さ0.54m、下端で長径1.52m短径0.74mを測り、主軸方位はN-72.5°-Eを示す。

底面はほぼ平坦であるが、墓壙内からは何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、底部を打ち欠いた1の須恵器短頸壺・2の甕口縁部片が一括で取り上げられている。

3.円墳

SM1014　セ28地区　（Fig.241～251、PL.4・10・105～106・169・185・200・211～213）

S・T-6・7グリッドに位置する。下層のSS103・104・105と重複する古墳時代後期～終末期にかけての円墳である。なお、付随する側壁抉り込み土壙は、調査時には073号の別番で調査されている。旧遺構番号はセ28-049・073号遺構である。

墳丘と周溝

長径19.52m、短径19.16m、残存する盛土の高さは1.24mを測り、長軸方位はN-35.5°-Eを示す。推定周溝内側面積は（296.1）㎡を測り、諏訪台古墳群中の円墳では第1位の規模である。確認面での周溝幅は、2.68～3.80m、深さは0.24～0.88m、土層断面図上の最深部では1.36mを測り、東側周溝が広く北側周溝が深い傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

埋葬施設は、墳丘内では中央から北側と東側に偏った2地点から計2基検出された。また東側の周溝外壁に接して、側壁抉り込み土壙1基が検出されている。ただし、この側壁抉り込み土壙の位置を示す図は、古墳平面図に上端のみの記載に過ぎず、単独での詳細図は存在していない。したがって、詳細図の提示は出来ないが、残存する土層断面図より側壁抉り込み土壙と判断される。

第1主体部

埋葬施設は、北側に偏った位置で検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径4.24m短径1.84m深さ0.64m、下端で長径3.82m短径1.52mを測り、主軸方位はN-75°-Wを示す。墓壙の南

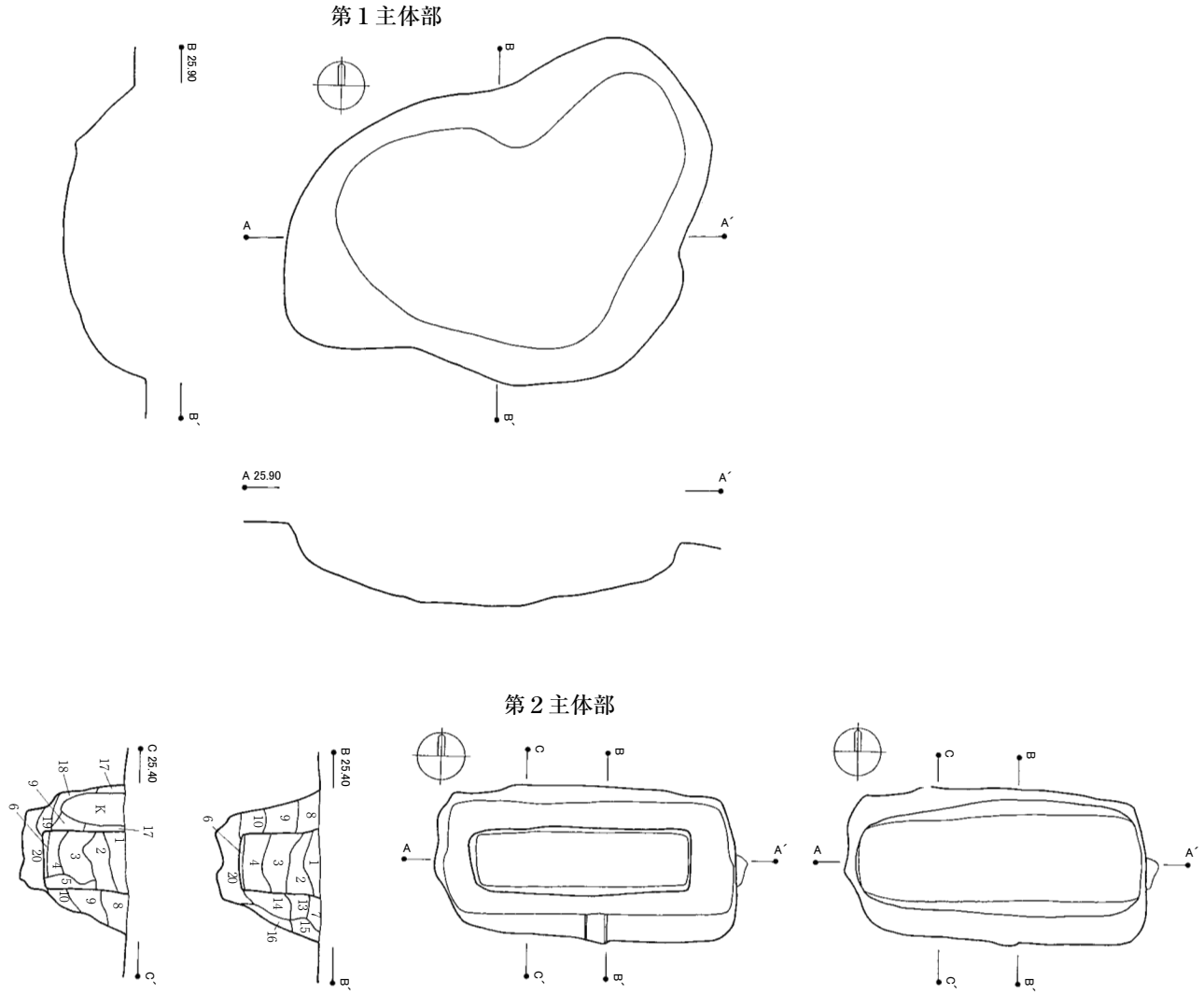
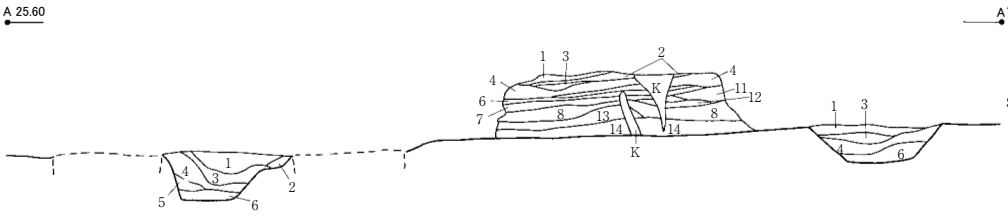
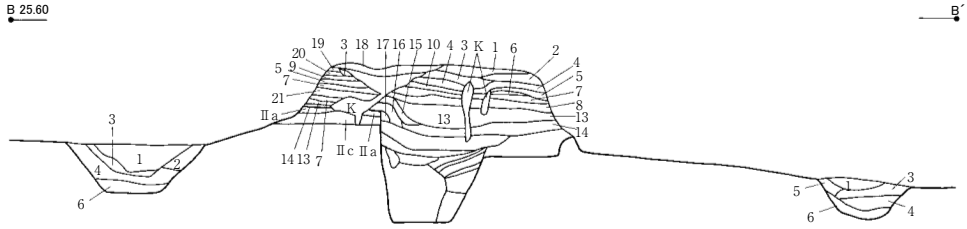


Fig.237　SM1012 遺構 (2)・遺物実測図



Fig.238　SM1013 遺構 (1) 実測図





SM1013 墳丘

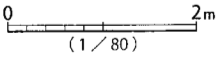
1 褐灰色土 締まる。
2 褐灰色土 軟質。
3 褐灰色土 —
4 暗褐色土 ローム粒少量含む。締まる。
5 褐色土 軟質。
6 褐灰色砂質土 宝永火山灰。
7 褐灰色砂質土ローム粒混入。
8 暗褐色土 ローム粒混じりやや軟質。
9 暗褐色土 褐灰色砂質土含む。
10 灰黄褐色土 褐灰色砂質土混じり。
11 黄褐色土 ローム B 主体。
宝永テフラ降下以前盛土。
12 暗褐色土 ローム粒含む。
13 暗褐色土 ローム粒少量混じり、やや締まる。
14 黒褐色土 ローム粒褐色土斑点状混じり。
15 暗黄褐色土 ローム粒混じり。
16 暗褐色土 ローム粒混じり。
17 暗褐色土 黄褐色土斑点状に含む。
18 褐灰色土 軟質。
19 褐灰色土 —
20 褐灰色砂質土 締まる。
21 褐灰色土 ローム粒、暗褐色土混じり締まる。



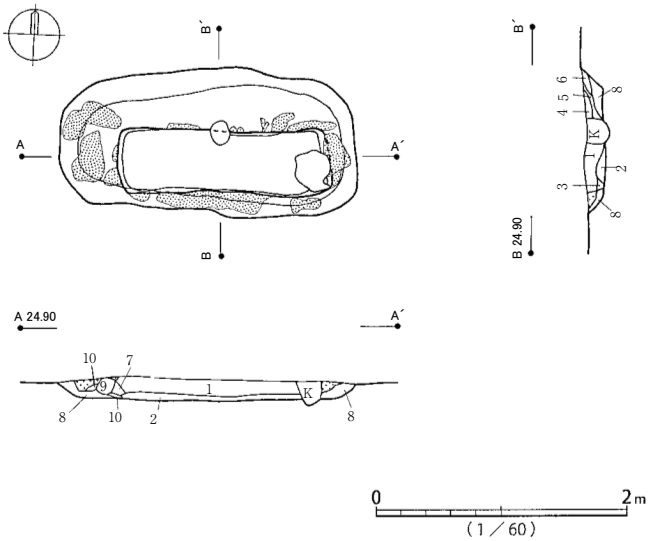


SM1013 周溝覆土

1 暗褐色土 ローム粒褐灰色土斑点状に含む。
2 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
3 暗褐色土 ローム粒大小混入。
4 黒褐色土 8㎜以下のローム粒大小混入。
5 黄褐色土 壁崩落。汚れたローム粒主体。
6 黄褐色土 ローム B 主体。



第 1 主体部



SM1013 第 1 主体部

1 暗褐色土 ローム B・白灰色粘土粒多く含む。
2 暗褐色土 ローム粒・ローム B 混入。
3 暗褐色土 ローム粒大小・白灰色粘土粒含む。
4 黒褐色土 黄白色粘土粒・ローム B 混入。
5 暗褐色土 黄白色粘土粒・ローム B 含む。
6 暗褐色土 黄白色粘土粒・ローム粒大含む。
7 暗褐色土 黄白色粘土混じる。
8 暗褐色土 白灰色粘土・ローム粒大小混入。
9 暗褐色土 ローム粒混じる。締まる。
10 黄白色土 黄白色粘土粒・ローム B 主体。
トーンは粘土 B。

Fig.239　SM1013 遺構 (2) 実測図

側に偏った位置に、周囲を粘土で固定した箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は上端で長さ2.90m幅1.38m、下端で長さ2.38m幅1.18m深さ0.33mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-78°-Wを示す。

木棺内からは小太刀・玉髄製勾玉・緑色岩製勾玉・琥珀管玉・蛇紋岩製丸玉・滑石製臼玉・鉛ガラス製丸玉・鉛ガラス製臼玉・ガラス玉等の玉類を主体とした遺物が検出されている。被葬者の胸の位置に玉類を想定すると、小太刀の鞘口あたりを右手で胸位置まで持ち上げた東枕安置の被葬者像が想定される。

第2主体部

第2主体部は、東側に偏った位置から検出された木棺直葬の土壙墓である。中央部を攪乱によって大きく削平されているが、墓壙規模は、上端で長径4.66m、A-A´間で1.64m、B-B´間で1.46m、深さ最大0.74m、下端で長径4.34m、A-A´間で1.26m、B-B´間で1.18mを測り、主軸方位はN-30°-Wを示す。墓壙のほぼ中央から箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は上端で長さ3.30m幅0.72～0.74m、下端で長さ3.26m幅0.50～0.62m深さ0.58mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-30°-Wを示す。

木棺内からは耳環4点・切っ先を欠く小太刀・琥珀管玉・ガラス管玉・琥珀丸玉・赤玉製小玉等の他に、2-23～474までの451点のガラス玉が検出されている。この内2-457番までは全てドットで取り上げられており、2-458～474までは、一括もしくは振いによって検出されたガラス玉である。

小太刀の出土位置から、被葬者は、南枕安置で埋葬されたと想定される。

第3主体部

東側周溝外壁側から検出された側壁抉り込み土壙である。上端で長径2.60m短径1.00m深さは周溝底より0.54mを測り、残存する天井部までの高さは0.52mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-8°-Eを示す。

墓壙内からは何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

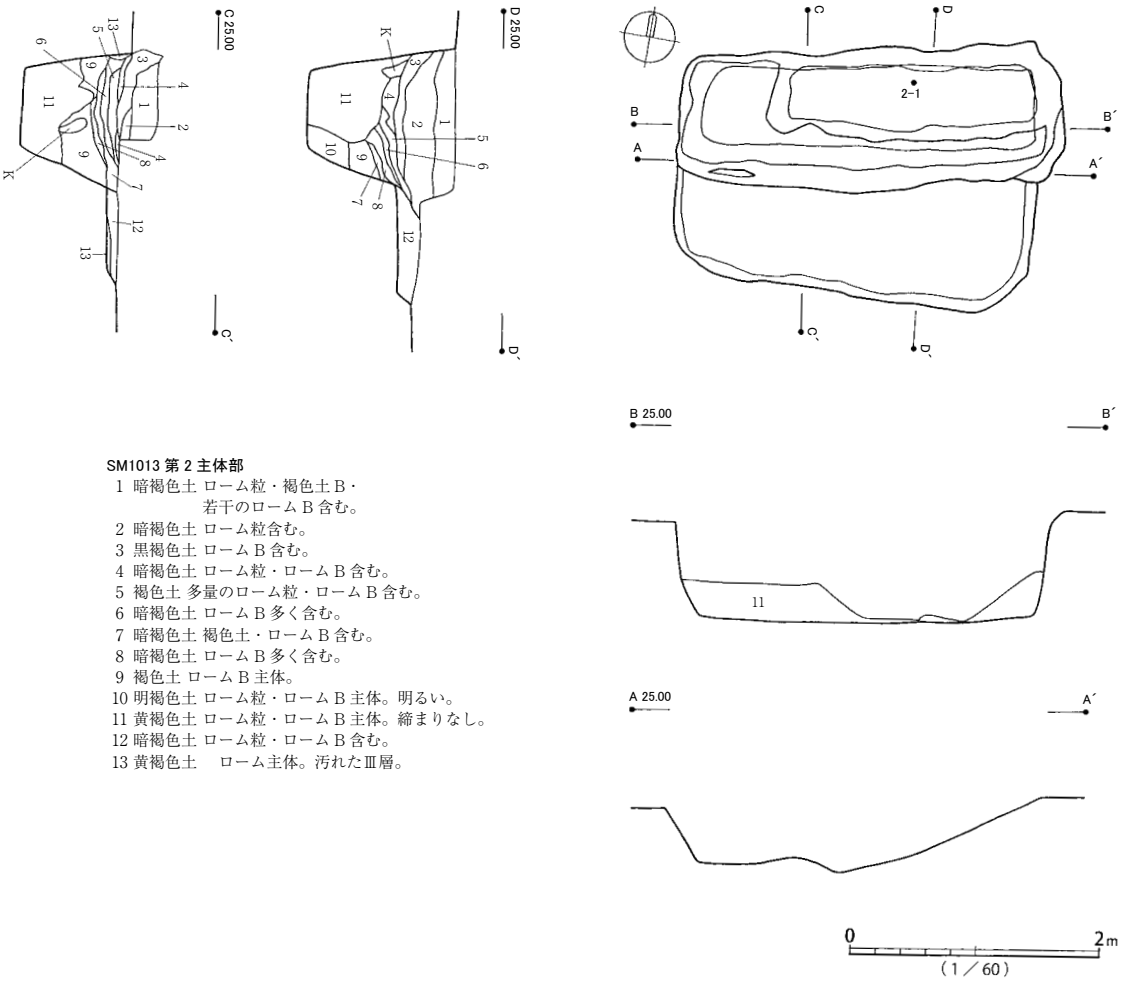
第1主体部棺内からは、1-1の小太刀の他、8点の玉髄製勾玉、1点の緑色岩製勾玉、1点の琥珀勾玉、1点のガラス勾玉、9点の琥珀管玉、4点の蛇紋岩製丸玉、1点の翡翠製丸玉、1点の蛇紋岩製臼玉、1点の滑石製臼玉、1点の鉛ガラス製丸玉、4点の鉛ガラス製臼玉、5点のガラス玉が検出されている。他にFig.245で示した範囲内からは、報告番号が付されない1点の琥珀玉片と2点の鉛ガラス玉が検出されているが、現状では劣化が進行し図化に堪えない。

1-1は全長43cmほどの小太刀である。鍔・1対の金銅製足金物・金銅製鞘尻金具を有し、小太刀としては豪華な造りである。刀身部と茎部の位置から、関は両関と想定され、茎には2孔の目釘孔が貫通する。

第2主体部からは2-1の切っ先を欠く小太刀、4点の金銅製耳環、14点の琥珀製管玉、1点のガラス管玉、1点の琥珀丸玉、1点の赤玉製小玉、450点を超えるガラス玉等が検出されている。2-1には鍔・鎺が伴い、鞘の鯉口部が残存する。茎部の鍔側には、糸巻きを施された柄の一部が残存し、茎長及び刀身幅より、切っ先を欠くものの小太刀と想定される。茎幅から、関は両関と想定され、茎には目釘孔が1か所認められ、目釘の1/2ほどが残存する。

本墳周溝内からは、土師器甕・湖西産須恵器広口壺・三足脚付灰釉短頸壺・用途不明鉄器・用途不明金

第２主体部



SM1013 第 2 主体部
1 暗褐色土 ローム粒・褐色土Ｂ・
若干のロームＢ含む。
2 暗褐色土 ローム粒含む。
3 黒褐色土 ロームＢ含む。
4 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
5 褐色土 多量のローム粒・ロームＢ含む。
6 暗褐色土 ロームＢ多く含む。
7 暗褐色土 褐色土・ロームＢ含む。
8 暗褐色土 ロームＢ多く含む。
9 褐色土 ロームＢ主体。
10 明褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。明るい。
11 黄褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。締まりなし。
12 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
13 黄褐色土　ローム主体。汚れたⅢ層。

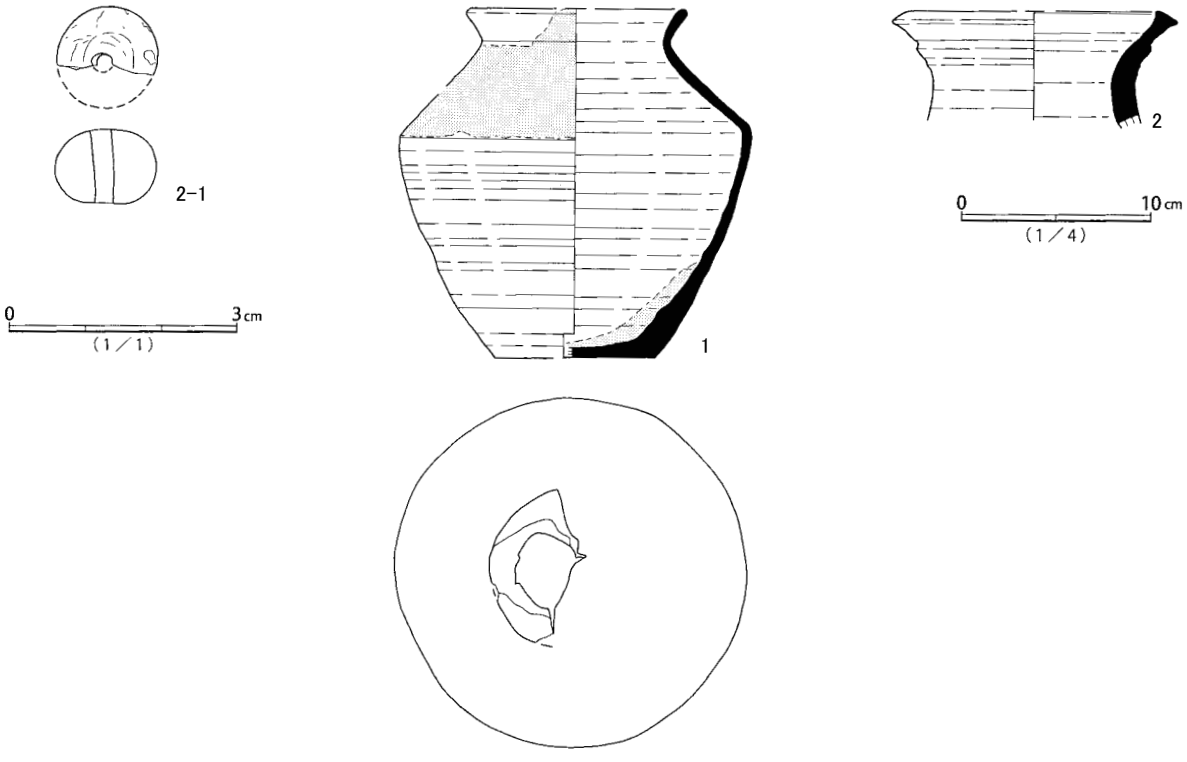


Fig.240　SM1013 遺構 (3)・遺物実測図

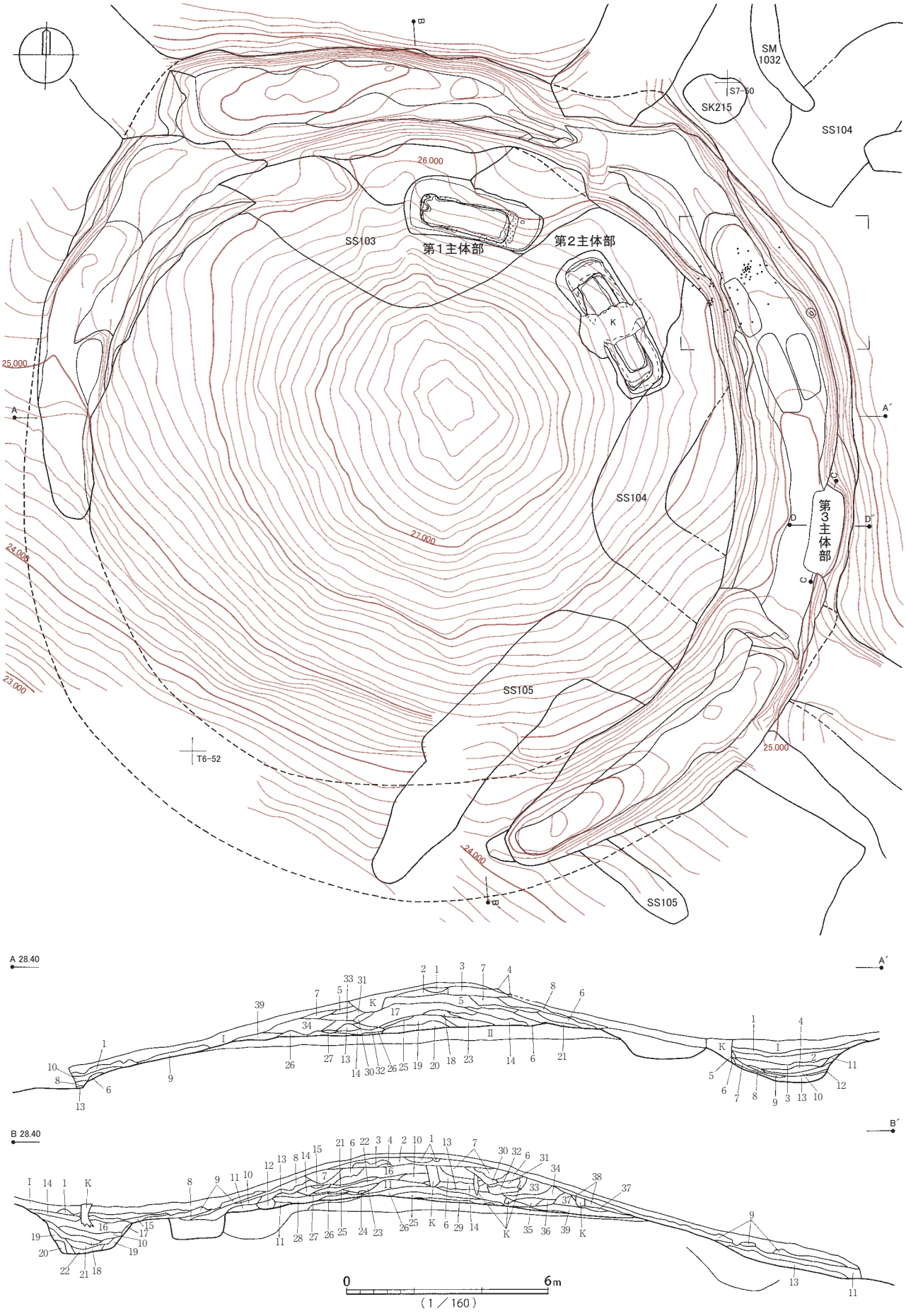


Fig.241　SM1014 遺構 (1) 実測図

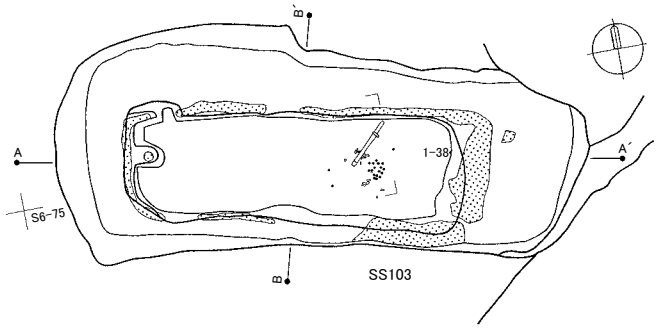
SM1014 墳丘

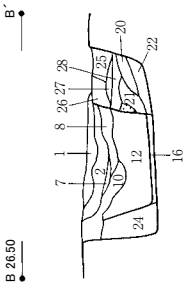
1 暗褐色土 ローム粒含む。
2 褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
3 褐色土 ローム粒・ロームＢ多く含む。
4 暗褐色土 ローム粒含む。
5 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ若干含む。
6 暗褐色土 中～大型ロームＢ主体層。
7 褐色土 有機質土中にローム粒含む。
8 暗褐色土 有機質土。
9 褐色土 ローム粒含む。墳丘流出土。
10 褐色土 ローム粒含む。
11 褐色土 小～中型ロームＢ主体。
12 褐色土 ローム小Ｂ含む。
13 褐色土 ローム粒主体。中型ロームＢ混入。
14 褐色土 ローム粒主体。
15 黒色土 有機質土。
16 暗褐色土５層と同じ。
17 褐色土 中～大型ロームＢ主体。
18 暗褐色土 ローム粒含む。
19 褐色土 ローム粒やや多く含む。
20 褐色土 ローム粒・ロームＢ多く含む。
21 褐色土 中型のロームＢ含む。
22 暗褐色土 ローム粒含む。
23 褐色土 小～中型ロームＢ均等に含む。
24 黄褐色土 ロームＢ。
25 暗褐色土 ローム粒含む。
26 褐色土 ローム小Ｂ多く含む。
27 褐色土 ローム粒多く含む。
28 褐色土 ローム小Ｂ多く含む。
29 褐色土 ローム粒多量に含む。
30 褐色土 ロームＢ主体。
31 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ若干含む。
32 褐色土 大型ロームＢ主体。
33 黄褐色土 ローム粒・ローム小Ｂ主体。
34 黄褐色土 ローム粒・ローム小～中Ｂ主体。
35 黄褐色土 ローム粒・ローム小Ｂ主体。中Ｂも混入。
36 褐色土 ローム小Ｂ主体。
37 黄褐色土 ローム主体。
38 暗褐色土 盛土流出。２次堆積土。ローム粒多く含む。
39 暗褐色土 ローム粒若干含む。

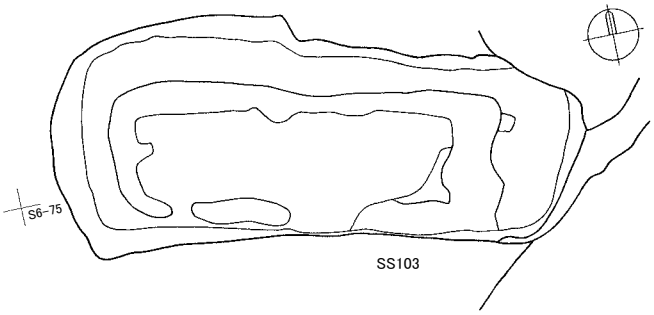
SM1014 周溝

1 暗褐色土 パサパサした有機質土。
2 暗褐色土 ローム粒斑点状に混入。
3 褐色土 ローム小粒含む。
4 暗褐色土 ローム粒若干含む。
5 褐色土 壁崩壊ローム主体。
6 褐色土 壁崩壊ロームＢ。
7 暗褐色土 ローム粒含む。
8 暗褐色土 壁崩落ローム粒含む。
9 明褐色土 ローム粒主体。
10 褐色土 ローム粒多量に含む。
11 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
12 明褐色土 ローム主体。
13 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
14 褐色土 墳丘流出ローム粒多量に含む。
15 褐色土 ローム粒多量に含む。
16 暗褐色土 ローム粒含む。
17 褐色土 壁崩落ローム粒主体。
18 暗褐色土 褐色土斑点状に含む。
19 暗褐色土 ローム粒・ローム小Ｂ含む。
20 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
21 褐色土 ローム粒・ロームＢやや多く含む。
22 黒色土 有機質土中にローム粒・ロームＢ若干含む。

第１主体部

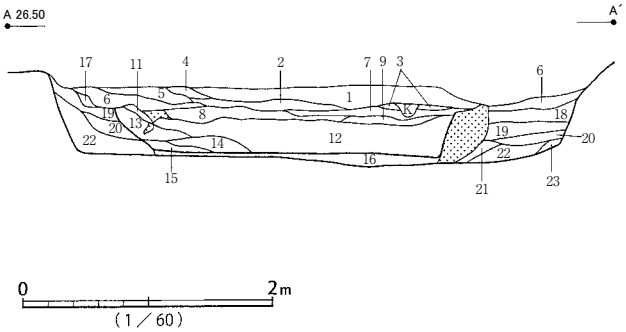






SM1014 第１主体部

1 暗褐色土 褐色土・ローム粒。締まりなし。
2 暗褐色土 褐色土・中型ロームＢを含む。
3 暗褐色土 褐色土・ローム粒。やや締まりなし。
4 褐色土 締まりなし。
5 褐色土 ローム粒・粘土粒含む。
6 暗褐色土 ローム粒含む。締まりなし。
7 黒褐色土 有機質土中にローム粒若干含む。
8 暗褐色土 ローム小～中Ｂを主体とし、締まりなし。
9 褐色土 ローム粒含む。締まりなし。
10 暗褐色土 ローム粒含む。
11 褐色土 ローム粒・粘土粒含む。
12 暗褐色土 有機質土中にローム粒混入。締まりなし。
13 暗褐色土 有機質土中にローム粒含む。
14 黒褐色土 ローム粒散る。
15 褐色土 締まりなくサラサラ。
16 褐色土 ローム粒を含む。楷底硬化した層。
17 黄褐色土 ロームＢ。
18 暗褐色土 ローム粒含む。
19 明褐色土 ローム粒・ロームＢ多量に含む。
20 暗褐色土 ローム粒含む。若干のロームＢ含む。
21 暗褐色土 ローム粒・粘土粒含む。
22 明褐色土 ローム粒主体・若干のロームＢ含む。
23 黄褐色土　ロームＢ主体。
24 暗褐色土 ローム粒・ロームＢやや多く含む。
25 黄褐色土 ロームＢ主体。
26 明褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。
27 褐色土 ローム粒・ロームＢ多く含む。
28 暗褐色土 ローム粒多量に含む。



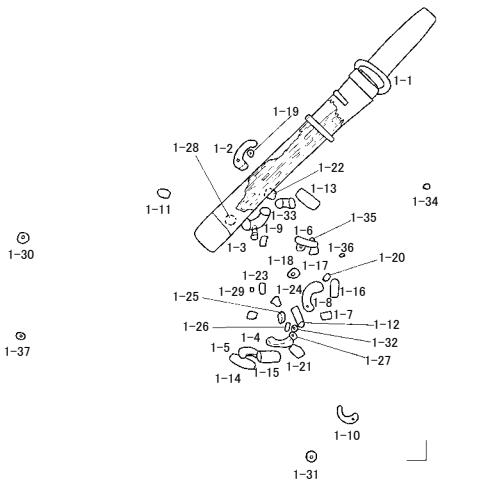


Fig.242　SM1014 遺構 (2)・遺物出土詳細 (1) 実測図

銅製品等が検出されている。これらの出土遺物の内、遺物の出土地点が明瞭なのは、1の土師器甕及び2の三足脚付灰釉短頸壺であり、他は全て周溝内一括扱いで取り上げられたものである。5の須恵器広口壺は口唇部の立ち上り形状から、7世紀中葉前後の製品と想定される。8は古墳時代前期のハケ甕片、9・10の甕や6の鉢類は5世紀末葉～6世紀前半にかけての製品と想定され、本墳とは時期的に整合しない。3の金銅製品・4の鉄器・7のガラス玉の類は、第2主体部の攪乱発生時に周溝内にまぎれた可能性もあるが、詳細は不明である。3の金銅製品の円環部には、渡金の痕跡が認められ、4は引き手状の鉄器である。1の土師器甕は周溝底から56㎝程浮いた状態で、2の三足脚付灰釉短頸壺は、第2主体部付近の東側周溝底面付近より粉々になった状態で検出されている。ドットで示した遺物は、全て三足脚付灰釉短頸壺の破片であるが、時期的に本墳と整合しない。器形から本来蓋付の単独火葬墓として、後世に埋葬されたものと想定される。

SM1015　セ28地区　（Fig.252～254、PL.106～107・185～186・200・211・213）

P・Q-13・14・15グリッドに位置する。下層のSS45・46と重複する古墳時代後期～終末期にかけての円墳である。旧遺構番号はセ28-022号遺構である。

墳丘と周溝

長径19.12m、短径18.36m、残存する盛土の高さは1.08mを測り、長軸方位はN-21.5°-Eを示す。周溝内側面積は274.6㎡を測り、諏訪台古墳群中の円墳では第2位の規模である。確認面での周溝幅は、1.88～2.92m、深さは0.56～0.88m、土層断面図上の最深部では1.12mを測り、南側周溝を除いた範囲が、広くて深い傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

埋葬施設は、墳丘内では南側に偏った地点で2基検出された。被葬者を東枕安置したと察知される第1主体部からは、銀象眼の鍔付小太刀をはじめとして、武器を主体とする遺物群が検出されている。また南枕安置と想定される第2主体部からは、管玉1・切子玉1・ガラス玉3点が出土するものの、武器類は全く検出されなかった。そのため、第1主体部被葬者は男性、第2主体部被葬者は女性の可能性が考えられる。

第1主体部

埋葬施設は、円台部南側に偏った位置で検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径4.52m短径1.96m深さ0.86m、下端で長径4.00m短径1.74mを測り、主軸方位はN-59°-Eを示す。墓壙の中央から、棺底周囲の一部を粘土で固定した船底型の木棺痕が検出された。木棺規模は上端で長さ3.62m幅1.20m、下端で長さ3.26m幅0.74m深さ0.54mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-61°-Eを示す。

木棺内からは1-1の鍔付大刀、銀象眼の鍔付小太刀の間に1-3～9の長頸鏃片が検出されている。大刀・小太刀の出土状態から、被葬者は東枕安置と想定され、1-2の銀象眼鍔付小太刀は、より上半身に近い位置に、1-1の鍔付大刀は腰辺り以下からの出土となる。

第2主体部

第2主体部は、西側に偏った位置から検出された木棺直葬の土壙墓である。木棺内の一部を攪乱によって削平されているが、墓壙規模は、上端で長径4.08m短径1.54m深さ最大0.52m、下端で長径4.02m短径1.46mを測り、主軸方位はN-16°-Eを示す。墓壙のほぼ中央から底面船底型の木棺痕が検出

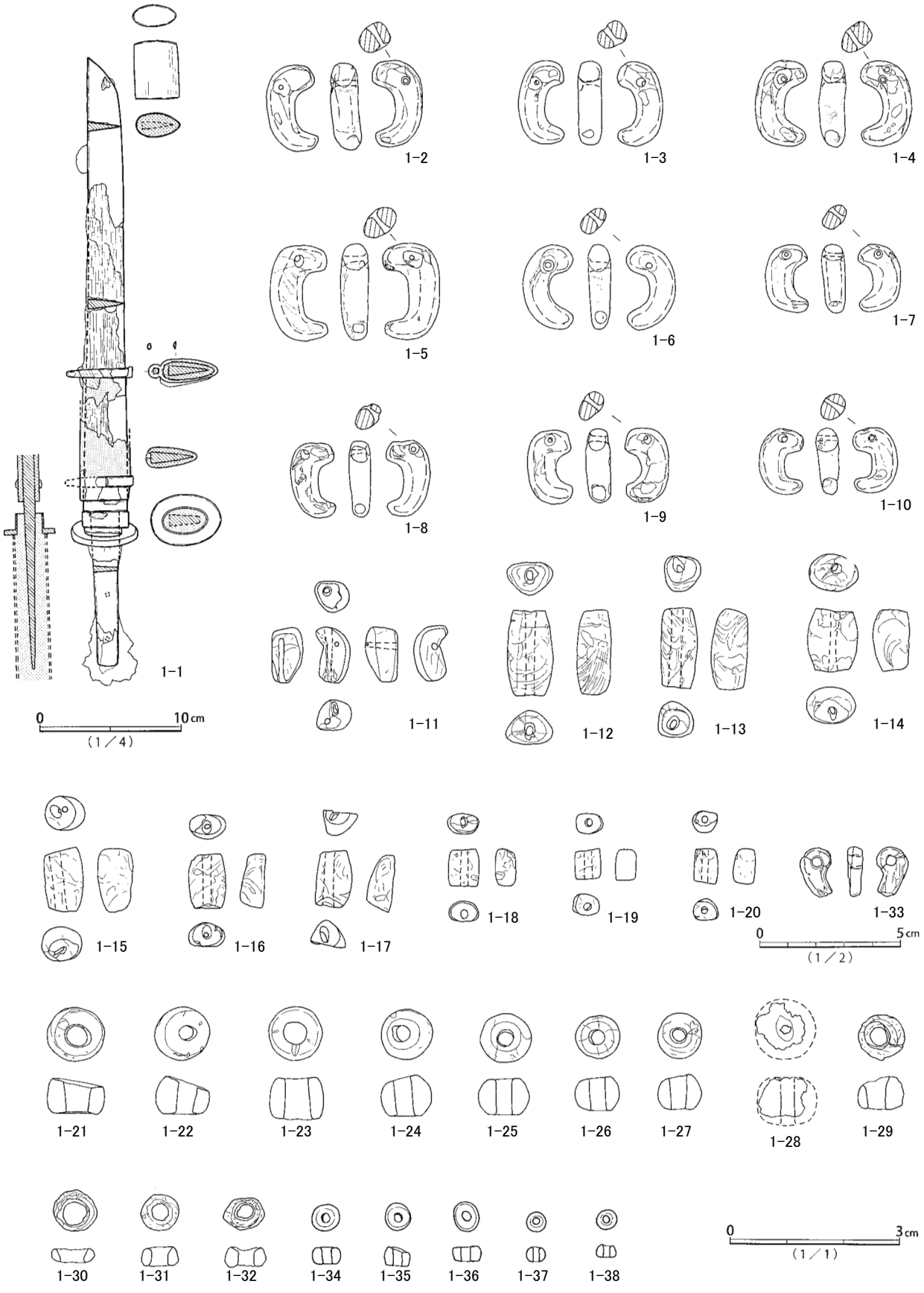
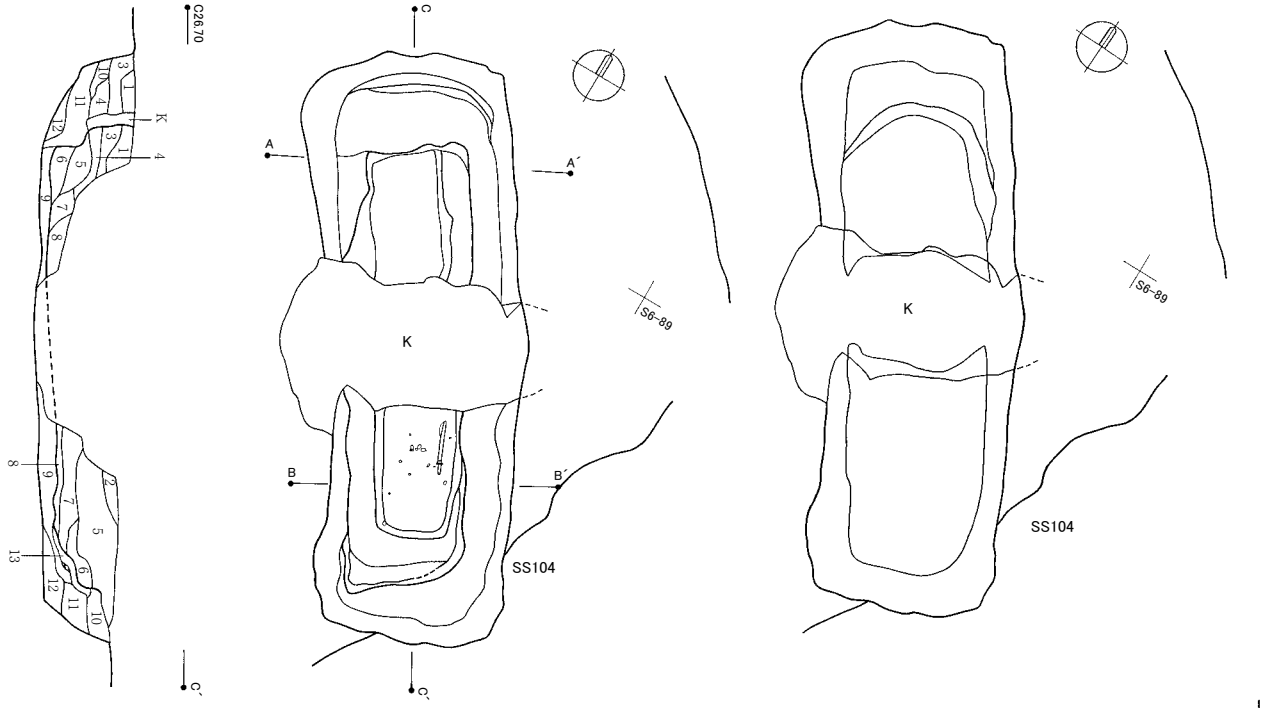
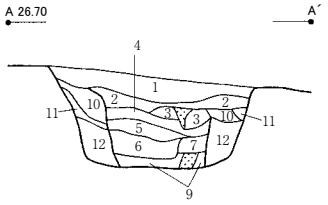
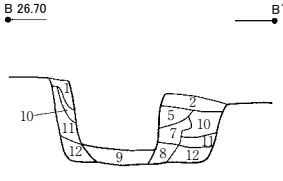


Fig.243　SM1014 遺物 (1) 実測図

第 2 主体部

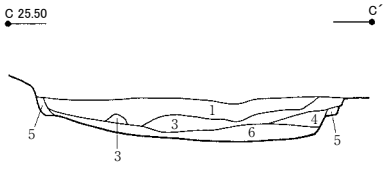


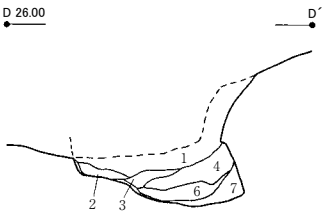




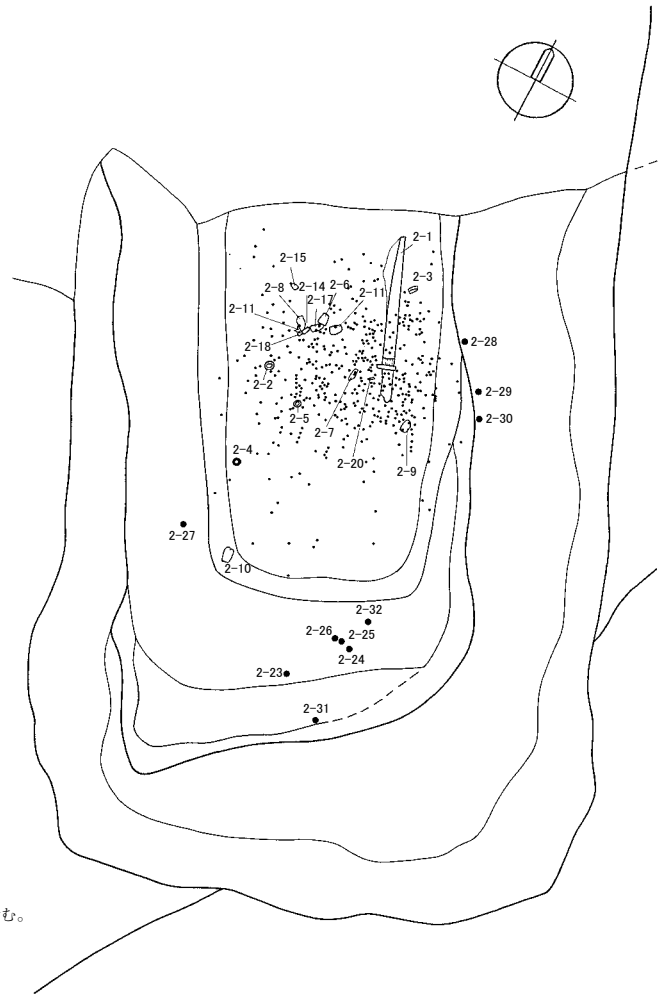
SM1014第2主体部
1 褐色土 ローム粒多量に含む。
2 褐色土 ローム粒混入。締まりなし。
3 褐色土 ローム粒層より多く含む。
4 褐色土 ローム粒・ロームB多く含む。
5 褐色土 ローム粒・ロームB含む。締まりなし。
6 暗褐色土 ローム粒・ロームB少量含む。
7 暗褐色土 ローム粒混入。
8 暗褐色土 ローム粒・ローム小～中B含む。
9 暗褐色土 ローム粒・ロームB混入。
10 褐色土 ローム粒・ロームB主体。
11 暗褐色土 ローム粒・ロームB若干混入。
12 黄褐色土 ローム粒・ロームB主体。明るい。
13 褐色土 ローム粒・ロームB含む。

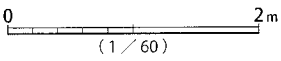
第 3 主体部





SM1014第3主体部
1 黒色土 ローム粒若干含む。
2 黒褐色土 ローム粒少量含む。
3 黄褐色土 天井崩落ロームB。
4 明褐色土 ローム粒多量に含む。
5 黄褐色土 壁崩落ロームB。
6 明褐色土 ローム粒・ロームB含む。
7 黄褐色土 天井崩落ロームB。





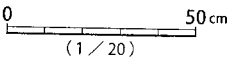


Fig.244　SM1014 遺構 (3)・遺物出土詳細 (2) 実測図

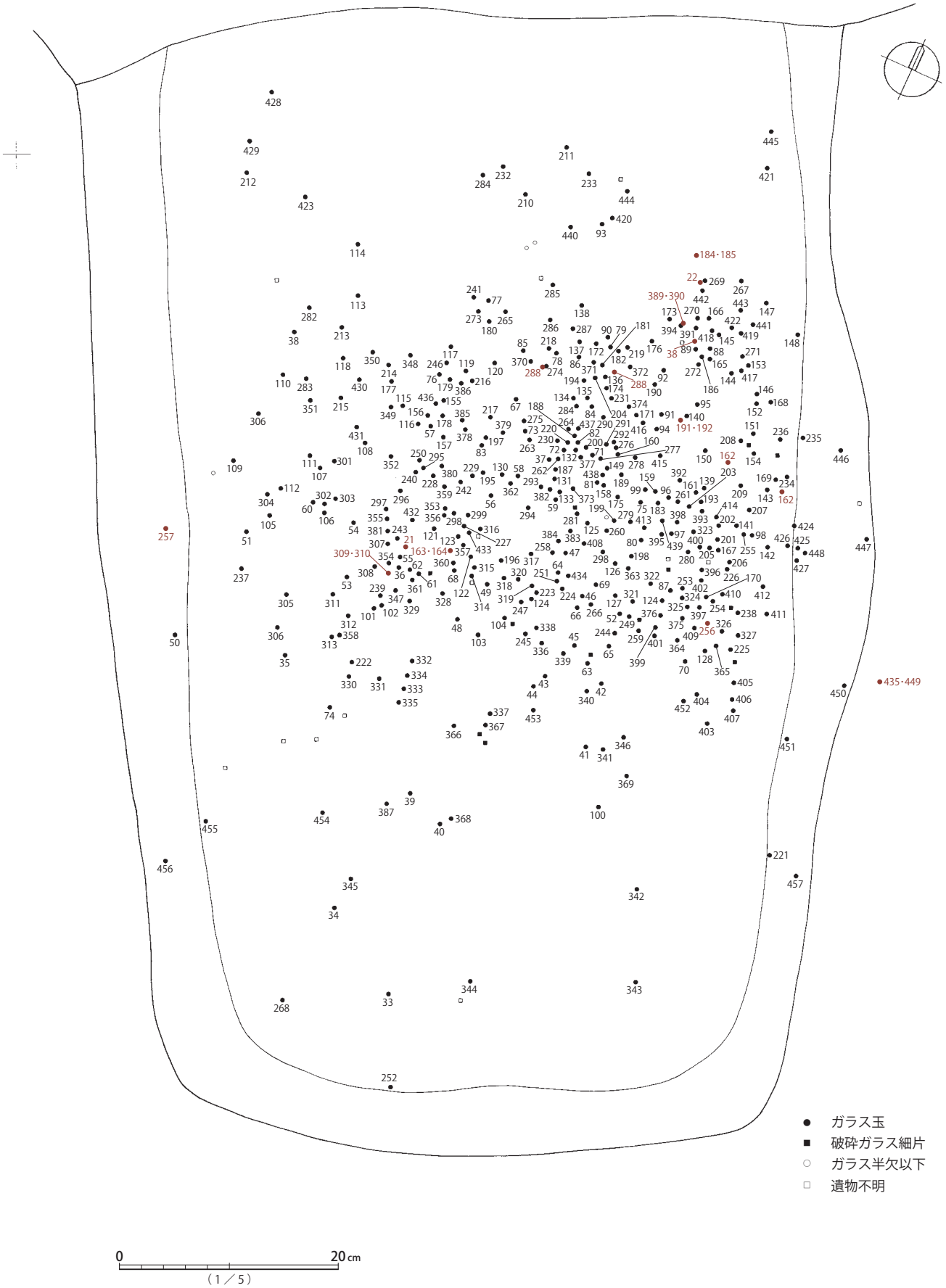


Fig.245　SM1014 遺物出土詳細 (3) 実測図

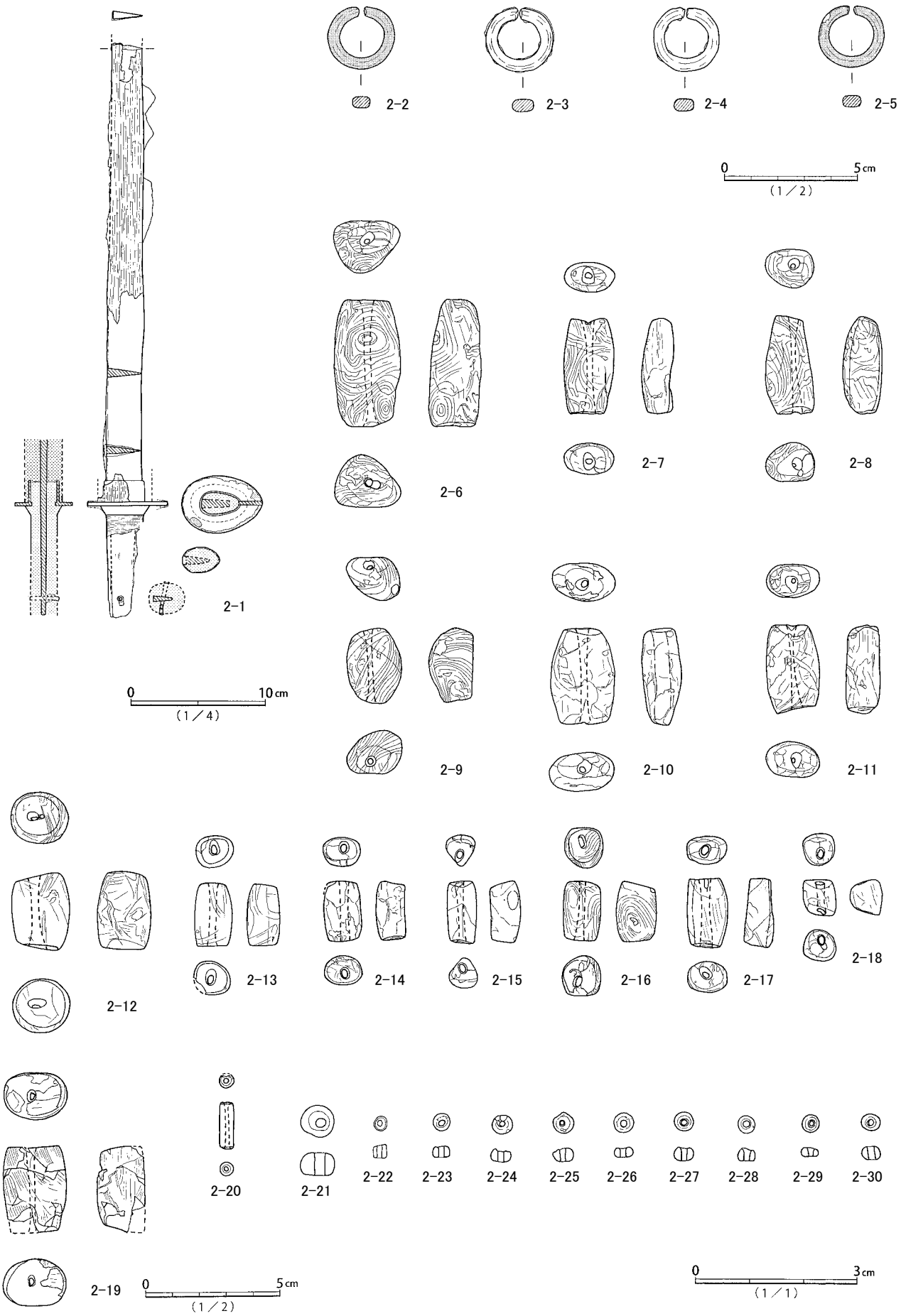


Fig.246　SM1014 遺物 (2) 実測図

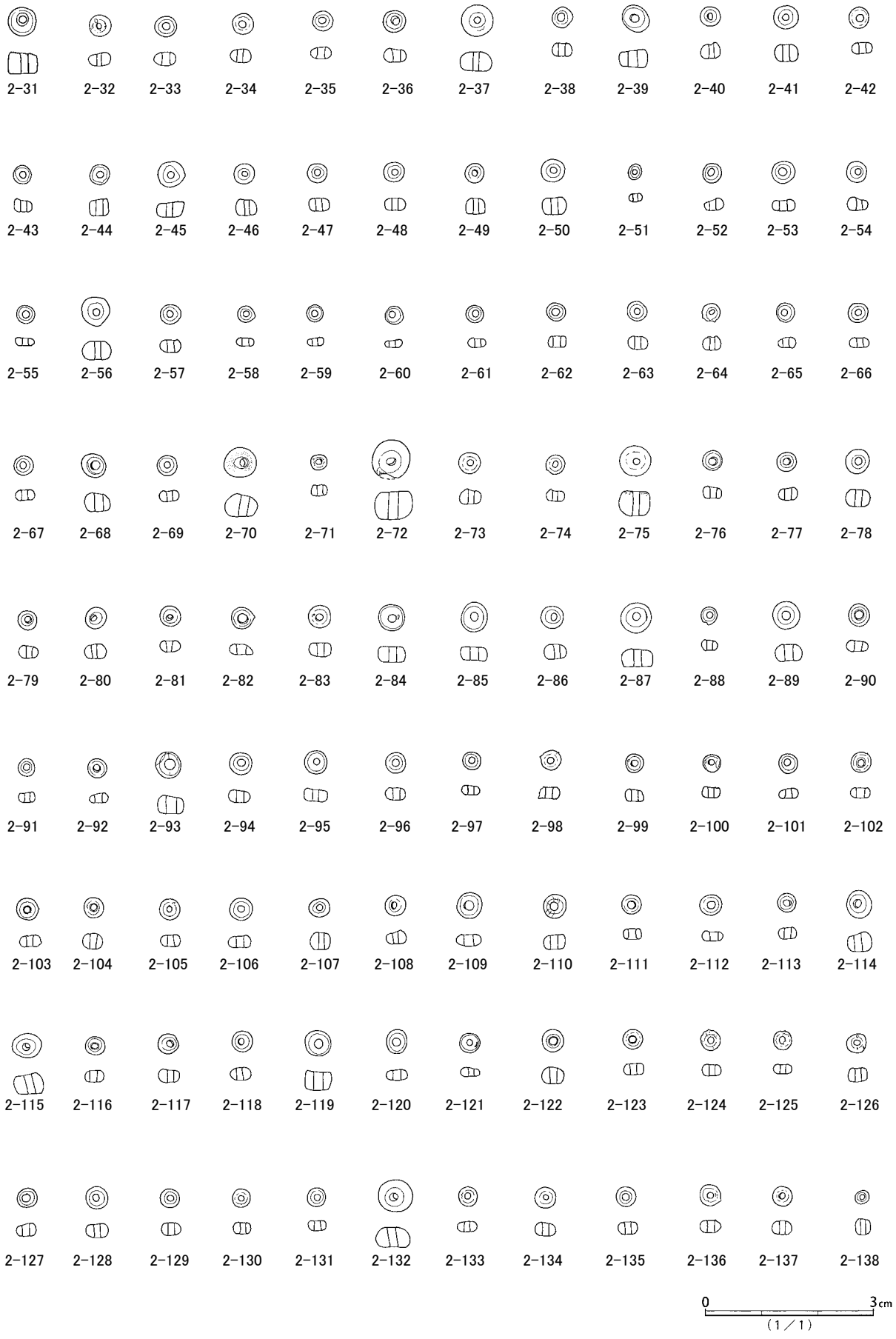


Fig.247　SM1014 遺物 (3) 実測図

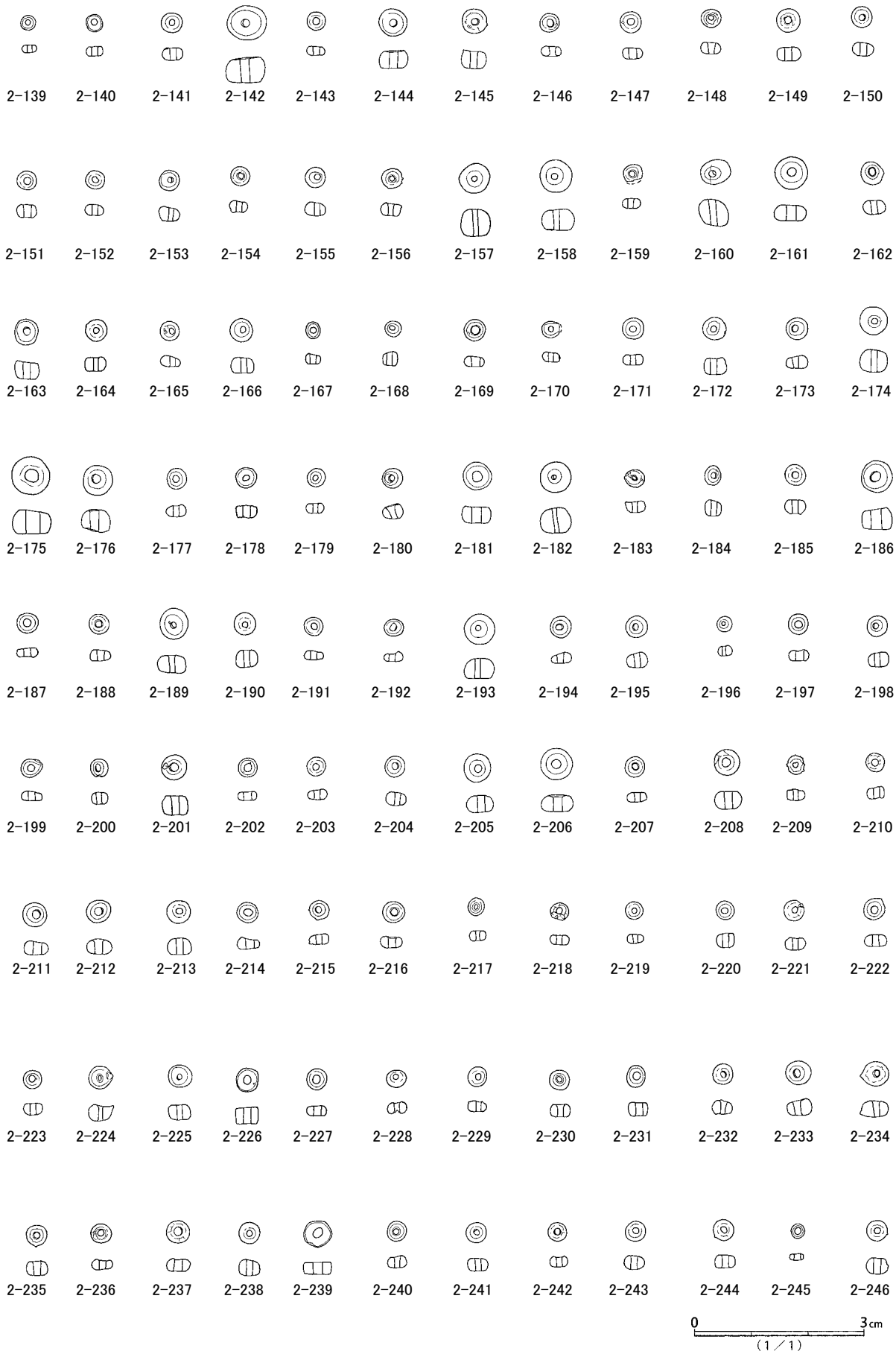


Fig.248　SM1014 遺物 (4) 実測図

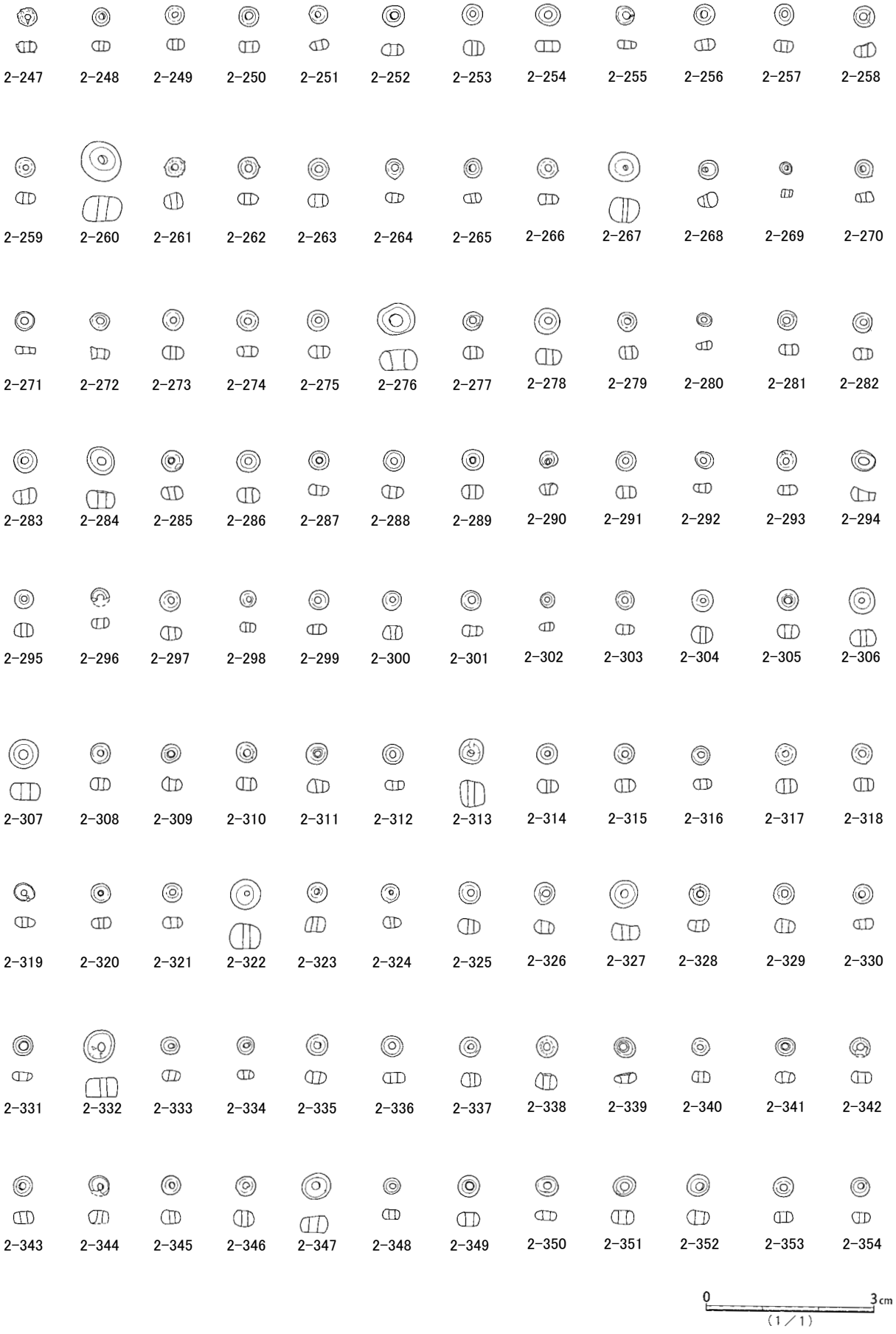


Fig.249　SM1014 遺物 (5) 実測図

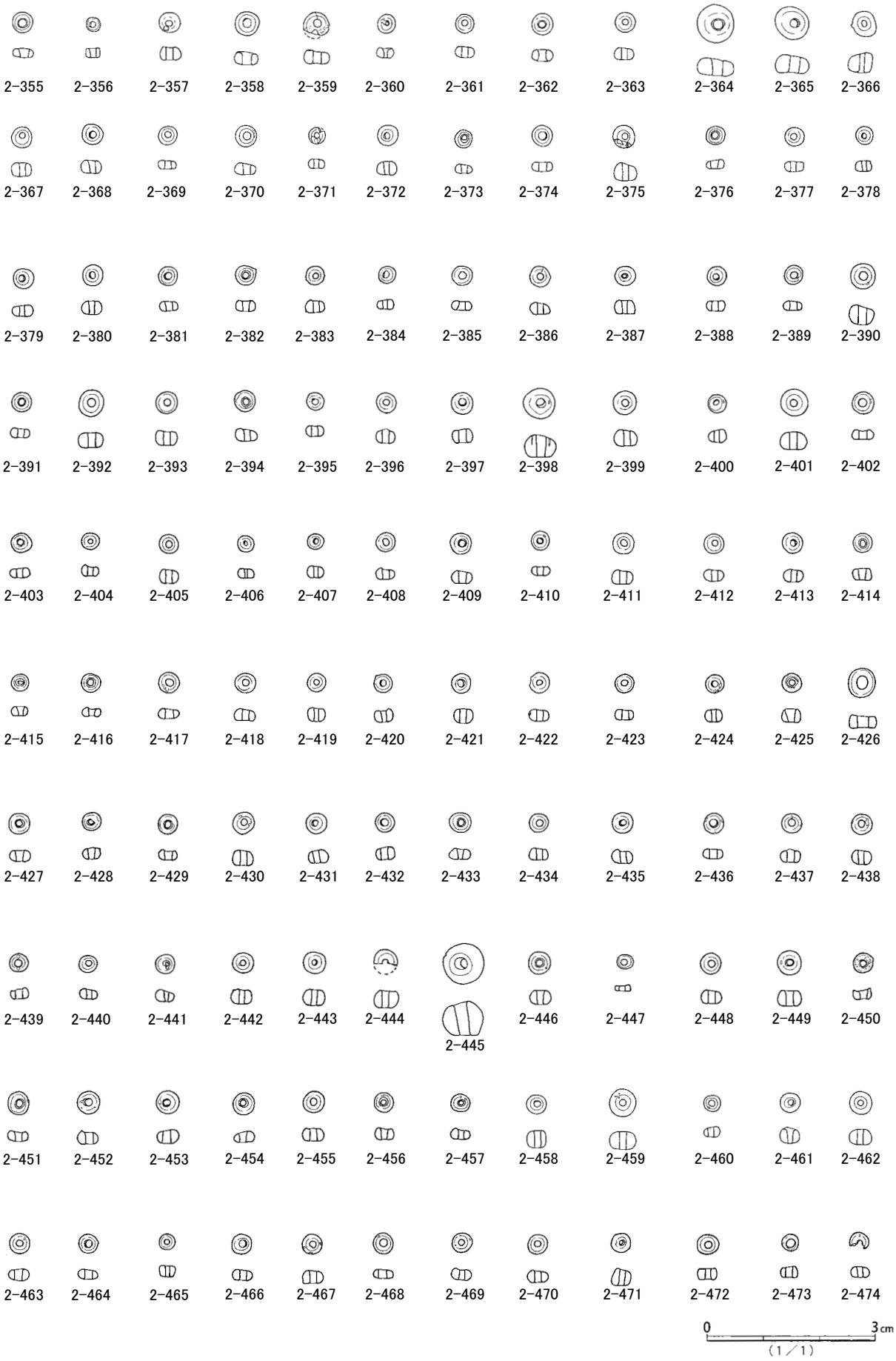


Fig.250　SM1014 遺物 (6) 実測図

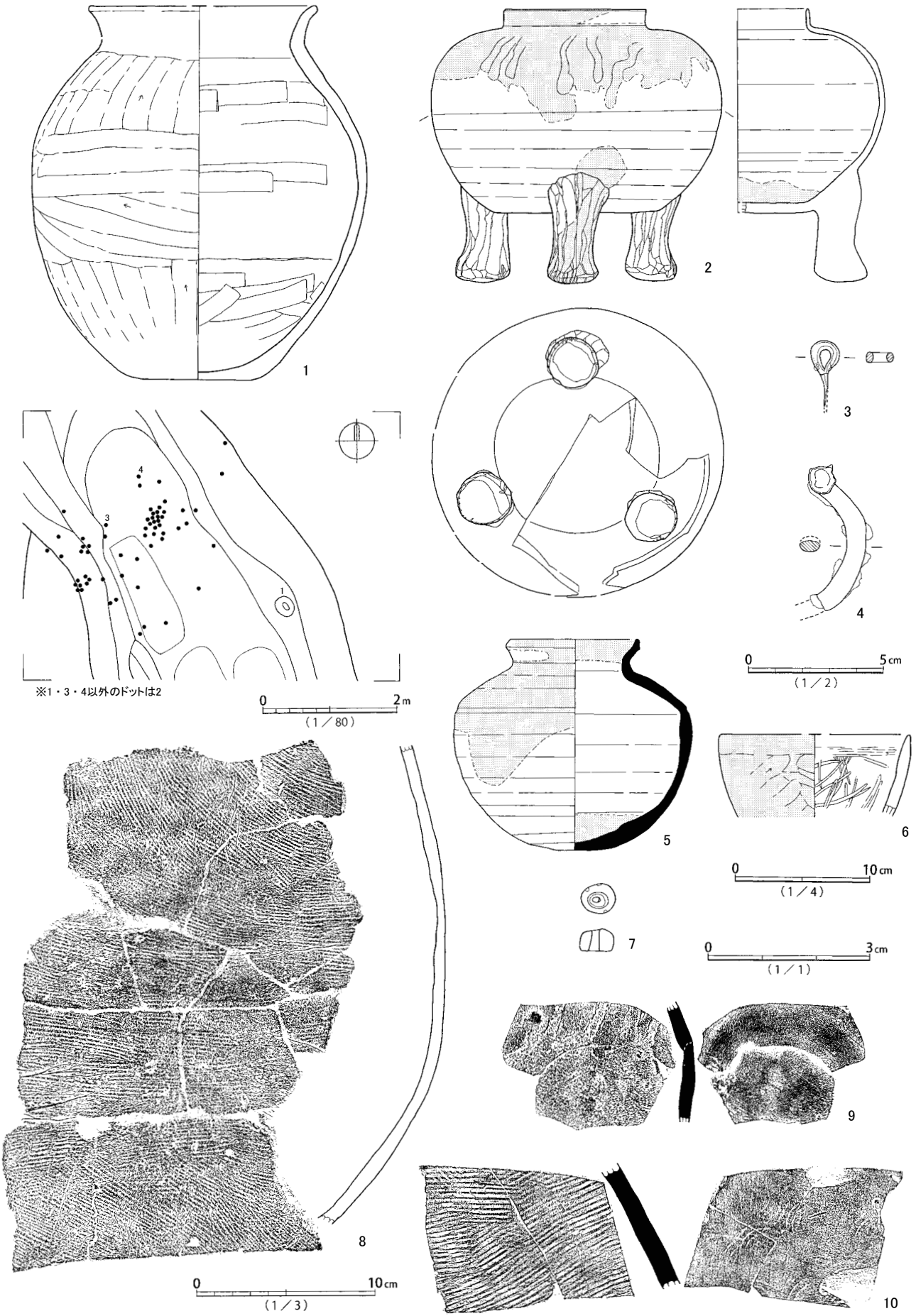


Fig.251　SM1014 遺物 (7)・遺物出土詳細 (4) 実測図

された。木棺規模は上端で長さ2.78m幅0.78m、下端で長さ2.44m幅0.58m深さ0.38mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-20°-Eを示す。

木棺内からは2-1の刀子、2-2の碧玉製管玉、2-3の石英製切子玉の他、2-4～6のガラス玉が検出された。現場図面には遺物出土地点に1・2の番号が付されているが、注記やラベルがないため、どの遺物がどちらの位置から出土したのかの判定ができない。何れにせよこれらの遺物の出土位置から、被葬者は、南枕安置で埋葬されたと想定される。

出土遺物

第1主体部棺内からは、1-1の鍔付大刀、1-2の銀象眼鍔付小太刀の他7点の鉄鏃片が検出されている。1-1は全長81.5cm程の大刀である。鍔・鏁を有しており、鍔の茎側には柄の一部が残存する。刃部と峯部の両側から茎部に向かって幅が減じることから、関形状は両関と想定される。茎長は10.3cmを測り、2孔の目釘孔のそれぞれ反対側に目釘の1/2ほどが残存する。

1-2は全長51.8cmを測る小太刀であり、銀象眼が施された鍔を持つ。刃部と峯部の両側から茎部に向かって幅が減じることから、関形状は両関と想定される。鍔の両側に円から楕円形の銀象眼文様が施されており、茎側が13点、刃部側に10点の銀象眼が認められる。茎部には目釘孔１孔が貫通し、片側に目釘が残存する。

1-3～9はおそらく片刃長頸鏃片である。刃部が残っている製品は片刃1点だけで、頸部から茎部の残存するものは全部で5点である。関形状は何れも棘関であることから、総数5点の鉄族が埋葬されていたと想定される。この内1-3・7・9の茎には紐巻きの痕跡が認められ、1-5の矢柄部には桜樺材が残存している。

第2主体部からは総数5点の玉類の他、刀子片が検出されている。2-1の刀子片は切っ先と茎尻部を欠いた製品であり、残存長8.4cmを測る。刃部から茎部に向かって幅を減じ、峯側が撫関、刃部側が片関と想定される。

本墳周溝内からは、外面平行敲き、内面青海波残存の須恵器甕片1・2の2点が検出されたのみで、具体的な時期は把握できない。ただし、鉄鏃群が全て棘関の長頸鏃で占められることから、本墳の築造年代は7世紀代と想定される。

SM1016　099地区　（Fig.255～256、PL.169・185・200）

N・O-9・10グリッドに位置する。下層のSS25・26・29・30と重複する古墳時代後期～終末期にかけての円墳である。旧遺構番号は099-4070号遺構である。

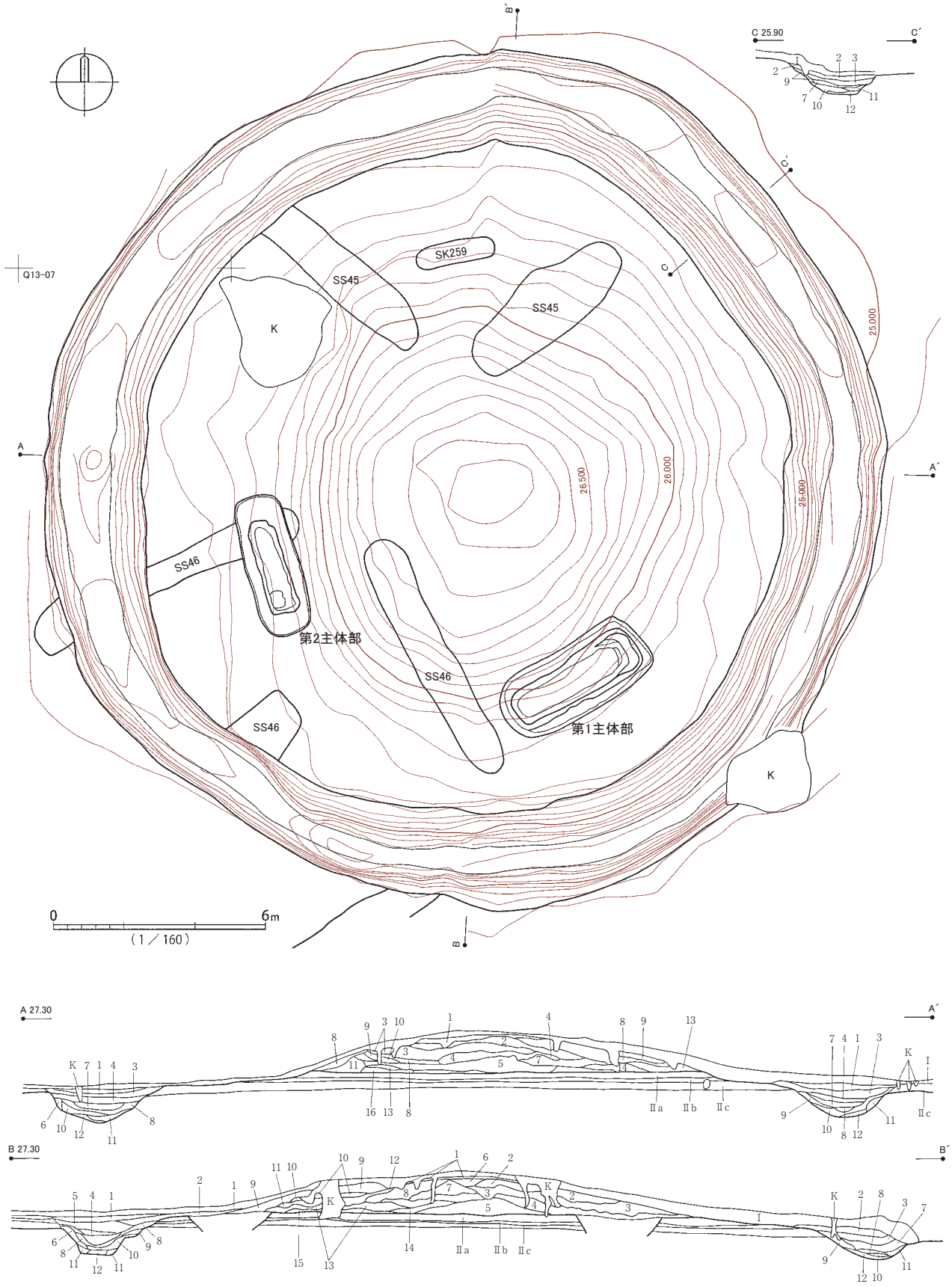
墳丘と周溝

長径19.08m、短径18.36m、現状では盛土は存在せず、長軸方位はN-40.5°-Eを示す。周溝内側面積は263.3㎡を測り、諏訪台古墳群中の円墳では第3位の規模である。確認面での周溝幅は、0.48～3.48m、深さは0.32～0.36mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。円台部内や周溝のいたる所に攪乱が存在しており、遺存状態は極めて不良である。

埋葬施設

円台部中央に1基検出されているが、本来木棺が存在したと想定される範囲全てが、攪乱によって削平されており、遺存状態は極めて不良である。

第1主体部



SM1015 墳丘
1 褐色土 ローム粒多く含む。
2 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ多く含む。
3 褐色土 ロームＢ主体。
4 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
5 褐色土 ローム粒・ロームＢ多量に含む。
6 褐色土 ロームＢ多量に含む。
7 暗褐色土 有機質土中にローム粒・ロームＢ含む。
8 明褐色土 ローム粒・ロームＢ多量に含む。
9 黒褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
10 暗褐色土 ロームＢやや多く含む。
11 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ多く含む。
12 黒褐色土 ローム粒・ロームＢ若干含む。
13 褐色土 ロームＢ多量に含む。
14 褐色土 ローム粒・ロームＢ多量に含む。
15 黄褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。硬く締まる。
16 暗褐色土 ローム粒・ロームＢやや多く含む。

SM1015 周溝
1 黒褐色土 有機質土。
2 暗褐色土 ローム粒含む。墳丘流出土。
3 極暗褐色土 有機質土中にローム粒若干含む。
4 黒褐色土 褐色土を斑点状に含む。
5 暗褐色土 ローム粒含む。
6 暗褐色土 壁崩壊ロームを多量に含む。
7 黒色土 有機質土主体。少量のローム粒混入。
8 黒褐色土 ローム粒・ロームＢまばらに含む。
9 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ混じる。
10 極暗褐色土 有機質土中に若干のローム粒混じる。
11 黄褐色土 壁崩壊ローム主体。
12 黄褐色土 ローム粒・ロームＢ多量に含む。

Fig.252　SM1015 遺構 (1) 実測図

第１主体部

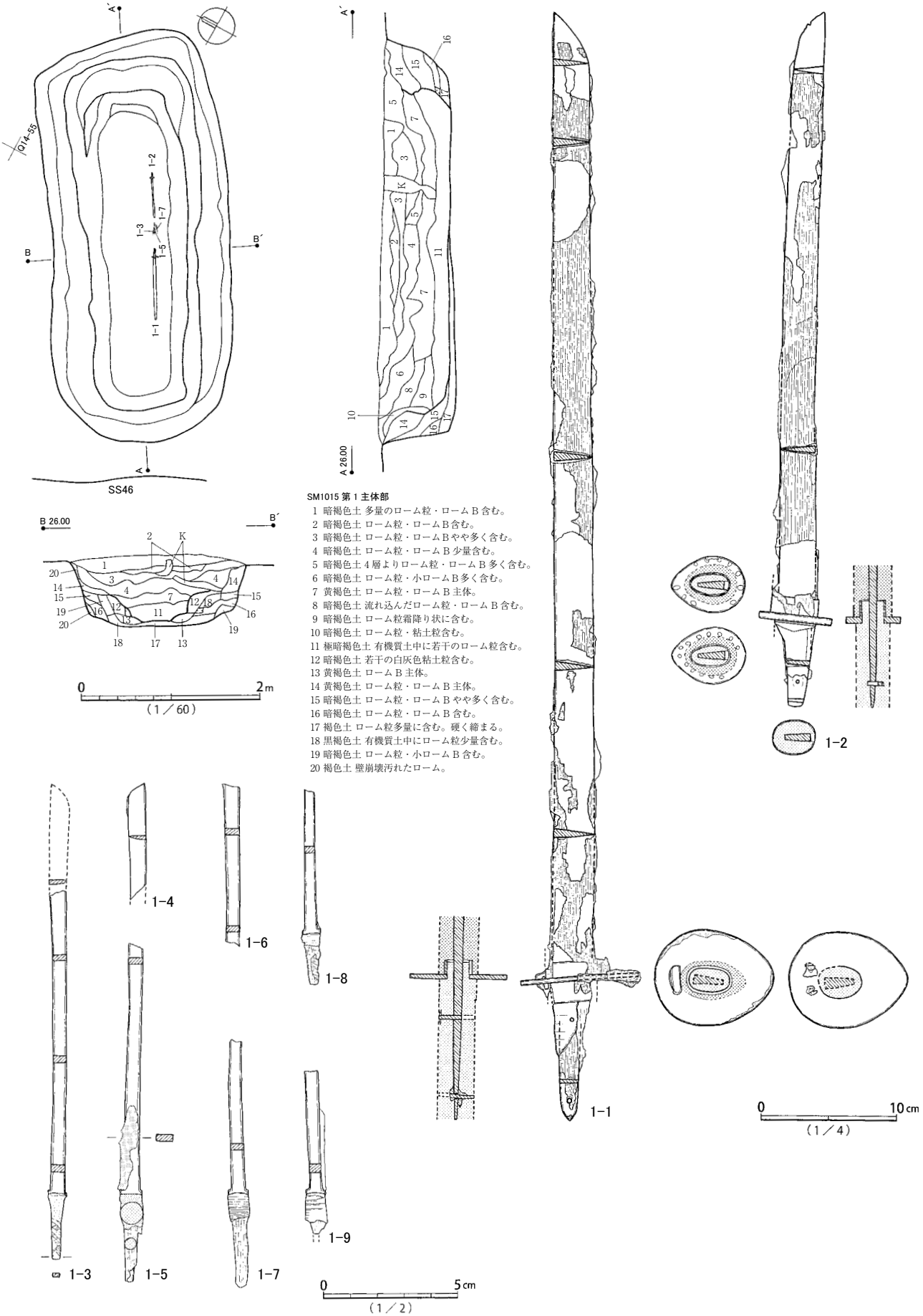


Fig.253　SM1015 遺構 (2)・遺物 (1) 実測図

第２主体部

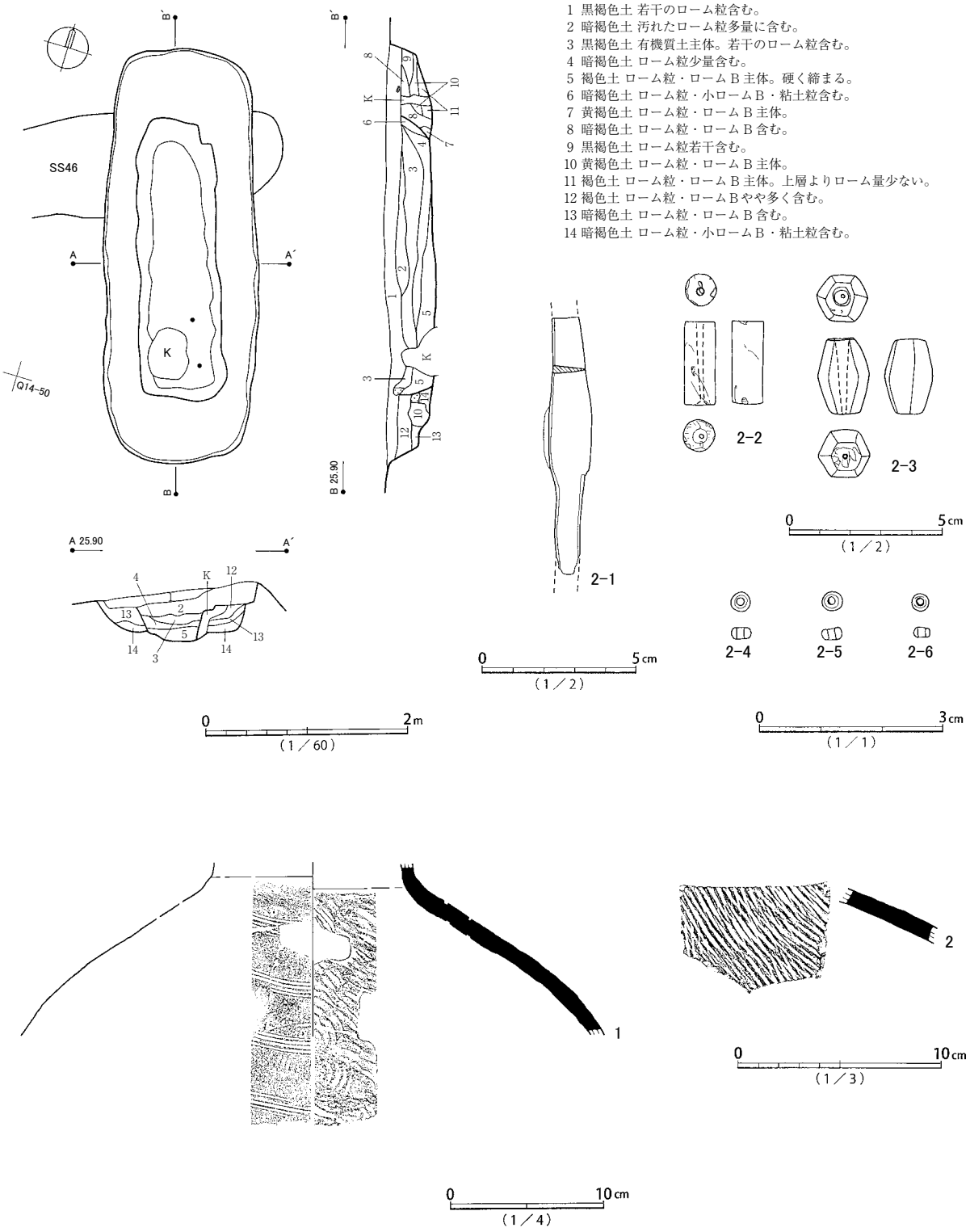


Fig.254　SM1015 遺構 (3)・遺物 (2) 実測図

埋葬施設は、円台部中央から検出された木棺直葬の土壙墓と想定される。墓壙規模は、上端で長径3.66m短径1.48m深さ0.26m、下端で長径3.32m短径1.32mを測り、残存長径方位はN-78°-Wを示す。本来木棺痕が存在したと想定される範囲は、攪乱によって大幅に削平されており、詳細については不明である。

墓壙内からは何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、土師器・須恵器・鉄器・金銅製耳環等が検出された。1は須恵器甕・2は須恵器高坏である。2の高坏は器形から湖西産の製品と想定され、時期的には7世紀末葉の年代観が想定される。須恵器甕片は外面平行敲き、内面青海波残存が主体であり、計6点を図示した。詳細不明ながら、青海波を磨り消さない製品は、比較的新しい段階と捉えてよかろう。11～13は大刀の刀身部片であり地金の依存は比較的良好である。刃部幅・厚み等よく似ており、本来1振りの大刀であったと想定される。14・15は長頸鏃頸部片であるが、鏃身部や関形状が不明である。16は断面楕円形の鉄輪状の製品と想定されるが、用途はよくわからない。17は金銅製耳環である。これらの遺物の内、特に11以下の番号を付した遺物は、性格的に通常埋葬施設内に供献される遺物である。したがって、本墳主体部に本来伴っていた可能性が極めて高い遺物と言えよう。

SM1017　064地区　（Fig.257～259、PL.107・119・169～170・185～187・200・215）

F・G-4・5グリッドに位置する。古墳時代後期末葉から終末期初頭の円墳である。旧遺構番号は064-151号遺構である。

墳丘と周溝

長径18.92m、短径18.60m、残存する盛土の高さは0.88mを測り、主軸方位はN-35.5°-Wを示す。残存周溝内側面積は237.8㎡であるが、復元される周溝内側面積は265.0㎡を測り、諏訪台古墳群中の円墳では第4位の規模である。確認面での周溝幅は、2.12～4.18m、深さは0.76～0.92m、土層断面図上の最深部では1.16mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。墳丘の中央より西側は伐根、南側は、大規模な台地整形を受け、遺存状況は不良である。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、土師器・須恵器が検出されている。1・2は須恵器坏底部、3・4は土師器坏、5は手捏土器、6は土師器高坏脚部、7はロクロ成形土師器、8は中世陶器である。9～39は須恵器大甕片であり、外面平行敲きもしくは格子敲き風、内面青海波半磨り消しの技法で器面を整える比較的古段階の須恵器片である。40・41は常滑大甕片、42は刀身幅と厚さから小太刀の刀身部片、43は刀身幅と厚さから刀子の刃部片と想定される。42・43は、性格的に通常埋葬施設内に供献されるべき遺物である。したがって、本墳主体部に本来伴っていた可能性が極めて高い遺物と言えよう。

なお、本墳盛土中には周溝構築によって削平された下層竪穴住居跡に伴う和泉式期の高坏が含まれており、本墳周溝から出土した古段階の須恵器大甕片は、下層に位置する竪穴住居に伴う可能性が極めて高いと判断される。そうすると、1～4の番号を付した土師器・須恵器が本墳の築造時期を示すものと想定され、その時期は、TK-209型式古段階併行期、実年代で6世紀末用から７世紀初頭の595年

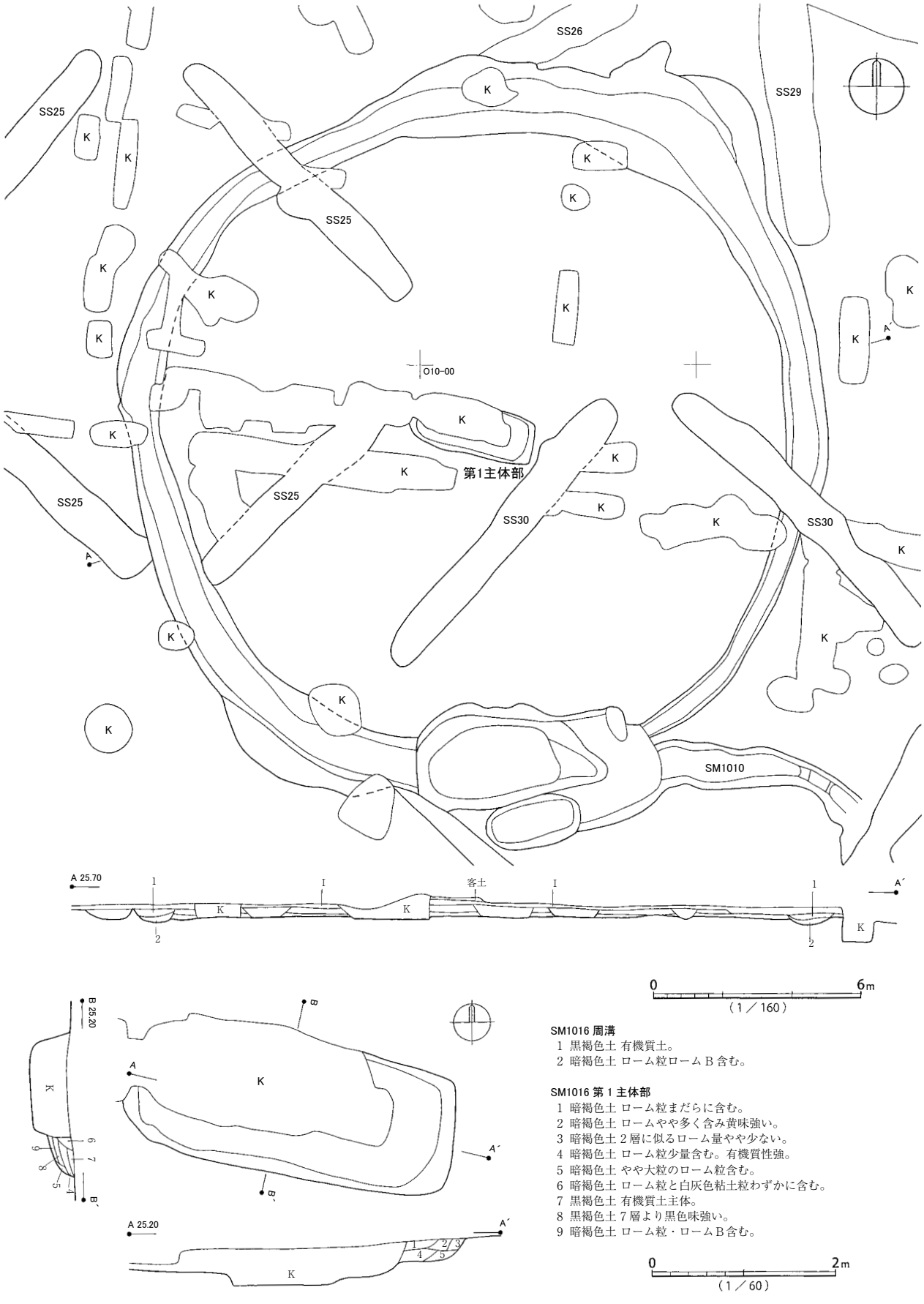


Fig.255　SM1016 遺構実測図

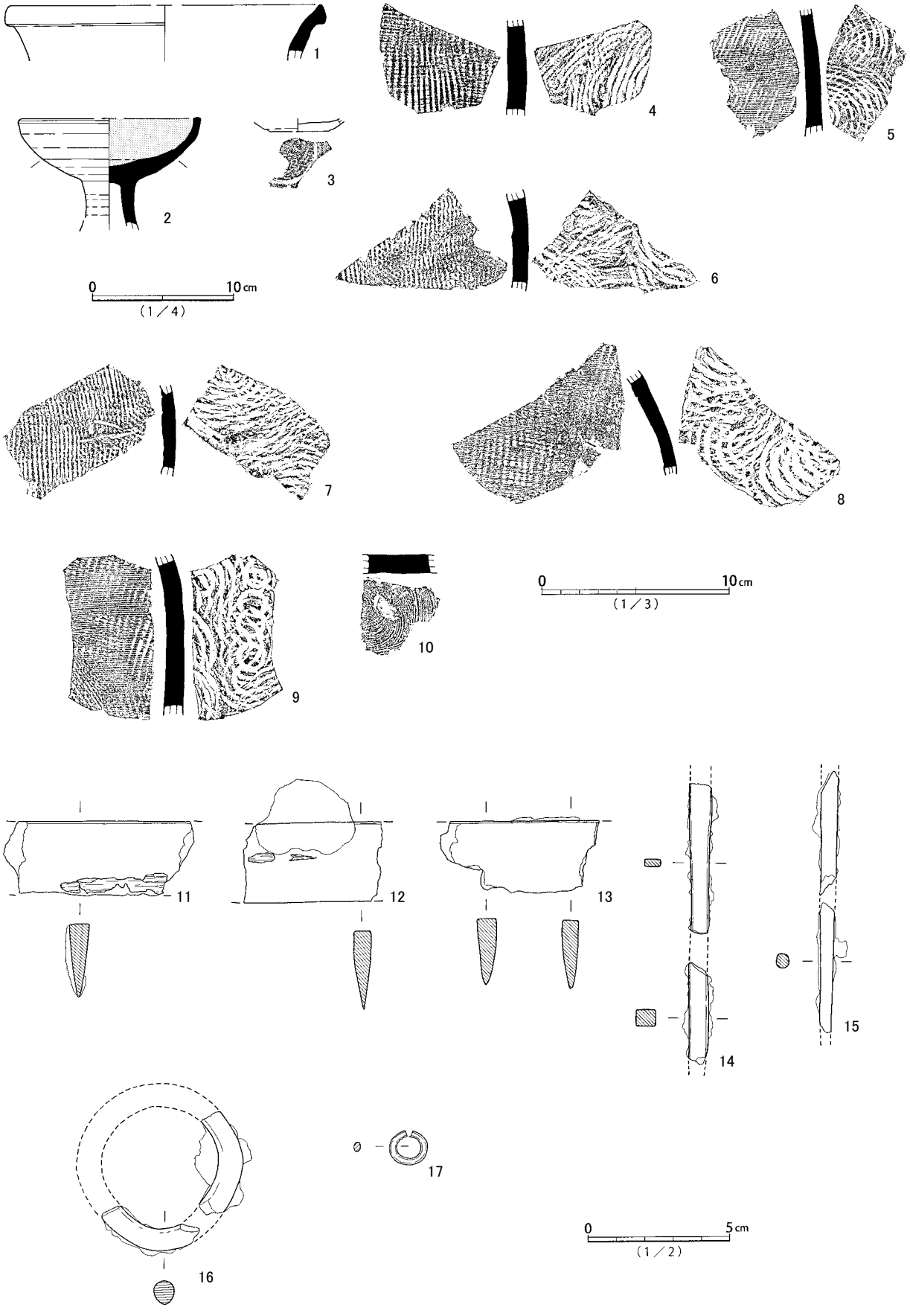


Fig.256　SM1016 遺物実測図

～605年間に位置づけられよう。

SM1018　099・セ28地区　（Fig.260～262、PL.186・201）

O・P-13・14グリッドに位置する。下層のSS99と重複する古墳時代終末期の円墳である。円台部内には多数の攪乱が存在しており、遺存状況は不良である。旧遺構番号は099-4066・セ28-147号遺構である。

墳丘と周溝

推定長径（18.96）m、推定短径（18.12）m、現状では残存する盛土が存在せず、主軸方位はN-46°-Wを示す。残存周溝内側面積は212.7㎡であるが、セ28調査時に周溝C-C´間の断面図を作成しており、その位置が動かないことから復元される周溝内側面積は（258.1）㎡を測る。このため、諏訪台古墳群中の円墳では第5位の規模となる。確認面での周溝幅は、1.56～2.52m、深さは0.48～0.68m、土層断面図上の最深部では0.84mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

円台部の南側に偏った地点で1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、南側に偏った位置から検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径3.50m短径1.36m深さ0.31m、下端で長径3.20m短径1.04mを測り、主軸方位はN-45°-Wを示す。墓壙の中央から、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は上端で長さ2.90m幅0.72m、下端で長さ2.52m幅0.60m深さ0.20mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-50°-Eを示す。

木棺内の頭部付近と推定される位置から1-1・2の金銅製耳環が検出されているが、縦方向に並んでいるため、2次的に遺物が動いた可能性がある。1-3の小太刀の南側には、1-4以下の鉄鏃群が纏まった状態で検出されている。現場図面に記録された点数以上の鉄鏃数の検出であり、おそらく上位の鉄鏃を取り上げた後に、その下方から出土した鉄鏃が含まれているのであろう。

出土遺物

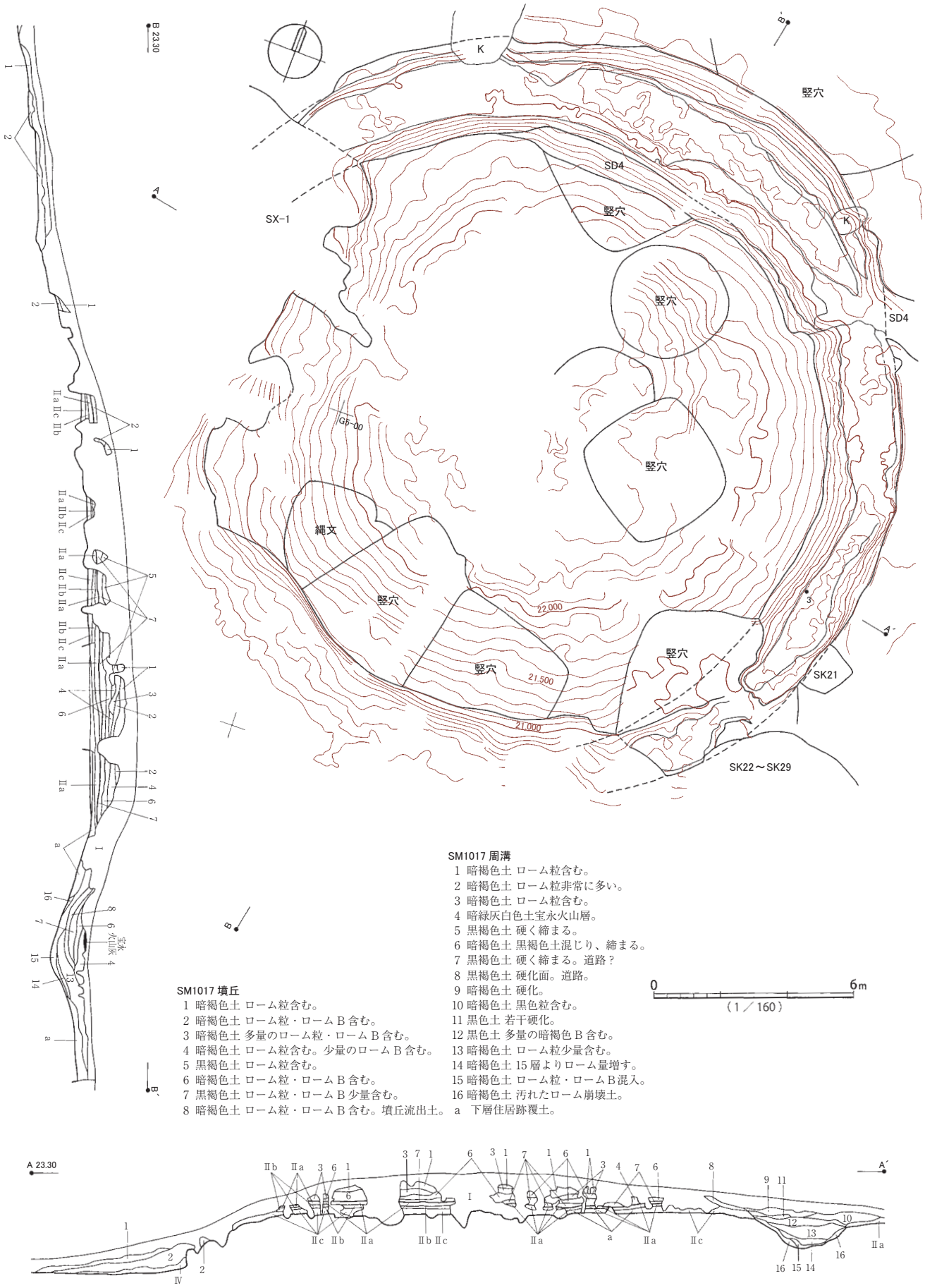
1-1・2は金銅製耳環、1-3は全長28.0㎝の小太刀、ないしは長めの刀子である。関は斜関で、刃部側に切り込まれている。茎尻を斜めに収めて刃部に対して茎の長い製品であるが、茎部には目釘孔が見当たらない。1-4～10はC形式-第Ⅰ・Ⅱ形式の第1・2型式に属する類五角形状を呈する鉄鏃群である。棘関を有するものとそうではないもの、鏃身部底辺が浅い逆刺状を呈するものが混在している。1-11～18は13を除いて片刃長頸鏃群であり、鏃身関部が退化した逆刺のない製品であり、C形式-第Ⅲ形式-第3型式が主体を占める。1-13は、A形式-第Ⅳ形式-第2型式1類の鏃身部両丸造りに区分される。これら鉄鏃群の組み合わせから、本墳の構築年代はTK-217型式併行期、実年代で630年代を下るものと想定される。1-19は縁金具であろうか。

本墳周溝内からは、1～4の須恵器片が検出されているが、何れも覆土一括で取り上げられたものであり、具体的な形状に復元される製品は存在しない。

SM1019　099地区　（Fig.263～266、PL.170・186～187・201・215）

O・P-10・11グリッドに位置する。下層に位置するSS34・35・37と重複する古墳時代終末期の円墳である。旧遺構番号は099-4061号遺構である。

墳丘と周溝



SM1017 墳丘

1 暗褐色土 ローム粒含む。
2 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
3 暗褐色土 多量のローム粒・ローム B 含む。
4 暗褐色土 ローム粒含む。少量のローム B 含む。
5 黒褐色土 ローム粒含む。
6 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
7 黒褐色土 ローム粒・ローム B 少量含む。
8 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。墳丘流出土。

SM1017 周溝

1 暗褐色土 ローム粒含む。
2 暗褐色土 ローム粒非常に多い。
3 暗褐色土 ローム粒含む。
4 暗緑灰白色土 宝永火山層。
5 黒褐色土 硬く締まる。
6 暗褐色土 黒褐色土混じり、締まる。
7 黒褐色土 硬く締まる。道路？
8 黒褐色土 硬化面。道路。
9 暗褐色土 硬化。
10 暗褐色土 黒色粒含む。
11 黒色土 若干硬化。
12 黒色土 多量の暗褐色 B 含む。
13 暗褐色土 ローム粒少量含む。
14 暗褐色土 15 層よりローム量増す。
15 暗褐色土 ローム粒・ローム B 混入。
16 暗褐色土 汚れたローム崩壊土。
a 下層住居跡覆土。

Fig.257　SM1017 遺構実測図

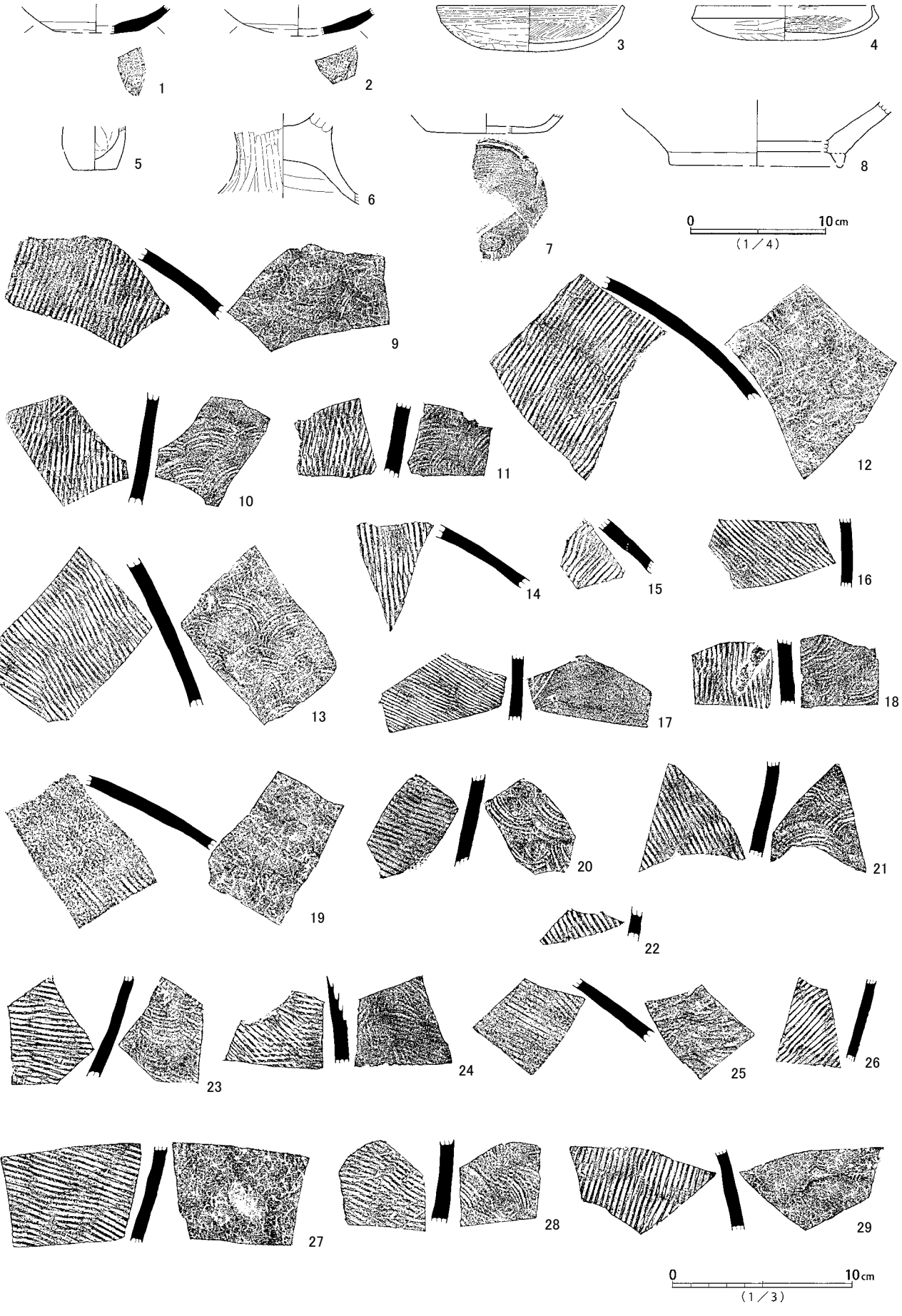


Fig.258　SM1017 遺物 (1) 実測図

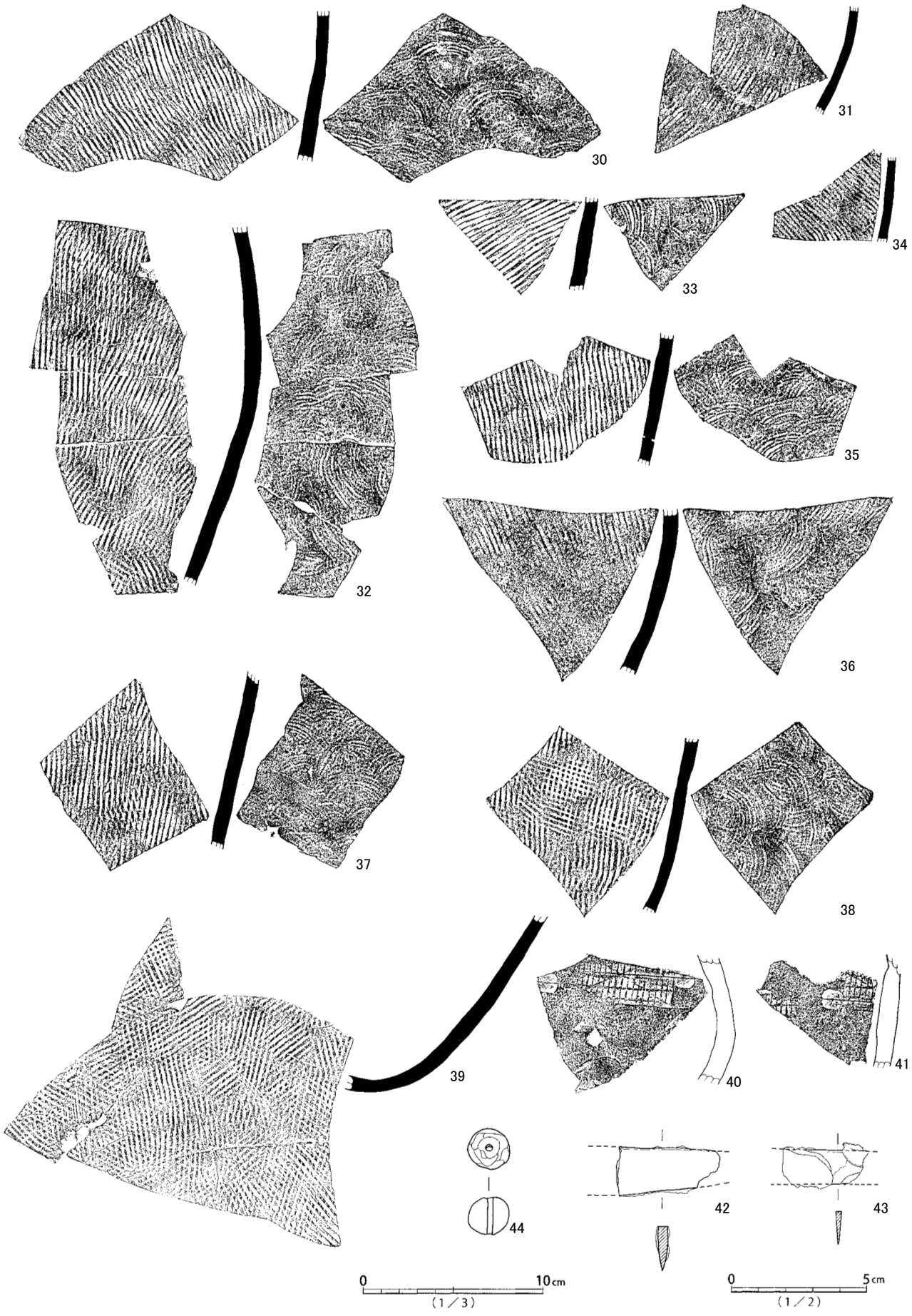


Fig.259　SM1017 遺物 (2) 実測図

長径17.80m、短径17.10m、残存する盛土の高さは0.15mを測り、主軸方位はN-5°-Eを示す。周溝内側面積は238.2㎡を測り、諏訪台古墳群中の円墳では第6位の規模である。確認面での周溝幅は、1.80～3.70m、深さは0.70～1.00m、土層断面図上の最深部では1.20mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

円台部の東側に偏った地点に1基、西側周溝内に側壁抉り込み土壙として1基、合計2基が検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、円台部の東側から検出された木棺直葬の土壙墓である。イモ穴による攪乱で、東側の一部を欠くが、墓壙規模は、上端で長径3.80m短径1.42m深さ0.40m、下端で長径3.54m短径1.16mを測り、主軸方位はN-6.5°-Wを示す。墓壙のほぼ中央から、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は上端で長さ2.94m幅0.62m、下端で長さ2.74m幅0.54m深さ0.22mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-6°-Eを示す。

木棺内の西側には1-1の大刀が1-3～12の鉄鏃群を伴って、東側からは鳩目金具付の1-2の圭頭大刀が検出されている。1-1・2の大刀切っ先の方向から判断して、被葬者は北枕安置で埋葬されたと想定される。

第2主体部

西側周溝内の外壁側に、側壁抉り込み土壙として検出されている。墓壙規模は、上端で長径2.54m短径1.30m深さ0.50m、下端で長径2.24m短径0.74mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-0.5°-Eを示す。壁側への抉り込みは、現状で0.14mを測る。

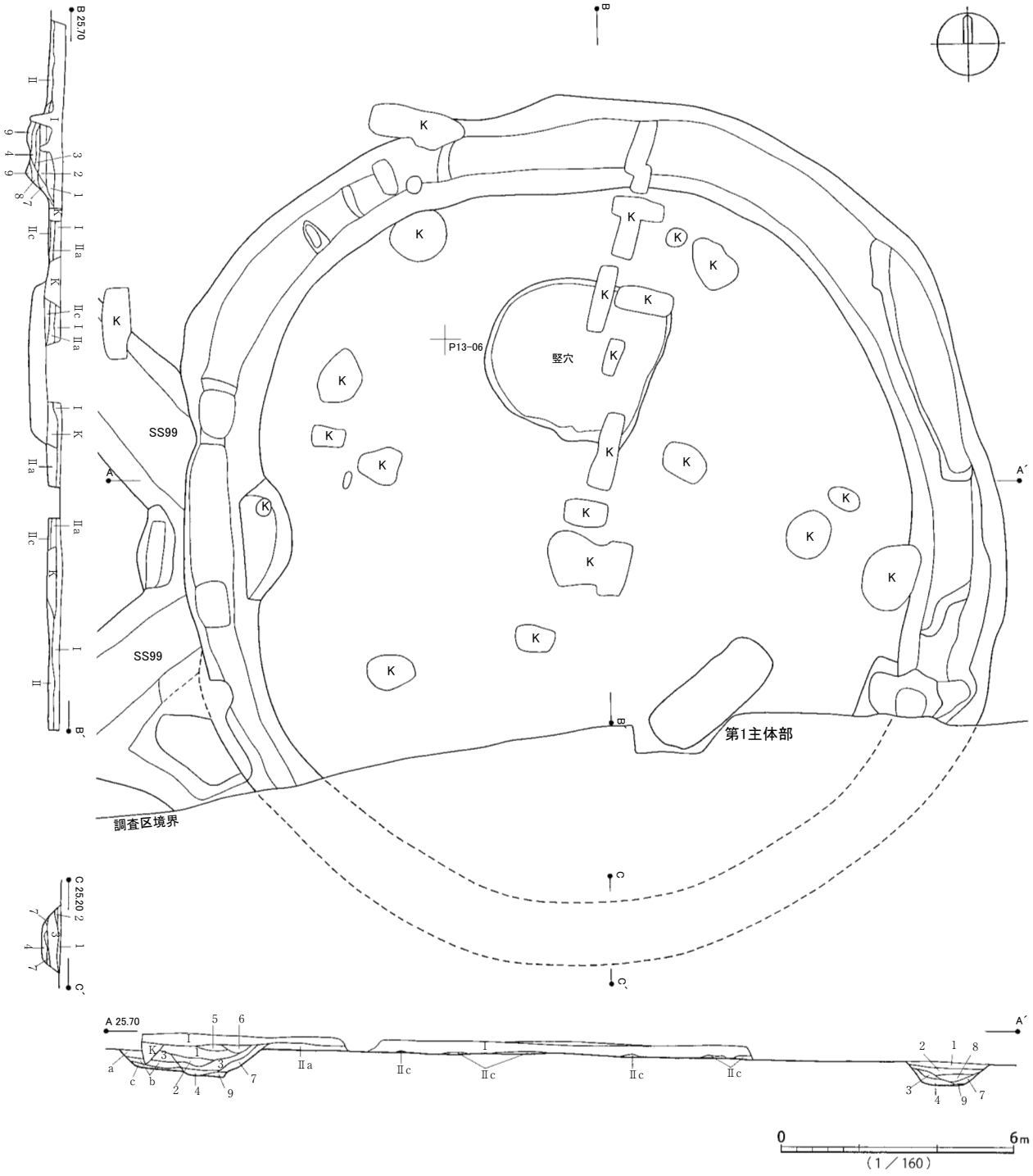
墓壙内からは、遺物は全く検出されなかった。

出土遺物

第1主体部からは、比較的多量の遺物が出土した。 1-1は全長85.8㎝を測り、無窓鍔と鏁を有する大刀である。鍔を挟んで鏁側と茎側の一部に、漆膜が認められる。刀身部より茎部の方が幅を減じる事から、関は両関であり茎部には2孔の目釘孔が残存する。1-2は無窓鍔の前後に鏁と縁金具を有し、金銅製柄頭金具を着装する圭頭大刀である。刀身部より茎部の方が幅を減じる事から、関は両関であり、茎部には目釘孔の一部が残存する。柄頭の木質部の中央には金銅製鳩目金具が残存する。1-3～6はC形式-第Ⅰ形式-第2型式に属する棘関の三角形鏃群で、鏃身部底辺が浅い逆刺状を呈するものが混在している。1-7～12は長頸鏃群で、1-7・11は鏃身形状が片刃の製品で、1-7の関は棘関である。1-8・9はA形式-第V形式-第2型式1類に属する棘関の三角形長頸鏃群で、鏃身部に逆刺を持ち両丸造の製品である。1-7・9の刃部には布、1-8の頸部から鏃身部にかけて皮の付着が、1-8・10・12の茎部には、撚りの無い紐巻きの痕跡が認められる。1-13・14は第1主体部を削平した攪乱内出土の鉄釘で、本来は第1主体部に伴う。

この他、周溝内からは1～30の遺物が覆土一括で取り上げられている。1～3は須恵器甕、4は長頸壺底部である。5は1086年に発行された、宋銭の元祐通宝であり本墳には直接伴わない。6～12は須恵器坏類、13～22は土師器坏、23は土師器鉢、24～29は須恵器大甕片、30は砥石である。

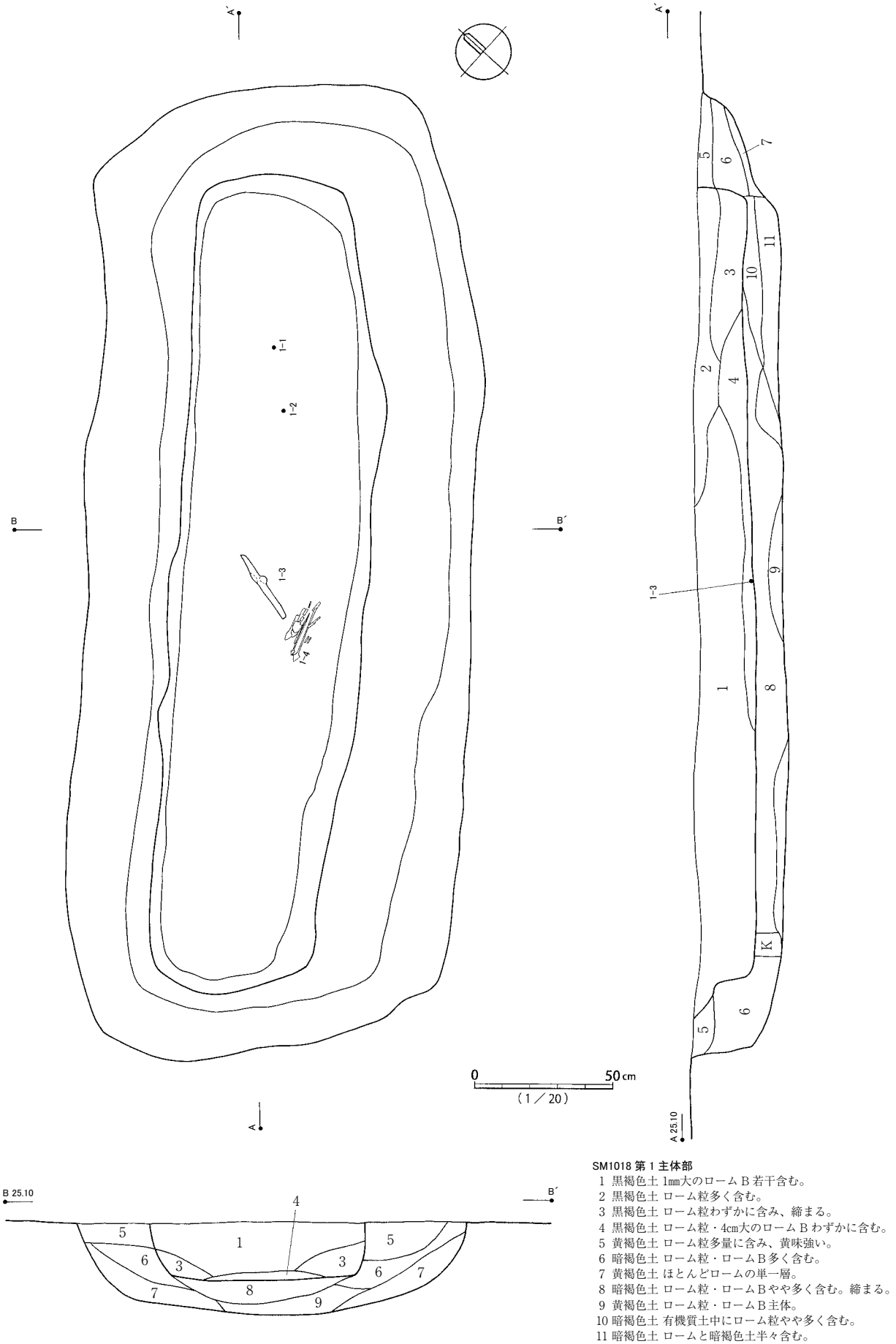
これら遺物群の示す年代は、鉄鏃群がTK-209～217型式併行期、20～24の須恵器坏類、28～35の



SM1018 周溝
1 黒褐色土 有機質土。
2 黒褐色土 有機質土中に若干のローム粒含む。
3 黒褐色土 有機質土中にローム粒少量含む。
4 黄褐色土 ローム粒・ロームＢ多量に含む。
5 黒褐色土 有機質土中に若干のローム粒含む。
6 暗褐色土 有機質土中にローム粒含む。
7 暗褐色土 有機質土中に壁崩壊ローム含む。
8 暗褐色土 有機質土中に壁崩壊ローム含む。
9 暗褐色土 有機質土中にローム粒・ロームＢ含む。

SS99 周溝
a 暗褐色土 有機質土中にローム粒少量含む。
b 暗褐色土 ローム粒含む。
c 褐色土 ローム粒・ロームＢ。

Fig.260　SM1018 遺構 (1) 実測図



SM1018 第 1 主体部
1 黒褐色土 1㎜大のローム B 若干含む。
2 黒褐色土 ローム粒多く含む。
3 黒褐色土 ローム粒わずかに含み、締まる。
4 黒褐色土 ローム粒・4㎝大のローム B わずかに含む。
5 黄褐色土 ローム粒多量に含み、黄味強い。
6 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多く含む。
7 黄褐色土 ほとんどロームの単一層。
8 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。締まる。
9 黄褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
10 暗褐色土 有機質土中にローム粒やや多く含む。
11 暗褐色土 ロームと暗褐色土半々含む。

Fig.261　SM1018 遺構 (2) 実測図

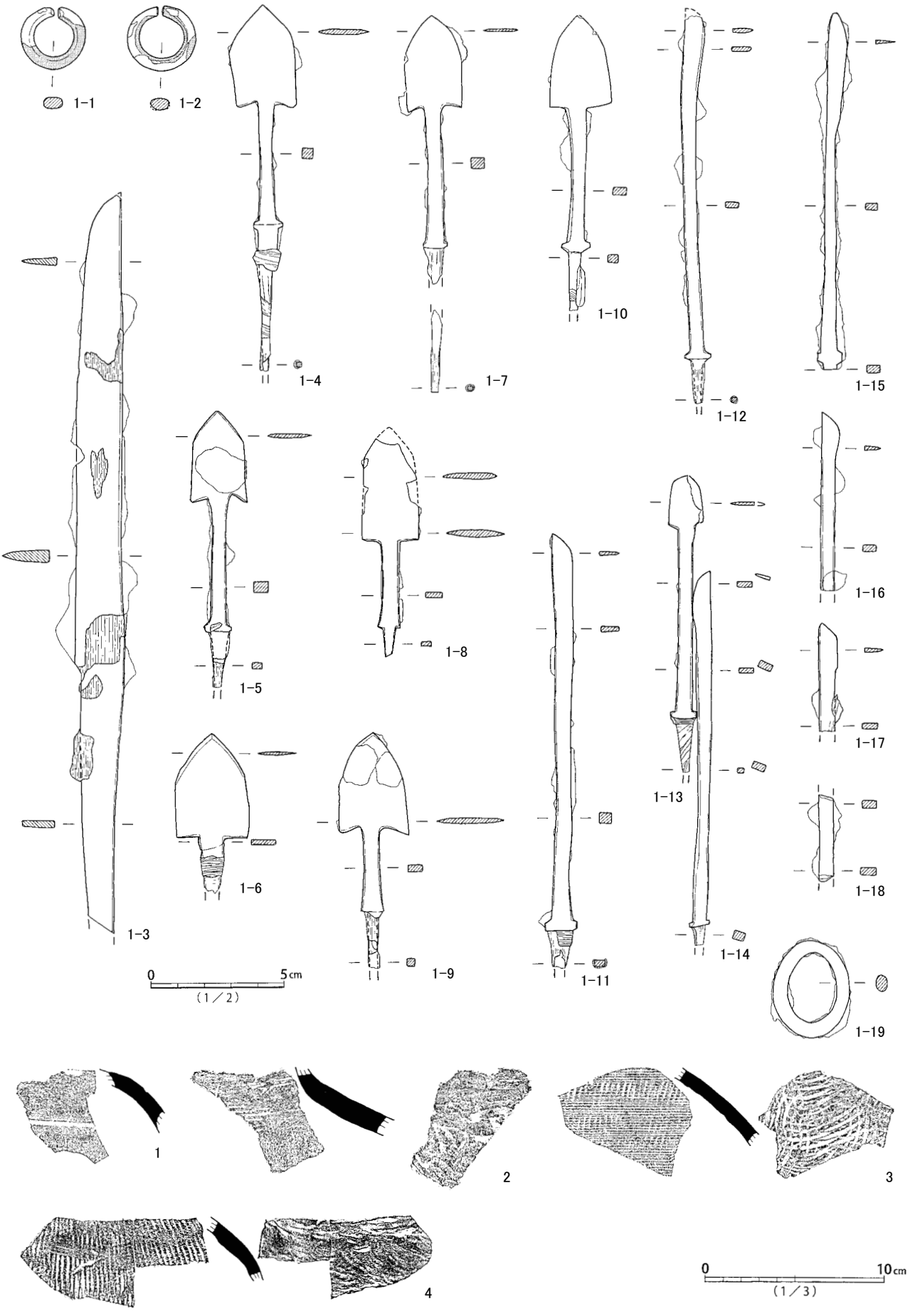


Fig.262　SM1018 遺物実測図

土師器坏類は、TK-209型式併行期の新段階～217型式期の古段階併行期を示しており、鉄鏃群の示す年代観とも矛盾しない。よって本墳の築造時期は、TK-209型式新段階併行期～217型式期の古段階併行期と想定され、実年代ではほぼ630年代を示すものと判断される。

SM1020　SW74地区　（Fig.267～269、PL.202）

J･K-2･3グリッドに位置する古墳時代後期の円墳である。本墳は1975年発行の諏訪台古墳概要で、7号墳としてその概要が報告されている。旧遺構番号はSW74-７号遺構である。

墳丘と周溝

長径15.52m、推定短径14.72m、残存する盛土の高さは0.32mを測り、主軸方位はN-47°-Wを示す。推定周溝内側面積は180.2㎡を測り、諏訪台古墳群中の円墳では第7位の規模である。確認面での周溝幅は、2.20～3.36m、深さは0.32～0.92m、土層断面図上の最深部では1.24mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。西側周溝の一部には、掘り残しの陸橋状を呈している。

埋葬施設

円台部の中央に1基、南側に1基、西側に1基、合計3基検出されている。

第1主体部

本墳の主体たる埋葬施設は、円台部の中央に存在する木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径4.60m短径1.94m深さ1.14m、下端で長径4.04m短径1.48mを測り、主軸方位はN-76°-Wを示す。墓壙のほぼ中央から、周囲を粘土で固定した箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は上端で長さ3.64m幅0.56m、下端で長さ3.50m幅0.64m深さ0.18mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-74°-Wを示す。

木棺内の中央やや東側から刀子が検出されている。刀子の位置を被葬者の胸あたりとすると、被葬者は東枕安置で埋葬されたと察知される。

第2主体部

第1主体部の西側に検出された土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径3.40m短径2.12m深さ0.86m、下端で長径2.66m短径1.42mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-89.5°-Eを示す。木棺痕が検出されないことから、木棺を採用しない土壙墓と想定される。

墓壙内からは、遺物は全く検出されなかった。

第3主体部

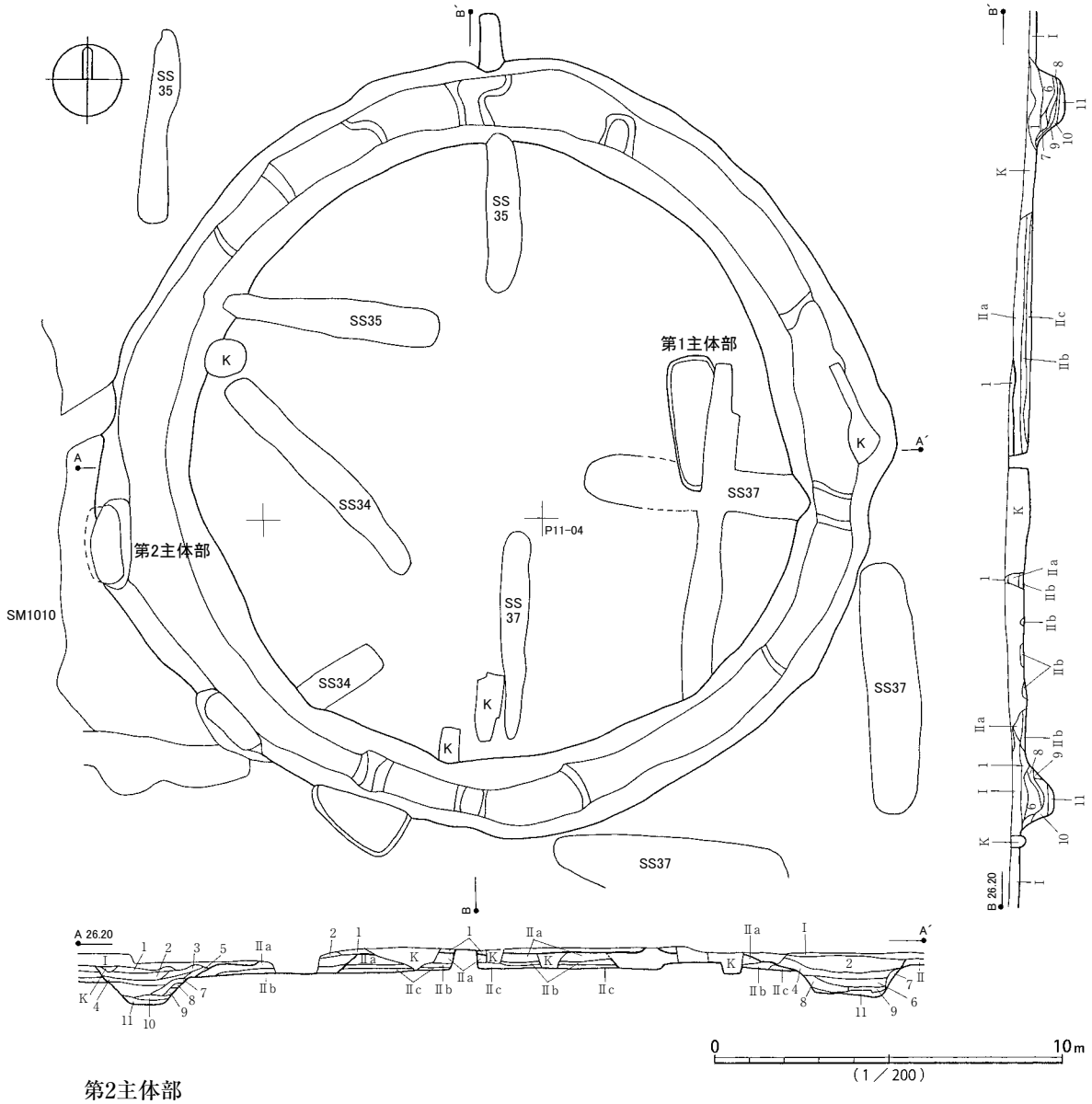
第1主体部の南側に検出された土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径1.64m短径0.86m深さ0.72m、下端で長径1.44m短径0.64mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-75°-Eを示す。墓壙中央から厚さ6～30㎝に亘って、多量の粘土が検出されているが、木棺痕は検出されていない。単なる土壙墓であったのだろう。

墓壙内からは、遺物は全く検出されなかった。

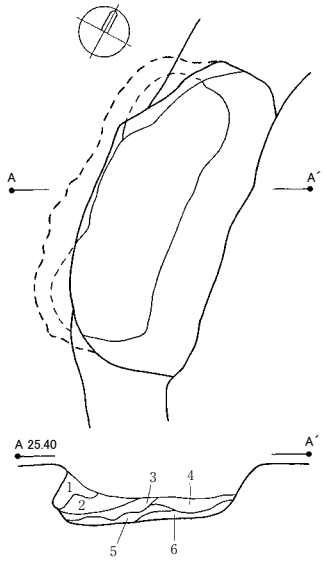
出土遺物

第1主体部からは、1-1の刀子1点が検出されているが、第2･第3主体部からは、何の遺物も検出されなかった。

本墳周溝内からは、西側周溝の陸橋部において、1の須恵器提瓶と2の土師器坏が検出されているが、こちらは遺物が現存しておらず概報からの再トレースである。これらの出土遺物から総合的に判断す



第2主体部



SM1019 墳丘
1 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
2 ―

SM1019 周溝
1 黒褐色土 有機質土。
2 暗褐色土 ローム粒含む。
3 極暗褐色土 ローム粒若干含む。
4 褐色土 壁崩壊ローム。
5 暗褐色土 ローム含む。
6 黒色土 有機質土主体。
7 褐色土 壁崩壊ローム。
8 暗褐色土 ローム粒含む。
9 明褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。
10 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
11 褐色土 汚れたローム粒・ロームＢ主体。

SM1019 第２主体部
1 黄褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。天井崩落土。
2 褐色土 汚れたローム主体。天井崩落土。
3 黄褐色土 ほとんどロームＢ。
4 褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。
5 褐色土 ローム粒・ロームＢ中に少量の有機質土含む。
6 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。

Fig.263　SM1019 遺構 (1) 実測図

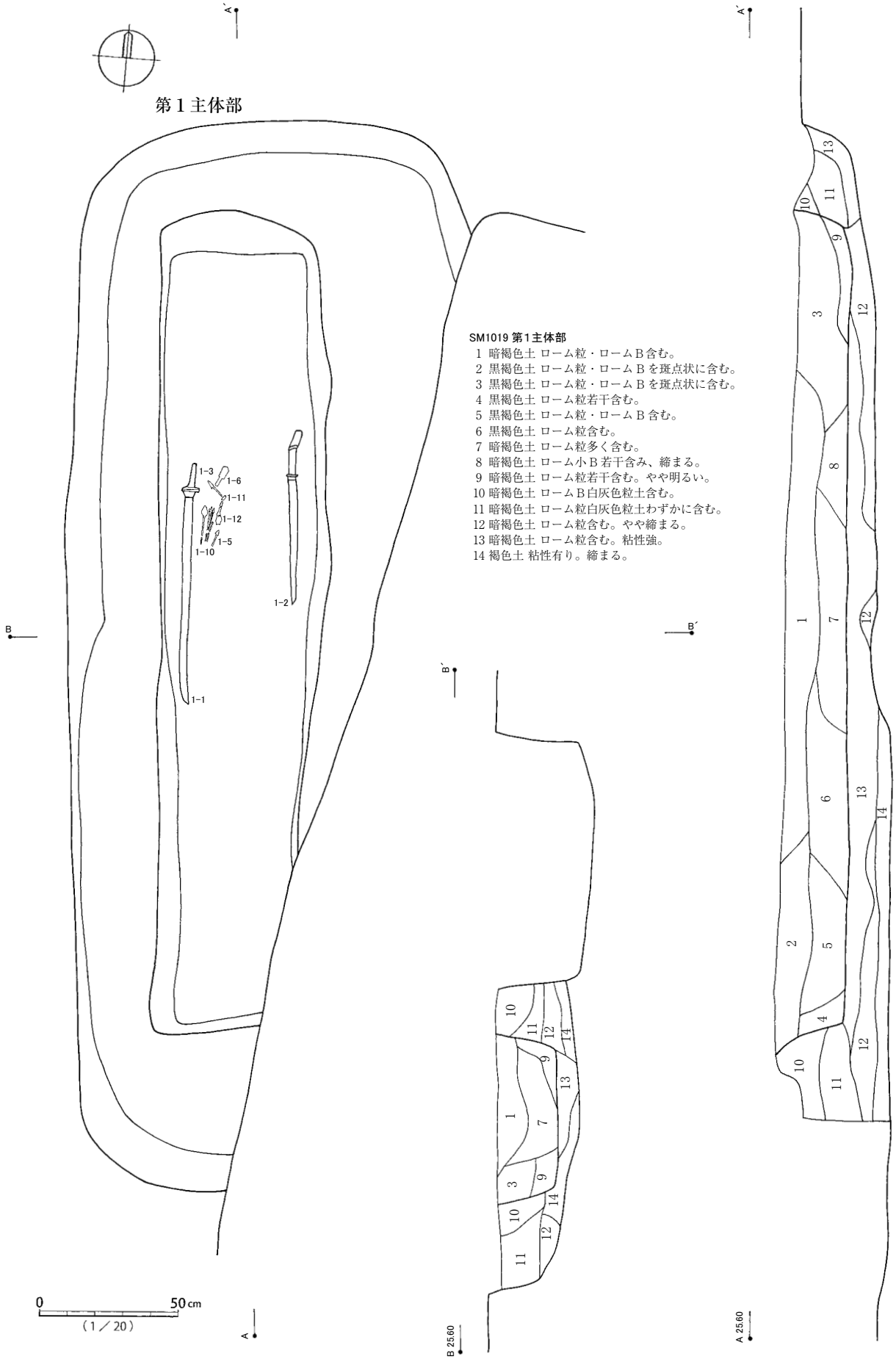


Fig.264　SM1019 遺構 (2) 実測図

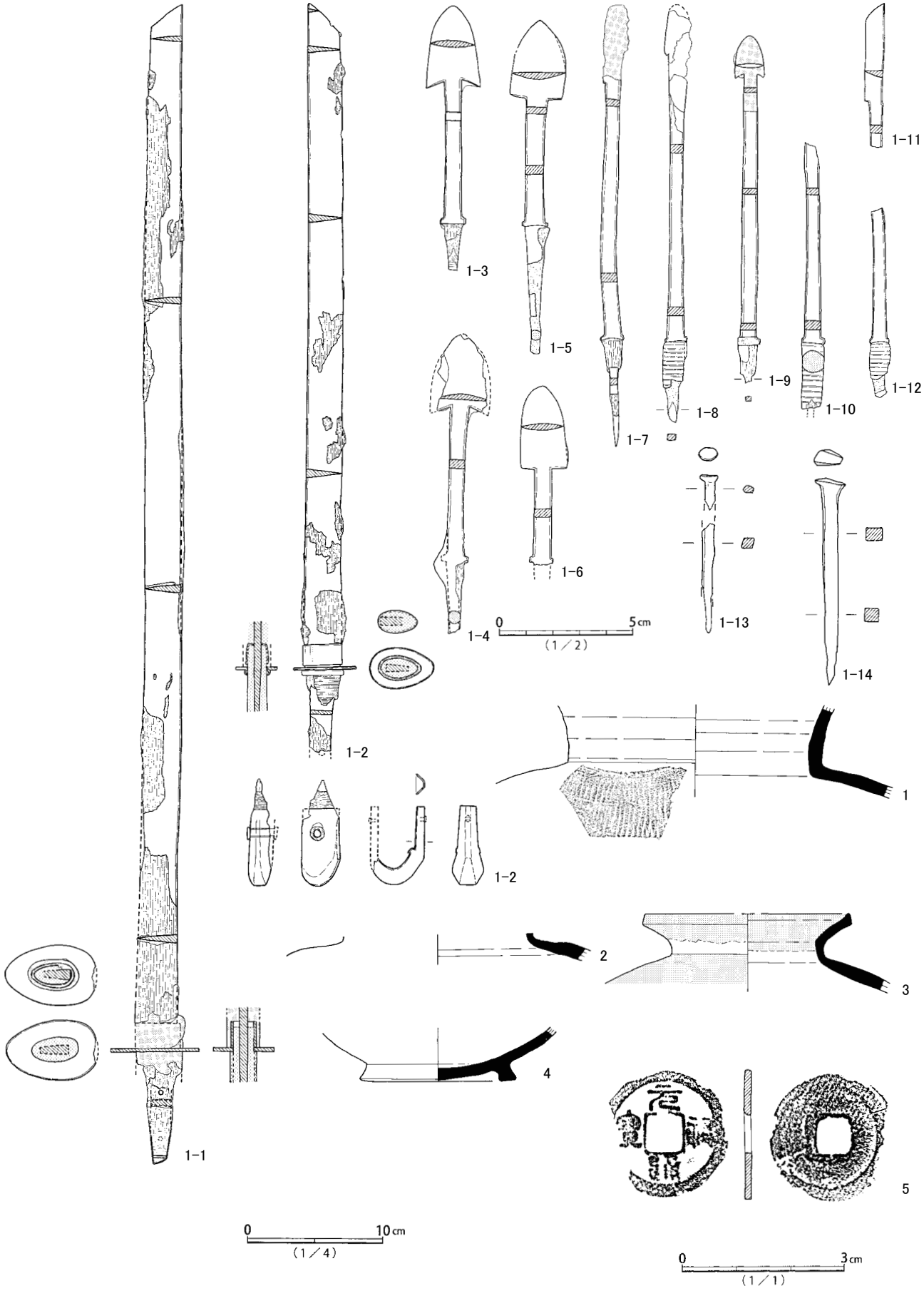


Fig.265　SM1019 遺物 (1) 実測図

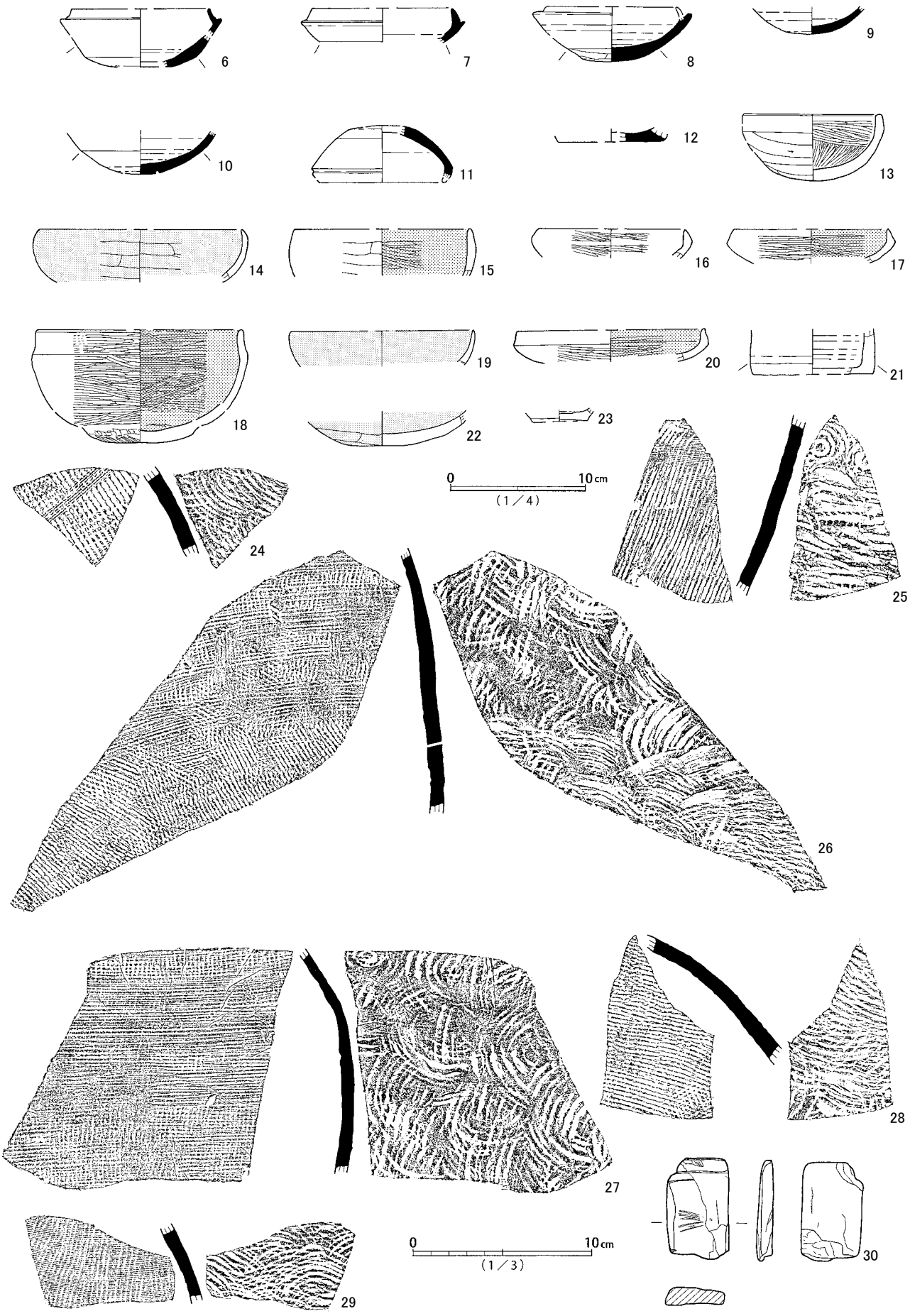


Fig.266　SM1019 遺物 (2) 実測図

ると、本墳の築造年代はTK-209型式併行期、6世紀末葉から7世紀初頭、実年代でほぼ600年代の年代観が想定される。

SM1021　セ28地区　（Fig.270～271、PL.108・202）

R-12・13グリッドに位置し、下層のSS58・59と重複し、西側周溝はSM1001前方後円墳と接する円墳である。旧遺構番号はセ28-028号遺構である。

墳丘と周溝

長径15.04m、短径14.00m、現状では墳丘が存在せず、主軸方位はN-46°-Eを示す。周溝内側面積は164.2㎡を測り、諏訪台古墳群中の円墳では第8位の規模である。確認面での周溝幅は、1.00～2.00m、深さは0.26～0.65mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

円台部の北側に1基、南側に1基、東側に1基、計3基検出されているが、何れも中央から大きく偏った位置に存在している。

第1主体部

埋葬施設は、円台部の南側に存在する木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径3.56m短径1.70m深さ0.32m、下端で長径3.36m短径1.56mを測り、主軸方位はN-75°-Eを示す。墓壙のほぼ中央から、両木口の周囲を粘土で固定した箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は上端で長さ2.12m幅0.44m、下端で長さ1.92m幅0.38m深さ0.30mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-77°-Eを示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

第2主体部

第2主体部は、第1主体部の東側に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径2.72m短径1.38m深さ0.26m、下端で長径2.60m短径1.12mを測り、主軸方位はN-20°-Eを示す。墓壙のほぼ中央から箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は上端で長さ2.00m幅0.56m、下端で長さ1.82m幅0.46m深さ0.26mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-25°-Eを示す。

木棺内の中央やや北東よりに、2-1の刀子が切っ先を南側に向けて検出されている。

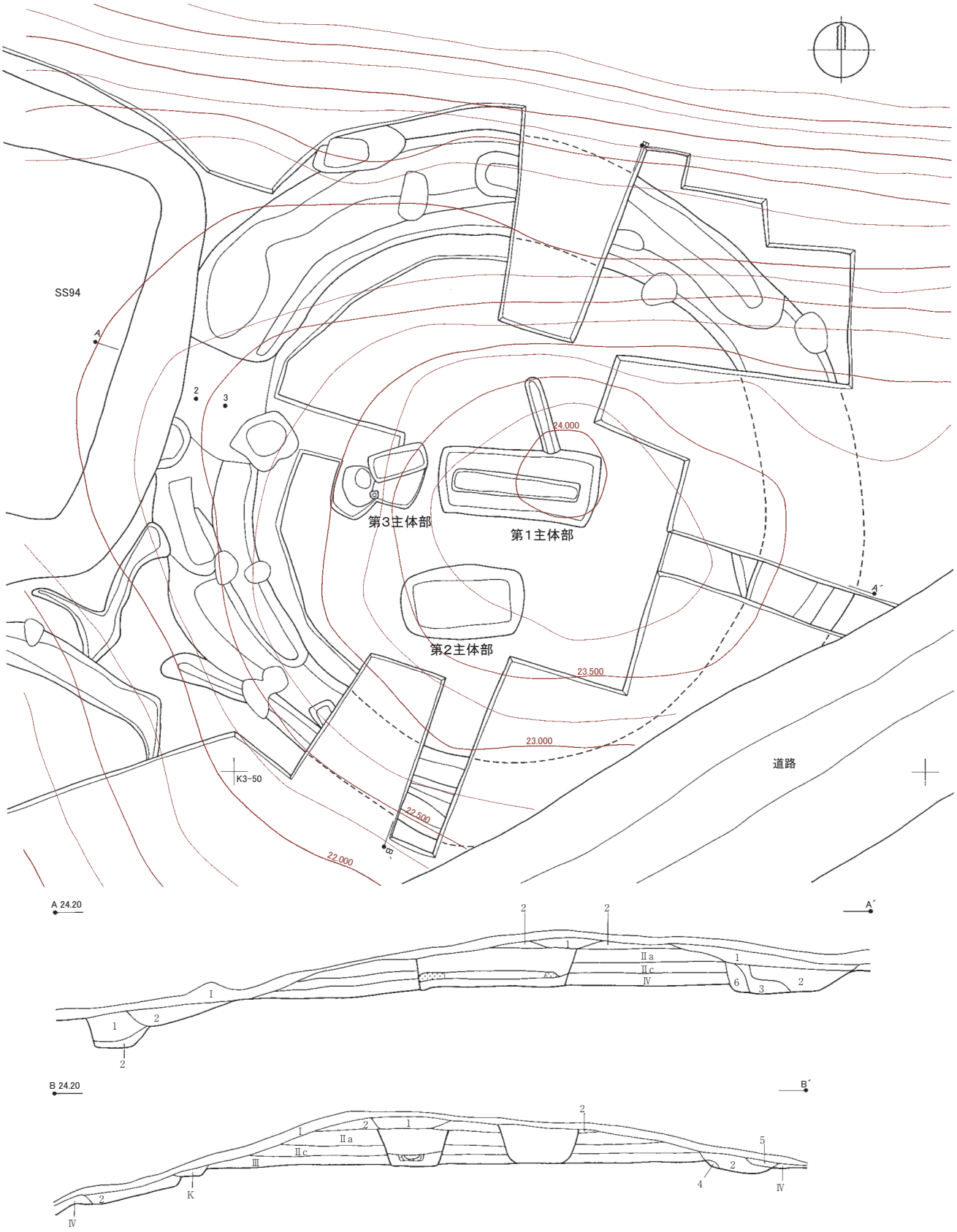
第3主体部

第1主体部の北側に検出されている。墓壙規模は、上端で長径3.06m短径1.28m深さ0.44m、下端で長径2.96m短径1.18mを測り、主軸方位はN-66°-Eを示す。墓壙のほぼ中央から箱型の木棺痕が検出されている。木棺規模は上端で長さ2.10m幅0.76m、下端で長さ1.90m幅0.52m深さ0.44mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-66°-Eを示す。

木棺内からは、3-1の金銅製耳環1点と3-2の類円頭状の鉄鏃が検出されている。

出土遺物

本墳出土の遺物は、第2・第3主体部から検出された2-1の刀子、3-1の金銅製耳環、3-2の類円頭状鉄鏃のみであり、周溝内からは何の遺物も検出されなかった。2-1は全長13.6㎝を測る刀子である。関は茎の両側に切り込まれる。3-2の鉄鏃はかなり特殊な形状であり、正式名称がわからない。これらの遺物から判断すると、本墳の築造年代は7世紀代であろうと推測されるが、正確な時期については特定できない。



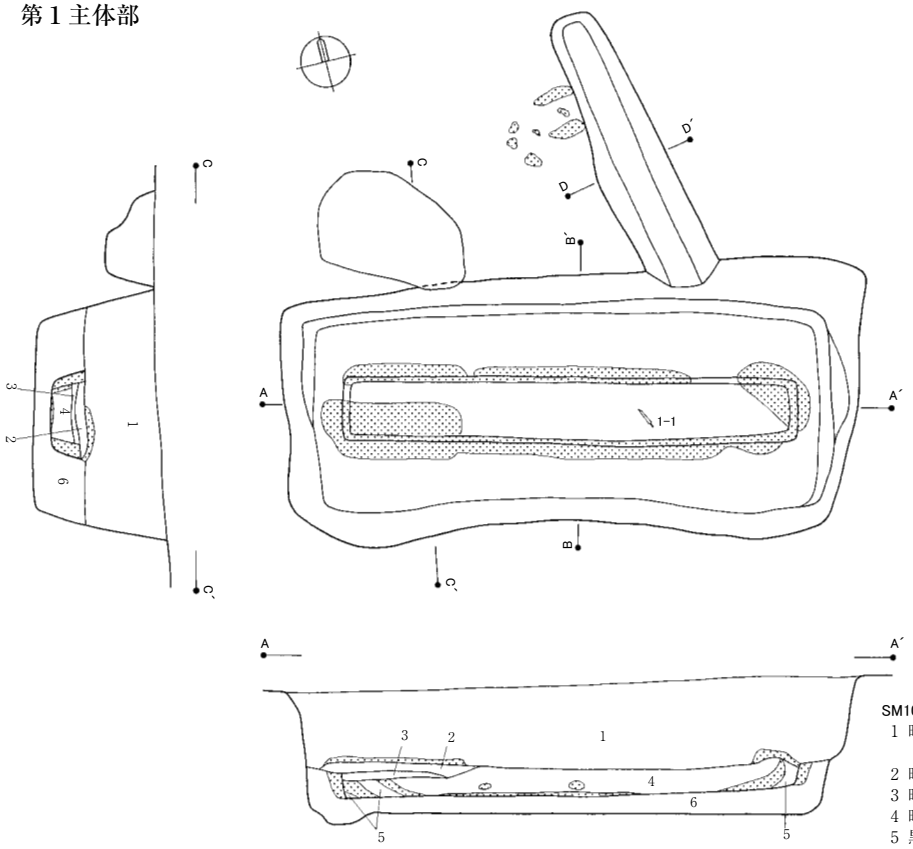
SS94 周溝
1 暗褐色土 ローム粒含む。前期前方後方墳覆土。
2 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。

SM1020 墳丘
1 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
2 暗褐色土 有機質土中にローム粒若干含む。

SM1020 周溝
1 暗褐色土 盛土流出土。ローム粒含む。
2 黒色土 ローム粒若干含む。
3 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
4 暗褐色土 汚れたローム崩壊土。
5 暗褐色土 汚れたソフトローム主体土。
6 黒色土 別遺構覆土。

Fig.267　SM1020 遺構 (1) 実測図

第１主体部



SM1020 第１主体部
1 暗褐色土 有機質土中にローム粒・
ロームＢ・粘土粒含む。
2 暗褐色土 粘土粒・ローム粒含む。
3 暗褐色土 ローム粒若干・粘土粒やや多く含む。
4 暗褐色土 粘土粒・ローム粒やや多く含む。
5 黒褐色土 粘土粒やや多く含む。
6 暗褐色土 ローム粒・ロームＢやや多く含む。
硬く締まる。

第２主体部

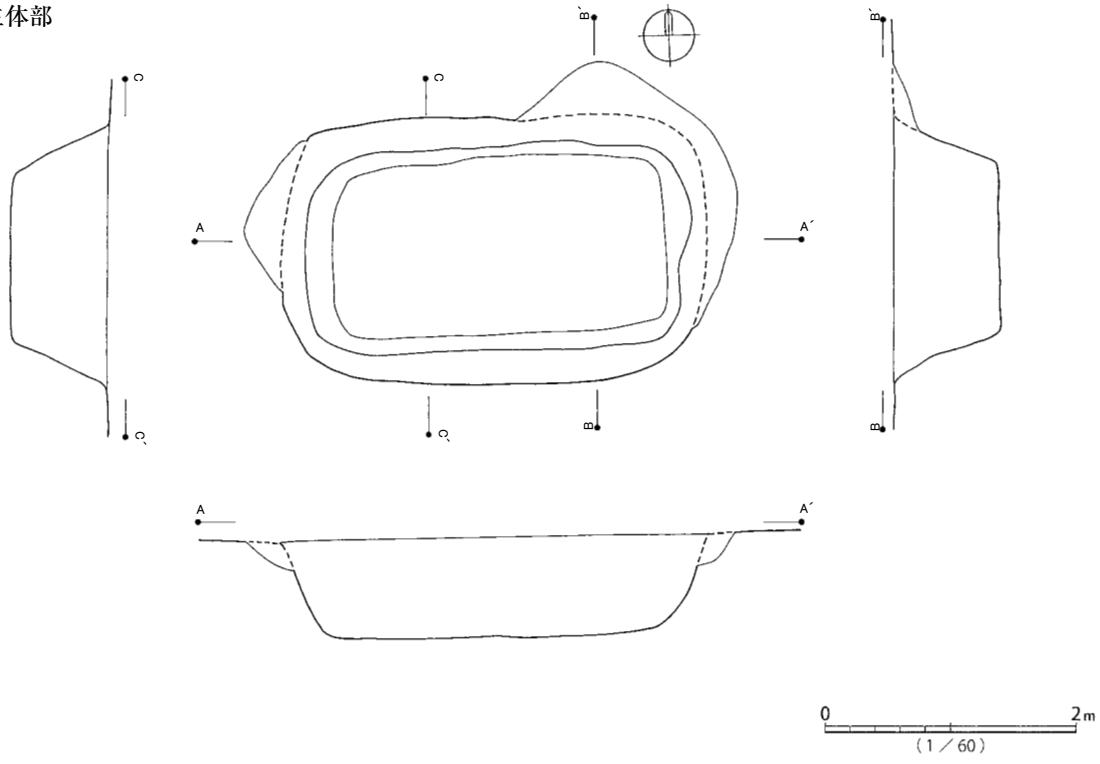
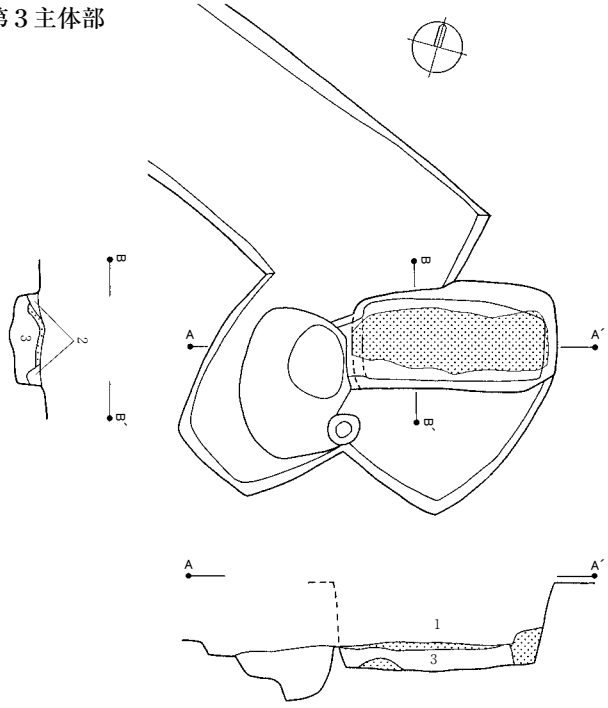


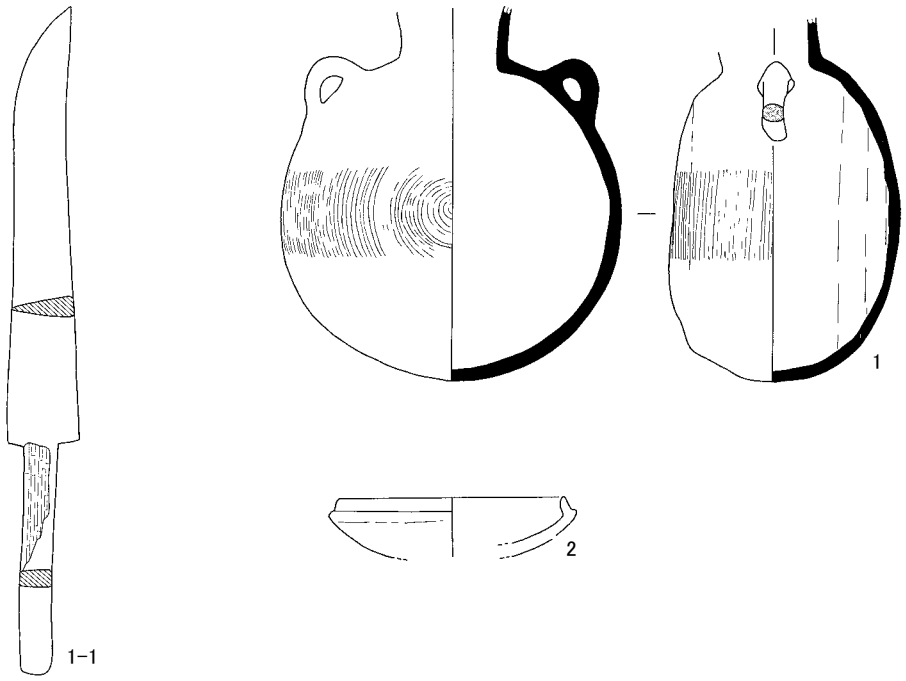
Fig.268　SM1020 遺構 (2) 実測図

第３主体部



SM1020 第３主体部
1 黒褐色土 ローム含む。
2 暗褐色土 ローム粒含む。
3 暗褐色土 黒褐色土混じる。

0 2m
（1／60）



0 5cm
（1／2）

0 10cm
（1／4）

Fig.269　SM1020 遺構 (3)・遺物実測図

SM1022　セ28地区　（Fig.272～273、PL.108・170・187・202）

S-7・8グリッドに位置し、下層のSS104・111・112と重複する円墳である。旧遺構番号はセ28-064号遺構である。

墳丘と周溝

長径14.40m、短径13.60m、残存する盛土の高さは0.16mを測り、主軸方位はN-36°-Wを示す。周溝内側面積は142.1㎡を測り、諏訪台古墳群中の円墳では第9位の規模である。確認面での周溝幅は、1.24～2.56m、確認面での深さは0.82～1.00m、土層断面では0.84～1.14mを測り、東と南西側が広くて深い傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

円台部中央に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、円台部中央に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径3.48m短径1.84m深さ1.12m、下端で長径3.22m短径1.52mを測り、主軸方位はN-88.5°-Wを示す。墓壙のほぼ中央から、両木口の下端の一部を粘土で固定した箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は上端で長さ2.18m幅0.90m、下端で長さ1.86m幅0.60m深さ0.60mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-88.5°-Eを示す。

木棺内の東側からは、金銅製耳環一対2点と刀子1点が検出されており、被葬者の頭位が想定される。

出土遺物

1-1は木棺痕北壁側付近から検出された刀子である。茎部の木質に、柄金具の痕跡が認められる。1-2・3は金銅製耳環一対である。木棺痕の東側から検出されていることから、被葬者は東枕安置で埋葬されたと考えられる。

本墳周溝内からは8点の遺物が検出されている。2～4は北側周溝の底部から25㎝前後浮いた状態で検出された須恵器片である。1は須恵器短頸壺であり、本墳に間接的に伴うと判断される。5～8は土師器・弥生土器・縄文土器である。全て周溝一括で取り上げられたものであり、本墳には直接伴わない。

SM1023　099地区　（Fig.274～275、PL.170・187・202）

N・O-8グリッドに位置し、下層のSS22・23・24と重複する円墳である。円台部内には多数のイモ穴が存在し、遺存状況は不良である。旧遺構番号は099-4050号遺構である。

墳丘と周溝

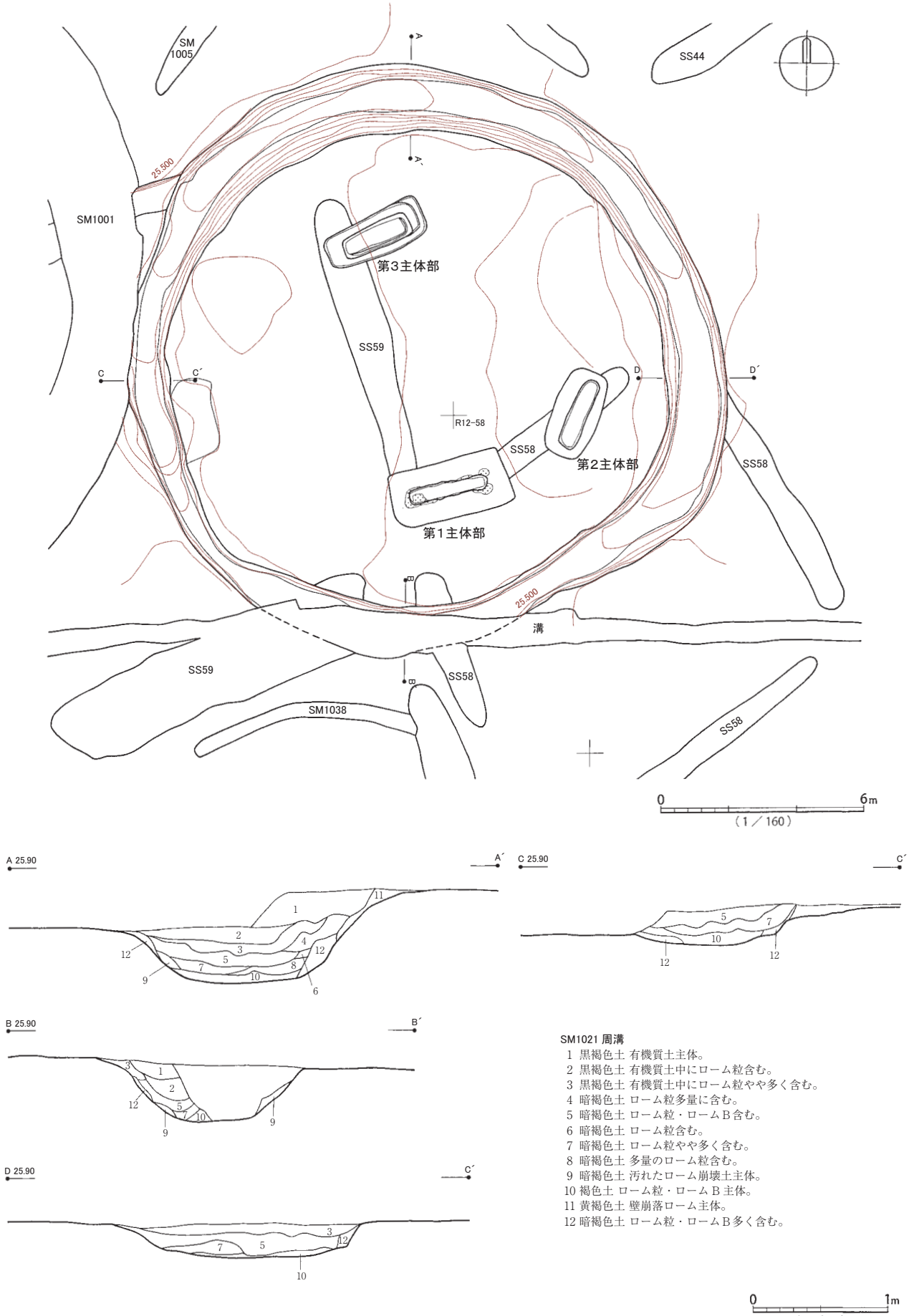
長径12.88m、短径12.48m、現状では盛土が存在せず、主軸方位はN-71°-Eを示す。周溝内側面積は120.2㎡を測り、諏訪台古墳群中の円墳では第10位の規模である。確認面での周溝幅は、1.00～1.76m、確認面での深さは0.32～1.18m、土層断面では0.72～1.30mを測り、西と南側が広くて深い傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

円台部中央に1基、東側周溝に張り出すような土壙1基、合計2基検出されている。

第1主体部

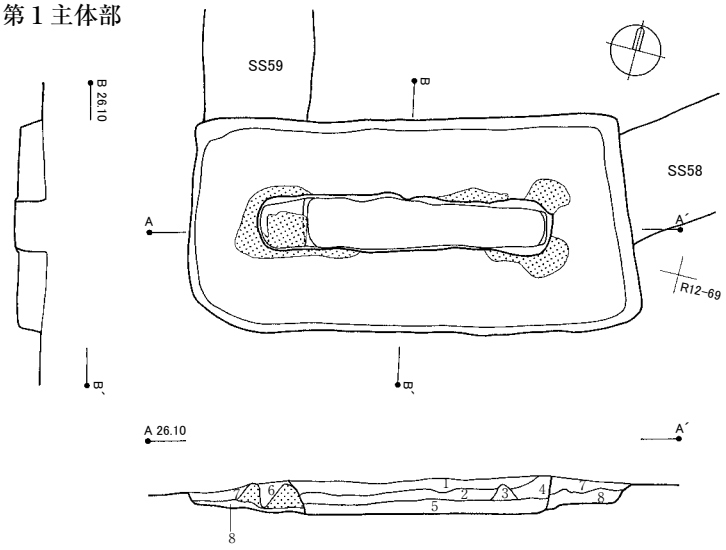
埋葬施設は、円台部やや南側に位置する木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径3.06m短径1.20m深さ0.24m、下端で長径2.96m短径1.10mを測り、主軸方位はN-81°-Wを示す。平面的に



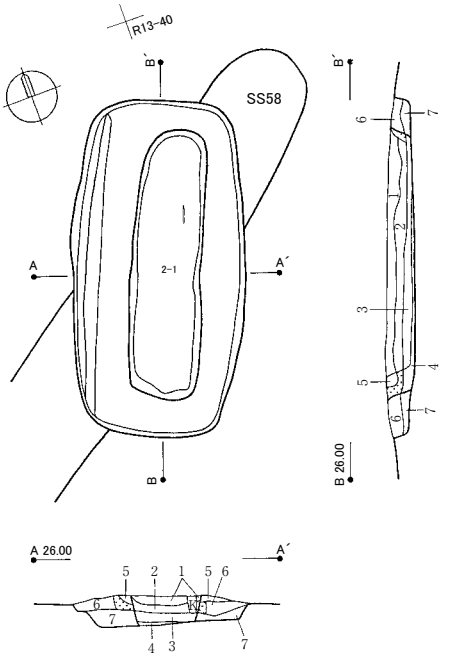
SM1021 周溝
1 黒褐色土 有機質土主体。
2 黒褐色土 有機質土中にローム粒含む。
3 黒褐色土 有機質土中にローム粒やや多く含む。
4 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
5 暗褐色土 ローム粒・ロームB含む。
6 暗褐色土 ローム粒含む。
7 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
8 暗褐色土 多量のローム粒含む。
9 暗褐色土 汚れたローム崩壊土主体。
10 褐色土 ローム粒・ロームB主体。
11 黄褐色土 壁崩落ローム主体。
12 暗褐色土 ローム粒・ロームB多く含む。

Fig.270　SM1021 遺構 (1) 実測図

第１主体部



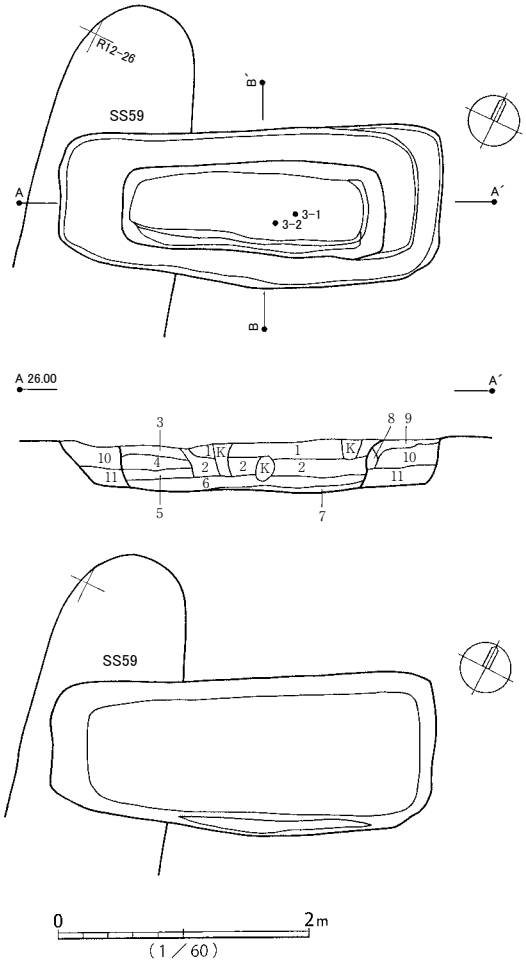
第２主体部



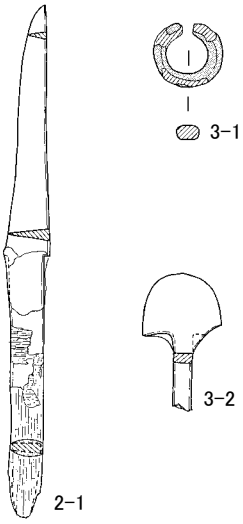
SM1021 第１主体部
1 黒褐色土 有機質土。
2 暗褐色土 有機質土中にローム粒・ローム B 含む。
3 黒褐色土 有機質土。
4 黒褐色土 白色粘土粒・ローム粒含む。
5 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。締まる。
6 暗褐色土 若干の白色粘土粒含む。
7 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
8 褐色土 ローム粒・ローム B 多く含む。

SM1021 第２主体部
1 極暗褐色土 有機質土中にローム粒含む。
2 黒褐色土 有機質土。
3 暗褐色土 ローム粒含む。
4 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。硬く締まる。
5 暗褐色土 ローム粒・粘土粒含む。
6 黒褐色土 ローム粒・粘土粒若干含む。
7 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。

第３主体部



SM1021 第３主体部
1 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多く含む。
2 暗褐色土 ローム粒含む。
3 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
4 褐色土 ローム粒・ローム B 多く含む。
5 暗褐色土 ローム粒と有機質土半々。
6 黒褐色土 有機質土主体。
7 暗褐色土 ローム粒多く含む。締まる。
8 暗褐色土 ローム粒含む。
9 暗褐色土 若干のローム粒と少量の白色粘土含む。
10 黄褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
11 暗褐色土 有機質土とローム粒・ローム B 半々。
12 黄褐色土 壁崩落ローム主体。



0 2m
（1／60）

0 5cm
（1／2）

Fig.271　SM1021 遺構 (2)・遺物実測図

は掴みとれなかったが、断面図によって墓壙のほぼ中央に箱型の木棺痕の端部が検出されているが、片方は攪乱によって削平されている。残存する木棺規模は、上端で長さ1.70m幅0.72m、下端で長さ1.66m幅0.36m深さ0.18mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-84°-Wを示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

第2主体部

東側周溝外にはみ出して存在する土壙である。土壙規模は、上端で長径4.60m短径2.48m深さ1.20m、下端で長径3.92m短径0.90mを測り、主軸方位はN-33°-Eを示す。底面はほぼ平坦であり、土層断面からは木棺の痕跡が見当たらない。

土壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

1～5は、全て周溝内一括で取り上げられた遺物である。1は土師器高坏、2・5は須恵器片、3は土師器甕、4は刀剣類の縁金具と想定され、本墳に間接的に伴うと想定される遺物が主体を占める。本墳の築造時期は、土師器高坏等から、TK-217型式古段階併行期と想定される。

SM1024　064地区　（Fig.276～279、PL.108～109・119・187～188・202）

E・F-5グリッドに位置する円墳である。墳丘全域に伐木・伐根が行われており、遺存状況は不良である。旧遺構番号は064-150号遺構である。

墳丘と周溝

長径12.72m、短径11.52m、現状での盛土の高さは0.60mを測り、主軸方位はN-5°-Wを示す。周溝内側面積は118.2㎡を測り、諏訪台古墳群中の円墳では第11位の規模である。確認面での周溝幅は、1.56～3.60m、深さは0.76～0.80m、土層断面の深さは0.78～0.96mを測り、西側が広く、東・南・北側が深い傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

円台部中央にやや北寄りに、1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、円台部内に存在する木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径4.01m短径1.72m深さ1.04m、下端で長径3.34m短径1.34mを測り、主軸方位はN-65°-Eを示す。墓壙の下層付近で、中央に箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.50m幅0.56m深さ0.22m、下端で長さ2.40m幅0.42mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-65°-Eを示す。

木棺内からは、耳環1対2点と刀子等が検出されていることが平面図から読み取れるが、遺物は現在所在不明で、図示することはできない。

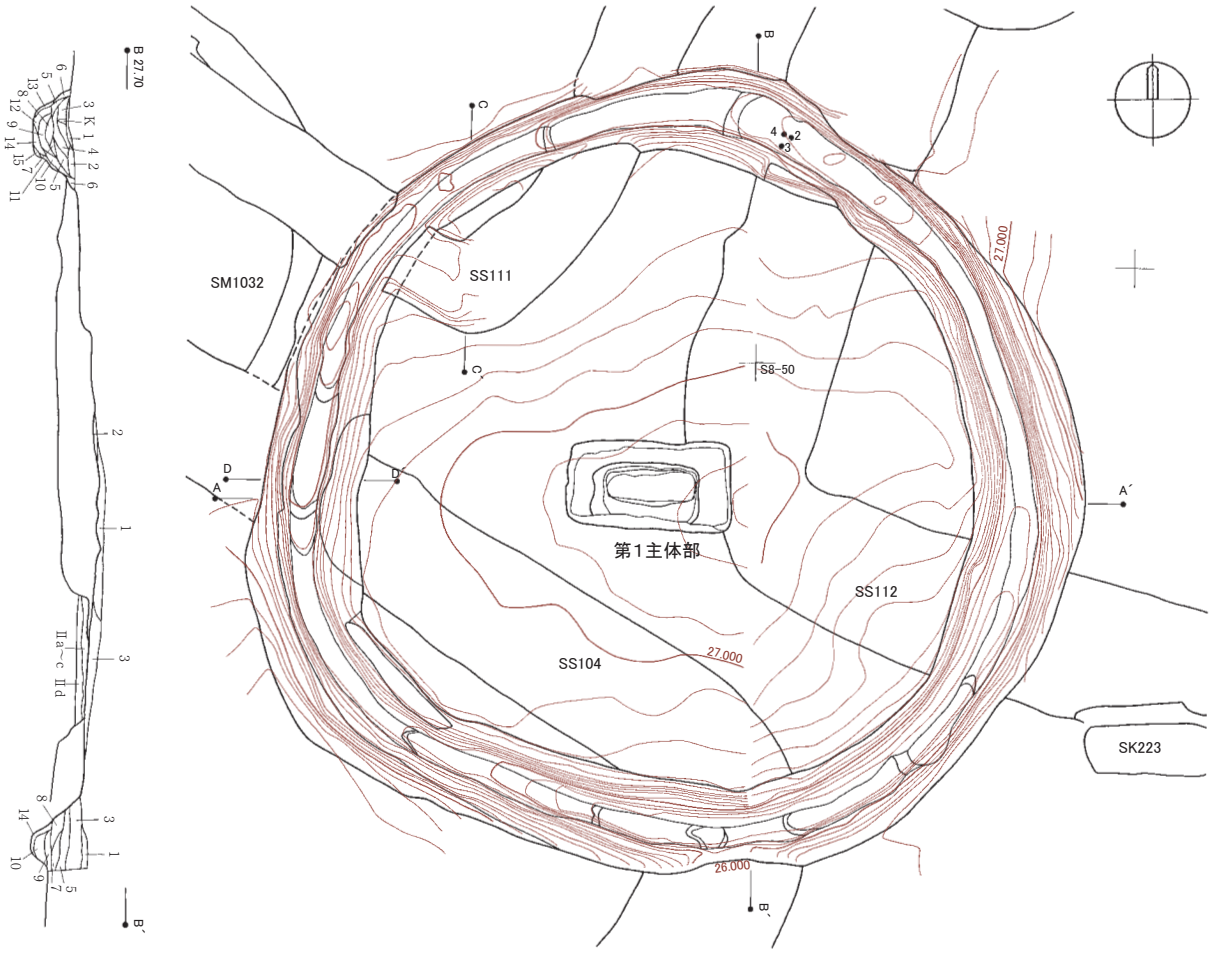
出土遺物

木棺内の出土遺物は、前述の通り現在所在不明のため図化できない。

周溝内からは、19点の須恵器片と1点の寛永通宝、1点の管状土錘片が検出されている。これらの遺物群の内、本墳に伴う遺物は大甕片が主体を占める須恵器群であろうと想定されるが、具体的な時期の判定は困難である。

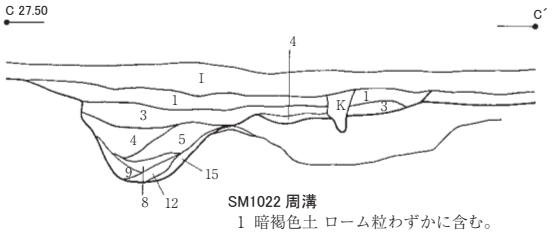
SM1025　099地区　（Fig.280～281、PL.109～110・170・188・202）

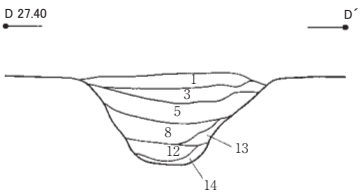
L・M-10グリッドに位置する円墳である。下層のSS28と重複し、SM1004前方部周溝と接している。



SM1022 墳丘
1 黄褐色土 ロームＢ主体。
2 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
3 褐色土 ローム粒・ロームＢ多く含む。

0 6m
（1／160）





SM1022 周溝
1 暗褐色土 ローム粒わずかに含む。
2 暗褐色土 ローム粒斑点状に含む。
3 暗褐色土 ローム粒少量含む。
4 暗褐色土 ローム粒若干含む。
5 暗褐色土 ローム粒均等に含む。
6 褐色土 汚れたローム粒多く含む。
7 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ若干含む。
8 黒褐色土 有機質土主体。ローム粒若干含む。
9 暗褐色土 ローム粒若干含む。
10 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
11 黄褐色土 壁崩落ローム主体。
12 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ多く含む。
13 黄褐色土 壁崩落ローム主体。汚れている。
14 褐色土 ローム粒・ロームＢ多量に含む。
15 褐色土 ローム粒多量に含む。

0 2m
（1／80）

Fig.272　SM1022 遺構 (1) 実測図

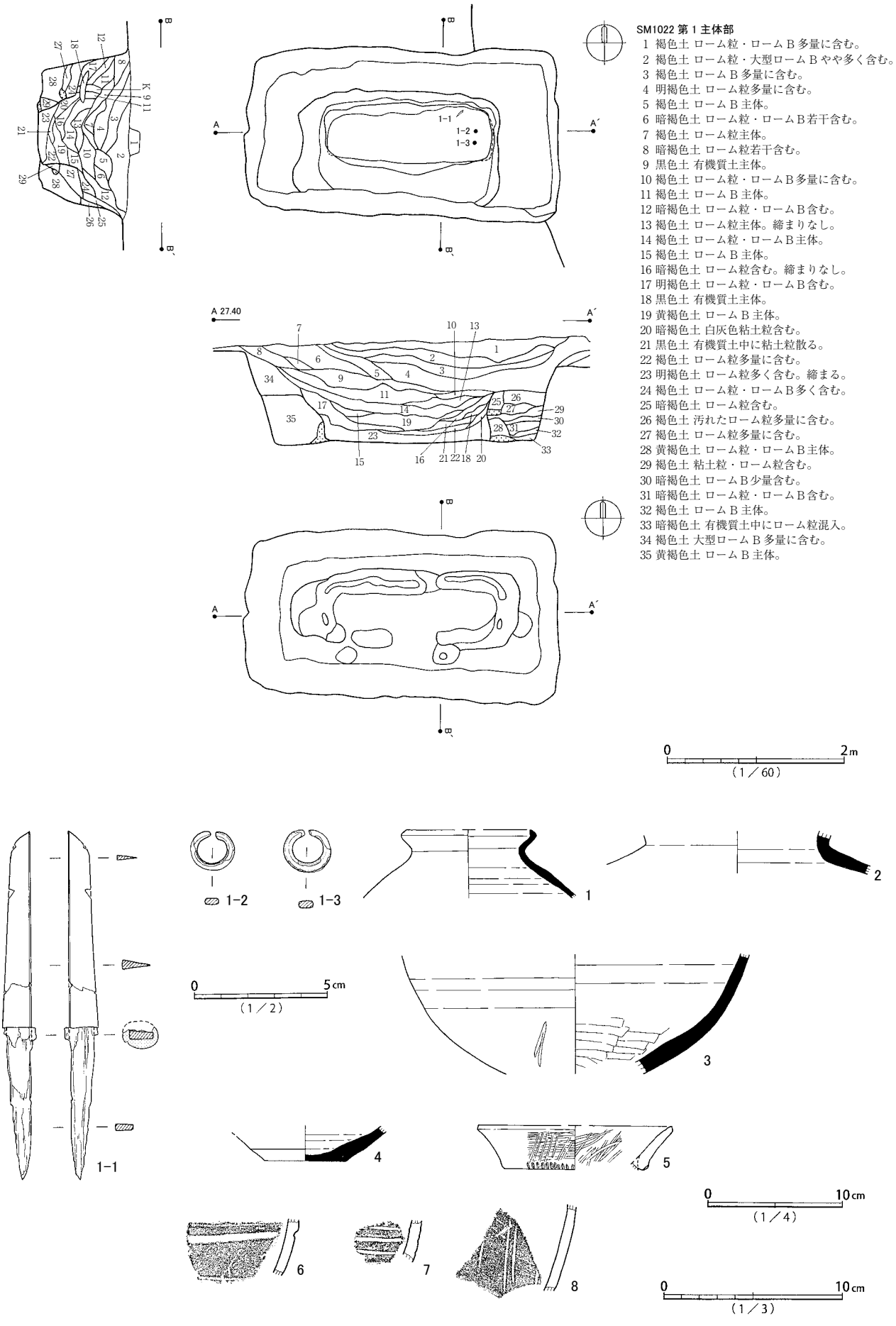


Fig.273　SM1022 遺構 (2)・遺物実測図

円台部内外に攪乱が多数存在し、遺存状況は不良である。旧遺構番号は099-4042号遺構である。

墳丘と周溝

長径12.08m、短径11.92m、現状では盛土は存在せず、主軸方位はN-88.5°-Eを示す。周溝内側面積は114.6㎡を測り、諏訪台古墳群中の円墳では第12位の規模である。確認面での周溝幅は、0.48～0.88m、深さは0.18～0.48mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、東西側が狭く浅く、南北側が広く深い傾向が認められる。

埋葬施設

円台部中央に1基、南側周溝内からはみ出して1基、合計2基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、円台部中央に位置する木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径3.14m短径1.94m深さ0.20m、下端で長径2.98m短径1.68mを測り、主軸方位はN-86°-Wを示す。墓壙の中央やや北寄りに、両木口の一部を粘土で固定した箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長径2.18m短径0.66m深さ0.20m、下端で長径2.00m短径0.50mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-85°-Wを示す。

木棺内東側からは、鉄製円環2点、中央部より刀子片2点、木棺の両木口側から11点の鉄釘が検出されている。

第2主体部

第2主体部は、南側周溝内からはみ出して検出されている木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径2.84m短径1.50m、深さは周溝底から0.60m、下端で長径2.42m短径0.84mを測り、主軸方位はN-68°-Wを示す。墓壙のほぼ中央で箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ1.84m幅0.62m深さ0.30m、下端で長さ1.68m幅0.48mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-68°-Wを示す。

木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

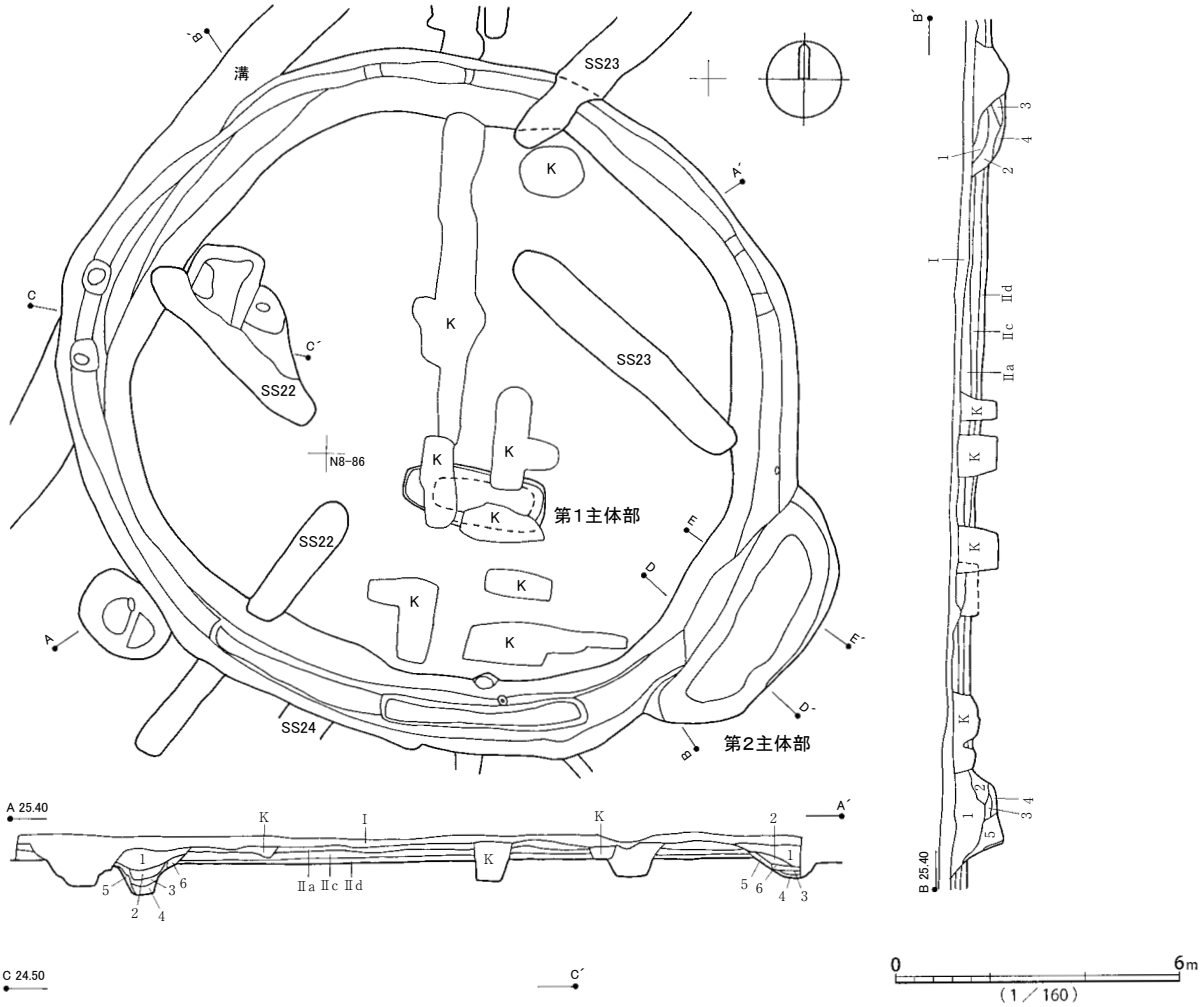
出土遺物

木棺内から遺物が検出したのは第1主体部のみである。1-1・2は復元直径4.6㎝前後の鉄製円環である。遺物の出土状態から見て、耳環と類似する性格なのであろうか。1-3・4は、刃部と茎部の大半を欠くが、共に刃部と茎部の一部が残存しており、別々の製品と判断される。3の茎部の刃部側木質には柄金具の痕跡が認められ、4の刃部には撚りの無い紐巻きと、先端部には布目の痕跡が認められる。1-5～15の鉄釘の大半には、木質の遺存が認められ、棺材に打ち込まれていたものと想定される。この内1-7は樹種同定により、釘頭側の柾目および先端付近の木口が針葉樹と同定されている。

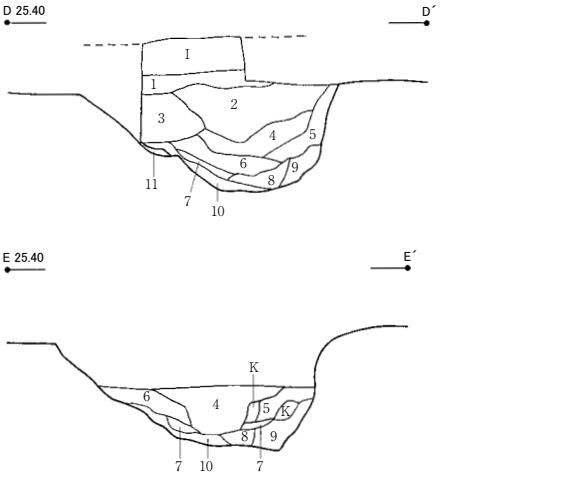
本墳周溝内からは1～7の須恵器及び須恵器片が出土しているが、何れも周溝内一括で取り上げられたものである。この内2及び内面青海波を半磨り消した製品以外は、本墳に間接的に伴う遺物であろう。1の須恵器坏から想定される年代観は、TK-217型式の古段階併行期、実年代で630年代頃に想定される。

SM1026　099地区　（Fig.282、PL.111・170・188）

K・L-8グリッドに位置し、下層のSS11南側周溝と、本墳の北東側周溝の一部が重複する円墳である。旧遺構番号は099-4039号遺構である。



第２主体部



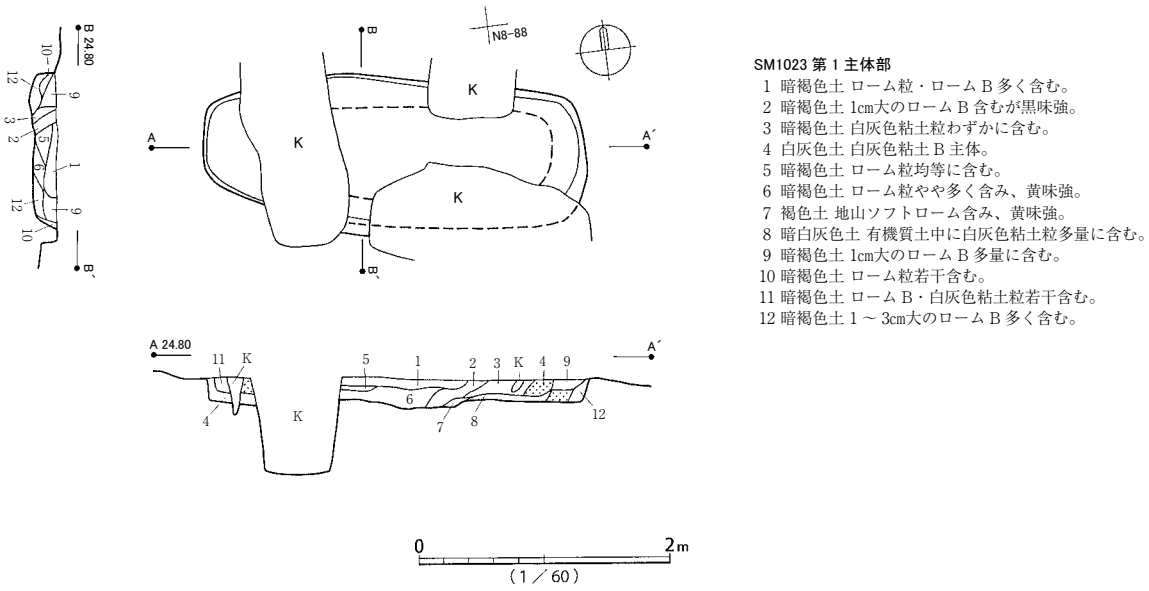
SM1023 周溝
1 黒褐色土 有機質土・ローム等含まない。
2 黒褐色土 有機質土中にローム粒若干含む。
3 黒褐色土 ローム粒含む。
4 暗褐色土 ローム粒・ロームＢやや多く含む。
5 黄褐色土 壁崩落汚れたローム主体。
6 褐色土 汚れたローム粒含む。

溝覆土
a 黒褐色土 多量のローム粒含み、硬く締まる。
b 黒褐色土 ローム粒含み、硬く締まる。
c 暗褐色土 ローム粒多量に含み、締まる。

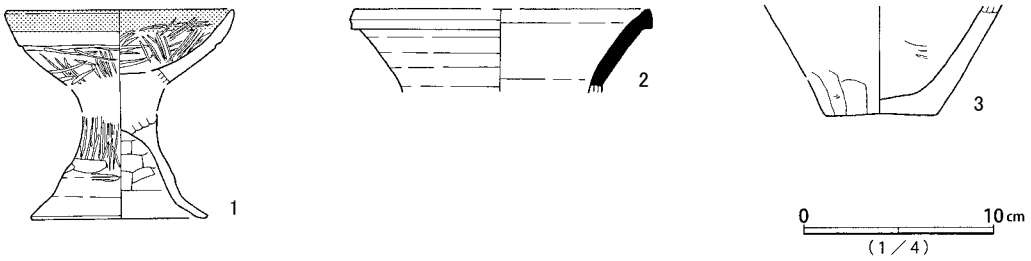
SM1023 第２主体部
1 黒褐色土 有機質土。
2 黒褐色土 有機質土中にローム粒含む。
3 暗褐色土 有機質土中にローム粒・ローム Ｂ 含む。
4 暗褐色土 有機質土とローム混合土。
5 暗褐色土 多量のローム粒・ロームＢ含む。
6 暗褐色土 ローム粒含む。
7 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
8 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ多量に含む。
9 褐色土 汚れたローム粒・ローム Ｂ 多量に含む。
10 黄褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。
11 暗褐色土 ローム粒・ロームＢやや多く含む。

Fig.274　SM1023 遺構 (1) 実測図

第１主体部



SM1023 第１主体部
1 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多く含む。
2 暗褐色土 1cm大のローム B 含むが黒味強。
3 暗褐色土 白灰色粘土粒わずかに含む。
4 白灰色土 白灰色粘土 B 主体。
5 暗褐色土 ローム粒均等に含む。
6 暗褐色土 ローム粒やや多く含み、黄味強。
7 褐色土 地山ソフトローム含み、黄味強。
8 暗白灰色土 有機質土中に白灰色粘土粒多量に含む。
9 暗褐色土 1cm大のローム B 多量に含む。
10 暗褐色土 ローム粒若干含む。
11 暗褐色土 ローム B・白灰色粘土粒若干含む。
12 暗褐色土 1 ～ 3cm大のローム B 多く含む。



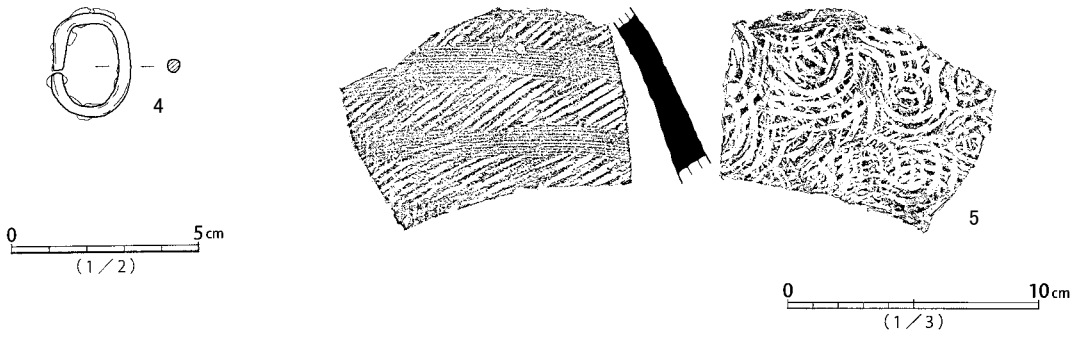


Fig.275　SM1023 遺構 (2)・遺物実測図

墳丘と周溝

長径11.00m、短径10.80m、現状では盛土は存在せず、主軸方位はN-1°-Eを示す。周溝内側面積は96.8㎡を測り、諏訪台古墳群中の円墳では第13位の規模である。確認面での周溝幅は、0.68～1.32m、深さは0.36～0.72mを測り、東西側が狭く浅く、南北側が広く深い傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

円台部中央に1基検出されていたらしいが、詳細図面が存在しない。おそらく削平された墓壙底面だけの検出だったのだろう。

第1主体部

埋葬施設は、円台部中央に位置する。上部は完全に削平されて、墓壙底面だけの検出と判断される。墓壙規模は、長径2.72m短径1.64mを測り、主軸方位はN-1°-Eを示す。木棺痕等は検出されなかったが、墓壙規模から判断して、おそらく墓壙中央に箱型の木棺が存在していた可能性が極めて高い。

出土遺物

墓壙内からは何の遺物も検出されなかった。

本墳周溝内から4点の須恵器及び須恵器片が検出されている。これらの遺物は何れも覆土一括で取り上げられたものであるが、間接的に伴う物であろう。2の須恵器蓋坏から想定される年代観は、TK-217型式の新段階～TK-46型式にかけての併行期、実年代で660年代前後に想定される。

SM1027　099地区　（Fig.283～285、PL.9・111・202）

O-11・12グリッドに位置する円墳である。遺構の中央及び東側に攪乱が多く、東側周溝は未検出であり、遺存状況は不良である。旧遺構番号は099-4074号遺構である。

墳丘と周溝

長径10.78m、短径10.46m、現状では盛土は存在せず、主軸方位はN-50°-Wを示す。周溝内側面積は90.3㎡を測り、諏訪台古墳群中の円墳では第14位の規模である。確認面での周溝幅は、0.40～1.10m、深さは0.16～0.24mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、東西側が狭く浅く、南北側が広く深い傾向が認められる。

埋葬施設

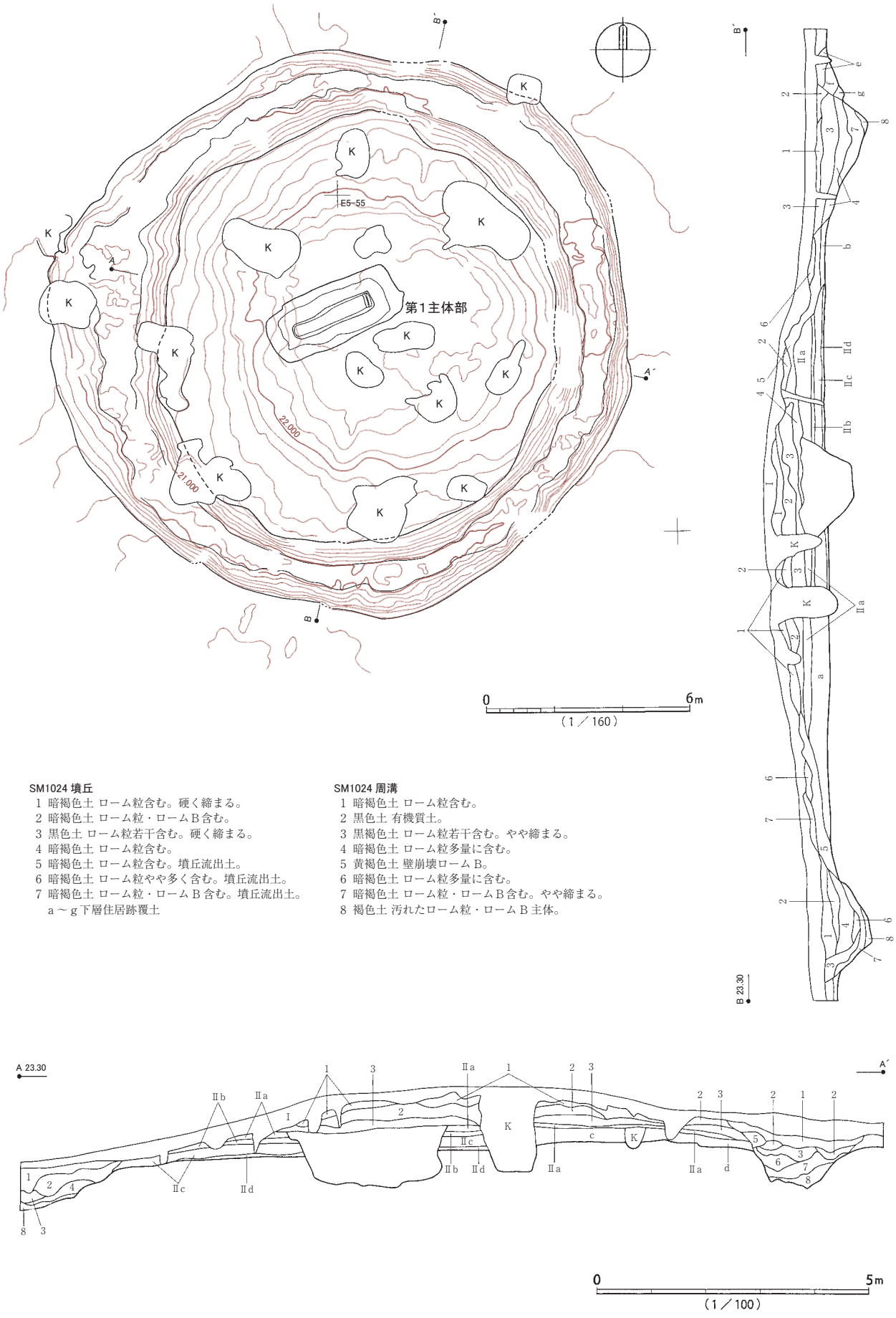
円台部中央に1基検出されているが、南側の一部が攪乱によって削平されている。

第1主体部

埋葬施設は、円台部中央に位置する木棺直葬の土壙墓である。上部及び南側は完全に削平されており、墓壙底面付近の検出である。残存墓壙規模は、上端で長径2.52m短径1.58m深さ0.28m、下端で長径2.50m短径1.54mを測り、主軸方位はN-47°-Eを示す。墓壙ほぼ中央に、箱型の木棺痕が検出された。残存木棺規模は、上端で長さ2.16m幅0.82m深さ0.16m、下端で長さ2.04m幅0.72mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-48°-Eを示す。

木棺内からは、刀子1点、金銅製耳環2対4点の他140点のガラス玉が検出されている。刀子・耳環・ガラス玉が集中する地点に被葬者の頭部付近があったとすれば、被葬者は東枕安置に近い状況で埋葬されていたものと察知される。

出土遺物



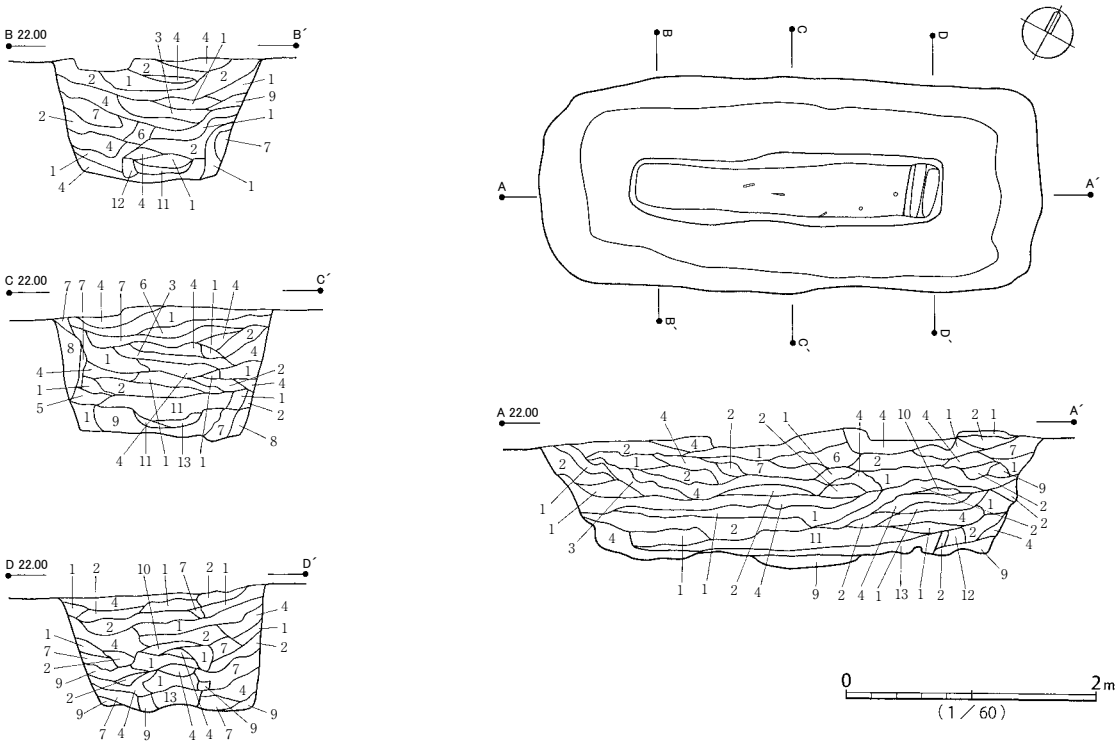
SM1024 墳丘

1 暗褐色土 ローム粒含む。硬く締まる。
2 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
3 黒色土 ローム粒若干含む。硬く締まる。
4 暗褐色土 ローム粒含む。
5 暗褐色土 ローム粒含む。墳丘流出土。
6 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。墳丘流出土。
7 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。墳丘流出土。
a ～ g 下層住居跡覆土

SM1024 周溝

1 暗褐色土 ローム粒含む。
2 黒色土 有機質土。
3 黒褐色土 ローム粒若干含む。やや締まる。
4 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
5 黄褐色土 壁崩壊ローム B。
6 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
7 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。やや締まる。
8 褐色土 汚れたローム粒・ローム B 主体。

Fig.276　SM1024 遺構 (1) 実測図



SM1024 第 1 主体部
1 暗褐色土 ローム粒・ローム B・粘土粒含む。
2 黒褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
3 暗褐色土 ローム粒含む。
4 黒褐色土 ローム粒・ローム B・
汚れたローム B 少量含む。
5 暗褐色土 ローム粒含む。軟質。
6 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
7 褐色土 ローム主体。
8 —
9 褐色土 ローム集中。汚れている。
10 褐色土 ローム粒主体。
11 暗褐色土 ローム粒・粘土粒含む。
12 暗褐色土 ローム粒若干・多量の粘土粒含む。軟質。
13 暗褐色土 ローム粒・粘土粒含む。締まる。

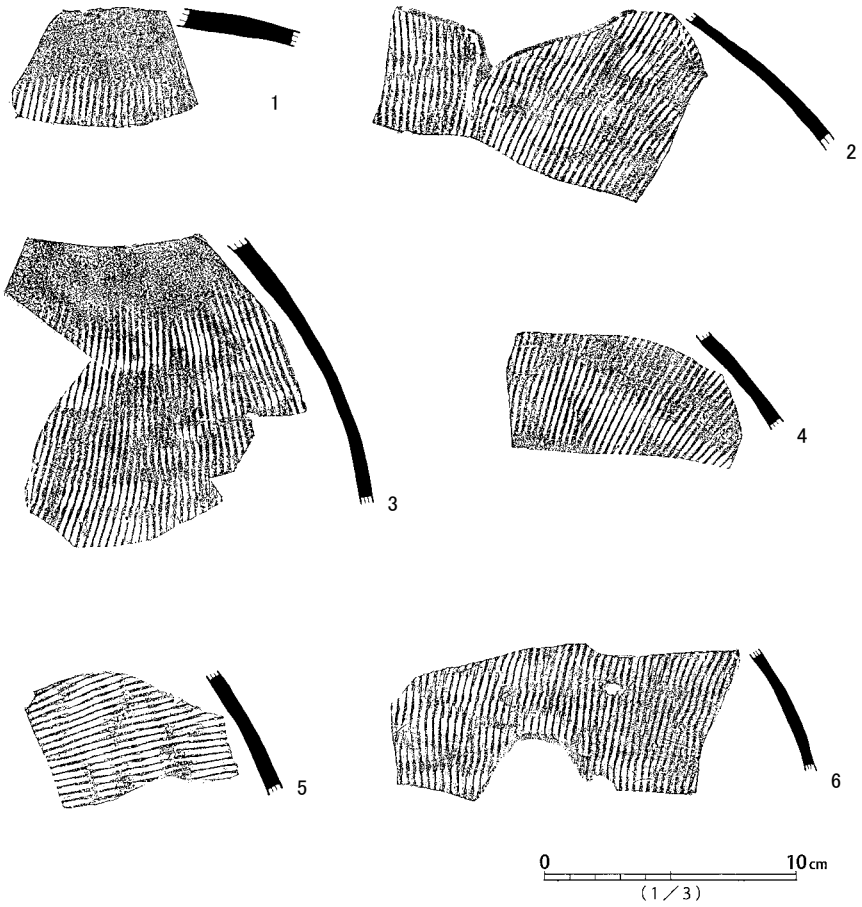
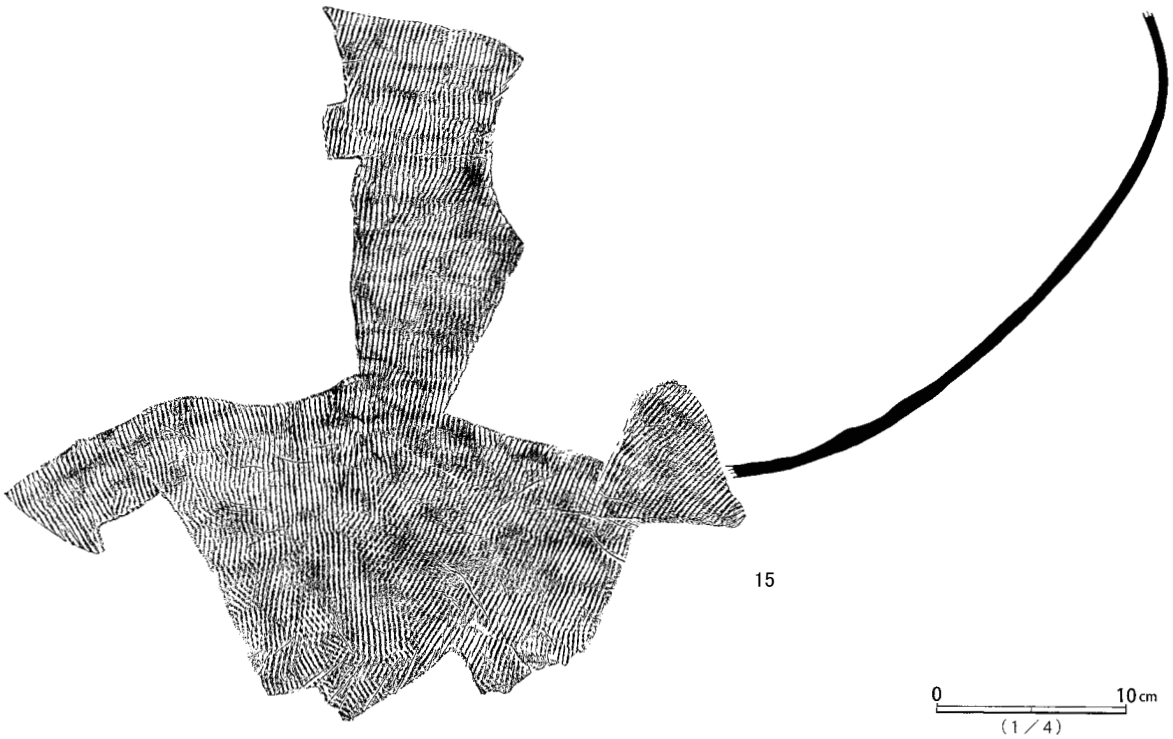
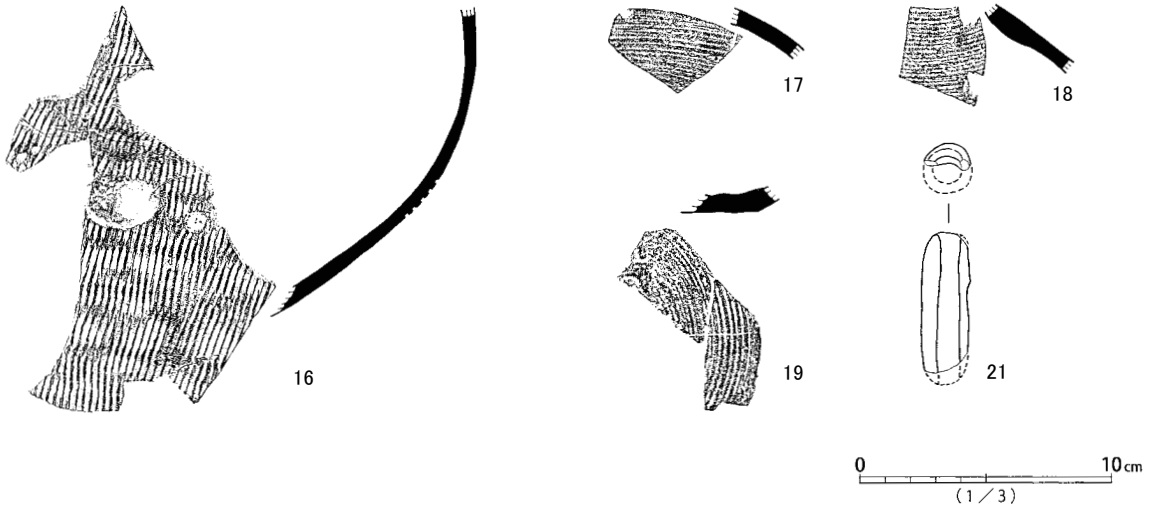


Fig.277　SM1024 遺構 (2)・遺物 (1) 実測図



Fig.278　SM1024 遺物 (2) 実測図





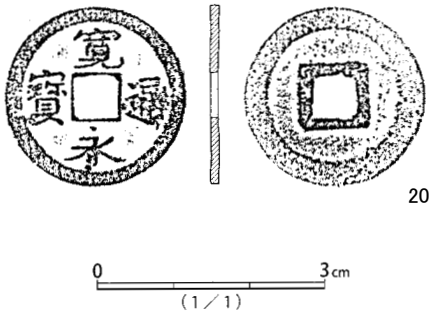
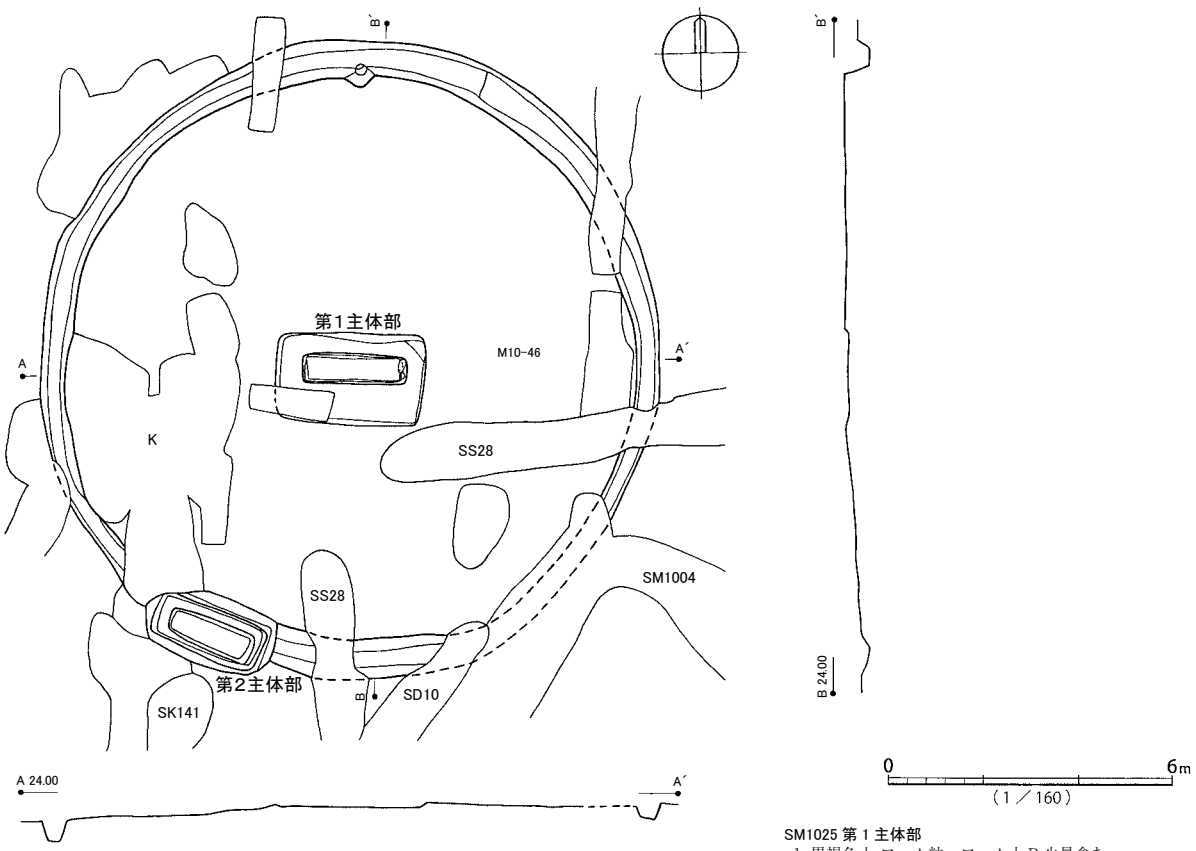


Fig.279　SM1024 遺物 (3) 実測図



SM1025 第 1 主体部
1 黒褐色土 ローム粒・ローム小Ｂ少量含む。
2 黒色土 ローム粒・粘土粒含む。
3 黒褐色土 ローム粒・ローム小Ｂ含む。
4 褐色土 ローム粒多量に含む。締まる。
5 暗褐色土 ローム粒・ローム Ｂ含む。
6 暗褐色土 汚れたローム粒・ローム Ｂ含む。
7 暗褐色土 有機質土中にローム粒含む。
8 黒色土 ローム粒含む。
9 黒褐色土 粘土粒含む。
10 黒色土 有機質土主体。
11 黒褐色土 有機質土中に粘土粒含む。

SM1025 第 2 主体部
1 黒褐色土 ローム粒含む。
2 黒褐色土 ローム小Ｂ含む。
3 暗褐色土 ローム小Ｂ多量に含む。
4 黒色土 ローム細粒多量に含む。
5 黒色土 ローム粒多量に含む。
6 黒色土 ローム粒・粘土粒混入。
7 黒褐色土 汚れたローム粒混入。
8 暗褐色土 ローム中Ｂ多量に含む。
9 暗褐色土 ローム小Ｂ・粘土粒含む。
10 暗褐色土 ローム小Ｂ含む。
11 暗褐色土 ローム粒・粘土粒の混合土。
12 暗褐色土 ローム小Ｂ・粘土粒主体。
13 暗褐色土 ローム大Ｂ混入。
14 黒色土 周溝覆土。ローム粒若干含む。

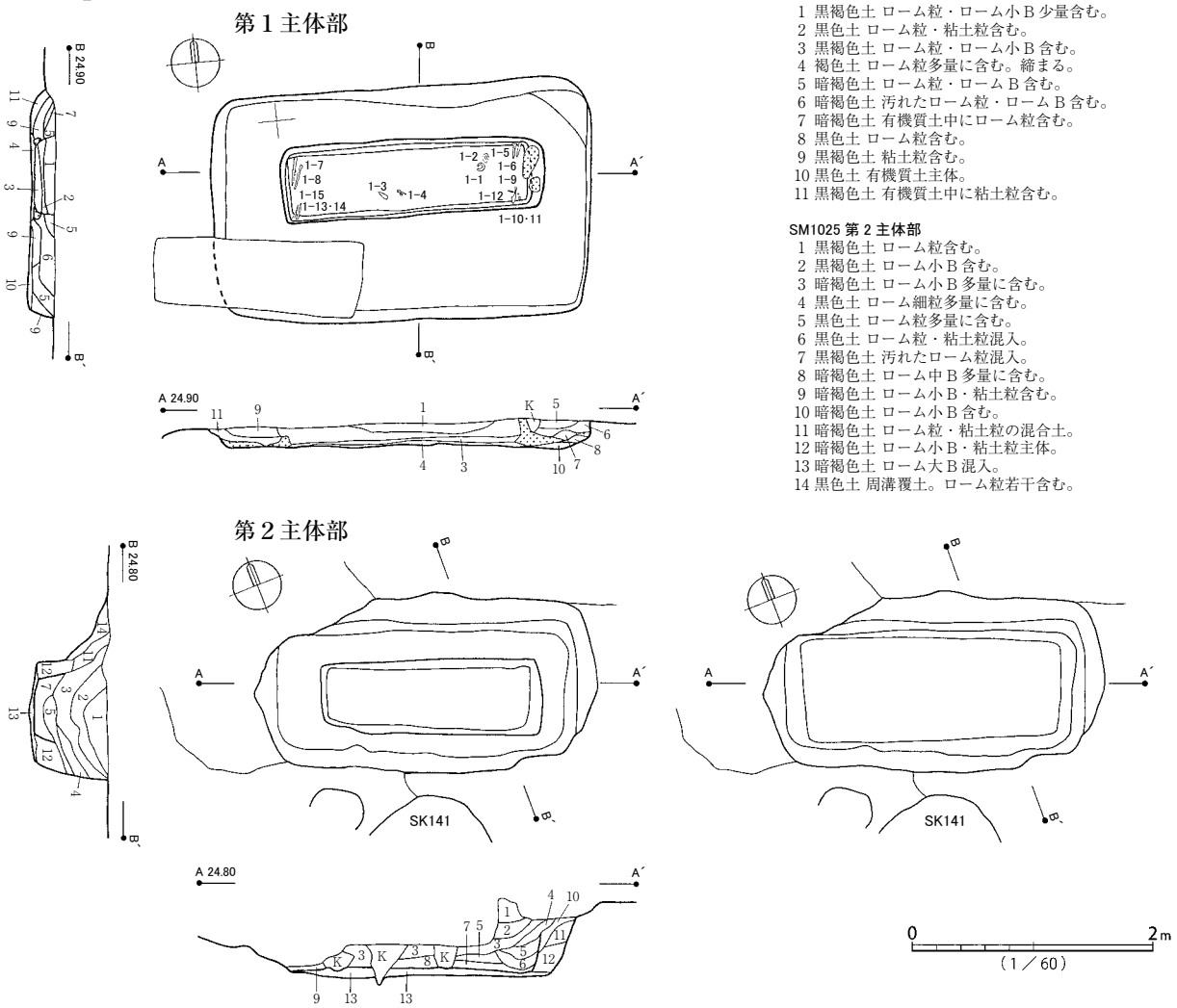


Fig.280　SM1025 遺構実測図

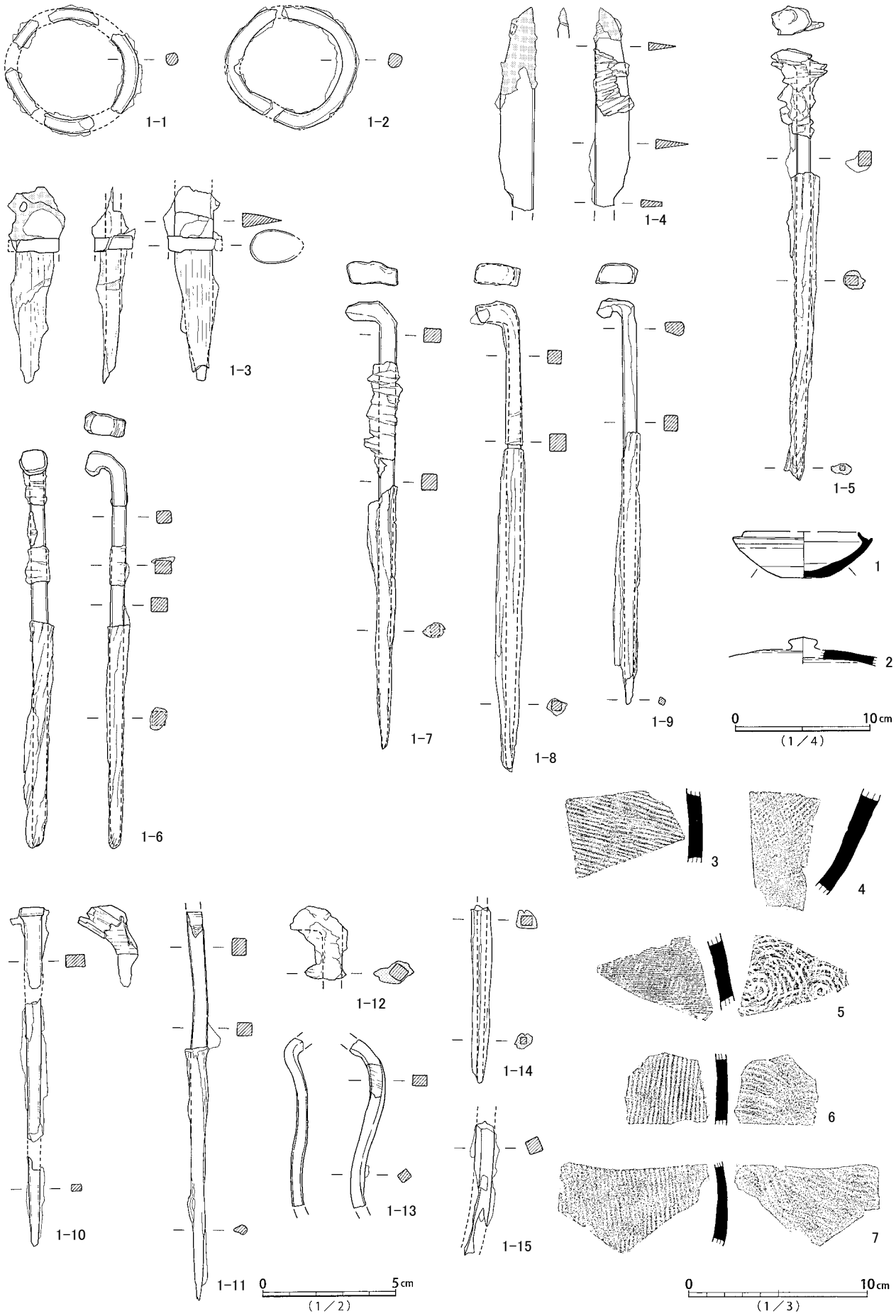
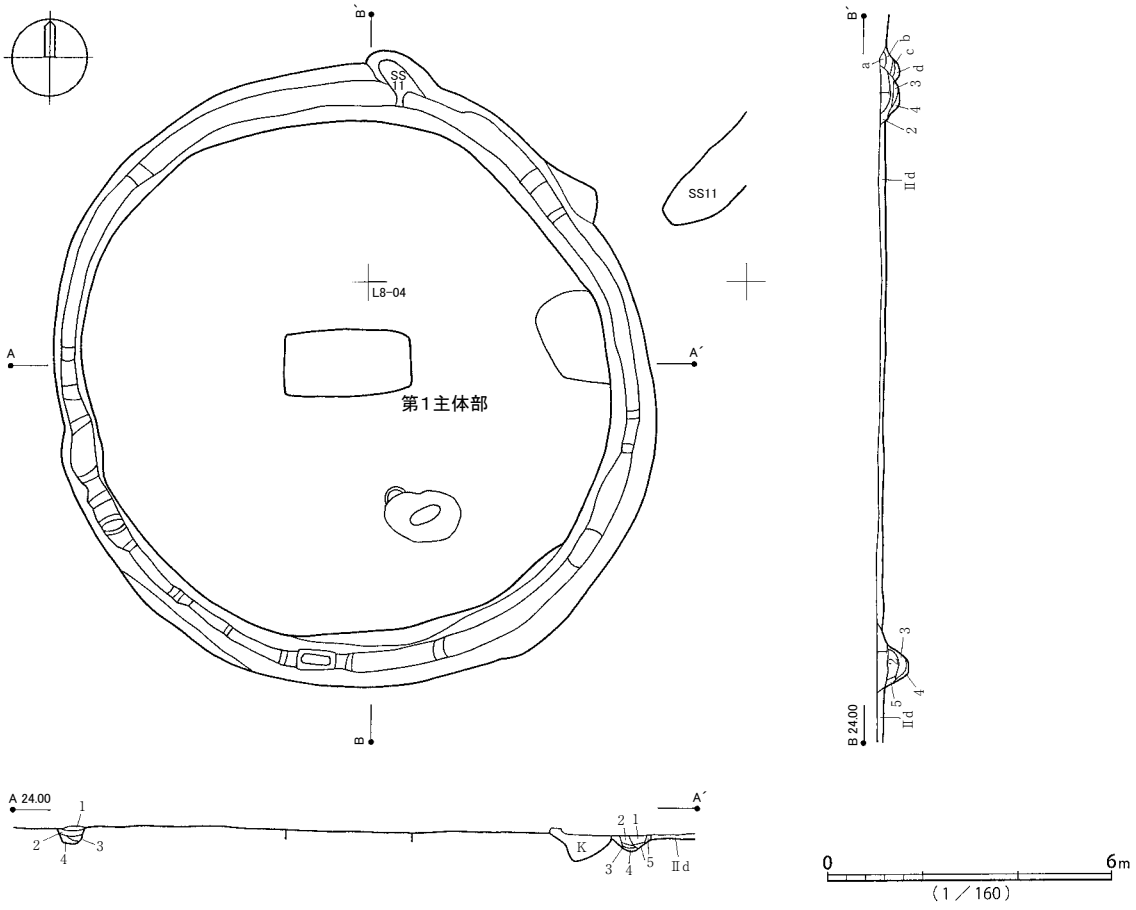


Fig.281　SM1025 遺物実測図



SM1026 周溝

1 黒褐色土 ローム粒若干含む。
2 黒色土 有機質土。
3 暗褐色土 ローム粒含む。
4 暗褐色土 ローム粒多く含む。
5 褐色土 ローム崩壊土。
a ― SS11 覆土。
b ― SS11 覆土。
c ― SS11 覆土。
d ― SS11 覆土。

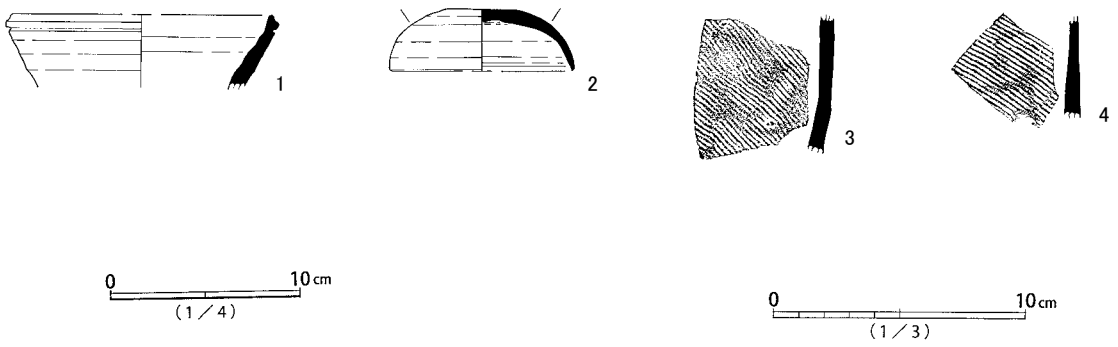


Fig.282　SM1026 遺構・遺物実測図

1-1は、被葬者の胸部付近と想定される位置から検出された刀子である。茎部の木質に、柄金具の痕跡が残存する。1-2～4は金銅製耳環2対4点であるが、出土状況から見て被葬者2名とは思えない。耳環1-4と5の周囲には、直径7.5㎝前後の範囲に、円形状の淡い朱色の変色範囲が残存する。出土位置から見れば、1-3・5と1-2・4がセット関係と思われるが、サイズ的には1-4・5が適正と想定されるほど大きさにバラつきがある。1-2・4は、おそらく被葬者の両手に、皮や紐などで巻かれた腕輪状製品の装飾品として使用されていた可能性が考えられる。1-6～145はガラス玉であり、1-137～145の一括品も含めて、被葬者の頭部あたりを装飾していたものと想定される。

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。このことから、本墳の築造時期の確定は極めて困難である。なお、本墳の埋葬施設内からは、大刀や鉄族などの武器類が検出されなかったことから、被葬者が女性であった可能性が高い。

SM1028　セ28地区　（Fig.286～287、PL.111・170・188～189）

S・T-8グリッドに位置する。下層のSS108・109を削平し、南側墳丘裾部の一部をSK231に削平される円墳である。緩斜面に位置し東から南側にかけて流出範囲が認められ、遺存状況は不良である。旧遺構番号はセ28-045号遺構である。

墳丘と周溝

長径10.94m、短径10.56m、現状での盛土の高さは1.04mを測り、主軸方位はN-18°-Wを示す。周溝内側面積は89.9㎡を測り、諏訪台古墳群中の円墳では第15位の規模である。確認面での周溝幅は、0.90～1.92m、深さは0.34～0.44m、土層断面では0.42～0.70mを測り、東南側が狭く浅く、西北側が広く深い傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

円台部中央に1基検出されている。他に、南側周溝に接する内側端部から、須恵器短頸壺と土師器坏転用蓋のセットで、単独の蔵骨器が検出されている。転用蓋の土師器坏から、時期的には8世紀第4四半期の年代観が想定され、本墳への追葬とは異なる段階での単独の火葬墓であろう。

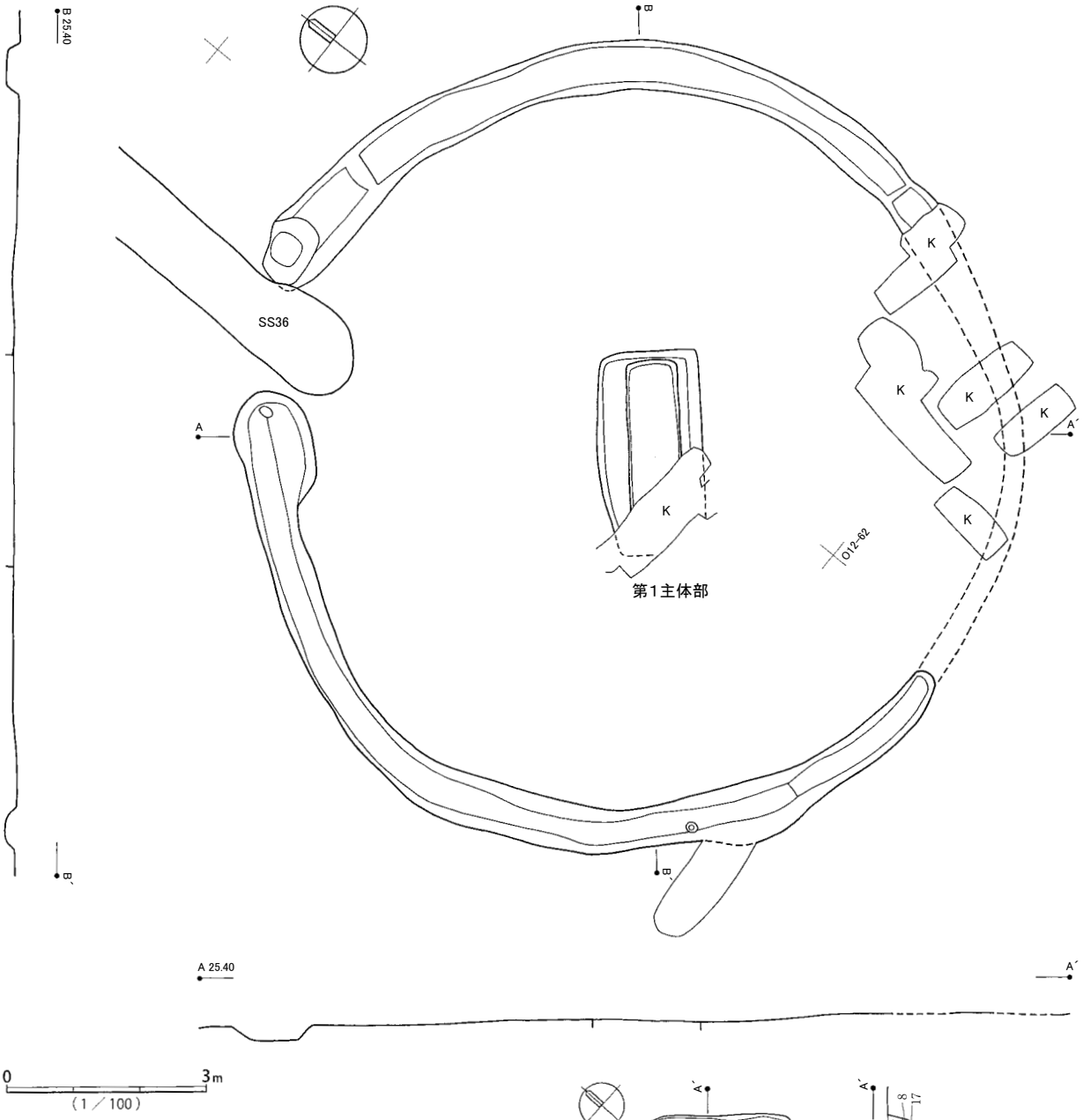
第1主体部

埋葬施設は、円台部中央に位置する木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径2.94m短径1.06m深さ0.52m、下端で長径2.70m短径0.88mを測り、主軸方位はN-79°-Eを示す。墓壙長軸の掘り方から7.5°北に振れた位置で、木口の両側と周囲の一部を粘土で固定した木棺痕が検出されている。木棺規模は、上端で長さ2.26m幅0.60m深さ0.44m、下端で長さ2.14m幅0.50mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-71.5°-Eを示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳の周溝内からは1～７の土師器・須恵器が検出されている。これ等の遺物の内、2・4を除けば全て一括で取り上げられたものである。1は古墳時代前期の甕で本墳には直接伴わない。2は6世紀末葉～7世紀初頭に位置付けられる湖西産フラスコ瓶で、西側周溝底より37㎝浮いた状態で検出されている。4も脚部の造り方などから同段階に想定される湖西産の脚付短頸壺の類であり、東側周溝底密着～33㎝浮いた状態で検出されている。これらの遺物と7の土師器坏は時期的にも同段階で矛盾がないことから、本墳の築造時期はTK-209型式期でも古段階から新段階への移行期に相当し、実年代では西



SM1027 第 1 主体部

1 暗褐色土 ローム粒と有機質土の混合土。
2 暗褐色土 1 層よりローム粒少なく暗い。
3 黒褐色土 褐色土と黒褐色土の混合土。
4 暗褐色土 2 層に似る。ローム大粒混入。
5 暗褐色土 4 層の硬質土。
6 暗褐色土 ローム粒少量含む。
7 暗褐色土 有機質土とローム粒の混合土。
8 暗褐色土 黒褐色土とローム粒の混合土。
棺底土硬く締まる。
9 暗褐色土 ローム粒含む。締まりなし。
10 褐色土 ローム主体。暗褐色土混じる。
11 暗褐色土 ローム粒と黒褐色土の混合土。
ローム量多い。
12 暗褐色土 11 層より黒褐色土の量多い。
13 暗褐色土 黒褐色土とローム粒の混合土。
14 暗褐色土 黒褐色土と暗褐色土の混合土。
ローム粒混じる。
15 暗褐色土 ローム主体。
16 暗褐色土 ローム主体。15 層より軟質。
17 暗褐色土 ローム主体。暗褐色土混入。

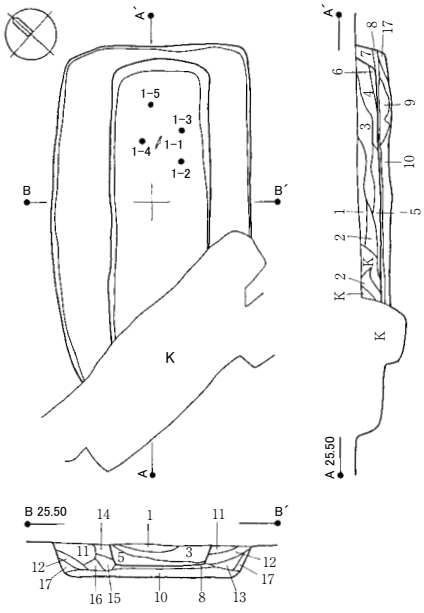


Fig.283　SM1027 遺構実測図

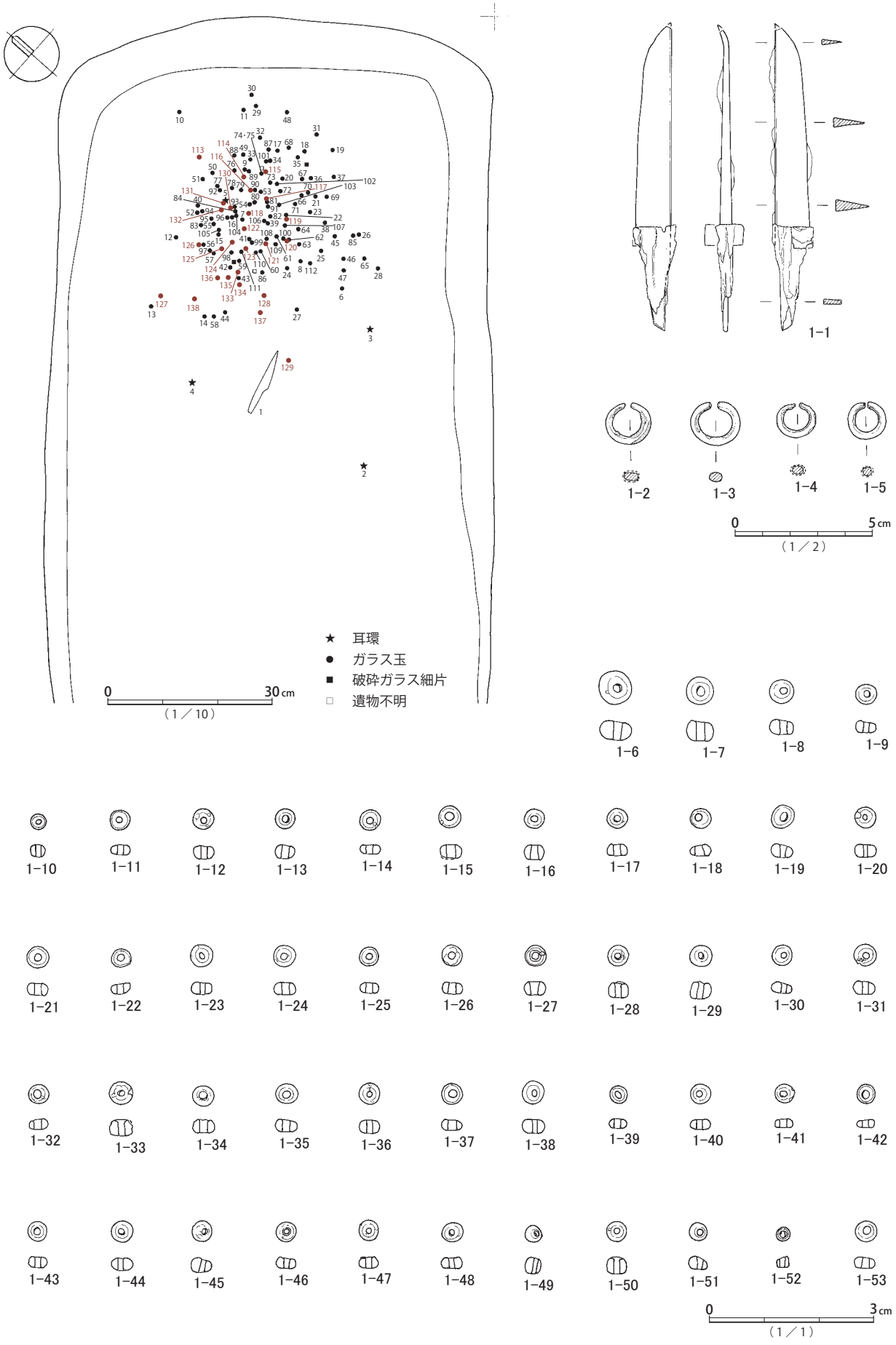


Fig.284　SM1027 遺物出土詳細・遺物 (1) 実測図

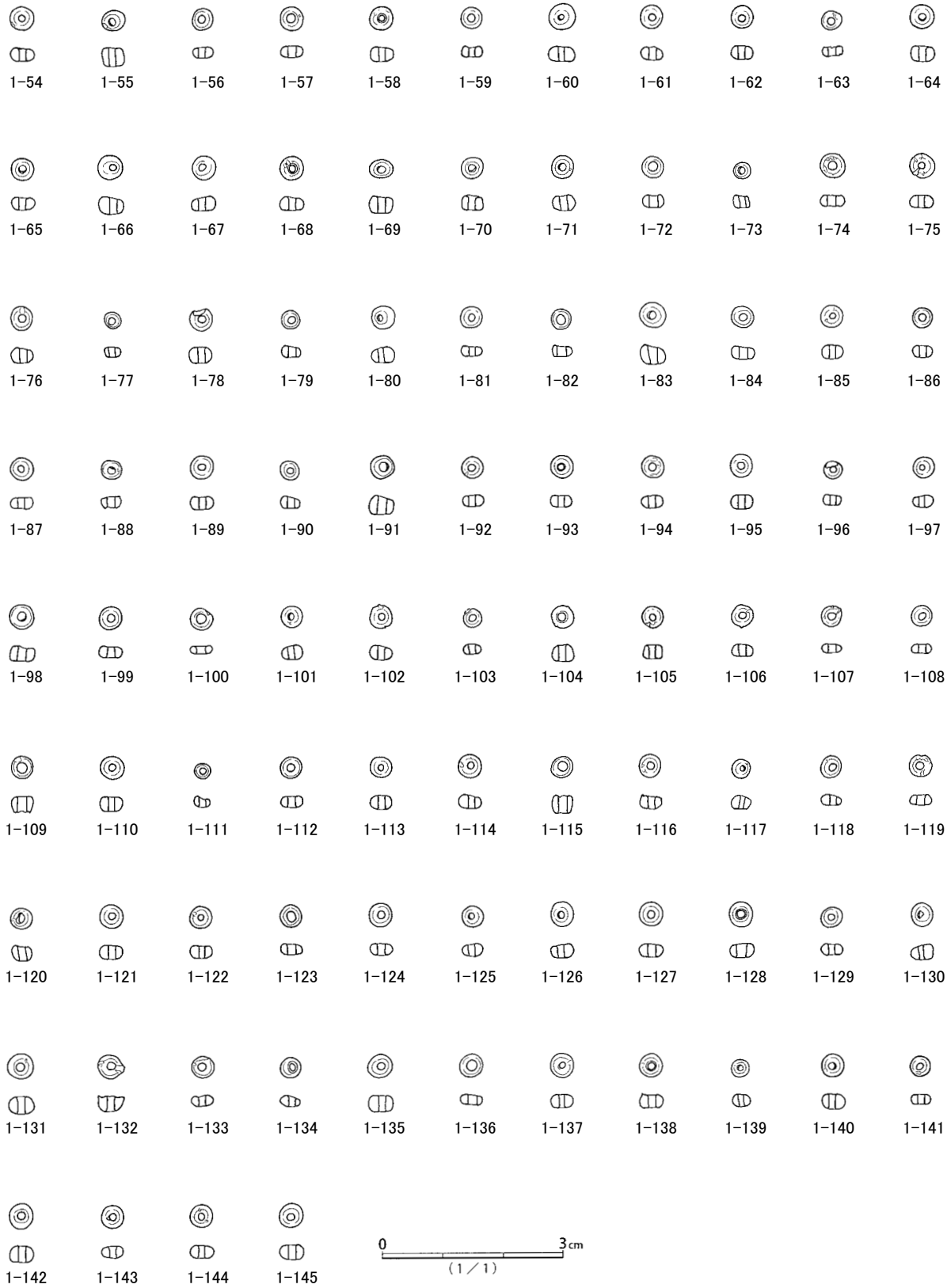


Fig.285　SM1027 遺物 (2) 実測図

暦600年前後に位置付けられる。

SM1029　セ28・099地区　（Fig.288、PL.170・188～189）

P・Q-11・12グリッドに位置する。SM1005の前方部と周溝を接し、下層に位置するSS41と重複する円墳である。旧遺構番号はセ28-030・099-4064号遺構である。

墳丘と周溝

長径11.00m、短径10.10m、現状での盛土の高さは0.28mを測り、主軸方位はN-9°-Eを示す。周溝内側面積は88.3㎡を測り、諏訪台古墳群中の円墳では第16位の規模である。確認面での周溝幅は、0.76～2.10m、深さは0.36～0.64m、土層断面では0.66～0.90mを測り、西北側が狭く浅く、東南側が広く深い傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳の周溝内からは5点の遺物が検出されているが、全て一括で取り上げられたものである。1は古墳時代前期の甕で本墳には直接伴わない。2～5は須恵器片であり、4・5は転用砥石である。5は内面を転用砥石として使用したことによって、青海波が完全に消滅している。本墳の出土遺物からは、築造段階を模索することが著しく困難である。ただし、他の円墳の築造時期から、著しく遡上、もしくは後退するとも考え難い。

SM1030　セ28地区　（Fig.289、PL.111～112）

R・Q-13グリッドに位置し、下層のSS44・46と重複する円墳である。周溝の遺存状態は極めて不良で、周溝は途切れ途切れに巡っている。旧遺構番号はセ28-151号遺構である。

墳丘と周溝

長径10.04m、短径10.02m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-90°を示す。途切れながら巡る推定周溝内側面積は79.5㎡を測り、諏訪台古墳群中の円墳では第17位の規模である。確認面での周溝幅は、0.38～0.62m、深さは0.30mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

円台部内中央に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、円台部中央に位置する木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径2.62m短径1.90m深さ0.60m、下端で長径2.44m短径1.24mを測り、主軸方位はN-90°を示す。平面では捉えきれなかったが、土層断面図では木棺痕と想定される断層が確認されている。このことによって、本来は、上端で長さ1.86m、幅0.58m、深さ0.34m程度の木棺が存在していたものと判断される。

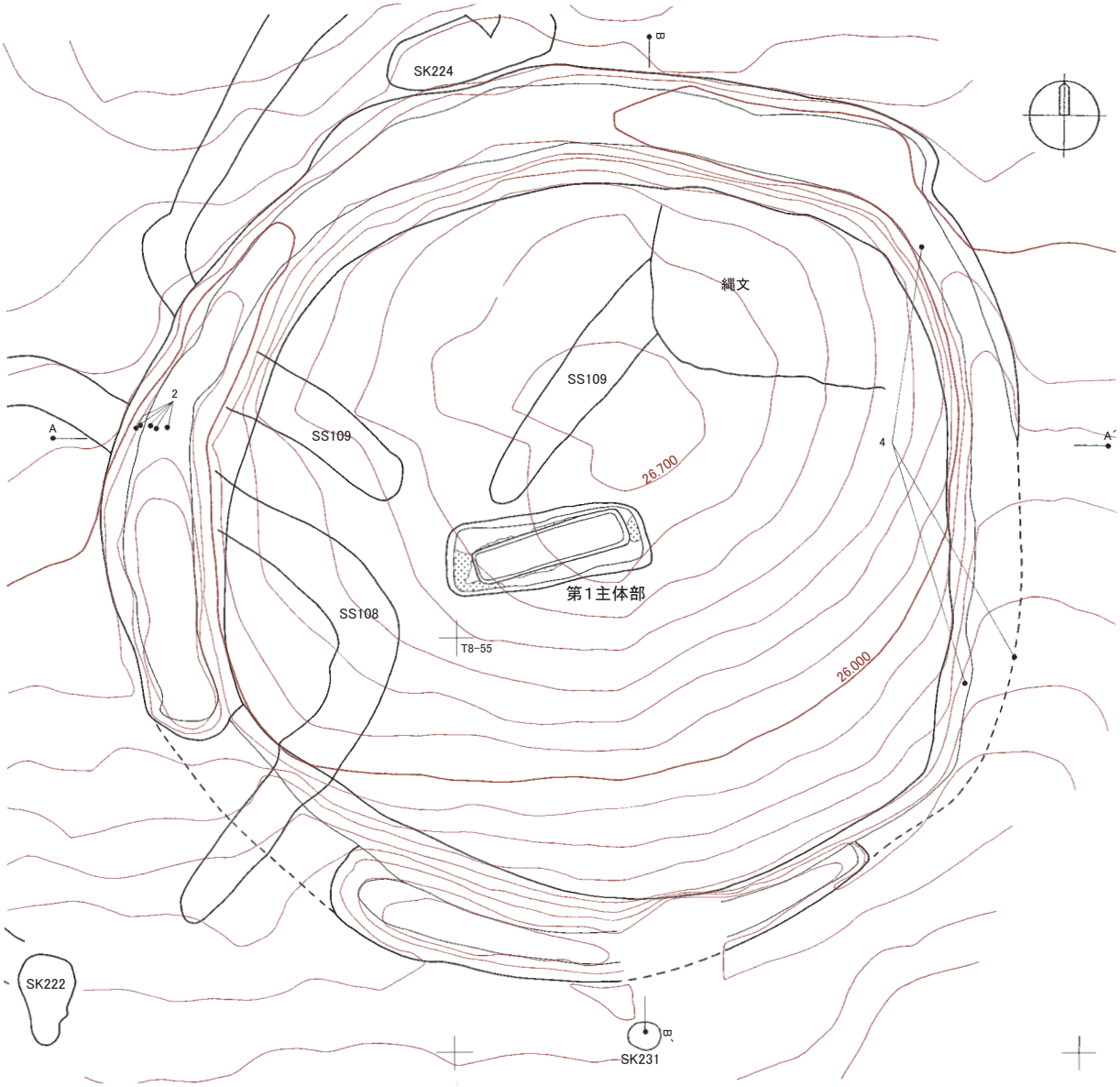
墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

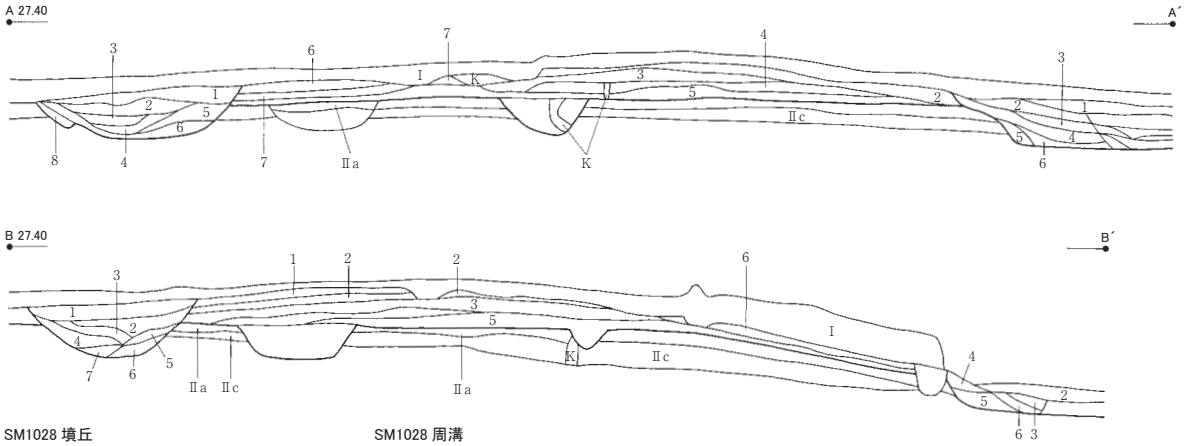
出土遺物

本墳の周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1031　セ28地区　（Fig.290、PL.112・189）

Q・R-10・11グリッドに位置し、下層のSS64と重複する円墳である。旧遺構番号はセ28-035号遺構





SM1028 墳丘

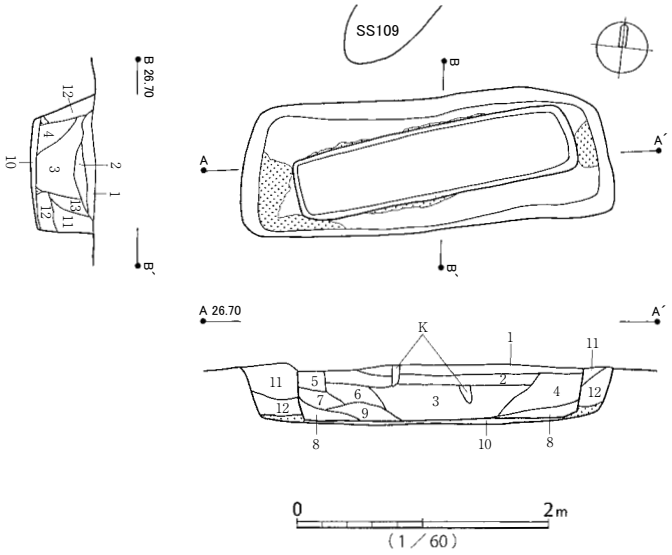
1 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
　　墳丘流出土。締まりなし。
2 褐色土 ローム粒含む。
3 暗褐色土 ローム粒・ローム B 少量含む。
4 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
5 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
6 褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
7 暗褐色土 ローム粒・ローム B 少量含む。

SM1028 周溝

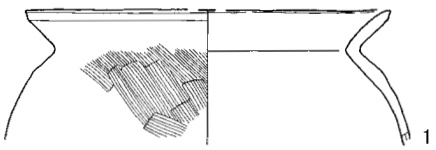
1 褐色土 ローム粒含む。墳丘流出土。締まりなし。
2 黒褐色土 ローム粒若干と褐色斑を含む。
3 黒褐色土 ローム粒含む。
4 暗褐色土 有機質土中にローム粒若干含む。
5 暗褐色土 ローム粒含む。
6 暗褐色土 ローム粒・汚れたローム B・
　　ローム小 B 斑点状に含む。
7 褐色土 壁崩落。汚れたローム B。
8 暗褐色土 ローム粒・ローム B 少量含む。

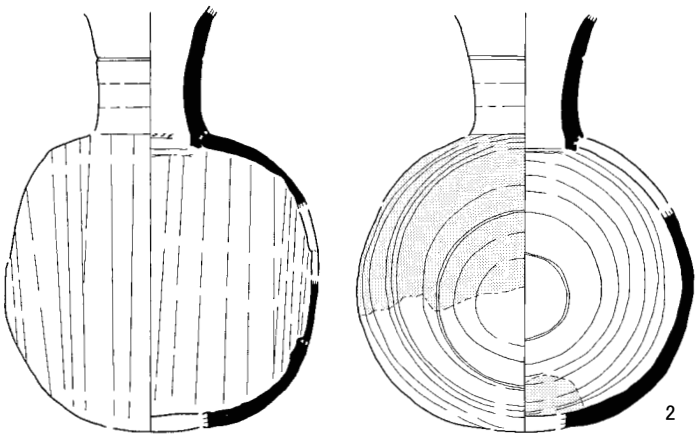
0　3m
（1／100）

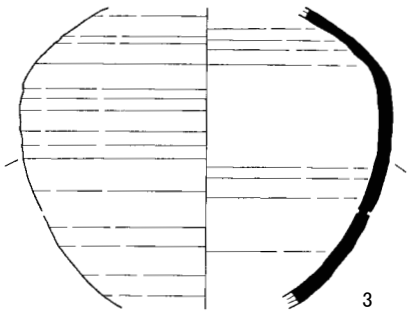
Fig.286　SM1028 遺構 (1) 実測図

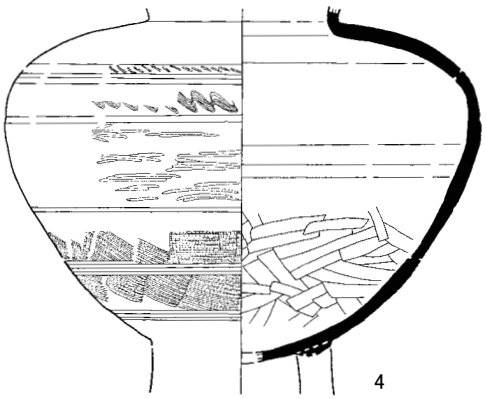


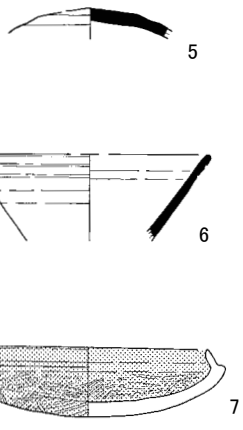
SM1028 第 1 主体部
1 暗褐色土 ローム粒含む。
2 暗褐色土 ローム粒含む。締まりなし。
3 暗褐色土 ローム粒・粘土粒含む。
4 暗褐色土 ローム粒・ローム小Ｂを若干含む。
5 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ若干含む。締まり弱。
6 暗褐色土 ローム粒・粘土粒若干含む。
7 暗褐色土 ローム粒含む。
8 暗褐色土 ローム粒・粘土粒含む。
9 褐色土 ローム粒・粘土粒やや多く含む。
10 明褐色土 ローム粒主体。やや締まる。
11 褐色土 ローム小Ｂ・粘土Ｂ・粘土粒含む。
12 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ・粘土粒含む。











0 10cm
（1／4）

Fig.287　SM1028 遺構 (2)・遺物実測図

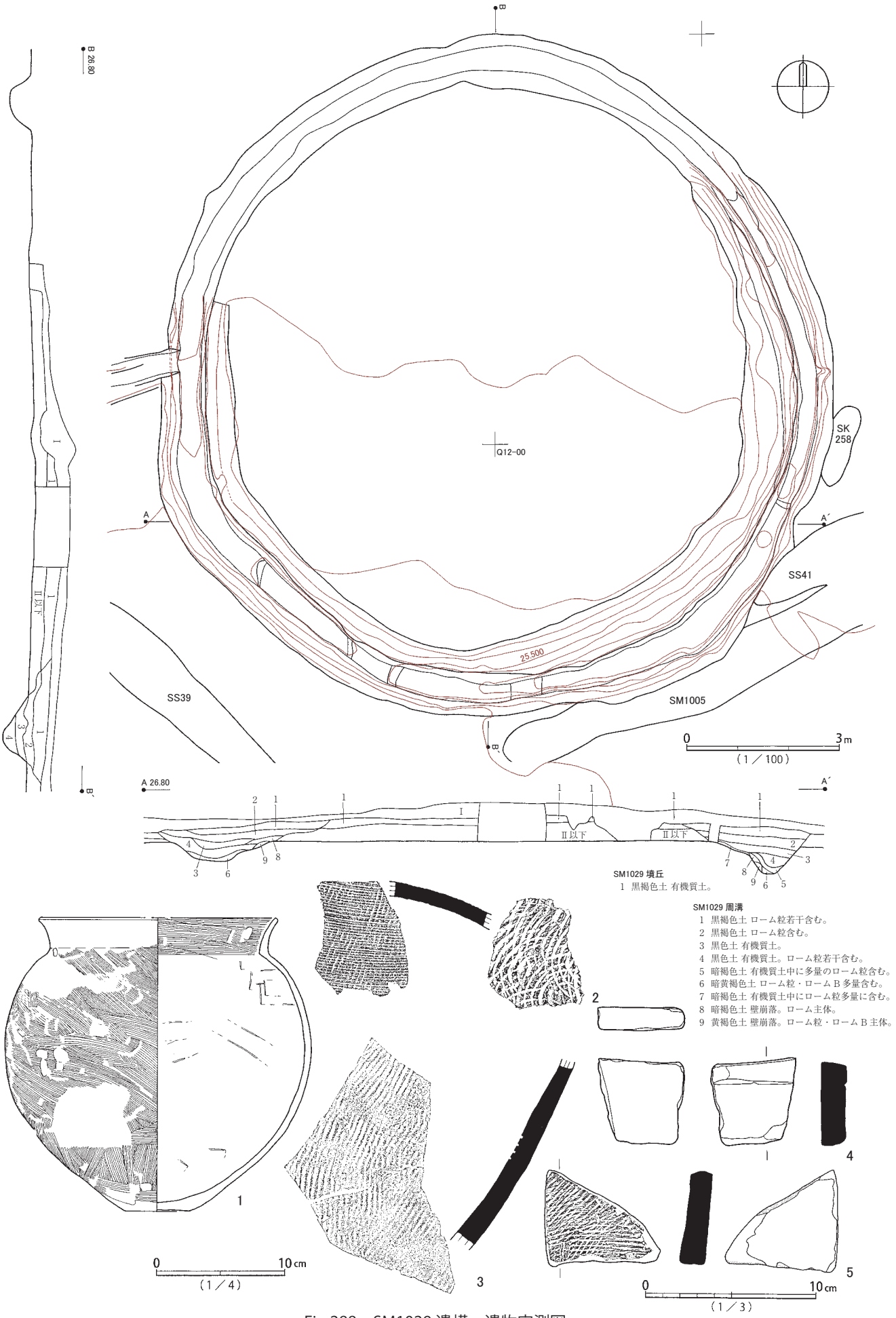


Fig.288　SM1029 遺構・遺物実測図

である。

墳丘と周溝

長径9.44m、短径8.78m、現状での盛土の高さは0.16mを測り、主軸方位はN-15°-Eを示す。周溝内側面積は63.5㎡を測り、諏訪台古墳群中の円墳では第18位の規模である。確認面での周溝幅は、1.44～2.44m、確認面での深さは0.38～0.64m、土層断面では0.66～0.88mを測り、西北側が狭く浅く、東南側が広く深い傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳の周溝内からは、1の須恵器坏蓋1点が覆土一括で検出されている。口唇部に返りが存在しないことや口径等から、8世紀前半代の遺物と判断されるが、円墳たる本墳の墳形から、本墳の築造時期とは無関係の可能性が高い。よって本墳の築造時期を正確に判定する資料に乏しく、その確定は著しく困難である。ただし、諏訪台古墳群中の他の円墳の築造時期から判断し、それら円墳群から著しく遡上、もしくは後退するとも考え難い。あるいは8世紀前半代まで、円墳が残存する1例なのであろうか。いずれにせよ本墳の築造時期は保留としておきたい。

SM1032　セ28地区　（Fig.291、PL.112・170）

S-6・7グリッドに位置し、下層のSS104・111を削平し、SS103・SM1022の周溝と本墳周溝が接する円墳である。下層のSS104・111の周溝を先行して調査しているため、調査時の遺構の遺存度は不良である。旧遺構番号はセ28-327号遺構である。

墳丘と周溝

長径8.88m、推定短径7.22m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-7.5°-Eを示す。推定周溝内側面積は(63.3)㎡を測り、諏訪台古墳群中の円墳では第19位の規模である。確認面での周溝幅は、0.54～1.24m、確認面での深さは0.22～0.32mを測り、東西北側が狭く南側が広いが、深さはほぼ同等の傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

円台部中央やや南側に1基、東側周溝内に1基の合計2基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、円台部中央やや南側に位置する木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径2.22m短径1.14m深さ0.50m、下端で長径2.10m短径1.08mを測り、主軸方位はN-81°-Eを示す。墓壙のほぼ中央から北側寄りに、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ1.92m幅0.90m、下端で長さ1.54m幅0.40m深さ0.24mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-85°-Eを示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

第2主体部

北東周溝内に存在する土壙である。新旧逆調査のため、土壙の一部を下層のSS111に削平されたかのように見えるが、本墳の方が新しい。土壙規模は、上端で長径2.40m短径0.90m深さ0.56m、下端で長径2.20m短径0.50mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-41°-Wを示す。土層断面からは木棺の痕跡が認められていない。

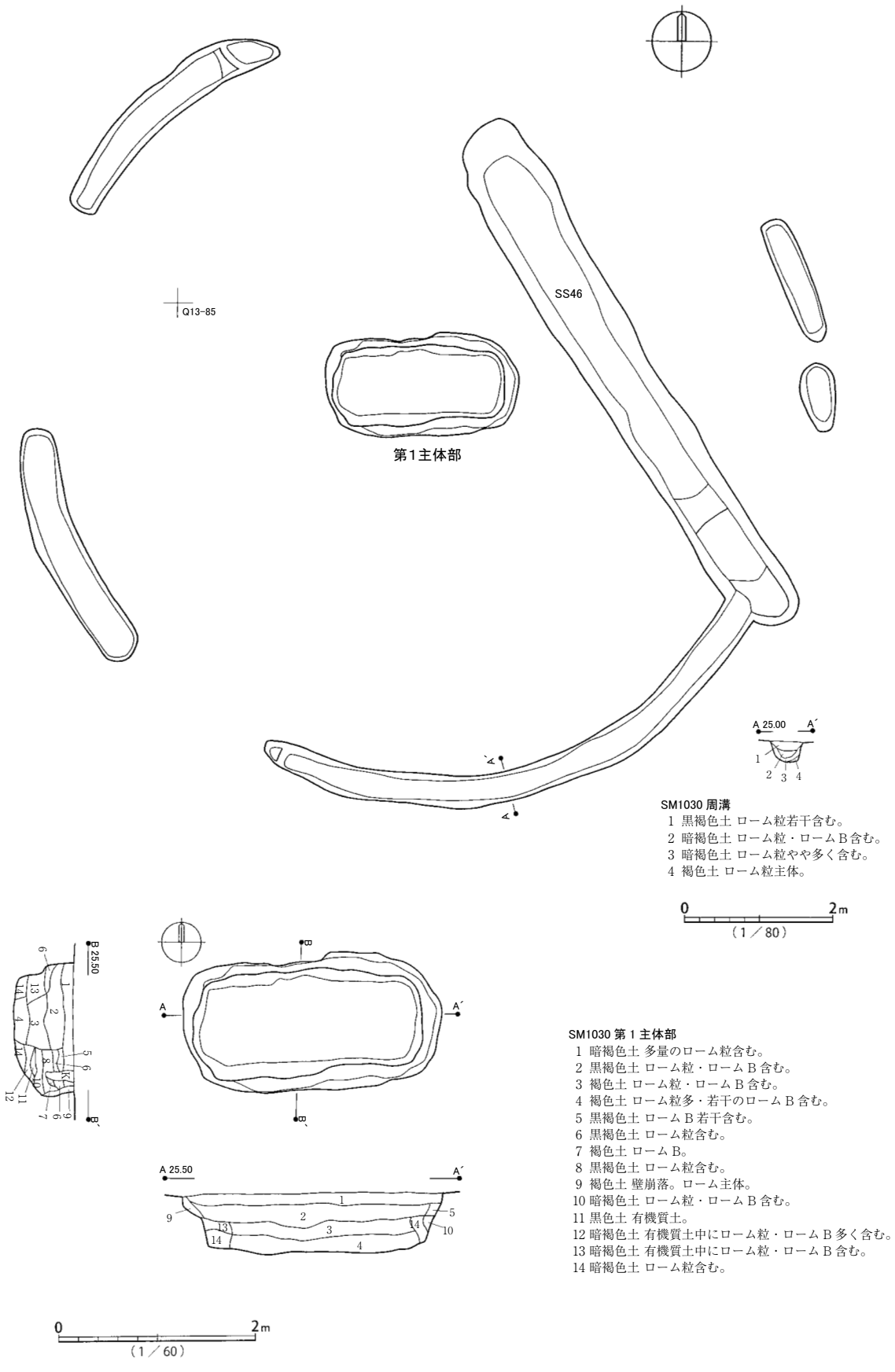
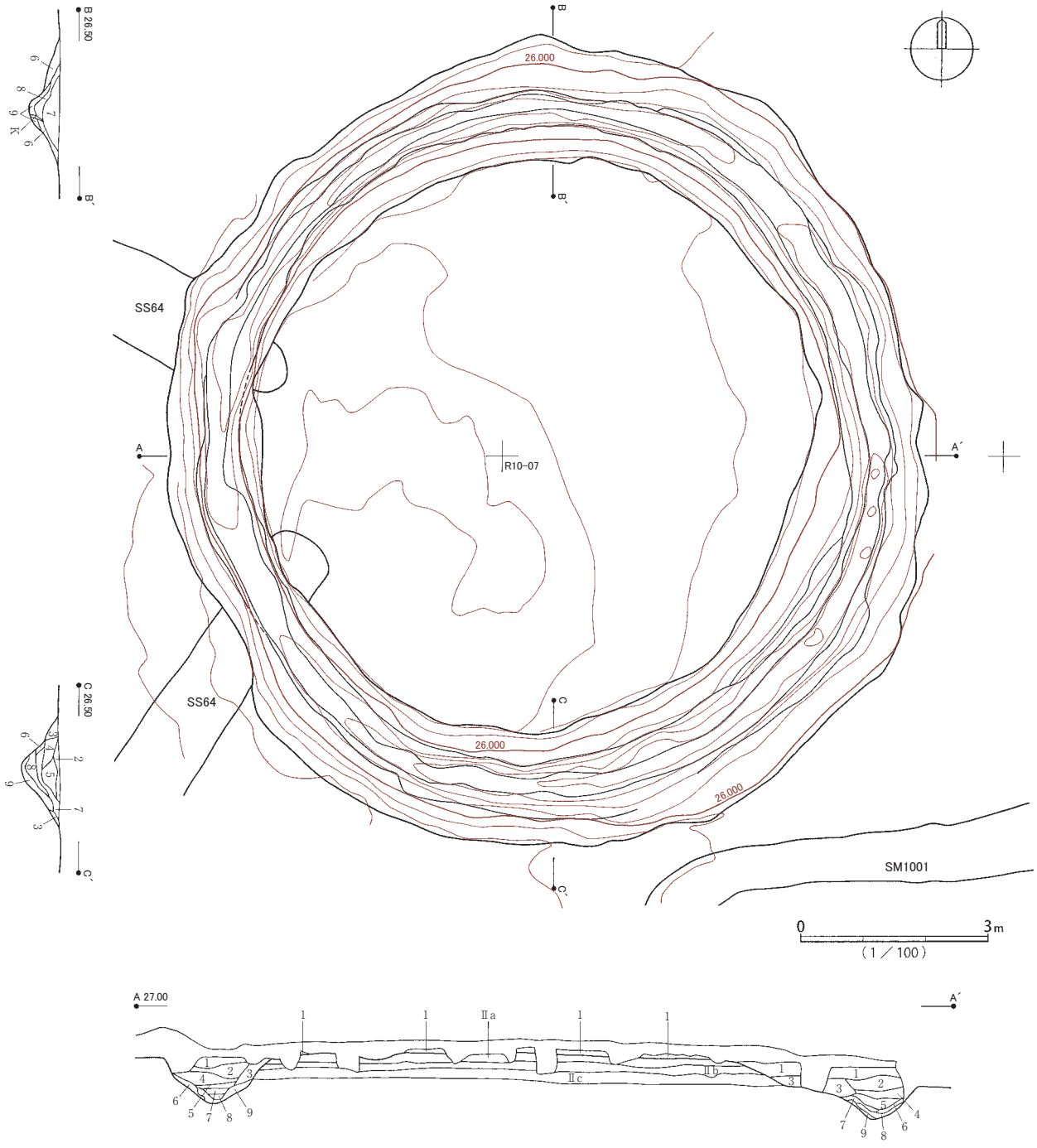


Fig.289　SM1030 遺構実測図



SM1031 墳丘
1 褐色土 ローム粒含む。

SM1031 周溝
1 暗褐色土 ローム粒含む。
2 黒色土 有機質土。
3 褐色土 ローム粒含む。
4 暗褐色土 淡褐色土斑点状に含む。
5 明褐色土 ローム粒多量に含む。
6 黄褐色土 壁崩落ローム。
7 明褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。
8 褐色土 ローム粒・ロームＢ多く含む。
9 明褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。

Fig.290　SM1031 遺構・遺物実測図

土壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳の周溝内からは、覆土一括で取り上げられた土師器坏1点が検出されている。1の土師器模倣坏は、周辺でもかなり矮小化した段階に想定される製品であり、内外面に入念な篦磨きが施されている。当域の土師器編年では、TK-217型式併行期の古～新段階に盛行する器種と捉えられ、実年代では640～50年代に位置付けられる。よって本墳の築造時期もそのあたりに想定することが可能であろう。

SM1033　099・神社裏地区　（Fig.292、PL.170）

O-8グリッドに位置し、下層のSS24と重複する円墳である。調査区域内ではその1/2を調査し、調査区域外に残り1/2が存在するものと考えられる。旧遺構番号は099-4053・神社裏-1033・1034号遺構である。

墳丘と周溝

長径8.52m、残存短径4.42m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-45°-Eを示す。残存する円台部をおよそ1/2と見れば、推定周溝内側面積は(63.0)㎡を測り、諏訪台古墳群中の円墳では第20位の規模である。確認面での周溝幅は、0.70～1.14m、確認面での深さは0.34～0.42mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、東西が狭く北側が広い傾向を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳の周溝内からは、覆土一括で取り上げられた土師器坏1点が検出されている。1の模倣坏は、当域の土師器編年では、TK-217型式併行期の新段階～TK-46型式初頭併行期に盛行する器種であり、実年代では660年代の年代観が想定される。

SM1034　セ28地区　（Fig.292、PL.112）

R-9グリッドに位置し、下層のSS64・65と重複し、SM1154に周溝の一部を削平される円墳である。旧遺構番号はセ28-040号遺構である。

墳丘と周溝

長径6.78m、短径6.18m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-81°-Eを示す。周溝内側面積は33.0㎡を測り、諏訪台古墳群中の円墳では第23位の規模であるが、紙面の都合上、ここに掲載し報告する。

本墳は、面積測定可能な円墳の中でも、最小規模の円墳であり、面積で直上のSM1036に対して6.3㎡少ない。他の円墳群と対比した場合でも、著しく縮小した傾向が認められる。

確認面での周溝幅は、0.36～0.56m、深さは0.12～0.28mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

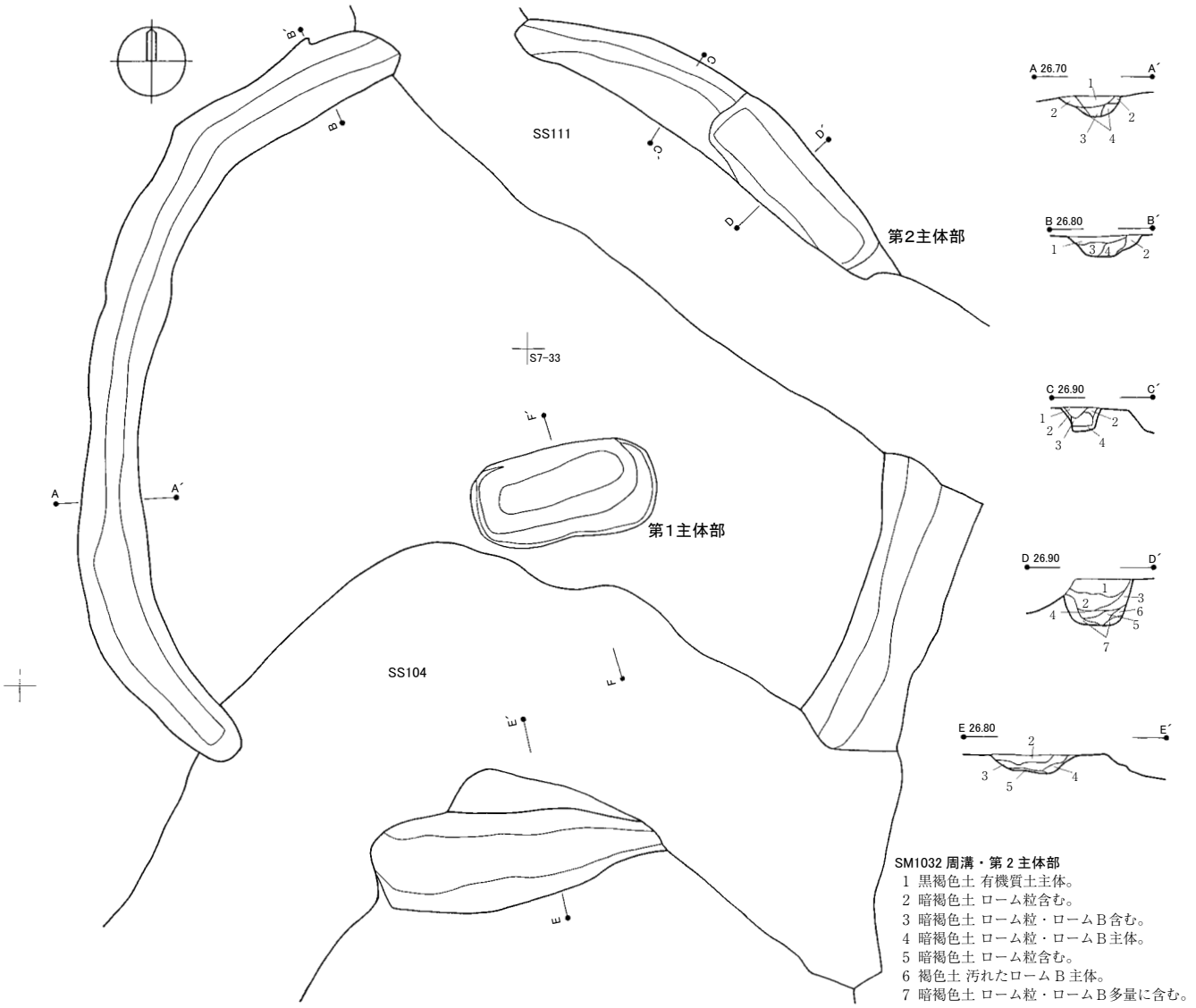
埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳からは、遺物が全く検出されなかった。よって本墳の築造時期も不明である。

SM1035　セ28地区　（Fig.293、PL.112）



第１主体部

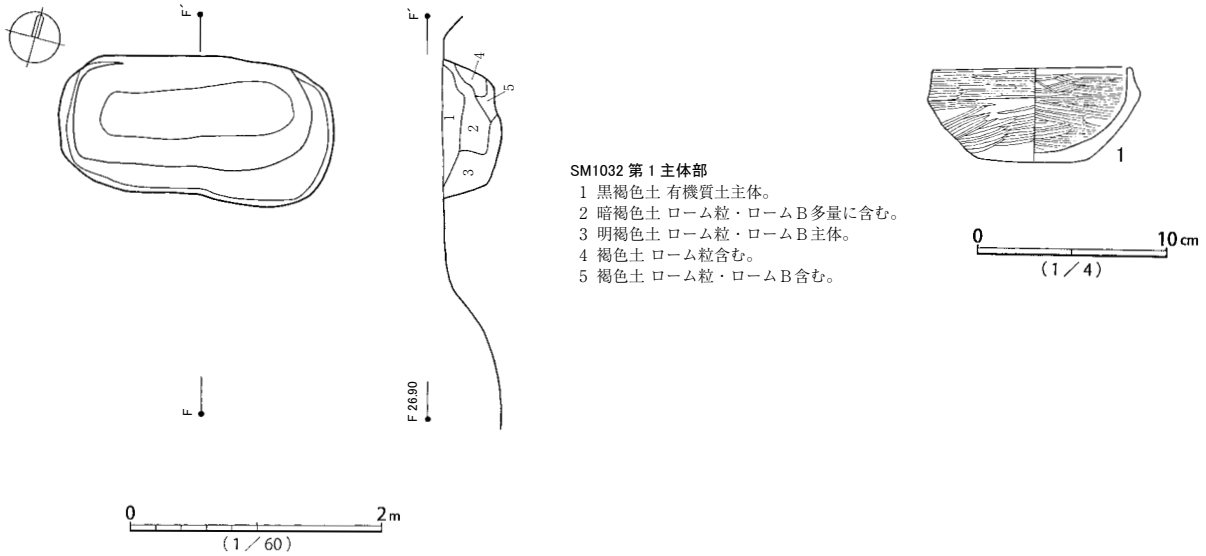


Fig.291　SM1032 遺構・遺物実測図

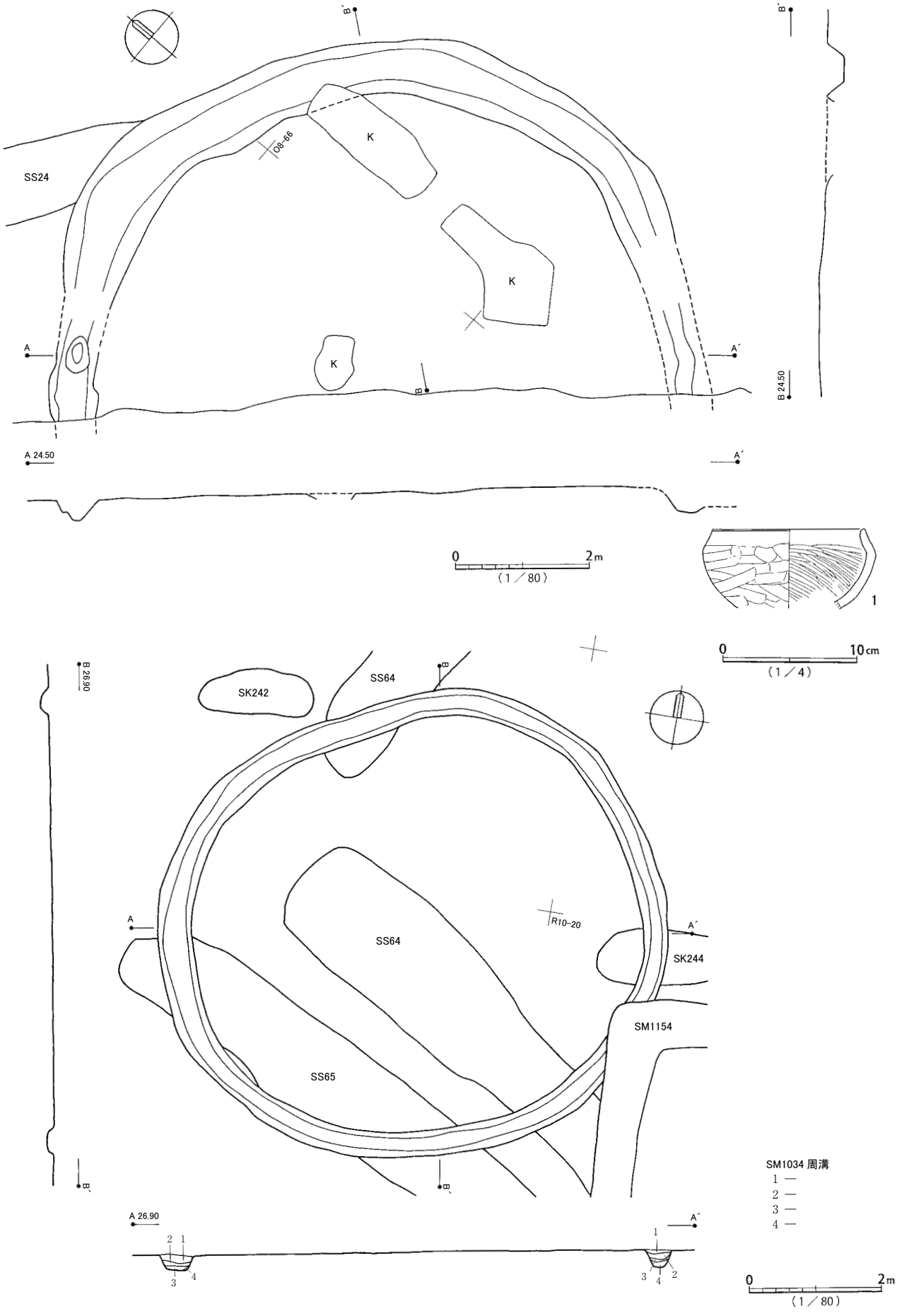


Fig.292　SM1033 遺構・遺物、SM1034 遺構実測図

Q-9・10グリッドに位置し、下層のSS69と重複し、SM1068の東側周溝と接近して検出された円墳である。旧遺構番号はセ28-036号遺構である。

墳丘と周溝

長径8.34m、短径7.66m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-51°-Eを示す。周溝内側面積は50.8㎡を測り、諏訪台古墳群中の円墳では第21位の規模であるが、紙面の都合上、ここに掲載し報告する。

確認面での周溝幅は、0.86～1.88m、深さは0.21～0.46m、土層断面では0.66～0.86mを測り、南側の周溝幅が広い傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳からは、遺物が全く検出されなかった。

SM1036　099地区　（Fig.294、PL.113・189）

K-13・14グリッドに位置し、単独で存在する円墳である。旧遺構番号は099-4023号遺構である。

墳丘と周溝

長径7.30m、短径6.86m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-22°-Eを示す。周溝内側面積は39.3㎡を測り、諏訪台古墳群中の円墳では第22位の規模であるが、紙面の都合上、ここに掲載し報告する。

確認面での周溝幅は、0.70～1.20m、深さは0.18～0.28mを測り、未検出の北側を除けばほぼ均一な傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

円台部内や周溝内に円形ピットが認められるものの、本墳の埋葬施設は未検出である。

出土遺物

本墳周溝内一括で、口唇端部を欠く須恵器甕口縁部片1点が検出されている。口唇端部が内側に摘み上がる形状と読み取ることができ、9世紀後葉の在地産須恵器と判断されるが、本墳の築造年代とは無関係と捉えられる。

SM1037　セ28地区　（Fig.295～296、PL.113・202）

R・S-12・13グリッドに位置する。周溝が全周していれば下層のSS53・58と重複し、SM1090に削平される円墳である。周溝の大半を流出し、遺存状況は極めて不良である。旧遺構番号はセ28-172号遺構である。

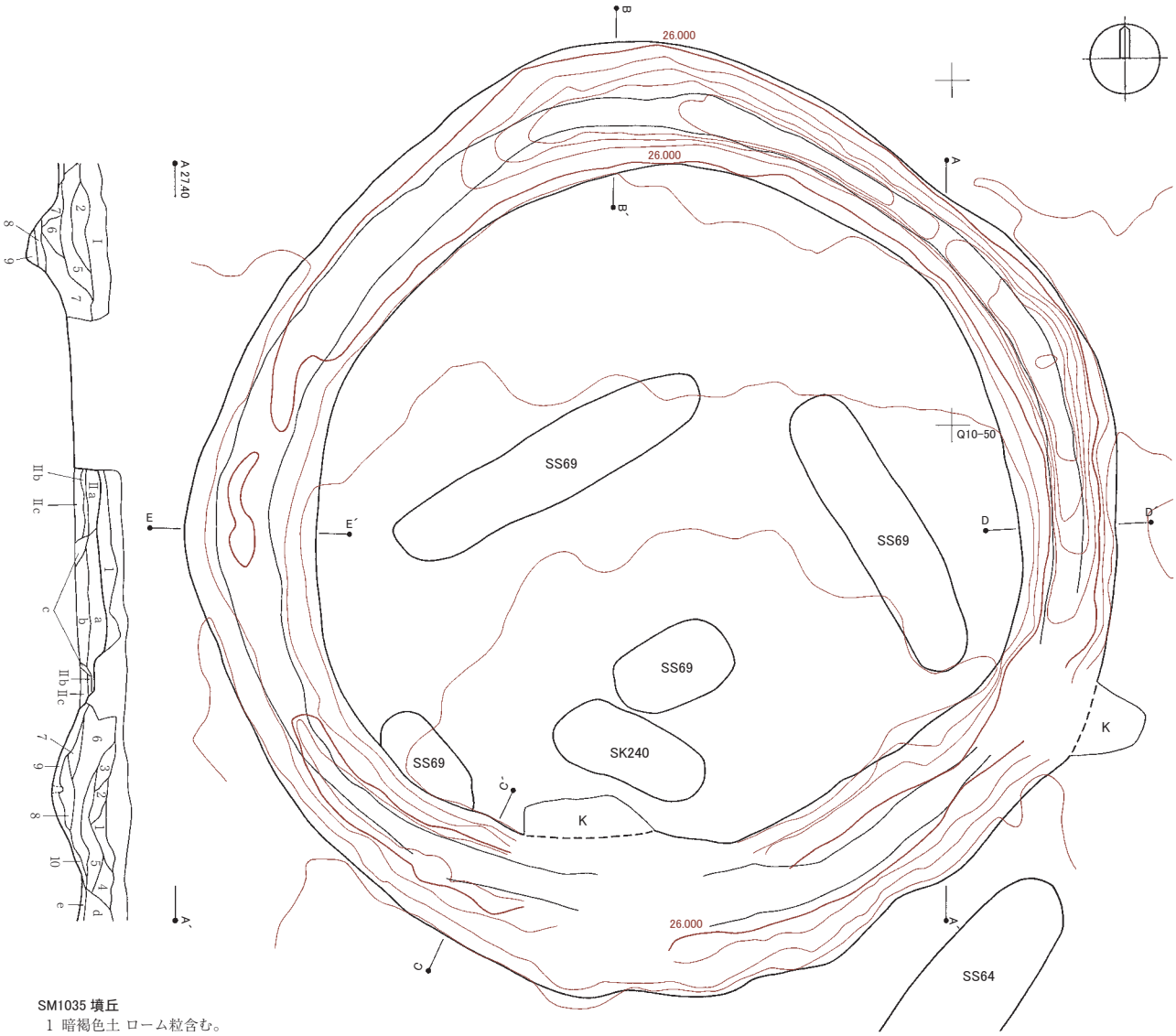
墳丘と周溝

周溝が全周していない円墳である。残存長径8.72m残存短径3.30mを測る不整形な円墳である。現状での盛土は存在せず、残存する周溝の短軸方位はN-23°-Eを示す。周溝内側面積は測定不能であり、諏訪台古墳群中の円墳順位も不明であるが、紙面の都合上、ここに掲載し報告する。

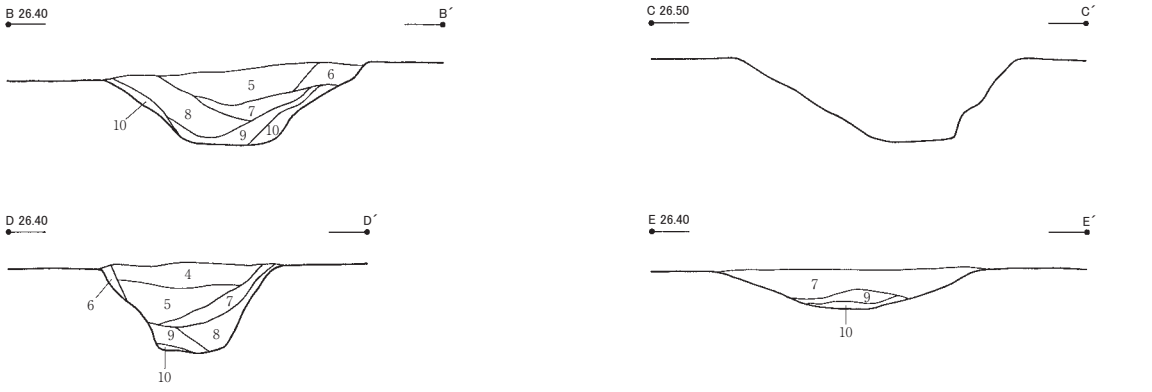
確認面での周溝幅は、0.34～0.46m、深さは0.12～0.24mを測り、断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

円台部内中央付近と想定される位置から1基検出されている。



SM1035 墳丘
1 暗褐色土 ローム粒含む。



SM1035 周溝
1 暗褐色土 ローム粒含む。締まりなし。
2 褐色土 ローム粒含む。
3 暗褐色土 褐色微粒子散る。
4 暗褐色土 ローム粒含む。
5 暗褐色土 ローム粒・ローム小B斑点状に含む。
6 黒褐色土 有機質土。ローム若干含む。
7 黒褐色土 有機質土中にローム粒・ローム小Ｂ散る。
8 褐色土 ローム粒・ロームＢ多く含む。
9 黄褐色土 ロームＢ主体。
10 黄褐色土 汚れたローム粒多量に含む。
a SS69 覆土
b SS69 覆土
c SS69 覆土
d SS64 覆土
e SS64 覆土

0 1m
(1／40)

Fig.293　SM1035 遺構実測図

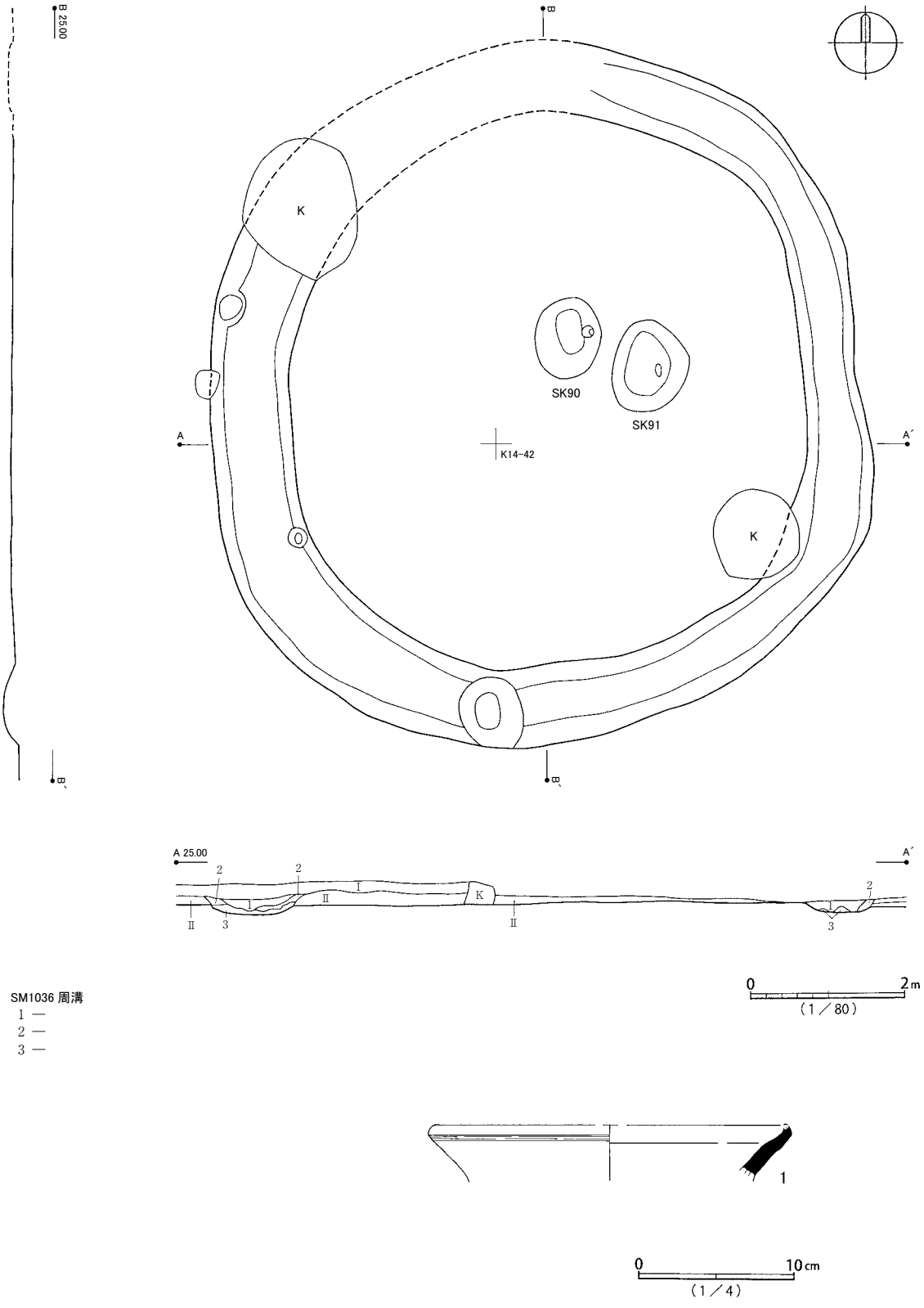


Fig.294　SM1036 遺構・遺物、SK90 遺構、SK91 遺構実測図

第1主体部

埋葬施設は円台部内の中央、おそらく本墳の埋葬施設と想定される位置から検出された。墓壙規模は、上端で長径2.12m短径1.18m深さ0.40m、下端で長径2.02m短径0.88mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-88°-Eを示す。墓壙内からは木棺痕が検出されなかったことから、単なる土壙墓と推定される。

墓壙内の南側やや西よりの位置から、束状になった長頸鏃群が検出された。このことから、被葬者は東枕安置で埋葬されていたと察知される。なお、平面図に掲載される鉄鏃本数より実際の検出鉄鏃の数が多い。おそらく、当初の平面図に記載した後に出土した鉄鏃の、追加ないしは新規の平面図作製を怠ったためと想定することが無難であろう。

出土遺物

本墳の埋葬施設からは、束状に固まった14本の鉄鏃の他、単品で15本の鉄鏃が存在し、計29本の長頸鏃群が検出されている。鉄鏃群の内訳は、確実に片刃長頸鏃と捉えられる製品が1点の他、あと2点の製品についてもその可能性が高い。片刃長頸鏃以外は、所謂鑿箭鏃と呼ばれる鏃身部が退化した形状の製品が主体を占めている。これら所謂鑿箭鏃での関形状の判明する製品は全て棘関である反面、関形状の不明なものは、ほとんどが関を喪失した段階の製品と想定され、この傾向は束状となって検出された14本の鉄鏃群に顕著に表れている。また、矢柄の残存する製品が比較的多数を占め、その殆どに紐巻きの痕跡が認められる。これら鉄鏃群の片刃長頸族の刃部形状は、端刃造りであり、鑿箭鏃の刃部形状も端刃であることなどから、これら鉄鏃群の流通した段階は、TK-217型式新段階～TK-46型式初頭併行期に位置付けられる。したがって、古墳時代鉄鏃群の中でも末葉段階の製品と想定されよう。なお、本墳周溝内からは何の遺物も検出されず、土器等による年代決定の補足が不可能である。

SM1038　セ28地区　（Fig.296）

R･S-12グリッドに位置する。周溝が全周していれば下層のSS57と重複し、SM1179に削平される円墳である。周溝の大半を流出し、遺存状況は極めて不良である。旧遺構番号はセ28-173号遺構である。

墳丘と周溝

周溝が全周していない円墳である。残存長径6.50m残存短径0.90mを測り、現状での盛土は存在せず、残存する周溝の短軸方位はN-5.5°-Wを示す。周溝内側面積は測定不能であり、諏訪台古墳群中の円墳順位も不明であるが、紙面の都合上、ここに掲載し報告する。

確認面での周溝幅は、0.38～0.46mを測るが、深さの測定値はない。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

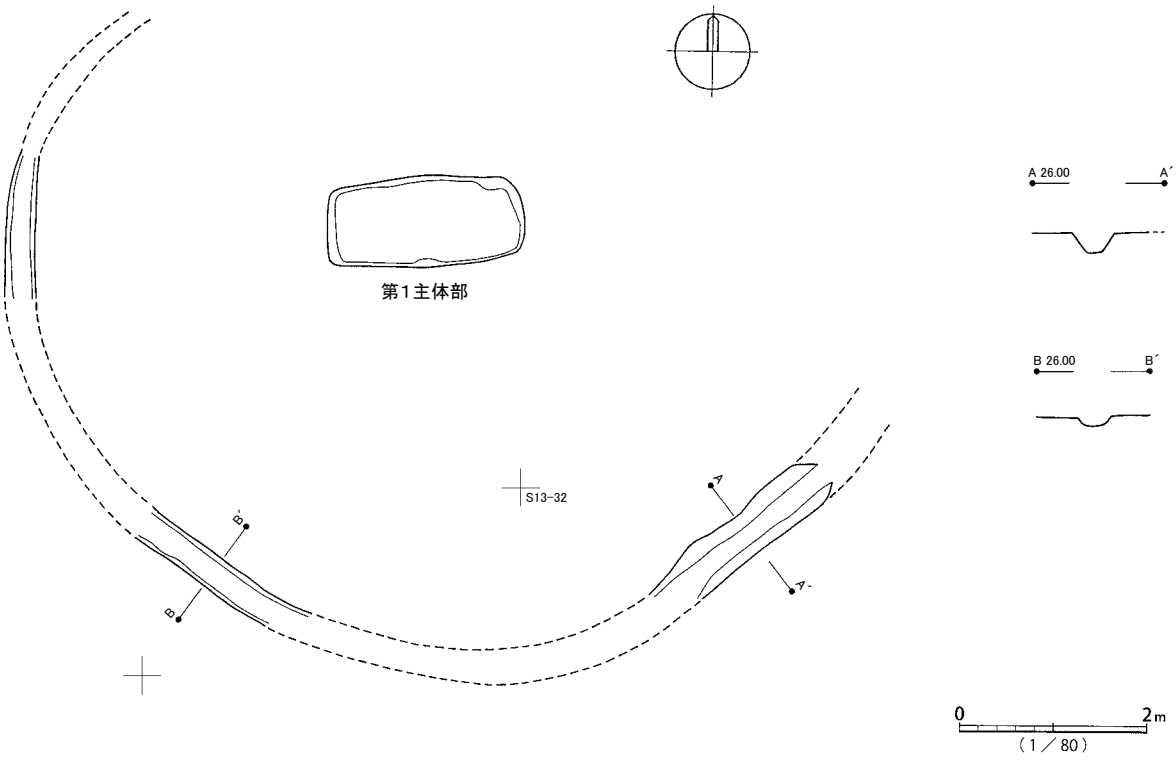
本墳の周溝等からは、何の遺物も検出されなかった。

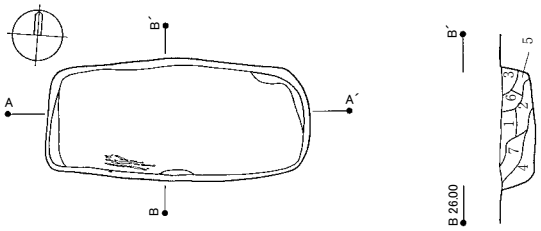
SM1039　064地区　（Fig.297、PL.113･202）

E･F-6･7グリッドに位置する円墳である。墳丘･周溝の大半を流出し、遺存状況は不良である。旧遺構番号は064-263号遺構である。

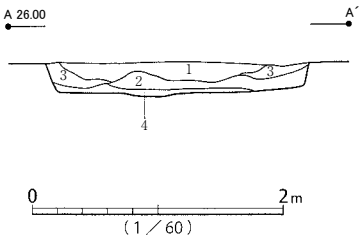
墳丘と周溝

周溝が全周しない円墳である。残存長径12.44m残存短径4.80mを測り、現状での盛土は存在せず、





SM1037 第 1 主体部
1 暗褐色土 ローム粒混入。
2 黒褐色土 ローム粒・ローム B 混入。
3 暗褐色土 ローム粒含む。締まる。
4 褐色土 ローム粒・ローム B 多量。貼床状に締まる。
5 暗褐色土 ローム粒少量含む。
6 黒色土 有機質土主体。
7 暗褐色土 ローム粒多量に含む。



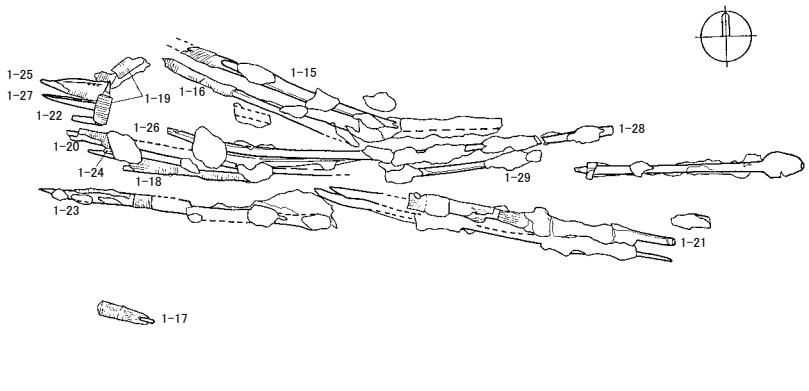


Fig.295　SM1037 遺構・遺物出土詳細実測図

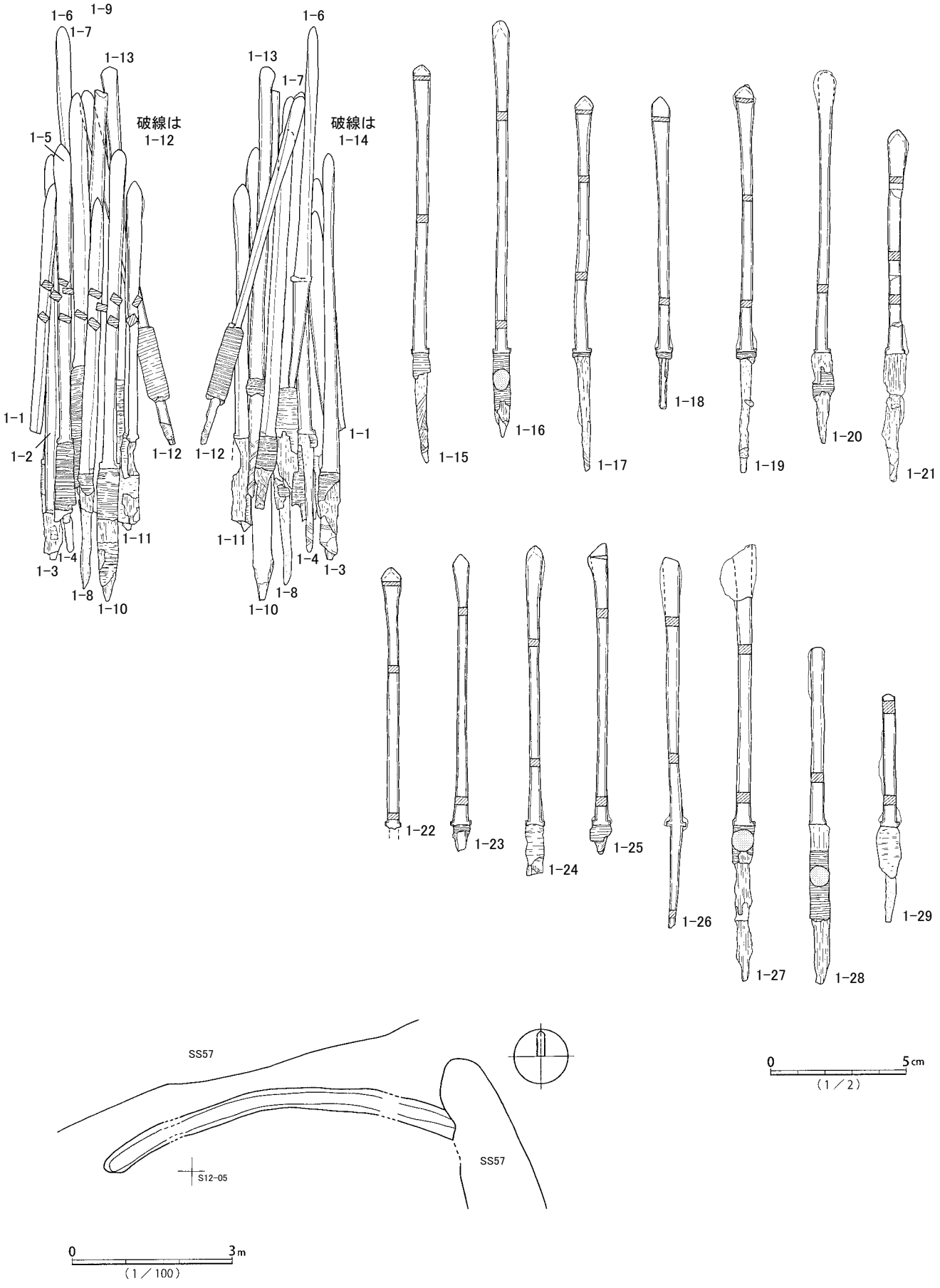


Fig.296　SM1037 遺物、SM1038 遺構実測図

残存する周溝の短軸方位はN-45°-Eを示す。周溝内側面積は測定不能であり、諏訪台古墳群中の円墳順位も不明であるが、紙面の都合上、ここに掲載し報告する。

確認面での周溝幅は0.72～1.32mを測るが、深さの測定値はない。

埋葬施設

円台部内の南側に偏って1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、円台部内の南側から検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径3.44m短径1.18m深さ0.40m、下端で長径3.04m短径0.70mを測り、主軸方位はN-44°-Eを示す。墓壙内のほぼ中央から、箱型の木棺痕が検出された。木棺の規模は上端で長さ2.86m幅0.58m深さ0.20m、下端で長さ2.78m幅0.48mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-45°-Eを示す。

木棺痕及び墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳の周溝内からは1の変形した銅製蓋が検出されている。極めて華奢な薄い作りで、天井部の立体化した鈕を中心として花紋を線刻によって形成する製品であり、極めて飛鳥文化的な気配を漂わせているが、明確な時期はよくわからない。現状図と併せ、復元図も提示した。

SM1040　099地区　（Fig.297）

O-8･9グリッドに位置し、下層のSS24･31と重複する円墳である。周溝のおよそ1/3を流出し、遺存状況は不良である。旧遺構番号は099-ロ-1号遺構である。

墳丘と周溝

周溝が全周しない円墳である。残存長径13.44mを測り、現状での盛土は存在せず、残存する周溝長軸方位はN-45°-Eを示す。周溝内側面積は測定不能であり、諏訪台古墳群中の円墳順位も不明であるが、紙面の都合上、ここに掲載し報告する。

確認面での周溝幅は0.92～1.48m、深さは0.24～0.32mを測り、断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳の周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

4.方墳

SM1041　SW83地区　（Fig.298～302、PL.113～114･189･203･215）

R･S･T-25･26･27グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号はSW83-K17号遺構である。

墳丘と周溝

長径28.10m、短径26.80m、現状での盛土の高さは1.60mを測り、主軸方位はN-6°-Wを示す。周溝内側面積は757.5㎡を測り、第2位のSM1042より395.5㎡も多く、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第1位の規模である。確認面での周溝幅は、3.35～5.00m、確認面での深さは0.56～1.12m、土層断面では1.00～1.36mを測り、南側に傾斜する緩斜面に位置するため、南側が浅く狭い傾向が認められる。全体的に均整のとれた方形形状で、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の

状況を示す。

埋葬施設

方台部中央に1基、方台部北西に1基の合計2基検出されている。

第1主体部

第1主体部は、方台部中央に位置する木棺直葬の土壙墓である。木棺を中心として外郭に大墓壙、内郭におそらく木槨ないしは木室と思われる小部屋を配する極めて特殊な構造である。

大墓壙の規模は、上端で長径5.68m短径3.45m深さ1.21m、下端で長径5.08m短径1.64mを測り、主軸方位はN-85.5°-Eを示す。大墓壙のほぼ中央からやや北側寄りに、南北にテラスを配置し、テラスの周囲を粘土で固定した箱型の木槨ないしは木室らしき内槨痕跡が認められている。内槨規模は、上端で長さ2.96m幅1.70m、下端で長さ2.86m幅1.64m深さ1.20mを測り、主軸方位はN-87°-Eを示す。内槨のほぼ中央から、周囲に鉄釘を配する箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ1.92m幅0.68m、下端で長さ1.92m幅0.54m深さ0・42mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-91°-Eを示す。

墓壙・木棺内からは、木棺の蓋を打ちつけた53本の鉄釘の他、棺材と想定される木片が21点検出された以外、何の遺物も検出されなかった。なお、検出鉄釘53点は全て図化している。

第2主体部

第2主体部は、方台部北西に位置する木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径1.70m短径0.68m深さ0.16m、下端で長径1.54m短径0.55mを測り、主軸方位はN-81°-Eを示す。墓壙のほぼ中央から、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ1.06m幅0.37m、下端で長さ0.97m幅0.30m深さ0.14mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-81°-Eを示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。ただし、木棺規模が諏訪台古墳群中でも著しく小型であるため、小児ないしは火葬骨を含めた改葬骨等を埋葬した木棺である可能性が極めて高い。

出土遺物

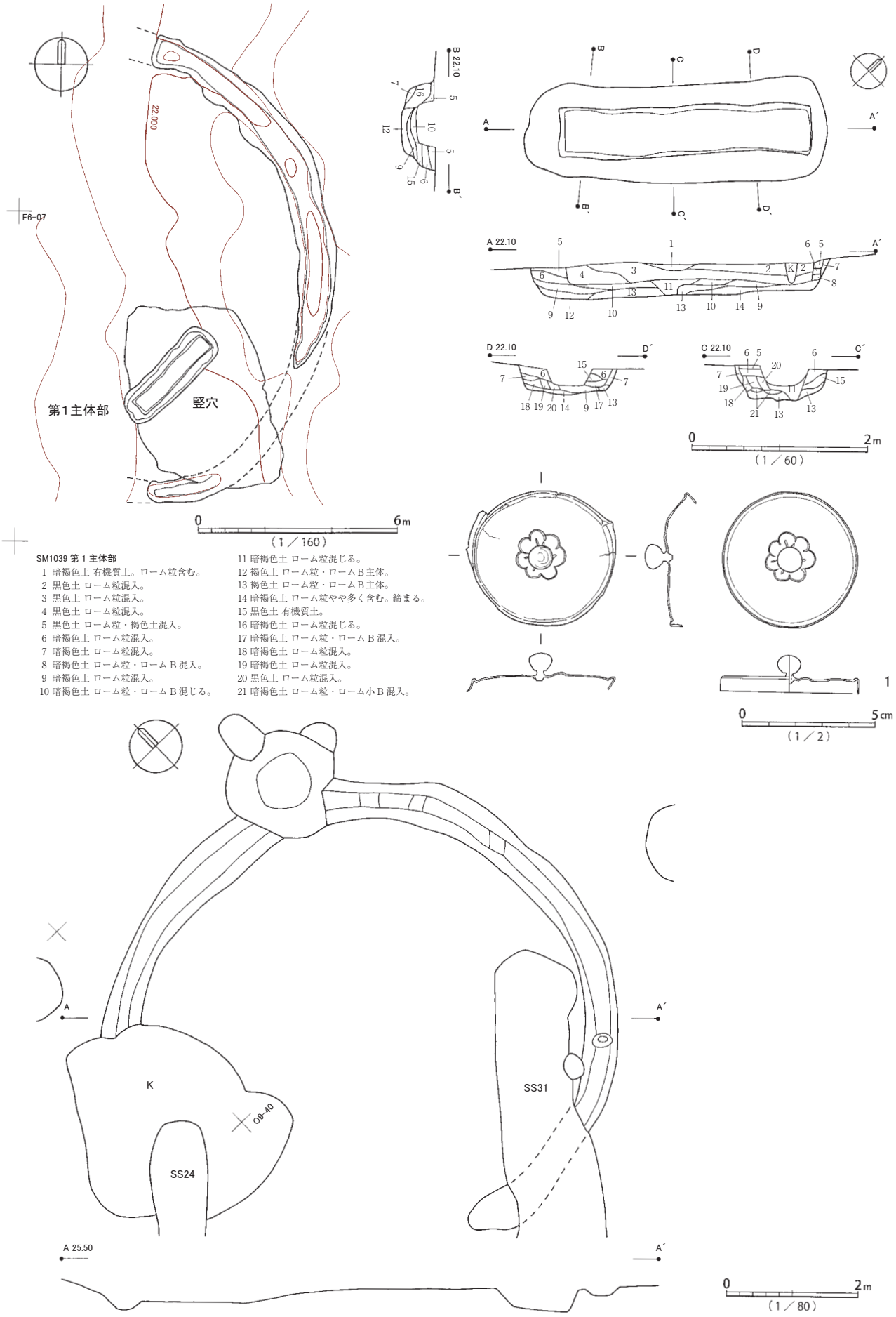
本墳の周溝内からは、一括で取り上げられた須恵器片１点、布目瓦片1点が検出されたにすぎない。第1主体部木棺内からは、比較的多量の鉄釘が検出されているものの、具体的時期を示す遺物に乏しい。この内1-17は、樹種同定により釘頭側が板目で釘の先端側が柾目の針葉樹と同定された木質が付着ている。時期を確定する出土遺物に乏しいながらも、諏訪台古墳群中の終末期方墳では最大規模を誇り、内部施設に木槨ないしは木室を採用するなど、当域の終末期方墳としては卓越したものを保持していることが重要である。諏訪台古墳群中における終末期方墳の成立段階に関わる方墳の1基として捉えておきたい。

SM1042　セ54地区　（Fig.303～305、PL.114～115・170～171・189）

S・T-16・17・18グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号はセ54-15号遺構である。

墳丘と周溝

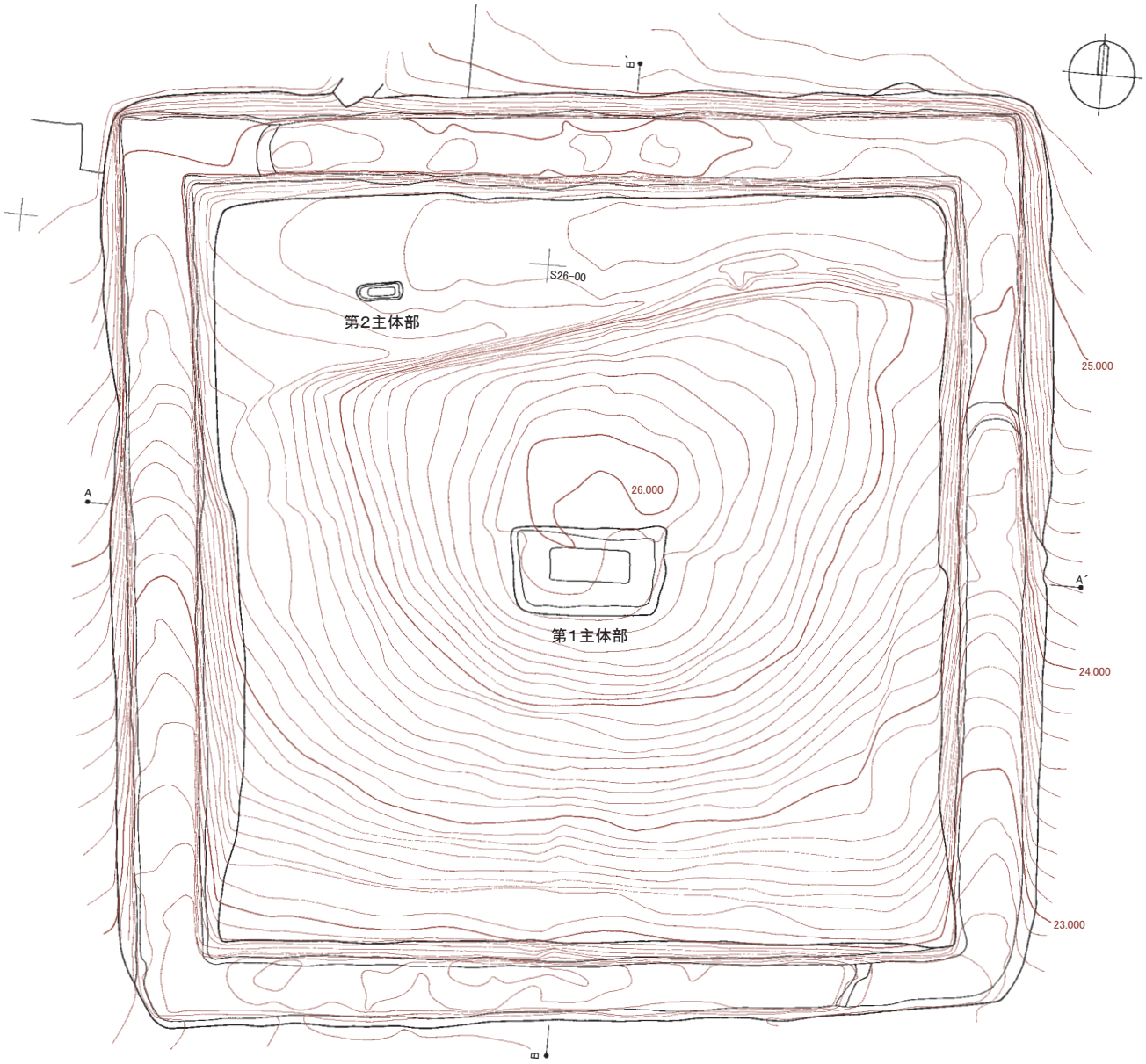
長径19.04m、短径18.68m、現状での盛土の高さは0.92mを測り、主軸方位はN-17°-Wを示す。周溝内側面積は362.0㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第2位の規模である。確認面での周溝幅は、3.08～4.12m、確認面での深さは0.56～1.12m、土層断面では1.04～1.06mを測



SM1039 第 1 主体部

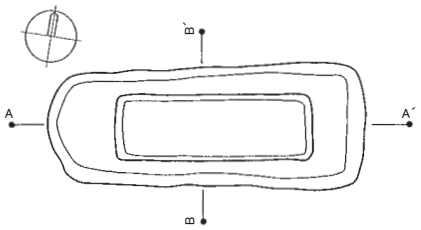
1 暗褐色土 有機質土。ローム粒含む。
2 黒色土 ローム粒混入。
3 黒色土 ローム粒混入。
4 黒色土 ローム粒混入。
5 黒色土 ローム粒・褐色土混入。
6 暗褐色土 ローム粒混入。
7 暗褐色土 ローム粒混入。
8 暗褐色土 ローム粒・ローム B 混入。
9 暗褐色土 ローム粒混入。
10 暗褐色土 ローム粒・ローム B 混じる。
11 暗褐色土 ローム粒混じる。
12 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
13 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
14 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。締まる。
15 黒色土 有機質土。
16 暗褐色土 ローム粒混じる。
17 暗褐色土 ローム粒・ローム B 混入。
18 暗褐色土 ローム粒混入。
19 暗褐色土 ローム粒混入。
20 黒色土 ローム粒混入。
21 暗褐色土 ローム粒・ローム小 B 混入。

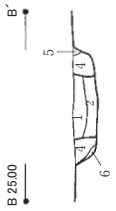
Fig.297　SM1039 遺構・遺物、SM1040 遺構実測図



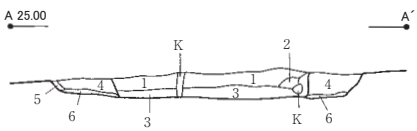
第２主体部

0　10m
（1／250）



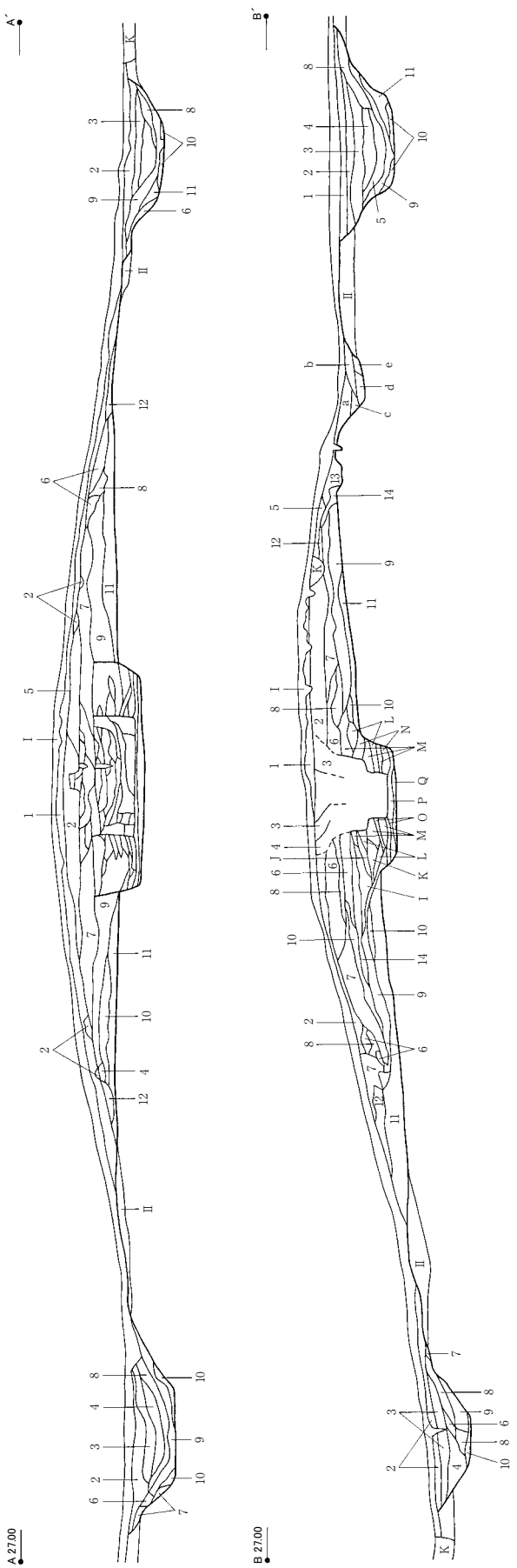


SM1041 第２主体部
1 黒色土 ローム B 少量含む。
2 黒褐色土 ローム粒若干含む。
3 黒褐色土 ローム粒含む。
4 黄褐色土 ローム B 多量に含む。
5 黒褐色土 ローム粒含む。
6 黒褐色土 ローム粒含む。締まる。



0　1m
（1／40）

Fig.298　SM1041 遺構 (1) 実測図



SM1041 墳丘
1 黒褐色土 ローム粒・ローム B 含む。黒味強。
2 黒褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
3 黒褐色土 ローム粒含む。
4 暗褐色土 ローム粒多く含む。
5 黒褐色土 ローム B 少量含む。
6 黒褐色土 ローム B 含む。
7 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
8 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
9 暗褐色土 ローム粒含む。
10 黒褐色土 ローム B 混入。
11 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
12 黒色土 ローム粒混入。
13 黒褐色土 ローム粒混入。
14 黒褐色土 ローム粒・ローム B 含む。

SM1041 周溝
1 黒褐色土 ローム微粒含む。
2 黒褐色土 ローム粒含み硬く締まる。
3 黒褐色土 暗褐色土粒含む。
4 黒褐色土 有機質土主体。
5 暗褐色土 暗褐色有機質土主体。
6 褐色土 壁崩落ローム B 主体。
7 黒色土 ローム粒含む。
8 黒褐色土 ローム粒含む。
9 黒褐色土 ローム粒含む。
10 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
11 暗褐色土 ローム粒多量に含む。

SM1041 主体部裏込め土
I 黒褐色土 ローム B 含む。
J 黒褐色土 ローム粒含む。
K 褐色土 有機質土中に多量のローム B 含む。
L 暗褐色土 有機質土中にローム B 混入。
M 黄褐色土 ローム B 主体。
N 黒褐色土 ローム粒・ローム B 混入。
O 黄褐色土 ローム粒・ローム B 多く含む。
P 黄褐色土 主体部 35 層相当。
Q 黄褐色土 主体部 36 層相当。

SM1041 新しい溝
a 黒褐色土 ローム粒含む。
b 黒褐色土 ローム細粒含む。
c 黒褐色土 ローム粒若干含む。
d 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
e 暗褐色土 壁崩落ローム多量に含む。

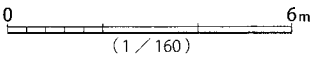
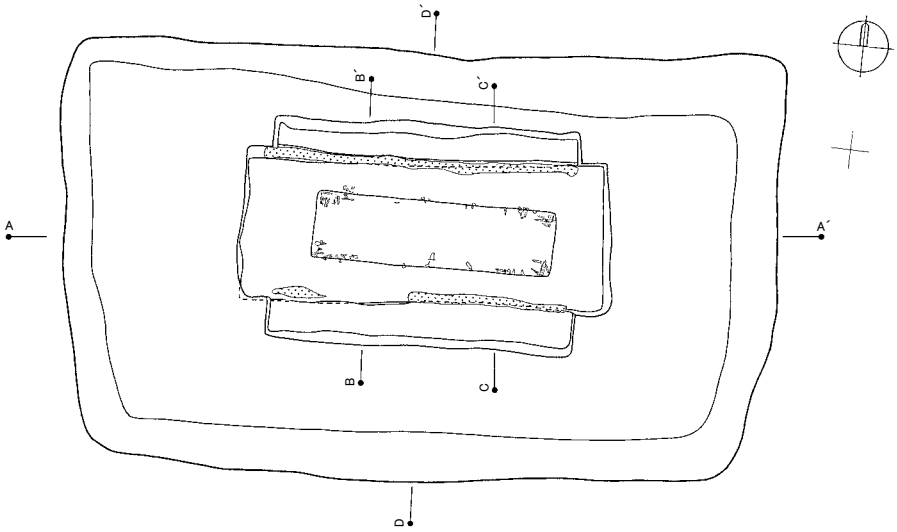
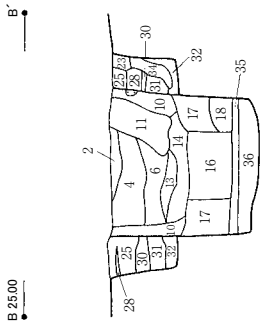
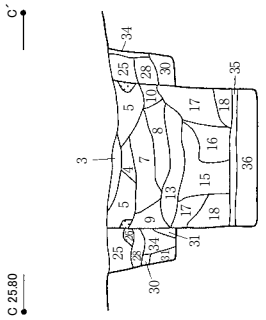


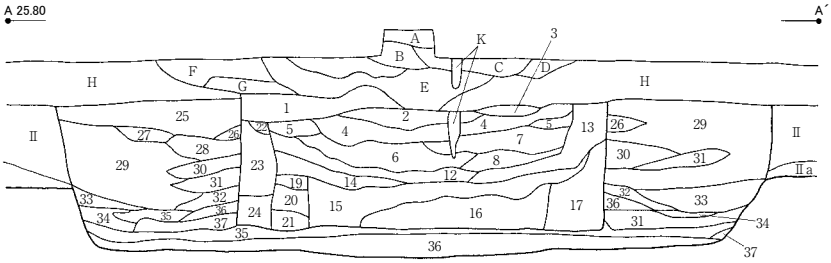
Fig.299　SM1041 遺構 (2) 実測図

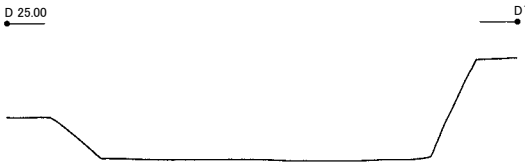
第１主体部

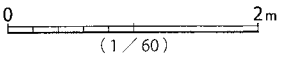


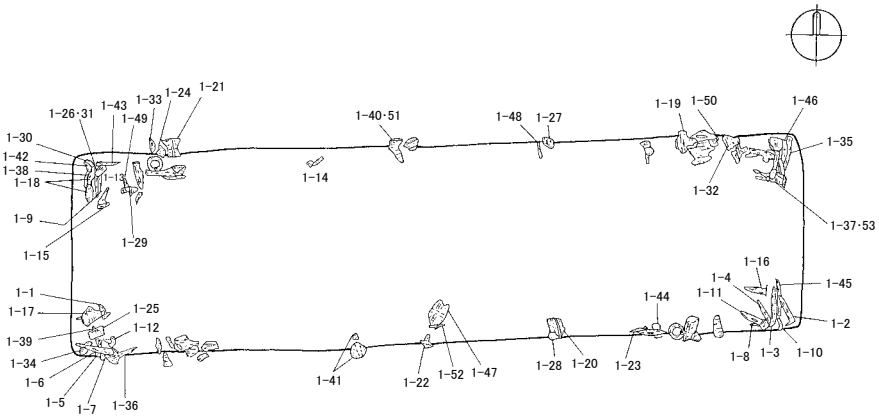


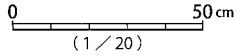












SM1041 第１主体部上層墳丘

A 黒褐色土 有機質土。きめ細かい。
B 黒褐色土 ローム粒含む。
C 黒褐色土 ローム粒含む。
D 黒褐色土 ソフトローム粒含む。
E 黒褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
F 暗褐色土 ローム B 含む。
G 明褐色土 ローム B。
H 暗褐色土 墳丘 14 層に相当。

SM1041 第１主体部

1 黒褐色土 ローム B 少量含む。
2 黒褐色土 ローム B と暗褐色土含む。
3 黄褐色土 ローム B 多量に含む。
4 黒褐色土 ローム B 含む。
5 黒褐色土 ローム B と暗褐色土含む。
6 明褐色土 ローム B 主体。暗褐色土含む。
7 暗褐色土 ローム B・黒褐色土含む。
8 黒褐色土 ローム B 含む。
9 黒褐色土 ローム B 多く含む。
10 黒褐色土 ローム粒・粘土粒含む。
11 黄褐色土 ローム B 主体。暗褐色土含む。
12 黒色土 ローム B 含む。
13 明褐色土 ローム B 主体。暗褐色土含む。
14 明褐色土 ローム B 含む。
15 黒褐色土 ローム B 含む。
16 黄褐色土 ローム B 主体。暗褐～黒褐色土含む。
17 黄褐色土 ローム B。
18 明褐色土 ローム B 多量に含む。黒褐色土混じる。
19 黒褐色土 ローム粒含む。
20 黒褐色土 有機質土主体。ローム B 混じる。
21 暗褐色土 有機質土中にローム B 多量に含む。
22 暗褐色土 ローム B・黒褐色土含む。
23 黄褐色土 暗褐色土含む。
24 褐色土 ローム粒多量。締まる。
25 黄褐色土 ローム B。
26 暗褐色土 ローム粒含む。
27 黒色土 ローム粒・ローム B 含む。
28 黄褐色土 ローム B 主体。
29 黒褐色土 有機質土中にローム粒・ローム B 混じる。
30 黄褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
31 黄褐色土 ローム粒・ローム B 主体。ローム B やや多い。
32 黄褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
ローム B 多量に含む。
33 黒褐色土 有機質土中にローム粒・ローム B 混入。
34 黒褐色土 有機質土中にローム B 含む。
35 黄褐色土 ローム B・ローム粒が版築状に硬く締まる。
36 黄褐色土 ローム B・ローム粒が版築状に硬く締まる。
上層より締りなし。
37 黒褐色土 ローム粒含む。

Fig.300　SM1041 遺構 (3)・遺物出土詳細実測図

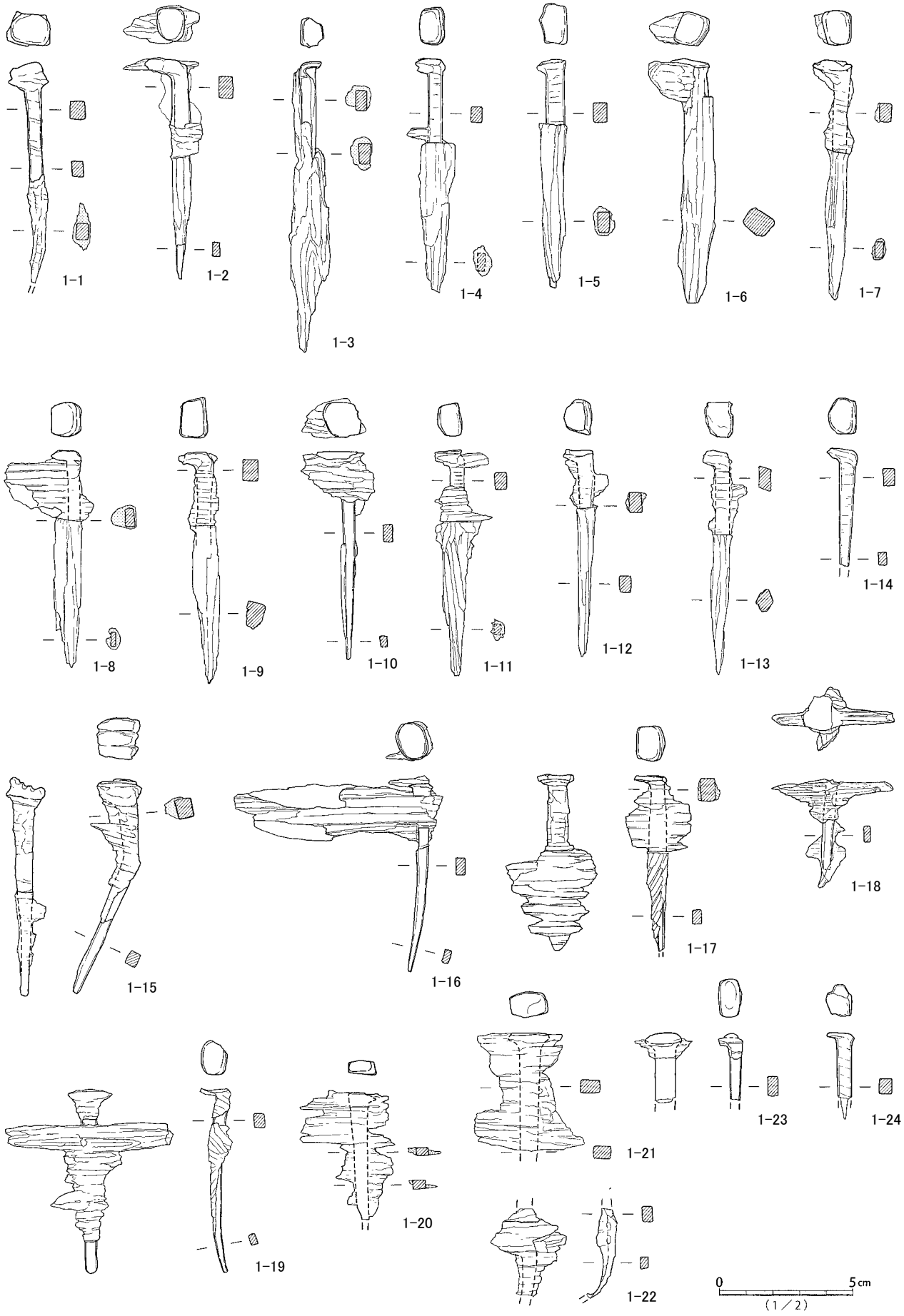


Fig.301　SM1041 遺物 (1) 実測図

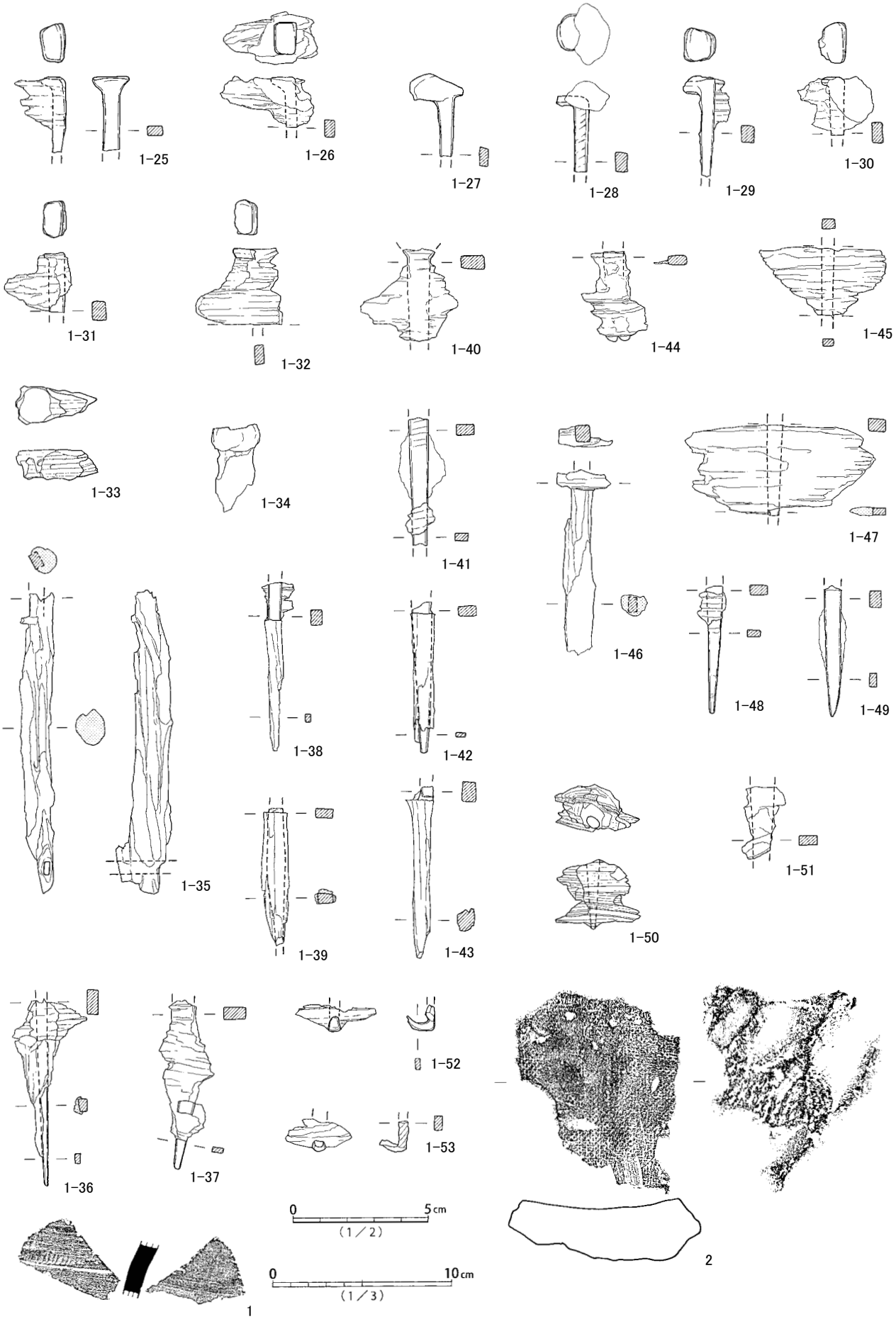


Fig.302　SM1041 遺物 (2) 実測図

り、南側に傾斜する緩斜面に位置するため、南側が浅く狭い傾向が認められる。全体的に均整のとれた方形形状で、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部中央に2基、方台部北側に1基、南側に1基の合計4基検出されている。

第1主体部

第1主体部は、方台部ほぼ中央やや北側に位置する木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径3.90m短径1.46m深さ0.74m、下端で長径3.74m短径1.10mを測り、主軸方位はN-70°-Eを示す。墓壙のほぼ中央の両端部から両木口を比較的大きく、かつ不整形な軟砂岩で固定したやや歪な箱型の木棺痕跡が検出されている。木棺規模は、上端で長さ2.50m幅0.88m、下端で長さ2.00m幅0.74m深さ0.44mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-75°-Eを示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

第2主体部

第2主体部は、第1主体部の南側に墓壙を接して検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径3.14m短径1.66m深さ1.08mを測り、主軸方位はN-77°-Eを示す。墓壙のほぼ中央から箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.26m幅0.96m、下端で長さ2.04m幅0.70m深さ1.06mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-80°-Eを示す。

木棺痕内や墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

第3主体部

第3主体部は、第1主体部の北西側に検出された土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径3.16m短径1.56m、下端で長径2.88m短径1.14m深さ0.44mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-70°-Wを示す。墓壙内からの木棺痕は未検出である。単なる土壙墓であったのであろう。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

第4主体部

第4主体部は、第2主体部の南側周溝近くに検出された。墓壙東側が狭まる不整形な墓壙である。墓壙規模は、上端で長径3.04m短径1.36m、下端で長径2.82m短径1.18m深さ0.14mを測り、主軸方位はN-63°-Eを示す。

墓壙内からは木棺痕が検出されなかったが、土師器高坏2点と底部内面に畿内系の暗文を模した坏形土器1点が検出されている。

出土遺物

4-1・2・3は第4主体部検出の土師器である。1・2は高坏、3は畿内風の暗文を有する盤状坏であり、第4主体部底部付近からの検出である。

1～6は、本墳の周溝内から一括で取り上げられた土器群である。1は須恵器横瓶、2・3は須恵器長頸壺、4・5は須恵器坏類、6はカワラケである。第4主体部出土遺物を含めたこれらの遺物群は、6を除けば7世紀末葉～8世紀初頭段階に位置付けられることから、当墳の築造年代を概ね示す遺物であると考えられる。

SM1043　セ54地区　（Fig.306～308、PL.115・171・189・203）

S・T-20・21グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号はセ54-13号遺構で

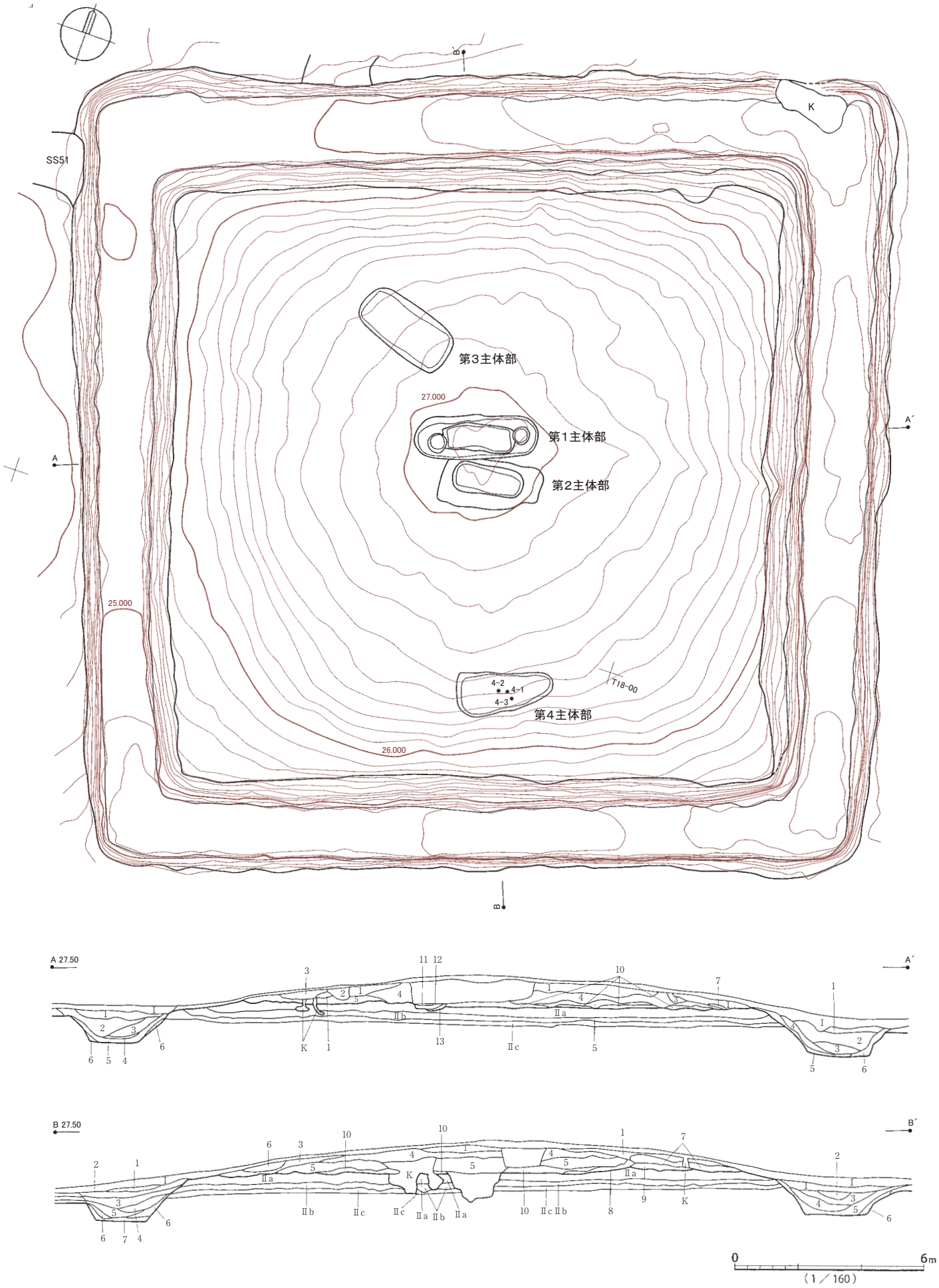
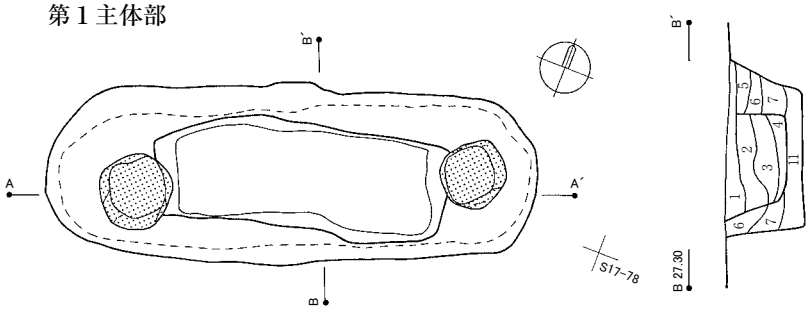


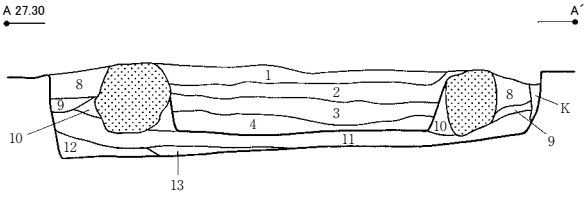
Fig.303　SM1042 遺構 (1) 実測図

SM1042 墳丘
1 黒褐色土 ローム粒少量含む。
2 暗褐色土 ローム粒多く含む。
3 褐色土 ロームＢ主体。
4 暗褐色土 ローム粒・ローム小Ｂ多く含む。
5 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
6 暗褐色土 ローム粒やや含む。第３主体部覆土。
7 褐色土 ローム粒・ロームＢ多く含む。
8 暗褐色土 ローム粒・ローム小Ｂやや多く含む。
9 褐色土 ローム粒・ロームＢ多量に含む。
10 黒褐色土 ローム粒少量含む。
11 黒褐色土 有機質土主体。
12 暗褐色土 ローム粒多く含む。
13 暗褐色土 ローム粒多く含む。

SM1042 周溝
1 黒色土 有機質土・ローム等含まない。
2 黒色土 ローム粒若干含む。
3 黒色土 ローム粒若干含む。暗褐色土を斑点状に混入。
4 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
5 極暗褐色土 極めて有機質性強。
6 褐色土 ローム粒主体。
7 褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。

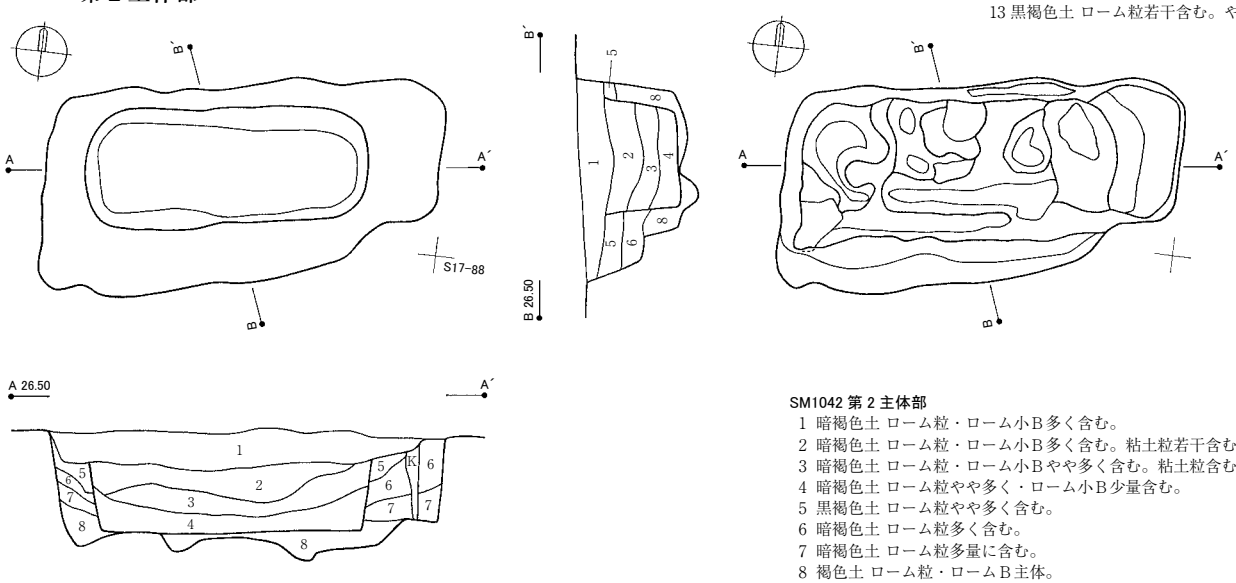
第１主体部





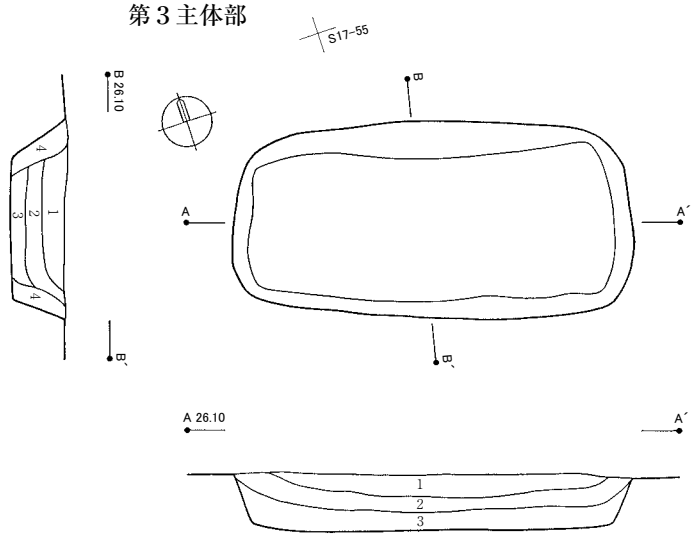
SM1042 第１主体部
1 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ少量含む。
2 黒褐色土 ローム粒少量含む。
3 黒褐色土 ローム粒・ローム小Ｂやや多く含む。
4 黒褐色土 ローム粒・ロームＢやや多く含む。
5 暗褐色土 ローム粒少量含む。
6 暗褐色土 ローム粒若干含む。
7 暗褐色土 ローム粒少量含む。
8 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ多く含む。
9 暗褐色土 白灰色粘土・ローム粒含む。
10 暗褐色土 ロームＢやや多く含む。
11 黒褐色土 ローム粒少量・ローム小Ｂやや多く含む。
12 黒褐色土 ローム粒含む。
13 黒褐色土 ローム粒若干含む。やや軟質。

第２主体部



SM1042 第２主体部
1 暗褐色土 ローム粒・ローム小Ｂ多く含む。
2 暗褐色土 ローム粒・ローム小Ｂ多く含む。粘土粒若干含む。
3 暗褐色土 ローム粒・ローム小Ｂやや多く含む。粘土粒含む。
4 暗褐色土 ローム粒やや多く・ローム小Ｂ少量含む。
5 黒褐色土 ローム粒やや多く含む。
6 暗褐色土 ローム粒多く含む。
7 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
8 褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。

第３主体部



SM1042 第３主体部
1 黒褐色土 ローム粒若干含む。
2 黒褐色土 ローム粒やや多く含む。
3 暗褐色土 ローム粒多量・ローム小Ｂ少量含む。
4 暗褐色土 壁崩落ローム主体。

0 2m
（1／60）

Fig.304　SM1042 遺構 (2) 実測図

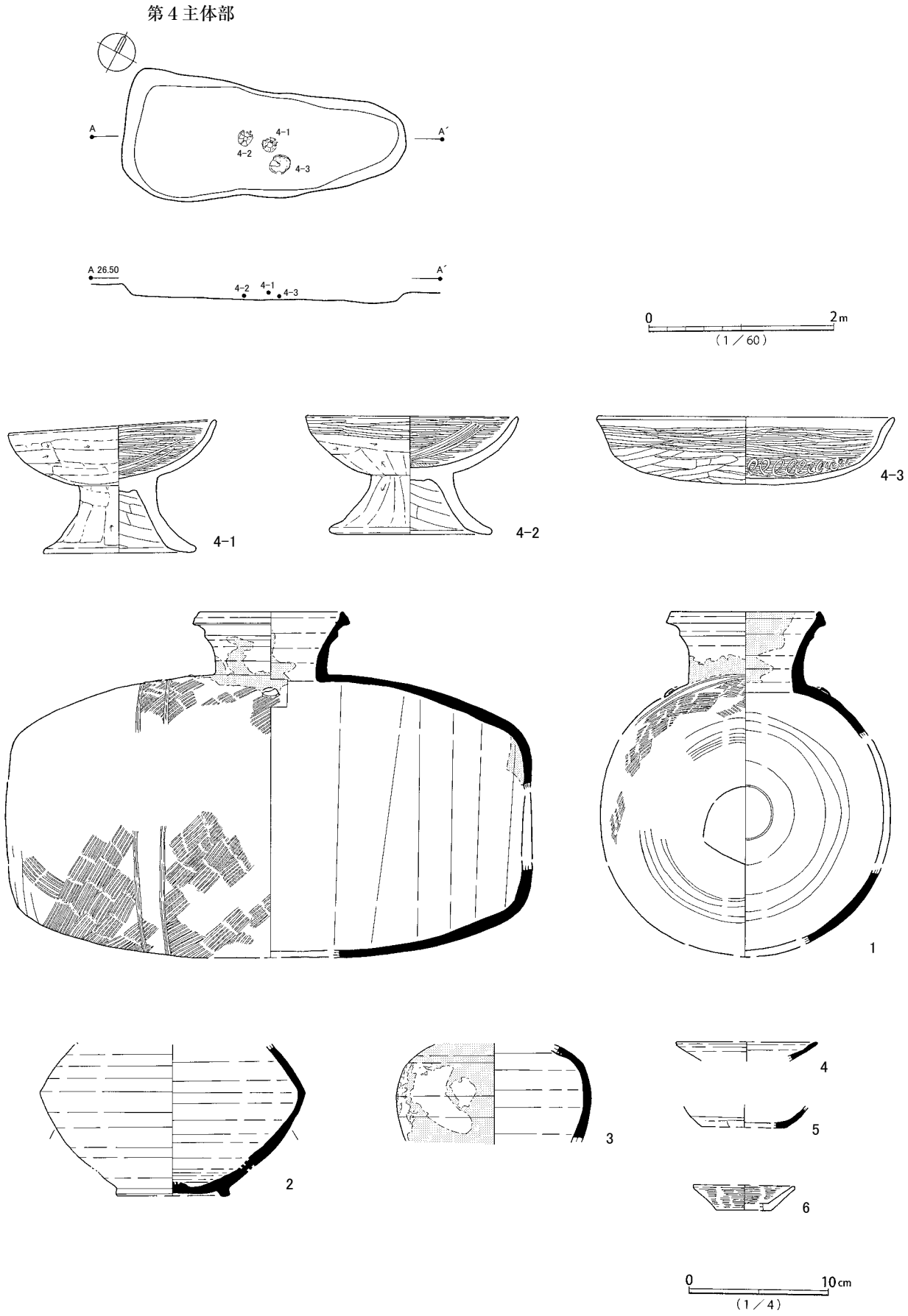


Fig.305　SM1042 遺構 (3)・遺物実測図

ある。

墳丘と周溝

長径19.00m、短径17.80m、現状での盛土の高さは0.72mを測り、主軸方位はN-13°-Wを示す。周溝内側面積は341.0㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第3位の規模である。確認面での周溝幅は、2.16～3.24m、確認面での深さは0.38～0.60m、土層断面では0.54～0.82mを測る。全体的に均整のとれた方形形状で、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部中央に1基、方台部西側に1基の他、西側周溝内に1基、南側周溝内に1基の合計4基検出されている。

第1主体部

第1主体部は方台部のほぼ中央に位置する。攪乱による削平著しく、墓壙の詳細は不明である。墓壙残存部の上端で、長径2.52m短径2.08mを測り、主軸方位はN-79°-Eを示す。深さは攪乱削平により不明である。第1主体部は、残存する墓壙規模から、おそらく木棺直葬の土壙墓と想定されるが、明瞭な木棺痕は検出することはできなかった。ただし、墓壙内の中でも木棺痕内と想定される位置からは、金銅製耳環1点が検出されている。

第2主体部

第2主体部は、第1主体部の西側に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径2.20m短径1.14m、下端で長径2.00m短径0.70m深さ0.84mを測り、主軸方位はN-5°-Wを示す。墓壙のほぼ中央から箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ1.62m幅0.48m、下端で長さ1.36m幅0.44m深さ0.50mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-5°-Wを示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

第3主体部

第3主体部は、西側周溝底から検出された土壙である。墓壙規模は、長径2.12m短径1.40m、深さは周溝底から0.54mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-10°-Wを示す。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

第4主体部

第4主体部は、南側周溝底から検出された土壙である。墓壙規模は、長径3.10m短径1.00m、深さは周溝底から0.54mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-75°-Eを示す。

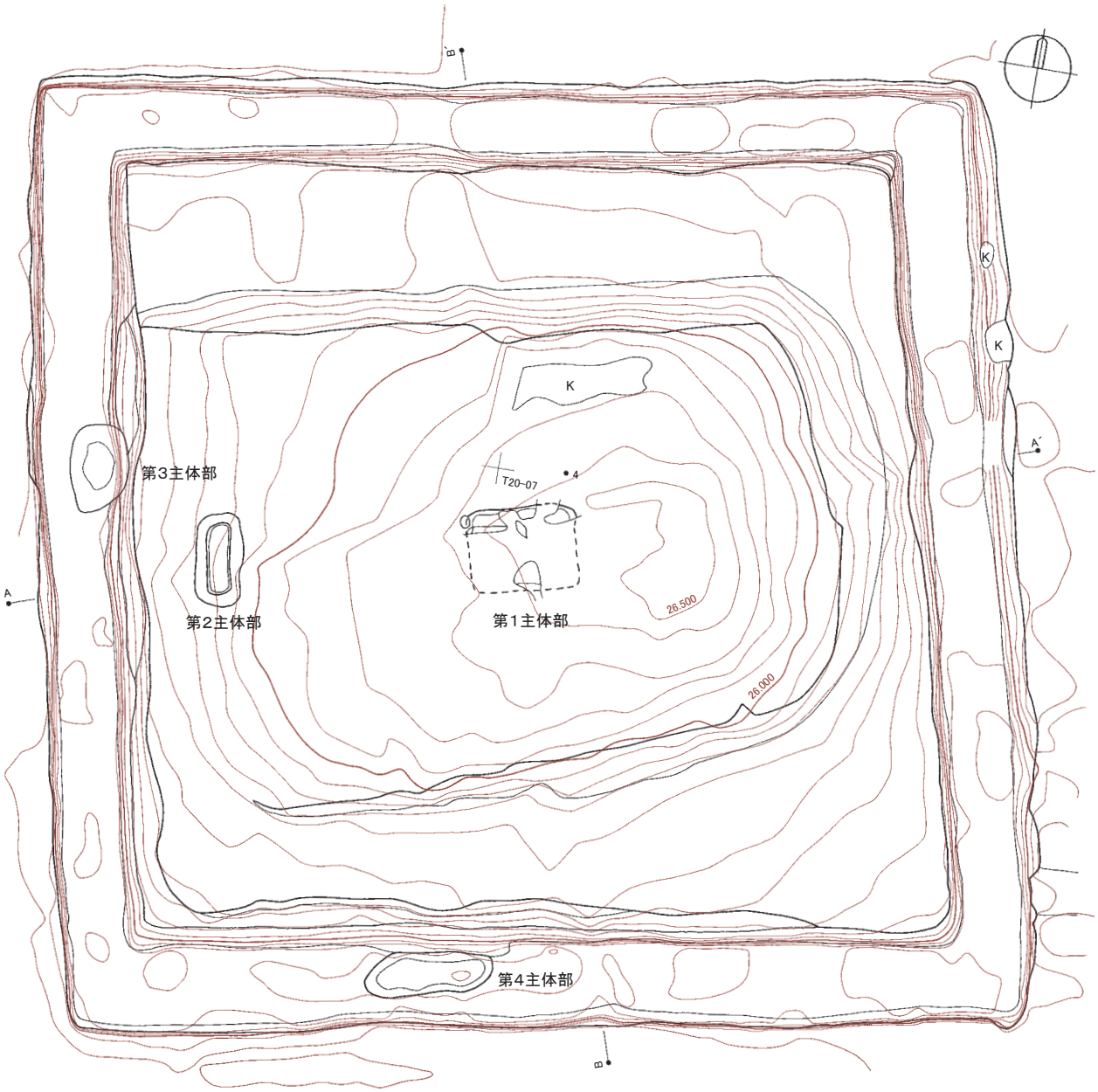
墓壙内からは何の遺物も検出されなかった。

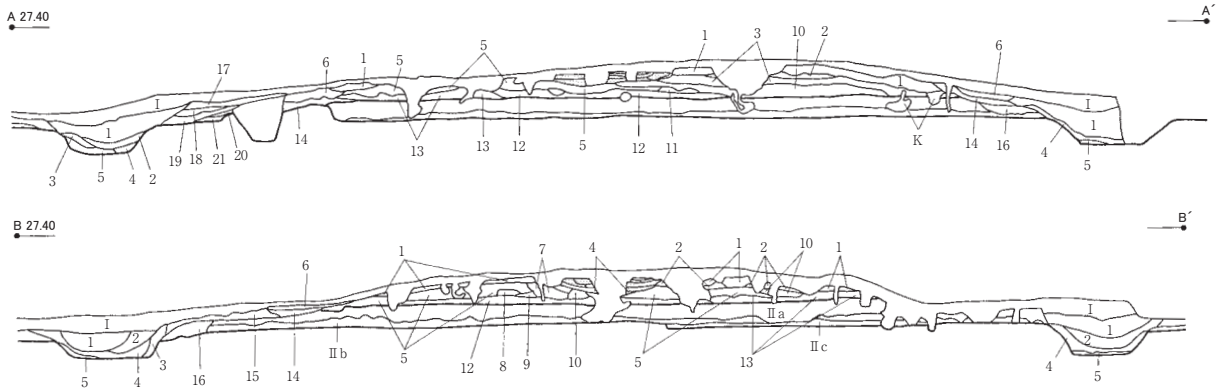
出土遺物

1-1は、第1主体部の推定木棺範囲内から検出された金銅製耳環である。攪乱底面から20㎝浮いた状況で検出されており、対になるべきもう片方は未検出である。攪乱によって喪失したものと想定される。4を除いた1～8は周溝内一括で検出された須恵器・灰釉陶器であり、4の須恵器甕は、第1主体部北側付近の旧表土上面から検出されている。これらの遺物群の内、器形の分かる6の須恵器長頸壺は、8世紀第1四半世紀の初頭に位置付けられ、当墳の築造年代を概ね示す遺物であると考えられる。

SM1044　SW83・099地区　（Fig.309、PL.116・189）

P・Q-20・21グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号はSW83-K21・





SM1043 墳丘

1 暗褐色土 ローム粒混入。
2 黒褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
3 黒褐色土 有機質土中にローム粒混入。
4 暗褐色土 ローム粒大小多く白色粘土粒若干含む。
5 暗褐色土 ローム粒大小混入。
6 暗褐色土 ローム粒含む。
7 黄褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
8 暗褐色土 ローム粒混入。
9 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
10 暗褐色土 ローム粒大小多く含む。
11 黒褐色土 ローム粒若干含む。
12 黒褐色土 ローム粒まばらに含む。
13 暗褐色土 ローム粒小量含む。
14 暗褐色土 ローム粒大小やや多く含む。
15 暗褐色土 ローム粒含む。
16 暗褐色土 ローム粒混入。
17 暗褐色土 ローム粒・ローム小 B 含む。
18 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
19 暗褐色土 汚れたローム粒含む。
20 暗褐色土 汚れたローム粒含む。
21 暗褐色土 汚れたローム粒・ローム小 B 含む。

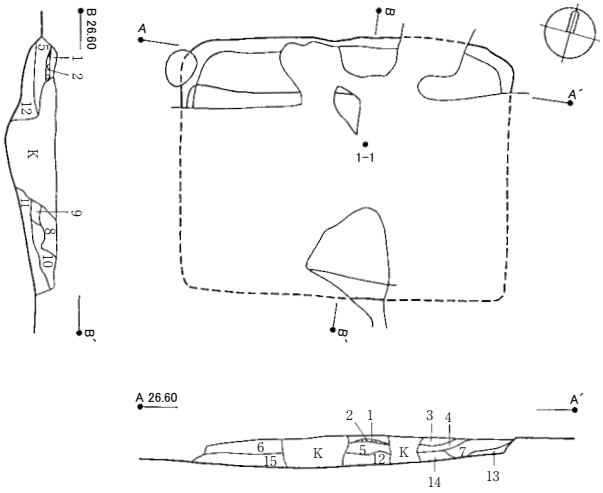
SM1043 周溝

1 暗褐色土 ローム粒含む。
2 黒褐色土 ローム粒含む。
3 褐色土 壁崩落ローム主体。
4 明褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
5 黄褐色土 ローム粒・ローム B 主体。

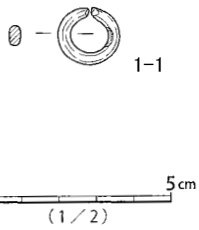
0 6m
（1／160）

Fig.306　SM1043 遺構 (1) 実測図

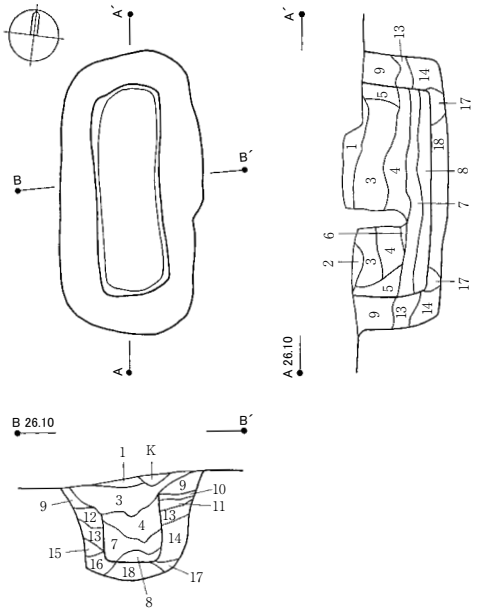
第１主体部



SM1043 第１主体部
1 暗褐色土 ローム粒含む。
2 暗褐色土 有機質土中にローム粒混入。
3 黄褐色土 ローム粒多量に含む。
4 暗褐色土 ローム粒含む。
5 暗褐色土 ローム粒混じる。
6 暗褐色土 ローム粒・粘土粒含む。締まる。
7 黄褐色土 ローム粒・ローム Ｂ主体。
8 暗褐色土 ローム粒含む。
9 暗褐色土 ローム粒・ローム Ｂ少量含む。
10 褐色土 ローム粒・ローム Ｂ含む。
11 黄褐色土 ローム粒・ローム Ｂ多量に含む。
12 暗褐色土 粘土粒大含む。
13 暗褐色土 ローム粒含む。
14 暗褐色土 ローム粒・粘土粒含む。
15 暗褐色土 ローム粒・ローム Ｂ白色砂質粘土含む。

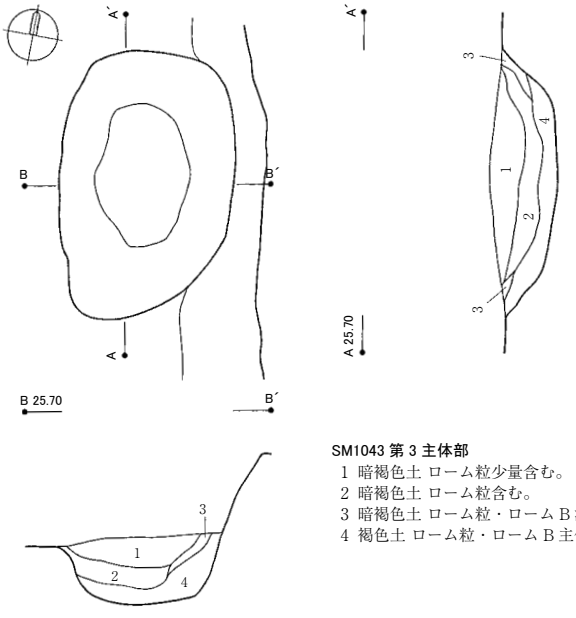


第２主体部



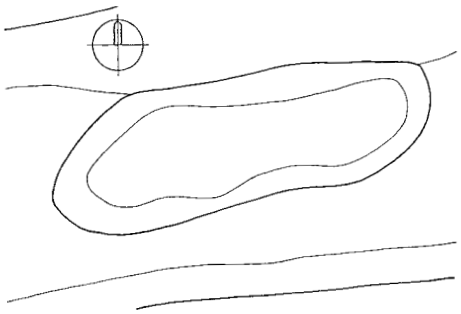
SM1043 第２主体部
1 暗褐色土 ローム粒混入。
2 暗褐色土 ローム粒含む。
3 暗褐色土 ローム粒・ローム Ｂ混入。
4 暗褐色土 ローム粒少量混入。
5 暗褐色土 ローム粒・ローム小Ｂ含む。
6 暗褐色土 ローム粒散る。
7 暗褐色土 ローム粒・ローム小Ｂ含む。やや軟質。
8 暗褐色土 汚れたローム粒含む。やや軟質。
9 暗褐色土 ローム粒少量含む。
10 暗褐色土 ローム粒含む。
11 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
12 暗褐色土 ローム大粒含む。
13 暗褐色土 ローム粒・ローム小Ｂ含む。
14 暗褐色土 ローム粒含む。
15 暗褐色土 ローム粒・ローム Ｂ含む。
16 暗褐色土 ローム粒・ローム小Ｂ含む。
17 暗褐色土 ローム粒・ローム Ｂ含む。
18 暗褐色土 ローム粒・ローム Ｂ含む。硬く締まる。

第３主体部



SM1043 第３主体部
1 暗褐色土 ローム粒少量含む。
2 暗褐色土 ローム粒含む。
3 暗褐色土 ローム粒・ローム Ｂ混入。
4 褐色土 ローム粒・ローム Ｂ主体。

第４主体部



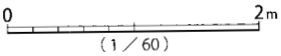


Fig.307　SM1043 遺構 (2)・遺物 (1) 実測図

099-4114号遺構である。

墳丘と周溝

長径16.72m、短径16.72mを測るほぼ正方形な方墳である。現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-9°-Wを示す。周溝内側面積は273.2㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第4位の規模である。確認面での周溝幅は、1.76～2.36m、確認面での深さは0.44～1.06mを測る。全体的に均整のとれた方形形状で、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

西側周溝の一部に落ち込みが認められるが、調査図面には落とし穴と記載されており、本墳とは無関係の遺構である。

埋葬施設

方台部中央西側に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央西側に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径2.70m短径1.42m深さ0.44m、下端で長径2.10m短径1.26mを測り、主軸方位はN-89°-Wを示す。墓壙の中央やや北寄りに、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.10m幅0.50m、下端で長さ2.06m幅0.44m深さ0.44mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-88°-Wを示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは2点の遺物が出土している。1は覆土一括で取り上げられており、その断面形状から鉄釘ないしは鉄鏃頸部と想定されるが、詳細は分からない。何れにせよ2次変形によって曲がった製品である。2は周溝底から33㎝浮いた状態で検出された須恵器平瓶ないしはフラスコ瓶の頸部であるが、器形の詳細は不明である。これらの遺物が示す年代は、7世紀末葉前後と想定され、当墳の築造年代を概ね示す遺物であると捉えられる。

SM1045　SW80・81地区　（Fig.310、PL.116～117）

Q・R-24・25グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。本墳は昭和57年度発行の概報にて、一部報告された175号墳である。旧遺構番号はSW80・81-175号遺構である。

墳丘と周溝

長径17.00m、短径16.50m、現状での盛土は1.24mを測り、主軸方位はN-9°-Eを示す。周溝内側面積は267.7㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第5位の規模である。確認面での周溝幅は、3.20～3.70m、確認面での深さは0.60～0.80m、土層断面では0.60～1.10mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部中央西側に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央西側に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径3.04m短径1.68m深さ0.76m、下端で長径2.16m短径1.42mを測り、主軸方位はN-83°-Wを示す。墓壙底面の木棺が配置された両サイドには、長さ2.20m幅0.22m深さ6～16㎝前後の溝状遺構が2本検出されている。溝の位置から、木棺固定ないしは排水溝的な役割を果たしていたものと察知される。

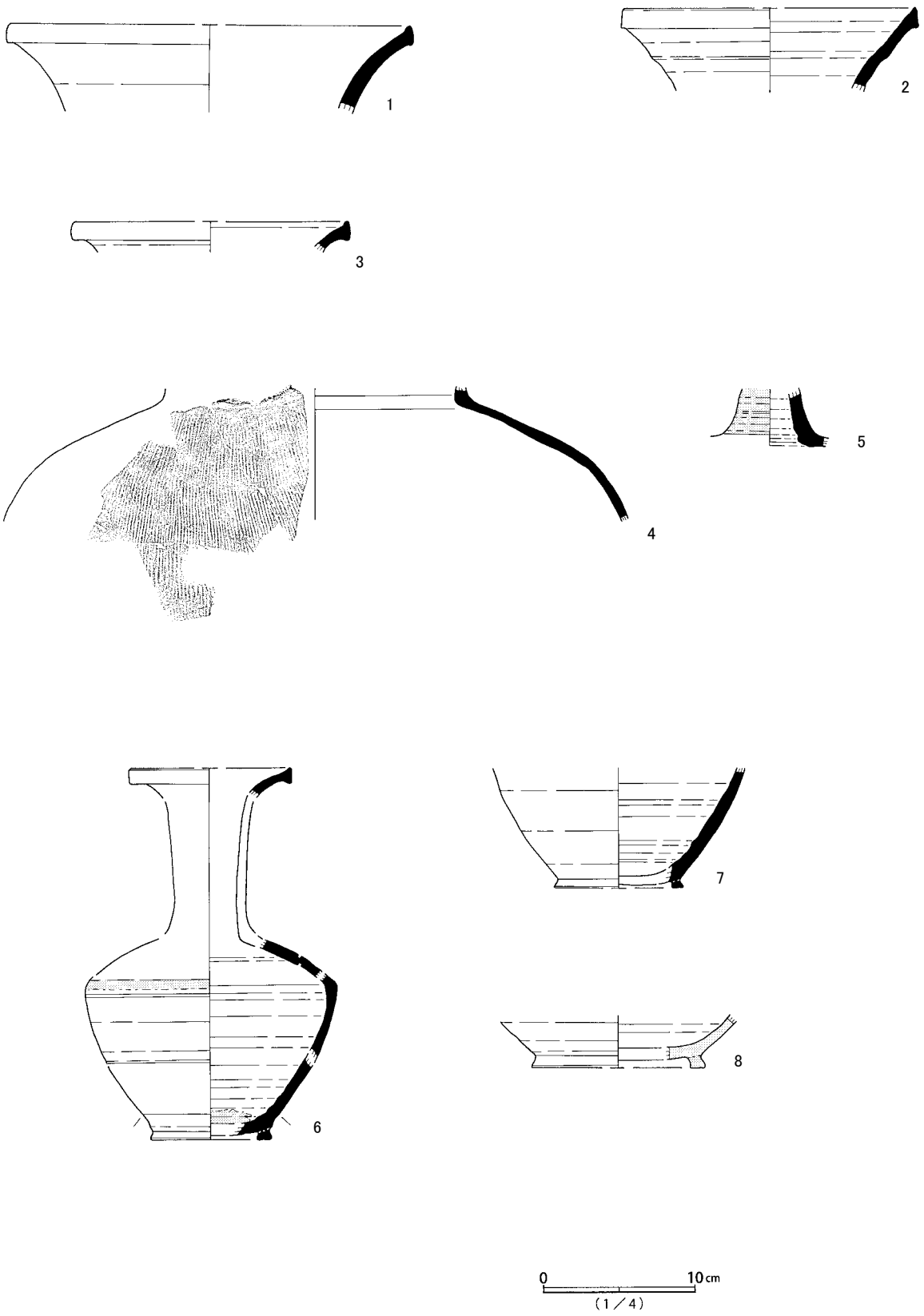
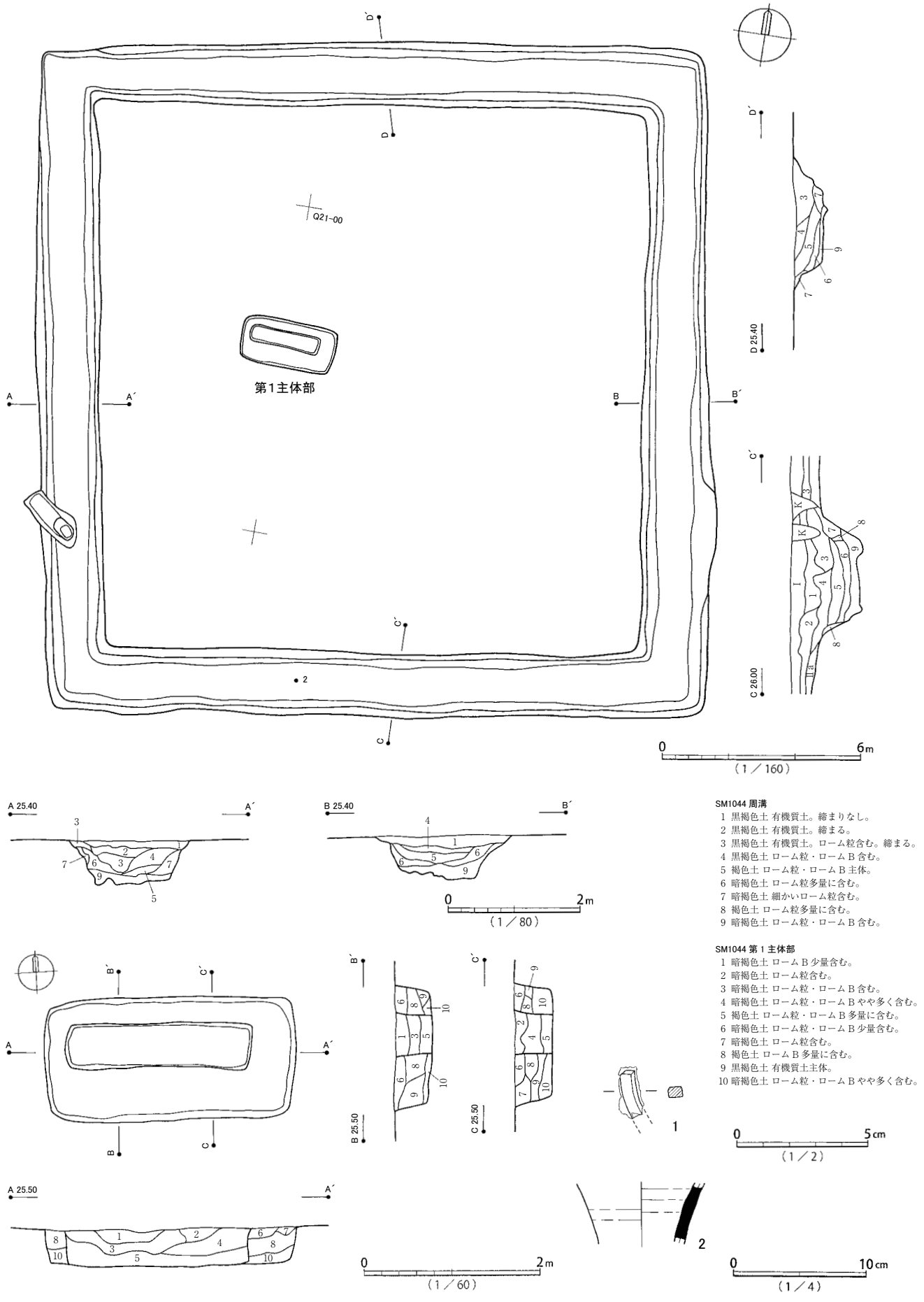


Fig.308　SM1043 遺物 (2) 実測図



SM1044 周溝
1 黒褐色土 有機質土。締まりなし。
2 黒褐色土 有機質土。締まる。
3 黒褐色土 有機質土。ローム粒含む。締まる。
4 黒褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
5 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
6 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
7 暗褐色土 細かいローム粒含む。
8 褐色土 ローム粒多量に含む。
9 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。

SM1044 第 1 主体部
1 暗褐色土 ローム B 少量含む。
2 暗褐色土 ローム粒含む。
3 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
4 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
5 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
6 暗褐色土 ローム粒・ローム B 少量含む。
7 暗褐色土 ローム粒含む。
8 褐色土 ローム B 多量に含む。
9 黒褐色土 有機質土主体。
10 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。

Fig.309　SM1044 遺構・遺物実測図

墓壙の中央やや東寄りに、長辺の棺底部付近の両サイドを粘土で固定した箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.34m幅0.74m、下端で長さ2.22m幅0.58m深さ0.34mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-80°-Wを示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは2点の須恵器が出土している。2の須恵器蓋は周溝底から13㎝、1の須恵器長頸壺は同じく18～28㎝浮いた状態で検出されている。3は、盛土開始面である旧表土上面から出土した須恵器蓋である。これらの遺物が示す年代は、8世紀初頭段階に限定され、当墳の築造年代を示す遺物であると捉えられる。

SM1046　064・SW74地区　（Fig.311～312、PL.117・189・203）

G-6・7グリッドに位置する。南西の一隅を削平等により欠くが、三隅が直角な終末期方墳である。本墳は昭和50年度発行の概報にて、一部報告された諏訪台6号墳である。旧遺構番号は064-152・SW74-6号遺構である。

墳丘と周溝

長径18.04m、短径13.80mを測る東西方向に長い方墳である。現状での盛土は0.36mを測り、主軸方位はN-3°-Eを示す。復元される周溝内側面積は256.2㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第6位の規模である。確認面での周溝幅は、1.40～3.20m、確認面での深さは0.60～0.92m、土層断面では1.00～1.24mを測る。南側に傾斜する緩斜面に位置し、南側が狭く浅い傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部のほぼ中央に1基、他に玉類が多量に検出された範囲が方台部内に存在することから、方台部内には合計2基の埋葬施設が存在していたものと想定される。

第1主体部

方台部のほぼ中央、やや西寄りに位置し、墓壙及び木棺痕の上面と西側の大半を流出した状態で検出されている。残存したのは、周囲を粘土で固定した箱型の木棺痕跡の東側半分であり、残存木棺規模は、上端で長さ1.48m幅0.88m、下端で長さ1.44m幅0.80m、深さは0.07mを測り、主軸方位はN-65°-Wを示す。残存する棺底部はほぼ平坦であり、周囲に粘土の散布も認められるが、攪乱も著しい。

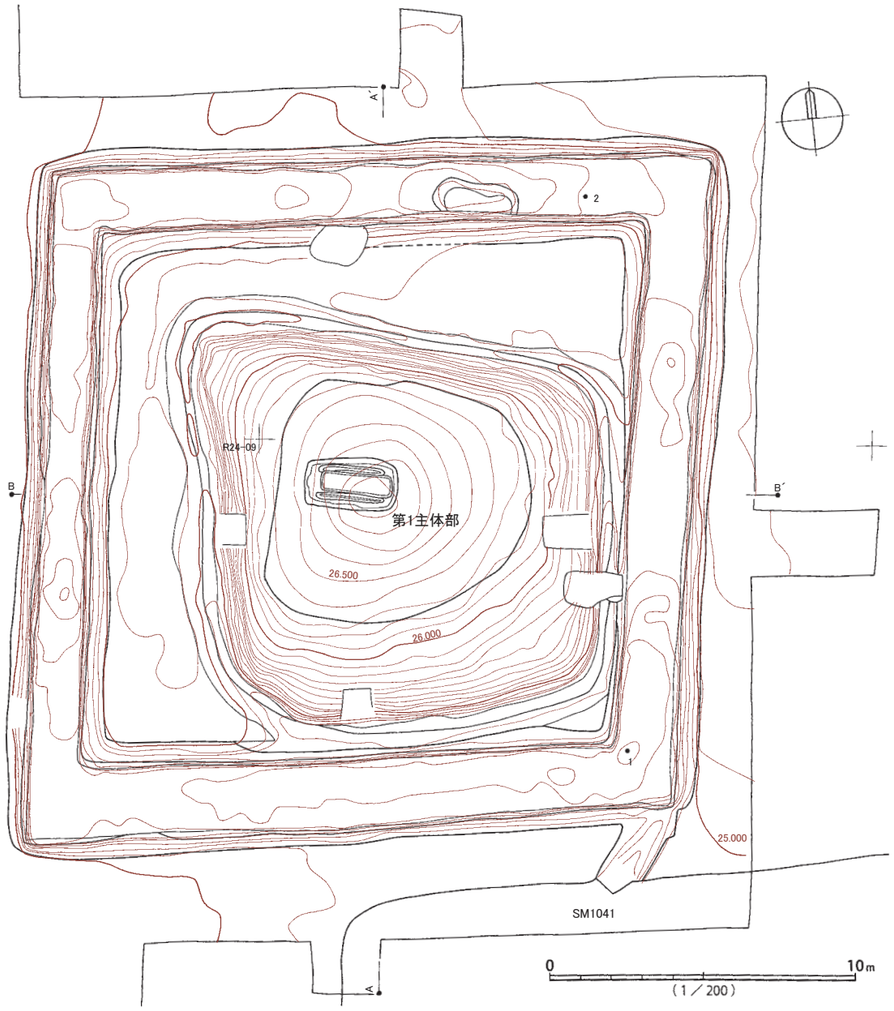
木棺内の北側から、茎部と切っ先部を攪乱により喪失した大刀1点が検出されている。

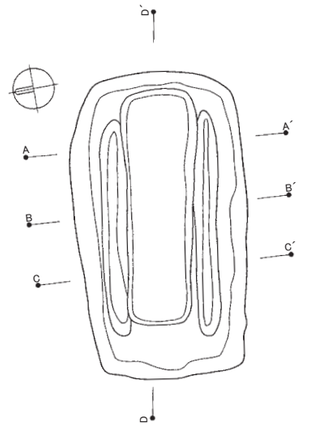
第2主体部

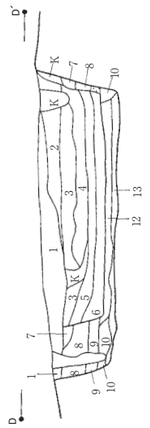
第1主体部の北東に約3.0m離れた地点を中心として、長径2.00m短径0.80m前後の範囲から、玉類が比較的纏って検出された。おそらくこの地点に埋葬施設が存在したものと察知されるが、墓壙や木棺痕は既に流出しており、詳細な図面は存在していない。流出を免れた玉類等が、当範囲に留まっていたものと想定される。

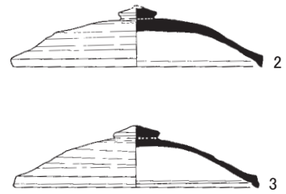
出土遺物

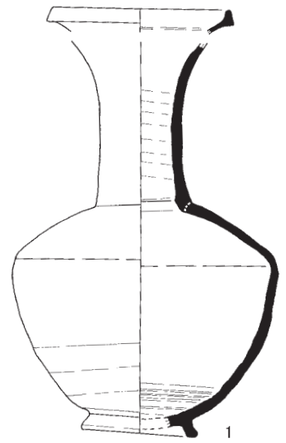
1-1は第1主体部棺底から検出された大刀である。前後に存在する攪乱によって、茎と切っ先を喪失している。2-1～79は、推定第2主体部範囲内から検出された計79個の玉類である。詳細な記録はないが、概ね棺底付近からの検出と想定される。2-1が石材不明切子玉、2～5は大型のガラス玉、6～79











SM1045 第１主体部
1 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
2 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
3 褐色土 有機質土。ローム粒含む。締まる。
4 褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
5 黒褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
6 黒褐色土 ローム粒多量に含む。
7 暗褐色土 細かいローム粒含む。
8 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
9 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
10 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
11 暗褐色土 細かいローム粒含む。
12 黄褐色土 ローム粒多量に含む。
13 黄褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
14 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。

0 2m
(1／60)

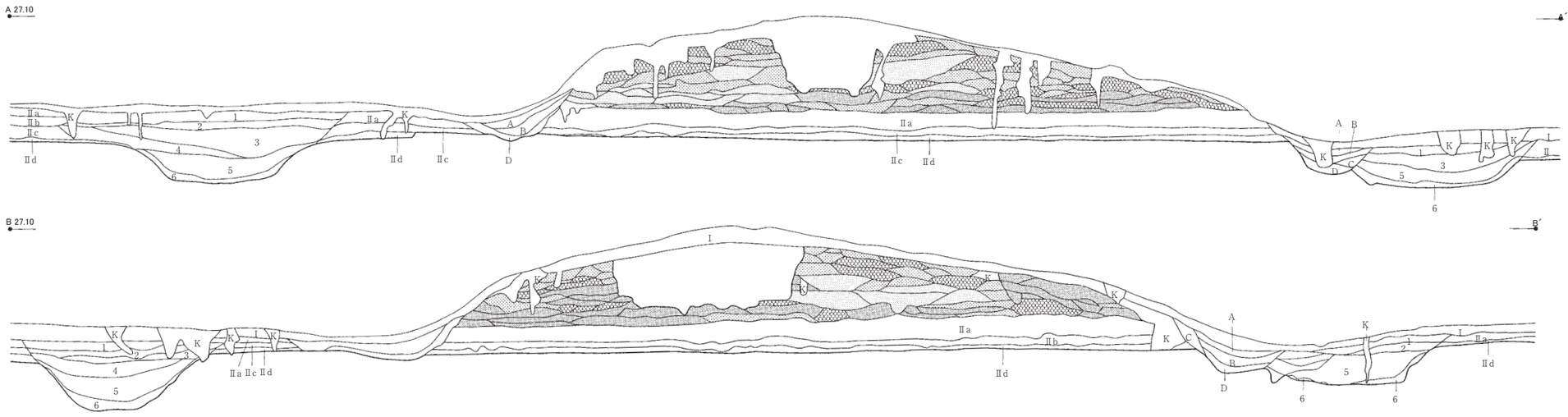
0 10cm
(1／4)

褐色土＋ローム粒

ローム粒・ローム B 主体

褐色土＋ローム粒＋黒色土

黒色土主体若干少量のローム粒含む



SM1045 周溝
1 暗褐色土 細かいローム粒多量に含む。締まる。
2 暗褐色土 細かいローム粒含む。硬く締まる。
3 黒褐色土 ローム粒含む。
4 黒褐色土 3 層より黒味を帯る。ローム B 含む。
5 黒褐色土 ローム粒・ローム B 含む。締まる。
6 黄褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
A —
B —
C —
D —

0 2m
(1／80)

Fig.310　SM1045 遺構・遺物実測図

はガラス玉であることが概報により確認される。

1は鏑造柳葉式の銅鏃であり、古墳時代前期の遺物である。本墳と重複する東側溝付近からの検出とされるが、時期的に本墳とは整合しない。2～4は本墳周溝内一括で検出された土師器・須恵器である。2は口縁部から胴部が大きく張り出す土師器甕型土器である。3・4は須恵器甕片である。外面平行敲き、内面青海波を丁寧に磨り消した製品であり、2を含めて5世紀代の所産と考えられるため、本墳には直接伴わない。

本墳出土遺物は、第1主体部出土の1-1、周溝内出土の1～4を除いて現在行方不明であり、第2主体部出土の2-1以下の遺物は、概報図の再トレースによって図化したものである。

SM1047　099地区　（Fig.313・316、PL.118・189）

K・L-12・13グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号は099-4020号遺構である。

墳丘と周溝

長径16.04m、短径15.72m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-1°-Eを示す。周溝内側面積は251.8㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第7位の規模である。確認面での周溝幅は、1.88～2.12m、確認面での深さは0.24～0.88mを測り、東西方向が深く、南北方向が浅い傾向が認められる。全体的に均整のとれた方形形状で、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部のほぼ中央に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部のほぼ中央に位置する木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径3.54m短径1.90m深さ0.84m、下端で長径2.98m短径1.32mを測り、主軸方位はN-90°を示す。墓壙の中央やや北寄りに、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.40m幅0.82m、下端で長さ2.26m幅0.72m深さ0.52mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-89°-Eを示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは1～3の須恵器の他、4の須恵器大甕片が検出されている。2は広口長頸壺の類であり、概ね8世紀前半代の年代観が想定される。

SM1048　SW83・セ54地区　（Fig.314～316、PL.118・171・189）

T・U-21・22グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。本墳は昭和59年発行の概報によって、諏訪台5号墳として一部報告されている。また、調査年度と調査範囲が異なって、2次に亘って調査が実施された古墳である。

なお、概報では、第1主体部出土玉類範囲内が、全て攪乱として報告されているが、明らかにその攪乱位置に齟齬が認められるため、本報告を持って訂正する。旧遺構番号はSW83-K5・セ54-22号遺構である。

墳丘と周溝

長径15.08m、短径15.44m、現状での盛土の高さは0.88mを測り、主軸方位はN-25°-Wを示す。周

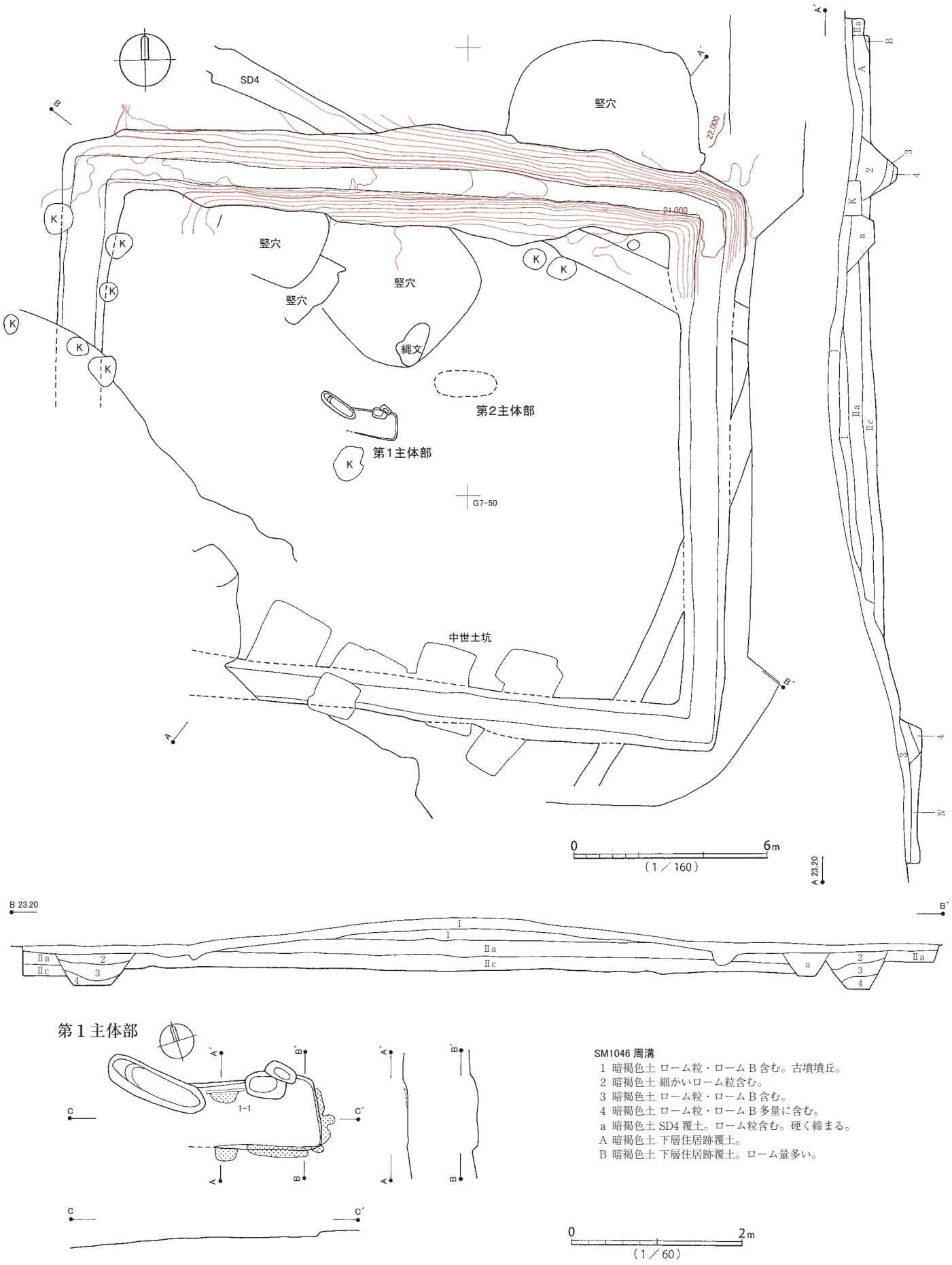
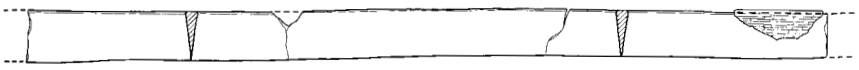
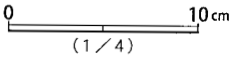
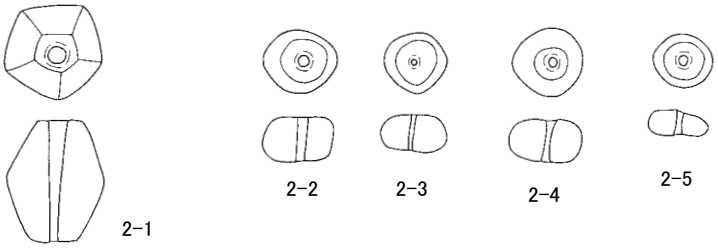
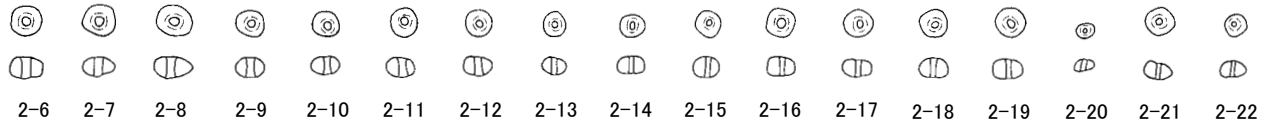


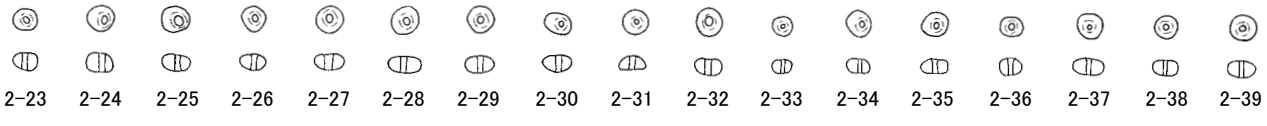
Fig.311　SM1046 遺構実測図

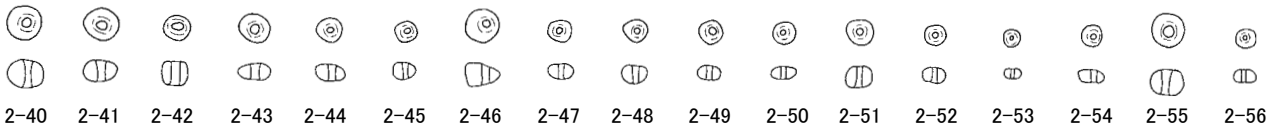


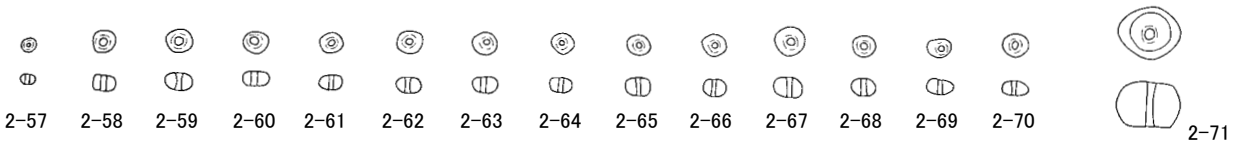


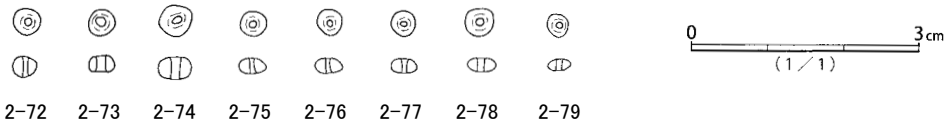












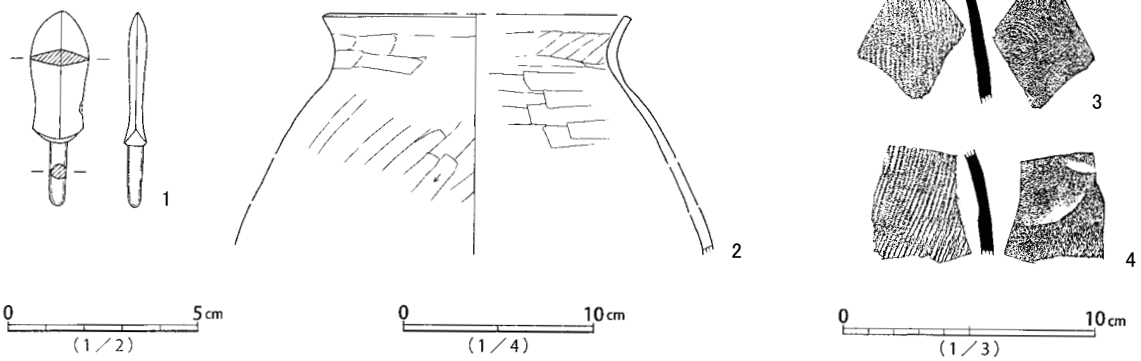


Fig.312　SM1046 遺物実測図

溝内側面積は250.4㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第8位の規模である。確認面での周溝幅は、2.20～2.60m、土層断面での深さは0.80～1.24mを測り、東西方向が広くて深い傾向が認められる。全体的に均整のとれた方形形状で、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部のほぼ中央に2基検出されている。ただし1基は調査途中で放棄され、調査図面が中途半端であったが、土層断面等から木棺直葬埋葬施設と判断された。

第1主体部

埋葬施設は、方台部の中央やや北側に位置する木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径2.64m短径1.06m深さ0.36m、下端で長径2.58m短径1.16mを測り、主軸方位はN-67°-Eを示す。墓壙の中央の攪乱により一部を削平されるものの、周囲を粘土で固定した箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.20m幅0.60m、下端で長さ2.00m幅0.44m深さ0.32mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-67°-Eを示す。

なお、概報によれば、木棺内の遺体頭部付近と想定される攪乱範囲の付近から、30点のガラス玉が検出されたとされるが、攪乱の位置に誤りがあり、ガラス玉出土地点には攪乱が存在していない。プライマリーな棺底部付近からの検出であるため、本報告を持って改正する。

第2主体部

第2主体部は、第1主体部の南側に位置した木棺直葬の土壙墓である。ただし、SW83地点の調査段階では、調査途中で放棄され、調査図面が中途半端で未完成である。今回の整理作業に際し、検出地点や土層断面の注記等も踏まえて総合的に読み解いていくと、木棺直葬土壙と判断されることから、一部図面修正して報告する。

なお、当埋葬施設は、セ54調査時段階では既に消滅していたため、追加検証することができなかった。したがって、全体規模等については不明な点もあるが、残存部での墓壙規模は、上端で長径1.50m短径0.84m以上、深さ0.50m、下端で長径1.46m短径0.78m以上を測り、主軸方位はN-85°-Eを示す。墓壙の中央に箱型の木棺痕が土層断面から復元できる。木棺規模は、上端で長さ1.38m幅0.44m以上、深さ0.46mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-85°-Eを示す。

墓壙・木棺内からは、遺物は全く検出されなかった。

出土遺物

本墳からは、比較的多数の遺物が出土している。ただし第1主体部から出土したガラス玉は、概報段階では遺物写真で報告されているが、現在行方不明で図化できず、本報告では掲載できない。1は北側周溝中央部から粉々になった状態で検出された須恵器大甕である。周溝底から55㎝浮いた状態で検出されており、本来墳頂部に供献されていたものが、後に周溝内に転落してきたものと判断される。2・3は湖西産須恵器坏蓋と坏身であり、時期的にセット関係と想定してよい遺物である。5はロクロ土師器の坏であり、明らかに時期が整合しないため混入品であろう。6は管状土錘、7・8は造りの特徴から接合に至らぬ1の須恵器大甕片の一部と判断される。

本墳の築造時期は、返りの無い2の坏蓋、所謂「出尻」な3の高台付坏が示す8世紀初頭段階に想定されよう。

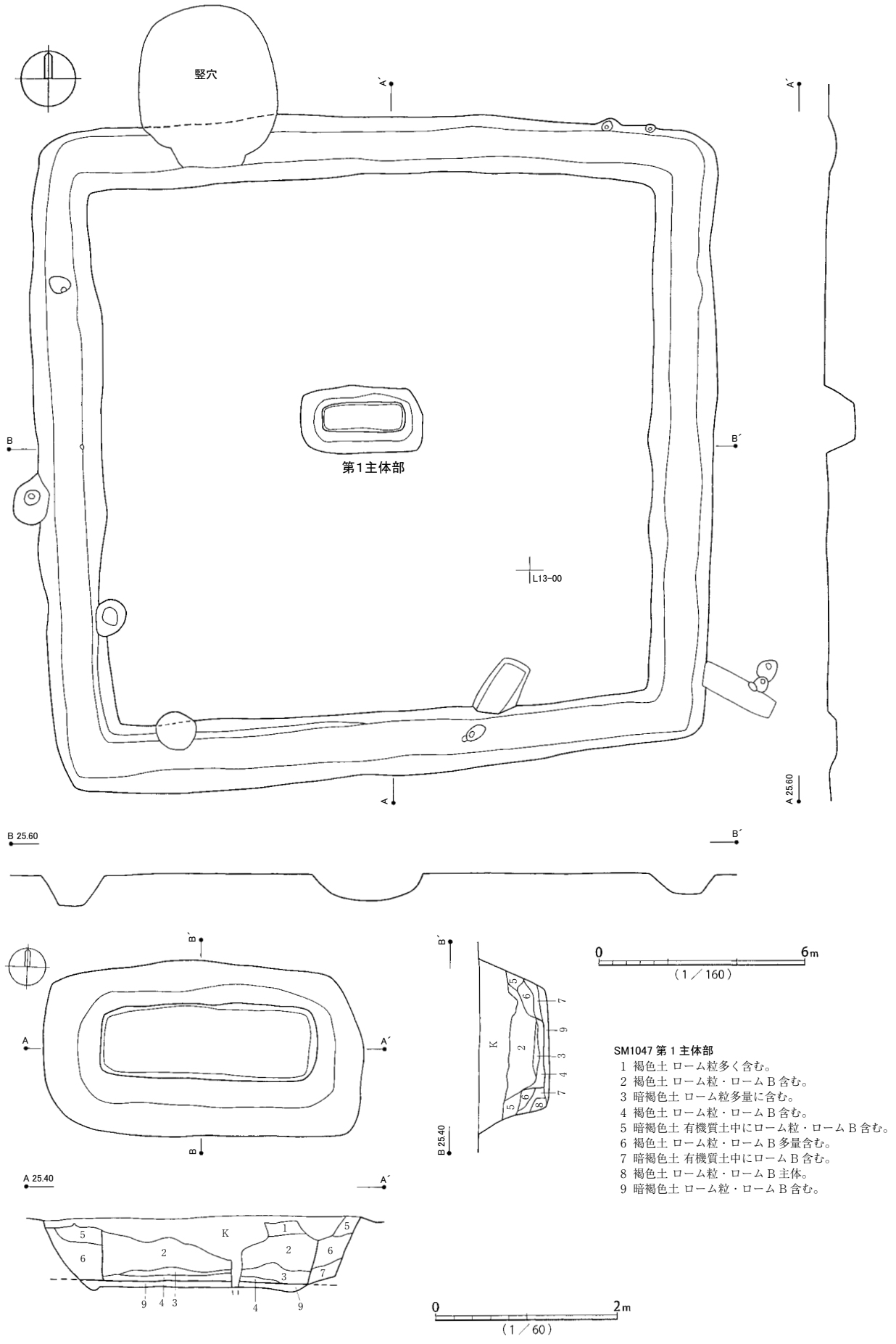
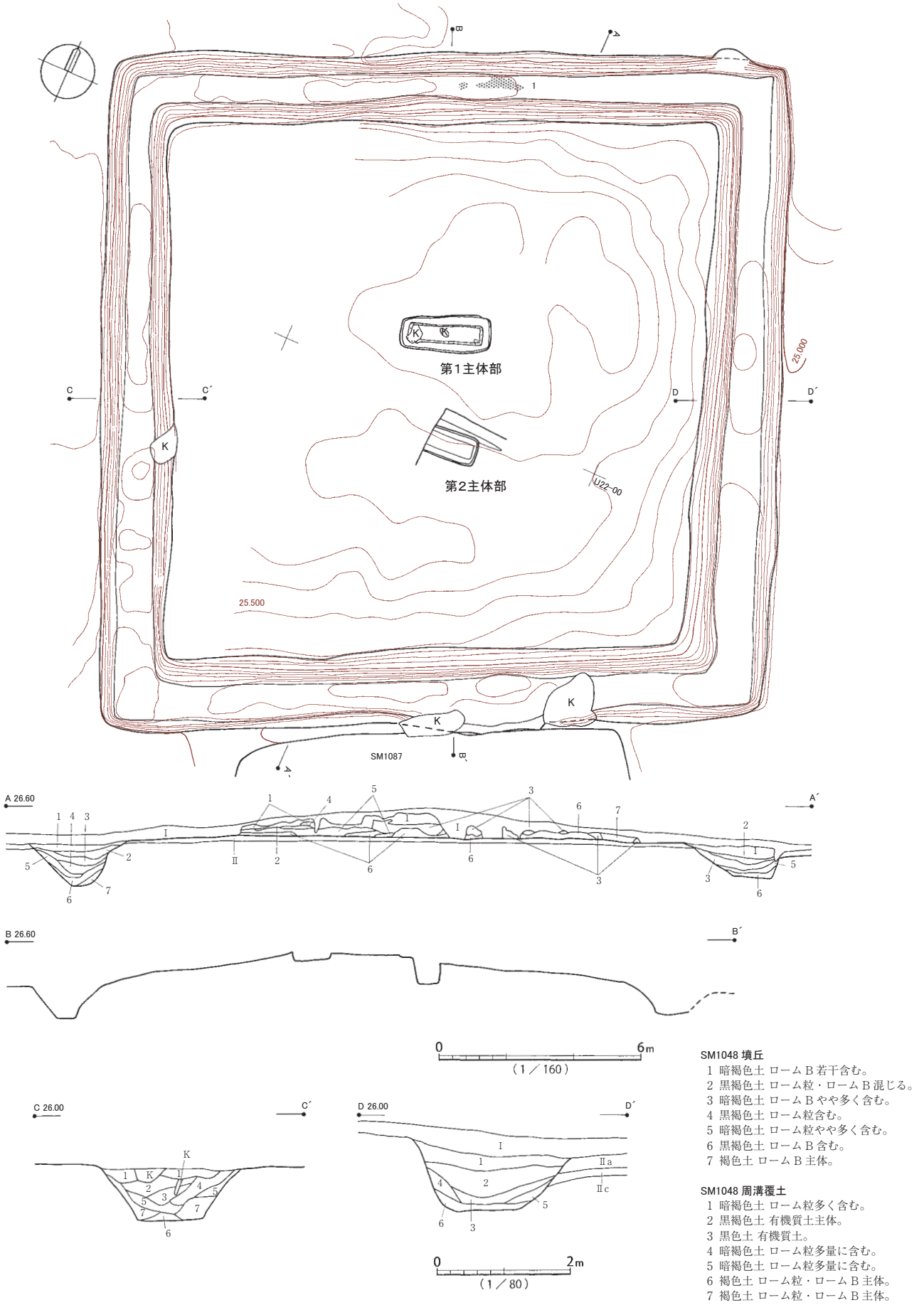


Fig.313　SM1047 遺構実測図



SM1048 墳丘

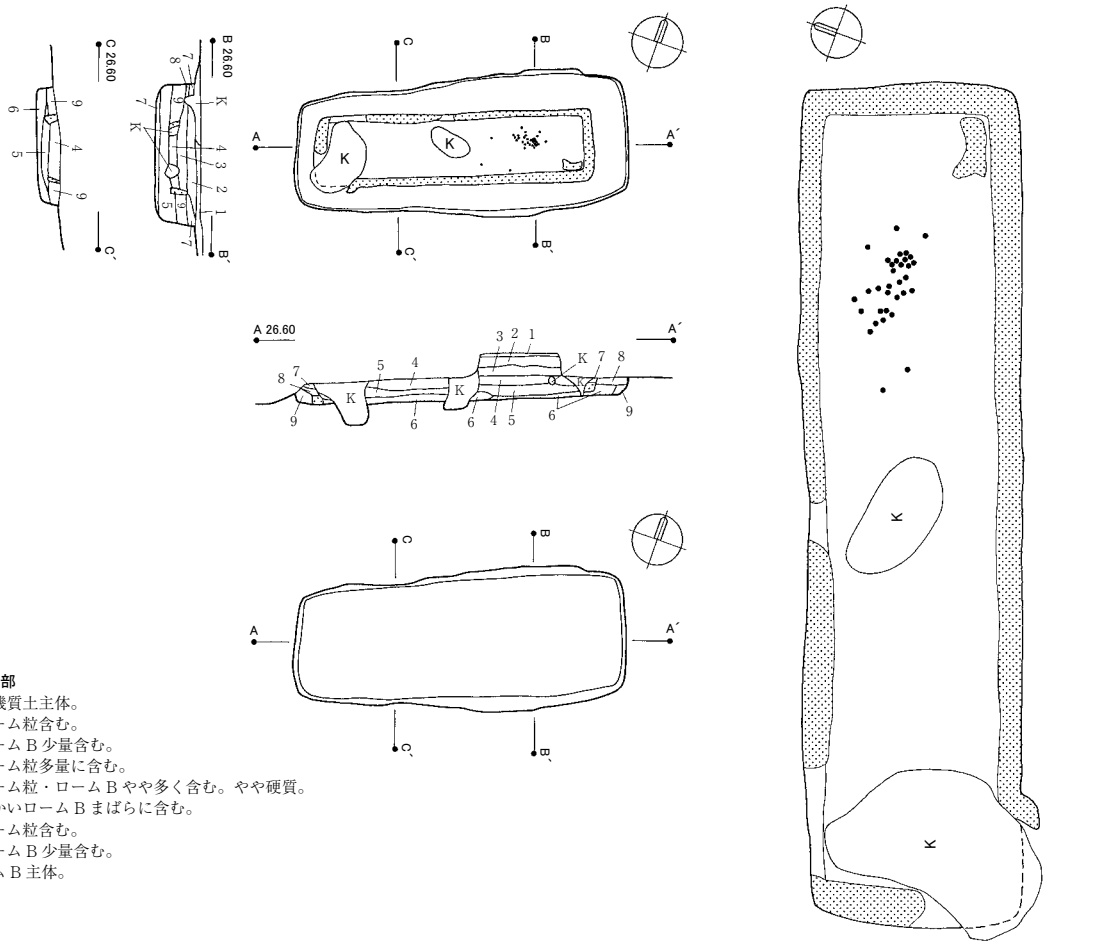
1 暗褐色土 ローム B 若干含む。
2 黒褐色土 ローム粒・ローム B 混じる。
3 暗褐色土 ローム B やや多く含む。
4 黒褐色土 ローム粒含む。
5 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
6 黒褐色土 ローム B 含む。
7 褐色土 ローム B 主体。

SM1048 周溝覆土

1 暗褐色土 ローム粒多く含む。
2 黒褐色土 有機質土主体。
3 黒色土 有機質土。
4 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
5 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
6 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
7 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。

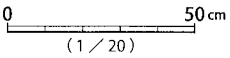
Fig.314　SM1048 遺構 (1) 実測図

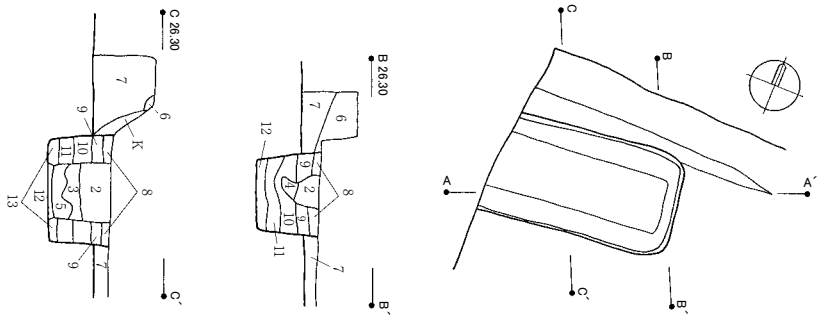
第１主体部

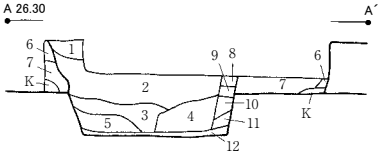


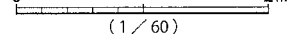
SM1048 第１主体部
1 暗褐色土 有機質土主体。
2 暗褐色土 ローム粒含む。
3 暗褐色土 ローム B 少量含む。
4 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
5 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。やや硬質。
6 黒褐色土 細かいローム B まばらに含む。
7 暗褐色土 ローム粒含む。
8 暗褐色土 ローム B 少量含む。
9 褐色土 ローム B 主体。

第２主体部









SM1048 第２主体部
1 暗褐色土 ローム粒含む。
2 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
3 暗褐色土 ローム粒・ローム小 B 含む。
4 暗褐色土 ローム粒・ローム小 B 含む。
5 黒褐色土 ローム小 B 若干含む。
6 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
7 暗褐色土 ローム B 含む。
8 暗褐色土 ローム粒含む。
9 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
10 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
11 暗褐色土 ローム粒多量に含む。やや軟質。
12 暗褐色土 有機質土中にローム粒混じる。
やや締まる。
13 黄褐色土 ローム粒・ローム B 主体。

Fig.315　SM1048 遺構 (2)・遺物出土詳細実測図

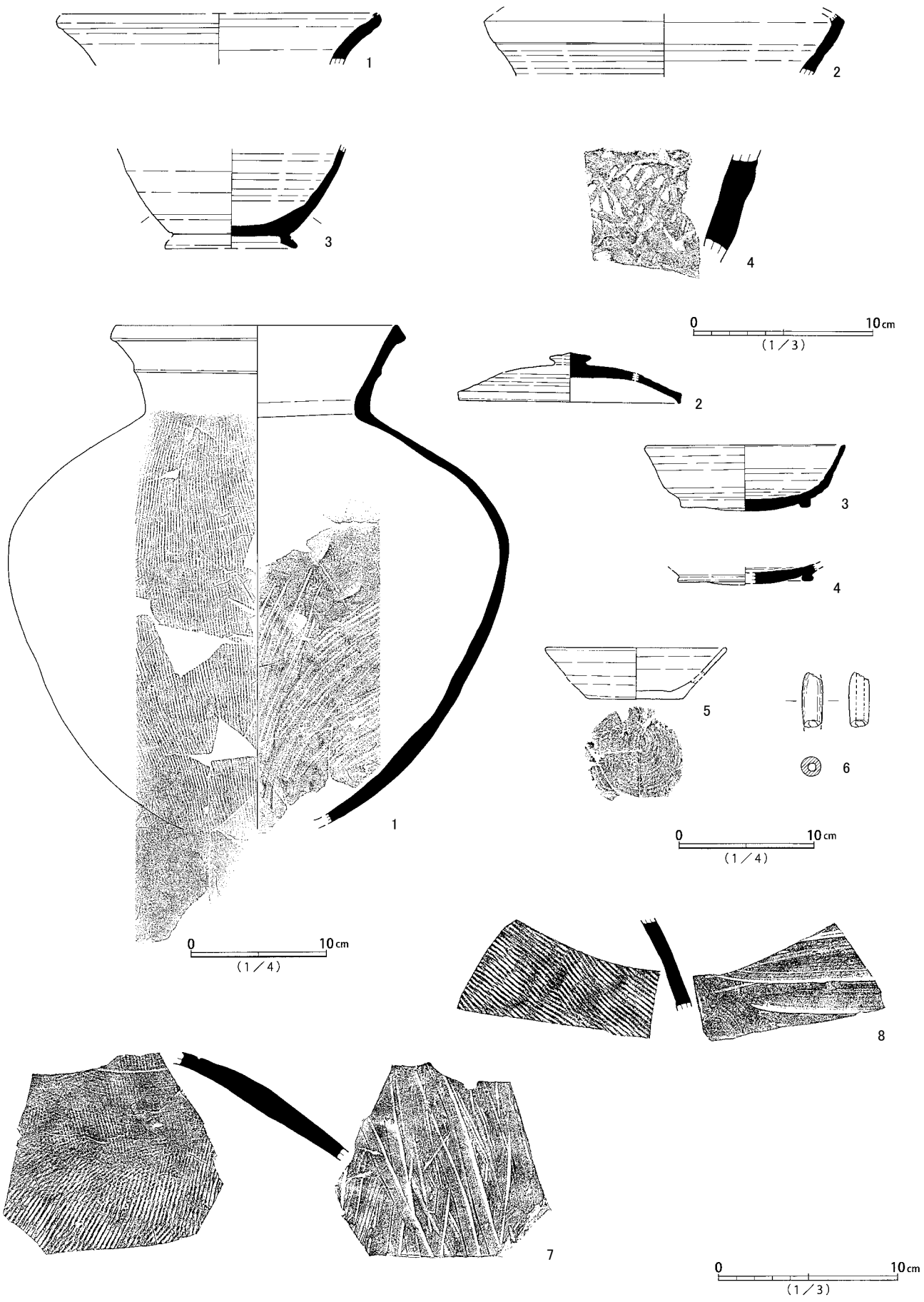


Fig.316　SM1047 遺物、SM1048 遺物実測図

SM1049　SW83地区　（Fig.317～318、PL.189・203・215）

Q・R-22・23グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。本墳は昭和59年発行の概報で、諏訪台3号墳として一部報告されている。旧遺構番号はSW83-K3号遺構である。

墳丘と周溝

長径14.88m、短径14.80m、現状での盛土の高さは0.34mを測り、主軸方位はN-34°-Wを示す。周溝内側面積は214.3㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第9位の規模である。確認面での周溝幅は、2.00～2.32m、深さは0.66～0.96m、土層断面では1.02～1.14mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳の南東コーナー部からは、1の須恵器長頸壺頸部片が検出されている。2～15の遺物は何れも周溝内一括で取り上げられたものである。2はおそらく灰釉陶器碗の口縁部破片であり、8は須恵器坏蓋の鈕である。一部に時期のそぐわない製品も含まれるが、本墳の築造時期は、1・2・8の製品が示す8世紀前半段階に想定されよう。1付近の周溝内からは、馬歯も検出されたとされる。

SM1050　099地区　（Fig.317～318、PL.118・189）

G-11グリッドに位置する。遺構の大半は隣接するTJ地区に存在したが、099地区より遺構確認面を低く設定したことにより、TJ地区では検出できなかった遺構と想定される。ただし、その残存形態から四隅が直角な終末期方墳と判断される遺構である。なお、本墳の周溝内側面積は正確に計測できないことから、紙面の都合上、余白を活用しここに掲載するものである。旧遺構番号は099-4009号遺構である。

墳丘と周溝

Ｌ字状に残った残存長径5.00m、残存短径3.00mを測る。現状での盛土は存在せず、主軸方位は不明である。確認面での周溝幅は、1.24～1.44m、深さは0.38mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

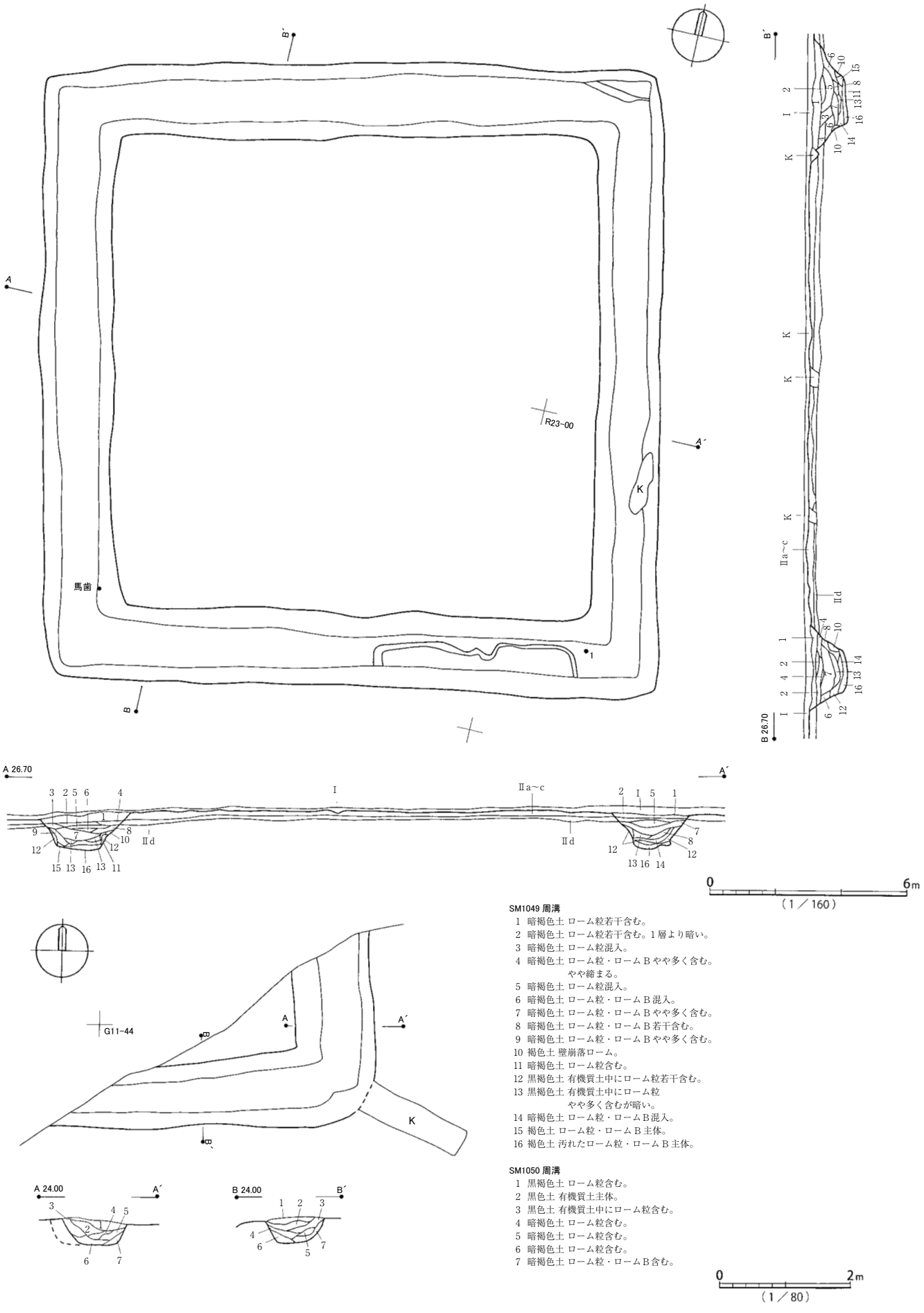
本墳の周溝内からは、一括で3点の弥生土器片が検出されたが、何れも本墳に伴う遺物ではない。

SM1051　099地区　（Fig.319、PL.189・203・215）

L・M-13・14グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号は099-4076号遺構である。

墳丘と周溝

長径14.68m、短径14.40m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-24°-Wを示す。周溝内側面積は211.5㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第10位の規模である。確認面での周溝幅は、1.68～1.92m、深さは0.34～0.56m、土層断面では0.68～0.88mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。



SM1049 周溝
1 暗褐色土 ローム粒若干含む。
2 暗褐色土 ローム粒若干含む。1層より暗い。
3 暗褐色土 ローム粒混入。
4 暗褐色土 ローム粒・ロームＢやや多く含む。
やや締まる。
5 暗褐色土 ローム粒混入。
6 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ混入。
7 暗褐色土 ローム粒・ロームＢやや多く含む。
8 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ若干含む。
9 暗褐色土 ローム粒・ロームＢやや多く含む。
10 褐色土 壁崩落ローム。
11 暗褐色土 ローム粒含む。
12 黒褐色土 有機質土中にローム粒若干含む。
13 黒褐色土 有機質土中にローム粒
やや多く含むが暗い。
14 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ混入。
15 褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。
16 褐色土 汚れたローム粒・ロームＢ主体。

SM1050 周溝
1 黒褐色土 ローム粒含む。
2 黒色土 有機質土主体。
3 黒色土 有機質土中にローム粒含む。
4 暗褐色土 ローム粒含む。
5 暗褐色土 ローム粒含む。
6 暗褐色土 ローム粒含む。
7 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。

Fig.317　SM1049 遺構、SM1050 遺構実測図

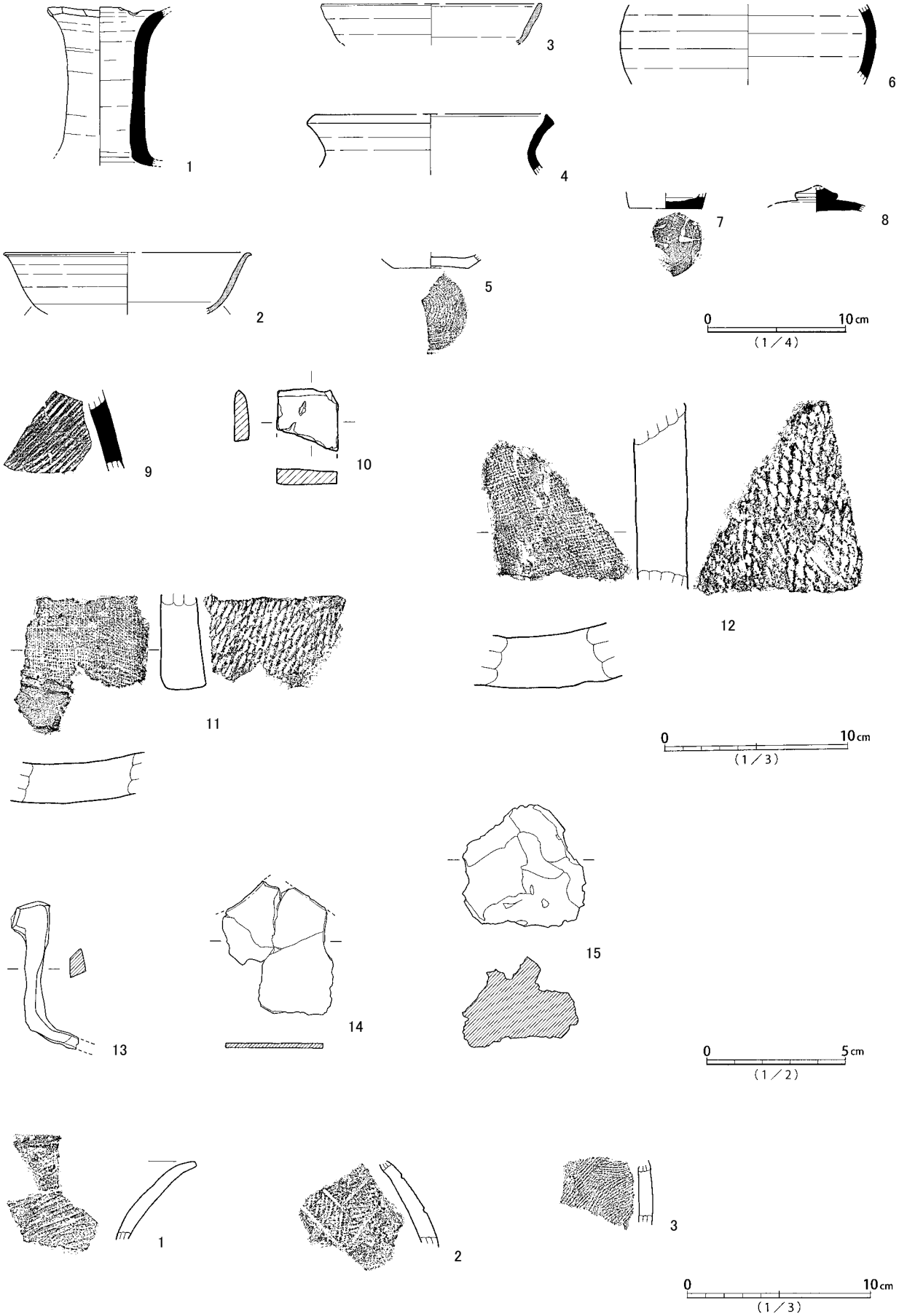


Fig.318　SM1049 遺物、SM1050 遺物実測図

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳の周溝内からは、1は須恵器広口壺、2は土師器坏、4は須恵器長頸壺頸部片、5は須恵器高台付坏の類であろう。本墳の築造時期は、1・2・4・5等の製品から8世紀前半段階に想定されよう。

SM1052　セ54地区　（Fig.320、PL.118）

P・Q-17・18グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号はセ54-2号遺構である。

墳丘と周溝

長径14.80m、短径14.24m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-19.5°-Wを示す。周溝内側面積は205.2㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第11位の規模である。確認面での周溝幅は、1.96～2.32m、深さは0.64～0.68mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳からは遺物が全く検出されなかった。

SM1053　099地区　（Fig.320、PL.118）

G-11・12グリッドに位置する。SM1051の東に隣接し、SM1051同様、遺構の大半は隣接するTJ地区に存在したと想定されるが、TJ地区では検出できなかった遺構である。ただし、その残存形態から四隅が直角な終末期方墳と判断される遺構である。周溝内側面積は測定不能であり、諏訪台古墳群中の方墳順位も不明であるが、紙面の都合上、ここに掲載し報告する。旧遺構番号は099-4010号遺構である。

墳丘と周溝

Ｌ字状に残った残存長径5.30m、残存短径2.70mを測る。現状での盛土は存在せず、主軸方位は不明である。確認面での周溝幅は、0.70～0.90m、深さは0.16～0.20mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳の周溝内からは、一括で2点の土師器甕片が検出されたが、直接本墳に伴う遺物ではない。

SM1054　SW83地区　（Fig.321～322、PL.118～119）

R・S-20・21グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号はSW83-K1号遺構である。

墳丘と周溝

長径14.36m、短径14.20m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-20°-Wを示す。周溝内側面積は204.7㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第12位の規模である。確認面での

周溝幅は、1.44～1.80m、深さは0.38～0.52mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央部に1基、北側に1基合計2基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部のほぼ中央に位置する木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.64m短径1.20m深さ0.98m、下端で長径1.96m短径1.02mを測り、主軸方位はN-87°-Eを示す。墓壙の中央に箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.06m幅0.66m、下端で長さ2.00m幅0.54m深さ0.82mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-88°-Eを示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

第2主体部

第2主体部は、第1主体部の北側に位置する土壙墓である。墓壙規模は、上端で長径2.50m短径1.06m深さ0.62m、下端で長径2.32m短径1.00mを測り、主軸方位はN-87°-Eを示す。墓壙底面には12基のピットが均等間隔に整然と並んで存在し、深さの判明するピットの深さは2～4㎝であり、さほど深くは掘り込まれてはいない。底面はほぼ平坦であるが、土層断面等からの木棺痕跡は検出されなかった。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、1点の須恵器片が検出されているに過ぎない。

SM1055　064地区　（Fig.323、PL.119）

E・F-7・8グリッドに位置する。調査区域外に一隅が位置する終末期方墳である。旧遺構番号は064-261号遺構である。

墳丘と周溝

長径14.60m、短径13.80m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-9°-Eを示す。復元される周溝内側面積は203.2㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第13位の規模である。確認面での周溝幅は、1.44～1.84m、深さは0.64～1.00mを測り、周溝の一部を欠くが、全体的に整った形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、1点の鉄釘片が検出されているに過ぎない。

SM1056　099地区　（Fig.323）

H-13グリッドに位置する。遺構の大半は隣接するTJ地区に存在したと想定されるが、TJ地区では未確認の遺構である。ただし、その形態から終末期方墳と判断される遺構であり、周溝内側面積も正確に測定できないことから、紙面の都合上、余白を活用しここに掲載する。旧遺構番号は099-4014号遺構である。

墳丘と周溝

L字状に残った残存長径3.70m、残存短径2.20m、現状での盛土は存在せず、主軸方位は不明である。

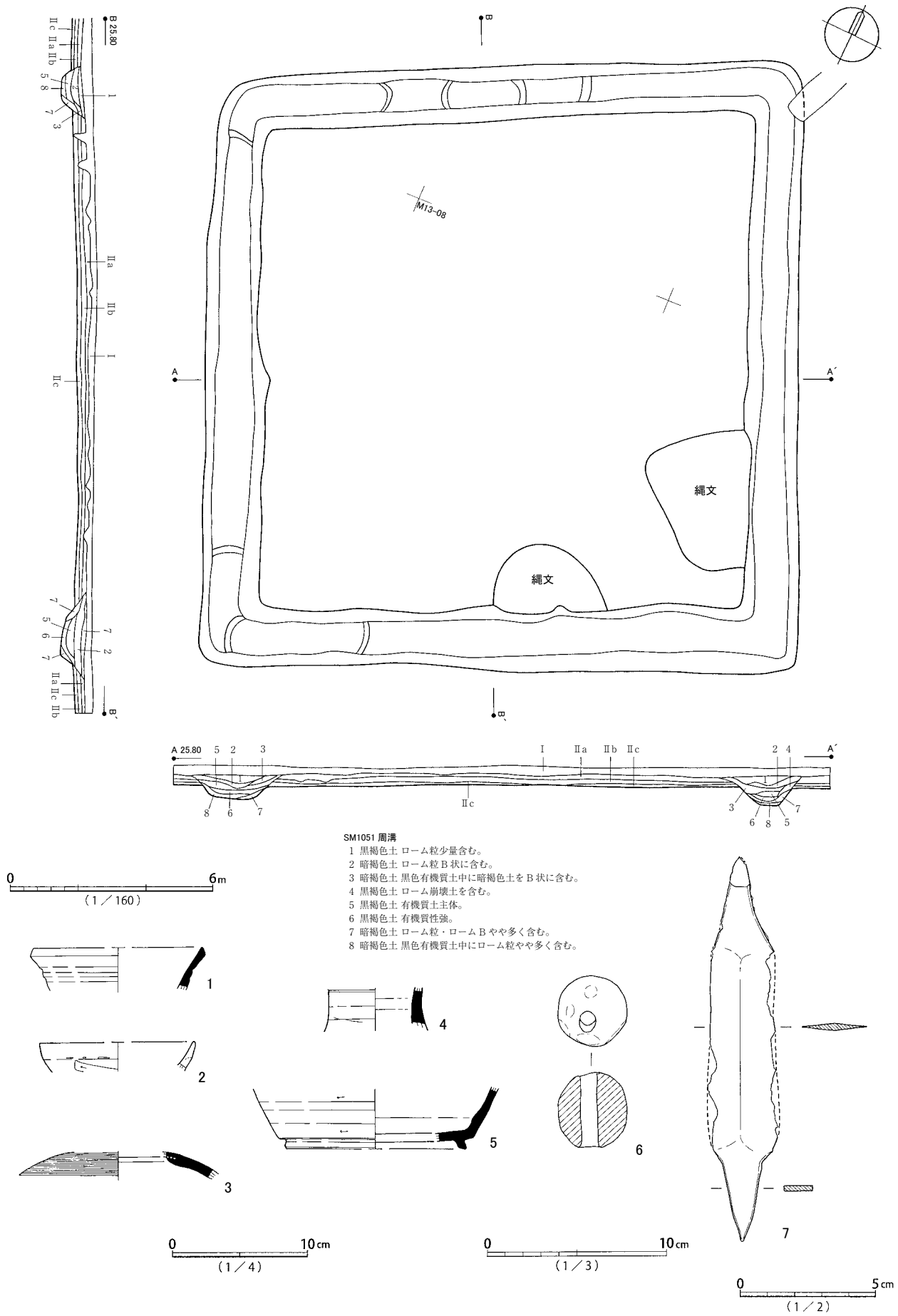


Fig.319　SM1051 遺構・遺物実測図

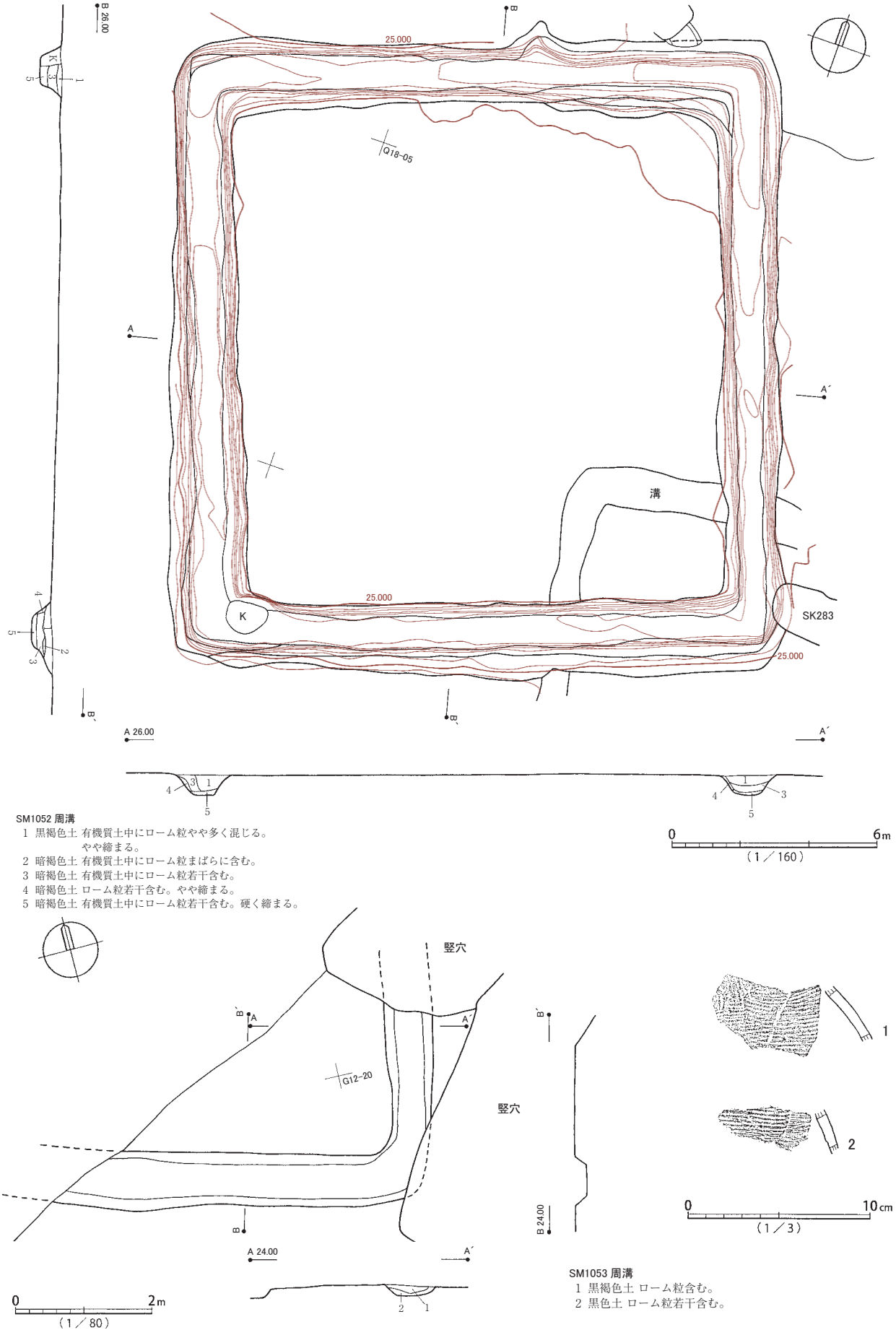


Fig.320　SM1052 遺構、SM1053 遺構・遺物実測図

確認面での周溝幅は、0.80～0.92m、深さは0.18～0.26mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、1点の須恵器甕底部片が検出されているに過ぎない。

SM1057　064地区　（Fig.324、PL.119・203）

F-5・6グリッドに位置する。下層に存在する溝を削平して本墳は構築されている。四隅が直角で、南北方向に長い終末期方墳である。旧遺構番号は064-260号遺構である。

墳丘と周溝

長径15.56m、短径13.00mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-25°-Wを示す。周溝内側面積は201.9㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第14位の規模である。確認面での周溝幅は、1.32～1.60m、深さは0.48～1.04m、土層断面図上では0.76～1.38mを測り、規模の割には周溝の掘り込みが深い傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内の南側に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部の南側に位置する木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.97m短径1.16m深さ0.69m、下端で長径2.60m短径1.00mを測り、主軸方位はN-75°-Eを示す。墓壙の中央に箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.22m幅0.40m、下端で長さ2.16m幅0.34m深さ0.34mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-75°-Eを示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

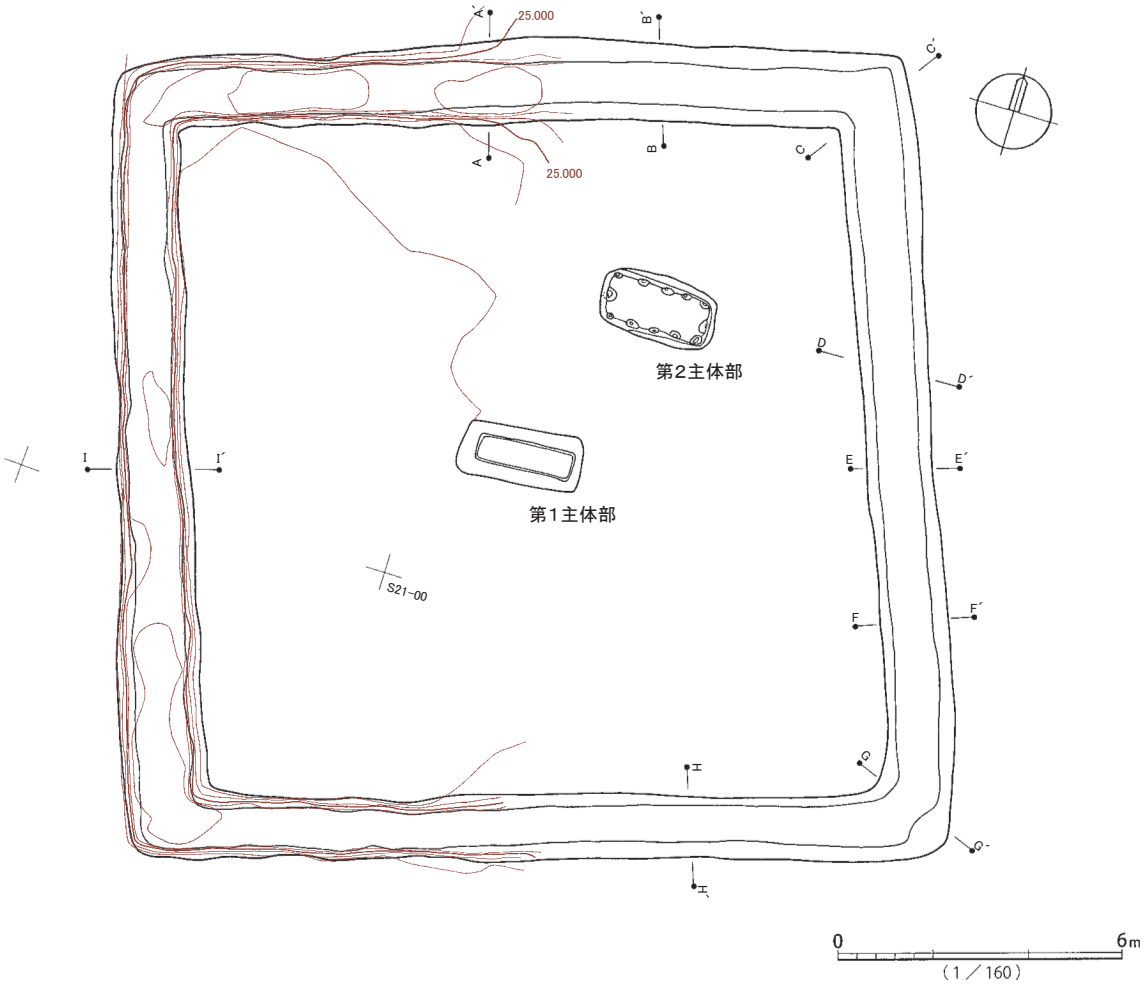
本墳周溝内からは、3点の鉄器が検出されている。この内時期の判明する1以外の遺物は、何れも一括で取り上げられており、出土地点は不明である。1は、南西コーナー部の周溝底から83cm以上浮いた状態で検出された腸抉三角形式の鉄鏃であり、関は台関である。5世紀末葉～6世紀代に盛行する鉄鏃であり、本墳と時期が合わない。下層に位置する竪穴住居跡に伴う遺物である可能性が極めて高い。2は長頸族の頸部ないしは鉄釘と想定されるが、両端部を欠くために形状不明である。3は先端部を欠く鉄釘である。なお、1・2の鉄器は、現在行方不明であり、残存した実測図を使用している。

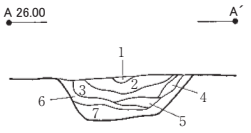
SM1058　SW83地区　（Fig.325～326、PL.119～120・171・189・203）

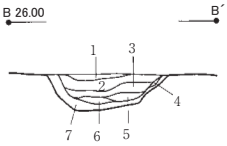
U-24グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号はSW83-K14号遺構である。

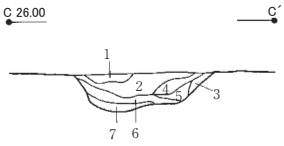
墳丘と周溝

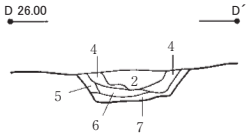
長径14.00m、短径13.50mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-4°-Wを示す。周溝内側面積は189.4㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第15位の規模である。確認面での周溝幅は、0.92～2.28m、深さは0.28～0.74m、土層断面図上では0.72～1.08mを測り、なだらかな緩斜面に位置した南側周溝が、浅くて狭い傾向が認められる。全体的に均整のとれた方形形状

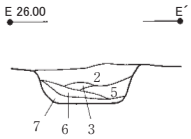


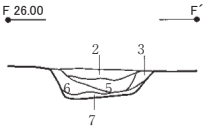


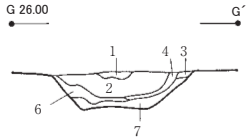


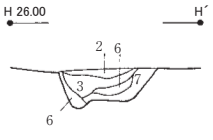


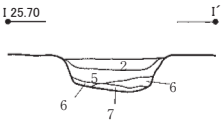














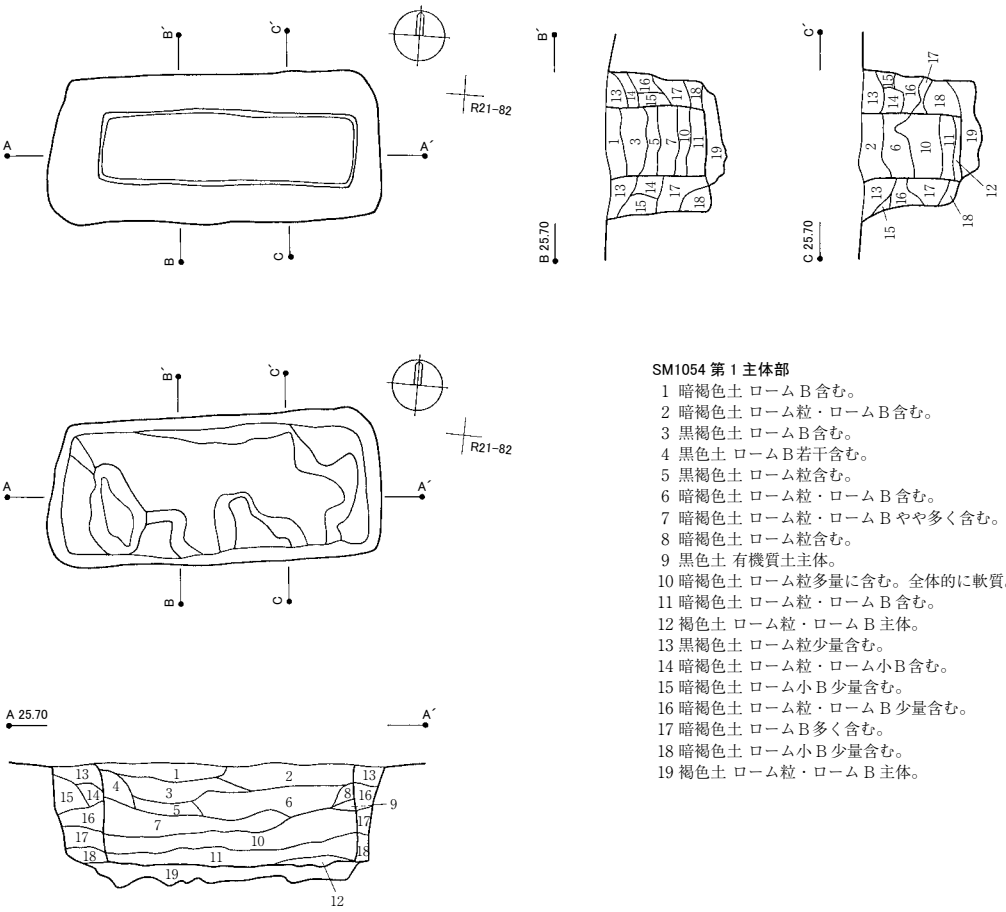
0 10cm
(1／3)

SM1054 周溝
1 黒褐色土 やや粘性あり。
2 黒褐色土 ローム粒子含む。やや締まり
若干粘性あり。
3 黒褐色土 2 層よりローム粒の混入多量。
4 暗褐色土 締まりあり。
5 黒色土 ローム粒若干混入。よく締まり粘性強い。
6 暗褐色土 ローム粒混じり、やや締まりあり。
7 暗褐色土 ロームＢ主体。

0 3m
(1／100)

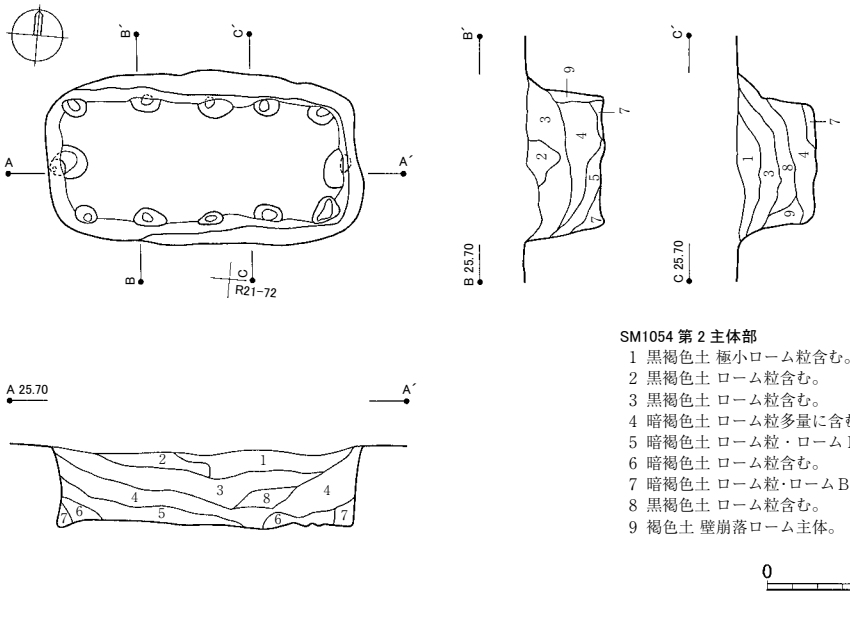
Fig.321　SM1054 遺構 (1)・遺物実測図

第１主体部



SM1054 第１主体部
1 暗褐色土 ローム B 含む。
2 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
3 黒褐色土 ローム B 含む。
4 黒色土 ローム B 若干含む。
5 黒褐色土 ローム粒含む。
6 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
7 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
8 暗褐色土 ローム粒含む。
9 黒色土 有機質土主体。
10 暗褐色土 ローム粒多量に含む。全体的に軟質。
11 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
12 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
13 黒褐色土 ローム粒少量含む。
14 暗褐色土 ローム粒・ローム小 B 含む。
15 暗褐色土 ローム小 B 少量含む。
16 暗褐色土 ローム粒・ローム B 少量含む。
17 暗褐色土 ローム B 多く含む。
18 暗褐色土 ローム小 B 少量含む。
19 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。

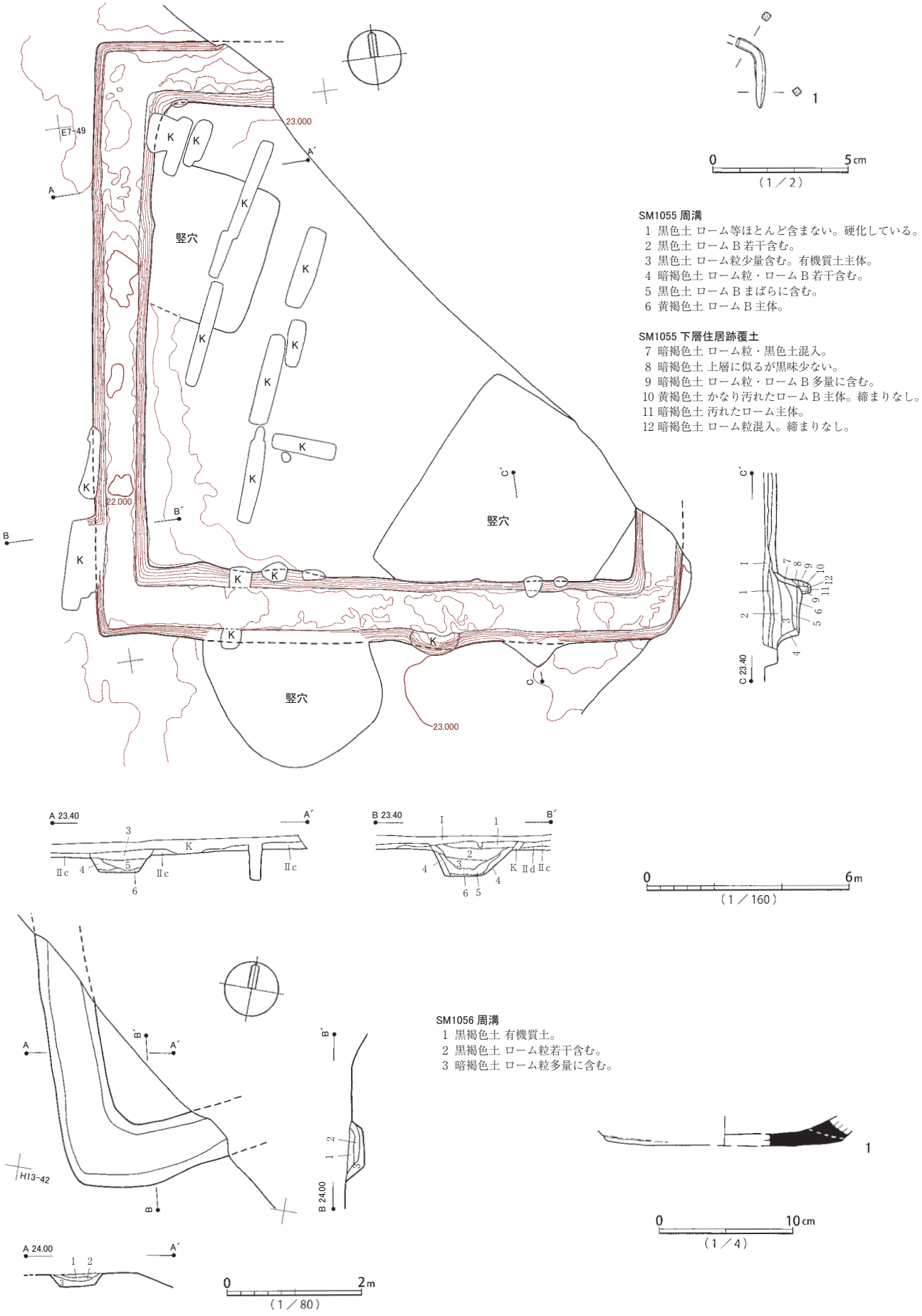
第２主体部



SM1054 第２主体部
1 黒褐色土 極小ローム粒含む。
2 黒褐色土 ローム粒含む。
3 黒褐色土 ローム粒含む。
4 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
5 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
6 暗褐色土 ローム粒含む。
7 暗褐色土 ローム粒･ローム B 含む。締まりなし。
8 黒褐色土 ローム粒含む。
9 褐色土 壁崩落ローム主体。

0 2m
（1／60）

Fig.322　SM1054 遺構 (2) 実測図



SM1055 周溝
1 黒色土 ローム等ほとんど含まない。硬化している。
2 黒色土 ローム B 若干含む。
3 黒色土 ローム粒少量含む。有機質土主体。
4 暗褐色土 ローム粒・ローム B 若干含む。
5 黒色土 ローム B まばらに含む。
6 黄褐色土 ローム B 主体。

SM1055 下層住居跡覆土
7 暗褐色土 ローム粒・黒色土混入。
8 暗褐色土 上層に似るが黒味少ない。
9 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
10 黄褐色土 かなり汚れたローム B 主体。締まりなし。
11 暗褐色土 汚れたローム主体。
12 暗褐色土 ローム粒混入。締まりなし。

SM1056 周溝
1 黒褐色土 有機質土。
2 黒褐色土 ローム粒若干含む。
3 暗褐色土 ローム粒多量に含む。

Fig.323　SM1055 遺構・遺物、SM1056 遺構・遺物実測図

で、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内の北西部に1基検出された。墓壙の掘り方から見て、ほとんど2人同時埋葬に近い時期に構築されたと想定される土壙墓である。ただし、木棺痕跡は南側だけにしか検出されなかった。また、墓壙規模も若干異なっており、特に被葬者を安置した墓壙底の深さにその違いを顕著に認める事が出来ることから、2基の埋葬施設として報告しておく。

第1主体部

第1主体部は、南側に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径3.04m短径1.90m深さ0.92m、下端で長径2.46m短径1.16mを測り、主軸方位はN-89°-Wを示す。墓壙の中央に箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.34m幅0.82m、下端で長さ2.02m幅0.62m深さ0.80mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-88°-Wを示す。

第2主体部南側の掘り方の一部を意識的に掘り残すことや、木棺痕跡が明瞭なことから、第2主体部より新しい段階の遺構であることは明白であり、かつ、第2主体部をかなり意識して構築されたと判断される。

木棺内からは、棺に打ち込まれた29点の鉄釘が検出されている。

第2主体部

第2主体部は、第1主体部の北側に接して検出された。木棺痕跡が検出されなかったことから、土壙墓と想定される。墓壙規模は上端で、長径3.08m短径1.00m深さ0.88m、下端で長径2.78m短径0.76mを測り、主軸方位はN-87°-Wを示す。墓壙内から木棺痕は検出されなかったが、底面はほぼ平坦であり、中央やや東側寄りにトーンで示した淡い赤色の変色範囲が検出されている。

墓壙内の底部からは、破片を含めて11点の長頸鏃が検出されているが、現在行方不明で図化することができない。

出土遺物

第1主体部出土の29点の鉄釘を図化した。大半に棺材の木質が付着し、木棺の蓋に打ち込まれた製品と判断される。1-15は、樹種同定により釘頭側の板目及び先端側の木口とも針葉樹と同定判定されている。

第2主体部からは、現場平面図に記載される11点の長頸鏃が検出されているが、行方不明のため、明確な時期の判定ができない。

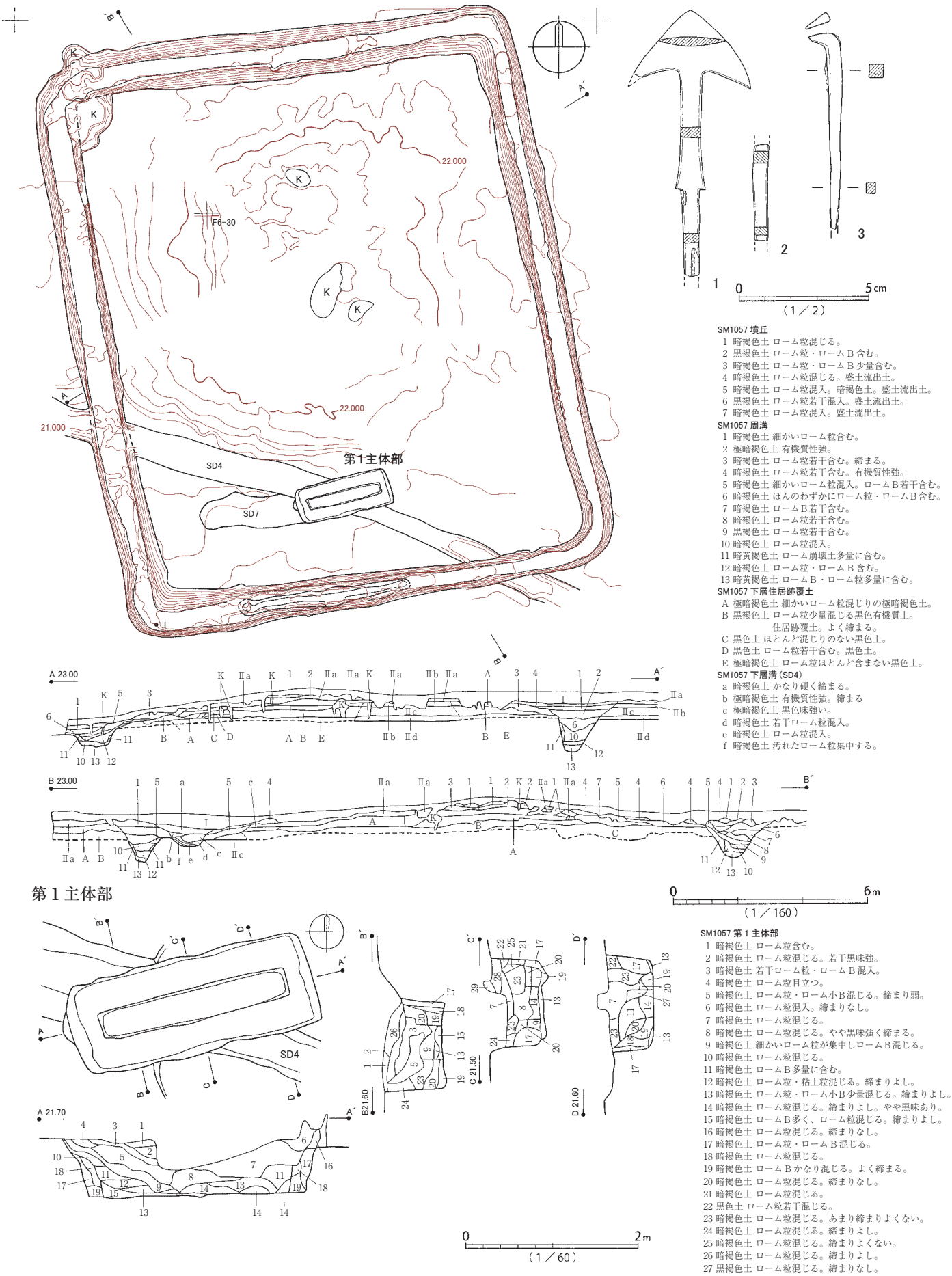
本墳周溝内からは、土師器甕は周溝底より25cm、須恵器横瓶ないしはフラスコ瓶が、覆土一括で取り上げられている。明確な時期の限定は出来ないが、6世紀末葉～7世紀初頭にかけての製品と判断される。

SM1059　SW83地区　（Fig.327～329、PL.120・189・204）

V-23・24グリッドに位置する。四隅が直角ではなく、平面形は平行四辺形に近い形状の終末期方墳である。旧遺構番号はSW83-K16号遺構である。

墳丘と周溝

長径13.08m、短径13.08m、現状での盛土の高さは0.62mを測り、主軸方位はN-15°-Wを示す。周溝内側面積は174.5㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第16位の規模である。



SM1057 墳丘
1 暗褐色土 ローム粒混じる。
2 黒褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
3 暗褐色土 ローム粒・ローム B 少量含む。
4 暗褐色土 ローム粒混じる。盛土流出土。
5 暗褐色土 ローム粒混入。暗褐色土。盛土流出土。
6 黒褐色土 ローム粒若干混入。盛土流出土。
7 暗褐色土 ローム粒混入。盛土流出土。

SM1057 周溝
1 暗褐色土 細かいローム粒含む。
2 極暗褐色土 有機質性強。
3 暗褐色土 ローム粒若干含む。締まる。
4 暗褐色土 ローム粒若干含む。有機質性強。
5 暗褐色土 細かいローム粒混入。ローム B 若干含む。
6 暗褐色土 ほんのわずかにローム粒・ローム B 含む。
7 暗褐色土 ローム B 若干含む。
8 暗褐色土 ローム粒若干含む。
9 黒褐色土 ローム粒若干含む。
10 暗褐色土 ローム粒混入。
11 暗黄褐色土 ローム崩壊土多量に含む。
12 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
13 暗黄褐色土 ローム B・ローム粒多量に含む。

SM1057 下層住居跡覆土
A 極暗褐色土 細かいローム粒混じりの極暗褐色土。
B 黒褐色土 ローム粒少量混じる黒色有機質土。
住居跡覆土。よく締まる。
C 黒色土 ほとんど混じりのない黒色土。
D 黒色土 ローム粒若干含む。黒色土。
E 極暗褐色土 ローム粒ほとんど含まない黒色土。

SM1057 下層溝（SD4）
a 暗褐色土 かなり硬く締まる。
b 極暗褐色土 有機質性強。締まる
c 極暗褐色土 黒色味強い。
d 暗褐色土 若干ローム粒混入。
e 暗褐色土 ローム粒混入。
f 暗褐色土 汚れたローム粒集中する。

SM1057 第 1 主体部
1 暗褐色土 ローム粒含む。
2 暗褐色土 ローム粒混じる。若干黒味強。
3 暗褐色土 若干ローム粒・ローム B 混入。
4 暗褐色土 ローム粒目立つ。
5 暗褐色土 ローム粒・ローム小B混じる。締まり弱。
6 暗褐色土 ローム粒混入。締まりなし。
7 暗褐色土 ローム粒混じる。
8 暗褐色土 ローム粒混じる。やや黒味強く締まる。
9 暗褐色土 細かいローム粒が集中しローム B 混じる。
10 暗褐色土 ローム粒混じる。
11 暗褐色土 ローム B 多量に含む。
12 暗褐色土 ローム粒・粘土粒混じる。締まりよし。
13 暗褐色土 ローム粒・ローム小 B 少量混じる。締まりよし。
14 暗褐色土 ローム粒混じる。締まりよし。やや黒味あり。
15 暗褐色土 ローム B 多く、ローム粒混じる。締まりよし。
16 暗褐色土 ローム粒混じる。締まりなし。
17 暗褐色土 ローム粒・ローム B 混じる。
18 暗褐色土 ローム粒混じる。
19 暗褐色土 ローム B かなり混じる。よく締まる。
20 暗褐色土 ローム粒混じる。締まりなし。
21 暗褐色土 ローム粒混じる。
22 黒色土 ローム粒若干混じる。
23 暗褐色土 ローム粒混じる。あまり締まりよくない。
24 暗褐色土 ローム粒混じる。締まりよし。
25 暗褐色土 ローム粒混じる。締まりよくない。
26 暗褐色土 ローム粒混じる。締まりよし。
27 黒褐色土 ローム粒混じる。締まりなし。
28 暗褐色土 ローム粒混じる。締まりよし。
29 暗褐色土 若干ローム粒混じる。締まりよし。

Fig.324　SM1057 遺構・遺物実測図

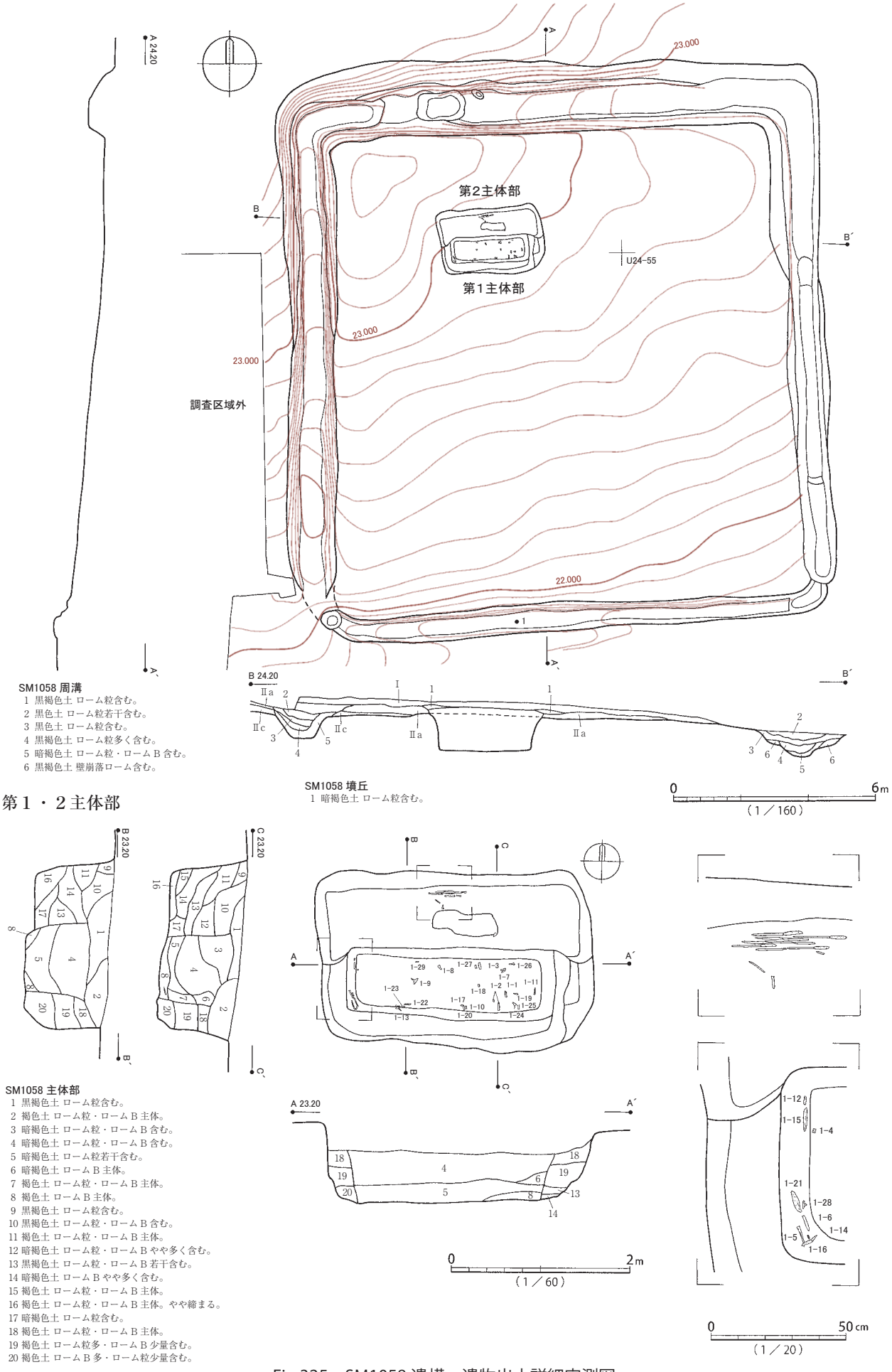


Fig.325　SM1058 遺構・遺物出土詳細実測図

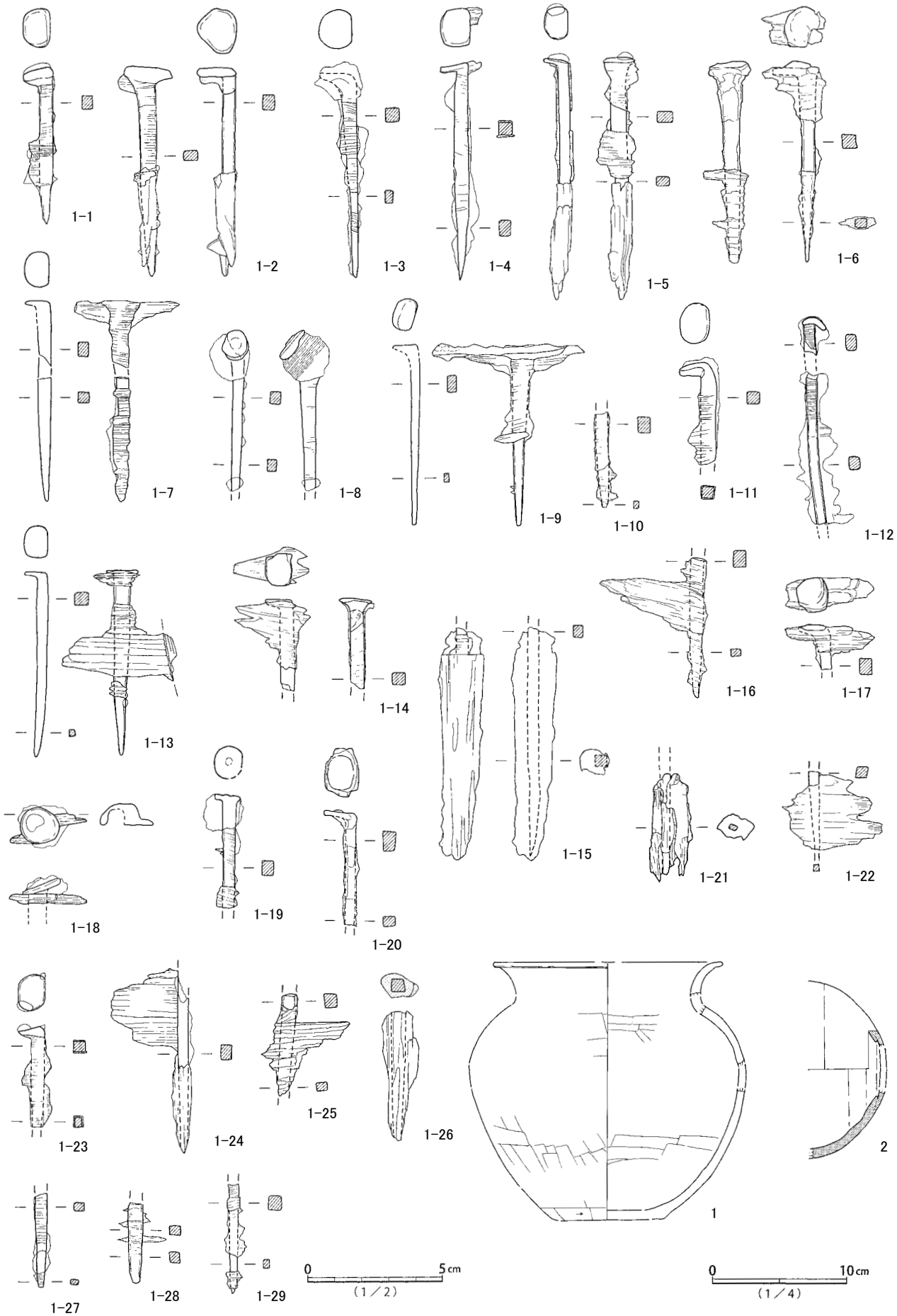


Fig.326　SM1058 遺物実測図

確認面での周溝幅は、1.92～2.20m、深さは0.86～1.85m、土層断面図上では1.30～2.20mを測り、緩やかな緩斜面に位置した南側周溝が浅い傾向が認められる。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内に3基検出されている。2基は木棺直葬土壙、1基は墓壙底にピットを持つ土壙墓である。

第1主体部

第1主体部は、方台部中央やや北側に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.96m短径1.26m深さ1.06m、下端で長径2.60m短径0.92mを測り、主軸方位はN-78°-Eを示す。墓壙の中央に箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.18m幅1.08m、下端で長さ2.02m幅0.85m深さ1.06mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-78°-E を示す。

墓壙内の棺外からは、1-1の有窓鍔付太刀が、墓壙外からは1の土師器坏が検出されている。

第2主体部

第2主体部は、第1主体部の南側に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径3.28m短径0.96m深さ1.16m、下端で長径2.28m短径0.70mを測り、主軸方位はN-67°-Eを示す。墓壙の中央に箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.40m幅0.84m、下端で長さ1.90m幅0.50m深さ0.80mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-67°-E を示す。

墓壙及び木棺内からは何の遺物も検出されなかった。

第3主体部

第3主体部は、第1主体部の北側に検出された。墓壙底面の長軸方向に、3基のピットを保持する土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.84m短径1.70m深さ1.12m、下端で長径2.14m短径0.78mを測り、主軸方位はN-67°-Eを示す。底面は若干の凹凸が存在するが、ほぼ平坦である。土壙の長軸方向の両端に3基のピットを保持し、深さは6～10㎝を測る。

墓壙及び木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

第1主体部の棺外からは、全長85.0㎝を測る1-1の有窓鍔付太刀が検出されている。鍔の有孔配置から、8窓と想定される。刀身部には鏨が存在し、関形状は不明である。茎には１孔の目釘孔が存在し、目釘孔には目釘が残存している。茎尻は端部に向かって幅を減じる隅抉である。1-2は、茎尻から2㎝離れて検出された1-1に伴う刀装金具と想定され、形状と出土位置から判断すると頭椎太刀の留金具と想定される。

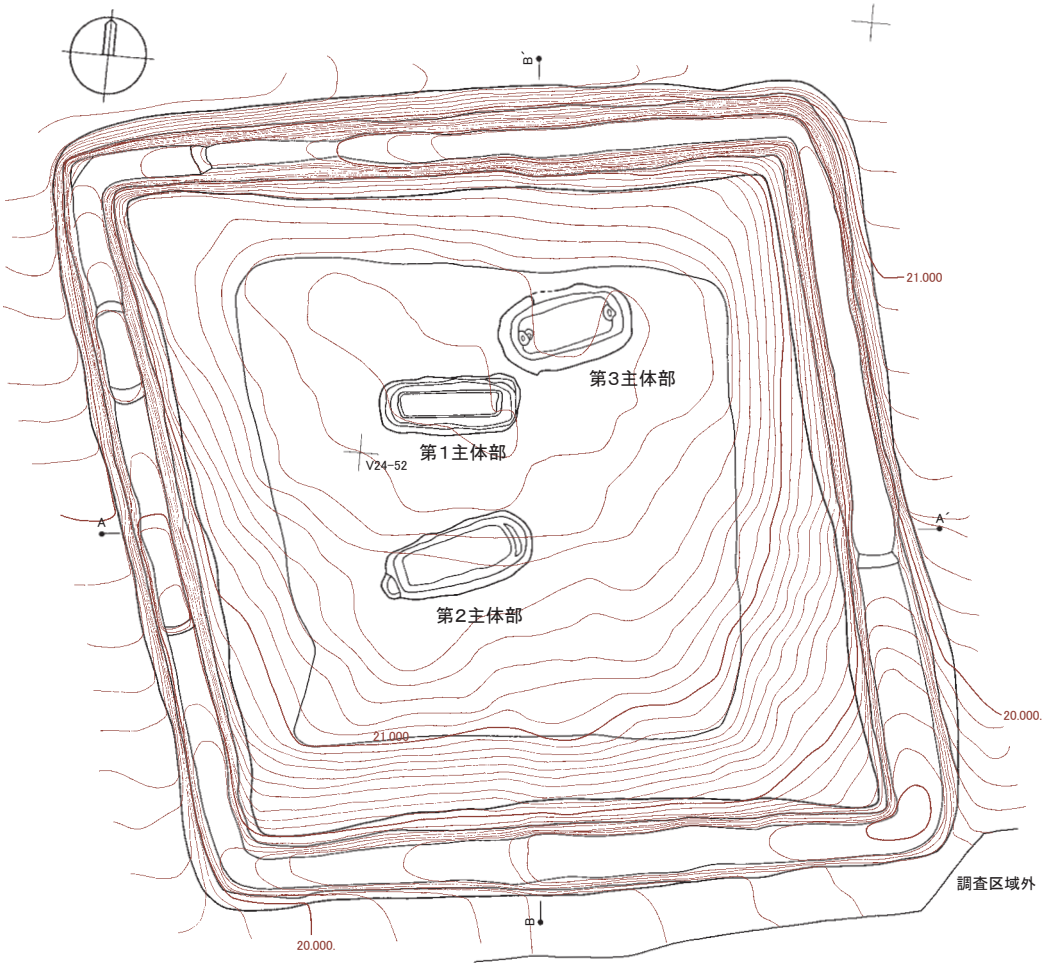
墓壙外からは1の土師器坏が検出されている。内面に篦磨きと黒色処理が施込された製品であり、7世紀末葉前後の製品と判断される。2～5は周溝内一括で検出された土師器、須恵器であるが、細片のため具体的な時期がよくわからない。

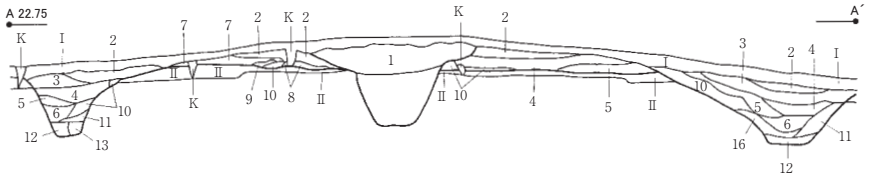
SM1060　セ28地区　（Fig.330～335、PL.11・121・171・189～190・204・213・216）

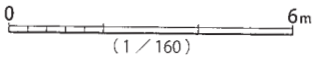
Q・R-8・9グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号はセ28-037号遺構である。

墳丘と周溝

長径13.28m、短径11.76m、現状での盛土の高さは1.06mを測り、主軸方位はN-7°-Wを示す。周溝

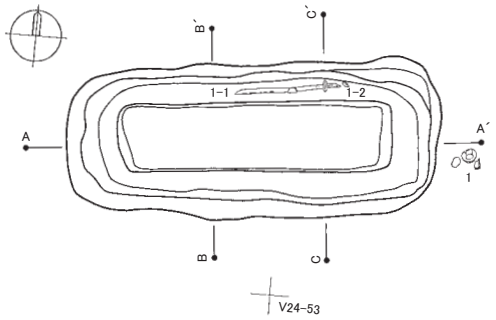


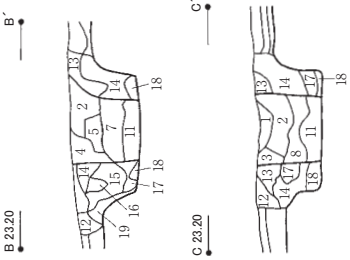


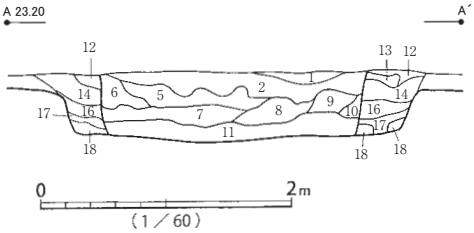


SM1059 墳丘
1 褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
2 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
3 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
4 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
5 暗褐色土 ローム粒含む。
6 黒褐色土 ローム粒・ローム B 若干含む。
7 黒色土 ローム粒若干含む。
8 黒色土 ローム粒若干含む。
9 暗褐色土 ローム B やや多く含む。
10 黒褐色土 ローム B 若干含む。
11 黒褐色土 ローム B 含む。

第 1 主体部





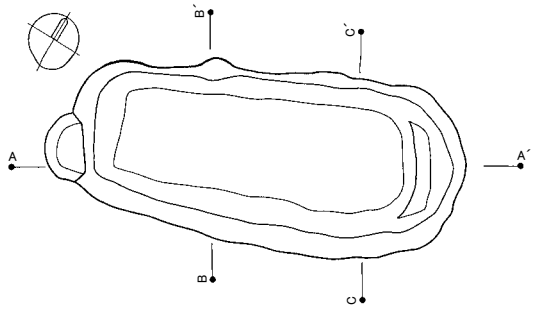


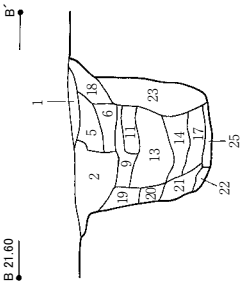
SM1059 周溝
1 黒褐色土 黒色の硬い粒子多量に含む。
2 暗褐色土 硬く締まる。
3 黒色土 ローム粒・黒色の硬い粒子含む。
4 黒褐色土 ローム粒含む。
5 黒褐色土 ローム粒含む。
6 黒色土 有機質土主体。
7 黒色土 有機質土・ローム等ほとんど含まない。
8 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
9 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
10 暗褐色土 壁崩落ローム B ・ローム粒やや多く含む。
11 暗褐色土 壁崩落ローム B ・ローム粒主体。明るい。
12 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
13 黄褐色土 ローム B 主体。

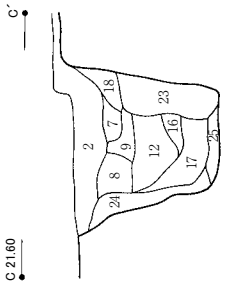
SM1059 第 1 主体部
1 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
2 黒褐色土 有機質土中にローム粒・ローム B 若干含む。
3 黒褐色土 ローム粒含む。
4 黒色土 ローム B 含む。
5 暗褐色土 ローム B 含む。
6 黒褐色土 ローム B 含む。
7 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
8 黒褐色土 ローム B 含む。
9 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
10 黒褐色土 ローム粒含む。
11 暗褐色土 ローム B 含む。硬く締まる。
12 暗褐色土 ローム粒含む。
13 暗褐色土 ローム粒・粘土粒含む。
14 暗褐色土 ローム粒・ローム B ・粘土粒含む。
15 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。粘土含む。
16 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
17 暗褐色土 ローム B 含む。
18 褐色土 ローム B 主体。
19 黒褐色土 ローム粒含む。

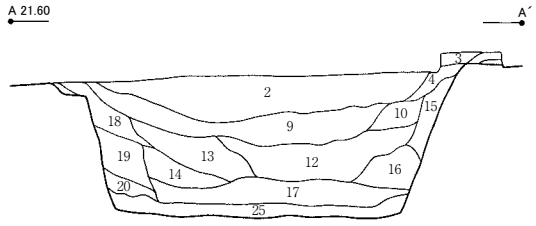
Fig.327　SM1059 遺構 (1) 実測図

第２主体部





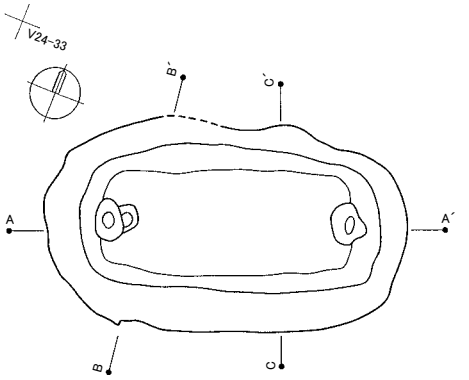


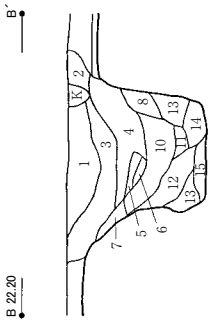


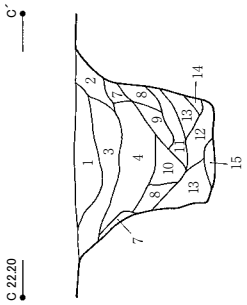
SM1059 第２主体部

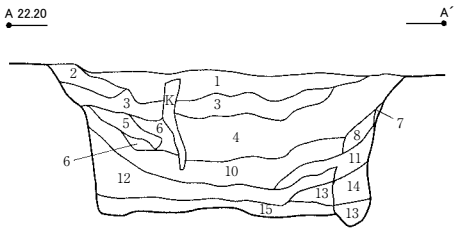
1 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
2 褐色土 ローム粒・ロームＢ多量に含む。
3 褐色土 ロームＢ主体。
4 褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。
5 暗褐色土 ロームＢ含む。
6 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
7 褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。
8 黒褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
9 黒褐色土 ロームＢやや多く含む。
10 黒褐色土 ローム粒・ロームＢ少量含む。
11 暗褐色土 ロームＢ含む。
12 褐色土 ロームＢ多量に含む。
13 暗褐色土 ローム粒・ロームＢやや多く含む。
14 黒褐色土 ロームＢ含む。
15 暗褐色土 ローム粒含む。
16 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
17 黒褐色土 ローム粒・ロームＢ均等に含む。
18 暗褐色土 ローム粒・ロームＢやや多く含む。
19 黒褐色土 ローム粒少量含む。
20 暗褐色土 ローム粒含む。
21 黒褐色土 ローム粒含む。
22 褐色土 ロームＢ主体。
23 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
24 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
25 暗褐色土 ローム粒･ロームＢ均等に含み締まる。

第３主体部









SM1059 第３主体部

1 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
2 黒褐色土 ローム粒若干含む。
3 黒褐色土 ローム粒含む。締まる。
4 黒褐色土 ロームＢ少量含む。
5 暗褐色土 ローム粒含む。
6 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
7 褐色土 壁崩落ローム主体。
8 黒褐色土 ローム粒含む。
9 暗褐色土 ローム粒含む。
10 黒色土 ローム粒若干含む。
11 黒色土 粘性強、ローム粒含む。
12 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ若干含む。
13 黒色土 ローム粒・ロームＢ若干含む。
14 黒色土 ローム粒含む。
15 暗褐色土 ローム粒霜降り状に含む。締まる。

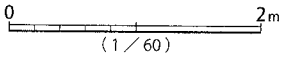


Fig.328　SM1059 遺構 (2) 実測図

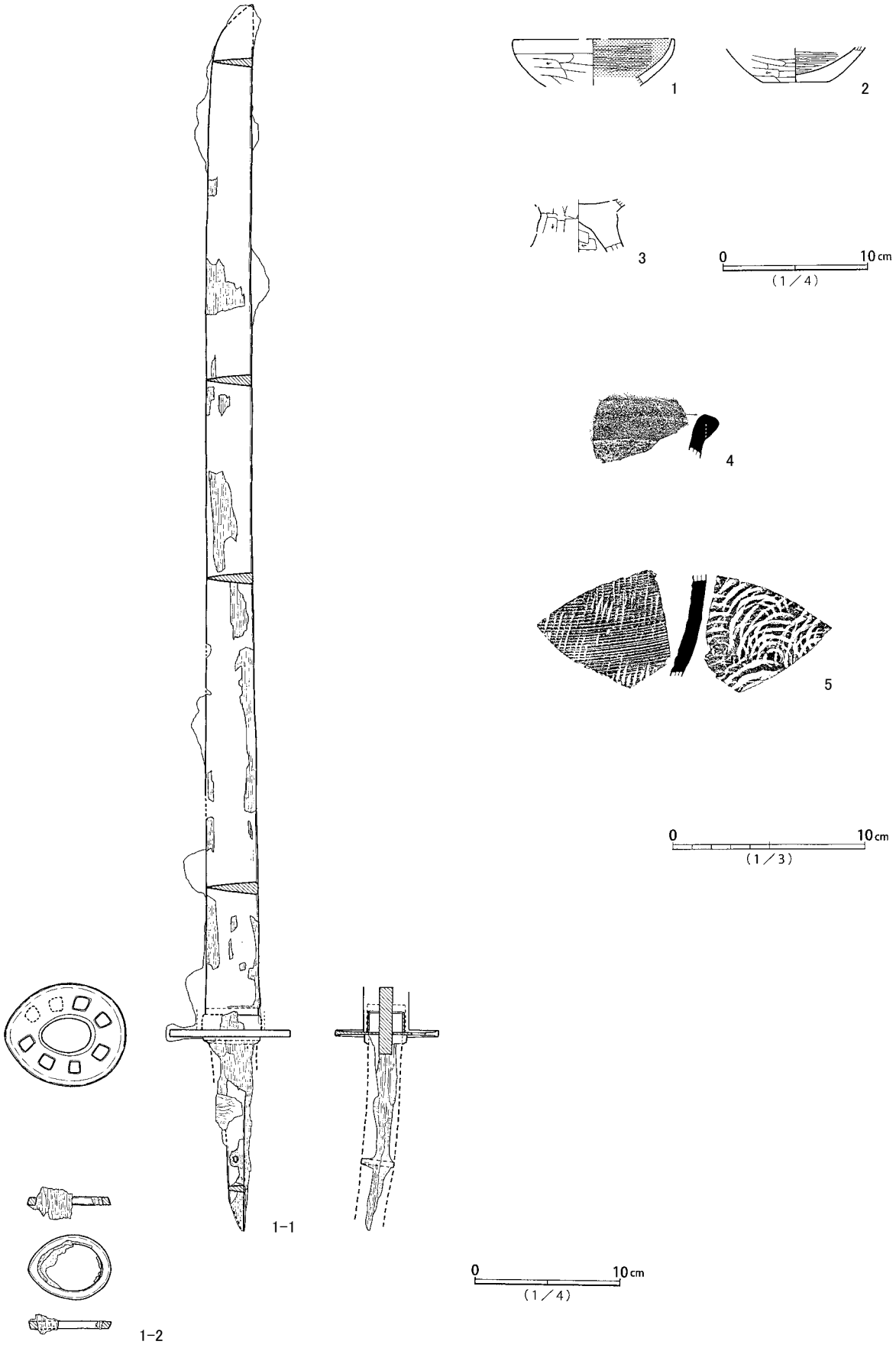


Fig.329　SM1059 遺物実測図

内側面積は161.7㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第17位の規模である。確認面での周溝幅は、2.80～3.36m、深さは0.86～1.20m、土層断面図上では1.04～1.32mを測り、全体的に周溝は広くて深い傾向が認められる。全体的に均整のとれた方形形状で、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内に3基検出されている。2基は木棺直葬土壙、1基は土壙墓ないしは木棺直葬土壙である。また、第1主体部確認面からは極めて多量の供献土器が検出されている。

第1主体部

第1主体部は、方台部中央やや南側に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.68m短径1.48m深さ0.14m、下端で長径2.60m短径1.42mを測り、主軸方位はN-88°-Eを示す。墓壙の中央に箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ1.60m幅0.58m、下端で長さ1.50m幅0.46m深さ0.14mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-88°-E を示す。

木棺内からは、1-1・2の金銅製耳環2点1対の他、1-3の蛇紋岩製勾玉、1-４～7の玉髄製勾玉、1-8の変質凝灰岩製管玉、1-9～11の蛇紋岩製臼玉、1-12の頁岩製臼玉、1-13・14の滑石製臼玉、1-15～17の蛇紋岩製丸玉、1-18～22の琥珀製管玉の他、ガラス玉51点などが検出されている。金銅製耳環を被葬者の頭部付近と見れば、多数の玉類を身に纏った被葬者が、東枕安置で埋葬されたと想定される。なお、1-1金銅製耳環付近からは炭化物の集中範囲と、耳環に被さって最大径1.1㎝、厚み１㎜を測る1-74の人歯が検出されている。

第2主体部

第2主体部は、第1主体部の北側に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.86m短径1.76m深さ0.38m、下端で長径2.72m短径1.20mを測り、主軸方位はN-90°を示す。墓壙の中央に、周囲の一部を粘土で固定した箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ1.92m幅0.70m、下端で長さ1.86m幅0.62m深さ0.28mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-90°を示す。

墓壙及び木棺内からは何の遺物も検出されなかった。

第3主体部

第3主体部は、方台部の北東寄りに検出された土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径3.44m短径2.75m深さ1.50m、下端で長径2.44m短径1.06mを測り、主軸方位はN-80°-Eを示す。底面はほぼ平坦である。土壙墓とされるが、土層断面を観察すると木棺状の立ち上がりが認められることから、木棺直葬の土壙墓であった可能性が高い。

墓壙及び木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

第1主体部の棺内からは、金銅製耳環一対の他、総数71点の玉類が検出されている。刀剣類や鉄鏃などの武器類が全く検出されなかったことから、被葬者は女性であった可能性が高い。

出土地点不明遺物に1・2の小物金属器がある。1は名称不明鉄器である。端部付近に径２㎜程の円孔が穿たれている。また、太刀の検出は認められてはいないが、2の足金物片が検出されている。何れも小物金属器であり、遺物の性格を考えると玉類が多量に検出された第1主体部一括で検出された可

能性が高い。

本墳墳頂部でも、第1主体部の直上及び周辺からは、3の供献用須恵器大甕の他、フラスコ瓶や平瓶・広口短頸壺などの極めて多量の供献土器が検出されている。7～11の須恵器合子形坏類や長頸壺の蓋などの小物は、Fig.330に示す地点から検出されており、3の須恵器大甕内から検出される他の小物とは分別されているようである。3の須恵器大甕内からは12の須恵器蓋、13の土師器坏、19・21・22の土師器高坏、土師器甕など5点が検出されており、何れも本墳の初葬から追葬に伴う遺物と判断される。23の土師器坏は墳丘内一括とされるが、第1主体部直上の遺物集中地点から検出されている可能性が高く、18の高坏脚部は周溝内一括出土遺物との接合関係を有している。24のカワラケは墳頂部の遺物集中地点から検出されているが、時期的に本墳とは整合しない。

これら墳頂部の遺物群は、TK-217型式古段階併行期・TK-217形式新段階併行期・TK-217形式新段階～TK-46古段階併行期の3段階の時期差を想定することが可能である。これをそれぞれ被葬者の埋葬段階と捉えると、第1主体部が7世紀第2四半期に、他の埋葬施設には、7世紀第3四半期前半と7世紀第3四半期後半の年代観を与える事が出来る。

SM1061　TJ地区　（Fig.336、PL.121）

G・H-9グリッドに位置する。四隅が直角でほぼ正方形な終末期方墳である。旧遺構番号はTJ-12号遺構である。

墳丘と周溝

長径12.50m、短径12.50m、現状では盛土は存在せず、主軸方位はN-7°-Eを示す。周溝内側面積は157.8㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第18位の規模である。確認面での周溝幅は、1.24～1.48m、深さは0.16～0.38mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳からは遺物が全く出土しなかった。

SM1062　SW83地区　（Fig.337～338、PL.122）

S・T-21・22グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号はSW83-K4号遺構である。

墳丘と周溝

長径12.64m、短径11.96m、現状での盛土の高さは0.22mを測り、主軸方位はN-1°-Eを示す。周溝内側面積は152.3㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第19位の規模である。確認面での周溝幅は、1.60～2.12m、深さは0.50～0.76m、土層断面図上では0.82～1.08mを測る。全体的に均整のとれた方形形状で、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内の中央と北側に2基検出されている。共に木棺直葬土壙である。

第1主体部

第1主体部は、方台部中央に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.68m

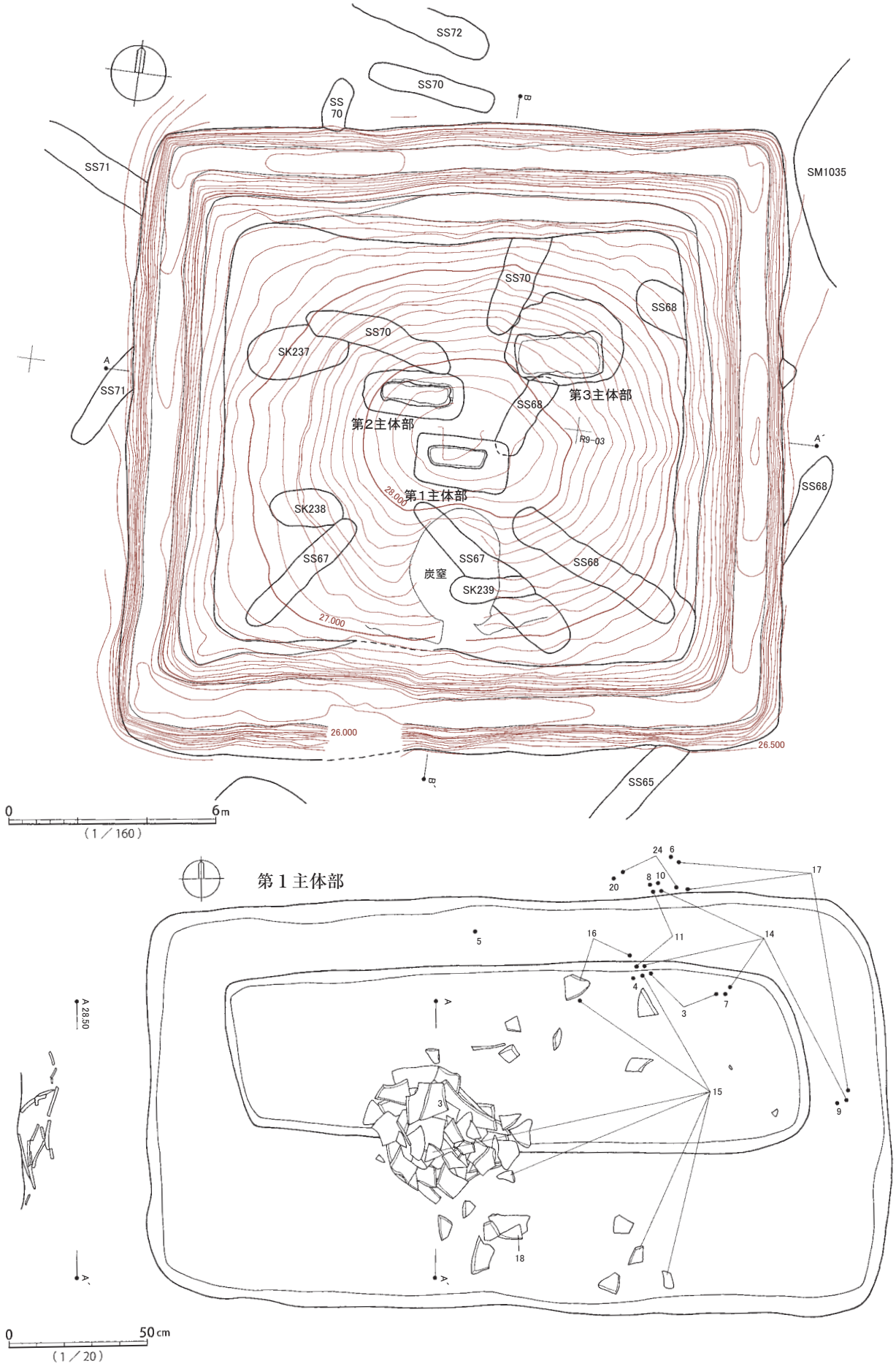
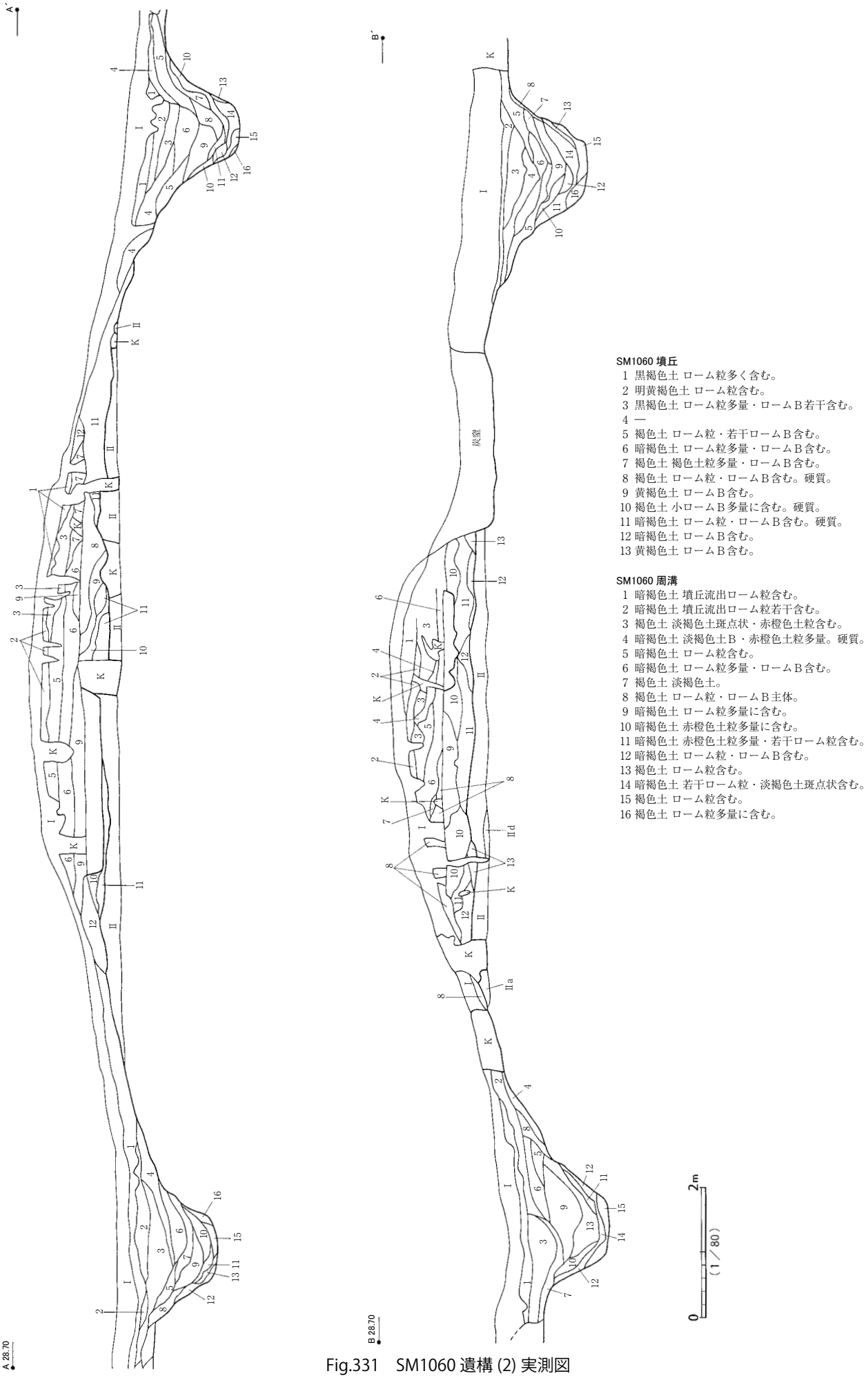


Fig.330　SM1060 遺構 (1)・遺物出土詳細 (1) 実測図



SM1060 墳丘

1 黒褐色土 ローム粒多く含む。
2 明黄褐色土 ローム粒含む。
3 黒褐色土 ローム粒多量・ロームＢ若干含む。
4 ―
5 褐色土 ローム粒・若干ロームＢ含む。
6 暗褐色土 ローム粒多量・ロームＢ含む。
7 褐色土 褐色土粒多量・ロームＢ含む。
8 褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。硬質。
9 黄褐色土 ロームＢ含む。
10 褐色土 小ロームＢ多量に含む。硬質。
11 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。硬質。
12 暗褐色土 ロームＢ含む。
13 黄褐色土 ロームＢ含む。

SM1060 周溝

1 暗褐色土 墳丘流出ローム粒含む。
2 暗褐色土 墳丘流出ローム粒若干含む。
3 褐色土 淡褐色土斑点状・赤橙色土粒含む。
4 暗褐色土 淡褐色土Ｂ・赤橙色土粒多量。硬質。
5 暗褐色土 ローム粒含む。
6 暗褐色土 ローム粒多量・ロームＢ含む。
7 褐色土 淡褐色土。
8 褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。
9 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
10 暗褐色土 赤橙色土粒多量に含む。
11 暗褐色土 赤橙色土粒多量・若干ローム粒含む。
12 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
13 褐色土 ローム粒含む。
14 暗褐色土 若干ローム粒・淡褐色土斑点状含む。
15 褐色土 ローム粒含む。
16 褐色土 ローム粒多量に含む。

Fig.331　SM1060 遺構 (2) 実測図

第１主体部

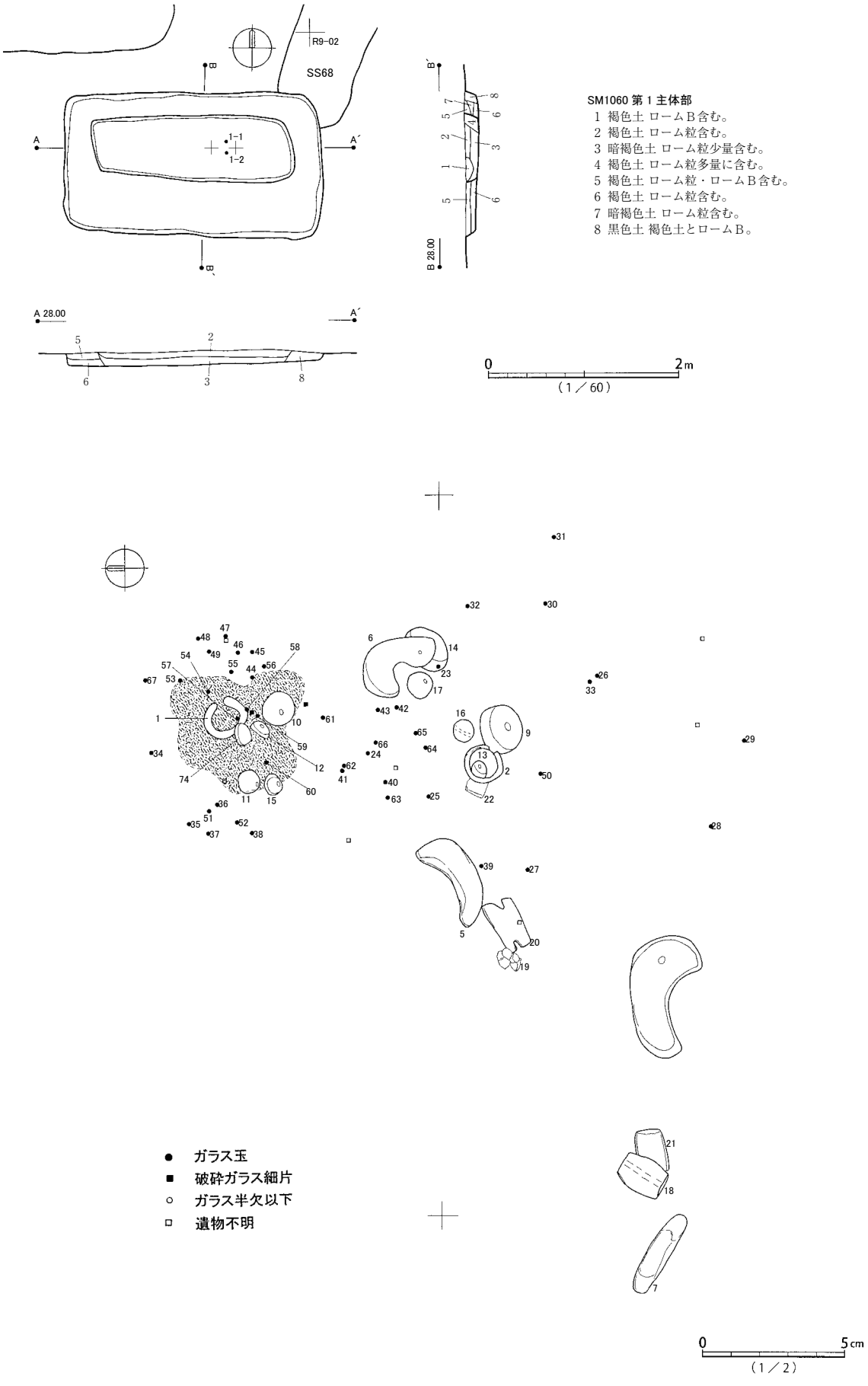
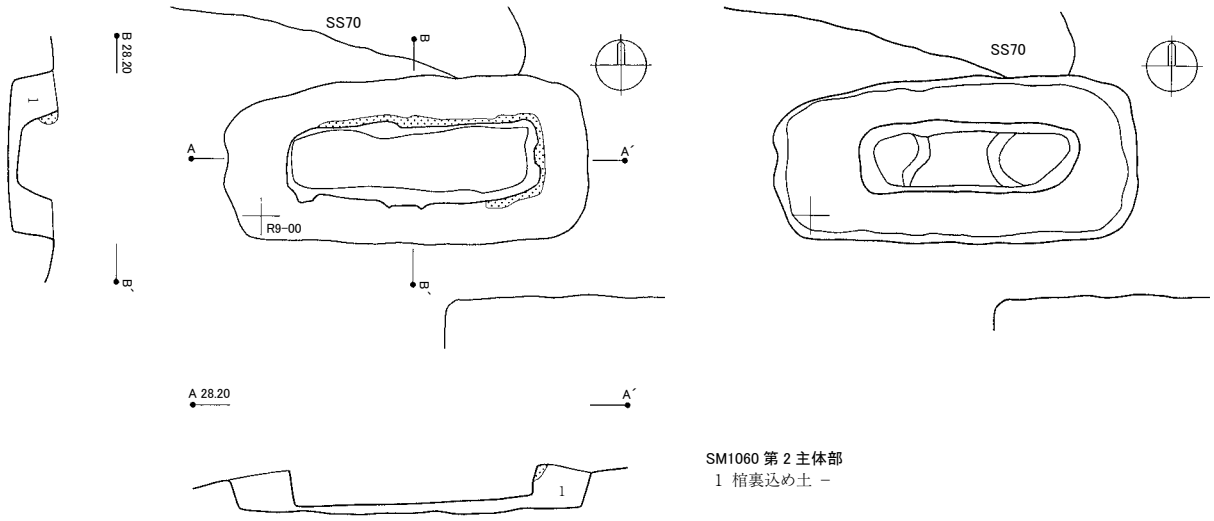


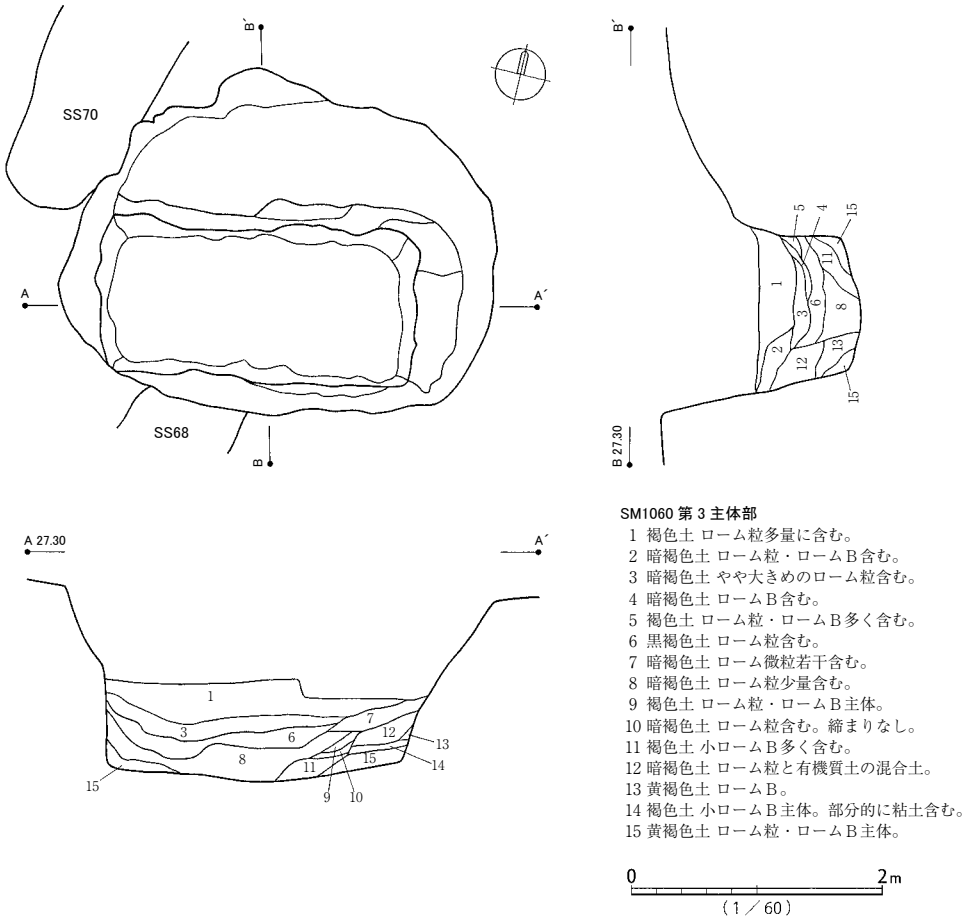
Fig.332　SM1060 遺構 (3)・遺物出土詳細 (2) 実測図

第２主体部



SM1060 第２主体部
1 棺裏込め土 －

第３主体部



SM1060 第３主体部
1 褐色土 ローム粒多量に含む。
2 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
3 暗褐色土 やや大きめのローム粒含む。
4 暗褐色土 ロームＢ含む。
5 褐色土 ローム粒・ロームＢ多く含む。
6 黒褐色土 ローム粒含む。
7 暗褐色土 ローム微粒若干含む。
8 暗褐色土 ローム粒少量含む。
9 褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。
10 暗褐色土 ローム粒含む。締まりなし。
11 褐色土 小ロームＢ多く含む。
12 暗褐色土 ローム粒と有機質土の混合土。
13 黄褐色土 ロームＢ。
14 褐色土 小ロームＢ主体。部分的に粘土含む。
15 黄褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。

0 2m
（1／60）

Fig.333　SM1060 遺構 (4) 実測図

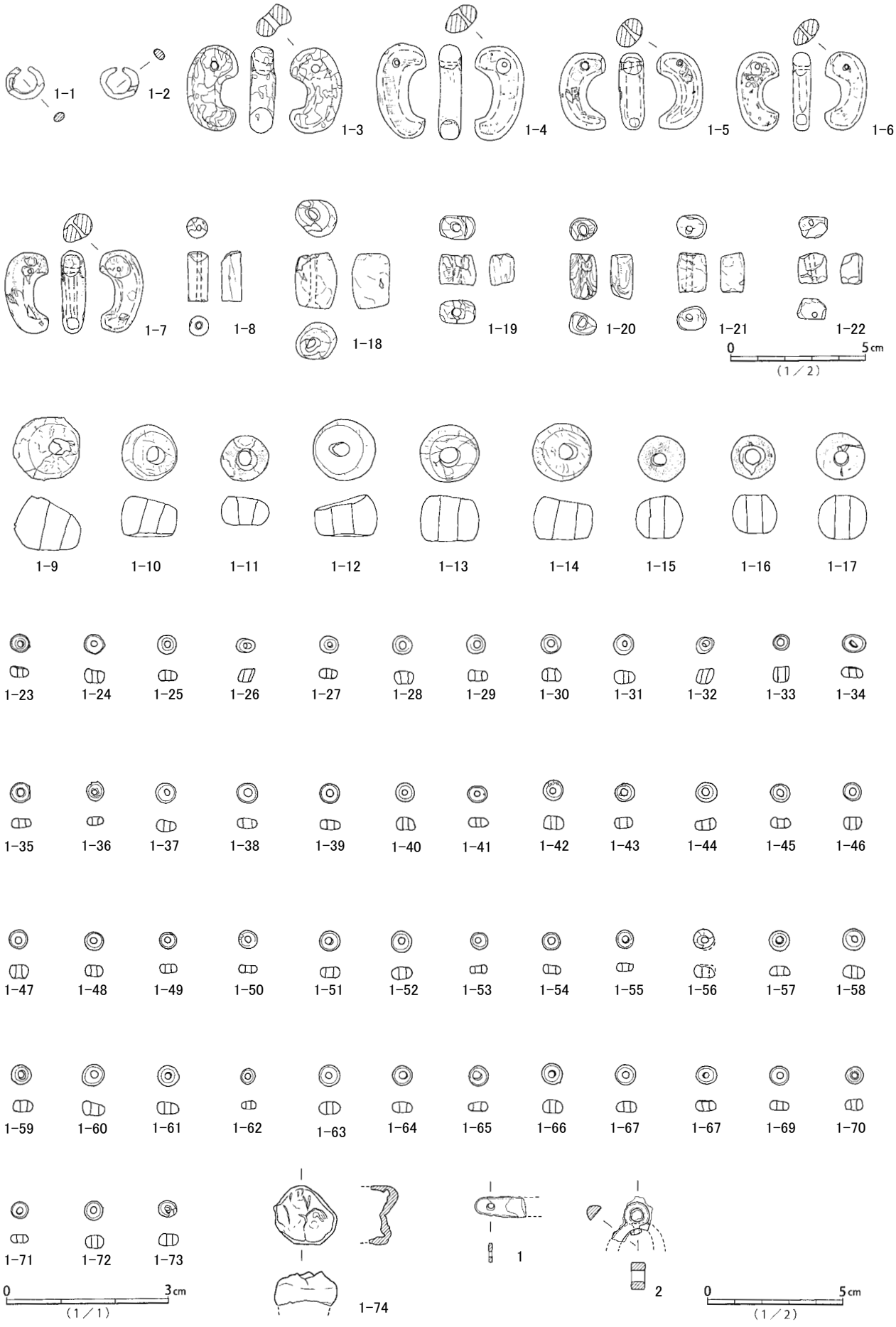


Fig.334　SM1060 遺物 (1) 実測図

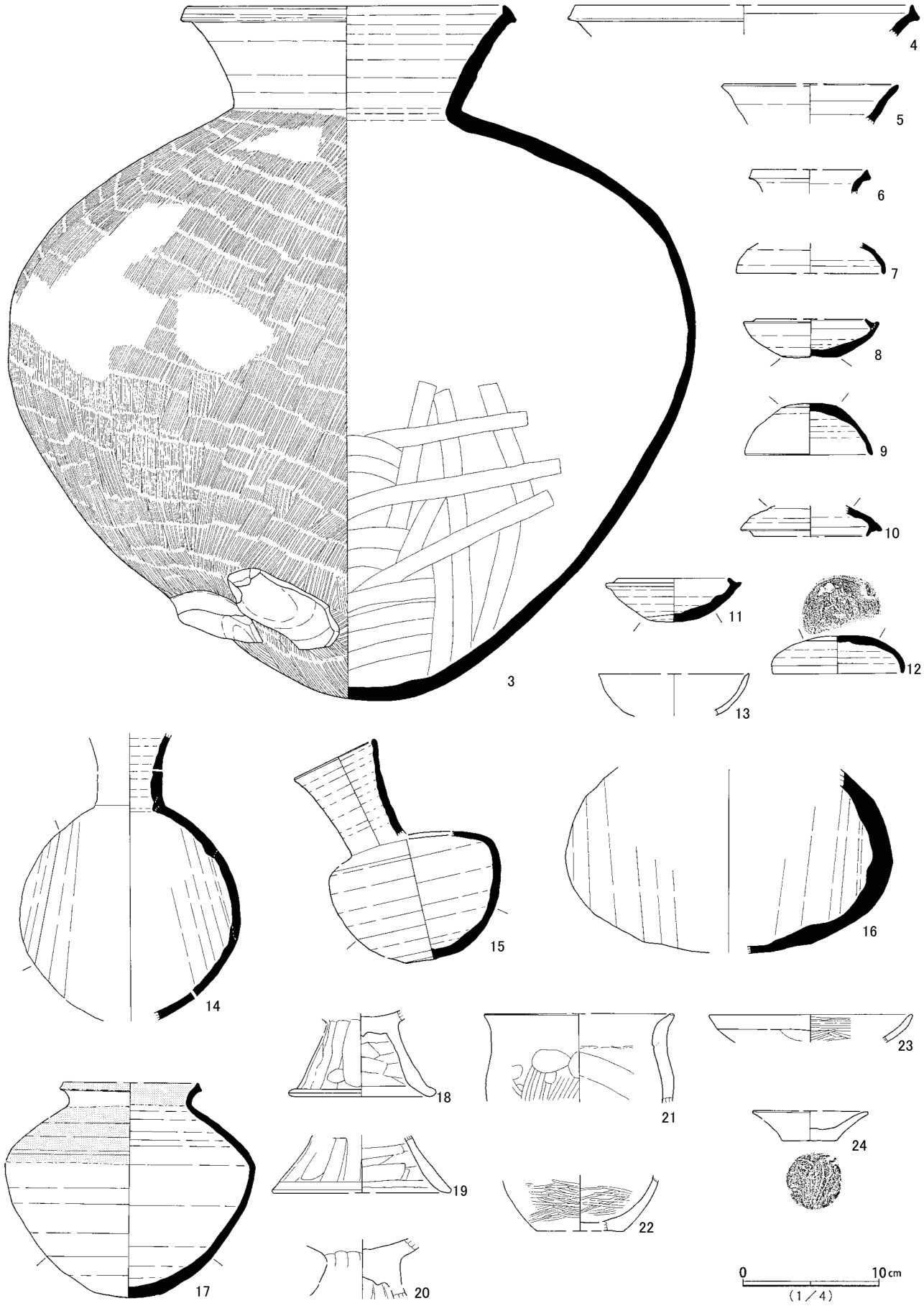


Fig.335　SM1060 遺物 (2) 実測図

短径1.26m深さ0.50m、下端で長径2.58m短径1.20mを測り、主軸方位はN-90°を示す。墓壙の中央に、周囲を粘土で固定した箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.28m幅0.76m、下端で長さ1.96m幅0.50m深さ0.40mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-85°-E を示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

第2主体部

第2主体部は、第1主体部の北側に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.36m短径0.90m深さ0.60m、下端で長径2.26m短径0.70mを測り、主軸方位はN-87°-Eを示す。墓壙の中央に箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.04m幅0.46m、下端で長さ1.92m幅0.26m深さ0.54mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-90°を示す。

墓壙及び木棺内からは何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、1の常滑片口鉢底部と2の須恵器甕胴部片が、覆土一括で検出されたにすぎない。

SM1063　099地区　（Fig.338、PL.190）

O-23グリッドに位置し、掘り込みが非常に浅いためL字状に検出された終末期方墳である。周溝内側面積は測定不能であり、諏訪台古墳群中の方墳順位も不明であるが、紙面の都合上、ここに掲載し報告する。旧遺構番号は099-4104号遺構である。

墳丘と周溝

L字状に残った残存長径6.28m、残存短径5.02m、現状での盛土は存在せず、主軸方位は不明である。確認面での周溝幅は、0.54～0.66m、深さは0.14mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

方台部内にはピット状遺構1基が存在しているが、本墳周辺には形状・深さともよく似たピット状遺構が無数に存在しており、本墳の埋葬施設としての小土壙ではないと判断される。深さは13.2㎝を測る。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、1の土師器甕口縁部、2の土師器甕底部が覆土一括で検出されたに過ぎない。

SM1064　セ54地区　（Fig.339～340、PL.122～123・171・190・214）

U・V-20・21グリッドに位置する。四隅が直角でほぼ正方形な終末期方墳である。旧遺構番号はセ54-23号遺構である。

墳丘と周溝

長径12.08m、短径12.08m、現状での盛土の高さは0.56mを測り、主軸方位はN-4°-Wを示す。周溝内側面積は150.2㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第20位の規模である。確認面での周溝幅は、1.62～2.00m、深さは0.70～0.96m、土層断面図上では0.76～1.04mを測る。全体的に均整のとれた方形形状で、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内のほぼ中央に1基検出されている。

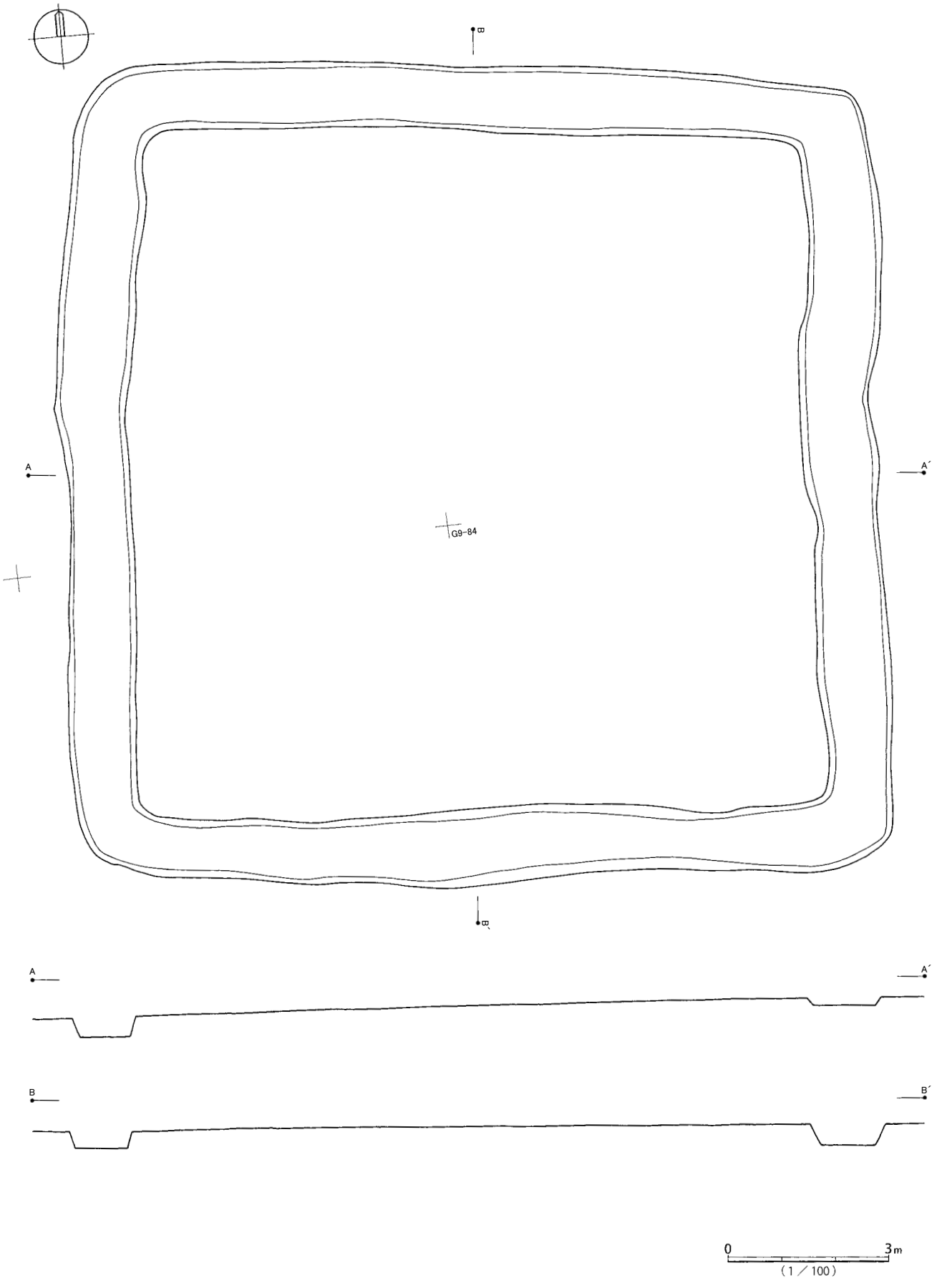
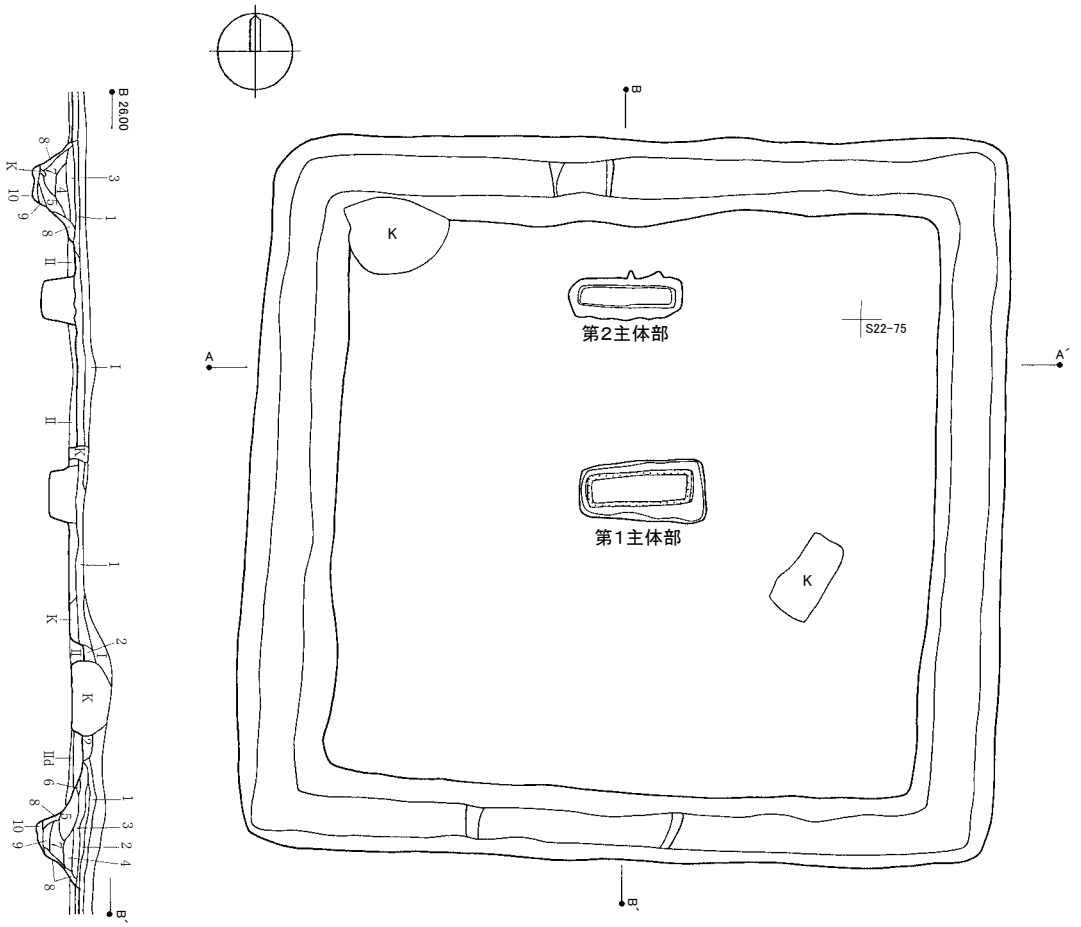


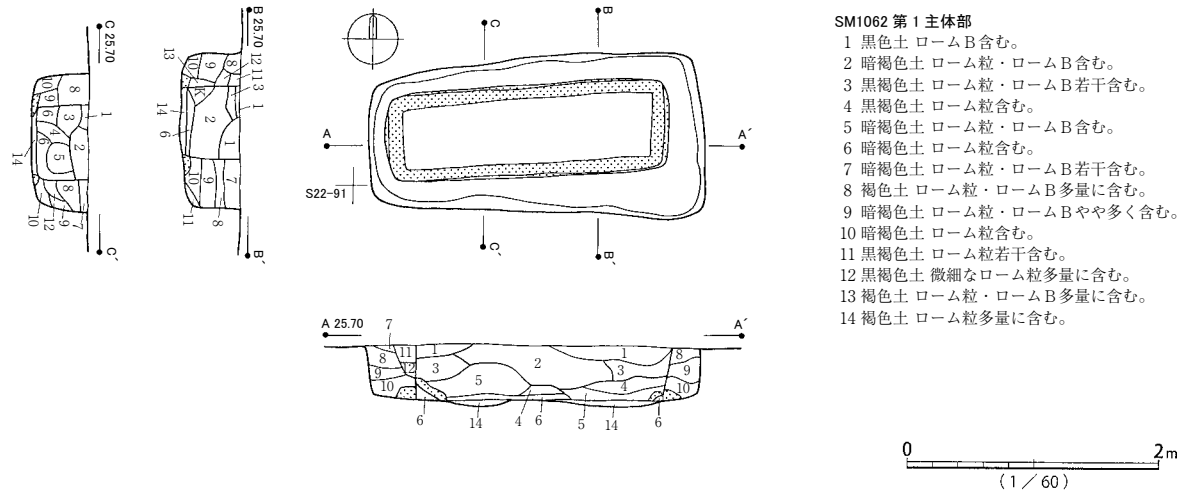
Fig.336　SM1061 遺構実測図



SM1062 墳丘
1 黒褐色土 ローム粒含む。
2 黒褐色土 ローム粒混入。

SM1062 周溝
1 黒褐色土 ローム微粒含む。
2 黒褐色土 ローム粒若干含む。
3 黒色土 有機質土。
4 黒褐色土 ローム粒含む。
5 黒褐色土 ローム粒多量に含む。
6 黒褐色土 有機質土主体。
7 黒褐色土 ローム粒若干含む。
8 暗褐色土 壁崩落ローム主体。
9 黒褐色土 ローム粒霜降り状に含む。
10 褐色土 汚れたローム粒・ロームＢ主体。

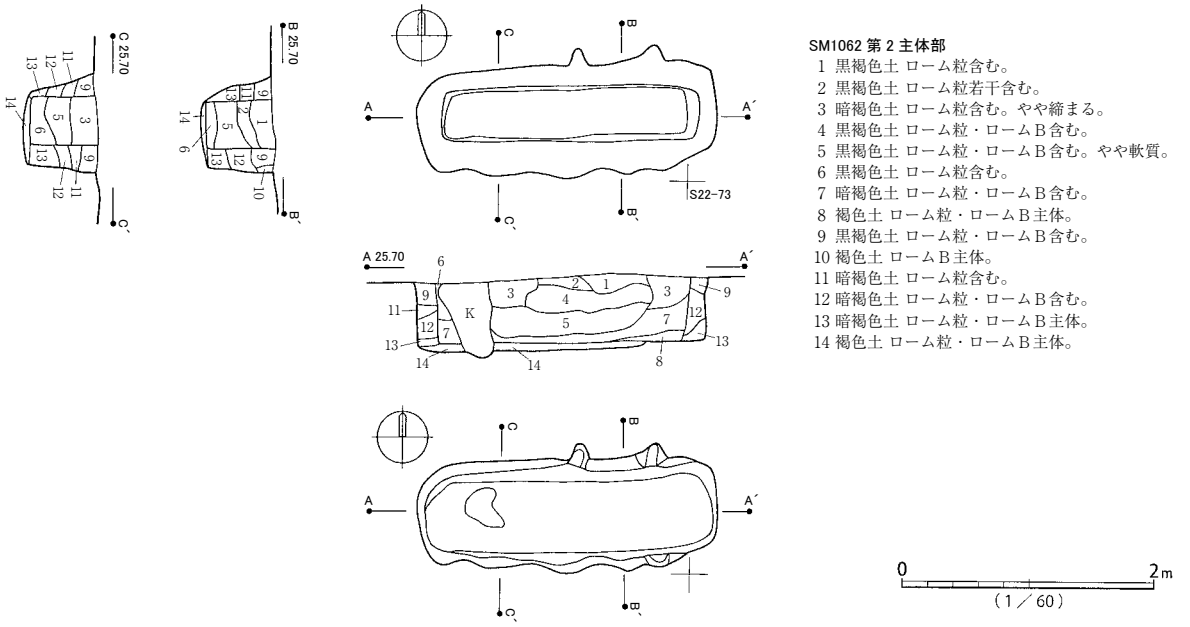
第１主体部

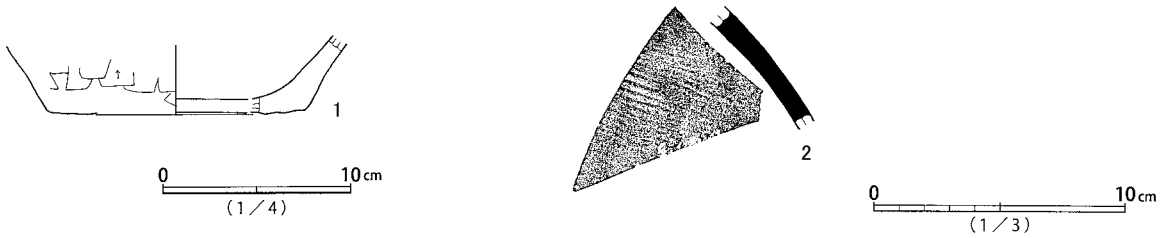


SM1062 第１主体部
1 黒色土 ロームＢ含む。
2 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
3 黒褐色土 ローム粒・ロームＢ若干含む。
4 黒褐色土 ローム粒含む。
5 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
6 暗褐色土 ローム粒含む。
7 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ若干含む。
8 褐色土 ローム粒・ロームＢ多量に含む。
9 暗褐色土 ローム粒・ロームＢやや多く含む。
10 暗褐色土 ローム粒含む。
11 黒褐色土 ローム粒若干含む。
12 黒褐色土 微細なローム粒多量に含む。
13 褐色土 ローム粒・ロームＢ多量に含む。
14 褐色土 ローム粒多量に含む。

Fig.337　SM1062 遺構 (1) 実測図

第２主体部





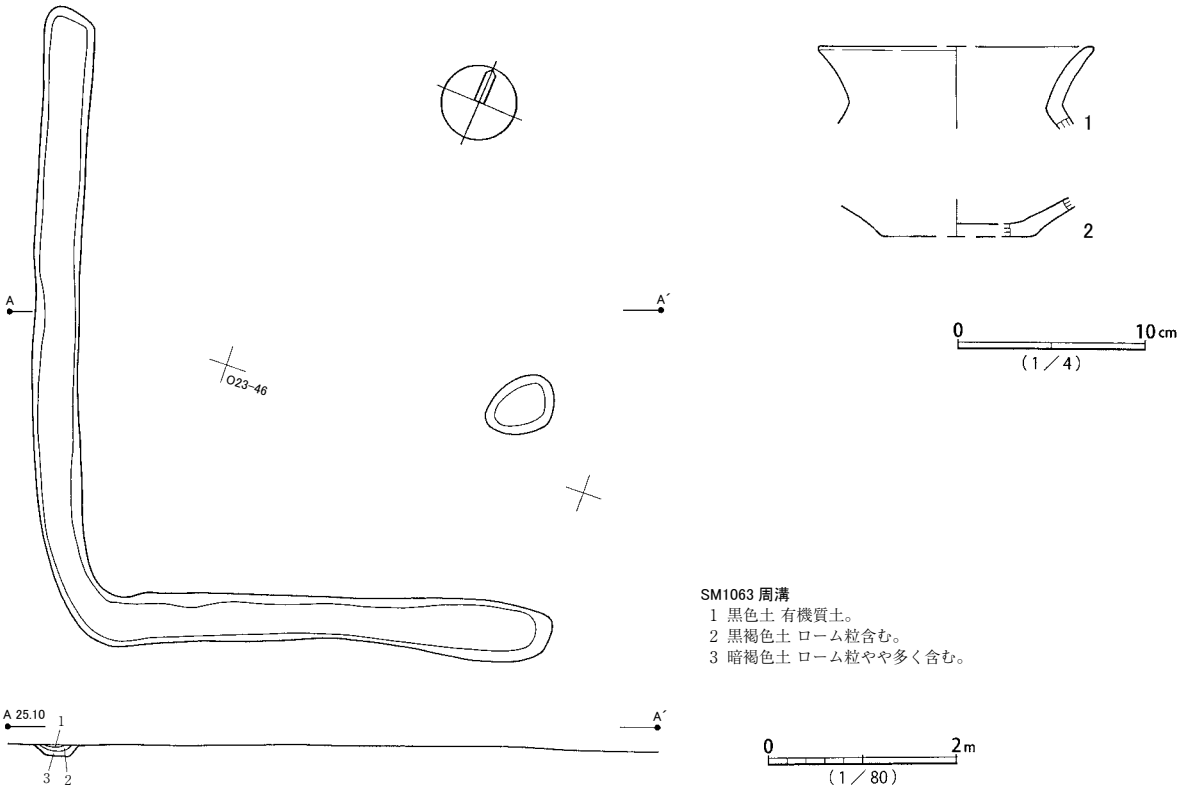


Fig.338　SM1062 遺構 (2)・遺物、SM1063 遺構・遺物実測図

第1主体部

第1主体部は、方台部ほぼ中央の盛土内2層中から検出されたが、遺存状況は不良で、木棺直葬の土壙墓かどうかは解らない。残存墓壙規模は上端で、長径1.36m短径1.00m深さ0.18m、下端で長径1.26m短径0.88mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-87°-Wを示す。

墓壙内からは、1-1の凝灰岩製丸玉と1-2の滑石製丸玉が検出されている。遺物の性格を考えれば、出土地不明の1の鉛ガラス製丸玉も主体部一括で検出された可能性が高い。

出土遺物

本墳周溝内からは、2の須恵器広口壺口縁部、4の須恵器長頸壺底部等の遺物が覆土一括で検出されている。5の土師器高坏脚部等を含めて、7世紀末葉～8世紀初頭の年代観が想定される。

SM1065　099・SW81地区　（Fig.341）

L･M-14･15グリッドに位置する。平面形は平行四辺形的な終末期方墳(律令制墳墓)である。周溝は全周せず、特に南北方向の遺存状況は良好ではない。方台部内には多くの攪乱が存在し、全体的に遺存状況は不良である。旧遺構番号は099-4077・SW81-260号遺構である。

墳丘と周溝

長径12.48m、短径11.70m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-17°-Wを示す。周溝内側面積は147.3㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳系では第21位の規模である。確認面での周溝幅は、0.96～1.50m、深さは0.14～0.56mを測り、断面は逆台形を呈している。

方台部内の中央部付近に、小土壙が検出されている。方台部に攪乱が多数存在する中で、土層説明が存在するのはこの小土壙のみであることから、調査者は、調査時から埋葬施設的な遺構と捉えたようである。

埋葬施設

方台部内の中央東側に小土壙1基が検出されている。

第1主体部

埋葬施設と捉えられる遺構は、方台部ほぼ中央に位置する不整形な小土壙である。埋葬施設であるならば、火葬を含む改葬墓的な性格の類のものであろう。規模は上端で、長径1.38m短径1.16m深さ0.54mを測る。底面は北側が深く平坦ではない。主軸方位はN-64°-Wを示す。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、遺物が全く検出されなかった。

SM1066　SW83地区　（Fig.342、PL.123･171･190）

T-23グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号はSW83-K7号遺構である。

墳丘と周溝

長径12.28m、短径11.76m、現状での盛土の高さは0.28mを測り、主軸方位はN-6°-Wを示す。周溝内側面積は147.1㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第22位の規模である。確認面での周溝幅は、1.64～2.32m、深さは0.60～0.84m、土層断面図上では0.84～1.08mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

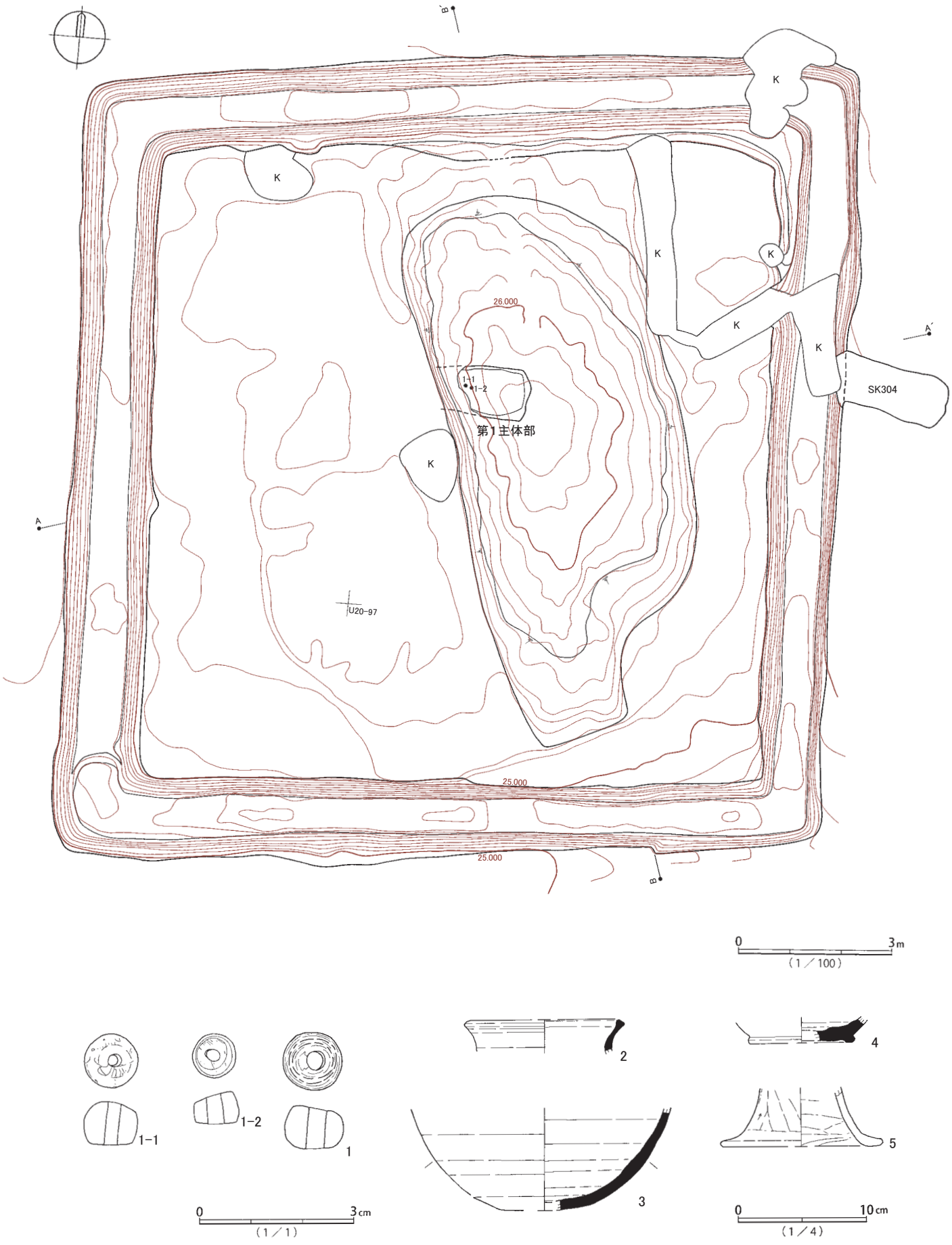
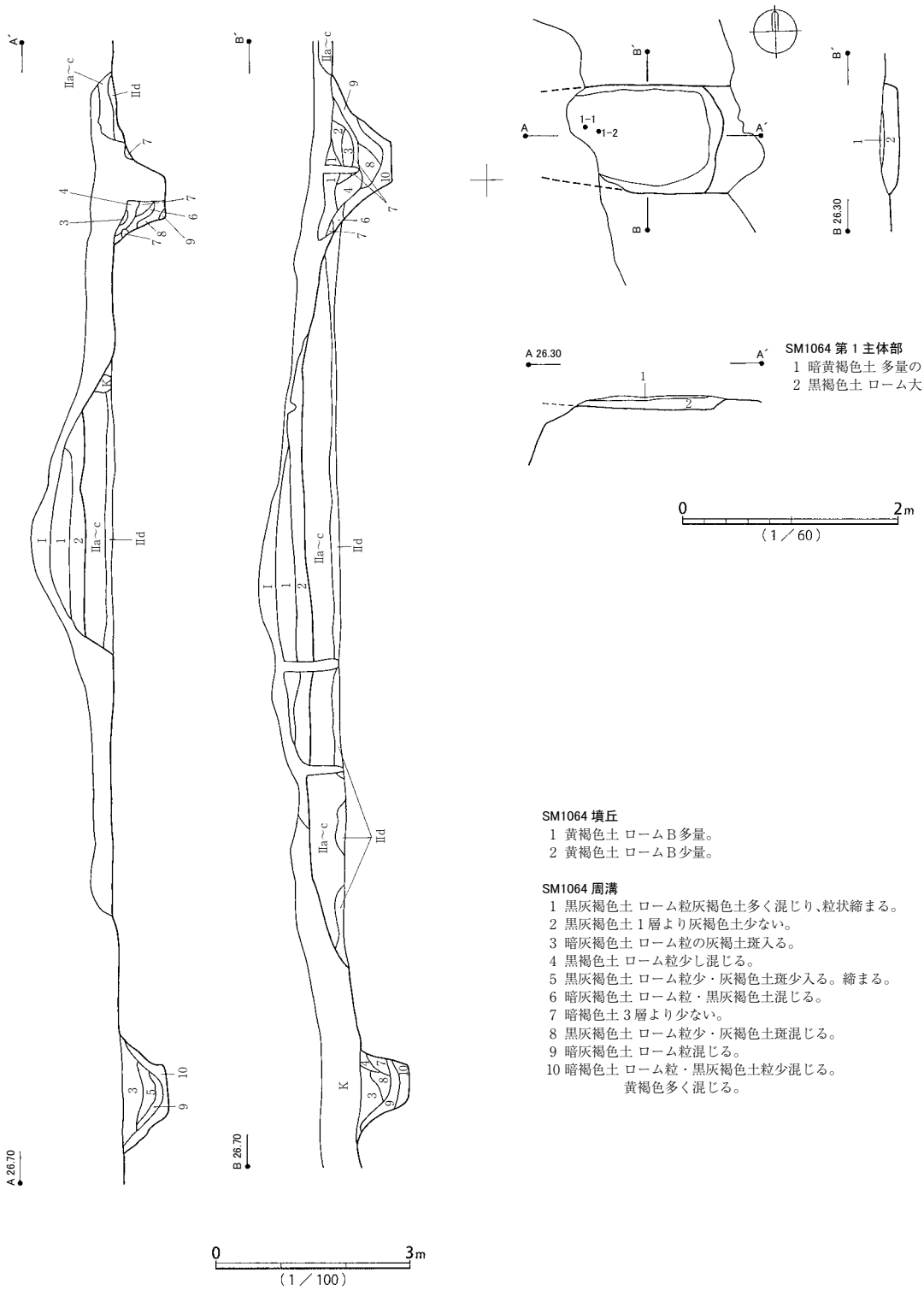


Fig.339　SM1064 遺構 (1)・遺物実測図



SM1064 第 1 主体部
1 暗黄褐色土 多量のローム粒・ロームＢ混じる。
2 黒褐色土 ローム大Ｂ。

SM1064 墳丘
1 黄褐色土 ロームＢ多量。
2 黄褐色土 ロームＢ少量。

SM1064 周溝
1 黒灰褐色土 ローム粒灰褐色土多く混じり、粒状締まる。
2 黒灰褐色土 1 層より灰褐色土少ない。
3 暗灰褐色土 ローム粒の灰褐土斑入る。
4 黒褐色土 ローム粒少し混じる。
5 黒灰褐色土 ローム粒少・灰褐色土斑少入る。締まる。
6 暗灰褐色土 ローム粒・黒灰褐色土混じる。
7 暗褐色土 3 層より少ない。
8 黒灰褐色土 ローム粒少・灰褐色土斑混じる。
9 暗灰褐色土 ローム粒混じる。
10 暗褐色土 ローム粒・黒灰褐色土粒少混じる。
黄褐色多く混じる。

Fig.340　SM1064 遺構 (2) 実測図

方台部内の中央に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.76m短径1.18m深さ0.30m、下端で長径2.46m短径0.98mを測り、主軸方位はN-88°-Eを示す。墓壙の中央に箱型の木棺痕は検出されていないが、土層断面によって木棺規模は復元できる。復元される木棺規模は、上端で長さ(1.98)m幅(0.62)m深さ0.26mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-88°-E を示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、3点の土師器・須恵器が検出されている。何れも覆土一括で取り上げられた遺物であるが、1の土師器坏が示す年代観は、7世紀末葉～8世紀初頭に位置付ける事が出来る。

SM1067　099地区　(Fig.343、PL.123・171・190)

O・P-22・23グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号は099-4108号遺構である。

墳丘と周溝

長径12.64m、短径11.90m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-17°-Wを示す。周溝内側面積は142.9㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第23位の規模である。確認面での周溝幅は、2.24～2.50m、深さは0.48～1.06mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内の中央に1基検出されている。他に小土坑状のピット1基が検出されているが、詳細な記録がない。調査段階で埋葬施設から除外された遺構と想定される。深さは74.8㎝を測る。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.62m短径1.58m深さ1.20m、下端で長径2.50m短径1.26mを測り、主軸方位はN-89.5°-Wを示す。墓壙の中央に、一部を粘土で固定した箱型の木棺痕が検出されている。木棺規模は、上端で長さ1.78m幅0.56m、下端で長さ1.64m幅0.48m深さ0.58mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-89°-W を示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

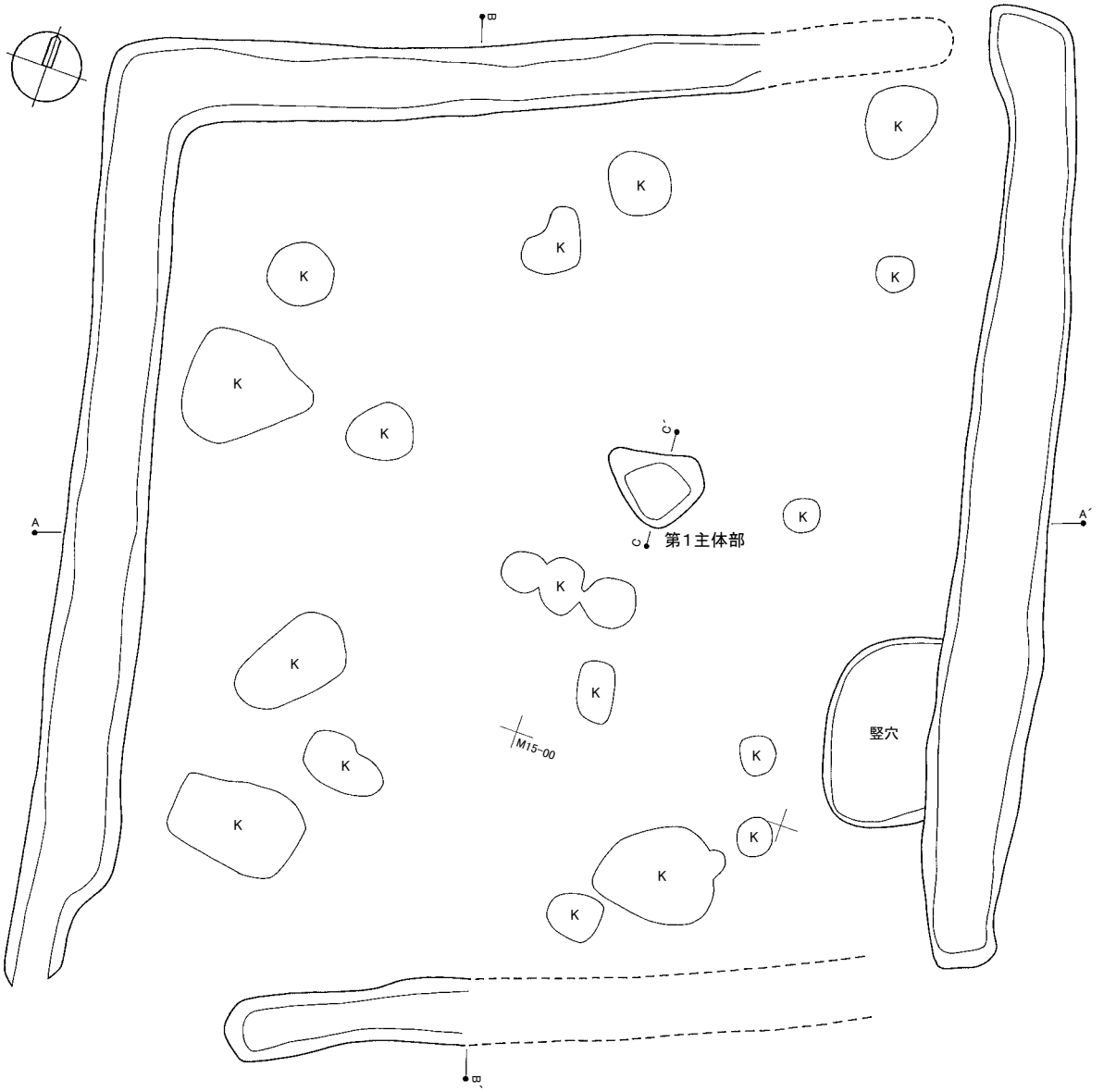
本墳周溝内からは、2点の須恵器が検出されている。1・2の須恵器甕は、西側周溝底よりそれぞれ25～32㎝浮いた状態で検出されている。調査時における調査所見によると、1・2は同一個体である。須恵器甕が示す年代観は、7世紀末葉～8世紀初頭に位置付けられる。

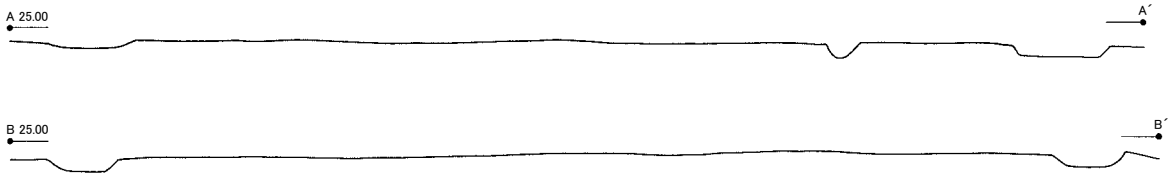
SM1068　099地区　(Fig.344、PL.123～124)

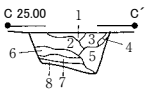
J・K-8・9グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。方台部を道路状遺構が横断し、遺存状況は不良である。旧遺構番号は099-4034号遺構である。

墳丘と周溝

長径11.88m、短径11.80m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-48°-Eを示す。周溝内側面積







SM1065 第 1 主体部
1 黒褐色土 ローム粒含む。
2 褐色土 ローム粒・ロームＢ多量に含む。
3 暗褐色土 ローム粒含む。
4 明褐色土 壁崩落ローム主体。
5 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
6 暗褐色土２層よりローム量多い。
7 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
8 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ多量に含む。

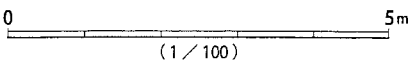
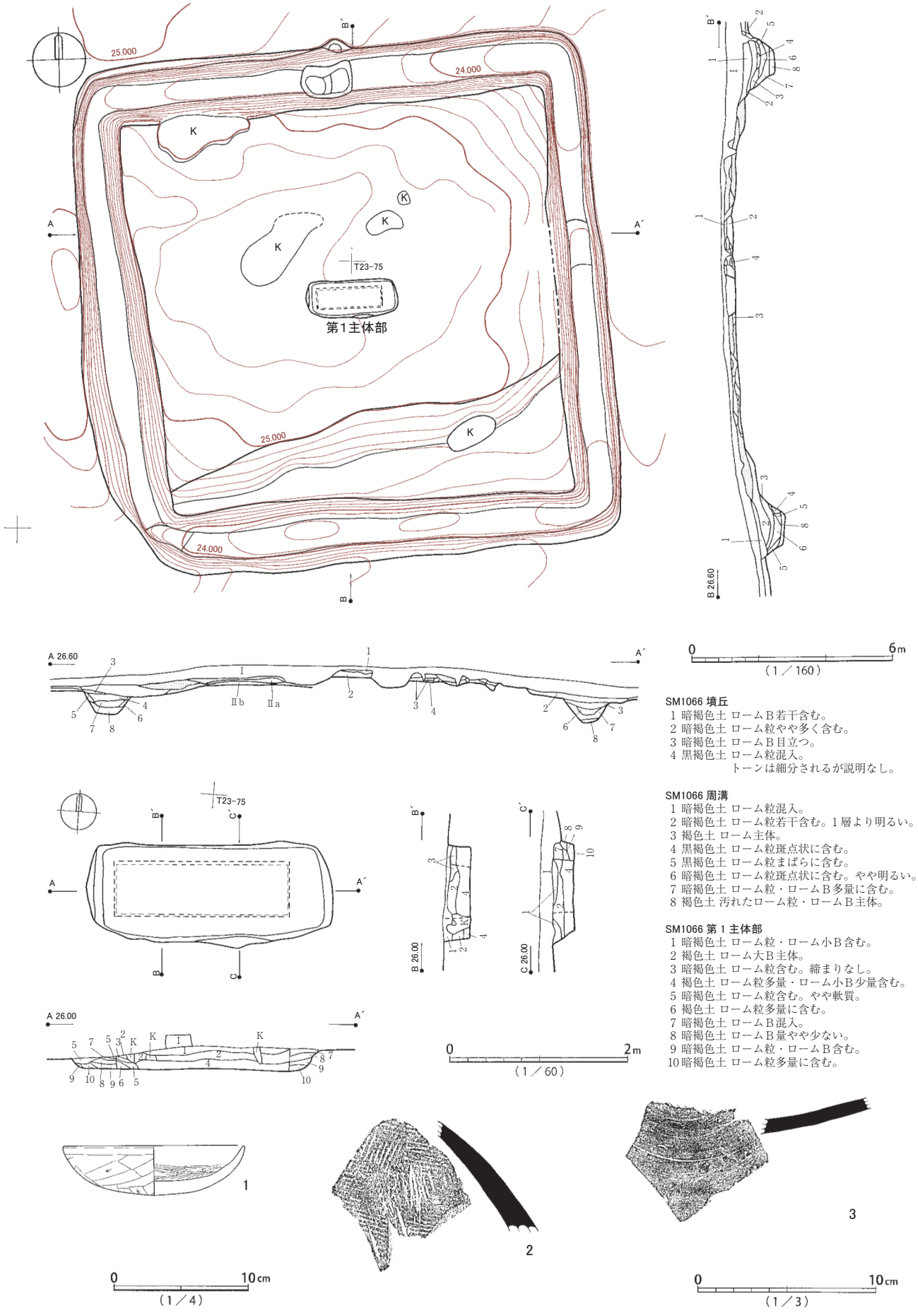


Fig.341　SM1065 遺構実測図



SM1066 墳丘
1 暗褐色土 ロームＢ若干含む。
2 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
3 暗褐色土 ロームＢ目立つ。
4 黒褐色土 ローム粒混入。
トーンは細分されるが説明なし。

SM1066 周溝
1 暗褐色土 ローム粒混入。
2 暗褐色土 ローム粒若干含む。1層より明るい。
3 褐色土 ローム主体。
4 黒褐色土 ローム粒斑点状に含む。
5 黒褐色土 ローム粒まばらに含む。
6 暗褐色土 ローム粒斑点状に含む。やや明るい。
7 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ多量に含む。
8 褐色土 汚れたローム粒・ロームＢ主体。

SM1066 第1主体部
1 暗褐色土 ローム粒・ローム小Ｂ含む。
2 褐色土 ローム大Ｂ主体。
3 暗褐色土 ローム粒含む。締まりなし。
4 褐色土 ローム粒多量・ローム小Ｂ少量含む。
5 暗褐色土 ローム粒含む。やや軟質。
6 褐色土 ローム粒多量に含む。
7 暗褐色土 ロームＢ混入。
8 暗褐色土 ロームＢ量やや少ない。
9 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
10 暗褐色土 ローム粒多量に含む。

Fig.342　SM1066 遺構・遺物実測図

は137.8㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第24位の規模である。確認面での周溝幅は、1.20～1.44m、深さは0.40～0.44mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内の中央に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.52m短径0.99m深さ0.19m、下端で長径2.32m短径0.81mを測り、主軸方位はN-65°-Eを示す。墓壙のほぼ中央に、箱型の木棺痕が検出されている。木棺規模は、上端で長さ2.34m幅0.67m、下端で長さ2.28m幅0.51m深さ0.17mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-65°-E を示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、3点の須恵器甕片が覆土一括で取り上げられているに過ぎない。

SM1069　099地区　（Fig.345～346、PL.124・172・190）

N・O-17・18グリッドに位置する。下層に存在するSS16・17を削平して存在する、四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号は099-4094号遺構である。

墳丘と周溝

長径11.84m、短径11.64m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-9°-Eを示す。周溝内側面積は137.6㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第25位の規模である。確認面での周溝幅は、1.46～1.96m、深さは0.54～0.82mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内の中央に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央南側に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径3.22m短径1.68m深さ0.48m、下端で長径2.94m短径1.48mを測り、主軸方位はN-11°-Eを示す。墓壙の中央南側に、周囲を粘土で固定した箱型の木棺痕が検出されている。木棺規模は、上端で長さ2.12m幅0.56m、下端で長さ2.06m幅0.54m深さ0.36mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-12°-E を示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

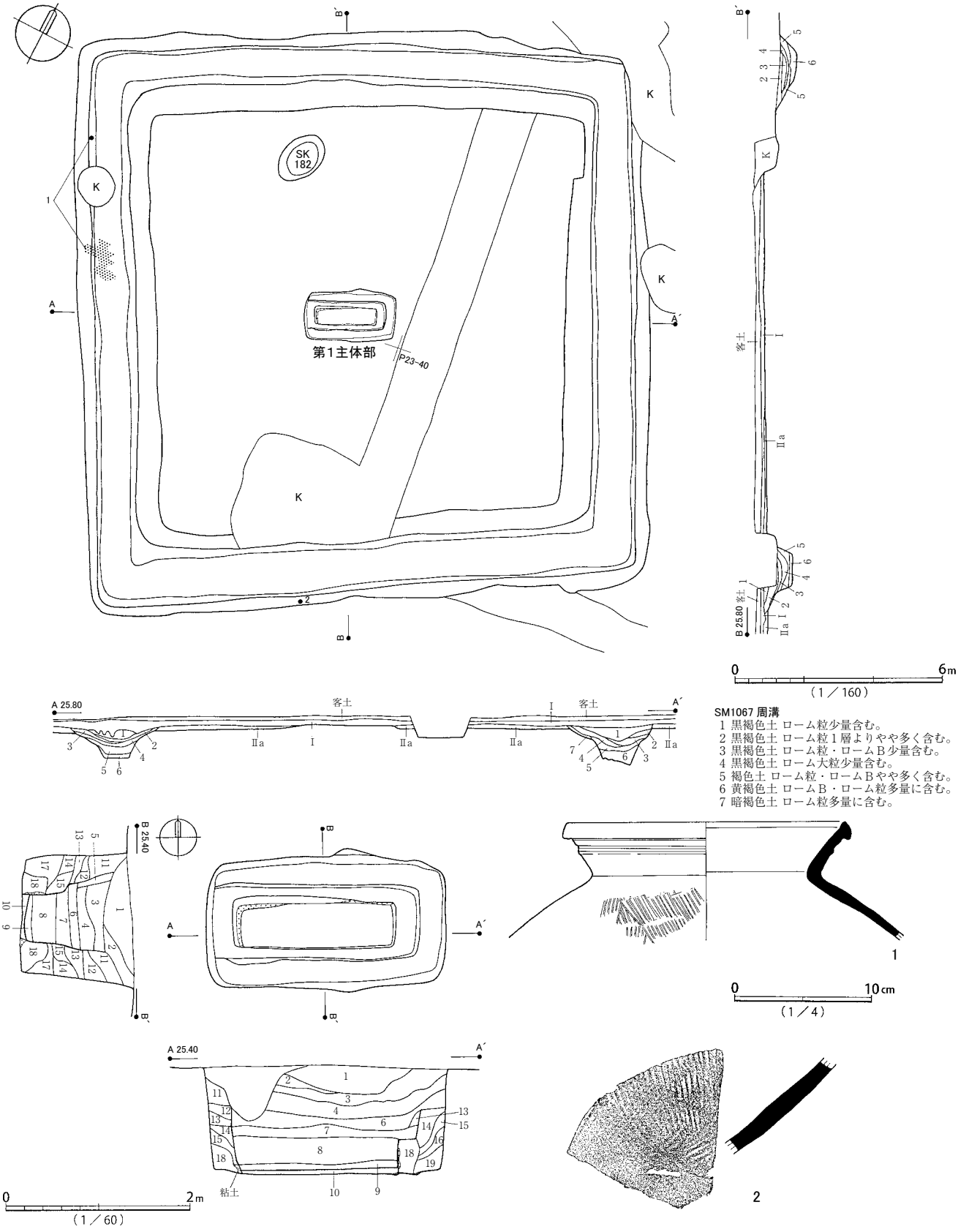
出土遺物

本墳周溝内からは、6点の弥生土器が覆土一括で検出されている。時期的に本墳とは整合しないため、下層に位置する方形周溝墓に伴う遺物であろう。

SM1070　099地区　（Fig.347、PL.124）

L・M-12・13グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。掘り込みが非常に浅く、周溝は途切れ途切れに巡り、遺存状況は極めて不良である。旧遺構番号は099-4078号遺構である。

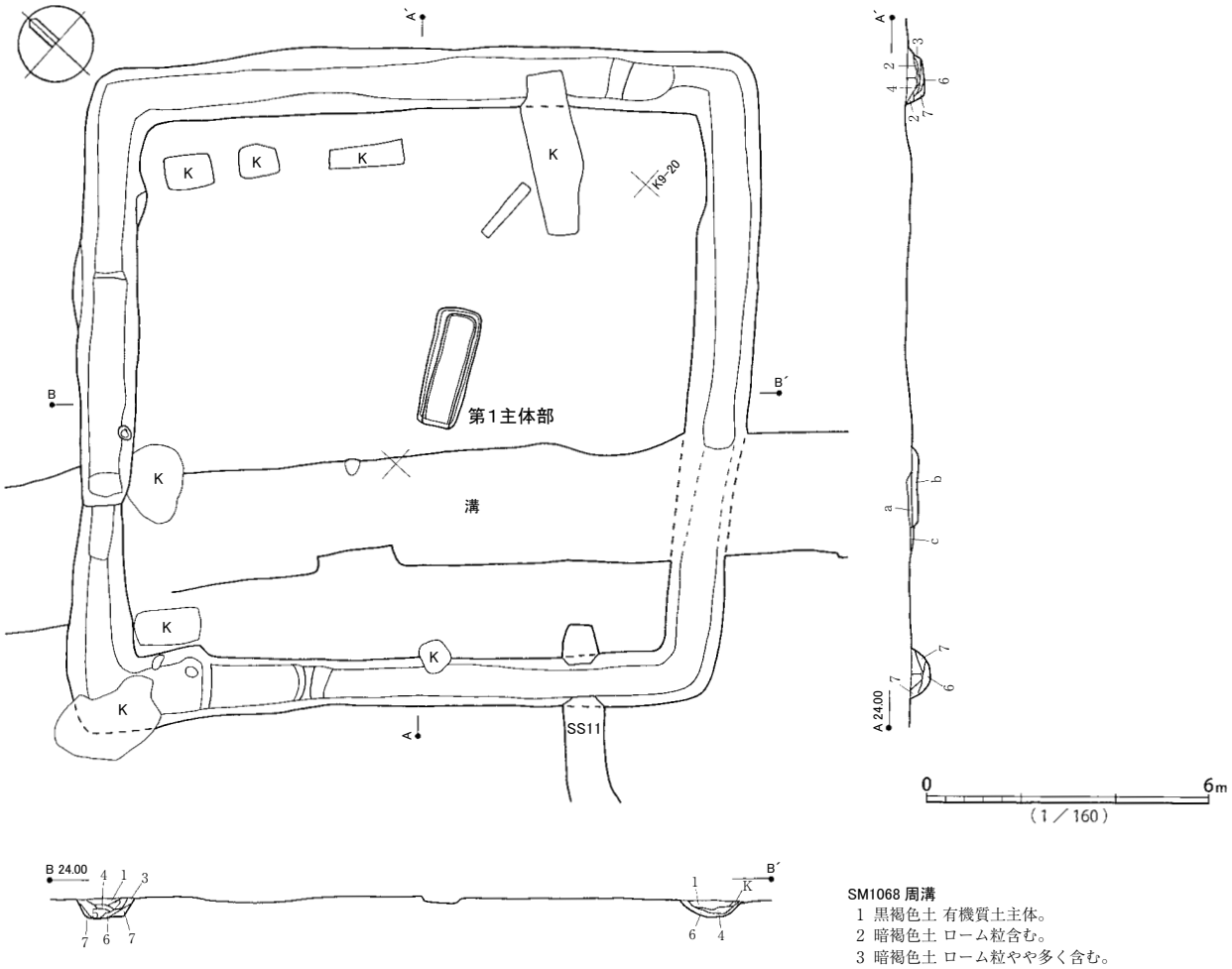
墳丘と周溝



SM1067 周溝
1 黒褐色土 ローム粒少量含む。
2 黒褐色土 ローム粒１層よりやや多く含む。
3 黒褐色土 ローム粒・ロームＢ少量含む。
4 黒褐色土 ローム大粒少量含む。
5 褐色土 ローム粒・ロームＢやや多く含む。
6 黄褐色土 ロームＢ・ローム粒多量に含む。
7 暗褐色土 ローム粒多量に含む。

SM1067 第１主体部
1 暗褐色土 ローム粒・ローム大粒多量に含む。
2 暗褐色土 1・3層の中間層。
3 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ少量含む。
4 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ多量に含む。
5 褐色土 ロームＢ主体層。
6 黒褐色土 ローム粒少量含む。
7 黒褐色土 ローム大粒多量に含む。
8 暗褐色土 ローム小Ｂ・粘土粒混入。締まりなし。
9 暗褐色土 ローム小Ｂ・黒色土の混合土。
10 暗褐色土 ローム大Ｂ多量に含む。
11 暗褐色土 ローム大粒多量に含む。粘土粒混じる。
12 褐色土 ロームＢ主体。
13 黒褐色土 ローム小Ｂやや多く含む。
14 暗褐色土 ローム粒多量に含む。黒褐色土粒混入。
15 暗褐色土 ローム小Ｂ・粘土粒含む。
16 黒褐色土 ローム大Ｂ少量・ローム粒多量に含む。
17 暗褐色土 ローム大Ｂ多量に含む。締まりなし。
18 黄褐色土 ローム大Ｂ多量・粘土Ｂ混入。
19 暗褐色土 ローム大Ｂ多量に含む。

Fig.343　SM1067 遺構・遺物実測図



SM1068 周溝
1 黒褐色土 有機質土主体。
2 暗褐色土 ローム粒含む。
3 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
4 黒褐色土 有機質土。
5 暗褐色土 ローム粒若干含む。
6 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
7 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
a ― 溝覆土。
b ― 溝覆土。
c ― 溝覆土。

SM1068 第１主体部
1 黒褐色土 ローム粒若干含む。
2 黒褐色土 ローム微粒含む。
3 黒色土 ローム粒やや多く含む。
4 黒褐色土 有機質土主体。やや締まる。
5 黒褐色土 ローム小Ｂ混入。
6 暗褐色土 ローム粒多量に含む。締まる。

Fig.344　SM1068 遺構・遺物実測図

長径11.40m、短径11.30m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-39°-Wを示す。周溝内側面積は130.8㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第26位の規模である。確認面での周溝幅は、0.56～0.86m、深さは0.06～0.18mを測り、周溝断面は逆台形を呈している。

確認面がもう少し低ければ、本墳は方墳とは認識されず、単なる木棺墓として取り扱われていたであろうと判断される。そう捉えると、本遺跡検出の単独の木棺墓や土壙墓の中には、本来周溝が伴う墳墓であった遺構が、少なからず含まれていた可能性を否定できない。

埋葬施設

方台部内の中央に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.52m短径1.24m深さ0.48m、下端で長径2.42m短径1.04mを測り、主軸方位はN-55°-Eを示す。墓壙の中央南側に、箱型の木棺痕が検出されている。木棺痕の南東側上部には赤褐色に酸化した変色範囲が、長さ1.70m幅0.20m前後に亘って検出されている。同様に北西側の一部の範囲からは、骨粉化した人骨片が、長さ0.50m幅最大0.16mに亘って検出されている。木棺規模は、上端で長さ1.92m幅0.70m、下端で長さ1.70m幅0.56m深さ0.40mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-55°-E を示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1071　セ54地区　（Fig.348、PL.125）

S・T-19グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号はセ54-14号遺構である。

墳丘と周溝

長径11.32m、短径11.30m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-24.5°-Wを示す。周溝内側面積は128.7㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第27位の規模である。確認面での周溝幅は、1.18～1.54m、深さは0.16～0.40mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内の中央に1基検出されている。

第1主体部

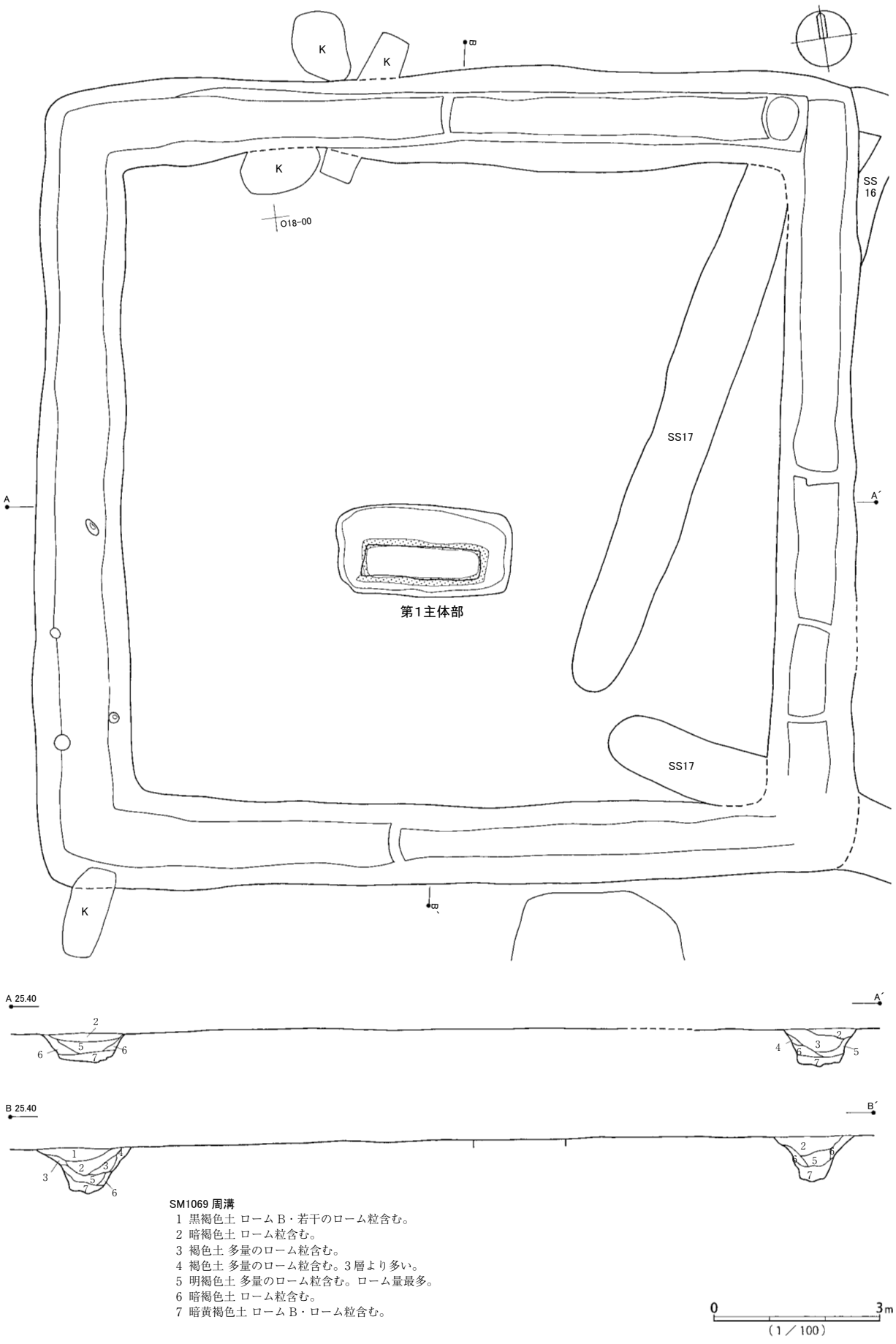
埋葬施設は、方台部中央に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.42m短径1.16m深さ0.74m、下端で長径1.84m短径0.80mを測り、主軸方位はN-75°-Eを示す。墓壙の中央南側に、箱型の木棺痕が検出されている。木棺規模は、上端で長さ1.68m幅0.74m、下端で長さ1.78m幅0.64m深さ0.44mを測る。底面の一部に攪乱が達するが、ほぼ平坦であり、主軸方位はN-76°-E を示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、覆土一括で1点の須恵器片が検出されている。

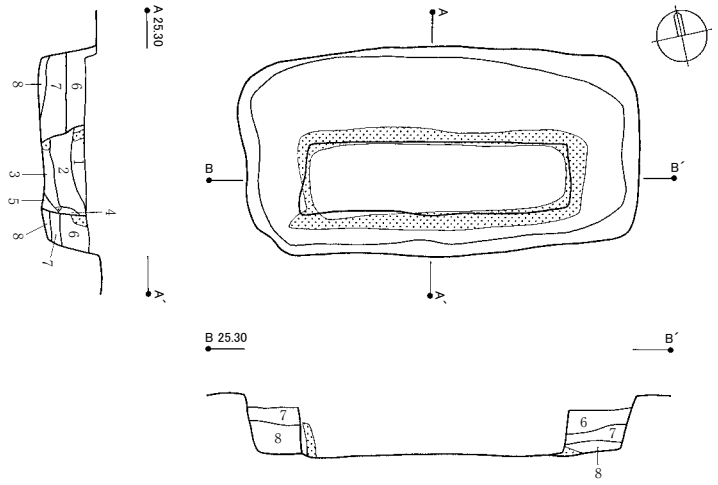
SM1072　099地区　（Fig.349、PL.125・172・190）



SM1069 周溝
1 黒褐色土 ローム B・若干のローム粒含む。
2 暗褐色土 ローム粒含む。
3 褐色土 多量のローム粒含む。
4 褐色土 多量のローム粒含む。3 層より多い。
5 明褐色土 多量のローム粒含む。ローム量最多。
6 暗褐色土 ローム粒含む。
7 暗黄褐色土 ローム B・ローム粒含む。

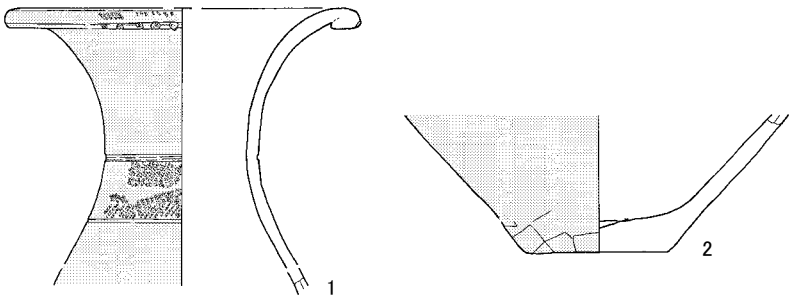
0 3m
(1／100)

Fig.345　SM1069 遺構 (1) 実測図

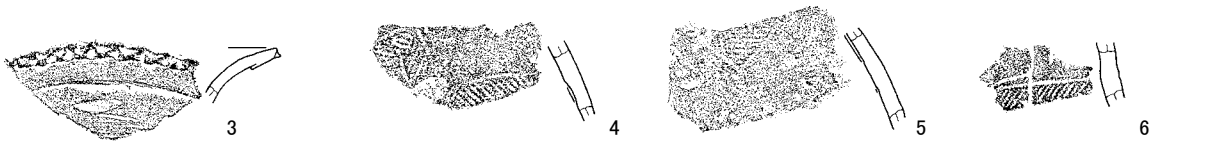


SM1069 第 1 主体部
1 褐色土 多量のローム粒・若干のロームＢ含む。
2 褐色土 ローム粒・若干のローム B 含む。
3 暗褐色土
4 ―
5 ―
6 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
7 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ少量含む。
8 褐色土 ロームＢ主体。

0 2m
（1／60）



0 10cm
（1／4）



0 10cm
（1／3）

Fig.346　SM1069 遺構 (2)・遺物実測図

J･K-9･10グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。方台部内には埋葬施設の一部を削平する大きな攪乱が存在し、遺存状況は不良である。旧遺構番号は099-4032号遺構である。

墳丘と周溝

長径11.40m、短径11.20m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-15°-Wを示す。周溝内側面積は128.7㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第28位の規模である。確認面での周溝幅は、1.40～1.92m、深さは0.22～0.68m、土層断面図上では0.56～0.88mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内の中央に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央に検出された木棺直葬の土壙墓であるが、攪乱により西側を大きく削平されている。残存する墓壙規模は上端で、長径2.14m短径1.44m深さ0.34m、下端で長径2.06m短径1.40mを測り、主軸方位はN-83°-Eを示す。墓壙のほぼ中央に、箱型の木棺痕が検出された。残存する木棺規模は、上端で長さ1.82m幅0.50m、下端で長さ1.74m幅0.46m深さ0.34mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-84°-E を示す。

墓壙･木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、覆土一括で3点の須恵器短頸壺の類が検出されている。

SM1073　SW83地区　（Fig.350、PL.190）

R･S-21･22グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。本墳は昭和59年度発行の概報にて、一部報告された2号墳である。旧遺構番号はSW83-K2号遺構である。

墳丘と周溝

長径11.08m、短径11.00m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-33°-Wを示す。周溝内側面積は122.4㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第29位の規模である。確認面での周溝幅は、1.68～1.96m、深さは0.64～0.86m、土層断面図上では0.78～0.94mを測る。全体的に均整のとれた方形形状で、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

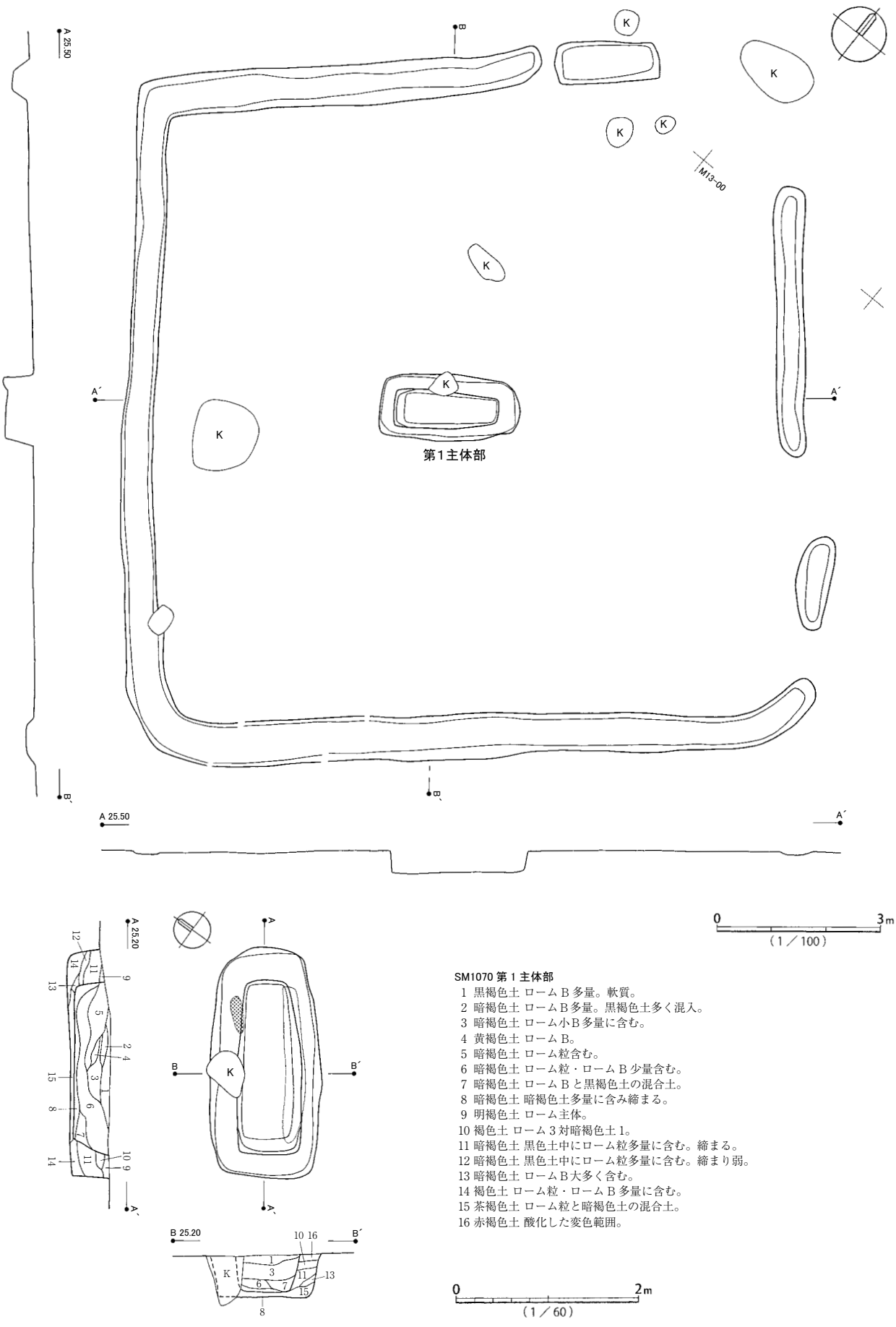
本墳南側周溝内からは、3点の遺物が検出されている。1は、周溝底から40㎝程浮いた状態で検出された瑞である。口縁部を欠くが東海産の須恵器であり、8世紀初頭の年代観を想定できる。3は覆土一括で検出された須恵器片と、二次変形により折れ曲がった鉄釘である。

SM1074　SW83・099地区　（Fig.351、PL.125）

P･Q-21･22グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号はSW83-K22･099-4113号遺構である。

墳丘と周溝

長径11.00m、短径10.84m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-7.5°-Wを示す。周溝内側面積



SM1070 第 1 主体部
1 黒褐色土 ローム B 多量。軟質。
2 暗褐色土 ローム B 多量。黒褐色土多く混入。
3 暗褐色土 ローム小 B 多量に含む。
4 黄褐色土 ローム B。
5 暗褐色土 ローム粒含む。
6 暗褐色土 ローム粒・ローム B 少量含む。
7 暗褐色土 ローム B と黒褐色土の混合土。
8 暗褐色土 暗褐色土多量に含み締まる。
9 明褐色土 ローム主体。
10 褐色土 ローム 3 対暗褐色土 1。
11 暗褐色土 黒色土中にローム粒多量に含む。締まる。
12 暗褐色土 黒色土中にローム粒多量に含む。締まり弱。
13 暗褐色土 ローム B 大多く含む。
14 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
15 茶褐色土 ローム粒と暗褐色土の混合土。
16 赤褐色土 酸化した変色範囲。

Fig.347　SM1070 遺構実測図

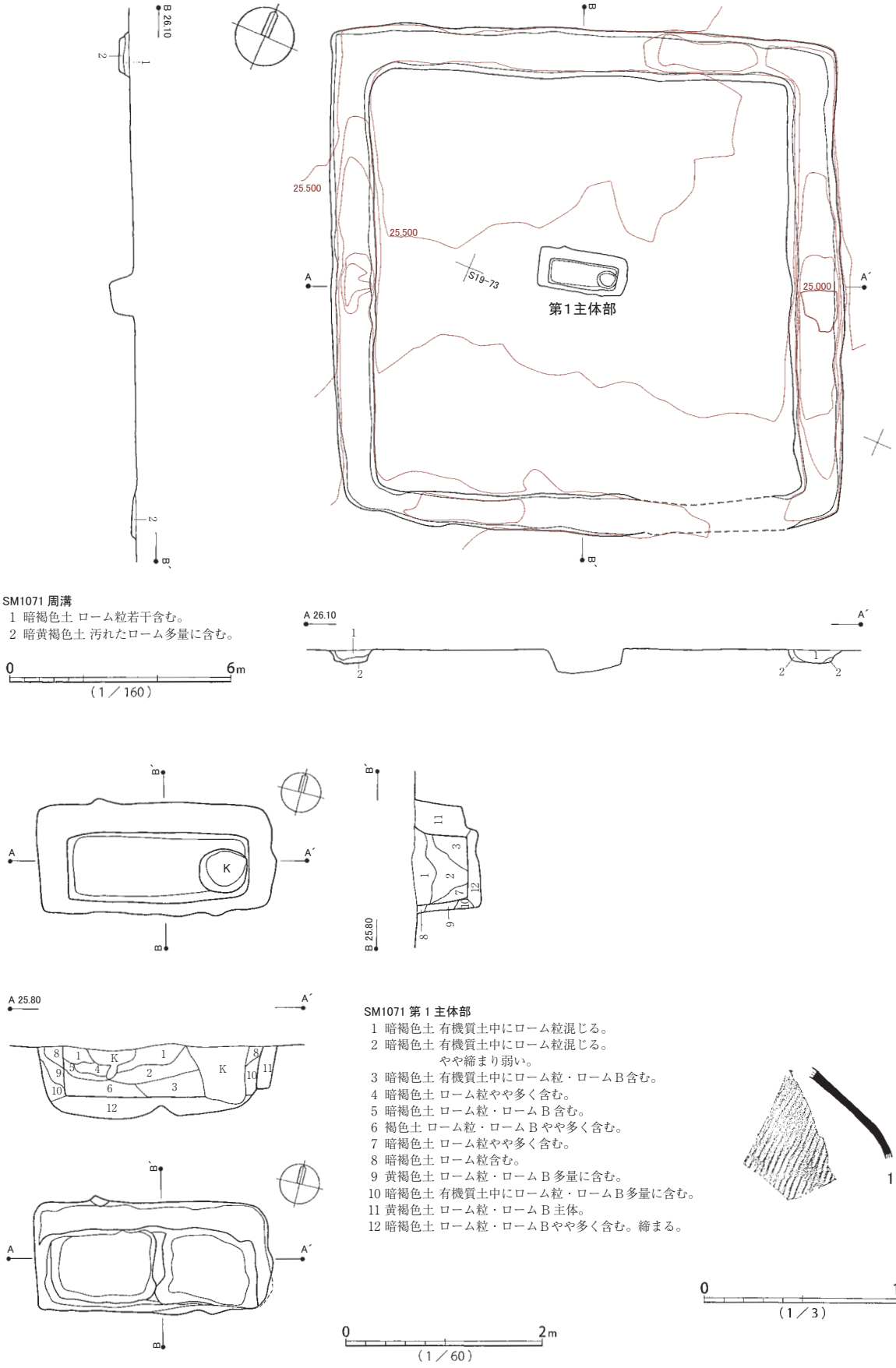


Fig.348　SM1071 遺構・遺物実測図

は120.4㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第30位の規模である。確認面での周溝幅は、0.86～1.18m、深さは0.16～0.24mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈している。

方台部中央には近～現代の炭窯が存在し、周溝の掘り込みも浅く、遺構の遺存状況は不良である。東側周溝を削平する掘り込みの浅い土坑が存在するが、本墳に伴う埋葬施設等ではなく、新しい時期の土坑と判断される。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、遺物が全く検出されなかった。

SM1075　セ73地区　　（Fig.352～353、PL.125～126）

O･P-1･2グリッドに位置する。北側周溝の大半は調査区域外に存在し、南側周溝も明瞭に検出されてはいないが、埋葬施設の形態から終末期方墳と判断される。旧遺構番号はセ73-003号遺構である。

墳丘と周溝

北側トレンチおよび南側周溝の検出状況から、長径11.10m、短径（10.82）mを測る。現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-36°-Wを示す。破線により復元される推定周溝内側面積は（119.7）㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第31位の規模である。確認面での周溝幅は、0.96～1.26m、深さは0.26～0.50m、土層断面図上では0.54～0.84mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

方台部中央に攪乱が存在し、埋葬施設の一部を削平している。

埋葬施設

方台部内中央西側と南側に検出されている。1基は木棺直葬土壙墓、もう1基は側壁抉り込み土壙である。

第1主体部

第1主体部は、方台部中央西側に検出された木棺直葬の土壙墓である。攪乱により一部を欠くが、残存する墓壙規模は上端で、長径2.68m短径1.32m深さ0.32m、下端で長径2.50m短径1.20mを測り、主軸方位はN-37°-Wを示す。墓壙のほぼ中央に、箱型の木棺痕が検出された。残存する木棺規模は、上端で長さ2.00m幅0.52m、下端で長さ2.08m幅0.60m深さ0.32mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-38°-W を示す。

墓壙･木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

第2主体部

埋葬施設は、方台部南側から検出された側壁抉り込み土壙である。墓壙規模は、長径1.24m短径1.18m深さ0.48mを測り、主軸方位はN-60°-Wを示す。開口部から側壁への抉り込みは0.44mを測り、この範囲には天井部が残存する。玄室内の底面は若干の凹凸があり、天井までの高さは0.24mを測る。埋葬施設の規模から、小児ないしは火葬を含む改葬骨の埋葬施設と想定される。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

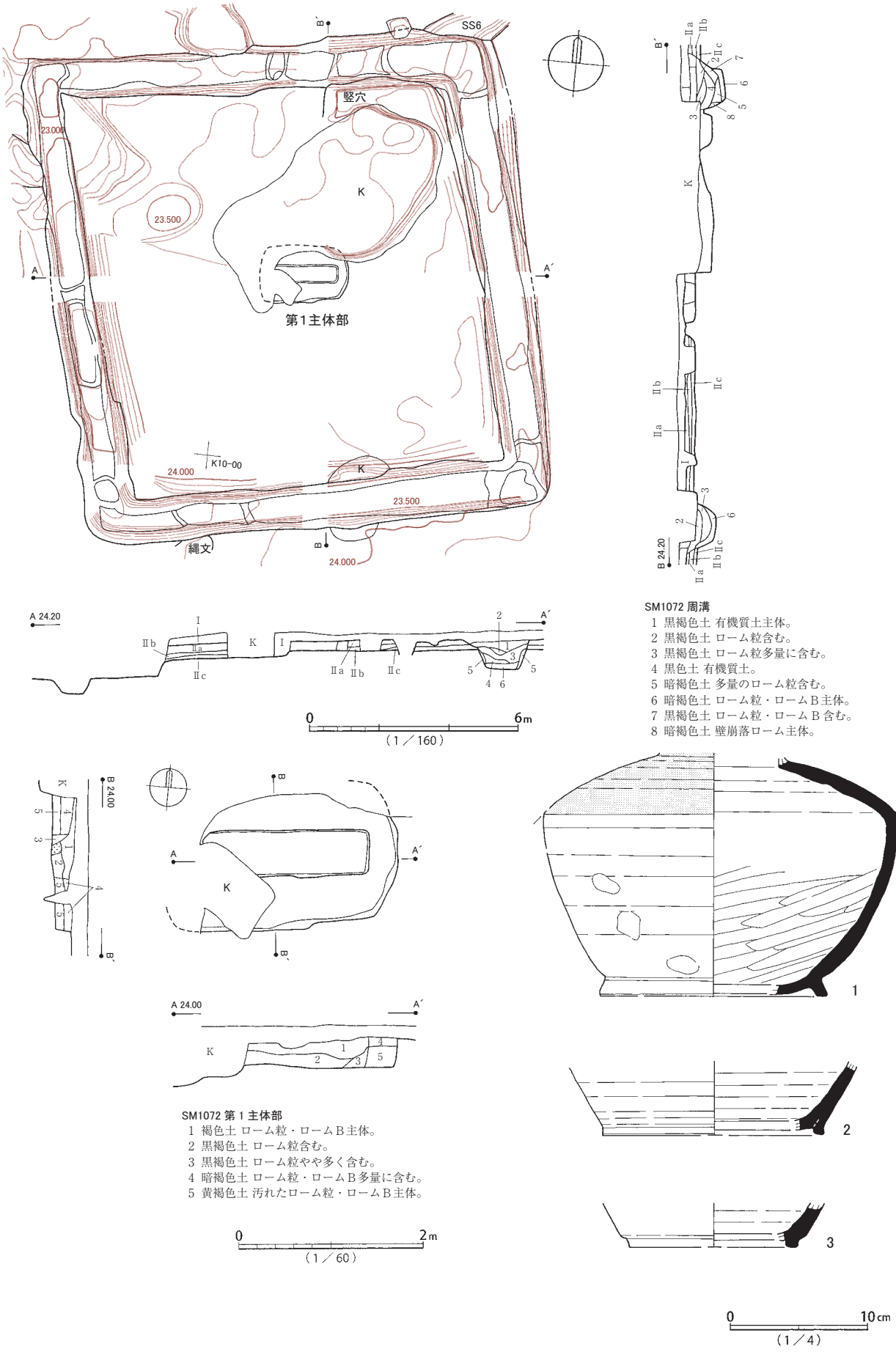
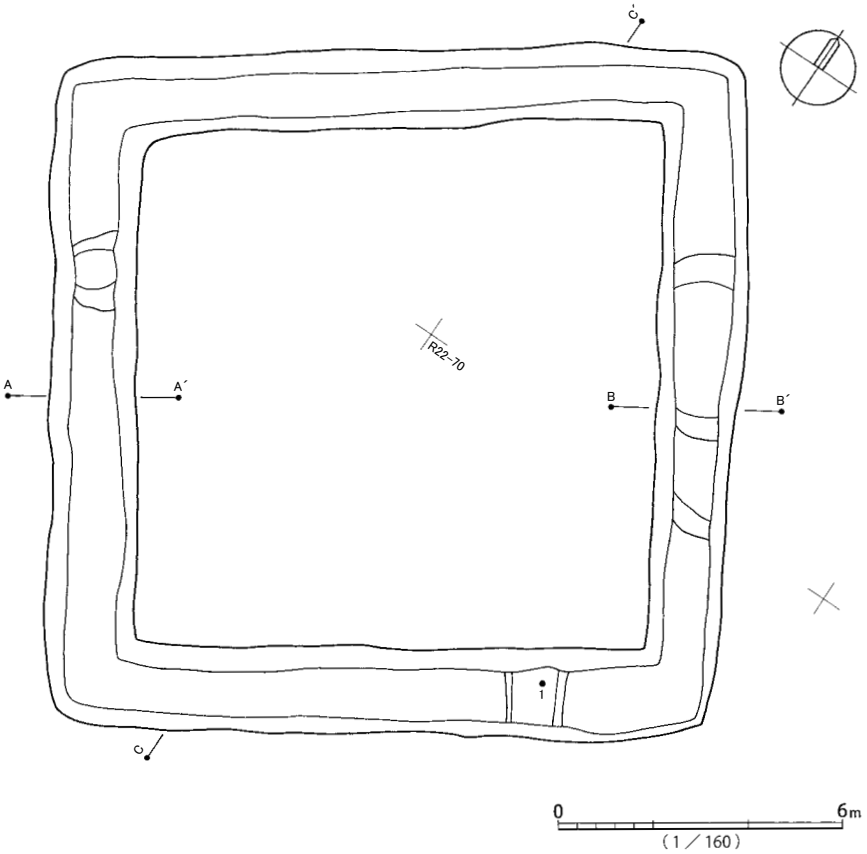
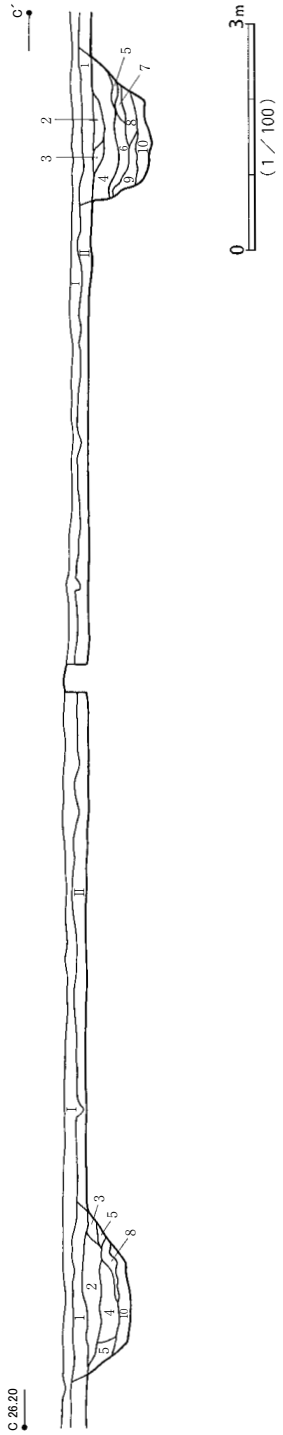
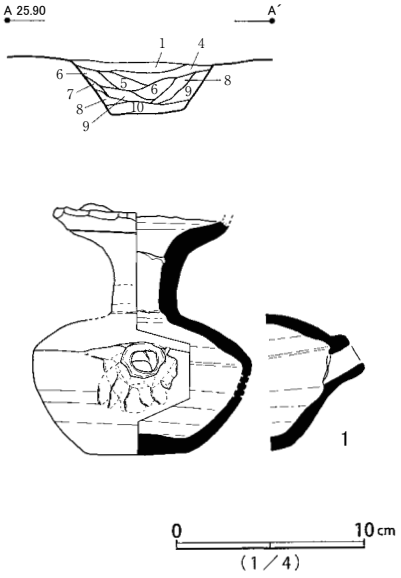
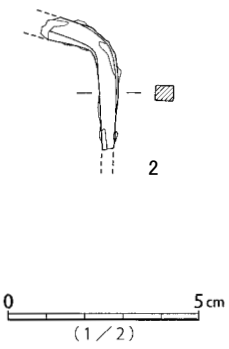


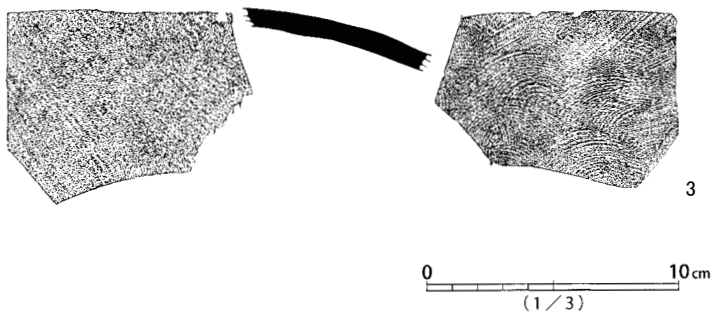
Fig.349　SM1072 遺構・遺物実測図











SM1073 周溝
1 暗褐色土 有機質土主体。
2 暗褐色土 若干のローム粒含む。
3 暗褐色土 2層よりローム量多い。
4 黒褐色土 ローム粒少量混入し、締まる。
5 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
6 黒褐色土 ローム粒含み、粘性強い。
7 黒褐色土 ローム粒斑点状に混入。
8 黒褐色土 ローム粒若干混入。
9 黒褐色土 粒の大きいローム粒多量に含む。
10 褐色土 ローム粒・ロームB主体。

Fig.350　SM1073 遺構・遺物実測図

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1076　SW83地区　（Fig.354～355、PL.126）

U･V-24･25グリッドに位置する終末期方墳である。旧遺構番号はSW83-K19号遺構である。

墳丘と周溝

西側周溝の遺存状況により、長径（11.50）m、短径10.30m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-4°-Wを示す。推定周溝内側面積は（119.5）㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第32位の規模である。確認面での周溝幅は、1.48～1.56m、深さは0.24～0.44mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。緩斜面に位置し、南側周溝は流出している。

埋葬施設

方台部内中央に2基検出されている。共に木棺直葬の土壙墓である。

第1主体部

第1主体部は、方台部中央北側に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径3.08m短径1.02m深さ0.50m、下端で長径2.84m短径0.92mを測り、主軸方位はN-85°-Wを示す。墓壙のほぼ中央に、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.00m幅1.32m、下端で長さ1.90m幅1.16m深さ0.48mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-81°-W を示す。墓壙内中央の底部には、周囲とは異なる淡い赤色に変化した変色範囲が、長さ1.16m幅0.20～0.30mに亘って検出されている。

墓壙･木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

第2主体部

第2主体部は、方台部南側から検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.80m短径1.10m深さ0.56m、下端で長径2.40m短径0.90mを測り、主軸方位はN-84°-Eを示す。墓壙のほぼ中央に、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.12m幅0.64m、下端で長さ1.98m幅0.56m深さ0.50mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-84°-E を示す。

墓壙･木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1077　099地区　（Fig.356、PL.126･190･204）

N･O-18･19グリッドに位置する。平行四辺形に近い形状の終末期方墳である。旧遺構番号は099-4090号遺構である。

墳丘と周溝

長径11.00m、短径10.70m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-12°-Wを示す。周溝内側面積は115.7㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第33位の規模である。確認面での周溝幅は、1.44～1.64m、深さは0.76～1.02mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央に1基検出されている。

第1主体部

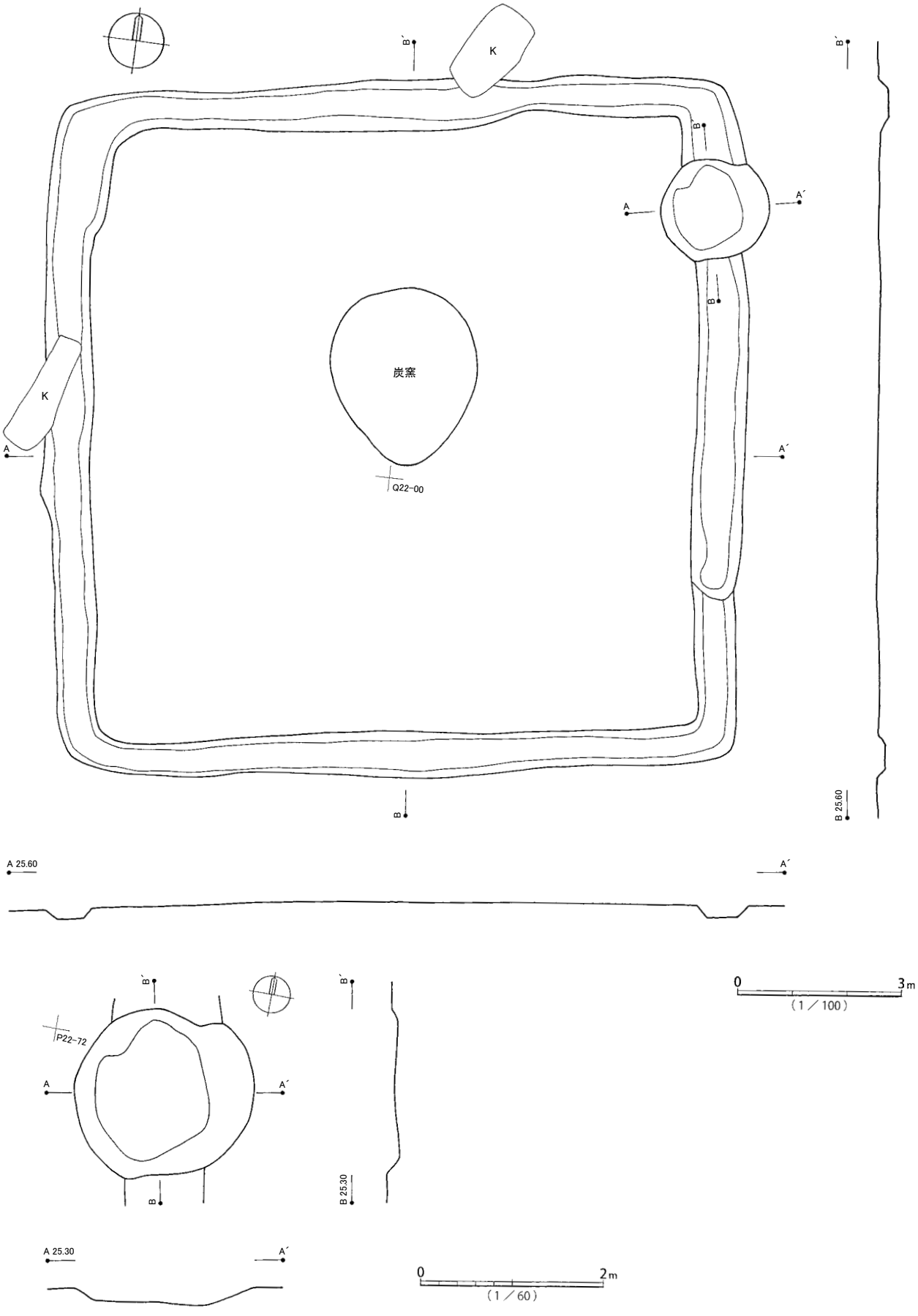


Fig.351　SM1074 遺構実測図

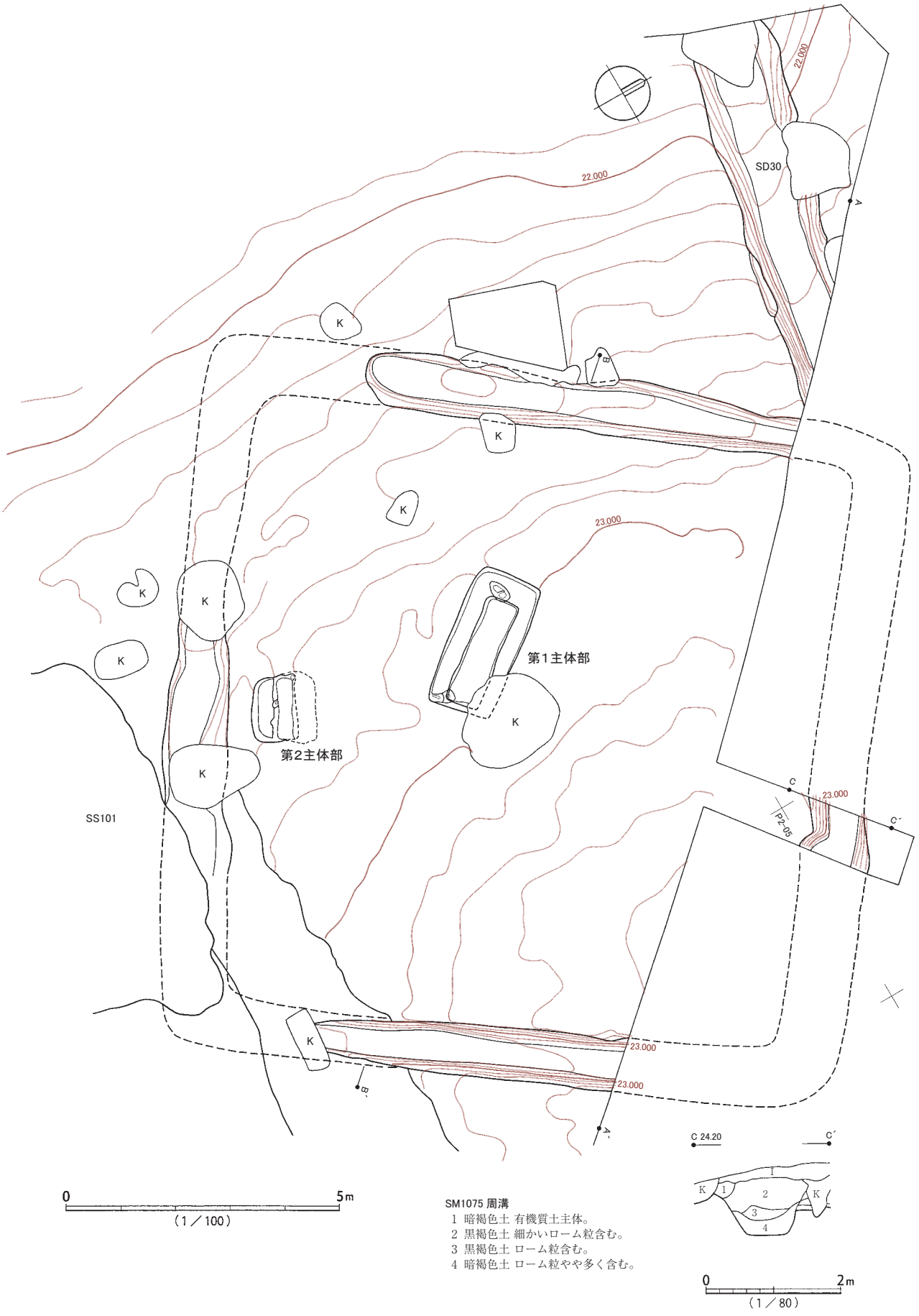
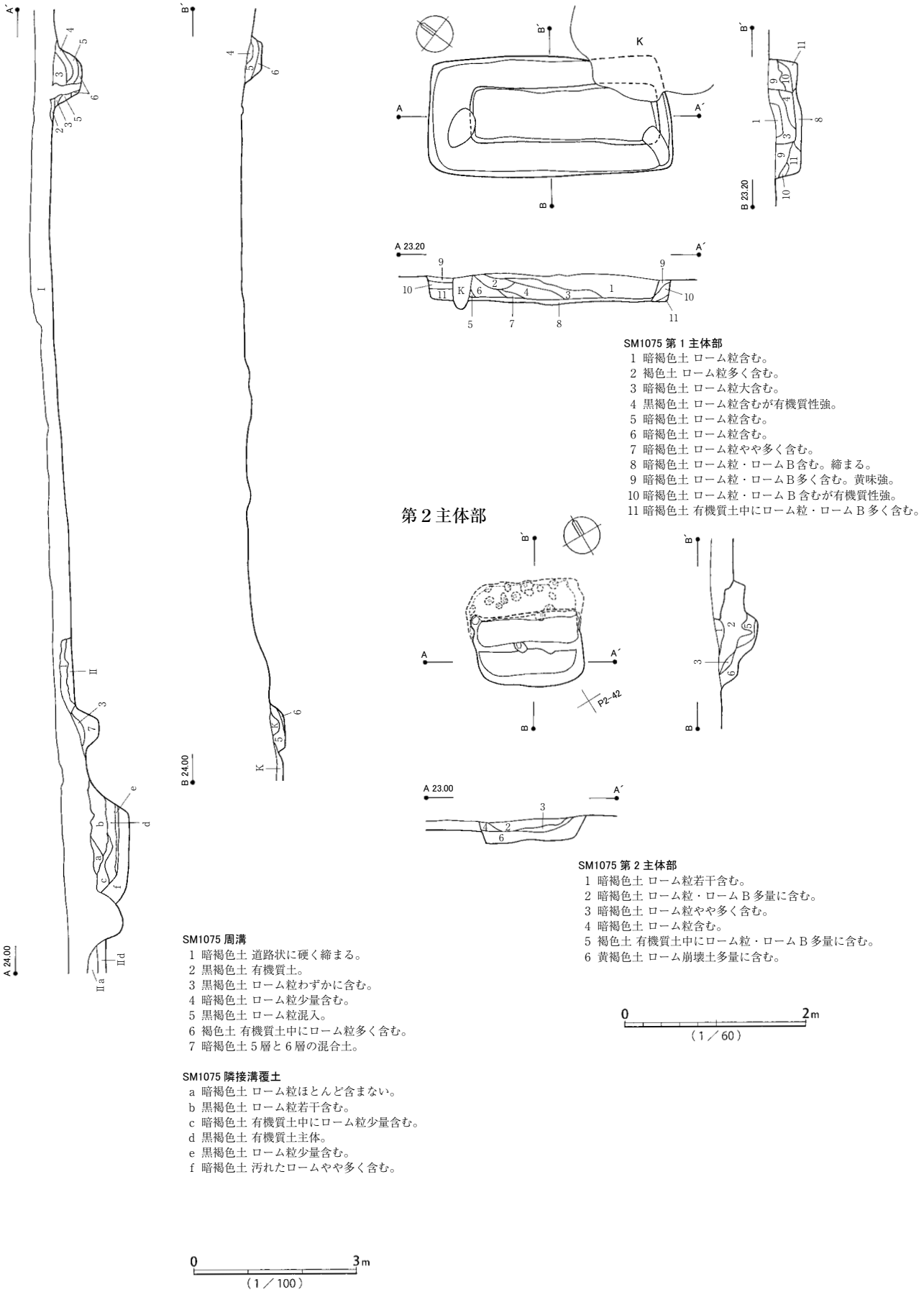


Fig.352　SM1075 遺構 (1)、SD30 遺構実測図



SM1075 周溝
1 暗褐色土 道路状に硬く締まる。
2 黒褐色土 有機質土。
3 黒褐色土 ローム粒わずかに含む。
4 暗褐色土 ローム粒少量含む。
5 黒褐色土 ローム粒混入。
6 褐色土 有機質土中にローム粒多く含む。
7 暗褐色土５層と６層の混合土。

SM1075 隣接溝覆土
a 暗褐色土 ローム粒ほとんど含まない。
b 黒褐色土 ローム粒若干含む。
c 暗褐色土 有機質土中にローム粒少量含む。
d 黒褐色土 有機質土主体。
e 黒褐色土 ローム粒少量含む。
f 暗褐色土 汚れたロームやや多く含む。

SM1075 第１主体部
1 暗褐色土 ローム粒含む。
2 褐色土 ローム粒多く含む。
3 暗褐色土 ローム粒大含む。
4 黒褐色土 ローム粒含むが有機質性強。
5 暗褐色土 ローム粒含む。
6 暗褐色土 ローム粒含む。
7 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
8 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。締まる。
9 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ多く含む。黄味強。
10 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含むが有機質性強。
11 暗褐色土 有機質土中にローム粒・ロームＢ多く含む。

SM1075 第２主体部
1 暗褐色土 ローム粒若干含む。
2 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ多量に含む。
3 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
4 暗褐色土 ローム粒含む。
5 褐色土 有機質土中にローム粒・ロームＢ多量に含む。
6 黄褐色土 ローム崩壊土多量に含む。

Fig.353　SM1075 遺構 (2) 実測図

第1主体部は、方台部中央に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.94m短径2.80m深さ1.02m、下端で長径2.38m短径2.36mを測り、主軸方位はN-82°-Wを示す。墓壙のほぼ中央から、通常より幅の広い箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.08m幅0.54m、下端で長さ1.98m幅0.50m深さ0.44mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-88°-E を示す。遺体が安置されたと想定される位置の墓壙底から、長さ1.10m幅20～30㎝に亘る変色範囲が検出されている。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、1点の鉄滓と3点の須恵器長頸壺、1点の土師器鉢が覆土一括で検出されている。5は内面が空洞化した鉄滓で、磁石に全く反応しない。1～4の土師器・須恵器は、8世紀前半代の年代観が想定される。

SM1078　TJ地区　（Fig.357、PL.172・190）

E-12・13グリッドに位置する。下層の竪穴と重複し、二隅は未検出であるが、整った形状から終末期方墳と判断される。旧遺構番号はTJ-14号遺構である。

墳丘と周溝

長径11.00m、短径10.36m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-23°-Wを示す。推定周溝内側面積は（114.1）㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第34位の規模である。確認面での周溝幅は、0.70～1.00m、深さは0.18～0.28mを測り、断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、2点の土師器と1点の弥生土器が覆土一括で検出されているが、時期的に本墳とは整合しない。下層に位置する竪穴住居跡に伴う遺物と判断される。

SM1079　TJ地区　（Fig.358、PL.126）

G-10グリッドに位置する。四隅が直角で、整った形状の終末期方墳である。旧遺構番号はTJ-11号遺構である。

墳丘と周溝

長径10.50m、短径10.50m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-2°-Wを示す。周溝内側面積は110.5㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第35位の規模である。確認面での周溝幅は、0.90～1.18m、深さは0.14～0.34mを測る。全体的に均整のとれた方形形状で、断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、遺物は全く検出されなかった。

SM1080　TJ地区　（Fig.359、PL.127）

D-13・14グリッドに位置する。四隅が直角で、整った形状の終末期方墳である。旧遺構番号はTJ-10

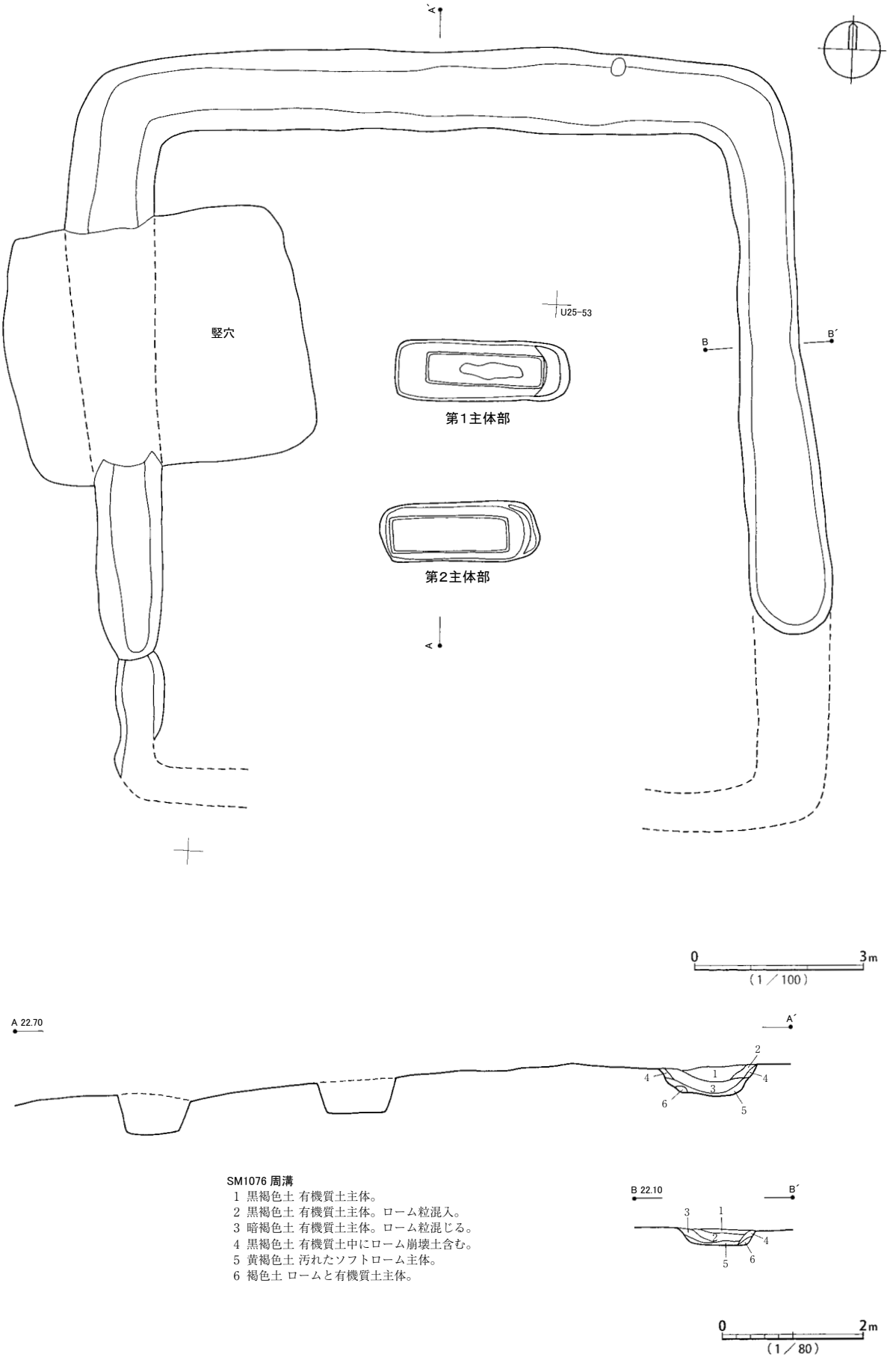
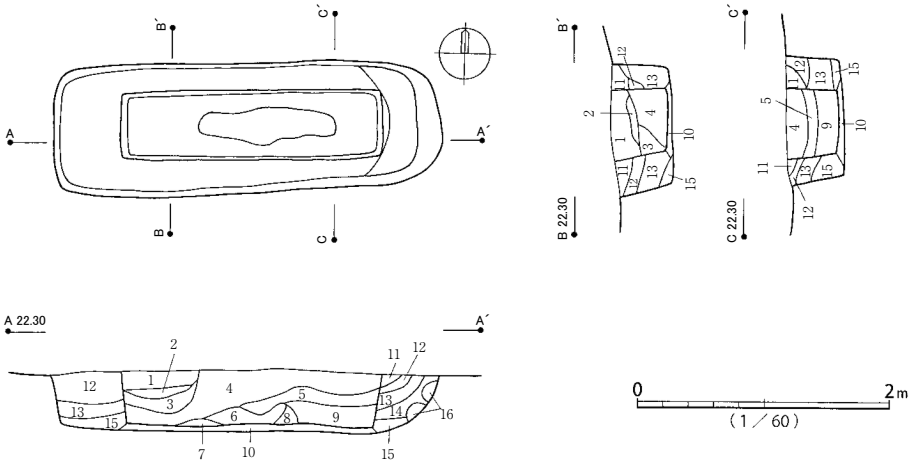


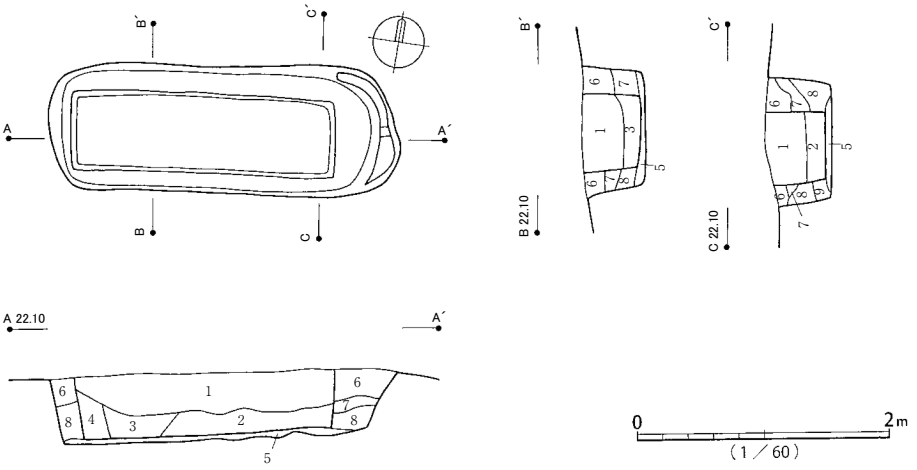
Fig.354　SM1076 遺構 (1) 実測図

第１主体部



SM1076 第１主体部
1 暗褐色土 有機質土中にローム粒若干混じる。
2 暗褐色土 有機質土中にローム粒やや多く含む。
3 黒褐色土 有機質土主体。
4 黒褐色土 有機質土主体。ローム粒若干含む。
5 黒褐色土 有機質土主体。ローム粒少量含む。
6 黒褐色土 ローム粒若干含む。
7 暗褐色土 ローム粒少量含む。
8 黄褐色土 ロームＢ。
9 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
10 暗褐色土 ローム粒やや多く含み、締まる。
11 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
12 黄褐色土 ローム粒・ロームＢ主体。
13 褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
14 暗褐色土 有機質土中にローム粒・ロームＢやや多く含む。
15 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
16 黒褐色土 ローム粒若干含む。

第２主体部



SM1076 第２主体部
1 暗褐色土 ローム粒混入。
2 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
3 黒褐色土 ローム粒・ロームＢ混入。
4 暗褐色土 ローム粒・ロームＢやや多く含む。
5 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。締まる。
6 暗褐色土 ローム粒・ロームＢやや多く含む。
7 暗褐色土 有機質土主体。ローム粒散る。
8 褐色土 ローム粒主体。
9 黒褐色土 有機質土中にローム粒・ロームＢ散る。

Fig.355　SM1076 遺構 (2) 実測図

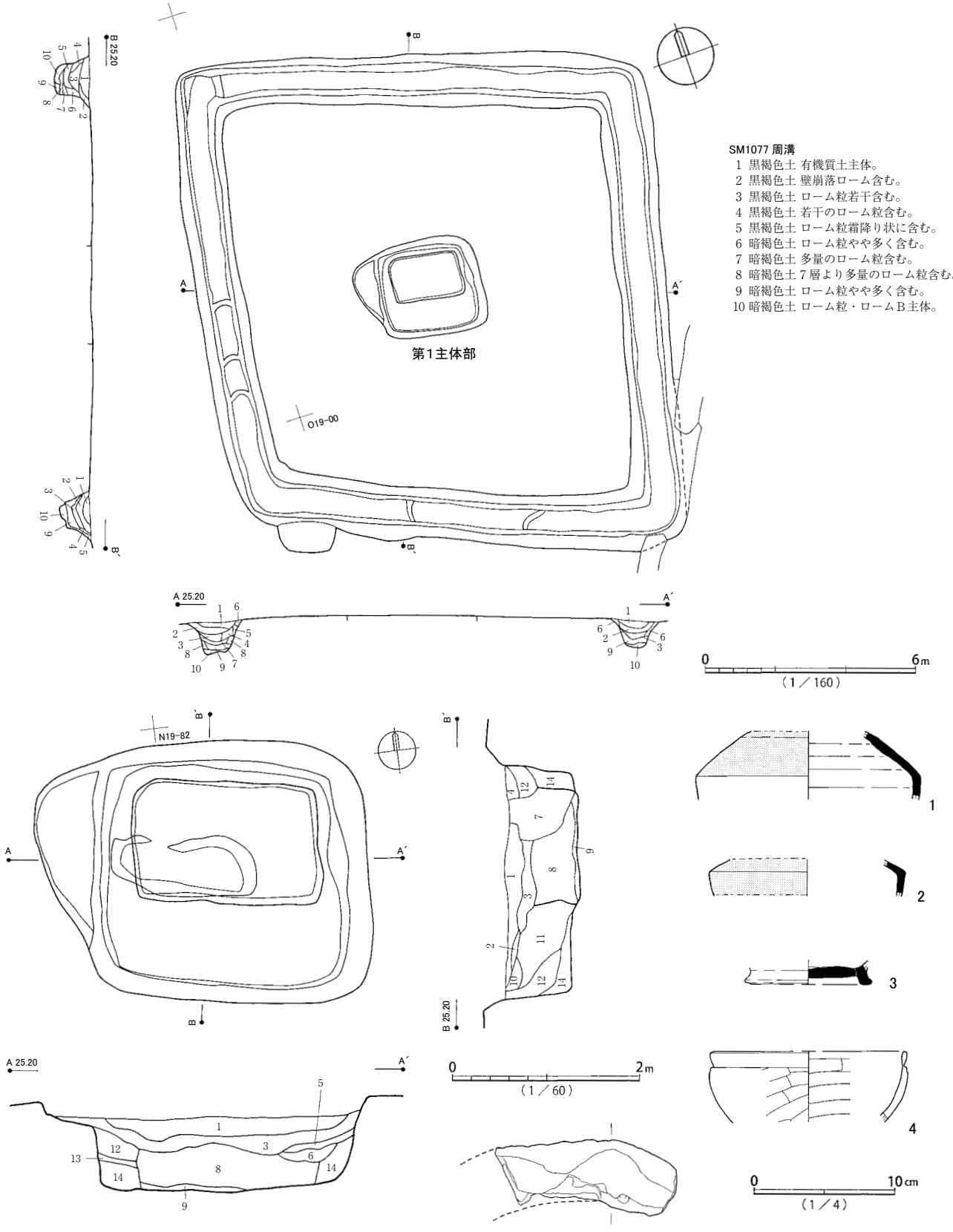


Fig.356　SM1077 遺構・遺物実測図

号遺構である。

墳丘と周溝

長径10.40m、短径10.16m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-8°-Wを示す。周溝内側面積は105.6㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第36位の規模である。確認面での周溝幅は、1.22～1.34m、深さは0.42～0.60mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、遺物は全く検出されなかった。

SM1081　セ54地区　（Fig.360、PL.127・172・190）

T-19・20グリッドに位置する。四隅が直角で整った形状の終末期方墳である。旧遺構番号はセ54-18号遺構である。

墳丘と周溝

長径10.30m、短径10.18m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-10°-Wを示す。周溝内側面積は104.7㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第37位の規模である。確認面での周溝幅は、1.06～1.38m、深さは0.50～0.60mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央やや東側に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央やや東側に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.54m短径1.06m深さ0.78m、下端で長径2.42m短径0.98mを測り、主軸方位はN-82°-Eを示す。墓壙のほぼ中央に、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ1.76m幅0.66m、下端で長さ1.66m幅0.52m深さ0.58mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-82°-E を示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、土師器高坏と須恵器壷類の類が覆土一括で検出されている。器形が判明する土師器高坏は、7世紀末葉～8世紀初頭の年代観を想定できる。

SM1082　SW83地区　（Fig.361、PL.127・204）

U-26・27グリッドに位置する。四隅が直角で整った形状の終末期方墳である。旧遺構番号はSW83-K18号遺構である。

墳丘と周溝

長径10.88m、短径9.50m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-7°-Eを示す。周溝内側面積は104.3㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第38位の規模である。確認面での周溝幅は、0.76～1.16m、深さは0.34～0.60mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

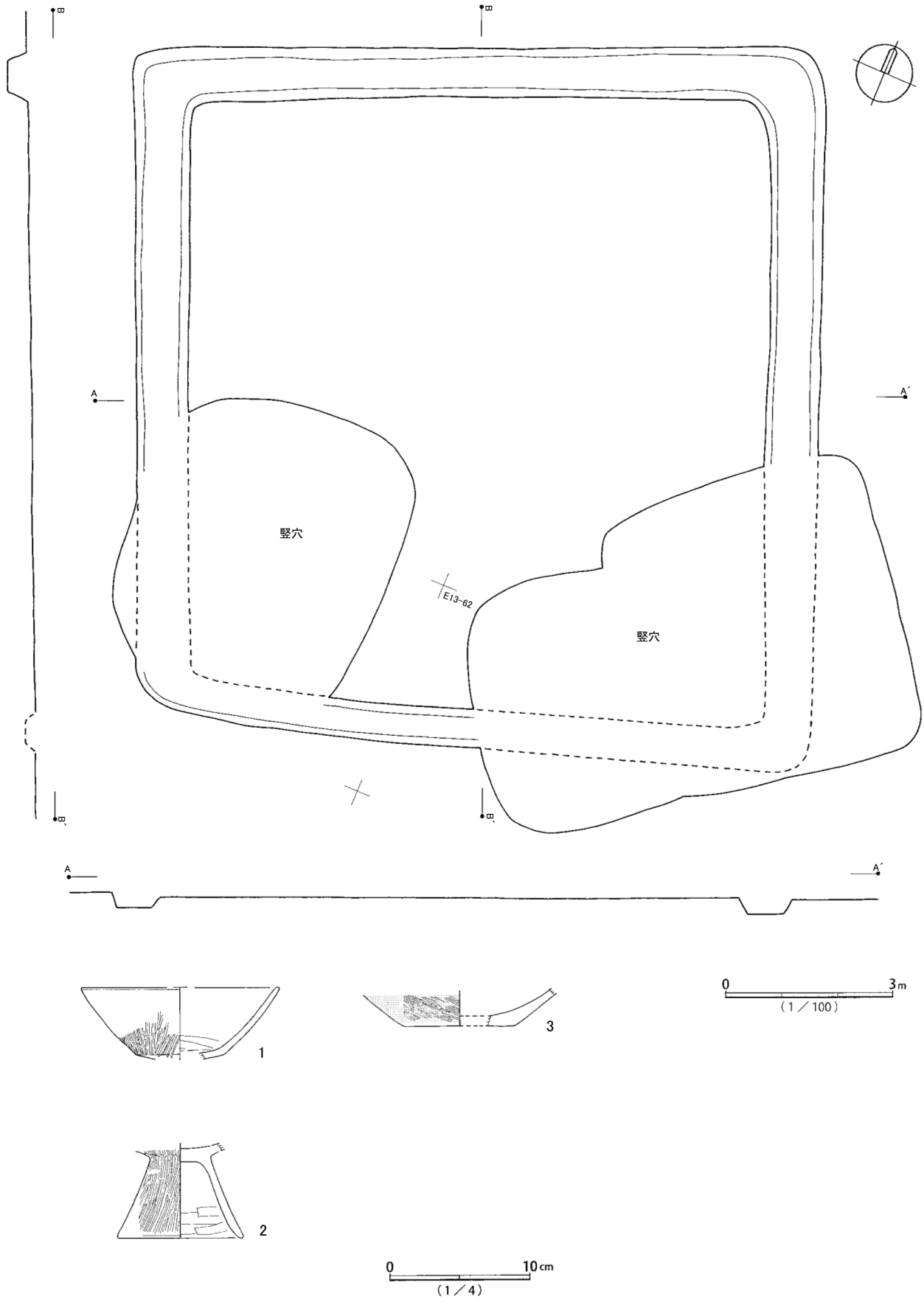


Fig.357　SM1078 遺構・遺物実測図

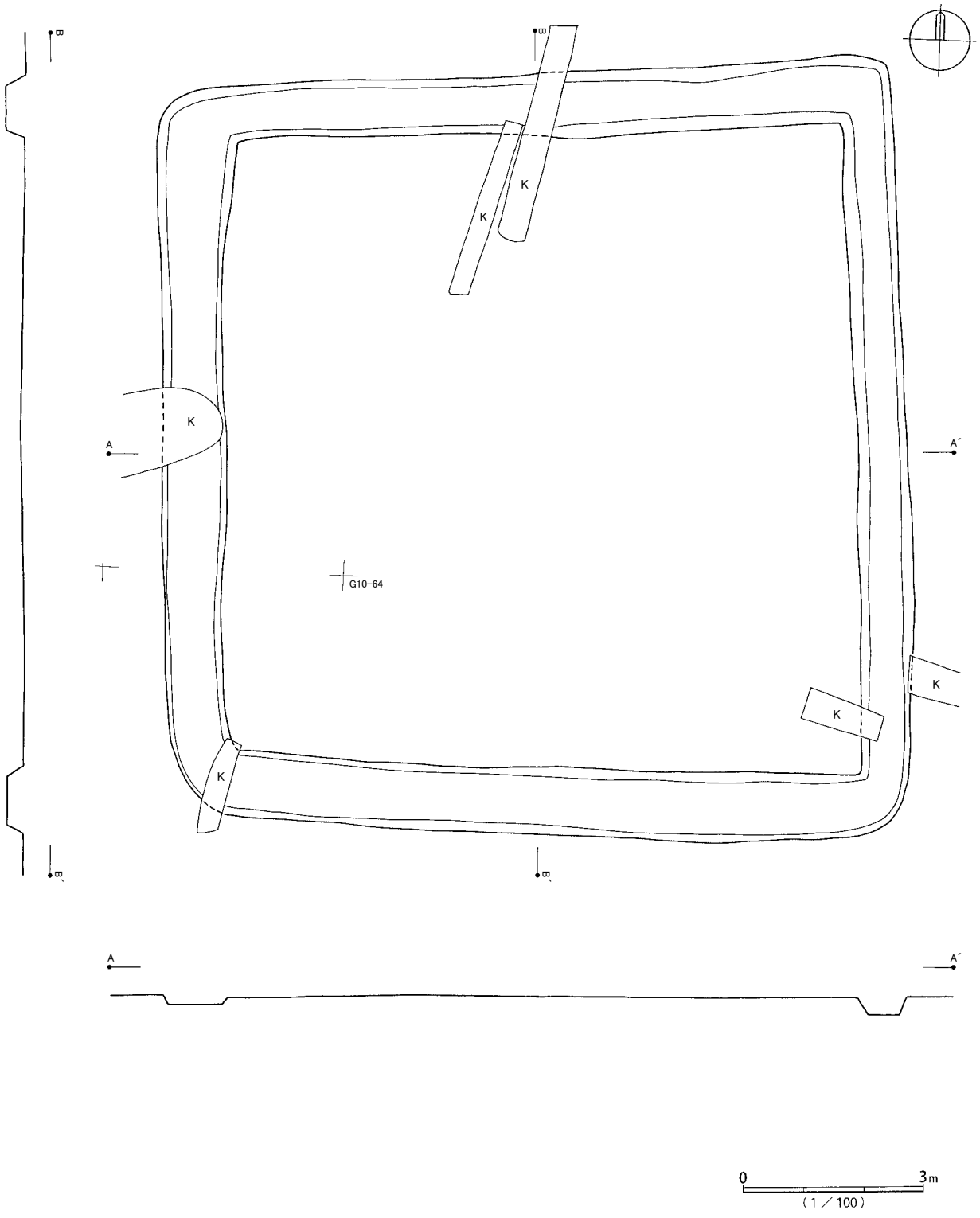


Fig.358　SM1079 遺構実測図

埋葬施設

方台部内中央やや西側に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央やや西側に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.16m短径0.80m深さ1.16m、下端で長径1.94m短径0.74mを測り、主軸方位はN-74°-Wを示す。墓壙の西側に接して、墓壙幅とほぼ同サイズの木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ1.80m幅0.80m、下端で長さ1.74m幅0.74m深さ1.00mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-74°-W を示す。

墓壙・木棺内の東側からは、墓壙底から6㎝浮いた状態で1-1の鉄釘が検出されている。

出土遺物

本墳埋葬施設からは、1点の木質が付着した鉄釘が検出されている。鉄釘に付着する木質の柾目と板目から、木棺に打ち込まれた鉄釘と判断される。

SM1083　099地区　(Fig.362～363、PL.127～128・190)

H・I-14グリッドに位置する。埋葬施設に地下式小型横穴を採用する終末期方墳（律令制墳墓）である。旧遺構番号は099-4016号遺構である。

墳丘と周溝

長径10.24m、短径9.94m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-6°-Wを示す。周溝内側面積は104.1㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳系では第39位の規模である。確認面での周溝幅は、0.68～1.04m、深さは0.64～0.90mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内やや東側に1基検出されている。

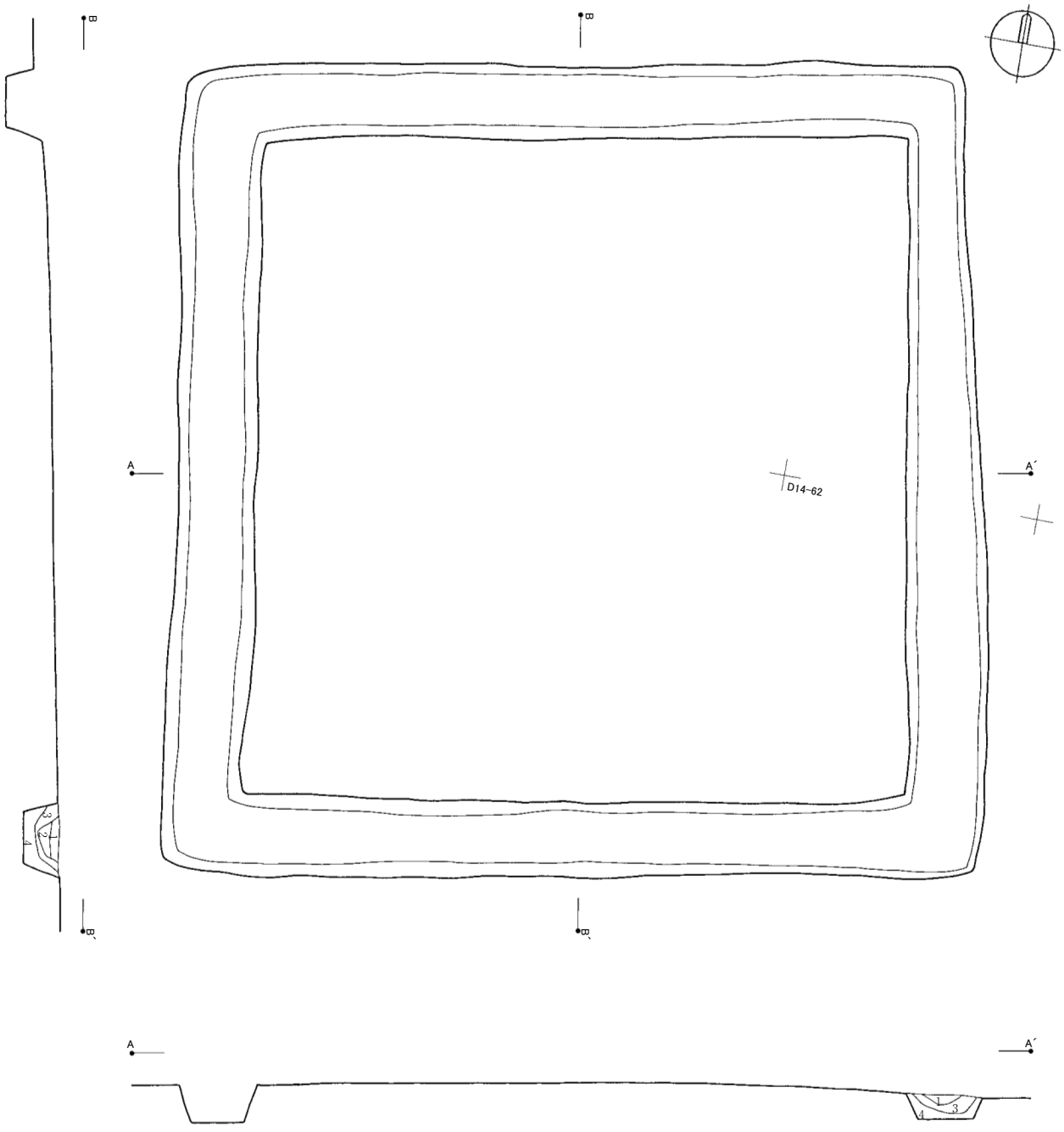
第1主体部

埋葬施設は、玄室を中央南東側に置く地下式小型横穴墓である。羨道部は南側周溝に接して構築されており、長径2.90m短径1.06から1.36mを測り、8段の階段状を呈して前庭部へと下っていく。階段の高さは1段目4㎝、2段目6㎝、3段目26㎝、4段目28㎝、5段目30㎝、6段目18㎝、7段目18㎝、8段目55㎝を測る。最下段の8段目は、玄室への前庭部であり、玄室底面からは26㎝低い位置に構築されている。

玄室に至る玄門部は、幅0.72m高さ0.56m奥行き0.30mに亘って開口しており、周囲より丁寧に一段深く掘り窪まれている。おそらく閉塞板が存在していたのだろう。羨道部と玄室間の閉塞板が存在したと想定される範囲は、調査時には空洞化していたことが写真からも読み取ることができる。土層断面におけるトーンは、この空洞範囲を表したものである。

玄室規模は、長径1.00m短径0.88m高さ0.32mを測り、主軸方位はN-85°を示している。玄室のほぼ中央には、計画的に改葬された1個体の人骨が検出されており、玄室規模から見て、予め殯屋的な場所で骨化させた遺体を、改めて玄室内に改葬したものと判断される。

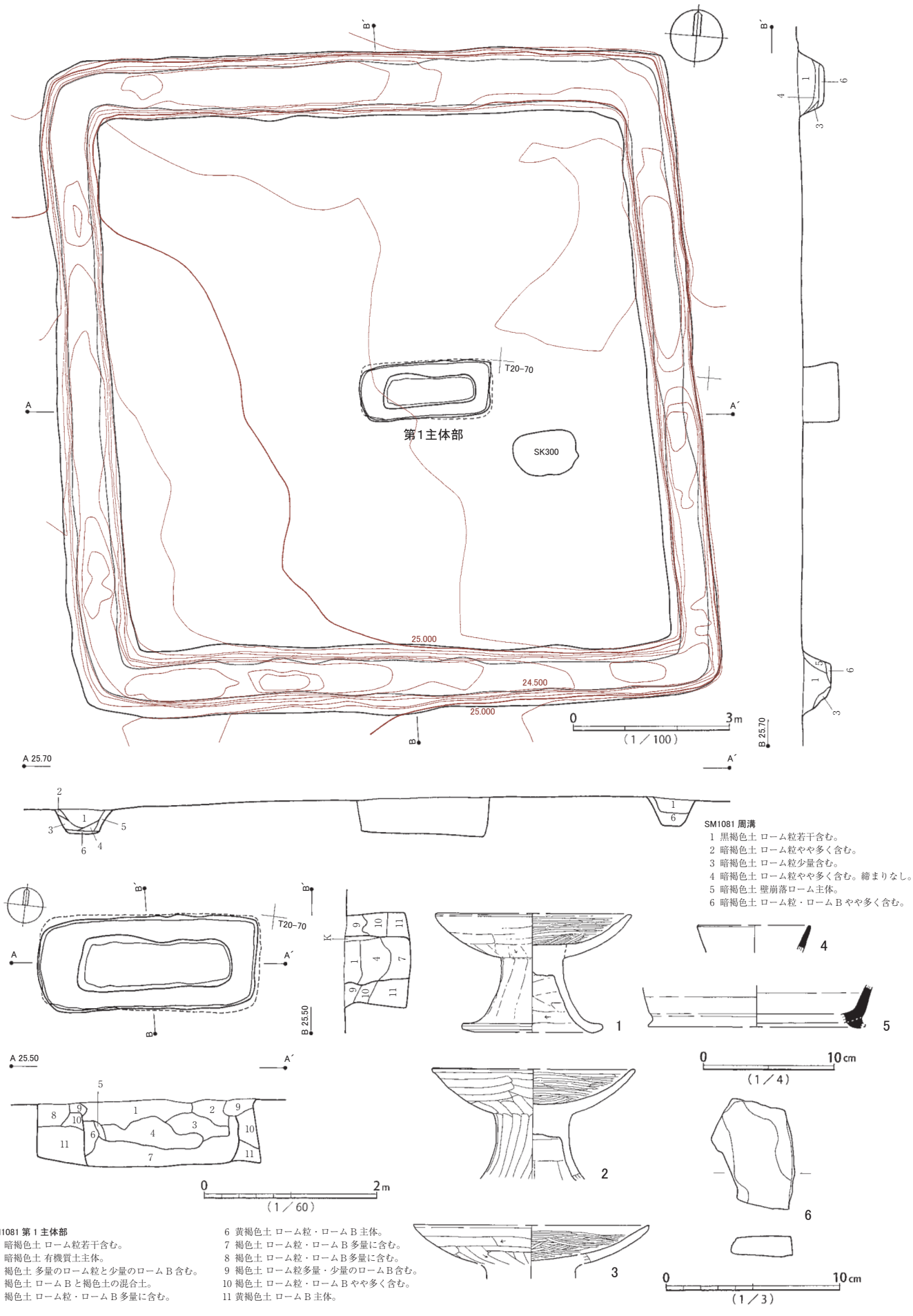
頭蓋骨と下顎骨の出土位置に留意すると、頭蓋骨は下顎骨を伴って、当初改葬骨の頂点に据え置かれていたと想定され、後に現位置に転落してきたものと判断される。なお、検出された人骨は、大腿



SM1080 周溝
1 黒褐色土 ローム粒混入。
2 褐色土 ローム粒・ロームＢ多量に含む。
3 黒褐色土 ローム粒少量含む。
4 褐色土 大粒のローム粒やや多く含む。

0 3m
（1／100）

Fig.359　SM1080 遺構実測図



SM1081 周溝
1 黒褐色土 ローム粒若干含む。
2 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
3 暗褐色土 ローム粒少量含む。
4 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。締まりなし。
5 暗褐色土 壁崩落ローム主体。
6 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。

SM1081 第 1 主体部
1 暗褐色土 ローム粒若干含む。
2 暗褐色土 有機質土主体。
3 褐色土 多量のローム粒と少量のローム B 含む。
4 褐色土 ローム B と褐色土の混合土。
5 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
6 黄褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
7 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
8 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
9 褐色土 ローム粒多量・少量のローム B 含む。
10 褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
11 黄褐色土 ローム B 主体。

Fig.360　SM1081 遺構・遺物実測図

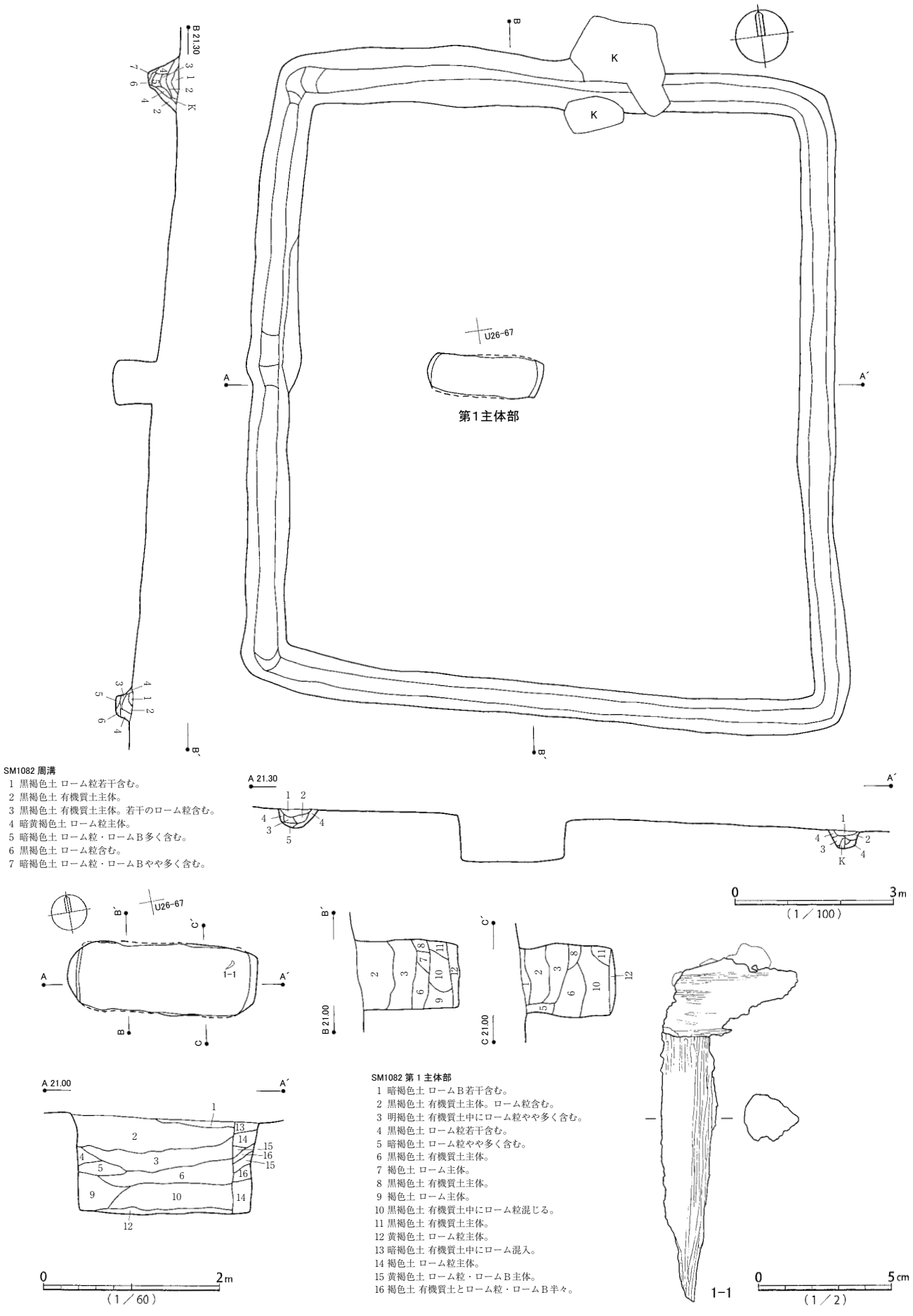


Fig.361　SM1082 遺構・遺物実測図

骨等の足骨両外側にして整然と据え置かれており、乱れも少ない。そのため埋葬時には木櫃等の外容器に収められていた可能性が高いと判断される。

人骨鑑定によれば、本墳に改葬された人物は、年齢50歳以上、身長158.2㎝前後の短顔の男性であるとの所見である。

出土遺物

本墳周溝内からは、2点の弥生土器が覆土一括で検出されている。本墳とは時期的に整合しないため、下層に位置する竪穴住居跡に伴う遺物と判断される。

SM1084　セ54地区　（Fig.364、PL.128・190）

R・S-18・19グリッドに位置する。四隅が直角で整った形状の終末期方墳である。旧遺構番号はセ54-6号遺構である。

墳丘と周溝

長径10.46m、短径9.84m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-28°-Wを示す。周溝内側面積は102.9㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第40位の規模である。確認面での周溝幅は、1.52～1.86m、深さは0.42～0.56mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径3.02m短径1.52m深さ0.34m、下端で長径2.76m短径1.38mを測り、主軸方位はN-77°-Eを示す。墓壙の中央に墓壙規模に対して小型な箱型の木棺痕が検出された。小児ないしは火葬を含む改葬骨を収めた木棺なのであろうか。木棺規模は、上端で長さ1.20m幅0.58m、下端で長さ1.06m幅0.50m深さ0.22mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-78°-E を示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、2点の須恵器甕片が覆土一括で検出されたに過ぎない。

SM1085　セ54地区　（Fig.365、PL.129）

V・W-18・19グリッドに位置する。下層に位置するSS76を削平する、四隅が直角で整った形状の終末期方墳である。旧遺構番号はセ54-29号遺構である。

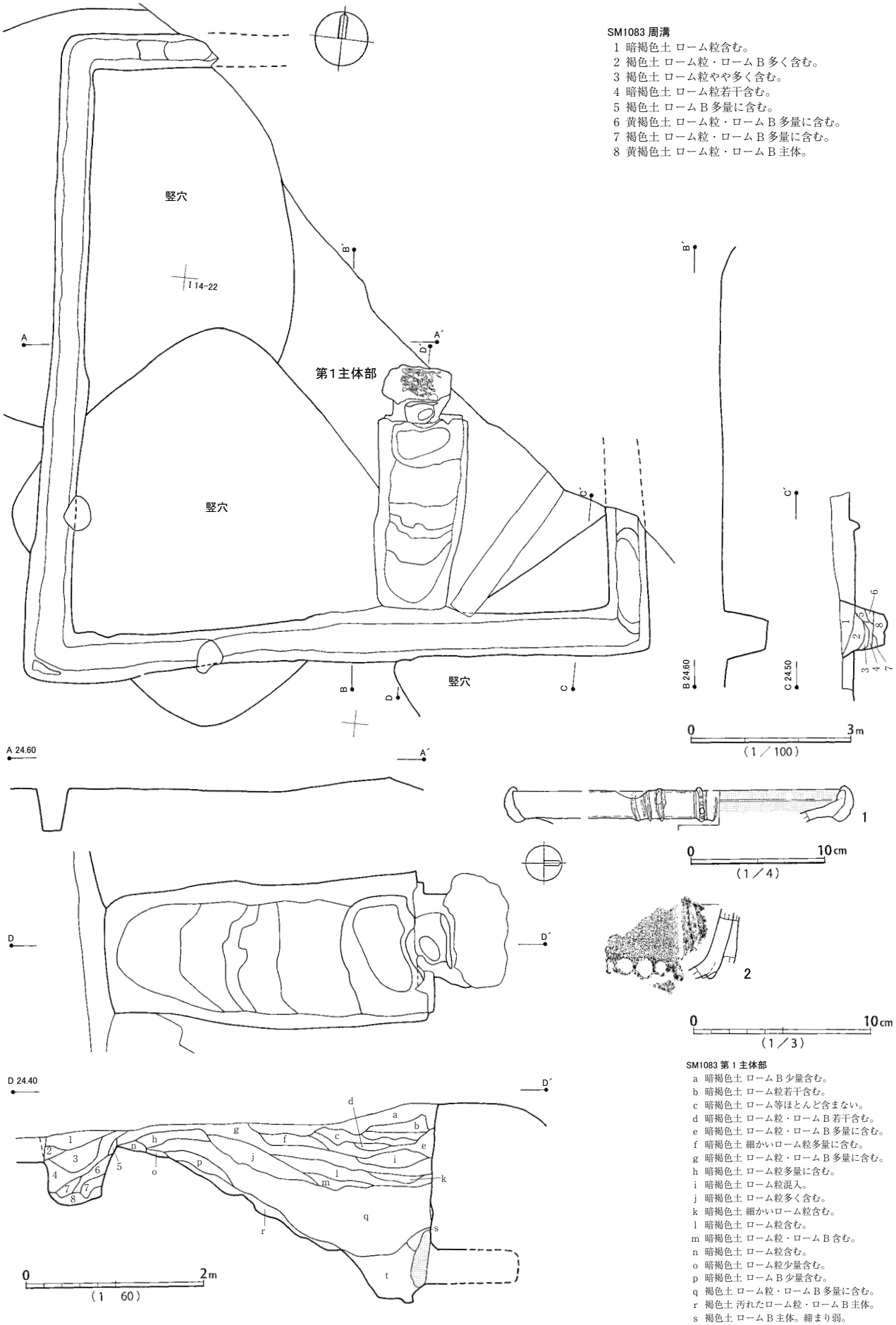
墳丘と周溝

長径9.98m、短径9.94m、現状での盛土の高さは0.40mを測り、主軸方位はN-11.5°-Wを示す。周溝内側面積は98.9㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第41位の規模である。確認面での周溝幅は、1.38～1.78m、深さは0.36～0.64m、土層断面の最深部では0.98mを測る。全体的に均整のとれた方形形状で、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央やや東寄りに1基検出されている。

第1主体部



SM1083 周溝
1 暗褐色土 ローム粒含む。
2 褐色土 ローム粒・ローム B 多く含む。
3 褐色土 ローム粒やや多く含む。
4 暗褐色土 ローム粒若干含む。
5 褐色土 ローム B 多量に含む。
6 黄褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
7 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
8 黄褐色土 ローム粒・ローム B 主体。

SM1083 第 1 主体部
a 暗褐色土 ローム B 少量含む。
b 暗褐色土 ローム粒若干含む。
c 暗褐色土 ローム等ほとんど含まない。
d 暗褐色土 ローム粒・ローム B 若干含む。
e 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
f 暗褐色土 細かいローム粒多量に含む。
g 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
h 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
i 暗褐色土 ローム粒混入。
j 暗褐色土 ローム粒多く含む。
k 暗褐色土 細かいローム粒含む。
l 暗褐色土 ローム粒含む。
m 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
n 暗褐色土 ローム粒含む。
o 暗褐色土 ローム粒少量含む。
p 暗褐色土 ローム B 少量含む。
q 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
r 褐色土 汚れたローム粒・ローム B 主体。
s 褐色土 ローム B 主体。締まり弱。
t 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。

Fig.362　SM1083 遺構・遺物実測図

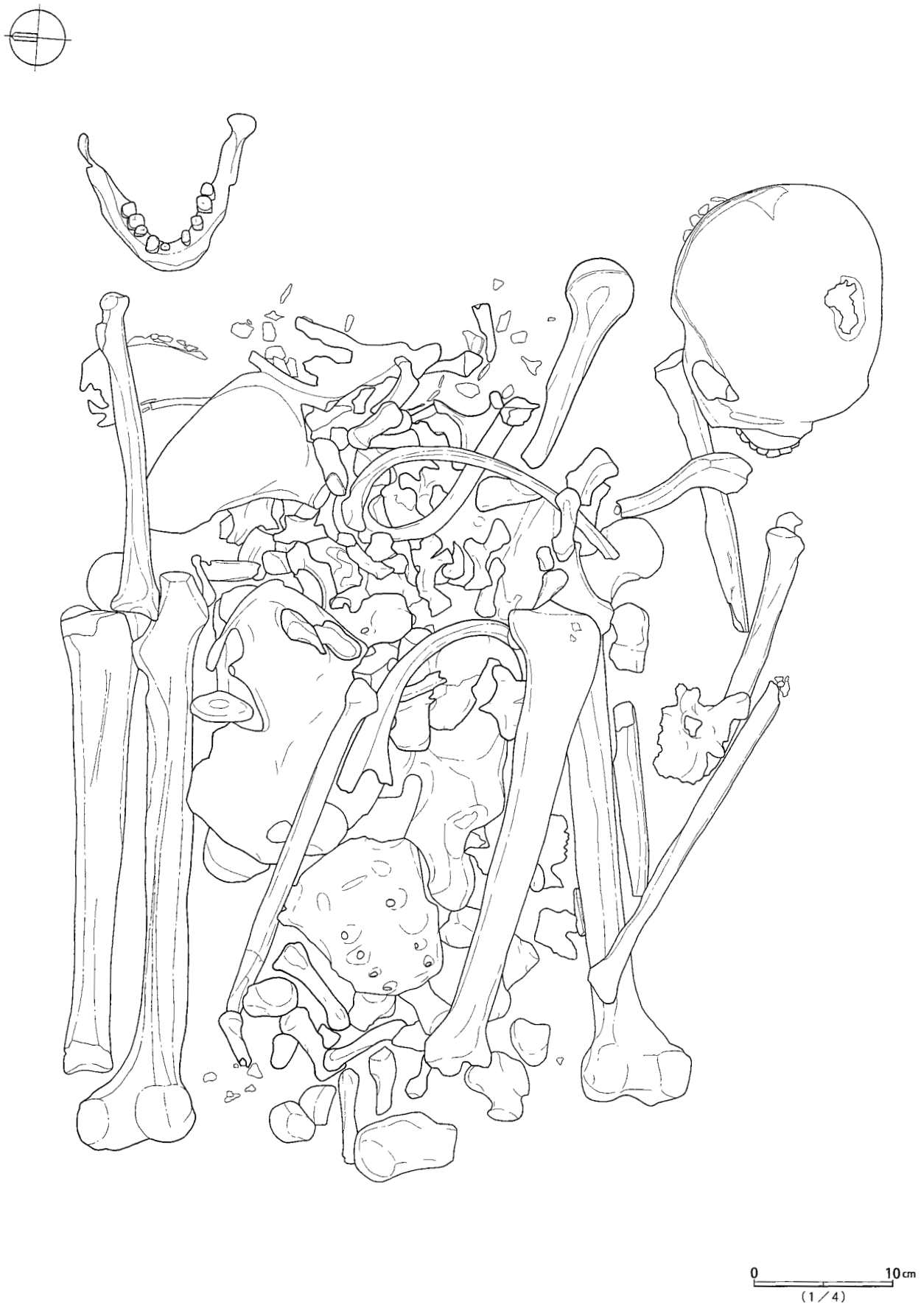


Fig.363　SM1083 人骨出土詳細実測図

埋葬施設は、方台部中央やや東寄りに検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.98m短径1.84m深さ0.92m、下端で長径2.64m短径1.56mを測り、主軸方位はN-12.5°-Wを示す。墓壙の中央に、幅広な箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.12m幅1.06m、下端で長さ1.96m幅0.92m深さ0.48mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-13°-W を示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、遺物は全く検出されなかった。

SM1086　TJ地区　（Fig.366、PL.129・190）

H-8グリッドに位置する。四隅が直角で、整った形状の終末期方墳である。旧遺構番号はTJ-13号遺構である。

墳丘と周溝

長径9.82m、短径9.74m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-17.5°-Wを示す。周溝内側面積は95.1㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第42位の規模である。確認面での周溝幅は、1.14～1.34m、深さは0.36～0.58mを測る。全体的に均整のとれた方形形状で、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、3点の弥生土器片が覆土一括で検出されている。時期的には本墳とは整合しない。下層に位置する竪穴住居跡等に伴う遺物と判断される。

SM1087　SW83地区　（Fig.367～368、PL.129・190・204）

U・V-21・22グリッドに位置する。北側周溝はSM1108の南側周溝と接して検出されている。南緩斜面に位置することから、南側周溝は流出していたが、四隅が直角で整った形状の終末期方墳と想定される。旧遺構番号はSW83-K9号遺構である。

墳丘と周溝

南側周溝は検出されなかったが、残存長径10.16m、短径9.46m、現状での盛土高さは0.12mを測り、主軸方位はN-31°-Wを示す。残存する周溝内側面積は95.0㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第43位の規模である。確認面での周溝幅は、1.02～1.46m、深さは0.28～0.48m、土層断面図上では0.58～0.66mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央やや北側に、4基纏って検出されている。

第1主体部

第1主体部は、方台部中央北側に検出された土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.22m短径0.90m深さ0.47m、下端で長径1.60m短径0.56mを測り、主軸方位はN-80°-Eを示す。土層断面によれば、南北に連なる墓壙の中では最も新しい。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

第2主体部

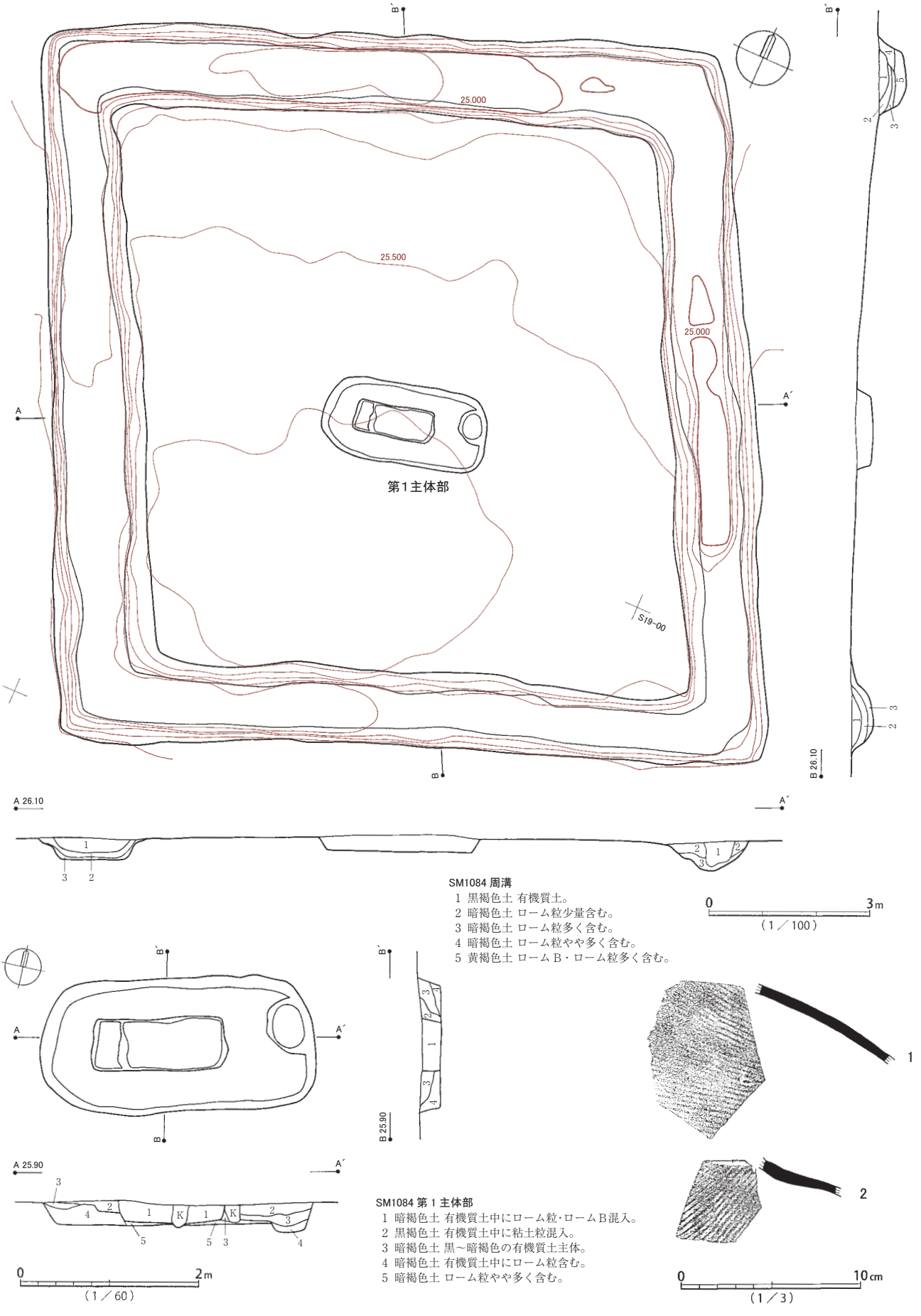


Fig.364　SM1084 遺構・遺物実測図

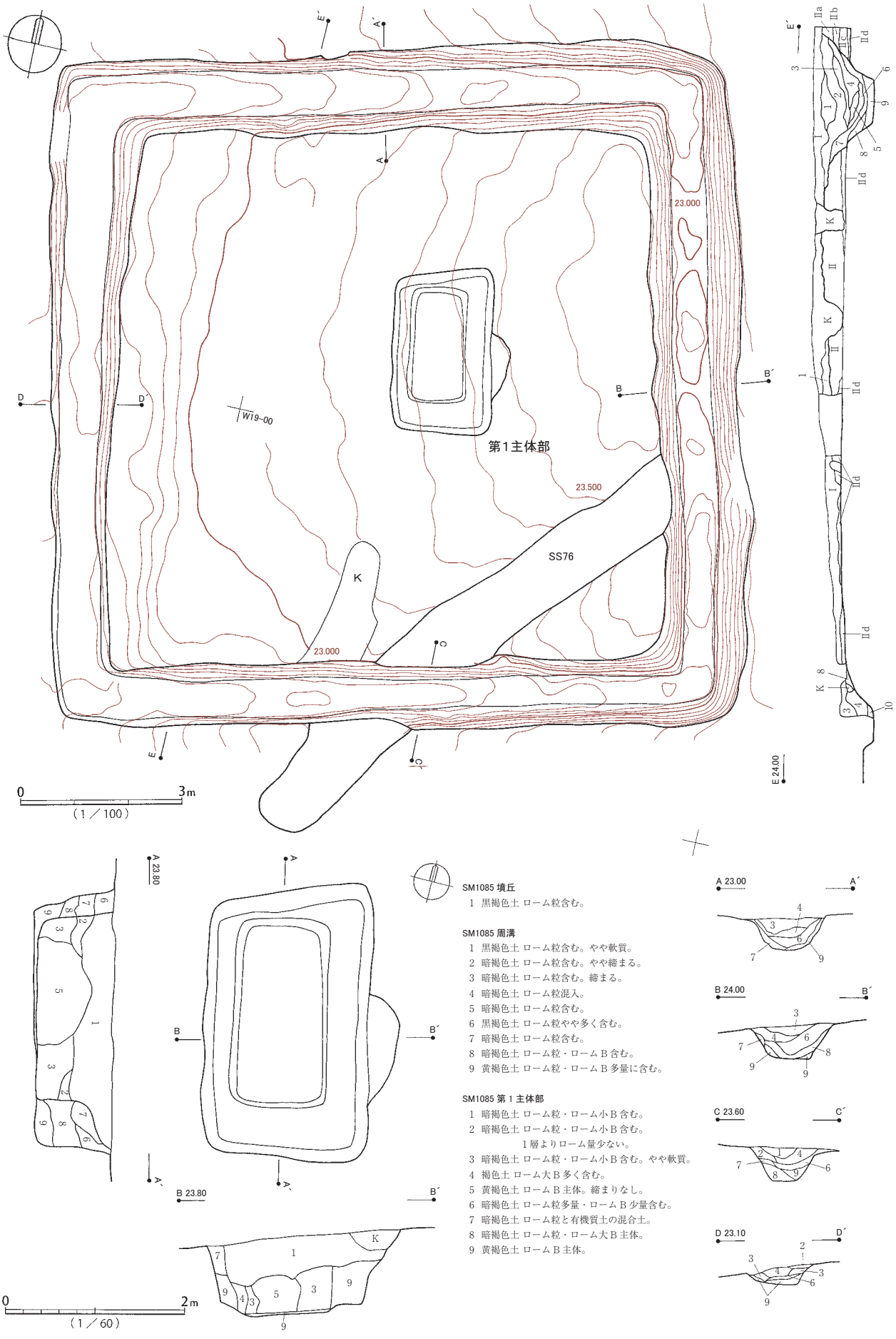


Fig.365　SM1085 遺構実測図

第2主体部は、南北に連なる3連の埋葬施設の中央から検出された土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.46m短径0.80m深さ0.54m、下端で長径2.30m短径0.72mを測り、主軸方位はN-84°-Eを示す。土層断面によれば、南北に連なる墓壙の中では2番目に新しい。墓壙内中央の底部には、周囲とは異なる淡い赤色に変化した変色範囲が、長さ0.80m幅0.16～0.46mに亘って検出されている。

墓壙内底面から3㎝浮いた状況では、2-1の刀子が検出されている。

第3主体部

第3主体部は、南北に連なる3連の埋葬施設の南側から検出された土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径3.02m短径1.04m深さ0.74m、下端で長径2.56m短径0.72mを測り、主軸方位はN-83°-Eを示す。土層断面によれば、南北に連なる墓壙の中では最も古い。墓壙内東側の底部には、周囲とは異なる淡い赤色に変化した変色範囲が、長さ1.00m幅0.12～0.42mに亘って検出されている。

墓壙内底面から4㎝浮いた状況では、3-1の刀子が検出されている。

第4主体部

第4主体部は、第1主体部の西側に、東側を削平されて検出された土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径1.76m短径0.80m深さ0.42m、下端で長径1.58m短径0.66mを測り、主軸方位はN-57°-Eを示す。土層断面によれば、第1主体部よりも古い。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、1の土師器甕、2の灰釉長頸壺が検出されている。これらの遺物が示す年代観は、8世紀中葉をやや下った、760～70年代が想定される。

SM1088　セ54地区　（Fig.369、PL.129）

V-21グリッドに位置する。下層に位置するSS79を削平して存在する。遺構の南側には溝が走り、残存する形状から、本来は隅が直角で整った形状の終末期方墳と想定される。旧遺構番号はセ54-27号遺構である。

墳丘と周溝

下層に位置するSS79号方形周溝墓の東溝を削平していないと想定されることから、推定長径（9.66）m、短径9.65mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-11°-Wを示す。方台部の埋葬施設の位置から求めた推定周溝内側面積は（94.6）㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第44位の規模である。確認面での周溝幅は、0.86～1.30m、深さは0.40～0.84mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

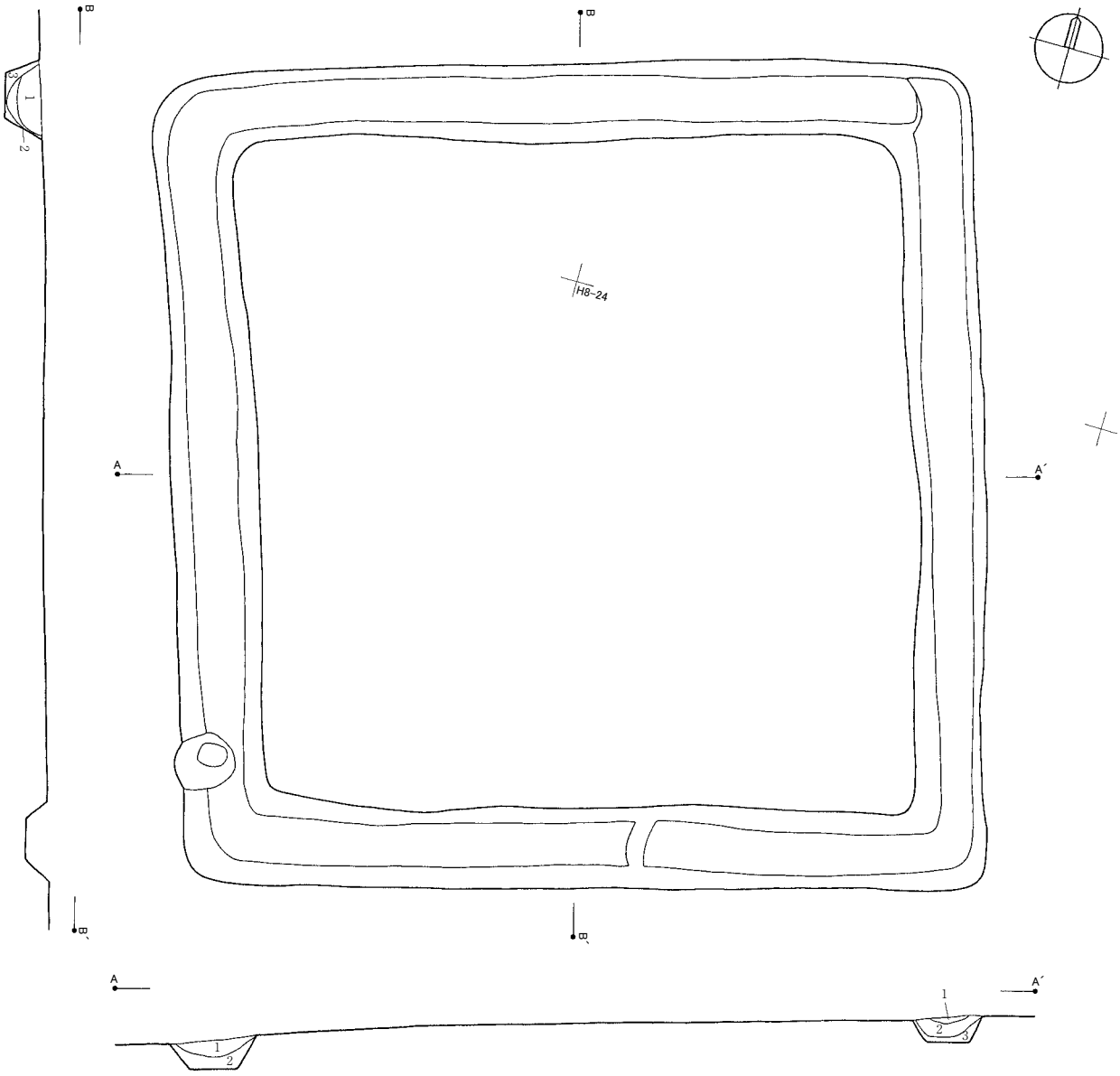
埋葬施設

方台部内中央やや南側に1基検出されている。

第1主体部

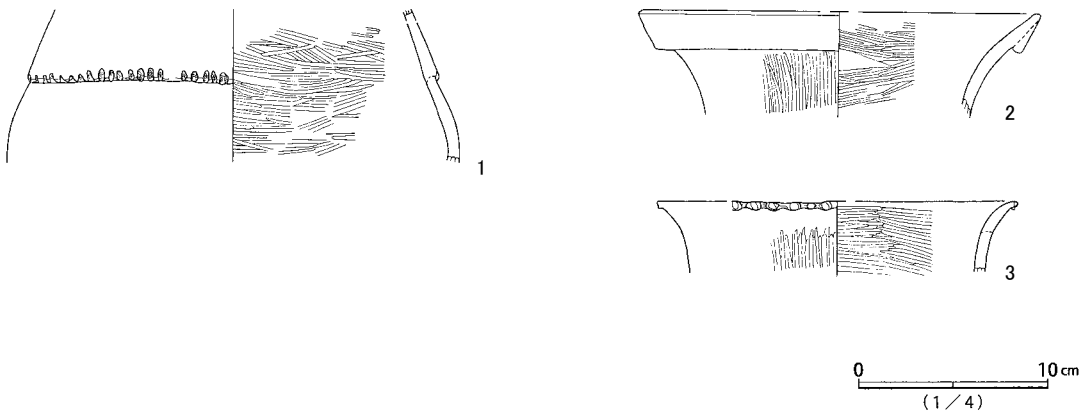
埋葬施設は、方台部中央やや南側に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.44m短径1.00m深さ0.56m、下端で長径2.34m短径0.96mを測り、主軸方位はN-86°-Eを示す。墓壙の中央に幅広な箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ1.68m幅0.50m、下端で長さ1.54m幅0.48m深さ0.56mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-85°-E を示す。

墓壙・木棺内からは、棺底から27㎝浮いた状態で2点の刀子が検出されているが、遺物は現在行方不



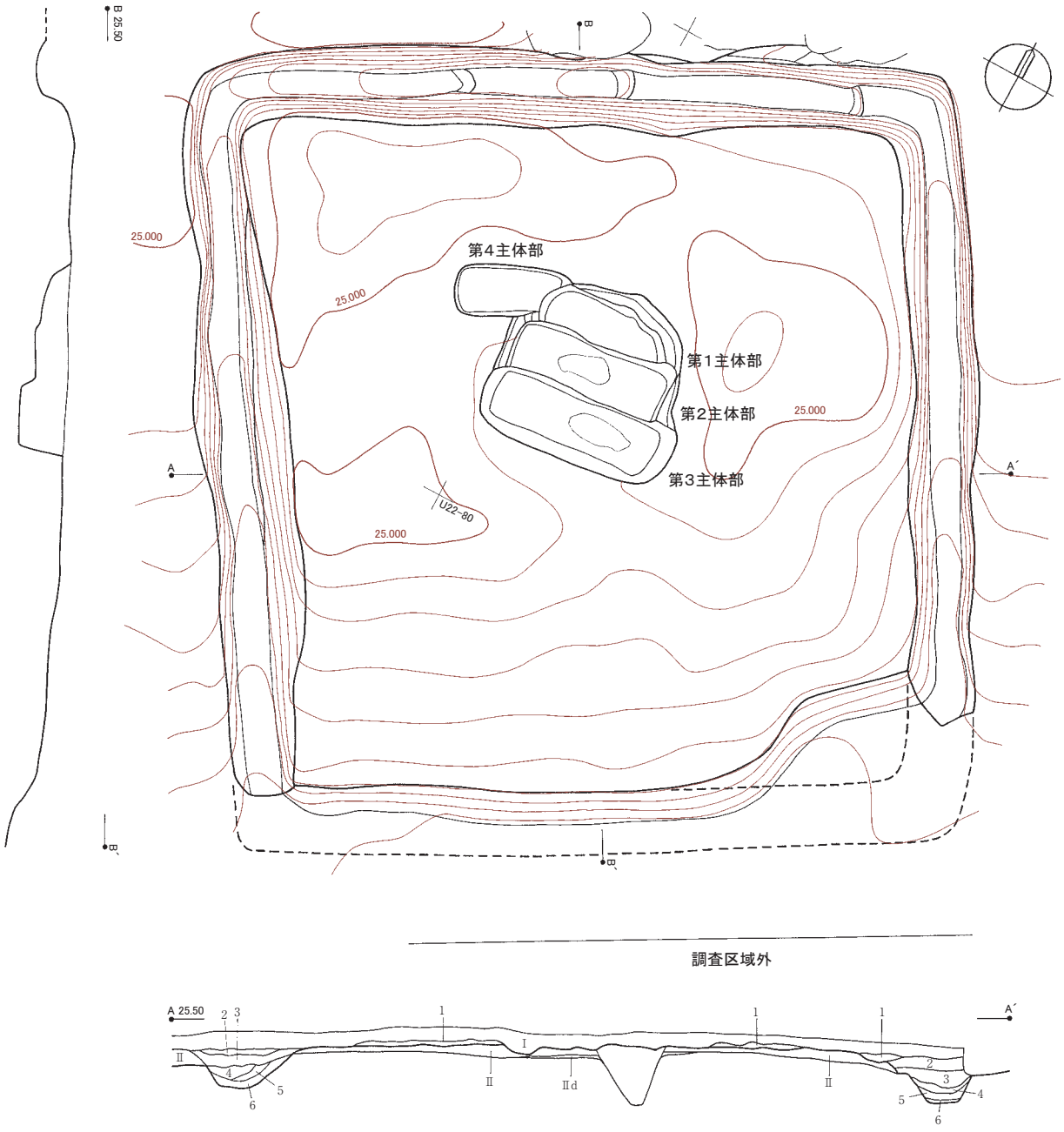
SM1086 周溝
1 黒褐色土 有機質土主体。
2 黒褐色土 ローム粒若干含む。
3 黄褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。

0 3m
（1／100）



0 10cm
（1／4）

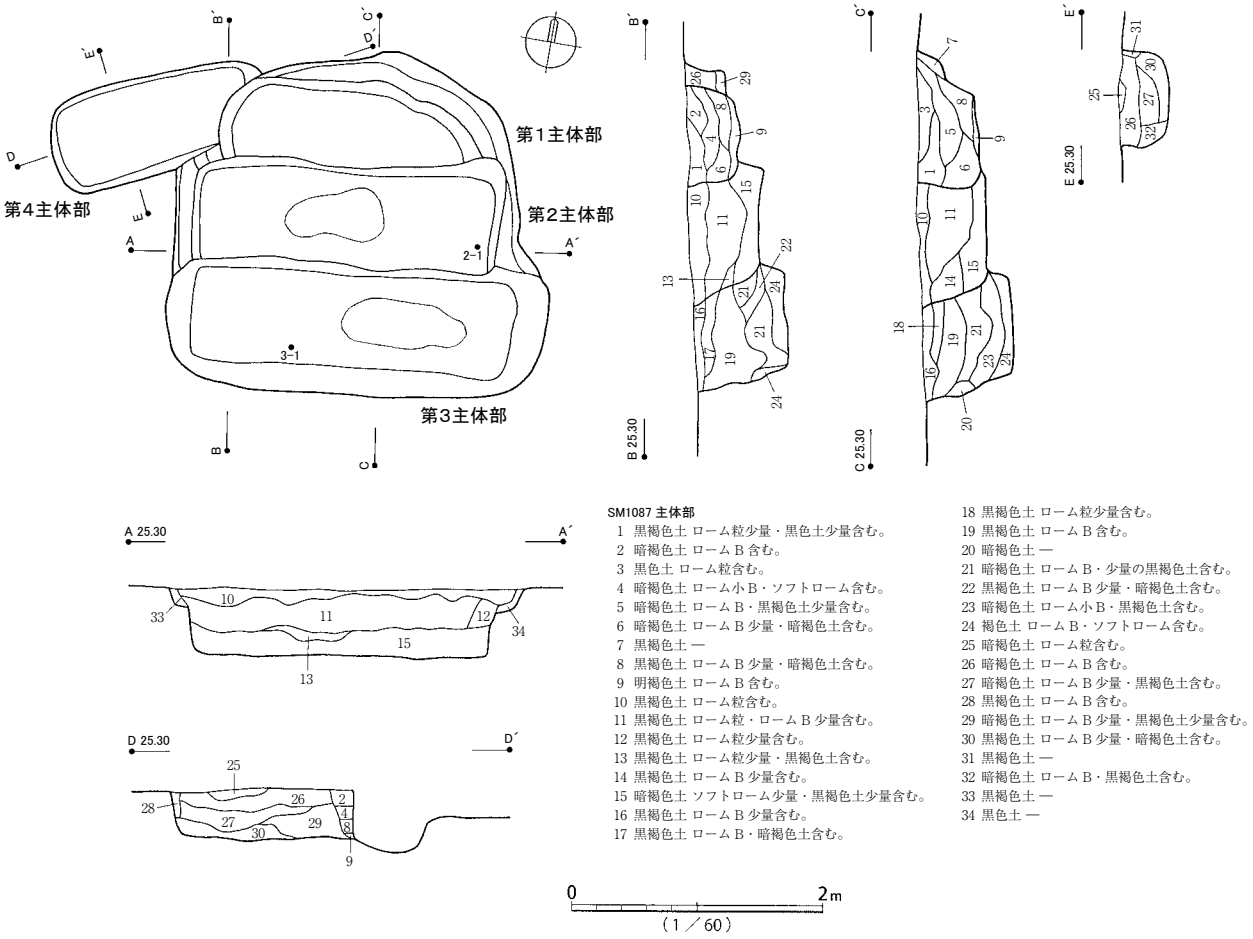
Fig.366　SM1086 遺構・遺物実測図



SM1087 墳丘
1 黒褐色土 ローム粒含む。

SM1087 周溝
1 暗褐色土 ローム粒含む。
2 黒褐色土 ローム粒含む。部分的に暗褐色土を含む。
3 黒褐色土 ローム微粒含む。
4 黒褐色土 ローム粒含む。
5 黒色土 部分的に暗褐色土を含む。
6 暗褐色土 ローム粒含む。

Fig.367　SM1087 遺構 (1) 実測図



SM1087 主体部

1 黒褐色土 ローム粒少量・黒色土少量含む。
2 暗褐色土 ローム B 含む。
3 黒色土 ローム粒含む。
4 暗褐色土 ローム小 B・ソフトローム含む。
5 暗褐色土 ローム B・黒褐色土少量含む。
6 暗褐色土 ローム B 少量・暗褐色土含む。
7 黒褐色土 —
8 黒褐色土 ローム B 少量・暗褐色土含む。
9 明褐色土 ローム B 含む。
10 黒褐色土 ローム粒含む。
11 黒褐色土 ローム粒・ローム B 少量含む。
12 黒褐色土 ローム粒少量含む。
13 黒褐色土 ローム粒少量・黒褐色土含む。
14 黒褐色土 ローム B 少量含む。
15 暗褐色土 ソフトローム少量・黒褐色土少量含む。
16 黒褐色土 ローム B 少量含む。
17 黒褐色土 ローム B・暗褐色土含む。
18 黒褐色土 ローム粒少量含む。
19 黒褐色土 ローム B 含む。
20 暗褐色土 —
21 暗褐色土 ローム B・少量の黒褐色土含む。
22 黒褐色土 ローム B 少量・暗褐色土含む。
23 暗褐色土 ローム小 B・黒褐色土含む。
24 褐色土 ローム B・ソフトローム含む。
25 暗褐色土 ローム粒含む。
26 暗褐色土 ローム B 含む。
27 暗褐色土 ローム B 少量・黒褐色土含む。
28 黒褐色土 ローム B 含む。
29 暗褐色土 ローム B 少量・黒褐色土少量含む。
30 黒褐色土 ローム B 少量・暗褐色土含む。
31 黒褐色土 —
32 暗褐色土 ローム B・黒褐色土含む。
33 黒褐色土 —
34 黒色土 —

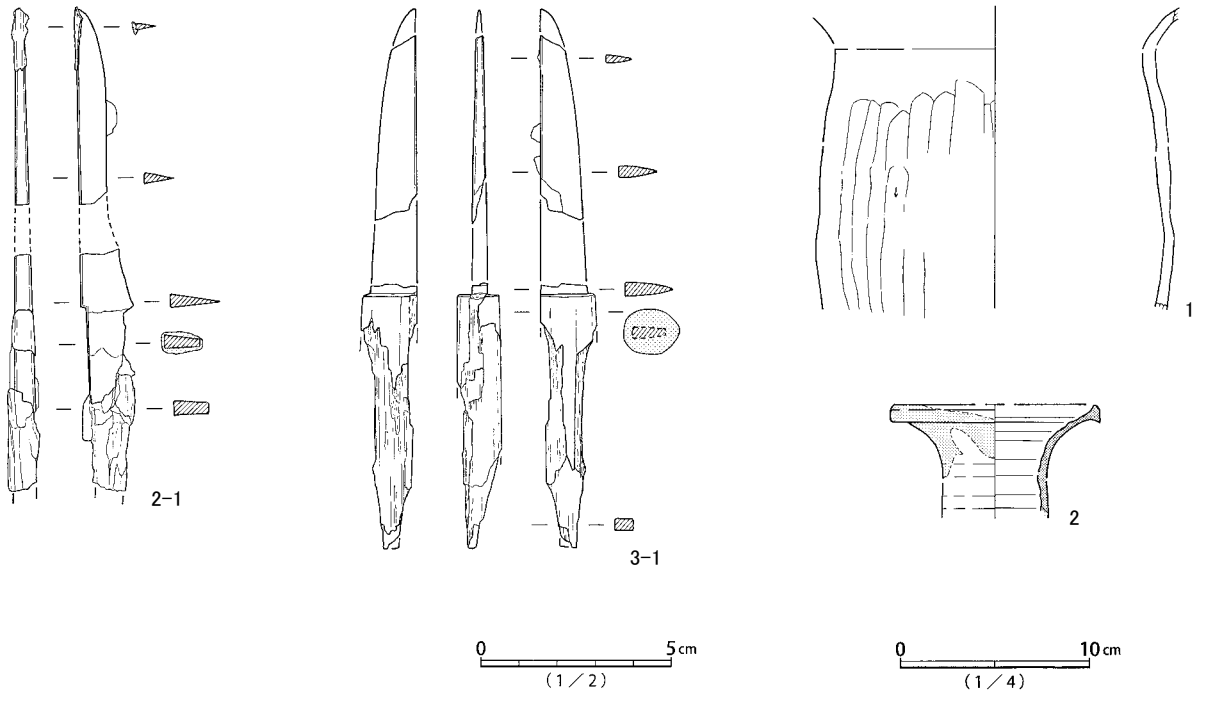


Fig.368　SM1087 遺構 (2)・遺物実測図

明で詳細不明である。

出土遺物

本墳周溝内からは、遺物は全く検出されなかった。

SM1089　セ28地区　（Fig.370～372、PL.130～131・172・190～191・204）

R・S-7・8グリッドに位置する。下層に位置するSS111・112を削平し、平面形は平行四辺形を呈する終末期方墳である。旧遺構番号はセ28-044号遺構である。

墳丘と周溝

長径9.60m、短径9.40mを測り、現状での盛土の高さは0.36mを測り、主軸方位はN-13.5°-Eを示す。周溝内側面積は93.0㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第45位の規模である。確認面での周溝幅は、1.62～2.10m、深さは0.48～0.60m、土層断面図上では0.84～0.98mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央に1基、北西コーナー部に1基、計2基検出されている。

第1主体部

第1主体部は、方台部中央に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径3.18m短径1.56m深さ0.62m、下端で長径2.92m短径1.40mを測り、主軸方位はN-69°-Wを示す。墓壙の中央に、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.22m幅0.72m、下端で長さ2.10m幅0.56m深さ0.48mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-70.5°-W を示す。

木棺内からは、棺底から2㎝浮いた状態で2点1対の金銅製耳環、1㎝浮いた状態で4点の長頸鏃と1点の刀子が検出されている。

第2主体部

第2主体部は、方台部北西コーナーに検出された土壙墓であるが、土層断面から判断すると木棺直葬土壙墓であった可能性が極めて高い。墓壙規模は上端で、長径2.76m短径1.10～1.48m深さ0.38m、下端で長径2.52m短径0.90～1.30mを測り、主軸方位はN-86.5°-Eを示す。木棺痕は未検出とされるが、土層断面によれば長さ2.22m幅0.60m程の土層の落込みが認められ、木棺痕であった可能性が考えられる。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

第1主体部出土の1-1・2の金銅製耳環2点一対は、遺体頭部付近からの検出と想定されるが、縦方向に並んで検出されているため、どちらか一方が大きく動いている可能性が高い。1-3～6の鉄鏃は、全て三角形式の長頸族であるが、鏃身部は退化し、所謂鑿箭鏃となる直前の状況を示している。鏃身部は片丸造りで、関は棘関を呈している。茎部には木質が付着し、1-4～6には紐巻きの痕跡が認められる。1-7は、木棺内の西側からほぼ棺底密着で検出された刀子であり、全長13.5㎝、刃部長7.2㎝を測る。

本墳南側周溝内からは、周溝底密着状態～0.50m前後浮いた状態で、比較的多量の須恵器が検出されている。この内6・11を除いた製品は、TK-217の最新段階～TK-46型式併行期に位置付けられる7世紀第3四半期末葉から第4四半期に位置づけられる湖西産須恵器であり、本墳の年代を表すものと想定

される。

SM1090　セ28地区　(Fig.373～374、PL.131・204)

S-12・13グリッドに位置する。下層に位置するSS54・SM1037を削平し、上層に位置するSB(掘立柱建物跡)に削平される終末期方墳である。旧遺構番号はセ28-171号遺構である。

墳丘と周溝

長径9.66m、短径9.46mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-5°-Wを示す。周溝内側面積は92.4㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第46位の規模である。確認面での周溝幅は、1.06～1.34m、深さは0.36～0.56mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳の周溝底からは、1の鉄斧が検出されている。

SM1091　099地区　(Fig.374～375、PL.131・172・191)

J・K-11・12グリッドに位置する終末期方墳である。旧遺構番号は099-4019号遺構である。

墳丘と周溝

長径9.50m、短径9.26mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-18°-Wを示す。周溝内側面積は89.3㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第47位の規模である。確認面での周溝幅は、1.40～2.54m、深さは0.50～1.06m、土層断面図上では0.50～1.14mを測る。全体的に均整のとれた方形形状で、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.46m短径1.26m深さ0.40m、下端で長径2.32m短径1.16mを測り、主軸方位はN-80°-Wを示す。墓壙の中央に箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ1.88m幅0.60m、下端で長さ1.76m幅0.50m深さ0.40mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-80°-W を示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

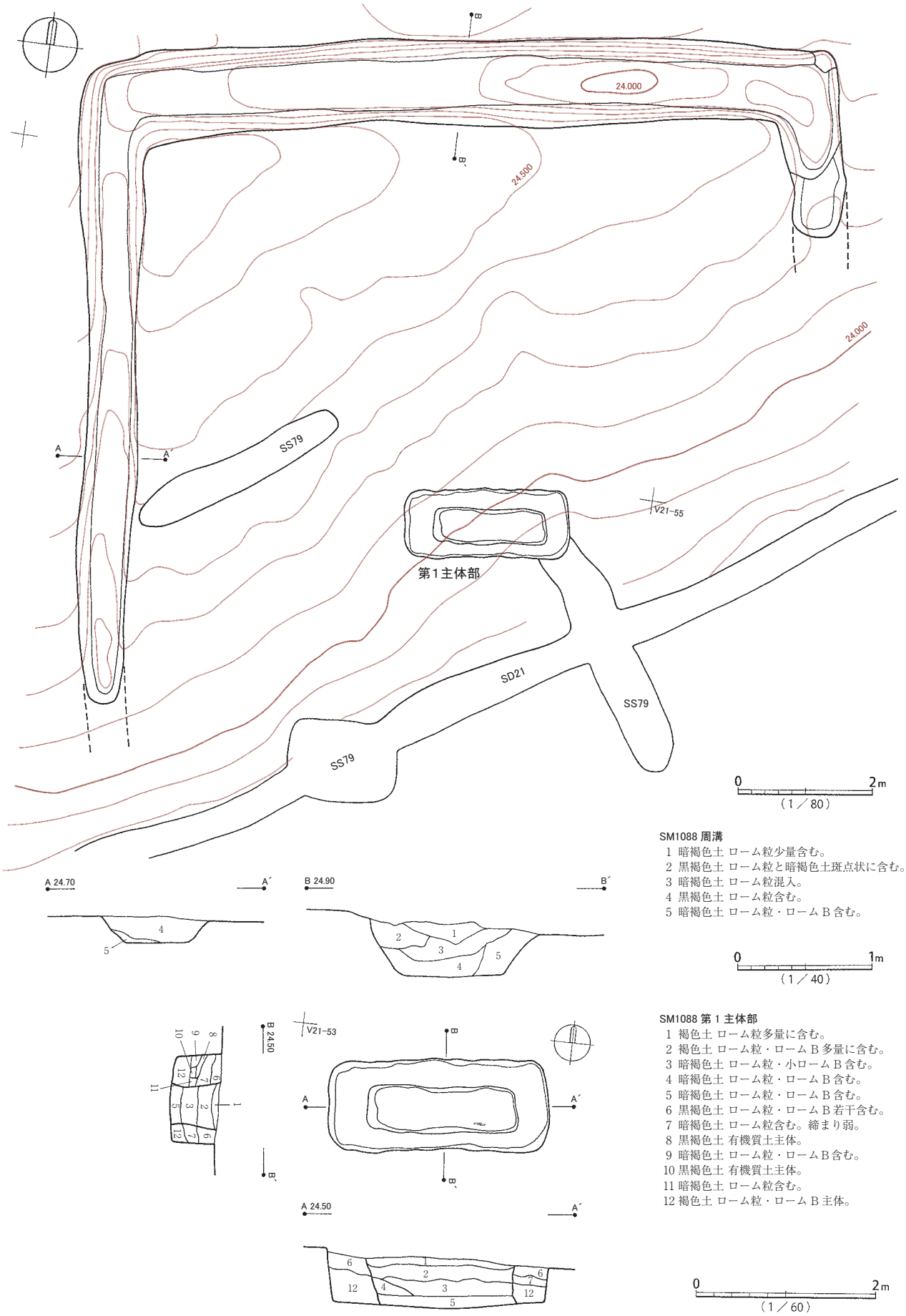
本墳南側周溝内からは、1の鉢、2のカワラケ、3・4の弥生土器が覆土一括で検出されているが、何れも本墳とは時期的に整合しない。下層に位置する竪穴住居跡等に伴う遺物と判断される。

SM1092　セ28地区　(Fig.376、PL.131)

Q・R-7・8グリッドに位置する。四隅が直角でやや横長な終末期方墳である。旧遺構番号はセ28-222号遺構である。

墳丘と周溝

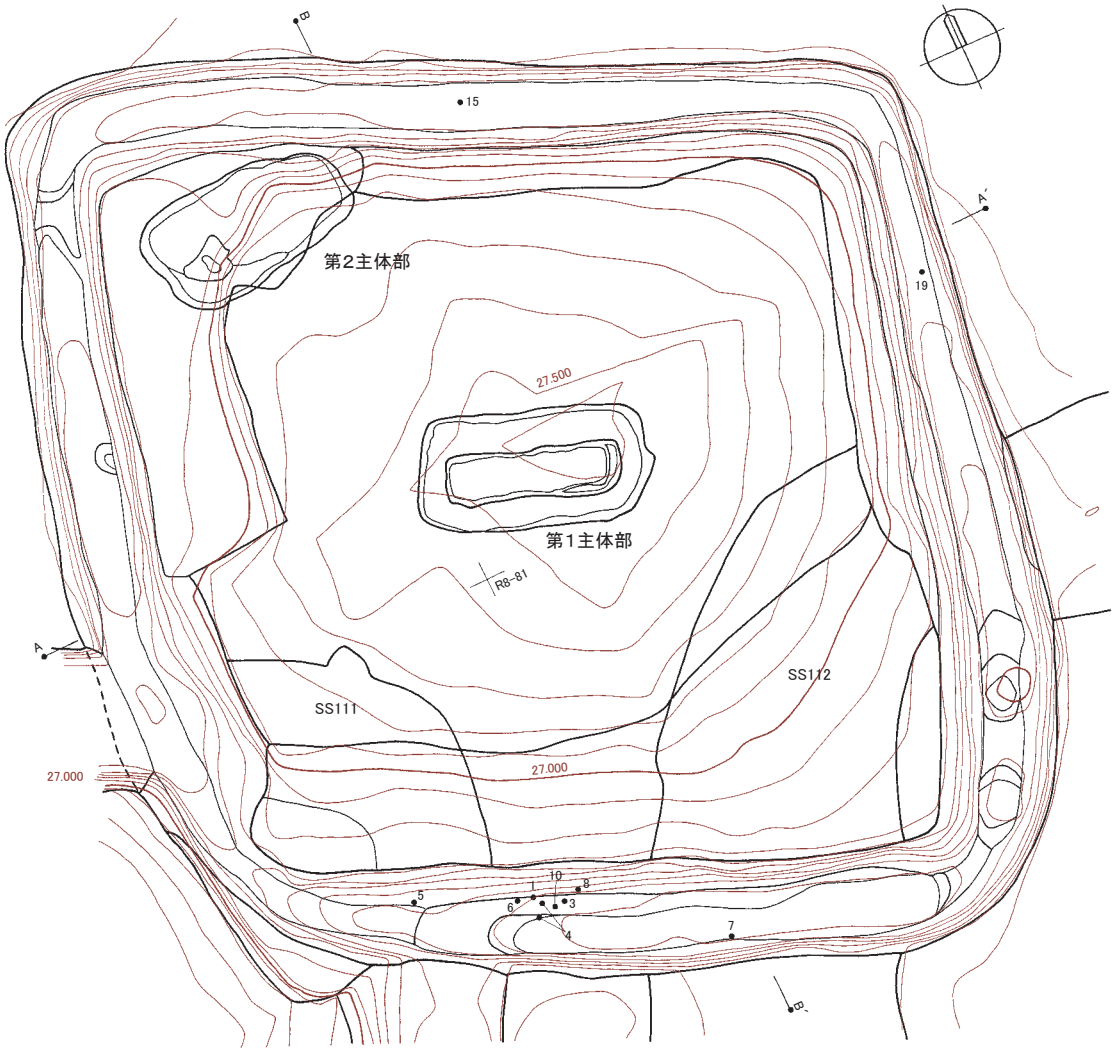
長径9.76m、短径8.72mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-1°-Eを示す。周溝内側面積は84.7㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第48位の規模である。確認面での



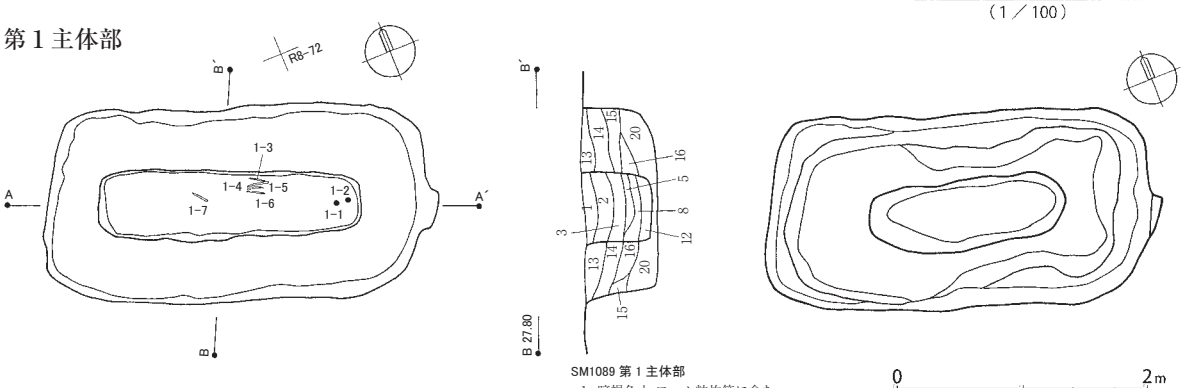
SM1088 周溝
1 暗褐色土 ローム粒少量含む。
2 黒褐色土 ローム粒と暗褐色土斑点状に含む。
3 暗褐色土 ローム粒混入。
4 黒褐色土 ローム粒含む。
5 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。

SM1088 第 1 主体部
1 褐色土 ローム粒多量に含む。
2 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
3 暗褐色土 ローム粒・小ローム B 含む。
4 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
5 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
6 黒褐色土 ローム粒・ローム B 若干含む。
7 暗褐色土 ローム粒含む。締まり弱。
8 黒褐色土 有機質土主体。
9 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
10 黒褐色土 有機質土主体。
11 暗褐色土 ローム粒含む。
12 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。

Fig.369　SM1088 遺構実測図



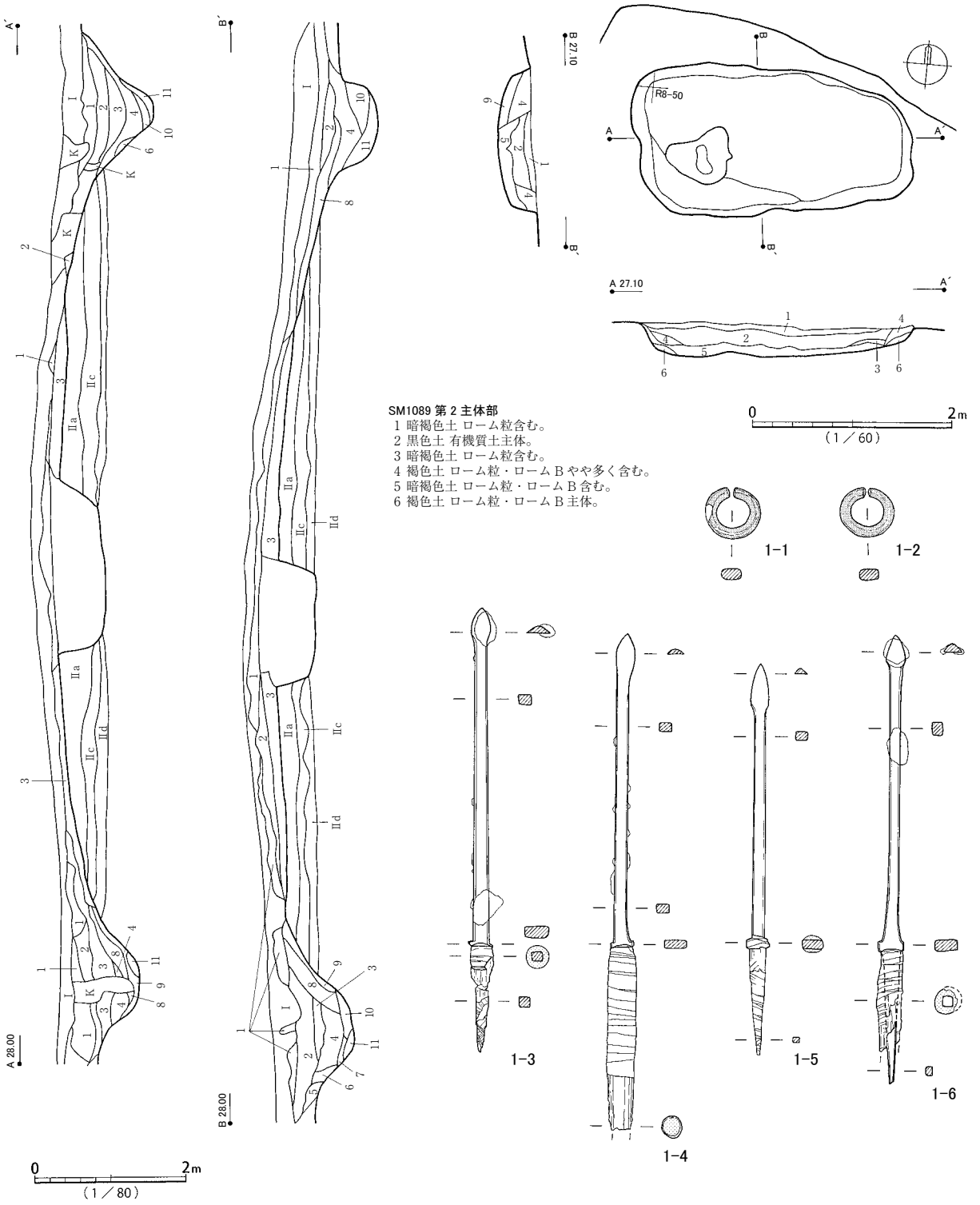
第１主体部



SM1089 第１主体部

1 暗褐色土 ローム粒均等に含む。
2 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ・縄文土器含む。
3 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ多く含む。
4 黒褐色土 ローム等ほとんど含まない。
5 黒褐色土 有機質土主体。
6 暗褐色土 ローム粒含む。
7 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
8 暗褐色土 褐色土斑点状に含む。
9 暗褐色土 ローム粒含む。締まり弱。
10 褐色土 ローム粒多い。締まり弱。
11 褐色土 ローム粒・大ロームＢ多量に含む。
12 暗褐色土 ローム粒含む。締まりなし。
13 褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
14 暗褐色土 ローム粒含む。締まる。
15 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ多く含む。
16 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
17 褐色土 ロームＢ主体。
18 暗褐色土 ローム粒含む。
19 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
20 暗褐色土 ローム粒多量に含む。

Fig.370　SM1089 遺構 (1) 実測図



SM1089 第２主体部
1 暗褐色土 ローム粒含む。
2 黒色土 有機質土主体。
3 暗褐色土 ローム粒含む。
4 褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
5 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
6 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。

SM1089 墳丘
1 黒褐色土 ローム粒若干含む。
2 黄褐色土 黄味強いローム B 一様に含む。
3 暗褐色土 ローム粒少量含む。

SM1089 周溝
1 暗褐色土 わずかにローム粒含む。締まり弱。
2 黄褐色土 黄土色細粒多量に含む。
3 暗褐色土 褐色味強くローム粒わずかながら一様に含む。
4 暗褐色土 ローム粒を一様に含む。
5 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む。
6 暗褐色土 ローム粒斑点状に含む。（撹乱？）
7 黒褐色土 ローム粒含む。
8 黒褐色土 ローム粒わずかに含む。
9 暗褐色土 ローム粒わずかに含む。
10 暗褐色土 黄味強いローム粒を一様に含む。
11 褐色土 ローム B 含む。

Fig.371　SM1089 遺構 (2)・遺物 (1) 実測図

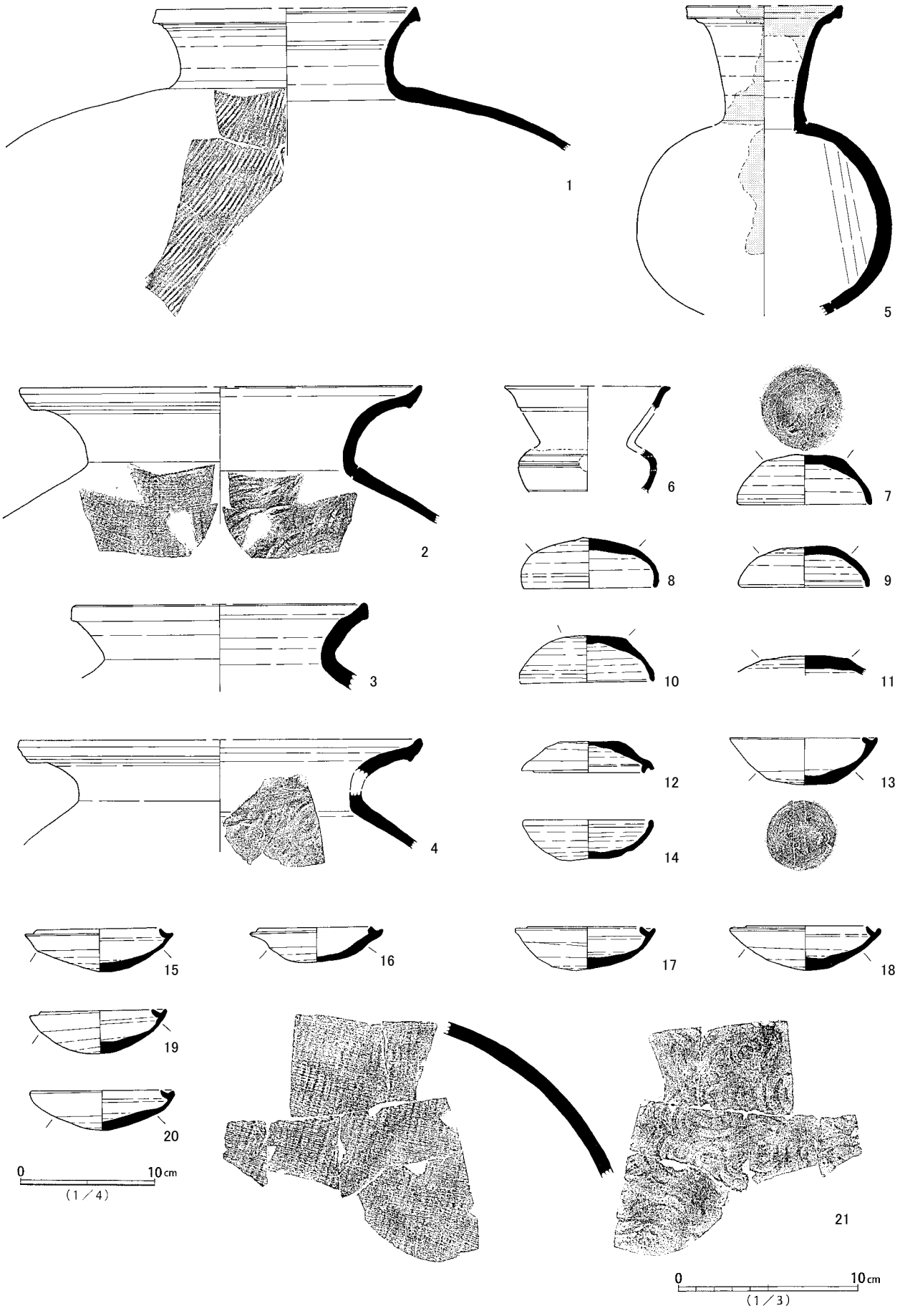


Fig.372　SM1089 遺物 (2) 実測図

周溝幅は、0.66～0.88m、深さは0.42～0.52mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央に検出された土壙墓であるが、土層断面図から判断すると木棺直葬土壙墓である可能性が極めて高い。墓壙規模は上端で、長径2.48m短径1.16m深さ0.24m、下端で長径2.34m短径1.04mを測り、主軸方位はN-88°-Eを示す。土層断面によれば墓壙の中央に木棺痕らしき断層が、上端で長さ2.00m幅0.68m、下端で長さ1.90m幅0.50m、深さ0.24mに亘って検出されており、この範囲こそが墓壙内の木棺痕と想定される。土層断面によれば底面はほぼ平坦であることが確認される。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1093　セ28地区　（Fig.377～378、PL.131～132・191）

Q・R-14・15グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号はセ28-020号遺構である。

墳丘と周溝

長径9.38m、短径8.94mを測り、現状での盛土の高さは0.46mを測り、主軸方位はN-9°-Eを示す。周溝内側面積は84.4㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第49位の規模である。確認面での周溝幅は、1.84～2.04m、深さは0.74～0.94m、土層断面図上では1.00～1.30mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央に1基、南東コーナー部に1基、計2基検出されている。

第1主体部

第1主体部は、方台部中央に検出された土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.62m短径1.42m深さ0.58m、下端で長径2.10m短径0.90mを測り、主軸方位はN-61°-Eを示す。土層断面によれば、墓壙の中央に木棺痕らしき断層があるようにも見て取れる。底面はほぼ平坦であり、あるいは木棺直葬土壙であった可能性が高い。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

第2主体部

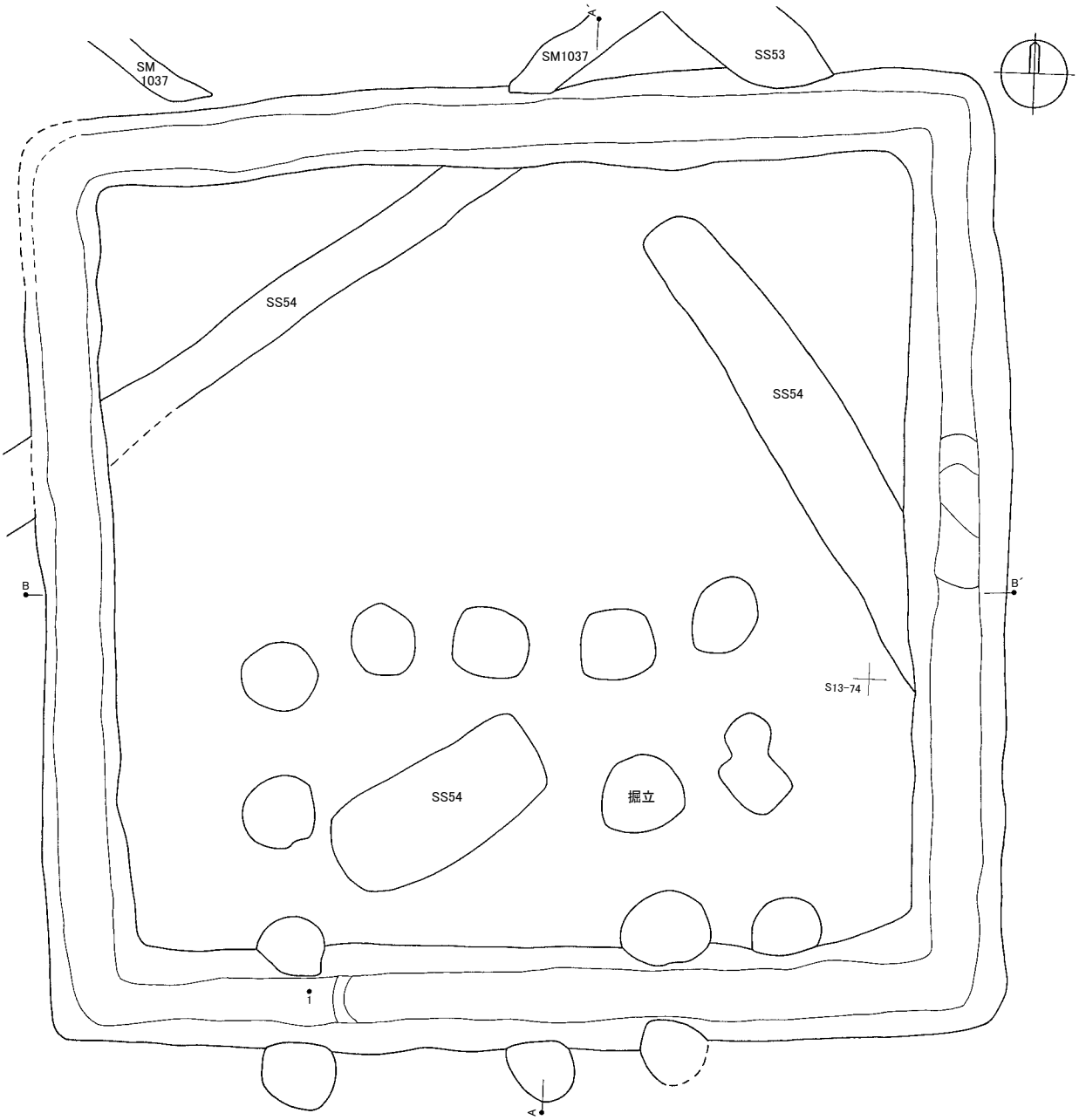
第2主体部は、南東コーナー部に検出された土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.48m短径1.42m深さ0.44m、下端で長径2.22m短径0.76mを測り、主軸方位はN-79°-Wを示す。底面はほぼ平坦である。

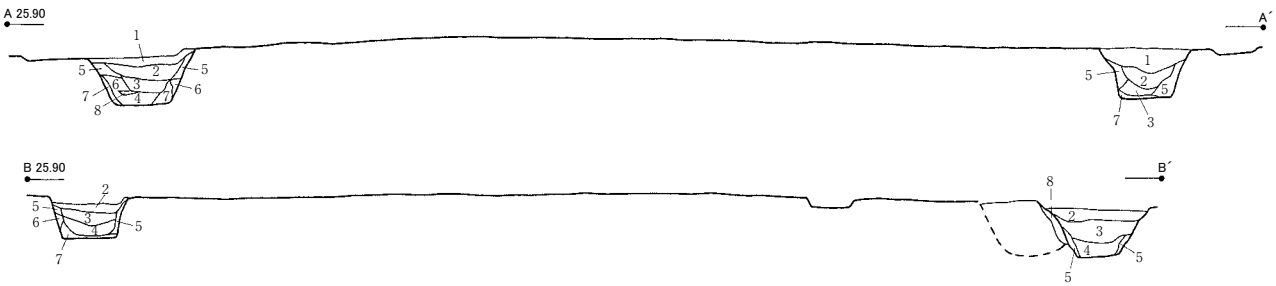
墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、5点の須恵器片が覆土一括で検出されている。

SM1094　セ54地区　（Fig.379、PL.132）





SM1090 周溝
1 暗褐色土 ローム粒含む。
2 黒褐色土 有機質土主体。
3 暗褐色土 ローム粒少量含む。
4 黒褐色土 ローム粒若干含む。
5 暗褐色土 ローム粒含む。
6 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
7 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
8 褐色土 ローム B 主体。

0 2m
(1／80)

Fig.373　SM1090 遺構実測図

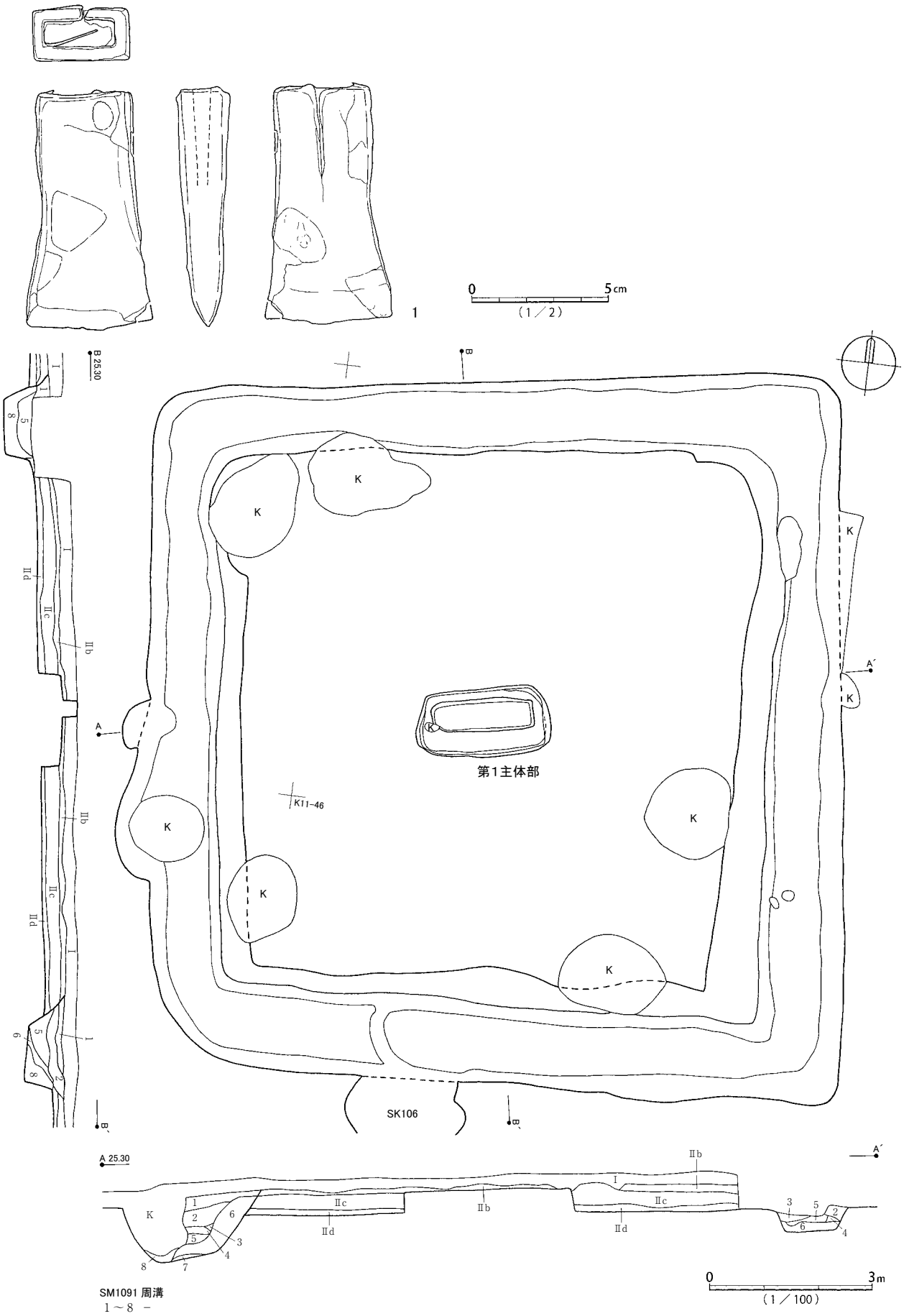
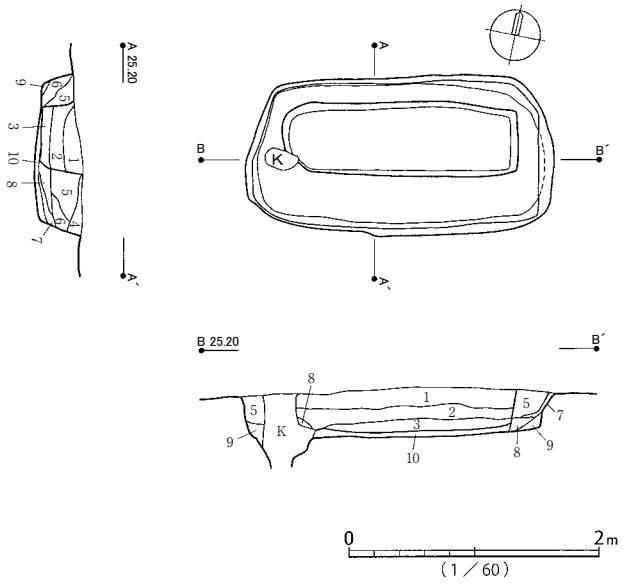


Fig.374　SM1090 遺物、SM1091 遺構 (1) 実測図



SM1091 第 1 主体部
1 褐色土 ローム粒多量に含む。
2 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
3 暗褐色土 ローム粒多・ローム B 少量含む。
4 黒褐色土 ローム粒若干含む。
5 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
6 褐色土 ローム粒多量に含む。
7 暗褐色土 ローム粒と有機質土の混合土。
8 黄褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
9 暗褐色土 ローム粒若干含む。
10 黒褐色土 ローム小 B 含む。

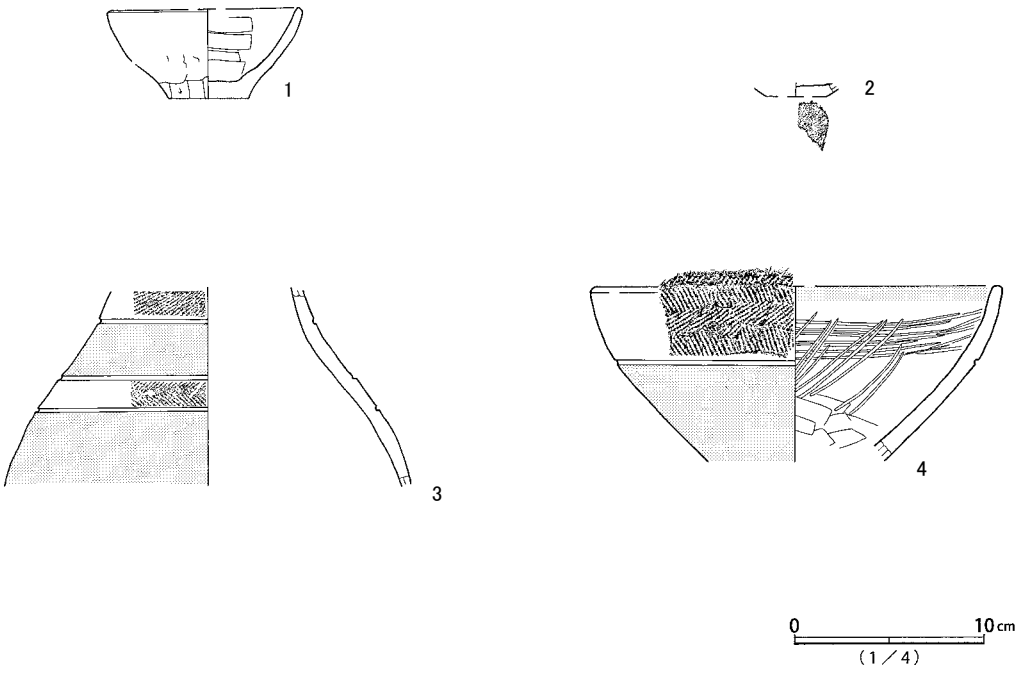


Fig.375　SM1091 遺構 (2)・遺物実測図

T-18グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号はセ54-19号遺構である。

墳丘と周溝

長径9.26m、短径8.90mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-7°-Eを示す。周溝内側面積は82.1㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第50位の規模である。確認面での周溝幅は、0.88～0.96m、深さは0.12～0.28mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.78m短径1.26m深さ0.68m、下端で長径2.56m短径1.00mを測り、主軸方位はN-82°-Wを示す。墓壙のほぼ中央に、棺底周囲の一部を粘土で固定した箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.20m幅0.60m、下端で長さ2.12m幅0.50m深さ0.40mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-82°-Wを示す。棺底直下の墓壙底部には、周囲とは異なる淡い赤色に変化した変色範囲が、長さ1.32m幅0.12～0.30mに亘って検出されている。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1095　セ28・セ54地区　（Fig.380、PL.132～133・172）

R-17グリッドに位置する。本墳はセ28・セ54の両地区で調査番号が付された、四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号はセ28-004・セ54-007号遺構である。

墳丘と周溝

長径8.98m、短径8.90mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-8°-Wを示す。周溝内側面積は80.7㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第51位の規模である。確認面での周溝幅は、1.70～1.90m、深さは0.46～0.71m、土層断面図上では0.60～0.74mを測る。全体的に均整のとれた方形形状で、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

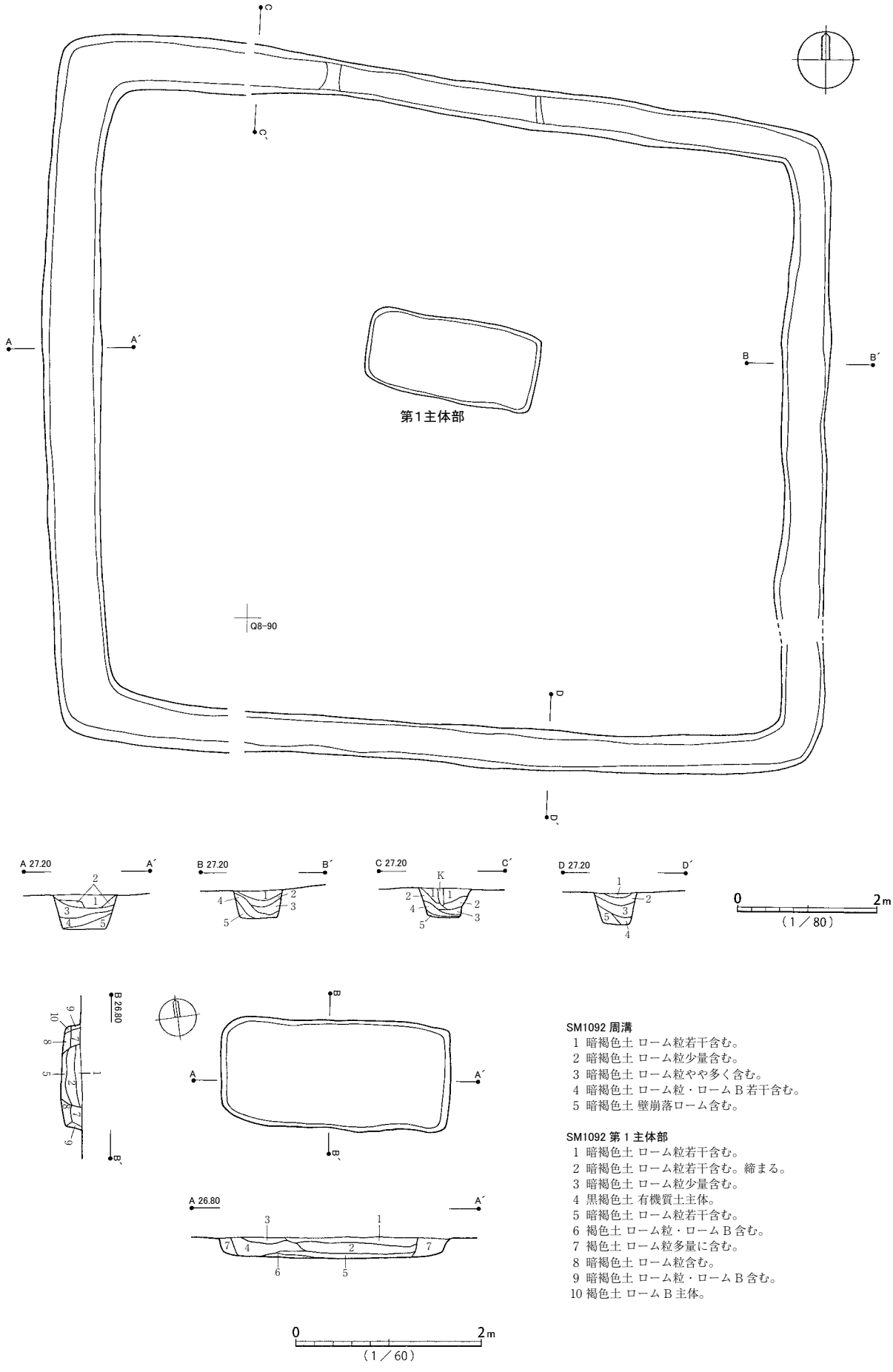
出土遺物

本墳北側周溝内からは、1の広口長頸壺が周溝底から12㎝程浮いた状態で検出されている。他に覆土一括で、鈕は剥離しているが、2の須恵器蓋と3の合子形須恵器坏が検出されている。本墳の築造時期は1の須恵器広口長頸壺が示す8世紀前半代と想定される。

SM1096　セ54地区　（Fig.381、PL.133）

V・W-20・21グリッドに位置する。下層に位置するSS77・79と重複し、緩やかな南緩斜面に存在し南側周溝を流出しているが、本来は四辺が直角に巡る終末期方墳である。旧遺構番号はセ54-34号遺構である。

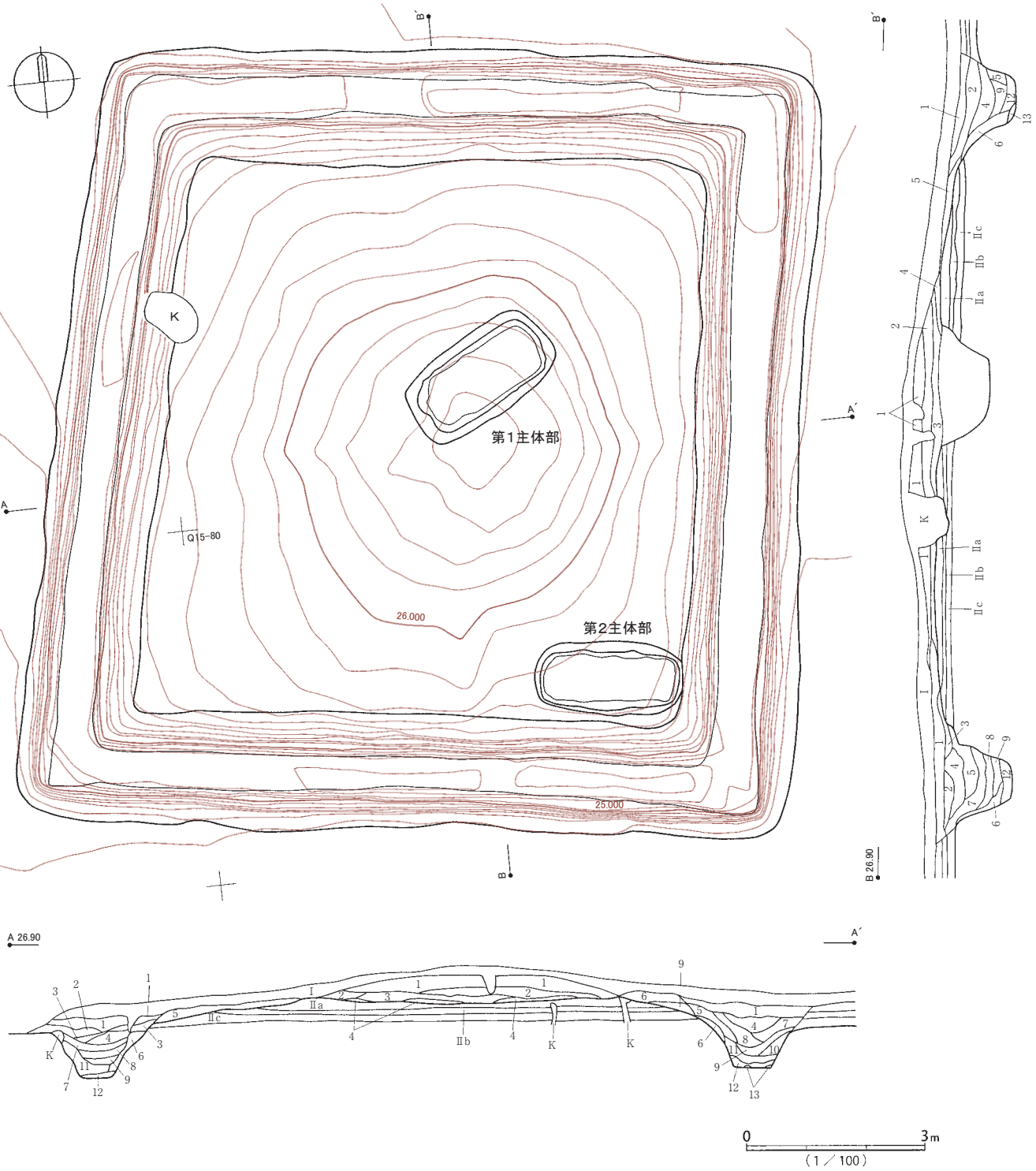
墳丘と周溝



SM1092 周溝
1 暗褐色土 ローム粒若干含む。
2 暗褐色土 ローム粒少量含む。
3 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
4 暗褐色土 ローム粒・ローム B 若干含む。
5 暗褐色土 壁崩落ローム含む。

SM1092 第 1 主体部
1 暗褐色土 ローム粒若干含む。
2 暗褐色土 ローム粒若干含む。締まる。
3 暗褐色土 ローム粒少量含む。
4 黒褐色土 有機質土主体。
5 暗褐色土 ローム粒若干含む。
6 褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
7 褐色土 ローム粒多量に含む。
8 暗褐色土 ローム粒含む。
9 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
10 褐色土 ローム B 主体。

Fig.376　SM1092 遺構実測図



SM1093 墳丘

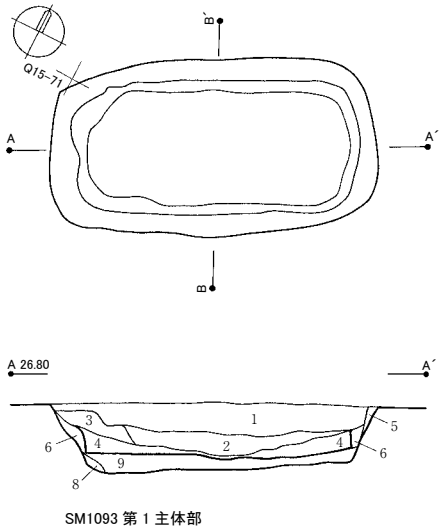
1 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
2 黒褐色土 ローム粒含む。
3 褐色土 ローム粒・ローム B 多く含む。
4 黒褐色土 ローム粒・ローム B 少量含む。
5 暗褐色土 ローム粒含む。

SM1093 周溝

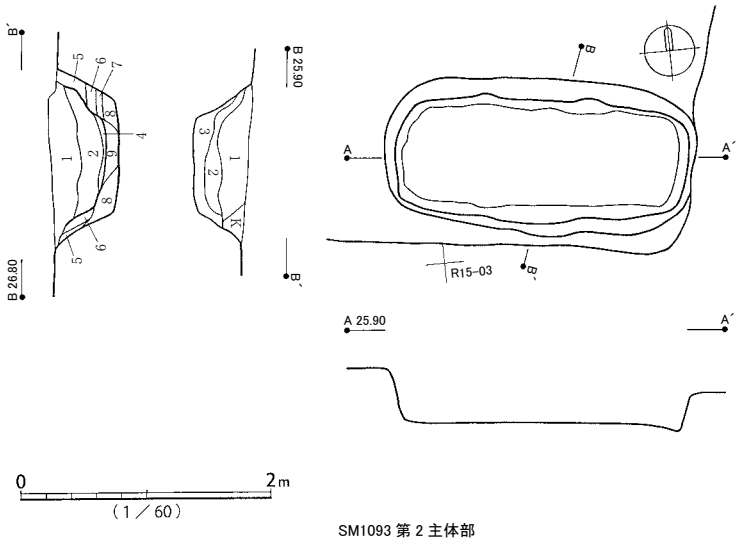
1 暗褐色土 表土混入し汚れている。
2 黒褐色土 ローム粒若干含む。
3 黒褐色土 ローム粒含む。
4 黒褐色土 多量のローム粒含む。
5 黒褐色土 多量の暗褐色土を斑点状に含む。
ローム粒含む。
6 暗褐色土 ローム崩壊土含む。
7 黒褐色土 多量のローム粒含む。
8 暗褐色土 褐色土の混入多い。
9 黒褐色土 多量の褐色土と若干のローム粒含む。
10 黒褐色土 多量のローム粒と褐色土粒を含む。
11 暗褐色土 褐色土と多量のローム粒含む。
12 褐色土 ローム B と暗褐色粒含む。
13 黄褐色土 ローム B。

Fig.377　SM1093 遺構 (1) 実測図

第１主体部



第２主体部



0　2m
（1／60）

SM1093 第 1 主体部
1 黒褐色土 有機質土主体。
2 黒褐色土 若干のローム粒含む。
3 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
4 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
5 暗褐色土 ローム粒多く含む。
6 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
7 暗褐色土 ローム粒含む。
8 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
9 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。硬く締まる。

SM1093 第 2 主体部
1 暗褐色土 ローム B 含む。
2 暗褐色土 ローム B 少量含む。
3 暗褐色土 ローム粒若干含む。

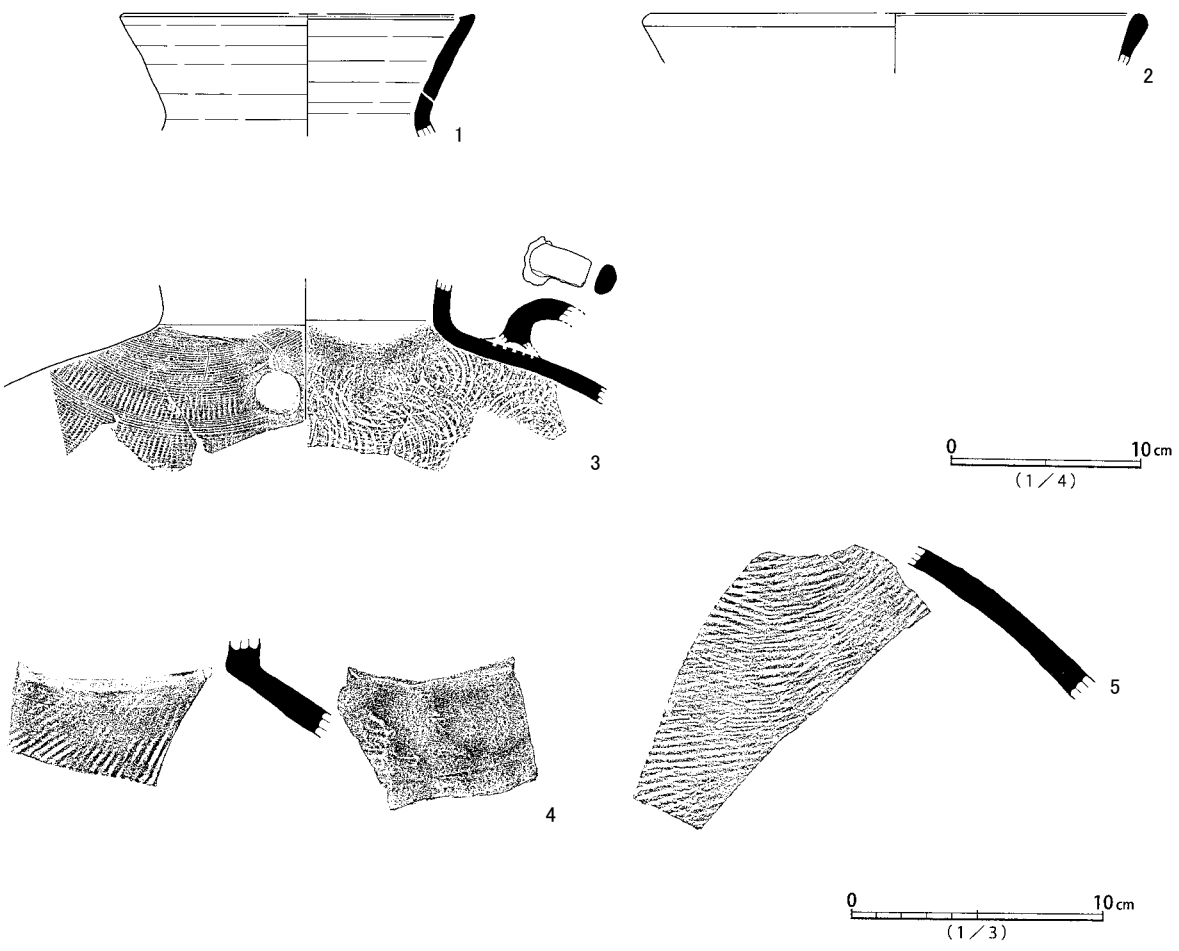


Fig.378　SM1093 遺構 (2)・遺物実測図

長径9.44m、残存短径8.60mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-10°-Wを示す。周溝内側面積は埋葬施設を中心とした推定で(79.9)㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第52位の規模である。確認面での周溝幅は、1.24～1.26m、深さは0.68～0.94m、土層断面図上の最大値は1.30mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央に検出された土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径1.48m短径0.90m深さ0.54m、下端で長径1.42m短径0.78mを測り、主軸方位はN-80°-Eを示す。底面はほぼ平坦である。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1097　セ54地区　(Fig.382・386、PL.133・173)

S-15・16グリッドに位置する。下層に位置するSS50と重複する終末期方墳である。旧遺構番号はセ54-17号遺構である。

墳丘と周溝

長径9.14m、短径8.68mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-11°-Wを示す。周溝内側面積は78.6㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第53位の規模である。確認面での周溝幅は、1.62～1.94m、深さは0.32～0.72mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

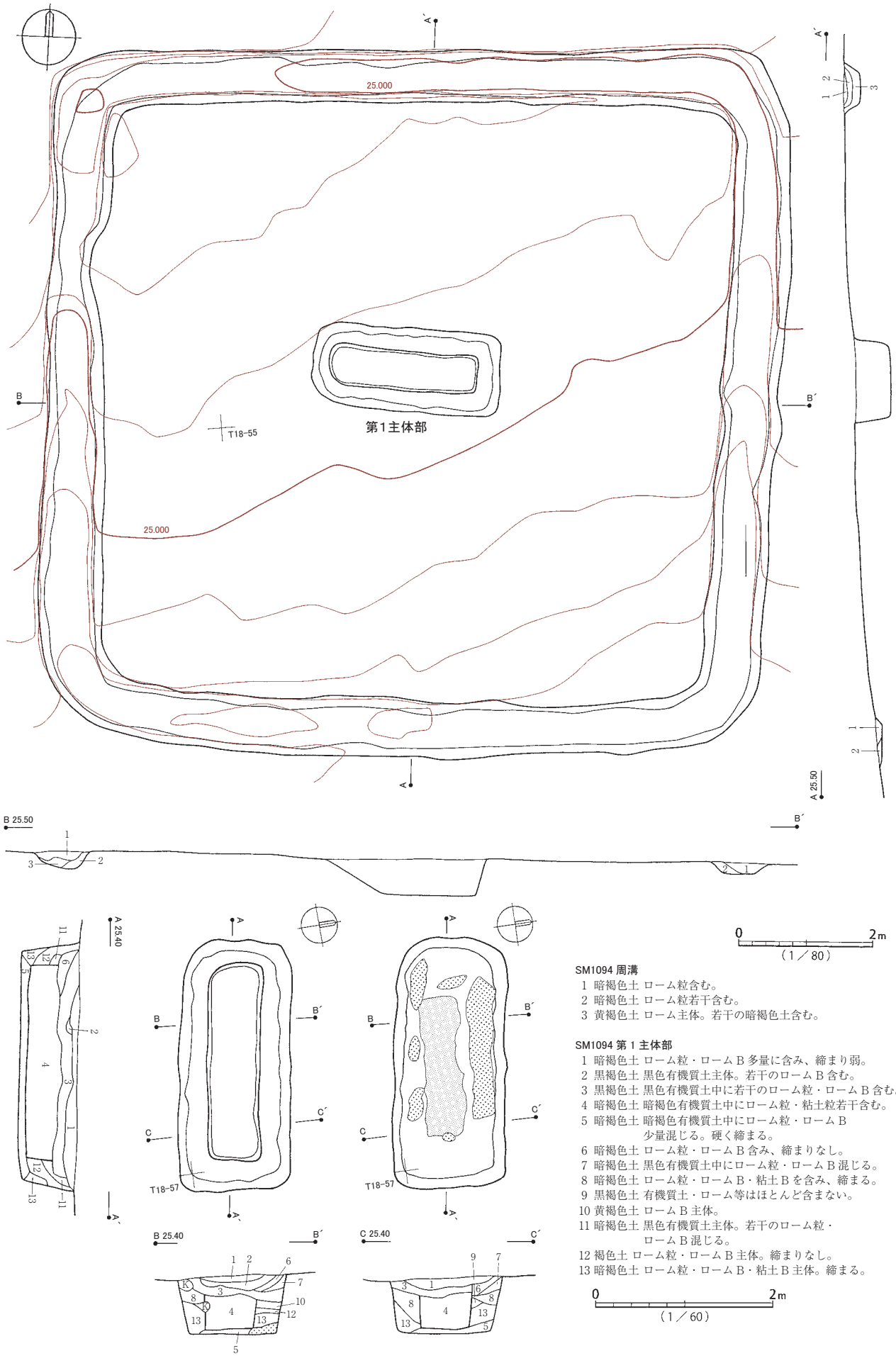
本墳周溝内からは、3点の土師器・須恵器が覆土一括で検出されている。1は8世紀前半代を示す須恵器長頸壺である。本墳が盛土内に存在した埋葬施設流出墳であるならば、1の須恵器長頸壺が本遺構に伴うのであろう。2は須恵器短頸壺片であるが、9世紀前半代頃の所産であろうか。3は9世紀前半代の土師器坏である。仮に2と3が同時期であるならば、これらの遺物は、セットで本遺構に伴う蔵骨器であった可能性が考えられる。何れにせよ、本遺構は埋葬施設未検出のため、盛土内の埋葬施設を流出した1の須恵器長頸壺が示す8世紀前半初頭の終末期方墳か、9世紀前半代の律令制墳墓なのかの判定が困難である。

SM1098　セ54地区　(Fig.383、PL.134)

Q・R-19・20グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号はセ54-4号遺構である。

墳丘と周溝

長径9.02m、短径8.54mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-6.5°-Eを示す。周溝内側面積は76.5㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第54位の規模である。確認面での周溝幅は、1.62～1.94m、深さは0.38～0.62mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈してい



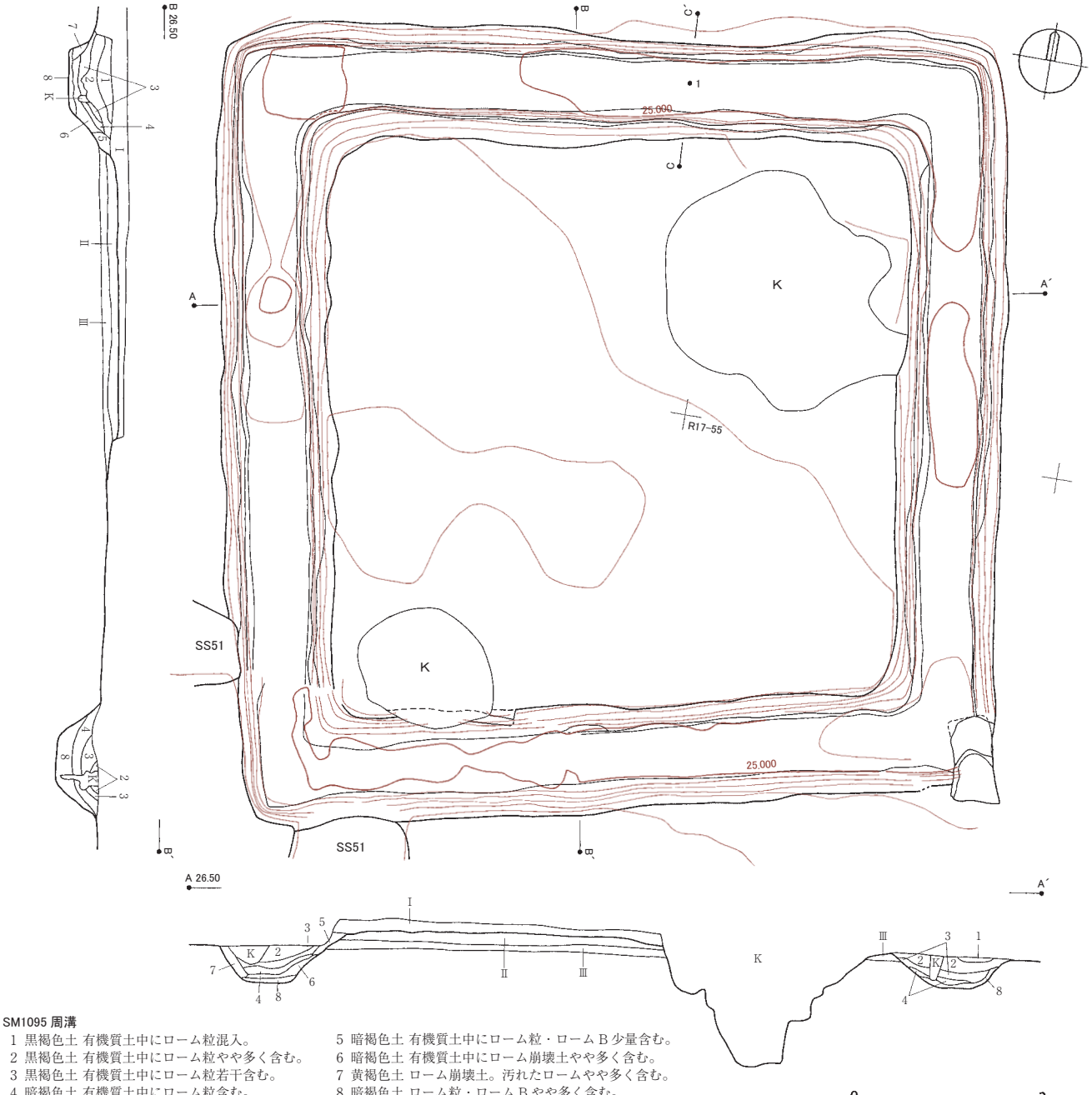
SM1094 周溝

1 暗褐色土 ローム粒含む。
2 暗褐色土 ローム粒若干含む。
3 黄褐色土 ローム主体。若干の暗褐色土含む。

SM1094 第 1 主体部

1 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含み、締まり弱。
2 黒褐色土 黒色有機質土主体。若干のローム B 含む。
3 黒褐色土 黒色有機質土中に若干のローム粒・ローム B 含む。
4 暗褐色土 暗褐色有機質土中にローム粒・粘土粒若干含む。
5 暗褐色土 暗褐色有機質土中にローム粒・ローム B 少量混じる。硬く締まる。
6 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含み、締まりなし。
7 暗褐色土 黒色有機質土中にローム粒・ローム B 混じる。
8 暗褐色土 ローム粒・ローム B・粘土 B を含み、締まる。
9 黒褐色土 有機質土・ローム等はほとんど含まない。
10 黄褐色土 ローム B 主体。
11 暗褐色土 黒色有機質土主体。若干のローム粒・ローム B 混じる。
12 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。締まりなし。
13 暗褐色土 ローム粒・ローム B・粘土 B 主体。締まる。

Fig.379　SM1094 遺構実測図



SM1095 周溝

1 黒褐色土 有機質土中にローム粒混入。
2 黒褐色土 有機質土中にローム粒やや多く含む。
3 黒褐色土 有機質土中にローム粒若干含む。
4 暗褐色土 有機質土中にローム粒含む。
5 暗褐色土 有機質土中にローム粒・ローム B 少量含む。
6 暗褐色土 有機質土中にローム崩壊土やや多く含む。
7 黄褐色土 ローム崩壊土。汚れたロームやや多く含む。
8 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。

Fig.380　SM1095 遺構・遺物出土詳細・遺物実測図

る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1099　SW83地区　（Fig.384・386、PL.134・137・173）

T-24グリッドに位置する。東側周溝が長く歪な終末期方墳である。旧遺構番号はSW83-K13号遺構である。

墳丘と周溝

長径8.94m、短径8.54mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-28°-Wを示す。周溝内側面積は75.4㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第55位の規模である。確認面での周溝幅は、1.28～1.74m、深さは0.26～0.48mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央西側に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央西側に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.62m短径1.22m深さ0.56m、下端で長径2.44m短径1.00mを測り、主軸方位はN-71.5°-Eを示す。墓壙のほぼ中央に、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ1.93m幅0.54m、下端で長さ1.84m幅0.46m深さ0.32mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-71.5°-E を示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、1の須恵器甕ないしは壺の胴部と2の須恵器長頸壺頸部が覆土一括で検出されているが、具体的な時期の特定はできない。

SM1100　099地区　（Fig.385～386、PL.134）

O・P-20・21グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号は099-4111号遺構である。

墳丘と周溝

長径8.68m、残存短径8.66mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-5°-Wを示す。周溝内側面積は72.8㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第56位の規模である。確認面での周溝幅は、1.40～1.76m、深さは0.32～0.50m、土層断面図上の深さは0.45～0.64mを測る。全体的に均整のとれた方形形状で周溝が巡り、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央に検出された木棺直葬の土壙墓である。攪乱により一部を欠くが、墓壙規模は上端で、長径2.57m短径1.48m深さ1.02m、下端で長径2.48m短径1.28mを測り、主軸方位は

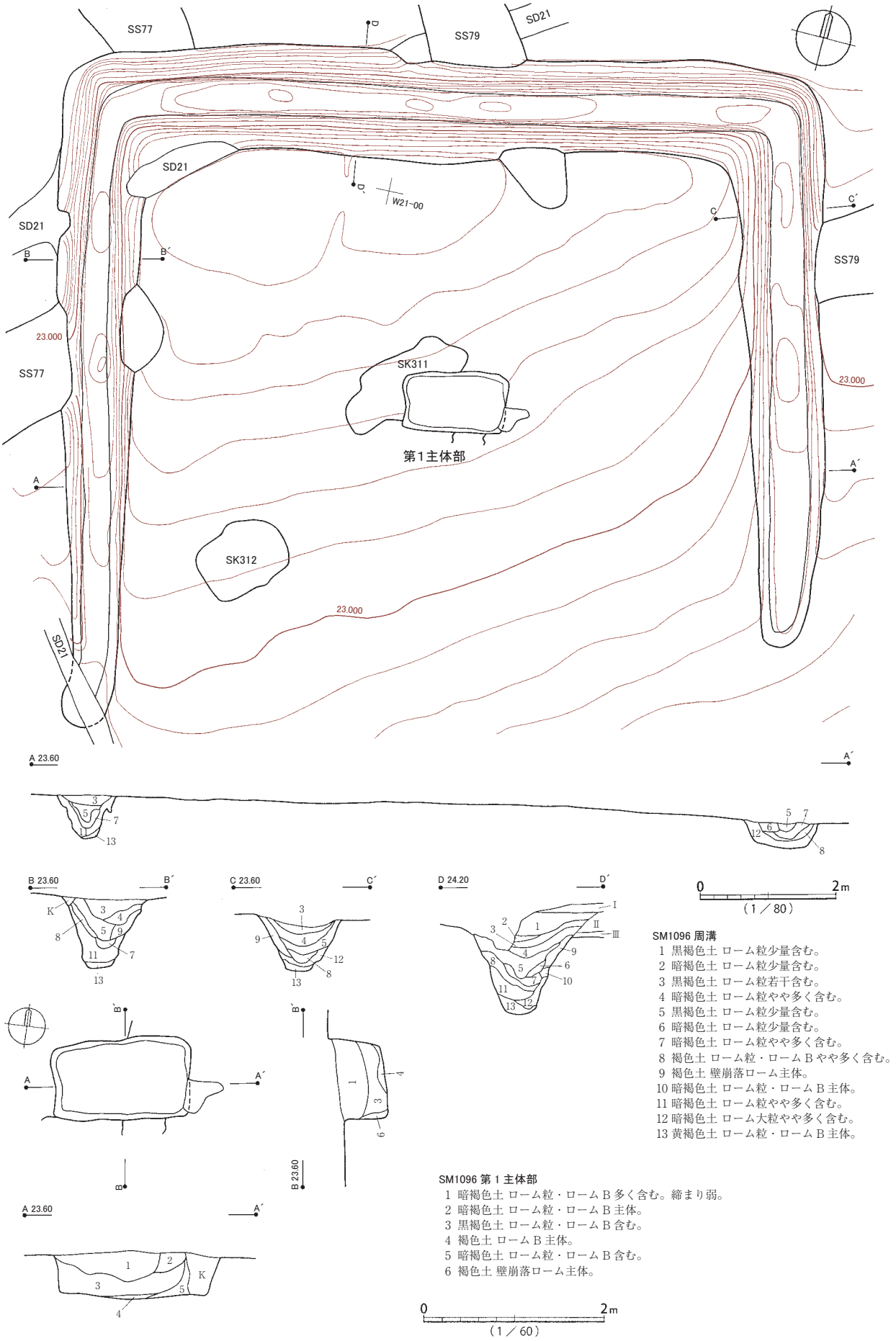
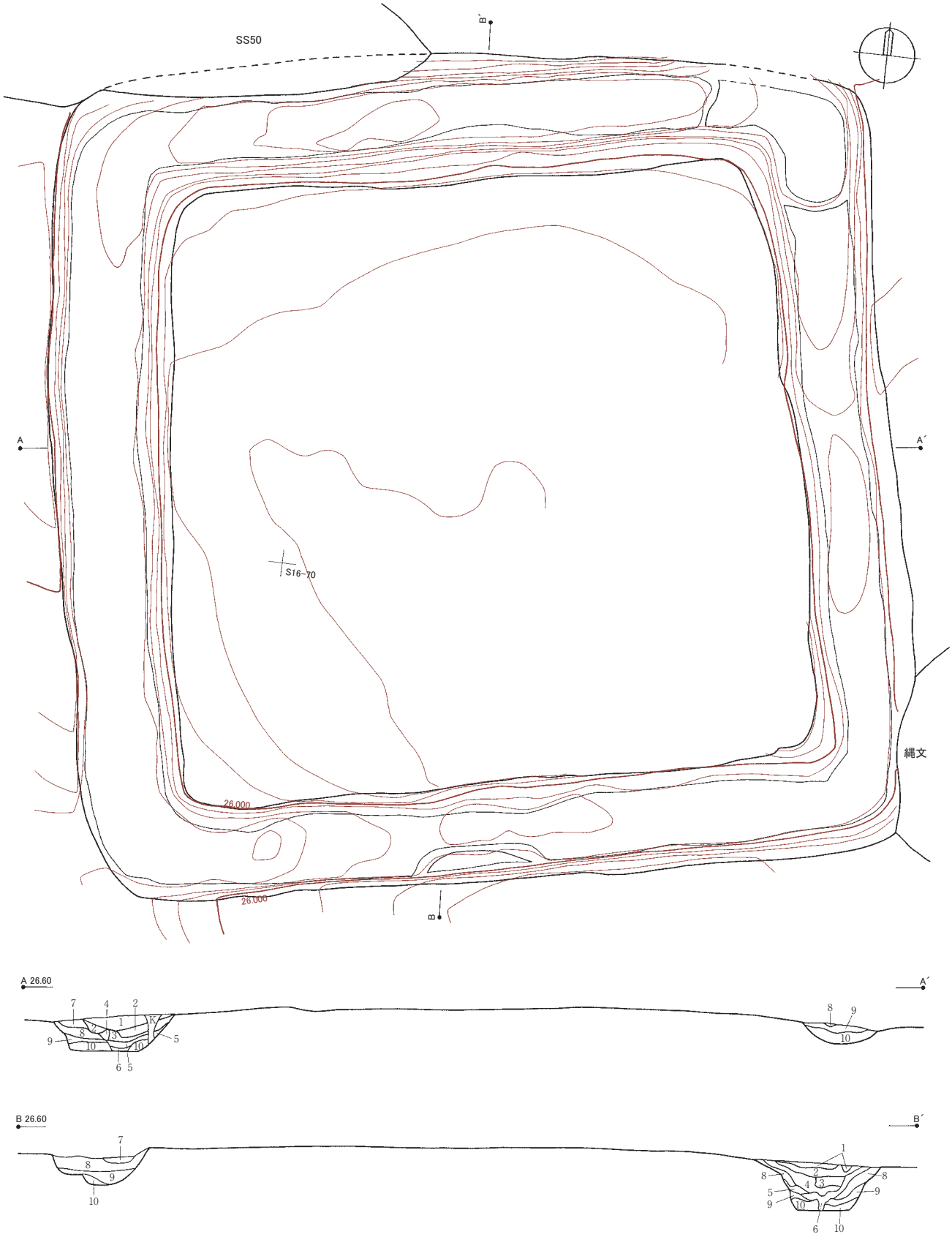


Fig.381　SM1096 遺構実測図



SM1097 周溝

1 黒褐色土 ローム粒若干含む。
2 黒褐色土 ローム粒やや多く含む。
3 暗褐色土 ローム粒混入。
4 黒褐色土 ローム粒やや多く含む。
5 暗褐色土 ローム粒極少量含む。有機質土。
6 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
7 暗褐色土 ローム粒少量含む。
8 褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
9 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
10 黄褐色土 ローム B 主体層。

0 2m
（1／80）

Fig.382　SM1097 遺構実測図

N-88.5°-Wを示す。墓壙のほぼ中央に、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.10m幅0.96m、下端で長さ1.98m幅0.88m深さ0.66mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-87°-Wを示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、1点の須恵器片が覆土一括で検出されているに過ぎない。

SM1101　099地区　（Fig.387、PL.173）

M-21・22グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号は099-4102号遺構である。

墳丘と周溝

長径8.56m、短径8.24mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-18°-Wを示す。周溝内側面積は70.6㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第57位の規模である。確認面での周溝幅は、0.96～1.90m、深さは0.58～0.72mを測り、全体的に均整のとれた方形形状で周溝が巡り、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.48m短径1.22m深さ0.86m、下端で長径2.38m短径1.04mを測り、主軸方位はN-70°-Eを示す。墓壙のほぼ中央に、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.06m幅0.68m、下端で長さ1.96m幅0.62m深さ0.54mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-69°-E を示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、3点の土師器・須恵器が覆土一括で検出されている。1は須恵器広口長頸壺、2～3は土師器小型鉢である。何れの遺物も8世紀前半代の所産であり、本墳の築造年代もその辺りに想定されよう。

SM1102　SW83地区　（Fig.388～389、PL.134～135・173・191・204）

U-22・23グリッドに位置する。四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号はSW83-K10号遺構である。

墳丘と周溝

長径8.10m、短径6.32mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-7°-Wを示す。周溝内側面積は、北側周溝内法からの復元で（68.1）㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第58位の規模である。確認面での周溝幅は、1.64～1.86m、深さは0.34～0.86m、土層断面図上の深さは0.86～1.34mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央に2基検出されている。

第1主体部

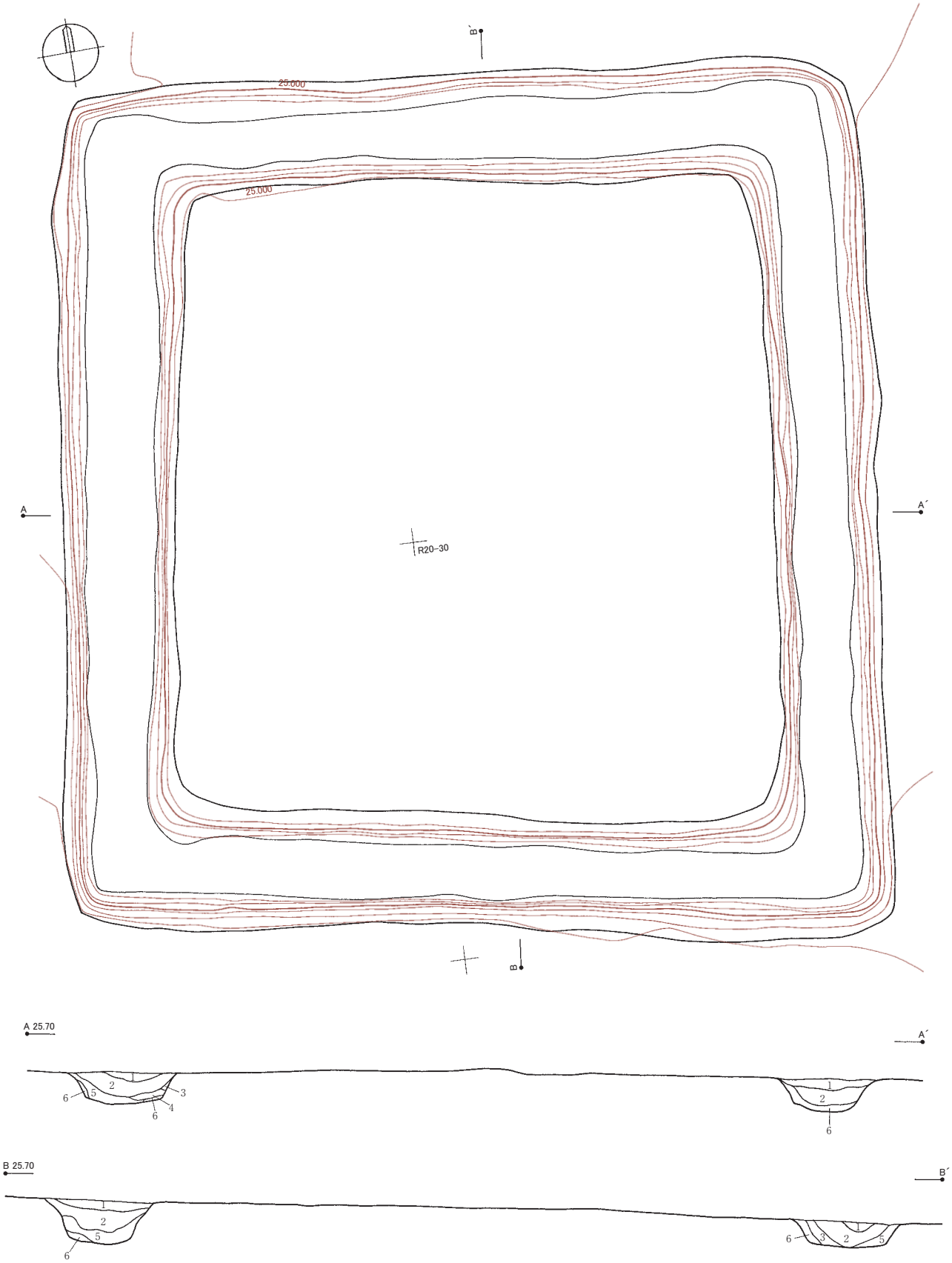
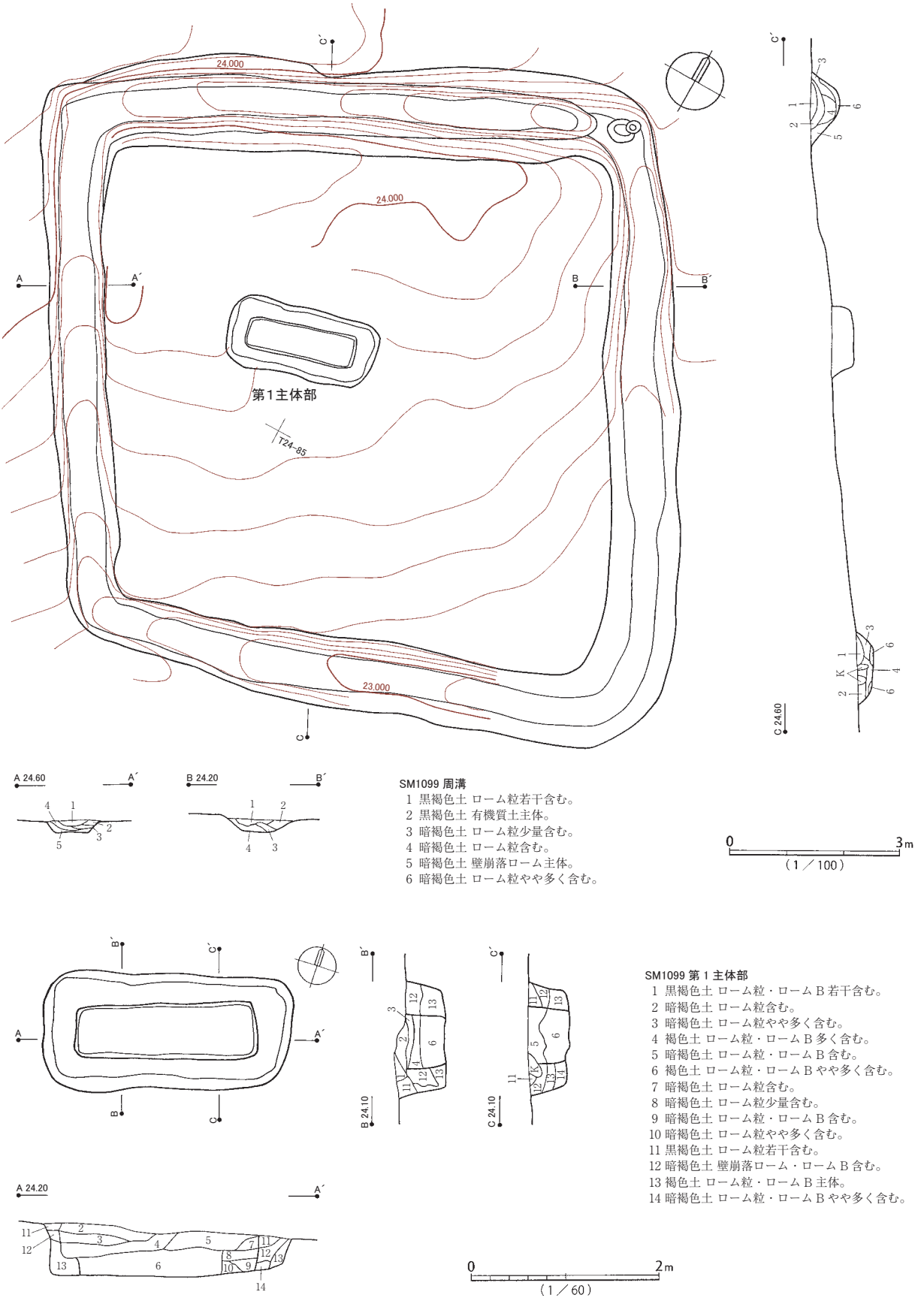


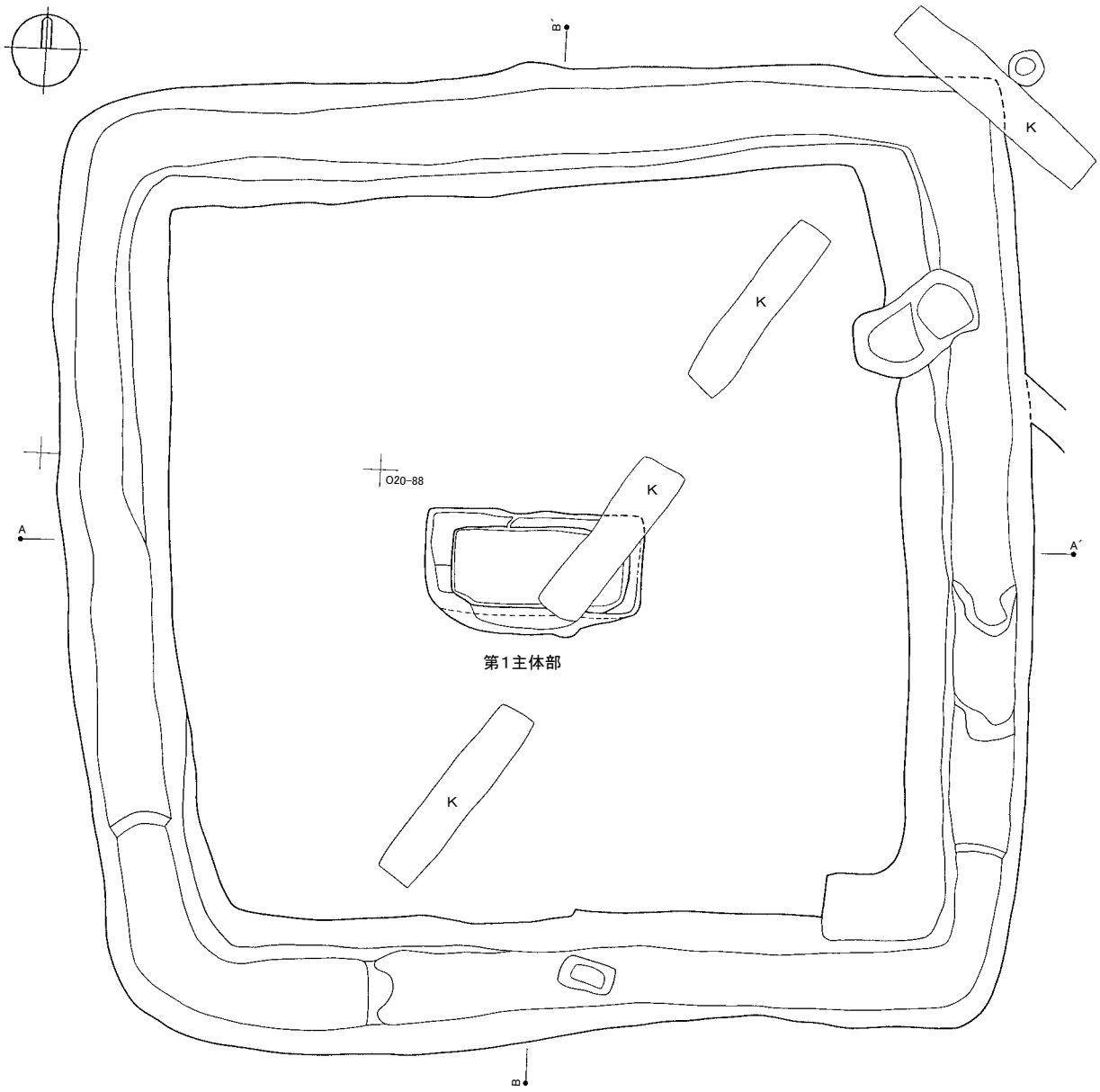
Fig.383　SM1098 遺構実測図

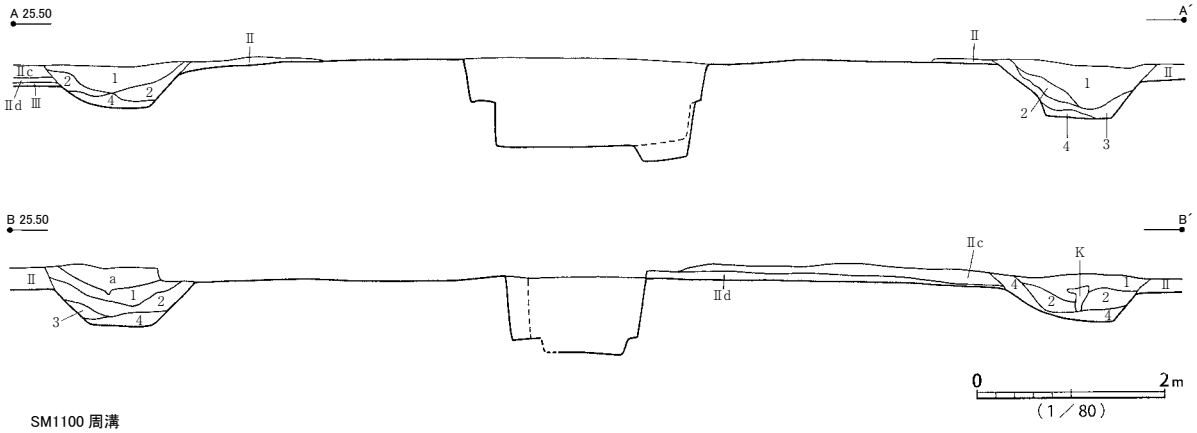


SM1099 周溝
1 黒褐色土 ローム粒若干含む。
2 黒褐色土 有機質土主体。
3 暗褐色土 ローム粒少量含む。
4 暗褐色土 ローム粒含む。
5 暗褐色土 壁崩落ローム主体。
6 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。

SM1099 第1主体部
1 黒褐色土 ローム粒・ローム B 若干含む。
2 暗褐色土 ローム粒含む。
3 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
4 褐色土 ローム粒・ローム B 多く含む。
5 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
6 褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
7 暗褐色土 ローム粒含む。
8 暗褐色土 ローム粒少量含む。
9 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
10 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
11 黒褐色土 ローム粒若干含む。
12 暗褐色土 壁崩落ローム・ローム B 含む。
13 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
14 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。

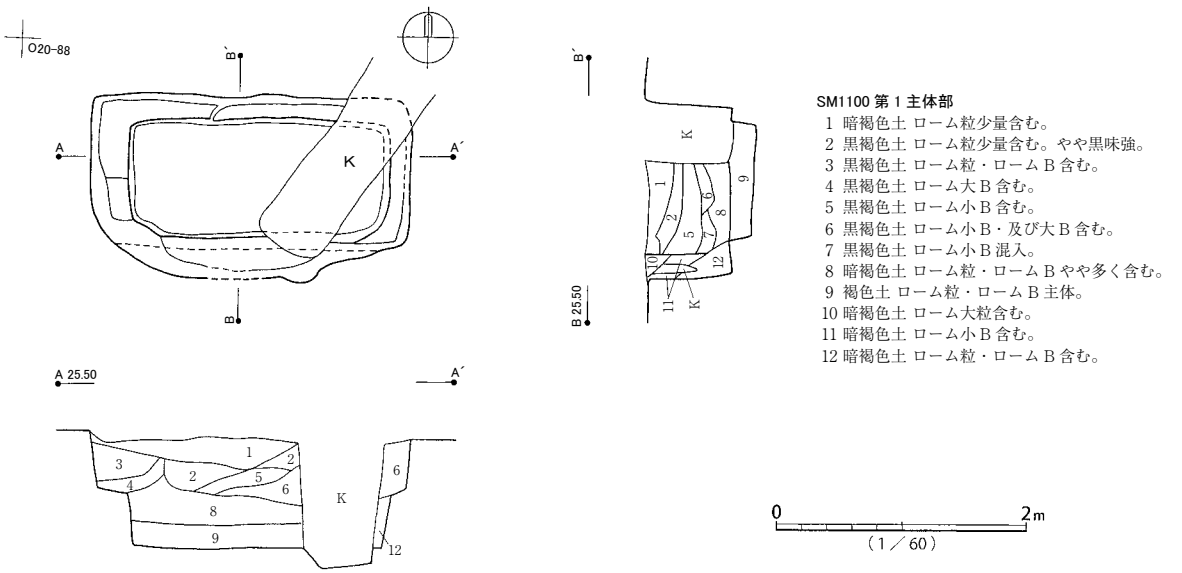
Fig.384　SM1099 遺構実測図





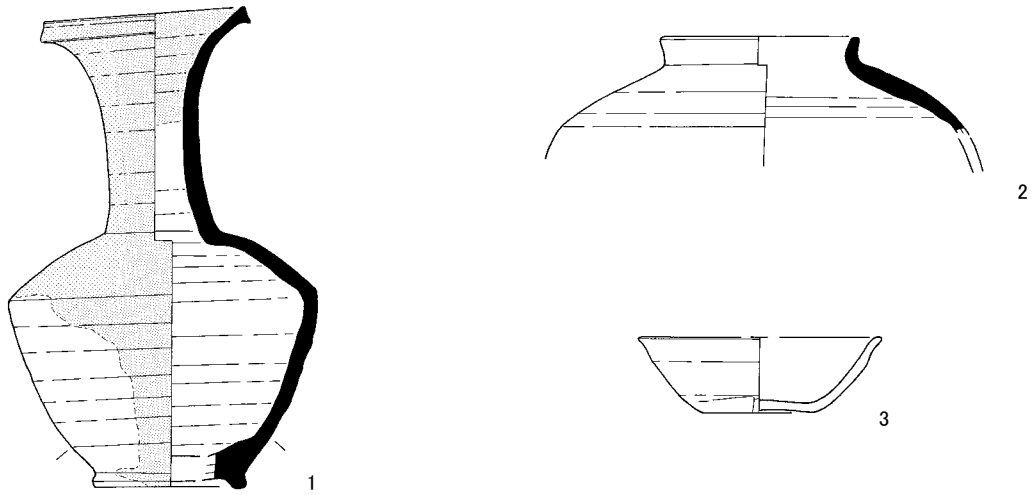
SM1100 周溝
1 黒褐色土 ローム粒若干含む。
2 暗褐色土 ローム粒少量含む。
3 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
4 暗褐色土 ローム粒3層より多く含む。
a 暗褐色土 溝覆土。

Fig.385　SM1100 遺構 (1) 実測図

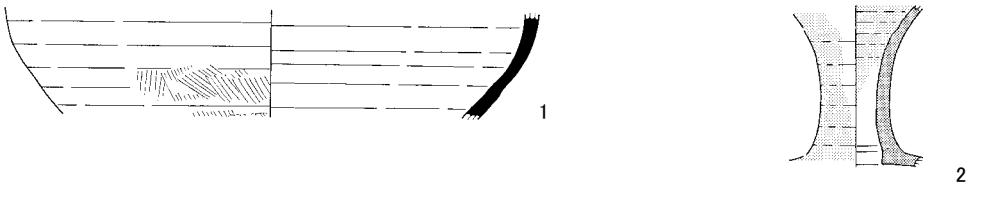


SM1100 第 1 主体部
1 暗褐色土 ローム粒少量含む。
2 黒褐色土 ローム粒少量含む。やや黒味強。
3 黒褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
4 黒褐色土 ローム大 B 含む。
5 黒褐色土 ローム小 B 含む。
6 黒褐色土 ローム小 B・及び大 B 含む。
7 黒褐色土 ローム小 B 混入。
8 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
9 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
10 暗褐色土 ローム大粒含む。
11 暗褐色土 ローム小 B 含む。
12 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。

SM1097



SM1099



SM1100

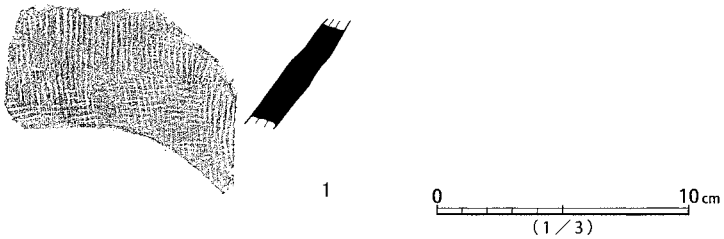


Fig.386　SM1100 遺構 (2)・遺物、SM1097 遺物、SM1099 遺物実測図

第1主体部は、方台部中央南側に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.84m短径1.06m深さ1.12m、下端で長径2.30m短径0.68mを測り、主軸方位はN-70°-Eを示す。墓壙のほぼ中央に、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.32m幅0.72m、下端で長さ2.00m幅0.66m深さ0.70mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-70°-E を示す。

木棺内の南端部付近から、棺底密着の状況で先端部と茎部の大半を欠いた1-1の刀子片が検出されている。

第2主体部

第2主体部は、第1主体部の北側に検出された小型の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径1.58m短径0.76m深さ0.54m、下端で長径1.36m短径0.56mを測り、主軸方位はN-82°-Eを示す。底面はほぼ平坦であり、西側端部に深さ15㎝程のピットが検出されている。墓壙が小型であることから、小児ないしは火葬を含む改葬骨を埋葬した墓壙である可能性が考えられる。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳方台部内の墓壙外から1の須恵器坏が確認面より25㎝浮いた状況で、西側周溝内では周溝底密着で2の土師器甕が検出されている。本墳の築造年代は、1の須恵器坏から8世紀中葉と想定される。

SM1103　TJ地区　（Fig.390、PL.135・191）

I・J-15・16グリッドに位置する。北西コーナー部を下層に位置する竪穴と重複する。四隅が直角な終末期方墳である。旧遺構番号はTJ-5号遺構である。

墳丘と周溝

長径8.94m、短径7.46mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-23°-Wを示す。周溝内側面積は66.8㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第59位の規模である。確認面での周溝幅は、0.94～1.26m、深さは0.38～0.46mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央に検出された土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.96m短径1.53m深さ0.36m、下端で長径2.64m短径1.40mを測り、主軸方位はN-63°-Eを示す。底面はほぼ平坦であり、北西コーナー部にピット1か所が認められるが、深さの測定値はない。

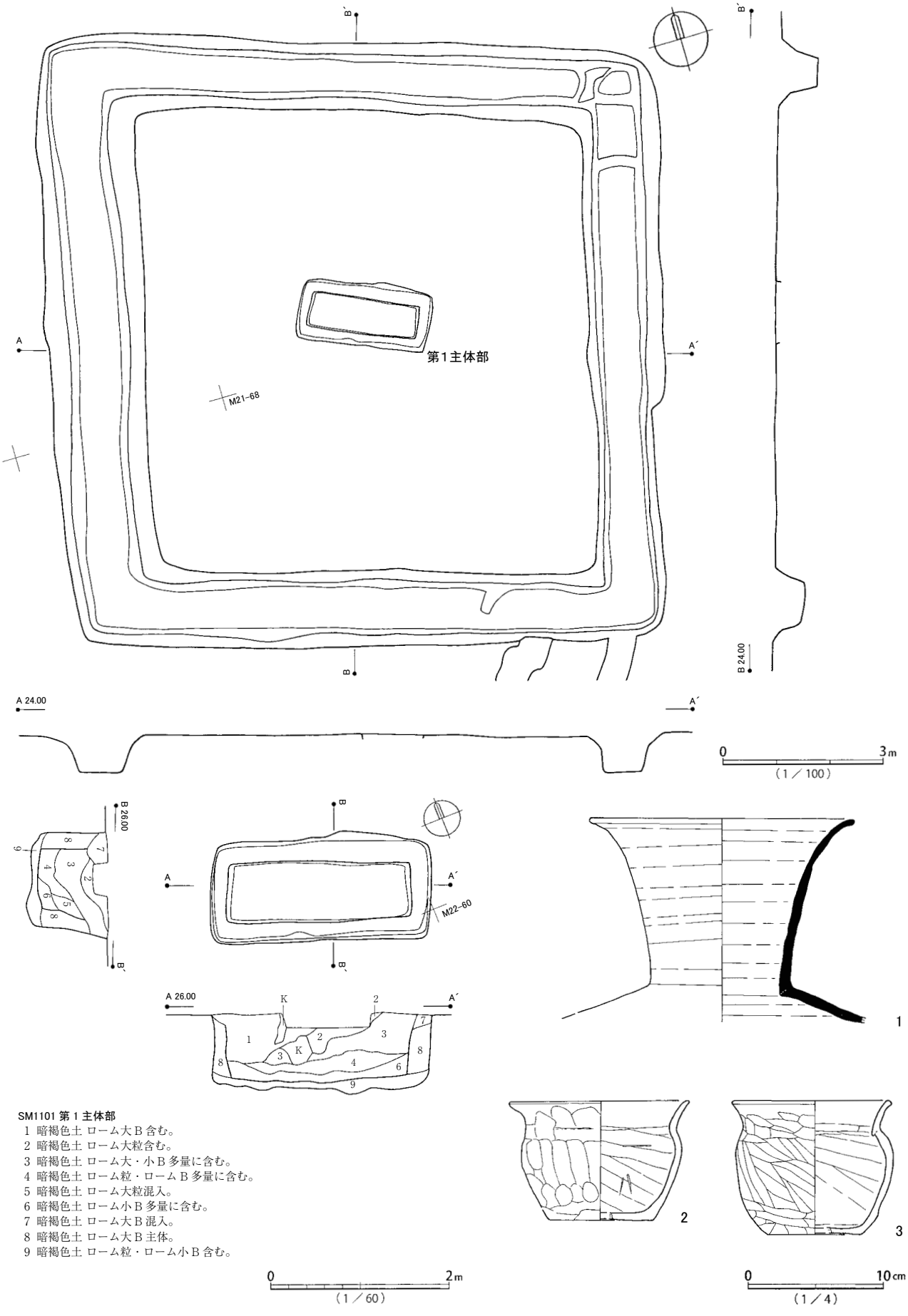
墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、土師器甕他4点の遺物が、覆土一括で取り上げられている。出土遺物を観察すると、何れの土器も古墳時代前期の所産と捉えられることから、時期的に本墳とは整合しない。下層に位置する竪穴住居跡等に帰属すべき遺物なのであろう。

SM1104　099地区　（Fig.391、PL.135・173・204）

M・N-18グリッドに位置する。北東コーナーを溝と重複しているが、四隅が直角的な終末期方墳である。旧遺構番号は099-4087号遺構である。



SM1101 第 1 主体部
1 暗褐色土 ローム大Ｂ含む。
2 暗褐色土 ローム大粒含む。
3 暗褐色土 ローム大・小Ｂ多量に含む。
4 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ多量に含む。
5 暗褐色土 ローム大粒混入。
6 暗褐色土 ローム小Ｂ多量に含む。
7 暗褐色土 ローム大Ｂ混入。
8 暗褐色土 ローム大Ｂ主体。
9 暗褐色土 ローム粒・ローム小Ｂ含む。

Fig.387　SM1101 遺構・遺物実測図

墳丘と周溝

長径8.44m、短径7.90mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-1°-Wを示す。周溝内側面積は66.4㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第60位の規模である。確認面での周溝幅は、0.94～1.14m、深さは0.52～0.62mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央に検出された土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.84m短径1.24m深さ0.56m、下端で長径2.32m短径0.92mを測り、主軸方位はN-85°-Eを示す。底面はほぼ平坦であり、中央東寄りに深さ10㎝程度のピット2か所が認められる。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、須恵器平瓶の類と刀子刃部片2点が検出されているが、何れも覆土一括で取り上げられている。平瓶の示す年代は、7世紀後半～末葉を示すと捉えられる。

SM1105　セ54地区　（Fig.392、PL.135～136・191）

Q・R-19グリッドに位置する。西側周溝を溝と重複するが、四隅が直角的な終末期方墳である。旧遺構番号はセ54-5号遺構である。

墳丘と周溝

長径8.06m、短径7.76mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-1°-Wを示す。周溝内側面積は62.3㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第61位の規模である。方台部内には攪乱が存在し、遺存状況はやや不良である。確認面での周溝幅は、1.28～1.50

m、深さは0.46～0.62mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央に1基検出されている。

第1主体部

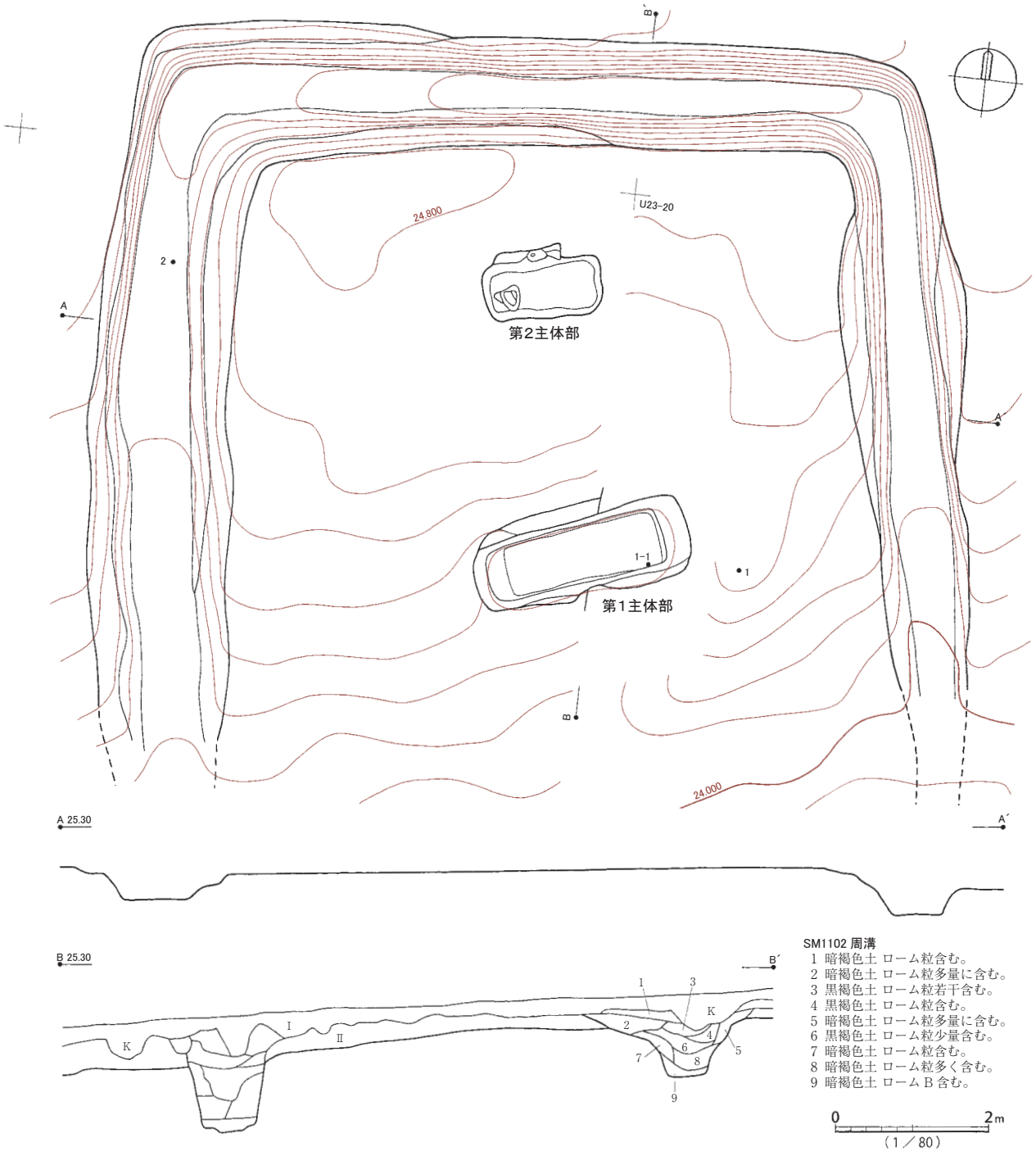
埋葬施設は、方台部中央に検出された土壙墓である。攪乱により一部を削平されており、推定墓壙規模は上端で、長径（2.64）m短径1.44m深さ0.26m、下端で長径2.56m短径1.20mを測り、主軸方位はN-88°-Eを示す。墓壙のほぼ中央に箱型の木棺痕が検出された。推定木棺規模は、上端で長さ1.76m幅0.80m、下端で1.66m幅0.58m深さ0.26mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-89°-Eを示す。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、内外面に赤彩が施された、1の弥生土器鉢底部が覆土一括で検出されているが、時期的には本墳と整合しない。

SM1106　099地区　（Fig.393、PL.136・173）



第 2 主体部

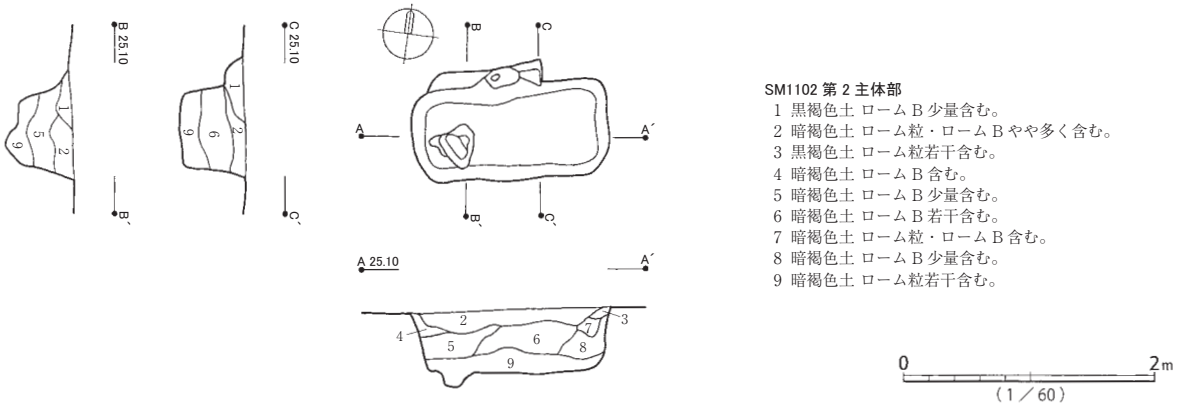
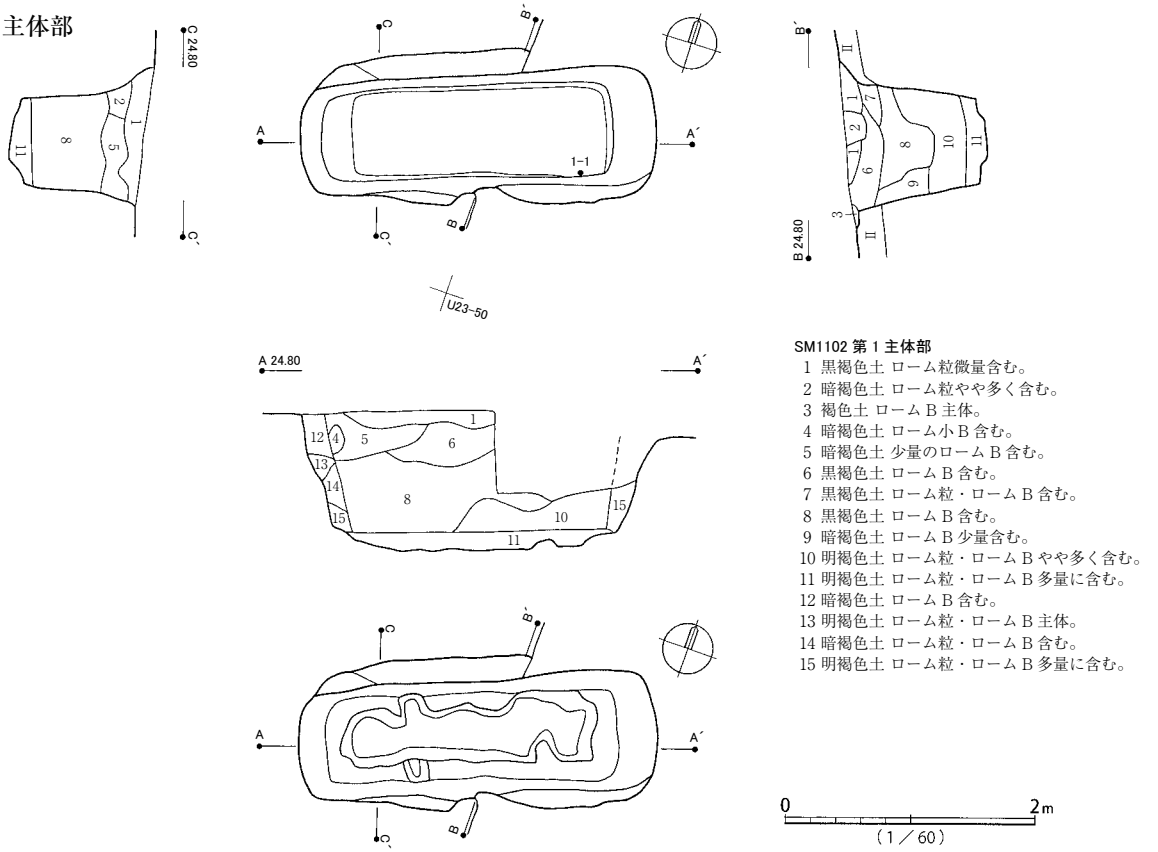


Fig.388　SM1102 遺構 (1) 実測図

第１主体部



SM1102 第１主体部
1 黒褐色土 ローム粒微量含む。
2 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
3 褐色土 ローム B 主体。
4 暗褐色土 ローム小 B 含む。
5 暗褐色土 少量のローム B 含む。
6 黒褐色土 ローム B 含む。
7 黒褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
8 黒褐色土 ローム B 含む。
9 暗褐色土 ローム B 少量含む。
10 明褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
11 明褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
12 暗褐色土 ローム B 含む。
13 明褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
14 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
15 明褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。

0 2m
（1／60）

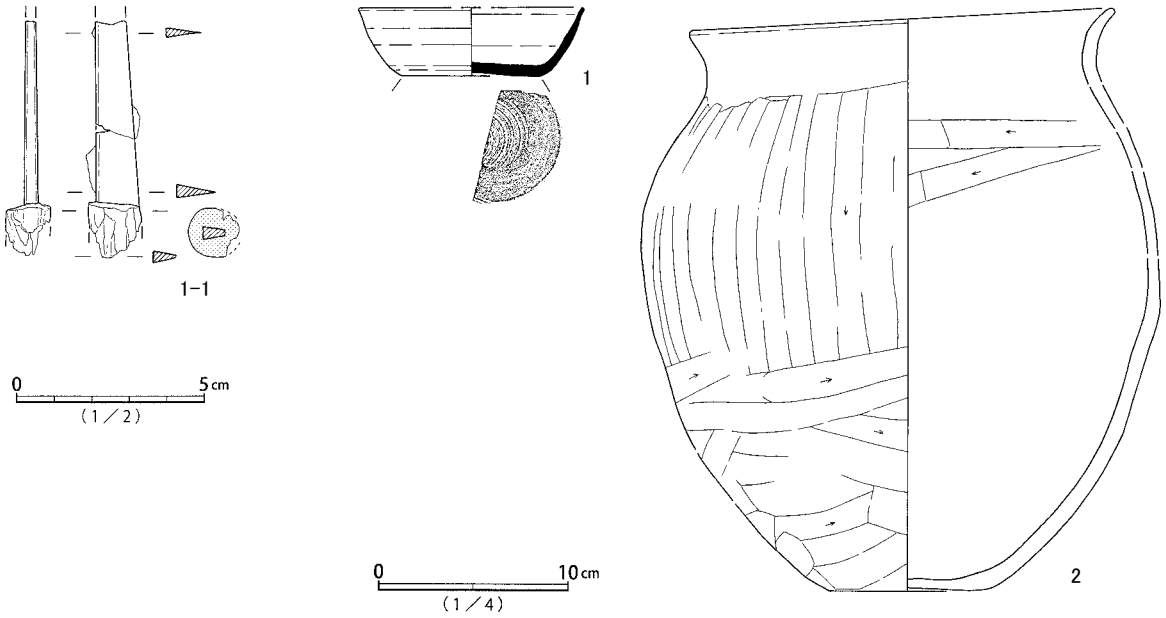
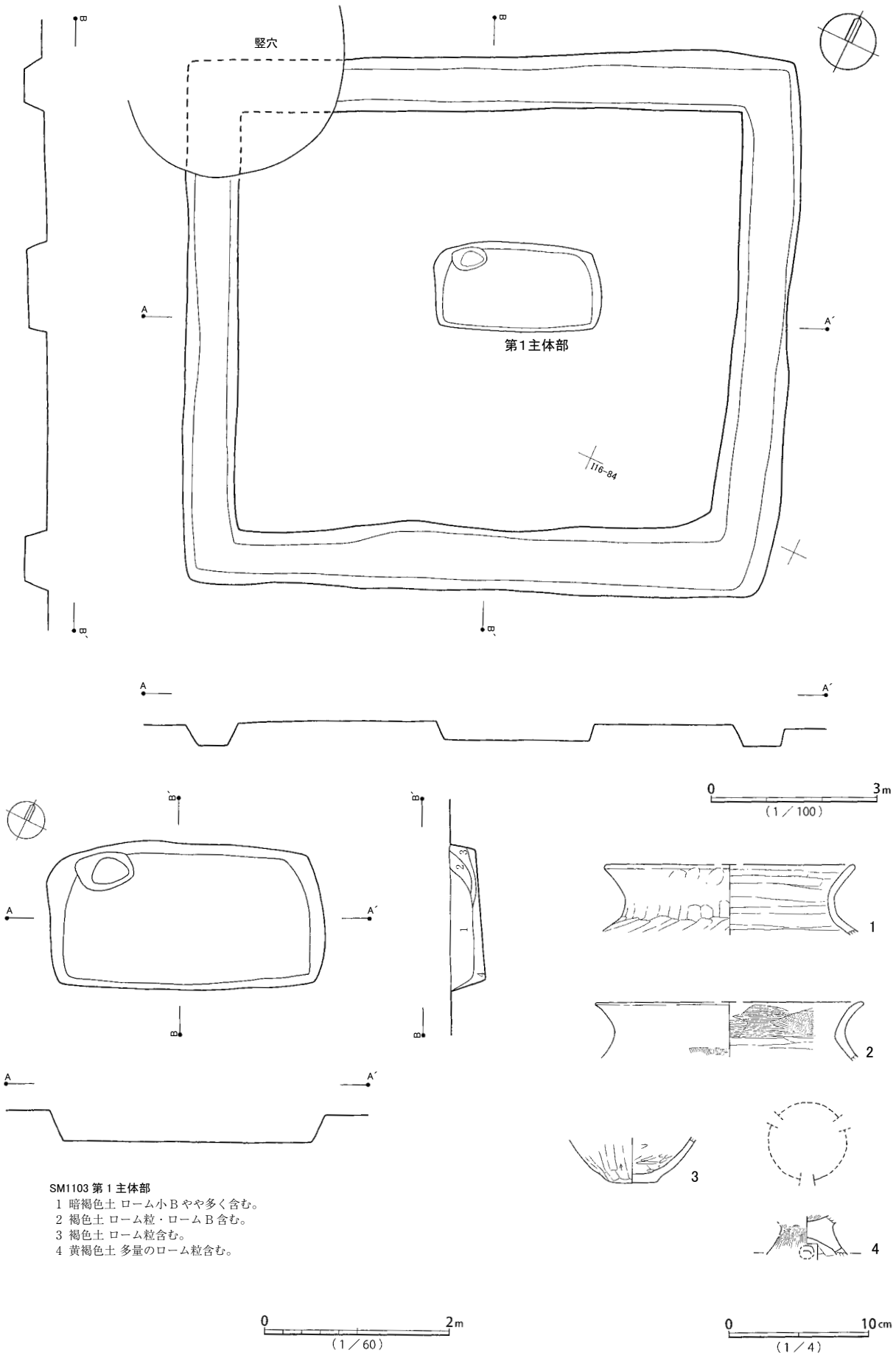


Fig.389　SM1102 遺構 (2)・遺物実測図



SM1103 第 1 主体部
1 暗褐色土 ローム小Ｂやや多く含む。
2 褐色土 ローム粒・ロームＢ含む。
3 褐色土 ローム粒含む。
4 黄褐色土 多量のローム粒含む。

Fig.390　SM1103 遺構・遺物実測図

O･P-21グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳である。方台部内には攪乱が存在し、遺存状況はやや不良である。旧遺構番号は099-4110号遺構である。

墳丘と周溝

長径8.00m、短径7.88mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-3°-Wを示す。周溝内側面積は60.9㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第62位の規模である。確認面での周溝幅は、0.78～1.18m、深さは0.20～0.32m、土層断面図上の深さは0.38～0.70mを測る。全体的に均整のとれた方形形状で、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央に検出された木棺直葬の土壙墓である。攪乱により上層の一部を削平されているが、遺存状況は比較的良好である。墓壙規模は上端で、長径2.46m短径1.18m深さ0.62m、下端で長径2.34m短径1.04mを測り、主軸方位はN-89.5°-Eを示す。墓壙の東南壁に沿って箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.08m幅0.88m、下端で1.96m幅0.72m深さ0.58mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-89.5°-Wを示す。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳北側周溝内からは、周溝底から10㎝浮いた状況で1の須恵器長頸壺が検出されている。肩張のその器形から、7世紀末葉～8世紀前半代の年代観が想定される。

SM1107　SW83地区　（Fig.394～395、PL.136～137･173･191）

T･U-25グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳である。旧遺構番号はSW83-K23号遺構である。

墳丘と周溝

長径7.60m、短径7.50mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-22°-Wを示す。周溝内側面積は57.6㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第63位の規模である。確認面での周溝幅は、0.90～1.46m、深さは0.30～0.58mを測る。南緩斜面に位置するため、南側周溝が狭くて浅い傾向を示している。南側周溝を除けば、全体的に均整のとれた方形形状で、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

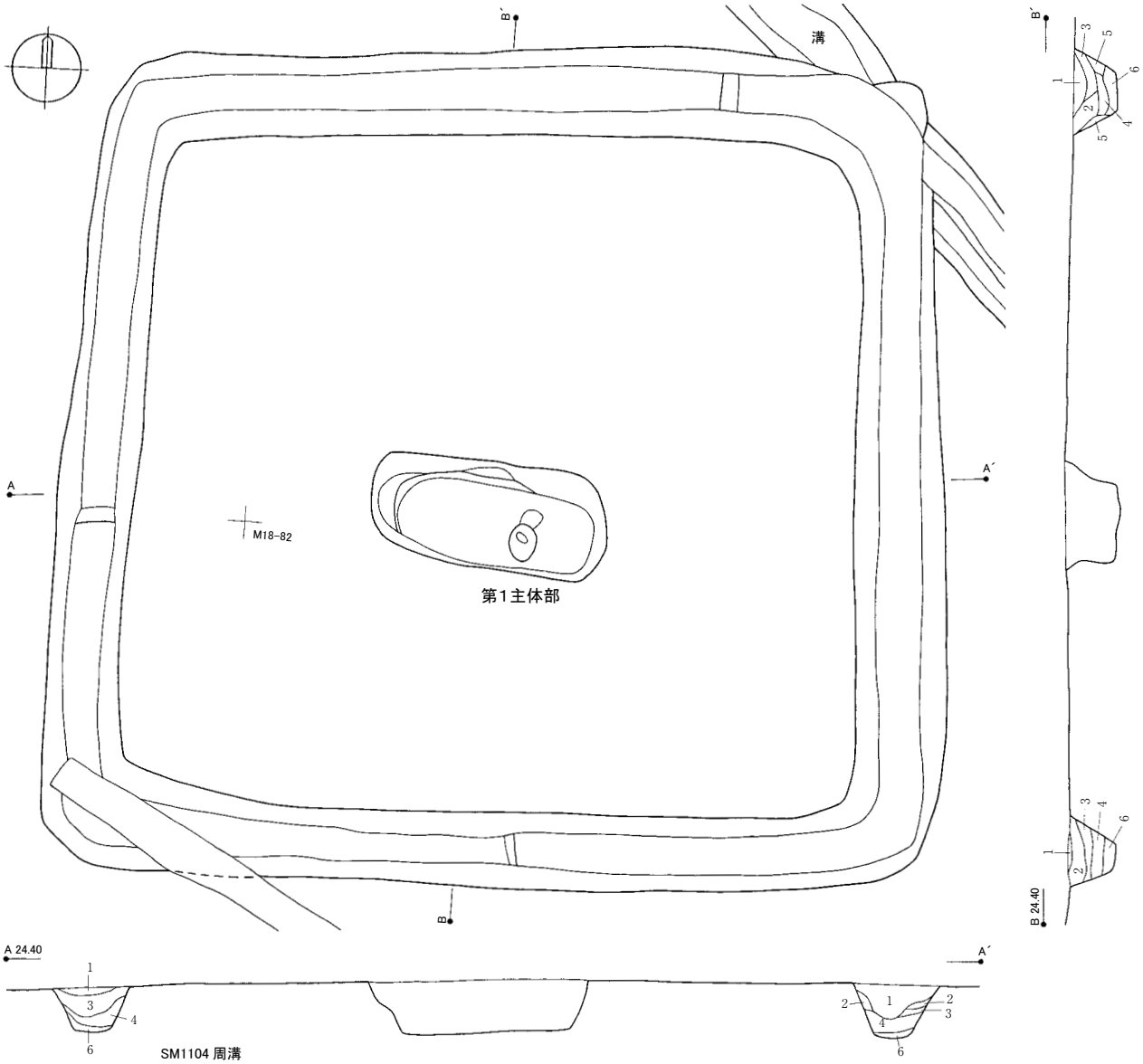
埋葬施設

方台部内中央に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.51m短径1.30m深さ0.54m、下端で長径2.48m短径1.10mを測り、主軸方位はN-65°-Eを示す。墓壙のほぼ中央から、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.04m幅0.62m、下端で1.92m幅0.50m深さ0.50mを測る。底面はほぼ平坦であり、淡い赤褐色に変色した範囲が、木棺痕内の東側墓壙底に沿って検出されている。木棺痕の主軸方位はN-65°-Eを示す。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。



SM1104 周溝
1 暗褐色土 多量のローム粒含む。
2 黒褐色土 ローム粒若干含む。
3 黒色土 有機質土主体。
4 暗褐色土 ローム粒含む。
5 褐色土 ローム粒主体。
6 暗黄褐色土 ローム粒・ロームＢ多量に含む。

SM1104 第１主体部
1 黒褐色土 ローム粒等ほとんど含まない。
2 暗褐色土 ローム粒と暗褐色土の混合土。
若干のロームＢ含む。
3 黒褐色土 ローム粒と黒色土の混合土。
4 暗褐色土 ローム粒・ロームＢ若干含む。
5 暗褐色土 ローム粒若干含む。
6 明褐色土 多量のローム粒・ロームＢ含む。
7 暗褐色土 ローム粒・若干のロームＢ含む。

Fig.391　SM1104 遺構・遺物実測図

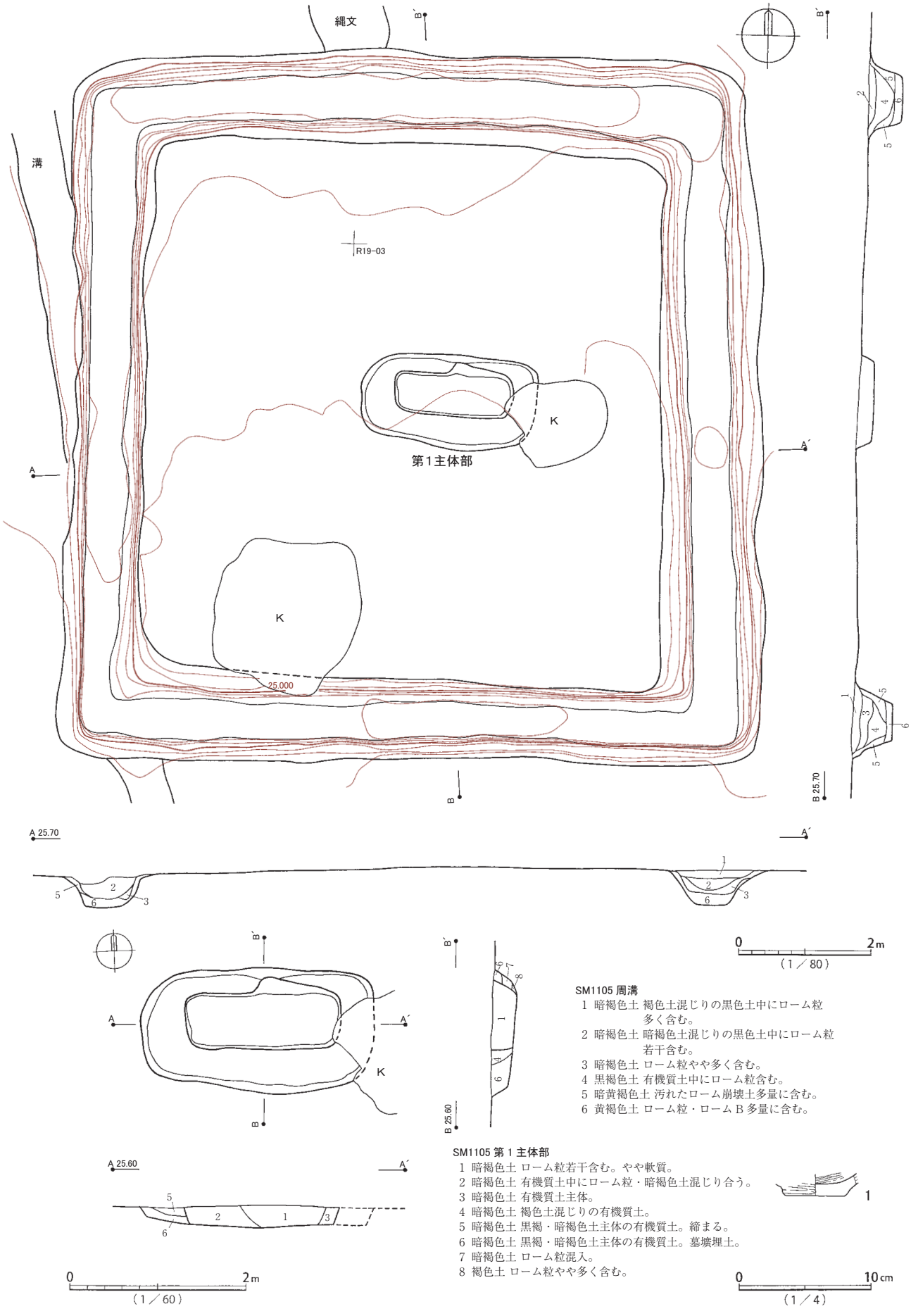


Fig.392　SM1105 遺構・遺物実測図

出土遺物

本墳南側周溝内からは、周溝底から29㎝浮いた状態で1の土師器甕、38㎝浮いた状態で2の土師器小型甕、46㎝浮いた状態で3の須恵器大甕片が検出されている。土師器甕型土器の形態から、本墳の築造年代は8世紀初頭と想定される。

SM1108　セ54地区　（Fig.395、PL.137）

V-21・22グリッドに位置する。調査区の境目に存在したことから四隅は検出されず、遺存状況が不良な終末期方墳である。旧遺構番号はセ54-47号遺構である。

墳丘と周溝

残存長径5.40m、残存短径3.30mを測り、現状での盛土は存在せず、西側周溝の傾き方位はN-8°-Wを示す。周溝内側面積は測定不能であるが、紙面の都合上ここに掲載する。確認面での周溝幅は、1.00～1.10m、深さは0.25～0.46mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内に1基検出されている。周囲は既に削平されており、遺存状況は極めて不良である。

第1主体部

埋葬施設は、方台部内に検出された土壙墓である。残存する墓壙規模は上端で、長径1.80m短径1.08m深さ0.40m、下端で長径1.70m短径0.96mを測り、主軸方位はN-83°-Eを示す。残存する墓壙の底面はほぼ平坦である。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1109　099地区　（Fig.396）

P-23グリッドに位置する。周溝幅が極めて細く、四隅の形態が崩れた終末期方墳である。旧遺構番号は099-4106号遺構である。

墳丘と周溝

長径7.76m、短径7.70mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-11°-Wを示す。周溝内側面積は57.6㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第64位の規模である。確認面での周溝幅は、0.36～0.62m、深さは0.20～0.32mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内の南西端部に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部南西に検出された土壙墓である。残存する墓壙規模は上端で、長径1.68m短径0.70m深さ0.14m、下端で長径1.58m短径0.62mを測り、主軸方位はN-29°-Wを示す。墓壙底面はほぼ平坦である。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1110　セ54地区　（Fig.397、PL.137）

T-16・17グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳である。旧遺構番号はセ54-21号遺構である。

墳丘と周溝

長径7.58m、短径7.34mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-17°-Wを示す。周溝内側面積は55.9㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第65位の規模である。確認面での周溝幅は、1.06～1.50m、深さは0.36～0.64mを測る。緩斜面に位置するため、周溝は北側が広く南側が狭い傾向があり、断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.84m短径1.22m深さ1.00m、下端で長径2.80m短径1.12mを測り、主軸方位はN-81°-Eを示す。墓壙のほぼ中央から、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.18m幅0.62m、下端で2.04m幅0.56m深さ0.58mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-80°-Eを示す。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1111　099地区　（Fig.398、PL.191）

M-7・8グリッドに位置する。下層に位置するSS20と重複する終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号は099-4040号遺構である。

墳丘と周溝

長径7.54m、短径7.32mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-3°-Eを示す。周溝内側面積は54.2㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳系では第66位の規模である。確認面での周溝幅は、0.66～1.04m、深さは0.14～0.36mを測り、断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

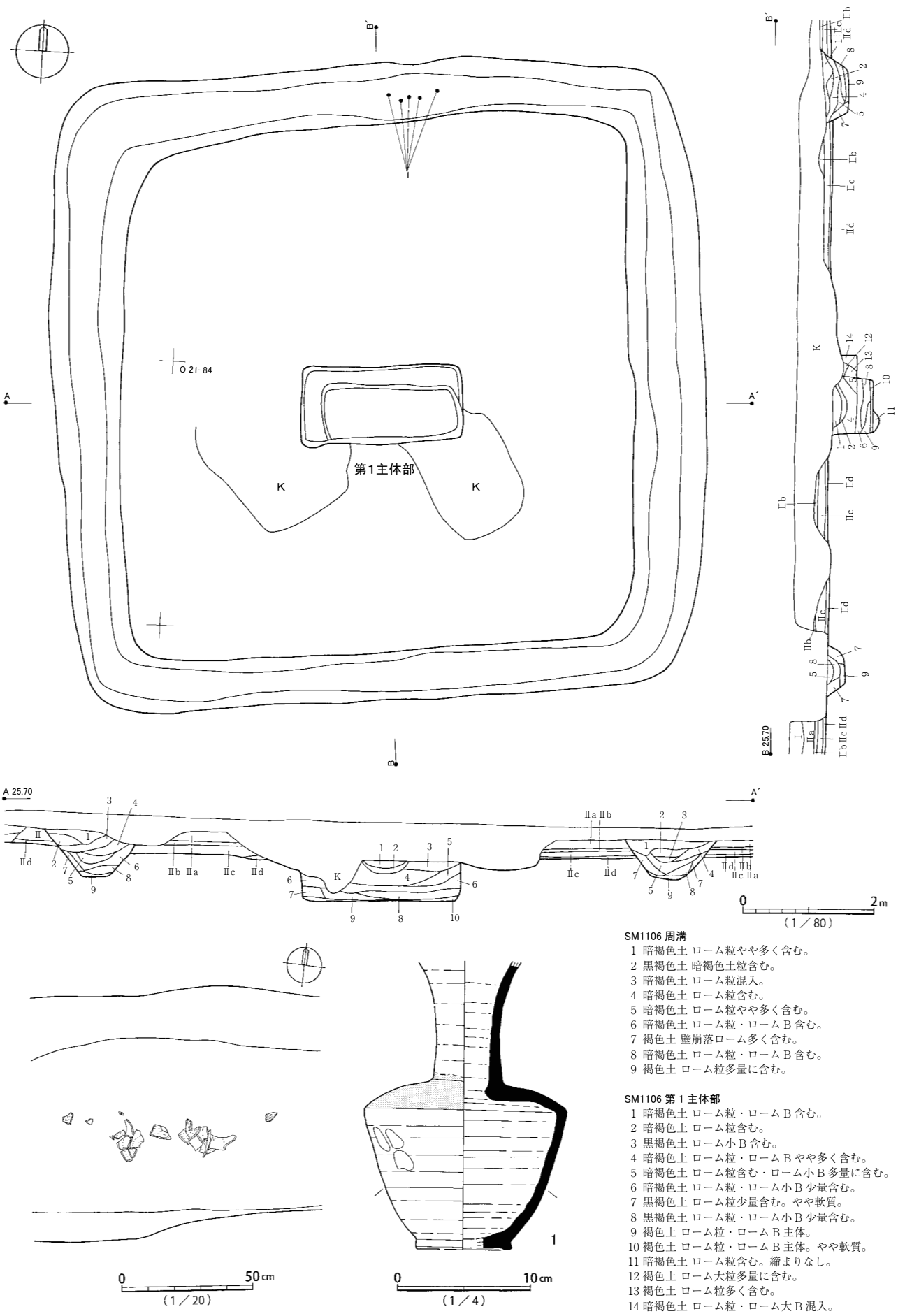
調査段階では攪乱として捉えられていたが、方台部内中央に位置し、下層のSS20の周溝を削平することから、可能性として本墳埋葬施設の小土壙として報告しておく。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央に検出された小土壙である。墓壙規模は上端で、長径0.94m短径0.80m深さ0.65mを測り、主軸方位はN-90°を示す。調査所見では攪乱とされるが、この時期のこのタイプの遺構には小土壙が伴う事例が多々あり、また方台部の中央に位置し、SS20の周溝を確実に削平していることなどを考慮すると、本跡に伴う火葬を含む改葬墓系の埋葬施設として捉えることが妥当と判断される。

墓壙内からは、1須恵器杯蓋1点、3～9須恵器甕7点、2灰釉陶器長頸壺1点が覆土一括で検出されている。

出土遺物



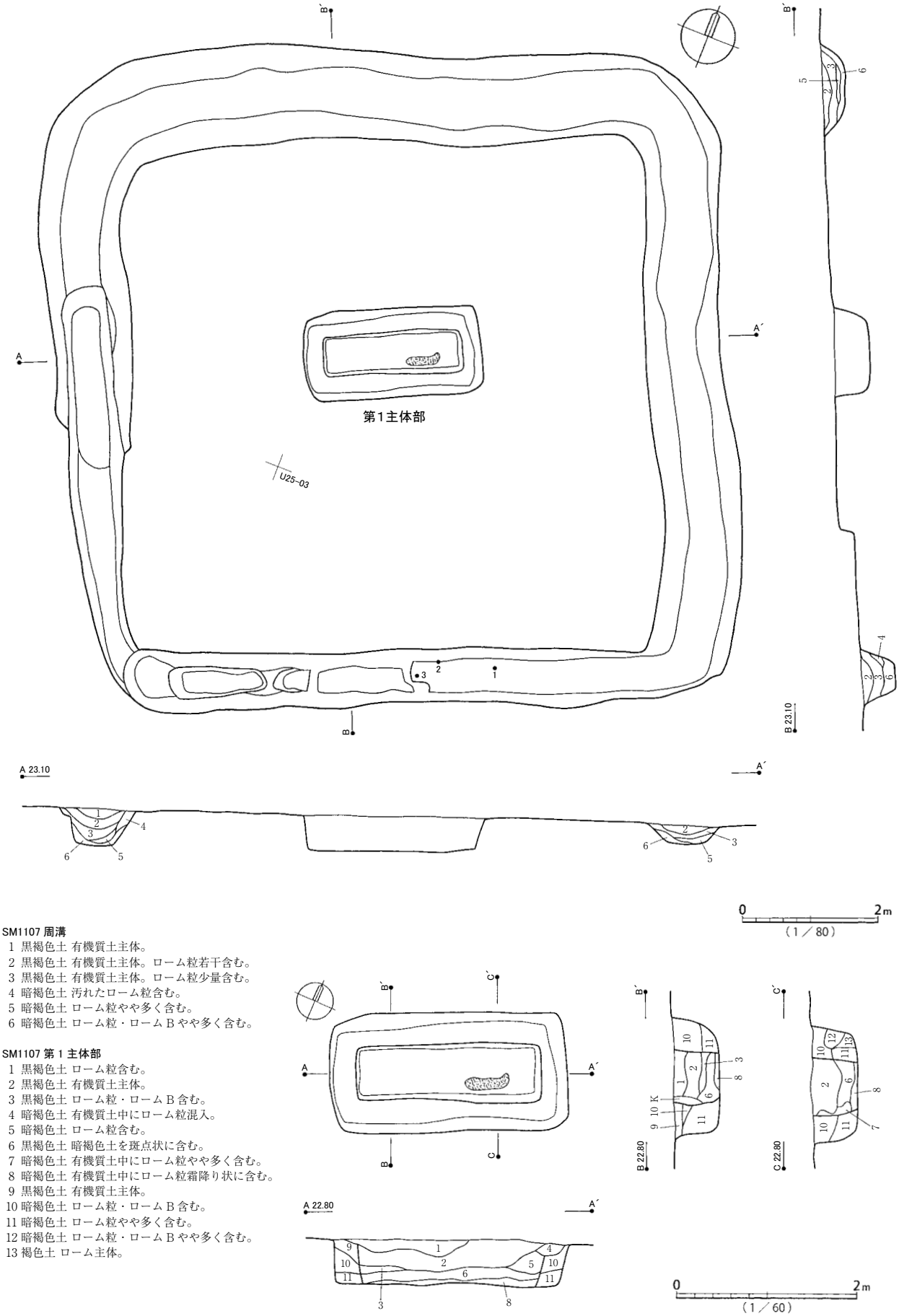
SM1106 周溝

1 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
2 黒褐色土 暗褐色土粒含む。
3 暗褐色土 ローム粒混入。
4 暗褐色土 ローム粒含む。
5 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
6 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
7 褐色土 壁崩落ローム多く含む。
8 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
9 褐色土 ローム粒多量に含む。

SM1106 第 1 主体部

1 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
2 暗褐色土 ローム粒含む。
3 黒褐色土 ローム小 B 含む。
4 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
5 暗褐色土 ローム粒含む・ローム小 B 多量に含む。
6 暗褐色土 ローム粒・ローム小 B 少量含む。
7 黒褐色土 ローム粒少量含む。やや軟質。
8 黒褐色土 ローム粒・ローム小 B 少量含む。
9 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
10 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。やや軟質。
11 暗褐色土 ローム粒含む。締まりなし。
12 褐色土 ローム大粒多量に含む。
13 褐色土 ローム粒多く含む。
14 暗褐色土 ローム粒・ローム大 B 混入。

Fig.393　SM1106 遺構・遺物出土詳細・遺物実測図



SM1107 周溝

1 黒褐色土 有機質土主体。
2 黒褐色土 有機質土主体。ローム粒若干含む。
3 黒褐色土 有機質土主体。ローム粒少量含む。
4 暗褐色土 汚れたローム粒含む。
5 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
6 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。

SM1107 第 1 主体部

1 黒褐色土 ローム粒含む。
2 黒褐色土 有機質土主体。
3 黒褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
4 暗褐色土 有機質土中にローム粒混入。
5 暗褐色土 ローム粒含む。
6 黒褐色土 暗褐色土を斑点状に含む。
7 暗褐色土 有機質土中にローム粒やや多く含む。
8 暗褐色土 有機質土中にローム粒霜降り状に含む。
9 黒褐色土 有機質土主体。
10 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
11 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
12 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
13 褐色土 ローム主体。

Fig.394　SM1107 遺構実測図

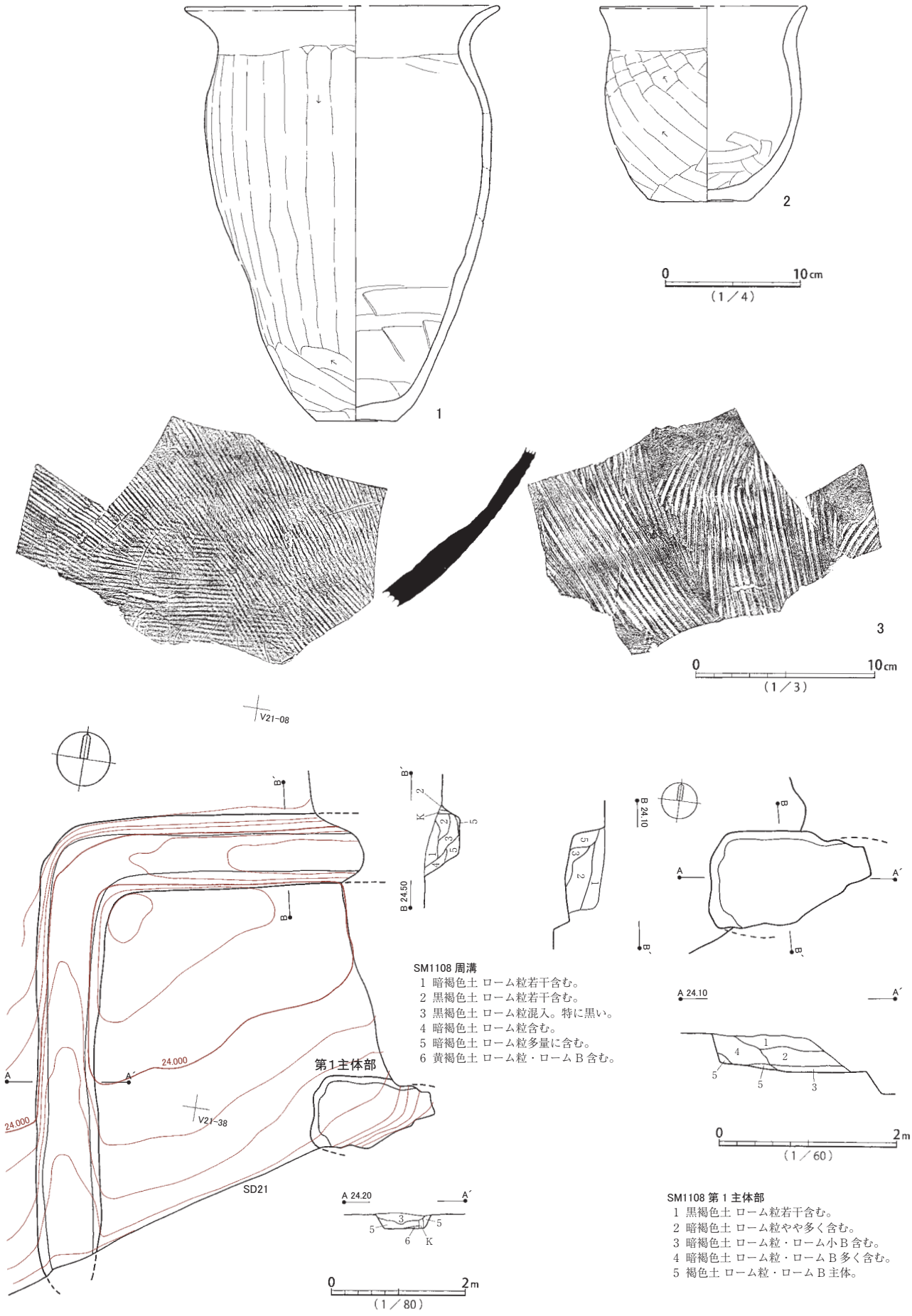


Fig.395　SM1107 遺物、SM1108 遺構実測図

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1112　セ54地区　（Fig.398、PL.137）

V-19グリッドに位置する。下層に存在するSS78と重複し、四隅は明瞭に検出されてはいないが、終末期の極小方墳と判断される。旧遺構番号はセ54-133号遺構である。

墳丘と周溝

残存長径1.80m、残存短径1.40mを測り、現状での盛土は存在せず、東側周溝の傾き方位はN-5°-Eを示す。周溝内側面積は測定不能であるが、紙面の都合上ここに掲載する。確認面での周溝幅は、0.48～0.56m、深さは0.04～0.18mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1113　セ54地区　（Fig.399、PL.137～138）

R･S-20グリッドに位置する。同時期のSM1114と重複する。四隅の形態が崩れ、埋葬施設に火葬系の小土壙を採用する終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号はセ54-036号遺構である。

墳丘と周溝

長径7.94m、短径7.00mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-5.5°-Eを示す。周溝内側面積は54.0㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳系では第67位の規模である。確認面での周溝幅は、0.80～1.20m、深さは0.12～0.22mを測り、広くて浅い傾向を示す。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部中央に、焼土･炭化物を含んだ火葬系埋葬施設が検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央に検出された。焼土･炭化物を含み、火葬系埋葬施設と捉えられる小土壙である。墓壙規模は上端で、長径1.56m短径0.80m深さ0.36mを測り、主軸方位はN-55°-Wを示す。覆土上層から中層にかけて焼土･炭化物を比較的多量に含むが、骨粉等は未検出である。

墓壙内からは、焼土･炭化物以外の遺物は検出されなかった。

出土遺物

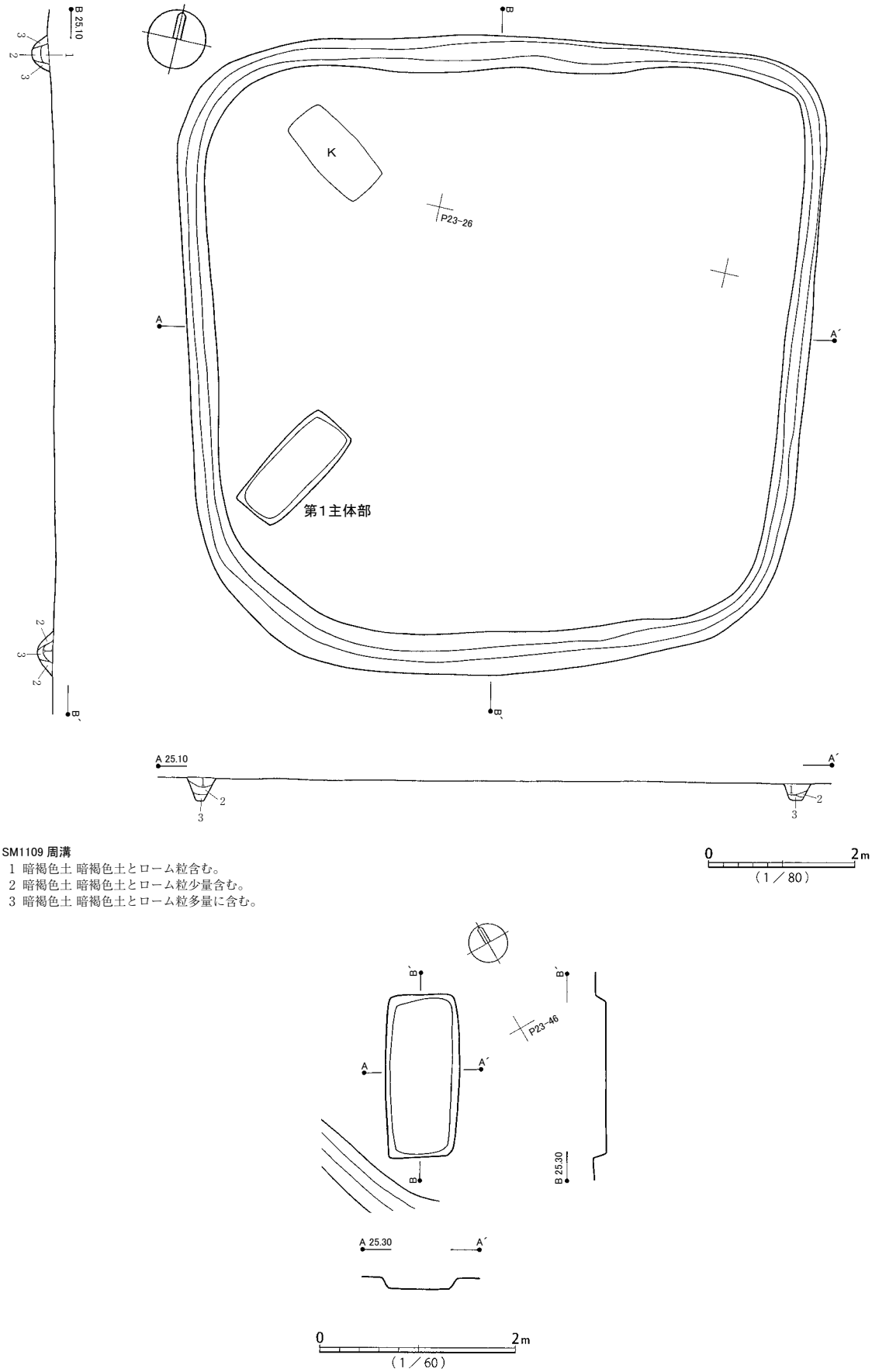
本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1114　セ54地区　（Fig.399、PL.204）

R･S-19･20グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期極小方墳であるが、方台部の中央をSM1113によって大きく削平されており遺存状況は不良である。同時期のSM1113と重複しているため、紙面の都合上ここに掲載する。旧遺構番号はセ54-035号遺構である。

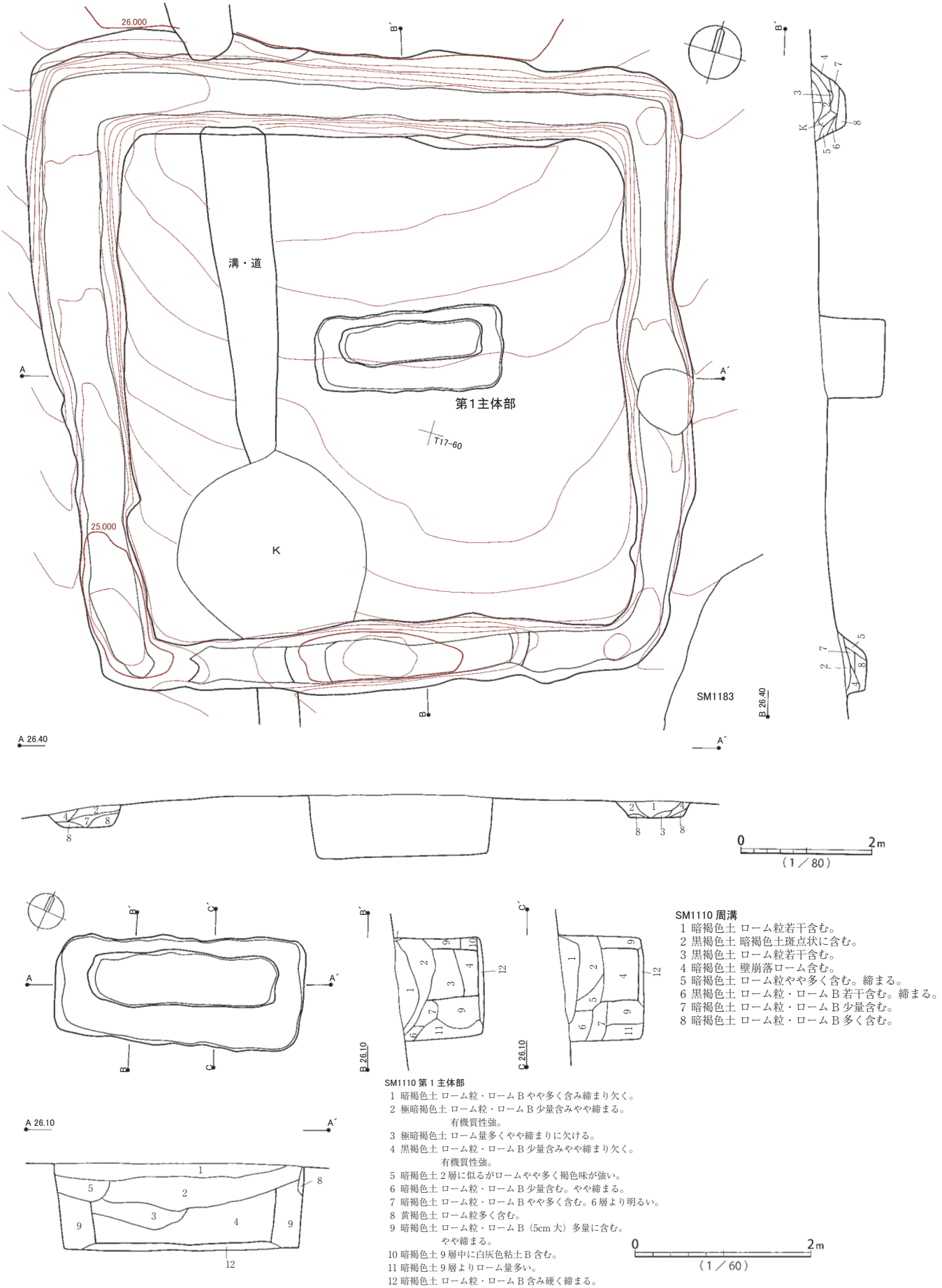
墳丘と周溝

長径2.22m、短径2.06mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-7°-Eを示す。周溝内側面積は4.7㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳系では最下位の第135位の規模である。確認面での周溝幅は、0.32～0.38m、深さは0.04～0.18mを測り、狭くて浅い傾向を示す。周溝断面



SM1109 周溝
1 暗褐色土 暗褐色土とローム粒含む。
2 暗褐色土 暗褐色土とローム粒少量含む。
3 暗褐色土 暗褐色土とローム粒多量に含む。

Fig.396　SM1109 遺構実測図



SM1110 周溝
1 暗褐色土 ローム粒若干含む。
2 黒褐色土 暗褐色土斑点状に含む。
3 黒褐色土 ローム粒若干含む。
4 暗褐色土 壁崩落ローム含む。
5 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。締まる。
6 黒褐色土 ローム粒・ローム B 若干含む。締まる。
7 暗褐色土 ローム粒・ローム B 少量含む。
8 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多く含む。

SM1110 第 1 主体部
1 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含み締まり欠く。
2 極暗褐色土 ローム粒・ローム B 少量含みやや締まる。
有機質性強。
3 極暗褐色土 ローム量多くやや締まりに欠ける。
4 黒褐色土 ローム粒・ローム B 少量含みやや締まり欠く。
有機質性強。
5 暗褐色土 2 層に似るがロームやや多く褐色味が強い。
6 暗褐色土 ローム粒・ローム B 少量含む。やや締まる。
7 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。6 層より明るい。
8 黄褐色土 ローム粒多く含む。
9 暗褐色土 ローム粒・ローム B（5cm 大）多量に含む。
やや締まる。
10 暗褐色土 9 層中に白灰色粘土 B 含む。
11 暗褐色土 9 層よりローム量多い。
12 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含み硬く締まる。

Fig.397　SM1110 遺構実測図

形状は、逆台形を呈している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、関形状不明な長頸鏃1点が検出されている。

SM1115　099地区　（Fig.400、PL.138・173・191）

H・I-11グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳であるが、方台部のいたるとこに攪乱が存在しており遺存状況は不良である。旧遺構番号は099-4011号遺構である。

墳丘と周溝

長径7.66m、短径7.08mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-8°-Eを示す。周溝内側面積は52.7㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第68位の規模である。確認面での周溝幅は、0.98～1.26m、深さは0.58～0.82mを測る。周溝断面形状は逆台形を呈している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、1点の須恵器短頸壺の他、2点の弥生土器が覆土一括で検出されている。仮に須恵器短頸壺が本墳に伴う遺物であれば、方台部内に存在した火葬系の蔵骨器と想定される。

SM1116　セ54地区　（Fig.401、PL.138・174）

V-20グリッドに位置する。周溝幅が極めて細い終末期方墳である。同時期のSK306～308、時期不明のSK305と重複し、周溝の幅、深さとも掘り込みが十分ではない。方台部内には、調査時遺構番号146号土坑が存在し、2基の埋葬施設の一部を削平しており、遺構の遺存状況は極めて不良である。旧遺構番号はセ54-51号遺構・146号土坑である。

墳丘と周溝

長径8.10m、短径6.50mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-12°-Wを示す。確認できた周溝の延長上から、周溝内側面積は52.7㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳ではSM1115と同規模の第68位の規模である。確認面での周溝幅は、0.20～0.26m、深さは東側で0.24mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央と南側の計2基検出されている。

第1主体部

第1主体部は、方台部中央に検出された木棺直葬の土壙墓であるが、端部を落ち込みにより削平されている。残存墓壙規模は上端で、長径2.68m短径0.94m深さ0.50m、下端で長径2.56m短径0.86mを測り、主軸方位はN-87°-Wを示す。墓壙のほぼ中央から、箱型の木棺痕が検出された。推定木棺規模は、上端で長さ1.78m幅0.52m、下端で1.66m幅0.44m深さ0.50mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-83°-Wを示す。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

第2主体部

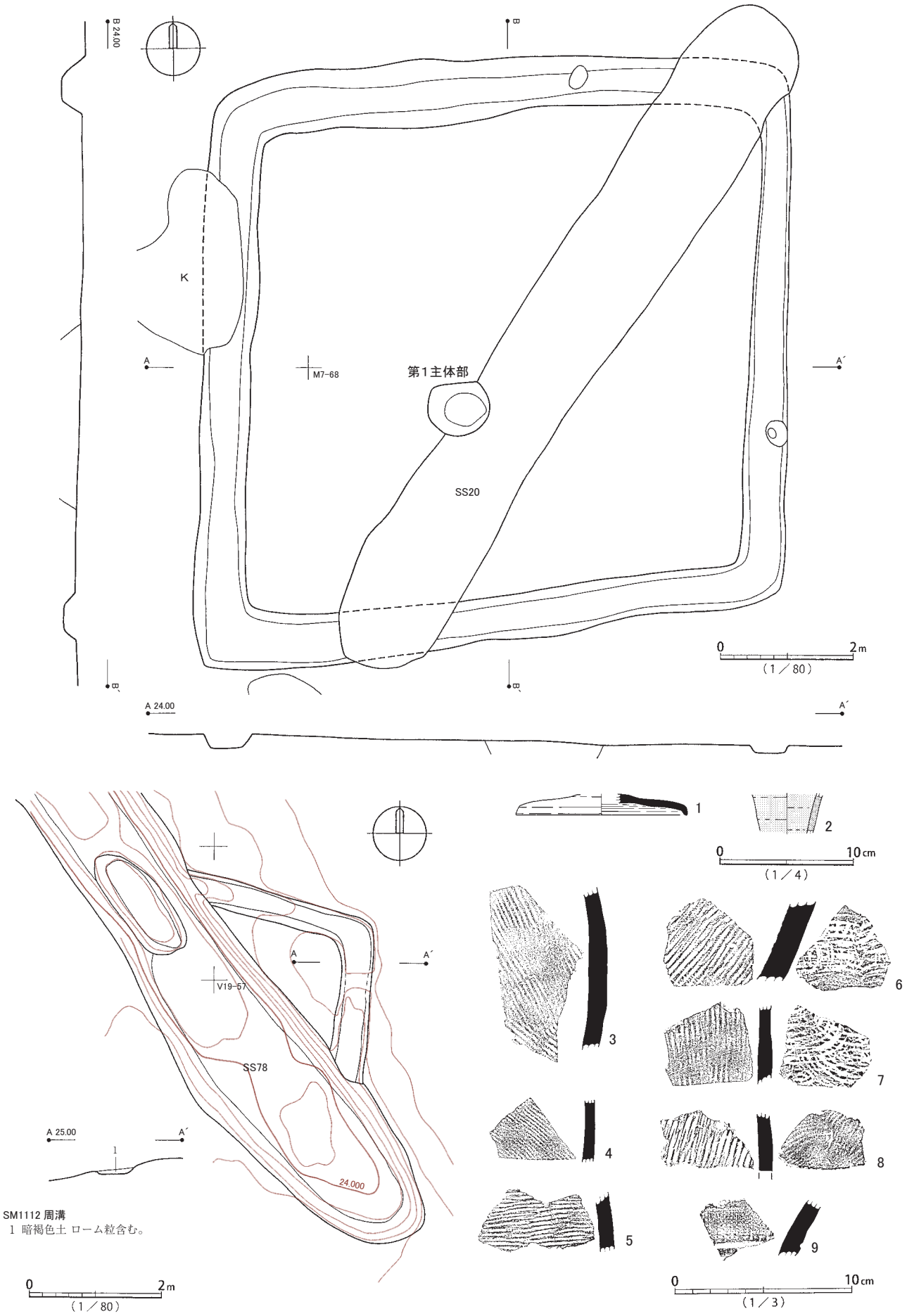


Fig.398　SM1111 遺構・遺物、SM1112 遺構実測図

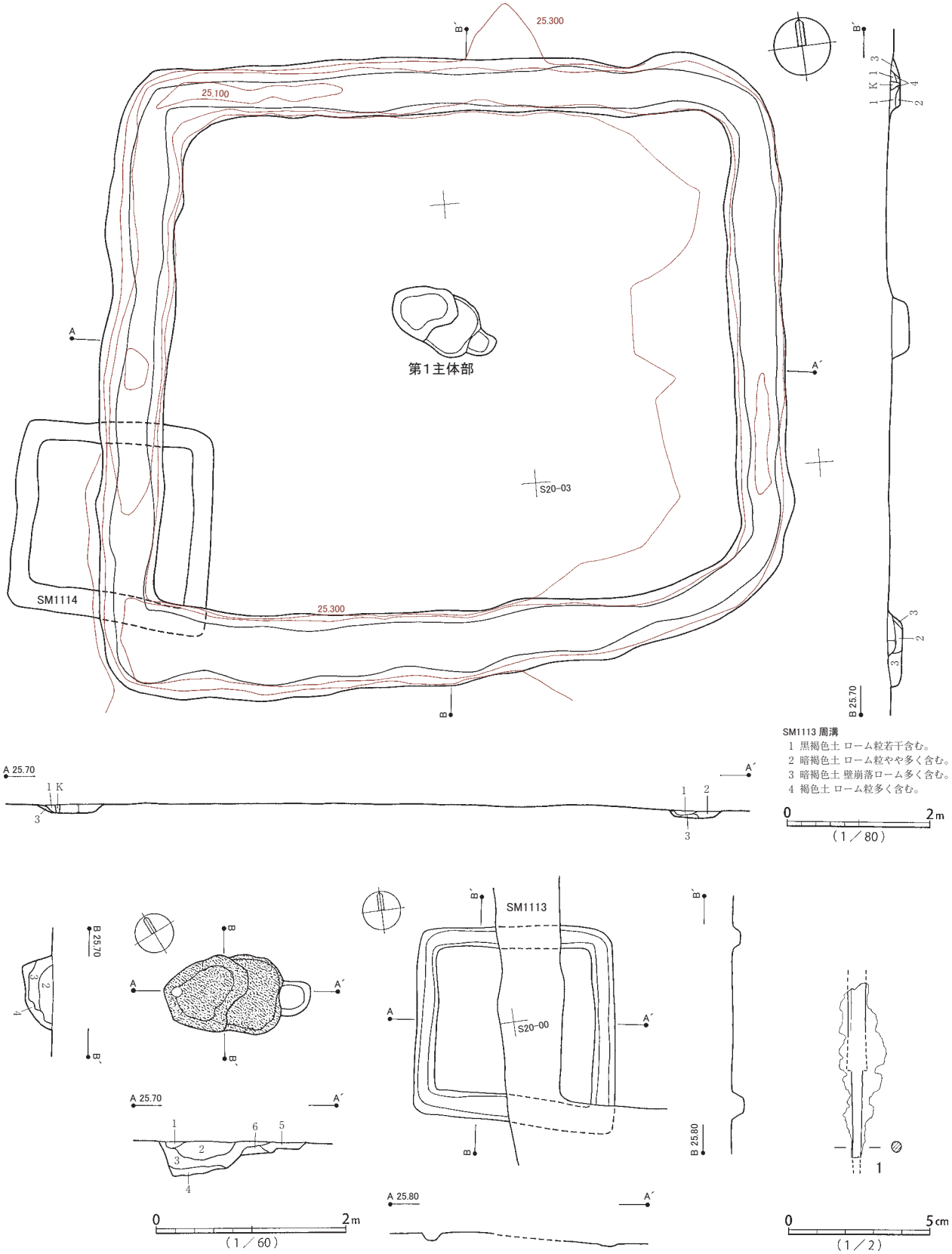


Fig.399　SM1113 遺構、SM1114 遺構・遺物実測図

第2主体部は、方台部南東コーナー付近に検出された側壁抉り込み土壙である。墓壙規模は上端で、長径2.54m短径1.58m深さ最大0.78mを測る。天井部を保持した抉り込み部は、長径2.30m短径0.78m深さは0.68mを測り、主軸方位はN-82.5°-Wを示す。底面はほぼ平坦であり、奥壁側に0.18m抉り込まれている。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

落ち込み

第1主体部と第2主体部の間に存在する長方形の落ち込みである。長径2.70m短径1.50m深さ最大0.40mを測り、主軸方位はN-5°-Eを示す。底面は二段構造になっており一段目が16.3㎝、二段目が40㎝前後を測る。構造から埋葬施設とは考えがたく、比較的新しい段階の落ち込みと考えられる。

落ち込みからは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳東側周溝内からは、周溝底から22㎝浮いた状態で1の在地須恵器甕が検出されている。出土位置から見れば、本遺構もしくはSK306に伴う可能性が高い。須恵器の年代観は9世紀前半代を示すものと想定される。

SM1117　099地区　（Fig.402、PL.138・174・191）

I・J-12グリッドに位置する。下層に位置する竪穴住居跡等と重複し、比較的整った形状の四隅が直角的な終末期方墳である。旧遺構番号は099-4017号遺構である。

墳丘と周溝

長径7.36m、短径7.28mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-2°-Wを示す。周溝内側面積は52.3㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第70位の規模である。確認面での周溝幅は、0.98～1.10m、深さは0.22～0.46mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、1～10の弥生土器および古式土師器片が覆土一括で出土している。時期的に本墳とは整合せず、下層に位置する竪穴住居跡等に伴う遺物と判断される。

SM1118　099地区　（Fig.403）

N・O-15・16グリッドに位置する。埋葬施設に特異な方形土壙を採用する四隅が直角的な終末期方墳（律令制墳墓）である。旧遺構番号は099-4099号遺構である。

墳丘と周溝

長径7.10m、短径7.06mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-86°-Wを示す。周溝内側面積は50.6㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳系では第71位の規模である。確認面での周溝幅は、1.04～1.12m、深さは0.52～0.64m、土層断面図上では0.70～0.72mを測る。全体的に整った方形で、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示している。

埋葬施設

方台部中央南東側に1基検出されている。

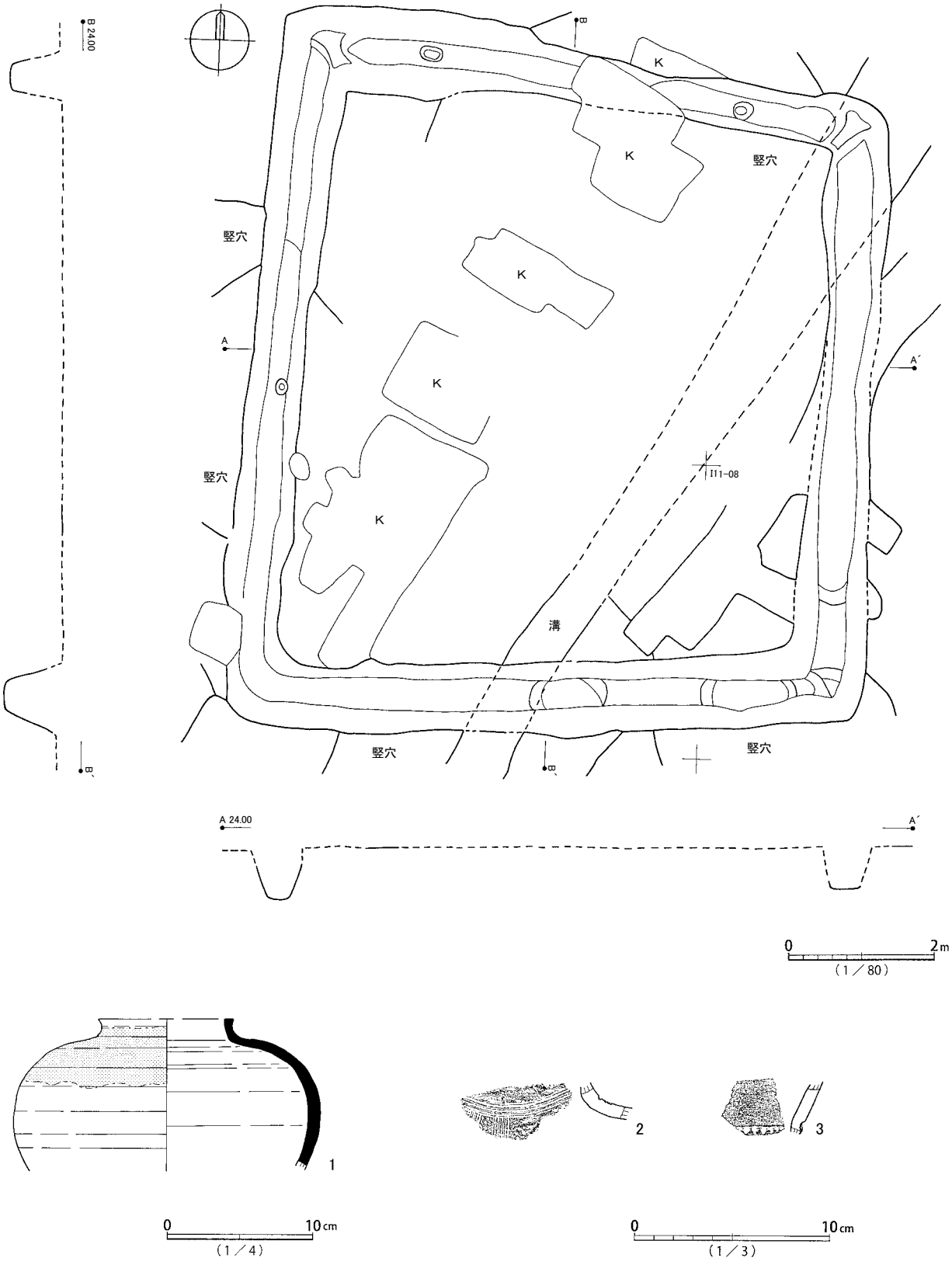
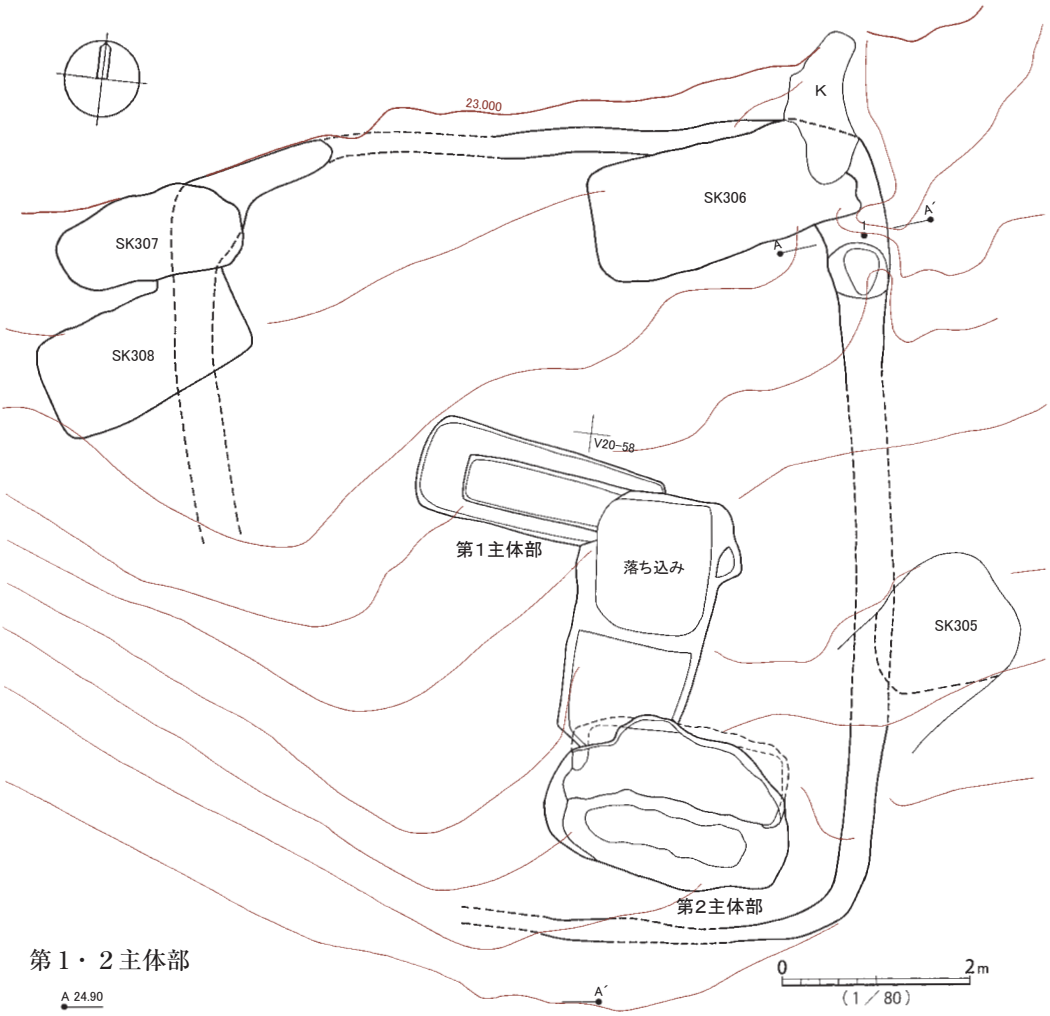
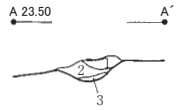


Fig.400　SM1115 遺構・遺物実測図



第1・2主体部



SM1116 周溝
1 暗褐色土 ローム粒含む。
2 黒褐色土 ローム粒若干含む。
3 黄褐色土 汚れたソフトローム主体。

SM1116 第1主体部
1 暗褐色土 多量のローム粒含む。
2 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
3 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多く含む。
4 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
5 黒褐色土 ローム粒やや多く含む。
6 暗褐色土 ローム粒多・ローム B 若干含む。
7 褐色土 多量のローム粒含む。
8 褐色土 ローム粒・ローム B 多く含む。
9 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。

SM1116 落ち込み
A 黒褐色土 多量のローム粒含む。
B 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
C 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。

SM1116 第2主体部
1 暗褐色土 汚れたローム粒多く含む。
2 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
3 暗褐色土 ローム B 多量に含む。
4 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
5 暗褐色土 壁崩落ローム主体。
6 暗褐色土 ローム粒少量含む。
7 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
8 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
9 暗褐色土 ローム粒少量含む。
10 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
11 黄褐色土 天井崩落ローム B。
12 暗褐色土 ローム B 主体。

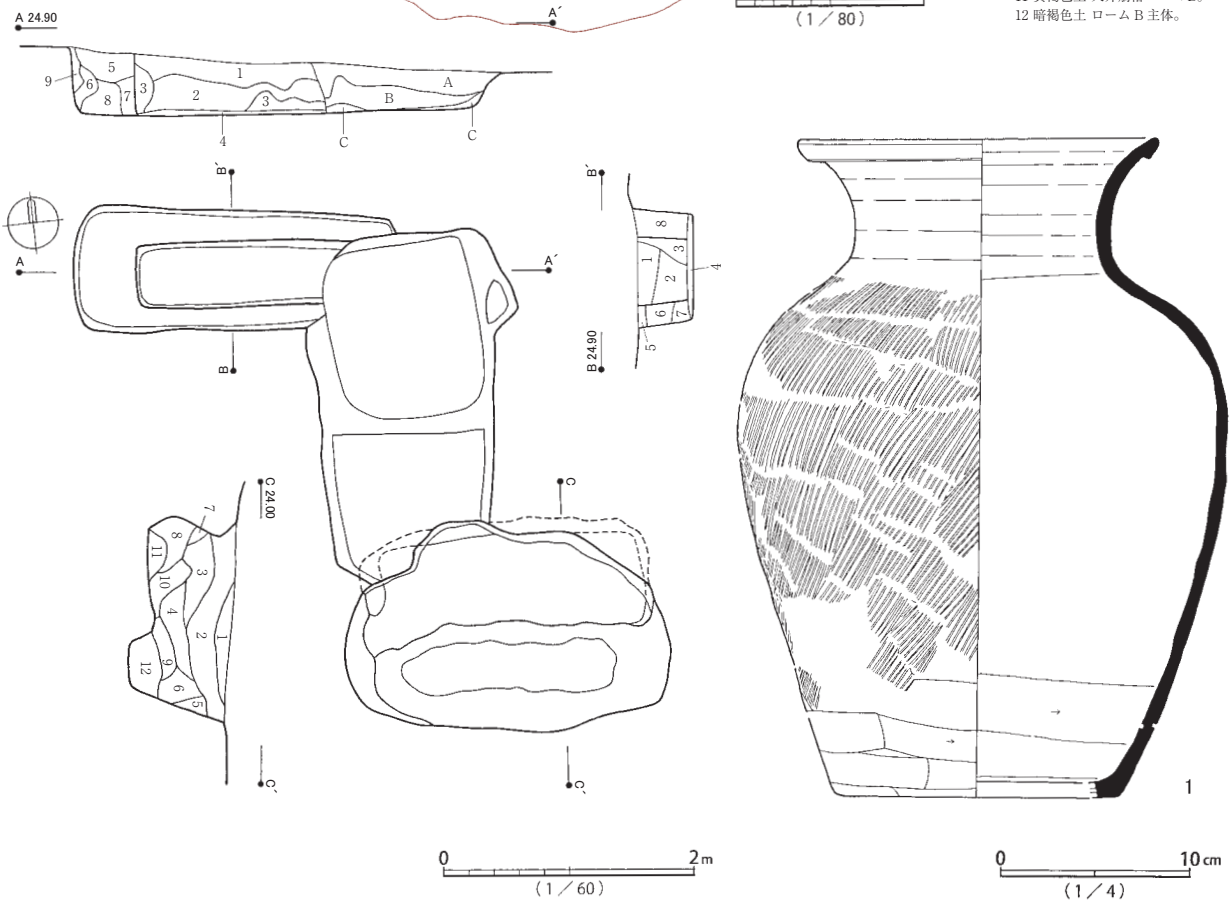


Fig.401　SM1116 遺構・遺物実測図

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央南東側に検出された特異な方形の土壙墓である。小児でなければ木棺＋仰臥伸展葬の埋葬方法がほとんど不可能なことから、火葬を含む改葬墓である可能性が高い。墓壙規模は上端で、長径1.46m短径1.34m深さ0.40m、下端で長径1.40m短径1.24mを測り、主軸方位はN-86°-Wを示す。土層断面からは、木棺等を配置したと想定される断層は確認されず、底面はほぼ平坦である。

火葬および改葬骨の検出を期待したが、墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、1の古式土師器底部片が覆土一括で検出されているが、時期的に本墳と整合しない。下層に位置する竪穴住居跡等に伴う遺物と判断される。

SM1119　SW83地区　（Fig.404、PL.138～139）

V-25グリッドに位置する。南側周溝は未検出ながら、二隅が直角的な終末期方墳である。旧遺構番号はSW83-K20号遺構である。

墳丘と周溝

長径7.00m、残存短径5.50mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-13°-Wを示す。埋葬施設を中心とする推定周溝内側面積は(49.2)㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第72位の規模である。南緩斜面に位置するため、南側周溝を流出し未検出である。確認面での周溝幅は、0.86～1.42m、深さは0.32～0.80mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示している。

埋葬施設

方台部中央に1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央に検出された側壁抉り込み土壙である。墓壙規模は上端で、長径1.68m短径0.94m深さ0.96m、下端で長径1.46m短径0.74mを測り、主軸方位はN-83°-Eを示す。底面はほぼ平坦であるが、抉り込み部は更に10㎝程掘り窪められており、かつ側壁側に0.40mほど掘り込まれている。玄室部の天井部までの高さは0.32mを測る。

墓壙内からは、遺物は全く検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、遺物は全く検出されなかった。

SM1120　SW83地区　（Fig.405、PL.139）

R-27グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳である。旧遺構番号はSW83-K24号遺構である。

墳丘と周溝

長径7.14m、短径6.98mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-8°-Eを示す。周溝内側面積は49.1㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第73位の規模である。緩やかな南緩斜面に位置し、確認面での周溝幅は、1.10～1.20m、深さは0.20～0.37mを測る。全体的に均整のとれた方形形状で、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示している。

埋葬施設

方台部中央に1基検出されている。

第1主体部

第1主体部は、方台部中央に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.75m短径1.54m深さ0.68m、下端で長径2.56m短径1.24mを測り、主軸方位はN-90°を示す。墓壙のほぼ中央から、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.10m幅0.80m、下端で2.04m幅0.70m深さ0.50mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-80°-Eを示す。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、遺物は全く検出されなかった。

SM1121　099地区　（Fig.406）

M･N-12グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳である。周溝から方台部内には攪乱が存在し、遺構の遺存状況はやや不良である。旧遺構番号は099-4079号遺構である。

墳丘と周溝

長径7.08m、短径6.80mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-3.5°-Eを示す。周溝内側面積は47.9㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第74位の規模である。確認面での周溝幅は、1.02～1.12m、深さは0.18～0.30mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、遺物は全く検出されなかった。

SM1122　セ54地区　（Fig.406、PL.139）

W-20グリッドに位置する。下層のSS77と重複し、埋葬施設に火葬系の小土壙を採用する終末期方墳（律令制墳墓）である。周溝掘り込みが極めて浅く、且つ緩やかな南緩斜面に位置することから、南側周溝を流出している。旧遺構番号はセ54-50号遺構である。

墳丘と周溝

長径4.50m、残存短径0.80mを測り、現状での盛土は存在せず、西側周溝の傾き方位はN-7°-Wを示す。周溝内側面積は測定不能であり、紙面の都合上ここで報告する。確認面での周溝幅は、0.42～0.50m、深さは北側周溝で0.10mを測る。周溝断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

方台部内中央で重複するSS77周溝覆土内に検出されている。

第1主体部

第1主体部は、方台部中央に検出された小土壙である。炭化物を多量に検出することから火葬系の小土壙と判断される。墓壙規模は、長径1.42m短径0.66m深さ0.20mの掘り方東端に、長径0.70m短径0.60m深さ0.20mの環状プランの木炭を充填し、主軸方位はN-75°-Eを示す。環状プランの木炭内には、現状ではロームが充満していたが、本来は、袋状ないしは木櫃等の容器に埋納された火葬骨が伴

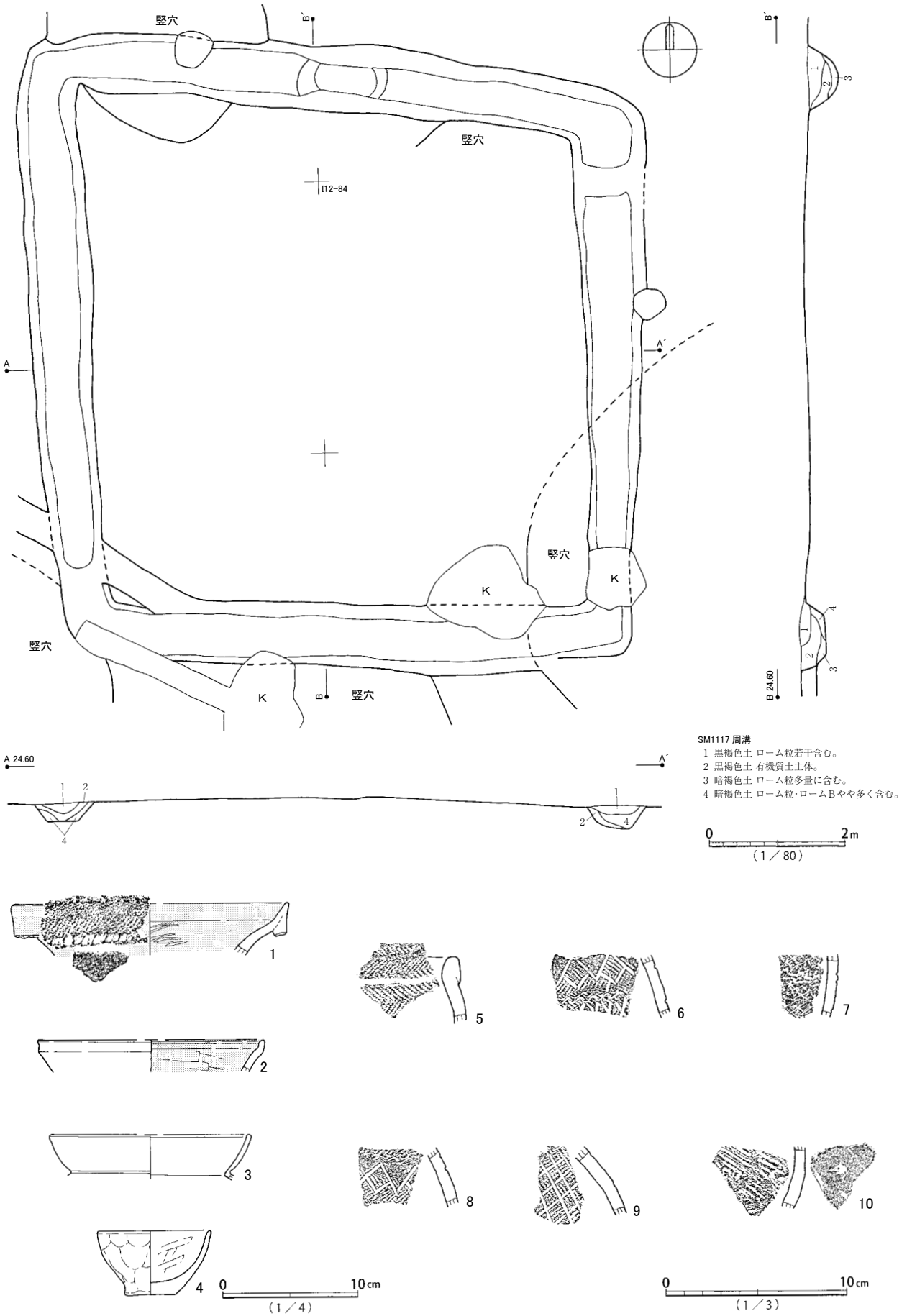
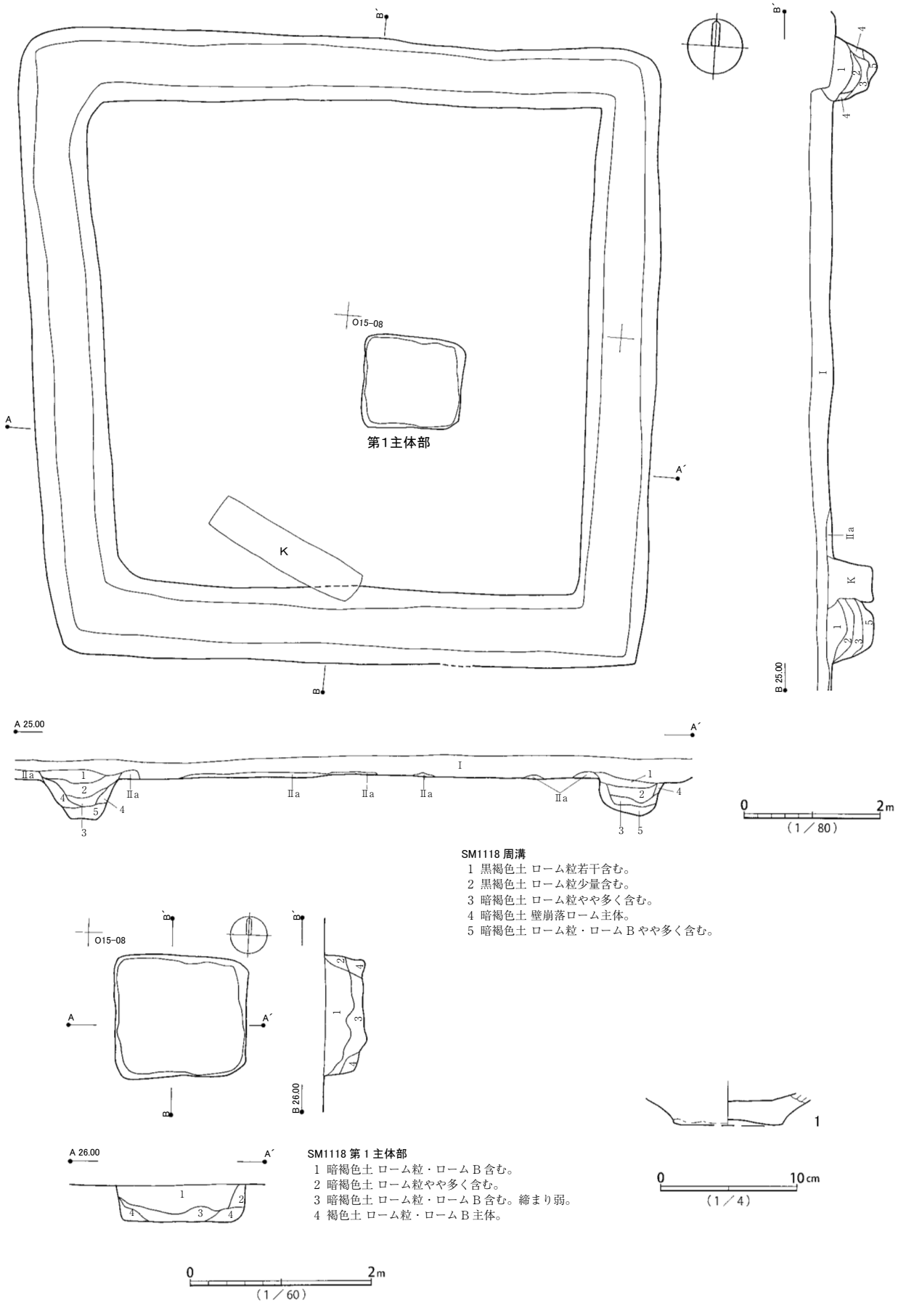


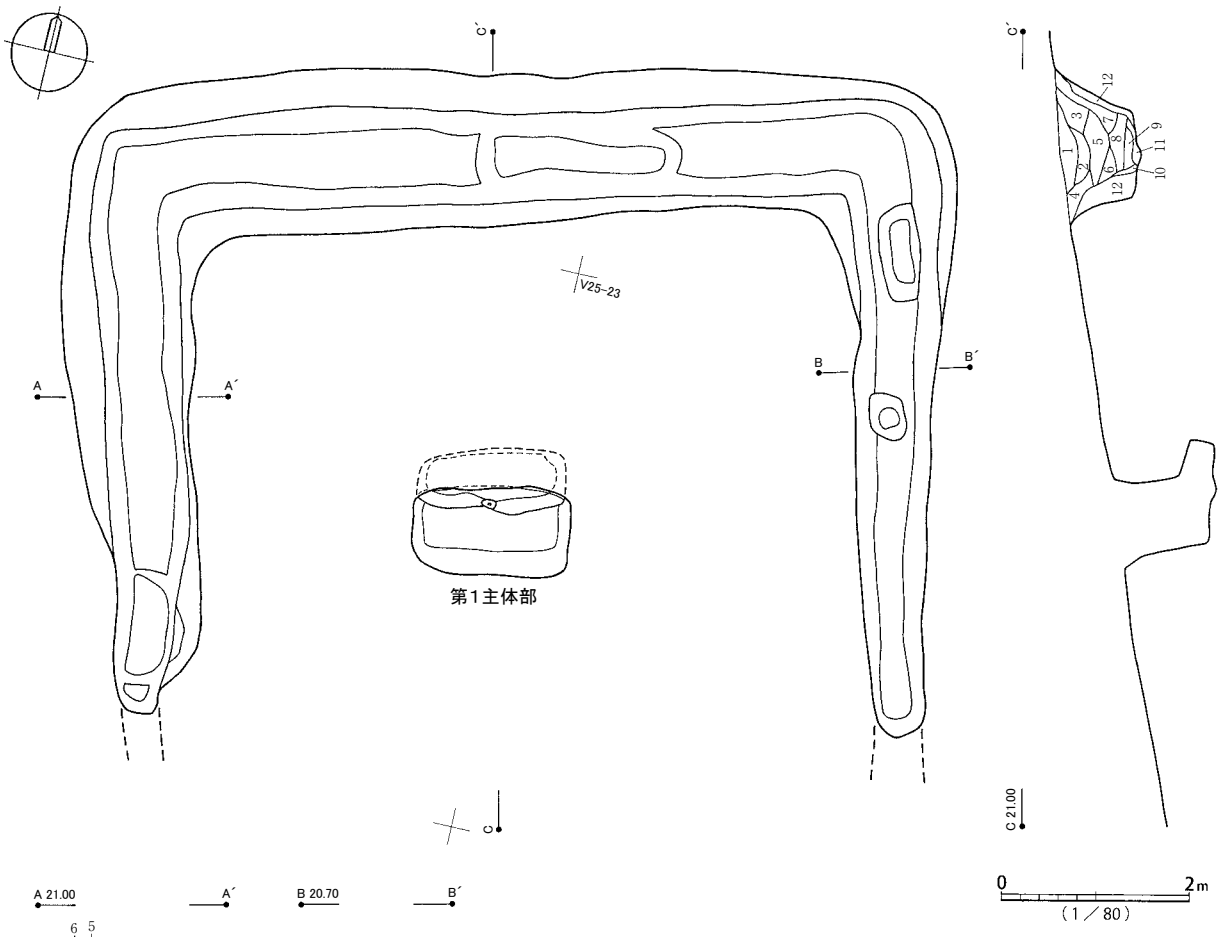
Fig.402　SM1117 遺構・遺物実測図



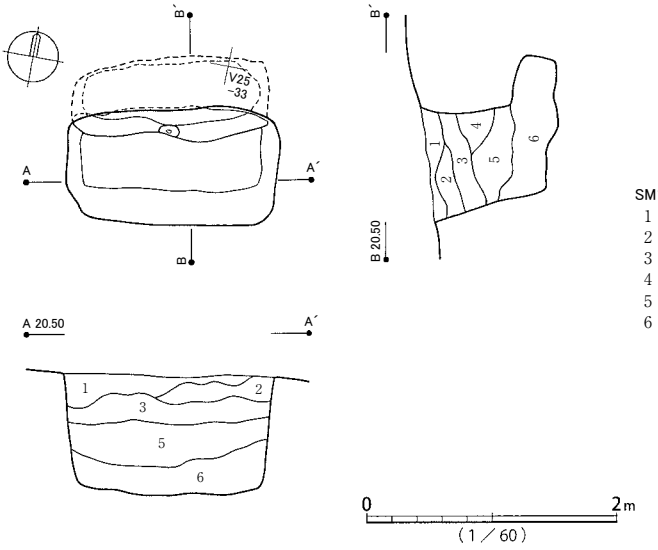
SM1118 周溝
1 黒褐色土 ローム粒若干含む。
2 黒褐色土 ローム粒少量含む。
3 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
4 暗褐色土 壁崩落ローム主体。
5 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。

SM1118 第 1 主体部
1 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
2 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
3 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。締まり弱。
4 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。

Fig.403　SM1118 遺構・遺物実測図



SM1119 周溝
1 黒褐色土 有機質土主体。
2 黒褐色土 有機質土主体。黒味強。
3 黒褐色土 有機質土主体。ローム若干含む。
4 暗褐色土 ローム粒若干混入。
5 極暗褐色土 有機質性強。
6 黒褐色土 ローム粒含む。
7 褐色土 ローム粒主体。
8 黒色土 ローム粒若干含む。
9 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
10 暗褐色土 汚れたローム粒やや多く含む。
11 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
12 黄褐色土 汚れたソフトローム主体。



SM1119 第 1 主体部
1 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
2 褐色土 ローム主体層に若干の有機質土混入。
3 暗褐色土 有機質土中にローム粒･ローム B 含む。
4 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。天井崩壊土。
5 黄褐色土 ローム B・ローム粒主体。
6 黄褐色土 ローム B のみ。

Fig.404　SM1119 遺構実測図

っていたものと想定される。

墓壙内からは、木炭・焼土以外、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、遺物は全く検出されなかった。

SM1123　099地区　（Fig.407、PL.139・192・204・215）

H-9・10グリッドに位置する。北西コーナーを下層に位置する竪穴と重複しているが、四隅が直角的な終末期方墳である。旧遺構番号は099-4006号遺構である。

墳丘と周溝

長径6.84m、短径6.78mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-6°-Eを示す。周溝内側面積は46.7㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第75位の規模である。確認面での周溝幅は、0.72～0.86m、深さは0.36～0.48m、土層断面図上では0.50～0.52mを測る。全体的に均整のとれた方形形状で、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、5点の遺物が覆土一括で検出されている。1・3は古式土師器である。2は須恵器甕片、4は管状土錘である。5は板状鉄片、6は円筒状鉄器であるが、鉄器については何れも用途不明品である。本墳出土遺物は、鉄器や須恵器片を除けば、何れも下層に位置する竪穴住居跡等に伴う遺物と判断され、鉄器については本墳に伴う遺物かどうか不明である。

SM1124　TJ地区　（Fig.408、PL.140）

G-12・13グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳である。旧遺構番号はTJ-6号遺構である。

墳丘と周溝

長径7.00m、短径6.72mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-21°-Eを示す。周溝内側面積は46.1㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第76位の規模である。確認面での周溝幅は、0.62～0.80m、深さは0.32～0.40mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

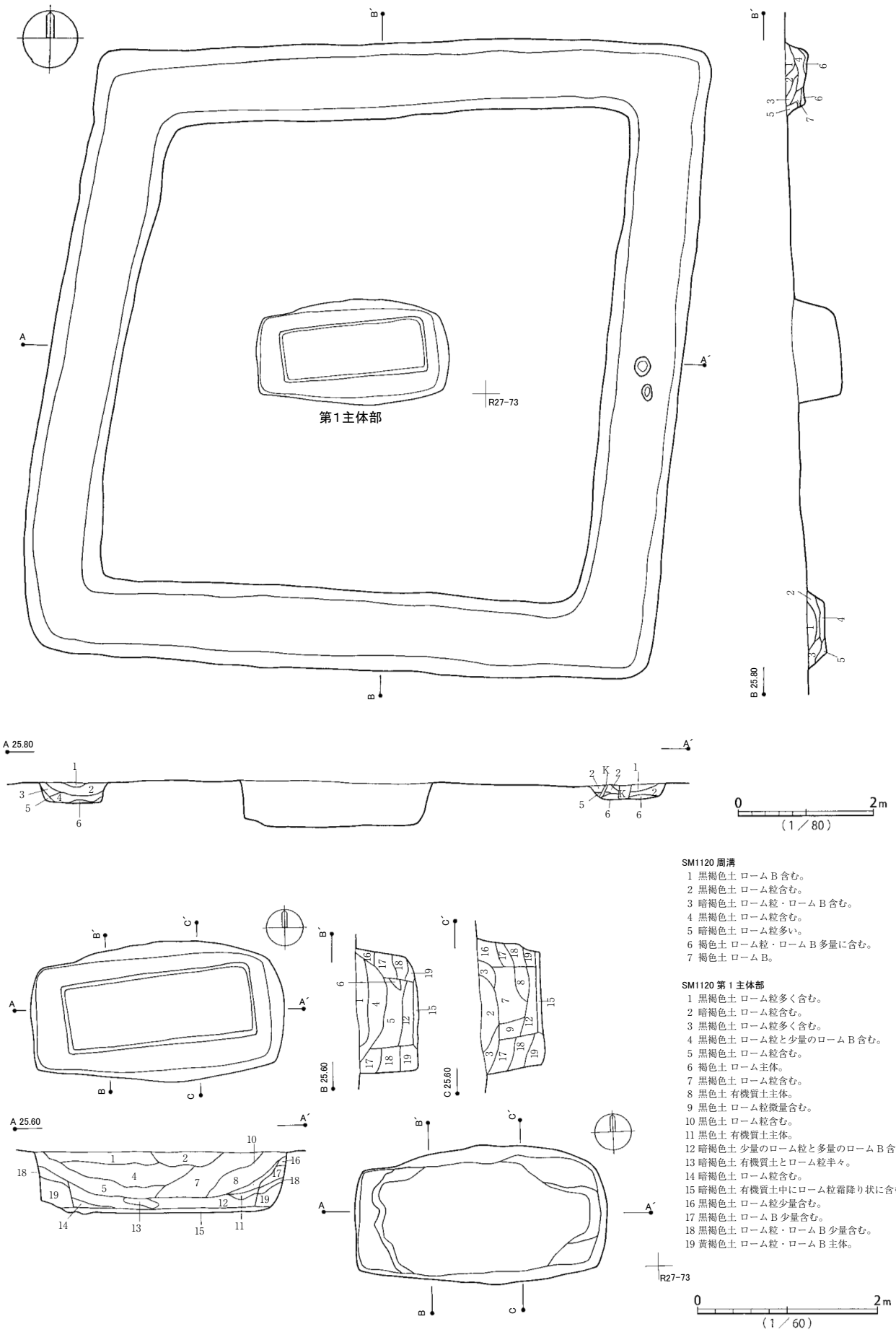
本墳周溝内からは、遺物が全く検出されなかった。

SM1125　TJ地区　（Fig.408、PL.140）

G-13・14グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳である。旧遺構番号はTJ-15号遺構である。

墳丘と周溝

長径6.82m、短径6.76mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-3°-Eを示す。周溝内側面積は44.3㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、SM1126を下回る第78位の規模であるが、紙面の都合上ここで報告する。確認面での周溝幅は、0.88～0.96m、深さは0.24～0.28mを測る。全体的に均整のとれた方形形状で、周溝断面は逆台形を呈している。



SM1120 周溝
1 黒褐色土 ローム B 含む。
2 黒褐色土 ローム粒含む。
3 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
4 黒褐色土 ローム粒含む。
5 暗褐色土 ローム粒多い。
6 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
7 褐色土 ローム B。

SM1120 第 1 主体部
1 黒褐色土 ローム粒多く含む。
2 暗褐色土 ローム粒含む。
3 黒褐色土 ローム粒多く含む。
4 黒褐色土 ローム粒と少量のローム B 含む。
5 黒褐色土 ローム粒含む。
6 褐色土 ローム主体。
7 黒褐色土 ローム粒含む。
8 黒色土 有機質土主体。
9 黒色土 ローム粒微量含む。
10 黒色土 ローム粒含む。
11 黒色土 有機質土主体。
12 暗褐色土 少量のローム粒と多量のローム B 含む。
13 暗褐色土 有機質土とローム粒半々。
14 暗褐色土 ローム粒含む。
15 暗褐色土 有機質土中にローム粒霜降り状に含む。
16 黒褐色土 ローム粒少量含む。
17 黒褐色土 ローム B 少量含む。
18 黒褐色土 ローム粒・ローム B 少量含む。
19 黄褐色土 ローム粒・ローム B 主体。

Fig.405　SM1120 遺構実測図

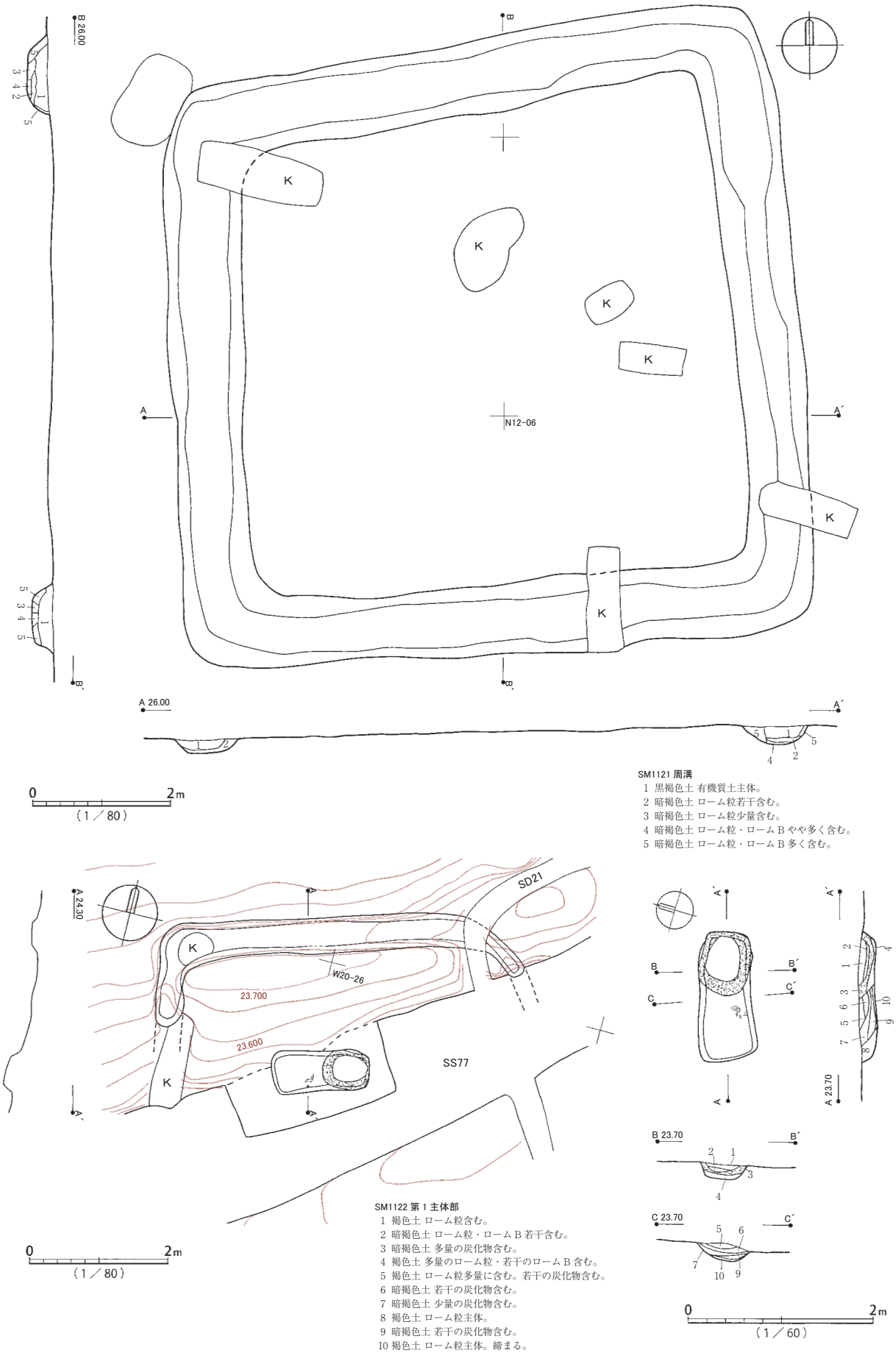


Fig.406　SM1121 遺構、SM1122 遺構実測図

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、遺物が全く検出されなかった。

SM1126　セ28地区　（Fig.409、PL.140）

Q-16グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳である。旧遺構番号セ28-011号遺構である。

墳丘と周溝

長径6.88m、短径6.50mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-1.5°-Wを示す。周溝内側面積は44.9㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、SM1125を上回る第77位の規模であるが、紙面の都合上ここで報告する。確認面での周溝幅は、1.00～1.30m、深さは0.48～0.90mを測り、北側の方台部から周溝にかけて大きく削平されている。全体的に均整のとれた方形形状で、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示している。

埋葬施設

方台部中央に1基検出されている。

第1主体部

第1主体部は、方台部中央に検出された側壁抉り込み土壙である。墓壙規模は開口部上端で、長径2.35m短径1.18m深さ0.98～1.08m、下端で長径1.79m短径0.79mを測り、主軸方位はN-87°-Eを示す。開口部底面はやや凹凸激しい。抉り込み部は上端で、長径2.10m短径0.55m深さは開口部底面の高いところから更に0.55m程掘り窪められ、側壁側に最大0.84m程掘り込まれている。天井部までの高さは、残りの良いところで0.54mを測る。開口部と玄室部の境には、長さ1.70m幅0.34m深さ4㎝程の溝が掘り込まれており、両端部には深さ5㎝程のピットが存在する。

墓壙内からは、遺物は全く検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、遺物は全く検出されなかった。

SM1127　セ28地区　（Fig.410、PL.140～141・192）

S・T-9グリッドに位置する。下層に位置するSS113を削平する四隅が直角的な終末期方墳である。旧遺構番号はセ28-042号遺構である。

墳丘と周溝

長径6.68m、短径6.62mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-1°-Eを示す。周溝内側面積は43.7㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第79位の規模である。確認面での周溝幅は、0.86～1.42m、深さは0.34～0.70mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示している。

埋葬施設

方台部中央に1基、南西部に1基、計2基検出されている。

第1主体部

第1主体部は、方台部中央に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.44m短径1.26m深さ0.60m、下端で長径2.20m短径0.94mを測り、主軸方位はN-69°-Wを示す。墓壙のほ

ぼ中央から、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ1.88m幅0.66m、下端で1.76m幅0.54m深さ0.26mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-69°-Wを示す。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

第2主体部

第2主体部は、方台部南西に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.40m短径0.96m深さ0.44m、下端で長径2.18m短径0.84mを測り、主軸方位はN-64°-Wを示す。墓壙のほぼ中央から、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ1.56m幅0.60m、下端で1.46m幅0.46m深さ0.28mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-64°-Wを示す。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、1の土師器坏が覆土一括で取り上げられている。底部内面に「吉」？の墨書が認められる。市原市内での類例は、北に600mほど離れた郡衙推定地でもある郡本遺跡において、「吉」の線刻例が存在する。遺物の示す年代は8世紀後葉～末葉を示しており、本墳周囲に存在する竪穴住居跡や掘立柱建物跡等に伴う可能性が考えられる。

SM1128　099地区　(Fig.411)

N-12グリッドに位置する。埋葬施設に地下式小型横穴を採用し、方台部がやや横長の終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号は099-4080号遺構である。

墳丘と周溝

長径7.50m、短径5.80m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-10°-Wを示す。周溝内側面積は43.2㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳系では第80位の規模である。確認面での周溝幅は、0.82～1.02m、深さは0.18～0.26mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

南側周溝を跨いで構築され、方台部内中央やや南側に玄室を置く地下式小型横穴墓が1基検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、玄室を中央南側に置く地下式小型横穴墓である。羨道部は南側周溝を跨いで構築されており、長径3.06m短径1.54mを測り、5段の階段状を呈しながら前庭部へと下っていく。階段の高さは1段目14㎝、2段目64㎝、3段目38㎝、4段目8㎝、5段目4㎝を測る。最下段の5段目は、玄室への前庭部であり、玄門部底面からは36㎝低い位置に構築されている。

玄室に至る玄門部は、最大幅0.92m最小幅0.78m奥行き0.88mを測る。玄室規模は長径1.22m短径0.60mを測り、主軸方位はN-82°-Eを示す。天井部は残存していなかったが、土層断面から0.38m前後に復元できる。玄室規模から見て、SM1083同様、予め別の場所で骨化させた遺体を、玄室内に改葬したものか、或いは火葬骨を収納する墓壙と判断されるが、改葬骨・火葬骨の何れも未検出である。

残存人骨等を期待したが、玄室内からは何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳からは、遺物が全く検出されなかった。

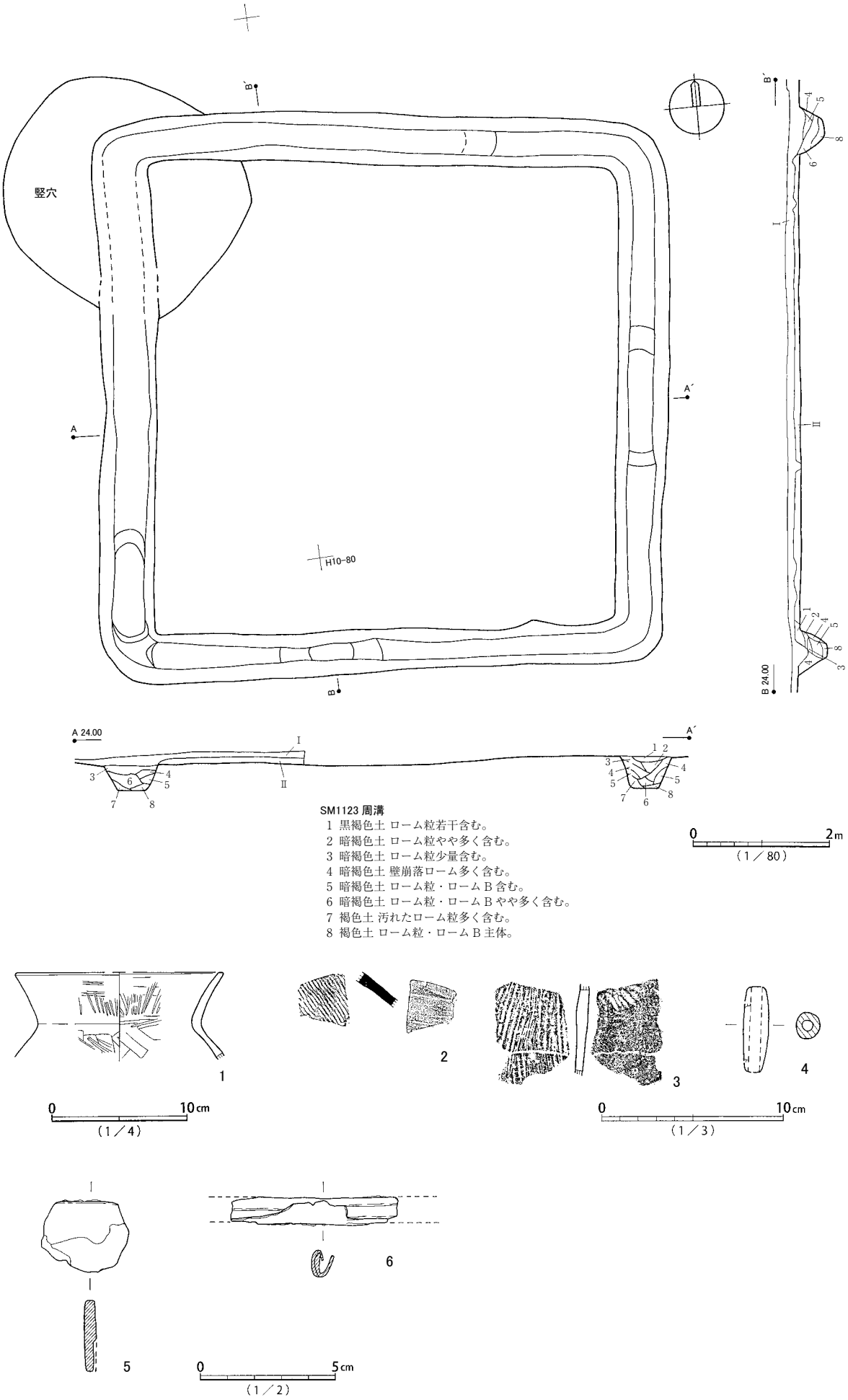


Fig.407　SM1123 遺構・遺物実測図

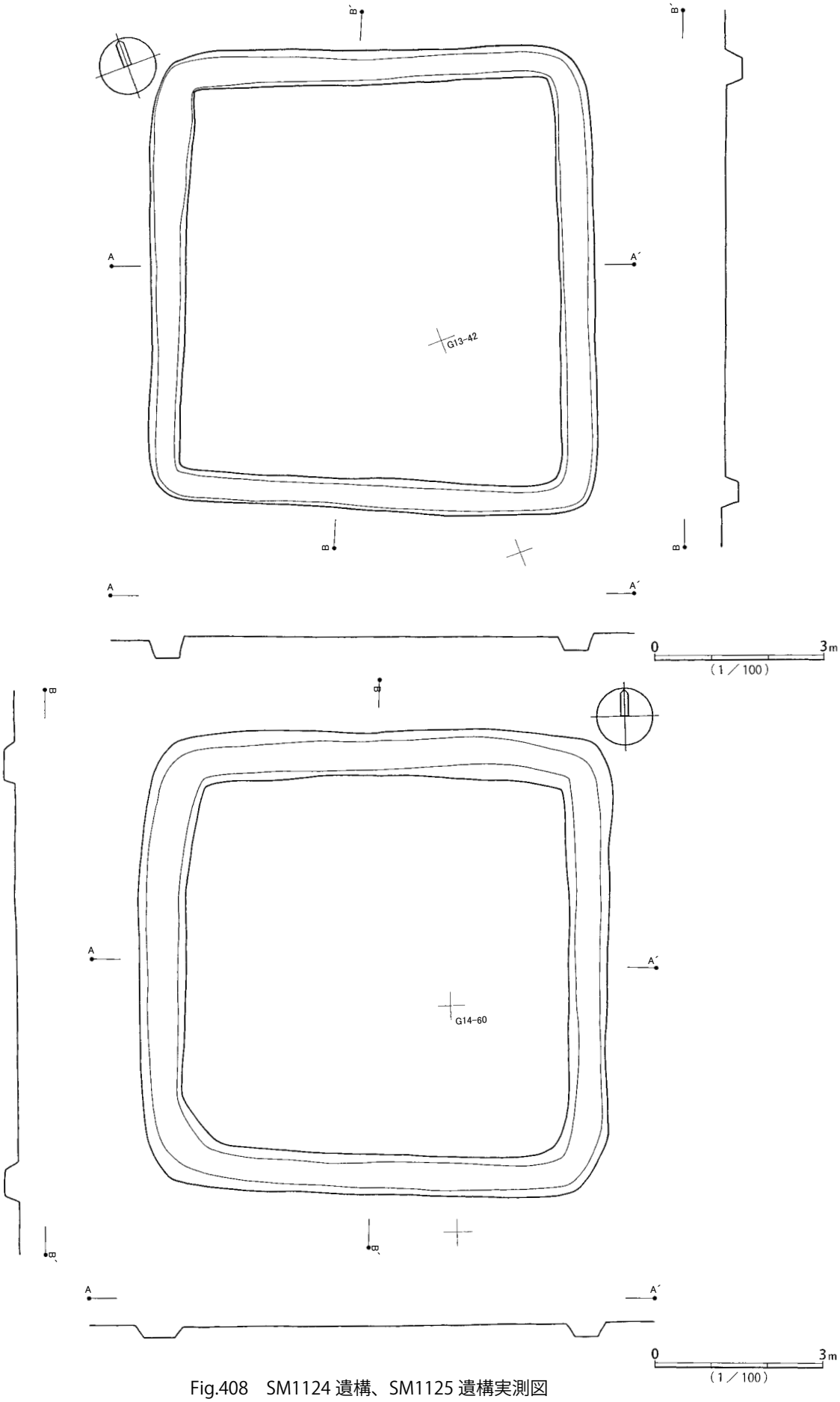
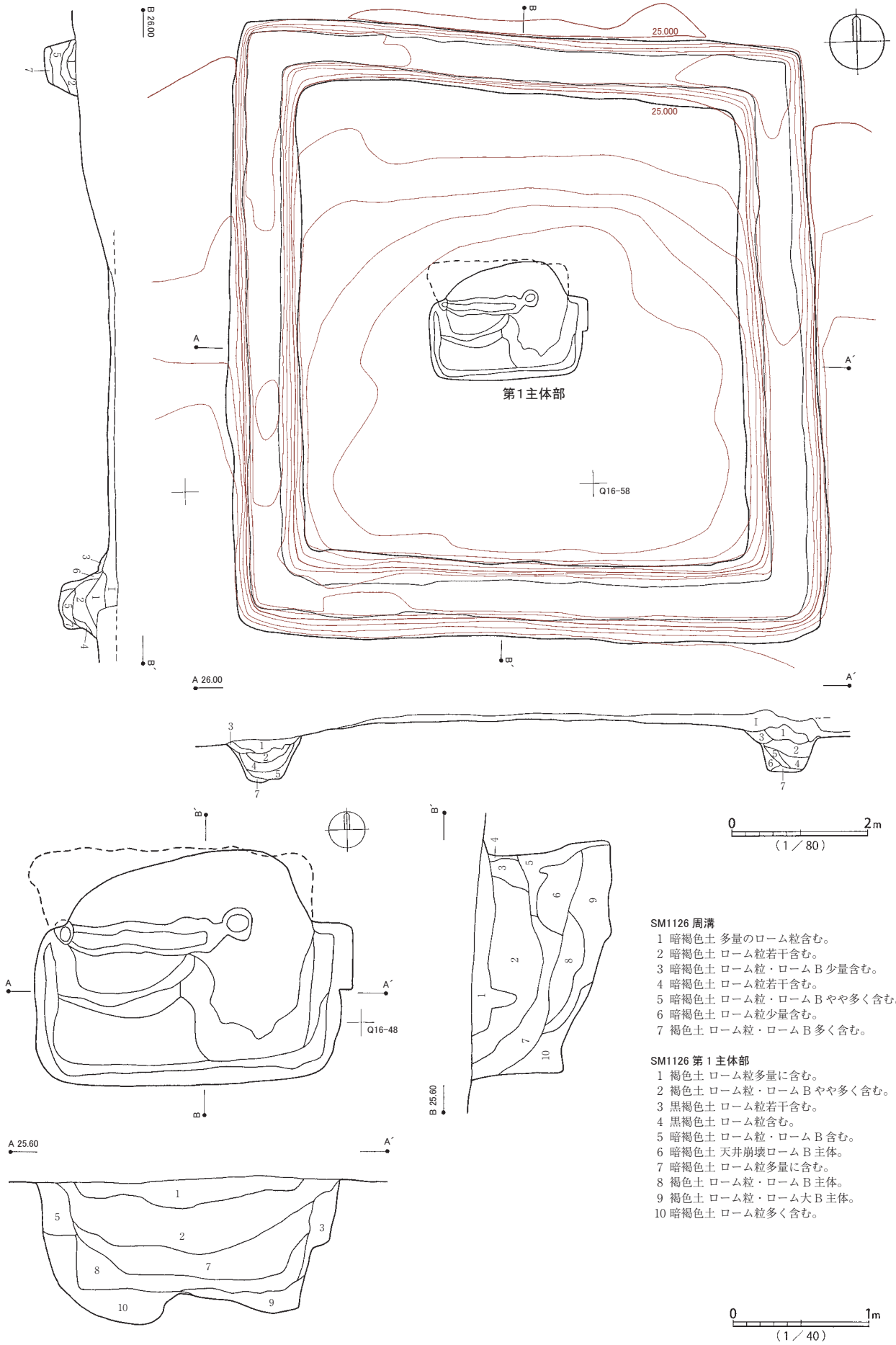


Fig.408　SM1124 遺構、SM1125 遺構実測図



SM1126 周溝
1 暗褐色土 多量のローム粒含む。
2 暗褐色土 ローム粒若干含む。
3 暗褐色土 ローム粒・ローム B 少量含む。
4 暗褐色土 ローム粒若干含む。
5 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
6 暗褐色土 ローム粒少量含む。
7 褐色土 ローム粒・ローム B 多く含む。

SM1126 第 1 主体部
1 褐色土 ローム粒多量に含む。
2 褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
3 黒褐色土 ローム粒若干含む。
4 黒褐色土 ローム粒含む。
5 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
6 暗褐色土 天井崩壊ローム B 主体。
7 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
8 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
9 褐色土 ローム粒・ローム大 B 主体。
10 暗褐色土 ローム粒多く含む。

Fig.409　SM1126 遺構実測図

SM1129　セ54地区　（Fig.412、PL.141・174）

S・T-16グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳である。旧遺構番号はセ54-16号遺構である。

墳丘と周溝

長径6.66m、短径6.64mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-4.5°-Wを示す。周溝内側面積は42.7㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第81位の規模である。確認面での周溝幅は、1.38～1.82m、深さは0.36～0.58mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳東側周溝内からは、底部を欠いた1の須恵器大甕が、東側周溝底から36㎝浮いた状態で検出されている。

SM1130　099地区　（Fig.413、PL.141）

L-17グリッドに位置する。新旧逆調査による縄文時代の竪穴住居跡により、一隅が未検出であるが、本来は四隅が直角的な終末期方墳と想定される。旧遺構番号は099-4085号遺構である。

墳丘と周溝

長径6.70m、短径6.18mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-6°-Wを示す。周溝内側面積は42.0㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第82位の規模である。確認面での周溝幅は、0.64～0.66m、深さは0.18～0.32mを測り、周溝断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1131　セ28地区　（Fig.413）

Q-15・16グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳である。旧遺構番号はセ28-018号遺構である。

墳丘と周溝

長径6.44m、短径6.08mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-18°-Eを示す。周溝内側面積は39.6㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第83位の規模である。確認面での周溝幅は、1.18～1.46m、深さは0.36～0.56mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、1の灰釉陶器片が覆土一括で検出されている。

SM1132　セ54地区　（Fig.414、PL.141）

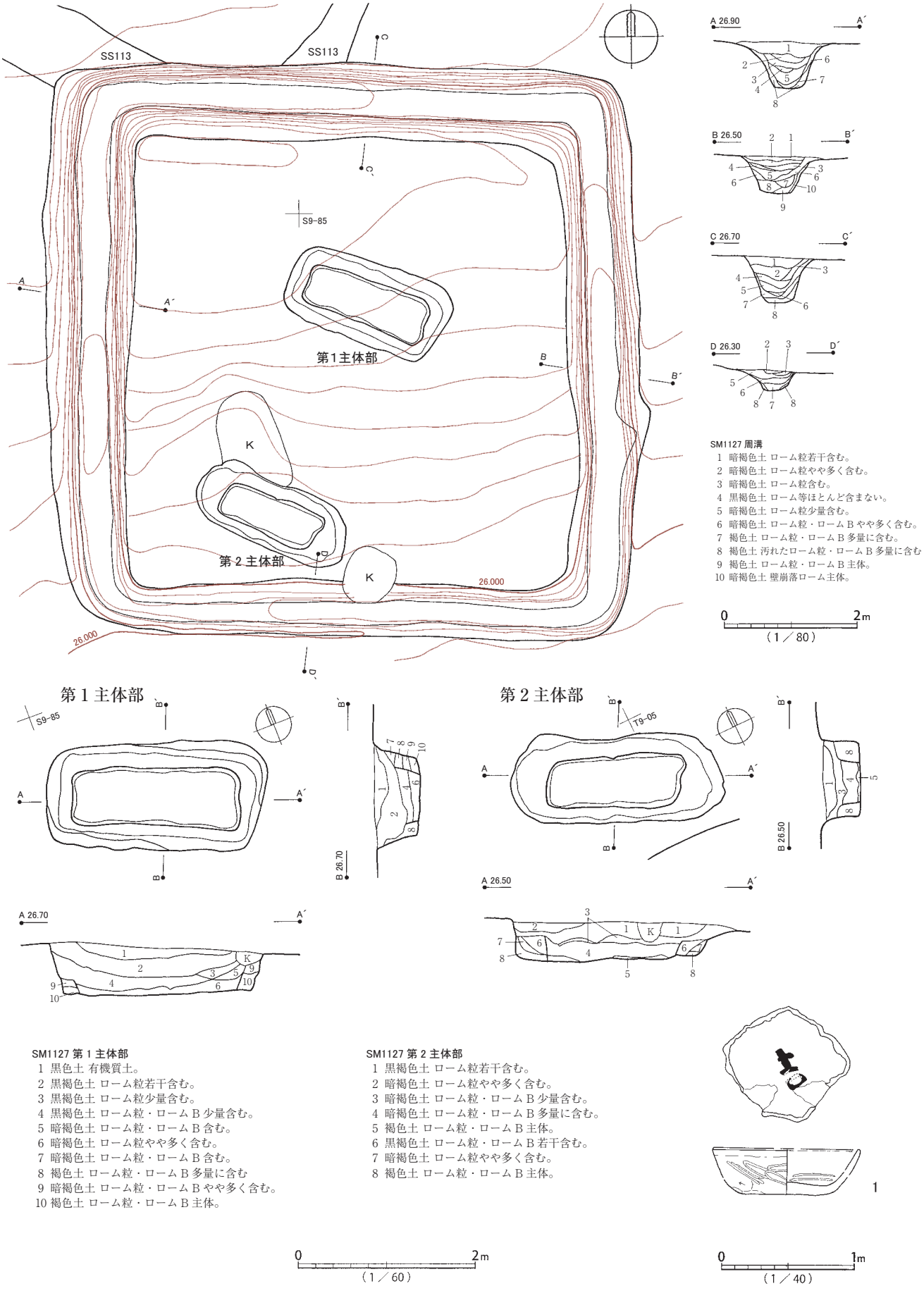
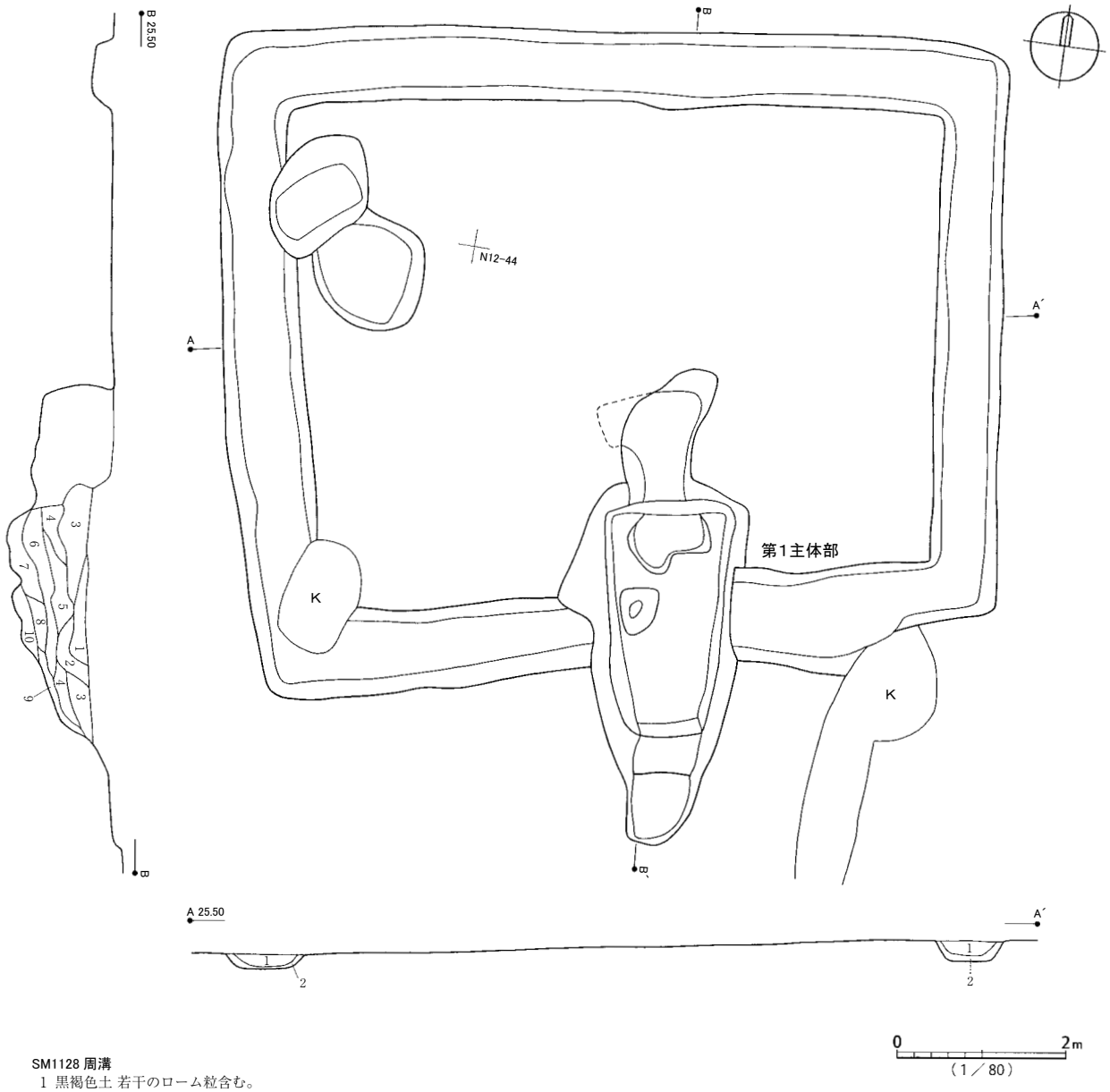


Fig.410　SM1127 遺構・遺物実測図



SM1128 周溝
1 黒褐色土 若干のローム粒含む。
2 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。

SM1128 第 1 主体部
1 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
2 黒褐色土 若干のローム粒含む。
3 黒褐色土 やや多くのローム粒含む。
4 黒褐色土 若干のローム粒含む。
5 黒褐色土 多量のローム粒含む。
6 明褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
7 黒褐色土 多量のローム粒・褐色土粒含む。
8 暗褐色土 多量のローム粒・ローム B 含む。
9 暗褐色土 多量のローム粒・ローム B 含む。
10 暗褐色土 汚れたローム粒・ローム B 主体。

Fig.411　SM1128 遺構実測図

R･S-19グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳である。旧遺構番号はセ54-12号遺構である。

墳丘と周溝

長径6.36m、短径6.16mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-12°-Wを示す。周溝内側面積は38.9㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第84位の規模である。確認面での周溝幅は、0.92～1.16m、深さは0.16～0.36mを測り、全体的に均整のとれた方形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1133　TJ地区　（Fig.414、PL.141）

K･L-21グリッドに位置する。埋葬施設に小土壙を採用する四隅の形態が崩れた終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号はTJ-1号遺構である。

墳丘と周溝

長径6.76m、短径6.04mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-39°-Wを示す。周溝内側面積は38.5㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳系では、第85位の規模である。確認面での周溝幅は、0.70～0.82m、深さは0.20～0.28mを測り、周溝断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

西側コーナー部に小土壙が検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部の西側コーナー付近に検出された小土壙である。墓壙規模は上端で、長径1.00m短径1.00m、下端で長径0.96m短径0.90mを測るが、深さの測定値はない。主軸方位はN-10°-Eを示す。調査所見では何も触れられてはいないが、この時期のこのタイプの遺構には小土壙が伴う事例が多々あり、本跡に伴う火葬を含む改葬墓系の埋葬施設として捉えることが妥当と判断される。

火葬骨等を期待したが、墓壙内からは何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1134　セ28地区　（Fig.415、PL.142）

T-9･10グリッドに位置する。西側周溝をSM1146と共有し、埋葬施設に地下式小型横穴を採用する終末期方墳(律令制墳墓)である。緩やかな南緩斜面に位置し、東側周溝のおよそ1/2、および南側周溝が流出しており、遺構の遺存状態は極めて不良である。旧遺構番号はセ28-116号遺構である。

墳丘と周溝

残存長径6.16m、短径6.04m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-14°-Eを示す。周溝内側面積は推定で(37.1)㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳系では第86位の規模である。確認面での周溝幅は、0.54～0.68m、深さは0.24～0.26mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央南側に、地下式小型横穴墓1基が検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、玄室を方台部の南側に置く地下式小型横穴墓である。羨道部は、長径1.60m短径1.30m、深さ最大1.00mを測り、竪坑状に一気に掘り込まれている。玄門部は羨道部底面からは0.28m高い位置に構築されており、幅0.64m高さ0.40m奥行き0.40mを測る。玄室規模は長径1.24m短径0.66mを測り、主軸方位はN-72°-Wを示す。天井部は残存していなかったが、土層断面より0.54m前後に復元できる。玄室内の中央底面からは木炭混じりの火葬骨が検出されており、類似する玄室規模のSM1083の改葬骨例とは別系の、火葬骨を収納するための地下式小型横穴墓の存在が確認される。

玄室内からは、木炭・火葬骨以外の遺物は検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、1の須恵器広口長頸壺ないしは短頸壺片が覆土一括で検出されている。

SM1135　セ28地区　（Fig.416、PL.142・192）

T-12・13グリッドに位置する。下層のSS55・56と重複する四隅が直角的な終末期方墳である。方台部内および周囲には攪乱が多数存在し、遺存状況は不良である。旧遺構番号はセ28-179号遺構である。

墳丘と周溝

長径6.32m、短径5.84mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-8°-Wを示す。周溝内側面積は36.6㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第87位の規模である。確認面での周溝幅は、0.88～1.04m、深さは0.30～0.42mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、覆土一括で1の須恵器短頸壺片および2の土師器坏が出土している。2の土師器坏が示す年代観は8世紀中葉頃と推定され、本来は方台部中央の攪乱内に存在し、須恵器短頸壺の転用蓋として使用された蔵骨器セットの可能性が高い。

SM1136　セ54地区　（Fig.417、PL.142）

W-20グリッドに位置する。なだらかな南緩斜面に位置し、南側周溝は流出している。下層のSK140と重複する終末期方墳である。旧遺構番号はセ54-48号遺構である。

墳丘と周溝

長径6.10m、残存短径3.04mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-28°-Wを示す。埋葬施設を中心とした周溝内側面積は推定で(36.5)㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第88位の規模である。確認面での周溝幅は、0.36～0.44m、深さは北側で0.30mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

推定方台部内の中央に1基検出されている。

第1主体部

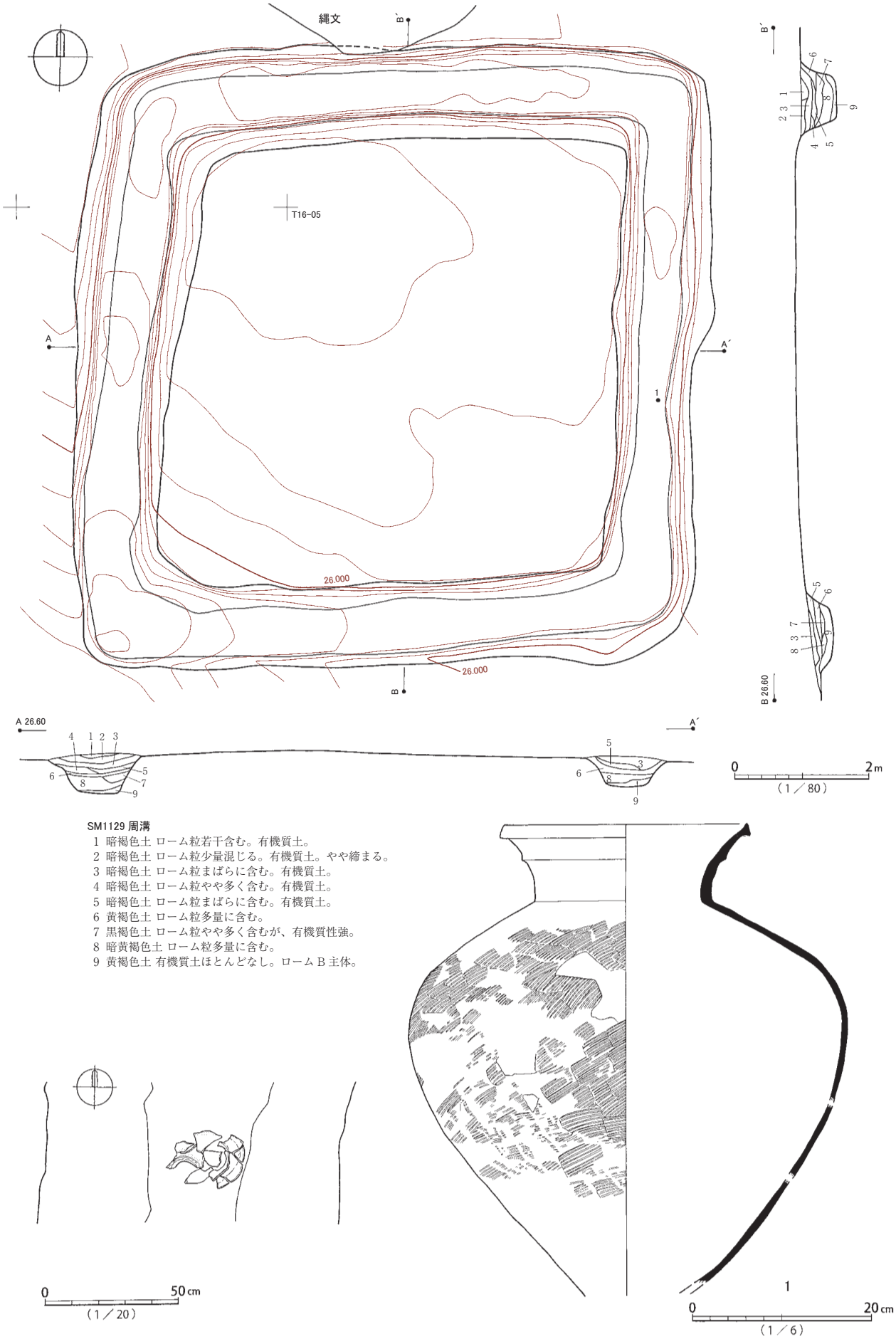


Fig.412　SM1129 遺構・遺物出土詳細・遺物実測図

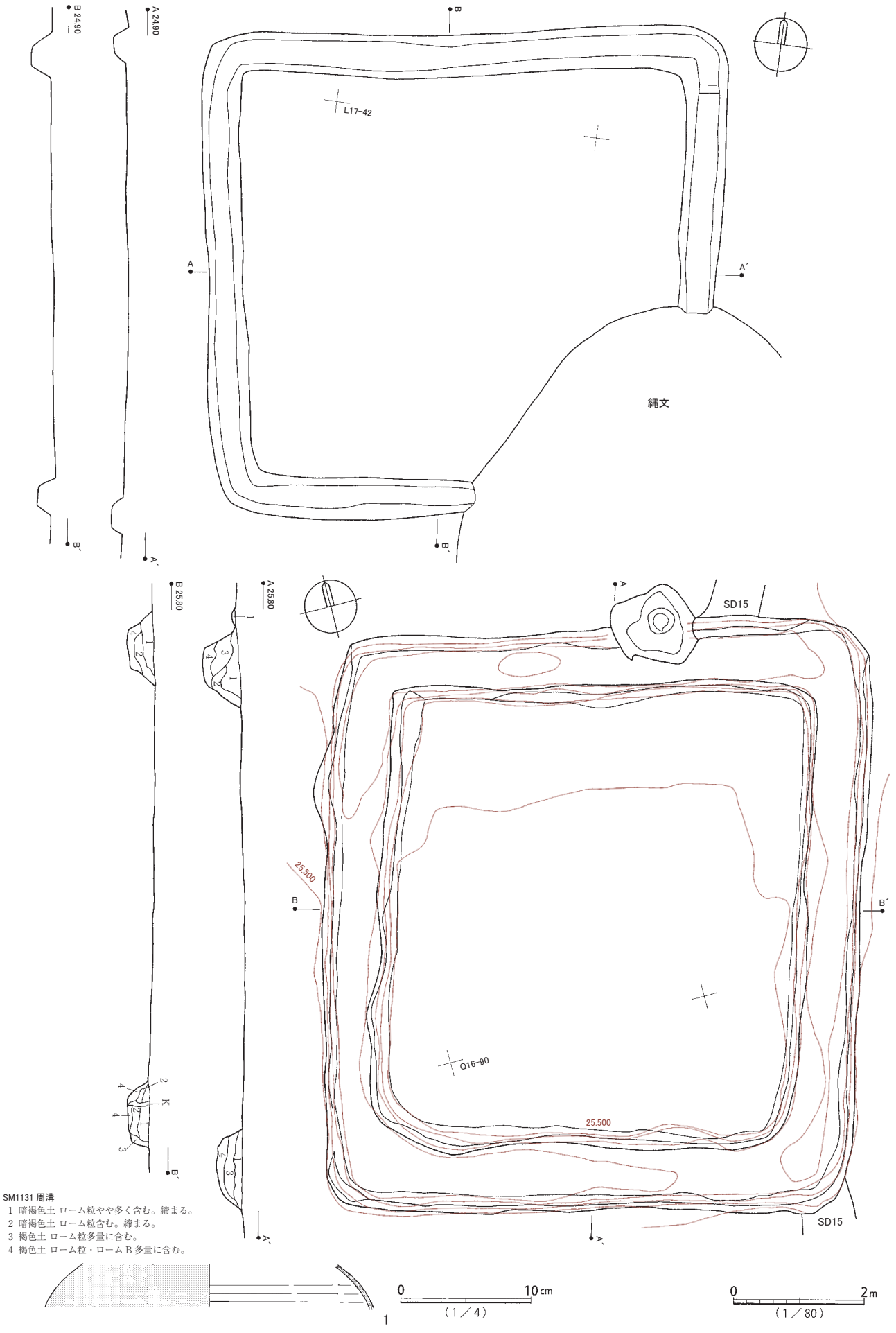
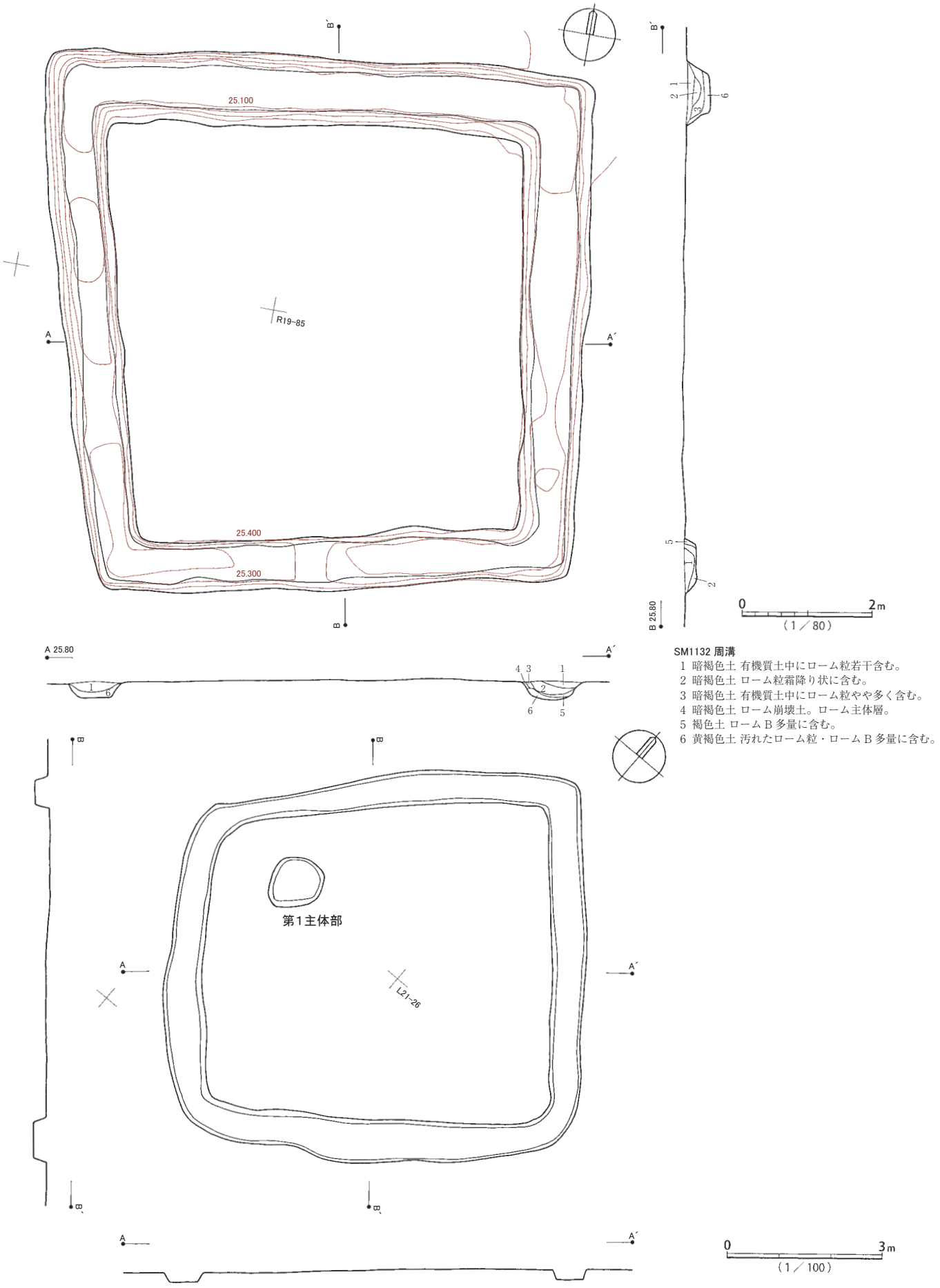


Fig.413　SM1130 遺構、SM1131 遺構・遺物実測図



SM1132 周溝
1 暗褐色土 有機質土中にローム粒若干含む。
2 暗褐色土 ローム粒霜降り状に含む。
3 暗褐色土 有機質土中にローム粒やや多く含む。
4 暗褐色土 ローム崩壊土。ローム主体層。
5 褐色土 ローム B 多量に含む。
6 黄褐色土 汚れたローム粒・ローム B 多量に含む。

Fig.414　SM1132 遺構、SM1133 遺構実測図

埋葬施設は、推定方台部中央に検出された土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.62m短径1.10m深さ0.56m、下端で長径2.44m短径0.78mを測り、主軸方位はN-64°-Eを示す。平面では捉えていないが、土層断面により墓壙のほぼ中央から箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、長さ2.10m幅0.48m、高さ0.34mを測り、底面はほぼ平坦である。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1137　セ54地区　（Fig.418、PL.142・192）

W-19グリッドに位置する。なだらかな南緩斜面に位置し、南西側の周溝の一部が流出している。下層のSS81と重複する四隅が直角的な終末期方墳である。旧遺構番号はセ54-31号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.86m、短径5.84mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-3°-Eを示す。周溝内側面積は34.9㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第89位の規模である。確認面での周溝幅は、1.06～1.30m、深さは0.30～0.44mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、覆土一括で1の須恵器短頸壺が検出されている。

SM1138　099地区　（Fig.418、PL.142）

N-17・18グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳（律令制墳墓）である。旧遺構番号は099-4097号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.94m、短径5.86mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-2°-Eを示す。周溝内側面積は34.5㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳系では、第90位の規模である。確認面での周溝幅は、0.84～1.02m、深さは0.18～0.32mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部東南コーナー付近に小土壙が検出されている。

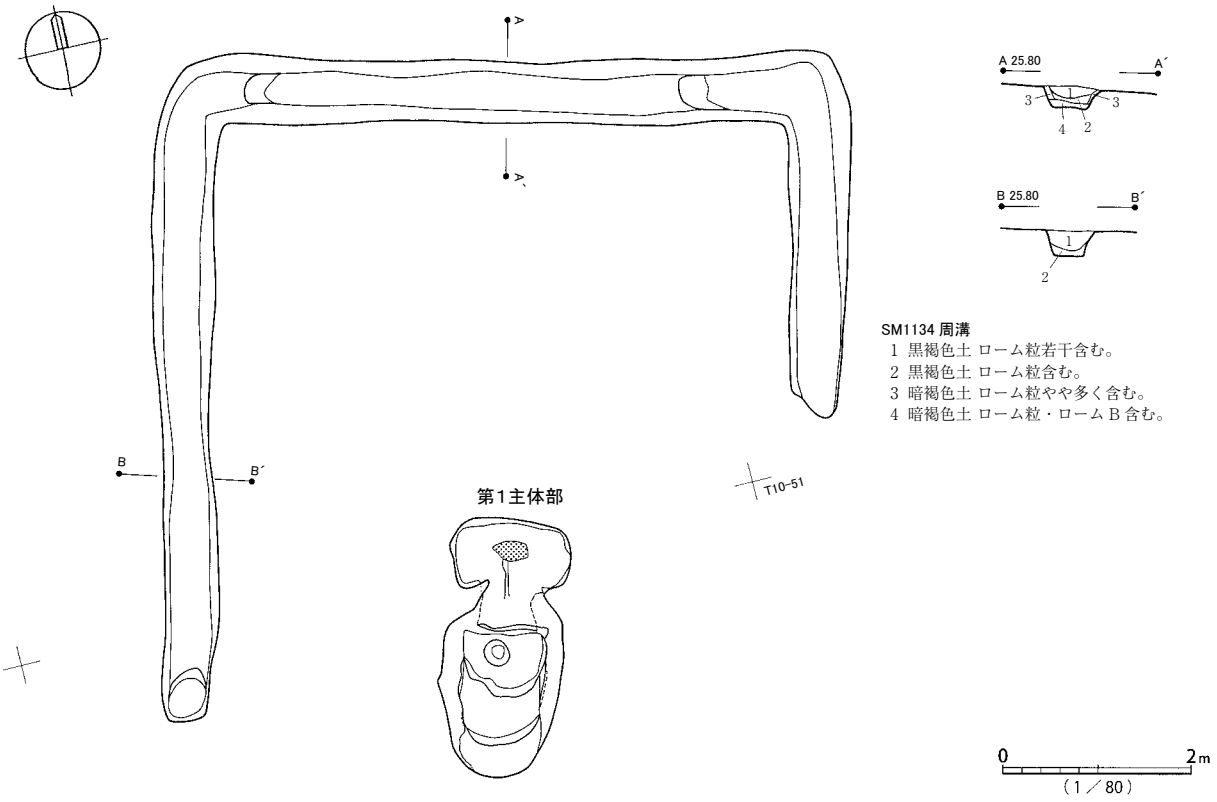
第1主体部

埋葬施設は、方台部東南コーナー付近に検出された小土壙である。墓壙規模は上端で、長径1.18m短径1.10m、深さ0.30mを測り、主軸方位はN-23°-Wを示す。調査所見では何も触れられてはいないが、この時期のこのタイプの遺構には小土壙が伴う事例が多々あり、本跡に伴う火葬を含む改葬墓系の埋葬施設として捉えることが妥当と判断される。

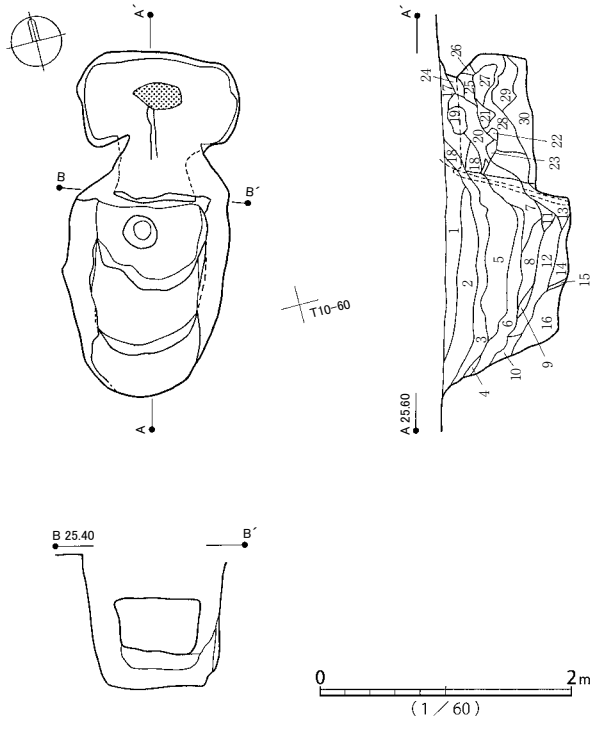
墓壙内からは何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

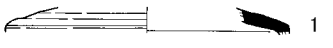
本墳周溝内からは、覆土一括で1の須恵器片が検出されている。



SM1134 周溝
1 黒褐色土 ローム粒若干含む。
2 黒褐色土 ローム粒含む。
3 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
4 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。



SM1134 第 1 主体部
1 暗褐色土 ローム粒若干含む。
2 褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
3 暗褐色土 ローム B 含む。
4 褐色土 ローム B 主体。
5 明褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
6 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
7 暗褐色土 ローム粒若干含む。
8 黒色土 有機質土主体。
9 褐色土 ローム B。
10 暗褐色土 ローム粒含む。
11 暗褐色土 ローム粒少量含む。
12 明褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
13 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
14 明褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
15 明褐色土 ローム B 主体。
16 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
17 暗褐色土 ローム粒含む。締まりなし。
18 褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
19 明褐色土 滓ローム B。
20 暗褐色土 ローム粒含む。締まりなし。
21 明褐色土 ローム B。
22 褐色土 汚れたローム B。
23 明褐色土 ローム B。
24 暗褐色土 ローム粒含む。
25 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
26 暗褐色土 ローム粒含む。
27 褐色土 汚れたローム B。
28 暗褐色土 ローム粒･ローム B 含む。締まりなし。
29 明褐色土 ローム B。
30 暗褐色土 ローム粒含む。締まりなし。



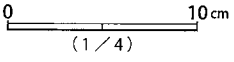
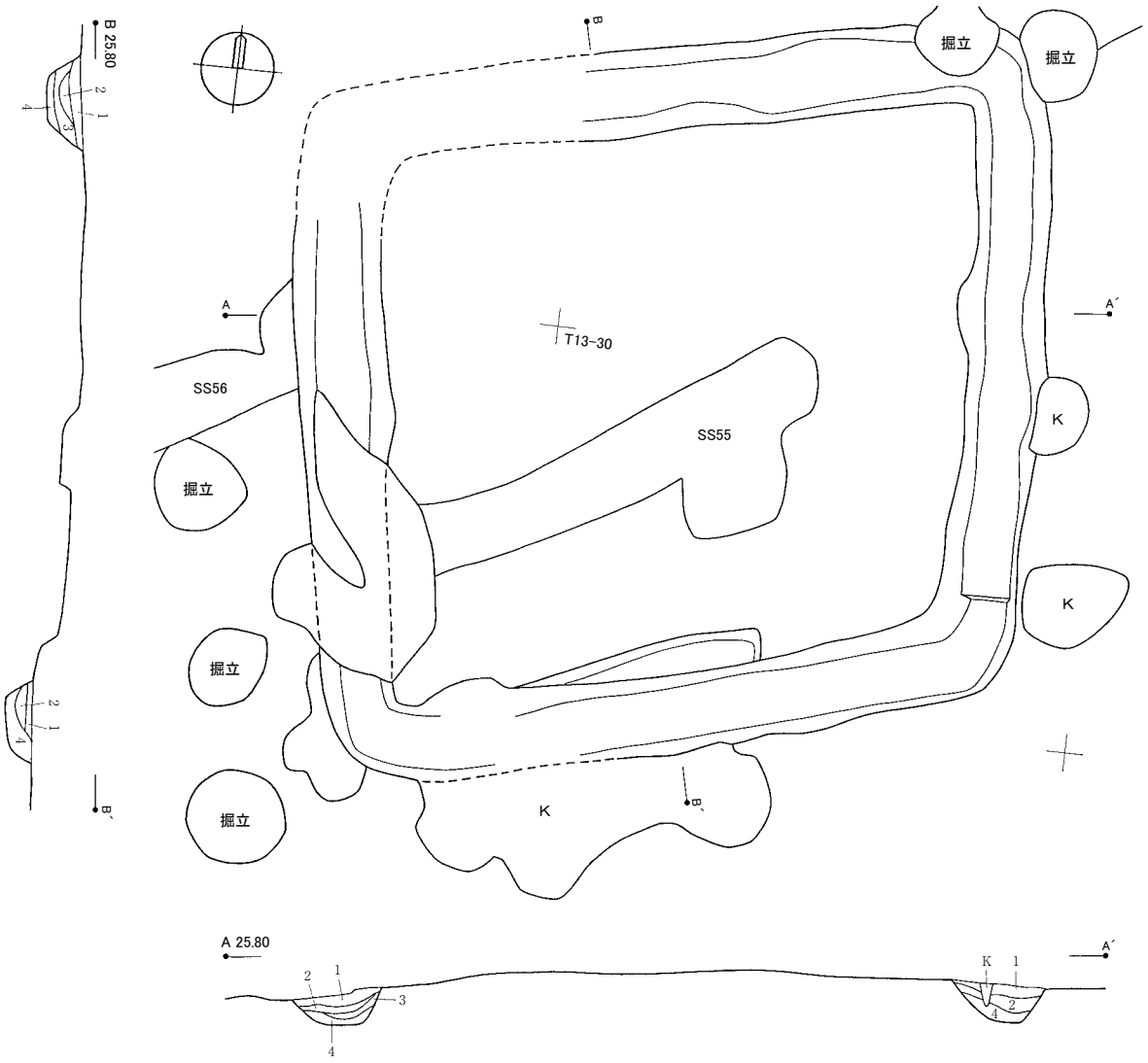


Fig.415　SM1134 遺構・遺物実測図



SM1135 周溝
1 暗褐色土 有機質土主体。
2 黄褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
3 暗褐色土 有機質土中にローム粒混じる。
4 暗褐色土 有機質土中にローム粒・ローム B 混入。

0 2m
（1／80）



0 10cm
（1／4）

Fig.416　SM1135 遺構・遺物実測図

SM1139　099地区　（Fig.419、PL.143）

L-16グリッドに位置する。埋葬施設に小土壙を採用する終末期方墳（律令制墳墓）である。旧遺構番号は099-4084号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.94m、短径5.76mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-3°-Wを示す。周溝内側面積は34.0㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳系では、第91位の規模である。確認面での周溝幅は、0.66～1.08m、深さは0.34～0.54mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部中央やや東側に小土壙が検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央やや東側に検出された小土壙である。墓壙規模は上端で、長径1.14m短径0.70m、深さ0.20mを測り、主軸方位はN-16°-Eを示す。調査所見では触れられていないが、本跡に伴う火葬を含む改葬墓系の埋葬施設として捉えることが妥当と判断される。北側付近にピット１が検出されており、深さは27㎝を測る。

墓壙内からは何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1140　TJ地区　（Fig.419、PL.143）

E-12グリッドに位置する。下層に位置する竪穴住居跡と重複する四隅が直角的な終末期方墳（律令制墳墓）である。旧遺構番号はTJ-7号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.86m、短径5.56mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-11°-Wを示す。周溝内側面積は32.3㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第92位の規模である。確認面での周溝幅は、0.60～0.66m、深さは0.16～0.26mを測り、周溝断面は逆台形を呈している。

方台部内に6基のピット状落込みが検出されているが、何れも不整形ないしは規模が小さいことから埋葬施設として捉え難い。深さはそれぞれP1が18㎝、P2が18㎝、P3が10㎝、P4が6㎝、P5が13㎝、P6が21㎝を測る。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

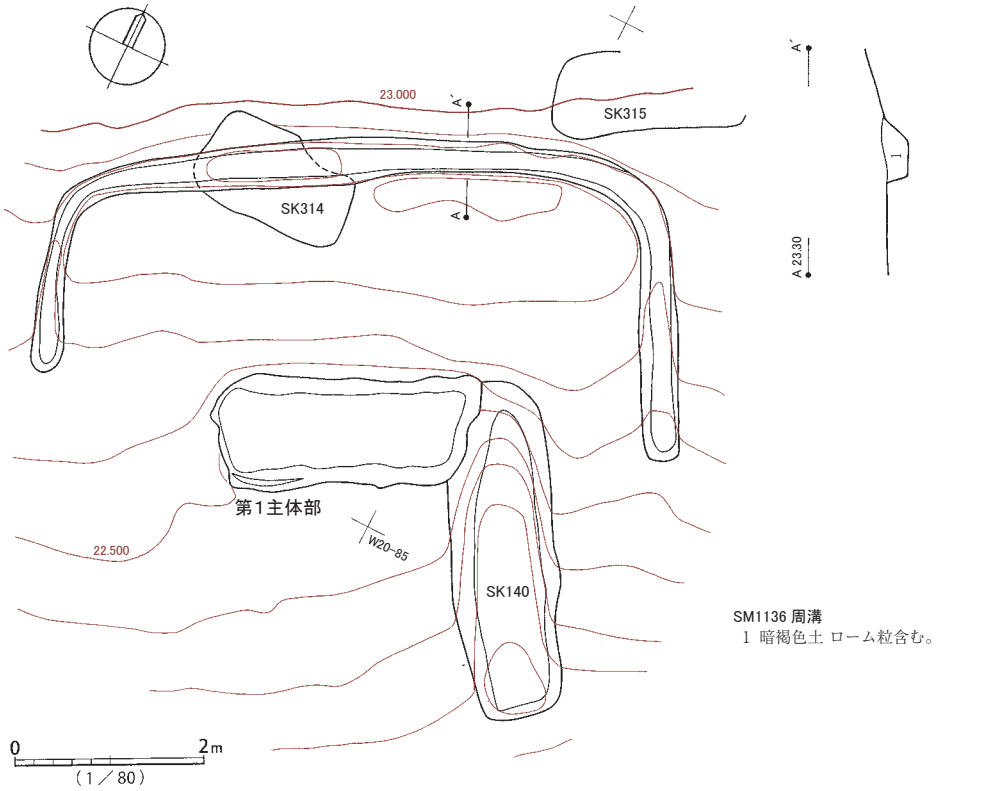
本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

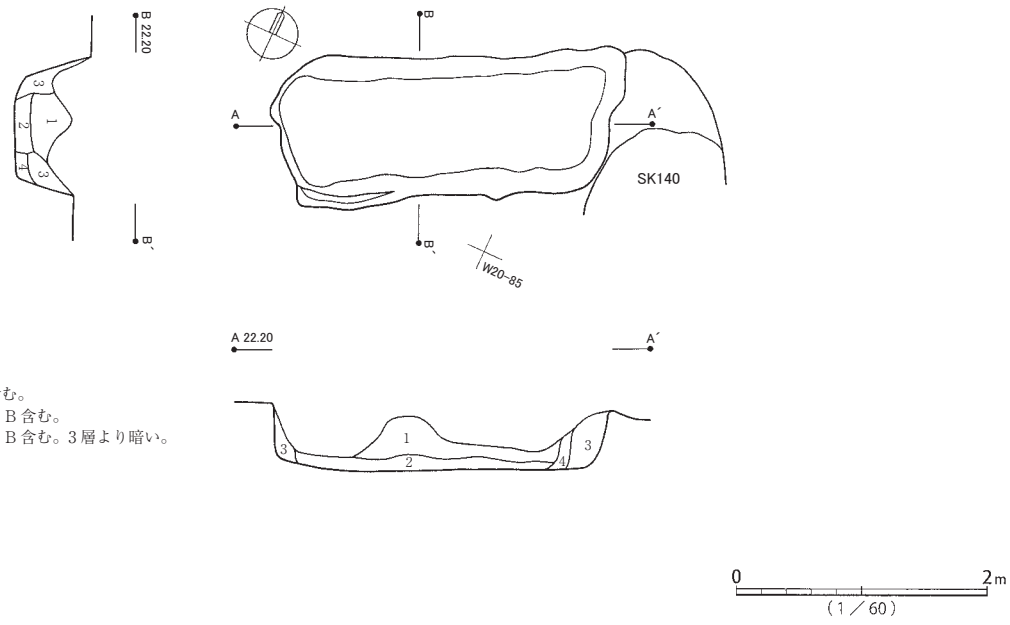
SM1141　099地区　（Fig.420、PL.192）

N-23グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳（律令制墳墓）である。方台部中央付近に大きな攪乱が存在し、遺存状況は不良である。旧遺構番号は099-4103号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.90m、短径5.30mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-15°-Wを示す。周溝内側





SM1136 第 1 主体部
1 暗褐色土 ローム粒含む。
2 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
3 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
4 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。3 層より暗い。

Fig.417　SM1136 遺構実測図

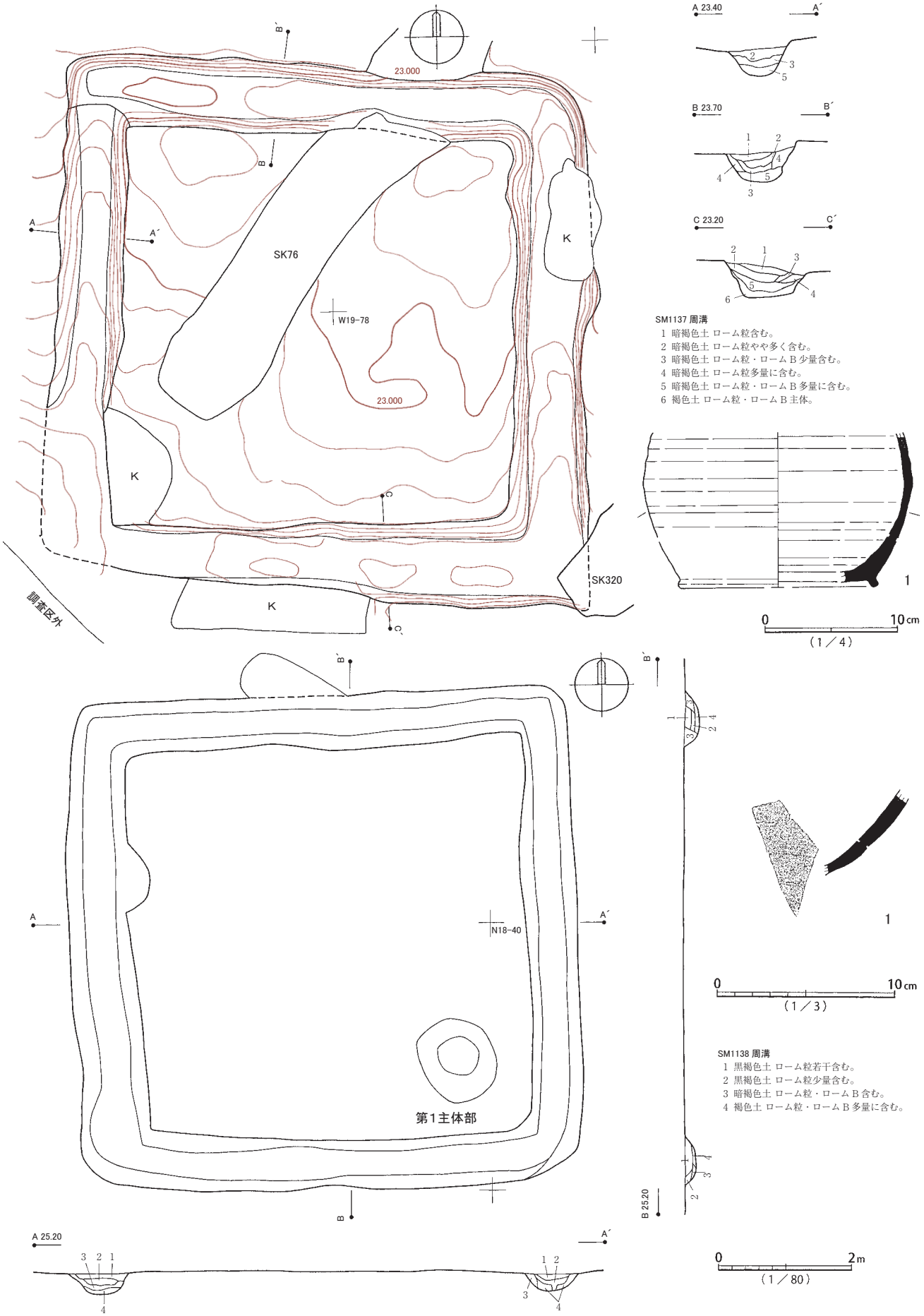


Fig.418　SM1137 遺構・遺物、SM1138 遺構・遺物実測図

面積は31.5㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第93位の規模である。確認面での周溝幅は、0.70～0.92m、深さは0.26～0.42mを測り、周溝断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、覆土一括で1の須恵器長頸壺片と2の須恵器片が検出されている。

SM1142　TJ地区　（Fig.420、PL.143・192）

K-19・20グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳（律令制墳墓）である。旧遺構番号はTJ-3号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.68m、短径5.64mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-22°-Wを示す。周溝内側面積は31.4㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第94位の規模である。確認面での周溝幅は、0.54～0.82m、深さは0.30～0.36mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、覆土一括で1の土師器高坏坏部が検出されているが、時期的に本跡に直接伴う遺物ではない。

SM1143　TJ地区　（Fig.421、PL.143）

K-20グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳である。下層に位置する竪穴住居跡と重複し、南側周溝の一部は未検出である。旧遺構番号はTJ-2号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.50m、短径5.40mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-26°-Wを示す。周溝内側面積は30.5㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第95位の規模である。確認面での周溝幅は、0.58～0.70m、深さは0.24～0.38mを測り、周溝断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1144　099地区　（Fig.421、PL.143）

K-16・17グリッドに位置する。SM1145と重複する四隅が直角的な終末期方墳（律令制墳墓）である。方台部の内外には攪乱が多数存在し、遺存状況は不良である。旧遺構番号は099-4041A号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.60m、短径5.30mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-20°-Wを示す。周溝内側面積は29.9㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第96位の規模である。確認面

での周溝幅は、0.86～1.24m、深さは0.14～0.24mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1145　099地区　（Fig.421、PL.143）

K-16･17グリッドに位置する。SM1144と重複する四隅が直角的な終末期方墳（律令制墳墓）である。SM1144と重複した範囲は、新旧逆調査によって遺構の一部が喪失しており、遺存状況は不良である。旧遺構番号は099-4041B号遺構である。

墳丘と周溝

長径3.82m、短径3.74mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-6°-Wを示す。周溝内側面積は13.6㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第132位の規模であるが、SM1144と重複しているためここで報告する。確認面での周溝幅は、0.46～0.76m、深さは0.24mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1146　セ28地区　（Fig.422、PL.143～144･192）

T-9グリッドに位置する。東側周溝をSM1134と共有し、埋葬施設に地下式小型横穴を採用する終末期方墳（律令制墳墓）である。旧遺構番号はセ28-115号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.50m、短径5.50m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-15°-Eを示す。周溝内側面積は29.6㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳系では第97位の規模である。確認面での周溝幅は、0.66～0.76m、深さは0.20～0.24mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設の天井部崩落を避けるために掘り下げられた拡張範囲から、Ⅲ層中に掘り込まれた縄文炉穴を想定し得る焼土を多量に含んだ土層が検出されている。

埋葬施設

南側周溝を跨いで、地下式小型横穴墓1基を検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、南側周溝を跨いで構築された地下式小型横穴墓である。羨道部は、長径2.10m短径1.52m、深さ最大1.40mを測り、竪坑状に一気に掘り込まれている。この部分の周溝底は西側から階段状に掘り込まれており、1段目は周溝底から20.9㎝、2段目は20.3㎝、3段目は60.0㎝、4段目は27.1㎝を測る。玄門部は羨道部底面から0.43m高い位置に構築されており、幅0.60m奥行き0.12mを測る。玄室規模は長径0.88m短径0.66m、天井部までの高さ0.34mを測り、主軸方位はN-76°-Eを示す。土層

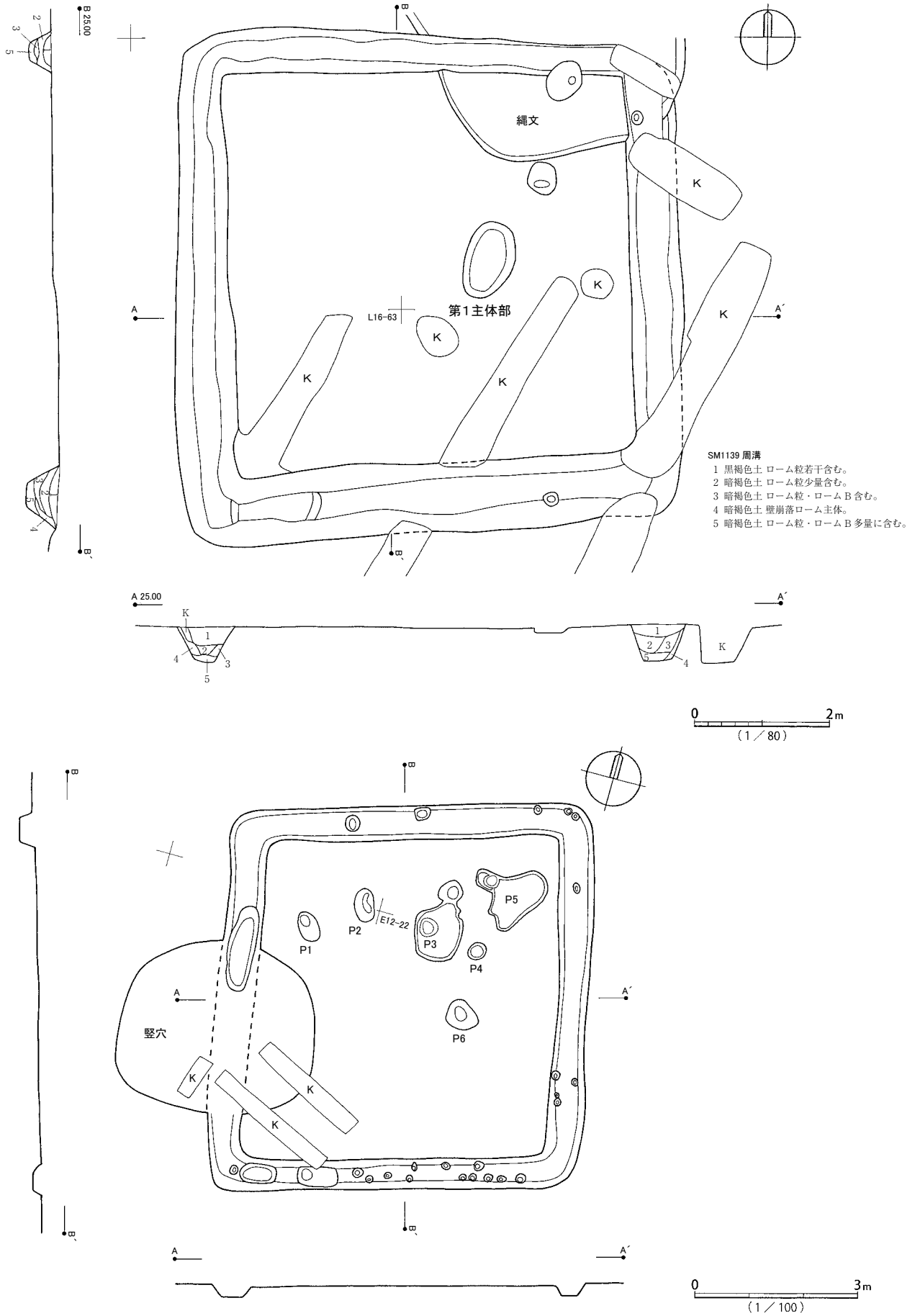


Fig.419　SM1139 遺構、SM1140 遺構実測図

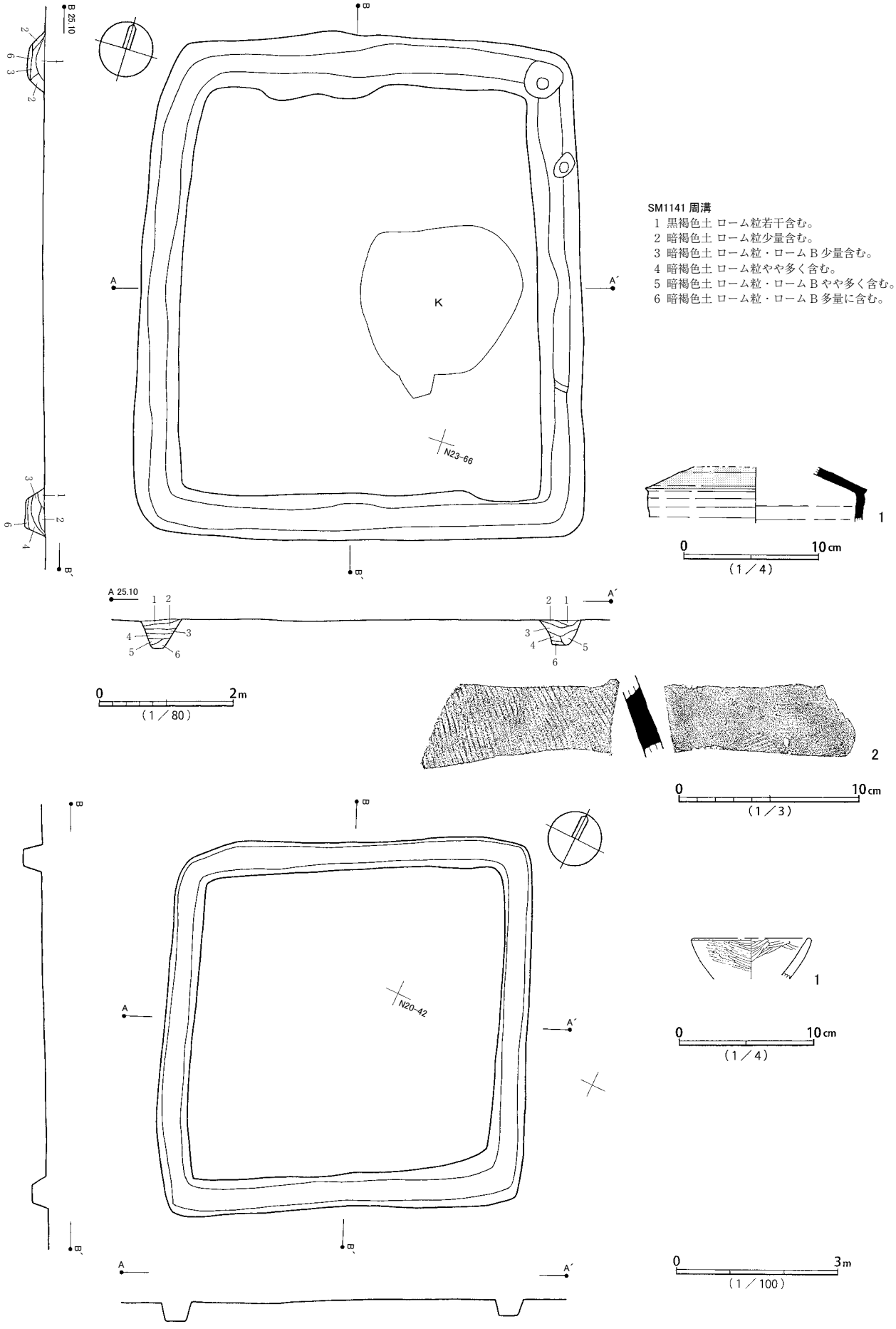


Fig.420　SM1141 遺構・遺物、SM1142 遺構・遺物実測図

断面によれば、玄室と羨道部間に存在する13層は、縦長に走っており、ここに閉塞板が存在していた可能性が高い。玄室中央部の底面からは炭化材と共に火葬骨が検出されており、類似する玄室規模であるSM1083の改葬骨とは別に、火葬骨を収納するための地下式小型横穴墓の存在が確認される。

玄室内からは、炭化材と火葬骨以外の遺物は検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、1～5の須恵器短頸壺、及び6の土師器鉢が検出されているが、全て覆土一括の検出である。1～5の短頸壺の内何れか1点と、土師器鉢が転用蓋となるセットで蔵骨器を構成していた可能性が考えられる。

SM1147　099地区　（Fig.423、PL.174・192）

M・N-23・24グリッドに位置する。埋葬施設に地下式小型横穴を採用する終末期方墳（律令制墳墓）である。旧遺構番号は099-4101号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.56m、短径5.48m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-39°-Wを示す。周溝内側面積は29.4㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳系では第98位の規模である。確認面での周溝幅は、0.64～0.82m、深さは0.14～0.20mを測り、周溝断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

南側周溝に接して構築された、地下式小型横穴墓1基が検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、南側周溝に接して構築された地下式小型横穴墓である。羨道部は、長径2.26m短径1.86m、深さ最大0.98mを測り、竪坑状に一気に掘り込まれている。玄門部は羨道部底面から4㎝高い位置に構築されており、幅0.72m奥行き0.12mを測る。玄室規模は長径0.92m短径0.54m、天井部までの高さは不明であるが、深さは0.62mを測り、主軸方位はN-54°-Eを示す。

玄室内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、1の須恵器短頸壺と2の須恵器底部（短頸壺か？）が覆土一括で検出されている。短頸壺はおそらく蔵骨器として本来玄室内に収められていた遺物と想定される。

SM1148　099地区　（Fig.424、PL.144）

N-16グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳(律令制墳墓)である。方台部内外に攪乱が存在し、遺存状況は不良である。旧遺構番号は099-4098号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.62m、短径5.14m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-36°-Wを示す。周溝内側面積は28.5㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第99位の規模である。確認面での周溝幅は、0.90～1.00m、深さは0.28～0.38mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

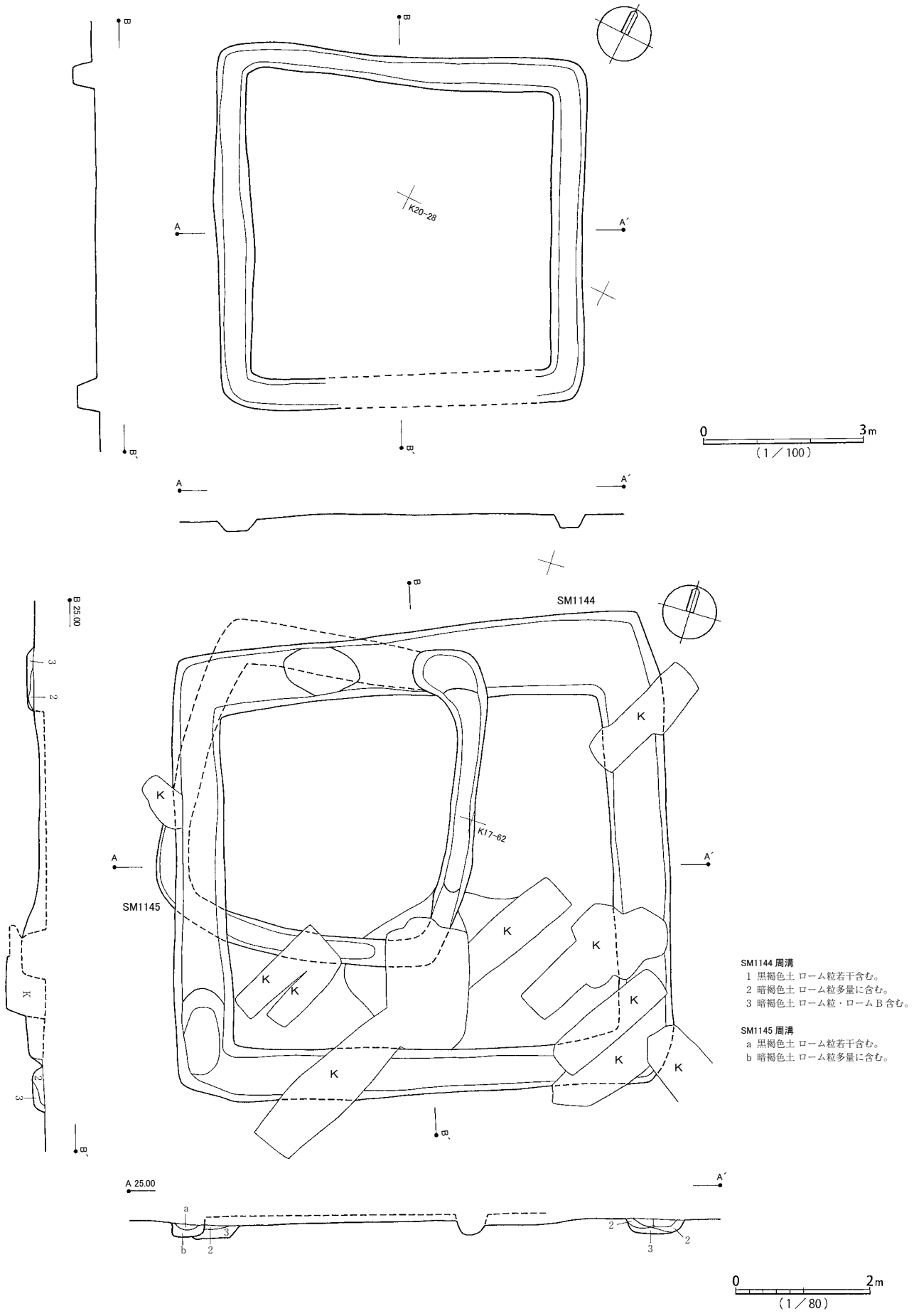


Fig.421　SM1143 遺構、SM1144 遺構、SM1145 遺構実測図

本墳周溝内からは、遺物が全く検出されなかった。

SM1149　セ28地区　（Fig.424、PL.144）

R-13グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳（律令制墳墓）である。旧遺構番号はセ28-027号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.54m、短径5.10m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-5°-Wを示す。周溝内側面積は27.6㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第100位の規模である。確認面での周溝幅は、0.84～1.18m、深さは0.22～0.32mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、1内面に「仙」の文字が１字認められる土師器杯の底部が、2･3須恵器甕が検出されている。

SM1150　099地区　（Fig.425、PL.144）

K-9グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳（律令制墳墓）である。旧遺構番号は099-4035号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.44m、短径5.06m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-6°-Eを示す。周溝内側面積は27.3㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第101位の規模である。確認面での周溝幅は、0.66～0.76m、深さは0.16～0.28mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、遺物が全く検出されなかった。

SM1151　099地区　（Fig.425）

O･P-23･24グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳(律令制墳墓)である。方台部内にはトレンチが入り、遺存状況は見た目以上に不良である。旧遺構番号は099-4105号遺構である。

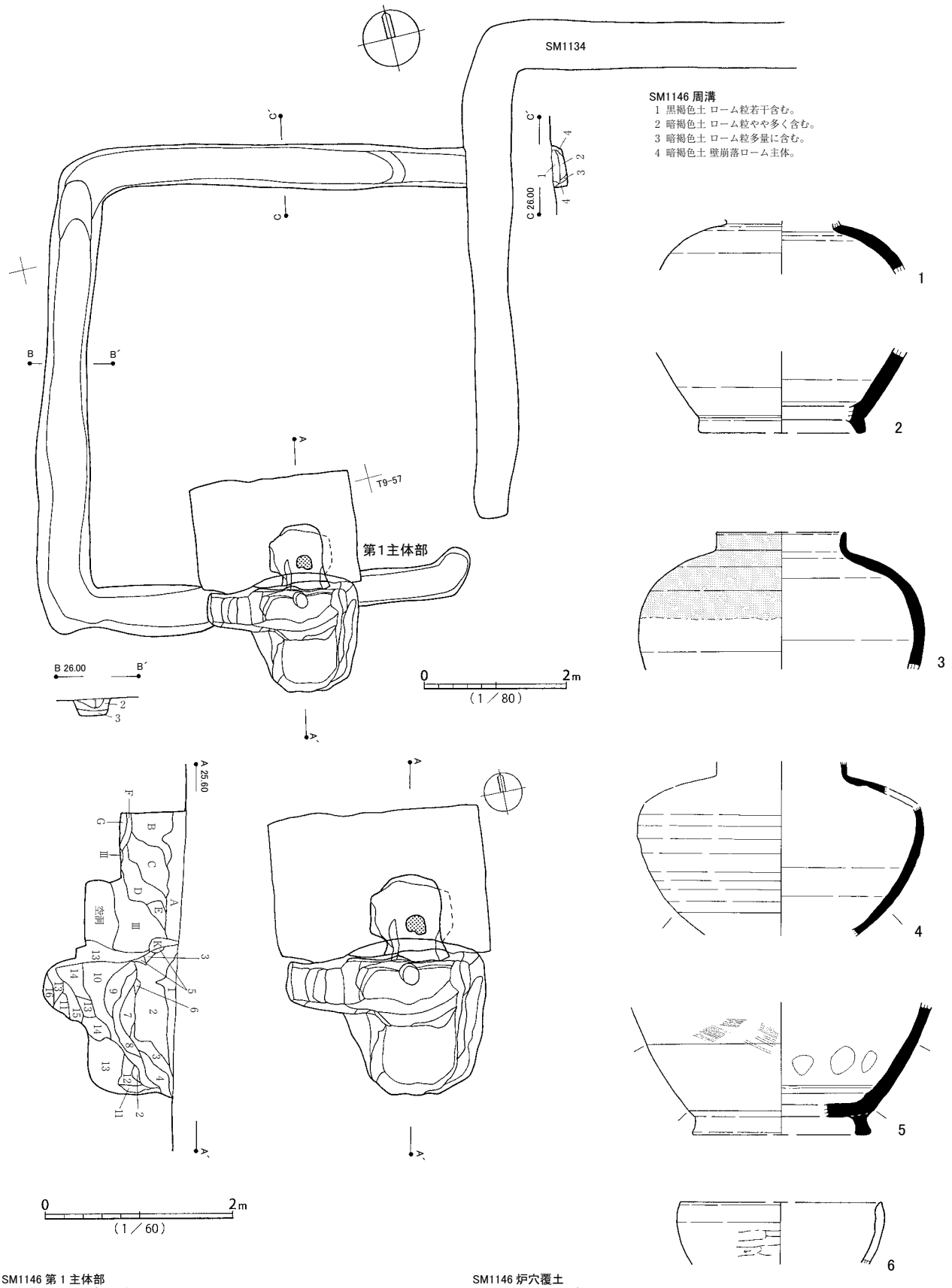
墳丘と周溝

長径5.24m、短径5.16m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-7°-Wを示す。周溝内側面積は27.2㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第102位の規模である。確認面での周溝幅は、0.78～1.08m、深さは0.18～0.40m、土層断面図上では0.80～0.98mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物



SM1146 第 1 主体部
1 褐色土 ローム粒多量に含む。
2 暗褐色土 ローム粒若干含む。
3 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
4 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
5 明褐色土 ローム B。
6 明褐色土 ローム B 主体。
7 明褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
8 明褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
9 明褐色土 ローム B 主体。
10 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
11 暗褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
12 暗褐色土 ローム粒・ローム小 B 多量に含む。
13 褐色土 汚れたローム B 主体。
14 暗褐色土 ローム小 B 多量に含む。
15 暗褐色土 ローム B 多量に含む。
16 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。

SM1146 炉穴覆土
A 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
B 暗褐色土 ローム粒・焼土粒含む。
C 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
D 暗褐色土 ローム粒含む。
E 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
F 暗褐色土 ローム粒・焼土粒含む。
G 赤褐色土 焼土粒多量に含む。

Fig.422　SM1146 遺構・遺物実測図

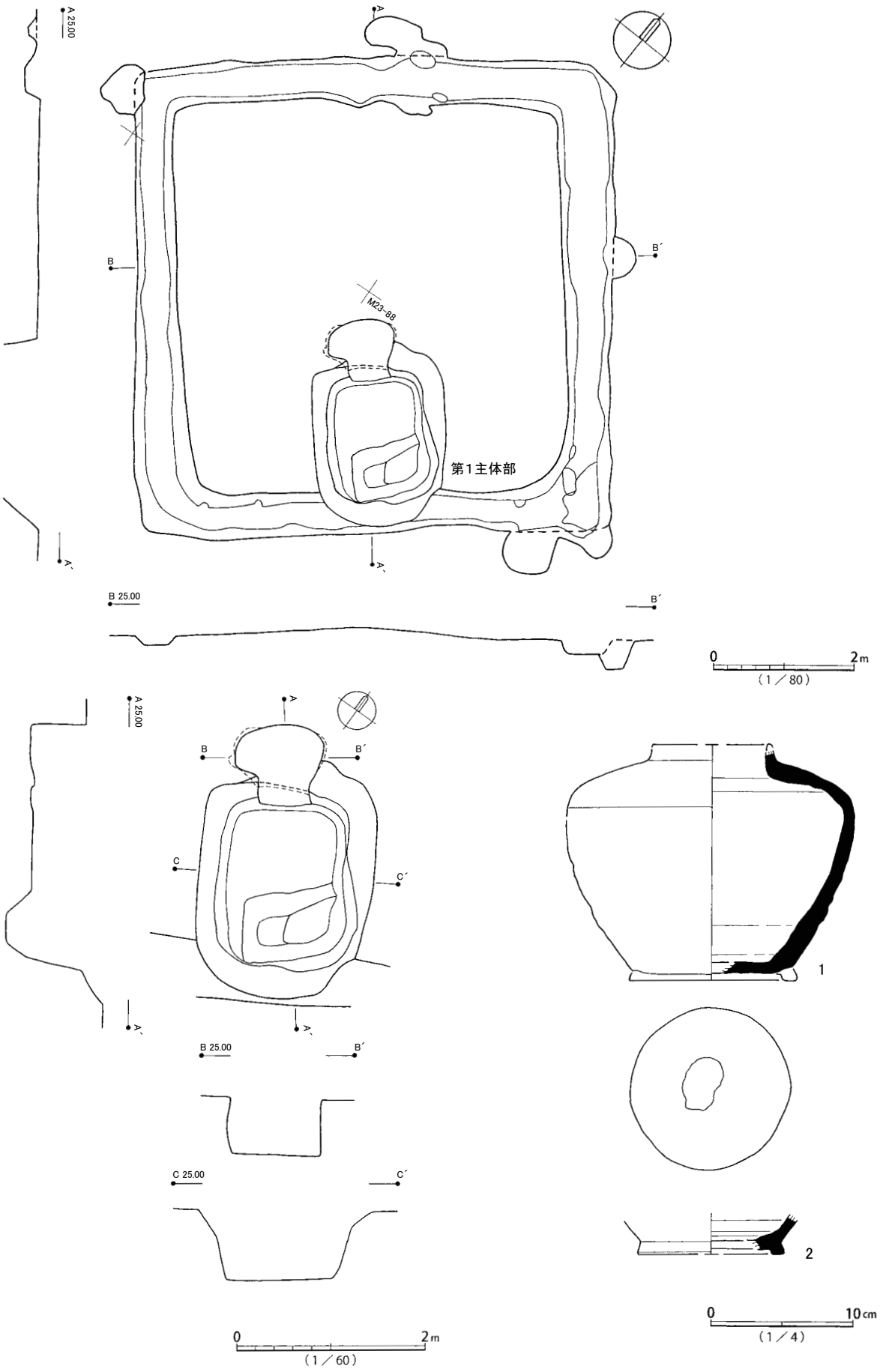


Fig.423　SM1147 遺構・遺物実測図

本墳周溝内からは、遺物が全く検出されなかった。

SM1152　セ28･099地区　（Fig.426、PL.192）

P･Q-11グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳(律令制墳墓)である。本跡はセ28･099の両地区で1/2ずつ調査が行われている。旧遺構番号はセ28-031・099-4100号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.24m、短径5.06m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-20°-Wを示す。周溝内側面積は26.7㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第103位の規模である。確認面での周溝幅は、0.74～0.80m、深さは0.20mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

方台部内にはピットが1基存在し、深さは72.9㎝を測る。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、3点の須恵器片が覆土一括で検出されている。1はその器形から、広口壺底部と想定される。2は転用砥石であり、内外面ともよく使用されている。

SM1153　099地区　（Fig.426）

P-21グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号は099-4112号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.36m、短径5.20m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-86°-Eを示す。周溝内側面積は26.6㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第104位の規模である。確認面での周溝幅は、0.60～0.70m、深さは0.14～0.18mを測り、周溝断面は逆台形を呈している。

全体的に均整のとれた方形形状を呈し、方台部内にはピットが4基存在し、深さはそれぞれP1が20,3㎝、P2が32.2㎝、P3が43.5㎝、P4が24.5㎝を測る。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、遺物が全く検出されなかった。

SM1154　セ28地区　（Fig.427、PL.112･144～145）

R-10グリッドに位置する。埋葬施設に小土壙を採用する終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号はセ28-041号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.20m、短径5.14mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-5°-Wを示す。周溝内側面積は26.4㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第105位の規模である。確認面での周溝幅は、0.60～0.74m、深さは0.18～0.22mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

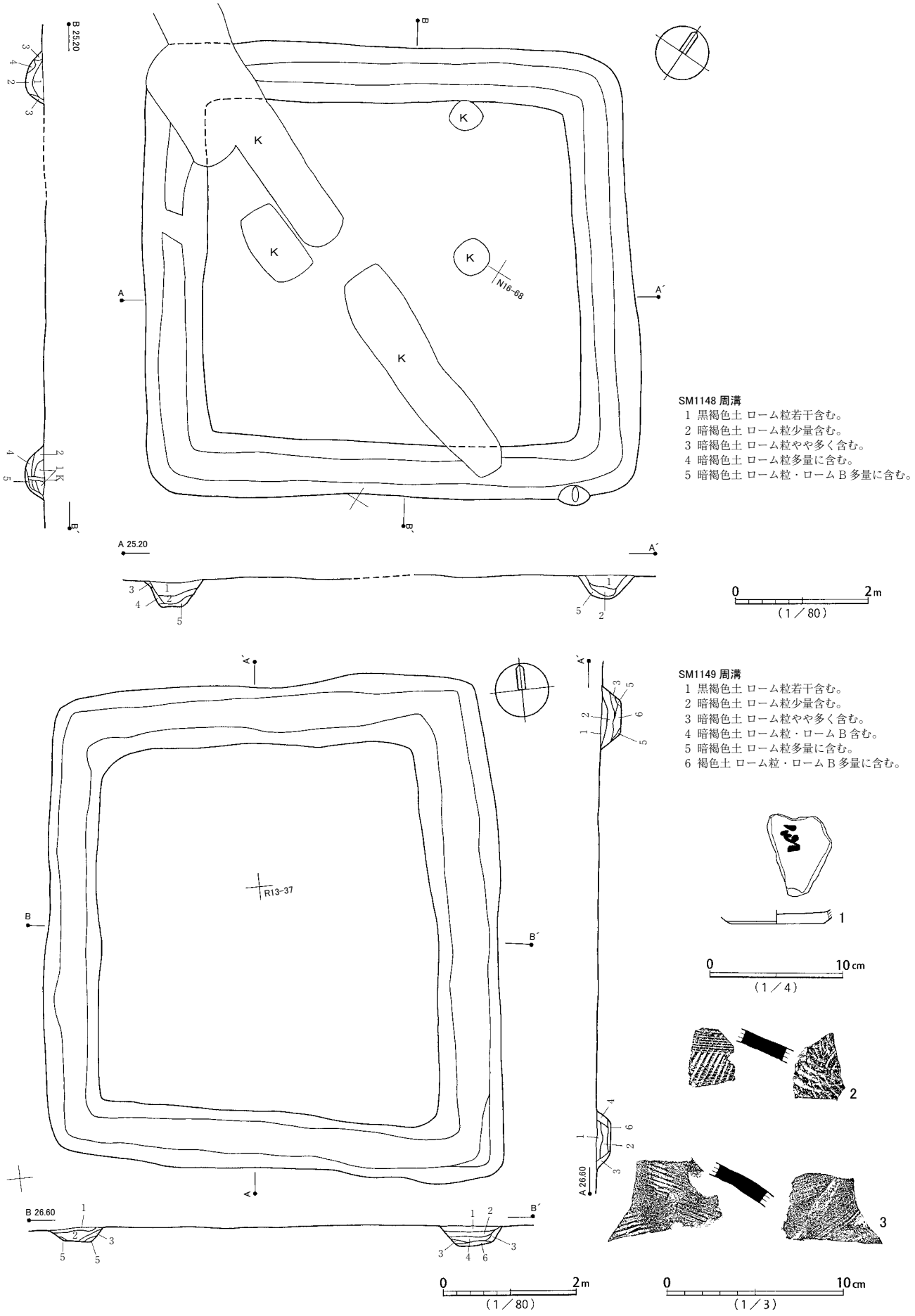


Fig.424　SM1148 遺構、1149 遺構・遺物実測図

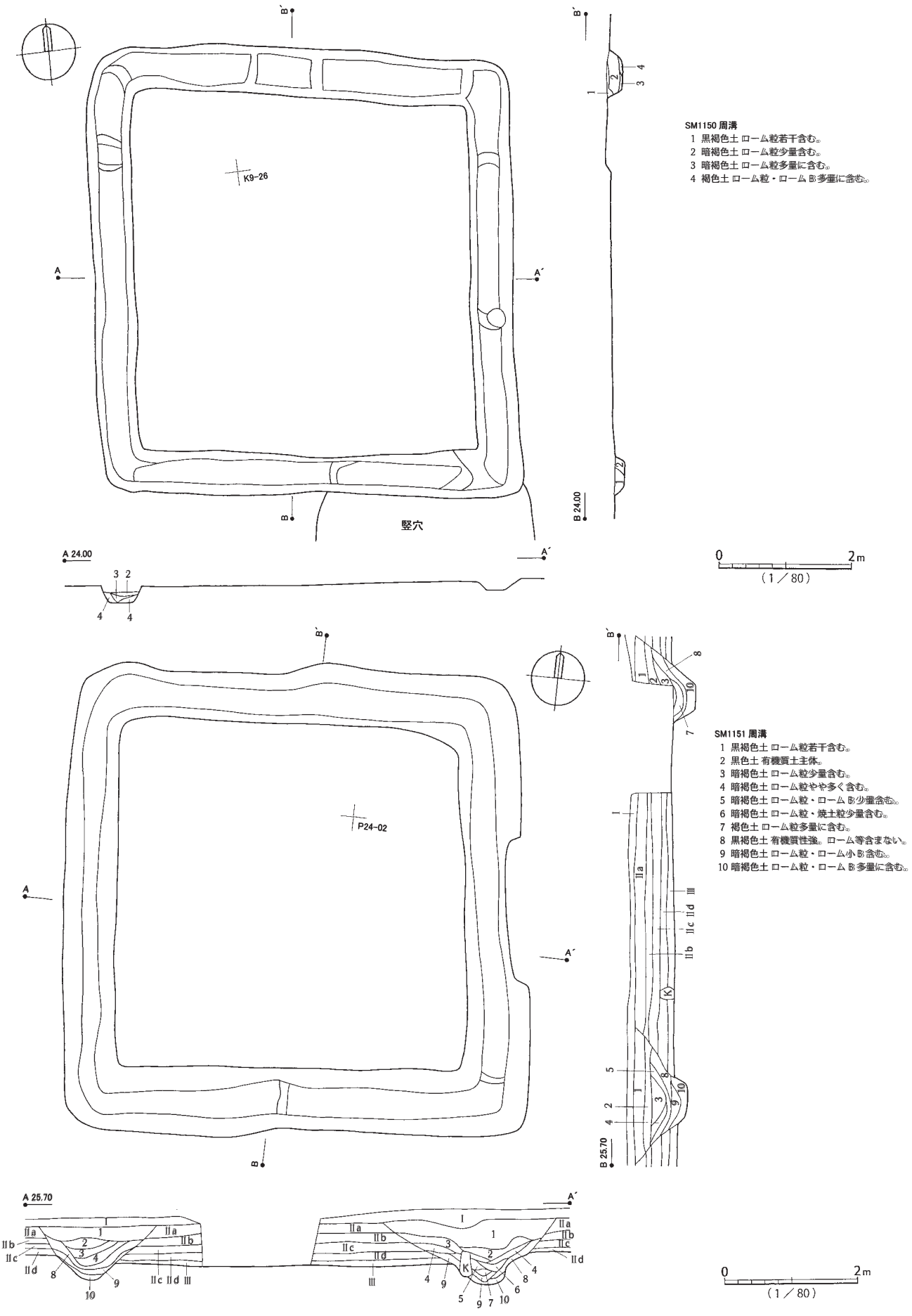


Fig.425　SM1150 遺構、SM1151 遺構実測図

方台部中央やや西側に、木炭を使用した小土壙が検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央やや西側に検出された木炭使用の小土壙である。墓壙規模は上端で、長径1.20m短径1.18m、深さ0.06mを測り、主軸方位はN-1°-Eを示す。周囲を木炭で充填した中央部からは、骨粉と共に火葬骨が検出されており、本跡に伴う火葬墓であることが判明する。

墓壙内からは木炭・骨粉と火葬骨の他、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1155　セ54地区　（Fig.427、PL.145・192）

U・V-16・17グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号はセ54-26号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.18m、短径5.14mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-5°-Wを示す。周溝内側面積は26.0㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第106位の規模である。確認面での周溝幅は、0.58～0.86m、深さは0.16～0.26mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、覆土一括で1点の須恵器片が検出されている。

SM1156　099地区　（Fig.428、PL.145・192）

J-9グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号は099-4037号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.48m、短径4.72mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-11°-Wを示す。周溝内側面積は25.8㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第107位の規模である。確認面での周溝幅は、0.46～0.52m、深さは0.04～0.14mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、覆土一括で2点の弥生土器片が検出されている。1は鉢、2は甕であるが、何れも本遺構には直接伴わない。

SM1157　099地区　（Fig.428、PL.192）

L・M-10・11グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号は099-4028号遺構である。

墳丘と周溝

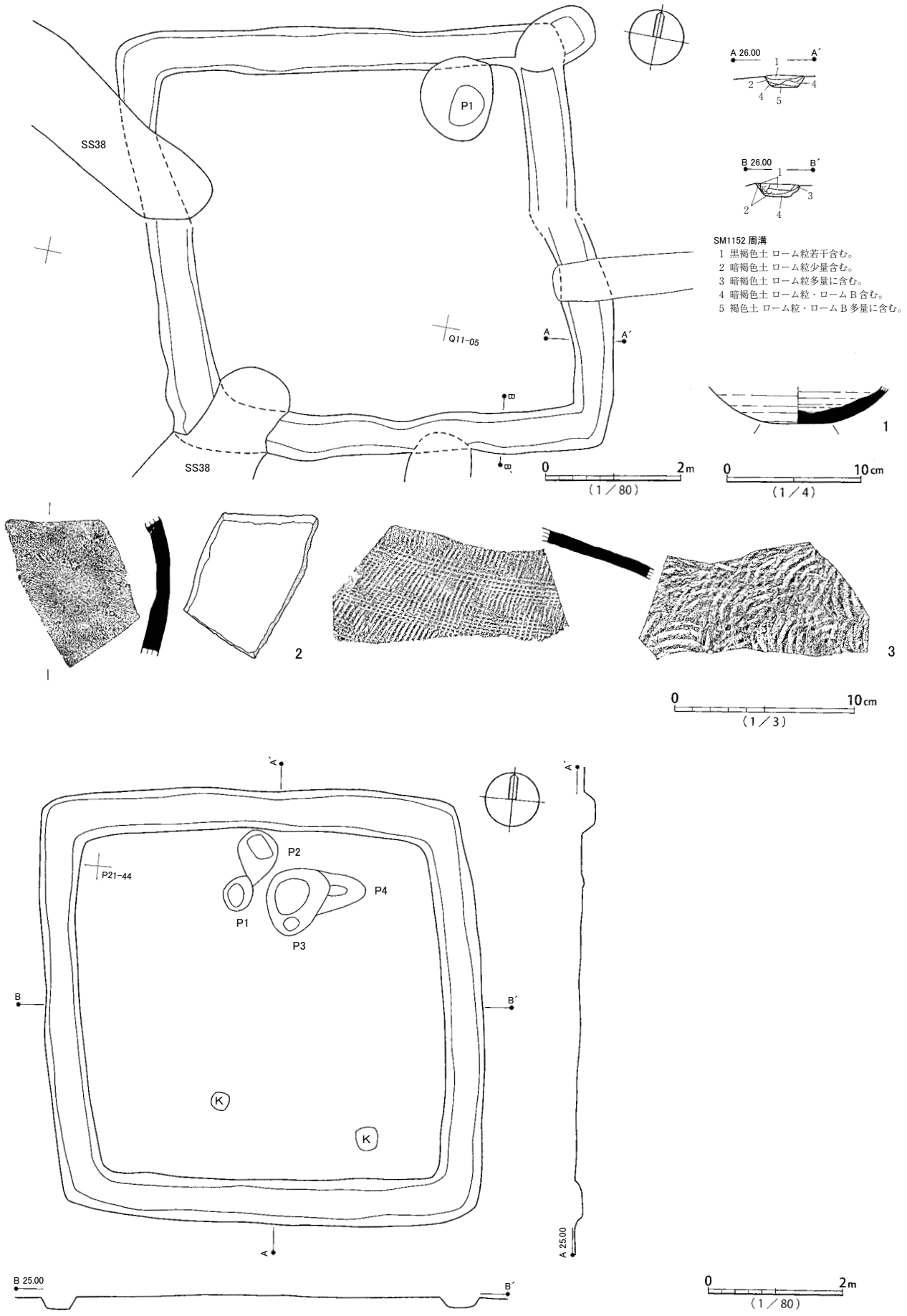


Fig.426　SM1152 遺構・遺物、SM1153 遺構実測図

長径5.24m、短径5.06mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-30°-Wを示す。周溝内側面積は25.7㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第108位の規模である。確認面での周溝幅は、0.60～0.70m、深さは0.16～0.22mを測り、周溝断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、覆土一括で総数5点の土師器・須恵器・灰釉陶器片が検出されている。1は土師器甕・2は須恵器壷類であり、2は脚付の可能性があるが具体的な器形がよくわからない。3は灰釉長頸壺の類、4は須恵器広口長頸壺ないしは在地産須恵器甕の類であろうか。比較的器形を復元し得る1の土師器甕から、8世紀末葉～9世紀代の年代観が想定される。

SM1158　099地区　（Fig.429、PL.145・174・192）

K-10グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳（律令制墳墓）である。旧遺構番号は099-4024号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.22m、短径4.98mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-25°-Eを示す。周溝内側面積は25.6㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第109位の規模である。確認面での周溝幅は、0.66～0.80m、深さは0.18～0.30mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、覆土一括で1の須恵器広口甕・2の土師器坏が検出されている。8世紀中葉から後半の遺物と想定される。

SM1159　セ54地区　（Fig.429、PL.145・192）

S-15グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号はセ54-10号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.18m、短径4.92mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-4.5°-Eを示す。周溝内側面積は25.6㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、SM1158と同面積の第109位の規模である。確認面での周溝幅は、0.82～1.26m、深さは0.20～0.54mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、覆土一括で2点の弥生土器片が検出されているが、何れも本遺構に直接伴う遺物ではない。

SM1160　099地区　（Fig.430、PL.145）

O-16・17グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳(律令制墳墓)である。方台部内には多数の攪乱が存在し、遺構の遺存状況は不良である。旧遺構番号は099-4096号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.02m、短径4.90mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-12°-Eを示す。周溝内側面積は24.7㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第111位の規模である。確認面での周溝幅は、0.70～0.76m、深さは0.42～0.52mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1161　099地区　(Fig.430、PL.145・192)

I・J-14・15グリッドに位置する。下層に位置する竪穴旧住居跡と重複し、北東コーナーが未検出ながら三隅が直角的な終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号は099-4018号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.08m、短径4.76mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-15°-Wを示す。周溝内側面積は24.4㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第112位の規模である。確認面での周溝幅は、0.66～0.80m、深さは0.16～0.28mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、1点の手捏土器、1点の須恵器片が覆土一括で検出されている。

SM1162　099地区　(Fig.431、PL.145・192)

G・H-11グリッドに位置する。下層に位置する竪穴住居跡と重複する四隅が直角的な終末期方墳（律令制墳墓）である。方台部の内外には攪乱が存在し、遺構の遺存状況は不良である。旧遺構番号は099-4008号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.00m、推定短径(4.98)mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-3°-Wを示す。推定周溝内側面積は(24.3)㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第113位の規模である。確認面での周溝幅は、0.72～0.90m、深さは0.18～0.26mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、1点の須恵器片と3点の弥生土器片が覆土一括で検出されている。

SM1163　099地区　(Fig.431、PL.146)

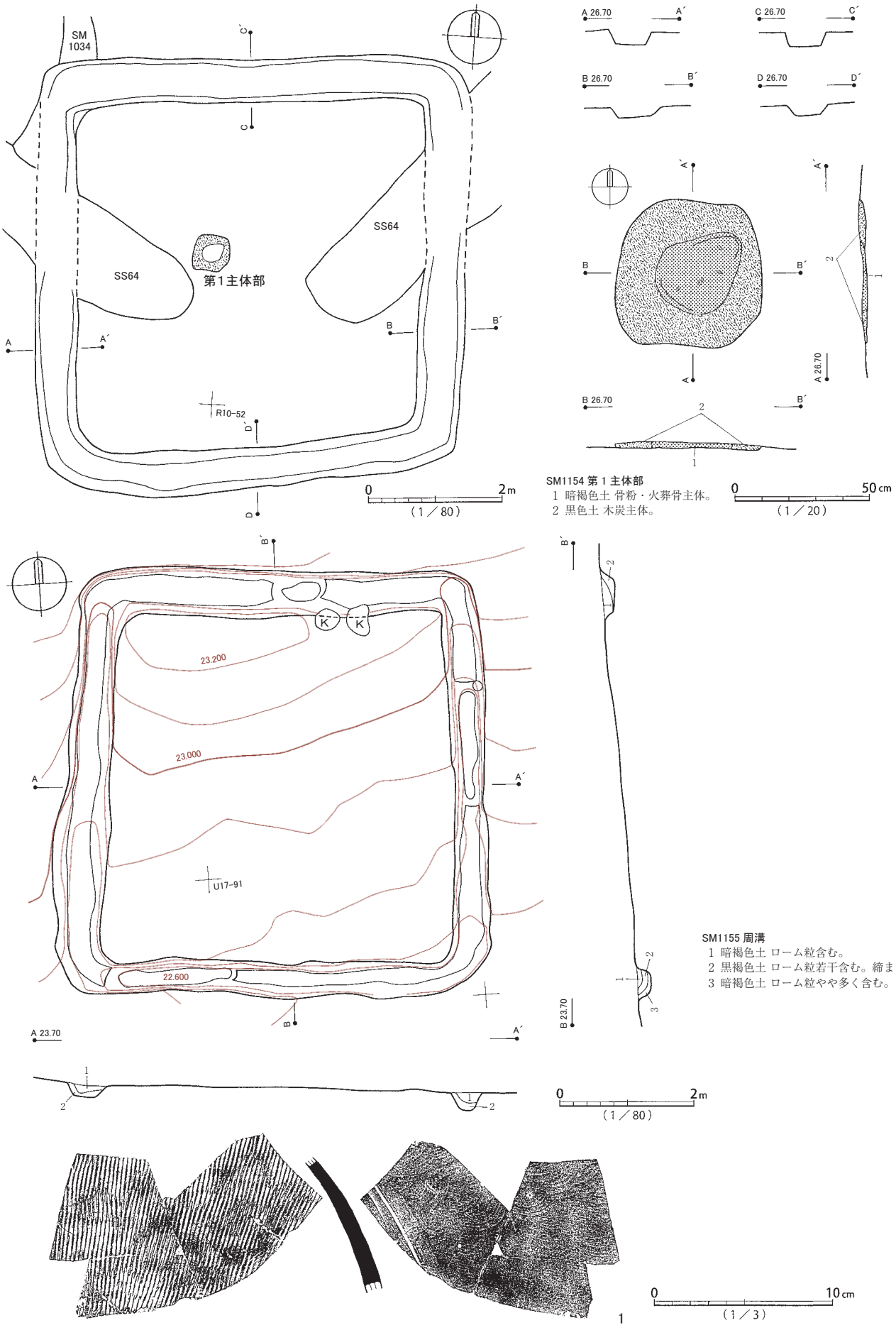


Fig.427　SM1154 遺構、SM1155 遺構・遺物実測図

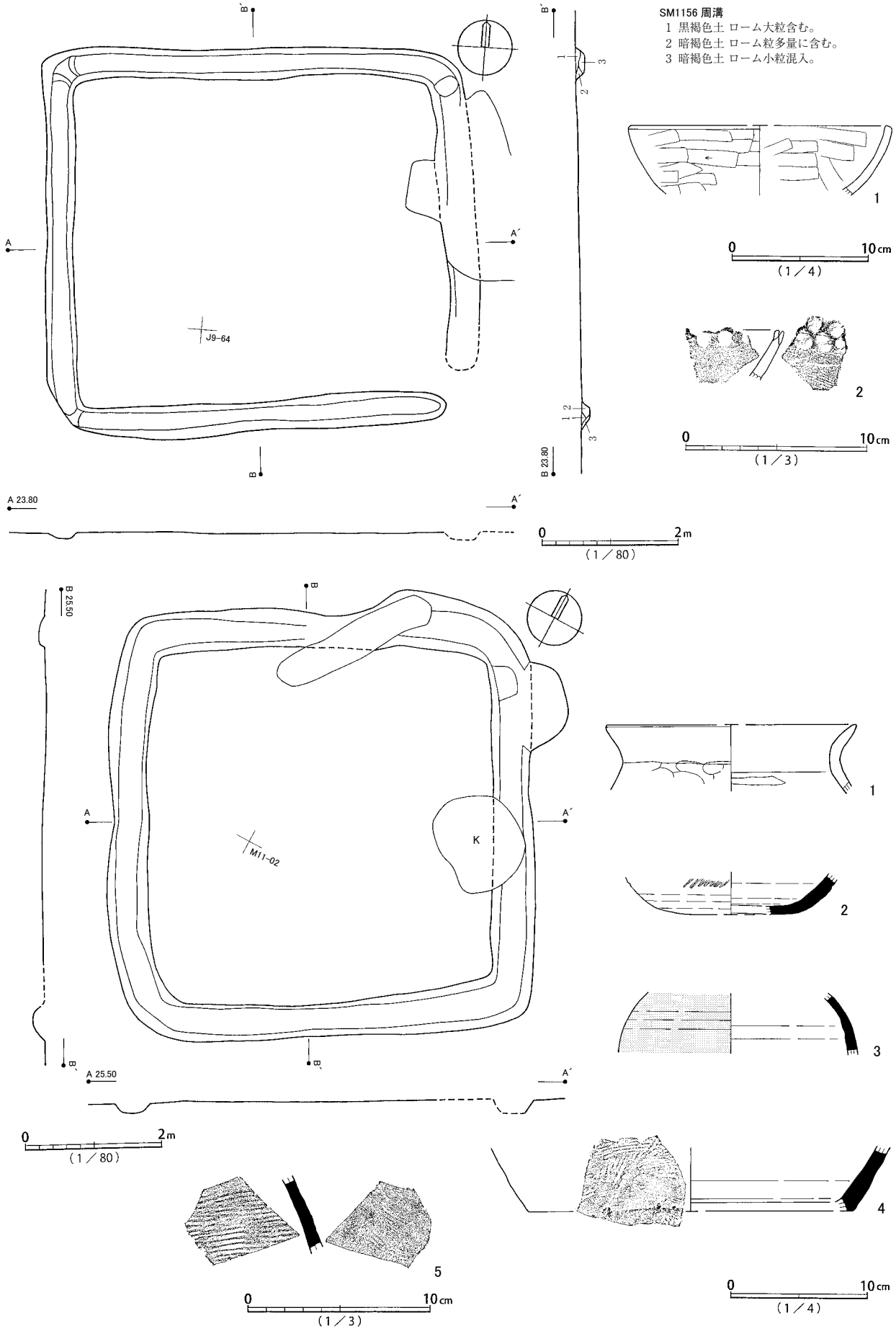


Fig.428　SM1156 遺構・遺物、SM1157 遺構・遺物実測図

N•O-21グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳(律令制墳墓)である。方台部の内外には攪乱が存在し、遺構の遺存状況は不良である。旧遺構番号は099-4109号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.18m、短径4.84mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-15°-Wを示す。周溝内側面積は24.1㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第114位の規模である。確認面での周溝幅は、0.72～0.80m、深さは0.32～0.40mを測り、周溝断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1164　セ28地区　(Fig.432、PL.146・174)

R-14グリッドに位置する。下層に位置するSS47・SS49と重複する四隅が直角的な終末期方墳（律令制墳墓）である。旧遺構番号はセ28-026号遺構である。

墳丘と周溝

長径4.92m、短径4.82mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-3°-Wを示す。周溝内側面積は23.4㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第115位の規模である。確認面での周溝幅は、0.76～0.90m、深さは0.28～0.40mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内中央に小土壙1基が検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央部から検出された小土壙である。墓壙規模は上端で、長径1.10m短径0.72m、深さ0.24mを測り、主軸方位はN-87°-Eを示す。木炭・焼土等は検出されなかったが、規模から見て火葬墓と判断される。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、3点の土師器・須恵器が覆土一括で検出されている。1は口縁から肩口に自然釉が付着する須恵器広口壺であり、2・3は土師器甕底部である。1の須恵器広口壺の年代から8世紀前半代が想定される。

SM1165　セ54地区　(Fig.433、PL.146)

U-20グリッドに位置する。下層に位置するSS78と重複し、四隅が直角的な終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号はセ54-24号遺構である。

墳丘と周溝

長径4.76m、短径4.66mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-5°-Wを示す。周溝内側面積は22.4㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第116位の規模である。確認面での周溝幅は、0.66～0.90m、深さは0.16～0.26mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

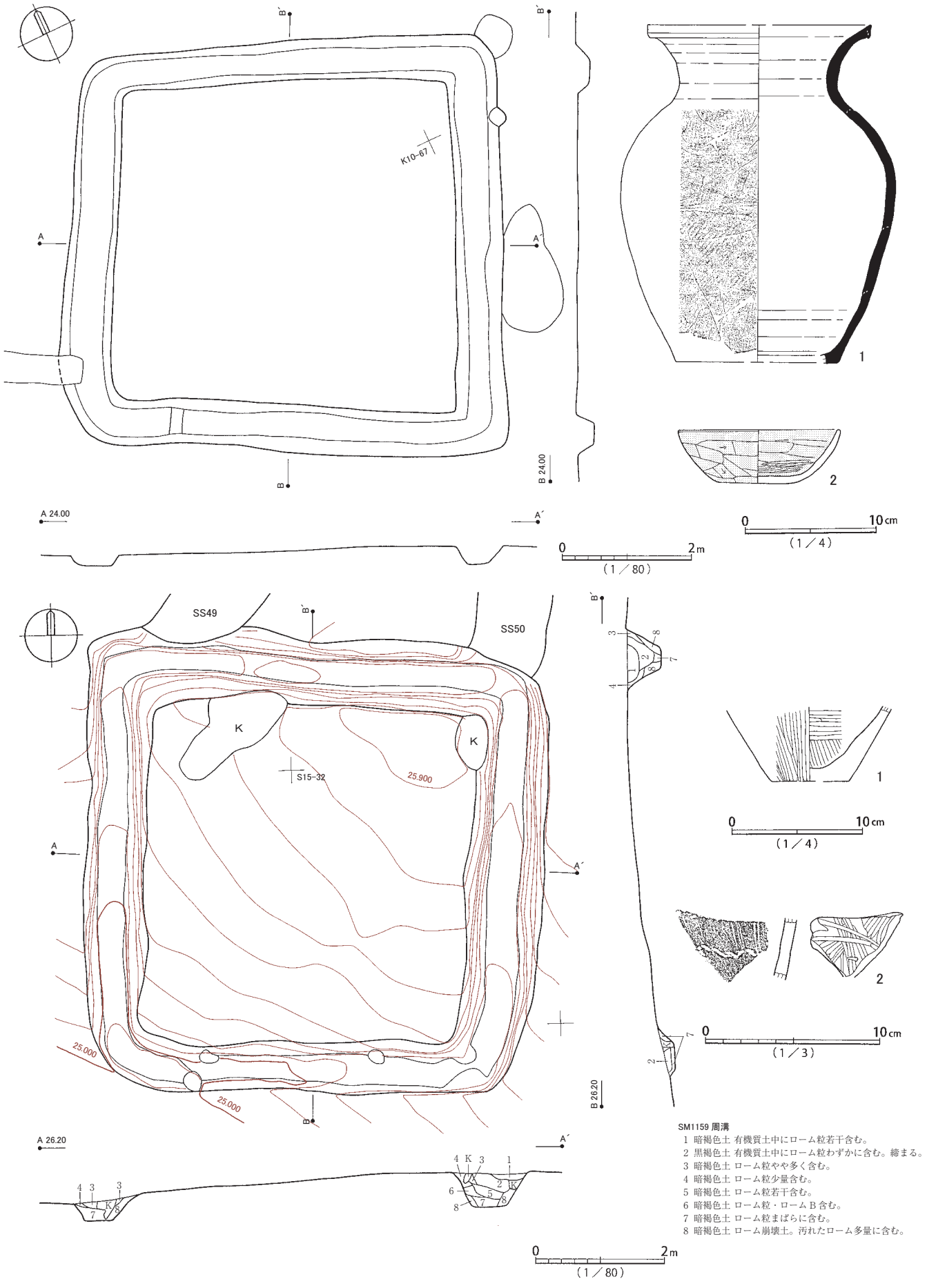


Fig.429　SM1158 遺構・遺物、SM1159 遺構・遺物実測図

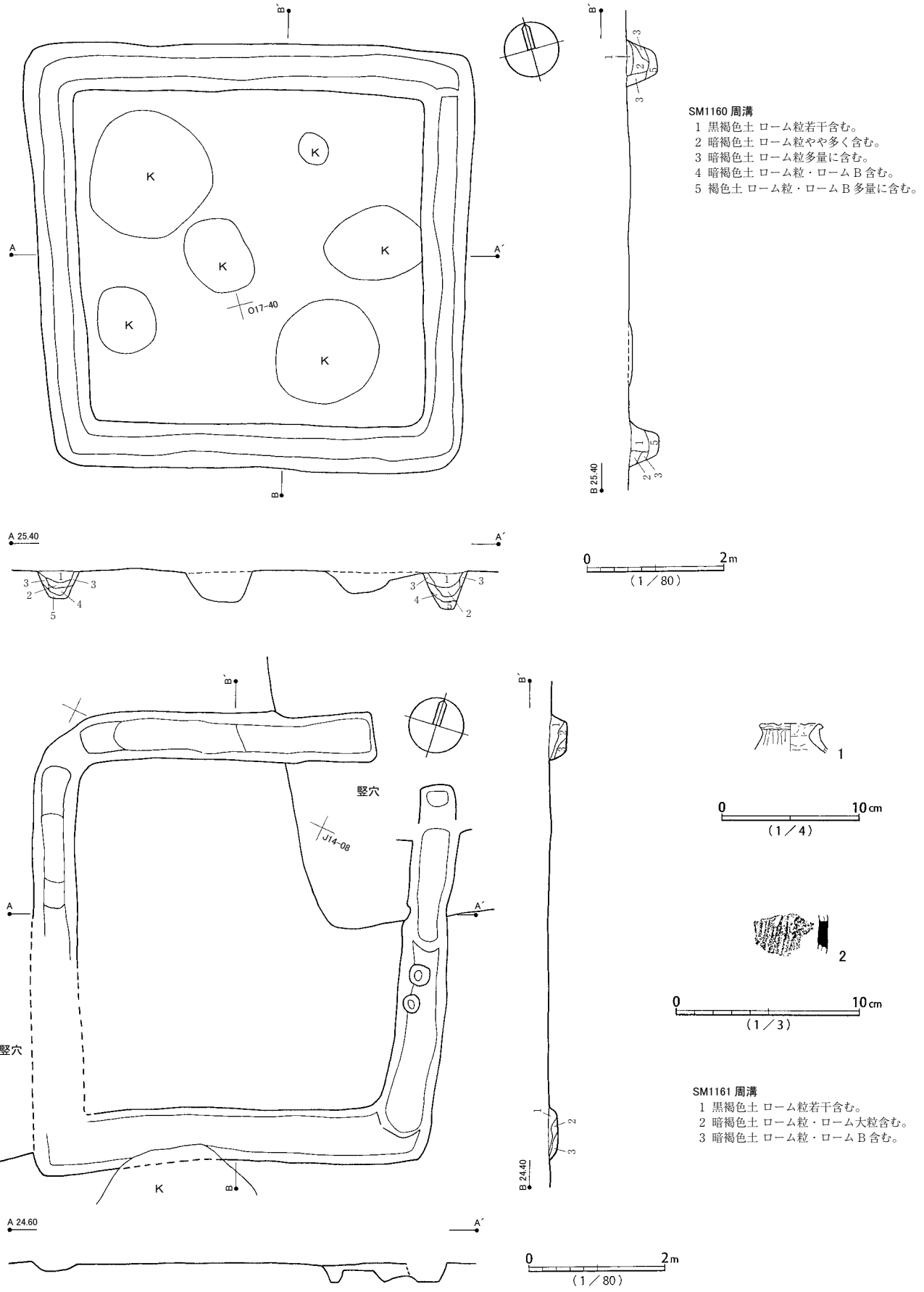


Fig.430　SM1160 遺構、SM1161 遺構・遺物実測図

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、須恵器長頸壺片ないしは短頸壺片1点が、覆土一括で検出されている。

SM1166　099地区　（Fig.433）

L-10グリッドに位置する。下層に位置するSS27と重複し、北側周溝が未検出ながら二隅が直角的な終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号は099-4026号遺構である。

墳丘と周溝

長径4.78m、残存短径4.60mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-24°-Eを示す。推定周溝内側面積は（22.2）㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第117位の規模である。確認面での周溝幅は、0.56～0.76m、深さは0.04～0.12mを測り、周溝断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1167　セ28地区　（Fig.434、PL.146）

S-5グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号はセ28-060号遺構である。

墳丘と周溝

長径4.74m、短径4.60mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-41°-Wを示す。周溝内側面積は21.8㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第118位の規模である。確認面での周溝幅は、0.60～1.00m、深さは0.14～0.38mを測り、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1168　099地区　（Fig.434）

O-18グリッドに位置する。下層に位置するSS17と重複する四隅が直角的な終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号は099-4093号遺構である。

墳丘と周溝

長径4.78m、短径4.50mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-5°-Wを示す。周溝内側面積は21.7㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第119位の規模である。確認面での周溝幅は、0.90～1.18m、深さは0.30～0.46mを測り、周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1169　099地区　(Fig.435、PL.146・192)

G・H-12グリッドに位置する。埋葬施設に地下式小型横穴を採用する終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号は099-4013号遺構である。

墳丘と周溝

長径4.76m、短径4.62m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-30.5°-Wを示す。周溝内側面積は21.2㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第120位の規模である。確認面での周溝幅は、0.60～0.76m、深さは0.22～0.24mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

南側周溝を跨いで、方台部内の南側に地下式小型横穴墓1基を検出している。

第1主体部

埋葬施設は、玄室を方台部中央南側に置く地下式小型横穴墓である。羨道部は南側周溝の外に構築されており、長径2.26m短径1.40mを測り、7段の階段状を呈しながら前庭部へと下っていく。階段の高さは1段目50㎝、2段目12㎝、3段目14㎝、4段目15㎝、5段目13㎝、6段目13㎝、7段目17㎝を測る。最下段の8段目は、玄室への前庭部であり、玄室底面からは8㎝低い位置に構築されている。

玄室に至る玄門部は、幅0.56m高さ0.54m奥行き0.50mに亘って開口しており、周囲は丁寧に掘り窪まれている。おそらく閉塞板が存在していたものと想定され、調査時段階における玄室内は、空洞化していた。

玄室規模は幅1.30m奥行き1.24m高さ0.48～0.50mを測り、主軸方位はN-65°-Eを示す。玄室内の最奥部は、玄室内でも更に12㎝程高く構築されており、奥壁に沿った中央部には火葬骨が厚さ8㎝に亘り堆積していた。

玄室内からは、火葬骨以外検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、覆土一括で4点の須恵器片が検出されている。1は須恵器蓋であるが、細片のため時期不明である。

SM1170　099地区　(Fig.435、PL.147)

G・H-11グリッドに位置する。下層に位置する竪穴住居跡と重複し、周溝が全周しない終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号は099-4007号遺構である。

墳丘と周溝

推定長径(4.54)m、短径4.50m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-4°-Eを示す。推定周溝内側面積は(20.4)㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第121位の規模である。確認面での周溝幅は、0.50～0.60m、深さは0.10～0.14mを測る。周溝断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

未検出である。

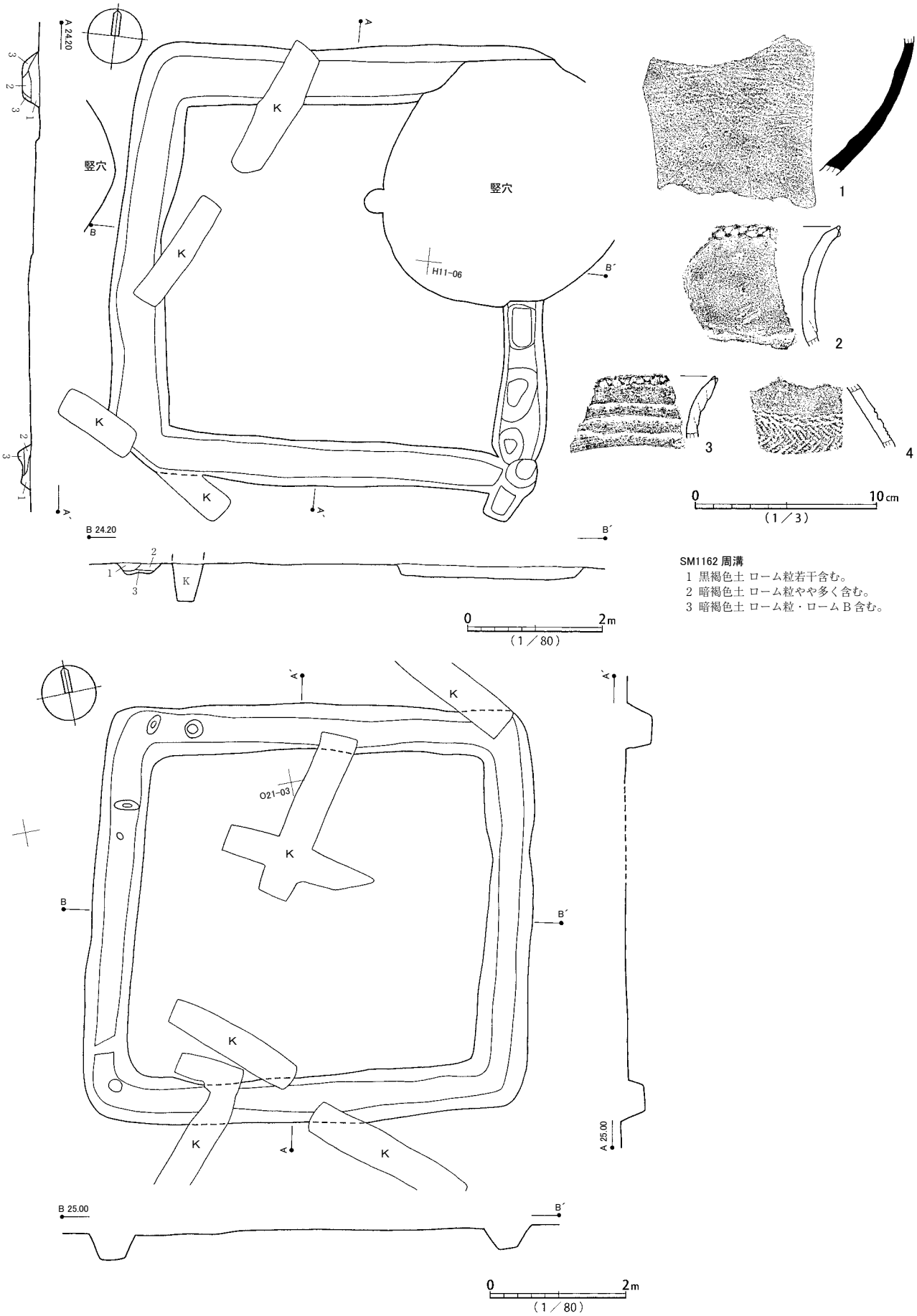
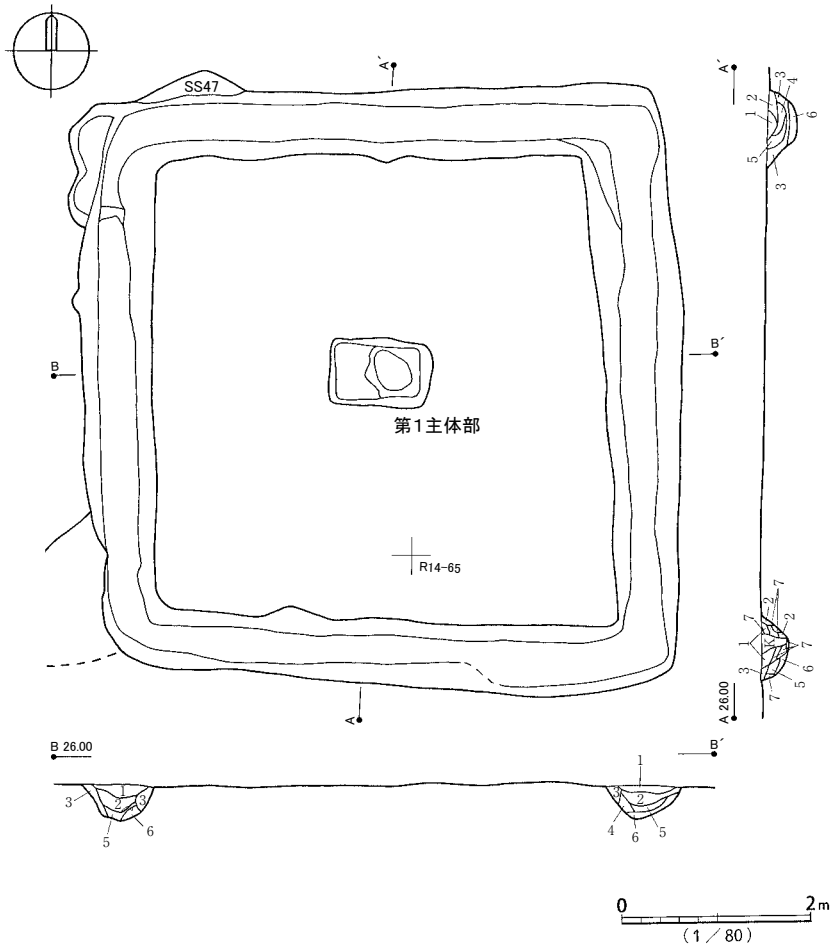
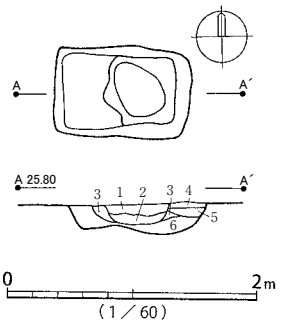


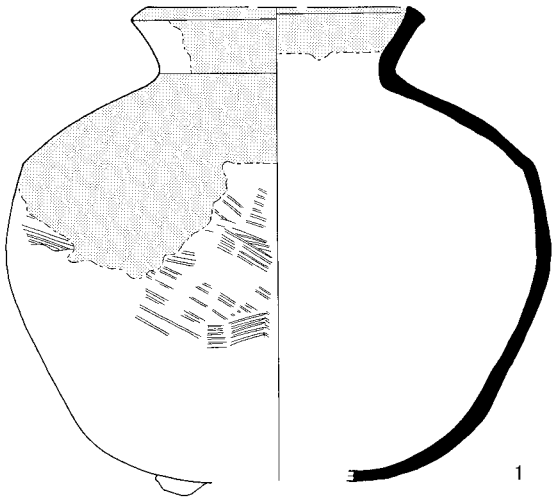
Fig.431　SM1162 遺構・遺物、SM1163 遺構実測図

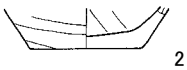


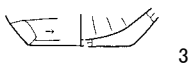
SM1164 周溝
1 黒褐色土 ローム粒若干含む。
2 黒褐色土 ローム B 若干含む。
3 暗褐色土 ローム粒・ローム B 少量含む。
4 暗褐色土 ローム粒含む。
5 暗褐色土 ローム粒・ローム B やや多く含む。
6 暗褐色土 ローム B 含む。
7 —



SM1164 第 1 主体部
1 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
2 褐色土 ローム粒・ローム大粒多量に含む。
3 明褐色土 ローム粒・ローム B 主体。
4 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。
5 暗褐色土 ローム粒含む。
6 暗褐色土 ローム粒・ローム B 含む。







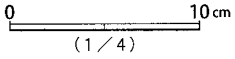


Fig.432　SM1164 遺構・遺物実測図

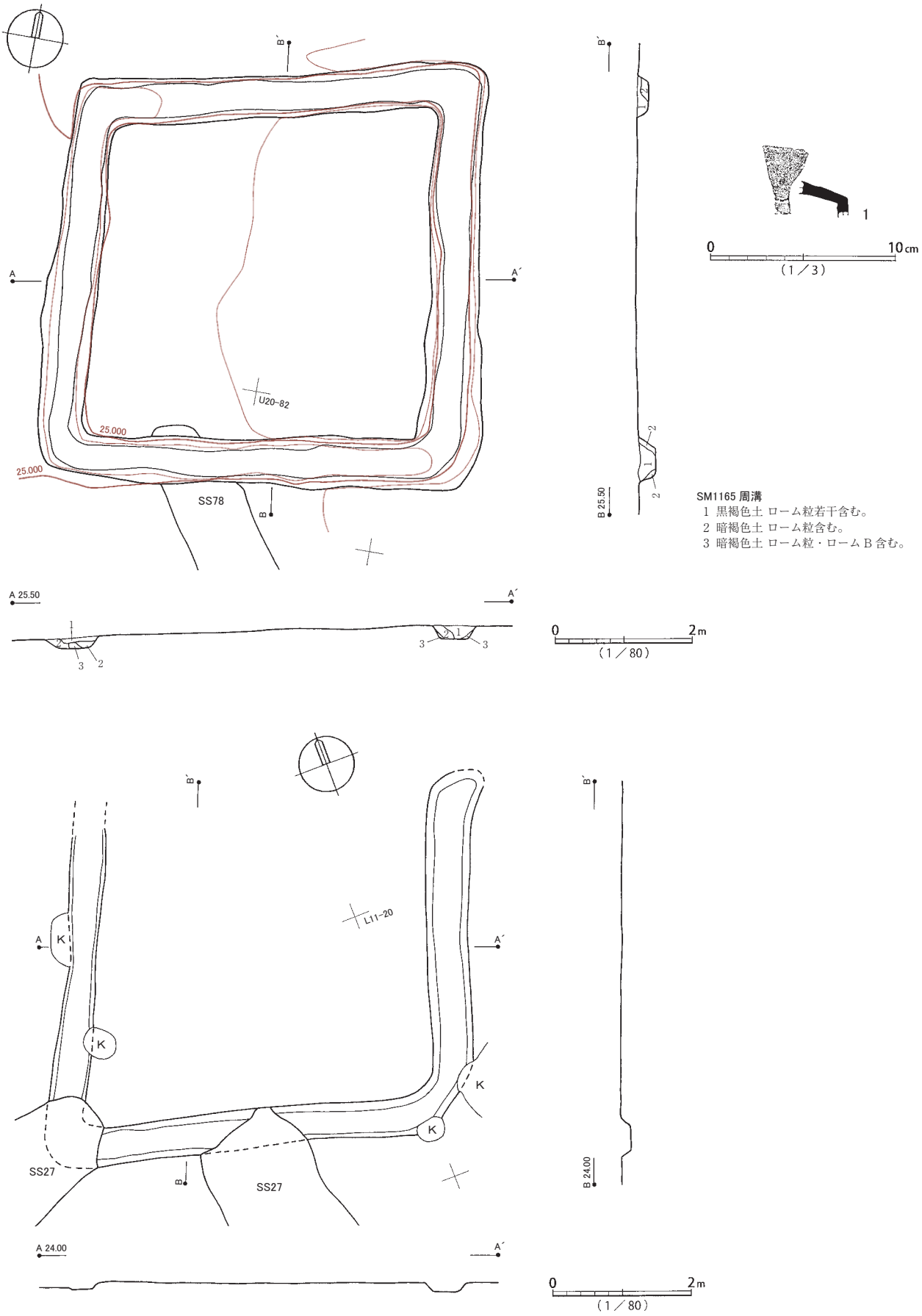


Fig.433　SM1165 遺構・遺物、SM1166 遺構実測図

出土遺物

本墳周溝内からは、遺物が全く検出されなかった。

SM1171　099地区　（Fig.436）

N-12グリッドに位置する。周溝が全周しない終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号は099-4083号遺構である。

墳丘と周溝

推定長径（4.58）m、短径4.40m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-10°-Wを示す。推定周溝内側面積は（19.9）㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第122位の規模である。確認面での周溝幅は、0.48～0.56m、深さは0.10～0.34mを測り、周溝断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、遺物が全く検出されなかった。

SM1172　TJ地区　（Fig.436、PL.147）

I-17グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号はTJ-4号遺構である。

墳丘と周溝

長径4.44m、短径4.38m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-23°-Wを示す。推定周溝内側面積は19.2㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第123位の規模である。確認面での周溝幅は、0.54～0.64m、深さは0.16～0.20mを測り、周溝断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、遺物が全く検出されなかった。

SM1173　099地区　（Fig.437、PL.147・192）

O-17グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳（律令制墳墓）である。旧遺構番号は099-4095号遺構である。

墳丘と周溝

長径4.54m、短径4.08m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-10°-Eを示す。推定周溝内側面積は18.4㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第124位の規模である。確認面での周溝幅は、0.80～0.98m、深さは0.42～0.52mを測り、全体的に均整のとれた方形形状を呈している。周溝断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、覆土一括で1の灰釉長頸壺が検出されている。頸部の接合技法から、I-45・K-11併行期と想定され、9世紀中葉前半代が想定される。

SM1174　064地区　（Fig.437、PL.147）

D-6グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号は064-262号遺構である。

墳丘と周溝

長径4.14m、短径4.06m、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-51°-Wを示す。周溝内側面積は16.4㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では第125位の規模である。確認面での周溝幅は、0.64～0.88m、深さは0.24～0.58mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1175　SW83地区　（Fig.438、PL.147）

T-24グリッドに位置する。埋葬施設に火葬骨検出の小土壙を採用する終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号はSW83-K12号遺構である。

墳丘と周溝

長径4.18m、短径3.84mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-16.5°-Wを示す。周溝内側面積は15.5㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第126位の規模である。確認面での周溝幅は、0.72～0.82m、深さは0.15～0.31mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部中央やや南側に木炭使用の小土壙が検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、方台部中央やや西側に検出された木炭使用の小土壙である。墓壙規模は上端で、長径1.03m短径0.72m、深さ0.38mを測り、主軸方位はN-13°-Wを示す。土層断面によれば、上層はローム粒を含んだ有機質土層であるが、最下層の上層に骨粉を含んだ木炭で8～10㎝程充填して整地しており、この木炭の中央最上層から火葬骨が検出されている。また、火葬骨を中心として立ち上がる断層が確認されることから、埋葬時には、長さ0.74m幅0.54m高さ0.30m程の木櫃等の外容器に火葬骨が納められていた可能性が高い。

墓壙内からは木炭・骨粉と火葬骨の他、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内覆土から土師器甕とみられる土器片が1点出土しているが、遺構時期は判断できない。

SM1176　SW83地区　（Fig.438、PL.147）

V-26グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号はSW83-K26号遺構である。

墳丘と周溝

長径4.04m、短径3.92mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-3°-Wを示す。周溝内側面

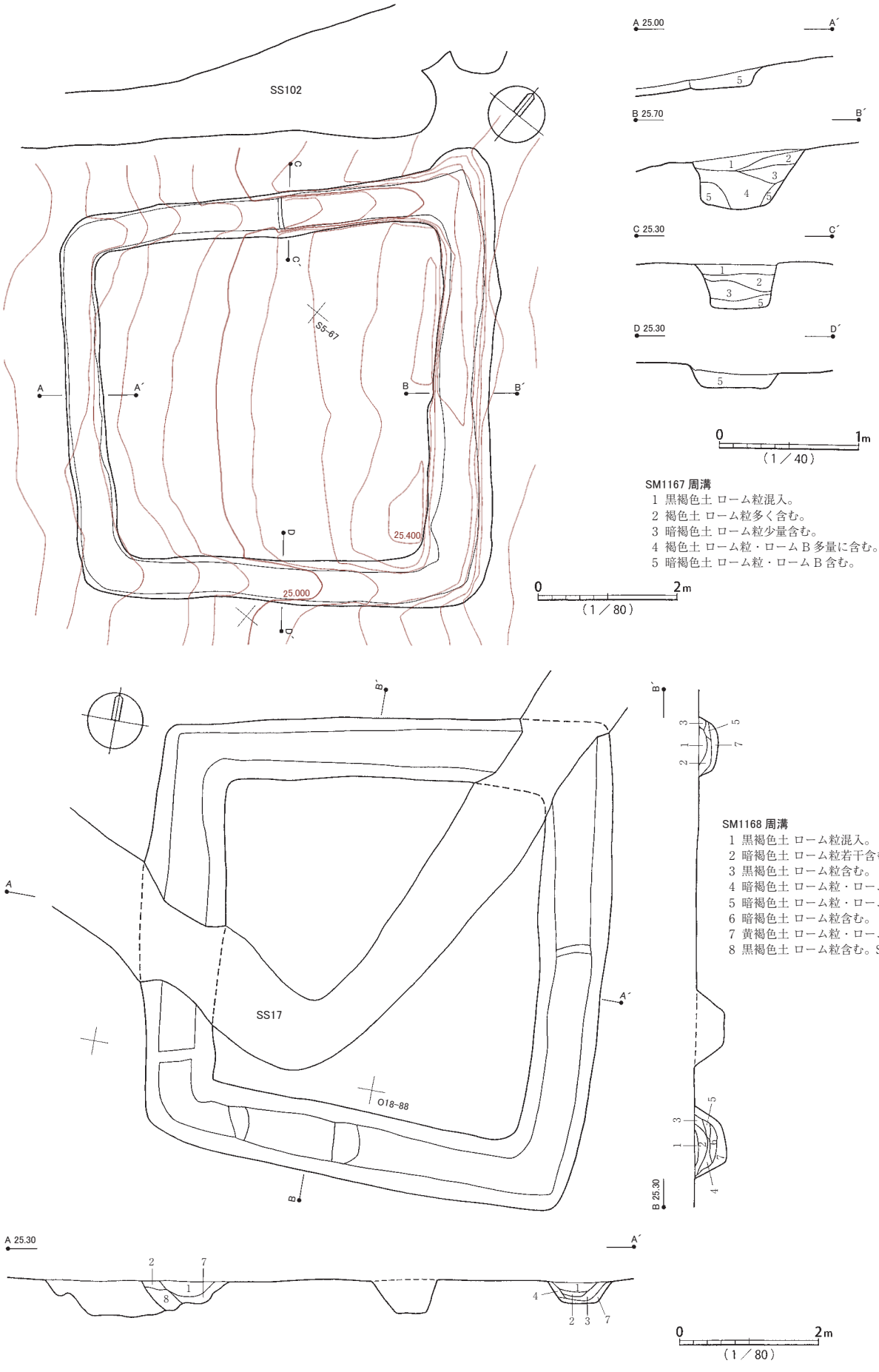


Fig.434　SM1167 遺構、SM1168 遺構実測図

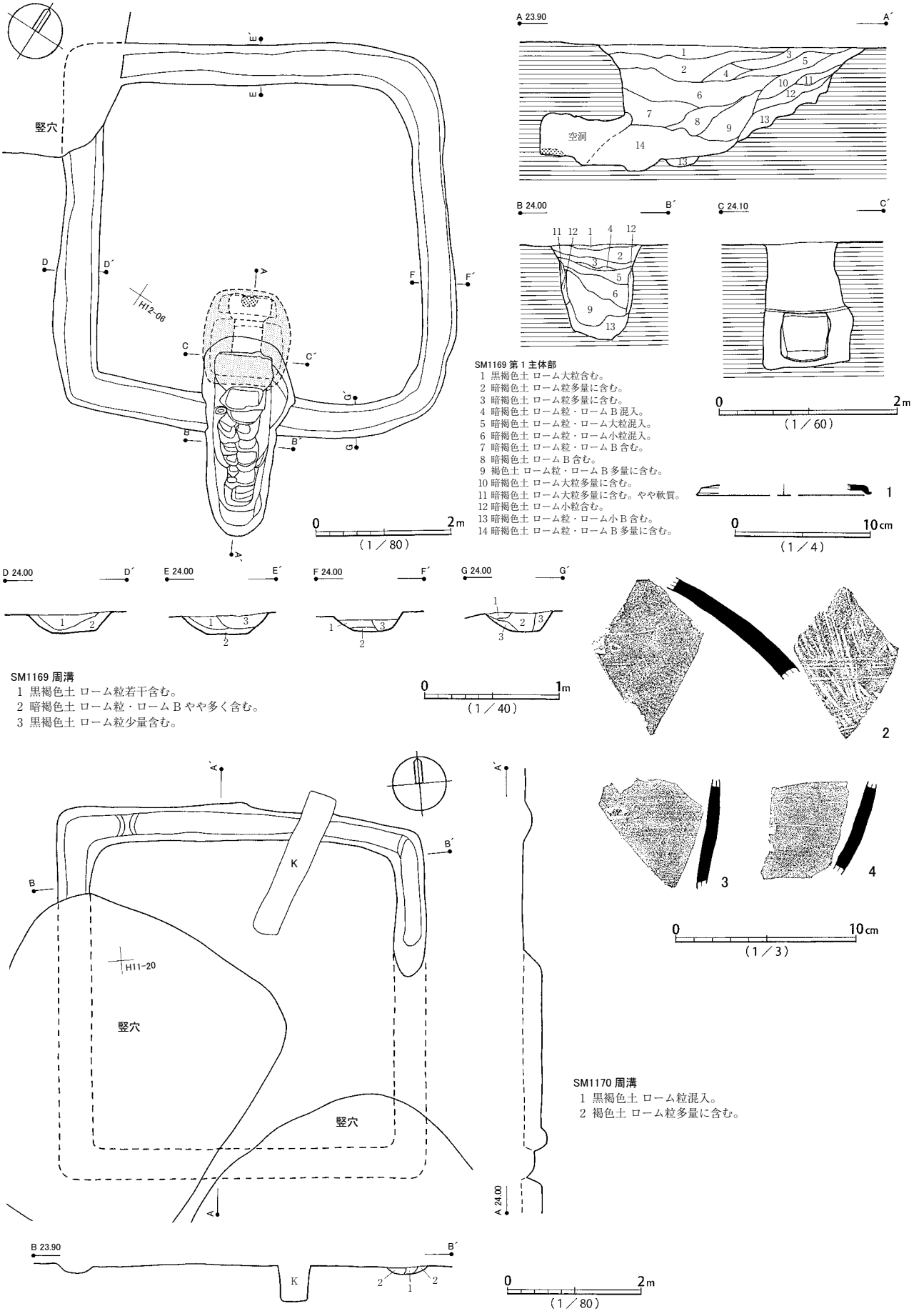


Fig.435　SM1169 遺構・遺物、SM1170 遺構実測図

積は15.5㎡を測り、SM1175同様、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第126位の規模である。確認面での周溝幅は、0.66～0.78m、深さは0.28～0.41mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1177　セ54・セ28地区　（Fig.439、PL.147）

R･S-14グリッドに位置する。下層に位置するSS49と重複する四隅が直角的な終末期方墳（律令制墳墓）である。旧遺構番号はセ54-38・セ28-157号遺構である。

墳丘と周溝

長径4.24m、短径3.84mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-16°-Eを示す。周溝内側面積は15.5㎡を測り、SM1175･SM1176同様、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第126位の規模である。確認面での周溝幅は、0.62～0.66m、深さは0.16～0.24mを測り、周溝断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1178　099地区　（Fig.439、PL.148･174）

P-23グリッドに位置する。四隅が直角的な終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号は099-4107号遺構である。

墳丘と周溝

長径4.28m、短径3.80mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-1°-Wを示す。周溝内側面積は15.5㎡を測り、SM1175･SM1176･SM1177同様、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第126位の規模である。確認面での周溝幅は、0.54～0.56m、深さは0.20～0.32mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

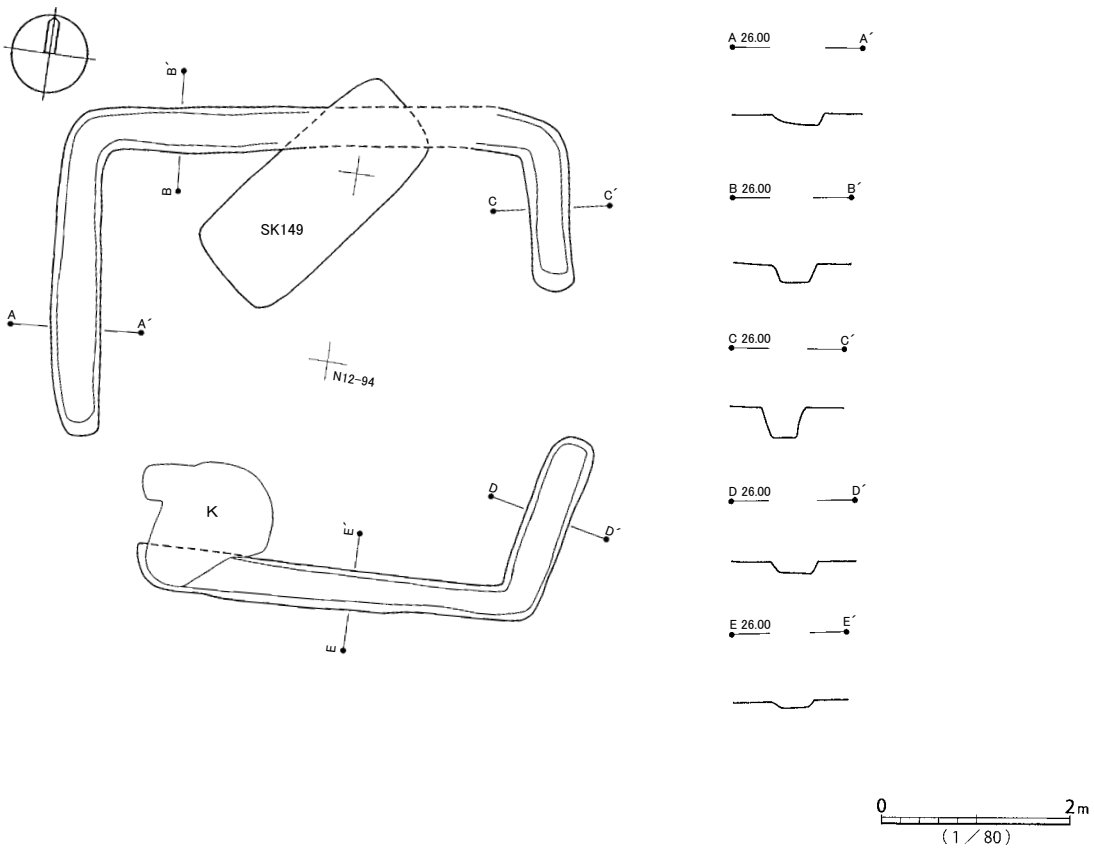
本墳北側周溝コーナー部付近からは、1の須恵器長頸壺が周溝底より26㎝浮いた状態で検出されている。器形から8世紀中葉の年代観が想定される。

SM1179　セ28地区　（Fig.440、PL.192）

S-12グリッドに位置する。下層に位置するSS57と、上層に存在する掘立柱建物跡と重複する四隅が直角的な終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号はセ28-144号遺構である。

墳丘と周溝

長径3.80m、短径3.80mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-14°-Eを示す。周溝内側面



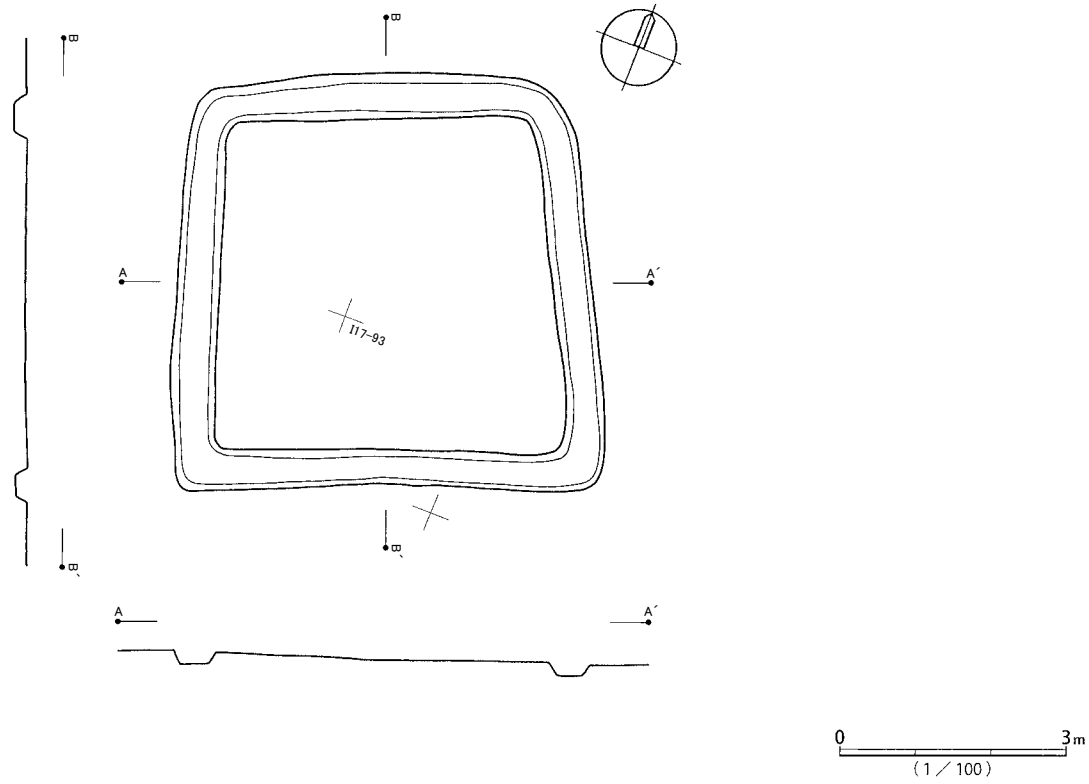


Fig.436　SM1171 遺構、SM1172 遺構実測図

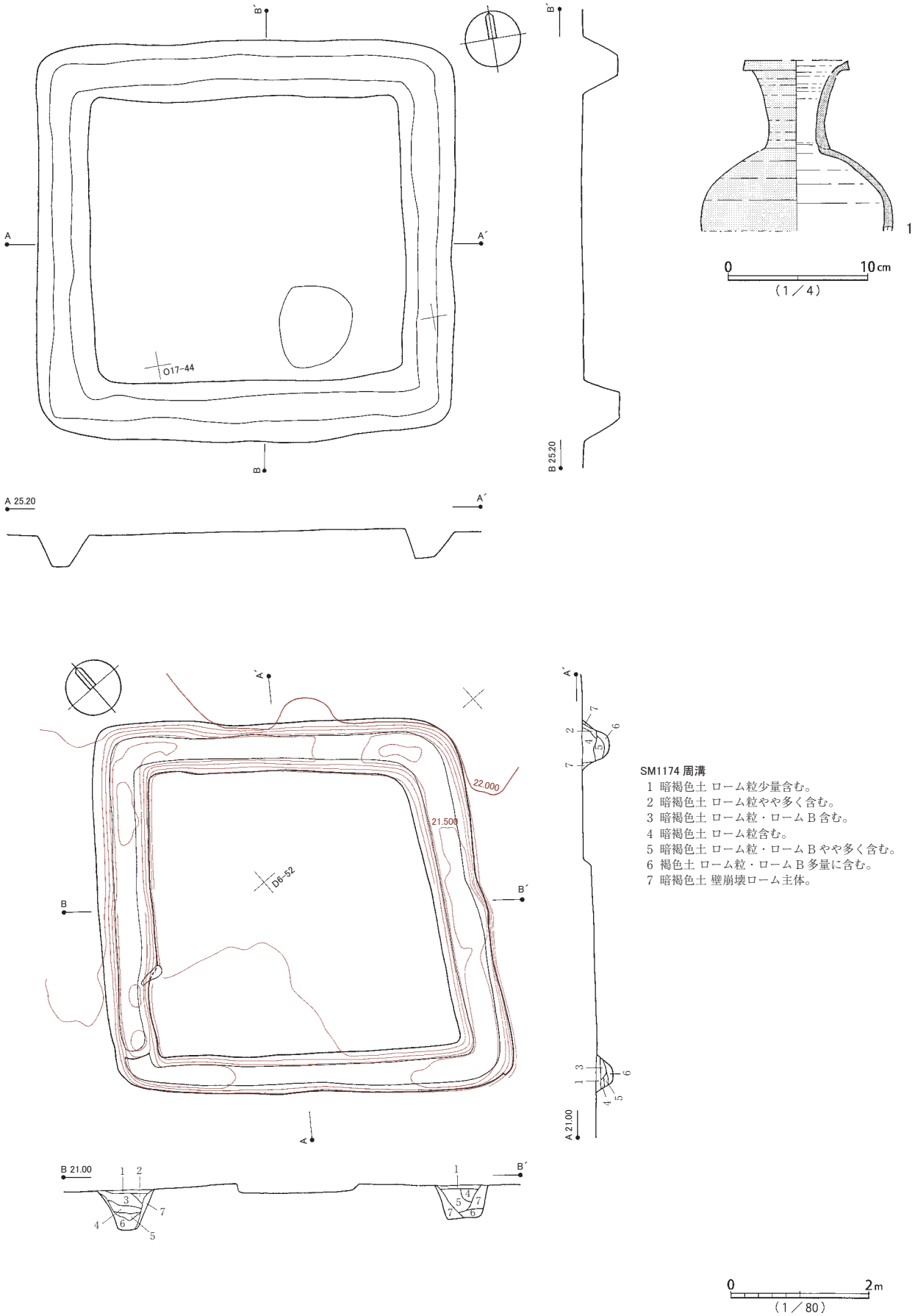


Fig.437　SM1173 遺構・遺物、SM1174 遺構実測図

積は14.0㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第130位の規模である。確認面での周溝幅は、0.48～0.58m深さは0.06～0.16mを測り、周溝断面は逆台形を呈している。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、覆土一括で2点の須恵器片が検出されている。1は須恵器坏、2は須恵器長頸壺ないしは短頸壺の底部である。

SM1180　セ54地区　（Fig.440、PL.148）

R-15グリッドに位置する。下層に位置するSS48・49と重複する四隅が直角的な終末期方墳（律令制墳墓）である。新旧逆調査のため、遺構の遺存状況は不良である。旧遺構番号はセ54-40号遺構である。

墳丘と周溝

長径3.88m、短径3.70mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-5°-Wを示す。周溝内側面積は14.0㎡を測り、SM1179同様、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第130位の規模である。確認面での周溝幅は、0.34～0.74m深さは0.10～0.25mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、遺物が全く検出されなかった。

SM1181　099地区　（Fig.441、PL.148・174・192）

G-11・12グリッドに位置する。下層に位置する竪穴住居跡と重複する四隅が直角的な終末期方墳（律令制墳墓）である。新旧逆調査のため、遺構の遺存状況は不良である。旧遺構番号は099-4012号遺構である。

墳丘と周溝

推定長径(3.84) m、推定短径(3.54)mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-13°-Wを示す。推定周溝内側面積は(13.0)㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第133位の規模(132位はSM1145)である。確認面での周溝幅は、0.50～0.54m深さは0.28～0.48mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、覆土一括で7点の遺物が検出されている。1は土師器甕、2は須恵器長頸壺、3は灰釉短頸壺片、4は須恵器坏蓋、5は古墳時代前期の高坏坏部、6・7は須恵器片である。1・2の遺物が示す年代観は、8世紀第4四半世紀もしくはそれ以降と想定される。

SM1182　099地区　（Fig.441、PL.148・174）

H-13グリッドに位置する。下層に位置する竪穴住居跡と重複し、北側の一部はTJ地区との境界で消滅した周溝が全周しない終末期方墳(律令制墳墓)である。旧遺構番号は099-4015号遺構である。

墳丘と周溝

長径3.82m、短径3.36mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-32°-Wを示す。周溝内側面積は12.1㎡を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第134位の規模であり、面積測定方墳の中では最低規模である。確認面での周溝幅は、0.44～0.68m深さは0.10～0.16mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、覆土一括で1の灰釉長頸壺が検出されている。K-14併行期と想定され、9世紀第1四半世紀併行期に位置付けられる。

SM1183　セ54地区　（Fig.442、PL.148～149）

T-17グリッドに位置する。緩やかな南緩斜面に位置し、南側周溝を流出した終末期方墳である。旧遺構番号はセ54-20号遺構である。

墳丘と周溝

長径9.36m、残存短径3.92mを測り、現状での盛土は存在せず、西側周溝の傾き方位はほぼ真北を示す。周溝内側面積は測定不能であるが、長径の長さで全周すると仮定すれば、87.6㎡程度を測り、今回報告する諏訪台古墳群中の終末期方墳では、第86位の規模に相当する。確認面での周溝幅は、0.94～1.32m深さは北側周溝で0.21mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内の推定中央の位置に1基検出されている。

第1主体部

第1主体部は、方台部の推定中央の位置に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.54m短径1.16m深さ0.52m、下端で長径2.50m短径1.08mを測り、主軸方位はN-86.5°-Eを示す。墓壙のほぼ中央に、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ2.10m幅0.66m、下端で長さ1.98m幅0.58m深さ0.52mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-87°-E を示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1184　セ54地区　（Fig.443、PL.149）

U-18・19グリッドに位置する。緩やかな南緩斜面に位置し、南側周溝を流出した終末期方墳である。旧遺構番号はセ54-25号遺構である。

墳丘と周溝

残存長径11.55m、残存短径1.74mを測り、現状での盛土は存在せず、西側周溝の傾き方位はN-10°-Wを示す。周溝内側面積は測定不能である。確認面での周溝幅は、0.74～1.56m深さは北側周溝で0.12m、土層断面では0.32mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内に1基、周溝内に1基、計2基検出されている。

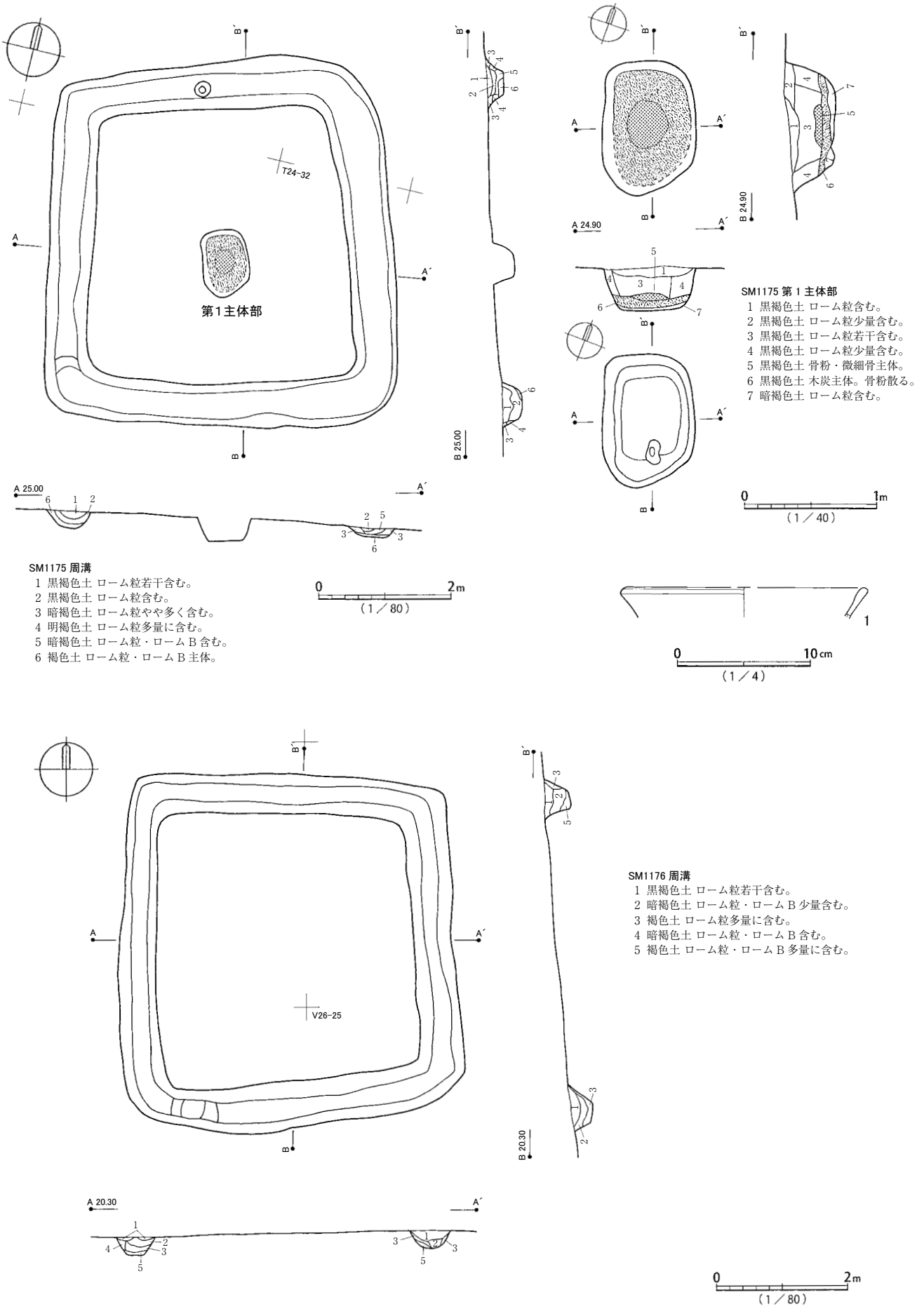


Fig.438　SM1175 遺構・遺物、SM1176 遺構実測図

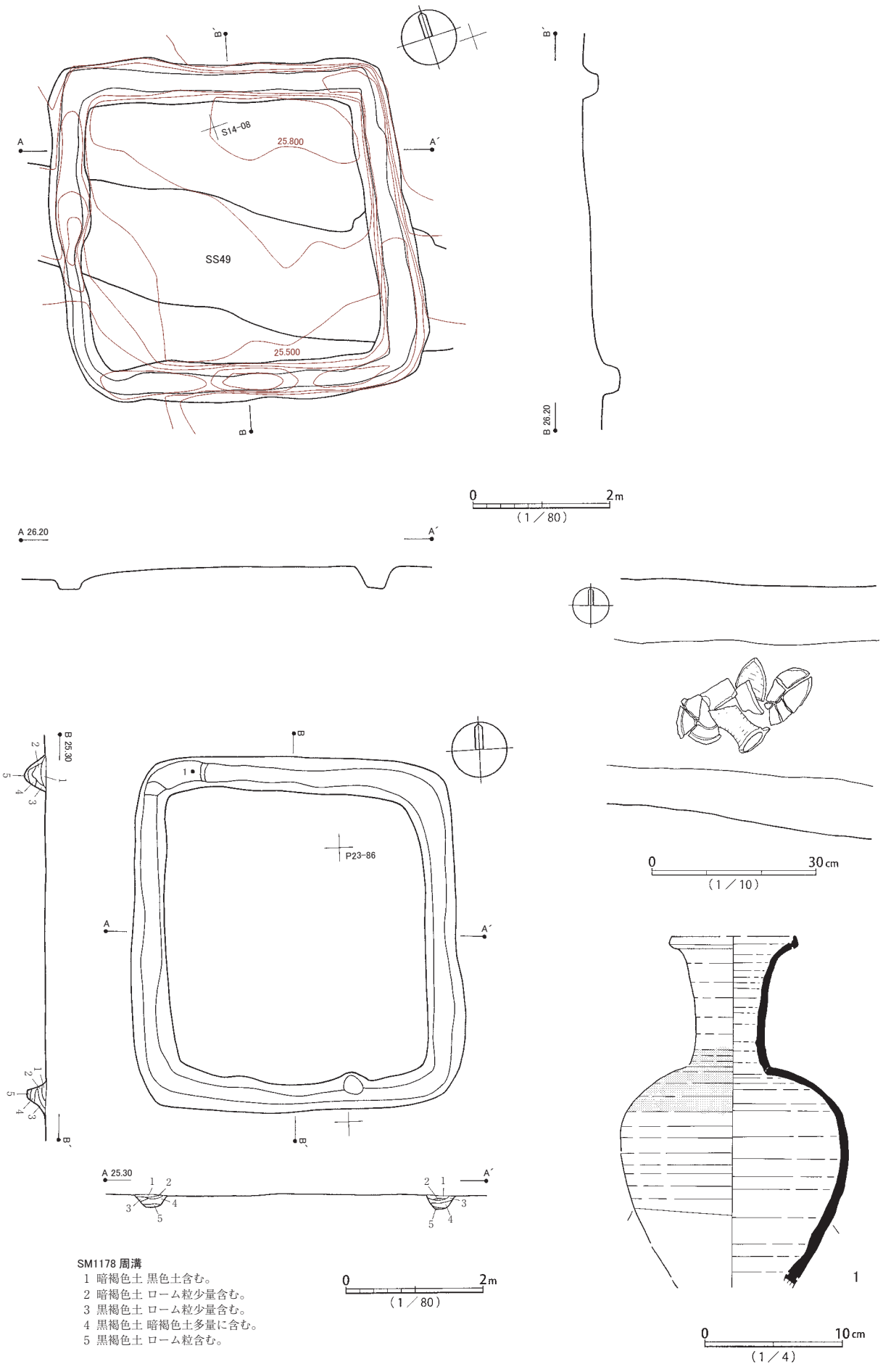
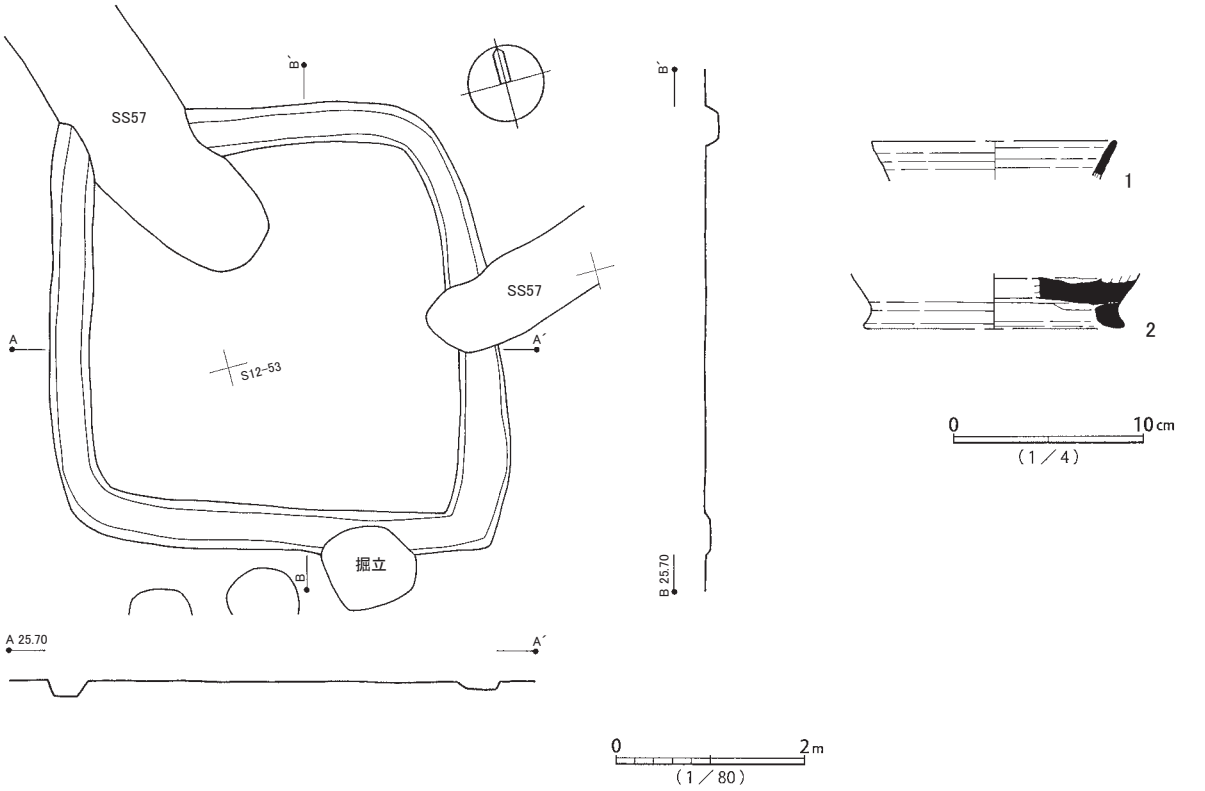
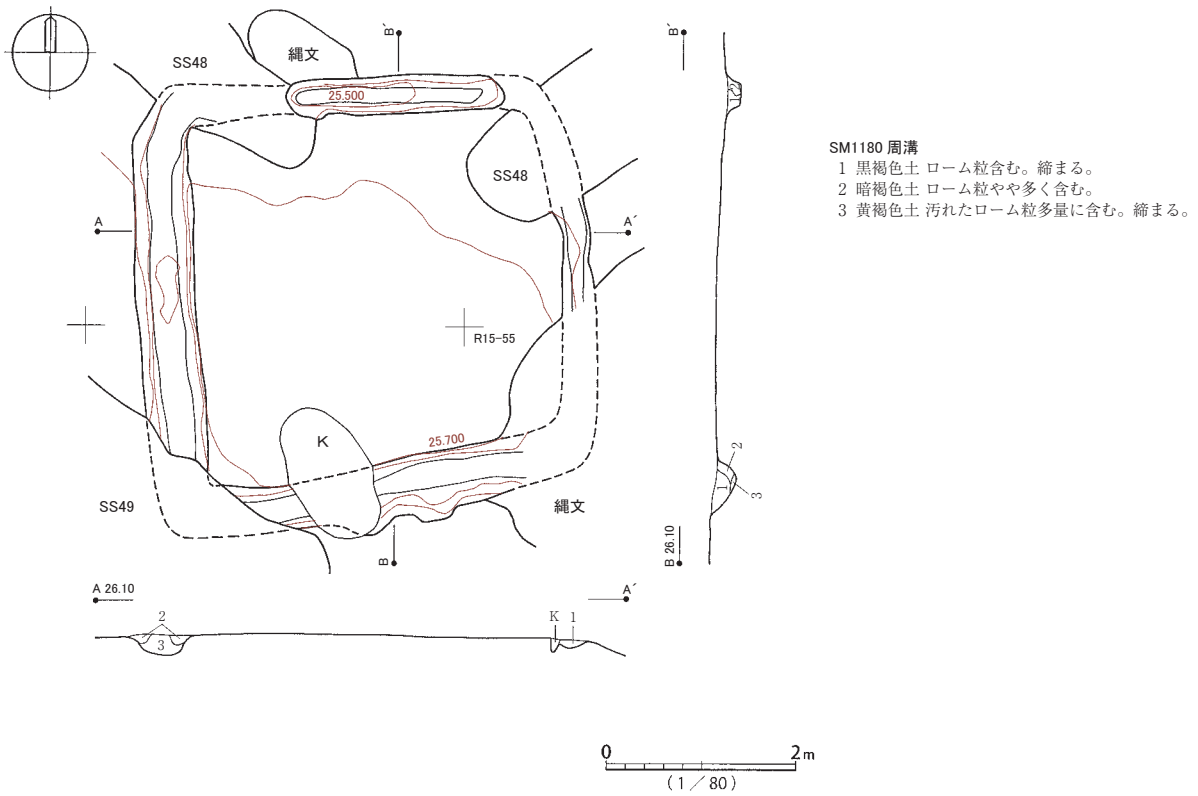


Fig.439　SM1177 遺構、SM1178 遺構・遺物出土詳細・遺物実測図





SM1180 周溝
1 黒褐色土 ローム粒含む。締まる。
2 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
3 黄褐色土 汚れたローム粒多量に含む。締まる。

Fig.440　SM1179 遺構・遺物、SM1180 遺構実測図

第1主体部

第1主体部は、方台部内に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.66m短径1.64m深さ0.54m、下端で長径2.44m短径1.26mを測り、主軸方位はN-82°-Eを示す。墓壙のほぼ中央に、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ1.98m幅0.68m、下端で長さ1.88m幅0.54m深さ0.38mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-78°-E を示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

第2主体部

第2主体部は、北側周溝内に検出された側壁抉り込み土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径1.64m短径1.40m深さ0.76m、下端で長径1.12m短径0.48mを測り、主軸方位はN-79°-Eを示す。側壁抉り込み部の奥行きは、長さ0.10m、天井部までの高さは0.14mを測り、底面はほぼ平坦である。

墓壙内からは、何の遺物も検出されなかった。

土坑

他に北側周溝内の第2主体部東側に検出された土坑がある。規模は上端で、長径1.40m短径1.00m深さ0.70mを測り、主軸方位はN-74°-Eを示す。底面はほぼ平坦である。形体的に見て本墳に伴う墓壙とは考え難い。

土坑内からは、何の遺物も検出されなかった。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1185　セ73地区　（Fig.444、PL.149～150・204）

S-4グリッドに位置する。南緩斜面に位置し、北側周溝以外を流出した終末期方墳である。旧遺構番号はセ73-015号遺構である。

墳丘と周溝

残存長径9.18mを測り、現状での盛土は存在せず、北側周溝の傾き方位はN-46°-Wを示す。周溝内側面積は測定不能である。確認面での周溝幅は、0.94m深さは0.46mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内に2基検出されている。

第1主体部

第1主体部は、方台部内の北側に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.30m短径0.92m深さ0.20m、下端で長径2.16m短径0.80mを測り、主軸方位はN-43°-Wを示す。墓壙のほぼ中央に、断面図上で箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ1.54m幅0.56m、下端で長さ1.44m幅0.48m深さ0.16mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-43°-W を示す。

墓壙・木棺内からは、何の遺物も検出されなかった。

第2主体部

第2主体部は、第1主体部の南側に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径2.78m短径1.26m深さ0.24m、下端で長径2.46m短径1.12mを測り、主軸方位はN-89°-Wを示す。墓壙のほぼ中央に、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ1.88m幅0.76m、下端で長さ

1.78m幅0.66m深さ0.10mを測る。底面はほぼ平坦であり、主軸方位はN-86°-W を示す。

木棺内の中央南よりに2-1の刀子、北壁に沿って2-2の8窓鍔付大刀が検出されている。

出土遺物

第2主体部から出土した2-1の刀子は先端部を欠くが、残存長10.2㎝を測る。復元される全長は10.8㎝、刃部長5.9㎝、刃部幅1.1㎝を測り、茎部には木質が残存する。2-2の8窓鍔付大刀は、全長74.0㎝を測り、関形状と位置が不明ながら、鎺の造りから刃部長61.4㎝前後に復元される。刀身部は切っ先から24㎝程度の位置で2次変形により歪んでいる。茎部は推定長12.5㎝前後を測り、目釘孔と想定される位置の両面に凸帯が存在する。目釘孔内で、目釘の一部が残存しているのであろう。茎尻は隅切状を呈し、鍔側の柄木の木質を削り込んで巻いた革紐の一部が残存する。鍔は非対称な8窓で、長さ7.25㎝幅5.89㎝周縁部の厚さ0.4㎝、それ以外は0.26㎝前後を測る。鎺は長径3.28cm、長さ0.95㎝、厚さ0.16㎝を測る。茎尻部の先端には、長径5㎝、短径4.15㎝、幅5.7㎜、厚さ4.3～4.8㎜の縁金具が検出されている。縁金具内には対向する2本の釘が認められ、長さは2.0～2.5㎝を測る。釘には木質が付着し、断面形状が明確ではないが、おそらく方形と想定される。形状と出土位置から判断すると頭椎大刀の留金具と想定される。

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1186　セ54地区　（Fig.445、PL.150・192）

O・P・Q-18・19・20グリッドに位置する。セ54調査区では南西コーナー部、昭和55年度には残りが調査されており、昭和55・56年度概報にて一部が紹介された終末期方墳である。旧遺構番号はセ54-1号・諏訪台36号墳(252号墳)遺構である。

墳丘と周溝

現状での残存長径は10.00m、残存短径は8.30mを測る。概報での規模は、長径19.80m短径19.20m、盛土の高さは0.25mを測り、残存する西側周溝からの傾き方位はN-30°-Wを示す。周溝内側面積は379.4㎡を測り、今回報告する方墳順位に加えるならば第2位の規模となる。セ54地区での確認面での周溝幅は、2.06～2.50m、深さは0.46～0.68mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

方台部内に1基検出されているが、詳細不明である。

第1主体部

概報から略述すると、墓壙規模は、長径4.50m短径1.40m深さ0.32mであり、木棺規模は、長さ3.55m幅0.70m深さ0.27mを測る。主軸方位は不明。

墓壙・木棺内からの検出遺物も不明である。

出土遺物

セ54調査範囲内からは、覆土一括で須恵器甕口縁部が検出されている。昭和55年度調査範囲内からの出土遺物は不明である。

SM1187　SW83地区　（Fig.446、PL.150）

V・W-24・25グリッドに位置する。SW83調査区では最南端に位置し、遺構の大半は調査区域外に存在する終末期方墳である。旧遺構番号はSW83-K25号遺構である。

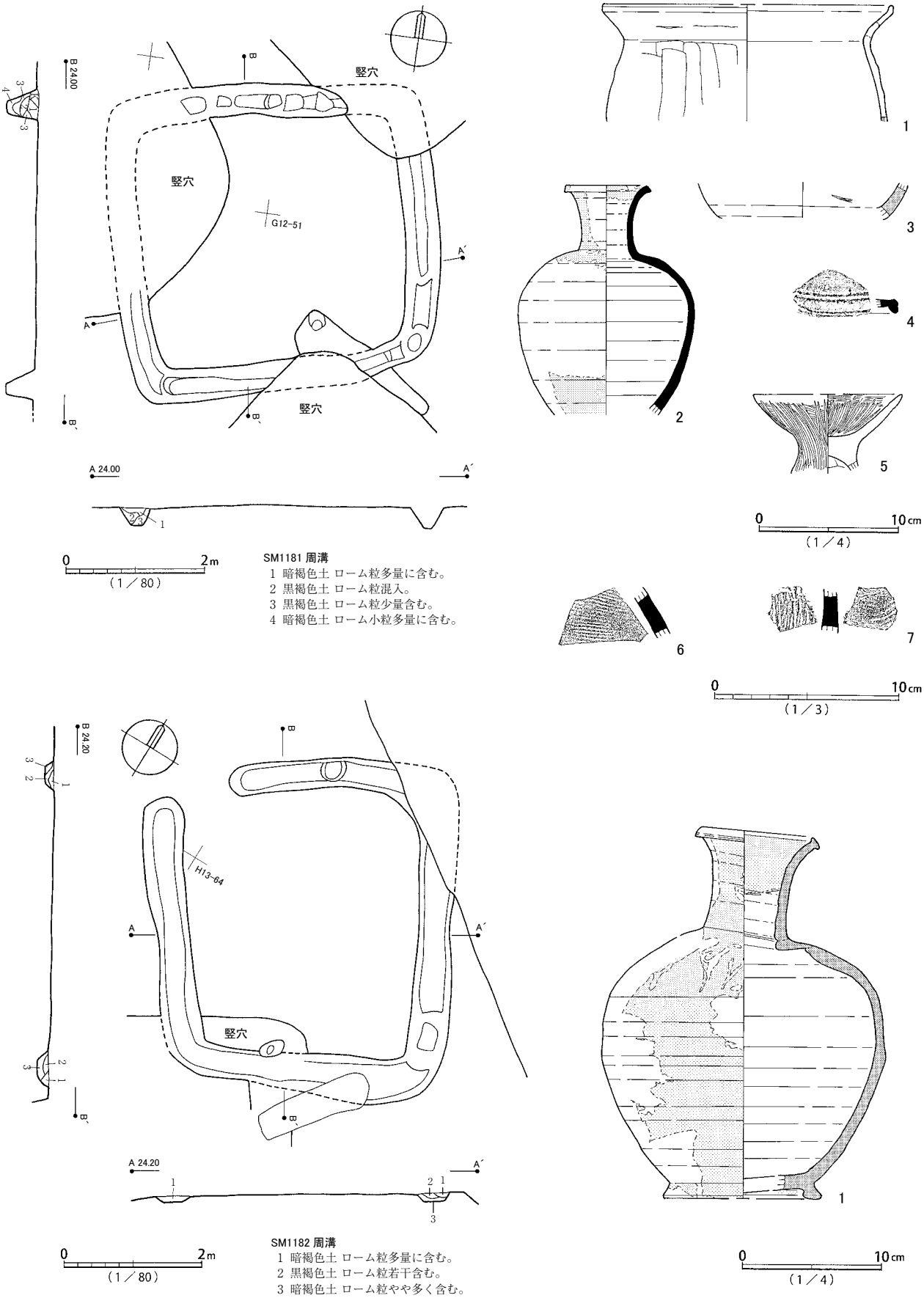
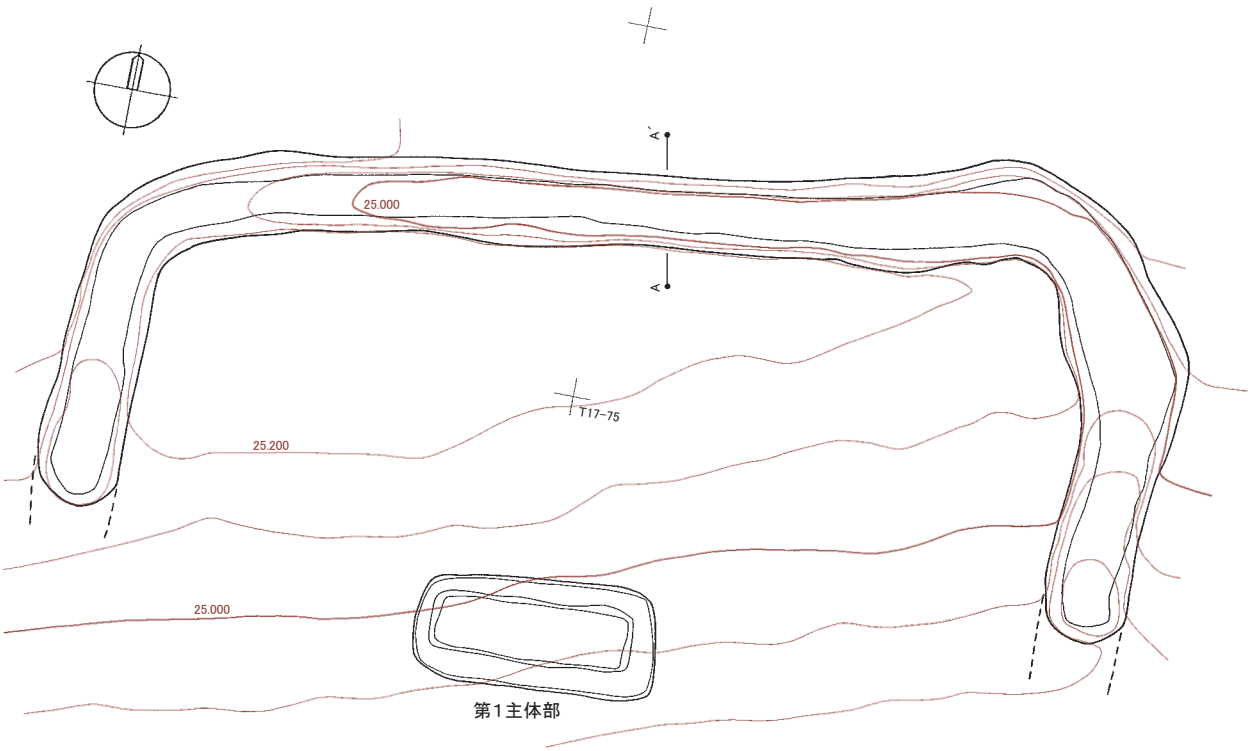
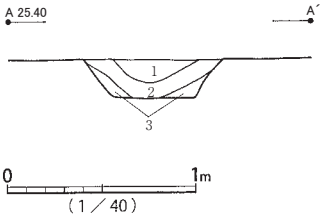
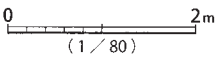


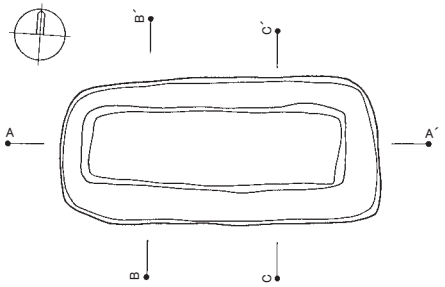
Fig.441　SM1181 遺構・遺物、SM1182 遺構・遺物実測図

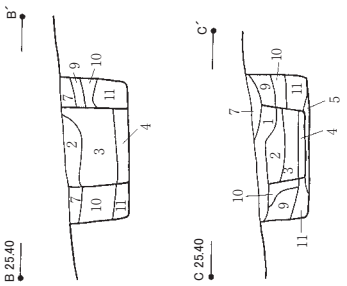


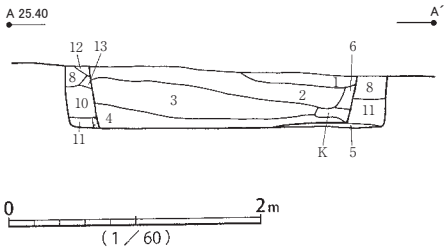


SM1183 周溝
1 黒褐色土 有機質土主体。
2 黒褐色土 有機質土主体。若干のローム粒含む。
3 褐色土 ローム主体層。



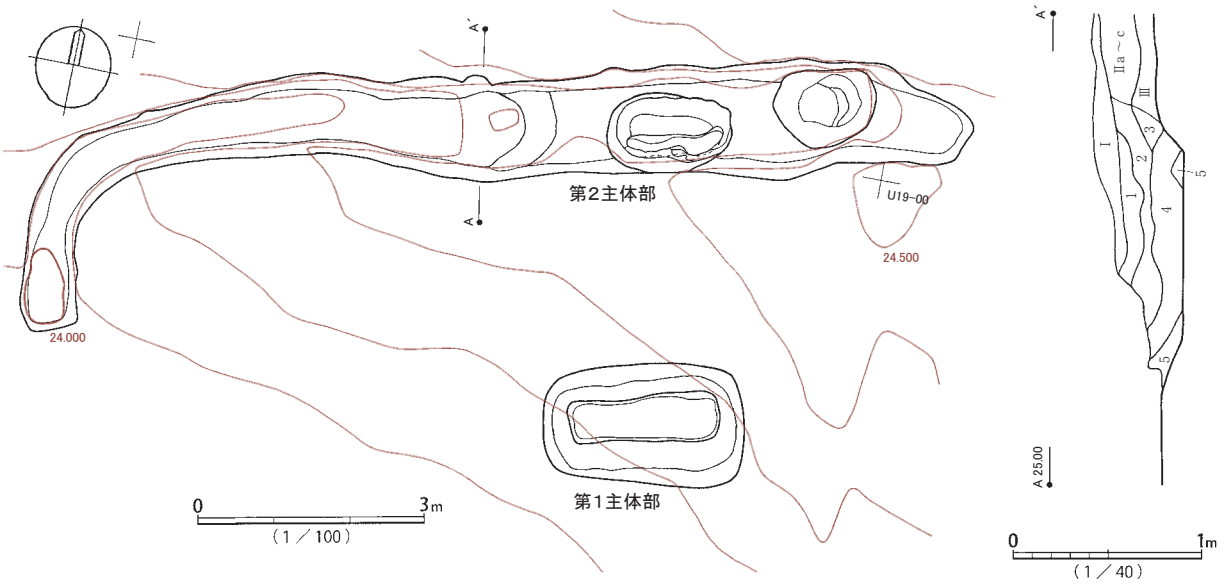






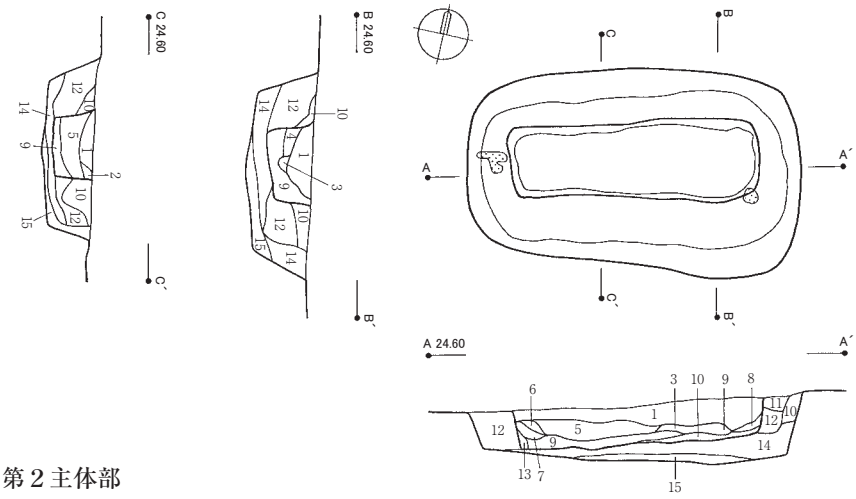
SM1183 第 1 主体部
1 黒褐色土 黒色有機質土中にローム粒霜降り状に含む。締まる。
2 黒褐色土 有機質土中にローム粒・ローム B 含む。
3 暗褐色土 2 層よりローム量多く、明るい。
4 暗褐色土 有機質土中にローム粒・ローム B・粘土粒を
霜降り状に含む。締まる。
5 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。締まりなし。
6 黄褐色土 ローム B。
7 黒褐色土 有機質土中にローム粒・ローム B 若干含む。
8 黄褐色土 ローム B。
9 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。締まりなし。
10 暗褐色土 ローム粒・ローム B。白灰色粘土 B を含む。締まる。
11 暗褐色土 白灰色粘土粒を霜降状に含む。

Fig.442　SM1183 遺構実測図



SM1184 周溝
1 暗褐色土 ローム粒若干含む。
2 黒褐色土 ローム粒若干含む。黒味強。
3 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
4 黒褐色土 ローム粒若干含む。
5 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。

第 1 主体部



SM1184 第 1 主体部
1 暗褐色土 ローム粒霜降り状に含む。若干のローム B 含む。
2 黒褐色土 ローム粒若干含む。
3 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。締まり弱。
4 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
5 褐色土 ローム粒・ローム B 極めて多量に含む。
6 褐色土 ローム粒多量に含む。締まり弱。
7 暗褐色土 きめ細かいローム粒多量に含む。
8 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。締まり弱。
9 暗褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。締まる。楕底土。
10 暗褐色土 ローム粒多く含む。締まる。
11 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
12 褐色土 ローム粒・ローム B 多量に含む。
13 暗褐色土 ローム粒含む。締まる。
14 暗褐色土 ローム粒含む。かなり硬く締まる。
15 褐色土 汚れたソフトローム主体。

第 2 主体部

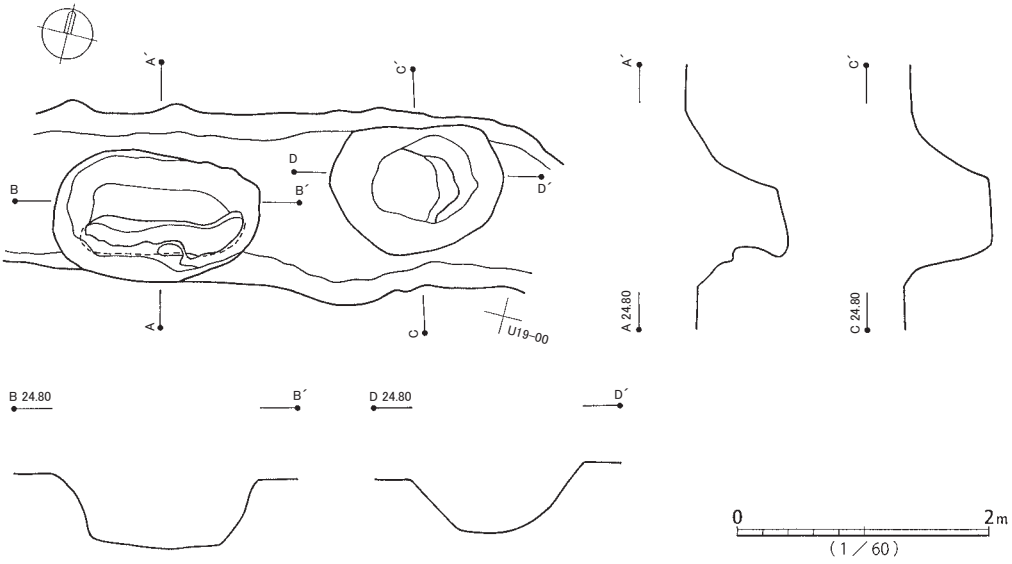


Fig.443　SM1184 遺構実測図

墳丘と周溝

長径11.20m、残存短径は2.14mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-24.5°-Wを示す。周溝内側面積は測定不能であり、確認面での周溝幅は､1.22～1.54mを測る。周溝の深さ･形状･覆土の堆積状況は不明である。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1188　SW83地区　（Fig.447、PL.150）

V-25グリッドに位置する。SW83調査区では南端に位置する。南斜面に位置し、北側周辺の周溝以外は流出している。旧遺構番号はSW83-K27号遺構である。

墳丘と周溝

長径5.08m、残存短径は2.90mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位はN-17.5°-Wを示す。周溝内側面積は測定不能であり、確認面での周溝幅は、0.76～1.22m、深さは0.40mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1189　SW83地区　（Fig.447、PL.150）

V-25グリッドに位置する。SW83調査区では南端に位置する。南斜面に位置し、北側周溝以外の周溝は流出している。旧遺構番号はSW83-K28号遺構である。

墳丘と周溝

北側周溝しか存在しておらず、残存長5.06mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位は不明である。周溝内側面積は測定不能であり、確認面での周溝幅は、0.58m、深さは0.30mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

北側周溝の南側に検出されている。

第1主体部

埋葬施設は、北側周溝の南に検出された木棺直葬の土壙墓である。墓壙規模は上端で、長径1.54m短径0.96m深さ0.88m、下端で長径1.36m短径0.84mを測り、主軸方位はN-89°-Wを示す。墓壙のほぼ中央に、箱型の木棺痕が検出された。木棺規模は、上端で長さ1.26m幅0.52m、下端で長さ1.20m幅0.44m深さ0.38mを測り、主軸方位はN-89.5°-E を示す。

調査段階で、本来木棺が存在した範囲については空洞の状態であった極めて稀な例である。底面はほぼ平坦であり、部分的に木棺を固定したと思われる粘土の散布が、厚さ3㎝前後に亘って認められた。

木棺内からは、5点の長頸鏃片が検出されているが、現在遺物は行方不明で図化できない。現場平

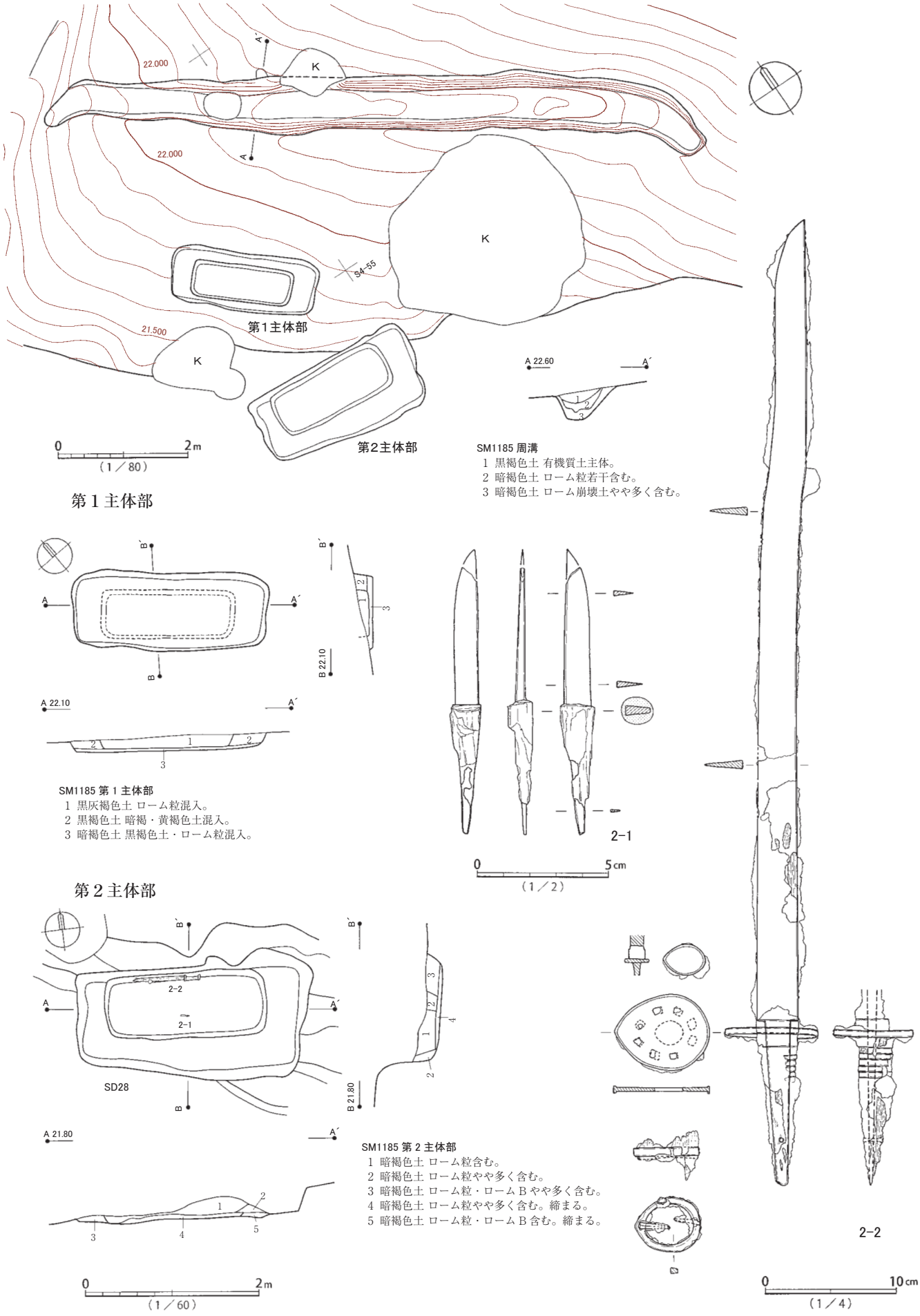


Fig.444　SM1185 遺構・遺物実測図

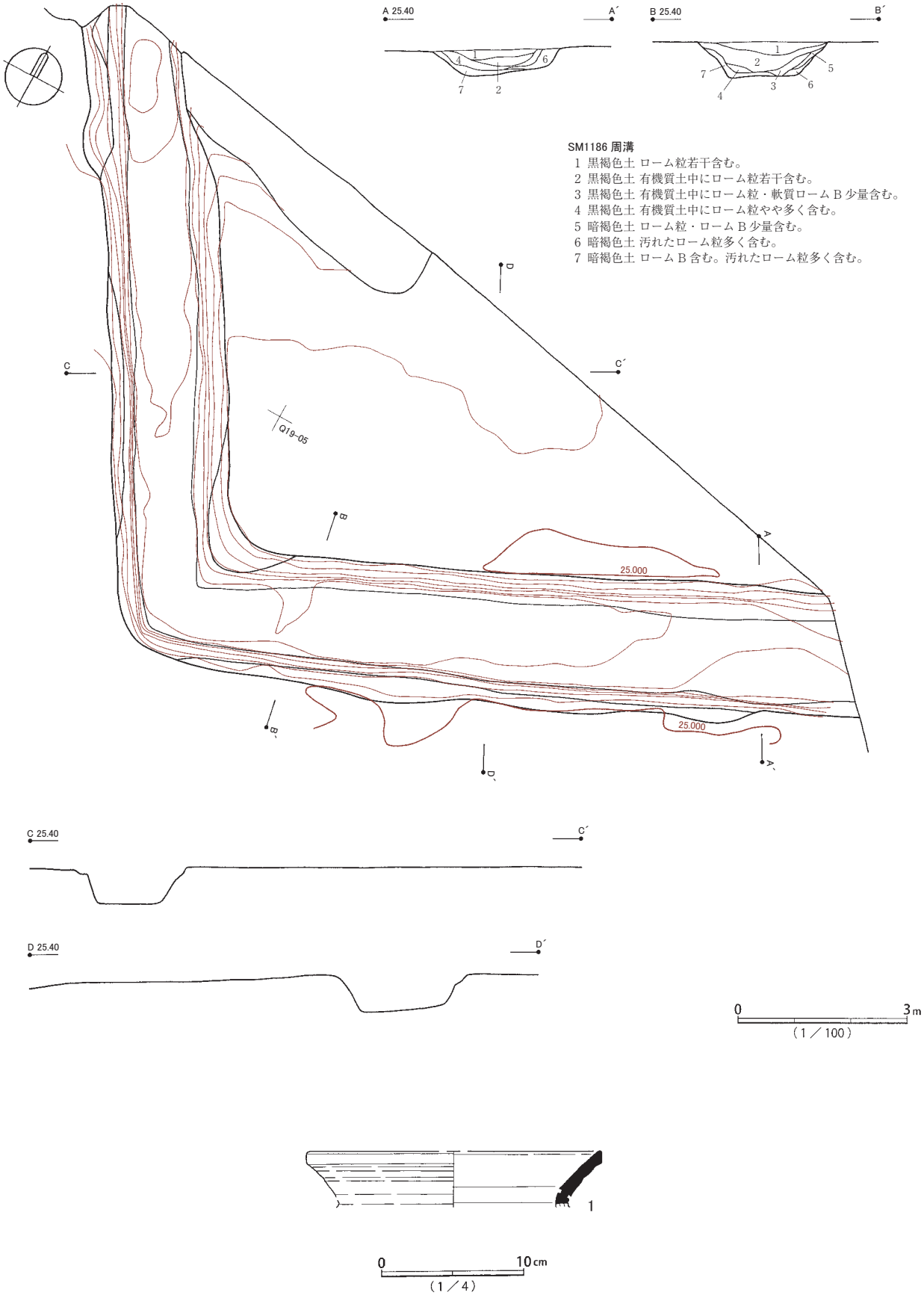


Fig.445　SM1186 遺構・遺物実測図

面図からは、1ないし2点の長頸鏃の頸部片と思われる長片を読み取ることができるが、鏃身部や茎部についての判断はできない。

出土遺物

本墳周溝内からは、何の遺物も検出されなかった。

SM1190　セ28地区　（Fig.448、PL.174）

T-4グリッドに位置する。調査区南西端の緩やかな南緩斜面に位置し、北側周溝は溝に削平されており、南側は調査区域外に位置している。旧遺構番号はセ28-361号遺構である。

墳丘と周溝

北側周溝しか存在しておらず、残存長径2.72m、残存短径2.52mを測り、現状での盛土は存在せず、主軸方位は不明である。周溝内側面積は測定不能であり、確認面での周溝幅は、0.72～0.96m、深さは0.20～0.30mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。

埋葬施設

未検出である。

出土遺物

本墳周溝内からは、1の土師器台付甕の胴～底部が周溝底から44㎝浮いた状態で検出されている。

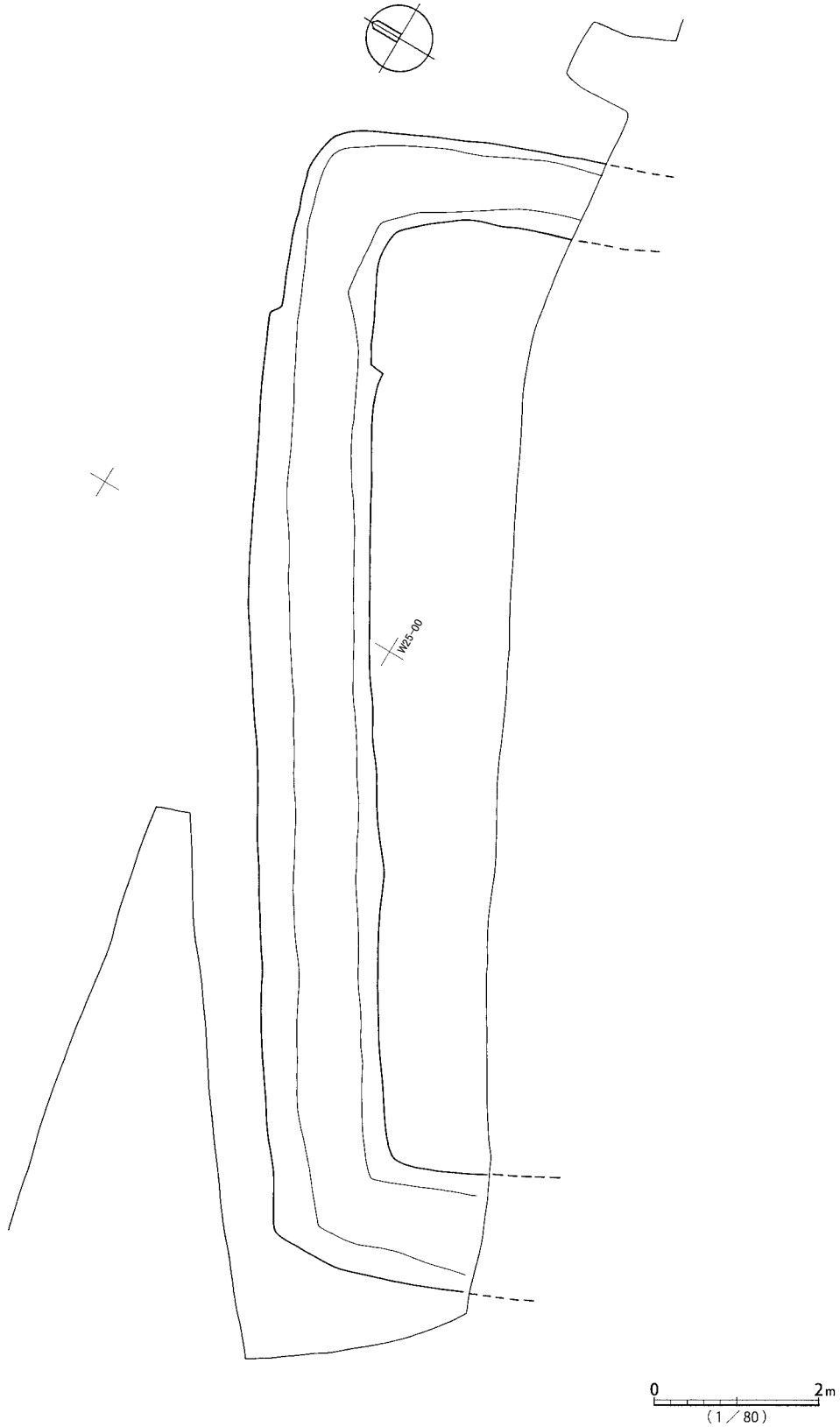


Fig.446　SM1187 遺構実測図

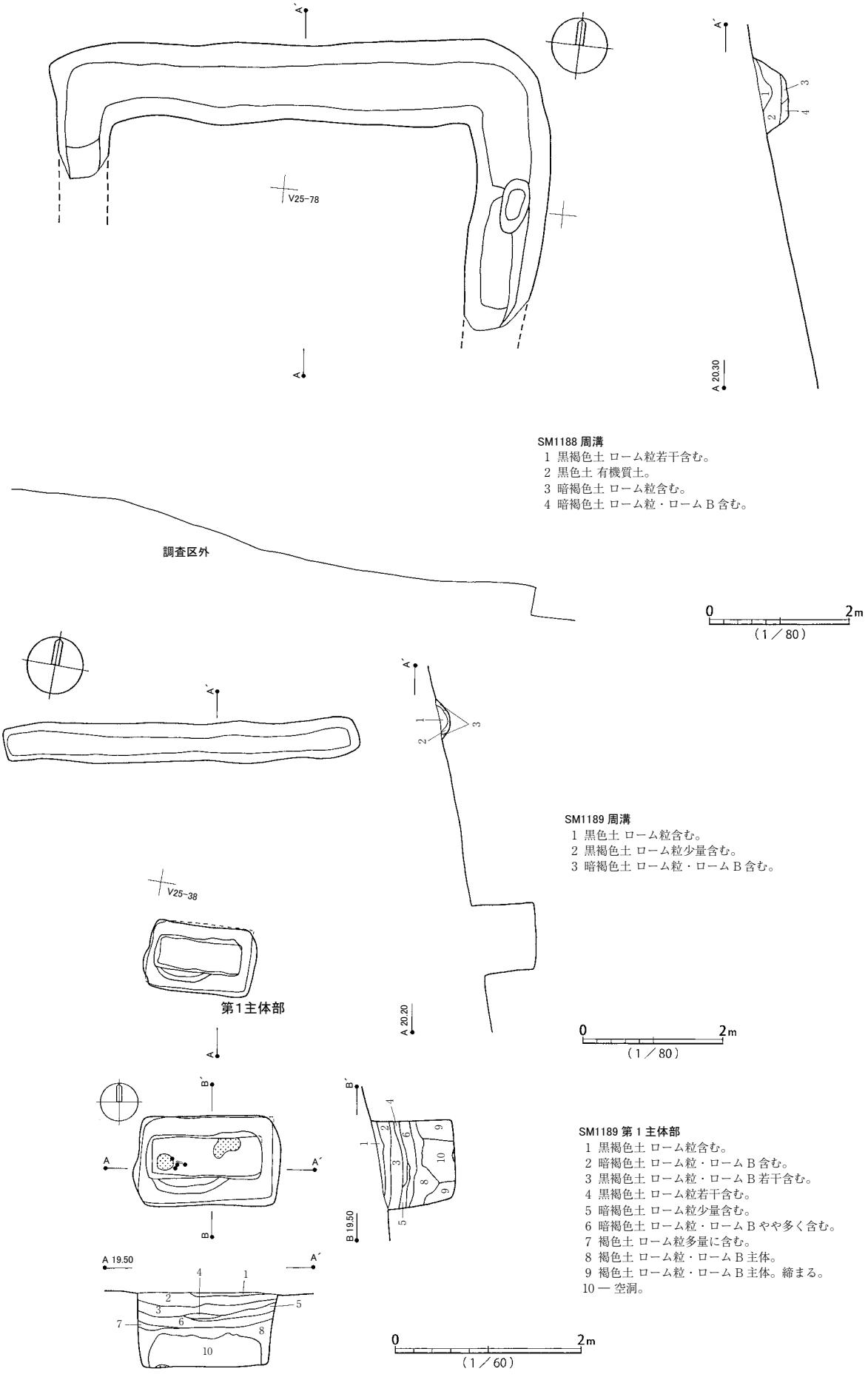
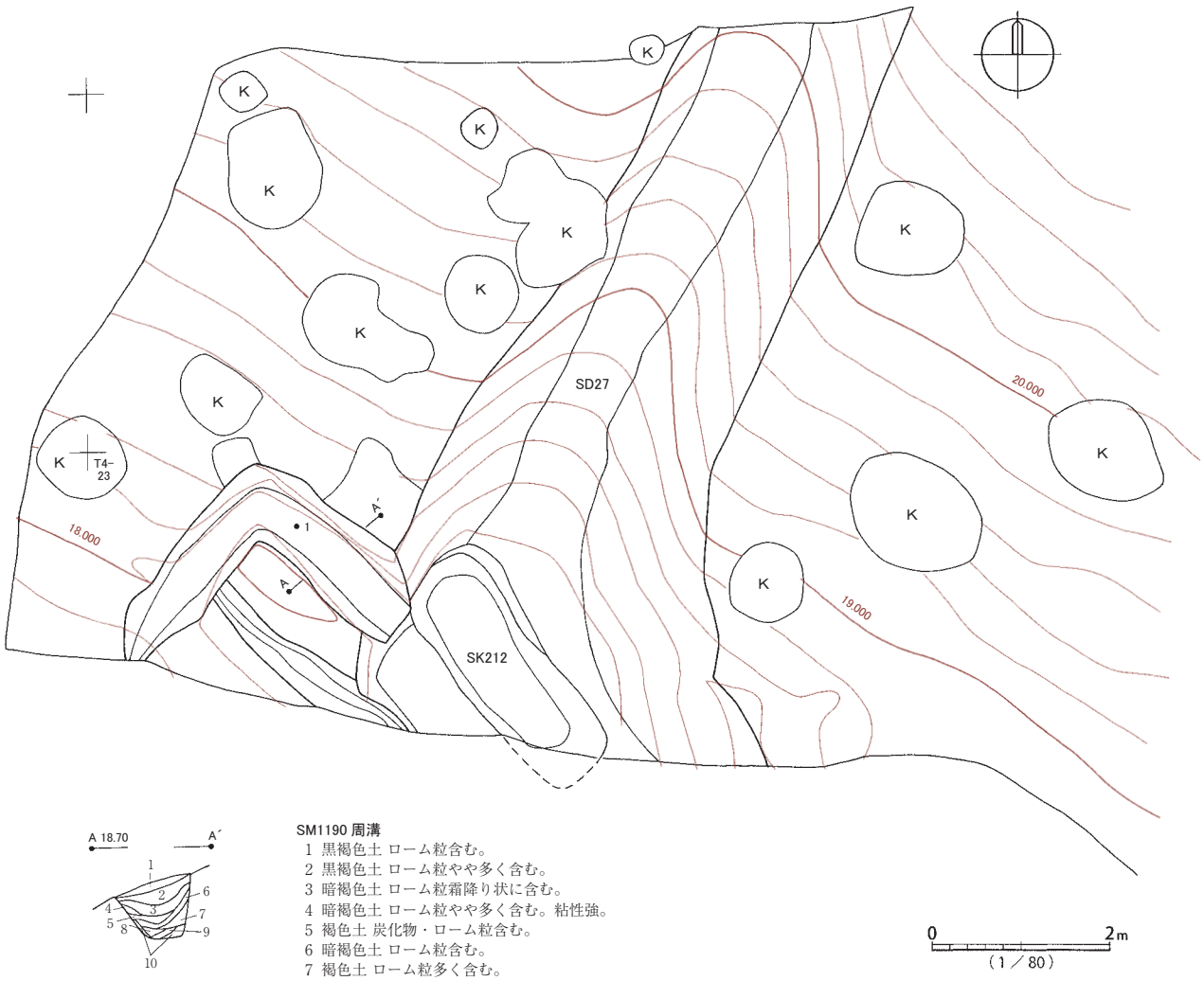


Fig.447　SM1188 遺構、SM1189 遺構実測図



SM1190 周溝

1 黒褐色土 ローム粒含む。
2 黒褐色土 ローム粒やや多く含む。
3 暗褐色土 ローム粒霜降り状に含む。
4 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。粘性強。
5 褐色土 炭化物・ローム粒含む。
6 暗褐色土 ローム粒含む。
7 褐色土 ローム粒多く含む。
8 暗褐色土 やや粘性強。
9 暗褐色土 やや粘性強。ローム粒少量含む。
10 褐色土 ローム粒・ローム B 主体。

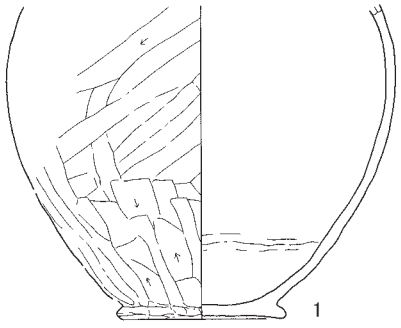


Fig.448　SM1190 遺構・遺物実測図

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第 31 集
上総国分寺台遺跡調査報告ＸＸⅥ

市原市諏訪台古墳群・天神台遺跡Ⅱ

平成 27 年 3 月 27 日　発行

編集発行　市原市教育委員会埋蔵文化財調査センター
住所　市原市能満 1489 番地
℡　0436(41)9000
印　　刷　株式会社　弘報社印刷
住所　千葉市緑区古市場町 474-268 ちば印刷団地内
℡　043(268)2371㈹